とある正極（プラス）の異世界樹（ユグドラシル）

想像屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある正極の異世界樹（ユグドラシル）

【Ｎコード】
Ｎ２６３７Ｑ

【作者名】
想像屋

【あらすじ】
この物語りは、学園都市で生み出された怪物、本来存在しないはずの絶対能力者（レベル６）は、愛する者のために己の力を己の正体を学園都市から消した。しかし、彼は、学園都市から居なくなっては居なかった。彼は、学園都市で幻想殺しと呼ばれる少年と同じ学校に通っていた。ある日彼は、幻想殺しの少年とその友と出会い学園都市の数々の事件に巻き込まれて行くのであった。この小説のヒロインは、本来存在しないはずの魔術師、禁書目録ではなく新書（しんしょ）血録（けつろく）。彼女（新書血録）のためになら世界を敵に回す程の力を持っ

た化け物だった彼は、今度は友のためそして、彼女のためにその力を振るう。『見ろよ、これが化け物の生き様だ！！今からてめぇを喰い殺してやるよ』この小説は、渡さんのとある小説『とある負極の能力解析』とのコラボとなっております。ただ今、オリキャラ募集中です

物語開始　（プロローグ）（前書き）

とあるの小説は初めてです

がんばります

感想よろしくお願いします

物語開始　（プロローグ）

＞ｉ１５９３０―２２１０＜

あ～

おほんおほん

これから始まる意味不明な物語は、現在語り手の俺の住む学園都市での騒動、事件の記録である

超能力が科学によって解明された世界。能力開発を時間割り（カリキュラム）に組み込む巨大な学園都市。

東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約２３０万人（その8割は学生）。学園だらけの町、故に学園都市

最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在する。都市はそれぞれ特色のある２３の学区から構成されており、それぞれの学区で独自の条例が、都市の法律とは別に制定されている。

建前では日本の一都市であるが、実際には統括理事長および統括理事会が行政・立法・司法の全てを独自に運営し、その実態は独立国家に相当する。例えば独自の軍事力（建前は自衛兵器）を有していたり、都市の上層部が各国の外交官と会うなど独自の外交なども行っている。また世界各地に協力機関が点在し、物資の補給ルートや資金源も独自に構築している。ただし、日本政府の意地として、都市独自の法律は全て条令扱いとなっている。１０月９日は独立記念日となっており、都市内では祝日であるまぁそんな町

この学園都市で超能力は、全てである

超能力
超常現象を引き起こす力。学園都市は、脳を開発（薬物投与・催眠術・電気刺激など）することで、科学的に能力者を作り出している。

シュレーディンガーの猫で有名な量子力学を超能力が発現する理論としており、能力者は「自分だけの現実（パーソナルリアリティ）」を観測することで可能性としては存在する本来はありえない現象を実現させる。また、これには基本的に演算能力が不可欠であり、上位の能力者とは演算能力が高い（頭が良い）と言う意味でもある。
能力にはいくつもの種類があり、それは個々人によって決まり、理論上「能力は１人につき１つまで」となっている。その中には「発電能力」や「発火能力」のように発現しやすい能力と「空間移動」のように発現しにくい能力がある。何故、違いが出るかなどの研究も行われているが解明されていない。
能力は、その威力や効果によって図に示すようにレベル０からレベル５までの６段階に分けられている。これとは別に「神の領域」とも呼ばれる「絶対能力（レベル６）」も概念上存在する。全学生のうち約６割は「無能力者（レベル０）」である。最高位のレベル５は７人しかおらず、さらに序列（第〇位）が存在する。ただし、こ

の序列は、能力研究から生まれる利益が基準であり、必ずしも強さを表すものではない。また、レベル3と4の間には大きな壁があるとされる。なお、無能力者は能力開発を受けている以上、微弱ながらも能力を有していることがほとんどで、本当に何の能力も発現していない真の無能力者はわずかである。

能力名は原則として学校側がシンプルな名前を決めているが、学生自身もしくは開発者が申請した名称も存在する。

ちなみに能力の強弱はこれ←

超能力者（レベル5）　単独で軍隊と戦える程の力
大能力者（レベル4）　軍隊において戦術的価値を得られる程の力
強能力者（レベル3）　日常生活において活用可能で、便利と感じられる力
異能力者（レベル2）　低能力者（レベル1）とほとんど変わらない程度の力
低能力者（レベル1）　スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力
無能力者（レベル0）　測定不能や効果の薄い力

その超能力者の頂点が学園都市第1位の超能力者（レベル5）・・・「一方通行（アクセラレータ）」

運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作（変換）する能力。デフォルトでは重力や酸素などの生きるのに必要な力を除いた全てのベクトルを「反射（ベクトルの反転）」するよう、無意識下で設定している。また、足元のベクトルを操作することで高速移動や飛行を可能にしたり、相手に触れて血流を操作するなど、応用力も高い。核兵器を打ち込まれ

ても無傷のままでいられるとされ、不意打ちなどでも反射で全く効果がないため学園都市最強の能力とされる。

この学園都市には、→を加えて7人の超能力者（レベル5）が居るとされているが

実際には、学園都市には、超能力者（レベル5）は、7人存在するついでにこの物語の語り手である俺のレベルは、6です

昔、『一方通行（アクセラレータ）』と決闘して圧勝しています

しかし、そのことを誰も知らない

だって俺の能力がそういう能力だもん♪

俺の存在は、俺の望まない人間にもデーターにも残りはしない

実際には、俺は、学園都市最強の名を捨てた人間

いや、俺は、アクセラレーターに押しつけて逃げた臆病者さ♪

そんな俺の能力は、記憶消去文字道理（メモリーキャンセラー）、記憶を消すのさ♪生き物や機械の♪完全に♪

何でそんな能力でアクセラレーターに勝てたんだよ?って

簡単だよ

奴は、俺と戦っているという事実でさえ俺の能力で忘れてしまうから戦いにすらならないんだよ

それに俺の能力は、俺を相手に認識させないそんなことが出来るレベルだ

その方法？

人は、目で相手を見るだろ？

俺は、相手が、視覚神経（または、光信号）に記憶した俺の情報を脳（メモリー）に届くまでに消去できるから実際俺は、どんな情報にも残らない故に俺は、誰にも見えない

ここからが、俺の能力の凄いところ♪

人の記憶を勝手に消すときは、相手の動きや脳の働きが2秒だけストップするんだよね

だから生身の俺でもアクセラレーターに攻撃が出来るって訳（さすがのアクセラレーターも演算が出来なきゃ能力はなくなる）

これが俺の能力

記憶消去（メモリーキャンセラー）の使い方

ただ二つ欠点のある能力だ

どこぞの漫画の知られざる英雄と同じで一人に完全に認識されると

周りの人間にも俺の姿が黙認されてしまう

もう一つは、・・・・・・この能力を使いすぎると一時、冬眠してしまうところだ

まぁ、世界中の人間の記憶をいっぺんに消して人類を赤ん坊化させることもできるし

もっと酷くすればみんなの記憶から自分自身の存在を消せば・・・みんなは、唯の生きてるだけの肉体と化してしまうほどの能力なので素晴らしいと言えば素晴らしいのだが・・・この能力をねらう奴も多い例えば学園都市のトップの誰だっけ？・・俺自身が記憶を消してしまったようだ・・・まぁ学園都市中から狙われるので俺は、ある一人の後任（アクセラレーター）を残し現在は、レベル０として学園都市でもレベルの低い高校に密かに通学しようとしている

ただこの便利きわまりなく強大な力を持った俺だが一つ悲しいのは・・・誰にも認識させないと言うことは、ある意味では、孤高だがある意味では、・・・・孤独だ

強すぎる力を隠すために必要なのだが・・・・・・まぁいいや

しかもこの俺の記憶消去（メモリーキャンセラー）ですら、俺の能力のほんの一部に過ぎない

俺はとことん化け物だよ

そして、アクセラレーターと戦ったあの日、俺が学園都市最強の名を退いた日、俺は、謎めいた力、俺の本来持っている能力を超越しかねない謎の力をそして、俺のことを一切忘れないで居てくれる新たな家族と同時に手に入れた

今から始まるのがこの俺

『桜小路（さくらこうじ）　影虎（かげとら）』

別名　記憶消去（メモリーキャンセラー）もうひとつは、記憶を貪る虎、　牙桜、『異世界樹（ユグドラシル）』

さらに『ビースト』または『ワールドツリー』

さらにある女につけられたあだ名は・・・ぬらりひょん

が学園都市で過ごした物語

物語開始　（プロローグ）（後書き）

今日は、キャラ設定も投稿します

感想ください

身元照会（キャラ紹介）（前書き）

我が小説のバグキャラ達です

一癖も二癖もあります

長いので読むのに苦労すると思います

指摘は受け付けますが

批判はあまり受け付けられません

ではどうぞ

身元照会（キャラ紹介）

桜小路　影虎

CV（キャラクターボイス）：細谷佳正（刀語の鑢　七花）→あくまでもイメージです

年齢１５歳

身長１８０センチ

体重６５キロ（少しやせている）

容姿

顔は、優しい人が一番しっくりくる顔（けっこうイケ面）

常に目を閉じているような顔で本気になったりイラっと来ると目が開き鋭い目をすることが出き以外と鋭い八重歯が目立つようになる

この時は、ワイルドなイケ面になる

日本人にも見えるが外人にも見える

目の色は、黒

髪の色

黄色に茶色が混ざった感じ（染めている本当は、透き通るような黒）

髪型

髪の毛のほとんどが上に立っていて長さは、首筋当たり

体型

足が長くモデル体型で結構、筋肉がついている

服装

白いシャツにフード突きの緑のコート（裏地には、白の布に桜吹雪の刺繍が入っている特注品）を常に着ており

顔をフードで隠している

しかし、走ったりした後に暑くなるとコートを脱ぐ

職業

レベルの低い高校の一年生

元　長点上機学園（ながてんじょうき　学園　）その他色々

元学園都市最強であらゆる研究機関で実験体にされていたが能力の開発に嫌気がさし逃げ出した

過去

7歳まで置き去り（チャイルドエラー）で施設で育った
施設にいるとき周りの子供や大人達から影の薄い子だと思われていたが
かくれんぼをしている際に職員の目の前に立っているのに関わらずその職員は、彼には一切気付かず1時間ほどかくれんぼが終わらなかったことがあり
その際に学園都市の研究機関が彼に身体検査（システムスキャン）をしたところ計測不能領域に達し
今までにないほどの超能力者（レベル5）だという事が判明した彼は、研究所に引き取られた
そこで彼は、科学の力で「絶対能力（レベル6）」にたどり着かせようとする身勝手な大人達の研究の末
レベル5でありながらレベル5では、太刀打ちできない「絶対能力（レベル6）」に限りなく近づいてしまった
いや、正確には、たどり着いてしまった存在
この時に彼は、研究所から逃げ出した（理由は、・・・・寂しいから）
その後、自分の代わりを出来る強い能力者を探し出し（自分と並べる人間ならば、そいつに自分のことを覚えていて欲しかったから）
その人物にだけ自分の存在を認識させ決闘を挑み（実際に挑んでき

たのは相手だがそう仕組んだのは、自分）

圧倒的な力を見せつけるもその者に学園都市最強の座を譲り

その後の出来事により

現在は、自分の能力を上手く隠し学園都市で一般生徒として暮らしている

現在は、椿との二人暮らしで学園都市の少し高級なマンションで暮らしている

ちなみに椿の弟となっている

能力

記憶消去（メモリーキャンセラー）

使い方とかは、世界観説明でチェック

消去と書いてはいるが実際は、閲覧もでき改竄もできるまたは、他人の記憶を蘇らせたりもできるため

消すだけではない

この能力は、常盤台中学のレベル５の心理掌握（メンタルアウト）や他の能力で記憶破壊に酷似しているがそれらの能力とは、遥かに次元の違うレベルに位置していて例えるなら　花火と太陽のような感じである

正確には、記憶だけではなく記録や経験も消去できる
記憶や記録に関してはこれ以上にない能力
効果範囲は、本人から離れて月くらいの範囲まで
彼の能力は、この範囲とそして、人の脳を完全に支配下に置くことが出来るため実質は、最強の能力
この力は、アクセラレーターの望む無敵という力に実は、一番近い能力
この力があれば戦いすらおこらないのだから
彼は、常に自分を認識（記憶）させないように能力を使っている
彼は、この状態のことを『孤独な傍観者』と呼んでいる
または、戦闘などで相手を翻弄するために記憶を消したり消さなかったり蘇らせたりする使い方を
『孤高なる参戦者』と呼び
そして、一人か二人の経験（自転車の乗り方や泳ぎ方など身体で覚える経験も）を消し去り一気に素人化させる使い方を
『物忘れ辞典』と呼ぶ
そして、世界中の人間や機械の記憶をいっぺんに消し去る使い方を

『孤独なる楽園』と名付けている
実際に使ったことはない
そして、記憶を呼び覚ます使い方を
『孤独からの帰還』と呼んでいて
彼は、この能力を滅多に使わない

そして、世界中のコンピュータと人間や生物を乗っ取って操り
世界一の演算能力を持つ超高度並列演算処理器（アブソリュートシミュレーター）を超えるネットワークを一人で行使することが出来る。「予言」とまで称される予測を使いこなせる
技名は
樹形図の完成者（ツリーダイアグラム）

記憶というものに関しては物理法則を無視してでも実行できる能力
常に進化している

しかし、この能力は、影虎の本来の能力の副産物に過ぎない・・・

記憶消去説明終わり（メモリーキャンセラー）

魔術

彼は、能力者でありながら魔術を使用できる稀な体質

彼の使う魔術は、錬金術に酷似していながらも少し違う魔術

魔法名

ｖａｌｅｔｅ＋０００（さようなら、永遠に）

技名

『矛盾が生じる錬成』

名前は適当に決めているため意味はなし

発動するためには、詠唱が必要
頭でそのワードを読んでも可
ワード
『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』

効果は、身体の一部が触れている物体（異能も可）を変形させたり抜き取ったり陥没させたり溶かしたり固めたり動かしたり物体であれば好きに操れるしかし、錬成した物体には、何かしらの矛盾を付属しなければならない

例、鉄から銃を錬成するとその銃は、相手を切るために使うなど

または、コンクリートで槍を作ったとすると

その槍は、後ろに投げなければ前には飛ばないなど

正直、意味不明な能力

まだまだ進化の可能性があり

この魔術を簡単に言うと理想を形にして表す力

黄金錬成とは、強弱の関係

魔術説明以上

そして、彼の最強の能力のひとつが

幻想掌握（イマジンジャック）

彼の人の脳に干渉する能力と彼の矛盾が生ずる錬成を最大限に使ったときに発動できる

能力ではなく災害や現象のようなもの

その現象は、相手が使った魔術や能力を乗っ取り自由自在に操る頂上態になる禁忌の技

代償は、その時によって違うが能力が3日使えなくなったり身体が凍りだしたり異能の力に阻まれる状態になる

この能力の発動時は、目の色が赤に変わり髪の毛が桜色に変わり長髪になって性別と性格が変化する

性別の変化は、最低で1日で終わり最長で3日間

性格が変わるとほとんど別人になりもの凄く怒りやすくなる

（主に自分の身体の変化に心が付いていけなく椿以上に泣きながら
叫んで暴れる）

そして、彼の異常な戦闘力や発想を可能にしている

精神の力

『闘争本能』

能力ではなく精神面の力

戦いを望み常に勝つことを前提に動く

そんな本能

相手の弱点を見抜いたり

自分の技を自分でアレンジしたりするため

椿が言うには

影虎は、どんな能力を与えられても

戦闘向きな能力に改造するらしい

影虎は、本当の能力は、科学でも魔術でも解明することが一切出来ない幻想殺しと同じく奇妙な能力

実は学園都市で開発されたレベル６の能力の成功例

名称は、『異世界樹（ユグドラシル）』

この能力を発動するとまたは、影虎が生命の危機に陥ったり死亡したりすると勝手に発動し対象を破壊しようとする（自己防衛迎撃機能＋自己再生治癒機能）

なぜ、死んでも能力が発動するかというと『異世界樹（ユグドラシル）』の意志で無理矢理蘇らされるから。これは、魔術に属している作用

影虎の頭から光り輝く桜色の鋭い刃のような枝が現れ頭に王冠（能力を操るための媒体で天使の輪と同じ性質で正式名称は、ケテルの王冠）のようなものが出来る

そして、能力の一つは、全ての生命または生物でないものでも自分と強制的に接続する（支配する）

二つ目は、魔術にも科学にも常識にも非常識にも物理にもオカルトにも影響されない（イマジンブレイカーには、触れられた部分が破壊される？）謎の物質？（生命力）でできた桜色の鋭い刃のような枝を自在に操り闘う

この枝は、相手の攻撃を完全に受け止め攻撃にも使える

生命力で出来ているため相手を滅多刺しにしたり八つ裂きにしても相手は死なず傷も残らない（精神には大ダメージで痛みもちゃんと感じる）

３つ目は、『異世界樹（ユグドラシル）』で傷の治療が出来る

４つ目は、巨大な世界樹を生み出して地球の生命力やエネルギーを支配し使役する

それを発射することもできる

この時の砲台の形が龍の顔似ていることから

『竜王の波動（ドラゴンウェーブ）』

威力は、ご想像にお任せ

後は、ＡＩＭ拡散力場の完全な制御（支配）など・・

これだけの能力を持ってしても完成はしていないらしい

椿と暮らし初め精神的に成長した彼は、自分の能力を完全に掌握し、現在の『異世界樹（ユグドラシル）』とは違い黒い枝の殺傷能力だけの、『死世界樹（キルドラシル）』を生みだし

使役していた

あるひ、椿が暴走した時、瀕死にまで追い込まれ『死世界樹（ユグドラシル）』が自動で発動し椿を瀕死にまで追い込んでしまった時、

椿を失いたく無いっと必死に己に出来る全ての演算能力と知識を利用し

己の能力の真の意味『進行と支配』を理解し

『死世界樹（キルドラシル）』を本来存在していて物質として存在していない生命力を使役する、桜色の枝と葉と花の『異世界樹（ユグドラシル）』に作り替えた（を喚び出した）

そして、瀕死の椿を完全に治療した

枝の色が黒から桜色の変わったのは、彼の中で世界樹の使い道や感情が変わったから

植物の黒羽↑『怒り』『敵意』『悪意』

『死世界樹（キルドラシル）』↑『殺意』『未熟な愛情』『恐怖』

『異世界樹（ユグドラシル）』↑『救済』『愛情』『守護』

何故羽から世界樹かというと桜の木が好きだったという事にくわえ影虎の中で『進行と支配』の象徴が世界樹だったためである可能性が高い

本当に世界樹の形になったのは、『進行と支配』に『生命力』を加えた、『異世界樹（ユグドラシル）』だけである

今でも不安定な状態にすれば羽を出すことは出来る

『異世界樹（セフィロトの樹）』は、本来自分の意志を持っており自分の認めたものにしか恵みを与えない。気に入られなければ神にすら襲いかかる謎の物体

彼が死んだ場合、勝手に彼の身体に現れて彼を死から蘇らせる程
影虎のことを気に入っているらしい

「こことは違う世界における概念の生死の象徴」

この能力に覚醒したときアレイスターから「神々の世界を支配する
力の片鱗を振るう者」としてさらには、『科学が生み出した世界の
神』と認識され重要視されている

使用すると若返り（最低8歳の姿まで）成長しなくなる（使用中は）
使用してから三日たつともとにもどる

追加事項

聖人である

神の力をその身に宿している

属性は、メタトロン

この属性は、本来存在しない

能力は、　無限光裁き（アイン・ソフ・オウル）

守護天使、メタトロンとサンダルフォン以外の、ラツィエル、ザフキエル、ザドキエル、カマエル、ミカエル、ハニエル、ラファエル、ガブリエルの属性全てを使用し最後には、『神による裁き』を発動する

これを使うと神として覚醒してしまい

人間の感情を失い記憶も失う

ため、最後の手段

以上

性格

穏やかでのほほんとしている

もの好き

ある一定に人に対しては、お人好し

動物が好き

寂しがりや

ヤキモチ焼き

感動屋

一途

常に笑っている

怒っちゃうと乱暴になる

実は、人間に興味が無く全く関係無い人なら簡単に見捨てるなど少し白状

→

これでも子供時代よりは、断然性格が丸くなった

好きなもの

紙パックのコーヒー牛乳とカップ麺

好きなこと

傍観　教室での昼寝　椿との会話

好きな人間

クロス＝マリアンヌ　現在の名前は　桜小路　椿

嫌いなもの

怒った椿の料理　学園都市の大人達　椿を狙う魔術結社

戦闘スタイル

拳か脚かと言えば拳で闘う派

握力は、１９０キロ越えと異常

懐から本物の銃を取り出して闘う（アンチスキルからこっそりくすね取った）

結構腕っ節が強く

能力無しでも暴走族一つや二つは、壊滅させられる

口癖

普段

『孤独だね～』か『退屈だね～』

怒ると

『噛み殺してやろうか？』または『喰い殺してやろうか？』

かなりドスが利いた声で言う

補足事項

能力を使わずに学校に行った時は、放課後に平均１０の呼び出しを受け告白されるくらいイケ面（全て断りその女の子から自分の記憶を消す）

姉こと恋人の桜小路　椿の呼び方は、普通に『椿』と呼ぶ

椿との関係は、順調というより１８になったらプロポーズする予定

未だに椿が年下ではないかと疑っている

酒を飲んでも酔うには酔うが冷静でいられるため

酒には強い

学園都市では、都市伝説として『牙桜』

学園都市の裏では、　学園都市の最重要機密である「ドラゴン」と

同じ位置に存在する絶対能力者進化計画（神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの（ＳＹＳＴＥＭ　／　システム）の開発）　の成功者『ビースト』または『ワールドツリー』と呼ばれていた

このことは、影虎と一方通行以外は誰も知らない

実は、影虎は、名前も能力も全てを偽って生きている

年齢と性別は、本当

影虎のヒーローとしてのあり方

誰に教えられなくても、自身の内から湧く感情に従って真っ直ぐに進もうとする者・・・上条当麻

過去に大きな過ちを犯し、その罪に苦悩しながらも正しい道を歩もうとする者・・・一方通行

誰にも選ばれず、素質らしいものを何一つ持っていなくても、たった一人の大切な者のためにヒーローになれる者・・・浜面仕上

己の意志で守りたい者のために人にも怪物にもそして、正義にも悪にもなれる良く言えば英雄、悪く言えば悪党、光と闇、両方を兼ね備えた者・・・桜小路影虎

以上

桜小路　椿（女）　（クロス＝マリアンヌ〈これも偽名〉）

年齢　自称１７歳（大人っぽい言動だがどう見ても中学生）

身長１４７センチ

体重３６キロ

推定Ｆカップ

ＣＶ（キャラクターボイス），田村　ゆかり（魔法少女リリカルなのは（高町なのは）刀語（とがめ））↑あくまでもイメージです

容姿

若干童顔

目がパチッと開いていてまつげが長く可愛いがしっくりくる顔

他の言い方をするとお嬢様顔

髪の毛は、膝くらいまで長い透き通るような黒髪をしているが常に

帽子やフードなどで隠している

目の色は、赤っぽく

強い光があると人より目が痛いらしいため

黒のカラコンをしている

体型

身長とは、裏腹に発育は良いらしくプロポーションは良い（神裂くらい）

白い素肌にすぐに折れてしまいそうなほど細いが綺麗で長い手足

服装

女であるのが嫌らしく常に男装を心がけている（胸にはサラシを巻いている）

帽子かフードは必需品

職業

現在は、影虎と同じ高校に通っているがほとんど行かず家でゴロゴロしている（それでも家事はしていて完璧にこなしている）

もとイギリス聖教で修道女として暮らしていた

過去

０歳の時にイギリスの十字教の協会に前に捨てられていたらしい

そこの協会に引き取られ育てられた

その後（５歳）に魔術に触れ輝かしい才能を発揮し神童や二代目アレイスターとまで呼ばれた

１？の時にイギリス聖教で必要悪の教会（ネセサリウス）に所属していたがあまりに魔術に関して才能がありすぎて飛び抜けていた

人工的に自分を聖人にする方法などを独自に開発し天使ですらも独自に術式で呼び出すことに成功しているため実質的に魔術の世界では、魔神にもっとも近い人間の一人に数えられていたが

イギリス聖教が彼女の才能と彼女の独特すぎる思考に加え新書目録が災いを招くと予想し暗殺を企てるが彼女が全力で抵抗したため失敗した

そして、１年に近い逃亡生活の末

かつて世界最高最強の魔術師にして現世界最高の科学者のアレイスター＝クロウリー　の統括する学園都市にたどり着いたものの追っ手の魔術師に手傷を負わされ学園都市に無断で進入したためアンチスキルに追われ

ボロボロになりながらも何とか逃げ延び学園都市の公園にたどり着いた

その時、髪の白い少年と髪の黒い少年が奇妙な争いをしているところを目撃しその戦いを見届けた

そして、助けを求めようとしたが

自分を追ってきた魔術師に囲まれ

少年を逃がそうとしたが少年の能力を自分が無効化していることに気付き

その少年に自分が新たに開発した最強の魔術を渡し

その少年に刺客を撃破させた

そして、その少年が自分と同じで孤独であることや自分と同じような人生を歩んでいるため

ほうっておけず

家族になってやると言い

少年とともに暮らし始めた

名前や戸籍を偽り現在は、影虎の姉として暮らしているが本当は、恋人同士

昔は、利用してやろうと思い続けていたが今では、影虎のことを大事に思っている

男装なのは、昔から女の子は、損だと思っている（つらい思いをしてきたため）ふしがあり性同一性障害の気がある

しかし、髪を切ることには抵抗があり伸ばしている

たまに影虎に「顔も可愛くてスタイルも申し分ないんだからもっと女の子らしい格好しても良いんじゃないか？」

と言われると複雑な心境になる

後、「お前ってさ、女が損だと思えば思うほど女性らしい体型になっている気がするんだが」っと言われた際は、泣きながら崩れ落ちたなど女性らしい体型になっていくのには、抵抗があるらしい

精神が少し不安定なところもある

実は、影虎以外の男性が苦手で自分を女と見られるのには虫酸が走るらしい

以上

魔法名

ａ　ｐｒｉｏｒｉ　１９３（先天的な理想は、新たなる発展を生む）

通り名

新書血録（レコードブラッド）または、しんしょけつろく

血まみれの魔導書（ブラッディ・グリモワール）

魔術

スティグマータ（ラテン語：ｓｔｉｇｍａｔａ）

自分の血を媒体としある特殊な魔法陣を自分の体と周りの地面に描き

自分の身体に描いた魔法陣を聖痕に変化させ

人為的に神の子の力を自分宿し

聖人と同じ力を得る

法王級魔術

使役型エンゼルフォール

自分の血を媒体とし巨大な魔法陣を展開しその魔法陣に

セラフィム（熾天使）Ｓｅｒａｐｈ，Ｓｅｒａｐｈｉｍ 天使の九階級のうち最上とされている。三対六枚の翼を持ち、２つで頭を、２つで体を隠し、残り２つの翼ではばたく。神への愛と情熱で体が燃えているため、熾（燃える、などの意）天使といわれる。

ケルビム（智天使）Ｃｈｅｒｕｂその顔は”人間の顔のようであり、右に獅子の顔、左に牛の顔、後ろに鷲の顔”を持っていた。・・・生き物のかたわらには車輪があって、それは車輪の中にもうひとつの車輪があるかのようで、それによってこの生き物はどの方向にも速やかに移動することができた。・・・ケルビムの”全身、すなわち背中、両手、翼と車輪には、一面に目がつけられていた”（知の象徴）・・・ケルビムの一対の翼は大空にまっすぐ伸びて互いにふれ合い、他の一対の翼が体をおおっていた。またケルビムにはその翼の下に、人間の手の手の形がみえる

オファニム（座天使）Ｏｆａｎｉｍ

名は「玉座」や「車輪」の意で、唯一神たる主の戦車を運ぶ者とされる。また、「意思の支配者（Ｌｏｒｄｓ ｏｆ Ｗｉｌｌ）」の異名も持つ。

物質の体をもつ天使としては最上級にあたり、主に燃え盛る車輪の姿

天使の1位2位3位の3体を召還し使役する魔術奥義、この力を使えば国一つは簡単にほろぼせる

が寿命が減り

しかも常に血液を流し続けなければいけないため

2分の使用が限界

1体だけの場合は、4分間は持つ

ブラッドペンシル

体中の血液を自由に操作できて自分の術式を血液に記憶させることで複雑な魔法陣でも血を撒けば一瞬で準備できる裏技

この力があれば手傷を負わされれば負わされるほど強力な魔術が使えるため結構くせ者

応用で血を硬質化させ血液のナイフを作ることも可能

彼女は、魔術を血液で行うためいつも貧血対策はしている

新書血録

本当の名称は、『発展の書』や『エノクの書』など魔道書に元づいている。

魔導書で原点は、血液

禁書目録とは違い自分で魔術を作り出すことが容易になる上にこの魔導書が完成してからずっと魔術の知識が発展するたびに魔導書にその発展した技術が刻まれる

つまりは、魔術の進歩全てを手に入れる事が出来る魔導書

以上

そのほかには、火や電気を蛇の姿にして飛ばしたり

色々出来る

インデックスほどではないが相手の魔術を見るだけで大抵の仕組みを理解できる

自分の開発した魔術を相手に分けることもできる

その際には、キスなど接触が必要

以上

性格

物静か

多少我が儘

偉そう

人を見下す

動物が苦手

戦略的

めんどくさがり

本気で嫌なことがあると泣く

好きなもの・こと・ひと

フルーツ牛乳　棒のついたキャンディー　アニメ（影虎に内緒で結構集めているがバレている）　家事

結構子供好き　　桜小路　影虎

嫌いなもの・こと

女らしい服装（学校の制服）下着も嫌い　自分の体（特に大きすぎる上に未だに成長し続けている胸（Ｆカップ））　学校　十字教
銭湯　温泉　（必ず女湯に入らなければいけない上に女からも身体をじろじろ見られるため）

悩み

牛乳を毎日飲んでいるが

背が低いこと

背の割に大きすぎる胸が未だに続けている成長（どうやら遺伝っぽい）

牛乳＝発育に繋がっているという事実

戦闘スタイル

肉弾戦も人並みには出来るが主に魔術使用の遠距離戦と中距離戦と待ち伏せが得意

たまに影虎から渡された鉄砲を使う

口癖

「バ～カ」

怒ると

「私があんたに裁きを下す」

一人称

『俺』滅多に使わないが怒ると『私』

補足事項

試しに学校に行くと

次の日には、下駄箱が手紙でいっぱいになるくらいモテる容姿をしている

しかし、女子からは、よく虐められる

現在は影虎のことが恋愛の対象として好き

自分のスタイルをめちゃくちゃ気にしている（めちゃくちゃ良いのに関わらず）

昔は、男とあまり変わらなかったのに（それでもスタイルは良かっ

た）影虎に会ってから成長し始めて現在にいたる

右肩に傷がある

自分の血は、見慣れているが他人の血を見ると気持ち悪くなり

影虎以外の男に１０秒以上触られるとトラウマがフラッシュバック

しパニックになり魔術が暴走する

影虎に絶大な信頼を置いており心の底から好いている

影虎を女として好きだが女でありたくないという自分の感情がぶつ

かり合っているため

変な人格が存在するそして、一ヶ月に一回のペースで女性であるの

が嫌になる時には、

人格が変わり暴れる（魔術を使いまくって）

影虎は、いつもその時の相手をしているが未だになれないらしい

人格が１７２個存在する（多くない？）

酒を飲むとすぐに酔っぱらい

普通に女言葉で話し

影虎に抱きついて甘えたり服を脱ぎだしたり

人前で平気でキスをしたりなど

積極的になる

以上

キャラ説明終わり

身元照会（キャラ紹介）（後書き）

・・・・長すぎて疲れました

ほんとはもっとコンパクトだったんです

でも、あれやこれやをしていると・・・・

まぁいいです

感想ください

記憶消去（孤独な学生）（前書き）

調子に乗ってまたまた投稿です

ではどうぞ

記憶消去（孤独な学生）

今日は、俺にとって何かの分岐点がったのか？

何故俺は、夜の公園で今日名前を知った同級生と殴り合って居るんだ？

何故こうも血が騒ぐんだろう

何故こんなに楽しいのだろう

何故こんなに・・・・怒りが溢れるのであろう

何故こんなに・・・・・・・喰い殺したいのであろう

今日を思い返してみよう・・・・・

俺こと桜小路　影虎は、毎日のように朝、５時半に目を覚ます

昔は、ふつうに7時くらいに目を覚ましていたのだが

現在俺の横で猫のように丸まって寝ている俺の戸籍上の姉で本当は、
恋人の桜小路　椿さんと暮らし初めてから

俺の生活はがらりと変わった

椿に会うまでは、家事なんてほとんどしないでレトルトやカップ麺
に頼りっきりだったが椿さんに完全に食生活を改めさせられ現在で
は、

朝がとことん苦手な椿さんの変わりに俺が朝食を作る習慣が付いた
でもそれだけならそこまで早く起きることないだろって？

実は、椿は、夜一人では寝れません。

本人も恥ずかしがってはいるんだがそりゃ～１１歳の時に巨大な組
織に命を狙われ１年間も逃げ回ってたら

夜寝るのも怖くなりますよ

だから俺は、常に椿のそばにいて見守ってやるのが日課だ

まぁそれはいいや

トントン

今日は、気分が日本食なのでご飯を炊いて味噌汁を作り卵を焼き
日本の朝食には欠かせない焼き魚を焼いている最中に
目をさすりながらフラフラした足取りでこっちに向かってくる椿さんが居た

身長が俺より３０センチ位低く綺麗な黒髪は膝まであり黒のランニング一枚に短パンという姿だ

正直言って・・・はしたない

自称では１７歳だと言い張るがどう考えても中学生が良いところの椿だが
スタイルだけは、高校生を超越しているので
目のやり場に困る

「あ、あの～椿？お前は女なんだからもうちょっと服装に気を使おうぜ。な？」

俺がそう言うと

「うるせーよ、俺は、女の格好なんてしない。それよりも飯は出来たのかよ！？」

機嫌悪そうに怒鳴る椿

彼女は、女であることにコンプレックスを若干抱いていて

女性らしい服装を無理矢理させようとすると泣いて暴れる

初めは、性同一性障害かな?っと思い調べてみたが

少しだけ正解でほとんど違った

椿は、心も体も女性だった

しかし、彼女が幼少を過ごした環境が悪かった

彼女の保護されていた協会は、経営難で取り立てにいつも怯えていたシスター達を見て

(女ってなんて弱々しくて・・無力なんだろう・・それに比べて男という生き物は、何てゲスで汚いのだろう、でも、それでも男は、常に女の上に立っている・・・なら、女より男の方が絶対に得だ)

っと心に刻んでしまったため

常に強くあろうと

女だと思われないよう生きてきたため

心に強靱な鎧という枷を付けてしまっている

だから、自分の中で弱者の象徴である女性に自分の体が変化しているのに酷く嫌悪感を抱いている

俺は、そんな鎧を剥がすのではなく自分から脱いでくれるのを心か

ら望んでいる

色々試したりもした

そのかいもあってか椿は、俺の前でだけたまに鎧を脱いでくれる

それがたまらなく嬉しかった俺は、椿に対して本当の意味で愛情という感情を抱いている

だから俺は、椿に再び鎧を着せた奴は必ず・・・・喰い殺す!!!

何処へ逃げても・・必ず喰い殺す

「誰も女性らしい格好をしろなんて言ってないぜ♪「な?」やっぱり自分でもどんな格好をすればいいかわかって「うるさい!!」〜ガン〜ぐは、〜ガチャン、ジュウ〜〜あちちちち」

俺は、椿の背に合わせるために腰を曲げて椿をからかっていると椿が両手で俺を突き飛ばし俺の身体が魚を焼いていたフライパンに当たり

焼き魚の一匹が飛び出し

俺の頭にベタンっと乗った

そして俺は見事にやけどした

そして、俺は頭を氷嚢で冷やしながら食べ終わった食卓を片づけていた

すると椿が

自分の部屋に戻ろうとしたので

俺は、椿の手首を掴み

「今日は一緒に学校に行かないか？」

俺は、椿に一応学校には通って欲しいと思っている

だから、今日は、椿を誘ってみた

「お前の制服を貸してくれるんなら行ってやっても良いぞ」

椿は、悪戯している子供のような純粋に黒い目で俺に行った

（こいつ今日も行かないつもりだな～？・・・よし）

「なら貸してやるから行くぞ」

俺は、すぐにクローゼットから夏の制服を取り出し

椿にそれを投げつけた

椿は、それを頭からかぶり

もがいていた

「まさか、お前本当に連れて行くつもりか？それよりお前は行かないつもりか？」

椿が驚きながら言った

「もちろん俺も行くぞ、正直俺は、制服なんて着なくても誰にも注意されないからいくらでも貸してやるぞ♪それに俺は、この桜吹雪が裏地に縫い込まれたコートがあるから♪「ぐっ・・・行ってやろうじゃね～か！！」正直言ってお前のその発育良好の身体で俺の制服を着たらある意味で男供からやらしい視線を送られることは間違いないぞ「え・・・」毎日一緒にいて見慣れてる俺ですらお前の格好には、未だに馴れないんだから他の男子達が見たらどういう反応をとるか・・・考えるだけでも恐ろしい・・だから、変な意地張ってないでお前の制服に着替えろ（まぁ何かしたり椿を変な目で見る男子が居たら俺が喰い殺すが）」

俺がそう言うと

「絶対にいヤダ――――――絶対にやだ・・・いやだ・・」

涙を流しながら首を振って

小さな子供のように泣き出した

（さすがに言い過ぎたかな～？・・・ってそれよりも・・はぁ～せめて家からは、出かけて気分転換させるつもりが失敗したな、まぁたしかに男性恐怖症を取るか女性らしい服装を取るかの一世一代の

決断を朝っぱらから問いかけられてもな）

っと心の中で反省をしている最中にも

「いやだ・・・いやだ・・・いやだ・・・そんなの耐えられない・・・どっちも嫌だよ・・・」

椿は、パニックを起こしたように泣いていた

これ以上放っておくと精神崩壊しかねないので

「別に本気でそう言った訳じゃないからな、な？」

俺は、そう言いながら

椿の頭を撫でた

椿は、人とふれあうことを拒絶する反面

人との（まぁたぶん俺だけ）接触を求めるっていう変わったあまのじゃくのような正確だ

正直、俺の中では、中学生に位置されている椿さんだが・・泣き出すと小学生と対して変わらないほど幼い

「ほ、ほんと、か？制服着ないでも良い？男達に見られないで良い？」

目を擦りながら俺に問いかける椿

う～ん・・かわいいっちゃかわいいけどキャラ合ってないよな？

「俺としては、普通に制服を着て普通に学校に通って友達を作って楽しく生きて欲しいってのも・・一応望んでるんだぞ？」

俺は心の内を優しく言ってみた

今の椿にきつい言葉をかけても泣くだけで逆効果だ

「・・・・・今日は、行きたくない」

椿は、普段の椿の戻り

俺に申し訳なさそうに言った

「そっか・・・（無理に言うと愛想をすかされちまうな）なら俺は行って来るよ」

そう言って俺は家を出てマンションの地下にあるガレージに駐車してある俺のバイクコレクションの中でもお気に入りに乗って誰にも気付かれずに誰にも覚えられることもなく学校にたどり着き

教室の存在しないはずの俺に席に着いている

誰も俺のことを気付かない

さっきやいつも椿には、友達でもつくれっていってるけど

俺は、友達なんて居な%悪戯で俺の存在を世界中のみんなに思い出させて俺の命を懸けたリアル鬼ごっこでもするか?それとも世界中の車に乗っている人から運転の仕方を忘れさせて歴史に残るような大災害を起こすか?名付けて『ど忘れ交通事故大作戦!!』・・・・・暇だな~・・・孤独だ~」

今、俺の気まぐれで大勢の尊い命が失われかけたのは、言うまでもなく誰も知らない

(・・・・・確か今日は、この後は、集会だけだったな・・・・帰って椿と遊びにでも行こうかな)

俺は、イスを下げて一応鞄を持って途中下校しようとすると

俺のクラスの三馬鹿デルタフォースの一角ことツンツン頭が特徴的な『上條当麻(かみじょうとうま)』が俺の通る道をとおりたかったのか俺の方向に歩いてきた、その瞬間、教室に転がっていた鉛筆に脚を滑らせ

・・・・俺にぶつかってきた

(・・・・・・・人にぶつかられんのって久々だな・・・・それにしても鉛筆一つで転けられるとは・・興味深い・・っていうか高校に鉛筆があるなんてこれは不幸の領域を超えてる)

「あ、あの、ぶつかってすみません」

俺の悪い癖の考え込むをしていると

上条当麻が俺に話しかけてきた

・・話しかけてきた？

こいつ俺の姿が見えてるのか？

いや、俺のことを認識できてるのか？

俺の姿に若干びびっている上条当麻をほったらかして

再び考えにふけってしまっていると

教室の外からボサッとした黒短髪で体型は一般の男性とはかわりない、制服のボタンを一つ外していてだらしなく着ている男が

「よぅ、当麻。
ん？こっちはお前の友達か？」

っと片手を挙げて当麻に挨拶した

（こいつも俺が見えてるのか？いや、こいつの記憶には、俺は、微かにしか残っていない、まぁそれだけでも十分特異点だけどな）

「一真…、いいところに来てくれた…。」

「えっ…？」

（今この一真って奴、もの凄く嫌な顔してるな）

「助けてください…。」

「ハァ…。」

（もしかして俺が虐めてる形になってる?酷い勘違いだぞ）

「え～と…、あんた名前は?」

っと俺を見上げながら俺の名前を聞いてきた。

（やっぱりこいつには、俺がくっきりでは無いが見えている?何故だ?

それどころか、見上げて目を合わせてくる。

こいつら…興味深いな…。まぁ名前くらいは教えてやるか。俺を見つけられたご褒美として）

おれはすぐにフードをとって

「俺のぎめ…じゃなくて名前は桜小路影虎（さくらこうじかげとら）。

よろしく。」

「今、偽名って言いかけなかったか…。」

（す、するどい!?確かに言いかけた・・・）

そして、今度は上条当麻の方を見て…。

「んで、当麻は今回、何をやらかしたんだ?」

「いや、何か疑問に思っていて声をかけようとしたら俺が転んで激しくぶつかってこうなった…。」

「ハァ…ん？疑問？」

（俺に対しての疑問か？嫌々そんな訳ないだって俺は、今日までちゃんとじぶｎ）

「あぁ…、何故かみんながこいつだけを無視するように通り過ぎたり、俺とこいつが寝てる時、小萌先生が俺しか注意しない上に授業中でこいつが一度も当てられた事がないんだよ…。」

「影が薄いだけ…ってことは無いな…。」

（ばれてたーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？一体こいつら何者なんだ？・・よし）

「そろそろ、君たちの名前を聞いても言いかな？」

俺がそう言うと

「えっ？あぁ…悪かった。
俺は負導一真。」

「俺は上條当麻。
よろしく。」

「よろしく。」

そう言って上条当麻が握手をしてきたので応じると途端教室の皆ざわざわと驚き始めた。

「ッ！？」

俺は変な感じがして舌打ちをしてしまった

「一体どうしたんだ？」

負導が聞いてきた

「…。」

（まさかこのかんじ・・・・）

「…何をしたんだ？」

つい疑問に思い上条当麻に聞いてみた

「えっ！？」

何か驚いていた

（意図的ではなく自然に何かが起こったのか？）

「当麻…、教室のみんなの様子が可笑しいぞ…。」

「ん？」

負導が上条に言うと、二人とも耳に意識を集中させて聞いていた

「あんな奴いたのかよ…。」

「今、いきなり現れなかったか…。」

「さっきから誰と話してるのかと思ってたけど、あんな人がいたなんて…。」

「さっきからあいつらは見えてたのかよ…。
何者何だよ…。」

などの声が聞こえてくる。

「みんな何を言ってるんだ…。」

「もしかして、さっきから超能力使って姿消してたか?」

「いかにも、俺はさっきまで能力を使っていたが、消えていた訳ではない…。」

（ここまでの特異体質な人間は、始めてみた。もしかしたら、こいつらなら俺のことを忘れないで居てくれるかもしれない・・・・まぁどっちみち関係ないか・・・・・・・・・）

何故かもの凄く嬉しかったが同時に悲しくなった

（まぁ能力くらいは教えてやるよ・・ほんの少しの間だけでも話してくれてありがとう）

「記憶消去（メモリーキャンセラー）と言って、相手の記憶を消したり出来る。
つまり、俺は常に全員から俺への認識を忘れさせていたんだ。」
俺は、詳しく能力の特徴を教えた。

そして、俺は、いつものように記憶を消そうと力を強めた
「と言う訳で悪いが俺の存在と俺の事をを忘れて貰うぞ…。」

「「えっ！？」」
2人は驚いていた
俺は、手を上に掲げて指をパチンッと鳴らした。
すると教室の皆が一瞬静止して動き始めると何事もなかったように動いていた

（いつもどうり俺と椿の生活の邪魔になることは消す・・・あれ？この二人の頭に全然入り込め無いぞ？それどころか俺のこと覚えてる！？）

「なッ！？何故お前達は俺の存在を忘れない！？」

「「ハァ！？」」

俺の意味不明な言葉に二人は驚いた。
そりゃそうだ

すると

「お前、まさか能力使ったのか？」

っと負導が聞いてきた

「えっ！？」

上条は驚いていた

「その通りだ…。」

（そのとうりだけど何で君たちからは俺が消えないの？・・・・・・・
なんだろう、本当なら悔しがるところだけどなんか嬉しいぞ）

「どうやら、君たちには何故か効かないようだな…、残念だが、面白い…。
まぁ、これも何かの縁だ。
上條当麻に負導一真…。
改めて、よろしく。」

この言葉は、俺の口が勝手にしゃべった台詞だった

たぶんこれは、記憶以外の椿以外の人間との繋がりが出来た弾みに俺の口から漏れた台詞なのだろう

「「あぁ…こちらこそ、よろしく。」」

俺が両手を差し出すと

ふたりは、俺と握手してくれた

正直お恥ずかしい限りだが

俺は、小さいころから友達ってのが居なかった

小さいころから力が強くてその上に超能力を持っていた俺は、誰にも構ってもらえない寂しさからもの凄く荒れていたため友達なんて居なかった・・・ついでにいうと喧嘩ばっかしてたときの俺の名が『牙桜(がおう)』（結構気に入っている）先代の喧嘩屋から受け継いだ名だ

俺が１２の時には椿が居たけど友達って言うよりあの時は、本当に姉っぽかったし2週間位立つとだんだんあいつのことが好きになり始めて恋愛の対象になってて告白もしたしそれを受け入れてもらって今では、２年近くカップルだ。（手も出してるよ♪もちろん両方の了解を得て♪決して無理矢理はない！！どちらかとういと椿から？・・・・・・・）話がそれてしまったようだそれどころかもの凄い発表までしてしまった。仕方ないだろ好きなんだからそれにお互いがお互いを好きで手を出さない方が失礼であって俺は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まぁ俺は、友達が居ないので今はもの凄く嬉しいのである

つづく

記憶消去（孤独な学生）（後書き）

今回は、全く戦闘はありませんね。はい

今回登場した負導　一真くんは、とある負極の能力解析の主人公です

感想ください

喧嘩勃発（喧嘩屋、牙桜の女）（前書き）

マシンガン投稿中です

でもそろそろストックが切れるので終わりにします

感想ください

喧嘩勃発（喧嘩屋、牙桜の女）

その後、なんだかんだあって色々話し込んでいた

「影虎？」

っと当麻が俺に声をかけてきた

「なんだ？」

「お前っていつもバイク登校してるのか？」

っと俺に尋ねてきたので

「あぁ、俺昔からバイクは好きだからな愛用してるよ」

「免許持ってるのか？」

上条がもっともらしいことを聞いてきた

「持ってるよ大型のも年齢をごまかして取得してる」

「ｓ、そうですか（深くつっこむのは止めよう）・・・そういえば、今度お前の家に遊びに行っても良いか？結構大きな家って言ってたじゃん「なら今日来るか？」悪い今日は、不本意ながらある人にアニメのＤＶＤを借りてこいと頼まれているので「ふ～ん・・・今日聞いたシスターさんか？」はい、唯でさえ少ない生活費を使い込む天才の「ハハハ、もしかしたら家にあるかもなお前の言っているアニメのＤＶＤ」・・もしかして集めていらっしゃるので？「俺の彼

女がな」・・・彼女居るんだ。「まぁな」いいな～俺も出会いが欲しい・・「・・まぁ好きだと感じたらよーく考えてみることだ。よく考えてそれでも好きだと思うんならそれは、恋の一歩手前だ後はお前次第だ。俺は、当たって砕けろで成功したよ」現役の方の意見ですか。参考にします「で?家に来るか?」ならたのむわ「了解」後一真にも言っておくよ「ご自由に」じゃ～俺は、小萌え先生に呼び出されてるから」

上条はそう言うと職員室に向かった

俺は、イスを上下に動かしていた

（さてと帰ろう）

俺は席を立ち

学校の俺専用駐車場（本当は、教員専用）に止めた緑が主なカラーの大型バイクに

に乗って

待っていると

上条がなにやら暗い表情で来た

おそらく補修に次ぐ補修が決定したのだろうと心の中で哀れんだ

「おい、いくぞ」

俺は、上条にヘルメットを投げた

「りょ、りょうかいです」

「死にたくなかったらそこのレバーをしっかり握っておけよ」

「え？なんｄ」

ヴォォオオオオオオオオオオオオオオ

上条が何か言っている気がしたがそんなことお構いなしにフルスロットルで走り出してしまった

そして、１０分後

家についた俺は、俺の運転で気持ち悪くなり

今にも天に召されそうな上条を部屋に運び

ソファーに寝転がせた

俺の部屋にはいるとき

上条は、少し驚いた顔をしながら

小さな声で

「イマジンブレイカーが発動した?」

っと言っていたが俺にはよくわからなかった

そして、上条が唸ること2分後

「上条「なんですか影虎さん~」ちょっと俺は、スーパーに買い物に行って来るからそこで待ってろよ。帰ってきたらビデオを貸してやるよ」

「遊びに来たはずなのに悪いな・・うぇ」

(俺の運転ってそんなに気持ち悪いかな?俺的には、椿の車の運転の方が気持ち悪くなるが・・・)

いろいろ考えながら今日の晩飯のおかずとコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を歩いて買いに向かった俺

影虎視点いったん終わり

桜小路　椿視点

影虎が家を出てから俺は、

１ヶ月に一回の診断にきている

俺は、昔からずっと酷い環境にいたから

精神面に軽くない傷を負っている

そのせいで俺は、通常では考えられないほどの多重人格者だ

俺の中には、１７２個の人格が存在する

その中の一番攻撃的な人格が昔、影虎と会って間もないころに俺を乗取って

影虎に瀕死の重傷を負わせてから俺は、こうやってたまに精神科の先生と会って薬をもらったり相談したりする日をもうけている

「で、最近気がつくと知らない場所にいたり意識が飛ぶことは少なくなった？」

っと俺にこの病院に２人居る名医中の名医の１人の桜井　忍　女医が俺に聞いてきた

黒髪を後ろで一つにまとめ長身でかなりの美人、見た目と同じでどこかの財閥の令嬢らしいのだが令嬢としての生活がつまらないのでヤンキー『牙桜』になった後に医者になったらしい

この先生は、医療なら何でも出来るが俺に絶対に可愛いからと無理矢理コスプレさせようとするなど自他共に認める変態だ（いつも俺を着せ替え人形のように扱うこの人曰く俺は、いじりたくなるよう

なきしゃではかない可愛いお気に入りの女の子らしい・・・女じゃなかったら絶対に殺してる）

この人は影虎の古くからの知り合いで

確か喧嘩の仕方をおしえていた影虎の師匠？

確か影虎の不良名の『牙桜』の先代らしい

『牙桜』って言うのは、学園としの都市伝説に存在する

最強の喧嘩屋の称号

牙桜は、必ず桜吹雪が描かれたコートを羽織らなければいけない

影虎の緑色のコートの裏側は、桜吹雪の刺繍が入っているのは、それが理由

牙桜は、代々強者に受け継がれるらしい

本気で喧嘩するときだけ桜吹雪を羽織るという伝統があるやらないやら・・・・・・

牙桜の説明終わり

「最近は特にありません。夜中に起きることもあまりありませんし・・・ただ「ただ？」・・・最近妙に悲しい気持ちになったり記憶がフラッシュバックして・・」

「う～ん、人格がどんどん減るごとにあなたの心に余裕が出来始めてるからじゃないかしら」

先生は俺にそう言った

「そう・・ですか・・」

「それよりも椿ちゃん」

「はい？」

「あなたの心の方じゃなく身体の方の症状は、影虎くんに報告しなくて良いの？もういろんな症状が出てきてるでしょう。そろそろ身体に出てくるわよ。隠せるのもそろそろ限界よ」

「・・・・・・・・バレたら諦めますけど・・隠せる内は隠しておきたいんです。『私』ですら受け入れられた無いんです。だから影虎には、まだ知られたくない」

「そう・・・・ならまだ秘密にして置いてあげます。それよりもうちの病院でナースやらない？絶対似合うわよ♪可愛いわよ絶対♪」

「『私』泣きますよ？暴れますよ？」

先生が仕方がないっと言いながら納得してくれた後に余計なことを言ってきたので軽く返す

「ありがとうございました。先生」

わた、俺は、先生にそう言うと
病院を出た
気がつけばほとんど夜になっていた
結構話し込んでいたからな・・・

そして、家に帰ると俺の張った結解が全て壊されていた
１００種類近くの結解が全てだ
俺は、家に入ってすぐに中を確認した
するとソファーに誰かだ横たわっていた男だった
こいつが俺の張った結解をやぶったのか？
つまりこいつは魔術師か？
なら、今ここで・・・始末する
俺はすぐにこの学園都市で影虎が許可してくれた魔術
『炎蛇の毒牙』
簡単に言えば魔術の炎を蛇状に変化させ相手に巻き付けて焼く拷問

用の魔術

「え、あなたは、影虎さんの弟さんで、『炎蛇の毒牙!!』うわ～!!!!!!!!」

俺が謎の男に攻撃を仕掛けると男は、とっさに右手を前に出し

俺の魔術を防いだ

（何だ今の能力は?）

「いきなりなにすんだよ。パイロキネシスか?」

（なぜ、この状況で超能力の話しになるんだ?結解を破っている時点で俺が魔術師だととわかっているはずだ）

「お、おい、何か気に触ったんなら謝るから（ポン）」

謎の男が俺の頭に手を置いた

（え、あ、な、）

思考がまとまらず身体が少しずつ震え出すのを感じた

俺には、今こいつが『奴ら』に見えた

「死ね!!」

俺はすぐに払いのけると男の腹部に膝蹴りをし九の字になった男の顔面にアッパーを決めようとしたが

少しは喧嘩慣れをしているのか

普通に避けられドアから外に逃げ出した

（え、っと、あ！！逃げられたらここの場所が他の魔術師に！！）

考えをまとめ今が大変不味いと思った俺は、身体の震えがまだ少しだけ残っている状況で追いかけた

幸い俺の方が足は速いのか

だんだんと距離を積めることが出来た

「待て！！お前は一体何者なんだ！？」

俺はそう叫んだ

「だーかーら！！友達にお呼ばれした只の高校生の上條当麻だー！！」

こいつは、さっきから同じ応答しかしない

「嘘をつくな！！」

だんだんイライラしてきて怒鳴った

「嘘じゃない！！不幸だー！！」

何をさっきからいってやがる

「うわぁ！？へ？どわぁ！？」

上条トンマ？が走っている最中に鳩の群れに向かって走っていき鳩が一斉に飛び立ちそれに驚いて急ブレーキをかけてしまい、運悪くそこが濡れている場所で足を滑らせて勢いよく後ろに頭から転んだ。

「イッテェ…。」

「追い付いたぞ…。」

「へ？」

俺は、仁王立ちで見下した

「これが最後だ。
正直に言えば命だけは助けてやる。
お前は一体、何者なんだ？」

（吐かせるだけ吐かせて始末してやる）

「だから、本当に只の高校生で友達に家に呼ばれて入ろうとしたらあんなことになってしまったんだって！！」

っと許しをこうように言ってきた

「ハァ…。
どうやら、まだ言う気にはならないらしいな…。
残念だ…。」

これ以上は時間の無駄だ・・

「ヒッ！？」

俺は上条トンマを消し去るため手を翳した瞬間

「重力…倍加！！」

横から声が聞こえると

「なッ！？」

俺の身体が急に重くなった

影虎に乗られてるときより重い

「ふぅ～、間に合った…。」

っと謎の男が言った

「ッ！？」

仲間が居たのかと思いしたうちをしてしまった

「一真!!サンキュー!!」

この状況はやばい

それよりこいつは誰だ?

「お前…は…?」

名前を聞いてみた

「名乗るのもめんどくさい!!」

この反応には驚きだ

「なッ!?」

思わず驚いてしまった

すると男が上条トンマの方に近寄り、手を差し伸べた。

「当麻…今度は何やらかしたんだ…?」

「まぁ、いろいろあってな。

それよりお前、能力使えたのかよ。

レベル0って言ってなかったっけ?」

トンマは、男の手を借りて起き上がり、首を傾げて尋ねた。

「…これには色々と訳があるんだ…。
また話すよ…。」

「？そうか。」

・・こいつら俺のことを完全に無視してやがる

「無視するな！！」

あまりにイライラするので怒鳴ってしまった

「「あっ…。」」

男共に叫ぶと思い出したかのように反応をした。

「お前は誰だと聞いているんだ！！とっとと答えろ！！」

「うるせぇな…。
そんなに名乗って欲しかったら先にお前から名乗れよ…。
それが昔から言う礼儀だろ…？」

「クッ…。」

どうする、現状況は好ましくない

なんで、こんな奴らに名のらなきゃならないんだ

「桜子路（さくらこうじ）…椿（つばき）…。」

本当は名のりたく何て無い

でも・・・

「それでよろしい。

俺は…、ん?桜子路?どっかで聞いたような…。」

（こいつ影虎のことを知ってるのか?）

すると男が

「遅れたな…。

俺は、負導一真。

この不運男の友達だ。」

そう言ってきた

・・・ブドウカス魔?

変な名前

「弁解する言葉もございません…。」

すると上条トンマが何か言い出した

「んで、今回こいつが一体何をやらかしたんだ…?」

「…。」

何か聞かれている気がするか体が重くてだんだん気持ち悪くなって来た

なんかジェットコースターに乗ってる気分だ

「黙ってちゃわからないぞ～。何かいってくれ…。」

「…しやがれ…。」

気持ち悪い・・

「ん?何だって?」

だんだん意識が無くなってきた

このやろう

「とっととこの重っ苦しいのを解除しやがれっつってんだよ!!」

全力で怒鳴った

「やだね。だって解除したらまた当麻に襲いかかるからな…。だから、悪いがそうしといて貰うぜ…。」

「クッ…、もういい…。」

もういいや、もうどうでもいい

この気持ち悪いのから逃れられるためだったら

こいつら跡形もなく吹っ飛ばす

まだ『俺』であるうちなら生かして置いてやったかもしれないのに

もうすぐ『私』になってしまう

俺は目を閉じて

「この異能に対しての分析、把握、そして…。

抗体を完成させよ…。（０００２０１５０５４０６８０６８２９６０６７０１９８０４７００５６０７６００１７０１６７０１５６７０６２０７６００６７０６０１０１５６４１６５６６４１７８９１５６４８９１５１４８９４２．０５３４８９４８＋＋１６５１９７５０２３６４６０５６４８９７８９１２３１８９８４５３０２３１４９８４１２４８９７８１２５９１４１７８９９０００１６５１９７５０２３６４６０５６４８９７８９１２３１８９８４５３０２３１４９８４１２４８９７８１２５９１４１７８９９０００００２０１５０５５４０６８０６８２９６０６７０１９８０４７００５６０７６００１７０１６７０１５６７０６２０７６００６７０６０１０１５６４１６５６６４１７８９１５６４８９１５１４８９４２．０５３４８９４８８９９０００００２０１５０５５４０６８０６８２９６０６７０１９８０４７００５６０７６００１７０１６７０１５６７０６２０７６００６７０６０１０１５６４１６５６６４１７８９１５６４８９１５１４８９９０００００２０１５０５５４０６８０６８２９６０６７０１９８０４７００５６０７６００１７０１６７０１５６７０６２０７６００６７０６０１０１５６４１６５６６４１７８９１５６４８９１５１４０５３４８９４８＋＋１６５１９７５０２３６４６０５６４８９７８９１２３１８９８４５３０２３

1498412489781259141789900165197502364605648978912318984530231498412489781259141789900000220150540680682960670198047005607600170167015670620760067010160010156416566・・・解析完了）」

「何ッ！？」

ブドウカス魔が『私』が重力を無効化したので驚いていた

これは、『私』が対能力者用に開発した

魔術

『演算崩し』

相手の能力のを瞬間的に解析しその能力に対しての耐性を付ける

裏技

するとブドウカス魔がもういちど重力を使ってきたが無駄だよ

「なッ…。」

あまりにも滑稽だ

「無駄だ…。
それはもう効かん…。
さらばだ…。」

「一真！！」

『私』が手から『罪深き聖火』と言う魔術を放ったが上条という人間に打ち消された

「チッ…。」

面倒な奴

「今の…何だよ…？」

（こいつらお互いの能力について知らないのか？）

「説明はあとだ。
今は、あいつが先決だ！！」

「あぁ…、そうだな…。
面倒だが…やってやるよ…。」

なにやらうにゃむにゃにされながらも構える二人

（『私』でいられるのは、後、一分が限界かな?楽じゃないね、心の鎧（椿）を脱ぎ捨てて心をさらけ出すって言うのも・・・いつもみたいに助けに来てくれないかな?・・・ねぇ椿を守る『牙桜』さん）

どんどん自分が無くなっていくのを感じていた

わt、『俺』は、主人格じゃないからちょっとでも鎧を脱ぐとすぐに別の人格に乗っ取られてしまう

だから、出来る限りストレスをためないように生きてる

我慢の限界になると

今みたいに『俺』が無くなって行くから

怖い

でも、乗ったられてたまるか!!

俺は、俺だ!!

そう思った瞬間に

「お前達…。
何をしているんだ…?」

今、一番聞きたくてたまらなかった声が聞こえた

「「ん…?」」

2人は驚いていた

そう、影虎が来てくれた

「「影虎!?」」

二人は振り返りハモリながら影虎の名前を言った

買い物帰りだったのかスーパーの袋を持って首をコキッコキッと鳴らした影虎が立っていた

「2人共…、あいつに何をしようとしてるんだ…?」

影虎が二人に険しく、恐ろしい表情で言った

俺には、もの凄く優しさに溢れた顔に見えた

「いきなり火球打たれて…「影虎、食い殺してやれ…。」なッ!?」

カス魔と言う奴が何か言おうとしたが俺は、その言葉を遮り影虎に命令をした

「極めて了解…。」

影虎はそう言い俺を守るときの凶暴な顔をし狩りの準備に入った

「オイッ!!話を聞けって!!」

カス魔が何か言うが影虎は無言で獲物を狩る為にゆっくりと歩いて

いく。

「だから、話を…。」

「無駄だ…。
あぁ、なれば俺以外は止める事は不可能だ…。」

嘘は言っていないあいつは、俺のためだけに人間にも獣にも化け物にだってなってくれる

「なッ!?」

カス魔は言葉を失っている

「クソッ!!一真どうする!?このままじゃ…。」

上条トンマは、一真に訪ねた

(今ようやくあいつの名前がはっきり聞き取れたカス魔じゃなくて一真だったんだ)

「頼んだ…。」

「えっ!?」
「向こうは頼んだぞ!!
当麻!!
あいつは俺が目を覚まさせる!!」

「了解!!」

「「ウォォオ！！」」

そう言って一真って奴は、影虎にかかっていった

一人で勝てる分けないのに・・・・

そして、上条トンマ改め上条当麻が俺に向かってきた

ある意味こいつの判断は正解

影虎との約束で俺は、血液消費型の魔術は、使わないことにしているから

実質俺は影虎より弱い

「でも、負けるわけにはいかない！！」

俺は、大量の『罪深き聖火』と『炎蛇の毒牙』を放った

しかし、こいつは、右手で全部を打ち消すので正直

やりにくい

そして、そんな状況が2分ほど続いた

そして、俺が『炎蛇の毒牙』

を放つと上条が打ち消しながら

迫ってきた俺は、後ろに飛ぼうとしたが
間に合わず
「ウォオオオオオオオオオ」
ガァン
左の頬を思いっきり殴られた
「グゥウウウ」
俺は、そのまま殴り飛ばされた
ドサ
そして、地面に落ちた
「く？グゥ」
体を起こして闘おうとしたが
アゴの近くを思いっきり殴られたため
身体が思うように動かない
すると上条当麻がおれに近づいてきて
俺の来ているフード付きのパーカーの胸ぐらを掴んで持ち上げた

その時、俺のかぶっている帽子が脱げ落ちて俺の長い黒髪が広がり
俺の服の上着のチャックが壊れ
サラシを巻いた胸が見えるようになった

「え、お、女の子!?」

上条って男は、顔を赤くしながらそう言った

(男に触られた、{{嫌だ}}だめだ飲まれたら{{怖い怖い恐い}}だめだ、身体が震えて動かない{{やめて!!!!!!助けて許して!!!}}だめ、{{やめて!!}}y、めて、{{やめてやめて!!!!!!!!}}やめて!!!!!)

「やめろ!!放せぇぇえ!!」

昔の記憶に埋め尽くされそうなった俺の
たぶんこれが最後の抵抗だったのかもしれない

この後は、たぶん体と心が勝手に何もかもおそれて震えて唯全てを否定していたんだと思う

この後の記憶は、無い

椿視点終わり

影虎視点

俺は、状況がよくわからないままこの負導一真と素手で闘っていた

こいつは能力をたくさん駆使して攻めてくるので少しやりにくい

しかも重いのを何発かもらってる

そして、どうやって喰い殺そうか考えていると

「やめろ!!放せぇぇえ!!」

「ッ!?」

突然椿の叫び声が聞こえて、俺はその方向を見ると、左頬の腫れ髪が広がっている状態の椿が当麻に胸ぐらを掴まれて酷く怯えていた

「あいつ誰だ?」

一真が首を傾げていた。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ…。」

もの凄く怯えていた

「椿!?」

思わず叫んでしまった

「えぇぇぇえ!?」

一真が驚いていた

(完全に忘れてた…。
そうと決まれば…。
とっとと終わらすか!!)

本当に忘れていたので申し訳ない気持ちでいっぱいで目の前の一真を廃除することしか考えられなかった

そのため避けられるのが面倒なので上着を掴み思いっきり頭突きを決めてやった

「ん?ガハァ!!」

一真は、なぜか地面をバウンドしてぶっ飛んだ

(何故?・・まぁいいや今は椿を・・)

「さぁて…お次は…。」

今だに唖然となって椿の事を見ている当麻の方を見てゆっくりと歩みよる

「よぅ…。」

イライラを押さえながら平静を保ってみるものの優しい顔は出来ない

「ッ！？」

当麻はいきなり俺に声をかけられて、振り向く

（『俺の椿に』触るなよ上条！！！）

「椿…、大丈夫か？
って言っても今は無駄か…。

（この時にも椿は、涙を流し両腕で身体を抱きながら「嫌だ嫌だ怖い」っと言って震えていた
こんなことになるなら友達なんて欲しいって思わなければ良かったかな）

さぁて、上條当麻…。
人の女に何してくれてんのかな…？」

（聞いてみたものの我慢が効かないや正直、椿がこの状態になると俺は、鎖の外れた猛獣だぜ？）

「まぁ、言い訳はじっくりいたぶったあとに聞いてやるよ…。」

（嘘だけど）

「ウワァ！！」

俺は思いっきり拳を当麻の頭目掛けて振り下ろすが、当麻は身体を転がして避けると地面に拳が当たり、アスファルトが砕けていた。

（あれ？俺ってこんなにファンタジーな威力のパンチもってたっけ？やっぱり日に日に怪力になってくるな俺）

当麻は恐ろしさのあまり顔が険しくそしていつになく真剣な表情になっていた

「ウラァ！！」

俺が再びパンチを仕掛けると

「チッ！！」

交わされたので

「オラァ！！」

先代牙桜の直伝のキツイ蹴りを喰らわせた

「なッ！？グハァ！！」

何とかパンチは交わせたものの、蹴りが腹に決まった当麻、意識が朦朧（もうろう）としてくるはずだ

「ウォォォオ！！」

お！？まだ立ち向かってくるか？

「ウリャア！！」

当麻は振りかぶって顔面目掛けてストレートを叩き込もうとして、
俺も返り討ちに合わせるためにストレートを繰り出した。
そして…。

「グッ！！ガッ…。」

「グハァ！！ァァア…。」

俺と当麻の頬にクロスカウンターが決まったが、当麻は膝を折って
倒れていき気を失った…。

「さてと…、なかなかいいストレートだったぜ…。
椿…ってまだ無理か…。

（未だに怯え続けていた）

さぁて、まだ償いは終わって…「重力遮断…。」なッ！？お前！？」

急に体が浮き上がった

「よぅ…。
何とか、助ける事が出来たぜ…。」

一真が意識を取り戻して起き上がっていて、俺の重力をほとんど無
くして宙に浮かせていた。

「もう、我慢ならねぇ…。
重力倍加!!」

「グハァ!!」

一真が荒々しい口調で言うと、宙に浮かせていた状態の俺に一気に重力をかけて叩きつける。

結構痛い

「今のが、俺の分だ…。
そんでもって…。
これが…、当麻の分だ!!
重力遮断!!」

一真は一気に走りだし、飛び上がり際に自分の重力を遮断して高く飛び上がって

「重力倍加!!」

そして、自分の体重を重くして俺目掛けて振りかぶってストレートを繰り出してきた

俺も

「面白い!!
俺はお前を食い殺してやるよ!!」

っと言いただいま大変ファンタジーな殺人パンチを一真の拳にぶつけた

少しの間

押し合いが続き

おれも少し疲れていたので押され始めた

（やば、さっき捨て犬を虐めてる奴ら（２０人）と闘ってたから疲れが出てきた・・・が！俺は椿の前では、絶対に倒れちゃいけない、そう言う約束だからな！！！！！！！！）

疲れなんて吹っ飛んでしまった俺は、一真の攻撃に耐えた

すると一真は、自分のかけた重力に負け

「ガァ…、ァァア…。」

地面に突っ伏した

「惜しかったな…。
もう少し、重力が重かったらさすがに負けていたかもな…。」

（昔の俺なら間違いなくお前に負けてたよ。でも、今は、誰にも負けない負けるつもりがない）

俺はその後、一真を当麻の横に並べ

『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』

っと唱え

「さてと…、あとは頭を割って終わるか…。
え～と、よし、手より鋭き剣を出現せよ、加える矛盾は斬るのではなく砕く剣を！！」

そう言って俺は、両手をパンパンて叩いて、前に差し出しとスラッとした鋭い剣を錬成した

「一応試しに…。」

近くにあった街灯に向けて、剣を振り下ろした。
すると…！！

「うん、十分な威力だな…。」

なんと、街灯が斬れるのではなく、ガツンッと言う音と共に街灯が歪みかなりへこんでいた。

想像道理♪

「さてと…。
少しだけだったが中々楽しかったぞ…。
じゃあな…。」

俺は一真にそう言うと剣を振り上げた。
その時…。

「ハァ…、ハァ…。」

「ん？椿！？大丈夫なのか！？」

椿が立ち上がっていて、俺はそれに気づいて剣を下ろした。

（…一応聞いておいてやるか…。）

「椿、何故あいつらに絡まれていたんだ？」

「それは…、家に帰ったら、１００種類ぐらいの結界が全て壊されていて、家に入れば、あいつが疲れたように寝てるからこいつが犯人だとわかって、火の玉放ったら右手で打ち消して逃げて行ったから火の玉放ちながら、問い詰めながらで追いかけ回してたら、あいつがこけて、問いかけたけどまだ魔導師だって認めねぇからイライラして、火の玉打とうとしたら、んだか重ッ苦しいのがのし掛かってきて、そいつが現れて気分悪くなってきたから早く解けって言ったのに、解かねぇからムカついて、抗体作って火の玉放ったらまた打ち消されてイライラしてたらお前が来て、あぁなった。」

「ハァ…。」

（お前の方が悪いんじゃないのか？椿さん・・最近キレるの早すぎだぞ反抗期？）

椿が当麻や一真を見て答えると俺は頭を抑えてため息をついた。

「お前…、こいつが魔術師って言ってない上に認めてないよな…？」

「それがどうした？」

椿が首を傾げながら俺に尋ねた。

「お前…、それは誤解だ…。
こいつはただ、俺の家にもしかしたら、あるかもしれないビデオを借りに来ただけだ…。」

（なにしてくれちゃってんの？椿さん）

「へ？」

椿は、まの抜けたようなを甲高い声をあげて首を傾げた。

「で、でもこいつしか結界潰したやついないだろ？
疲れてたし。
お前もいなかったし。」

椿は問い詰めるように自分は無実ですと言わんばかりに反論してくる

「結界を潰したのは誰だか知らんが、疲れていたのは俺の運転のせいで、俺は買い物に出掛けたんだよ…。
ホラッ。」

（もう、どうしてくれんの？・・・）

「あっ…。」

影虎は椿に買い物袋を見せて答えると椿は目を一気に反らした。

（目をそらせばいいわけじゃないぞ！！｛怒｝）

「椿…、運ぶぞ…。」

「…俺にはもうそんな力は無い！！
ほっとけばいいんだ！！」

椿は腕を組んでそう言うと、また俺は、幸せを外に逃がすようにため息を吐いた。

「あのな…、俺にも罪はあるが、事の発端はお前の勘違いから始まったんだからこいつらを見捨てる訳には行かないんだよ…。」

「クッ…。」

椿は正論を次々と言われて言葉を失い俯いた。

「まぁ、お前が運べないんなら俺が二人を運ぶが家に入れていいよな？」

すると椿はクルリとおれからそっぽ向いて帽子を拾って髪を纏めて被り…。

「好きにしろ…。」

そう言って椿は家に向かって歩いていくその時まだ少し震えていた

（素直じゃない奴）

「やれやれ…。
よいしょっと…。」

そして俺は二人を左肩に重ねて担いで椿の隣を歩いていく途中に開

いている方の手で

ポケットからケータイを出し

変態（桜井　忍　女医）を呼ぶことにした

つづく

喧嘩勃発（喧嘩屋、牙桜の女）（後書き）

またまた、疲れました

感想ください

事情説明（謝罪（すみませんでした！！））（前書き）

ちょっと速いペースで投稿です

未だに感想が一度もない・・・・・

めげずに頑張ります

ではどうぞ

感想が欲しいです

事情説明（謝罪（すみませんでした！！））

ピップルルルル

〜は〜い、もしもし、トラ？なんのようもしかして椿ちゃんだけじゃ満足できなくてｗたｓ〜解剖するぞ♪〜・・で、なんのよう？〜

余計なことを会話の最初に持ってくるので一応脅しておく

〜いや、何、今日ちょっと喧嘩しちゃってさ〜〜

俺が言葉を続けようとすると

〜あんたまた椿ちゃんに暴力振るったわけ？あの子はワタシのお気に入りなのよ。今から殺しに行ってやるから待ってな！！〜

ブチ

勝手にキレて勝手に切ったよ

まぁ来てくれることには変わりないしいいか♪

そう思い家に帰って

上条達を布団の上に放り投げ

椿が寝ると言うので落ち着くまで横にいてやり

椿が眠り

自由になった後

変態を待っていると

ドアがガチャッと開いた

俺は、ドアの方を見るがだれもおらず

ガァァアンガン

いきなり後ろにまるでトンカチで2回殴られたような痛みが走った

「痛って～！！！！！！！！！！！！！」

俺は後頭部を両手で押さえ床を激しく転がっていた

すると後ろから光学操作（つまり姿を消す能力）を解いた白衣の変態こと桜井忍が両手に血が少し付いたトンカチを持っていた

「よくもわたしの椿ちゃんを虐めたわね」

っと怒鳴ってきた

「正直に言おう今あんたは、勝手な勘違いから無実の人を撲殺しようとしていると・・・痛い・・ついでに言うと椿は俺のもの」

一応強がってみるも痛いものは痛い

「え？・・もしかしてワタシの早とちり？」

とかわいこぶって聞いてくるので

「そのとおりですよ。そのとおり、あんたの勝手な早とちりのせいで俺は、頭にたんこぶ二つ作る羽目になっちまったんですよ。桜井先生？（超怒）」

怒りが爆発しそうだった

「あははは、ごめんなさいね～じゃ」

ガシ

俺はさわやかに帰ろうとする忍を捕まえて

「帰るんだったらこの二人を治療してから帰ってくれ」

俺がそう言うと

「調教？」

ブチ

俺はイラっとしたので上段蹴りを決めようとすると

忍は、それに対処して上段蹴りを繰り出してきて

おれと忍の蹴りがぶつかった

忍はにっこりしていて

俺は、苛つきながら

「治療だ治療、次余計なことを言ったら本気で蹴る」

俺がそう言うと

忍は、「了解」っと言うと上条達の治療をし

帰っていった

さて、どうしよう・・・・（どんより）

俺は、よつんばになって悩んだ

そして、気絶してから1時間後

「う～ん…。

あれ…？ここは…？」

一真が目を覚ました

ここは一体…。」

そう言っていた

「気がついたか…？」

（それと大丈夫ですか？）

「ッ！？」

一真は親指を突き立てて身構えてきた

「待て！！待ってくれ！！当麻が起きたら話をするから待ってくれ！！！」

（これ以上の無駄な争いは、正直言って望まない）

俺は、両手を胸の辺りで左右にブンブンと振って闘う意志がないことを示す

すると警戒体制を解いてくれた

すると

「う～ん…。」

「当麻！？しっかりしろ！！」

当麻が起きそうだったので、一真は、体揺すって起こそうとすると、それに答えるように目を開けた。

「あれ？ここは？」

周りを見渡しながら

「影虎の家だ…。」

一真が説明した

「へ？」

上条は俺の方を見てきた

（ここは謝っておこう）

「「すみませんでした！！
女の子とも知らずに妹さんの顔面を殴ってしまったあげく、精神障害にまで追いやってしまって！！
（すみませんでした！！
椿の一方的な勘違いのせいでボコボコにしてしまったあげくに食い殺そうとしてしまって！！）」」

おれは土下座をして謝ったその時上条が何かを言っていた気がするが無視

「「カ・ン・チ・ガ・イ？」」

当麻は頭をあげて、一真と一緒に声を出していた。

「あぁ…。
本当にすまなかった。
どうか、椿だけでも許してやってくれ！！
この通り！！」

深々と俺は頭をさげて、土下座をする

「うん…。
わかったから、とりあえず何がどういう訳か教えて…。
それを聞かない訳にはどうすることも出来ないから…。」

（こんな俺の話を聞いてくれるなんて・・少し感激だ）

「あぁ、取り乱してすまなかった。
実は…お前達が気絶したあと…。」

……
……
……

「そして、現在に至る訳だ。」

「いやいやいや!!
ちょっと待て!!
爽やかにすんなり話してたけど、何!?俺達はあの人の勘違いがきっかけで死闘を繰り広げた挙げ句に頭をかち割られそうになったの!?
結界ってあの人何者!?それにあんたも一体何個能力持ってんの!?
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ…。
俺はパニックになってきたぞ…。」

いきなり騒ぎ出した

「一真!?落ち着け!!
」

「その通りだ!!それにそんなに一気に質問されても答えられん!

！」

（いっぺんに聞かれてもな～）

「あっ…。
取り乱して、悪かった…」

「一応落ち着いたから、もう大丈夫だ…。
本当にすまない…。」

「もう、良いって。
気にするなよ。」

「うむ。
それに俺も衝撃発言が多かったしな…。」

（本当に容赦なかったな俺）

「んじゃ、片っ端から片付けていくか…。
始めから行くと…。
影虎…、まずはお前のことだ…。
お前は何者なんだ？
能力名は覚えているが、剣を出す能力は聞いてないぞ…。」

「ん？あぁ…。」

俺は悩んでいた。

はっきり言ってしまおうか隠しておこうか
でも、考えるだけ無駄なのではっきり言うことにした

「あれはな…、超能力じゃなくて、魔術なんだよ…。」

「ッ!?」

「…は?」

(意味がわかりません。
超能力じゃなくて魔術?
どういう意味?
当麻が驚いているけど意味がさっぱりわからない。
魔術?そんな非科学的なものがあるのか?)

っと一真が思っていたので俺は

「一真…、お前理解できてないんだな…。」

っと言った

「ッ!?何でわかったんだ!?」

(えっ!?
何でわかったの!?
顔に出てた!?

それならわかるけど…。
よし!!これは聞いてみよう。）

本当に読みやすいなこいつの心

「あのさ…「何で俺がお前の疑問にわかったか、だろう?」そう。
ってえぇ!?」

（だから、なんでわかるんだ!）

「教えてやるよ…、俺の能力で記憶が消せると言うことは、記憶を
読むことも出来る上に相手の心の中も読むことが出来る。
さらに言えば記憶の改善も出来る。
だから、お前の記憶をさっきから読んでいたと言うことだ。」

恐れ入ったか♪

「あぁ…、なるほどね。」
（と言うことは、さっきから読まれてた訳か…。）

「そういうことだ…。」

何だろう楽しい?

「さっきから読むな…。」

「悪い、悪い…。
もう、やめるよ。」

ちぇ、おもしろかったのに

「全く…。
んで、魔術って何なんだよ…？」

「これは、俺の過去の話しになるな。」

そう言って、俺は過去の話を話し始めた。

俺の生い立ちや

大まかに椿のこと

俺達の出会いといままで（かなり大まかに）

魔術のこと

後、牙桜が俺であることなどをおおまかに話した

「と、まぁこんな感じだな…。」

「「…。」」

「どうした？
そんな顔をして？」

上条と不導が変な顔をしていたので疑問に思い聞いてみた

「いや、なんつうか…。
なぁ、一真…。」

「あぁ…。
突っ込みどころが多すぎて言葉が見つからない…。」

あ～俺の話で気分が滅入ってるのね～

「そうか…。
まぁ、そうだよな。」

「さて、俺達のことはわかったとして、椿もう入ってきていいぞ…。
」

俺がそう呼ぶと椿（寝起き）が入ってきて

「そうか…。
さて、白状してもらおうか…。
お前達の正体を…。」

っと言った

「「「はぁ…。」」」

上条と不導に続いておれもため息をついてしまった

「俺達は本当にただの一般人だ…。」

不導が呆れながら椿に言った

「なら何故家に張ってあった１００種類ぐらいの結界がすべて壊れているんだ!?」

そういえば、上条だけは、俺の能力一度も効かないんだよな～

「そんな事言われたって…。
なぁ、当…ま?」

「…。」

不導が聞くと上条が黙りこくった

「当麻、お前まさか心当たりがあるんじゃないか?」

「…。」

「当麻。」

「な、何でございましょうか?」

不導の声に動揺しまくりだな…。

「レベル0のお前が何故能力があったんだ?」

「へ?」

やっぱり予想外だったのか、まの抜けたような声を出してる。

「ッ!?お前!?今質問しているのはこっちだぞ!?」

(頼むから本当に空気読んでくれ…。
少しは影虎を見習ったらどうなんだ…。)

試しに心を呼んでみたが凄い言い方だないや、思い方か?

「お前が出した質問の謎を解明するためにこっちはやってんだよ…。」

「…まぁいい。
それなら続けろ…。」

椿がキツく言うと

(ヤバい!!マジで殴りたい!!
こいつが男なら今頃殴っているところだ。
見た目が男だからいいか…?
影虎さん殴ってもいいですか?)

だめに決まってるだろ!!!

と思い首を横に振った

（あなた、また人の心の中を読みましたね？）

おもしろいんで♪

「で？その能力はなんなんだよ…。」

何かを諦めたような声で上条に言った

俺何かしたかな？

「ハァ…、俺の右腕にはイマジンブレイカーって言う特殊な能力があってな、あらゆる異能と言う異能を打ち消してしまうんだよ…。一回家に入った時にイマジンブレイカーが発動した理由がわかった気がする…。

その～、悪かった…。

そんなの知らずに家に入っちまったから…。

多分、結界も全部潰しちまったんだと思う…。」

なに、そのアンチ能力

俺なんて相手の演算を操ったり消したり狂わせたりでしか能力消せないのに・・俺も十分アンチか？

「まぁいい…。

過ぎた事を攻めても仕方がないからな…。

どうやら俺の勘違いのようだ…。

これからは、気をつけてくれ…。」

椿が許すなんて今日は俺が死ぬ日かな？

「はい…。」

（まぁ…、椿さんもこれからはって言ったってことは少しは受け入れてくれたのかな？
まぁ…、これで一件落着…。）

お前の説明を忘れてるぞ一真

「一真…、俺も教えたんだからお前も何故能力があるか教えて貰おうか…。」

（するわけなかったか…。
そうだよな…。
ハァ…、面倒だ…。）

考えが甘いわ

「俺の能力はアビリティスキャンって言って、食らった能力や見た能力を覚える能力らしい…。」

チート♪チート♪チート♪

ずるくないその能力なんかかっこいい

「らしいってまるで人から教えて貰ったみたいな言い方だな…。」

「あぁ…、俺もレベル０って言われたからそのままで生きてきたが、能力使いに襲われた時に知った能力だし、それを見られて教えて貰ったからな…。」

「ふ～ん…、誰から？」

「白い宗導服をきた銀色の髪をした女の子。」

修道女？それって魔術師じゃ・・・？

「…そ、そっか…。」

当麻、笑顔が惹きつってるがどうしたんだろう？
何か関係があるのか？

「便利な能力だな…。
だからお前達には俺の能力が聞かなかったのかもな…。」

ずるいぞそんなかっこいい能力持ってるお前らがうらやましい

「俺はよくわからんが当麻はそうだろうな…。
それに便利って言っても３０分しか覚えれねぇし。
忘れてから同じレベルで同じ能力三回食らうか五回見なきゃ覚えれねぇんだぞ…。」

「…、そんなに便利じゃないんだな…。
一真だったな、ちょっと話がある…。
来てくれ…。」

椿が一真を呼び出した

もしかして、一真の惚れたとか？・・・・・・・・・うそだ！！！！！！！！！！！！！

もしそんなことがあったら

俺は、俺は、・・夏休みに世界中の人から泳ぎ方を忘れさせて人類史上初の溺死事件を起こしてやる

名付けて『ど忘れでみんな海の藻屑大作戦！！』

・・・そんなのいやだ～

今度は、世界中の人々の楽しい夏休みと尊い命が失われかけたのは、誰も知らない

「？あ、あぁ…。」

そう言って椿についていった一真

影虎視点一時終了

椿視点

家に帰ってからずっと考え込んでいた

俺は、今日、上条と不導に酷いことをした

影虎との生活が脅かされると思うと凄く怖かった

怖かったから勝手に勘違いをし

襲いかかって挙げ句の果てに影虎の気持ちを無視して闘わせて

・・・・・・『私』は、最低な人間だ

せっかく出来た友達を

殺せと命令してしまった

最終的には殺さなかったものの

ボコボコにしてしまっていた

『私』は、また影虎を傷つけてしまった

あいつは、気にするなって言ってたけど

少なからず傷ついたはずだ

上条と不導も必ず影虎から離れていってしまう

そう思っていたがそうじゃなかった

少なからず警戒はしているものの

『私』と影虎に普通に接してくれている

もしかしたら、こいつらなら異常で異常な『私』や規格外の中でももっとも規格外の影虎を認めてくれるかもしれない

いや、『私』はいい影虎だけでも認めてやって欲しい

色々考えているうちに俺は、不導一真を呼び出していた

「何でしょうか？」

俺に呼び出された一真が聞いてきた

「…単刀直入に聞くが、お前は影虎をどう思う？」

腕を組んでまじめに聞いた

「う～ん…、正直に言うとあんな話を聞いた後だから恐いかな…。」

「…そうか…。」

俺は頭を掻きむしりながら答えてきた

（やっぱり怖いか・・）

「でも、それは過去のあいつだろ？
俺は今のあいつを見ていきたいしあいつは信頼できる。」

「ほぉ…それは何故だ？」

（思わぬ切り返しだな）

「あいつが過去の話を普通に聞かせてくれたが、それって普通今日あったばかりの奴に聞かせる話じゃないだろ？
あんな過去聞かされてほっとけるか…。
それに…。」

「それに？」

俺は一真の顔を覗き込んだ。

何故か顔が赤くなっていた

（風邪か？）

「惚れた女を命がけで守る奴に悪いやつはいないだろ？」

（善悪の区別の付かない奴はいるがな、ハハ、惚れた女を命がけで守る奴に悪いやつはいないっか・・・俺を女だと認識しているのは、

腹が立つが・・・バカバカで清々しい奴だ）

「…。

フフフ…、あはははははは…。」

思わず笑ってしまった

「お前みたいなバカは久し振りに見たぞ…。

そりゃあ、あいつが気にいるわけだ。」

「あんた失礼だな。」

（まったくだよ）

「気に入った。

これからは影虎の事を友として頼むぞ。」

「安心してくれ。

必ず期待を裏切ったりしないよ…。」

そう答えてくれた

「それは良かった…。

では、お前には抗体を作ってやらんとな…。」

（なら、二度と影虎の能力の被害に遭わないように）

「えっ！？」

「何の抗体だよ…。」

「何のって影虎の能力の抗体だよ…。」

「何故俺の思っている言葉がわかった!?
お前も影虎と同じ能力の持ち主なのか!?」

「お前…、声に出てたぞ…。」

（本物の馬鹿だ、こいつ）

「え？マジで？」

「うん…。」

恥ずかしい!!
まさか声に出てたなんて…。ってかおしてる・・

「一応聞くが、抗体はいるか？」

「抗体を作ったらどうなるんだ？」

「簡単な話、影虎はお前に対して能力が使えなくなる。」

「是非ください!!」

「即答だな…。」

（影虎の能力質悪いから当然か）

「それじゃあ始めるぞ…。」

「あ、あぁ…。」

俺は、一真の頭に手を置いて目を瞑り、

『神の使いの意志によりこのものに進行に立ち向かう力を分け与えたまえ、神の使いの名は、クロス・マリアンヌ、力欲しきものの名は、不導一真』

っと小さな声で唱え

「ハッ!!」

「ウグッ!!」

一真の脳に魔術抗体を打ち込んだ

「これで大丈夫だろう…。」

「ハァ…ハァ…、ありがとう…。」

「大丈夫か?」

かなり辛そうだ

「…何とかな…。」

「そうか…、なら戻るぞ…。」

「あ、あぁ…。」

そして、俺達は影虎達の所に戻ることにした。

椿視点終わり

影虎視点

「よぅ、何の話してたんだ?」

椿と何話してやがった!!?

「別に言うのが面倒だ…。」

ほう?人には言えないことを話してたのか?

「なるほど…。

なら、こうするしかないよな。」

俺は目を瞑って能力を発動した

しかし、結果は・・エラー?

「あれ?読めない?
…椿、まさか…。」

俺が聞くと

「そのまさかだ…。」

即答してくれた

「やっぱり椿お前、一真に気が移ったんだな?俺の何が悪かったんだよ?いったいなにが?」

てんぱって喋り続けた

すると

「もめてる所悪いが俺はそろそろ帰るわ…。」

一真がそう言ってきたので

「ん?もう、そんな時間か?」

今が何時か聞いてみると

「あぁ…、もう10時越えてるからな…。」

そう言って一真は携帯の時計を俺に見せてきた。

「それなら俺も帰るわ。」

そう言って当麻も立ち上がり、帰ると言い出した。

「そうか、なら送って行くか…。」

俺もそう言って立ち上がろうとしていた。

「いいよ、別に。
気を使わなくても…。」

「お前…、ここがどの辺だかわかっているのか?」

俺がそう聞くと

「「…。」」

黙りこくっていた・・

「道案内頼む…。」

「やっぱりな…。
お前達の家も知りたいしな…。
椿、お前はどうす「面白そうだから行く。」そうか。」

俺が椿に聞こうとすると即答された

そして俺達は家を出て、道を歩いていると…。
「「「ッ！？」」」
俺のお腹がグーっと大きな音で鳴りだした。
「悪い…俺だ…。」
正直に自白しよう
「「「…プッ…アハハハハ！！」」」
、少し沈黙してみんなが笑い出した。
「笑うな！！」
酷いよな？正直に言っただけでこんなに笑うなんて・・・
よし、俺は決めた
今回は、学園都市の人間から夏休みという習慣を忘れさせて
炎天下の中ずっと学校に通い続けて熱中症になって大勢の生徒が倒れて
都市機能が麻痺すれば良いんだ
名付けて・・『ど忘れ無休熱中症パニック大作戦！！』

・・・・マジで実行してやろうか？

「はは…いや…ごめん、ごめん。
いきなりだったからさ。
まだ飯食べてなかったんだな。」

「あぁ、俺もそれなりに腹は空いてきたな…。」

椿も俺をフォローするように言っていた

なんか凄く惨めな気持ちになる

でも、腹減ったな～

「だったらさ、俺の家で飯食わねぇか？」

「「…良いのか？」」

予想外のお誘いだ！？

「当たり前だ。
送って貰ってんだからこれぐらいのお礼はするよ。
口に合うかはわからないがな…。」

「なら、お言葉に甘えてごちそうになる。」

「椿が良いなら俺もごちそうになる。」

椿素直になってくれてありがとうございます♪

「わかった。
当麻お前はどうする？」

そして、一真は隣にいる当麻にも聞いていた。

「んじゃ俺も行くわ。」

「よし、決まりだな。」

何故かは、知らないが飯にありつけるのは嬉しい・・・・・・俺って腹が減ると別人になるな・・ちょっと自己嫌悪

「「当麻（一真）！！」」

「「ん？」」

一真と当麻を呼ぶ声が聞こえた。

すると、そこには、学校で隣のクラスの女子と白い修道服をきた銀髪の多分外国人の少女が立っていた。

「当麻、こんなに私はお腹空いているって言うのにこんなに遅くまで何をしてたのかな？
それにその傷とこの状況はどういう事かな？」

「あのインデックスさん。
これには実は深い訳がありまして…。」

インデックスさん？

やっぱり外人か？

それよりこいつ修道女ってことは・・・・・魔術師＝椿の敵！！！！

俺が首を掻ききろうとすると椿に真剣な目で止められた

「止めろ影虎、この子は、『私』の敵じゃない」

少し悲しそうな目で言われたので

おとなしく彼女が敵だと言う価値観をすぐに止めた

その時、上条と一真がピンチに陥っていた

俺が助けようとすると

「ふむ、面白い。
俺もノリでやっておこう。」

「えっ！？椿！？何のノリだ！？」

（ここでこのノリ重要？ねぇ俺お仕置きされる理由見つからないんだけど？）

椿さんは俺の背中に小さな手を当てていた。

「安心しろ…。
バーベキューの炭にしてやるから…。」

「肉じゃなくて炭かよ!!」

せめて人思いに肉だろ?せめて食えよ!?焼くための材料に使うなよ!!

などと心の中で突っ込みを入れ続けていると

「ゴハァ!!」

マジで至近距離で燃やされたよ

暑かった

いや、熱かった

腹が減っていたおれは簡単にノックアウトされた

気絶する直前

俺は何もしてない

そう思った

くづつ

事情説明（謝罪（すみませんでした！！））（後書き）

・・・・・・影虎可哀想

椿は基本的にノリはいいです

ではまた

感想ください

酔眼朦朧（まともなのは俺だけ？）（前書き）

遂に書き終わりました

ではどうぞ

酔眼朦朧（まともなのは俺だけ？）

「なるほど。
よろしくね影虎君に椿君。」

あのあと制裁された俺達（俺は全く何もしていないにもかかわらずだ！！！）は歩きながら白い修道服を着た銀髪少女ことインデックスの事を当麻に耳打ちで教えてもらった。
何でも禁書目録と呼ばれていて、１０万３０００冊もの魔導書が記憶されているらしい。
俺は読もうとしたが椿さんが

「読まない方がいいぞ影虎、お前でもただじゃ済まない・・・・・」

っと言ってきたので俺は渋々読むのを止めた

インデックスは、

今は当麻の家に居候しているらしい。

「一真、インデックスちゃんの事をじろじろ見てるの？
もしかして惚れちゃったのかな？」

「なッ！？
あのな…、んな訳ねぇだろ…。」

一真と天野葵という俺の通っている学校の生徒がもめているように見えた

マンションの部屋の前に着いた。

「ここがお前の家か…。」

俺は他人の家なんて始めてくるので感想があまり出てこなかった

「あぁ…、因みにその隣の隣が当麻の家だがな…。」

「ほぉ…。」

ご近所さんだったのね～

「意外だな…。
お前にしては片付いてる…。」

椿は玄関の扉越しに一真の部屋を見て言った。

一真の表情が怒りになりかけていた

だが、すまない、俺も椿と同じ意見で～す

「んじゃお邪魔しまーす。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します…。」

当麻、インデックス、俺の順番で一真の家にはいった

「…。」

椿が何も言わないで入っていくので

「椿、お邪魔しますぐらい言ったらどうなんだ…。失礼だろ？」

っとずっと前に椿から教わった常識を椿に教えた・・・・・・最近椿の奴本当に態度悪いよな～・・反抗期？

「…お邪魔します…。」

椿は何故か渋々そう言ってはいっていった

「椿君ってなんだか愛想悪いよね。」

ほら、なんか色々言われてるぞ！！って椿、何故俺を睨んで居るんだ？

俺が椿とにらみ合っているとき

当麻は、インデックスに少しだけかじられていた

一真と天野さんは何か揉めていた？

「ヤッター♪」

「とっとと入れ…。」

天野さんは何故か飛び上がりながら喜んでいた。

「ただいまー♪」

あれ？この言い方だと一真と天野って同棲してるのか？

「…いきなり君達2人は何テレビ占領してるの…。」

部屋に入るなり天野はテレビをつけて、ＤＶＤデッキをいじって何かのＤＶＤを入れていた。

テレビの前ではインデックスがなぜかワクワクしながら待っていた。

「ダメなの？」

「別にいいけど…。
じゃあ俺飯作るから…。」

「それじゃあテレビ借りるね。」

なんか、話が決定したみたいだな

「キタァ！！」

「ん？なッ！？」

インデックスの声に振り向いてみると、テレビを見るとフリフリの服を着た魔女っ娘が呪文を唱えてキメポーズをとっていて、ＯＰが始まった。・・・・・これどっかで見たことあるな、うん

「何で…、これをまた持ってきた…。」

「え?え~と、インデックスちゃんが見たがってたから一回家に帰って持ってきちゃった♪」

「ハァ…。」

まさか椿と同じ趣味の人間がここにもいたとは、・・・また今度、椿にテレビ占領され挙げ句の果てに俺が家にいると恥ずかしいのかいつも何かと理由付けられて家だされるし・・・トホホ

「「「ハァ…。」」」

男三人でまたため息か…。
俺達ってどこか似てるよな。

色々考えていると台所からカレーの独特な香りがしてきた

「なぁ当麻、お前の右手って本当に何でも無効に出来るのか?」

俺がそう聞くと

「あぁ、まぁそのなんだ、異能の力であれば神の奇跡だって無効に出来るらしいぜ」

っと当麻は、右手を眺めながらそう言った

その後も何故か色々会話が弾んだ

……

……

……

「おまちどおさま。」

俺と当麻が会話を楽しんでいると一真がカレーライスを配ってくれた

「「「おぉ～…。」」」

その出来映えに思わず声が出た

「味の保証はしないが、どうぞ召し上がれ。」

「「「いただきます。」」」

たぶん俺とインデックスが一番はしゃいでいると思う

「美味しい!!」

「うまい。」

「コラッ!!インデックス!!
自分のを食え!!」

「少しぐらいいいんじゃないかな!!」

「お前にしては、上出来だな…。」

椿の奴、こんなに美味しいカレーにその言い方はないだろう

「俺、飲み物いれてくるわ。」

そう言って一真はキッチンに向かおうとしたが…。

「私が入れてくるよ。
一真は休んでて。」

と天野がいきなり言い出した。
優しい人みたいだな

「そうか？
なら頼んだ。」

「はいは～い♪」

そして、天野はキッチンに移動した。

その時、おれの中の野生の勘が急に働いた

「絶対にその飲み物を飲むなと」

そして、サイダーだろうか、シュワシュワとなっている透明の液体を天野が入れてきた。

「悪いな。」

っと一真が言うと

「いいの、いいの、皆さんもどうぞ♪」

と言われたので俺も警戒しながら一応コップを取った

俺と天野以外のみんなが手に取り、ゴクゴクとほとんどの人が一気飲みしていた。

するとどういう事だろう

みんなが一斉にヒックっと酔っぱらい限定の動作を行った

「…みんなどうしたんだ?」

この中で、飲み物を飲んでいなかった人物がいた。

1人はもちろん俺、そして…。

「大成功だね♪」

なぜか笑顔の天野の2人だけ…。

「お前何をしたんだ?」

俺は勇気を振り絞って聞いてみると

「あれ?影虎君は飲んでないんだ。

残念…。」

俺は引っ掛かっている言葉があることに気づいた。

「飲んでない?」

そう、飲み物を飲んでいないと言う言葉に反応して、俺は、飲み物を眺めていた。

・・・普通のソーダぽいが・・

「まさか!?」

俺はあわてて、匂いを嗅ぐ。

俺の嗅覚は、警察犬並だぜ

そして、ある事実が判明した・・・

「ウッ…。
やっぱり…。
お前、酒をこいつらに渡したな!?」

確定していることだが一応聞いてみた

「うん♪
だって面白いよ~♪」

何故だろう思いっきりぶっ飛ばしたい・・・

俺は周りを見渡した。

すると

「俺なんか毎回毎回不幸だ…。

昨日何か玉子を買った瞬間に空き缶に滑って転んで割るわ、不良に襲われるわ、人生不幸だらけだ…。」と当麻が泣きながら言っていた。

（泣き上戸？ん？）

上条は酔っぱらうと泣き上戸でした、・・・ぴったりだな

「ニャァア！！」

「フギャァァア！！
不幸だー！！」

インデックスがいきなり当麻に飛び付いて襲いかかり、当麻は引っ掻き傷を顔に負っていた。
そのあと、インデックスは布団に丸まっていた。

（まるで猫だな…。
ハッ！！そういえば…。）

インデックスは、猫化していました。

当麻、残念

そんなことを考えていると

けっこう重要なことを忘れていました

酒＋いや、酒X椿＝・・・・・・・・生き地獄（R－18）

俺は祈りながら首をゆっくりと横に向けていく。
しかし…。

「かげ～！！」

「ウワァ！！」

途中でいきなり椿が俺の腕に抱きついてきた。

（よりにもよって俺の苦手な人格かよ！？）

どうやら、酔っぱらった影響で性格が変更したらしい

「椿君が女口調になっちゃった！？」

天野、いや、今は、天野弱と呼ばせてもらう、天野弱が椿の変貌に驚いていた

「椿！？やめろ！！離れろ！！」

椿が自分の体格に合わないほどの兵器と呼んでも良いくらいの胸を押し当てて来る

サラシを巻いて見た目からは、考えられないくらいの大きさのをだ

俺がグイグイと椿を引き剥がそうとした、そのとき、パサッと帽子と纏めていた髪が落ち長すぎる黒髪が散らばった。

「あっ…。」

椿が少しだけ焦ったがすぐに俺に集中してきた

「えっ！？
椿君って男じゃなくて女の子なの？
だから、さっきからイチャイチャしてたの？
でも、姉弟だよね？
影虎君、説明して？」

「ハァ…。」

俺は天野の反応を見て、めんどくさいが仕方なく説明をした。（誤解をされたままじゃしんどい）
ちゃんと恋人かつ偽造している事を。

「って言う事は、本当は恋人であって影虎君の能力で世間では姉弟って言うことにしてると？」

「そう言う事。」

すぐに納得してくれたのであまり面倒なことにならなかった

しかし、未だに俺の腕には、ムギュ～といった野郎共大喜び子猫ちゃん達のあこがれ？を押しつけてきてやがるしかもわざとだ

（いい加減離れろ！！）

説明を終えて、俺は離れない椿を未だに引き剥がそうとしていた。

「そういえば一真はどこいった？」

そう言えばさっきから姿を見ていない事を思い出し天野に聞いてみた

「一番面白いよ♪」

すると天野弱が満面の笑みで答えた。

俺には全く意味が分からず

首を傾げていたその時。

「ん？」

机の下で何かがモゾモゾと動いていた。

そして、俺の膝辺りの上まで這い上がり顔が出て来て、俺と目があった。

その正体は…。

「子供？」

髪は短く頬が少し赤い小学６年生ぐらいの子供が俺の足の膝の上で四つん這いになって俺の事を見上げていました。

・・・・子供？

「おにぃちゃん、だぁれ？」

男の子は、俺を見上げて首を傾げて聞いてきた。

「…桜小路…影虎…。

君の方こそ誰？」

俺は名乗ると逆に聞き返した。
その隣で天野が笑いを堪えていたが気にしなかった。

「僕？
僕は不導一真。」

「…えっ！？」

俺はその名前を聞いた時驚いた。いや、固まった
俺はそのあと、男の子をジーッと見た。
ボサッとした短髪に見覚えのある顔立ち、サイズのあっていない制服、さらに…。

「読めない…。」

俺は必死に男の子の心を読もうとしたが、結果はエラー。

「影虎君。
この男の子が一真だよ♪」

「何があった！？」

天野がそう言って、俺は答えは出たが、何故一真が縮んだかが気になっていた。

「うん。
何でも酔っぱらっちゃったらそうなっちゃうみたいなんだよね。
私も初めはお酒渡して飲み干した時は驚いたよ。」

「へー…。」
（まず飲ませようとするなよ…。
それに酔っぱらったら縮むって…。）

一体酒から何を抽出した?若返り薬か?何だそのおもしろ体質、科学者にばれたら必ず不老不死の実験されるぞ?というより・・・・・・馬鹿なんじゃ・・・いや、よくよく考えてみたら俺も人のことを言えません

「カズくん、やっぱり可愛いよ♪」

「葵おねぇちゃん、やめてよ!!」

天野は突然、一真に抱きつき頬擦りをしていて、一真は嫌がっていた。
しかし…。

「カズくん♪
もっと呼んで♪」

天野おねぇちゃんの言葉に反応して逆に抱き締められるはめになった。

お悔やみ申し上げます・・・

「いい加減にやめてやれ…。」

とは、言えなかったため助け船を出してやることに

「えー。」

俺は一真を助けるために天野を引き剥がしすと天野は残念そうにしていた。
俺はそれを見てため息を吐いていた。
その時…。

「この子可愛い♪」

「離して～!!」

「なッ!?」

俺は忘れていた、椿は、異常なまで子供が好きだったんだ・・
今度は椿が一真に抱きつき頬擦りをして、一真は天野同様に嫌がっていた。

俺は、何故か一真に殺意がわいた

この瞬間、俺の脳内で謎の会議が始まった

選択一

一真を抹殺・・・めんどくさいので却下

選択二

一真を海に沈める・・・海まで運ぶのが面倒なので却下

選択三

一真を窓から放り投げる・・・・・すぐに実行できる上にスッキリする・・・・可決（オッォオオ～）↑心の中の謎の歓声

俺は立ち上がり、一真を抱えてベランダの窓を開け、腰を低くして振りかぶった。
そして…勢い良く。

「ダメェェエ！！」

「ウオッ！？」

外に投げ捨てようとしたが天野に間一髪のところで取り上げられて俺は驚いていた。

「何しようとしてるのよ！？危なかった…。」

めっちゃおこられた・・・・・あれ？確か原因はこの人ではないだろうか？

「すまん…。ついムカついて…。」

おれは頭を掻いて反省していた。

「もう…。カズくん、恐くなかった？

カズくん？」

「Ｚｚｚ…。」

「寝たな…。」

一真は天野の腕の中で心地よさそうに眠っていた。

「寝顔も可愛い♪
私も眠くなっちゃった。
おやすみ…。」

そして、一真を隣に寝かせて、天野は添い寝する形になっていた。

おあついね～

「さてと…。」

「？」

椿が天野が眠りについた所を見計らい頭に手を当てて目を瞑りぶつぶつと何かを唱えていた。
そして…。

「ハッ！！」

「ん…！！」

（まさかな…。）

天野が一瞬辛そうな表情をしたが、直ぐに心地よさそうに眠った。
俺はまさかと思い、天野の心を読もうとしたが…。

（やはりか…。）

結果はエラー。
椿は葵に抗体を打ち込んでいたのであった。

「椿…。
何故そいつに抗体を打ち込んだ…？」

何でそんな意味のわからんことを・・・・

「かげは鈍感ね。
女の子には知られたくない秘密はいっぱいあるのよ♪」

（…この人格のする事はわからん…。）

椿が俺の問いに自分の唇に人差し指を当てて答えた。
そして、俺は周りを見渡すと自分と椿以外眠っていることに気がついた。
そして…。

「もうこんな時間か…。」

知らない間に時計はは６：００と示していた。

「俺も少し寝るか…。」

寝ないと急に冬眠しちまうからな～

「え〜…。
もう少し付き合ってよ。」

「…ハァ…。」

俺は寝ようとしたが、椿が甘えて来るので、ため息をついて起きる事にした。

すると、椿がいきなり

「影はちょっと私に優しすぎだよ、たまには、私を襲うくらいしたら？たまには肉食系になってさ」

と俺の首に両手をかけながら首を傾げて言ってきた

普通なら誰でも墜ちるんだろうけど

「俺は、酔っぱらった人間に手は出さないよ、まぁ、酔っぱらって無くてもだが勢いではなく心からそうして欲しくなったらいいえよ、俺は、はなから肉食系だぜ♪」

俺がそう言おうと椿は嬉しそうに笑い俺に甘え続けてきた

途中全裸になろうとしたりキスを要求してきたり大変だったが

俺は、少し時間を持て余していたので皿洗いをしていると

「ふわぁ〜あ…。

ん？」

一真が起きたようだ体のサイズだが徐々に大きくなっていたので俺は驚いた

そして、一真は周りを見渡すと…。

「…、何でみんな寝てんだよ…。」

なんかブツブツ言っていた

「ッ！？なッ！？」

一真は、自分の横で寝ている天野を見て驚いていた

「やっと起きたか…。」

俺が声をかけると

「影虎！？」

なんか驚いていた

「かげ～、私にもっと構ってよ～。」

一真は俺に抱きついている椿をみると顔を赤くしていた

ハァ～

「気にするな…。

まだ酔ってるだけだ…。」

「酔ってる?」

何を驚いて居るんだこいつ・・・・・まさか?

「影虎…、その…言いにくいんだが…。」

「何だ?言ってみろ?」

もしかして・・・・・

「あのあと…、何があったんだ?」

予想道理だよ

「覚えて無いのか?」

「全く…。」

「なら聞かせてやるよ。」

……

……

……

……

……

「そして現在に至る訳だ…。」

「なるほど…。
こいつは後で殴る。
それよりも…ハァ…見られたか…。」

何故か恥ずかしそうな表情をしていた

「ハァ…。」

「そう落ち込むな。
俺は楽しかったぞ。
こういったパーティーは初めてだったからな…。
今度は俺の家で飯食ってけよ。
俺が作ってやるから。」

「あぁ…、わかった。
いつか、そうさせてもらうわ。」

この後、目覚めた当麻とインデックスは、自分の部屋に帰って俺と
椿は、家に帰ることにした

この時俺は予想もしていなかった

だだの帰路がちょっとした戦場になるなんて

酔眼朦朧（まともなのは俺だけ？）（後書き）

基本的に自分のこの作品は、渡さんの小説と常にリンクしています

感想ください

次回は、あの人達が出てきます

四面楚歌（『異世界樹（ユグドラシル）』の日常）（前書き）

久しぶりの投稿です

今回は正直言って原作のあの人達が出てきます

ただ、キャラがいまいち理解できていないので

キャラ崩壊していたらごめんなさい

四面楚歌（『異世界樹（ユグドラシル）』の日常）

まだ、学園都市では起きている者も少ない時間

当然、スキルアウト達がはびこっている時間帯

俺は、背中に酔っぱらい泥酔した椿（新書血録）を背負いながらまた今日も暇つぶしで喧嘩でもするかとと考えていると

俺から見て斜め４８度で高度は、２０メートル、距離にして２００メートルの位置から光り輝く何かが高速で俺の方に飛んでくるのが見えた・・・ロケランです

俺は、真っ正面から向かっても良いと思ったけどあいにく背中には、椿を背をっていたので

俺はとっさに『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』と頭の中で詠唱し

『矛盾が生じる錬成』

を使用し

俺の目の前に触れたものを破壊する盾を錬成し

ロケットランチャーをふせいだ

すると今度は、ビルが突如爆発してガラスの破片が俺の方に降り注いできた

（俺、何か悪い子としたかな～？）

そんなことを考えながら空気中の窒素を錬成し灼熱の液体窒素を作りだし

それを空気を錬成して生み出した超低温の竜巻と合わせて使い

ガラスの破片を全てとかしたうえで竜巻に乗せて

再び解けたガラスの液体を破片にして

当たりのビルに散弾銃のようにとばした

俺の周りにあるビルの窓は全て割れた

すると攻撃が一端収まったので

俺は、再び歩を進めた

（本当ならすぐにでも能力を使ってトンずらしたいけど椿が近くにいる時点でそれは叶わない・・・どうしようかな～記録の消去は出来ても記憶の消去は出来ない故にデーターには残らないけど俺を追う刺客には俺が完全に認識できる・・・はぁ～椿さん起きてよ～）

俺の願いも空しく

「むにゃむにゃ・・ステーキ食べたい・・・・ぐ～」

寝言しか言ってくれません

ただ、俺は、さっきの防衛をしているうちに俺に攻撃をしている連中の正体をすでに能力の一部で割り出していた

相手は、

『アイテム』

学園都市の裏に潜む組織の一つ。

主な業務は学園都市統括理事会を含む上層部や『スクール』（未現物質がボス）と言った極秘集団の暴走の阻止。

所属メンバーは以下。

・麦野沈利：リーダー。学園都市第四位・超能力（レベル５）『原子崩し』。

・絹旗最愛：中学生。大能力（レベル４）『窒素装甲』。

・フレンダ：金髪碧眼の女子高生。

・滝壺理后：高校生。大能力（レベル４）『能力追跡』

・・・・・・・・・・・『原子崩し』が相手かよ

多分俺の場所がばれたのは『能力追跡』のせいだろうな～・・・・本当に邪魔な能力だ

俺のＡＩＭ拡散力場を察知して俺を付けてたって訳か？

こいつが俺を認識しているときが一番面倒くさい

俺のＡＩＭ拡散力場・・・・・範囲デカ過ぎだ～！！！！！

などと、冷静に状況を整理していると

グラグラグラ

ピキピキピキ・・・がっしゃ～ん

俺の足場が崩れだした

どうやら相手の仕掛けたトラップが発動して

地面を支えていた地下の柱が爆破されて崩れたのかな？

俺は、爆破によってあけられた落とし穴に落ちた

あなの直径は、４メートルくらいで俺は、直接着地するのは、痛いと感じて

落ちている途中に椿を背負っているのにも関わらず壁ジャンプと壁スライディング

で落ちる速度を落としながら

地面に着地した

俺の落ちた場所は、地下の大きな空間だった
おそらく緊急時に避難所になるような場所だ
俺は、落ちそうになっている椿をきちんと背負い直すと
当たりを見渡した
当たりは暗闇で何も見えないので
俺は、すぐさま瓦礫を脚で触り
日傘を錬成しそれを天井に投げ突き刺した
そして、その傘が開くと暗闇だった場所がまるで昼間のように明るくなった
俺が錬成した日傘は、日傘なのにわずかな光を日光の光にへんかする強力なライトだ
「お、明るくなった明るくなった、・・・・お～い、かかって来るんだったら早くしてくれ」
俺の居た場所は、コンテナが規則正しき並べられた場所だった
俺は、呼びかけるように挑発したすると

見かけ１２歳位の大人しそうな少女で、
ふわふわしたニットのワンピースを着用した子が
現れて
急にコンテナを持ち上げて！？俺に投げてきた
俺はすぐさま、走り出しその攻撃を避けた
すると
今度はその子が俺に殴りかかってきた
俺は、その攻撃を避けた
そして、俺はそいつの後頭部に蹴りをとしたが
俺の中のやせいの勘が許さず
すぐさまステップで距離を取った
この時の俺の判断は正しかった
こいつは、レベル４『窒素装甲』の大能力者
窒素を空気中の『窒素』を自在に操り、圧縮した窒素の塊を制御することで、
自動車を軽々と持ち上げ、動かすようなパワーや、
直撃した磁力狙撃砲のスチール弾を逆に潰してしまう程の頑強さを

発揮する。

そんな能力あいてに『孤高なる参戦者』と『物忘れ辞典』の両方を使えないんじゃやってられない

俺がいつも道理、冷静に状況整理していると

「お兄さん、超かっこいいですね、特にさっきからその女の子を守りながら闘っているところなんて映画の主人公みたいであこがれます」

っとその子がそう言ってきた

「それはどうも、お嬢ちゃん?、あのさ~俺は何で殺されかけてるのかな?」

わかりきった質問をあえてしてみる

すると

「それは、それは、超めんどうなんですけどお兄さんが学園都市で生み出された化け物で私たちは、それを捕獲または、抹殺を任されたからですよ、だから超とっとと死んでください」

そういって彼女は、再び俺に殴りかかってきた

俺は、何度も言うようだが椿を背負っているため普段の反応が出来ない

俺は、避けるので精一杯（大嘘）

俺は、攻撃を避け続けていると
いろいろと面倒になり
彼女の『窒素装甲』に普通に右手で触れたそして
彼女の纏っている窒素を錬成し
窒素からマグネシウムを錬成し
マグネシウムを錬成し鋼鉄のサッカーボールを作り出し彼女の腹部にシュート♪
「ぐぅ!?・・・〜バタン〜」
彼女は、窒素を失い『窒素装甲』を使えない状況になったので俺の鋼鉄サッカーボールシュートをもろにくらい
コンテナにぶつかると気絶した
「ごめんね」
俺はそう言い出口に向かって歩き続けた
正直、この状況で爆睡している椿が凄いと思う
そして、少し、歩き進めていると俺の両サイドにあるコンテナの反対側が爆発し

俺を潰すように飛んできた

「なに～！？」

俺は驚いて走り出した

しかし、コンテナプレス攻撃は止まることを知らず

そして、ガッシャ～ン

もちろん挟まれましたよ

まぁ俺は、椿を背負う両手を一瞬だけ離して両手でコンテナを押さえつけていたので

実際には、コンテナがへこんだだけで俺には、ダメージはほとんどない（手がめっちゃしびれて居ることを除いては・・）

「結局、学園都市が生み出した化け物って言っても私には勝てないわけじゃん？この程度の相手になんで絹旗は、負けてんのよ」

っと俺を殺せたと思ったのか余裕の声を発しながら俺に（コンテナ）近づいてきた女が居た

（こいつの中では俺は雑魚扱いなのね～・・・・・・・て言うかさ、こいつらさっきから椿も一緒に殺そうとしてるよな・・・・・・・・・・殺しはしないけど半殺しにする）

そう決めた俺は早速、俺の目の前に居るであろう女とそこらじゅうに仕掛けられた爆弾を処理するために地面と壁そして俺に触れているコンテナを錬成し

今俺の居るフロアを全て銅にそして俺を覆っているコンテナを鉄檻に錬成した

急に辺りが変化し俺が急に出来た檻の中にあらわれたのでさっきまで余裕そうに話していた女は驚きの表情になり

「生きてたの？ていうか結局あんたの能力は一体何なのよ？」

っと聞いてきたので

「夢想実現（ネバーマジック）」（超大嘘）

俺は大嘘を着いた後、指パッチンして

大気中にそんざいする酸素と窒素を錬成して

感電しても絶対に死ないイカヅチを作り出し

それを放った

当然のごとく金髪碧眼の女は感電して気を失った

俺は、鉄の檻の中にいたので全く感電はしなかった

そして、俺は、横で感電して白目をむいている女を放置して

別のフロアに向かった
すると椿が落ちそうになったので再び背負い直すため一度
椿を地面に座らせた
すると
突如横から白く輝く細い光線が真っ直ぐ椿の方に飛んできたので俺は、椿を突き飛ばし
その謎の光線を左胸（心臓の辺り）を打ち抜かれた俺は
倒れはしないものの？口からは吐血、傷口からは、大量の血が吹き出していた
「ハァハァ～・・・・ゴホゴホ、」
（肺をやられた・・・呼吸が整わない）
「心臓を打ち抜いたはずなのに何で生きてんのお前？」
っと５０メートルくらい離れた場所から明らかに大人のお嬢様ってタイプの人が似合わないようなしゃべり方で怒鳴ってきた
「はぁ～・・・・・・・『原子崩し』さん？」
俺が苦し紛れにそう言うと
「名のったつもりはないんだけど？」

っとドスの利いて声で怒鳴ってきた

「・・・・レベル5の能力者ならそれなりに名前も売れてるでしょ？」

余裕ぶって喋ってはいるが正直危ない

「そうか、なら問題はないわね・・・・・・それよりも何で死んでないのか答えろって言ってんだよ」

（説明めんどくさいんだよな～）

「・・・・・・・俺はな、死なない体質なんだよ（真実）」

俺がそう言うと『原子崩し』さんは、俺の言葉を聞くと白く輝く細い光線改め粒機波形高速砲を俺の頭部に撃ってきた

それは見事に俺に命中

俺は、当然のように額に穴が開いて死んだ

・・・・・・・・・・・・しかし、その瞬間、俺の『異世界樹（ユグドラシル）』が勝手に発動した

（俺は、あいつ（新書血録）を置いてあの世に行く訳には行かない

んだよ。『原子崩し』！！）

つづく

四面楚歌（『異世界樹（ユグドラシル）』の日常）（後書き）

・・・・・あの人達こんなしゃべり方と戦い方で良いのかな？

まぁいいです

アドバイスがあったら是非ください

感想まってます。

あと、敵キャラのスキルアウトの能力を募集します

必ず４文字で読み仮名もください

では、また

異世界樹（ユグドラシル）（前書き）

今回は、2本同時投稿です

では、どうぞ

感想待ってます

異世界樹（ユグドラシル）

『原子崩し』に頭を打ち抜かれた俺を
『異世界樹（ユグドラシル）』は俺の身体を治し俺を生き返らせた
俺が、ムクっと起きあがると
『原子崩し』は、驚きの表情を見せていた
「マジで化けもんなのかよ？」
そう聞いてくるので
「そうだよ、俺は化けもんだ、お前程度じゃ殺すこともできないような怪物だよ」
俺が再び『原子崩し』に近づくと『原子崩し』は、
「これで死ななかったらお前があたしじゃ殺せないって認めてあげるわよ！！」
俺に対して、粒機波形高速砲を打ちまくってきた
俺は、椿を背負っても居ないし椿が後ろにいるわけでもないので
全部からだで受け止めた

もちろん身体はバラバラになり正直描写もしたくないような姿になったが『異世界樹（ユグドラシル）』が俺を瞬間的に復活させるので全くダメージはない

服はもちろんボロボロになるが錬金術で服を元に戻すので本当にダメージがない

どこぞの過負荷の『大嘘付き』に匹敵するほどの再生力だ

「でさ～『原子崩し』さん、俺が殺せないのはわかったと思うんで「ふざんけんな、」え？「無名の能力者ごときに私がまけるわけね～んだよ！！！」なに！？」

『原子崩し』は、俺を狙うのを諦めあろう事か全く関係のない椿に粒機波形高速砲を撃った

「さっきから横でグウグウうるせ～んだよ！！！！！」

そして、ダァアアアンと

椿の居た位置で爆発が起こった

「・・・く、く、ククク、残念だったわね化け物？あんたの女は、木っ端みじんになってあの世で待ってますってね？」

笑いをこらえながら『原子崩し』は、そういやみそうに言ってきた

「・・・・・・・・・」

「どうしたのよ、ショックで言葉も出なくなった？だったら大人しく死んであの世で女と乳くりあってるんだね」

そういって笑っていた

（馬鹿な奴）

「な、なんで？」

すると『原子崩し』は、己が置かれている状況に気付いたらしい

まずひとつ椿が今もぐうすか寝ていること

ふたつめは、俺の頭に光り輝く桜色の鋭い刃のような枝で王冠が存在していること

「『原子崩し』、お前が殺したと思っている女は、実は無傷だ

なぜなら簡単だよ

能力で俺は予め女の周りに障壁を作っていたんだよ

だから、女は無傷で今もぐっすり寝ているよ・・・後、俺はお前

を許さない、俺を殺そうとするの

は、許してやれるけど・・・・椿を殺そうとしたのは許せない・・

神が許そうが・俺は許さない・・・・・神が

お前に味方するんなら俺は神を殺してでも許さない・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・それでさ～今からお

前を喰い殺すから・・・・・・・「な、何なんなのよお前の能力は

？」・・・・・・・俺の能力？・・・ハハハ、教えてやるよ、

俺の能力は、『異世界樹（ユグドラシル）』「何？まさかお前、『ビースト』？」・・

・・正解♪、咲け紅桜」

俺がそう言うと

『原子崩し』は、地面から生えてきた『異世界樹（ユグドラシル）』の鋭い枝に貫かれ宙に浮かんだ状態で串刺し

「うぁあああああああああ」

苦痛に表情を歪ませながら悲鳴を上げていた

しかし、苦しみはこれで終わらない

紅桜の怖さは、ここからなんだよ

腹部を貫かれていた『原子崩し』は、苦しみながら何とか抜け出そうとしていたがもう遅い

俺がそう思った瞬間、

『原子崩し』の身体の内から『異世界樹（ユグドラシル）』の枝がそこらじゅうから出てきて『原子崩し』の身体を内側から貫いて体中から血を吹き出させた

『原子崩し』は、声にならないような声で涙を流しながら

白目をむいてしばらく痙攣してショック死（まぁ死なないんだけどね）

これが俺の考案した報復のための技だ

「今回はこれくらいで許してやる」

おれはそう言って

椿を再び椿を背負って

出口に進むことにした

「すぅすぅ・・・・・・」

（それにしても椿の奴、酒が入った後に寝ると１０時間は何をしても起きないからな～・・・・これって一つの才能だと思う）

など、一人で考えながら進んでいると

肩の辺りで切りそろえられた黒髪に、ピンクのジャージを着た子がシャーペンの芯入れのような小型の透明ケースを持っていた

「・・・・久しぶりだね、滝壺理后さん？いや、『能力追跡』」

俺がそう言うと

滝壺理后は、びくっと震えていた

無理もないけどね～

「あ、あなたを捕縛します・・大丈夫、悪い用にはしません・・」

そう言ってきた

「どの口がそんなこと言うのかな？分かり切った嘘は付かない方がいい、下手すれば殺されるよ？・・・俺は君には手を出すつもりはないから安心しなよ。じゃあね」

俺がそう言って滝壺理后の横を通り過ぎると

滝壺理后が振り返って

自分に体晶を使おうとしていた

俺はそれを見ると

「やめとくんだな、体晶を使っても俺には勝てない、そもそも俺の計算では、体晶を使って良いことは絶対にない・・・・・『異世界（ユグドラシル）樹』」

「うっ！？ぁ、ぁあ・・・・｛バタン｝」

俺はそう言い

彼女の頭に『異世界樹（ユグドラシル）』の根を直接接続し

俺の事を完全に忘れさせた

（これで良いんだ俺を追いかけて彼女が死ぬのは、同じ実験体として可哀想だ）

そう思い

俺は、錬金術で作り出した鉄製の柔らかくて暖かい毛布を気絶している彼女にかけて

地下を抜ける階段を上り

地上に出た

（ようやく地上か～・・・・・・な・ん・で！、こいつまでいやがるんだ！！・・学園都市第二位の超能力者（レベル５）『未元物質（ダークマター）』垣根帝督！！）

「よう、初めして、学園都市第０位の絶対能力者（レベル６）の『ビースト』と呼んだ方がいいか？」

１８０ｃｍの長身。茶髪で長髪。ヤクザ＋ホストっぽい雰囲気のイケメン野郎が俺にそう言ってきた

「これはこれは、園都市第二位の超能力者（レベル５）『未元物質（ダークマター）』垣根帝督さんじゃありませんか・・・・・何のようだ？」

俺は、目をかっぴらいて八重歯を出しながら威嚇した

「俺みたいな最低の人間のことを知っていてくれるなんて感激だぜ♪　な～に、絶対能力者って奴の実力を試したいって言うのもあるが正確には、お前を倒せば一方通行を一個抜かしで学園都市最強、いや、世界最強になれるってすんぽうだ」

そう言って近寄ってくる垣根

俺はすぐさま椿を負ぶっている右手を離し

空気を錬成し雷の弾丸を作り出しそれを垣根にぶつけたすると

垣根は、未元物質で出来た白い六枚三対の翼を背中から生やして翼で俺の攻撃を防いだ

そして、垣根は、翼を使って飛び上がり

上空から

「お前を馬鹿にしている訳じゃね～がその程度なわけはねぇだろ！！あまりに舐められててムカついた！！見せて見ろよ。最強の絶対

能力者の力って奴を！！そして一つだけ最初に言って置いてやる俺の未元物質に常識は通用しねえ！！！！」

垣根は翼から強力な風を起こし俺に攻撃してきやがった

影虎視点一時終了

・・・・・・・・・

俺こと垣根帝督は、現在の状況に戸惑っていた

「なんだよあれ・・・・・？」

俺（垣根帝督）は、気分が良かった

まるで誕生日を前日に控えた子供のような気分だった

それは、彼が今、学園都市で生み出されたと裏の世界での噂

絶対能力者・・・・『ビースト』・・・・学園都市の裏社会に存在する架空の化け物だと思っていた

が、実際はどうだ、『ビースト』は存在していてその実力は、『原子崩し』を圧倒する実力

どんな能力かは、まだわからねぇが『アイテム』の奴らを相手して
無傷って時点で

俺や一方通行並の化けもんだってことは証明された

なら、こいつを殺せば俺の望み第一候補（メインプラン）への近道だ

そう思いこいつには、出し惜しみなく白い6枚の翼を初っぱなから
だし

烈風を発生させ攻撃を仕掛けた

あたりは地面を削った烈風のせいで土煙に覆われていた

何かするだろうと思い煙が晴れない内に

未元物質の翼全部を使い

打撃・斬撃・衝撃波そして、辺りを爆破しその上で更には回折によ
り太陽光を殺人光線に変換させそれをぶつけてやった

（俺やあの一方通行ですら絶対能力者には、認定されなかった、俺
の未元物質に常識は通用しねえ、とは言っても正直、絶対能力者（
レベル6）に常識があるかさえわかりゃしねぇ・・・・なら、何か
をやられる前に潰す）

そう思い手の内をほとんど出してみた俺だが

目の前には、桜色の優しい光の球体が存在していた

（なんだありゃあ?絶対能力者様の能力か?）

俺がそう考え込んでいると

その光の球体が二つに分かれて

その中には、頭から光り輝く桜色の鋭い刃のような枝で出来た王冠を頭に被りながら

背中には、小さな黒髪の少女を背負った状態で

さっきまで球体だと思っていた桜色の何かは、両肩と背中から生えたまるで植物の根が羽になろうとしているような状態の物だった

（なんだあれは?翼?俺と同じ未元物質か?いや、それだけは絶対にない）

俺が今の状況を冷静に観察していると

「未元物質!!「なっ!?」見せてやるよ、俺の真の能力、『異世界樹(ユグドラシル)』の真の力をな」

そう言って奴は、通常では考えられない程の速度で遥か上空まで飛び上がった

そして、俺は、それを追いかけて遥か上空に昇った

そこでおれは・・・・・・・・・・5と6の越えるに超えられな

い壁（1の差）を拝むことになった

垣根視点終わり

影虎視点

俺は、とっさに奴の攻撃を防ぐために

『異世界樹（ユグドラシル）』をあえて未完成な状態で呼び出し

羽にし

その攻撃を防ぎ羽を広げ大空高く飛び上がった

地上なんかで闘ったら

学園都市が吹っ飛ぶっての

すると、俺を追いかけて未元物質が追いかけてきた

（計画道理だ、未元物質君には悪いが・・・・・・エデン（天国）とヘル（地獄）の境界（ボーダーライン）くらいまでは行ってもらうぜ）

「悪いね、垣根さん、俺は、眠くなってきたんでここらでお別れだ・・・『異世界樹（ユグドラシル）』」

俺がそう言うと

垣根は目を見開いて

現在自分が居る状況を信じられないようだ

俺の後ろにそして、垣根の目の前には、

一体どれほどの大きさはわからないがおそらく学園都市の大きさに匹敵するほどの巨大な『異世界樹（ユグドラシル）』が目の前に浮かんでいたのだ（ラピュタのように）

そして、

「未元物質、お前はこれから起こる出来事を理解もできないし記憶もできないそれほどに刺激的だぜ・・・・『竜王の波動』ドラゴンウェーブ」

俺がそう言って指を鳴らすと

『異世界樹（ユグドラシル）』の幹が動き出し幹の間から龍の顔に見え無くもないかたちの枝の砲台が出現し

そこから、この世界に存在していながら決して存在していないエネルギーを放った

垣根は、光り輝く6枚の翼でガードしようとしたが無駄だ

未元物質が常識が通用しない物質なら俺の『異世界樹（ユグドラシル）』は、常識も『非常識』も通用しね～んだからよ

『竜王の波動（ドラゴンウェーブ）』は、垣根の未元物質の翼のガードを貫いて垣根に直撃
上空で大爆発を起こした

そして、大爆発の影響で空の雲は、ぽっかり穴が居たようにドーナツ状になり
爆発の衝撃波は、上空のため学園都市に少し強い風が吹いた程度に収まった

垣根は、翼を出したまま地面にフラフラ墜落していった
そして、『竜王の波動（ドラゴンウェーブ）』のエネルギーは、『生命力』なのでその力が学園都市に振り注いでしまい、『生命力』の影響で学園都市中の花が咲き
学園都市中の桜が満開になり
上空からそれを見た俺は、その綺麗な光景に目を奪われていた

椿にも見せてやりたかったが起きるまで残り9時間を空中で過ごすにはしんどいので
すぐに帰ることにした

もちろん、家についたときには、椿を椿の部屋に隔離し

能力全開になったのでさっそく俺と闘った人間の俺と闘ったときの記憶を消し去り

情報操作をして力尽き・・・ベッドに倒れた

（ねむい、今日、いや、昨日と今日は、なかなか面白かったな～まぁ最後の『原子崩し』や『未元物質』とのお遊びは・・・・・正直言ってつまんなくて退屈だったな～）

そう言って俺は眠りについた

影虎視点終わり

その頃

通称窓のないビルに設置された生命維持槽のビーカーには弱アルカリ性培養液が満たされ、
緑の手術衣のまま、その中に逆さまになって浮かんでいる男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』がどういう原理なのか空中に画面のようなものを無数に展開し

それを見て微かに微笑んでいた

その画面には、先ほどの戦闘の映像がつまり影虎が椿を背負いなが

ら戦っていた姿が映し出されており
それを見て微笑んでいたのだ
まるで大切なものを無くした後にそれが見つかったようなそんな笑顔だった
すると、
「まさか、俺が通っている学校のクラスメイトが学園都市が生み出した絶対能力者だったとは驚きを隠せないぜ、それどころかそんなものが実際に存在していたとはな、何故今までこんな奴が普通の高校生として当たり前のように暮らして居るんだ?」
ドアも窓も廊下も階段もエレベータも通風孔すら存在しないビルの一室で上条当麻や影虎と同じ学校で同じクラスの唯の高校生のはずの土御門は空中に浮かぶ映像から目を離して呟いた。
すると水槽の中でアレイスターが喋った
「理由は、定かではないが彼の存在が私たちの記憶そして、学園都市の表から暗部まであらゆる機関の記録から完全に消えていたからだろう」
「完全に消えていた?どういうことだ、立った一人で自分の存在を社会から消し去ったとでも言うつもりか?あろう事かこの学園都市という町でそんなことが可能なら世界中何処の国でもその芸当が可能と言うことか?ばかな、そんなことが出来る者がいればそいつは、今頃この世界で神になってるだろ?」

土御門は、そう言うと

「その神を生み出すのがそもそもＳＹＳＴＥＭだろう？「グッ！！」

」

水槽の男がそう言うと

土御門は、唇を噛みしめた

するとある事を思い出し口に出した

「それはそれとして一つ聞いておきたい事がある、「なんだ？」あいつがさっきからその映像で見せているそれはどういうことだ？絶対能力者の能力名が『異世界樹（ユグドラシル）』と言うことは暗部では、ずっと噂されていて木を生み出す能力かとも思ったが「そのままではないか？」何を必死にごまかしている！！

あれは、あいつが使用している世界樹というのは、魔術サイドで言い伝えられている原形界、創造界、形成界、物質界（人間の住む世界）にそれぞれ一本ずつ存在すると言われるセフィロトの樹だ、魔術術式でもなくうわさ話でもない、正真正銘の本物だ。

それもあろうことか原型界【オーラム・アツィルト」神の完全な世界といわれる天使ですら踏み込めない場所にあるセフィロトの樹最上級のものを呼び出しそれを使役している。

魔術の知識も無しにそんなことができるはずもない。（魔術の知識があろうが出来ないんだろうがな）・・」

土御門がそう言うと

「彼はすでに魔術を知っているようだ。」

水槽の男が答えた

先ほどまで見ていた映像の背負われている人間の顔をアップにして見せた

それは当然のように椿であった

それを見た土御門は、驚いた顔をしながら

椿を見て

「血まみれの魔導書？
いや、こいつは、新書血録（しんしょけつろく）…、レコードブラッドか？
顔写真を昔見たことがある！！
まさか、生きていたなんてな！！
必要悪の教会（ネセサリウス）を裏切って粛正されたと聞いていたが・・・・！？
・・おい、これは一体どう言うことだ？
この学園都市いや、科学サイド真の最強と魔術サイドで最強の位置にある魔導書がデキてるとでもいうつもりか？「・・・・・・・」
ほんとうか？
つまり、お前は俺にこの二人の監視をしろということか？」

土御門がそう言うと

アレイスターは、静かに頷いた

つづく

異世界樹（ユグドラシル）（後書き）

正直、『原子崩し』麦野さんと『未元物質』垣根さん・・・難しい指摘していただけると嬉しいです

ではまた

初志貫徹（変わらぬ想い）（前書き）

今回は少し短めです

ではどうぞ

感想ください

初志貫徹（変わらぬ想い）

俺は、一真と当麻と別れて
家に帰る途中に命を狙われ
辛くも無傷でそれを撃退し
さらに現れたイレギュラーを何事もなく撃退し
家に帰ると椿を寝かせ
俺と戦った奴らの記憶を消して
・・・・・・・・そこから記憶がない

たぶん、記憶消去を使いすぎたために冬眠してしまったんだな・・・
少なくとも2日は寝てたな・・・

俺は、能力の使い過ぎで上手く機能しない脳を使いながら寝ながら
物事を考えていた

そして、俺は、今が何時かわからず時計を見ようと目を開けると

時刻は、午後、8時半・・・・・・・・・・・・・・

（完全に寝坊した！！！！！！！！？・・・・・・・・そうふぁ、
今日は学校無かったんだ）

そう思い寝返ると横に、ジーパンで上は水色の半袖の服を来て黒くて長い髪を後ろで括って（ポニーテールにし）緑色のエプロンをした椿が立っていた。

「おはようございます、椿さん・・・・・何か怒ってますか？」

俺が寝ころびながらそう言うと

「おこってないよ、むしろ・・・・・」

「むしろ？」

椿は、俺を見てプルプル震えていた。

そして、

「抱きしめたい！！！」

「ホワッツ？」

グワッギュ～

「グワ～・・く、くるしい・・・」

（何故だ、振り払えない？よくよく考えてみたら俺の目線が椿より低い気が・・・・ハァ！？俺の身体完全に８歳の時くらいに縮んでる？）

俺は今の状況を一瞬で理解した

俺の身体は、『異世界樹（ユグドラシル）』の過剰使用・・・（竜王の波動が効いたな～）・・のせいで3日間の子供タイムスタートだ

・・・・・・・・・・・・・・・・鬱になりそう

俺のそんな気持ちは関係ないと言わんばかりに喜んでいる椿

こいつの子供好きには、驚かされる

・・・・・何故だろう?子供を可愛がっているときの椿は、無性に忍とかぶる

気のせいかな?

など考えていると

ムギュ～・・・・・（苦し!?）

椿に抱きつかれている俺は、椿の胸に顔を押しつけられ見事、谷間に顔を埋められてしまい窒息寸前

死なないとは言っても苦しいのは変わりない

「モグイーパグジデグベブバビー（苦しい離してくれ椿）」

叫びながらバタバタしてみるも

俺の思いは届かず

「じたばたしてる影も可愛い♪」

と乙女モード突入の椿さん

・・・・・不味い・・・・・・本当に死ぬぞこれは・・・・・・

仕方がない

俺は、矛盾の生じる錬成で砕けるゴム玉（直径３０センチ重さ1キロ）を椿の頭に落とした

ゴン、バリ～ン

椿にボールが当たると椿の意識はシャットダウンしボールはすぐに砕けた

椿の手から解放された俺は、谷間から脱出し深呼吸

（あぁ～これほど旨い空気を吸ったことがあっただろうか？いや、無いこれは確信できる）

などと新鮮な空気のおいしさを味わっていた俺は、さっきまで可愛がるという課程で俺を圧死＋窒息死に追い込んだ椿を見た

スゥスゥ寝ていた

そして、俺は、椿を揺すって起こした

「ん？・・あれ、俺は一体何を？・・・・あぁ影と・・・」

再びうずうずし始めた

俺は二度と窒息死を味わいたくないんで正座しながら右手を前に出すと

「椿さん落ち着いてください、あなたは先ほどの過ちを繰り返すつもりですか?そして、再び制裁されたいんですか?」

と告げると

「いや、だって、その、お前の子供の時の姿は、滅多に見れないから・・それに・・・2日間もお前の可愛い寝顔を見て襲わなかっただけでも・・・表彰ものだぞ?」

っと顔を赤くしながら口をとがらせて首を傾げながら言った

正直言って可愛かった

(おい、おもわずときめいちまったぞ?その格好でその顔は反則だぁ)

と思っていると

椿が立って

「そうだ、晩御飯が出来たぞ、顔を洗ってリビングに来いよ」

そう言って

椿は部屋を出ようとしていた

「ふぅ～ようやく身の安全を確保でき｛バタン｝イチャイ・・グス、グス」

俺は自分の身長＋脚の短さを忘れてしまい自分の着ていた学校のズボンの裾を踏んでしまい

床との強烈なキスを体験してしまった

俺は、鼻を思い切り地面にぶつけた痛みで思わず泣いてしまった

一真を見て思ったが心は体に影響されると言う理論は、本当だったと痛みで泣きながら納得していた

すると椿が再び俺の部屋にエプロンを外そうと両手を後ろにしながら入ってきて

「どうしたんだ、影虎？・・・あ～あ、派手に転んで鼻血まで出てるぞ？ほら」

そう言って

椿は、俺の鼻にポケットから出したハンカチを当ててきた

そして、

「ほら、子供のなったからって男が泣くなよ」

そう言ってきた

恥ずかしい！！

マジで恥ずかしい！！

「泣いてね～よ」

っと涙声で言うと

「影、これ以上、『私』の保護欲と母性愛をくすぐるのは止めてくれ、我慢するのがしんどい、また、襲いかかりそうだ・・・嫌だろ？」

そういわれたので

「勘弁してください、それと・・・この身体の使い方がいまいちわからなくてその・・あの、リビングまで運んでもらえませんか？」

俺がそう言うと

「よっこらせっと」

椿は、俺の願いをたやすく引き受けて

俺を負ぶってリビングに運んでくれた

（自分の不甲斐なさに涙が止まらない・・・・それよりも子供の時の俺ってこんなに使いにくい身体で生活してたなんて天晴れだ、そして、一つだけ言いたいことがある）

「なんで、俺は、椿の膝の上で飯を食わねばならんのだ！！！！！！」

本気で怒鳴った

椿は、両手で自分の耳をふさいでいた

そして、

「・・・バ～カ、仕方ないだろ?お前の身長９５センチでは、イスに座っても手が届かないんだから」

っともの凄く正論責めされて

再び涙が・・・・・とまりません

だって、俺の身長は、１８０センチあったのに今は、９５センチだぞ?て言うか俺の８歳の時の身長引く過ぎだ!!幼稚園児と変わらないんだぞ、あのころにもっと飯を食っていれば～

などと

椿に食べさせられながら涙でしょっぱい料理を美味しくいただきましたよ。コンチクショウ

その後、風呂に入ってすぐに寝ましたよ

椿が一緒に入ってやろうか?などと嫌味を言ってくるので

「忍の家に泊まらせるぞ?」っと睨みながら言うと

大人しく退散しました

その後、小さな身体にも馴れてきたので普通に寝ることにした

この状態になると3日間は元に戻らないので大変である

俺が先に寝ていると

椿が風呂に入った後なのか湿った髪でピンクのパジャマを着ていた

そして、俺のかぶっている布団に入ってきて

俺にくっついてきた

これはいつものことなので

文句は言わない

でも、さっきまで俺の姿をかかったことにはおこっているので

椿と反対方向を見て寝ていると

「・・・・さっきは、ごめんな、久しぶりにお前のかっこいいじゃなくて可愛い姿を見てはしゃぎすぎた」

っと謝ってきたので

俺は、椿の腕の中で一回転して椿の方を見ると

「・・・今の俺は、昨日のように大人じゃないのはわかったんだ

な？」

俺がそう言うと

椿は、こくりと笑顔で頷いて

「もう、電気消すぞ」

っと寝室の電気を消して

眠った

俺は、すぐには眠れなかったので色々考えていた

昨日と今日のこと

俺に初めて出来た

好敵手（ライバル）以外の普通の友達

友達との喧嘩

食事

まぁいろいろ

裏の生活とは違い表の生活

正直俺は裏の生活には飽き飽きしていた

俺からすれば表の生活の方が刺激的だよ
俺の価値観がおかしいのはわかってる
まぁそんなことはどうでもいいんだけどな

俺にとって大事なのは、俺の横で俺の手を握って安心して寝ている
女だ

４年前、俺は、こいつと出会い

こいつの笑顔や微笑みそして今みたいな安心しきっている寝顔を
こいつの全てをどんなものからも守りたくて

こいつの地獄から

こいつを解放してやりたくて

いや、こいつの居る場所が地獄なら

その地獄を天国にかえるために

俺は、真の意味で

俺は、全てを敵に回した

こいつのために俺は、柄でもないのを承知で表に出たんだ

俺の中の正義を掲げて

俺の中で悪を決めつけ

自分勝手に自分勝手な正義を振りかざし力を使い

それでも俺は、椿と一緒にいたかった

椿に笑って欲しかった

餓鬼の時からの誓いは、今もここにある

っと自分の左胸を左手で押さえてそう思っていた

そして、椿に握られている小さな右手で強く握って

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・例え何を敵に回してもお前だけは絶対に守ってやるそして、幸せにしてやる」

その時、俺は過去に言った一言を思い出した

・・・・『お前が人からも神からも見放されたっていうんなら・・・俺は、俺という怪物は、化けもんは・・・・絶対にお前を見捨てない!!俺が見捨てたら誰がお前を救うっつ～んだよ?あいつらみたいなまともな善人に見捨てられたお前を!!誰が守ってやるっつ～んだよ!?悪人からも見捨てられたお前を誰が幸せに出来るっつ～んだよ?・・・・・表からも裏からもこぼれ落ちたお前を誰がすくい上げてやるんだよ?・・・・・・・・・それが出来るのはな～

表と裏どちらでもない怪物だ、だからこそ、化け物の俺が救い上げてやるよ!!幸せにしてやるよ。だからこそ、俺は倒れない俺は死なない化け物として・・・お前を守り続けるために!!!お前を幸せにするために!!そして、一つだけ誓ってやる俺はお前を　裏切らない!お前は、一生に一人あるかないかっていうくらいの当たりくじを引いた。俺という化け物に幸せにされるって言うな～・・俺の力は、お前のためにあったって訳か・・おもしろい・・・・・・喜べよ、今から俺は、お前だけのお前のためだけの化け物だ!!』

「俺は約束、守れてるのか・・・な・・・？」

そう言って俺も眠りに落ちた

初志貫徹（変わらぬ想い）（後書き）

正直言って影虎には散々な回でした

ではまた

（もしかすればもう一回投稿するかもしれません）

初志貫徹（多くの出会い）（前書き）

少し早く書けたので投稿します

では、どうぞ

初志貫徹（多くの出会い）

・・・・・・・・・・・・・・・９年前

俺は、異常な子供だった

名前だって日本人の名前じゃなく外人ぽい名前だった

周りの大人達からは、影が薄い子供だと思われていたが

俺の影が薄いなんて事はない

俺は、生まれつき体が小さく成長が遅かった

同年代の子供から見ても俺は、年下にしか見えないだろう

でも、俺の力は強かった

ただ、能力で俺の存在を薄くしか認識できないように設定していたからだ

俺は、三歳のころから自分が人とは違うと本能的に感じていた（そして怖かった・・・）

その証拠に俺には、能力開発を受けていないのに俺には、明確な能力？があった

そして、その力が怖かった俺は、その力を中和するために独学で能力を生み出したりした

時折、怒りでいっぱいになると怪力になったりもしたので

正直・・『俺は人間じゃない』とおもわづに居られなかった

そう、俺は、はじめはゼロだった・・なのに俺は望むことで1になった

俺が俺であるための条件が才能の開花だったんだ

そして、動き始めた俺の歯車（才能）は止まることを知らなかった・・

ある日、奇跡的に俺を見つけだした

孤児院の職員にいっしょに遊びましょうと

言われて連れ出された

正直面倒以外の何者でもないので

生み出した能力を使って俺のことを記憶するなと設定し

あえて職員の後ろに居続けてやった

すると、1時間ほど続けていると

孤児院の職員達は、焦ってアンチスキルに捜索願を出そうとしたので

すぐに能力を解除すると

俺は、職員達のど真ん中にいたので
みんなは驚き
俺に質問をいっぱいしてきた
俺はその質問に全部答えてやった
すると俺は、施設から学園都市の研究機関に引き取られた
その時、
ある年下の青髪の女の子が
「行かないで」っと泣きわめいて俺を引き留めようとしたりもしたが
結局俺は、施設の半ば強制連行された
そこからは語る必要もない
ただ、普通の人間からすれば壊れるような世界だ
地獄と呼ぶ奴も居たかもしれない
でも、俺は、地獄ってこんなもんかっと飽き飽きしていた
研究所で俺は、才能の化け物と呼ばれた
（わかっていた3歳の時からそんなことはわかっていた・・・）

俺は、生まれながらにしてずっと損失感を感じていた
大切な者が奪われてしまったかのような
孤独っと言っても良い
そんな感情を抱き続けていた
8歳のある日
俺は、損失感と孤独感がいっぱいになり
それが精神に異常を来たし
能力研究の途中に俺の能力は、暴走という名のレベルアップを遂げた
俺の背中には、黒い木の枝のような翼が生え頭には、朽ちた木のような触覚が生えていた
俺の身体から出来た木の枝は、突如、研究所を破壊し学園都市に存在する窓のないビルを攻撃し大きな穴を開けた
研究員共も驚いていたよ
本来、精神操作系に属する俺の能力が突如、物理法則に影響する能力に変化したのだから
この能力に覚醒したとき俺のレベルは、レベル6に裏の世界で認定された

俺の能力名は、記憶消去から『異世界樹（ユグドラシル）』に変更された

能力の由来は、世界樹

この世に根を張り全てを掌握し育ち続ける大木

『進行と支配』

と言う意味だそうだ

そして、俺の能力『異世界樹（ユグドラシル）』が覚醒してから

2週間が立った

俺は、独自のカリキュラムを制定し

『異世界樹（ユグドラシル）』の完全に操作する事に成功した

（もう、この研究所に縛られるのはたくさんだ）

そう思い

ある冬の夜、俺は、収容所とも言える研究所の人間を社会的にも生物学的にも抹殺した

そして、俺は研究所を抜け出すときに

ある一人の白髪で色白の少年（年上？）が俺の前に立ちふさがっていた

「ここで実験だって聞いたンだけど君が俺の相手？」

っと白髪が俺に向かって聞いて来た

「・・・・・違うんじゃないかな？俺、そんな話し聞いてないから・・・・あんた名前は？」

俺は、不思議な白髪に興味が沸き

聞いてみた

「〇〇　〇〇〇・・・・・・そうか、なら、早く家に帰ったらどう？」

白髪は納得して俺が破壊した施設に入っていこうとした

そして、俺『異世界樹（ユグドラシル）』と呼ばれ学園都市でただ一人の絶対能力者と後に『一方通行（アクセラレータ）』と呼ばれ学園都市最強の超能力者が初めてあったのもこの日だ

この時は、俺もこいつと戦うことになるなんて想像もしていなかった

そして、研究所を逃げ出した俺は、正直何の宛もなかったので

ただ、夜の学園都市をただ歩いているだけだった

そして、ある公園のベンチで俺は力尽きて眠ってしまった

俺が眠ろうとするとき

俺の『異世界樹（ユグドラシル）』の翼？が俺の身体を包み込んでいたのがわかった

優しく包まれ俺は、何の不安もなく眠った

寝ているときに誰かに抱きかかえられるという夢を見た

そして、目を覚ますと

寝る時いた公園のベンチではなく

かなり大きい部屋のベッドの上だった

（何故俺がこんな所に居るんだ？確か『異世界樹（ユグドラシル）』には、敵または、危険が迫ったら迎撃って設定してたのに？）

俺が頭を抱えながら悩んでいると

コンコンコン

初めから開いているドアにあえてノックして

右手には、マグカップをもっている目元を涙で腫らした長身の髪の長い巨乳女が居た

そして、

俺に

「あんた、昨日、ベンチで寝てたのを覚えてる？」

と俺にマグカップを渡してきた

俺はすぐに謎の女を『異世界樹（ユグドラシル）』で串刺しにしようと

『異世界樹（ユグドラシル）』を発動しようとすると

ガタガタガタ

身体がいや、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼が動かなくなった

（なんで？動かない？）

などと少しパニックになっていると

翼が勝手に消えた

謎の女が俺の手を取って

暖かいコーヒー牛乳の入ったマグカップを持たせてきた

そして、

「寒かったでしょ？それでも飲んで暖まりなさい♪毒なんて入ってないわよ♪」

そう言われて
俺は、その飲み物を飲んだ

そして、

「君の名前は？」

っと聞かれたので

とっさに本名を言おうとしたが正直自分の名前が好きではないので

「桜小路・・・・・「桜小路・・・？」・・・・影・・・ま「影丸！？」・・・と、と、「影虎？」そう、影虎」

俺が偽名を一生懸命考えていろいろ悩んだあげく

俺の名前は、桜小路　影虎に決まった

そして、

「可愛い顔してる割には、随分と厳つい名前ね♪私の名前は、桜井忍♪気軽におねえさんって呼んでね♪」

これが変態ロリコン女医こと俺の恩人の一人桜井忍との出会いだった

俺は、この日からこいつから社会で生き抜く方法や喧嘩の仕方や医学の知識あろうことか銃器の使い方などを教わった

そして、１０歳の俺は学園都市最強の喧嘩屋の称号『牙桜』をコートとともにもらった

忍との生活も楽しかったけど

俺の心にぽっかりと空いた穴を埋める事は出来ないと言われた

俺の中で損失感と孤独感は、日に日に強くなっていた

何を失ったのかわからないから探しようもない

そう思っていた

１０歳から１２歳までの間は、つねにスキルアウトとの喧嘩の毎日だった

ちなみに身長は、１２０センチだ・・・・・低い〜ズーン〜

そして、ある日、俺は、一方通行との決闘を学園都市にある広い公園で行っていた

理由は簡単♪

スキルアウトとの喧嘩に飽きたから

能力者との喧嘩を楽しもうと

学園都市一位と言われている『一方通行（アクセラレータ）』殿とその研究機関に挑発

と言えるほどの嫌がらせをして（データを消したり非研体の顔写真を全部ゲコ太や蛙の写真そして冥土返しの写真に変更したりして妨害（遊んで）していた・・・めっちゃ楽しかった）

あえて、『一方通行（アクセラレータ）』を呼び出した

そして、奴は空を飛んで俺の前に降りてきた

『一方通行（アクセラレータ）』は、俺が四年前にあった白髪色白の少年だった

「てめェかよ、俺のォ無敵になるための実験を妨害してるガキてェのわよォ？」

変なしゃべり方・・・そして、この四年の間に何があった!?

まぁいいや

「そうだぜ、俺がお前の邪魔をしてる人間・・・・・ていうかさ、たかが『電撃使い（エレクトロマスター）』の女の子のクローン・・・なんだっけ？欠陥電気？それをさ～２００００通りの戦闘環境で２００００回殺害するって言う正気の沙汰とは思えない内容の実験で絶対能力者（レベル６）になれるとでもおもってんの？マジで笑えるんだけど・・・・・・・どうした？怒った？それとも泣きそう？ごめんごめんちょっと虐めすぎたよ♪」

俺がごめんねっと謝ると

『一方通行（アクセラレータ）』様は、

「ククククク、ハァッハハハハハ、・・・・・ちょっと計画を狂わせたくれェで調子にのってんじゃねェよォ！！！！」

『一方通行（アクセラレータ）』は、足下に転がっている砂利を脚で蹴ってきた

その砂利は、通常では考えられない速度で俺に向かってきた

恐らく彼の能力で砂利にかかるあらゆるベクトルを俺に向けたのであろう

（・・・・・調子に乗ってるのはお前だ）

俺は、すぐさま『異世界樹（ユグドラシル）』の羽を出し飛んでくる砂利をはじき返し再び『一方通行（アクセラレータ）』にぶつけようとしたもちろん『一方通行（アクセラレータ）』もベクトルの反射で返してくる

しかし、俺は、再びそれを返し

再び反射しようとする『一方通行（アクセラレータ）』に俺の元々の能力であったはずの記憶消去の中で能力者用に開発した『孤高なる参戦者』を使い

『一方通行（アクセラレータ）』の演算を2秒間だけ完全にストップさせ

かなり威力のある砂利をぶつけてやった

「・・・・・グハ〔ドサ〕・・・・・なンだァ？今の攻撃、全く見え無いどころか反射がはたらかねェだァ？どうなってやがる？」

『一方通行（アクセラレータ）』は、俺の『孤高なる参戦者』攻撃に全く対処できずに
右肩にダメージを受けて吹っ飛んだ

しかし、演算が戻った『一方通行（アクセラレータ）』さんは、すぐにベクトル変換で
体制を立て直し

状況を詳しく判断していた

（・・・・・やっぱ頭の良い奴ってのわ・・・・なぶりやすい）

俺の方をじっと見て俺が何をしたのかを見極めようとしている『一方通行（アクセラレータ）』に俺は、記憶消去で俺の存在をアクセラレータに忘れさせ

普通に歩いて近寄り

目の前で猫だまし

「・・・・俺は、ここでなに〜バン〜うおォ！？」

「プククク・・・クク」

予想以上に驚いた顔が面白かったので笑いが止まらなかった

すると俺を認識＋思い出した『一方通行（アクセラレータ）』は、

「てめェ！！一体何してやがるンだァ？」

っと地面を強く蹴って（ベクトル操作をし）

俺に向かって高速移動して

右手で殴りかかってきた

俺は、すぐにマトリックス様々なのけぞり避けで拳を避けて

すぐに『孤高なる参戦者』を発動し2秒間『一方通行(アクセラレータ)』の演算を止め膝でアゴを蹴り上げてやった

そして再び吹っ飛んでいる最中に気を取り戻した『一方通行(アクセラレータ)』は、背中に竜巻?を作り出して空を飛んで俺に蹴りかかってきた

「ちょこまかとォ!!!!!ささっと終われェ三下ァ!!」

俺は、三下と言う言葉にイラっとして

「『一方通行(アクセラレータ)』・・・喰い殺してやろうか?」

『異世界樹(ユグドラシル)』の翼を瞬時に出し

右側の羽で『一方通行(アクセラレータ)』のベクトル変化キックを受け止め

左側の羽で『一方通行(アクセラレータ)』の顔面に強烈なビンタをかましてやった

『一方通行(アクセラレータ)』さんは、もの凄い勢いで吹っ飛んで大木に身体を打ち付けて

倒れた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・て、てめェ・・・・・なにもンだ?・・・・ハァハァ(
俺の反射が一度も成功しない能力だと?)・・・・」

正直、お前の心は読みやすいな~

「特別に教えてやるよ♪ただし、誰にも言わないと誓えさもなければ殺す。オーケー?「チィ・・(確かに下手すれば殺される)」・・・・俺の名は、研究名『ビースト』能力名『異世界樹(ユグドラシル)』レベル6の絶対能力者、学園都市0位の能力者だよ?でも、俺のことは、忘れた方がいいよ・・・・惨めになるだけだ・・・でも、良い線いってるよ♪・・・・間違いなく学園都市最強の超能力者はお前だ・・じゃあね」

俺はそう言って『一方通行(アクセラレータ)』を気絶させ家に帰ろうと

公園を歩いていると

ガサガサ

俺の右側の茂みから何かがこっちに近づいてくるのが解った

(なんだ?)

すると草陰から

身長は147くらいの長い黒髪を無造作に垂らし神父?ぽい服がボロボロなたぶん女が吸い込まれるように俺に倒れかかってきた

「え?{ガシ}・・・・誰、こいつ{ピチャ}!?」

俺は、一応受け止めた

黒髪の女は、息はしているが意識がほとんどなかった

そして、左肩から出血していた

すると

「ハァハァ・・・・・」

かなり苦しそうだった

息も少し荒かった

恐らく外傷による出血が原因で出血多量とはいわないが血が足りなくなりかけていて意識が跳びかけてるな?

俺は、一応救急車を呼ぼうかと思ったが

(ここで良いことをするのは、善人の仕事だな、そして、こいつをここで楽にしてやるのは、悪人の仕事・・・・・人でない化け物はどうすれば良いんだ?・・・・放置?それとも食べる?・・・・なんかいかがわしい言い方になるな)

などと全く助ける気も無い俺

今思うと俺って

屑野郎だ

などと瀕死の人間の横で自己嫌悪しているとと女が言って来たので

「お前に頼みがある・・・・・」

「お断りさせてもらう」

丁重にお断りさせてもらった

だって俺は、化け物だから♪

人間の問題は、人間で解決すればいい

（それに俺が何かしなくても誰かが助けてくれるだろうしここは、人通りも・・・・・？そういえば、さっきから誰ともすれ違わないぞ？・・・・おかしい、ここは、夜景が綺麗に見えるって言うデートスポットでこの時間はいつもカップルでいっぱいのはずだ！！なのに誰も居ないだと？どうなっている？）

などと必死に状況整理しているとそらに突如、変なものが広がった

「なんだ、あれ？・・・・・・魔法陣？どこの幻術使いだ？まったく」

っと勝手に仮説を立てて納得しているとと

ドン

バタン

いきなり後ろから突き飛ばされ

地面にだいぶ

「イチャイ・・・・何すんだこのや・・ろ?」

俺は怒って俺を突き飛ばした女の方を見ると

空の魔法陣から伸びた光の縄?に首と右手と両足を縛られ宙に浮いていた

つづく

初志貫徹（多くの出会い）（後書き）

今回は急ピッチで書きましたので間違いが多いかもしれません

感想や指摘を待ってます

さすがに批判だけの感想は、対応に困るので受け付けておりません

後、オリキャラ募集します

強い能力者を募集します

では、また

初志貫徹（６４億分の１の出会い）（前書き）

はい、完成しました

感想ください

では、どうぞ

初志貫徹（６４億分の１の出会い）

俺はいまいち状況が理解できなかった

そして、何故か胸への圧迫感を感じていた

すると

女は、開いている左手の指の皮を口で食いちぎると

指から出た血を空に向かって飛び散らせると

苦し紛れに呪文?を唱えた

すると魔法陣の遥か上空からもの凄い光の柱が振ってきて魔法陣を砕いた

そして、高速から解放された女は、

「ゴホゴホ・・・・ハァハァ・・・・撒いたと思ったがしつこい奴らだ」

と上手いこと着地をして

俺の手を取って走り出した

（こいつ足早!?）

そして、１００メートルくらい走ると

１０人くらいの男共に囲まれてしまった

「チィ」

女は、舌打ちしていた

すると神父らしき男が

「遂に年貢の納め時だな・・・魔術師クロス・マリアンヌいや新書血録」

新書血録？魔術？・・・・・・・・・？

「何か言い残すことはあるか？」

っと神父の一人が聞いてきた

「この子だけは、見逃して欲しい」

（俺のことか？何で俺の事なんて）

「その子供は目撃者だ、見逃すことはできん」

と冷酷に告げてきた

そして、８人の男共がみんな胸にぶら下げた十字架を持って

謎のレーザー？で攻撃してきた

すると

女は、血液で自分と俺の周りに円を書くと結解のようなものをはって防御し始めた

「この中にいれば大丈夫だから・・・巻き込んで済まない」

俺は、人間に守られるなんてプライドが許さなかったので

この女ごと男共を『異世界樹（ユグドラシル）』の翼で八つ裂きにしようと攻撃を仕掛けると

ガタガタガタ

忍の時と同じく羽が突如動かなくなり

勝手に消えた

「はぁ！？何で消えるんだよ？おい『異世界樹（ユグドラシル）』？」

っと消えた翼に怒鳴ってしまった

すると

女が

「もしかして、その羽は使えないのか？」

っと攻撃を防ぎながら

俺に聞いてきた

俺は、

「あぁ、お前ごと奴らを真っ二つにしようとしたら急に消えた」

っと言うと

女は、

「なら、お前に逃げるための力をやる」

と言ってきた

「はぁ？力をやるてウグっ！？」

俺は、文句を言う前に女に接吻された・・・・つまりキス

俺は、自分がドンドン赤くなるのが解った

すると

俺の頭に『魔術』の知識と『魔術』の術式・・・・・・そして、この女の記憶が流れ込んできた

もの凄く暗い思い出しかなかった

そして、

女が俺の唇から唇を離し

「その力があればあいつらを退けて逃げられると思う追跡防止の術式も一緒に組んでおいた、俺が時間を稼ぐからアンチスキルにでも助けを求めろ」

そう言って女は、急に炎の塊を出し

神父共に向かって投げ

再び暗闇に走っていった

俺は、フリーズしていた

あの女の記憶が余りにも黒かったからである

神父の内８人が女を追って

残りの２人が俺を始末しようと残った

その内の一人が

「あの悪魔に会ってしまったのがお前の人生に終わりだったのだ・・・神の慈悲があらん事を」

そう言って

十字架をライトサーベルみたいにし

俺に魔術で攻撃を仕掛けようとしてきた

ガキン

「くだらねぇ・・・・・・」

「な!?」

俺はすぐさま羽を展開し羽でビームサーベル?を受け止めて呟いた

神父は驚いていた

「・・・・くだらねぇ・・・・お前らの言う神がくだらねぇ・・・・たった一人の女の子をやろうが１０人で追い回して始末しようとするのがお前らの神の教えだというのなら・・・・くだらねぇ・・・・・そんな神に忠誠を誓って挙げ句の果てに裏切られたあの女もくだらねぇ・・・・・・・・・・・・神なんてもん信じてるからくだらなくなるのか?・・・・いや、しんじてなくてもくだらねぇな・・・・・・・でもよ・・何かのために何かをしようとしてる奴は、嫌いじゃねぇむしろ・・・・・好きだな」

俺がそう呟くと

もう一人の神父がビームサーベル?で俺に斬りかかってきた

俺はとっさに『異世界樹(ユグドラシル)』の翼のあいている方でそれを受け止めて

神父の体勢を崩し前屈みにして

腰から隠し持っていた拳銃を取り出して

撃鉄を引き

神父の眉間に目掛けて～

バァン

俺の拳銃は、銃身から微かに煙を出し

撃った弾薬を外に吐き出していた

神父の額には穴があいていて

神父の後方には、血と脳味噌の一部が散らばっていた

バタン

神父だったものは、地面に仰向けで倒れた

「なんだ？魔術か？・・・己～！！！！！」

もう一人の神父が十字架からレーザー？を連射してきた

１秒につき１０００発くらい

俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の両翼でそれら全てを光速にも等しい速度で動かし

それらを全て弾きながら一歩一歩神父に近づいていってやった

すると神父は、腰を抜かして

「く、くるな、化け物！！」

っと右手を地面について

左手で俺を払うように振り回していた

俺は、神父に優しく微笑み口に銃口を突っ込み

再び

バァン

これ以上は言うことはない

また、神父が蛋白質の塊になっただけだ

そして、神父を蛋白質に変えると

俺は、ひとまず深呼吸し

「すぅ～・・・・・・ハァ～・・・・・・さてと・・・くそったれな神に替わって・・・化け物の俺があの女と神父共に判決を下すとするか神の裁きならぬ怪物の施しを・・」

そう言って俺は、女の血の後を追った

そして、歩くこと2分

女は、力尽きたのか

再び空に展開された咎人捕獲用の魔術に体中を縛られ中にだらんと浮いていた

そして、神父共４人は、女に何かをするつもりらしく十字架を女に向けて詠唱をしていた

さっき女にもらった魔術の知識からすると

これは、女の体の中にある新書血録を再び魔導書に戻す術式らしい

この術式を使用するには、４人は、それぞれの方位に散らばっている

（・・・・女一人に４人で襲いかかって・・・・・・・これが喧嘩の世界で言う屑だな・・・）

俺は、再び『異世界樹（ユグドラシル）』を発動し両翼を作り出し

俺は、両手に女からもらった魔術『矛盾の生じる錬成』で右手に光の集束した日本刀『白刀』

左手に重力を圧縮した日本刀『黒刀』

を錬成し

『異世界樹（ユグドラシル）』の羽で空気を踏み台にし

神父共に襲いかかった

一人目の神父は俺に気付かずに首を切り落とされ

その横にいた神父は、俺に気付いてはいたが反応できずに身体を真っ二つになり肉の塊になった

「「己!!!!!」」

そして、俺の後ろにいた神父2人が十字架からビームを連射してきたので『異世界樹(ユグドラシル)』の両翼を激しくくねらせ全てをはじき飛ばし両翼で神父二人の上半身と下半身を断罪した

(正直、俺に魔術なんていらないけど記憶消去の使用限界がちかずいてきてるから目撃者は全員殺す)

そう思いながら俺は口に付いた血液をぺろっと舐めて

「おい、女!!」

俺は、宙につり上げられている女に大声で怒鳴った

「ん、んn・・・ハァハァ」

女は、俺の声を聞くと少しだけ意識を取り戻して

「・・・・・何で、なんで逃げなかったんだ!?」

俺の方を見て怒鳴ってきた

俺は頭に手を置きながら

「あのさ～・・・・あんたが寝てる間に俺、神父共６人も地獄に送ったんだけど？」

俺がそう言うと

女が周りを見渡して状況を把握したようだ

「・・・・なんで、なんで、こんなに危ない事してるんだよ・・・・お前人を殺したんだぞ！？まだ、そんなに小さいのに・・・・」

もの凄く申し訳なさそうに唇を噛みしめていた

（小さいは、余計だ｛怒｝気にしてるんだぞ）

「・・・・・俺は、化け物だからさ、殺しとかには馴れてるから心配するなよ・・・それよりもさ、あんた、助けて欲しいか？」

「？・・・・いい、お前だけでも逃げろ・・・俺を助けたらお前まで地獄に堕ちる・・」

っと俺に対して優しい笑顔で言いやがった

（・・・・・自分のことより他人を優先するこいつの考え型は、聖職者としては、素晴らしいと思うんだけど・・今救われなければ行けないのは、自分だってのに・・・・馬鹿な奴だよ）

だが、嫌いじゃねぇ・・・

つづく

初志貫徹（６４億分の１の出会い）（後書き）

なかなか過去編から抜けられません

てか、影虎の子供時代、チビ虎は、人を殺しすぎ！！ですよね。善悪の意識が余りないんでしょうけど・・・

「何ならお前を喰い殺してやろうか？」

え？なぜ、後書きでしかも地の文の俺に『異世界樹（ユグドラシル）』の先端を突きつけてるんでしょうか？

「グダグダ言うなよ・・・・・やれ『異世界樹（ユグドラシル）』」

いやぁあああああ

では、また

多分今日中に投稿できると思います

初志貫徹（契約と言うなの愛情表現）（前書き）

今回で過去編は終わりです

次回からは、渡さんの小説の話しに追いつけたら嬉しいです

ではどうぞ

感想ください

俺は空中につり上げられている女に聞いた

「・・・・・一つだけ聞く・・・・・お前ってさ、死にたいの？生きたいの？」

「ッ！？・・・・・・・・・俺は、生きてる資格なんて無いんだ・・・ただ、死ぬのが怖くて・・怖くて・・必死に逃げてただけなんだ・・俺なんて生きてたって・・・」

女は、俯きながら頬に涙を走らせていた

（こいつの記憶を見たとき思ったがこいつ・・・まともに生きたって思い出がないんだな。いつも、幸せを掴もうと必死に頑張って・・そして、裏切られる。その繰り返しだ。これは俺だけの考えかもしれないが・・・こいつは、絶対に幸せにならなきゃいけない・・・こんな事を俺みたいな化け物がこんな女を幸せにしたいなんて思うなんてな・・・俺って自分が自分でわからねぇ）

「おい、一度だけ聞くお前は幸せになりたくないのか？」

俺は、腹のそこから声を出して宙に浮いている女に怒鳴った

すると、女は、ビクっとして

大粒の涙を流しながら

「わた・・『私』だって幸せになりたいよ!!でも、『私』は、神に見放されてるんだ!!人のために頑張っても・・・・すぐに手のひらを返される・・『私』は、幸せになんかなれない!!だから、生きていたって意味なんてないんだ。誰かに頼ったて・・・お前だってきっといつかは『私』を見捨てるに決まってるんだ」

女は、俺の方をにらみ付けて噛みつくように怒鳴ってきた

(幸せになりたいよ・・・その言葉が聞きたかった・・これで俺の覚悟は決まった♪)

俺は、両手に持った日本刀を強く握りしめながら

「お前が人からも神からも見放されたっていうんなら・・・俺は、俺という怪物は、化けもんは・・・絶対にお前を見捨てない!!「え?」俺が見捨てたら誰がお前を救うっつ~んだよ?あいつらみたいなまともな善人に見捨てられたお前を!!誰が守ってやるっつ~んだよ!?悪人からも見捨てられたお前を誰が幸せに出来るっつ~んだよ?・・「・・・・」・・・表からも裏からもこぼれ落ちたお前を誰がすくい上げてやるんだよ?・・・・・・・・・それが出来るのはな~表と裏どちらでもない怪物だ、だからこそ、化け物の俺が救い上げにやるよ!!!幸せにしてやるよ。だからこそ、俺は倒れない俺は死なない、化け物として・・・お前を守り続けるために!!!お前を幸せにするまでは、絶対に死なない!!そして、一つだけ誓う、俺はお前を　裏切らない。お前は、一生に一人あるかないかっていうくらいの当たりくじを引いた。俺という化け物に幸せにされるって言うな~・・俺の力は、お前のためにあったって訳か・・おもしろい・・・・・・喜べよ、今から俺は、お前だけの

お前のためだけの化け物だ!!」

俺は、自分でも信じられないくらいこの女を守ると誓った

なぜだかは解らなかったが俺は、この女の事がなぜだか・・・気になった

そして、俺は、女の言葉を静かに待った

女は、しばらく目を閉じながら泣いていて

遂に口を開いた

「お前は、『私』を幸せにしてくれるのか?〜コクン〜・・・・信じても良いんだな?〜コクン〜・・なら、『私』を助けろ!!」

俺は女の質問に全て無言で頷いた

すると、女の目に光が宿り俺に、命令をしてきた

その命令に俺は、

刀を握った右手を女に向け

「極めて了解!!!!」

そう言い俺は、女を縛り付けている魔法陣を完全に破壊するために

俺は、『異世界樹(ユグドラシル)』の羽を出し

術式を発動させている神父共を皆殺しにした

神父共は、俺の攻撃に気付く間もなく一人一人悲鳴も上げられずに肉塊になっていった

そして、４人目を殺すと

女を縛り付けていた魔法陣が完全に消え

女は、拘束が解け地面に目掛け落ち始めた

それを見ていた俺は

（・・・・・あの高さから落ちたら・・・死ぬな・・・ヤバイ！！）

そう思い俺は、全力で女に向かって走り出した

そして・・・上手いこと飛び込んでキャッチ・・したのは良いものの俺よりも大きくて体重が重い女を受け止めるのは、それなりに代償があるようだ

ドシン

「ぐはぁ！！」

俺は、女の尻に潰されてしまい不覚にも疲労などがたまっていたので気絶してしまった

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（う、う～ん、ここは・・・・・忍の家！？）

俺は、目を開けて天井を見ると見たことのある天井だったので俺は、驚いて起きあがろうとすると

「う、うｎ・・・・」

俺は、誰かに抱きしめられていて起きられなかった

俺は、身体の何処が動かせるか確かめてみるが

足は、どうやら足を巻かれているようで動かせず

両手も抱きしめられているので動かせず

特に右腕の当たりには、なにやらプニプニと柔らかい感触が２つほど当たり続けていて

俺が動こうとすると後ろからは、熱い吐息が俺の耳元に掛かってめっちゃ嫌な気持ちになる

俺は、恐る恐る首を動かし後ろを見ると

昨日俺が助けた女が裸で寝ていた女の横には、昨日着ていた神父の服？が脱ぎ捨ててあった

（そうか、昨日この女をキャッチしたときに潰されて気絶したんだったな・・・それよりも何でこの女、裸なの？恥はないのか？それに身長の割に胸がかなりでかいぞ・・・・・・・・・・このま

までは、忍と同類になってしまう～あぁ～・・・）

などといかがわしいことを考えかけたので自暴自棄になりかけていると

女が寝ながら泣いていて

「・・お願い・・・・もう、ひとりぼっちにしないで・・・・お願いだから裏切らないで・・・」

っと涙を流してすこしふるえておれのことをつよくだきしめ怯える幼い少女のような声でそう確かに言った

「俺はお前を裏切らないよ・・・・何処にも行かないからお休み」

俺がそう言うと女は、寝ながらでも嬉しそうに笑い眠った

そして、俺ももう一度眠った何故か凄く暖かくて凄く懐かしい暖かさを肌に感じながら・・・・・・・・・・

・　・　・過去編終わり

・・・・・

次の日の朝５時

俺は、いつもどうり目を覚ました

体のサイズは元に戻っていた

感覚もほとんど戻っていて動くことに支障はなかった

俺は、首をパキパキっとならして伸びをして

ベッドから降りようとすると

ギュ

布団の中から椿の手が出てきて俺の服の端を握りしめて「行かないで」っと言わんばかりに俺を引っ張っていた

俺は、その手を優しく握って離した

すると薄い掛け布団に顔を埋めて猫のように寝ている椿が

「う、うう～ん・・・うう～ん～」

突如もごもご動き出し

眠りながらも右手で俺を捜しながら唸っていた

俺は、その時、何を思ったか覚えていないが

椿の顔を布団からだし

唇にキスをして

「またいつもみたいに朝飯作ってやるからそこで安心して寝てろよ」

俺がそう言うと椿は、嬉しそうな寝顔になり唸るのを止めて静かな寝息に戻った

それを確認した俺は寝室を出た

（ハハハ、懐かしい夢を見たな・・・・『俺はお前を裏切らない』、か・・・今でもいやいつでも俺はこの約束だけは破らない）

「さてと、旨い朝飯作りますか～今日は、日本食の気分なので焼き魚に味噌汁だ」

俺はそう言って料理に取りかかった

つづく

初志貫徹（契約と言うなの愛情表現）（後書き）

今回は短めです

予定を繰り上げてもう一回投稿するつもりです

では、また

新書血録（男装少女）（前書き）

今回は、少しだけ長いです

ではどうぞ

新書血録（男装少女）

あの日から何日かがたったある日

『俺』ことクロス＝マリアンヌ、いや、『新書血録』・・『桜小路椿』は、いつも道理、朝、７時４０分に起床し歯を磨いたり影虎の用意したなかなか旨い朝食を食べ終えると

急に影虎が服をぽいっと放り投げてきて「早くそれに着替えろ」と言ってきた

スカートとかじゃなさそうなので

普通に着替えると『俺』の着ていた服は、影虎と『俺』は通っている高校の男子用制服だった

「なんだよ影？これって確か負導一真からもらった制服だよな・・・・もしかして、補習に通えと？」

『俺』は、恐る恐る聞いてみると

影虎の奴は、とっても良い笑顔で

「Ｃｏｒｒｅｃｔ　ａｎｓｗｅｒ（正解）♪」

っと言ってきたので『俺』は、窓から（ちなみに影虎と『俺』の家は、１３階）脱走しようとすると影虎に首根っこを捕まれ引きずられるように登校させられた

（『俺』が言うのも何だけど引きずって学校に連れていくって女子に対する接し方としてどうなんだ？・・・絶対将来彼女が出来ても同じ事してるタイプだ・・・・・あ！？彼女って『俺』か）

などと高校の補習を全く聞かず耳にイヤホンで教科書の代わりに漫画を読んで過ごし

昼休みになったときだ

影虎に補習が詰まらないと文句を言っているとき

隣の教室から負導一真と天野葵が入ってきて『俺』を見るなり

「何故あなたがこのクラスにいるのでしょうか？」

と聞いてきた

すると影虎が

「とりあえず場所を移って話そう。」

っと言ったので

「あ、あぁ…。」

負導達も納得して屋上に行くことになった

そして、屋上で

「んで、何であんたがいるんだ?」

っと聞いてきた

(『俺』が聞きたいよ・・・)

「そいつは勿論、俺の改善で…。」

影虎が代わりに答えた。

「そっか…。

あとは、何で男子生徒用の制服を持ってんだ?」

っと負導が言ってきたので

(お前がくれたんだろうが・・・)

『俺』は頭を抑えながらそう思った

「覚えてないのか?」

影虎がそう言うと

「?何を?」

一真が首を傾げた。

何を言ってるんだ?

みたいな顔をしていた

「本気で忘れてたようだな…。」

俺はそう言いながら小さくため息をついた

「はい…。」

本気で忘れていたようで少し落ち込んでいるのが目に見えた

すると天野が

「あの時聞き忘れてたけど、何で椿ちゃんって男用の衣類ばっかり着てるの？」

っと聞いてきた

正直言って『ちゃん』は不愉快だ

まぁいいや答えてやろう

「俺は過去にいろいろあって女扱いや女の姿でいるのが嫌いなんだ…。

だから男を装っているんだ…。」

「過去に何があったの？」

天野がそう聞いてくる

「…。」

（正直話したくない・・思い出すのも嫌なんだ・）

『俺』は、今、自分が人を殺しそうな顔をしているのが解ったから帽子を深々と被って、顔が見えなくした

「あっ…。
ごめんね…。」

天野が俺の気持ちを察してくれたのか詮索してこなくなった

（黙りはさすがに悪かったかな？）

「別にいいんだ…。
男を装っているだけで心は女だから…。」

俺はそう言った

「「えッ…！？」」

天野と負導は、凄く驚いた表情をしていた

「どうした？そんなに驚いて？
不思議か？」

『俺』がそう聞くと

「「あぁ…わりと…。
（うん…かなり…。）」」

っと二人仲良く返してきた

（さすがに失礼じゃないか?そして、服装ならずに心まで男だったら何で影虎と付き合ってるんだよ。考えたら解るだろ?）

っと『俺』は驚きながらそう思った

「そうなのか?」

焦った『俺』はひとまず影虎に聞いてみた

「俺に聞かれても困るんだが…。」

困った表情をされた

（確かにごもっともだ・・・）

すると影虎が腹を押さえながら

「…まぁいい。
それより、そろそろ腹がへった…。」

っと言ったので

とりあえず昼飯タイムに突入

……

……

……

そのあと何をすることも無く、学校が終わり影虎、負導、天野と買い物に行った。

と言うよりは『俺』は、天野に強制連行された…。

『俺』は、服屋に連行されそうになったとき影虎と一応負導に助けを求めてみたが

負導はどうすることもできないと頭を掻きながら目線で伝えてきて

影虎に関しては、いつも道理の能面笑顔でさらには手を振っていた

（後で絶対に一度殺す！！）

『俺』が影虎に殺意の視線を送っていると

天野が『俺』に話しかけてきた

「椿ちゃ・・椿さんって「呼び捨てで全然良い」なら、椿ってさ・・

影虎君と何処まで進んでるの？も、もちろん言いたくなければ言わなくて良いんだよ？」

っと両手をパーにして胸の前当たりで振っていた

「・・・何でそんなこと聞くんだ？」

「そ、それは～・・・影虎君と椿を見ていてなんでそんなに仲良く出来るのかなって？思ったからかな？」

（『俺』から見たらお前ら二人も完全にカップルに見えるんだが）

「学校の女友達にでも聞けばいいだろ？好きなんじゃないのか？女子ってそう言う恋いバナとか」

『俺』がそう言うと
天野は、
「・・・・・」
俯いて黙った
（もしかしてこいつ・・・）
「お前って学校じゃ友達とかいないタイプか？」
失礼なのを承知でそう言うと
「・・・うん、私って学校じゃ一真とか当麻君しか友達いないんだよね・・アハハハ」
少し泣きそうになってそう言ってきたので『俺』は、少しため息をついた後
天野の制服の胸ぐらを軽く掴み自分の目線に来るように引っ張った
「！？」
天野は驚いていたがそんなの無視
「そうやって、虐められてる事を素直に受け入れて、もう友達なんか出来ないとか思ってるから友達が出来ないんだよ。『俺』だって中学の時は、虐めにあってたけど『俺』は一度も屈したことはないぞ（むしろ影虎を使って地獄にたたき落としたくらいだ）。『俺』

だって学校じゃ女友達はいね～よ？でも、他の場所でちゃんと相談できる友達も作った。ようは、諦めないか諦めちまうかなんだよ。一度思い切って誰かに友達になってくださいって言ってみたらどうだ？お前ならきっとすぐ出来るよ♪」

『俺』がそう言うと

天野は、凄く嬉しそうな顔をして

頭を下げて

「なら、私と友達になってください！！」

そう言ってきた

（・・・・・・ハハ）

「まさか、言った側からいきなり言われるとは思わなかったよ・・・こちらこそ改めてよろしく天野「葵で良いよ」葵」

そして、変な感じに『俺』と天野は・・葵は、友達になった

すると

『俺』は、最初より強力な力で腕を引っ張られ

何故か下着コーナーへ

「何でこんな所に移動したんだ？」

（『俺』、こういうふいんき恥ずかしくて苦手）

『俺』は、むずかゆくなり早くこの場所から移動したいと思っていたが

葵が

「それでさっきの話の続きなんだけど・・・・何処まで進んでるの？」

（あぁ～そのはなしまだつづいてたんだな・・・・正直に答えるべきか・・・それともうやむやにするべきか・・・♨正直に話しちゃいなさい♪♨なんで『俺』の心の声に忍さんが出て来るんだ？・・・・もういいや、正直に言っちゃえ）

「え～と・・・・一応順調に進んで後は、結婚だけ？みたいな？」

『俺』がそう言うと

葵は、何かを考えると顔を徐々に真っ赤にしだし

「そ、そこまで、なの？すごいね、大人なんだね！！」

っと『俺』の手を両手で握りながらはしゃいでいた

『俺』は、手をぶんぶん振られて首がカクカクなって目が回りそうになったので

「と～り～あ～えーず・・腕振り回すの止めて」

『俺』がそう言うと葵は、すぐに止めてくれた

（気持ち悪かった）

『俺』が気持ち悪るがっていると

葵が『俺』に

「ねぇ椿、「なに？」これ一回着てみてよ」

葵が渡してきたのは、最近雑誌とかで使われている『ＳＡＫＵＲＡ』と言う

人気ブランドの服だった

（『俺』、これ仕事で着たことある・・・・というかこの服、世間に広めたの『俺』じゃん・・・）

「どうしたの？やっぱり嫌だった？そうだよね・・いきなり友達になったからって・・〜ブツブツ〜」

葵がめっちゃネガティブなオーラを出しながらブツブツ言いだして

周りの客も注目しだしてきた

「あぁ〜も〜！！わかったよ、着てやるから、でも、それよりワンサイズ大きい奴にしてくれ」

『俺』がそう言うと葵は、頭の上に？を出していた

「え、でもこの服のサイズ、私で普通くらいだから大きいと思うよ？」

っと首を傾げながら言ってくるので

「胸が苦しいのが嫌だから大きいのが良いんだよ」

俺はそう言って

服のワンサイズ大きめを取ると試着室にはいって

ポケットの中に入っている

十字架のヘアピンを前髪に付けた

そして、魔術を行使し

髪の色を金色にして

黒のカラコンを外して

本来の赤みの掛かった目をさらけ出して

他人から見たら全くの別人に見える変装をして

サラシを外して大きすぎる邪魔な胸を何とかまとめ

服を着て

試着室のドアを開けて

ドアの横の小さなベンチで座っていた

葵に

「これで良いか？」

っと見せると

葵の奴は、慌てて立ちあがって『俺』を指差し

「え、えぇ～、う、そ、嘘～『金桜　菜々（きざくら　なな）』！？」

っと大声で『俺』の影虎には内緒で働いている桜井　忍の父親の会社の傘下の一つのファッション雑誌を連載している会社でファッションモデルをしているときのモデル名を大声で叫ばれた

ちなみに『金桜　菜々（きざくら　なな）』でモデルをしている『俺』だが売れ行きは好調で給料もかなり良いため一応続けている（外車とか買いたいから）

女物の服になれるために始めたのだがただ、仕事の時にだけ着れるようになっただけで日常では、恥ずかしくてとても着れないので微妙な心境である

ただし、今のように『金桜　菜々（きざくら　なな）』に変装しているときだけ恥ずかしくなくなるので一種の成長と言えるはず

まぁそれはいいや

「そのとうり『俺』のもう一つの名前は、『金桜　菜々（きざくらな）』だ」

『俺』が両手を腰に置いて言うと

「握手してください！！」

「さっき一応握手はしたと思うぞ？」

『俺』がそう言うと

「あ、そうだ！？・・・それよりも椿が菜々なの？ほんとうに？」

と疑って聞いてくるので

「はい、そうですよ、悪いか？」

「全然！♪むしろ感激だよ」

などと意外にも盛り上がってしまい

仕事の話とかふだんの生活とか影虎とはいつもどうやって過ごしているかなど聞かれながら

二人で代わり番こでなぜかファッションショーなどをして遊んでしまっていた

そして、結構遊んだ後に影虎達のことを思い出し

『俺』は、いつもの桜小路　椿に戻り

影虎達の元に戻った

そして、『俺』達は買い物終えて負導と葵と別れて、『俺』と影虎は帰路についていた。

楽しい一日も俺と言う存在が引き寄せる悲劇のせいで詰まらない物にされるとは知らずに・・・

つづく

新書血録（男装少女）（後書き）

結構長くて疲れました

マシンガン投稿して現在ライフ（ストック）が大変なことになっています

ではまた

感想ください

幻想御手（第二のレベルアッパー事件）（前書き）

今回は少し長めです

感想をいただけたら嬉しいです

ではどうぞ

葵たちとの買い物の帰り道で・・・

「椿、楽しかったか？」

っと影虎がさり気なく聞いてきた

「なかなか有意義な時間だったよ」

『俺』は、影虎を見上げながらそう言うと

「そうか、よかったな、同い年の友達が出来て」

っと言ってきたので

とりあえず足のつま先を踏みつけ

「『俺』は、お前たちより年上だ！！！！！」

っと怒鳴った

影虎は、あしのつま先を踏まれ痛かったのか片足を手でもってぴょんぴょん跳んでいた

「何故あなたは、そこまで年下呼ばわりされるのが嫌いなのでしょ

う？」

「お前だって雑魚扱いされると切れるだろうが！？それと同じだよ」

『俺』がそう言うと

「Ｃｏｎｓｅｎｔ（納得）♪」

っと笑顔で言ってきた

こいつ、子供に戻ったせいで何故かたまに英語になる癖が蘇ったな？

など、と二人で会話しながら帰っていると

学園都市で不良集団のスキルアウトの集団（８人）が裏路地からぞろぞろ出てきて

『俺』と影虎を取り囲んで

「おいおい、兄ちゃん、可愛い彼女連れてるジャン？『俺』らも混ぜてよ～」

っとスキルアウトの一人が影虎に肩をかけながらたばこの煙を吹きかけた

そして、もう一人のスキルアウトが『俺』の身体に触ろうとした

（せっかく楽しい気分だったのに不愉快だな・・・いや、こいつらの苦しみに歪む顔を見るのも楽しいかもな）

「影虎～・・・喰い殺せ」

『俺』がそう呟くと

影虎の能面笑顔が無くなり

スキルアウト共全員が地獄に堕ちた

影虎が手加減無しで暴れ回りスキルアウトたちも能力を持っていたのかそれで対抗していたが

一度鎖から離れた化け物（影虎）は、止まることを知らず一人また一人と沈めていった

途中もの凄い悲鳴や命乞いが聞こえたが『俺』にとっては唯のロックな音楽と同じでより気分が高まった

たぶん、今の『俺』の顔は、もの凄く歪んだ笑顔だと思う

（この世に影虎以外の男がいるから私はあんな思いしなくちゃならなかったんだ!!みんな死ねばいい、男なんてみんな死んじゃえば良いんだ、アハハハ）

と心の中で笑っていると

スキルアウトの一人が血を吐きながら

『俺』の足を握って

「おね、gぃだ・・も、うゆるしてぇください」

っと涙を流し震えながら言ってきた

『俺』は、『俺』に触っている手を思いっきり踏みつけ

腰から影虎にもらった小型の銃を構えて

男の手のひらに目掛けて

バァン

「うぎゃぁあああああああ!!!!!」

男の手のひらには、大きな風穴があいて

男は、痛みでのたうち回っていた

でも、『俺』の気は済まなかった

(こんな奴に触られた・・・こんなやつに・・・・身体を触られた!!!!・・・許さない!!)

「お前らのせいで『私』は、あんな思いしなくちゃいけなくなったんだ!!!!!!」

「おれら、まだ何もしてねぇよ~」

男は泣きながらそう言った

『俺』は、もう自分でも何を言っているかわからなかった

ただ、許せなかった

『俺』は、男の口に銃口をねじ込み

引き金を・・・・・・

ドン

ギュ

バァン

「グゥ!?」

・・・・・・『俺』は引き金を引いた

『俺』を突き飛ばし倒れそうになっている俺を抱きしめた『影虎』の腹をだ・・

(なんで『俺』は、影虎を撃ってるんだ!?それよりもなんで『俺』は、銃なんて出したんだ?・・・・恐かった唯それだけなのに・・・・『俺』は、人を殺そうと・・・・いや、いや、いやぁぁ〜ギュ〜〜!!?)

「泣くなよ椿、俺が邪魔したおかげでお前はまだ誰も殺してない♪それに撃たれたときは痛かったけど今はもう回復してるから傷だってないぜ?弾だってもう外に出てるし♪恐かったんだよな?昔の事を思い出しそうになってもの凄く恐かっただけなんだもんな?お前は、俺が守ってやるから昔の嫌なこと思い出さなくて良いよ♪」

影虎は、『俺』を強く抱きしめて優しくそう言ってくれた

急に安心してしまった『俺』は、その場でストンと力が抜け気を失ってしまった

（本当にごめんな影虎、そして、本当にありがとうな・・・・・）

こうして『俺』の意識は完全に墜ちた

『俺』はこの後、影虎に背負われながら家に帰って

ベッドで寝かされていた

（『私』にとって影虎は、ただ一つの救いだ・・・・・こいつに会えたことが『私』のたった一つの幸福だ・・・・・・お願いだから・・『私』から離れないで・・ずっと一緒にいて・・もうあんな事は嫌だよぉ・・・もう誰にも触られたくない・・おまえ以外の男には、絶対に・・・）

椿視点終わり

影虎視点

一真達と買い物に行った日の帰りに

俺と椿は、スキルアウト達に絡まれたので

スキルアウト共をボコボコにすることにして

暴れていた

このスキルアウト共は、何故か全員が全員、レベル４位の能力者で俺の身体が時々大変なことにも（腕が飛んだり体中が燃え上がったり鉄パイプを体中に刺されたりなどに）なったが『異世界樹（ユグドラシル）』（自己再生）がある俺には、どんな攻撃も意味をなさないので

一人また一人と地面に沈めてる途中に椿の方を見ると

俺は驚くべき光景を見た

基本、魔術師以外には、あまり攻撃しない椿が俺がシバいてボロボロになっている男の手のひらに銃を発砲していた

そして、椿は、「お前らのせいで『私』は、あんな思いしなくちゃいけなくなったんだ！！！！！」

「おれら、まだ何もしてねぇよ～」

男は泣きながらそう言った

確かにこいつらは俺と椿の機嫌を損なわせた意外は何もしていない

しかし、椿は、明らかな殺意を男に向けながら

拳銃の銃口を男の口にねじ込んでいた

男は、涙を流しながら目をつぶっていた

（いくらなんでもやりすぎなんｚ・・・・あいつ、笑ってる？）

俺は、椿から違和感を感じて

とっさに地面を強く蹴って飛び椿を突き飛ばして

椿が地面に落ちそうになったので抱きかかえた

するとバァン

「グゥ！？」

（痛ッ！？・・・・マジで撃ちやがったよ、この馬鹿たれが）

俺は、椿に左下腹部をゼロ距離で打ち抜かれた

「はぁはぁ・・・・なんで撃つんだよ？つば・・き？」

俺は、痛みを我慢しながら椿に喋りかけると

何が起こったのか解らないような顔をしていた

そして、一瞬ビクっとなると大きく開かれた焦点が合ってない目から涙がこぼれ落ちだした

（これは、泣くパターンだな・・・・はぁ～撃たれた俺がピンピンしてて撃った椿が苦しいなんて・・理不尽だなでも、路地裏で男に囲まれるって状況は、椿にとっては、耐え難い状況なんだもんな・・仕方ない）

俺は、椿を出来るだけ優しくそして強く椿を抱きしめてやった

「泣くなよ椿、俺が邪魔したおかげでお前はまだ誰も殺してない♪それに撃たれたときは痛かったけど今はもう回復してるから傷だってないぜ?弾だってもう外に出てるし♪恐かったんだよな?昔の事を思い出しそうになってもの凄く恐かっただけなんだもんな?お前は、俺が守ってやるから昔の嫌なこと思い出さなくて良いよ♪」

急に安心したのか椿は、その場でストンと力が抜け気を失ってしまった

俺は、気を失った椿を背負って家に帰って

椿をお姫様だっこしてそのまま、ベッドに寝かせた

すると

椿が寝ながら俺の服を凄い力で掴んではなさない

「椿、離してくれ、今日は、ちょっと用事があるんだ。ちゃんとお前が起きるまでに帰ってくるからな?〜チュ〜」

俺がそう言い唇に軽くキスをすると

椿は、ゆっくりその手を離してくれた

椿に捕まれた場合、キスすれば離してもらえる

まぁ実際これがかなり恥ずかしい

椿からは、キスくらいならいつでもして良いと言われてはいるが恥ずかしい

まぁ今日はそんなことどうでもいい

今日俺が見てしまった椿の感情は、ふだんの癇癪から来る怒りではなく単純な恐怖から来る怒りみたいだった

たぶん、俺が止めなきゃ・・・今頃あいつは、心にさらに大きな傷を負うところだった

「はぁ～考えていても解決しないな～それよりも・・・さっきのスキルアウト達の脳内情報が少しおかしかったからな～なにかえらいことが起こる前にとっとと終わらせるか・・・レベルアッパー事件をな・・・久々に楽しめそうなゲームだ♪」

俺はそう言いながらマンションの屋上から『異世界樹（ユグドラシル）』の羽根を出し飛び降り

夜の学園都市を飛び回っていた

夏とはいえ夜は少し肌寒いこともあり

椿に掛け布団をかけ忘れたことを後悔していると

俺のちょうど下で

一人のレザースーツを着たやたらとスタイルの良い女がスキルアウト２０人くらいに囲まれていた

（・・・・これって助けるべき?それとも無視するべき・・・・）

俺は、必死に考えた

俺は、人間としては、かなり感情が欠落しているのでこんな簡単なことでも時々悩んでしまう

（・・・・まぁいいや助けよう『孤独な傍観者』解除）

そう決めた俺は、すぐさま『異世界樹(ユグドラシル)』の翼?を消して

結構高い位置から飛び降りて

女の後ろに着地

もちろん足が折れたりもしたが『異世界樹(ユグドラシル)』で一瞬で回復するので

何事もなく着地成功?

俺が上空から飛び降りると

スキルアウト達は、全員驚いて

「なにもんだ?どこからあらわれた!?」

っとボスらしき男が聞いてきたので

「見て解らなかったのか?上からだよ・・・正確に言えば上空２００メートルくらいかな?さぁ～て・・『噛み殺してやろうか?』{ニコ}」

俺は、笑顔でスキルアウト達に聞いたすると

「馬鹿かこいつ？どうやら能力者みて～だが俺達は、全員レベルアッパーを使ってレベル３～４の能力者だ。ちょうど良い野郎共！！能力者への復讐者第一号をたたんじまえ！！」

リーダーの合図でスキルアウトたちが一斉に襲いかかってきた

俺は、後ろでたたずんでいるレザースーツの女に

「何したのかはしらないけど夜にこんな所を彷徨かない方がいい」今日は、運が良かったと思うんだな」

俺はそう言って

一番近くにいたスキルアウトの顔面を鷲掴みにして

壁に叩きつけて鉄パイプで殴りかかってきた男の喉元にパンチをしてノックアウトし

俺の後方１０メートルから火球を2人が放ってきたので俺は、先ノックアウトした男の持っていた鉄パイプを左手に握って

片方の男に投げつけて

飛んでくる火球をスライディングで交わし

スライディングの勢いを利用して飛び上がり男の顔面にファンタジーなパンチを炸裂させた

殴られた男は、ぐるんぐるんと回りながら吹っ飛び後ろにいた5人を巻き込んで地面に倒れた

すると俺の暴れ方が恐かったのか何人かが逃げ出した

「おい、逃げるな戦え!!」

リーダーが何か言っていたがほとんどの奴らは何も聞かずに逃げていって

リーダー一人が残った

残ったリーダーは、震えながらも戦う意志を捨てていなかった

「て、てめぇ、いったい何もんだ?」

っと俺に聞いてくるので

「牙桜」

っと一言だけ答えた

俺がそう言うと

男は、一気にやる気になった

「お前が牙桜かよ、つまりお前を倒せば俺が牙桜じゃねぇか?俺の『電光石火(アクセルブリッツ)』で可愛がってやるぜ」

そう言って男は、高速移動して俺の顔面を殴ってきた

（確かにこいつの動きは早いなパンチの威力は大したことはないが『電光石火（アクセルブリッツ）』か、検索・・開始）

俺は、殴られながらもメモリーキャンセラーの応用技、検索で学園都市のバンクそしてこいつの記憶を調べた

（・・・検索完了・・『電光石火（アクセルブリッツ）』レベル４能力詳細は、一種のベクトル操作で自分と自分に掛かる重力と空気のベクトルを全て前に一瞬だけ変更することが出来るため人間の反射神経では対処できない高速移動が可能・・・優秀な能力だな・・まぁ弱いけど）

男は、未だに高速移動を繰り返し俺の身体にパンチを叩き込んでくる

正直言ってパンチが軽すぎて痛くないのだが

うざいことこのうえない

（うざいうざいうざい・・・全ネットワーク接続さらに脳内ネットワーク強制接続　オールネットワーク昭和区完了これより『樹形図（ツリーダイアグラム）の完成者』の予測作業を開始）

俺は、男の動きを完全に予測（予知）し

高速移動で殴りかかってきた男の顔面にファンタジーな威力のパンチを叩き込んでやった

男は、少しだけ吹っ飛んで地面に転がった

「なかなか良い能力だぜ?でも、あいてが悪すぎるな♪俺に立ち向かったことがお前の敗因だ」

俺はそう言いながら男に近寄っていった

すると男は、まだ力が残っていたのか

鉄パイプを持って

『電光石火(アクセルブリッツ)』で俺に殴りかかってきた

俺は予知していたので再びカウンターをかけるため構えると

俺は予想外の事実を目撃した

本来人間では反応することの出来ない速度で動いている男を

レザースーツを着たエロかっこいい女が横から蹴り飛ばしたのだ

男は、あり得ない速度で吹っ飛んでいって近くの川に墜ちていった

(今の動き、完全に光の速度だぞ?なんだよこいつ・・・あれ?いない?)

俺が当たりを見渡すと

女はそこには居なくなっていた

「あの女、一体何者だったんだ?さっきの動きと蹴りの威力・・・・・めっちゃ強いじゃん、助けて損した・・・まぁいいや気絶してる

こいつら（スキルアウト）を忍の所（病院）にでも運んでレベルアッパーについて調べてもらおう。正直、スキルアウトに調子に乗られるのは、腹が立つ」

俺はそう呟きながらスキルアウト達（5人）を錬金術で作ったコンクリート製のロープで縛り引きずりながら病院に向かった

病院にはいると帰る顔の先生に

「また、えらくたくさん連れてきたね。で、今回も忍君に用かい？」

「まぁね」毎回言うようだが怪我人を縛って連れてくるのは止しなさい」

なぜか怒られたが

「以後気を付けます」

そう言って

忍の診察室に連れていくと

「あら、とら、随分いっぱい連れてきたじゃない♪で、何のよう？おねぇさんとアダルティーな夜を「もう間に合ってるから」ちぇ～椿ちゃんばっかりずるい～椿ちゃんず～る～い～」

忍の奴が駄々をこねだした

（正直にはっきりと言おう『ウザい』と）

「正直と言ってやる「椿ちゃんが・・」『ウザい』と・・・・！

？なに言わせるんだこの野郎！！」

忍が変な相づちを入れてきたせいでとんでもない発言になってしまった

しかも忍の奴は、俺の言葉を録音していて

ケータイの画面には、送信っと書いてあった

そして忍は、ニィっと笑っていた

こいつの必殺技、『弱み握り』だ

こいつはこの方法で大勢の奴隷を手に入れている

だが、相手が悪かったな

俺の能力を舐めるなよ♪

「お前のケータイのデータは全て俺が消したぜ♪」

俺がそう言うと

「え？・・・嘘！？・・あ、本当だ・・こらぁ！！・・とらぁ！！！！」

忍が少しだけキレたようで俺に蹴り掛かってきた

俺はそれを簡単に受け流し

忍にこいつらはレベルアッパーで能力が上がったと言っていたと言うと、忍はそれを聞くと

真面目な顔になり

「あちゃ～またこれ、はやっちゃてるのね～・・・・とら「なに？」あんたの情報操作で学園都市でもう一度、レベルアッパーの使用者狩りをさせなさい、これ以上被害が広がらなくなるし未使用の子たちも迂闊に手が出せなくなるわ」

忍はそう言って俺が捕まえてきた奴らの頭に機械を取り付けて

何かを調べ始めた

するとカエルの先生まではいってきて

二人でスキルアウト達を調べ始めた

そして、カエルの先生に

「影虎君、君はもう帰りなさい、また今度手伝ってもらうとおもうから連絡を待っておいてくれそれに早く帰らないと彼女が悲しむんじゃないのかい？」

そう言われたので

「確かにそろそろ帰らないと寝ぼけたあいつ（椿）が泣き叫んで家が大変なことになりそうなので帰ります。じゃ後はガンバ、カエル先生と変態先生達」

俺はそう言って

病院の窓から『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を出して飛び立ち家に帰って

案の定、俺が居なくて泣いていた椿を泣きやまして一緒に寝た

影虎視点終わり

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・影虎が家に帰るとき

影虎を見ている一人の人間が居た

黒のレザースーツを着ていてチャックをへその辺りまで降ろしている青髪のスタイルの良い美人だった

さっき影虎に助けられた？女性だった

彼女は、学園都市の高層ビルから空を飛んでいる影虎を双眼鏡で眺めていた

そして、

「やっぱり、あの人だよ♪背が凄く高くて髪の毛の色も違うからすぐには解らなかったけどあの凛々しい顔そして、昔から変わらないあの存在感、間違いない。やっと会えた私の初恋の人、でも、私のことは忘れてしまったみたいですね・・いや、私が綺麗になりすぎ

てきっと気づけなかっただけですよね？今は無理ですけど必ず会いに行ってあなたを私の虜にしてみせますよ。待っててくださいね、『エルク』様」

そう言って顔を赤めた少女？美女は、嬉しそうに笑いながら突如光になってその場から消えた

つづく

幻想御手（第二のレベルアッパー事件）（後書き）

以上です

青髪の女については、小説が進んでいくにつれてわかると思います

まぁ一応どこかには登場させてるんですけどね♪

ではまた

事態急変（強さという麻薬（前書き）

本日二回目の投稿です

ではどうぞ

事態急変（強さという麻薬

俺がレベルアッパー使用者をボコった次の日から
学園都市では、レベルアッパー事件の再発が観測され
アンチスキルやジャッジメントたちも本格的に動き始めてはいるのだが
今回の事件は、なかなか簡単に収まりそうにないのだ
以前の犯人の木山春生は、逮捕されていて犯人は、別にいるらしい
以前に使ったレベルアッパーのワクチンは、今回のレベルアッパーには全く効果がないと言う
全く持って迷惑な奴だ
スキルアウトたちがどんどん気絶して眠ってしまうと俺の憂さ晴らしの相手が居なくなる
それすなわち
ストレスがたまる＝イライラする＝我慢強くなくなる＝椿とすぐに喧嘩になる＋α＝下手すれば殺し合い・・・これだけは絶対に無いと言いたいが昔あったから否定できない・・・もう二度とごめんだぞあの雨の日の惨劇は・・
喧嘩を止めろよと言われたことはあるが

俺は、ストレスを溜続けられるほど大人じゃない

だから、夜な夜な偽善を掲げて一応悪と戦っている

まぁいいや

なんだかんだと悩みながら学校の補習を真面目に寝ていた俺は、お昼のチャイムと同時に目を覚まして

土御門と青髪ピアスと何故か殴り合っている当麻に話しかけた

「当麻、飯行こうぜ？それと何故に殴り合って居るんですか？あなたたちは？」

「おおよくぞ聞いてくれたにゃ～事の始まりはピアスの・・・

なるほどね

自分が小さいときから好きだった女の子がいて小さいころはその子の方が背が高く大人っぽかったけど年を重ねるに連れて自分の方が圧倒的に背が高くなり大人っぽくなってしまった

しかし、彼女は、昔のままで年的に言えばその容姿は、ロリ属性に含まれる

しかし、自分はその子に恋心を抱いている。さて、自分が抱いた感情は、ロリコンとしての愛なのか純粋に愛なのか?か・・・・・・・・・何だこの俺に対して直球ストレートは、俺も去年この疑問がぽっかり浮かんできて悩みに悩んだ

だからこそ言わせてもらおう

バン

俺は机を片手でたたいて

「それは純粋な愛情以外の何者でもないこれは、上官が定めた絶対の定義だ!!以上!!質問は受け付けない。当麻飯食いに行くぞ」

と言って当麻を呼ぶと

「はい、{ビシ}上官殿!!」

当麻は、俺に敬礼してそう言ってきた

どうやら俺の一言で終止符が打たれたらしく
謎の戦いは終わった
この後、一真と当麻と昼飯を食ったのだが
今回は珍しく天野は来ていなくて
一真は、何故か元気がなく
「天野はどうした？」
と俺が聞くと
「さぁ告白でもされてるんじゃね？」
っと本日２０回目の返答をしてくる
すると
当麻が小さな声で
「一真は、いったんこうなると何を言っても適当な返事しか来ないからそっとしておいた方がいいぞ」
と言ってきたので
「あなたは、天野さんとキスしたことはありますか？」
と遊びで聞いてみると

一真は、

「さぁあるんじゃない？」

っと適当に返事してきた

俺と当麻は、腹を抱えながら必死に笑いをこらえていた

その後も愉快な質問を繰り返して当麻と俺のケータイでムービーを撮って『証拠映像』を撮っていた

そして、愉快？な昼食は終わり

この日は特に何も無く

普通に喧嘩してレベルアッパー使用者を忍ぶの所に連れていき

普通に家に帰って

椿とはなしたり

一緒に寝た（やらしい意味は・・・・・ご想像にお任せだ）

など、

ただ次の日、椿は機嫌が良かった

そして、この日も特に何もなかった

ただ、いつも道理、レベルアッパーでレベルの上がった能力者達２０名を叩きのめし

病院のベッドを次々に使用不可にしただけだ

だだ、変わったことと言えば一真と天野が学校に来ておらず

俺が病院に行ったとき

忍から天野が入院していて

その原因がレベルアッパーだという事を聞いた意外は、普通だった

このことを椿に話すと

「負導の前では、知らないふりをしてやれ」

っと言われた

次の日、俺は珍しく椿と一緒に登校し補習を今日は、真面目に受けた

小萌先生に、

「あいかわらず小さくてちんちくりんでいつまでも子供っぽくて若々しいすね。」

と言ったら

小萌先生に泣かれた

すると

青髪と当麻と何故かマジギレの椿にしばかれた

「「小萌え先生を泣かせるとは、地獄に堕ちろ影虎（とらやん）」」

ゲシゲシ↑蹴っている音

「あんな小さな子を泣かせるなんて最低な奴だ、地獄に堕ちろ」

ドガドガ

俺は蹴られながらずっと思っていた

椿だけもっと小萌先生泣かせてる。と

そして、なかなか楽しい補習を終え昼休みになったので

一真を迎えに行くと寝ていたのでとりあえず揺すってみた

すると

「天野弱…？」

一真は、どうやら天野に起こされていると勘違いしているようだ

「一真！！起きろ！！

お昼だぞ…。」

「当麻か…。」

一真は、起きると俺達を見て酔うやくめがさめたようだ

「早くしてくれ…。
腹が減ってるんだ…。」

椿が横からそう言った

「あぁ、悪い、悪い…。」
椿の言葉で一真は急いで用意して、俺達は、屋上に向かうことにし。

「やっぱり、一真の弁当はうめぇな！！
影虎、お前のも少しくれよ。」

「ん？構わんぞ…。」

「俺にもよこせ…。」

「一真…。
俺にも弁当分けてくれ…。」

椿がそう言うと

「たく～、仕方ねぇな…天野弱は…。
ハッ！！」

「「「ッ！？」」」

椿のことをどうやら天野と勘違いしたらしく俺達は、全員固まってしまった

「…悪い…少し、一人にさせてくれ…。」

「あっ!?一真…!!」

一真が立ち上がると、当麻も止めようとしたが、椿に止められていた。

そして、今日一日は、一真と一度も話さなかった

正確には、一真に話そうとするといつも椿に止められるからだ

そして、この日も俺は、椿と家に帰ってから

レベルアッパー使用者狩りをするために空を飛んでいると

病院から少し離れた場所で

いきなり大きな光と爆発が起こった

「なんだ?また能力者が暴れてるのか?」

俺はその場所にすぐに向かうことにした

そこで俺は驚くべき光景を見た

爆発の煙の真ん中で一真がボロボロの状態で倒れていたのだ

俺はすぐに駆け寄って

「おい、一真、大丈夫か?何があった」

と聞きながら揺すってみたが一真は眠ったままで

起きない

俺は、急に視線を感じたので

当たりを見渡してみた

すると

遥か遠くから

氷、炎、電気と他の何かで出来たような大きな球体が飛んできた

(なんだ?なんか変なのが飛んできたな・・・まぁいいや当たっても死なないし・・・あ!?一真がいるからそうは行かないか・・・よし、ぶっこわそう)

「うぉらぁあああああああああああああ」

ガァン・・・・ピキピキpキ・・バァアアアン

俺は、謎の球体をとりあえず全力で殴ってみた

すると当麻のようには上手く行かないが何とか力ずくで球体を破壊

することが出来た

右手はやけどするは、骨は折れるは、筋肉は、断罪するは、体中に電気が走って服はあちこちはぜるは、で散々だったが何とか後ろの一真には被害が行かなかったので一応結果オーライ

この後、俺はすぐに一真を担いで『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を展開して

カエルの先生と変態の変人がいる病院に運んだ

途中、病院の窓から入院している女の子に見られて

「天使さんだ！！」

っと騒がれたりもしたが

記憶消去で事態を解決して

カエルの先生と忍に見せた。するとカエルの先生が

「いつかは、やるんじゃないかとおもってはいたがまさかここまでボロボロにする必要があったのかい？」

そして忍が

「え～一真君までレベルアッパーを使ってたの？でも、連れてくるのにここまでやらなくても良いんじゃない？とら？」

・・・・・何か勘違いされてるような気がする

「あのさ～一真をボロボロにしたのは俺じゃないよ?ついでに言うと一真を死の危機から救ったの俺ね?ＯＫ?・・・・｛ジー｝・・・・・あ～、もういい久々に俺が先生になる」

俺が慌てながら弁解しても二人の疑りの目は止まらずむしろ強まってすらあった

そして、その視線に耐えられなくなった俺は、

走って病院の先生達が着替える場所に行って

桜小路と書かれたロッカーを開けその中に今まで着ていた緑色のコートを脱いでロッカーに入っている

白衣と桜小路　影虎と書かれた身分証明のカードを首に掛け

髪型も少し変えて再び忍とカエルの先生の元に走った

そして、

「はぁはぁもうこの患者は俺が診るから散れカエルに変態」

俺がそう言うと

二人は、「「頼みますよ（わね♪）。桜小路『先生』」」

と言って二人は、レベルアッパーの治療に戻った

俺は、診察室にいた看護師２人に

「神出鬼没の謎の医師ですがご協力お願いします。」

俺は、にっこり笑いながらそう言うと

看護士の2人は、何故か顔を赤くして一真の治療を手伝ってくれた

正直言って一真の傷は、凍傷に大火傷に体中に強力な電気のとおった後があったので感電に大きな物とぶつかったのか身体のあちこちに青胆があって骨も何本か折れてた

正直、ここの病院じゃなけりゃ間違いなく死んでたな

そして、一真を治療した後、他の患者達を『異世界樹（ユグドラシル）』を使って少しずつ直したりしていた

なぜか、女性や女の子を治療しているときにみんな顔を赤くしていていつのまにか俺の後ろにたくさんの看護士たちが居てびっくりした

「あの皆さんお仕事はよろしいんですか？」

っと俺がそう言うと

女性看護士の皆さん（２０人）は

「「「「お気になさらず」」」」

っと言ってきた

（いや、気にするでしょう？仕事してくれよ。他の患者が大変だろ

うがよ・・・・はぁ～）

俺が心の中でため息をついていると

プルルル・・・プルルル

こっそりポケットに入れていた携帯がなりだした

（あ、やば・・トイレに行こう）

俺は走ってトイレに行きトイレのドアを閉めて

ケータイを取り出して電話に出た

「はい、もしも『何ですぐ出ないんだよ!?』あの申しわけありません」

案の定椿からだった

「で、何のよう?」

『もう晩飯作って待っているんだよ?』

あれ?椿さんのしゃべり方が少し乙女っぽかったような気がする・・

もう一度よ～く聞いてみよう

「今なんて言いました?」

『だ～か～ら、ご飯作ったから早く帰ってきてね♪って言いました』

あれれ?やっぱり椿のしゃべり方が全て乙女っちくにきこえる?・・・・

「そのもう一度だけ言ってもらえませんか?」

これで最後だ

『もう~影は、そんなに『私』の声が聞きたいのかな?だったら仕方ないね。もう一度だけ言うね。晩御飯を作ったから早く帰ってきてね♪帰ってこないと泣いちゃうぞ?って言ったんだよ♪理解できた?』

声は可愛い事だけは理解できたよ・・・・ただ、何で女口調、絶好調連載中状態なの?

考えろ考えるんだ・・・・俺は学園都市でたった一人の絶対能力者だ・・俺に不可能はない・・・・!!

解った解ったぞ・・・・俺の使っている携帯に音声を自然に乙女チックに変える新機能があるんだ

何だそんな簡単なことか悩んで存したぜまったく・・・・・・・・

・・・・・・・・・・俺って今世紀稀に見る馬鹿野郎だ

でも、椿が女口調な理由がわからない

また、忍が酒のませた？

忍は、今病院にいるので無理

椿がデレた？

別にあいつはツンデレじゃないからデレる必要もない

自分で酒を飲んだ？

いや、あいつ酒の味は好きだけどアルコールには弱いのは知ってるから自分では飲まないだろ？

あれ？本格的に解らない

なんで？何か怒ってるの？それとも頭ぶつけた？・・・・・・

「椿、大丈夫か？何か悪い物でも食った？それとも怪我でもして病院に運ばれたのか？いや、病院にきたんなら俺が気付かないはずはないな」

『何一人でしゃべってんの？『私』の話しちゃんと聞いてる～？』

「あの椿さん『なに？』ちなみに今日の献立は？」

俺の推理が正しければ・・・・シチューだ

『今日は、白ワインを入れたシチューだよ？なんで？』

これで確信した

「椿、お前またワインのアルコールを飛ばさないでそのまま入れただろしかも味見をしてよぱっらってるんだろ？」

俺がそう言うと

『正解正解大正解！！現在『私』は、酔っぱらっておりますです。はい』

（だからあれほど酒を使った料理は慎重にって言ったのに俺今家に帰ると酔っぱらいの相手しなきゃ行けないのか？・・・当麻の台詞を借りて・・不幸だ）

『あ～先に言って置くけど帰ってこなかったりしたら家に入れないし影の部屋を手当たり次第に散らかすから♪』ブチッ

プープープー

・・・・・・・・・・退路は断たれた

おれにのこされた道はただ一つ

「帰ろう、別に卑しい物が部屋にあるわけじゃないけど俺の部屋って資料やらパソコンやらスパコン正直言って散らかされると『異世界樹（ユグドラシル）』を無駄使いしても片づけるのに3日は掛かるからな～・・・・まぁ一真もすぐ治るだろうし伊達に『早期完治（クイックリカバリー）』と医療関係者から呼ばれていないぜ♪今日は、大人しく家に帰って酔っぱらいの愚痴でも聞きながら一杯やりますか♪」

俺はそう言いながら病院を出た

とちゅう看護士さん達から「さっきの電話彼女からですか？」と聞かれたので

「そうですよ」

っと言うと

何故かみんなげんなりし出した

俺は、どうして良いのか解らず悩んでいると

コーヒーを飲んであるいてきた

忍が

「皆さん頑張ってください。私は、働いている皆さんが好きですよ」

っと言えと言われたので実行すると

皆さん一気にやる気になって仕事をバリバリこなしていた

俺は忍に何故？と聞くと

「とら、あんた、自分がどれだけいい男なのか自覚無いの？」

っと言われた

はて、何の事やら

などと色々あったが俺は、現在家の玄関の前にいる
そう俺は、家に入る前に心の準備という奴をしているのだ
（ここでウジウジしていても仕方ない）
おれはそう思い一気にドアを開けると
玄関で椿さんが倒れていました
胸に何か抱いていて俺はそれをよーく見ると
剣菱と書かれた空っぽの酒瓶を抱えて寝ていた
全身の血の気が引いた
（このばか、酔った勢いで俺の部屋にあった焼酎飲み干しやがった）
俺はすぐに椿を揺すってみた
しかし、すぅすぅ規則正しい寝息を欠いているだけで全く反応無し
とりあえず俺は、水を飲ませるためキッチンに向かうと
驚きの光景を見た
台所に隠してあった俺のウィスキーなどが飲まれていたのだ
てか、椿の奴、酔っぱらうだけで酒には強いんじゃないのか？と思ったりもした

その後、椿に水を飲ませて

少しの愛だ待っては見たが泥酔しているため１０時間は、地球が太陽に飲み込まれても起きないので

いつもどうりベッドで寝かせた

いつもなら俺の服が掴まれるのだが今回は、酒瓶をしっかり手と脚と胸で抱きかかえていて離さなかった

（・・・・椿って絶対に酒とは共存できないよな?いろんないみで）

この後、俺は、椿作のアルコール濃度６０のシチューという名の酒を飲んで寝た

（正直言って・・・まず、予想外に上手かった!?）

つづく

事態急変（強さという麻薬（後書き）

以上です

また投稿する可能性もあります

ではまた

本末転倒（宮方（みやかた）　恋花（れんか））（前書き）

今回は、ちょっと遅くなりました

では、どうぞ

本末転倒（宮方（みやかた）　恋花（れんか））

あの椿が酔っぱらった次の日

目を覚ました俺は、横に椿が居ないのを見て

探そうとしたがテーブルに書き置きがあり

『またいつもように用事で出かける。3日くらいは、帰らない。飯は、一応作っておいたが足りなかったら出前でもとってくれ椿より』

っと書かれていて

テーブルには、１０万円が置いてあった

（・・・・いつもこの金は、何処から出てるんだ?この間、椿に洒落で１００万円貸してくださいって言ったらポンと出されてびびったのを覚えてる・・・まぁおれも結構実は稼いでるけど全部バイクだのパソコンだの飯だのにつかっちまうから貯金できないんだよね～・・・・・そういえば俺達一体何の金で生活してたんだっけ?）

などと考えながらも

いつも道理、学校にバイクで通って

教室にいた

土御門や青髪ピアスや当麻に昨日一真が大怪我していて俺がそれを

見つけて病院に運び一真は、入院中と伝えた

そして、明日、当麻がお見舞いに行くと言うことが決まった

この日は、もの凄く暇だったので

当麻と禁書目録と飯を食いに行くことにした

最初は何処でも良かったのだが当麻から

「行くんならぜったいに食べ放題にしてください」っと土下座して頼まれたので

この日はバイキングに行くことにした

そして、後ろの方で呆然と立ちつくしてる当麻をほったらかして

俺と禁書目録は、

どっちが多く食べられるかを競っていた

俺の方が体が大きいので

もちろんハンデは有りだ

俺は食べる前に水やジュースを5リットル飲んでから食べ始めた

この死闘は、なかなか勝負がつかなかった

俺もインデックスも食べ続けている物の全然腹が膨れないので

周りの客の視線を無視して

泣きながら謝る店長を放置して

料理を食べ尽くした

しかし、禁書目録の方もダウンにはまだ早いと言わんばかりにデザートを食べていた

俺は、『今の状態では』甘い物はそれほど好きではないため

大人しく負けを認めた

そして、店を出た後、当麻と一真の話をしていた

「一真の奴、絶対に誰かにやられた傷だった」

「マジか？つまり一真をやった奴は、相当な実力者って事になるぞ！！あいつは、ただの喧嘩でも能力者との喧嘩でも勝ってきたのに・・・・」

当麻が驚いた後、信じられないと言いながら俯いた

「相手は、間違いなくじゅちゅうはっく能力者だ、それもかなりの凄腕のな・・・まぁ凄腕だろうが素人だろうが俺の相手にならないことには変わりないから俺がとっとと半殺しにでもして来ますかね〜ガシッ〜？」

俺が少し早歩きで行こうとしたら

当麻が右腕で俺の肩を掴んで

「この戦い・・・・・一真にけりを付けさせてやってくんねぇか？」

と真面目で真っ直ぐな眼差しで俺に言った

「でも、俺が行けば誰も怪我しないで済むぜ？ちなみに言うとこれは比喩表現じゃないから♪」

俺がそう言っても当麻は俺の肩から手を離さなかった

（当麻は何がしたいのか解らない・・いつもなら椿にでも聞くんだけど・・今居ないしな～・・・）

「ハァ～合理的じゃないのは嫌いなんだけどな～・・・・なら、一真に美味しいところをやるか♪」

俺がそう言うと

当麻は、フッと笑い

俺の肩から手を離し

「サンキュー」

そう言って俺達は、手でタッチして家に帰った

そして、次の日

俺は、医者として当麻は、お見舞いで
学校をサボり
一真の病室に行った
病院に行くと
忍が待っており
「あら、当麻君お☆ひ☆さ☆し☆ぶ☆り☆ね♪私のこと覚えてる？」
っと何故か胸の谷間を見せ誘惑するように言っていた
そして、
「お、お久しぶりです。はい」
っと顔を真っ赤にして頭を下げていた
「当麻だまされるなこいつは、どう考えても４０代入ってるはずだ」
っと俺が当麻に冷静さを取り戻させる発言をすると
忍が少しムッとして俺に近づき
俺の耳を引っ張りながら
いつもとは違う目つきをして

「いいか?私はまだ29なんだよボケ!!、つまんないこと言ってと食い散らかすぞ!?わかったか?あん?返事はどうしたんだ?」

ともの凄く恐い顔で胸ぐらを掴まれて怒られた

俺も一瞬ビビってしまった

「す、すいません、アハハハハ」

俺は、両手を上に上げ明らかな降伏のポーズを取って

謝ったすると

「今度余計なこと言ったら生物学的にも社会的にも殺すOK?」

俺は、こいつと争っても良かったのだが

(めんどくさいのでここは絶対降伏だ)

俺は、この後、2分くらいヤンキー時台に戻った忍の相手をしてから

一真の病室に向かった

正直言って忍とバトっても良かったのだが場所が病院でしかも忍は、俺は能力有りでも忍は、簡単には倒せないから戦うわけには行かない

そして、俺は、当麻にちょっと外で待って入れくれと頼むと病室にはいった。一真はまだ眠っていたので俺は、当麻に聞こえないように『異世界樹(ユグドラシル)』をこっそり発動して一真のびょうじょうをいっきに

よくすると

「う～ん…。
ここは…？」

一真が目を覚ました

「気がついたか…？」

しらじらしいのはじぶんでもわかるのだが一応驚いてみた

「影虎…？
ハッ！！
ッ！？
イッテェェ…！！」

『異世界樹（ユグドラシル）』を使ったとはいえ傷は完治していないので激痛に顔を歪ませていた

「無理をするな…。
ただでさえやばかったんだぞ…。」

っと一応俺も医師なので警告

「ハァ…、ハァ…。
あぁ…。」

納得したみたいに言うが俺から見れば不満があると言わんばかりの顔だ

「何があったんだ…？」

「…。」

俺が聞くと一真は黙り込み

「只の喧嘩だ…、気にするな…。」

っと笑いながら言ってきた

俺はチラッと一真の手をみて一真の顔を見ると、ため息を吐いた…。

「嘘をつくな…。
本当は何があったんだ…？」

「なッ！？」

何故バレた！？見たいな顔をしている一真

「嘘じゃねぇよ…。
この傷見て何処が嘘だって言うんだ…。」

・・・俺がお前の治療をしたのでその程度に治まっているだけで
本当はもっと酷い怪我だったんだけどな・・

「喧嘩だろうな…。
でも、『ただの』って言葉は嘘だろ…？」

「ッ！？」

「図星だったみたいだな…。」

俺はお前の病状を全部知っているしお前の『癖』を椿から聞いたので嘘は意味をなさない

「何で嘘ってわかったんだ…？」

「お前の癖だよ…。」

俺はそう言った

「えっ！？」

一真は信じられないと言わんばかりに悩んでいたので

「天野弱から聞いたよ…。
お前は嘘をつくときに左手の親指で人差し指と中指を擦るって言う癖がな…。」

「ッ！？」

一真は、もの凄く驚いていた

「…笑えるよ…本当…。
まさか、同じ癖だったなんてな…。」

そして、俯きながら少し悲しそうな声でそう言った

「…。
何で、嘘をつくんだ…。

俺の事がまだ、信用出来ねぇか？」

出来れば信用してもらいたい俺はお前のことを信用しているんだから・・・・

「迷惑を掛けたくねぇし、失いたく無いんだよ…。」

「…ハァ…。」

俺は、思わずため息をついて

「あのな…、それはこっちだって同じだ…。
迷惑を掛けたくねぇし、失いたく無いんだよ…俺も、多分当麻だって思ってるよ…。
でもな…、仲間ならもっと頼れ…。
こんな状況だからこそ、仲間を頼れ…。
いいな…？」

それに俺は、俺の前でもう人が死ぬところや死にかけるところを見たくない『あの時みたいに』・・・だから俺は、倒すためじゃなく守るために『異世界樹（ユグドラシル）』を作り上げたんだ

「…。」

一真は黙ったままコクりと頷いた…。

「さてと、もう入ってきて良いぞ！！当麻！！」

俺は、早野前で待っていてもらった当麻をよんだ

一真は、間抜けな顔をしていたがあえて無視して置いてあげるのが友情だと思う

「へ？」

「…よう…。」

俺が扉の向こうに呼び掛けると、ガラッと扉が開いて当麻が扉の向こうから現れた…。

「一応聞くが…。
どこから、どこまで聞いていた…。」

「え～と…、目を覚ました辺りから今まで…。」

一真が聞くと当麻が答えた

「それより一真、話せ。
何があったのかを。
全部。」

当麻は目付きを変えて尋ねていた。
一真は、決心したように先程の出来事を話した…。
宮方恋花と言う女が現れた事…。
そいつが幻想御手（レベルアッパー）の主犯者である事…。
一真が聞いた宮方恋花の目的…。
どんな能力か…。

「多重能力（デュアルスキル）か…。

厄介だな…。」

珍しい能力だ。しかし・・・・

「まぁ、俺からしたらどうでも良いが、かなりムカつくから顔面の一発じゃあ気が済まねぇだろうな…。」

「ただ、目的も狂ってやがる…。」

確かに当麻の言う通り狂ってる。
人の負の感情が見たい？
イカれてんじゃねぇのか？と一真は言いたいようだが

俺には、その気持ちが少なからず分かる大きすぎる力を持ってしまったとき人は、化け物になる

その思考は、化け物の思考だ

弱者を虐げたくて仕方がない

苦痛に歪む顔がみたい

あの時の俺のような思考だ

『幻想掌握』を椿に向かって使ったときのような感情だ

同じ化け物同士なら俺がトドメを刺したい・・・・・・・

（思い出すな俺、あの感情は思い出しちゃいけない、そして二度と・・・・・『影千代』にだけはなりたくない・・・）

俺が昔のことを思い出して拳を握りしめていると

「天野弱はまだ気絶してるのか…？」

一真がそう聞いてきた

俺も当麻も答えることが出来なかった

でも、希望があることは伝えてやろうかな？さっき忍から聞いた『人物』の話を

「だが、心配するな…。
かなりの助っ人が来てくれたから。」

あ！？先に言われた

「助っ人？」

一真は、当麻の発言には理解できずに首を傾げたようだ。
助っ人って誰？みたいな顔をしていた

「木山春生（きやまはるみ）…、過去に幻想御手（レベルアッパー）事件の主犯者だ…。」

「ッ！？」

それを聞いて一真は驚いていた。

「って事は…！！」

「あぁ…！！今、解析をしてくれている！！
二時間ぐらいで終わるらしい！！
もしかしたら天野は助かるかも知れん！！」

その言葉を聞いてから一真の目に再び希望の光が宿ったような気がした。

……

……

……

「ん？」

俺は、一真と当麻と喋っていると一人の白衣を着て、髪がボサボサの目の下には酷いクマが出来た女性が入ってきた。

「影虎、誰だ？この人？」

一真が聞いてきたので答えてやった

「ん？そうだったな…。
一真は知らなかったな…。
この人がさっき言った木山先生だ。」

「木山　春生だ…。
よろしく…。」

木山先生は、一真に挨拶していた

「あ、あぁ…。」

リアクションが曖昧だぞ一真。

「俺は…「負導　一真君だったね…。
話は忍先生から聞いているよ…。」えっ！？」

「木山さん…。
幻想御手（レベルアッパー）の解析は出来たのか！？」

一真は、必死に聞いていたが…。

「解析は出来たが、君の望むワクチンを作る為には、足りない物がある…。」

「ワクチン…？」

「あぁ…、君の大事な人を幻想御手（レベルアッパー）による眠りから覚ますワクチンのことだが…残念ながら今は作れないと言っているんだ…。」

「ッ！？」

木山の言葉を聞いた一真は

下唇を噛んで涙を流してシーツを濡らしていた。

「一真！！絶望するのは早いぞ！！」

当麻が、一真に向かって叫んでいた。

「そ、そうだったな…！！
木山さん！！足りない物ってなんだ！？」

一真がもの凄く焦っていた

「それを聞いて君はどうする気だ…？」

「もちろん今から取りに行くに決まってるだろ！！」

「そんな傷だらけの体で命を投げ捨ててもか…？」

「あたりめぇだ！！」

一真の顔が輝いていた

覚悟を決めたんだな・・・

俺がそう考えていると

忍から

「とら、一応椿ちゃんからあんたの使用許可とったから記憶消去応用編、検索で犯人を捜しなさい」

っと言われたので

頭を抑えて

全神経を集中して

（『異世界樹（ユグドラシル）』第３機能、接続開始、脳波の繋がりからメインブレインを検索開始・・・

よし！！そうと決まればとっとと行って捕獲するぞ…。
影虎、案内を頼む！！」

「了解…。」

俺と一真とは拳同士を合わせて笑いあっていた。

「俺もいることを忘れんなよ…。」

そこに、当麻の拳が合わさり当麻を見ると照れ臭かったのか顔を赤くしていた。

準備は整ったこの作戦で重要なのは、当麻の幻想殺しだ。これなら出来るだけ被害がないように終わらせられる

「さてと、行くか…。」

「カズく～ん♪」

「ん？って、えっ！？」

俺達は病室から出て行こうとすると、一真が忍から呼ばれたので振り替えってみると同時に姿を消して一真の目の前で現れた。

「おねぇさんからのプレゼントよ♪」

・・・あぁ！スケルトンの能力で不意打ちでもしろってことか・・・・

「この能力の事ですか…？」

「うん♪とらから聞いたわよ♪カズくんの能力♪透明人間（スケルトン）レベル３♪でも、カズくんならレベル４で３０分間だけなら扱えるでしょ？」

「あ、あぁ…。」

「カズくんが、帰ってきた時には多分３０分以上過ぎてると思うから、ちゃんと任務をこなして帰ってきたらご褒美として、この能力をもう一度使って覚えさせてあげるわ♪」

「えっ！？」

一真は明らかにいらないという顔をしていた

「今いらないとか思ったでしょう？」

忍がそう言うと一真は図星だったようだ

ただ俺から言えば、透明人間（スケルトン）の能力は、魅力的だ

使い勝手が良い能力だからな

「いや、思ってないよ…。
楽しみにしとく…。」

（一真の奴、左手の親指で人差し指と中指を擦ってるぞ！？思いっきり大嘘ついてるよ・・・・）

「うん♪
あと、勝ったら祝勝会あげるから絶対勝つのよ♪」

「ほどほどに頼むぜ…。」

俺は頭を抱えてぼやいた。

「じゃあ、行くぞ…。」

「おう…。」

「うん。」

「「「行ってきます！！」」」

俺達はそう言って病院を出た

俺は、犯人に向かう途中一真にこっそり『異世界樹（ユグドラシル）』の治療をかけていたが

この短時間で一体何処まで処置できるのかな～？

つづく

本末転倒（宮方（みやかた）　恋花（れんか））（後書き）

以上です

このレベルアッパーは一真君が主役なので影虎は裏方ですね

幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）（前書き）

今回はこれでレベルアッパー事件終わりです

ではどうぞ

忍視点

送り出したのはいいけどかなり不安だわ…。
あれから４０分近くたつけど大丈夫かな？

「ん？これは…。」

「どうしたんですか？
木山先生？」

幻想御手（レベルアッパー）のプログラムを見直していた木山先生が何かを発見したように声をあげて、プログラムに目を通していた。
何があったのかしら？

「これは、ちょっと不味い事になったな…。」

「えっ！？」

木山先生はコーヒーを飲みながら呟いたので私は驚いた。

「一体何があったのですか！？」

「プログラムで少し見落としをしてしまっていたようだ…。
幻想御手（レベルアッパー）とはそもそも、共感覚性を利用して相手の脳波に干渉し、複数の脳を組み合わせて大きな一つの脳状のネットワークを構成して高度な演算が可能な演算装置を作るプログラムなのだが…。
しかし、こんな無茶苦茶な幻想御手（レベルアッパー）のプログラム構成では、主犯者

にもし強大な一撃が加わると、脳波が乱れてネットワークが暴走を起こしかねない…。
このままでは、最悪の事態になるな…。」

木山先生が幻想御手（レベルアッパー）について、詳しく教えてくれた…。

「それって…。」

「あぁ…。
一刻も早くあの子達に伝えなければワクチンプログラムの完成どころか、大変な事態になるだろう…。」

「私、急いで伝えてきます。」私は、車の鍵を持ってとら達の元に向かおうとした。
しかし…。

「いや、私が行く…。
これは、私のミスだ…。
忍先生は、一応患者の様態を見ていてくれ…。」

「わかりました。
お気をつけて。
あと、これを!?」

木山先生が行くと言って止められた。
私は仕方なく言うことを聞いて木山先生に携帯を投げ渡し、木山先生は携帯を開いて中身を見ていた。

「これは?」

「GPS機能です。
これなら、すぐに見つけられるでしょう♪」

私がそう言うと、木山先生は笑っていた。

「ありがとう…。
それでは行ってくる…。」

木山先生にお礼を言われて私は木山先生の背中を見送った…。

「はぁ…。
……。」

そのあと、近くのベッドで寝ているカズ君と一緒にいた女の子、葵ちゃんを見た。
私のお気に入りだから一緒の部屋にしてるの♪
小さくて可愛いし♪
でも、カズくんは何でこの子の事「天の邪鬼」って呼ぶのかしら?
天野って名字だから?
それで極度のツンデレとか?
それはそれで可愛いわね♪

『そうですか…。こいつの事お願いします…。』

『『『行ってきます!!』』』

「…。」

私はあの堕落して目に光が宿っていなかったカズくんと今のカズくんを思い出して比べていた。

全く…。
あんなに堕落して、生気なんか感じなかったのに今は行ってきますか…。

「あなた、かなり愛されてるのね♪
カズくんの方が天の邪鬼じゃないかな♪
嫉妬しちゃうな♪」

私は葵ちゃんの頭を撫でながら言っていた。

でも、よくよく考えたら影虎が居る時点で解決したみたいなものね♪
あいつの前で死ぬことは誰も許されないから大丈夫ね♪

忍視点終わり……

……

「よぅ、『宮方』…。」

一真が今回のレベルアッパー事件の当事者、宮方恋花に声をかけた

俺達は俺の案内の元ある河原に来ていた。

「ん？君か♪あれ？随分と仲間が増えたみたいだけどどうしたの？
まさか僕を♪倒しに来たとか言わねぇよな…。」

宮方がそう俺達にいや特に一真にそう言ってきた

「その前に一つ頼みがある…。」

一真がそう言うと

「なぁに?♪」

宮方は笑顔で言ってきたが、張り付けた嘘の笑顔だ。だって俺の偽物の笑顔と同じか押してるんだもんな

「大人しく、俺達と一緒に来る気はねぇか?」

「どこに?♪」

「病院だ…。」

「キャハハハハハ…!!
何処かと思えばそんなところか♪
アハ、アハハハハハ…!!」

宮方は狂ったように笑い出した。

まぁ当然と言えば当然か・・・・・それにしてもこいつなんかむかつくこれが同族嫌悪って奴か?

「嫌だよ…。
誰がテメェなんかの言うことをなんか聞くか…。」

ドスの効いた声で言ってきた。
すると、一真は、急に振り返って

「影虎、当麻…。

あいつは、俺一人で殺らせてくれないか？」

「「なッ！？」」

俺と当麻は驚いた

だって、とうまの予想道理だった事に加えて俺は、『殺る』の？と心の中でしょうもないことを考えていたからだ

「あいつはさ、天野弱をあんな風に合わせたし、俺の罪滅ぼしでもあるんだ…。
だから一人で殺らせてくれないか…。」

一真の心意気は解るがあいつの怪我の具合からして・・・・・・

「「１０分だけならいいぞ…！！」」

当麻と俺は顔を上げて一真にそう言った

「あぁ、わかった…。
感謝する…。」

一真はそう言い宮方の方を向いた

「さてと…、待たせたな…、宮方。」

「全くだよ♪どれだけ殺してやろうと思ったか…。」

俺が見た限り宮方って奴のギアは、マックスに入りかけてるな・・・

「もう一度聞くが、大人しく来る気は無いんだな…。」

「君は性懲りも無くおもしろい事を聞くね～♪
無いって言ってるだろうが…。」

「ッ！？」

いきなり火球を放っていたが、一真の横を通りすぎていった。

「次は当てるよ♪」

「…バトルスタートって訳か…。
上等だ…。」

遂に始まったな・・疑似化け物対強者の戦いが

「オリャア♪」

「チッ…。」

宮方が火球を放っていたので、一真も火球を放ってぶつけると二人の前で爆発が起きた。

「ウグッ…！！」

一真は少しダメージを負っていたように見えた

「へぇ～…。
火球も放てるんだ…♪
やっぱり君はおもしろい♪

でも…。」

「クッ…。」

また、喋りながら宮方は火球を放ち一真も対抗すると、先ほどと同じく爆発が起きる。

「これは、避けれないだろ…？」

「ッ！？グハッ！！」

宮方は、一真の後ろに走って脇腹を蹴っていた。

「これでおしまい♪」

宮方はまた、一真の目の前に現れて顔面を蹴りあげようと足を振りかぶっていた。

「ん？」

宮方は何かに気づいたのか自分の袖を見た。

「ウワッ！？アチッ！！アチッ！！」

宮方の服の袖には燃えていて走り回っていた。

（ひゅ～♪パイロキネシスの応用、自然発火（座標攻撃）を使ったな？一真もなかなかやるジャン）

「瞬間移動（テレポート）まであるとはな…。

驚いたな…。」

一真は、宮方が走り回っている隙に立ち上がった。

「何故だろうちょこっと宮方が可哀想に思えてきた」

俺の横で当麻がそう言った

「どういう意味だ?そりゃたしかに服を燃やされて走り回っている姿は、なかなか滑稽だけどさ?」

「違うんだ、あの宮方って奴は、何であんなに楽しそうに能力を使ってるんだろうっておもってな・・・能力があることがまるで幸せみたいな顔してる・・あいつも俺と同じレベル０の無能力者で俺達みたいに・・・・いいや、少なくとも俺よりは、惨めな思いしてきたんじゃないのかな?あいつもこの学園都市という街での能力者と無能力者の格差の被害者なのかもな。だからこそ努力して間違った力を手に入れてしまった・・」

当麻は、自分の右手に拳を作りそれを見てそう言っていた

「俺には良くわからないけど他人を犠牲にしてまで力を手に入れてもそれは、必ず自分を滅ぼす。だからこそそんなくだらない能力（幻想）は、早いうちに喰い殺してやった方がいい（昔の俺のようになってからじゃ手遅れになる）」

俺がそう言うと

「・・・だな、宮方の作り出した悲しい幻想（希望）を俺達でキチンとブッ壊してやらね～とな?」

「あぁただ壊すのも喰い殺すのも今回は、一真の仕事だ・・・・・お！？もうすぐ決着が付くかな（勝って見せろ一真、そいつの悲しい幻想をお前が否定してやれ！！）」

……

……

……

「まぁ、良い…。
跡形も無く消えてしまえェェエ！！」

すると、宮方は手を前に翳して、風、氷、炎、電気、土の球体を作って一真に放った。

「…。」

しかし、一真は動こうとはしなかった…。
そして、大きな爆発が起こって煙りに包まれた。

「アハハハハ…！！
勝った！！勝ったぞ！！吹き飛ばしてやったぞ…！！
アハハハハ…！！「何、笑ってんだ…？」ハッ！？」

一真の奴は、平然と立っていた。
宮方は一真を認識すると笑うのをやめて驚いていた…。

「お前!?どうして!?」

「ハァ…。
簡単だ…。
打ち消しただけだ…。」

「そんな、バカな…!!
ウッ!?」

一真はどうやら先ほど覚えた重力変化(グラビトン)を使って宮方に重力をかけたようだ。

「お前…。
使えなかった…筈じゃ…。」

「誰が使えないって言った…。
お前が勝手に言ってただけだろ…?」

やるね~能力解析いや幻想模写

「クッ…解…除…。
ウワッ…!?」

「どうやら、俺の重力変化(グラビトン)の方が一回り上だったみたいだな…。」

(遂に終わったか・・・・・)

「宮方…、これで終わりだァァア!!」

「ガハッ!!」

一真は、思いっきり拳を振りかぶって宮方の顔面を殴った。
吹っ飛ぶ際に重力を解除したようで宮方は、かなり吹っ飛んで倒れていた（ナ～イスショット♪）。

「やっと…終わったか…。」

「一真!!やったな!!
それよりも、早くあいつを!?」

「あぁ…。」

一真に駆け寄った俺と当麻は倒れた宮方に近づいた
すると

「ウッ…ウワァァァア!!
アァァァァア…!!」

「「「ッ!?」」」

いきなり宮方が頭を押さえて叫びだした。
さらに…。

「アッ…。」

『グォォォォォォォ!!』

「「「なッ!?」」」

宮方が脱け殻のように倒れたと思うと同時に何かが出てきた。
ビルの四階ぐらいの大きさで身体が大きく、背中には悪魔と天使のような羽が生えてあり、赤い手が４つ、それぞれの掌の上には電気、氷、火、風の球体が浮いていた。
姿を例えるなら血まみれになった女神が空中で胡座を組んでいた…。

「チッ…、遅かったか…。」

「木山さん!?」

一真がそう叫んだ

「木山さん!!
あれは一体何なんだよ!?」

一真が焦りながら聞いていた

「…あれは、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の改悪版、幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）と言った所か…。
幻想御手（レベルアッパー）の作り出した、ネットワークの暴走だよ…。
全く…。」

「ＡＩＭバースト?ネットワークの暴走?
何の話だ…?」

どうやら一真は意味が分からないらしい

俺にはしかと理解できた

この化け物は、未完成状態の『異世界樹（ユグドラシル）』と似たような物って訳かそれよりもこいつが出てきてからなんだかからだがちょっと怠いなが出来ていた。

『グォォオォォオォオ！！』

怪物が川の水面目掛けて氷の球体を投げた。
すると、投げられた部分の川の水は吹き飛び代わりに巨大な氷の柱

「わかった…。
俺が何とかする…。
その間に、木山さんはこいつを連れて病院でワクチンを…。」

一真が木山さんに宮方を預けた。

「…生憎だが、幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）が現れてしまった以上、もうワクチンを作っても意味がないだろう…。」

「「「ッ！？」」」

俺達三人はそれを聞いて驚いた…。

「そんな…。」

「一真…。」

「何を屈服している…。

私はワクチンが意味を成さなくなったと言っただけで助けることが出来ないとは言ってないぞ…。」

「「「えっ!?」」」

俺達はまた驚いた…。

いや、俺はこの残念な美人に怒りを覚えた

（ややこしい言い方するなよ・・）

「なら、どうすればいいんだ…。」

一真が木山さんに尋ねると木山さんは暴れている怪物を見た。

そして…。

「あの、幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）の中にあるであろうコアを、破壊すれば助けられるだろうが…。

君はそれでもやるのかい…?」

「…やるに決まってんだろ!!」

「フッ…、君ならそう言うと思ったよ…。

あとは、君達だがどうする…?」

今度は俺と当麻に聞いていた。

俺達は顔を見合わせて笑い合っていた。

そして…。

「「俺達もやるに決まってんだろ！！」」

「そうか…。
なら、私は止めはしない…。
ただ…。」

木山さんはそう言って目付き少し変えて

「あの化け物を倒したとしても命をもし落とせばあの娘が逆に悲しむ事になる…。
これだけは頭に入れておいてくれ…。
では失礼するよ…。」

「…わかりました…。」

そして、木山さんは車に乗り込み去っていった…。

「俺達の心配無しとは、冷たい先生なことで…。」

「当麻、プラス思考に考えて俺達の力が信頼されてるから心配する必要が無かったって解釈すればいいんじゃねぇのか？」

俺は、そう言った

当麻と一真は知らないけど俺は、心配される必要はない

「そんなこと言ってる場合じゃねぇだろ…。

全く…。
さてと…。」

一真は、少しめんどくさそうにそう言って怪物を見た

『グォォォォォォ！！』

俺達は、子供のように暴れて鳴き叫ぶ怪物を見た。
幸い人が通ったりアンチスキルが来る形跡は無かった…。
そして…。

「先手必勝だ！！
気づいていないうちに大ダメージ与えるぞ！！」

「「おう！！」」

俺達は、一真のかけ声とともに走って怪物に近づいて行く。
そして、十分な位置まで来ると俺は手を広げて上空に掲げ『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』と唱え

「よし、相手の上空に無数の氷弾を、加える矛盾は灼熱の氷弾…。」

『グォォォォォォ！！』

俺は、怪物の真上に霰（あられ）を降らせて、怪物の腕や羽を熔かした。
俺は化け物には容赦しない

「さてと…。

重力…倍加！！」

「グァァァァア！？」

そして、怪物に一真が重力を一気に掛けて、地面に落ちていく。
それと同時に霰を止めた。

「当麻！！地面にぶつかる前に消してくれ！！」

「任せろ！！ウォォオ！！」

一真が当麻に言うと、怪物向かって走り出していく。
そして、墜落する前に真下にたどり着いていた。
そして…。

「ウォリャァア！！」

『グァァアァァアァァ！！』

当麻が右手で墜落してくる怪物を殴り、怪物は苦しみながら消滅していく…。

「やったな！！当麻！！」

「あぁ。
ん？」

俺と一真が、当麻に駆けつけて言うと、当麻は何かを見つけたように声を上げた…。
その視線の先を俺達も見てみた。

「何だ…？あれ…？」

思わず呟いてしまった

俺達の視線の先には、巨大な発光している、六角柱の物体が空中に浮いていた。

そして…。

『グォォォォォォオ！！』

「「「なッ！？」」」

まるで、早送りをしたみたいに六角柱から怪物の姿が現れて復活した。

（・・・なかなかの再生力だな）

『グォォオォォオォオ！！』

「クッ！！」

怪物は俺達目掛けて巨大な火球を放ってきたが当麻が打ち消してくれた。

「サンキュー、当麻！！」

「あぁ、それにしても固まって行動したら共倒れだ。

別れて行動した方が良さそうだぞ。」

「そうだな…。

一旦離れて攻撃しよう…。」

俺と一真は当麻の案に賛成して、走って別方向から攻撃する事にした。

「さっきと同じように、相手の上空に無数の氷弾を、加える矛盾は灼熱の氷弾…。」

俺はさっきと同じ攻撃をすると

『グォォォォォォォ！！』

怪物が風の球体を浮かせた手を真上に掲げると、風の球体が平たく巨大な盾になり霰が全て、怪物の手前で消滅していき、湯気なのか冷気なのかわからない白い煙が怪物の周りから出ていた。

「これならどうだ！！」

『グォォオォオ！？』

一真は親指を、下に向けて怪物に重力を掛けた。

すると、怪物は苦しみながら落下していく。

「当麻！！」

「わかってる！！」

一真は向こうにいる当麻に叫ぶと当麻はそう言って落下していく怪物目掛けて走って行く。

しかし…。

『グォォォォォ！！』

「「なッ！？グワァア！！」」

怪物が重力を解除して体制を立て直して、放電してきて、俺達の近くの地面に当たって爆発すると、俺は地面を転がり、当麻は川に落ちた。

「クソッ…。」

「ウグッ…。」

俺達は何とか立ち上がって怪物を見上げた。
意識が失いそうになったが何とか耐えた。

「前に投げれば後ろに後ろに投げれば前に飛ぶ、投げ槍を出現させよ！！」

俺は手に錬金した特殊な槍を相手と反対に放り投げた

「ウォリャァア！！」

『グォォォォォォォ！！』
そして、怪物の全くの逆方向に投げると、槍は何故か怪物の方向に飛んでいき怪物の身体と羽根を貫いて穴が出来て、槍は地面に刺さって消滅した。
これで、またバランスを崩して落ちてくる筈…。
そう思っていたのだが…。

「嘘だろ…？」

『グォォォォォォォ！！』

怪物に出来た穴がすぐに元に戻り、今度は俺を見ていた。

『グォォォォォォォ！！』

「グワァァア！！」

「「影虎ァァア！！！！」」

怪物は怒ったのか、俺に全ての手を翳してそれぞれの球体を放つと見事に命中して、俺は動けなくなった

（今のは効いたぞコンチクショウ！！）

「影虎！！しっかりしろ！！影虎！！」

「オイッ！？起きろよ！！影虎！！しっかりしろ！！」

俺が精神世界に入っている間に当麻と一真が叫んでいた

『グォォォォォォォ！！』

「「ッ！？」」

そして、怪物は球体が溜め終わったのか、すぐに当麻達に放ってきた。

一真は目を瞑ってしまってた。

『グワァァア！！』

（俺の前で誰かを死なせてたまるかぁ！！！！！！！！！！『異世界樹（ユグドラシル）』！！！！！！！）

怪物の鳴き声と近くで爆発が起きた。

「なんだ…これは…。」

目を開けた一真がそう言っていた

俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』を発動して当麻達を守らせた

死んでからも発動するこれが俺の『異世界樹（ユグドラシル）』だ

絶対に俺の前では誰も死なせねぇ2年前みたいなあの無力感はもうたくさんだ！！！！！！

「何とか間に合ったな…。」

「「影虎！？」」

「影虎…、その頭の上の物体は何だ…？」

「ん？これか…？」

俺の頭を見て一真がきいてきたので
頭の枝を触りながら聞き返すと一真と当麻は頷いた。

(はっきりと言うべきかな?・・・・・嘘ついてごまかせる状況じゃないな)
「こいつは異世界樹(ユグドラシル)。
まぁ、俺の究極魔術だ…。
それよりも…。」

そう言って、俺は当麻達を覆わせていた枝をどけて倒れていた怪物を見た。

『グォォォォォォ!!』

「そうだったな…。
クッ…。」

「一真!?大丈夫か?」

なぜかいきなり一真が膝を突いていた

「大丈夫だよ…。
もう少しで四つ目以降の能力を覚えて30分経つってだけだ…。」

「それって…。」

「あぁ…、能力を全て忘れて役立たずの無能力者になるな…。」

一真は、頭を抑えて言った。
(・・・はぁ~美味しいところは全部一真にやるか・・・お姫

様を眠りからさますのは、また別の姫さんを守るドラゴン（俺）でもなければ、不幸な男（当麻）でもなくお姫様（天野）の王子様（一真）の仕事だもんな）

「一真…、お前がトドメをさせ…。」

「えっ！？」

俺の発言に、驚いていた。

「俺と当麻であの、六角柱を出現させる、お前はそれを全力で破壊しろ…。
いいな…。
当麻、異論は聞かねぇぜ…。」

（当麻には怖い思いしてもらう・・）

「…わかった…。」

「言われなくても賛成だ。」

俺達はまた怪物に視線を移した。

『グォォォォォォ！！』

また、怪物は球体を放とうとして全ての手を翳して来た。

「何度も同じことが出来ると思うなよ…。」
（さっきのは痛かったんだぞこのやろう！！！！！貫けそして咲け

『異世界樹（ユグドラシル）』）

『グァァァァア！？』

怪物の真下から数本の桜色の巨大な根を生えさせ、怪物を貫いて拘束して怪物の攻撃を阻止した。

「行くぞ！！当麻！！」

（下拵えは終わった。吹っ飛べ当麻！！♪）

「えッ！？何を…？ウワァア！！」

当麻の真下から根を生やして、当麻を飛ばした。

「こうなりゃやけくそだ！！
ウォォオ！！」

『グァァァァア！！』

怪物目掛けて落下と共に当麻は怪物を殴り、怪物は消滅していく。

「ウワァァア！！
ウッ…。」

当麻の落下点に『異世界樹（ユグドラシル）』の蔓をネット状に張って、マット代わりにして当麻は助かった。（右手から墜ちなくて良かったな当麻・・・♪）

そして、また発光している六角柱が現れた。

「ハァァア…！！」

一真は、両手を六角柱に向けて氷、炎、雷、風、さらに重力の球体を作っていた。

「終わらせてやるよ…。
ハァア！！」

そして、それぞれの球体を一気に放ち六角柱に全てが同時にぶつかると六角柱は砕け散って、破片が綺麗に舞っていた。
完全に六角柱がこわれたようであの怪物は復活しなかった

（万事解決っと）

「やっと、終わった…。
クッ…。」

「「ッ！？」」

一真は、地面に倒れて気を失った。

俺と当麻は、焦って駆け寄ったすると

満足そうに微笑みながら寝ていた

「「ふ～」」

俺と当麻は同時に胸に手を置いて息を吐いた

「一真の奴、死んだかと思ったぜ・・あれ?影虎お前、なんか少し縮んでないか?」

当麻が俺を見てそう言ってきた

「いや、気のせいだろそれよりも俺は、一真を運ぶからお前は・・・・禁書目録の昼飯を作らなくて良いの?」

俺はふと思い出したことを言うと

当麻は急に汗だくになり顔の色がどんどん悪くなっていった

「上条当麻は、最優先事項を見つけたのでひとまず帰らせてもらいます。後で必ずお見舞いに来ます」

そう言って当麻は走って帰った

俺は当麻に手を振りながら一真を背負って病院に帰った

そして、病院に帰ると木山先生と忍とカエルの先生が俺を待っていた

「忍先生、本当に彼の力でワクチンが完成するのか?」

木山先生は俺を見ながらそう言った

「えぇこの子の演算能力を使えばワクチンをすぐに生産できます」

「後は頼んだよ。影虎君」

ポン

カエルの先生に肩をたたかれた

「了解しました。」

この後俺は、宮方の脳内をトレースして脳波パターンを割り出し

今回のレベルアッパーの特徴、欠点やあらゆるものを割り出し

ワクチンを作り出し

なるべく早く効果が出るように

改良を加えワクチンを作り上げた

（このワクチンで眠っている奴は起きるはずだ・・・・ただ、能力のレベルは下がるという欠点は補えなかったがな）

そして、俺はこのワクチン実験体第一号には、『あの人』を選んだ

・・・・

（あ、カズ君起きたみたいよ）コソコソ

「一真！！」

（おぉ～天野、愛のダイブ発射まで１０びょうまえってか？）コソコソ

「天野弱…？」

（カズ君驚いてる驚いてる♪）コソコソ

「良かった！！」

天野が一真に抱きついた

「ウワァ！？」

「おはよう…、一真…。」

「全く…、起きるの遅すぎだぞ…。
『葵』…。」

「えっ！？」

（おっ？遂に負導の奴、葵の名前をよんだぞ♪）コソコソ
（カズ君と葵ちゃんの距離が一気に縮まりました♪）コソコソ
（そのままキスまで行っちゃえ天野に一真！！後、重いんだけど椿と特に忍）コソコソ

「一真…。

今、なんて？」

「ん？起きるの遅すぎだぞ…葵…って言っただけだが…？
何か可笑しかったか…？」
葵はまた涙を流して、一真に抱きついた。

（え？もしかしてこのまま一気に大人の世界に〝ガシ〟モガモガ）
（（五月蠅い忍））
（だってだっておねぇさんこういうベタベタな展開からドロドロな
良い子閲覧禁止な展開になる感じのところが隙なのに）コソコソ

「えへへ♪一真に言われたくないよ♪
二時間も寝てたんだから♪」

「二時間も？
そう言えば影虎たち…は…。」

（忍マニアック過ぎだ・・・あ？張れたか？）

（そんなこと無いわよ椿ちゃん、今度そんな感じの同人誌貸して上
げるから良さを理解しなさい♪それとカズ君と葵ちゃんは二人の愛
の世界にはいってるから私たちは見えてないわ）

急に椿と忍が言い合いを始め俺は、一真の方を見ると明らかにこっ
ちを見て固まりながら顔を赤くしていた

どうやらドアの外で覗いているおれたち3にんに気付いたらしい

「なぁ…もう、見つかってると思うんだが…。」

俺がそう言うと二人は言い合いを止め

「そうだな…。
まぁ、中々面白い物が見れたからもう、いっか…。」

「そうね♪
でも、椿ちゃん♪
もう少し見つからなかったらキスぐらいはいってたかもしれないのに、惜しかった♪」

っと言っていた

「とっとと入れ!!」

一真に怒鳴られたので中にはいることにした

「カズく~ん♪」

するといきなり忍が一真に近づき飛びかかった!?

「えっ!?
どわぁ!!」

一真は驚いていた

「離せ!!痛いから離せ!!」

「あら♪葵ちゃんの時は全然平気だったじゃない♪
あっ♪もしかして抱きついてて欲しかったから痛いの我慢してたと

か♪」

（あぁなるほどね）

忍の言った言葉に少し納得してしまった俺・・・・・一真ごめん（ノ。Д。）

「マジで離して…、また気絶する…。」

一真の顔色がどんどん悪くなっていたので忍を止めようとすると忍が離れた

「全治二日ってところね♪

まぁ、二日間入院してなさい♪」

「…。」

どうやら、調べられてたらしい…。

（おいおい、触診ってよ・・・・・けが人にするものだっけ？）

「まぁ、お邪魔虫はこの辺で消えましょう♪

カズくん♪約束通りご褒美はあげたわよ♪

2人とも行くわよ♪」

そう言って、忍は出ていった。

「まぁ、お二人さん、ごゆっくり…。」

「待て！？」

「ん？」

俺は出ていこうとしたが呼び止められ振り向いた。

「当麻は何処に行ったんだ？」

（何だそんなことか・・・）

「あぁ、それなら…「フギャァァァア！！」…。」

どうやら言わずして解ったようだ

「「「…。」」」

言おうとした瞬間、隣の部屋から当麻の断末魔が聞こえた。

「じゃあ俺は、忙しいんで…。」

「そう言えば何で影虎は白衣着てんだ？」

「ん？」

俺は、白衣についてきかれたので

「あぁ…、俺は一応医療に関しての知識は覚えさせられたから手伝いで来たりするんだ…。
だから、な…。」

「あぁ…。」

俺の説明で察してくれたらしい

「じゃあな…。」

「あぁ…じゃあな…。」

そして、俺と椿は病室から出た。

・・・

椿が後ろを見ながら言ってきたので

「俺のファンだ♪」

っと冗談で椿に言うと

少しだけ怒っていたがすぐに妖艶な笑顔になり

「なぁ、影虎。「ん?なに〜グイ、チュ〜ウグッ?／／／

病院での仕事を終え
家に帰ろうとする途中に突如いきなりの大雨に振られたが
何とか家に帰って
風呂にでも入ろうと思いリビングのドアを開けると
「ゴクゴク・・・ほぉ・・美味しい♪・・あ、」
「お帰り影虎、あ～こいつは、・・雨宮(あまみや)　蓮(れん)くんだ。虐めるなよ？」
リビングにいたのは、
ポニーテールにエプロンをした椿と
１０歳ぐらいの黄色の雨ガッパを羽織った男の子だった
（だれ？）
俺がそう思ってにらみ付けると
「こっ恐！！あ、あれ、避けて！！！」
突如、少年の周囲から強力な冷気が発生し俺と椿に向かって
冷気が襲いかかってきた
「「ツ！？」」

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「え、え、またやっちゃった!?もしかして、人殺しちゃった!?」

少年は、自分の両手を見ながら驚いていた

すると

「いきなり攻撃されたらびっくりするだろうが!!!」

緑のコートを羽織った男は、背中から奇妙な桜色の羽を生やし強力な冷気を防いでいた

「怒鳴るな影虎!!お前が怖がらせるからいけないんだろうが」

そして、もう一人の黒髪の女は、自分の回りに灼熱の炎を出して冷気を防いでいた

しかも、男を怒っていた

「す、すごい、僕の攻撃を普通に防ぐなんて・・お兄ちゃんとお姉ちゃん凄いよ」

少年は目を輝かせてはしゃいでいた

この少年、雨宮（あまみや）　蓮（れん）との接触が俺の日常を再び刺激的に変えてくれるなんて思いもしなかった。

つづく

新キャラ紹介

雨宮（あまみや）　蓮（れん）

性別　男

ｃｖ三瓶由布子

年齢１０歳

身長１３０

髪の色　灰色

髪型　デスノートのニアと同じ

顔は、将来絶対にイケメンになること間違いなしの母性愛をくすぐるような可愛い顔

体型は、ふつうの小学生

服装　常に黄色の雨ガッパを羽織っており靴も少し長靴っぽい

黒のランドセルを常に背負っている

性格は、無邪気で怖がり　ドS

好きなもの　雨音から聞こえてくる自然の音楽

『天気戦争（ウェザークロニクル）』

強烈な日照、豪雨、落雷、竜巻、絶対零度の冷気など、あらゆる気象や天候、自然現象を増幅して自身の技に転用する。

・冷気…人体も凍らせる程の冷気で凍らせバラバラにする
・風…大きな竜巻で吹き飛ばす。跳ね返されると大変
・雷…雷で攻撃。固定もできる。使用頻度が高く割とお気に入り
・熱…触れると火傷する熱気を発生させる
・蜃気楼…攻撃をかわしたり逃げる時に使う
・雨…相手を溺死させる。こちらも固定可能

他にも色々ある

ある意味でオールラウンダーな能力

幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）（後書き）

以上です

次回からは、渡さんの小説とは別ルートで話が進みますのでよろしくお願いします

ではまた

感想ください

天気戦争（ウェザークロニクル）（前書き）

最近、風邪気味でしんどいです

ではどうぞ

俺と椿とそして謎の少年　連は、リビングのテーブルで向かい合っていた

「「「・・・・・・・・・・」」」

（気不味い・・・・・・俺から話しかけよう）

「あ、あのさ～・・さっきのアレって『冷気放出（ドライアイス）』とかそう言う系の能力？」

俺は、出来るだけ笑顔で連に聞いてみたすると

「あ、さっきのは、僕の能力のほんの一つです」

っと言ってきた

俺は、何となく椿の方を見てみるが「泣かすなよ」っと言われただけであった

「さっきのが能力のほんの一つって事は、他にも色々あるわけ？さっきの冷気だけでももの凄く高レベルの能力ぽいけど（だってさっき一瞬でリビングが凍ったほどだからな・・）他には何が出来るんだ？」

俺がそう聞くと

連は、突如立ち上がって

窓の外を指差した

俺と椿は、それにつられて窓の外を見たすると

「お姉ちゃんは、天気の中でどんな天気が好き?」

っと椿に連が聞いたすると

「う〜ん・・・雪?」

(夏に望む天気じゃないぞ!!)

しかし、連は、笑顔で

「じゃ〜『天気戦争(ウェザークロニクル)』で雪を降らせるね♪」

連がそう言うと

連から謎の違和感を感じた

そして、

「な!?そんな馬鹿な!!」

椿が窓を見ながら驚いていたので

俺もすぐに窓の外を見ると

さっきまで大雨だった天気が

雪に変わっていたのだ

しかも学園都市中に雪が降っていた

「・・・『天気戦争（ウェザークロニクル）』だと？まさか、天候を操る能力か？」

俺が目を大きく開いて聞くと

「ひぃ・・う、う、」

・・・・・・・驚いて泣かれました

ガァンバキャ

「痛って～！！！！！！！！椿の馬鹿野郎！！！！！！んなもんで後頭部殴ったら死ぬだろうが！？考えたら解るだろうがぁ！！・・・・・痛い」

「うるさい黙れ大馬鹿虎、泣かすなっていったばかりだろうが！！考えたら解らないのか馬鹿虎！！」

「馬鹿虎って馬鹿犬の同じで漢字で読むと何の動物かわからねぇよバカ」

「誰がバカだ、一番のバカはお前だ馬鹿馬鹿バ～カ大馬鹿虎野郎」

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

「参りましたｏｒｚ｛（　－人－）・ｏＯ（複雑）｝」

「はぁ・・・はぁ・・・ようやく解ったかこの馬鹿が」（ー'ー'）
「ヤレヤレ」

「あの、あの、喧嘩は止めてください！！てか、無視すんなぁ！！！！！！！！！！！！！」

そして、口論すること2分

俺は、後頭部をフライパンとパンとかの生地を伸ばす木製のアレでどつかれ

それに俺が反論すると

もの凄く噛みついてきて

最終的に椿の「出ていく」や「他の男を作ってやる～」と半分泣きながら言われ

結局口喧嘩で俺は負けました。

ついでに言うと連は、俺と椿の口喧嘩を止めようとしてくれたみたいだが

俺と椿の言い合いが激しすぎて怖がっていたが

最後の最後で俺と椿に怒鳴った

「「・・・ごめん」」

俺と椿は、急に冷静になって連に謝った

「で、『天気戦争(ウェザークロニクル)』だっけ?それがお前の能力なんだな?」

俺が笑顔で聞くと

「うん、『天気戦争(ウェザークロニクル)』が僕の能力だよ♪レベルは、計れないけどね」

(はかれない?)

「どうしてレベルを計れないんだ?」

俺がそう聞くと

「いや、あの、え~とね、僕のレベルを正式にはかると必ずレベル5認定されちゃうからはかちゃいけないんだってさ」

「計っちゃいけない?なn・・・・・(こんなに小さなガキがレベル5に認定されたらこのガキの身の安全も危うくなる上にさっきみたいに怖がっただけで確実に人を殺せる攻撃が出来るこいつの能力が合わさったらこいつを襲う奴も危ない・・・・・昔の俺や一方通行みたいな目に遭うって訳か)・・それよりもさ、なんで、ここに居るんだ?」

俺は話題を逸らして聞いた

「それはですね・・実は、僕、マフィアに追われてるんです・・・」

っと連は衝撃の発言を申し訳なさそうに言った

（マフィアに追われてる・・かぁ～）
「どうして追われてるんだ？お前がちょっかいでも出したのか？」
俺がそう聞くと
「〝ブンブン〟・・僕は、僕は、僕を追っているマフィアのボスの子供なんです」
「はぁ！？どういう「最後まで聞いてやれ」・・・」
俺が連に怒鳴りかけると椿に止められた
（椿の奴、真面目な話の時は、妙に大人っぽいよな。俺が子供なだけかな？）
「僕は、６歳の時にお母さんから引き離されてアメリカのマフィアのボスの父に引き取られて・・僕はその後すぐに学園都市にある秘密裏な事務所に預けられました。」
「マフィアの父に預けられた？なんで？」
「父は、僕に能力開発させて能力者にして僕を道具として使うつもりだと言っていました。」
（たしかにな、能力者なんてもんこの街では珍しくもないけど外界では、能力者は、驚異だ。マフィアとしては、そんな能力者が欲しくないはずがない。それに加えてこの餓鬼の能力は、素晴らしいと言っても良いほどの能力だ天候を支配するなんて神にも等しい能力をマフィアが野放しにするはずはないって事か）

「つまりお前は、マフィアに利用されるのが嫌で逃げてるって訳だな」

未だに黙って話を聞いている椿をほっておいて

俺がそう言うと

連は、首を横に振っていた

「え？違うの？〔コクン〕じゃぁなんで親父さんから逃げてるんだ？」

「・・・お母さんが学園都市に来てるってお父さんの部下の一人が言ってたんだ。それを聞いて奴らから逃げて追われてる途中にお姉ちゃんに助けられて・・」

（あぁ～可哀想なこいつを放っておけなかったって訳か・・・椿らしい）

「でも、なんですぐにアンチスキルに助けを求めないんだ？あそこなら・・・・・・おい、お前の親父の仲間ってアンチスキルにもいるのか？」

「うん、そうだよ。僕のお父さんの仲間は間違いなくアンチスキルにいる」

連は、真っ直ぐな眼差しを俺に向けて言った

「おまえら、何故アンチスキルに敵が居ることがわかるんだ？」

椿が目を点にしながら聞いてくるので

「椿よく考えて見ろ「ん？」この学園都市にマフィアなんて大層なもんが入れる分けないだろ？なら、」

「あ！？」

俺がそう言うと椿は納得したようだ

「解ったか椿、誰かが手引きしてるんだよ。」

「だから、さっき６人くらいのスーツを着た男達が銃を撃ってきたのか。」

〜ズサー〜

俺は椿の発言に思わず床に仰向けでスライディングしてずっこけてしまった

「え？お前らもうマフィアと戦ったの？しかも銃で撃たれたの？」

俺が焦って聞くと

「「うん、だからここに居るんだよ」」

二人そろって言ってきました

俺はすぐに頭に右手を置いて１０秒近く悩んでいた

（この餓鬼をマフィアに引き渡しても結局俺や椿は、狙われるしな〜まず見捨てたりしたら椿に嫌われる。記憶消去で解決したいがさっきワクチン作ったり犯人の検索やらで無駄使い出来る容量は残っ

ていない。なら、やることはただ一つだ）
「おい、連とか言ったな「はい」今日はもう遅いし泊まって行け明日、お前の母親を捜すのを手伝ってやる」
これが一番いい方法なので俺はそう言った
（母親か～よくよく考え直して見れば俺も椿も生まれたときから居ないんだもんな・・・）
「あ、ありがとう」
連はそう言ってきた
「へぇお前が他人に素直に手伝ってやるなんてどうした？ストレスでおかしくなったのか？」
「おかしくなったら真っ先に俺はお前と殴り合いしてると思うけど？」
「フフ、そうかもな」
椿が笑いながらそう言ってきた
「よし、家主の許可も出たから・・・いっしょに風呂にでも入ろう連♪」
「え？お姉ちゃん、なんで僕もう１０歳だから一人で入れるよ」
「バカ！！」

椿がいきなりとんでもないことを言い出したので
連は焦り俺は、呆れた
そして、俺は椿の所まで歩いて腰を下ろし肩に手をかけて
耳元で
「あのね、椿さん、どれぐらいかは解らないけど男の子は、女の子と特に年上と一緒に風呂にはいるのは何とも恥ずかしい生き物なんだよ?だから一人で入りなさい。それにお前は、自分の体型がどれだけ男を狼に変えるかをそろそろ自覚するべきだ。てか、お前、まだトラウマを克服してないだろ?」
「男がどれだけ恐いかは、身体にも心にも深く刻まれてるから忘れはしない。でも、子供ならＯＫだ」
椿は、少しだけ震えたがどうやら今回は、本気で大丈夫のようだ・・・
「って何嫌がってる子供の服を無理矢理脱がそうとしてるんだお前は・・・・」
俺は、途中から言葉を失って椿から目を離した
椿の奴は、俺がまた何かを言うと思ったのかムスッとしながらいきなり服を脱ぎはじめたのだ
そして、俺が目をそらしてる間に椿さんは，連と一緒に風呂に入りました

風呂の中から

「お姉ちゃんお願いだからお胸を背中に当てるのは止めて」

など悲鳴に近い声が聞こえた

俺は、その悲鳴を無視して色々考えていた

（『天気戦争（ウェザークロニクル）』か・・・・・・・・・・・悪（クズ）に利用させるには大きすぎる力だな、あいつの能力は、簡単に国一つを滅ぼせるだけの能力・・・今回の面倒事は、本当にめんどくさいな）

などと考えていると

「影虎、次入って良いぞ」

と風呂から出たばかりで身体から湯気が出ている椿にそう言われた

そしてその横には、グッタリとしている連が居た

「もうお嫁に行けない・・・・グス」

と連が言うので

「お前は生まれたときからすでにお嫁には行けないだろ？」

俺はそう突っ込んで風呂に入った

（ふぅ～椿の奴は、もう少し男心を女目線で理解しろよな～3年前、

あいつが一緒に風呂に入ってきた時は、もの凄く恥ずかしかった）

など色々考えて

風呂を出ていつもどうりコーヒー牛乳を一気のみした後、

寝室に行くと

椿と連が寝ていた

（・・・こいつらまるで姉弟だな・・正直いってこいつの親探しに椿を同行させたくない）

「なら、やることは一つだな・・・・・・〜ポン〜勝手にで悪いがお前の記憶を俺の中にコピーさせてもらうぞ」

俺はそういって

連の額に手を置いて連の母親の記憶をよんだ

（こいつが連の母親か・・・・おいおい嘘だろ?この女、１０年前のレベル６プロジェクトで研究員をしてた奴だ・・・・・・まさか、このガキ、『俺』の演算パターンを持ってるのか?俺の『自分だけの現実』を完全に支配する力と世界全土を包み込めるくらいの広大な『自分だけの現実』持ってるって事か?脳内パターンを見たところじゃ他人の『自分だけの現実』に割り込みや侵略はできない失敗作みたいだけど・・）

「俺のクローンて訳じゃなくても能力のオマージュてことか『暗闇の五月計画』ならず『闇夜の四月計画』の被験者?また、面倒な話だ・・・」

この後俺はすぐにソファーで朝に椿に起こされるまで寝た

天気戦争（ウェザークロニクル）（後書き）

今回の話は、渡さんの小説とはリンクしていません

さぁ謎の少年、雨宮　連、彼との出会いが影虎の日常をどうスリリングに変えるのか？

おたのしみに

ではまた

異常気象（言うことを効かない『異世界樹（ユグドラシル）』）（前書き）

できれば感想をいただきたいです

オリキャラも募集しています

気軽に感想ください

異常気象（言うことを効かない『異世界樹（ユグドラシル）』）

……

……

……

そして、次の日起こされた俺は、眠気に襲われながらも

目を覚まし

連の親探しを始めた

俺の能力で探したかったのは山々なのだがさすがにメモリーキャンセラーを使いすぎてしまっているので

検索すら出来なくなっている

（まぁ記憶消去は、元々俺の能力の片鱗なだけだからここまで使えれば十分なんだけど使用するのに制限があるのは、しんどいよな）

「おい、影虎、もっと飛ばせ」

俺が考え事をしていると

後ろで俺の腹に手を回している椿にそう言われた

俺達は、今、サイドカー付きの大型自動二輪で学園都市の研究所と言う研究所やサイドカーに座っている連の母親の居そうな場所を手当たり次第に回っていた

「おい、連、お前がヤクザ共から聞いた母親の情報は、もうないのか？」

俺がそう聞くと

連は、少しだけ悩みながら

「一度だけお母さんの昔働いていた場所を聞いたことがあるんだけど・・・もしかしてそこかもお父さんの部下の人たちもそこでなにかするとかどうとかいってたから・・」

「・・・第十学区・・『特例能力者多重調整技術研究所』通称『特力研』・・・昔、一ヶ月間だけそこで能力開発してた時があった・・あれ？（よくよく思いだして見れば俺そこでも『一方通行（アクセラレータ）』とあってたかも・・）・・・・まぁいいや椿に連、しっかり捕まっておけよ」

ヴァアアア

「ここがお前の能力を閑静に導いた場所の一つか？」

と椿がヘルメットを脱ぎながら言って来るので

「そうじゃない〜フラ・・〜」

「大丈夫か影虎！？」

「お兄ちゃん？」

急に意識が飛びそうになったが何とか持ちこたえて

「あぁちょっと気分が悪くなっただけだ。こんな廃墟にお前の母親が居るとは思えないが望みは捨てない限り希望になる。いくぞ」

そう言いながら俺達は、廃墟となった研究所に入った

……

……

……

カツンカツン

「なぁ連、お前の母親ってどんな奴なんだ？」

研究所を歩いている最中に突如椿が連に聞いた

「う〜ん、研究熱心で仕事ばっかりだったけど日曜日には、必ず僕とどこかに遊びに行ってくれたよ？」

「ふ〜ん、母親って優しいもんなんだな〜」

「お姉ちゃんのお母さんはどんな人？」

連がそう聞くと

「・・・・・俺には、生まれたときから親なんて居ないんだ。俺を産んですぐに死んだのかそれともただ俺が邪魔だったのかは解らないけど・・赤ん坊の時から孤児院暮らしだったんだ」

（椿の奴、急に親が恋しくなったのかな？）

「・・・あの、ごめんなさい」

「別に良いよ。この話題を振ったのは俺だからな・・ただ、一生に一度だけで良いから親に甘えてみたかったなって思ってさ」

「・・・・お兄ちゃんは？」

今度は、俺に聞いてきた連

「うーん、俺も昔から親居ないよ♪俺みたいな化け物を産んじまった親は、俺の力をおそれて手放したんだろうよ♪賢明な判断が出来る賢い親だと思うぜ♪さすがは俺の親だよ。だから俺は捨てられたことに感謝しているんだよ。俺（化け物）を家族（血の繋がり）なんて言う絆（檻）から野（地獄）に解放（追放）してくれたんだからな。感謝の言葉しかない。俺は今、基本的に人を殺せないけど俺の親と椿を捨てた親を見つけた場合は、跡形も残さず消すつもりさ」

俺がそう言うと連は、黙り込んでしまった

（何か変なこと言ったかな？）

と本気で悩んでいると

ズギューン

ブシュー

「・・・チィ・・いきなりバトルパートかよ」

「影虎!?」

「お兄ちゃん!?」

突然の後ろからの発砲で俺は、心臓を完璧に打ち抜かれた

ズギューンズギューン

今度は、連達の後ろつまり俺の前から発砲

（あぶねぇ!!!!!）

ドン

「「あっ!?」」

ドサ

バスバス・・・ドクドク

「コフッ・・・はぁはぁ（何故だ?『異世界樹（ユグドラシル）』の発動が上手くで

きない？いや、発動が最低限俺が死なない用になってるだけで不死ではあるけど不死身ではないって感じか？）椿！！「なんだ影虎？それよりもお前何で回復してないんだよ？」今はそんなことどうでも良い「どうでもって」椿お前は、連を連れて逃げろ「でも、お前・・」俺を信頼しろ俺も前をきちんと信頼するだからお前は、俺の信頼と連の希望を裏切るな」

俺は、口から血を吐きながら椿にそう言うと

「・・・解った。連行くぞ。・・・影虎、お前を撃った奴ら全員・・『喰い殺せ』」

と被っていた帽子を深くかぶって俺にそう言って

連の手を握って走っていった

俺は、椿が走り去っていくのを確認すると

「スゥ～ハァ～・・・・・おい、いい加減出てきたらどうだ？アンチスキル（警備員）いやバッドスキル（工作員）とでも呼ぼうか？」

俺がそう言うと

ぞろぞろと２０人くらいのアンチスキルの制服に身を包んだ大人達が現れた

全員が全員小型自動小銃を俺に向けて構えていた

「ほう、あれだけ鉛玉を打ち込まれても女とガキを逃がし俺達に挑

発をかけることが出来るとは、何ともタフなガキだなお前」

「「ハハハハハ」」

リーダーらしき男の一言で周りの奴らが笑い出した

「お前が命を懸けて逃がした女とがきは、今頃通路のあちこちに徘徊させている部下に捕まってるだろうぜ」

〜ブ・ブブ・・・ターゲット発見第一部隊と第二部隊ではさみ打ちにします〜

突如男の胸に掛けて合ったトランシーバーに通信が入った

「了解、目標は殺すなよ。女の方も出来れば殺すな」

〜了解しました。第一部隊かかれ〜

〜ラジャー〜

「お前の女もうすぐ捕まるってよ?ただ残念なことにお前は、ここで死ぬんだけどな」

〜動くな手を挙げろ〜

再び男のトランシーバーに連れくが入った

(全くどうして学園都市の大人ってまともな奴居ないんだろう?もしかして、学園都市って名前は、学生ばかりの街って意味じゃなくて大人も子供もみんなガキだからかな?そう考えると学園都市よりお遊戯村って名前にすれば良いんだよ・・・第一アンチスキルごときで折れと互角または、それ以上に強い『椿』をとめられるわけないのに・・・)

{{おい、女、いったいなにw「全ての罪人を焼き尽くしこの世を浄化する咎の炎よ。今、この時、咎人を焼き尽くしたまえ【煉獄業火】」{{ゴォオオオ}}ううわぁあああああああああああ・・ブチ・・プープー!}}

「おい、第一小隊どうした?一体何があった?第二小隊、第一小隊に何があった?」

{{こちら第二小隊、現在第一小隊の何だ?身体が凍って!?ピキピキキ・・プープー!}}

男のトランシーバから再び信号が消えた

男は顔を真っ青にしていた

「どうした?捕まえるんじゃなかったのか?」

俺が笑いながら聞くと

「五月蠅い、黙ってろクソ餓鬼!!」

男は、銃を持った手を大きく上に振り上げ

俺のこめかみに目掛けて迷うこともなく振り下ろしてきた

(俺もそろそろ・・・スイッチ入れるか・・)

ガシ

「な!?」

俺は、男の振り下ろした腕を右手で受け止めながら男の手を捻って
少しずつ立ち上がり男を見下ろす形になった
男は、俺に手を捻られているので苦痛の表情を浮かべていた
「なぁあんたたち「「「「ッ！？」」」」喰い殺してやろうか！！？」
この後のことは、あまり記憶にない
俺はいつも道理、力任せにそれでいて出来るだけ生死に関わらないように痛めつけた
途中、バッドスキルの奴らが泣きわめいて銃を乱射していたが俺は死ぬに死ねない身体なので
体中を穴だらけにされながらも一人また一人と地面にめり込ませていった
……
……
……10分後
パンパン
「ふぅ～あらかた片づいたな・・・・・」
俺は、両手や服に付いた埃を払いながら誰かに呟くように言った

（・・・・・椿の奴、もしかとは思うが大丈夫かな？）
と椿の心配をしていたまさにその時、

〜ピ、ガビーザザー〜

俺の倒したバッドスキルの男の胸ポケットに入っていたトランシーバーに突如通信が入った

（椿かな？）

俺はてっきり椿からの通信だと思い男の胸ポケットに入っているトランシーバーに手を伸ばしたとき

〜え〜ただいまトランシーバーに手を伸ばしている君？〜

「な！？だれだ？」
突如椿以外の声で喋り掛けられたので俺は驚きながらもトランシーバを奪い取り話しかけた

〜あぁ俺？俺は、お前達が匿っていたガキの父親に当たるもんだ。以後よろしく〜・・それでさ、一つ取引をしたいんだよ。〜

「取引だと？」

男が訳の分からないことを言い出すので微笑を交えながら聞き返した

〜お前達の匿っていたガキを今日の２３時までに第十一学区の〇〇〇の工場まで連れてきな。あぁよくある台詞でありきたりだが誰かにこのことを話して見ろお前ん所の可愛い巨乳『嬢ちゃん』が心に

も体にも傷を作った上に俺らの商品になるぜ?高額で買い取ってくれるぜこんな上物の嬢ちゃんは特によ?ハッハハハ・・連!お前も聞いてるな?お前を庇って捕まった嬢ちゃんをお父さん達のオモチャにされたくなかったらとっとと出てこい!お前の母さんも俺に売り飛ばされる前にな!?」ブチ

連の父親らしき男の下品な声がやんだ時

コソコソ

そろりそろりと連が怖がりながら近づいてきた

その目には、大粒の涙が貯まっていて頬を伝って地面に落ちていた

「ご、ごべんなざい!!」

連は、鼻水や涙を垂れ流しにしながら

俺に思いっきり頭を下げた

連の服には、多少の血が付着しており

先ほどの戦闘の激しさを物語っていた

俺は、右手に持っていたトランシーバを壊れるほど握りしめていたが

連の顔を見て

不思議と怒りが治まった

ポン・ナデナデ

「ふぇ？なんで怒らないの？僕のせいでお姉ちゃんが・・・お姉ちゃんが」

「今ここでお前を怒っても椿は帰ってこないだろ？それに椿がお前を庇いたくて庇ったんだ♪お前に悪いところはないよ。「グス、グス」泣くな男だろ？連、いいか？お前の親父は教えてくれない俺流の男の心得を教えてやる『逃げることは恥ずかしい事じゃない。逃げ続けることが一番恥ずかしいんだ。逃げ切ることこそが負けだ。逃げ切らない以上負けじゃない』わかったか。それに『俺は椿を誰にも渡す気はねぇんだよ』だからこそお前の力を貸してくれ。お前のクソ親父から母親と椿を同時に取り返すぞ？Ａｒｅ ｙｏｕ ｒｅａｄｙ？」

俺は、連を慰めるために少し腰を下ろして連の目をしっかりと見つめながら

聞いたすると

連は、涙を拭って

「ＯＫ、僕も逃げ続けたくない今度は僕から仕掛けてやる。」

連は、さっきまで泣いていた子供にはとうてい出せないような

殺気を出しながら俺にそう言った

「よしなら行くか？確か二十三時までにって・・・なに？今２２時５６分じゃね～か！！お前の親父、時計読めないんじゃないか？

あり得ないだろ？5分で別の学区に来いって。」

俺がケータイ電話の時計を見ながらそう言うと

連は、

「あのクソ親父、結構バカなんだよね～全くバカの血が流れてるだけで汚らわしい」

・・・連君？キャラ変わってない？怒ると性格変わるの？それとも素の性格がこっちでいつもがフェイクなの？

この日俺は少しだけ子供が恐くなった

「でも、どうする？ここから第十一学区までバイクを飛ばしても20分はかかるぞ（『異世界樹（ユグドラシル）』も上手く動くか解らないしな・・・ストレスで動かなくなるって・・どうよ？）」

「僕は空飛べるよ？お兄ちゃんは？」

「え？お前飛べるの？どうやって？」

俺は突然の連の発言に驚いた

天気を操る力で空を飛ぶ事が出来るのか？

すると連は、突如自分の足下に小さいながらも強力な竜巻を作って飛び上がった

（なるほど。竜巻に乗って空を飛ぶんだな？・・・カッコイイ）

「お～い、お兄ちゃん～お兄ちゃんもこれ（竜巻）で飛ぶ？」

っと上空から俺を見下ろす形で呼びかけてきた

（確かに一度竜巻に乗って空を飛んでみたいのは山々だが・・・俺には使い慣れた『異世界樹（ユグドラシル）』があるしな・・・ユグドラシル、椿を助けたいだから協力してくれ頼む）

俺がそう心の中で『異世界樹（ユグドラシル）』にそう頼むと

バサァっと俺の背中から『異世界樹（ユグドラシル）』の桜色に輝く木の根や枝のような羽根が生え俺の頭には、同じく桜色に輝くケテルの王冠が現れた

（これで俺も飛べる）

俺は、桜色に輝く翼を思いっきり羽ばたかせ一気に連の居る高度まで飛び上がった

「うわぁそれ何お兄ちゃん？なんか天使みたいだよ？」

「これが俺の本当の力だ。行くぞ連、遅れるなよ？」

俺は、連にそう言って時速２００キロで空を飛んで目的地に向かった

異常気象（言うことを効かない『異世界樹（ユグドラシル）』）（後書き）

以上です

次回は明日投稿予定です

ではまた

天体観測（天気戦争の実力と影虎の謎の才能（能力）？）（前書き）

予告道理

今日投稿します

本当に原作に関係ない話ですね・・

今回で天気戦争編、今回で完結です

天体観測（天気戦争の実力と影虎の謎の才能（能力）？）

ビュウウウっと俺の身体をもの凄く冷たい風が通り抜けるが連が『天気戦争（ウェザークロニクル）』で自分の身を守っていたのでハイスピードで飛んでいた

「なぁ連、「何？」俺は正直言ってお前の親父を許せない。もし椿に何かしてたら俺は何の迷いもなくお前の親父さんを肉塊にかえちまうかもしれない。そんなところをお前に見せたくない・・・だから、お前は・」

「来るなっていったら・・・・お兄ちゃんを殺すよ？」

俺が急に冷静に人の気持ちについて考えたあげく連にこの先の戦いは、させない方がいいと思い連を止めようとしたのだが

予想外の一言で返された

「なんでお前はそこまでして付いて来るんだ？俺だけでもお前の母親と椿を助けられるだぞ？わざわざ、一生心に残る傷を負うことはないんじゃないか？」

「・・・・お兄ちゃんはやっぱり優しいね・・・でも、子供にだって譲れないものがあるんだよ♪お兄ちゃんがお姉ちゃんを助けたいのと一緒で僕だってお母さんをクソ親父から助けたいんだ。お母さんを助ける役目は、お兄ちゃんにはあげない・・・もし僕を置いていったらお兄ちゃんの頭上が常に大雨に落雷が墜ちると思ってね♪」

連は、まじめな声で俺にそう言ってもの凄く満足そうに笑っていた

（頭の上が常に大雨に落雷って嫌だな。・・・連の奴、さっきまでと違って偉く強気だな？こいつは、怒れば怒るほど真面目に物事を考えられるタイプか？俺と同じだな・・・さすがは、推定レベル５の『天気戦争（ウェザークロニクル）』さんだと、俺と同じ化け物の資格がある子供だ・・・フフフ。末恐ろしいモンスターチャイルドだな）

「なら、俺は何も言わない。ただ、俺の邪魔したら蹴るからな？」

俺は少し冗談を交えながら後ろの方で竜巻に乗って飛んでいる連にそう言いかけると

「お兄ちゃんこそ邪魔したりお姉ちゃんを助けられなかったりしたら氷付けにして北極の北極点に埋めてやる」

などと俺と連は、お互いに話し合いながらも目的地に２２時５９分に到着した

俺と連は、上空から取引場所を覗いていた

廃工場の広場に大勢の男達が居た恐らくバッドスキルとスキルアウトにマフィアの３勢力のようだ

「あ！？お母さんとお姉ちゃんが居た」

連が急に叫び出すので

連の指差す方向を見た

すると椿と連の母親がグッタリとした感じで地面に寝かされていた

「・・・あの様子、椿も母親も何か薬でもやられたかな?・・・麻薬とかじゃないよな?」

「あの人は、平気で麻薬付けとかにするよ。早く助けなくちゃ」

連がいきなり降下しようとしたその時、

ドーンヒュー

突如、下からロケットランチャーをぶっ放され

「連アブねぇ!!!!」

ドガァアアアアアアン

空中で大きな爆発が起こり俺と連は、その爆発に巻き込まれた

が俺はとっさに連と俺の前に『異世界樹(ユグドラシル)』の翼を広げていたので俺と連は無傷ですんだ

「今の攻撃、あのパワードスーツの野郎だな」

俺は、ミサイルの被弾した角度発射した角度などを割り出してうった奴を見つけた

俺達を撃ったのは、紫色と黒がメインカラーのスリムで腕と脚と足の裏に巻き付くように回転するギアが装着されたなかなかカッコイイスーツを着た人間だった

「おい、クソ餓鬼共、約束道理来たことは褒めてやるだからとっとと降りてきて大人しく捕まりな」

どうやらやたらとカッコイイスーツを着ていたのは、連の親父らしい

「クソ親父、母さんに薬まで使いやがるなんて・・・・全員ぶっ飛ばす」

連が突如キレたと思うと

俺達の居る上空の気流が乱れ

連の回りに大きな竜巻が３つできていた

「吹っ飛びな、汚れた人間に価値なんてねぇよ」

連がそう言い両手を前に突き出すと連の作った竜巻が地上にいる男達に襲いかかり始めた

すると

「野郎共、撃ちまくれ！！パワードスーツ部隊は、上空にいるガキを始末しろ」

ともはや連を諦めたらしく抹殺する気のようだ

するとパワードスーツを着た男達十人が連に目掛けて集中砲火を始めた

「んなもん効くかよ」

連はそう言いながら自分を囲むよう超強力な竜巻を作り出し
銃火器や銃による攻撃を全部防いでいた

「ちぃ・・まさか連の奴がここまで出来るなんてな・・仕方ねぇあの女とお嬢ちゃんを始末するか？来い野郎共」

そう言って椿と連の母親に銃を向けた奴ら

（させねぇよクソ野郎共が！！！！！）

俺は、椿達の周りに地面から『異世界樹（ユグドラシル）』を生やして包み込ませた

そして、突如、謎の物体が目の前に現れて驚いているパワードスーツを着たやつの一人に空中からの飛びげりをかまし

男のパワードスーツをボロボロに破壊し

隣にいた男のスーツに手を翳し『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』と大声で唱え

男のスーツに触れ

スーツを全長２５メートルの超大剣を作り出して

力任せに横に振った

その時、ブォンと言う鈍い空気をきる音がした

俺の力任せに振り回された大剣は遠心力でさらにスピードと威力を増しながら8人のパワードスーツを着た奴らを全部いっぺんに壁にめり込ませた

しかし、本命の連の親父は、俺の攻撃を飛んで交わし

足に着いたギアを高速で回転させて俺の大剣の刀身を走るように向かってきた

（何だこのスーツ、動きがもの凄く早い？）

「死ねぇクソ餓鬼！！」

連の親父（謎のバトルスーツ装着）は、突如飛び上がり俺目掛けてギアが高速回転した腕を向けてきた

「あめぇよ！！」

俺は、とっさに超大型の大剣を持ち替えて俺の前面に刀身が来るようにして防御した

ギュィイイイイイン

ガガガガ

男の拳とおれの大剣が激しい鍔競り合いをして

火花と煙が発生していた

「おいガキ、俺の攻撃は防いじゃだめなんだぜ」
男は、ヘルメットの中から俺にそう言ってきた
俺はいまいち意味が理解できず顔をしかめたその時
ギュィンンンンンンンと男の腕のギアがおかしな回り方をすると
ピシピシと俺の大剣にひびが入りだしそのヒビはどんどん広がり深くなりそして・・・俺の身体を守っていた大剣が見事に砕け散った
（なに？）
俺が驚いていると男が俺の間合いに入り込んでいて
ドス
男は、手のひらをパーにして俺の鳩尾の辺りを押して
ギュィンンンンンンンンンン
男の腕のギアが再びおかしな回転をし出して
「うぁあああああああああああああ」
ベキンベキングチャグチャグチャブシュー
「くそやろ・・・〜バタン〜」
男の腕から突如謎の震動が伝わってきたと思ったとき

俺の体中の骨や内臓、筋繊維、血管などが一気に砕けたり破裂したりした

俺は、体中から血を拭きだし倒れてしまった

「フハハハ、スゲーなこのスーツ、本当に触ったものをぶっこわしちまうなんてな流石は、学園都市ってところだな試作品もこの性能かよ・・よし、今すぐあのお嬢ちゃんをお前の元に送ってやるよ」

男は、俺を倒したことに満足して頭に手を置きながら喜んで『異世界樹(ユグドラシル)』で守っていた椿達の方向に高速で進みだした

そして、俺は、『異世界樹(ユグドラシル)』の力で死んではいないのだがいつもみたいに超高速再生が出来ず動けないでいた

それどころか椿達を防御していたはずの『異世界樹(ユグドラシル)』が突如消え始めた

(なぜだ?椿が危なくなればなるほど身体や能力が使いにくい・・・なんで?)

俺は、必死に能力を発動して回復したがっていたのだがまるで自分に邪魔されているように能力が発動できなかった

(意味が分からない・・・・・・まさか!?ありえない・・俺がいや、『俺』が椿を殺そうとしてる?)

俺は頭の中でそう考えると一気に寒気がした

死が近づいてるとかではなく、昔の事を思い出したからだ

俺の唯一で最大のトラウマ・・・3年と5ヶ月間のあの惨劇を・・

雨の日、自分の両手には、大量の血を流し力尽きたように手をだらんとさせ・・俺の手の上で死んでいる『　　』の事を・・

嫌だ・・・・・・絶対に嫌だ・・・・・ア・ン・ナ・コ・ト・ニ・ナ・ル・ン・ナ・ラ・ス・ベ・テ・ガ・ナ・ケ・レ・バ・イ・イ！！

（おえぇ・・・）

俺は、急に来た吐き気がするほどの強烈なストレスに襲われ俺自身でもよくわからない思考が働いた

その瞬間、俺の頭から生えていたケテルの王冠が少しずつ黒ずんでいた

これは、『異世界樹（ユグドラシル）』が『死世界樹（キルドラシル）』に変わる前兆だ

『異世界樹（ユグドラシル）』が『死世界樹（キルドラシル）』に変われば破壊しと死しか産まない

（落ち着け俺、落ち着け、・・・・・・椿！？）

俺は必死に落ち着こうとしていると連の親父が椿の前に立っていて

「おれはね、恋人を引き離すつもりはないからあの世で幸せにな」

俺の時と同じく腕のギアを高速回転させて椿の身体にそれをぶつけようとした

「やめろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺は、必死に手を伸ばしたが届くはずもなかった

その時だ、俺の右手から先が突如消えた

そして、

ベキベキベキ

「ぐわぁ！！！！！！！！何だこれは！！！！！！！！〜ベキベキ〜」

俺の腕が消えた瞬間、バトルスーツを着た男の身体が何かに握りつぶされるように縮み始めた

そう、男は何かに握りつぶされ掛けていた

この現象を俺が起こしているのか、はたまた、偶然起こっている現象なのかは解らなかったが

ただ、俺に今出来ることは、この奇跡が少しでも長くつづいて欲しかった

そう思っていたとき

「お姉ちゃんには手を出すな！！！！」

とれんが上空から降りてきて自分の父親に強力な電気を浴びせていた

「ぐわぁあああああ・・ああああ・・・

俺は、この声を聞いた瞬間

立ち上がり

「一体何の真似だ!!!『影千代』!!椿にいったい何の恨みがあるんだ!?」

空に目掛けて大声で叫んだ連は横で驚いて俺に「やっぱりだいじょうぶ?」と言っていたがそんなことは今は関係ない

すると再び頭の中に直接、女の声がした

〜それは、『俺』じゃなくお前が一番知ってることジャン♪てか、むしろお前しか知らないはずだよ?まぁ恨んでるのは、『俺』だけだね♪〜

「ふざけるな!!どんなことがあってもお前にだって椿は殺させない!!絶対にだ」

俺がそう叫ぶともう頭の中に声がしなくなった

「お、おにいちゃん・・本当に大丈夫?すぐに救急車とか呼ぶ?アンチスキルはすぐにここに来ると思うけど」

連がそう言ったので俺は、もういちど『異世界樹(ユグドラシル)』を発動してみると

先程よりは、断然使いやすく体中の傷を超高速再生した

そして、傷が完治した俺は、椿とそして連の母親の元に向かった

俺が見たところ連の母親は、体中に痣を作っていて様子から見ると本当に薬物付けにされたようだ

そして、椿の方は、どうやら眠らされているだけで大して問題はなさそうだった

「お姉ちゃんは大丈夫？お母さんは？」

連が必死に俺の服の袖を掴みながら聞いてきた

「大丈夫だ連、椿はなんともないしお前の母さんも良い病院で良い治療を受ければお前の知っている優しいお母さんに戻るよ・・・・アンチスキルがもう来るな・・連、俺に掴まれ」

「え？あ、うん」

俺が連にそう言うと連は俺に捕まった

（アイツが居ない以上、『異世界樹（ユグドラシル）』もまともに動くはずだ）

そう仮定し俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を展開し

椿と連の母親と連を桜色の蔓で縛って空に飛び上がった

飛んでいる最中に誰かに見られるのもアレなので連の能力で俺達の周りに大規模な濃い霧を発生させてもらって

俺は、病院に飛んだ

そして、病院に付くと俺の姿を見たカエル顔の先生と忍がやってきたので事情を話し

連の母親の治療と連の一時預かりを申し出た

快く受け入れてくれたのだが

俺の話を聞く前に忍と冥土返し（カエル）が

「キャーとら、この男の子可愛いわね♪もしかして養子？」

などと戯れ言を言われたり

「おい、君、君はそんなにもこの病院の経済活性に協力したいのかね？」

などと酷い言い方をされて半分泣きながら椿を背負って

家に帰ろうとしたとき

連が病院から走って出てきて少し遠くから

「お兄ちゃんお姉ちゃんありがとう！！！！！僕絶対に大きくなったらお兄ちゃんみたいに絶対に誰かを守れる人間になるよ！！！！！またね！！」

っと大声で言ってきて急に曇り空を晴れにしてくれたおかげで綺麗な星空が見えた

俺は、何かしてやろうと思い良いことを思いついたので実行した

「わぁ～すんごく綺麗な桜だ！！！！！」

っと連が喜んでいたのが見えた

俺は、連だけに見える位置に『異世界樹（ユグドラシル）』の世界樹バージョンを見せて

「じゃまたな」

と片手を上げて連に言った

そして、連も納得したのかしばらくすると病院に帰った

俺も椿を背負いながら帰路に就いた

そして、家に帰る途中、今日俺の手が消えて連の親父が何かに潰される状況を思い出し必死に考えながら家に帰った（アレは一体何だったんだ？）

つづく

『高速機動（ライドインパルス）』

接触兵器「振動破砕」を装備した近代型接近専用高速機動バトルスーツ。

紫色と黒がメインカラーのスリムで腕と脚と足の裏に巻き付くように回転するギアが装着されたなかなかカッコイイスーツ

『振動破砕（ウェーブショック）』

四肢の末端部から目標の物体に振動波を送り、共振現象を発生させる事によって対象を粉砕する。それによる破壊効果は対象の外装・装甲に留まらず、内部の骨格や機械部品にまで瞬時に及ぶ。

触れたものを全て破壊し高速で相手を追いつめ相手を破壊するためのスーツ。

天体観測（天気戦争の実力と影虎の謎の才能（能力）？）（後書き）

今回は本当に戦闘ばかりでした。

これで天気戦争の話は終了です

感想ください

後、今回は魔術師を募集します。

内容は、エジプトの魔術師でお願いします

出来ればメタトロンと敵対関係の魔術師が良いです

魔術のもとの神話

魔術の効果や制限など詳しく記述していただけると作品作りに助かります。

多少のチートは、ＯＫです。『黄金錬成』クラスなら全然構いません

では、また

波瀾万丈（海水浴！？）（前書き）

今回は、ただの日常話です

では、どうぞ

波瀾万丈（海水浴！？）

連の親父と戦って連の母親を救出したひから数日。
俺は、暇があれば『異世界樹（ユグドラシル）』を使用していた。
あの日からこれと言って不具合はなくむしろ使いやすくすらあった。

（アイツの邪魔がなければ『異世界樹（ユグドラシル）』が俺の命令を無視することはないな・・・『アイツ』さえなければ・・）

俺は、拳を強く握りながら窓枠にもたれて座って外を見ていた。
１３階の窓からの景色は、なかなか絶景なのだが、夏の日差しが強くもの凄く熱かった。

（アチ～、今日も暇だな～）

俺は、日差しが強いので右手で影を作った。

すると。

「お～い、影虎、そこのタンス退かしてくれ」

っといつも道理、ポニーテールのエプロンで掃除機を持った椿が俺にそう言ってきた。

「了解。」

俺はそう言って立ち上がって、椿の指差しているタンスを持ち上げた。

「サンキュー♪」

椿は、そう言いながら俺が退かしたタンスの裏を掃除し始めた。
結構埃が貯まっていた。

「よいしょと。」

俺は椿が掃除を終えるとタンスを再び持ち上げて元の場所に戻した。
そして、俺は再び窓際に座って窓の外を見ていた。
すると、掃除を終えて満足している椿に

「影虎どうかしたのか？さっきから窓ばっかりみて」

っと髪を下ろしながら言われた。

「いや、別に、なんでもないよ・・・」

俺が窓を見ながらそう言うとしばらくの沈黙が流れ…。

「・・・・・構ってくれないんだったら出て行くぞ？」

っと俺の顔色を伺うように下から覗き込んできた。

「・・・構って欲しいのか？・・・あ！？」

っと間違えて聞いてしまった。
すると椿は、プルプル震えながら目に涙をためもの凄く怒っていた。

「そんないいかたされるんならもういい！！」

と椿は、走って外に出ようとした。
俺は、（しまった!!）と思い椿を止めようと手を伸ばした。
その時、ピンポーンと家のインターホンが鳴った。
瞬間、俺と椿は一瞬フリーズした。
するとピンポーンピンポーンと今度は連続でインターホンが鳴った。

「・・・・俺見てくるわ」

俺がそう言うと椿は静かに頷いた。
俺はすぐには、インターホンには出ずドアの覗き穴を使って覗こうとすると…。
ピインポーンピンポーピピンピンポーンと急に謎のリズムに乗って鳴り出し、俺は、覗き穴を覗くと、私服姿の忍が…。
ｰ∇ｰ）σ＝σ□ピンポン!!ピンポン!!ピンポン!!ピンポン（（ｏ（＞▽＜）ｏ））きゃはは～～～♪と謎のトランス状態だったのでおれは思わず後ずさりしてしまった。

「どうした影虎？幽霊でも居たのか？いや、蛇が居たとか？」

すると今度は、椿がそう言いながら覗いた。
そして椿は、ドアの外で繰り広げられている謎の光景に言葉を失っていた。

「ナァ、椿・・・これって出なきゃだめか？」

俺が頭を掻きながらそう言うと椿は、

「どうしよう・・・正直、今の忍には会いたく…。」

椿が何かを言おうとするとガチャっとドアが開いた

「おじゃましまーす！！」

っと鍵を閉めていたはずのドアから忍がわがもの顔で入ってきた。

「「え～！！！！！！！！！！！！！」」

俺と椿は、意味不明な登場の仕方に驚いた。

「何で入ってこれるんだ？鍵締めてたぞ？」

椿が忍にそう言うと

「じゃ～ん『合い鍵』」

っとジャラジャラと大量の鍵を見せつけてきた

「な～ん～で～お前が俺の家の鍵持ってるんだよ」

っと俺は、忍の持っている鍵に手を伸ばした。

すると、綺麗に避けられ顔面にペシンと何かを張られた。

「なんだこれ？」

俺の顔に張られた紙には、『プールに行こうぜ！！』と書かれた紙が張って合った。

「・・・？」

この後、俺が忍に聞くとたまたま学園都市の最新技術の集まった場所でただで遊ばせてくれるだそうだ。

そして、そこに行くための条件が男女のペアーであることと忍に教えられた。

（・・・・・嘘っぽい）

と思った瞬間に忍から

「呼ぶんだったらカズ君と葵ちゃんにしなさいね♪特にカズくんには、断られそうになったときに断った場合は例の写真を大変な人に見せるって言いなさいね♪」

っと言われた。

その後、俺はすぐにポケットから携帯電話を取り出して一真に電話を掛けた。

俺が電話を掛けようとしている最中に忍が椿に絡んでいたが特に止めようと言う気にもなれなかった。

（別に椿が泣くほど虐めてもないから良いか）

と思い俺は、電話に集中した。

プルル・・プルル・・ガチャ

『はい？』

「一真か？死にそうな声だが大丈夫か？」

いきなり一真が死にそうな声で言ってきたので俺は、一応心配して聞いた。

『何とか大丈夫だ…。問題ない…。』

とは言って来るものの位置も以上に声に覇気がないというか・・・・・気力がない、それよりもなんとかって何？

まぁそんなのどうでも良いか♪

「そうか、変態からの伝言だ。今日プール行くから、天野も誘って来てくれ。何でも、金は向こうが払ってくれるそうだ。あと、断った場合は例の写真を大変な人に見せるとの事だ。」

『…。』

俺がそう伝えると何故か一真が黙りだした。例の写真てのが原因かな？恐らく忍にでも弱みを握られたのかな？まぁ相談さえ受ければその原因を消すか倒してやっても良いけどね♪

『わかった…。用意が終わったらお前の家に向かう…。』

マジで今から自殺でもしそうな声だった！？

「お前…へん、」

『ブチッ…。

ツー…、ツー…。』

いきなり切られた・・・・・・マジで自殺とかじゃないよな？

その後、一真が来るまでに忍が椿を泣かし掛けていたので仲裁に入ったりして時間が流れていった。

そして、ピンポーン

っとインターホンが鳴ったので椿が扉を開いた…。

「遅かったな…。」

本当に来るのが遅かったので少し文句混じりに椿が一真にそう呟くと

「悪かったな…。
それよりも…影虎は？」

「それなら奥の…「カズく～ん♪」」

椿が玄関から俺を指差そうとしたとき忍が一真に飛びかかった。

「へ？グワァ！！」
そして、一真は倒れ込んでいた。

（ハァ～しょうがない）

っと俺は立ち上がり忍の背後に静かに近づき右手に拳を作りそれを勢いよく振り下ろした

ガンッ!!っと良い音が忍ぶの頭とおれの拳との衝突で起こった。

「イッタァ!?」

忍を見ると頭を抑えていたがっていた。

「昼間ッから暑苦しいんだよ!!」

俺はそう怒鳴った。

俺の拳は何故かシューッと煙をあげていた。

「ん?」

葵に一真の頭が抱き寄せられた。

「一真は私のだよ。」

「えっ!?」

「「「おぉ~…。」」」

俺と椿は、突然の天野の大胆発言に歓声を送った

やっとそこまで進んだか♪

「えへへ♪一真♪」

「うっ!!葵!?どうした!?」

ますます、大胆になっていく天野さん。

何かおかしいような・・・。

ん?てか、よく見ると顔が少し赤くないか?

「お前、酔ってんのか!?」

一真が天野に俺と同じ疑問を問いかけると

「ムッ…。
わらひは酔ってなんか無いヨーだ♪」

「完全に酔ってんじゃねぇか…。」

やっぱり酔ってました。
そう言えばさっきからアルコールの臭いがするな?と言うことはまさか?

「おい、変態…。
まさかとは思うが、一真に抱きつきに行ったあの一瞬で天野に酒を含ませたな…。」

俺が確信を持って忍にそう聞くと・・・・・・・・・・・・・・。

「さすがとら♪よくわかったわね♪」

「エェェ!?」

一真は驚いていた。
まぁそうだろうな・・・。
この忍は能力以外であり得ないほどの怪力や高速移動を簡単にやってのける、化物(怪物)の俺ですら驚くほどの珍獣(変態)だから

な。
しかもスピードだけならおれより圧倒的に上・・・。
この屈辱たらありゃしない。

「でも、酒なんかどこに…。」

一真が忍にそう聞くと

「それは…♪」

「ん？」

忍は椿の前に立つと椿は首を傾げていた…。

（やばい！！）

俺はそう思って忍に手を伸ばすが・・・。

「ここよ♪」

「ングッ！？」

間に合わず、いきなり手元に缶に入った酒を椿に飲ませた。

「待たんかい！？」

俺は間に合わなかったが忍に怒鳴った。

「ウフフ♪遅かったわね♪
とら♪」

「かげ～♪」

「ウワァ！？」

一瞬で顔を真っ赤にして目をトロンとさせた椿が抱きついてきた。

（まずいな・・・それよりもいい加減椿は、自分の胸の大きさに気付いて俺に接するべきだ！！）

俺は、椿に胸を押しつけられて恥ずかしかった。

「いい加減離れろ…。」

「嫌だよ♪

一真♪好きだよ♪」

「へ？」

一真の方を見ると一真は一真で大変そうだった。

「離れろ！！」

「キャッ！？」

一真は無理矢理、葵を引き剥がした。

（一真よそれは忍の前ではしてはいけない・・・・。）

「ん？」

一真は、気付かぬ内に忍に首を絞められていた。

終わったな・・・。

「うっ…。」

「カズくん…、ダメじゃない？
女の子に乱暴しちゃ♪」

一真は、腕を叩いてヤバイと言う意思表示をした…。
忍は笑いながら言っていたが多分笑っていない…。
（アレで一回俺は落とされたことがある・・・。
嫌な思い出だ・・・。）

「ゲホッ…ゲホッ…。」

「これに懲りたら女の子に乱暴しちゃダメだからね♪」

（今回は許してもらえたようだな・・・俺はここから逃げる。）

そう思ったとき恐らく俺と同じ事を考えていた。
一真と目があって頷き合った。
よし！！
せーの！！よーい！！

ガシッ！！

ガシッ？
俺と一真が走り出そうとしたとき、俺と一真の服が三本の腕に捕まれた。
俺達はギィ～っと首を後ろに向けると、天野に忍、そして椿が物凄

く良いニッコリ笑顔で笑っていた。
しかし、逆にそれが怖かった。

「「「2人共、何処に逃げようとしてるのかな♪」」」

「「…。」」

この言葉に俺達は言葉を失ったついでに一真は、逃げる気も失ったらしい・・・。
なら、俺だけ逃げよう・・・。

「ハッ!!」

俺は、とっさに上着を脱いで走り抜けた。

「「「なっ!?」」」

「ウォオ!!」
(忍法、空蝉の術成功!)

と思い後は逃げるだけと思い逃げようとすると

「待てやコラァ!!」

「グオォ!?」

俺が走り去ろうとする一真が逃がすまいと思ったのか手を伸ばして俺をガッシリ掴むから見事に転けた。
(一真の大馬鹿野郎!!!

と怒鳴りたかったが椿が俺の首に手を回してきて

「かげ～♪逃げちゃダメだよ♪」

っと耳元で言ってきたので・・・

「一真もだよ♪」

「「…はい…。」」

俺達2人は仕方なく逃げようとした事を反省して、女性陣（特に俺は無邪気な女帝～（ピュアエンプレス）椿～）に誓うはめになった…。

……

……

……

そのあと、みんなが支度を終えて車に乗り込んだ…。

俺、一真、天野は後部座席に椿は助手席（途中前に乗りたい、前に乗りたいと椿が我が儘を言い題したため）に乗っていた。

忍は忘れ物をしたらしく今はいなかった。

てか、人の家で何を忘れるんだ？

ただ、椿がもとに戻ったら暴走は間違いないな・・・。

俺って惨めすぎる・・・。

・・あ！？そうだ！！

「一真、シートベルトはしっかり閉めておいた方が良いぞ。」

俺は経験から一真にアドバイスした。

「へ？」

一真が間抜けな声と顔をしていた。

「わかってるんだが…、こいつが腕から離れてくれなくて…。」

と一真が説明してきた。

「早くしろ！！変態女医が帰ってくる前にシートベルトを閉めなきゃ…「お待たせ♪」…。」

「…。」

俺は、一真と天野のことを心配して強く言おうとしたが、噂をすればなんとやら…忍が帰ってきて、俺と一真は沈黙した…。

「ま、まぁ、シートベルトは面倒だからいいや…。苦しいしな…。」

「死んでも知らんからな…。」

俺は最終警告だけして少しだけ眠ることにした。

（一真に天野・・・・・あの世で幸せにな・・・・・・・・グ～・・・・ｚｚｚ・・・。）

……

……

五分後…。

「着いた♪」

「気持ち悪い…。」

「大丈夫…一真？」

「だから言わんこっちゃない。」

俺達は現在大きな建物の中にいた。
何でも、ここに変わったプールがあるんだと言う話だ。

ちなみに一真は、忍の運転に酔ったらしい・・・。
明らかに気持ち悪そうな顔をしていた。
天野の方はそれほどでもなかったようで普通にケロッとしていた。

「カズくん。
男の子何だからしっかりしないとダメよ♪」

「椿ちゃんの言う通り♪
おねぇさんの運転でそこまでなってちゃもう乗れないわよ♪」

椿に関しては酔いが悪化しているぞ・・・・。

「あれ？一真に影虎？」

「「ん？」」

俺達は聞き覚えのある声がしたのでそちらを向いた。
するとそこには…。

「当麻！？」

「それに…土御門にインデックスにピアスまで…。
何でここにいるんだ…。」

「よう。
何でって土御門がプールに行こうぜって誘ってきたから…。」

「そう言うわけだにゃ。」

「ボクからしたら何でかずやん達の方がおるかきになるんやけどな。」

当麻が言うと、土御門はメイドと書かれた団扇を半回転させて妹と書かれた方を表にすると、サングラスをずらしてニッと笑っていた。
ピアスはセンスを扇ぎながら言ってきた…

「なるほど…、目的は一緒か…。」

「そうみたいだな…。」

「なんや、一緒やったんかいな。
まぁ、ここにおるちゅう事はそれ以外あれへんやろうけどな。」

ピアスは笑っているが、こんな偶然ってあるんだ・・・・。
世の中って意外と狭いんですね。

「ん?かずやん、とらやん。
そっちの二人は誰ぜよ?」

「「えっ!?」」

土御門は椿と忍を指差した。
因みに天野はインデックスとはしゃいでいるようだ。

「え～と…。」

（不味い、椿のことが女だとばれてしまうな・・・・・・こうなれば・・）

「土御門？何言ってんだ？
あいつは…グホッ！！」

「あっ♪悪いな当麻♪」

当麻が椿の事を張らそうとした瞬間に俺は荷物を投げて見事に当麻の鳩尾にクリーンヒットさせて当麻を倒した。
そのあと俺は荷物を拾いに行ったついでに当麻に耳打ちをしていた。

「いったい何するんですか！？」

っと当麻が怒鳴ってきたので

「上条君〔ポン〕もし椿のことを女とバラすような発言があれば・・・・わかるよな？」

っと俺が満面の笑みで言うと上条は、顔をひきつらせながら頷いた。

（よし、解決して良かった・・ん？）

俺が当麻との話を終えて一真の方を見ると一真が椿と忍を指差して

「え～と…、あっちが桜井　忍さんで…。
こっちが…え～と…桜井(さくらい)…蕾(つぼみ)だ…。
忍さんの娘さんだ…。」

椿に物凄い偽名を付けていました。

（あんな嘘酒に酔った椿が乗ってくれるわけがない・・・・・・。
こうなれば全員ここで・・・。）

「どうも～♪桜井　忍って言って病院では女医をやってるわ♪おねぇさんって呼んでね♪」

セクシーポーズを決める忍・・・・良しもう世界は終わったも同然だ！！！

「桜井　蕾って言います♪
よろしくね♪」

（予想外にノリが良かった！！！！！！！！！！）

俺は、予想外の事態にスライディングしながらズッコケた。

「へぇ～こりゃまたかずやんととらやんの周りにこんなに美人さんが増えたなんて、二人ともすみに置けないぜよ。」

「あぁ…、普通の美人なら良かったんだがな…。」

「？」

一真が目を逸らしてそう言うと土御門は首を傾げていた。

「ん?はてな?蕾ちゃん、どっかで俺と会ったことあらへんか?」

「えっ?」

ヤバイ!?こう言う時だけ（女のこと）勘がいいピアスがいやがった・・・。

どうするどうやって言い訳すれば良いんだ?

「あら?蕾ちゃんの知り合いなの?

それなら『お母さん』にちゃんと言いなさいよ♪」

えっ!?お母さん?もしかしてそのネタで行くの?2年まえにもしてたよねそのネタ・。

「えっ!?でもお母さん?

私、初対面だよ♪

多分、誰かと勘違いしてるんだよ♪」

しかもノリがもの凄くいい・・・・俺って後で八つ当たりで死なないか?

「う〜ん…、まぁ、えっか!!

蕾ちゃん、これからよろしく頼むわ。」

「よろしく♪」

ピアスも納得してやがった…。

まぁ、いっか・・・俺が消し炭になるだけだ。

……
……
……
「…なんだこりゃ…？」

あのあと俺達は着替えて中に入ってみると一真がいきなり声を上げた…。

「かずやん知らずにここへ来たのかい？
なら、女子達が来たら面白い物が見れるにゃ～。」

「？」

土御門の言いぐさは何かもったい付けてるような言い方だった・・・・。
ここって確か最新の技術がどうのこうの言ってたな・・・・。
確か詳しく忍が話していたような・・・。
はぁー俺って椿や忍と違って実は、機械が少し苦手なんだよな・・・・。
能力でいつもどうにかなるから人には知られてないけど・・。

「ん？うわぁ！？」

などと考えていた瞬間。
いきなり白かった筈の空間が綺麗なビーチに変わったので俺は驚いた。
しかも、リアルに砂浜が熱いし、潮の香りもする。
何よりも暑い。

「これは、すごいでんな。」

「確かに、ん?でも、インデックス達は?」

当麻の言葉にそう言えばと思い、俺達は周りを見渡した…。

「ん?なんだ?あれは?」

よく解らない大きなステージがあったので俺は、少し大きな声でみんなに聞いた。

「えっ!?」

っと一真が驚いていた。

その時

『皆さんちゅうもーく!!♪』

「「「へ?」」」

「おっ♪なんやなんや♪」

「何か面白そうな事が始まりそうだにゃー♪」

黒いビキニを着た忍（年を考えろと言いたいが言ったら言ったで砂浜を両者の血で染めることになりそうなので言わない）がステージの上でマイクを持って叫び、俺、一真、当麻はまの抜けた声をあげてしまい、土御門とピアスに関しては楽しそうにしていた。

このテンションの違いから恐らくノーマルとアブノーマルの違いなのだろう。

『それでは第一回水着美少女コンテストを始めま～す♪
では、始めましょう♪
エントリーナンバー1♪
砂浜の白い天使♪
インデックスちゃん♪』

「インデックス！？」

ステージの奥からピンク色の水着を着たインデックスが現れて当麻は驚いていた。
てか、いきなりなんなの？水着？椿が水着なんてきるのか・・・？
・・・そうだった、酔っぱらっていらっしゃった。

「あれは、あれでありやな。」

「青髪の言う通り、良い感だにゃ～。」

当たり前のように評価を出している変態二人・・・・。
この際だからお前らのテンションの１０パーセント位分けてくれよ・・・。
後のことが気になって素直に楽しめない。

『では、続いて参りましょう♪
エントリーナンバー2♪
キュートな悪戯小悪魔♪
天野　葵ちゃん♪』

「ヤッホー♪」

「やっぱりか…。」

黄色いフリルの着いた水着を着て天野が登場するなり、一真さんは頭を抱えていた。

「おぉ!!葵ちゃんかわいいで!!」

「眩しいぜよ!!」

再びまともに審査するアブノーマル2人・・。

お前達ならきっとどこぞのマンモス高校で13組の中でもえらばれし13人に加入できるよ。

そして、フラスコ計画の避研体にでもなって素晴らしいお薬でも作ってください。

「チュッ♪」

「なッ!?」

全員が天野に未だに注目するなか、前屈みになって一真に向けて投げキッスをしていた。

おあついことで♪

「ハッ!?」

俺は一真の声を聞いて一真と同じ方向を見ると土御門とピアスの後ろの方で黒いオーラが見えた。

さてはお前ら、アブノーマルだけじゃ飽きたらず念能力にまで手を出したのか!?

おぞましいオーラだ！？

『さて、最後にエントリーナンバー３♪
男子のみんな鼻血注意だ♪
桜こ…「「オイッ！！」」ゲフンゲフン、桜井　蕾ちゃん♪』

「はぁ～い♪」

「「おぉ～♪」」

最後に椿がシンプルな白い水着に身を包んで現れると土御門とピアスは声をあげていた。

俺も少しだけ見とれてしまったが後に待っている災厄を考えるとやはり気が乗らなかった・・・。

忍…完全に今椿の名前を言おうとしたな…。俺と協力者の一真が指摘しなかったらどうなってたか・・・。
・・・はぁでも俺酔いが醒めた後に椿に泣きながら燃やされるんだろうな・・・。
・・・考えただけで頭が痛くなってきた・・。

そのあと、誰が一位かを決めていたが、５人中４人が椿に票を入れて椿が優勝した…。
当麻はそのあとインデックスに噛みつかれていた…。
一真は誰にも票を入れてなかった為、忍と天野に追い回されて捕まり、首をまた絞められていた。

「それにしても蕾ちゃんは、予想外のナイスバディやったな～。普通にロリ属性やとおもうたんやけどあの体つきは・・・。も～う～辛抱たまりまへんで～。蕾ちゃ～んボクとちょっとお茶で・・あれ？と、とらやん？ど、ど、どないしたん？ボク、何か気に障るようなことでもした？」

突如、青紙ピアスが蕾（椿）にちょっかいを出そうとしたようで俺が微笑みながら見ていると何故かピアスは、顔色を悪くして俺を怖がっていた。

本当に何でだろう？

まぁいいや♪

「なぁピアス「は、はい！？」ちょっとスイカ割りしたいからさ～埋まってろ！！！」

「ぇえええええええええ！！」

俺は、何となく勢いでピアスを砂浜に肩まで埋めた。

その後に椿が後ろから抱きついてきて

「コラ、影、お友達は虐めちゃだめでしょ？お姉ちゃん許しませんよ？」

っといきなりの姉属性追加！？

「なんで、急に姉属性追加してるんだよ？お前は俺より年下だろ～バチバチ～ガハ！！」

俺が後ろに抱きついている椿の文句を言おうとすると椿に放電されて感電し、少しだけ意識が飛んだ。

……

……

…

「みんな♪ビーチバレーしましょう♪」

忍が何処からか、ボールを持ってきて言い出した。
俺はこの声で目が覚めた。
女子の皆さんとピアスと土御門はやる気満々だ。

「「ハァ…。」」

俺は一真とため息を吐いた…。
そのあと、くじ引きで誰が審判をするかを決めた…。

（めんどくさい・・）

「ありゃ～。
どうやらハズレクジを引いちまったにゃ～…。」

どうやら土御門が不出場のようだ・・・。
・・いいなぁ俺、サッカー以外はあんまり球技ってやったこと無いんだよな～
。

「あらら♪残念でした♪
これなら、美女対野獣で出来るわね♪」

「「「誰が野獣だ!!誰が!!」」」

俺、当麻、一真が同時に声を上げた。
あまりに失礼だろ忍!?何だ俺は獣か?確かに『ビースト』ってたまに呼ばれるよ?でもいくら何でも酷すぎないか?
てか、ピアスは野獣でも良いのかよ。
笑ってるけど。

「細かい事は気にせず始めるわよ♪」

そう言って、いつの間にか現れていたビーチバレーのラインとネットがある場所に向かい、男子対女子のビーチバレーが始まった…。
(女ども俺様を獣扱いしたことを後悔させてやる・・・・。
圧倒的な点差を叩き込んで合法的に泣かしてやる・・。)

俺は密かにそう誓った。

「因みに真面目にしなきゃ殺すわよ♪」

目が笑ってない…。

「それ♪」

忍のサーブからビーチバレーが始まったのだが…。

「へ?グハッ!?」

当麻の顔面にギュルギュルと音をたてながらいきなり直撃してボールは空を浮いた…。

（さすがは、不幸の避雷針だ♪
だがその不幸俺様が勝利に変えてやる！！）

「オラァア！！」

俺がスパイクをすると、不思議な事にズガーンと音を立てて砂浜にボールがめり込みました…。
力加減は・・・・・・無しだ。

そのあと、女子チームが何か相談していた…。

「さて、もういいわよ♪」

「ほな行くで～。
よっと。」

どうやら、準備が出来たらしく、忍が言うとピアスのサーブから始まった（ミスったら殺す）。

「エイッ。」

天野がレシーブをすると、見事に訳の解らない場所にボールが飛んでいった。
何かの作戦か？

「ちぇりおー！！」

「「「えっ！？」」」

しかし、いきなりボールが何かに叩かれたようにカクンッと曲がり地面に着くと全員が声を上げた…。

「フフ～ン♪」

「「「なっ！？」」」

いきなり、ネットの向こう側で忍が姿を表した。
透明人間（スケルトン）の能力で姿を消してやがったのか？・・・・・・俺としたことが不覚。

「ちょっとまて…、それってアリなのか…？」

「ダメってルールは無かったでしょ♪
男なら文句を言わない♪」

（確かに駄目とは言っていないな…。
ここは忍に賛成。）

「土御門…アリなのか…？」

一応審判である土御門に一真が聞いた。
すると…。

「面白そうだからアリってことにしとくにゃ～。」

女どもは能力有りなんだから本当に手加減なんていらないよな？よ

し、合法的に喰い殺す・・

……

……

……

「一真!!いったぞ!!」

「任せろ!!グアッ!?」

ボールが上に上がっていたので、スパイクする為に一真が飛び上がろうとするといきなり転んだ…。

「何いきなり転んでんだ!?お前は!!」

「いきなり、重力かけられたんだよ!!

ギブ!!ギブ!!」

俺は一真にヘッドロックを食らわせた。

やる気無いのかこいつは・・・。

……

……

……

「当麻!!ブロック!!」

「まかせ…「とうまぁ～!!」…ヒッ!?」

当麻がブロックしようとしたが、インデックスが牙を光らせて接近すると、当麻は怯えて尻餅をついた。

「何やってんだ!?お前は!!」

「一真!!悪かった!!今のは反射的なんだ!!許して!!ギブ!!」

一真は、怒鳴りながら当麻にコブラツイストをかけていた。

頼むから真面目にしてくれ…。

……

……

……

「影虎!!行ったぞ!!」

「任せとけ!!」

俺は飛び上がり、ボール目掛けてスパイクを決めようとしていた。

やっと点が入る。

「カゲ～、やめて…お願い…。」

「ウオッ!?」

「ヘブッ!?」

椿が涙目でウサギのように怯えた声でおねだりしてきて、身体が勝手に反応して半回転してスパイクし、当麻の顔面にクリーンヒットした…。

(あ?・・・・・ごめん当麻)

「なぜ!?」

一真が驚いたまぁ当然か。

「と、当麻?
大丈夫か?」

俺はすぐに横で起きあがり口元を手で拭っている当麻に駆け寄った。

「…影虎…舌出してみろ…?」

「へっ?舌?」

当麻がいきなり訳の分からないことを言い出した・・・頭大丈夫か?

「そう、舌だ。
こんな風に、ンベッ。」

そう言って当麻が舌を出す手本を見せてきたので。

「ンベッ…。」

俺が舌を出すと、当麻は助走をつけて走り出した。

「何をお前は女のおねだりに負けとんじゃい!!」

「ンガッ!!」

俺はいきなり当麻に舌を出した状態でアッパーを決められ俺は激痛のあまり仰向けで倒れた…。

「みんな何やっとんねん!?
しゃあないな~。
ボクに任せとき。」

ピアスが扇子を口許で開いて、自信満々に言っていた。

……

……

……

「ほな行くで!!
ほっ、ん?」

ピアスがボールを高く上に上げて、サーブをしようとすると何かを見つけたみたいだ…。
その視線の先には…。

「ウフ~ん♪」
「…。
イタッ。」

忍がセクシーポーズをしていて（自分の年を考えろ忍）、ピアスは見事に悩殺にかかり、見とれていると頭にボールが当たっていた…。
てか、俺にはアイツに色気があるとさえ思えない。
とりあえず♪

「「「テメェは埋まってろ!!」」」

「わぁ！！ちょい待ってぇな！！いくら何でも二回目は酷いで！！助けてぇな！！」

俺達は三人係りでピアスを砂浜に埋めた…。
全く…。

「ピアスの代わりだ…。
土御門…入ってくれ…。」

「了解だにゃ～。」

一真が土御門に言うと、土御門はニッと笑ってＯＫした。
そして、ピアスに変わって土御門が入った…。

……
……
……

「ホイッとにゃ！！」

土御門はそのあと、どんどんとスパイクを決めて点差を縮めて行く。
こいつは役に立つ！！
スパイクやブロックを土御門に任せれば問題はない！！
「土御門！！ブロックだ！！」

「了解だにゃ～！！」

そう、言って土御門は忍のスパイクをブロックしようと飛び上がった。

「あっ♪あんなところに妹メイドさんがいるわよ♪」

「えっ♪どこだにゃ♪」

そう言って、土御門は別の方向を嬉しそうに見た。
そして…。

「うそ♪ちぇりお♪」

「ホブッ！！」

見事に忍のスパイクを顔面に食らう羽目になった…。
やっぱりお前もバカだ・・・。
俺は手を頭に置いて呆れていた。

「土御門…大丈夫か…？」
「お、お星さまが見えるぜよ…。
ガクッ…。」

そう言って、土御門は伸ばしていた手をガクッと下ろして戦闘不能となった…。
気絶する威力って…。

「どうするよ…。
女子チームは俺達の弱点を知り尽くしてるぞ…。」

「「う～ん…。
ん？」」

俺と当麻が悩んだ。
そして、ある一つの解にたどり着いた。

「な、何だよ？」

「よくよく考えてみたんだが。」

「一真って弱点あるのか？」

「へ？」

恐らく当麻の考えが同じであればこう考えているはずだ。
当麻のように恐怖している奴もいない…俺のようにおねだりされても問題はない…。
多分、女にも興味も無ければ、もちろんメイド等にも興味は無い筈…。
つまり、一真は弱点がないと言う結論だ。

「いける気がする…。」

「「よし！！頼んだ！！」」

俺と当麻は、最終兵器（リーサルウェポン）『負導一真』に人類の未来を掛けた。

……

……

……

「一真！！ブロック！！」

「おう！！」

一真は忍のスパイクをブロックしようと飛び上がった。

その時…。

「おねぇさんの邪魔したら…♪わかるわよね♪」

「…。」

忍の言葉によって、なぜか手を引っ込めてしまい点をいれられてしまった…。

「このバカ野郎!!」

「何がいける気がするだ!!
弱味握られてんじゃねぇかよ!!」

「イテッ!!チョッ!?痛いって!!
袋叩きはやめろ!!」

怒りを抑えきれなかった俺と当麻は、一真をとにかく蹴りまくった。

……

……

……

そして、滅茶苦茶なビーチバレーが終わった…。
勝敗は当たり前だが、女子チームの勝ち…。
俺達のビーチバレーの敗北の理由はチームワークの無さと、お仕置きの時の傷、そして、何よりも弱点を知られ過ぎてることだった…。
何やってたんだか…。
そのあと時間が来たようなので当麻達と別れたあと、地獄のドライブで俺の家に着いた…。

「一真、休んでいくか…?」

「そうする…。」

「私もお願い…。」

今回はシートベルトをしていたのにも関わらず一真と天野は俺の家のソファーでダウンした…。

天野は、酔ってなかったらダメらしいな…。

「二人とも♪はい♪これ♪」

「「ありがとうございます…。」」

忍が一真と天野に笑顔で飲み物を持っていった。

「さ～て、俺は、酒でも飲んでゆっくりしようか・・・。

・・あれ?酒瓶が一本足りない?」

俺は、酒瓶がないことに気付いて周りを見渡すと空っぽの酒瓶が転がっていて、俺の目の前には、子供になっていて酔っぱらった天野に抱きつかれて苦しんでいる一真と面白そうに椿に酒を飲ましている忍だった・・・。

その後は語る必要もない。

この間と同じように過ごした今回は、酒豪の忍が居たので修正は意外にすぐ付いて一真と天野はそのまま寝て椿は俺に絡んでくると言う感じだった。

その後目覚めた一真は、天野を背負って家に帰って忍は、その後、

おれんちにあった酒を2~3本飲み干して飲酒運転して帰った。

事故でも起こせばいいのに・・・・・。

まぁあいつのおかげで今日は楽しかったけどな・・・・・。

「あ、こら椿!!勝手に酒のむな!!」

こうして今日は終わった。

つづく

波瀾万丈（海水浴！？）（後書き）

以上です

ではまた来週

天変地異（締め出し）（前書き）

本日は、３話連続です

天変地異（締め出し）

いきなりだが、
今日という日が来てしまった…。

今日の天気は、雲一つない快晴で気温も夏にしては熱くなく肌を通り過ぎるそよ風が涼しくまさに最高の日と言える日に・・・・・
俺は、我が家の我が儘姫こと桜小路　椿さんにある一言を言われた。

「なぁ影虎・・」

俺は目覚めたばかりで目を擦っていたときに先に起きてソファーに座ってテレビを見ていた椿さんにいきなり

「ちょっと家にお前が居ると邪魔だからブラジルのアマゾン川でネッシー捕まえてきて。」

っと唐突に真面目な眼差しで言われたのだ。
さすがに学園都市の模試などで常に一方通行さん達と並んで満点を取っている俺でもこの発言は、一種の外来語にしか聞こえなかった。

「あの～椿さん？もういちど言ってくれません？」

っと俺が聞き返すと椿さんは、もの凄く機嫌が悪い顔でつまらなそうに俺を見ながら

「影虎～・・・・・『私』は、今非常に機嫌が悪いんだ～。だ～か～ら～あんまり怒らせるなよ？今は、本当に機嫌が悪いんだ」

っと言われた。
あぁそう言うことね。

「今日が〝ガァン〟の日だから・・・イタい・・・。」

俺が喋ろうとした瞬間に椿にチャンネルをアゴにぶつけられた。

「何するんですか？」

俺が痛さで半泣きになりながら聞くと

「お前には、デリカシーがないのか？馬鹿虎！！」

っと立ち上がって怒鳴られた。

「デリカシーってお前な、３日くらいテレビアニメが見たいからってだけだろ？」

っと俺が言うと椿は、顔を真っ赤にして

「少し違うわ！！出て行け！！！３日は帰ってくるな！！！！！！！」

っと俺の荷物がつまったキャリーバッグを投げつけてきた。

こうして俺は、家を追い出された…。

（イテテ、何だよ椿のやつ・・・あ！？・・・・もしかして今日だったのか・・・。

今回は間違いなく俺がデリカシーがなかったな・・

はぁ～だから椿のやつキャラ（人格）が違ったのか。・・・まぁいいや、ブラジルに行こう・・・あれ？パスポートが無い！？・・・椿さん・・生理痛が苦しいのはわかります・・でも、パスポートはください・・本当にどうしよう・・）

そして、十分間悩んだ挙げ句に俺は・・

ピンポーン。と一真の家の前で天野と一緒にあったのでそのまま一真の家のインターホンを押した。

「ヤッホー♪」
と天野がハイテンションで挨拶
「よう。」

俺はローテンションで挨拶すると

ガチャ…。
バタン！！

「「何故、閉めた！！」」

扉を閉められたので勢いよく扉を力ずくで開いた。
すると、一真は携帯を取りだした。

「ダメー！！」

「グハッ！！」

天野が飛び付いて物の見事に一真は押し倒された…。

熱々だな・・・（そういえば、俺と椿も昔、どうすれば恋人？という疑問にぶつかって無理に恋人ごっこして今みたいに飛びかかられたっけ～）

「一真、何処に電話しようとしたんだ？」

そういえば、と思いだした疑問を問いかけた。

「イテテ…アンチスキル…。」

と起き上がりながら答えてきた一真さん。

って！！なんてところに連絡するきだ～！！

「なるほど、お前の部屋を二人の血で染めてやろうか…？」

少しイラっとしたので一真を脅すと

「何で私まで！？」

とまねけな解答をしながら俺は睨みを効かせて一真を睨みつけて言った。

そして、天野すまん…何となくだ。すると一真が・・

「…良いアッパーだな…。
利いたぜ…。」

「そりゃどうも…。」

ムカついていたのか俺にアッパーを決めていた。
しかし、俺は平然な顔で受け止めた。

まぁ、それから少しの間にらみ合い天野に止められたのでとりあえず、一真の家の中に入った。

「んで、影虎は何のようだ…？
キャリーバック何か持ってきて…？」

「それはだな、話せば長くなるんだが…。」

俺は一真の問いにそう答えた。

「？」

一真は首を傾げながらも俺のグチともいえる話を聞いてくれた。

……

……

……

「で、椿に家を追い出されて行こうとしたのはいいが、パスポートを忘れて家にも取りに行けずに、現在椿はこれと同じアニメを見ていて、泊めてくださいと…？」

「…はい…。」

恐らくそうなんです。もう一つの理由は、椿が自殺しかねないので言いません。

一真は今天野が見ているテレビアニメを指差して尋ねてきたので、俺は俯いて答えた…。

「ハァ…、お前もちょっと椿のこと甘やかし過ぎなんじゃねぇのか…？」

「すまん…。

どうも、椿には逆らえなくて…。」

ごもっともなことを言われて俺は、黙るしかなかった。だってあいつは、俺のすべてを賭けてでも護りたい女だから・・。

「今回だけだぞ…全く…。」

「恩に着る…。」

一真がＯＫを出してくれた、俺は感謝の気持ちを表すために頭を下げた。

マジでありがたい♪

「私も♪」

「「えっ！？」」

天野がいきなり手を上げて意見してきたので、驚いた…。

完全に忘れてた…。

「一真、私も泊まっていい♪」

「ダメに決まってんだろ…。」

「何で？」

一真がそう言うと天野はキョトンとして首を傾げた…。

「あのな…、男二人と女一人だぞ…？
何があるか解らないだろ。」

一真はともかく俺は、なにも絶対にしないから安心していただきたい。
俺の好みは、椿か今世紀最大の悪女だから天野は、カウントに入れない♪

「そんなの平気だよ♪
ハグとかキスなら一真にしてるし♪」

「えっ！？やっぱりお前達って…。」

などと俺が考えていると天野が衝撃の発言をしたので俺は驚いた。

「ちっがーう！！
ハグは一方的にやられただけで、キスに関しても無理やり頬にやられただけだ！！」

一真の説明で俺は一真を見下す目に代えた。

（何で天野にリードされとるんだこいつは？俺なんて椿に、リードしてくれないんだったら別れるって言われたことあるのに・・）

「何だよ？その目は…？」

「いや、別に…。
それよりも、天野。
逆の発想でお前が椿の家に行ったらどうだ？」

と俺は話の内容を変えた

「ほぇ？」

俺が一気に話を変えて椿の家に行かせる提案をした。
しかし…。

「影虎…やめておいた方がいいぞ…。」

「ホワッツ！？」

何故？
すると

（今の現状を椿に話されてみろ…？
トラブルになるのは目に見えてるぞ…？）

（…確かに…。
でも…天野はどうするんだ…？）

俺達は小声で話すと俺は一瞬考えて賛同した…。

しかし、それによってまた問題が増えた。

「…ハァ…仕方ない…。
葵…泊まっても良いが、何が起きても責任は持たんからな…。」

「はぁ～い♪」

どうやら一真が了承してくれた。
迷惑を掛けるな♪

「ちょっと食材の調達に行ってくる…。」

といわれたので俺は

「俺が行ってくるよ。」

っと立ち上がろうとして、言った。

「いや、良いよ。
客に動かせる訳にはいかねぇよ…。」

「そうか？なら、これだけは渡しておくぞ。」

そう言って俺は３００円を渡した…。

「これは？」

「飯代。
天野から聞いたぞ。

３００円徴収するってな。
どうせ天野からもう、渡されてんだろ？
だからな。」

前に椿からそういう話を聞いたからな

「確かに３００円は徴収したぞ…。
じゃあ、行ってくる…。」

「気をつけてな。」

俺はそう言って一真を見送った

……
……
……

「ねぇ、影虎君。」

「ん？何だ？」

俺は一真が行った後、すぐに天野に呼ばれたので俺は驚きながらも
応対した。

「その、一真って何で私が意識を失った時にあんなになるまで助け
てくれたの…？」

「…。」

あぁそのことね…う～ん、話て良いのだろうか？

一真じゃないんだから分かるわけ無いんだけどな…。

「さぁな。
でも、あいつはかなり自分を責めてたらしい。」

「えっ!?」

「へんた…忍から聞いた話だけど、お前、かなり天野弱って言われるのが嫌だったらしいな。」

「あっ…。
…。」

「大丈夫か?顔が真っ赤だぞ?」

俺が考えていると天野の顔がドンドン赤く染まっていた。

「だ、大丈夫、大丈夫!!続けて」
と言われたのだがドンドン顔が赤くなりながら言われてもあまり説得力がない。

「あ、あぁ…。
まぁ、毎回見舞いには来てたらしいぞ。
見舞いに来ては忍に幻想御手(レベルアッパー)の解析は出来たかって聞いてたらしい…。」

出来るだけ遠回しに伝えてやった。

「…。」

これだけヒントをあげたんだから気付よ～？

「そっか…傷つけたから…。」

天野はベッドの上で体育座りで膝に顔をつけて呟いた…。

「天野、それは違うと思うぞ…？」

「えっ！？」

俺は明らかに違う方向に考えているであろう天野の考えを否定した。

「確かに、一真はお前の事を傷つけたから助けたかも知れないが、もうひとつ理由はあったと思うぞ。」

俺がそう言うとそれって一体何？みたいな顔をしていたので

「あいつな、お前が倒れたあと、かなり様子が可笑しかったぞ。思い悩んでいたと言うより、追い詰められて死人みたいだったな。目には光が宿ってないし、元気も無いし椿の事を天野って呼び間違えた時なんか一人でどっかに行ったしな。それに、当麻から聞いたらその日の夜飯を一人分作りすぎてお裾分けに来たらしいぞ。」

っと再びさりげなく助言をしてやった。

「…。」

すると天野は唖然としていた。

「それに、助けれる可能性が出てきた時なんか傷だらけの体なのに無理してでも出掛けようとしてたしな。お前を傷つけただけで普通ここまでするか？
ただ一人の女の為に…。」

っと優しすぎるくらいの助言をすると

「じゃあ、何で一真は私を傷つけたから以外の理由で助けてくれたの…？」

「さぁな。でも、多分あいつはお前がいたら楽しいんじゃないのか？」

「えっ！？」

まだ、顔をしかめている天野をみてえぇ～い、どんだけネガティブなんだこいつ？椿と性格が違いすぎて腹がたってきた…よし！！

「あいつはもしかしたら口ではめんどくさそうに言っているが、本当はお前の世話を焼くのが楽しいんじゃないのかって俺は思うな。まぁ、俺が言うことなんか宛にならんけどな。」

俺が最大究極大サービスな助言をしてやった。

正直、これでまだ自信がないとか言い出したら…｛バキボキ｝ハハハ…我慢の限界だ…。

「ううん♪

かなり、元気付いたよ♪
ありがとう♪影虎君♪」

やっといつもの天野に戻り元気付いた。ようやくだ。
やっと…長いような短いような。

まぁいいや

「俺からも聞いていいか？」

一つ気になっていたことを聞きたくなった。

「うん♪良いよ♪なに♪」

天野は質問を許可してくれた。

「そうか、なら聞かせてもらうが…。」

掛かったな天野…今からは、一切の気遣いなしの『絶対時間（エンペラータイム）』だ！！

「お前、一真の事好きだろ？」

ずっと直に言ってみたかった台詞を惜しみなく言い放った

「にゃッ！？」

天野は何故か猫みたいな声を上げて驚いていた。

なかなかおもしろい反応するなコイツ♪
かなり前、ちょっとだけ一真の記憶を呼んだ時、趣味に天野イジリ

とあったからな♪

「ち、違うもん！！
周りにはそんな風に言われてるけど、わ、私は好きな人いないもん！！」

そう言って天野は顔が赤くなったからそっぽ向いてしまったが、俺はチラッと天野の手を見た。

「一真の言う通りだな。
お前は嘘をつくときに一真と同じ癖があるんだな。」

「ッ！？」

やっぱり気づかれてる！！って顔をしていた。

「好きなんだな？」
悪いが遠慮は無しだ。

「…はい。」

勝った。
俺は、心理戦に勝ったぞ！！さぁずっと俺のターンだ！！

「どこまで進んだんだ♪」

だめだ、楽しすぎて喧嘩じゃないのに牙桜の時みたいに暴走しそう。

「え～と…。さっきも聞いた通り…頬にキスまで…。」

「告白するつもりは？」

「…この関係を壊したくないから無いね…。」

「…はぁ…。」

ついついため息をついてしまった。

「何で！？」

こいつ、あの我が儘姫と同じ性別とは、おもえんな…

「お前は、椿から聞いた通り本当に逃げ腰だな…。」

「仕方ないじゃん…。

だって、一真私に興味無さそうだし…。」

また、天野のテンションが下がってしょんぼりしてしまった…。

「別に言わなくても良いが、一真に他の彼女が出来て後悔しても知らねぇからな。」

俺は、昔コイツと同じ考えだったから無償に腹がたったんだな…同族嫌悪？

「えっ！？

う～ん…。」

「はぁ…。

まぁ、別に今すぐ決めなくてもゆっくり考えたら言い。
それに、あいつは見ててわかったが、極度がつくほどの鈍感だから、お前から言わなきゃ気づかないと思うぞ。
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」
「うん…。
ありがとね♪」

本当に世話のかかるお人で・・・。
一真も頑張れよ♪

「ただいま…。」

「あっ♪一真♪おかえ…り？」

一真がドアを開けて帰ってきたので天野がお出迎えに行くと、一番予想外の人が隣にいた。
俺はその人物を見て驚愕した。
その人物は…。

「影虎…こんなところにいたか…。」

「つ、椿…さん…？
何故あなたがここに…？」

椿が目の前にいた。
何か、よからぬ嵐が起こりそうだ。

天変地異（締め出し）（後書き）

では続きまして

女帝光臨（なぜ？）（前書き）

本日2話目

女帝光臨（なぜ？）

俺はのこのこ椿を連れて帰ってきた一真に殺意が芽生えた

「つ、椿…さん？
何故あなたがここに…？」

「ほぅ、愚問だな…。
これを忘れていたからあちらこちらと探し回ってやったのだ…。」

そう言って、椿は長方形の手帳ぐらいの暑さのパスポートを見せつけてきた。

「か、一真？どういう事？
何で、椿がここにいるの？」

天野も少し青ざめて一真に近寄っていった…。
俺もこれには青ざめている…。
だって椿の表情が恐い。
「話せば長くなるけど…。」

いきなり一真が事情を説明し始めた。納得できる理由がなきゃ『異世界樹（ユグドラシル）』で貰く俺はそう心に決めていた

……

……

……

「…で現在に至るわけだ…。」

「な、なるほど…。」

天野が納得していたが、椿は俺を睨みながら黙っていた。

（つ、椿さんが恐い・・・めっちゃおこってる！！）

「このバカ…。」

「ウオッ！？」

俺が顔をひきつらせながら少しビビっていると

椿が走り出して来て俺の胸にダイブした。

俺は、何とかキャッチしたが、バランスを崩し後ろに転んでしまい、机に頭をぶつけていた…。

（キャッチには成功したけど痛い・・・俺っていつも頭を攻撃されるよな・・俺の頭だけ幻想殺しでもあるのか？）

「もう、お願いだから『私』からこんな形で離れないでくれ…。」

「あのな～。

お前が追い出したからこうなったんだろうが…。

全く。」

（全くこの我が儘姫が・・・まぁ俺に椿に逆らう権利はないな・・）

俺は、涙を流している椿の頭を撫でた

すると

「あのさ、お二人さん…。
気持ちは分かるんだが、余所でやってくれないか…？」

「「うわぁ！？」」

完全に一真の家であることと一真達の存在を忘れてた！？

「はぁ…。
まぁ、一件落着してよかったな…。
影虎、家に帰れそうだな…。」

「あぁ、良かった♪良かった♪」

一真の言葉を聞いて俺は家に帰れそうで喜んでいたのだが…。

「負導に影虎…。
その事なんだが…。」

「「ん？」」

椿はとても言いにくそうに話してきた。
ま、まさか・・・？

「え～とな…忍さんが家にいてだな…。
帰りたくないんだが…。」

「まさかとは思うが、忍さんから逃げてきて影虎と一緒の場所に泊まろうとしてた訳か…？」

一真がそれを言うと、椿はコクりと首を縦に振った…。

あの変態年増女がぁ！！！！！！！『異世界樹（ユグドラシル）』があいつに使えれば一瞬で片が付くのに・・・俺は無力だ

「大丈夫だよ椿♪一真なら泊めてくれるよ♪私と影虎君も泊まろうとしてたし♪ね♪」

「ね、じゃねぇよ！！勝手に決めるな！！」

天野が提案すると一真がそれに怒っていた

「てか、影虎が追い出せばいいじゃねぇか？無理なのかよ？」

一真が俺にいきなり当然の質問をしてきた

俺だって確かにそうしたいのだが・・・

「あの変態ロリータＸ（忍）が前みたいに一瞬で椿に酒を飲まされたら、俺が死ぬ…。」

「…納得…。」

一真はすぐに察してくれたこいつって鈍いのか鋭いんだか解らないな？まぁいいや今は、一真に頼るしかない

「だから、頼む…。泊めてくれ！！」

影虎が土下座をして頼み込んだ…。

「…あのな…。」

一真さんお願いだから断らないでくれ・・・正直弱体化している俺
では、忍には勝てないんだ

「一真、一真。」

「ん？」

一真は天野に呼ばれたので突如振り向いた。

俺もつられて振り向くと

「おねがい。」

「お、おねがい。」

「なッ！？」

天野とまさかの椿が上目遣いで自分の両手を握って頬に当てて首を
傾げてねだっていた。

俺は驚きで言葉を失った

「ハァ…。

わかったよ…。

全員がそこまでして頼むなら勝手にしろよ…。」

その後、一真が泊まりを許可してくれたのだがその後、椿が部屋の隅でもの凄く落ち込み始めた

もの凄く恥ずかしかったらしい・・・天野さん、椿に何やらせてるの？

その後、俺と天野は、椿を慰めていた

……

……

……

「はい♪

皆さんどうぞ召し上がれ♪」

「「「…。」」」

一真が持ってきたメニューに俺達は驚きで言葉が出なかった

「ねぇ…一真…キャラ変わってない？

それに、夜ご飯本当にこれなの？」

天野が俺達全員の疑問を一真に振りかけた

「そうだが♪何か♪」

「「ウッ！？」」

椿と俺は一真の怒りに満ちた笑顔に怯えた

「じゃあ食べるぞ♪

文句があるなら♪
食うんじゃねぇぞ…。」

「「「ヒッ!?」」」

「いただきます…。」

「「「い、いただきます…」」」

そして、俺達は泣きながらキムチ鍋を食べた。

途中、謎のオーラを一真から発せられているのを見たが無視して激辛鍋を食べた

……

……

……

俺達は食い終わってだらけていた。

天野と椿は今風呂に入っているんだが、さっきから椿の悲鳴とか如何わしい声が聞こえるがまた椿の奴弄られているようだ・・・頼むから天野、椿を泣かすなよ?あいつ泣くと全裸でも暴れるんだからさ

などと考えながら一真とたわいもない会話をしていた

「お前、よくこの暑い日にあんなもの食えたな…?」

「ん?あぁ…。

俺、辛いの好きだし、牛乳の力って偉大だぞ…?」

「それはわかるが、牛乳だけで、あの化け物級の辛い食い物を防い

だというのか！？」

「あぁ…。」

「化け物だ…。」

「まぁいい。
それより一真、天野の事をどう思っている？」

「へ？葵の事？何で影虎がそんなことを聞くんだ？」

おれは突如思いだしたことを一真に聞いた

これで一真も好きだと言えば相思相愛でくっつけやすい・・・

「いや、ただ幻想御手（レベルアッパー）の時は命懸けてたし最近さらに仲が良くなってる気がするから気になってな。
もう、隠し事とか嘘は無しに言ってくれ。」

「…。」

俺は一真の逃げ道を封じるためにくぎを打った

「う～ん…。」

一真は腕を組んで悩んでいた。

もの凄く悩んで出た答えが・・・

「わからねぇ…。」

「おいおい…。」

素直にわからないと言われたので、俺は頭をカクンッと落とした…。

「でも、わかることはあるな…。」

「ん？」

お、もしかしてもしかすると？

「何故だかは知らねぇが…、ほっとけない存在だな…。」

「…そうか。」

俺はちゃんとした一真の思いを聞いて頭を上げてニッと笑った。まだまだ脈アリだな♪

「ハァ～♪楽しかった…♪」

「もう、葵とは入りたくないかもな…。」

そんな話をしている内に天野が楽しそうに、椿がグッタリしてあがってきた…。

椿さんは、胸を押さえて溜息を付いているところを見るとまた、胸を弄られていたな・・・まぁ泣かないで良かった

「まぁ、いいや…。

影虎、風呂行こうぜ…。」

「そうだな…。」

そう言って、俺達は風呂に入ることにした。

……

……

……

椿視点

（邪魔な男共はもう居ないな・・・・・よし）

「葵。

一真とはどこまで進んだんだ…？」

「…。」

俺の質問に葵は黙ってしまった。

「まさかとは思うが、進展は無しか…？」

「う、うん…。」

「ハァ…。」

おれは思わず呆れて溜息を盛大に付いてしまった

だって、あれだけ盛大なチャンスがゴロゴロしてたのに・・俺ならやる気はないけど5人くらいは落としてるぞ？

「今思ったんだけど、椿と影虎君ってどうやって知り合ってどうやって付き合ったの？」

「えっ！？」

葵が突如質問してきてすぐには言葉が出なかった・・言いにくかったし何より思い出したくないことも思い出したからだ

「…聞くのか？
踏み込めば後戻りは出来ないし下手をすれば命を狙われるぞ？
それでも聞くのか…？」

俺は冗談抜きで聞いた。本当に危ない話で誰にも話したくない事実、そして、同時に誰かに知っていて欲しい事実だからだ

「う～ん…。」

頭を抑えて考えていた。
そして・・・・・

「うん、どんな過去があっても命を狙われても私は全てを受け入れるし後悔もしない…。
だから、聞かせて♪」

「…そうか…。
なら始めるぞ…。」

「うん。」

……

……

……

「…何だか凄い過去だね…。」

俺は出来る限りを話した。
魔術の事も影虎がかなりの数の魔術師を殺して俺を助け出してくれた事も…。
『新書血録』の事も…。
俺の血液の中にはあらゆる魔術の知識や魔方陣が配列されているなど…。
でも、影虎に止められていて火炎系の魔術以外は使えないとか…。

「軽蔑したか？」

ぜったい軽蔑されたよな・・特に影虎は、幼くとはいえ悪人とは言え間違いなく人をあやめているしかもその原因が全て俺だ俺が影虎に人をあやめさせたんだ・・・

「全然♪むしろ過去が知れて良かったよ♪
何で男装してるかも分かったし♪」

予想外の言葉が葵の口から発せられた

「そうか…。」

俺は胸を撫で下ろしてホッと安心していた。
良かった・・・葵に軽蔑されないで・・・こうなったら葵の恋を恋愛の先輩として応援してやるか♪

「「葵（椿）達って意外と仲良いんだな。」」

「「ひゃッ！？」」

葵と俺はいつの間にか後ろにいた一真と影虎君に話し掛けられて声をあげて驚いてしまった。しかも、「ひゃッ!?」って自分の口から出たのでめちゃくちゃ恥ずかしかった

「いつの間に揚がってきたの?」

「いつって言われてもなぁ…?」

「椿が魔術に関して話終えるぐらい前からいたぞ…。」

一真はチラッと影虎の方を見た。
そして、それに答えるように影虎が答えた。
結構前からいたのか?
葵の気持ちが聞かれてなくて良かった。

「一真に魔術師の事聞かれてたけどこれってヤバイんじゃ…?」

「「「えっ!?」」」

天野の言葉に葵以外の俺達は驚いたそして、あることを思い出し・・・

「葵…その悪いんだが…。」

俺が言葉を続けようとすると

「俺はかなり前から椿が魔術師って事は知ってるぞ。」

「えっ!?」

一真がいきなりはっきりと伝えるので葵は、

「はぁ…。」

っと部屋の隅っこで三角座りをして落ち込んでしまった…。

……

……

……

「そうだよね…。

どうせ私だけ…。」

何だか知らないがかなり酷く落ち込まれてしまった。

「かなり落ち込んだが、葵は大丈夫なのか…？」

俺は心配になり一真に聞いてみた

「「……。」」

一真から返事が来ないので悩んでいると影虎がアイコンタクトで

（天野の機嫌を取るために一真に犠牲になってもらおう）

っといってきたので

（了解♪）

っと返し

「「えい…。」」

「へ？うわぁ！！」

「キャッ！？」

一真を二人で突き飛ばした。

そして、一真は見事に葵にぶつかって押し倒す形になった…。

「「おぉ…。」」

（作戦成功だ・・・）

「な、なな、なッ！？」

葵は恥ずかしいのか、顔がドンドンと赤くなって壊れていた。

「葵！！落ち着け！？
とりあえず今から退くから！！」

一真はすぐに立ち上がり葵から離れた。

「つまんない奴だ…。」

「全くだ。」

俺と影虎は呆れてしまい

「てめぇらのせいだろうが…？
それに呆れられる意味がわからん…。」

（こいつは本当に解らないのか？・・・よし、もう一度）

「葵…大丈夫か？」

「うん…何とか…。」

一真が葵に手を貸して起き上がらせようとすると…。

「うわぁ！？」

「キャッ！？」

影虎に服を引っ張らせた、しかも葵の手を掴んでいたので見事に二人とも転んで、一真はタンスに頭をぶつけた…。

「「イッテェ…（イッター…）。

ハッ！？」」

そして、一真と葵は目があうと、顔との距離はかなり近かったため葵がまた赤くなり一真も赤くなってる…。

「…とりあえずどいてくれ…。

重いから…。」

「なッ！？」

いくら何でも一真の奴デリカシーなさ過ぎだろ？葵が可哀想だよ

葵が泣きそうな目で肩をプルプルと震わせていた。

「一真のバカー！！」

「へブ！？」

「少しは言葉を考えろ！！」

「ンガッ！？」

馬乗りされてる状態で一真は葵の平手打ちを頬に食らっていたが、
今回はお前が悪いと俺は爪先蹴りを顎に食らわせた…。

「一真…。
女心は学ぼうな…。」

何故か影虎はダウンしている俺の背中をポンッと叩いた。
面倒だ…（涙）。

それから少しの愛だ葵は泣いていたが俺が慰めるとすぐに寝た

そして、一真と影虎も眠っていた

あぁ～あ、葵（逃げ腰）と一真（上条と並ぶほどの鈍感）の恋を成熟させるのは難しそうだな

そう思いながら俺は、寝ようとすると

突如俺の血が騒ぎだした

「え？えぇ？・・・・・なんだ？なにかの魔術か？・・・・・これは、御使堕し（エンゼルフォール）か？」

俺は、すぐに辺りを見渡したすると

影虎の背が縮んでチビ虎になっていて寝ながらにして『異世界樹（ユグドラシル）』を発動させていて

頭にケテルの王冠が現れており『異世界樹（ユグドラシル）』の桜色の翼も小さいながらも展開していて

ちび虎の表情が苦しそうにしていた

「そうか、影虎の操っている『異世界樹（ユグドラシル）』は『セフィロトの樹』だから御使堕し（エンゼルフォール）の影響をもろに受けてるのか？まずい、このままじゃ影虎が・・・・・」

この後、俺は、すぐに手首を切って血液を出して

血液で対抗術式を作り出し

天草式十字凄教の日常動作に残された僅かな宗教的要素を拾い出し、何十回と重ねる事で魔術を発動させる方法を応用し台所を儀式場にして影虎の魂を無理矢理この世界（物質世界（オーラムアッシャー））につなぎ止めた

このショックで一時だけ影虎の肉体がこの世界から消滅するが御使堕し（エンゼルフォール）が破壊されればすぐに元に戻るようにと大魔術に等しいほどの魔術を組み

俺はそれを発動させると同時に力尽きた・・・・・・・・・・

女帝光臨（なぜ？）（後書き）

ではまたまた・・・

御使堕し（俺が一真で椿が忍で一真が天野で天野が椿！？）（前書き）

本日三話目

御使堕し（俺が一真で椿が忍で一真が天野で天野が椿!?）

次の日の朝、俺が浅く眠っていると・・・

「なんじゃこりゃーーーーーーーーーーーーーッ!!」

っといきなり大きな声で天野が叫んでいたので飛び起きて洗面台に走った

立ったとき無性に目線が低くなった気がしたが気にせずに洗面所に行くと

天野が足下に体重計を置いて鏡を見ながら降着していた

「どうした…？
いきなり大声を出して…。」

俺は、鏡を見て固まっている天野に後ろから声を掛けると

「えっ!?俺?」

っと天野が振り返っていきなり訳のわからんことを言い出した

「はぁ?天野?何を言って……。
えぇーーーーー!!」

俺は、天野から目線をずらし鏡を見ると訳のわからんものが映っていたので目を擦って再び鏡を見ると今の自分の姿に絶叫した。

本来、鏡に映っていなければいけないのは、俺と天野なのに映っていたのは、天野と俺と同じポーズをとっている・・・一真だった

「天野!?これは一体どういう事だ!?」

俺は焦って天野に怒鳴ってしまった

「落ち着け…それに…俺は…葵じゃなくて…負導…一真だ…。」

「えッ!?」

俺は天野の肩を揺らして首をカクンカクンッと動かせていた俺は、天野がいきなりの一真発言をするので驚いて揺するのをやめた…。

……

……

……

「って事は影虎?」

「そうだ。

しかし、何故こんなことに…。」

俺達は自分の正体を教え合い洗面台で座って話していた…。

一体何でこんなことに?

「…夢かどうか確かめ合わないか?」

「そ、そうだな。」

そして、俺達は頬をつねってみた。

「「イテテテテッ！！」」

痛かったので直ぐに二人とも手を離した…。

なぜだ？この程度の事が痛いっていうか天野の頬が赤く染まっていくのを見ると一真だと解っていても少し罪悪感を感じた

「「夢じゃない…。」」

俺達は顔を見合わせて言った。

それにしても・・・・・

「プッ…アハハハハハハハハハ！！」

「なッ！！」

俺は、天野になっている一真を見て腹を抑えて指を差して笑った。

「何故笑っている…？」

「だ、だってお前…。

アハ…、よりにもよって天野に…。

アハハハハ！！」

これって一種の天野の怨念だよな？一真が入れ替わるのは、私だけ。みたいな怨念を感じるよ。てか、天野の奴本当に心を自分の物（身体）にしてるジャン♪っと笑っていると

「うるせぇ！！」

「グヘッ！！」

俺は天野（一真）にアッパーを決められた。
かなり痛かった・・・一真の身体って弱い～

「さて、話を戻すが…。
何でこんなことに…。」
「う～ん…。」

一真が天野の身体を見て言うと俺は腕を組んで唸っていた。

（そうだ、これは、魔術の可能性が高い、つまり魔術のプロに相談しよう）

「これは、椿に聞いてみよう。
もしかしたら魔術かもしれんしな。」
「それもそうだな…。」

俺達は立ち上がり椿の元に向かった…。

「椿！！起きろ！！椿！！」

俺は椿の身体を揺すったが起きる気配がなかった…。
その時。

「うるせぇな…。
こっちはつかれてんだよ…。」
「「えっ！？」」

キッチンの方からいきなり誰かが起きてきた。
何故キッチンから？

と思ったが、今は非常事態のためそちらに向かったすると。

「「忍さん!!（変態野郎!!）」」

忍が寝ていて俺達は声をあげた。
一体何処から入ってきたんだ?また、合い鍵か?

「誰が変態野郎だ…。
ブッ殺すぞ…『影虎』…。」
「逆に殺して…ん?
変態…何故俺が影虎ってわかったんだ…?」

忍がいきなりキレてきたので本気で殴ってやろうかと思ったが一真の姿である俺を影虎と呼んだことを思い出しふと忍に聞いた

すると忍の反応は・・

「はぁ…影虎…俺は『椿』だ…。」
「「えっ!?」」

俺達は忍の言葉に驚いた。
忍が椿?
嘘だろ?たしかに今の忍の立ち振る舞いは、椿その物だ・・・だが、よりによって忍と椿が入れ替わるなんて・・・地獄だ

「ん?待てよ…。」
「どした…あま…一真…?」

俺は、一真の姿を見てつい天野と呼びかけてしまった。

「影虎…もしかしたらこっちは本当に椿で、今寝てる椿は…。」
「えっ!?私!?」
振り向くと椿が天野（一真）を指を差して驚いて立っていた。
……
……
……
「一真?どういう事?」
っといきなり椿（中身誰?）が俺を見て聞いてきた
「やっぱりな…。」
一真が天野の身体で椿にそう呟いた・・・もしかして
「お前…もしかして天野か?」
俺がそう確信して椿（天野）にそう聞くと
「ほぇ?一真…寝ぼけてる?」
・・・どちらかと言えばあなたが寝ぼけているような気がします・・
・てか、記憶消去が全く発動しない?
「天野、悪いが俺は桜子路　影虎だ…。」
俺がそう自己紹介すると

「えっ！？」

訳がわかんないって顔をしている椿（天野）

「んでもって俺がお前の呼んでいた一真だ…。」

「えっ！？」

さらに一真が天野の身体で自己紹介すると椿（天野）は、パニックっていた

「信用できないならホラよ…。」

「……えぇぇぇえ！！」

天野（一真）に手鏡で自分の姿を見せられた椿（天野）は、驚いていた。

「信じたか…？」

「う、うん…。

信じ難いけど…。」

どうやら、やっと信じてくれたらしい。

ただ、天野さん…何故椿の身体で胸の辺りを見て嬉しそうににやけているんだ？少しだけ今、忍（椿）も自分の姿を鏡で見て喜んでいた・・そういえば背が低いのがコンプレックスの一つだったから今は、忍の長身が手には入って嬉しいんですね。

「とりあえず、椿…。

これは魔術なのか…？」

一真が話を進めようと忍（椿）に聞くと

「そうだ。」

っとすぐに返答が来た

「えっ!?椿は忍さんなの!?」

「「今頃!?」」

椿（天野）の一言には全員が声を揃えて驚き椿（天野）は何故か忍になった椿を見て羨ましそうにしていた。

「と、とりあえず話を戻して説明頼む…。」

「あ、あぁ…。

御使堕し（エンゼルフォール）と言ってな…。

言葉の通り天使を天界から人間界に引き摺り落とす術式で、その時の衝撃のせいで世界各地の人々の魂が入れ替わったのでは無く肉体だけが入れ替わってしまったんだ…。」

「なるほど…。

でも、それなら学園都市だけじゃなく世界でパニックになる筈だが、この静けさは何なんだ?」

忍（椿）が詳しく説明してくれたのだが、そんな大規模な事が起きているならパニックになってる筈だが、この学園都市内の静かさはおかしい。

「この辺は少しややこしいんだ…。

本来なら俺達も内側の魂を見て自分たちの事を認識出来ているのだが…、俺が御使堕し（エンゼルフォール）に気づいて対抗術式をなんとか使おうとしたのだが、間に合わなくて中途半端に打ち消してしまったんだよ…。だからこの部屋にいる全員が、外見の肉体だけ

で認識してるから俺達は認識でき無かったんだ…。」

・・・？しの、いや、椿の奴少しだけ嘘言ってないか？何となくだけど間に合わなかったってところが嘘っぽいような・・・・・・・

「何だかややこしい話だな…。
てことは、学園都市や世界の人々が入れ替わっていたとしても、俺達以外は入れ替わっていたことは認識できないからパニックにはならない…。
これでいいのか？」
「だいたいあってるな…。」

一真は忍（椿）の言ってることに納得はしたようだが、椿（天野）は口をパクパクさせて首を傾げていた。
まぁ納得しろっていう方が無理だわな・・

「葵…ゆっくり教えてやる…。」
「うん…、お願い…。」

そして、天野（一真）は先ほど忍（椿）から聞いた話を詳しく分かりやすく椿（天野）に説明した。

……

……

「わかったか…？」
「だいたい…かな？」椿（天野）はだいたいならわかったらしく数回頷いたあと、首を傾げていた。
たぶん、成り行きで納得してるだけだな・・・

「とりあえず椿。

元に戻る方法は？」
「術式を破壊するか術式を展開した奴を殺すしかないのだが…、わからないんだ…。」

忍（椿）は残念と言った感じで手をあげていた。
てか、入れ替わって何の特があるんだこの魔術。大して意味がない気がするし・・・てか、この世界に天使が降りてきてるって事は・・・天使が暴れて・・・もしかしてめっちゃ危ないんじゃないのか？
『異世界樹（ユグドラシル）』もさっきからうんともすんとも反応がないところを見ると俺の身体と一緒にどこかに行ってしまったのか？

「ってちょっと待て！！
そいつが破壊されるまで俺達はずっとこの姿かよ…。」

一真が気づいてそう言うと、忍（椿）が首を縦に振って頷いていた。

「早く潰しに行くぞ…。」「待て、一真。
お前どこにあるのかわかってるのか？」

一真がどこかに行こうとしたので俺は、天野（一真）の肩を掴かんで止めた…。

「わからん…。
でも、このままじっとしてるよりマジだ…。
とりあえず学園都市内全てを探して、そのあとに学園都市の外に出て探すだけだ…。」

一真は本気でやる気だったようで少しくすぶっていた

まぁ身体が女の身体になるのは、男には耐えられないよな？・・・

俺だって女になったら泣いて物投げて叫んで暴れるもん・・・・・

「だが、逆にこの御使堕し（エンゼルフォール）が収まるまで部屋で大人しくしてれば…「そいつは厳しいな…。」…Ｗｈｙ!?」

俺が言いきる前に忍（椿）が言葉を遮って答え、俺は綺麗な発音で驚いた。

「何よりも逆に一真の意見に賛成した方がいいな…。」

「「「？」」」

全員が頭にはてなマークを浮かべて首を傾げていた。

え～!!もしかして探すの？

「ここからは問題形式でいこう。

お前達はいきなり見知らぬ場所に行かされたら先ず初めにどんな感情がある…？

はい、葵さん。」

「えっ!?え～と…、帰りたい…。」

椿（天野）が忍（椿）に質問されて、驚きながらも直ぐに答えた。

「帰りたいよな…。

なら、この御使堕し（エンゼルフォール）はどういった術式でしたか？

はい、影虎君。」「えっ!?確か、天界から天使を人間界に引き摺り落とす術式。」

何で君づけ?忍の姿に加えて椿が言っているため違和感で吐きそう

になった

「正解。
では最後の問題…。
天使が天界に帰るときは下手をすれば莫大なエネルギーが核爆弾×１０並に爆発します。
さて、こんな事が起こればどうなるでしょうか？
はい、一真君。」

だから、天使さんが暴れて世界滅亡だっての！！

「世界が…終わる…。」
「正解…。」
「ッ！？」

忍（椿）がゆっくりとした口調で告げるとここにいた全員が驚いた。
まぁおれは、今更気付いたことに驚いた

それにしても・・

「影虎…まさかとは思うがお前…さっきの話を聞いてビビってるのか？」

っと言ってきたので

「変態女医が…真面目に話してる…。」
「「……はぁ？」」

っと俺が言うと

一真と椿が同時に声をあげた。

「影虎…俺は、椿だぞ？
さっきも言わなかったか？」
「わかっている…。
だが、不自然過ぎてな…。
これは、世界の終わりだ…。」

だって忍が真面目に2分以上話してるなんてダニやノミが盛大に年越しを祝っているよう何とも意味不明な気持ち悪さがあるんだ正直吐くぞ？

「いやいやいや！？
世界の終わりだとかじゃなくて終わりかけてんだよ！？
状況把握ＯＫ？」

一真の言っている意味はよーく解るので俺は首を縦に振って頷いた…。

「っと言うわけでとっとと着替えて行くぞ…。」
「ちょっと待ったぁあ！！」
「えっ！？あっ…。」

一真がパジャマ姿から着替えようとすると椿（天野）に止められた…。

「…葵…目を瞑っておくから『お前の服』じゃなくて、『俺の服』に着替えさせてくれ…。」
「わかった♪」

あぁ～確かに天野が恥ずかしいわなっと思って俺は、普通に着替えていると椿（天野）がなにやら目をつぶっている天野（一真）に女物の服を着せようとしているのが見えただがすぐに目を離した（天野の裸を俺が見ちゃ絶対に駄目だよね♪）っと思いながら着替えた

……

……

「もう目を開けていいよ♪」

「そうか…。」

着替えが終わったらしく一真は、目を開けていた。

「ちょっと待て！！」

一真はスカートに青いTシャツと言った確実に女の衣類を着せられていたので怒鳴っていた。

あれは、俺も一度やられたことがあるな・・・しかも、椿に・・その後のことをあまり覚えてないんだよな・・・いや、思い出すのはよそう・・

俺は、思い出している最中にもの凄いストレスを感じたので考えるのを止めた・・・・アレは思い出したくない・・冗談ではなくシリアスな方で・・

「って言うと思ったか！！」

「フギャー！！」

「何してんだ!?一真!!」

「ウグッ!?」

「「イッテェ…。（イッタァ…。）」」

一真が椿の頭に拳骨を食らわすところを見た俺は、天野（一真）に拳骨を食らわせたため、2人共頭を抑えていた。

「影虎…何故…?」

一真に聞かれたので

「すまん…入れ替わってることを忘れてて椿を殴ってるようにしか見えなかったから、条件反射でつい…。」

っと理由を説明した

「なるほど…。
気を付けてくれ…。」

「あ、あぁ…。」

今のは条件反射だから気を付けることは出来ないような・・・

……

……

「さ、さて、行くか…。」

「「「アハハハハ!!」」」

「笑うな!!」

あのあと、一真は忍（椿）に頼んで一真の服を着せてもらおうとし

たのだが、サイズが合わなかった為に結局天野のTシャツに椿のジーパンを借りることになっていた…。

「と、とにかくとっとと行くぞ!!」

「「は～い…。」」

そして、俺達はとりあえず外に出てあちらこちらと椿に聞きながら探し回った。

何でも、かなり近ければ気配ぐらいは感じられるんだそうだ…。

だが、あれから数時間。

辺りはすっかり暗くなってきたのだが全くと言って良いほど見つからない…。

「これは、学園都市にはないな…。」

「はぁ…。」

椿の容赦無い一言が俺と一真のやる気を一気に失わせてため息を吐いてげんなりとした。

その時…。

「ん?も、戻ったぁあ!?」

「本当だ…。」

俺と一真が同時に気づくと、天野も気づいたようで呟いていた。

俺達は何とか体が戻った…。

喜ばしいことなのだが、しかし…。

「椿、どうした?」

「…いや、何でもない…。」

椿だけが難しく険しい表情をしていた。
それに気づいて俺が話し掛けたが、簡単に流された。・・・慎重が低くなって悲しいのか？

「まぁ、影虎…。
戻ったから良いんじゃねぇか？」
「…それもそうだな…。」

それから後は何も気にすることなく家に帰った。

椿視点

あの後家に帰ってすぐに影虎と俺はベッドに倒れるように眠った

そして、影虎が眠ると俺は、影虎の頭を撫でながら

よかった・・・上手く魔術術式が発動して・・・もしこれが失敗すれば影虎は死んでしまうところだった・・でも、御使堕しで影虎が天に昇るよりはリスクがなかった・・・・・あの時もの凄く恐かったんだぞ？お前が天に昇ろうとしていたから、必死で必死で頑張ったんだぞ？お前が俺を守ってくれるように俺も絶対にお前を守ってやるからな・・影虎♪

「おやすみ、影♪」

俺はそう言って電気を消して眠った

この次の日、俺と影虎の間に再びあんな事が起こるとはしらずに・・

・・・・・・・・

つづく

御使堕し（俺が一真で椿が忍で一真が天野で天野が椿！？）（後書き）

以上です

では、また来週

〜来週、ついに来るもう一つの影虎の顔〜

我慢爆発（俺の裏側）（前書き）

いつも道理の投稿です

今回は展開が速すぎて自分でもよくわかりません

我慢爆発（俺の裏側）

こと桜小路　影虎は、現在、能力の使いすぎで知恵熱に襲われている

昨日、依然、右手が消えた謎の現象について検索していたら日頃からのストレスと相余って高熱と頭痛に犯されています。

「おい、影虎大丈夫か？」

っと椿が俺の頭に氷嚢を乗せながら聞いてきたので

「黙れ、クソ女、てめぇは、とっとと学校に行け！！俺に構うな！！」

と怒鳴りつけると椿は、帽子を深く被り静かに家を出て行った・・・

これで良いんだ。そろそろ、アイツになっちまうから椿の傍には居れない

アイツになっちまうと何の罪の意識もなく椿を殺しちまう・・・

大丈夫だ。このイライラが無くなれば椿にも会える。それまでの我慢だ。な～に、我慢は、俺の特技だ・・大丈夫…この後、俺は、ぐっすりと眠ってしまった

裏世界からのお迎えがあるまで

……

……

……
俺が眠ってから1時間後ぐらい
俺が熱にうなされながら眠っている時、
ガァアアンといきなり何かにドアが突き破られる音がした
俺は、その音で飛び起きてフラフラしながらも部屋のドアを開けて玄関の方を見た。
すると、
ショルシュルシュルギュ「な?」
玄関のあたりから煙が出ていて突如謎の光が俺の体に巻き付き縛られ手を動かせなくされた
「こら、鉄也、いきなりドアを壊したりしたから『エルク』さまが起きちゃったじゃない」
と俺を縛り付けている光をまるで紐のようにして持っている青髪のレザースーツをエロ格好良く着た女が後ろにいる玄関に入りきらないほどの大男の横腹を軽く殴っていた
(ドアを破壊したのがあの大男か…それにしてもこのロープ、さっきからいくら力を入れてもビクともしない…それに俺の事をエルクって呼びやがった!?何者なんだこいつら)
と必死にロープを切ろうと力を入れながら頭痛のする頭で必死に考えていた

すると青髪のセミロングの女が俺の方を見て微笑みだしいきなり俺を引っ張ったと思うと急に飛びかかってきて俺を仰向けに倒し急に馬乗りしてきて

「やっとあなたの前に現れることが出来ました♪さぁ昔の約束道理、私をあなたのものにしてあなたを私のものに…」

といきなり言ってきた

「おまえは何もん〜{チュ〜レロチュ}〜うぐっ!?む〜?」

俺は、いきなり唇にディープキスをされ驚きながらも必死にジタバタした

（このやろー!!）

「キャ!?」バタン

俺は、必死に暴れて俺に馬乗りして重なるようにキスしてきた女をどかすことに成功し俺を縛っていたロープが解けたので俺は、すぐに後ろに飛び拳銃を玄関で頭をぶつけて痛がっている女に向けた

「何しやがるクソ女!!いきなりキスして約束だぁ?お前なんて見たこと無いっての。てか、今は機嫌が悪いんだ…土に還れ!!」

ズギャーンズギャーンと俺は、女の大きい胸の左側と頭を狙って銃を撃った

すると、俺の撃った弾は、女の体をすり抜けた

そして、後ろにいた男に弾が当たるとギュインギュインと跳弾してその内一発が俺の右頬を掠めた俺の右頬からは、微かに血が流れて流れた血は、重力に従い俺の顎まで垂れて地面にボタボタっと地面を赤く染めた

（何だ今｛ペロ｝な！？）

俺が距離をとりながら思考を巡らせていると青髪女がいつの間にか俺に抱きついていて胸を俺に押しつけながら俺の頬から垂れている血を舐めていた。

「あなたの血も中なか美味しいですよ♪次は私の血でも飲みますか？…冗談ですよ♪今回は怪我をさせる気はこれっぽっちも無かったんですけど！？｛ギリギリ｝もし、かして、怒ってます？」

俺はこの女がウザくなり女の首を右手で締めながら持ち上げた。女は、俺の右手を両手で掴んで両足をプラプラさせていた

「お前さ…ウザいんだけど？いつもの大人しい俺でもこうしたと思うくらいウザい！！」

俺は、そう言いながら女を外に放り投げた。この部屋の階は１３階、落ちれば助からない高さだ。まぁ下は、木で一杯だしプールになってるし死には～「私は死にませんよ♪」何？

「今確かに「こんな風にですか！！」うわぁ！！」

俺は、いきなり女に投げられ窓をぶち破って空になげだされた

「なんだ?あの女の能力は?ありえない早さだ…」

俺は、空中で空をみながら落下している最中に考えていた最初の弾が通り抜けたことや俺が反応できない速度で動いたこと（まるで忍みたいに早く動いていやがる）

そして、落ちるのは、不味いので異世界樹の羽を出したそのとき、俺の目の前にいきなり青髪女の顔がありにっこりと笑っていた

「チョコまかとウザいんだよ!!死ね!!」

っと女の下腹部に拳銃を突きつけ全弾ぶっぱっなしたがまたもや銃弾は、女の体をすり抜けた

「あなたになら殺されても文句はいいません…ただ、あなたが私のものになったらの話です!!これは、私のことを忘れた仕返しです!!」

と女は、俺に空中でドロップキックを決めた

決められた俺は、中なかの勢いでプールに背中から墜落した

「カッハァ・・・」

衝撃をうまく殺せなかった俺は、コンクリートと同じ強度の水面に激突し大ダメージを受けた

（今のは、マジで効いた…傷はすぐに回復するが今の状況じゃ・・・それよりもあの青髪の女…俺のことをやっぱ知ってるみたいだな・・・俺は一度世界から消えた筈なのに何であの女は俺を知ってるんだ

？）と考えながら水面にプカプカ浮いていると上空に輝くメタリックな人型の銅像が降ってきて銅像の拳が俺の腹部に当たり俺は、水中に沈められた

（畜生、いつもみたいに異世界樹が使えればあの女くらい楽に・・・なに？銅像が動いた！？）

俺は突如動き出したシルバーの銅像の大きな手に胸倉を掴まれプールから外に放り投げられた

そして、俺は、近くの道路に投げ出されて大の字で倒れてしまった

（本当になんだよこいつら・・・〜ズキ〜クッ！！・・・やばい、むりやり『異世界樹（ユグドラシル）』を使ったからさっきより頭痛が酷くなってるし・・それにそろそろ今まで詰め込んでいた物が溢れそうだ・・・しかし、本当にこいつらどうする？それにこのままじゃアイツになっちまう・・・嫌だ・・くそ！！）

っと仰向けになりながら思っていると

「何してんだお前？」

「よう、一真〜。何してんだってやられてんだよ…。」

突如チートな能力を持っている一真君が俺を見下ろして、登場してきて俺に現在の状況を聞いてくるので答えた

「誰にやられてたんだよ…。」

「お前の真後ろの奴等に…。」

一真君が俺に聞いてくるので俺は、一真の後ろから歩いてくるセミロングの青い髪に着用したレザースーツのチャックをヘソの辺りまで下げたキス魔の女と長身角刈りでボロボロのジーンズに黒のタンクトップを着た体つきのいかついメタリック男を指差して答えた

「えっ!?」

俺に言われて後ろを見た一真に青髪女は・・・

「あんた誰よ?」

青髪女が一真君を見下しながらちょっと切れぎみで聞いていた。

(あれ?キャラが違う?)

「はぁ…。

やれやれ…最近の女って礼儀を知らねぇのか…。

名乗って欲しかったら先に名乗れ…。」

一真さんが呆れ口調で言うと、青髪女がムッとなって何かをしようとしていたが角刈り男に手を前に出されて止められていた。(それにしてもあの男の方は喋らないな・・無口なのか寡黙なのかそれとも声が小さいのか?まぁ、いいや、一真がいる時点で形勢は、一気にひっくり返ったも同じだから勝機はある)

「チッ…。

まぁいいわ。

大人しく帰るなら何もしないけど、どうする?」

舌打ちをされて言われた一真が、悩み始めた

(裏切って逃げるなよ?さすがに今回は俺だけじゃ苦しいんだぞ・・

・）

「誰があんたみたいな奴の言うこと聞くかってぇの。」
「なッ！？」

一真が生意気口調で挑発して言うと青髪女は挑発にのったのか、顔を惹きつらせていた。
（よかった、どうやら闘ってくれるみたいだな・・・・・恩にきる）

「あんた…良い度胸じゃない…。」
「グハッ！？」

俺がそう思っているとまた青髪女が消えて俺の隣にいる一真を殴り飛ばしていた
（一真の奴大丈夫か？正直、一対一なら今の俺でも何とかなるが２体１は今の体調では絶望的だ）

「はぁ～ぁ…。
しんどい…。」

俺は、本音を言いながら怠い体とズキズキと痛む頭に鞭を打ってスイッチを入れた

「チッ…。
鉄也（てつや）～。
あいつは頼んだわよ♪」

「はぁ…。
了解…。」

俺が立ち上がると青髪女は舌打ちをして角刈り男に言うと角刈り男が一真に向かって歩いていった。

そして、俺の前にレザースーツの女が立ちふさがっていた

「ねぇエルク様？本当に私のことを覚えてませんか？」

っと女は突如俺の懐に入り込んでそう言った

（そういえばこいつの青髪どこかで・・・ピアス？いや、色が違うな・・・・・・思い出せないや）

「・・・・見覚えがある気はするが覚えていない。それよりも何故お前は、俺の昔の・・捨てたはずの名を知っている？」

っとさっきからずっと気になっていた事を女に言った

すると、

女は、一瞬で俺の後ろに回りこみ俺の膝を軽く蹴り俺の体勢を崩させ俺に膝を地面につかせて首に手を回してきて

「私達二人は、９年前に夫婦になろうと誓った仲ですよ？お名前くらい知っていますよ♪」

っと首を傾げながら女は言ってくるので

「・・・・そうか、とりあえず・・・・喰い殺す！！！！！」

俺は、俺に抱きついている女の手を無理矢理外し女の腹部に本気で拳を叩き込もうとすると

スカッ「は?」ズガッ「グフ!?」

俺の目の前にいたはずの女は、俺が殴ろうとしたら消え気付かぬ内に俺は腹を殴られ2メートル近く殴り飛ばされた

「もう!!いい加減におもい出してくれません?さすがに弱っているあなたを殴るのは心が痛むんですけど?私ですよ~9年前に『木原塾』であなたと一緒に居た・・」

女が言葉を言いかけていたとき俺は、痛みにたえながらもこの女の事を完全に思い出した

「・・・・お前まさか・・・園崎(そのざき) 琉奈(るな)?」

っと俺が立ち上がって少し口を切ったので口からの出血を右手の袖の布地で拭き取りながら女にそう尋ねた

すると、女の顔が一気に幸せそうに微笑みだし再び消えた

しかし、居てが誰だか認識できたのと出来ていなかったとでは、大きな違いがある

俺は、女が消える0、02秒前に拳を前に付きだした

すると

「グハァ・・・・・まさかもう見抜かれたんですか?流石はエル

ク様ですね・・」

俺の突き出した拳に女の身体が勝手に当たってきたのだそれもかなりのスピードでぶつかってきたため俺の拳は女の腹部に深く刺さり女は九の字になっていた、内臓破裂は行かなくてもそこそこ威力はあったと思う

そして、俺に殴られた?女は、俺からすぐに離れ距離をとった

「俺に流石って言われてもな・・・それよりも懐かしい顔と再会できるもんだな・・それにしてもあのピカリンって呼ばれて毎日虐めにあって押入でシクシクウサギの人形を抱きしめて泣いていた引っ込み思案で消極的で泣き虫なお前が変わったもんだな?まさか、こうして俺と真っ正面から向かってくる上にいきなり馬乗りになって人の唇を奪ったりそんなエロい服の着方してるなんて昔のピカリンからじゃ想像もつかねぇな♪」

っと俺は、前方でお腹を片手で御朝えながら呼吸を整えようとしている昔の知り合いに嫌味を言った

「そう言うエルク様こそ随分と性格が丸くなられたんじゃないんですか?背は高くなってますます私好みの男性ですけど。昔のあなたは、正に天上天下唯我独尊を地で行く我が儘にして孤高で自分より上に誰かが居るのが許せず全ての人間を虐げなければ気が済まないような暴君でしたのに♪まぁ私みたいに虐められていた弱い人間に手を差し伸べてくれる優しさもありましたね♪」

っと琉菜は俺の昔の恥ずかしい思い出を話して気やがった

「・・・でも・・そんなあなたが今では、たった一人のあんな小娘

に扱き使われているのだけは・・・・・許せない」

っと琉菜は俺に向かって光の鞭で攻撃してきた

俺は、両腕でガードしたが肉を抉られるような痛みがおれを襲った

ぱしんぱしんと素早く光の鞭を振り回しながら攻撃してくる琉奈に

俺は、

「調子に乗るな!!!」

っと鞭でのダメージを無視して殴りかかると琉菜は再び一瞬で消えたが俺は、琉奈が消える前に右膝を前に突きだした

そして、再び琉菜は俺の攻撃に自分からあたりに来た

そして、俺は、俺の膝を喰らっている琉菜の顔面をすかさず殴ろうとしたその時、

少し恐怖に怯えた琉菜の顔を見たとき

（あなたもあたしを虐めるの？）

「な？」

突如、目の前にぬいぐるみを抱きかかえながら部屋の隅で泣いていた昔の琉奈の声と姿が一瞬目の前に見え

俺は、何故かパンチを止めてしまった

と言うより殴れなかった・・・

俺が攻撃を止めるのを見た琉奈は、俺の横腹を蹴り俺の腹部と鳩尾と左肩に連続で蹴りを決め光速で後ろに下がった

そう、琉奈の能力は、９年前、俺がアイツの面倒を見ていた時点では、自分から光を放つことが出来る『発光物質（ライトアップ）』レベル３の大能力だった

恐らく今は、光速で動くことや光を武器にして闘うことが出来るなどそう言う能力なんだろう

さっき銃弾が通り抜けたのは、恐らく身体を光に変化させる何て言うあり得ないことをやってのけたからだろう

ただ、俺の打撃が当たるところを見ると攻撃と防御の両立は出来ないと見た

などと相手についての分析を終え本来ならすぐに攻撃に移れるのだが体調不良に加えて琉奈を俺から殴ろうとすると昔唯一椿以外に殴れなかった昔の琉奈の顔が目の前に浮かんできて殴れなくなると言う酷いおまけ付きだ

などと考えていると

「どうしたんですか？エルク様！！私に惚れ直しちゃいました・・か！！」

突如、琉奈が右手を付きだして

手のひらから強力なレーザーを撃ってきた

俺は、両腕でガードしたが質量を持った強力なレーザに吹っ飛ばされてしまい

琉奈との距離をかなり開けられた

（レーザーがある女に２０メートルって距離感は、『異世界樹（ユグドラシル）』使用不可状態の俺じゃ辛いな・・・マジでこれはキツイ）

そうおもいながらうしろにさがっていると

同じく下がっていた一真が居た

そして、俺と一真は背中合わせになったので

「一真～大丈夫か～？」

っと背中越しに聞いた

「無理無理。

あいつ体を金属みたいに硬くなるから殴ってもあいつじゃなくて俺がダメージ食らってるよ…。

お前の方こそ大丈夫かよ…？

状態が悪化してる気がするけど…？」

やっぱりそっちもなかなかのツワモノだったか・・・・まぁおそらくは、琉奈の方が強いと思うけど・・

「こっちもキツいな…。

光みたいに速く動くし、攻撃は当たらねぇし、何か一方的に殴られてるみたいでムカムカしてきた…。」

っとある程度ヒントをやって一真と変わってもらおうとした

正直、今、琉奈をなぐっちまうと溜め込んで来たもん全てが一辺に出てきそうだ

俺は、歯ぎしりしながらそう考えていた

「な、なるほど…。
影虎？交換しねぇか？
こっちは硬いけど殴り放題だぞ？」
「おっ♪いいね～♪
やるやる♪」

これは好都合だ♪悪いが一真には、琉奈の相手を頼みたかったし

「交渉成立だな…。」

「「では…。」」
「「ッ！？」」

俺達はクルリと回転してゆっくり歩いてくる敵の対象を入れ換えると琉奈と角刈り男は驚いていた。

そして、俺は、明らかに2メートルを超えている大男にダッシュして壁を伝って飛び上がり

男の右頬に一発拳を叩き込んだしかし、一真の言ったとうりこいつ

の体は固く俺の腕の骨が砕けそうになってしまった

そして、空中で止まっている俺に男は、もの凄く大きいシルバーの拳を腹部に叩き込んできた

俺は、その拳をもろに受け口から吐血して壁にぶつかった

（こいつの能力は、身体硬化あたりか・・・・・チクショウ、こうも頭が痛くちゃ錬金術だってまともに使えやしない・・・）

っと体を起こそうとしている間に思考していると

俺の目の前に大男が居て俺の顔面に向かって鋼鉄をも砕くパンチをしてきた

俺は、とっさに前に飛んでその攻撃を避けて前転から起きあがり男に対して構えようとしたその時、

（ねぇそろそろ交代の時間だ♪）

っと以前のような声が頭に響いた

「なに？なんで「・・・よそ見とは言い度胸だ」しまグッ」

俺がついついよそ見をして居るときに男のパンチが俺の腹部に刺さり

その上に男は、俺の首を掴み壁に叩きつけて首を絞め始めてきた

俺は、もがきながらも男を蹴ったりしていたが堅すぎてダメージを与えられず逆に俺の脚がダメージを受ける始末だ

（くそ、何の恨みがあって俺の邪魔しやがる・・・影千代！！！！！！！）

俺は必死に自分の頭に怒鳴った

しかし、当然のごとく返事はない

「・・・おまえのほんとうの実力を見せて見ろ」

っと大男は俺にそう言ってきた

（このくそ野郎・・こっちだって能力が使えりゃお前なんて・・・一撃で・）

っと思っていると

男は、俺を片手で首を絞め持ち上げながら溜息を付いて

「・・・やはりお前に本気を出させる手段は・・・琉奈の言ったとうり・・・あの娘を殺すだけか・・」

っと男は言ってきやがった

ブチブチブチっと俺の血管が切れる音がした

この男は言ってはいけない台詞を言いやがった

そのワードは一つじゃないただ一つの接点がその言葉にあれば

言った物の口は二度と開かなくなる

そのワードは

『お前のせいであの女が死ぬ』

この言葉を聞いた瞬間、俺の頬を大きな塩分と水分の混じった液体が流れた

そして、俺の髪は、桜色に変色し髪はロングになり結構筋肉質だった身体はどんどんと筋肉がそげおちてぷにぷにした肉質になって出るところが出てきてひっこむところはひっこんでしまった

そして、わずかながら聞こえる俺の声は、男声とは違いソプラノになっていた

そう、まるで女のような今の俺

そうこの女の姿こそが俺が一番嫌っている『俺』、忍が付けた名では、『桜小路　影千代（かげちよ）』だ

本当に女になってしまって居るんだから驚くよ

この姿は、幻想掌握を使ったときかストレスが溜まりに貯まって爆発したときに勝手に幻想掌握が発動したときに現れる姿だ

後者の場合、俺は、２分間の暴走状態に陥る　怒りという名の破壊衝動を抑えられなくなる

そして、この破壊衝動が終わりを告げると始まるのは、生き地獄だ

怒りをストレスを貯められなくなるつまり全てを吐き出してしまう
それはつまり、何かがあればすぐに近くにいるものや人に当たってしまう

「・・・・泣いているのか？・・・この程度で泣くとは、・・・・？お前髪の色が・・〜バキバキバキバァアアアンン〜ぐあぁあああああああああああああああ」

男の俺の首を絞めていた鋼鉄よりも堅い腕が突如砕けた
仕組みは簡単、『俺』が男の腕を瞬間的に凍らせて共鳴破壊（ノイズクラッシュ）で砕いたからだ

なぜ、俺がそんなことできるかって？

幻想掌握を発動して

・・・・・・・・俺が『俺』に変わったからだ

そして、ここから始まるのは、2分間の『無駄』と『無力』と『無情』と最大級の『無限の絶望』

『俺』は、その後、大男を学園都市に存在する能力の全てを他人から勝手に引き出して有効打を与え続け
男が虫の息になるまでいたぶった

そして、男がピクリとも動かなくなったのでなんとか苦痛の言葉を

聞こうと蹴り続けたが男は、おかしな呼吸をするだけで全然動かなかった

（つまんねぇつまんねぇつまらねぇ！！！！！！！！何でどいつもこいつも『俺』をイライラさせるんだぁ！？あ！！！！！むかつく！！）

『俺』は、もの凄く腹が立って他に誰か悲鳴を聞かせてくれる人間を捜した

そして、『俺』が選んだ人間は、昔の知り合いのピカリンだ

『俺』は、標的を決めると幻想掌握（イマジンジャック）を使い学園都市中に存在する火炎系能力を使う能力者全ての脳にハッキングをかけ脳を全て掌握しピカリン目掛けて全ての炎を火球にして上空からぶつけた

「キャァァア！？」

っとピカリンは、心地いい感じの悲鳴を上げてくれた

そして、ばたりと倒れて立ち上がることはない

『俺』は悪くないもんな、だってピカリンみたいな虐められっ子の分際で生きてることが罪なんだよ

だから、死ねば良いんだよ

たかが虫けらの分際で『俺』様に逆らったんだからな

むしろ『俺』に殺されたことを誇りに思って欲しいね♪

「あははははははは

（ちょこまかとしやがって・・・・一真を殺したら今度は学園都市中の人間を殺して憂さ晴らししね～とな）

『俺』は、そう考え一真を地面から無数の蔓で一真を拘束し、四方八方から電気を放って苦痛を味わってもらってから殺すつもりだった。

しかし、

『俺』の意識はそこで途絶えた

（・・・・・誰か頼む・・・『俺』が椿を泣かせる前に『俺』を殺してくれ、もう嫌だ・・・・・あの雨の日みたいな事は・・・ぜったいに・・）

つづく

『光子変化（フォトンオーバー）』レベル４～５

園崎（そのざき）　琉奈（るな）

ｃｖ遠藤綾

性別　女

年齢１３歳

身長１７０

髪の色は、青

髪型セミロング

スタイルの良い美人

服装　黒のレザースーツを着ていてチャックをへその辺りまで降ろしている（正直エロい）

性格は、恋する乙女と究極の暴れん坊

過去は、影虎と同じ孤児院に居てすこしの間だけ影虎と一緒に居た。

好きなもの　影虎

『光子変化（フォトンオーバー）』

光を作り上げる粒子のベクトル量、方向、密度を自在に操作できる。そのため、光通信に侵入することも可能。また暗闇でも自身の体を発光させて読書をする子ことも出来る。

身体を光子（フォトン）に変化させ高速で動いたり無敵とも言え無くもない身体になることが可能で光速の攻撃が可能。演算能力だけで言えば光子（フォトン）を使用しているときだけ影虎をも超える程の超高速演算が可能

本来なら迷うことなくレベル５のはずなのだが影虎にしか興味がないため能力測定を一度もしたことがない

身体を能力に変化させる『身体能力化計画』の被験者

『神体鋼化（オリハルコンアーマー）』レベル４～５

黒金（くろがね）　鉄也（てつや）

ｃｖ玄田哲章

性別　男

年齢２７歳

身長２００センチ

髪の色　黒

髪型　角刈り

男らしい意味では、イケメン

体型は、マッチョで肉体美が自慢？

性格は、無口

好きなもの　殴り合い　英雄

服装　ボロボロのジーンズに黒のタンクトップ

『神体鋼化（オリハルコンアーマー）』

自分の皮膚と筋肉を『神が与えた最も硬い』金属と言う物質に変化させる金属色は、光沢が眩しいシルバー

防御力が高くこの世に存在するどんな弾丸もとうさない程

力も強くなるため防御力＋金属の重量＋怪力の肉弾戦が得意

琉奈と同じく『身体能力化計画』の被験者

『桜小路　影千代』

ＣＶ小清水亜美

身長１７４

体重４２キロ

スタイルは、良く　胸は椿より少し控えめな状態

髪は、桜色に変色し髪はロングになり結構筋肉質だった身体はどんどんと筋肉がそげおちてぷにぷにした肉質になって出るところが出てきてひっこむところはひっこんでしまった女状態の影虎

そして、声は、男声とは違いソプラノになっている

影虎のホルモンバランスの不安定が引き起こす発作のようなもの
性別が変わる事により心身ともに変化して別人になる

使用能力『幻想掌握』

記憶消去の人の脳に干渉する能力と彼の矛盾が生ずる錬成を最大限に使ったときに発動できる

能力ではなく災害や現象のようなもの

その現象は、相手が使った魔術や能力を乗っ取り自由自在に操る頂上態になる禁忌の技

嫌いなもの　自分を含めた全部、特に嫌いなもの　椿

以上です

我慢爆発（俺の裏側）（後書き）

異常です・・・以上です

影虎、二重人格＋女？の巻きでした。

ではまた

幻想掌握（望まない暴力）（前書き）

いつも通り一週間投稿です。

ではどうぞ

出来れば気軽に感想をください

幻想掌握（望まない暴力）

私こと桜井忍は、いつもどうり病院で仕事をしていた

すると、突如みんなに内緒でポケットに入れていたケータイにカズくんからの着信があったので看護師のみんなに内緒でこっそり出てみた

「は～い、カズくん何かな？」

私が出来るだけ明るく聞いてみると

〔あぁ忍さんか、あの今から言う場所まですぐに来て欲しいんだけど・・〕

っと明らかに声変わりしていない幼い男の子の声が聞こえた

「・・・・・・・・・ボク誰？」

っと一応考えては見たものの全く誰か解らなかったのでつい呟いてしまった

……

……

あの後、カズくんの説明でお酒を飲んだ時みたいに縮んだと聞いて納得した

（あぁそういえばお酒を飲ませてみたら縮んでたわね～まるでとらと同じように・・）

そして、カズくんから状況を聞いた私は病院を飛び出しすぐにカズくんの行った場所に車を飛ばしてむかっていた

そして、目的地に着くと椿ちゃんが葵ちゃんの後ろに隠れていて子供になったカズくんが桜色の長髪の美女とも言えるような女の子の前で立っていた

「お待たせ♪本当に子供になってるのね♪かわいい～♪」
「はーなーせーー！！」

私は到着と同時に、子供カズくんに抱きついた。
やっぱりカズくんの子供姿は、チビ虎並に可愛いわね♪

「し、忍さん…。
それよりも早く、影虎が…。」

椿ちゃんが怯えながら私にそう言ってくるので本題に戻りましょうか。

「あら、影千代（かげちよ）ちゃんになっちゃったのね♪
全く仕方ないんだから…。」

影虎がこの姿になっちゃうってことは、今回は、よっぽど辛かったのね・・・泣いた後まであるから余程ね。

・・・・今回は、恐らくいつもどうり椿ちゃんと環境の変化が引き金ね・・

「あの…、忍さん…影千代って誰ですか…？」

「椿ちゃんの天敵よ♪
まぁ、詳しい事は病院で話すわ♪」

葵ちゃんの可愛い質問に私は答えて女の子になったとらを担いで車の助手席に寝かせた

「さぁ、行くわよ♪」
「いや、待て。
あいつらはほっていくのかよ!?」

カズくん、は青髪女と角刈り男を指差したが袖がダボタボになっていたため袖口から指が出てこず、袖がだらしなく垂れ下がっていた…。

あら、ものすごく可愛い仕草ね♪

「大丈夫よ♪
もう少しでアンチスキルとかも来るし♪それに、あの子達もう少しで起き上がって来るわよ♪」「でも、監視カメラがあるんじゃないのか…?」
「それに関しても大丈夫♪
とらは喧嘩とか、殴りあい、あんさ…げふんげふん…。
とかの時には監視カメラの情報を記憶消去(メモリーキャンセラー)を使って消しちゃうから♪」
「「…。」」

今ノリで暗殺とか言いかけちゃった・・・まぁあの子たちを見たところ死んではいないみたいだしどんな事をしたにせよ。とらに怒りで涙を流させるほどの子たちだから死にはしないでしょ

「とりあえず、行くわよ♪」
「「はい…。」」
そして、私達は病院に向かった。
ただ、カズくんをこのまま人に見られてはヤバイので持ってきていたキャリーバックの中に入れた。
ごめんねカズくん♪
……
……
……
「ブハ～…！！
狭かった…。」
「お疲れ様♪」
カズくんは何とかキャリーバックから脱出したとき
私は、影千代ちゃんを病室のベッドに寝かせて頭を撫でていた
「ところで、こいつは誰なんだ？
あと、椿…お前は何をしてるんだ…？」
カズくんが私に影千代ちゃんのことを聞いてくると同時に、椿ちゃんが病室の隅でシーツを被って怯えていた。
（やっぱり椿ちゃんは、影千代ちゃんは、苦手みたいね・・・でもとらがこの姿になるのは、椿ちゃんが悪いのが大半だからね・・・最近の椿ちゃん我が儘が酷いってとらも呟いてたし）
「き、きき気にするな…。」
「そうか…？

忍さん、こいつは誰なんだ？」

椿ちゃんはどうやら話したくないらしいわね

そう思っているとカズくんが聞いてきたのでここは、はっきりと

「この子？この子はね♪

とらの女ｖｅｒｓｉｏｎ。

桜子路　影千代ちゃんよ♪」

「「……へ？」」

カズくんと葵ちゃんが同時に首を傾げて声を上げた。

そんなに驚くことかな？私は結構そう言うのは慣れっこだから平気だったけど普通の人には理解しにくいのかしら……。

「「何があった（何があったの）！！」」

病院の事を忘れてるとしか思えない程の驚きで大声をあげていたカズくんと葵ちゃんに人差し指を口元に当てて静かにっとジェスチャーした…。

「え～とね…。

まぁ、とらは能力の使いすぎやストレスが溜まりすぎてストレスが爆発しちゃうと、このように女体化しちゃうの♪

女体化した時には、記憶消去（メモリーキャンセラー）の応用版として、関係の無い人の脳内に入り込んでその人の能力を勝手に使って攻撃をする、幻想掌握（イマジンジャック）を使って戦う、Ｒｅａｌ，Ｍｏｓｔｅｒ（リアルモンスター）になっちゃうのよ♪」

「よくわかるような、わからないような…。」

一応詳しく教えたのだが、幻想掌握（イマジンジャック）についてはいまいち解らなかったみたいね♪。

「例える攻撃なら、いきなり後ろの方から攻撃が来たり、上空から攻撃が来たりかな♪」

っと昔、椿ちゃんを庇って影千代ちゃんを止めた時の体験を話した（あの時は大変だった）

「……あっ！！」

どうやら少し影千代ちゃんに襲われた見たいね♪話が早くて良かったわ♪

「納得してもらったところで、カズくん♪二つ程お願いがあるんだけど♪」

「な、何ですか…？」

（今カズくんが嫌な顔したけどこれだけは、頼まれてもらわなくちゃね・・実を言うとカズくんにも関係があるからね・・・・・椿ちゃんとカズくんを死なせないためにも絶対に！！）

「一つはとらが可哀想だから、あまり影千代ちゃんのことを見ないであげて♪

Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」

「は、はい…。

もう一つは…？」

どうやらこれは素直に聞いてくれる見たいね♪どちらかと言えばこ

れを守ってくれなきゃ始まらないのよね～・・・・それに今のとらは、自分の姿に酷くショックを受けてるしなにより今のとらを刺激しないのが一番の安全策なのよね♪

「もう一つはね♪椿ちゃんを三日間の間泊めてあげて♪」

「……は？」

私がそう言うとカズくんは頭を捻って考え始めた

「絶対やだ！！」

「あら♪どうして♪いいじゃない♪許可するなら今ならもれなく葵ちゃんも泊まりに来る両手に花キャンペーンがあるのに♪」

「いらんわ！！それに両方ともトゲだらけじゃねぇか！！」

多分カズくんが考えていることを言ったら当たったらしくもの凄く怒られた（それにしてもカズくんの思考ってわかりやすい）

「なら、最終兵器を使うしかないわね♪」

「うッ…。」

私はそういいながら、一枚の写真をヒラヒラと揺らした…。

「ま、まず、理由を聞かせろ…。
それを聞くまで許可は出せねぇから…。」

（ふん、服従はしなくとも完全に拒否は出来ないわね♪私の勝ちよ）

「とらが影千代ちゃんになったら、人格も変わっているの♪
それでもって、椿ちゃんを虐めちゃうからよ♪
それに元に戻るのに三日間かかるのよ♪」

「う～ん…。」

どうやら信じられない見たいね・・・しかたない、今回は、椿ちゃんに対するお仕置きとして影千代ちゃん実験やるか～・・・まぁ椿ちゃんも反省するだろうし

「信じてないようね♪無理も無いわ♪
なら、試して見る？」
「…へ？」
……
……
……
数十分後…。

「う～ん…。
あれ？ここは？ん？」
「ヒッ！？」

影虎改め影千代ちゃんが目を覚まして椿ちゃんを見つけるなり椿ちゃんは怯えだした。

（いつもなら助けてあげるけど今回は、椿ちゃんの我が儘が過ぎたからしばらくは助けないで置こう・・私は、椿ちゃんは好きだけどとらと差別する事はしたくないし）

「つ～ば～き～ちゃん♪
あっそび～ましょ♪」
「い、嫌だ！！来るな来るな来るな来るな来るな！！」

影千代ちゃんが起き上がってジワジワと近づくなり椿ちゃんが狂っ

たように怯えて後ずさって行く…。しかし、壁に追い込まれて逃げ場を無くした…。

（影千代ちゃんになったとらは、執拗に椿ちゃんを痛め付けて殺そうとする・・・たしか3年前辺りからだっけ？）

「やっと追い詰めたよ♪
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」
「や、やだ！！」
「無理♪」
「グフッ！！」
「「ッ！？」」

いきなり、影千代ちゃんは椿ちゃんの顔面を問答無用で殴ってカズくんと葵ちゃんは驚いていた。
私も初めてとらが影千代ちゃんになった1日後の光景を見て言葉を失ったもの

小さい影千代ちゃんが椿ちゃんに馬乗りになって首を絞めていたんだから

「ガハッ！！ゴフッ！！」
「アハハハハハ！！」

笑いながらも椿ちゃんの事を殴り続ける影千代ちゃん
そろそろとめた方がいいかしら？あれ？アレを何処にやったかな

私は、影千代になったとらを止めることの出来るアレを探していた

するとカズくんが・・・

「影虎!!やめろ!!
いくらなんでもやりすぎだ!!」
「子供がでしゃばると、危ないよ♪」
「ゴハッ!?」

カズくんが椿ちゃんを庇うように前に立つといきなり殴り飛ばされていた…。(そりゃ当然よね)
そして、未だに影千代ちゃんは椿ちゃんを殴っている。

あれ?ほんとアレ何処やったっけ?アレレ?

「このガキ~!!」

っと影千代ちゃんがカズくんに襲いかかろうとしたとき

アレが見つかったので私は・・

「影千代ちゃん♪これな~んだ♪」
「へ?ヒッ!?ヘビ!?いや、イヤァア!!」

影千代ちゃんが立ち上がると同時におもちゃのヘビを影千代ちゃんに見せるとさっきの椿ちゃんと同じように部屋の隅でシーツを被って怯えだした…。
フフフ、作戦成功

実は、とらは、子供の時に蛇に咬まれたらしくてそれ以来蛇が苦手なの♪まぁ普段なら苦手なだけで触れるし問題はないらしいんだけど影千代ちゃんになると咬まれたときのことを思い出して椿ちゃんのように怯えてしまうのだ。これこそ対影千代対策『蛇でどっきり

大作戦』・・・あたしって馬鹿ね・・・ほんと・自分で考えて殴りたくなった・・・・ハァ～

まぁそれは置いといて

「カズくん♪わかってくれた？」

「あ、あぁ…、椿…悪かったな…。」

カズくんは、自分に泣きついてきている椿ちゃんの頭を撫でて謝ってきた

椿ちゃんは、小さい声で「ごめんなさいごめんなさい」って謝りながら泣いていた

実を言うと

影千代ちゃんと椿ちゃんを同じ部屋に二人でいさせたら影千代が椿ちゃんを冗談抜きで殺しちゃうから預かっていて欲しいのよね。私は、影千代ちゃんの相手をしなくちゃいけないから椿ちゃんの面倒は見れないのよね

「忍さん…その話のるよ…。

椿を使って実験までしちまったからな…。」

よかったやっぱり根は優しいのね・・・あの人みたいね・・・・・

まぁいい

「おねぇさん♪

ってあれ!?何でおねぇちゃんが泣いてるの!?それにここにいる三人の人は誰!?」

いきなり、扉が開いて外は晴れているにも関わらず黄色い雨ガッパを着た今のカズくんと同じぐらいの歳の子でこの前、とらと椿ちゃんが助けた雨宮連くんが入ってくるなりビックリしていた…。

「忍さん…誰？この子？」
「カズくんは知らなかったわね♪
訳があって病院で預かってる雨宮連君よ♪」
「は、初めまして…。」

何故か雨宮　連くんはオドオドしながらカズくんに挨拶していた…。

「でね、連君♪
こっちが椿ちゃんのお友達の天野　葵ちゃんよ♪」
「へぇ～…おねぇちゃんのお友達なんだ♪
よろしくね。
葵おねぇちゃん。」
「葵おねぇちゃん…。
はう～よろしくね連君♪」

私が連くんの肩に手を置いて葵ちゃんを紹介すると、葵ちゃんは葵おねぇちゃんと言う言葉に反応してかかなり上機嫌になっていた…。

やっぱりこの子も可愛いわね♪

「それで、こっちはとらのお友達の負導　一真君よ♪」
「よろしく…。」

カズくんが片手だけをあげて簡単に挨拶をすると、連くんが何故か驚いていた…。

「おにぃちゃんって年下しかお友達いないの？」

（プフ、思わず吹きそうになったわ・・・これってもしかしておもしろい？）

「とらはね、小さな子としかお友達になれないの…。だから、連君はお友達で…「誤解を招く事を言ってんじゃねぇ！？」」

私が冗談で悲しい表情で連くんを見つめて答える前にカズくんが怒鳴った。

「もう♪冗談が通じないんだから♪」

「あんたが言うと冗談に聞こえないんだよ…。連とか言ったな…。

俺は本来なら影虎と同い年で身長も１６９ぐらいあるのだが、訳あって今は縮んでるだけだ…。」

「…。」

そこまで説明すると連くんがまじまじとカズくんを見ていた。

そして…。

「一真君…現実見ようよ…。

頭大丈夫？」

「「「えっ！？」」」

ブチッ！！っと何故かカズくんから聞こえた

「一真！？落ち着いて！！

きっと悪気は無いんだよ!!」
「そ、そうだ!!
連は事情を知らないんだ!!」
「二人とも離せ!!
あいつだけはこの手で殺す!!」

連くんの発言には私を含め葵ちゃん、椿ちゃんまでもが驚き、カズくんは今の言葉にぶちギレると葵ちゃんと我に帰って泣き止んだ椿ちゃんに抑えられた…。

ナイスなチームワークね♪

「え～とね…連君…。
今のカズくんが言った言葉は全部事実なのよ…。」
「えっ!?そうなの!?」

私慌ててそう言うと連くんはやっと誤解を解いてくれたようだ…。
(やっぱり頭のいい子は、話が早いわね)

「やっと信じたか…。」
「う、うん…。
今も半信半疑だけど…。」
「戻ったら絶対にお前の前に現れて自己紹介してやる!!」

カズくん・・その捨てゼリフ・意味が分からないわ・・・

「それで、あそこでシーツを被ってる女の人は誰?」
「え～と…、言いにくいんだけど…。
とらの女の子バージョンの影千代ちゃん。」
「えぇっ!?」

連くんが影千代ちゃんを指差して聞いてきたので正直に答えて上げると

もの凄く驚いていた

「おにぃちゃんがおねぇちゃんになっちゃったの!?
それで、おねぇちゃんは泣いてたの!?」

「れ、連…落ち着け!!
確かに俺はあいつのせいで泣いていたがそう言った意味で泣いてた訳じゃないから!?」

「えっ!?どういうこと!?」

「あっ!?」

連くんがパニックになって椿ちゃんが弁解すると、連くんが首を傾げて椿ちゃんに尋ねると椿ちゃんはしまったと言わんばかりの表情をしていた。

……

……

「…でおねぇちゃんは泣いていたと?」

「はい…。」

連くんは椿ちゃんから全てを聞いて連くんが椿ちゃんを問い詰めていた。
何故だろう・・笑いの神が光臨する予感がする

「へぇ…おにぃちゃんがおねぇちゃんを泣かしたんだ…。」

すると、いきなり連くんの目が黒く歪み濁った様に見えた。

たしか、連くんってキレるともの凄くおっかないんだっけ？

「なら同じように痛め付けて泣かして「やめろ！！連！！」や…おねぇちゃん！？」

椿ちゃんは連くんが何かを仕出かすと予想して、連くんに飛び付いて阻止していた。
ナイスよ椿ちゃん・・・下手すればあたし達まで凍りづけにされる所だわ

「連…やめろ…今回は私が悪いんだ…。
私がわがままを言ったから…。」
「おねぇちゃん…。
わかったよ…。」

椿ちゃんが言うと、連くんは納得して殺気が消えた…。
一件落着？まぁ椿ちゃんもちゃんと反省してるみたいね

「そうだ♪連君♪
今日ね、椿ちゃんがカズくんの家に泊まるのよ♪
君も泊まりに行ってみれば♪」

よくよく考えたら連くんと影千代ちゃんが喧嘩でもしたらまずいので連くんも預かって欲しいな？それに連くんにとっては、カズくんは、友達みたいだし

「へ？」
「本当に！？一真君、僕も泊まっていい？」

私が勝手に決めて連くんがカズくんにキラキラした目で尋ねていた。

あの目は裏切れないと思うわ

「…あ、あぁ…。
構わんぞ…。」
「ヤッター♪」
「良かったわね♪」

フフフ、全てが作戦どうり♪

後は、影千代ちゃんになったとらのケアをしてあげないとね

つづく

幻想掌握（望まない暴力）（後書き）

以上です

今回は、女性キャラクターを募集したいと思います。

影虎も段々と当麻ぽくフラグキャラにしたいので・・（現在頭の中では、３人います）

気軽に送ってください

もし採用できない場合でもどこかで色々と変更して出させていただきます。

精神抑圧（ストレス障害）（前書き）

いつも道理の一週間投稿です。

では、どうぞ

精神抑圧（ストレス障害）

私は、カズくん達を車で送った後、コンビニに行ってとらが好きなものを買って病室に帰ると

影千代ちゃんの病室に行くと

病室の前で看護士のみんなが慌てていた

「あ!?桜井先生、あのまた、桜小路先生の親族の患者さんが・・・」

っと看護士の一人が私を見るとそう言ってきたので

「わかりました。あの子はいつも道理私が見るからみんなは、仕事に戻って」

私がそう言うと外にいた看護士のみんなは、頭を下げて仕事に戻った

そして、私が病室にはいると部屋の中は、割れたガラスや破れた枕の綿や羽根、そして恐らく投げられて壊れた時計やテレビに破かれた本のページでいっぱいだった

そして、中では、

「はなせぇえええええ離せ!!!!!!!!」

っと冥土返しと看護士3人に押さえつけられながら泣いて暴れている影千代ちゃんの姿があった

私はすぐに影千代ちゃんに駆け寄り影千代ちゃんの両腕の手首を片手で鷲掴みにして両手を拘束して

「ヘブンキャンセラーにみんなありがとう、後はいつも道理この子は、私が3日間面倒見ますからお仕事に戻ってください」

っと私が暴れている影千代ちゃんに馬乗りして押さえ込みながらそう言うと

みんなは、すぐに部屋を出ていってくれた

「桜井先生、「はい？」そのこの症状は、いつも道理重傷だよ。気を付けておくれ」

っとヘブンキャンセラーは、私にそう言って病室を出ていった

「さてと・・・また、鏡でも見てイライラしたのかな？とら」

っと私は、私の下で拘束されている影千代ちゃんにそう尋ねると

「あぁ自分の姿を見てイラっとしたね～このイライラは、まずあのクソ女を涙が枯れるまで泣かせてから殺してその後にあの俺の邪魔しやがったガキ、いや、一真を殺す、あの野郎、クソ女と同じ感じがして苛つくんだよ。だから殺してやるんだ。アハハハハ」

っと影千代は、可愛い声と姿には似合わない台詞を吐いて狂ったように笑っていた

（確か今回で影千代になるのは、８回目だっけ？毎回毎回、この姿

のとらと話すけどあまりにもとらと違いすぎて未だにこの状態のとらの治療法が解らない精神疾患?違う気がする・・何か根本的にとらが狂っている気がする。心に傷を負っているの知っているけど・・・なんか違う気がする・・・まるで何かに後押しされてるような・・、それに自分から進んで自分が一番したくないことをしてしまうまるで自虐?以前、二重人格かと思ったけど違った・・・一体どうすれば・・そういえば)

「ねぇとら「なんですか?」あんた、椿ちゃんと今はカズくんを殺したいのよね?」

「あぁ殺したいよ♪今すぐにでもな!!」

「なら、私は殺したくないの?今の状態のあんたの口から私を殺したいって聞いたこと無いんだけど?」

っと私は、長年の疑問をぶつけたすると

「何だよ殺して欲しかったのか?なr・・・・あ、う、あぁアア、なに・・これ、アッァアアアアアア・・ア・・・・」

突如、影千代ちゃんが苦しみだし気を失って今は、再び眠っていた

私が手を拘束して馬乗りで座っていたのであまり動けなかったようだけど

今、もの凄い苦しみかたしてたわ・・・・可哀想に・・

(でも、やっぱり『異世界樹(ユグドラシル)』どうよう私には攻撃できないと言うハンデは残っているみたいね・・でも、椿ちゃんには、簡単に手を

挙げられるまだまだ、研究の余地はあるわね♪）

「いつも傷つくのは、あなた『たち』なのね・・・でも、私が絶対にあんたをあんたから守って上げるから安心して寝なさい・・とら、いえ『エルク』。」

私は、先程まで暴れていたこともあるのか疲れ切って眠ってしまったように眠る影千代ちゃんの桜色の長い髪の毛を顔にかからないように避けてあげて頭を撫でていると

「・・・・いやだよ、・・・椿を・・殴りたくないのに・・・殺したくないのに・・・・」

っと寝ながらにして涙を流して寝言を言っていた

「絶対に影千代ちゃんの姿でもいつものあんたで居れるようにして上げるわ♪おやすみなさい」

私は、そう言って病室の電気を消して病室に鍵を閉めて

病室の前のベンチに座り

天井を見ながら考え事をしていた

……

……

……

「ん?あれ?眠っちゃてた・・あれ毛布が・・え?」

私はついつい寝てしまっていて目を覚ますと私の身体には毛布がかぶせられていてふと影千代ちゃんの病室のドアを見ると鍵が壊されていてドアが開いていた

（まさかあの子、椿ちゃんの所に・・・・・あ！？）

私は飛び起きて病室に入りベッドを見るとすやすやととらならぬ影千代ちゃんが眠っていた

「あれ？逃げたんじゃなかったの？」

私は、安著して肩をがくりと落としそう呟くと

「・・・・・逃げて欲しかったのか？」

「うわぁ！？」

いきなり影千代ちゃんが話してきたので驚いた

「そんなに驚かなくてもいいだろ？・・・・・はぁ～」

っと溜息を付かれた

（・・・・アレ？なんかいつものとらっぽいような・・）

「昨日は、止めてくれてありがとうな。なぜだか解らないが今は少しだけ落ち着きを取り戻せてる・・」

っと影千代ちゃんは俯きながら私のそう言ってきた

「つまり、今のあんたは、とらなのね？」

私がそう聞くととらは、悲しい顔をしながら

「・・・・今だけじゃない・・椿を殴って笑っていたのも一真を殴ったのも病室をここまで散らかしたのも全部俺だ・・・・・・俺は俺は、自分の手で・椿を椿を・・殺そうと、コロソウト、したのは・・・〔ポタポタ〕俺なんだ！！！！！！！」

っととらは、涙を流しながら自分の膝に掛けられた掛け布団を両手で握りしめてそう怒鳴った

「自分でも良くわからないんだ。無性に苛ついて物を壊したくなって人を傷つけたくなって椿を殺したくなるんだよ！！今だってそうだ、理由がないのにアイツのことが大事なのにアイツのことを思い出しただけでいますぐにでも心臓をえぐり出したくなる！！おかしくなりそうなんだよ！！いやなのに止められない止めようとすら思えない。なぁ、俺って死んだほうが良いよな？これいじょう俺が俺でなくなるんなら・・・」

突如、とら（影千代）は、震えだして前を見ているものの焦点が全くあっておらず

言動もただ気持ちをぶつけてくるだけになっていた

（いつもの破壊衝動が無くなって理性は取り戻せたけど殺戮衝動が残ったままで逆にとらの心を蝕んでるのね・・・）

「そんなことはないわ♪あんたがとらで無くなることはないわ♪それりゃ～たしかにあんたは、椿ちゃんを殴ってたのは事実よ？でも、

それはあんたの意志じゃないしあんたが弱いわけでもない。きっと理由があるのよ。昔の心の傷以外にあんたを苦しめている理由がね。それにあんたは、その姿になると凶暴になるけど意外に人間以外の生き物にはやさしいじゃない♪おねぇさんはちゃんとそう言うところもあるって解ってるからいっしょに直しましょうね♪」

っと私は、いつものように化け物みたいな強さを持ったとらではなく心を徹底的に痛め付けられて強靱と言う言葉からは一番とおい華奢で儚いさわっただけで壊れてしまうほど衰弱しきったとらをなだめながらそう言った

（とら、常に強さの裏に弱さを持って生きてる・・・・それが自分で招いた種だとしても惨めすぎるわよ。一体この子が何をしたって言うのかしら・・神って意地悪な物ね・・大いなる力には大いなる災いが降りかかるとは言っても・・酷すぎる）

この後、私は、何故かは解らないが理性を取り戻したとらの世話をしていた

今回は、とらのいや影千代ちゃんの相手はもの凄く楽だった

ただ、とらの悩みを聞いて上げたり出来る限り怒らせないようにして上げただけだった

やはり、怒ると最初みたいに暴れ回るという現象は、存在して居るみたいだけど

昨日よりは全然ましのようね。

恐らく今のとらがまともでいられるのは、昨日の夜に私を殺そうとしたあの時のなぞの苦しみが原因だろう

そして・・・

三日後…。

元の姿に戻ったとらは、まず一番始めに『異世界樹（ユグドラシル）』の枝で自分を突き刺していた

「あんたね、元に戻ってからすぐに自分に攻撃するの止めたら？」

っと私がそう言うと

「ムリ、俺はどうであれ自分で約束を破った、だからこそこれは俺に対する俺自身からのケジメだ。都合がいいかもしれないけど椿を俺が殴ったからって俺が椿から逃げちゃイケねぇんだよ。俺が居なきゃアイツを守ってやれるやつがい無くなるだからこそ俺は、恥をかいてでも椿を守るんだ・・・今回もありがとうな忍、恩に着る。」

とらはそう言って服を着替えて人先早く家に帰っていった

その後カズくんが来たからちょこっと悪戯で

「人格は変わっても♪ちゃんと影千代ちゃんがしてきた記憶はちゃんとあるからね♪
椿ちゃんが泊まった事もちゃんと知ってるからカズくんひょっとしたら殺されるかもよ♪」

っと脅してみたところカズくんの顔色がどんどん悪くなっていくのが見えた

作戦成功ね♪

その後、カズくんは椿ちゃんを家に送って行って上げたらしい

やっぱり優しいのねカズくんは♪

そして、その日の夜にとらから電話があった

「はぁ～い、な～にとら？」

っと私が電話に出て聞いてみると

「今回の件は誠にありがとうございました。おかげで椿との仲直りもできて一真とも普通に接せられました。来ないばかりは感謝でいっぱいだ。今度、ただで一日先生してやる。その時はコキ使ってくれ最後にもう一度だけありがとう・・・おやすみ」

そう言ってとらは電話を切った

そして、プー・・プー・・・と私の電話から音が流れていて私は、診察室の窓から月明かりの眩しい夜空を見ながら不意にこう呟いてしまった

「わたしは、あなたや他の子から礼を言われるような人間じゃないわ、むしろ恨まれなきゃいけないのよ・・・・・」

桜井忍編終わり

つづく

精神抑圧（ストレス障害）（後書き）

以上です

実は、椿を殺そうとすることで影虎自身も苦しんでいます。

殴られた椿とは違い心に傷を追っていきます

ではまた来週

無我夢中（偽りに染まった愛）（前書き）

いつも通りの投稿です。

今回の話は、一真君が主役ですね♪

ではどうぞ

後、気軽に感想をください

無我夢中（偽りに染まった愛）

8月30日…。
夏休みの終わり一日前の午後…。
まだ寝起き（寝過ぎた・・昨日はしゃぎすぎた）で髪の毛がぼさぼさで寝間着も正直脱ぎ崩れていて一言で言うなら準備前、の俺が影虎の部屋のドアをバァンと開けて
パソコンに向きあって適当に遊んでいた影の耳元に

「おはよ・・？　おい、影。おまえ昨日風呂に入ってないんだから入っとけよ。それにその服もついでに洗うから脱いどけよ」

っと言っやると

「・・・・・」

（あれ?反応がない・・・もしかして無視!?・・・なんで無視するんだよ?俺の話なんて聞きたくないって言うのか?・・・なんか悲しく・・・・・「あれ椿?起きたのかよ。え?つ、椿さん!?こんな時間だけどお目覚めの熱いキスならまだしも灼熱の業火というあいさつは望まぬ限りなんですが」・・・この野郎、この間は、俺のわがままのせいでひどい目にあわせたから大人しくしてたら・・・この野郎!!）

「安心しろおまえに当てようなんか思ってない♪「ホッ・・」おまえの部屋を燃え散らしてやるぞ♪」

俺はそう言って影虎の現在クリアしたばかりのゲーム機に本当に火をつけてやった

ボォボォ燃えるゲーム機を見て影虎は、「俺の１３４時間が・・」
っと言っていた

やりすぎだろ・・・

そのあと俺は、少しだけ悔しそうな表情をしていた影虎を風呂に入らせて

洗濯に炊事そして、っと言っていた

やりすぎだろ・・・

そのあと俺は、少しだけ悔しそうな表情をしていた影虎を風呂に入らせて

洗濯に炊事そして、散らかっている影虎の部屋の掃除などをしていた

「影虎の奴、この部屋のどこが片付いていると言えるんだ？緻密に計算して物を置いているだけというがあいつはごみ屋敷を作り出す人間の典型だな・・・まぁ資料や機器だけで年頃にしては、如何わしい本などが一つもない。おまえは僧か！？と突っ込みたくなるが無い事にこしたことはないか♪」

などとぶつぶつ言いながら掃除を終えると突如

リビングでブーブーとバイブレーションの音がしたので行ってみると影虎のケータイに一真から着信があり俺はそれに出た

『プルルルル…プルルル…ガチャッ…はい？椿だが…？』

「椿か？俺がだれかわかるか？」

画面にお前って書いてあるからわかるだろ普通・・・なんとなくからかってやろう

『葵の彼氏さんか？』

俺がおふざけでそういうと

「違うわ！！負導　一真だ！！」

なかなかいい食い付きだったので

『ブドウ　カスマさんですね。
ご用件は？』

「いい加減殴るぞ！？」

ふん、俺を殴ったら影虎に殺されるだけだから一真ならそのことを考慮しているはずだ・・フフフ、私の奇策をなめるなよ？・・・あれ？このセリフこの間見たアニメで聞いたような？まぁいいや

『冗談はさておき、どうした？
影虎なら今は風呂だぞ？』

「マジか～…。」

なんか影虎に用があったのか？それにしても最近影虎の奴一真と遊びすぎだぞ！？俺と一緒にいる時間が減っちゃうじゃないか！！・・・・じゃなくて！

『用件は何だったんだ？

俺で良ければ聞くぞ…？』
「いや、影虎に宿題の論文の書き方を聞こうとしてただけだよ…。」
論文？あぁ夏休みの宿題か。あれなら俺もう終わらしたし一真に教えてやろうかな？
他は面倒だったが…。』
っと俺は、宿題の感想をまだ終わっていない一真に言った
『で、どうする？
明日見せてやろうか？』
「ぜひお願いします！！」
『凄い食い付きだな…。
じゃあ明日な…。』
「ん。
じゃあ…。」
そして、俺と一真は約束を終わらせた。
「椿～俺もう出るから次、入れよ・・な！？」
といつも上に立っている髪の毛が風呂に入ったことにより本来の猫っ毛に戻った頭のタオルを首にかけバスタオルを腰に巻いた影虎がそう言ってきて驚いていた
その時の俺の格好がついでにと洗濯しようと上着を脱いでいて上半身裸だった為であろう
（なんだ影の奴、一緒に入りたかったのか？かわいい奴だ♪）と思い

影虎を湯船に押し倒して一緒に入った影虎はその後、俺に怒鳴りながら拳骨を決めてきた

もの凄く痛くて泣きそうになった

それにしても今改めて影を見るとめちゃくちゃ男前だよな・・顔はカッコいいし背も高くて男物のモデルにでもなれそうなくらいバランス良いし・・・俺みたいな女失格みたいなのが彼女で釣り会うのかな?・・・とにかく背を延ばそう目標は、忍さんの身長だ。この間少しの間だけだがあの背の高さが手に入った時はうれしかった

などと思いながら好物のフルーツ牛乳を一気飲みしてその後、少し影虎の機嫌が悪かったが仲直りして眠った

・・・
・・・・
・・・

次の日、今日は影虎に起こしてもらったので早起き出来た

そして、いつも道理、家事をしていると

ピンポーンっとインターホンが鳴ったので

「影虎、出て。多分負導だから」

「わかった。」

そう言って影虎が玄関に行くと

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン。

あれ?忍さん?え?でも今日は、仕事のはずだよな?

「うる…ピンポーン…せぇ!!」

影虎が扉を開けた

「よぅ…ピンポーン…影…ピンポーン…虎…ピンポーン…椿は…ピンポーン…いるか…ピンポーン…。」

声的に一真だがなぜインターホンを押し続けてるんだこいつ?マジでうるさいんだが

「だからうるせぇ!!」

「ガハッ…ピンポーン…。」

影虎に殴られたのにもかかわらず押し続けるか?

「い…、いきなり何しやがる…?」

いやいやいや影虎悪くないだろ?むしろそんな疑問を持てることに驚きだぞ?

「ピンポーンピンポーンうるせぇんだよ!!

新手のいたずらか!?ピンポーンダッシュならぬピンポーンラッシュか!?」

なかなか上手い!!てか次インターホン鳴らしたら・・・『殺す』

「お前…自分が何をしていたか覚えてないのか…？」
「…ピンポーン…。
グヘッ！？」

時は満ちた！！と言わんばかりの勢いで走って一真の腹に魔術でこぶしを固めたパンチをめり込ませてやった

「えっ！？」
「いい加減うるせぇんだよ！！」

俺が攻撃したのを見て影虎が驚いていたがそんなの無視で一真を怒鳴りつけてやった

「全く…近所迷惑を考えろ…。」
「お、お前は力加減を考えたらどうなんだ…。」

（それに俺は常に力加減をして生きているのだ。力加減を間違えるはずはない）

俺は項垂（うなだ）れてる一真を見て、頭を抱えていた…。
影虎は何故かガッツポーズをしていた。

「それよりも何故１０時以内に呼び出したんだ…。」

一真は立ち上がり、俺に尋ねた…。

「別に意味はない。
ただ、時間通りに来るかどうかの実験をしたかっただけだ…。」
「…。」

正直言って理由なんてなかったんだけどな・・・ん？

一真は握り拳を作って俺に振りかぶった。

殴られたら一真の髪の毛全部燃やそう

っと冷静に考えていると

「待て！！一真！！気持ちはわかるが抑えろ！？
椿を怒らせれば世界が終わる！！」
「お前から見て俺は一体何なんだ…？」

しかし影虎に止められ、影虎は意味のわからんことを言い出すのでそれに突っ込んだ

一真は握り拳を解いて手を下ろした…。

ちぇ、せっかく天下御免で焼死体を作れるチャンスだったのに・・・
あれ？何か目的を忘れているような
……
……
「確か…この辺りに…あったあった。
ほらよ…。」
「どうも…。」

俺はあのあと、目的を思い出して部屋の中から宿題のファイルを取り出して一真に渡した

「一真？何だ？それ？」
「論文だよ…。
椿からこいつを見せてもらうために来たんだよ…。」
「…論文？」
「宿題にあっただろ…？」
「？宿題？」

影虎がいきなり訳のわからないことを言い始め一真が説明したのだが影虎は未だに首を傾げていた…。
こいつまさか…？いや、たぶんそれはないと思うけど・・・もし予想道理なら影虎の顔を机と一体化させてやろう・・・ッフフフ

「影虎…まさかとは思うが宿題してないのか？
まず、あった事は知ってたか？」
「…いや、知らなかった。」
「…えぇ！！」

影虎の発言に一真は驚いた

そして俺は、再び時は満ちたと言わんばかりに

「くぉんのバカ野郎！！」
「ガハッ！？」

影虎の頭を鷲掴みして、机に叩きつけた…。
・・・だから夏休みが始まる前に終わらせておけと言ったんだ・・・
毎年毎年夏休みになる前にそう言っているのに・・・

「いってぇ！！」
「とっとと宿題しやがれ！！

終わらなかった場合1ヶ月晩飯抜き＋陰湿な嫌がらせを繰り返してやる！！」

っと俺は毎年この季節になるというセリフを言ったすると

「りょ、了解した…。」

そう言って影虎は近くにあった学校の鞄から色々と手探りで探していた…。
ただ、影虎が恐怖で震えてる

あれ♪ただ毎日のように風呂を冷水にしたり調味料を胡椒だけとか味噌汁を水で１００倍に薄めたりとか影虎のバイクのガソリンタンクに角砂糖入れたりとかタイヤの空気を抜いたりとか目覚ましの代わりにダイナマイトを置いておくくらいなのに♪

・・・そして、一真に勉強を教えながら影虎のやる気を出させていると

カチカチカチカ

一真は机の上を見るた。机にはシャー芯が三本出ていた…。
そして一真は、一本のシャー芯を手に取ってシャーペンの中に直そうとするが…。

ポキッポキッポキッポキッポキッポキッポキッポキッ

「「……。」」

見事に粉々に砕けてた…。
それを見て、俺と一真は沈黙していた…。

（何かあったのかこいつ？もしかして葵のことで・・）

「宿題ってこんなに少ないのか！？
ガハッ！！」

影虎が宿題の内容が書かれているであろうプリントを見て叫んだので
少しムカついて思いっきり殴った

「何すんだよ！？椿！？」
「少しは空気を読め！！
それに宿題の内容がわかったならとっとと行動に移せ！！」

俺がそう怒鳴ると、影虎はしぶしぶと宿題をやり始めた…。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

「で、お前は何故そこまでイライラしているんだ…？」

「えっ！？何でわかったの？」
「また、シャー芯が出てるぞ…。」
「へ？うわぁ！？」

もう一度机の上を見るとシャー芯が五本増えていたので俺は一真になぜイライラしているのかを聞くとなんで？と聞かれ呆れながら答えた。

「お前、昨日か今日に何かあったのか？」
「う～ん…昨日は四時間に及ぶ宿題三昧だな…。イライラの原因はこれだと思うが…。」
「……。」

多分そうだろうけども。

俺は、いつも道理一真＆葵のうそ発見法を使った

一真は親指で中指と人差し指を擦っていました。

「イライラの原因は宿題三昧が原因じゃないようだな…。」
「えっ！？なッ！？」

一真の反応を見た限り自分でも理由がわかっていないみたいだな・・・仕方ない

「…今日の出来事を一応話してみろ…？」

俺はとりあえず事情を聞こうと一真に質問してみた。

「八時に起きて、朝飯食って歯を磨いて…。」

「そこはいらん…飛ばせ…。」
「ここに来た…。
あれ？」
「Ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ！！」

話が長くなりそうだったので簡潔に話させると話が飛んで完結してしまった

簡潔にが完結になった？と思いつい英語でしゃべってしまった

「え～と…ここに来る途中に葵が金髪のロングの男の腕に抱きついて歩いてた。」
「……はぁ？」

俺は一真の言葉を１００回近く頭の中で繰り返してみたがある答えしか思いつかなかった

「え～と…つまり…どういう事？
他の見知らぬ奴と葵は付き合ってるのか？」

俺は聞きたくもない事を聞いた

「そ、そう言うことじゃねぇか？」

おい、なんでそうも平然と答えるんだ？なめてんのか？

「兄と言う可能性は！？」
「え、え～と…あり得ません…。
葵は一人っ子らしいですから…。」

ぐいぐい食いついたがどうやら無駄らしいな・・・

「お前はそれで…「出来たー！！」うるせぇ！！」

ガンッ！！tっと俺は再び空気を読まない影虎の後頭部を懐から取り出したフライパンのフルスイングで殴ったもしここがバッティングセンターなら間違いなくホームランだ

「グハァ！！」

てか、影虎約３０分で宿題終わったのかよ…。相変わらず早いなこいつ・・・俺の2時間のお勉強時間が無駄な気がしてきた

「頭が割れる…。」

「ちょっとは空気読めって言ってんだろ馬鹿虎！！」

「だからってフライパンで殴るなよ！！バカ！！」

「うるさい！！空気を読まないから悪いんだ！！馬鹿虎！！いや、大馬鹿虎！！」

「誰が大馬鹿虎だ！！

バカバカ言う方がバカ何だよ！！このバカ！！」

「そこまで言うならもういい！！出ていってやる！！

他の男見つけるまでこいつの家に居候してやる！！」

「俺を巻き込むな！！」

「お前らやっぱり怪しいと思っていたがそう言う関係だったのか！？」

「違うわ！！」

「グハッ！？」

いきなり椿と影虎が言い争いを始めか一真を巻き込んで、影虎が突っ掛かったら右頬を殴っていた。

「いつもより…力が強い…。」

「…安心しろ…痛いのは…お前だけじゃねぇから…。」

影虎が痛がっていて俺も驚いたが一真の手を見るとシャーペンが砕けて手のひらに刺さっていて血が出ていた・・・普通に痛そう

……

……

「これでよし…。」

「ありがとよ…。」

「参りました…orz。」

「やっとわかったか…。

」（ー_ー）「フッ…。」

俺は、あの後、一真の手に消毒して包帯を巻いてやった

その最中でも、影虎と言い争いをしていたが伝家の宝刀の「学園都市を出ていってやる～。」や「自殺してやる～。」の言葉で影虎に勝利し土下座させた…。

「それはそうと…お前は葵があのままで良いのか?」

「…別に構わねぇよ…。」

俺がそう聞くと

一真は手をプラプラとさせて答え机の上の論文に向き直った…。

「何故だ?

お前は幻想御手事件の時に葵が気絶して、あんなに必死になって助け出した存在なのに、他の見知らぬ奴に負けて悔しくないのか?」

俺はなぜか一真が心配になって聞いてみると

「あのな…俺は別にあいつの事好きじゃないし…それに、あいつがどんな奴を好きになろうがあいつの勝手だろう？」
「でも、もうお前に構ってくることが無くなるかも知れないのだぞ？それでも良いのか？」
「…いつかこうなることぐらいわかってたよ…。」
「えっ！？」

一真はそれだけを呟いて別のシャーペンを筆箱から取り出し、手でクルクルと回した。

こいつムカつく、なんか奥手で素直じゃない弟？の恋愛を応援してる気分？

「あいつはかなり告白とかされまくってるからモテるんだよ…。だから、いつかこうなることぐらいわかってたよ…。」
「…素直じゃないな…。」
「はぁ！？」

俺がそう言うと一真は、驚いていた。

・・・だめだな。ここにいる男は、役に立たない

特に影虎・・・しゃーない俺が行くか・・

「ちょっと出掛けてくるぞ…。」

「気をつけてな。」

と一真が言ってきたが正直言ってフライパンで顔面を殴りたくなった・・・リアルで人の気も知らないでよ（怒）

……
……
……

家を出てから約３０分

俺はいつも道理、男装して学園都市のカップルが彷徨く場所を手あたり次第に回っていた

すると１２件目でようやく葵を見つけた

一真の言ったとうり葵は、金髪のロン毛男の腕に抱きついていた

（葵の奴、何であんなに・・・虚しく幸せそうなんだ？）

俺は。葵の表情を見てそう感じた

葵の今の笑顔は、一言で言うなら空っぽだ

まるで夢でも見せられているかのような虚しい笑顔だ

おれはすぐに葵に駆け寄って葵の手を後ろから引いた

「ん？あれ？椿じゃん。どうしたの？少し息が上がってるよ？」

っと葵はおれのほうを見て首を傾げながらそう言ってきた

「どういうことだ？なんで一真をほったらかしてここで男と遊んでやがる？」

っとおれは葵を見上げながらそう言うと

「う～ん、別に負導君と付き合ってるってわけでもないしただのクラスメイトだよ？別に私が何しようと勝手じゃない？」

「な！？」

っと首を傾げながら言ってきた

ので俺は驚いて声をあげてしまった

（なんだ、こいつ壊れちまったのか？・・・やっぱりこの男が原因か？さっきから俺のこと見定めるような眼で見てきてやがる・・・おれが女って認識してやがるの！？）

「へぇ～君、最初は男かと思ったけどよく見るとかわいい女の子だね♪どう君も僕らと一緒に行かないかい？」

「は、はなせ！！」

急に金髪男は、おれの顎を右手で軽く持っておれの顔をあげさせおれの顔を覗き込んできたのでおれは男の手を払いのけて下がったその時、帽子が脱げてしまい髪の毛が散らばったのでもう男だとは言い張れなくなった

（チキショウ！！ちょっと油断してたら顔を触られた！？汚らわしい・・・）

俺がそう思っていると

「おいおい、何も突き飛ばさなくてもいいだろ？まぁ俺が怖いと思

うのは間違いじゃないけど・・・安心してよ。あんたも俺の虜になるからさ♪さぁおれに夢中になりな！！」

男は俺の眼をまっすぐ見てそう言った

（・・・意味がわからん。・・・・この金髪ロン毛・・アホなのか？）

俺がそう思い

「お前バカか？夢中になれ？正直いって色々な意味で痛々しい俺がお前に夢中になるんじゃなくてお前は、集中治療室にでも入ってろよ？おい、葵、こんな馬鹿な男ほっておいて行こう「重力倍加！！」グッ！？」

俺が葵の手を引っ張っていこうとすると葵に一真の時と同様重力をかけられて動けなくなった

なんで？

俺はすぐに葵を見たすると

葵の顔は、ものすごく怒りに満ちていていまにも人を殺しそうだった

「いくら椿でもさ、言って良い事と悪い事があるよね？今度、高貴の悪口言ったら許さないから」

「言っていいことだ？俺は、素直に思ったことを言っただけだ・・・俺はお前と違ってこういうやばい奴に命を狙われていたんだからな・・人生の先輩のアドバイスは聞いておいたほうがいいと思うぜ。

どう考えても屑だろ?そういうオーラがにじみ出てる〜ガァン〜キャッ!!〜バタン〜」

俺がしゃべっているといきなり天野に右頬をあり得ない威力で殴られてつい悲鳴に近い声をあげて倒れてしまった

「悪口を言わないでって言ったよね?耳付いてるの?それとも頭悪いの?・・・」

(今のパンチ絶対にそこいらの不良のパンチより重いな・・・でも、なんで俺の言っていることが分からないんだ?本当にその男が好きなのか?俺がおせっかいしてるなかな?)

「だいたい高貴も高貴もだよ。私が居るのにほかの女の子に興味がわくなんてちょっとどうかな?」

「・・・あぁそれはごめん」

「それにこの女には、もう男居るよ?」

っと天野が言っていたが俺は、少し悲しい気持ちになって起き上がる気が失せていた

また、裏切られた。その感覚しかなかった

すると

「へぇこんな小さな女に彼氏いたんだもしかしてロリコン?」

っと高貴と呼ばれていた男が言った

ブチッ

「そうそう、図体がでかい木偶の棒でね。いつもこの子に殴られても文句も言わない弱虫でさ♪あと、快楽殺人犯だったね♪」

「へぇすごいのと付き合ってるね♪」

ブチブチブチ

俺は葵と男の楽しそうな会話の中に俺の悪口だけじゃなく『影虎』の悪口が出てきたことに無性に腹が立ったそして、目の前が真っ赤になる感覚がした

「チィ・・葵とあの男・・殺す」

(葵がさっき言ってた言って良い事と悪い事ってのはさ、言って良い事は、悪口で。言っちゃいけないことが『私』の『影虎』の悪口ってことを教えてあげないとな・・・馬鹿にもわかるように・・痛みを伴う方法でな!!)

「・・・・魔導書『発展の書』およびメイン魔導書『エノクの書』から現段階で最も適した魔術術式の構造の掲示および体内の血液配列による魔術術式構成を開始、これより『新書血録』を起動します」

『私』の口が勝手に開きペラペラ御託を並べて『新書血録』を起動させ俺自身を魔道書に変えて

『私』は、背中から燃え滾る赤き翼をはやして空を飛び

葵の重力から逃れた

「え？あの子、飛んだ？」

っと男は驚いていたが

葵は、若干構えていた

そして、俺は、５メートルくらい上空から

「おい、クソ女（天野）。一つだけ教えてやる。影虎の悪口を素で言って良いのは、『私』だけなんだよ！！私がに裁きを下す！！」

「グッ！？カハッ！！」

俺はそう言って葵の腹部に空中からのとび蹴りを食らわせた

葵は、蹴られた勢いで少し後ろに飛んで蹴られた部分を抑えながら苦痛に顔を歪めていた

もっともっと蹴ってやろうかとも思ったが

苦しんでいる葵を見て昔、影虎と殺しあったあの雨の日を思い出してやめた

「もういい、その男と一緒に居たければいればいい・・・ただ、必ず後悔するよ？」

俺はそう言って１０分くらい空を飛んで

ビルの屋上に行った

そして、あの男の背中にくっつけた追跡術式を使って今いる場所を割り出した

（あぁは言ったけど葵をあんなわけのわからない男と一緒にいらせるわけにはいかない恨まれても良い。それでも・・・・葵と男は、第六学区のここは確か影虎とのデートで行ったことのある遊園地だな。ここに行ったのか？）

「しかたない影虎に連絡して探してもらおう・・・それにしても頬が痛い・・（今になってジンジンしてきた）はぁ～って痛！！」

俺は、痛みを我慢しながら影虎のケータイにかけた

『もしも…「影虎…検索の時間だ…。」ホワッツ！？』

脈絡が無いのはわかってるけど今は詳しく話すつもりは無いんだよ・・・

『いいから早く！！』

お願いだから悟ってくれよ・・・今はものすごく泣きそうなんだよ・・・

「わかったよ…。
何を調べればいい？」

どうやら理解してくれたみたいだな・・ありがとう・・

『能力を調べたい…。
ワードを一気に言うぞ…。』
「了解…。」

たぶん今頃影虎は、検索しようとしてくれてるんだな・・・

「準備ＯＫだ…。」
『では始めるぞ…。
女たらし…金髪ロング…１８０台の身長…。
セリフで俺に夢中になれ…。
以上だ…。』

俺がキーワードを言うと影虎は黙り始めた

よくよく考えたら俺さっき血液消費魔術使ったから影虎に後で怒られるな・・・下手すれば殴られるかも

「ビンゴ♪
九十九（つくも）　高貴（こうき）。
能力は無我夢中（バーサーカソウル）。
人の価値観を上げたり下げたり出来る能力。
今まで無我夢中（バーサーカソウル）を使って付き合った女は数知れず…か…。」
「か、価値観を上げ下げ出来る能力？」

っと電話に一真が割り込んできたが俺も同じことを思った

『どういう意味だ？
詳しく教えてくれ？』

俺は能力の意味が解らずに首を傾げてしまった…。
「例えるなら、インデックスが当麻の事を好きだとするだろ？
そこへ無我夢中（バーサーカソウル）を使ってインデックスの中での自分への価値観を上げて当麻への価値観を下げると不思議なことにインデックスは当麻ではなく、無我夢中（バーサーカソウル）を使った相手を好きになるって言う能力だな。」
あ～納得、わかりやすい説明だな
『なるほど…。
って事は葵はそれにやられた可能性が高いと言う訳か…。』
「Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ（その通り）！！」
「ッ！？」
やっぱりそういうことだったのか・・・俺が一真ならマジで許さないしかし…一真の奴は、葵を助けるかが・・・
『おい！！一真いきなりどこにいくんだ！？』
（・・・さては、探しに行ったな♪少しだけは男らしいじゃね～か。）
「影虎、一真を連れて俺のところに来い手を貸してやれ。これは命令だ」
っとれは電話越しに影虎に命令すると
『極めて了解！！』
そう言って影虎は電話を切った・・・まぁ俺の居場所はあいつなら

簡単に見つけられるだろう

……

……

……

「椿!!待たせた!!」

「やっと来たか…。

遅いぞ…全く…。

てか一真、大丈夫か?」

「まだ、クラクラするが…何とか…。」

俺が待っていると影虎が『異世界樹(ユグドラシル)』の羽を広げて上空からすごい速度で降りてきた

そして、影虎に付き合わされていた一真はフラフラしていて顔色がものすごく悪かった

「椿?何故頬が紫色になってるんだ?」

っと影虎が聞いてくるので正直に答えた

「ちょっと葵と喧嘩してな…。」っと

「「えっ?」」

すると影虎と一真が声をあげていた。

「お前もそうだが葵は大丈夫なのかよ!?」

「大丈夫だ…。

あのナンパ男と一緒に遊園地にデートに行くぐらいだからな…。」

（めちゃくちゃむかつく話だがな・・・てか、葵の奴、どれだけパンチ強いんだよ？いまだにジンジンしてる）

「それよりも影虎、どこの遊園地かわかるか？」

「もちろん検索済みだ♪

行くぞ。」

「あ、あぁ…。」

そして、俺達は影虎の案内の元に遊園地に向かった…。

（今回は、一真にけりをつけさせよう・・・）

つづく

無我夢中（偽りに染まった愛）（後書き）

・・・・椿さんと天野さんが怖い

本日は2回投稿です。

ワタシ自身が他に書いている小説も投稿するのでよければ読んでください

都市伝説（アイスマスター狩りの仮面現る）（前書き）

本日二回目投稿です

今回は、本当に一真君主役です。

実を言うと影虎君は、強すぎて主人公にあまり向かないですよね・・・ＬＥＶＥＬ９９から始まるドラクエみたいな感じで・・・（まだまだ強くなるし）

まぁいいです。

では、どうぞ

さて、遊園地についたのはいいが、まさか入場料を払うはめになるとは予測していなかった…。

っと横で一真が呟いていたが俺はそんなの無視してペタペタと人払いのルーンを張り付けていた

「で？葵と屑野郎はどこにいるんだ？」

「あそこだ…。」

一真がそう言って影虎が指を差した方向を見ると葵と金髪男が見つめあって立っていた…。

そして…。

「「「なッ！？」」」

いきなり口と口でキスしだしたんだよ…。

目の前で…。

（葵の奴、絶対に後で泣くことになるな・・・だがそれは身から出たさびか…。）

「俺、帰る…。」

「「ちょっと待て！！」」

一真がいきなり帰ると言って帰りかけたので俺は一真の肩を掴んで引き戻した

「ここまで来たのに何で帰るんだよ！？」

そして、俺は怒鳴ったが一真はよくわからないという顔をしていた

「あいつがあんなに幸せそうにしてるならもう良いじゃねぇか…。
キスまでしてんだし…。
それに、もう助けなくてもいい気しかしねぇんだよ!!」

(馬鹿かこいつは?鈍いんじゃなくて自分に対して否定的なだけか?)

「そんなんで良いのかよ!?
何でお前は飛び出して来たんだよ!?」
「知るか!?
俺は助ける気なんかねぇからな!!助けるならお前らでやってろ…。」

ブチッ!!

一真が俺と影虎を横切ろうとした瞬間、俺は、一真の頬を手をパーにして思いっきり叩いたそして、パシンッと乾いた音が鳴った。
そして俺は一真の胸ぐらを掴んで近寄せ

「お前は何処まで腐ってんだ?
お前はあれが偽りの葵ってわからねぇのかよ?
幻想御手(レベルアッパー)の時に必死になって葵の事を助けたお前はどこ行ったんだ!?
答えろ!!負導　一真!!」

俺は目を見開いて一真を怒鳴り付けた…。
俺は、一真の助ける気がないという言葉に無性に怒りを感じたからだ

そして、一真が自分のことから目をそむけたからだ

「一真、良いことを教えてやるよ♪
あいつはな♪今まで女と言う女を泣かしてきて、簡単に捨てる男だぞ♪
お前が助けなきゃ天野もその1人になるが♪お前のその言い方だとそうなっても良いって事だよな♪」
「ッ！？」

影虎は一真に笑いながら言っていたが、目は笑っていなかった…。
寧ろ本気だった
どうやら影虎は分ったみたいだな♪
後は・・

「……行ってくる…。」

「「とっとと行ってこい♪」」

俺は、一真の口からやる気を感じ取れたので笑顔で見送ってやることにした

ただ、一真は、少しつらい思いをするだろうがな・・・まぁそれは、葵の気持ちに気付けなかった罰だよ

いざとなったら影虎に止めさせればいいし

そう思っていると

ポンっと影虎が俺の頭に手を置いて撫で始めた

「なに・・すんんだ」

少し涙き声になっていた

すると影虎は腰をおろして

「はいはい、よく泣かずに我慢できました♪結構ショックだったんだろ?電話でも一真にはわからなかったみたいだが必死に我慢してた感じだったしな・・・どうした、天野に悪口でも言われたのか?昔からそうだよな~女子と一緒にいては虐められるか取っ組み合いのけんかになったりまた、俺の悪口でも言われて怒ってくれたのかな?別にいいのに俺の悪口くらいさ。誰かが俺のことを何と言おうともそれは所詮負け犬の遠吠えでしかないって言ったろ」

っと影虎は少し嬉しそうにそう言ってきた

「う、うるさい!!それよりもいざとなったらお前が止めるんだぞ?わかってんのか?俺はもう殴られるのはごめん・・・だ?」

俺は一真のほうを見て目を疑った

一真は、懐から仮面を取り出していた

ただの仮面ではなく霊装、いや、魔装と呼んだほうがいい

なんで、なんであんなものを一真が持っているんだ

「どうして椿?あの仮面がどうかしたのか?」

っと影虎が聞いてきた

「一真のつけている仮面あれは・・・ローマ正教の霊装の一つでかつて魔女が愛する男を模した仮面を作り上げたがその愛した男が死に残された魔女があの仮面をかぶりその男のことを忘れようとかぶり続けたという霊装・・・『否情仮面』だ」

「それがどうしたんだ？」

っと俺の質問に影虎が質問を重ねてきた

「この霊装の恐ろしいところはここからなんだよ。あの仮面は話では、感情をシャットダウンできてかぶる前に決めた目的を果たせるらしいがもし途中で何か強い感情が流れ込むとその感情に流されるままになって発狂するといわれているんだつまり、精神的なドーピングだ」

「は？つまり一真は、暴走するということか？」

っと影虎が聞いてくるので

「本来ならあの仮面に触れるか覗き込むだけで魔女の思念に飲まれるはずなんだ・・・なんであいつは、狂わないで付けてられるんだ？」

「いや、何か様子がおかしいぞ」

俺は影虎に言われてその方向をみると

「ふ、ふふふ…。

アハハハ…。

フハハハ

『影虎、葵を助けろ』

っと魔術を使用して文字を書くと

「しゃべれないのか？よしわかった。まかせなそれに一真の野郎やっぱり狂ってるみたいだな・・殺りすぎだ『異世界樹（ユグドラシル）』！！天野を守ってあの男を貫け！！」

影虎が頭からケテルの王冠を出し『異世界樹（ユグドラシル）』を使って

地面から葵を覆い尽くすようにピンク色の根っ子を出して

金髪男を根っ子によって串刺にして両者を治療していた

（間に合った・・・良かった。）

「一真！！殺りすぎだ！！」

「……。」

影虎に指摘されて一真は少しして仮面を取った…。

「ッ！？一真大丈夫か！！」

「…悪い…もう…無…理…。」

そう言って一真は倒れた。

どうやら仮面の副作用が出たようだな・・・そりゃ当然か・・・

「椿大丈夫か？もしかしてこの間、俺が魔術師どもや魔術結社との戦いから拾って来ちゃった剣やら盾やら聖杯やらがあの仮面に反応

でもしたのか？」

と中々意図を付いたことを言うので

「・・・そうだよ、そのとおりだ。全く霊装のオリジナルをいくつも体に仕舞っている俺の気持ちにもなって拾ってこいよバ～カ・・・それよりもとっととアンチスキルを呼んで葵を忍さんの所に連れて行こうぜ？後、俺もちょっと霊装の怨念にやられた・・・」

俺はそう言って倒れかけたが影虎がしっかりと支えてくれて

「めんどうだなぁ３人も同時に運ばにゃならんのか・・・・まぁいいや」

そう言っていたのだけが聞こえた

……

……

……

「ん？・・・あぁ～ここは病院の「椿ちゃ～ん♪」え？うわぁ！！」

俺が目を覚まして体を起こすと忍さんが俺に抱きついてきて顔をスリスリ擦りつけてきた

「ちょ、やめ、ってどこ触ってるんだぁ！？」

俺が注意しようとしたらいきなりどさくさにまぎれてセクハラをしてきたので怒鳴ったすると

「きゃぁ～怒った椿ちゃんもかわいい「いい加減にしろ変態ロリータXZ!!」痛った～い!!いきなり殴らないでよとら・・」

忍さんがエスカレートしてきたときに影虎が忍さんの後頭部に拳骨を決めていた

忍さんは痛がっていて眼に涙を浮かべながら影虎をにらんでいた

「うるさいしゃべるな!!「酷いわよ?」それよりも椿体調はいかがかな?」

っと影虎は忍さんを無視して病院のベッドの横の椅子に座り聞いてきた

「俺は良い、葵は大丈夫なのか?怪我はなおしたのか?」

っと俺が焦って聞くと

「天野なら大丈夫、ただ、心のほうは、少し傷ついていてな・・・心の傷や病は『異世界樹(ユグドラシル)』でも治せないから眼が覚めるのを待つしかないよ」

っと影虎が説明してきた

「ついでに一真は、ただいまおねんね中だ」

「そうそう、もうじきカズ君も起きそうだからいくわね♪・・・・あの餓鬼、好きな女の子を蹴り続けるとか、いっぺん絞めないとわからねぇみたいだし・・・フフフ♪」

っと忍さんが影虎に続けてそう言っていた

ただ最後のほうは、忍さんは後ろを向いていたので表情はわからなかったがめちゃくちゃ怒っていた気がする

「あぁ～あ、一真、ご愁傷さま・・・来世でまた会いましょう。」

っと影虎が両手を合わせながら眼を閉じてそう言っていた

「そうか、良かった・・・{ポロ}？なんで涙が？あれ？うれしいはずなのに・・・次から次に・・」

「・・・泣きたければ泣けばいい、俺は、ちょっとジュースでも買ってくるわ・・・じゃ」

そう言って影虎は、病室を出た

そして、葵に色々言われて喧嘩までしてしまい

そして、絶交までしてしまったことを思い出してまた裏切られたという悲しい気持ちになって声を殺して泣いた

・・・そして泣くこと１０分

俺は完全に泣きやんでスッキリしていた

すると影虎が入ってきて

「スッキリしましたか？」

っと聞いてきたので

「あぁそれにしても長い買い物だったな・・・自販機ってよく考えたら目の前にあるんだけど？」

「いや、ハハハ、ちょっとたどり着く前に５００回ほど転んでしまって・・・わるい」

俺が泣いている最中影虎はずっとドアの外で泣きやむまで待っていてくれたようだ

（こいつはこういう所だけは気が効くんだよな・・・まぁいいや）

「そうだ、天野が目を覚ましたらしいぜ。今は、反省も踏まえて今は泣いてるらしいけどさ♪ほらよ」

影虎はそう言って俺にコーラの缶を渡してきた

プシュ

ゴクゴク・・・ゴク

「プファ・・のど乾いてたからうまい♪」

俺が缶を開けてコーラを飲んでそういうと

「ようやく緊張が解けたな・・・そうだ、変態が言ってたけど一真が天野の部屋に行ってるらしい・・・で、あの、その、なんだ・・・ちゃんと仲直りしなさいってよ喧嘩は、仲直りするまでが喧嘩だからってさ」

「わかった。」

俺はそう言ってベッドから降りて葵の部屋に向かった

……

……

……

「さてと、椿には謝ったのか？」

「…まだ…。

でも、許してもらえなかったらって考えると…謝る自信が無くて…。

」

俺が葵の病室に向かっている最中に葵と一真の声がした

「お前が悪いことをしたならたとえ許してもらえなかったとしても、

謝るのが常識だろ？」

「うん…そうだけど…。」

「はぁ…本当に面倒だな！！

俺も着いていってやるから謝りに行くぞ！！」

「えっ！？ちょっと！？」

（あれ？ものすごく俺気まずいんだけど・・・謝りに行くつもりが

謝りに来る空気？）

っと影虎に小さな声で言うと

「多分な♪まぁおまえはお前らしくすればいいさ」

っと影虎が言ってきたときに一真から電話が来た

「何だ？」

『椿か？今何処にいる。』

俺はすぐに電話に出て葵の部屋のドアの前に立ち

『「お前の目の前だ…。」』

「「…。」」

っと言ってやった・・これが俺らしい対応って奴だ

「ちょうどいい…。

葵がお前に言いたい事があるんだとよ…。」

一真は葵の肩を持って俺の前に突き出してきた。

「ほぅ…。

何を言うんだ？」

っとれは少し意地悪を言ってみた正直、まだ影虎の悪口を言われたことには怒っていたし・・

「え～と…。

殴ったり、暴言を言って…。

ごめんなさい！！」

葵は俺に深々と頭を下げて謝ってきた。

・・・はぁ・・・反省してるみたいだし・・許してやるか

「はぁ…全く…。
結構痛かったんだぞ？
あのパンチは…。」
「…。」
「でも、まぁ俺もカッとなったとは言えおもいっきり蹴り飛ばしたんだからチャラにしてやる…。
だから、気にするな…。」「う、うん…。
あり…が…とう…。」
「泣くな…みっともない…。」

葵が泣き抱いたので俺は葵を抱きしめてやった

「さてと…疲れたし…。
帰って寝るか…。」

っと一真が言ったので

ガシガシガシッ！！

「ん？」

俺と葵と影虎は、一真の服をつかんで止めた

だってこいつは、まだやらねばならんことがあるからだ

「何帰ろうとしてるんだ♪」
「えっ！？
いや、終わったらしいから…。」
「なるほど…。

だが、終わっていない事があるよな…？」
「えっ！？まさか…。」
「一真♪宿題しなさい♪」
「やっぱりかよ！？」

わかっていたのならやれよ！！夏休みもう終わりだぞ！？

「俺宿題を影虎の家に忘れてるから今は出来ねぇな。」

とか言って影虎の家に向かってる最中に逃げ出せば…。とか考えてる顔だな？フフ、俺の作戦道理だ。

「それなら心配ない♪
ちゃんとここに持ってきてやったから♪」

そう言って影虎は論文の原稿用紙を取り出した。
頼んどいて正解だったな

「で、でも、病室を宿題何かの為に借りたら悪いだろ？」
「それも心配ない…。
忍さんから許可は貰ってる…。」

俺はクックックッと笑いながら言ってやった…。
お前の考えなど手に取るようにわかるんだよ

「観念しなさい♪」
「…はい…。」

最後に葵に言われて一真は勉強に励んでいた。

こうして、俺達の波乱万丈な夏休みは幕を閉じた…。

ただ、負導の持っていたあの仮面・・・いったいどこで手に入れたんだ?

俺の体の中にある霊装が反応するなんて・・・あれは、本当に危ないんだ・・

つづく

都市伝説（アイスマスター狩りの仮面現る）（後書き）

一件落着♪

めでたしめでたし、次回は、椿のあの秘密が影虎にバレる!?そして、お目にかかれる影虎の裏の実力、そして、『非』全知全能の特技!?

ではまた

九月一日（新学期）（前書き）

先ほど渡さんとの相談で本日中にもう2本投稿することになりました。

ではどうぞ

九月一日（新学期）

今日の朝起きると椿がまた用事とかでいなくなっていた（いったい何の用事だよ？）

まぁそれはいい

しかし、俺は教室に入ることが出来なかった

ただいま一真が話している人物のせいだ

涼村　水城・・・風紀委員（ジャッジメント）だ

俺が都市伝説になるほどの不良で

あいつが不良どもを取っちめる風紀委員（ジャッジメント）と言うだけで俺があいつが苦手なことを理解してもらえると思うが

まぁ2年前の風紀委員（ジャッジメント）共の誇り（メンツ）をかけた牙桜捕縛作戦通称　牙桜大戦であいつもぼこった記憶がある・・

まぁ

本当の理由は、あいつの仲間の女に会いたくないんだ・・・

俺が唯一許せない相手であり次もしあった場合は、自分で自分が止められないほどの殺意塗れになる相手だ

そいつに会いたくないから出来る限り風紀委員（ジャッジメント）には関わりたくないんだ

お？行ったか・・

なにかを言って涼村は一真に丁寧に一礼して教室から出ていった。

さてと。

「入ってきて良いぞ…。

影虎…。」

「えっ！？」

「へぇ～…。

いつから気付いてた？」

一真が扉の向こうにいるはずの俺に呼び掛けてくると天野は驚いていたが俺はニッコリ笑いながら教室に入っていった。

「そうだな…。

さっきの奴が俺に話し掛けてきた辺りかな…。」

「始めから気づかれてたか。」

などと話ながら笑いあっていたのだが。

「あのさ、一真に影虎君…。

ちょっと着いてきて欲しいところがあるんだけど…。」

「ん？何処だ？」

っと俺は、天野から俺まで呼ばれたので珍しいと思いながらも聞いてみると

なぜか一真に睨まれた・・？

「え～と…ちょっと忍さんにモデルにならないかって誘われていて…。」

「「……はい？」」

俺と一真は同時に疑問符を浮かべた。

へぇ・・・そうなんだ・・てか忍の野郎、モデルの勧誘までしてやがるのか？恐るべし株式会社桜井コンツェルンの跡継ぎ令嬢！！

「え～と…それはつまり…。」

「スカウトされてるわけ？」

俺が言おうとすると一真に遮られた

「よくわからないけど、忍さんが言うにはプールに行った時の水着コンテストみたいなのはモデルの素質があるかどうかなんだとか…。」

「「…。」」

状況を整理しよう…。

夏休みの時に確かに俺はプールで水着コンテストをしていたのは覚えている。

そして、あれの本当の正体がモデルの素質があるか無いかの判断だったのか？

本当に油断も隙もねぇよな・・・へたすりゃ怖い・・・そういや、俺もガキのときに子供服のモデルやらされてた気がする・・あれが嫌で俺医者になったんだった・・

「お前にモデルの素質があるから…来てくれ…と…。」
「そうなるの…かな？」
「「……。」」

一真の質問に天野が答えて俺と一真は黙り込んでしまった
……

……
……

結局俺達は着いてきてしまった…。
1人では不安らしい上に俺に見せたい物があるとかどうとか…。
一真がなら影虎に頼めよと言っていたので『着いて来るよな♪』と言って連れてきた

何が楽しくて俺が天野と一緒に行かなきゃならんのだ!?まったく

「…ここなのか…？」
「ここ…らしいね…。」

一真が天野に尋ねた…。
すると、大きなガラス張りのビルが目の前にあった…。
う～わ、このビルよく見ると桜井コーポレーションって書いてあるよどんだけ金持ちなんだよこの一族

「葵ちゃ～ん♪
待ってたわよ♪」
「キャッ！？」

忍が自動ドアの向こうから出てきて天野に抱きついた…。

あれ？一真の表情がどんどん厳しく・・・♪

「一真♪嫉妬か♪」

「なッ！？」

俺はふと椿が乗り移ったように嫌味を言いたくなってそう言った

「俺が何に嫉妬すんだよ！？」

「変態が天野に抱きついてるから♪」

っと俺が悪乗りしながらそう言うと

「あら♪そうなの♪

って言うことはやっと付き合ったの♪」

「付き合ってねぇし嫉妬なんかしてねぇよ！？

それにやっとってどういう意味だよ！？」

突如忍が乗ってきて一真が忍に怒鳴っていた

「でも、とらまで来ちゃったのね♪まぁ良いわ♪」

「どういう意味だ？」

お前が呼んだんじゃないの？すべての黒幕ってお前じゃなかったけ？

「見てからのお楽しみよ♪

きっとカズくんもビックリするから♪」

「俺も？」

忍の言葉に俺と一真は首を傾げて中に入っていった…。

さて、いったい何を見せられるんだ？ここまで来てレプタイルスフ

ィーバー（爬虫類博覧会）とかだったら忍を殺してこのビルを崩す……

……

……

「じゃあ♪ここで待っててね♪」

「「？」」

俺達はよくわからないが『金桜　菜々様』と書かれた控え室の前に待たされて俺と一真は疑問符を浮かべて忍だけが部屋に入っていった。

金桜　菜々か確か俺の読んでる雑誌の表紙に乗りまくってたな・・（椿には内緒だが少しファンかも・・）・・・確か最初は桜井グループだけだったけど最近はあらゆる雑誌に引っ張りだことか・・・椿もモデルでもして女の服装になれればいいんだけどな・・・まぁ無理か♪

「お待たせ♪
入ってきて♪」

何て考えていると忍の合図があって部屋に入ってみると金髪で前髪に十字架のヘアピンを着けて赤がかった瞳の青と黄色の花をイメージさせるワンピースを着た女の子を連れて部屋の椅子に座っていた。てか、本物の金桜　菜々に合わせたかっただけかい！？

「なッ！？影虎に一真！？
何故ここに！？」
「「はぁ！？」」

俺と一真は同時に声を上げたあと、お互いに顔を見合わせて首を傾

げた。
てか、なんで俺の名前知ってんだよ?てか呼び捨てにすんなよ!!
機嫌が悪かったら殺しちゃうぞ?
っと俺は無性にイラついていたが頑張ってクールダウンして
「「え~と…誰?」」
「へブッ!?」
「えっ!?」
俺達は女の子に向き直って同時に言うと俺の顔面目掛けて忍の飛び膝蹴りが物凄い速さで決まって倒れてしまった。
こんにゃろう、また、高速移動かよ?
「いきなり何しやがる!?」「とらが解らないなんて最低ね♪」
「どういう意味だ!?」
忍の発言の意味がわからなかった
何故か天野は隣で笑っていた。
てか、忍の奴、ただ俺のこと蹴りたかっただけ?
「ひょっとして…椿か?」
「えっ!?」
「うっ…。」
一真がバカなことを言い始めたので驚いてしまった
何をバカなことを言っているんだこのバカは。

「ち、ちち、違います。
わ、わた、私はき、金桜（きざくら）　な、な、なななな、菜々（なな）って
言います！！
よ、よろしくね♪」

ほら、一真が変なこと言うから動揺しまくりじゃないか！！

「ほらみろ。
こいつは椿じゃなくて金桜さんじゃないか。
ゴファッ！！」
「「えぇぇ！？」」

俺がそういうと忍に顔面への回し蹴りをされて壁に激突した。
さっきから何なんだよ！？本当に！！

「お前…本気で言ってる？」
「俺はいつだって本気だ…。
グベッ！！」

一真の質問に答えようとすると顎を蹴り上げられた…。
本当に何なの！？忍！？俺何かしたかな？それになんで忍、お前は
頭を抱えて呆れながら俺を蹴っているんだ？

「椿もそろそろホントの事言ってあげようよ～…。」
「うるさい！！うるさい！！うるさい！！私は椿じゃないもん！！
金桜　菜々だもん！！」
「あんたはガキか！？」

天野の言葉に金桜　奈々が何処かのテレビアニメで見たことのある

駄々のこね方をしていて一真が明ながら突っ込んでいた

「もう、認めろ!!
てかバレてんだよ!!」
「あのバカにはバレてないもん!!
だから大丈夫だもん!!」
「お前知らず知らずの間に認めてるぞ!!」
「えっ!?でも、私は金桜　菜々だもん!!」

っと一真が見ず知らずの女性に突っかかっていた
いい加減やめてやれよ。てか眼科に行け!!一真に天野・・お前ら
眼悪すぎだ。

「認めたら一真がお酒飲んでくれるから♪」
「ちょっと待て!!」

おいおい、何を認めさせるんだ?こいつらバカなのか?本気でバカ
なのか?『異世界樹(ユグドラシル)』で治療してやろうか?

「本当か?」
「ねぇ、お願い…。」
「うっ…。」

おい、何を悩む必要がある?認めるも何も違うからね?

「わかったよ…(涙)。
飲んでやるから影虎の前で認めてきてくれ…(涙)。」
「了解した♪約束だぞ♪」

そして、一真は壁に手を着いてしゃがんで落ち込んでいた。

すると金桜さんが俺の前に来て恥ずかしそうに

「あのさ、隠してて悪かったんだけどさ俺が椿だ」

っと無理やり言わされている金桜さん

「お前が椿？あり得ない、あり得ない。」

っときっぱり否定してやると

「この野郎！！」

「グバッ！！」

一真が俺の右頬に金桜さんは真っ正面をそして忍が左頬を同時に殴ってきた。

ブチッよし、わかった。あ～わかった、お前ら俺に喧嘩売りたかったんだなよくわかったよ

ただ理由だけは聞いておいてやるか・・・

「一真まで何しやがる！！」

「やかましい！！今回と言う今回は許せるか！！」

「何の事だ！？俺が何かしたのか！？」

その言い方だと俺が何かしたみたいじゃん？

「俺のプライドを捨てた捨て身の頼みを意図も簡単に打ち砕きました！！」

「何言ってんだかわからねぇよ!?」

自分から勝手に捨てたんだろうが!?俺に何の関係がある。こっちは、椿が居なくて少しだけ寂しい心境だというのに

「うるせぇ!!
返せ!!俺のプライドを返せ!!」
「一真!!落ち着いて!!」
「カズくんがここまで怒るなんてよっぽど嫌なのね♪」
「納得してないで止めるの手伝ってくださいよ~!!」

一真が俺に殴りかかってきたので構えると天野が一真を取り押さえて横で忍が笑っていた

なんなんだ?神とやらは俺が嫌いか?嫌いだと言うなら今すぐにでも天に『竜王の波動』をぶっ放す!!

……
……
……
五分後…。

「すみませんでした…。
＞(￣＿￣;)＜」
「やっとわかったか…。
(￣＿￣;)」

あのあと、金桜の金髪だった髪が黒くなり黒のカラコンをつけると完全に椿だったので俺は土下座して椿に謝っていた…。

まさか、椿を椿だと認識できなかったなんて・・・俺が眼科に行かないといけなかったんだ

そんで目玉をくりぬいてメガネを移植して視力の回復をしようかな～？

「はぁ…俺だけ気づけなかった…。
一真まで気づいていたのに…。
どうせ俺なんて椿の事何にもわかりませんよ…。」

俺は部屋の隅でいじけながらぶつぶつ独り言を言っていた…。

ショックだ・・・一真や天野にはわかって俺にだけわからないなんて・・・

俺はゴミより臭いゴミ虫だ・・俺って生きていても仕方がない気がする・・・

「影虎…。
いつまで落ち込んでんだよ…。
もう、行っちまったぞ…。」
「どうせ俺なんて…。」

途中一真が何かを言っていた気がするが・・・どうせ俺なんて偶然でレベル6になっただけなんだよ・・本当のレベルは、ゴミ以下なんだよきっと・・・どうせ・・・

……
「たっだいま♪
えっ！？」
「ん。
おかえ…グベッ！！」

一真が椅子に座って待っていると天野達が帰ってきて一真は忍に抱きつかれてた。

「カズくん私がいなくて寂しいかったでしょ♪」
「えっ！？一真と忍さんってそういう関係だったの…？
うわぁ～ん！！浮気された！！」
「よしよし…。」

天野は椿の胸の中で泣き叫び椿に頭を撫でられていた…。
「いい加減離れろ！！
それに俺とお前は付き合ってねぇから浮気とか言ってんじゃねぇよ！！
あとついでもって言うなら俺は年増は好みじゃねぇ！！
グハッ！！」

一真がそう言い終えると忍からのアッパーが顎に炸裂して胸ぐらを掴まれていた。

「誰が年増だって！？コラァ！！
私はまだ２９何だよ！！
あまり変な事言ってると食い散らかすぞ！！わかったか！？」
「は、はい…わかりました…。
すみません…。」

「ならよろしい♪」

忍の豹変に俺はずっこけた

本当に忍の奴は、未婚、年増、アラサー、などのワードを言われると豹変するよな・・

……

……

……

そして、その後すぐに俺は、椿に励まされ生きる希望を見つけて家に帰ることになり全員で帰っている途中に、それは突如起こった

平和と言う俺と椿の夢をぶち壊しにする人の負の感情が導いた毒牙が椿に襲いかかった瞬間だった

俺の横で笑いながら話していた椿が突如ブシュ一っと胸の辺りから腹の辺りまでの場所で大量の血を噴き出してあおむけに倒れた

それを見た俺はとっさに『異世界樹(ユグドラシル)』を発動して椿を包み込み治療を開始した。

すると後ろの方で天野までが血をふいて倒れたので俺は、『異世界樹(ユグドラシル)』の枝を伸ばし

天野の治療を始めた

(焦るな俺!!今は、報復よりも椿と天野の治療が先だ)

っと殺意に従い暴れたくなる自分を落ち着かせながら俺は、治療に集中した

（椿を直したら犯人の野郎を食い殺してやる！！！）

俺は、下、唇を八重歯で噛みしめながらそう思った

つづく

九月一日（新学期）（後書き）

・・・・急展開・・・過ぎ・・・・

この後も続いて投稿します。

切り裂魔（ジャックザリッパー）（前書き）

本日はこれで最後です

ではどうぞ

感想ください

切り裂魔（ジャックザリッパー）

現状況を説明すると、いきなり目の前で椿が何かに切り裂かれて血を出したと思うと今度は後ろで天野が悲鳴をあげて血を流して倒れていき二人は今、俺が出現させた異世界樹（ユグドラシル）に包まれている

「でも、どうなってんだよ！？
いきなり二人共切り裂かれたように血を出して倒れるなんて！？」

一真は訳が解らずにパニックになってしまったようだ。

こういう状況では落ち着きが大事なんだよ

「さぁな…。
とりあえず、応急処置は出来たから病院に向かうぞ。
このままでは目立つし、危険だ…。」
「あ、あぁ…。」

さっきの攻撃がどういう原理かわからな以上、ここにいては良い的だな・・

……
……
……

そして、病院について天野と椿を寝かせた。
重傷を負っていたからなのか気を失っていた。
だが、一応『異世界樹（ユグドラシル）』出直したので死ぬことは絶対に無い

「さて…影虎…いつもの検索は出来るか？」
「残念だが、情報が無さすぎる…。」
「そうか…。
しかし…。」

一真がそう言ってきたが検索は、情報がやはり必要なんだ・・・それに情報なしに探すとなると全世界中の人間みんなを検索対象に指定しないとならないから面倒だし時間がかかる

「犯人は一体どういう理由で二人を襲ったんだろうな…？」
「さぁな。
だが、見つけ次第食い殺してやる…。」
「…同感だな…。」

俺は、俺の目の前で椿を傷つけた野郎を食い殺したくてたまらなかった

そして、今すぐにでも影千代に変わってしまいそうだった・・

いや、今回は、違うかもしれない・・・いつもの失いたくないって言う怒りじゃない

ものすごく小さい時の何かを失ってからのあのよくわからない感情だ

0だった俺を1に変えた

そして、5だった俺を6に変えた

あのよくわかんねぇ感情だ・・

それが爆発する前に解決しよう・・・てか、こうして落ち着けてる時点でもう０（異常抑制）になりかけてるのかな?・・・

「事件現場に戻りますか…。」
「言うと思ったよ。
掴まれ。」

一真が俺と同じ考えを言ったので
俺は病室の窓を開けて異世界樹（ユグドラシル）で羽根を作って言った。

「あいよ…。
忍さん…二人を頼みます…。」
「わかったわ♪いってらっしゃい♪」

そして、俺達は真っ暗な学園都市の空を舞った。
……
……
……
「ついたぜ♪」
「もうちょっと…安全に飛べねぇかな…。」

もう、お約束なんだからいい加減慣れろよな・・・事件現場についたと同時に一真はフラフラになってしまっていた…。

ペキッ!!

「ん?」

一真が辺りを見渡していたので俺は声をかけた。

「一真どした？」

「…影虎…あれって不自然じゃないか…？」

一真は一本の木を指差した。

しかし、自然な形の筈の木が真ん中辺りから下まで不自然ながらも縦に真っ直ぐ一直線に木が切られていた。（こいつは、刃物じゃないな・・）

「この場所は確か、椿が切り裂かれた場所だな。

だが、何故木がこのように切れているかが気になるな。」

「あぁ…、一応葵の場所も調べて見るか…。」

そう思って歩き出した。

すると…。

「「なっ！？」」

いきなり、後ろの木が倒れてきて、ズドーンと音を立てて俺のさっきまで立っていた場所に落ちてきた…。

そして、木の切り口は鮮やかにも斜めにスライスされたように切られていた。

「…挑発か？これは？

それとも調べるなと言う意思表示か…？」

一真がそう言っていたが俺は、必死に周りを見渡した

「さてと、見てるなら出てきたらどうなんだ、犯人さんよ～。

いや、こう呼ぼうか？
切り裂魔（ジャック・ザ・リッパー）さん♪」

っと俺は、いつしか見た映画の切り裂きジャックの呼び名で怒鳴った

「切り裂魔（ジャック・ザ・リッパー）？
お前…知ってるのか？」
「いや、勝手に名前付けた。」

だって何て呼んで良いかわかんないからとりあえず女ばかりを狙う切り裂きまということでその名前しか思い浮かばなかったんだよ

「ッ！？見つけた！！」

一真がそういった瞬間、俺は、香水の匂いを嗅ぎつけていたので一真の見つけた奴か俺の見つけた奴が犯人だとか確信した。さっき椿がやられたときに現場の５０メートル圏にあったにおいと同じでいきなり動き出したんだからな。

「こっちにもいるみたいだな。
一真！！そっちは任せたぞ！！」
「了解！！」

そして、俺と一真はそれぞれの人影を追っていく。

……
……
……

俺が走って追いかけると女は、取り壊し前の廃ビルに逃げ込んで

１０階建てのビルのうち６階まで逃げると突如とまり

そして、振り替えってきて俺を見てきたので俺も相手の外見を見て見ると、ロングの茶髪に背の高くスタイルの良い白く細い腕に藍色の目をした綺麗という言葉がぴったりな女性だった…。

そして、その女の記憶を読んで誰だか思いだした

この女の名前は、北条　紗香・・・職業ファッションモデル

確か、双子の妹の『北条（ほうじょう）　泪（るい）』と姉妹で仕事をしているモデルだっけ…。

って事は今影虎が戦おうとしているのは、姉の北条…泪か…まぁ大丈夫でしょう。妹のほうはそんなにヤバくない一番ヤバいのはこいつだ

「なぁに、人の顔ジロジロ見て？もしかしてファンだった？」

「全然、俺、金桜のファンで彼氏で～す☆」

っと女が意味のわからんことを言ってくるので素直に即答すると

女が右手を挙げた

すると俺の胸から上の右半身が消し飛んだ？

そして俺は、地面に倒れこんだ

「また、金桜のファンかよ。死んでもイライラさせる小娘だね！！ムカつく！！」

っとハイヒールの足で足元の鉄板を蹴っていた

（あ～この人、もしかして、椿の人気を妬んで殺害しようとしたのか・・・暇な奴）

っと俺は、右半身が欠落してる状態で器用に立ち上がってそう思っていた

「え？・・・なんでたてんのよ！？てか、なんで生きてんのよ？例え生きてたとしても出血多量で死ぬでしょう？」

と女は眼を大きく開いて驚きながら後ろに一歩また一歩と下がっていた

（はぁ～いつもの俺なら『異世界樹（ユグドラシル）』で一突きなんだけどな～正直言ってめんどくさい・・・今日は気分が微妙なんでどうしようかな？）

っとこの時の俺は、すでにあまり戦意が無かったと言える

理由は、すでに椿を傷つけられていて守れなかったことに関する損失感に必ず治るという安心感がうまい具合で混ざって生まれて初めて記憶消去を使った日以前までの感覚だった

物心ついた頃の俺は、たしか、無能力者だったはずなんだよね・・・それが何の因果でこんなにチートになってんだか。てか、それだけチートになってて好きな女一人守れないって・・・能力なんてあったってなかったって同じじゃん！！

っとフラフラしながら女に一歩一歩近寄っていくと

「なんなんだよお前は!!死ね!!」

再び右手を下から上に振り上げた

俺は、その動きに合わせて体を右に倒して体をくるりと回すと

俺の右側の地面がぱっくりと割れた

「な?」

(正直言ってあんたの能力なんて読めてんだよ!!)

っと俺は、くるりと回した体をさらに速く回して左手を強く握りしめて女の顔面を容赦なく真正面から殴った

「グッ!!」

っと女は、うめき声にも近い声を出してぶっ飛び鉄パイプの束にぶつかって鉄パイプに潰されていた。

(ほんとに何なんだよ。今のふざけた威力のパンチは?正直言ってこんな威力いらねぇよ。普通でいいんだ普通で・・・ん?おいおい、今のパンチ顔面にくらって立ち上がる女ってアブノーマルだな・・ウザ)

俺の殴った女は、うめき声をあげながらも眼に光を失っておらず俺を殺すと言わんばかりに俺をにらんできて

「確かゾンビって頭潰せば。死んだわよねぇ！！！！」

っと能力をむちゃくちゃに乱発してきて俺と俺たちのいるビルがどんどんズタズタになっていく

多分俺ごとこのビルを潰すつもりなんだろう・・・正直やめてほしいよね

怒ってビルを崩すとかさ～・・・「『・・・しなくていいよ』」

俺がこう言った瞬間、ビルを削りまくっていた謎の刃が動きを止めて消え去った

「え？な、なんで？私の次元壊し（ディメンションデストロイ）が消されたの？あんたいったい何者なのよ？なんでそんなに私のことを見て詰まらなそうに睨んでるのよ！？（ペラペラしゃべる奴だな・・）何よその眼？自分が強いって言いたいわけ？（塞いじゃえ）バカじゃなウゴッ！？〜バキ〜ウゴォオオオ！！？ウグゥ」

女がペラペラしゃべり続けるので口に鉄パイプをねじ込んで顎を外し女の顎に左手でアッパーを決めて女の顎と歯を砕いた

顎を砕かれた女は、目から大粒の涙を流して鉄パイプを上手い事ずらしながら土下座してきた

「あのさ、その状況で土下座って正直言って気落ち悪いよ？てか、泣くなよ。おまえは、レベル４の大能力者でありながら俺にこんな大きな傷をつけたんだぜ。そんな異常なお前に普通の涙は似合わないお前に似合うのは、血の涙♪」

ブス、ポン

「ウグォオオオ！！ギュァアアアア」

っと俺は、女の目線に顔を合わせてそう言い女の右目に指を突っ込んで眼を潰して指を引っこ抜くと目玉がとれて気持ち悪かった

そして、あまりにも気持ち悪かったのでそこらへんに落ちているさっきの攻撃で先のとがった鉄パイプを左手で拾い上げて女の体に１０本ほど突き刺した

女は、もう言葉にならない声を出しながら痙攣していた

「お～い、意識ある？「コヒュ～・・・・コヒュ～・・・」あれ？逝っちゃた？もう、俺まだ能力も使ってないのにさ・・・そのまま、死んどけ（ドクンドクンドクン）あ、そうか、忘れてた俺って人を殺すのが怖くなってたんだよな～・・・・・・何年ぶりだったかな・・・さっき見たいに弱気な気持ちになったのは・・」

っと俺は、トラウマを思い出し我を取り戻して

「『異世界樹（ユグドラシル）』・・・いつもどうり、椿に手を出した奴には・・・血の花を・・・咲け（裂け）紅桜」

っと『異世界樹（ユグドラシル）』で自分を直して女を貫いて

瀕死の状態だった女をいやいや治療してやった

（こんな奴、助けたくはないがさっきのは少しやりすぎた気がするので特別に許るしてやろう。）

っと思った時だ・・・周りの柱が突如大きくなって服までもが大きくなり始めたのは・・・

（これってまさか・・・）

っと俺は、とっさに工事現場に転がっていた鏡の破片を覗き込んだ

すると案の定・・・背がちじんで明らかに幼稚園にかよっていてもおかしくなくむしろ下手すれば4歳の子供にすら背で負けるほど小さい子供になってしまった。

（そういえば、最近『異世界樹（ユグドラシル）』のオンパレードだったな・・・てか、この女直すのに一番力使ってる気がする・・・）

「まぁいいか、この女を運んで一真の所に行こう・・・声も完全に子供だよもう～」

……

……

……

そう言って俺は、女を『異世界樹（ユグドラシル）』で串刺しにしたまま、一真の所に向かって

「オーイ！！一…ま！？」

「よぅ…影と…ら！？」

俺は、一真に声をかけて驚いた・・・だって一真君がなぜか酒飲ん

で縮んでんだもん
それに踏まえて一真まで俺を見て驚いていた
なに？このカオス（混沌）

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｎｔｉｎｕｅ

北条紗香（ほうじょうさやか）２０歳（大学２年）
身長１７０ｃｍ
体重４５ｋｇ

イメージＣＶ　伊瀬　茉莉也さん（夢喰いメリーの霧島　咲やＮＥ（ニ）ＥＤＬＥＳＳ（ードレス）のアルカ・シルト）

茶髪のロングで白い肌にスラッとした体格。
綺麗な藍色の目をしている。
双子の妹の北条　泪（るい）と一緒に姉妹でモデルの仕事をしており、一時期は姉妹でモデルのランキングで一位と二位を独占したこともある。
次元壊し（ディメンションデストロイ）レベル４のとか言う次元を切り裂いたり壊したり出来る能力
殺傷能力だけの能力である

手加減が困難らしく普段は使いどころがないが覚悟を決めれば誰でも殺せるような能力だ

影虎じゃなかったら間違いなく死んでるだろう

後、今回影虎の使った？謎の「『・・・しなくていいよ』」のセリフの後に起こった現象は

『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』レベル０？

能力としては単純で

この世に本来起きるはずのない事柄において自分の常識と食い違う現象（能力や魔術）が起こった場合

言葉一つや睨み一つでその幻想を自分にとっての常識で塗り潰す（消しさる）能力

幻想殺しは、異能の力を殺すのに対して

異常抑圧は、幻想を塗りつぶす力です。

異常抑圧を例えば美琴（レールガン）に使うと美琴は、電撃が出せると思っています↑これ能力の基本の自分だけの現実

がしかし、異常抑圧が発動されると影虎のマイナス思考（人が体から電気出せる分けないじゃん）と思うと美琴の自分だけの現実が影虎の常識に塗り変えられて電気を体から出せなくなる

魔術に関しても同じで手から火を出す魔術の使い手がマイナス思考で（手から火なんか出るわけない）と思うと火が出なくもなります。

黄金錬成との違いは、常識という型に相手を巻き込んでしまうところと思い込みではなく無意識の違いです

つまり相手の力を妄想に例えるなら相手を無理矢理、幻想から現実（影虎のリアル）に引きずり込む能力です。

範囲は、特にありません。むしろ下手をすれば世界中から幻想や異能を消し去ってしまうほど

異常抑圧は、演算をあまり必要としません。

ただの思い込みだけなので後、影虎の思い込みは、魔術師ですらを巻き込みます。

基本的に幻想殺しと同じで理由がありません

以上

自分が好きなマンガに例えるならめだかボックスの過負荷（マイナス）で『却本作り（ブックメーカー）』は、強さ（プラス）を弱さ（マイナス）にする能力に対して影虎の『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』は、相手の幻想（才能や異能）を現実（常識や物理や知識）で塗りつぶし他人を自分以下に引き摺り下ろす力。

ちなみにこの能力の由来は、メタトロンの力の存在喚起力　そんざいかんきりょくに由来しています。

存在喚起力には、自己の同一性を保存する力（曼荼羅的な統合力）

が含まれている。これは、自分らしさ（自分の独自性）を保つ力、かたちが崩れないように保つ力のことである。より専門的には、自己の恒常性を維持する力という。存在喚起力は、「夢は必ず実現する」と信じることで奇跡を引き起こす。それゆえ、願望実現の力とも呼ばれ、魔術師の人すべてにとって魔術力の源泉である。

と言う力があるので　自分だけの現実（パーソナルリアリティ）や魔術（異世界の法則を無理矢理現世界に適用し、様々な超常現象を引き起こす技術。）＝妄想・信じる力、疑似的な才能・偶発的に起きる奇跡的な現象を必然的に起こすこと＝存在喚起力なので能力や魔術の原点から塗りつぶすだけの能力ですね。・・・あれ?自分で書いててこの能力って逆チート?みたいな気持になってきました。

ただ、まぁこんな力ですね。長々とすみません

切り裂魔（ジャックザリッパー）（後書き）

『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』・・・怖いぜ・・・そして影虎・・・怖いぜ・・・

ではまた

幼児退行（子供（ヤンチャ）時代の俺、参上！？）（前書き）

一週間に一回の投稿タイムです。

ではどうぞ

幼児退行（子供（ヤンチャ）時代の俺、参上！？）

あれから俺と一真は何故縮んだかを説明しあった。

「なるほど…。
謎の能力か…。
お前もどんどんチートになっていくな♪」
「元から最強のチート能力の持ち主のあんたに言われたくない…。」

俺は一真に先ほどの醜い戦いのことは話さず適当にうそを言って納得させると

今度は一真からどうやって小さくなったのかを聞いたのだがなんだよ？未来が見えて遠くが見えて能力がぱくれるって・・・さっきの俺だったら間違いなく消してると思うな・・・それにしてもお腹空いたな・・早く家に帰ってカップラーメンが食いたい♪

「影虎…。
これからどうする？」
「う～ん…。
とりあえず♪こいつらを変態ロリータXZ（イクスゼータ）の所まで運んで処理して貰おう♪
行くぞ♪」

早く家に帰ってカップラーメンが食いたい♪これだけが今俺を動かす燃料だった。だって2か月以上食ってないもん

「影虎…。
行くのは良いがもし、葵達が起きてたらどうする？」

「何で？」

いきなり何を言い出すんだ？俺は早く帰って飯食ってゲームで遊びたいんだよ！！

「今の俺達の姿見たら…。」

「…。」

それを言われて俺は自分の姿を見て黙った…。

完全に忘れてた・・・どうしよう？ぜったい椿が触ってくるし意地ってくるし抱きしめられて胸に挟まれて窒息死の毎度のコースが出来ている・・・

「とりあえず、こいつらを引き渡して逃げるか…。」

「極めて了解！！」

一真がナイスな案を出したので俺はそれに猛烈に賛成した

そして、俺達は女どもをズルズル引きずりながら病院に向かった。

何故、異世界樹（ユグドラシル）を使って帰らなかったかと言うと、子供状態では定員オーバーだからだ。

重いわしんどいわ服はだぼだぼ出歩きにくく3回くらい躓いて転んだ（イチャイ）…。

因みに人通りの無い場所から帰っているため人には会わなかったのが救いだ…。

「あら、君達何をやっているの？」

「「ん？」」

と、どこかで聞いたことのある声がしたので振り返って見ると…。
セミロングに髪を結んでいた涼村が現れた

さて、どうする

こんなときにウザすぎる奴に会うなんて・・・不幸だぜ

たたかう
のうりょく
まじゅつ
どうぐ
にげる
いかく↑これだな
ころす

「テメェは風紀委員（ジャッジメント）の野郎じゃねぇか！！
声掛けてくんな！！」
「ふえっ！？（なッ）！？」

俺が涼村に怒鳴ったら、一真はまぬけな声を出していて、涼村は驚いていた。とっとと帰れクソ女！！

「なんで私の事が風紀委員（ジャッジメント）って知っているのかな？
それに、私キミに会うのは初めての筈だけど何かそれほど怨まれるような事したかな？」

涼村はしゃがんで俺に目線を合わせて優しい口調で話し掛けてきた…。・・・そういう偽善な態度がムカつくんだよ！！
たたかう

のうりょく
まじゅつ
どうぐ
にげる
いかく
ころす←これだな

「やかましい！！
喋りかけんなッツッテんだよ！！」
「ッ！！」
「ストップ！！スト～ップ！！」

いきなり、一真が黒い死世界樹（キルドラシル）を操って涼村を貫こうとしていたのに間に入って涼村の前に立つのでつい死世界樹（キルドラシル）を一真の目の前で急停止させてしまった。

まったく危ねぇ・・・異世界樹なら一真ごと行ってたんだけど死世界樹で刺したらマジで死んじまうな・・この姿の時は、殺しも平気だから本当にアブねぇ

「何なの？あれ？」
「一真！！どういうつもりだ！？」

っと一応怒っておく

「それはこっちのセリフだ！！（チクチク）こいつに（チクチク）一体何の怨みが（チクチク）…。
チクチクすんのやめんか！！」

一真が生意気にも反論してくるのでチクチクチクチクと死世界樹（キルドラシル）で

突っついていたが逆ギレされたのでイラっと来て怒鳴り返した

「うるせぇ!!命令してんじゃねぇ!!」
「なッ!?」

するといきなり

「ちょっと!?ダメでしょ!!
そんな言い方しちゃ!!」
「えっ!?」

一真の後ろで立ち上がった涼村が俺に叫んできた
チョウシニノンナヨ?

「うるせぇな!!
だから命令してんじゃねぇ!!
しかも風紀委員(ジャッジメント)の分際が!!」

っと俺は、女を怒鳴りつけた。

「キミに何があったかは知らないけど、お友だちにまでそんな言い方しちゃダメでしょ!!」

と立場を全く弁えていない発言に俺は、この女も次にあったら殺したい風紀委員にエントリーさせた

「はぁ…。
ウッとうしいな…。
一真…気分悪いから先に帰らせて貰うぞ…。」

俺は、風紀委員様たちの掲げる偽善に吐き気がして先に帰ることにした

（てめぇら風紀委員は、正義のためなら簡単に人質をとって人質に手をあげる集団の癖に！！俺は忘れねぇ何たってめぇもあの場にいやがったんだからな！！）

「お、おい！？」

凉村が俺に怒鳴ってきたので女二人を死世界樹（キルドラシル）で宙吊りにして一真の呼び止めを聞かずに帰ってしまった…。

b

……

……

……

あの後、病院のフロントのところに女を二人を放置して家に帰ろうとしたとき

「あれ？僕こんな時間にどうしたの？お母さんとはぐれちゃったの？」

っと目覚めたご様子の天野さんが腰を落として俺の頭を撫でながらそう言ってきた。

（ムカつくんだけど・・・殺っていいのか？殺っていいよな？うん、殺っていいんだよ「チビ虎かわいい～」ホワッツ？）

俺が再び死世界樹（キルドラシル）を出そうかと思っていた時に、後ろからあり得な

い勢いで椿が飛びついてきて俺は、椿に簡単に捕まり持ち上げられてしまった

（くそ、振りほどけない・・・てか、今の俺はよくよく考えたら3歳児と変わらないから椿に簡単に持ち上げられるんだよな・・・トホホ）

「え？椿その子と知り合い？それにチビ虎って・・・「そうそう、こいつ影虎だよ♪」えぇえええ！！」

っと俺を抱きしめてご機嫌な椿を見て天野が驚いていた

てか、うるさい

「うるせぇんだよ！！いちいち耳元で大声出すな！！てかとっとと俺を解放しやがれ椿！！調子に乗ってるとお前でも殺すぞ！！」

っと俺は腹の底から怒鳴ったすると

「おうおう、相変わらずちっちゃくなると影は、悪ガキって感じになるんだよねぇ♪」

っと椿は、さらになぜか喜んで抱きしめてきたので俺は、怒って錬金術で攻撃しようとした時だ

シュンっという音が鳴ったと思うと椿に抱き締められていたはずの俺は、いつのまにか忍に抱きかかえられていた？

「あれ？チビ虎は？」

「あ？忍さん」

「てか、なんでお前が俺を抱きかかえてるんだよ忍!!」

椿が俺が消えたことに驚き天野は忍の登場に驚き俺は、忍が俺を赤ん坊を抱くように持っていたことに怒鳴った

(そりゃ小さいけどな・・・色々と恥ずかしいんだよ!!)

「いや~ね、久しぶりにとらの子供姿を見てつい抱きしめたくなっちゃったのよ」

っと忍が天野と椿に笑顔で言っていたが

俺が必死にもがいて脱出しようとしても手の力を全く緩めないで無理矢理つよく抱きしめられて苦しかったので

「とっとと離せ年増、アラサー、婚期逃し!!おばさん、ロリコン、ショタコン、変態クソ女!!!」

と思いつく忍の悪口を全部耳元で怒鳴った

椿と天野は、顔を若干引き攣らせていたが党の本人は、少し悲しげな表情をしていて

俺の口を片手で塞ぐと

「こら、あんたがこんなに口の悪い子だとは思わなかったわ。ちょっとお説教の時間ね♪」

っと言って俺を抱いたまま自分の診察室に連れてきて診察室のカギをガチャリと閉めて俺をベッドに座らせて自分は、椅子に座って俺

に向き合って

「ねぇとら、あんた、何か今日変わったことしなかった？」

といきなり意味のわからんことを聞いてきた

「べ、別になにもしてねぇよいつも道理『異世界樹（ユグドラシル）』で一突きだよ」

っと現実を偽って伝えた

すると

「嘘おっしゃい、あんた、眼の色がどんどん変わってるわよ？「え？まじで？」それに髪の毛の質も少し変ってるし色も桜色になってるわよ・・・まぁ髪の毛は、もとからあんたは染めてるみたいだから椿ちゃんでもわからなかったみたいだけど生え際の色が変わってるのよ・・「それって影千代になりかけてるとか？」いいえ、今までそんなにゆっくり変ったこと無かったでしょう？」

っと忍に言われて確かにっと納得してしまった

「で？いったい今回は何をしたの？」っと詰め寄られて聞かれた

正直言って答えるのが難しい

ていうかさ、忍の奴洞察力ありすぎじゃね？

・・・どうするどうする・・「とら、嘘を考えないで教えて」・・

「わかったよ。ただ内緒にしとけよ。今回の俺の力は、一真にもお

前にも学園都市にもそして、椿にだって言ってなんだからな！！」

俺は、内緒の内緒の内緒の能力？魔術？の『異常抑圧（ゼロノーマル）』と名付けた

俺の昔の特技について教えてやった

俺の話を聞いた忍は、驚くこともなくただ、納得してうなずいていただけだった

本当に納得できてんのか？俺ですら納得できてないんだぜ？

「で、今回は、１０年ぶりに『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』を使っちゃったのが原因なのね？」

っと忍が言ってくるので

「確証はないがそれ以外ないじゃん♪ただ、内緒にしといてくれよ？俺に無能力者時代があったなんて恥ずかしいからな特に原石チートな一真君や魔術側で必然的にチートの椿にはなぜか知られたくないんだよね・・・とにかく話はこれで終わりだ俺は家にかえ「カズくん♪」「うわあ！！離して～！！」・・・バカな御方（椿）の声が聞こえたのでちょっと一真を救出してくる」

俺が話を切り上げようとした時にバカな人の声と聞き覚えのある声が聞こえたので俺は、立ち上がり診察室のカギを背が足りなかったので忍に空けてもらい部屋を出た

そして、部屋のドアが閉まりかけたその時、

「やっぱり生まれた時からずっと気にしてたのね・・」

っと忍が後ろを向きながら何かを言ってたが俺は特に気にせずさっきの声の発生源に向かった

「葵おねぇちゃ～ん!!
助けて～!!」
「葵おねぇちゃん…。
はぅ～!!もう、限界だよ!!」
「えぇ!?何でそうなるの!?
暑いよ!!苦しいよ～!!」

俺はドアの前で必死にドアノブをつかもうとぴょんぴょん飛んでいたときに謎のカオスがドアの向こうで繰り広げられていた

そして、ドアノブに手が届きドアを開けて入ると

一真（子供）がトランス状態の椿と天野に揉みくちゃにされていた

「何やってんだ?お前ら…。」

俺は頭を掻きながら言った。

すると一真が涙目で俺に助けを求めるような視線を送ってきたので

「とりあえず嫌がってるから離してやれよ…。」

と助け船を出すと

「なんだ?チビ虎。
嫉妬かな♪」

っと椿がバカにしてくるので俺はイラっとした

「誰が嫉妬なんかするか！！
そいつの悲鳴がうるさくて迷惑してるんだよ！！」
「チビ虎の声の方が煩いぞ♪」
「黙れ！！」

俺が嫉妬深いの知ってバカにしてくる椿に腹が立って怒鳴り続けていたが

椿は未だにこたえていないようだった

「いい加減離してよ～！！」
「たく～…しゃあねぇな…。
ホラよ…。」
「「あっ！！」」

一真が可哀想だったので俺は背中から死世界樹（キルドラシル）の黒い蔓を出して抱き締められていた一真を救出したら椿と天野は、驚いた後にシュンっと少し悲しそうな顔をしていた

「ありがとう…。
エッグッ…グスッ…。」
「メソメソするな！！
お前本当に一真かよ…。」

なぜか助け出すと弱弱しくない始めた一真に少し怒鳴ってしまった

わかってる悪いのは、そこにいるショタコン共だということは・・

「チビ虎!!カズくんを返せ!!
と言うより二人共抱き締めさせろ!!♪」
「ヤバい!!逃げるぞ!!」
「えっ!?うん!!」
「あっ!!待ってよ!!」

椿が追いかけてきたので俺は、一真と共に全速力で走った目的地は、もちろん俺の家の俺の部屋だあそこに逃げ込めば何とか三日間やり過ごせる

……

……

……

そして、逃げること２０分…。

「クソッ…身長がもう少し高ければ…鍵を開けて部屋の中に籠れたのに…。」
「観念しなさい♪」

俺と一真は見事に捕まった

答えは単純、ドアノブと鍵穴に背が足りなかったのだ

そして、『異世界樹（ユグドラシル）』の羽を出して飛んで逃げようとしたら天野に重力をかけられて落とされてその後すぐに椿に捕まってしまった

逃げてる最中にいきなり一真が電池が切れた見たいに寝ちゃってその一真は今、天野の腕の中で寝ちゃっていた。

「さて♪葵今日はもう遅いから泊まっていけ♪
チビ虎♪寝るぞ♪」

っと椿が言っていたが今回の椿は悪乗りしている×一緒に寝る＝食い殺される（あれ、俺の口癖？）

「１人で寝るからいい！！
はーなーせー！！嫌だー！！
助けて！！Ｈｅｌｐ　ｍｅ！！！」
「わかった♪おやすみ♪」

っと俺は一応天野に助けを求めてみたもののあっさり無視された

そして、ジタバタしてみたものの結局は、ベッドまで運ばれてしまった俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』を発動して椿と戦う覚悟をして構えているとき

「なぁ影虎、さっきからずっと思ってたんだけどさ・・・お前さっきとなんか雰囲気が違うんだけど？」

「なッ！？な、何言ってんだよ・・偽物とか言う気？」

っと俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』を消して椿にあわててそう言うと

「スキあり」
「しまった！！！！」
「この小生意気な影が可愛い！！」
「本当にやめて！！」

この後、俺はもみくちゃにされたが何とか無事に生還し

うまく寝つけづに横で寝ている椿を無視してゴロゴロしていた

（はぁ～さっきの椿の言葉には、ハラハラしたな・・・死ぬほど的を射たこと言いやがって・・・この我儘姫が～グニ～・・・ペチン～「痛い！！うにゃむにゃ」たく、さすがに椿にゃいえねぇよ・・・『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』なんて理屈もくそもない特技なんてな・・）

俺は、横で寝ている椿のほっぺたを少し引っ張って離して軽く攻撃して再び考え事に入っていた

するとさっきの俺のささやかな仕返しのせいで涙を流している椿が寝返りを打ってきて

俺の体を再び抱き枕のように扱ってきた

「う～ん、明日、遊びに行こうな・・・『エルク』」

「はぁ！？～ガバッ～おいおい、何の冗談だ？寝言か？いや、でも、なんで椿まで俺の捨てた名前を知ってるんだよ？教えた覚えねぇし・・・訳がわからない・・もういい、寝る」

俺は、そう言って眠った

つづく

幼児退行（子供（ヤンチャ）時代の俺、参上！？）（後書き）

影虎君の旧名をなぜか口走った椿、それに対して一瞬の不安を感じた影虎・・この先どうなるのか？

などと言いたいのですが急展開になるのはまだまだ先だと思います。

ご要望があればもう一回投稿できます。

制限時間は、２０時までででお願いします。

ではまた

紛失記憶（ロストメモリー）（前書き）

特に要望はなったのですが投稿します。

ではどうぞ

紛失記憶（ロストメモリー）

・・・・ここは、俺の夢の中だろう

『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』を発動すると必ず見る夢

俺に居ない筈の家族の夢？

ガキの頃は、毎日のように見ていた気がする

気がするって言うのは、俺自身が自分の記憶をどういうわけか消しているからだろう

だから俺もこの夢から目が覚めたらすぐに記憶を消すだろう

だって俺に家族はいらない

むしろ、俺なんかが居た方が迷惑だろうし

ただ、一つの疑問は、なぜ、俺をこんな街に捨てたのかという所だ

俺が化け物だと理解して捨てたのならば

こんな化け物養成所みたいな場所には死んでも送らないだろうし

俺が無能力者だからここに捨てると言うのならば

なぜ、俺をあんな孤児院とは名ばかりの能力者養成施設に捨てたんだ？

と言う事だけだ

まぁその昔の夢も忍に見つかってからは少しづつ少なくなり椿と暮らし始めてからは、全く見なくなった

あぁもうすぐ始まるな

見たらすぐに忘れる夢がどうせしょうもない夢だろう・・

・・・

供のころの記憶がないのがわかったぜ・・こんな記憶いらねぇよ！
！子供のころからずっと感じてた損失感の正体も俺が恨んで仕方が
なかった奴らも・・もし、この気持ちをそいつらにぶつけたら・・
何もかもおしまいだ・・）

「おい、影虎どうしたんだよ？」

っと椿が俺の手を簡単に払いのけ俺に文句を言ってきた

椿に対して俺は、少しにらみをきかせながら

「いや、ごめん、ちょっと怖い夢を見て動揺しただけさ・・・おや
すみ」

っと俺がうそを言ってそう言うと

「・・・お、おやすみ」

っと言って椿はすぐに眠った

俺は、それからすぐに俺は、

「わりーな『マリア』、俺は『エルク』としてあんたに接しられな
いからすぐに影虎に戻るよ・・記憶消去開始・・・・・あれ？俺さ
っきまで何言ってたんだっけ？まぁ良いやねよう・・・」

俺はそう言って椿の頭をなでて自分の記憶を消してすべてを忘れて
眠りに就いた

・・・

・・・・
・・・

そして次の日、俺は謎の違和感を感じながらも目覚めた

「う～ん、よく寝た・・・それになんだか頭がすっきりしてる・・
はれ？椿は？」

俺は起きてすぐ伸びをして横に居るはずの椿を探したが

横に椿がおらずねぼけていた俺は、ものすごく焦って

部屋中探しまくった

その時、何回かつまずいて転んだりしながらも

家中探したが椿がどこにもいなかった

（・・・えぇ？なんでいねぇの？まだ、朝の６時だぞ？あの朝に
弱い椿さんが早起きしてジョギングにでも行った？いやいや、そん
なわけねぇし・・・そうか、今俺が居る状況が幻想か・・なら再び
『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』で塗りつぶしてやろう・・・・

すると

「たっだいま～って何やってんだよチビ虎？芋虫ごっこか？」

っと帰ってくるなり俺の状態に驚いて俺に寄ってきて両脇を持って立たせてきた椿と

「おじゃましま～す影虎兄ちゃん～・・・あれ？いない、そして、きみは誰？・・・どことなく影虎兄ちゃんに似ているようなそして、影虎兄ちゃんと似た不陰気をもっているような・・・もしかして、「そうだよ俺だよ」椿お姉ちゃんと影虎兄ちゃんのお子さん？」

「違う！！｛ズゴォ！！｝」

っと連がまじめに俺を指さしながらそう言ったので俺は、突っ込みながらずっこけてし待った

「ち、違うぞ連！！こ、子供はまだだ！！そう、まだなだけだ！！」

っと椿は顔を赤くして物凄くさせてそう言っていた

（いや、いや、椿さんそこは違うの一言で良いんだよ？なに、ちょっとややこしくしちゃってるの？まぁいいか・・・）

「俺が影虎なの！！ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？」

っとれが怒鳴りながら言うと

「前に一真お兄ちゃんにも言ったんだけどさ・・・現実を見ようよ」

っと頭にポンと手を置かれてそう言われた俺・

「・・・・・・・・ｃｏｍｅ　ｏｎ！！死世界樹（キルドラシル）」

「うぇ！？」

「ストップストップストップストップ～！！！」

「ムグ？〜ガン〜痛って～！！！！！！！！！！酷いぞ椿！！」

俺が怒りにまかせて死世界樹（キルドラシル）で突き刺そうとした瞬間、椿が飛びついてきて俺の小さな体では支えきれず

床に後頭部をなかなかの威力でぶつけていつも以上の激痛だったので痛みで転げまわっていた

「あ、ごめんチビ虎、痛かったかよしよし」

っと椿がそう言って俺の頭をなでてくるのだが顔が喜んでいてムカつく

そして、その後に連にすべての事情を説明すると

「ねぇお兄ちゃんって宇宙人？」

と唐突に首をかしげて聞かれたので

「いやいや、一応哺乳類に属してると思うよ？てかなんで？」

っと言うと

「いや、この間見たときには、お兄ちゃんがお姉ちゃんになってたし今回は、僕より明らかに小さい子供になってるし・・・お兄ちゃんて元の姿が嫌いなの？「元の姿以外が嫌いなんだよ！？」それにしても面白い体だよね・・・リバーシブル（男女両性）って・・」

「こらまて！！なんだその可哀想なものを見るような眼は？マジで食い殺したい」

「おい、やめろって影虎、相手は子供だぞ？ほら、怖がってるだろ？」

っと椿が俺の体を押えてが俺の沸点は今は低いんだよ！！

「いっぺん表に出ろクソガキ〜ブチッ〜あぁん？なんだ、俺様が怖くておじけずいてんのか？」

ブチブチっという音が聞こえたその時

「・・・調子に乗るなよ・・このクソチビ・・吹っ飛べ！！」

「な？」

「来いよ！！」

っと突如キレた連が俺にめがけて竜巻をぶつけてきたので

俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の羽を展開してその竜巻を上手い事受け止めて窓の外に飛び出した

そして、空中で静止した状態で俺は連に来いよと手で誘った

するとさっきまでの青少年のような目がこの世の裏にはびこるヤクザのような目になって自分の周りに超小型の竜巻を作って

俺のところにすごい勢いで飛んできて殴りかかってきたので俺は、降下してそれを交わすと

連は、俺を見おろすような状態になっていた

そして俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の羽を使って空中にで制止し

連も小型の竜巻に乗るように空中で静止していて、おそらく俺が先に動けば強力な電撃と冷気を浴びさせられるし連が動いたら俺は、『竜王の波動』をぶっ放すつもりだった

その時

「このバカ共!!『炎蛇の毒牙』」

「「はぁ?なに?」」

椿が俺らに窓から叫んだとき

俺と連の周りは、巨大な炎の蛇に埋め尽くされていて

まるで巨大な蛇の巣に迷い込んだような光景だ

（おれ・・蛇嫌い・・てか、大っ嫌い・・・）

「何この蛇?さっきから大雨降らせてるのに消えないし風邪で攻撃しても炎が揺れもしない・・」

っと連が驚いていたので

「・・あの連?この蛇さんは、刺激しないに限るよ?怒らせると「え?」マジで怖いから・・とりあえず逃げよっか?大丈夫だよ。俺ならこの蛇を消せるし空も飛べるから逃げ切れるとおも」

「逃がさないぞ?」

「・・マジかよ・・・降参」

俺が連の手を持って逃げようとしたその時に椿がいきなり後ろに現れてびっくりしたが

炎の蛇に乗っていたので納得してあっさりと襟を掴まれたので降参した

その後、俺と連は、椿に襟元をつかまれながら部屋に連行されて壊した窓の修理と2時間にわたるお説教を味わった

「・・・・・以上だ・・足崩していいぞ♪」

「「お、そい・・・しびれる〜・・」」

俺と連は、2時間もの間ずっと正座させられていたので足がしびれてほとんど動けない状況になっていた

すると

チョンチョン

（あれこの音とこの後に来るこの衝撃は・・・）

「「ギャァアアアア」」

「ハハハハッハハ、お前ら二人おもしろすぎだ」

っと俺と連のしびれている脚を突いてきて俺たちが苦しんでいる姿を見て腹を抱えて笑っている椿さん

「コンニャロウ・・・よし、てめぇがそう言うつもりなら俺にも考えがある・・・お前のコレクションをすべて株式証券の情報に書き換えてやる」

っと椿をゆびさしてそう言うと

「・・・・・・・・・・・・・・・そんなことしたら後で酷いよ？」

「ひっ！？」

っと物凄くまじめな目で首をかしげられたので俺は、ついひるんでしまった

今の目と声がとにかく怖い

下手すればトラウマものだ

「お、お姉ちゃん・・こ、怖い・・・ {ブルブル}」

っと連も震えて怖がっていた

「・・・・・・で、そんなことしないよな?それともうしちゃったか?」

っと先ほどからずっと同じ目でそう聞いてくるので

「いえ、ちょっと寝ぼけてただけです」

っと両手をあげて全面降伏の姿勢でそう言うと

「なら、いい♪」

っと突如笑顔になられた椿さん

「「ふぅ〜・・・」」

っと俺と連は、やっと謎の空気から解放されたので溜息をついた

すると、椿が突如、立ち上がって

いつも道理帽子をかぶって

俺と連の手を持って立たせて

「今日は、久々に遊びに行くか♪」

「え?」

「そうだ忘れてた」

・・・

このゲームの面白いところは、能力がレベル０～レベル５までちゃんと揃っていて

あろうことか都市伝説の能力やキャラまで存在しているというまさかの一方通行まであったよ（能力だけ）

（このゲーム・・・絶対スパコン５０台くらいと直結されてるよな・・）

俺はそのゲームであえて、無能力者を使用してコスチュームを牙桜（つまり俺）にして

対戦相手のレベル５クラスの能力者キャラたちやゲームのボスキャラや敵キャラを一人また一人と撃退していた

そして、ついに１９９９９勝したその時、いきなり超ｅｘｔｒａｓｔａｇｅと言うのが出てきて

『絶対能力進化（レベル６シフト）』

という謎のステージが登場してきて俺の周りのギャラリーがおどろいていた

「ついに出るのか？レベル６が」

「俺この目で拝めるとは思わなかったぜ・・・しかもキャラが都市伝説キャラの姿をした無能力者って・・」

など各々の感想を述べていたが

俺はそんなのお構いなしで最後の敵と対峙していた

その最後の相手と言うのが俺の使っているキャラの色違いだった

（・・・なるほどね・・・１９９９９戦で俺の戦い方をすべてインストールして全く俺と同じ思考パターンを持った俺以上の俺を制作したわけね・・なるほどこのデッカイ機械とこの機械に接続されている地下室のスパコン５０台は、そう言う事をするためにもあったのか・・・まぁ俺の敵じゃない）

俺はそう思いながらあらゆるコマンドを入力してあらゆる格闘の技を繰り出した

しかし、ラスボスも俺と同じ動きをしてきた

（たしかに、俺のパターンをここまで忠実に再現するなんてすばらしいな・・だが俺のほうが何枚も上手だ！！）

そう思いながらいままでとは全く違うパターンでコマンドを入力してラスボスをボコボコにしだして

相手のライフが１２になった時に

ラスボスのキャラが突如、豹変して人型から化け物の形になった

そして、いきなり謎の動き方をしてきて俺のキャラのライフが一気に９０パーセントも削られた

（最後の措置としてこのバグが用意されてたか・・・だがこれでコ

ンプリートだ）

俺は、再現不可能と言われている伝説の１００００パターンのコマンドを一つも間違えることなく入力したときにだけ発動する

鬼神コンボを入力したその瞬間、さっきまで武器や格闘で戦っていた俺のキャラが突如、パワーアップして敵キャラを一撃粉砕した

そして、ゲームクリアーの画面になり

エンディング画面が流れた

そして、俺のスコアがインフィニティになってランクが絶対能力者になった

名前を入力しろとあったので『ＧＡＯＵ』と入力して椿の所に行った

その時、周りにいた奴らは、

「すごいぞ！！スキルマスターオールクリアー者が出たぞ！！」

「何なんだよあの子供・・・」

など、うるさいくらい騒いでいた

ついでにいうと俺が終わった後から最初のボスキャラが俺の偽物キャラになったので誰にもクリアーできなくなったらしい・・・フフフ

そして、ゲームを終えて椿の所に向かうと椿の周りにもギャラリーができていた

椿のやっていたのがレーシングゲームだった

本来なら?ラップ2分のところを椿は、ほかの車との衝突やショートカットやバグなどを巧みに使いこなし1分を切ってやがるのだから恐ろしい

あなたは、レーシングゲームの天才ですか?

俺でもそのゲーム1分30秒が限界なのに・・・

そう言えば連は・・・・・・え?なんであいつの周りにもギャラリーが?

そう思いながら連の所に行くと

ゾンビを銃で倒していくというおなじみのゲームをしていたのだが

おもしろいのがライフが一になったとたんに強くなって

連の奴が人質や味方関係なしにゾンビどもを消しては

ゾンビ（死体）を増やすという謎の裏技を絶賛公開中だった

スコアに関しては、言うまでもなく0だった

だって助けなきゃいけないヒロインの頭に大きな風穴があいてんだもん

俺がそれを眺めている時に連が俺に気付いて

「あ?兄ちゃんもいっしょにやる?」

っともう一つのコントローラー（銃）を渡してきたので

俺はそれを手にとって連と一緒にそのゲームを楽しんでいた

連が再びヒロインを殺しかけたので連の撃った銃弾を俺がうまい事兆弾させてゾンビに当てると言う神技を披露しまくってついにラスボス戦にさしかかったときに遊び終えた椿が来て

俺と連に肩をかけながら

「それ終わったらそろそろ帰ろっか?」

っと言ってきたので俺と連は、真横にある椿の顔を見ながらお互いに右手と左手に持った銃を画面のボスに向けてショットボタンをよそ見しながら押しまくって

「了解」

「は〜い」

っと言って画面を見てダメージを受けまくってボロボロのボスの頭に攻撃してゲームをクリアーして

またまた、最高スコアが出たので

再び『ＧＡＯＵ』と売って連は『ｗｅａｔｈｅｒ』と入力していて

『ＧＡＯＵ』＆『ｗｅａｔｈｅｒ』
で登録した
そして、椿の行ったとうりそろそろ帰ろうとゲーセンを出ようとした時
まずレーシングゲームはすべてスコアに『ＮＡＮＡ』と登録されていて椿だとわかったが
出口付近の歌唱力を測る音楽ゲームつまり音ゲーのスコアも試しに見てみるかと見たところ
全部に『ＮＡＮＡ』と入力されていて驚いた
しかも、点数がマックスに近かった
そして、その音声を再生してみると
「恥ずかしいからやめろって」
と椿が消そうとした椿を邪魔して
聞いてみると椿がものすごく綺麗な声で歌っていて驚いた
あんたは、歌手ですか？って聞きたくなるくらいうまくて驚いた
「この声ってお姉ちゃん「・・・うん・・」すごいきれいな声だね」
っと連がそう言うと

椿は、顔を赤くして

「そんなことない・・・」

っと言っていた

「いや、いや、この音ゲーでこのスコアはすごいぞ?前にやったことあるけど俺って音痴だから最低スコア出したもん・・まぁとなりのドラムのゲームやギターやらは練習して最高スコア叩き込んだけどな♪」

っと言うと

「残念、俺はお前のスコアすべてを超えちゃったんだよ」

っとものすごくいい笑顔で言われた

(・・・・あんたは、音ゲーの天才ですか?・・・てか、椿の奴、こんなに歌上手かったんだな・・そりゃ前から綺麗な声だと思ってはいたけど・・・ふ~ん)

「なら、一回歌ってみろよ」

「そうだよ、一回歌ってみてよ」

っと俺の言葉に続いて連もそう言ったので椿はしぶしぶ小さなボックスのような場所に入って

俺たちは、観戦席のベンチに座ってベンチの後ろに備えつけられて

いるヘッドフォンをして椿の歌を着てみた

椿の選んだ曲は、かなり切ない悲しい愛の歌だった

その歌をリズムに乗りながら再び歌っていたが心がこもりすぎていてカッコイイと思わせるほど堂々としていて涙をさそう歌詞で本当に涙を流させてきた

そして、歌い終わった椿が

「どうだ?普通だっただろ?」

っと言ってくるので

「「う、うんうん、ものすごくよかったぜ（よかったよ）」」

とそのような感想しかすぐに出てこなかった

意外な椿の一面を見た時だった

そして、その後、適当にファミリーレストランに入って晩飯を食ってちょっとそこで今日のことで話に花が咲いて少し長話になった

そして、少し遅い時間になってしまい連を病院に送ろうと夜道を歩いていたその時、

「「ん?・・・」」

「どうした?連に影虎?」

「「さっきから後ろ２５メートルの距離に１０人と前方の曲がり道両サイドに２０人づつそして、前方３０メートルの位置に１０人計４０人くらいが鉄パイプや鎖やらを持ってる」」

っと俺と連は、感じたことを椿に同時に述べてみた

俺は、『孤独の傍観者』を発動中なので俺を見ている奴の情報はすぐに頭に入ってくるからそういう結論になったが連の場合はおそらく風の流れで相手の位置や姿を割り出したんだろう・・相変わらず天才肌だねぇ

（それにしてもうっかりスキルアウトの集会所にグッドタイミングで入りこんじまったな・・どうする）

っと俺が考えていると

カランカランっと鉄パイプを引きずりながらチャライ男たち２０名くらいが後ろに来た

「なぁに？君たちあそこのマーク見なかったの？ここは今俺たち『オンライン』の貸切なんだよねぇ・・入場料として財布置いて行きな」

っとモヒカンに鼻ピアスの男が俺らにそう言った

その瞬間、椿が俺と連を庇うように前に出て

「悪いけど・・お前らに渡す金ないから・・」

しかし、男にガッと左腕をつかまれ万事休す。

「・・・なんだよ。感じわりーな。ついでにこの精神的苦痛に対する慰謝料出せや。」

男の言葉に、他の男達が下品な感じの笑い声を上げる。

（今どき“かつあげ”かよっ！てか、椿の野郎、なんで炎で攻撃しないんだ？いつもなら）

椿は、きつく掴まれた左腕の痛みに、うめき声をガマンするだけで精一杯みたいだった。

「なんだよ、このほせぇ腕。ちゃんとメシ食ってんのか？」

帽子のツバで目を隠すように俯く。

しかし、逆に、その仕草が男の気に触ったようだった

「聞いてんのかよっ！」

男の手が、「あっ！」という間もなく、椿の帽子を払い上げた。

帽子の中に隠していたロングヘアが、パサッという音とともに、あらわになる。

（あたりまえだ！！なんで触られて今にも泣きそうなのに我慢してんだよ！！）

俺は必死に動こうとしたが椿が離してくれない

「あぁ？女ぁ？」

男たちは、一様に驚いた顔を見せた。
しかし、椿の左腕を掴んでいる男は、力は緩ませることなかった
それどころかさらに力を強めてすらいた
「やっべ。結構かわいいじゃん。今からどっか遊びに行こうぜ。その子らは、あいつらにまかせてさ」
（なんで？なんで、椿は、いつもみたいに・・？）
下心丸出しの顔に、俺は、完全な殺意を抱いたどうやら俺の横で連もキレているようだった
でも、椿は、離してくれない
いつもだ、椿は、子供状態の俺には戦ってほしくないとか言って邪魔をするんだ・・
「へへ・・・、あまり胸ねぇじゃん？俺は貧乳でもロリなら結構好きだけどな。」
「おいおい、ロリコンかよ？」
「あ！お前わかってねぇ！ロリコンとは、まだまだ、希望があって楽しめるんだぜ？」
下らぬ会話で盛り上がる男たち。
椿はわざとサラシで、少々苦しく感じるほど押さえ付けているだけなのだ。

別に、貧乳というわけではない。
「ま、ちょっと触らせろよ・・・な？」

「や・・・め・・・。」

本当は、「やめろっ！」と叫びたいのだろうが、まともに声すら出てない。
出たのは、弱々しいかすれ声だけだ。
無遠慮な男の手が、椿の“胸”に伸びてくる。

激しく脈打つ心臓が、全身の血液をものすごい勢いで逆流させるような感覚。
心の底から『殺す』という感情に染まったその瞬間

「・・・イ・・・ヤッ！」

男の手が、『椿』の胸に触れる直前だった。
椿の体が、「ドンッ」という音とともに俺と連に引っ張られ尻もちをついていた。

「はぁガキどもは、そのお姉ちゃんが俺らと御遊びするのが嫌みたいだなギャハハハ」

っと周りの奴らと一緒に俺と連を見てわらっていた

しかし、椿だけは俺と連の袖をつかんで

「お前たちは、何もしなくて良い！！特に影虎、お前は特にだ・・いつもみたいになんて言うのか・・強い感じがしないんだよ！！もしかしたら死んじゃうかも知れない、そんな感じがするんだよ」

っと言っていたので

パシンと俺は椿の頬を思い切り叩いた

「？」

っとよくわからないと言った顔をしたいたので

「あのさ、椿、この間は、助けてやれなかったしお前を殺そうとしちまっただが今の俺は、お前の知ってる俺だ、久々に見て思い出せ俺がお前に守られなきゃならない小動物じゃなく小動物（椿）をまとめて守ってやれるような化け物だってことをな」

っと俺が椿にそう言うと椿は、少しパニックになっていたがうなずいた

すると

「ついでに言うと女子に守らてちゃ～俺のメンツ丸つぶれなんだよ。女子（おなご）が出娑婆んなや！！そして、か弱い女子（おなご）に大勢で絡み無理やり犯そうとするお前らチンピラに俺がケジメつけたるわ。俺の恩人に手を出したこと後悔しろや！！？」

っと連が椿にものすごく怒って不良集団（スキルアウト）どもにそう言った

さすがは、やくざの子供、生き生きとしてますね

「は。何なんだよこの気持ち悪い餓鬼どもは！！」

っと不良集団（スキルアウト）の一人が俺らを指さしてそう言ってきたので

「「え？なに？ただのレベル６ですけど？（レベル５だが？）」」

俺と連が合わせてそう言うと

「バカかこいつら？」

っと言ってきたので

「「一つだけ言っといてやる・・・てめぇらは今から『オンライン（接続）』じゃなくて『圏外』だ！！」」

「そしてもう一つ・・・たかがスキルアウトごときが『牙桜』を忘れてスキ勝手してんじゃねぇよ！！」

俺と連は、能力を最大に使って暴れまわった連には、何しても俺が後からもみ消してやる

っと戦っている最中に言うと

「ハハハ、今日は、最高の日だねぇ！！」

っと一瞬で巨大な竜巻を作って辺り一帯を凍らせたり巨大な水で相手を流したりものすごい暴れ方をしていた例えるなら風神と雷神

かく言う俺も椿の周りを『異世界樹（ユグドラシル）』で包み込んで後は、『異世界樹（ユグドラシル）』でさしまくって

最後の最後で『異世界樹（ユグドラシル）』の羽を変形させ『竜王の波動』を撃ちま

くって奴らを蹴散らしていた

そして、はじめに椿に触ったモヒカン馬鹿一人を残して残りの奴らを徹底的にいたぶった後に

その残った男を『異世界樹（ユグドラシル）』で貫いて

「全身で味わいな・・これがアイツを泣かせた対価だ・・・咲け（裂け）紅桜」

俺はそう言って男の全身を一瞬で『異世界樹（ユグドラシル）』で貫いて男の血で『異世界樹（ユグドラシル）』を血の色に染め赤い桜の木を演出した

そして、俺と連は、椿の周りに作った安全地帯に行って

『異世界樹（ユグドラシル）』を解除したら椿が真ん中で泣いていた

「・・・おい、姐さんに謝っとけよ」

っと連が肩で俺を押すので

「・・・・あの、さっきは叩いてごめんな」

っと俺が言うと

「・・・違うんだ・・実はな、この間、葵たちとの買い物の帰りのときから男に触られると嫌な気持ちでいっぱいになって殺しかけてからお前を撃っちゃってからもっと怖くなったんだ・・また、お前を撃っちゃうんじゃないかってそして、また簡単に人の命をもてあそんでしまうんじゃないかって・・それが怖くて怖くて・・でも、

お前たちにも危ない目に会ってほしくなくて・・」

っと椿が目に涙をずっと浮かべながら

そう言ってきたので

「・・・・・大丈夫だよ・・俺もそして連も危ない目には、慣れてるしお前の前で危ない事はしない」

っと俺が言うと連はうなずいていて

椿は、まだ黙っていた

「・・・それに俺は、お前が俺らをかばって酷い目に会うのだけは、許せないんだ・・なにもできなくてお前が気づ付くのだけは嫌なんだ・・お前は、自分勝手な奴だから」

俺がそう言うと椿は、自分の服の袖で涙を拭いて

俺と連を抱きしめてきて

「ごめん、俺らしくなかった・・本当にありがとう・・」

そう言っていた

そう言っていた時の椿は、いつもの椿よりもなぜか大人っぽかったように思えた

そして、その後に忍の所に連を帰して

俺と椿は、静かな夜道を二人で歩いていた

しかし、俺は段々と眠気に襲われてちょっとでも気を抜いたら寝てしまいそうだった

（畜生・・この体だとやっぱり活動時間が短いな・・・早寝早起きは子供の特権てか？）

そう自分を小バカにしながら歩いていると

スっと手を出してきて俺の小さな手をつかんで手をつないできた椿

「眠いんだろ？「・・・・」おぶってやるから今日は、寝てて良いぞ？」

っと良いぞと言ってくるので

「何が楽しくて自分の女に背おられてねにゃにゃふぁあああ」

しゃべっている途中にあくびが出てしまい

「お前はいつも俺をおぶってるんだからこんな時くらい甘えてろよ？」

っと半ば無理やり背負われてしまった

（・・・久しぶりだな・・こうして背負られるのも・・・昔は俺がしょっちゅうこうしてももらってて最近はずっと俺が背負ってたんだもんな・・・・・あったかい・・・おやすみ・・ｚｚｚ）

俺は、椿に背負われながら寝てしまった

そして、次の日には、もとの姿に戻っていた

ただ、俺は、起きた時、横で寝ている椿を見て

（俺が傷つくことで椿まで傷つくってことを忘れてたのかもな・・・）

っと天井に手を伸ばしてそう考えていた

つづく

紛失記憶（ロストメモリー）（後書き）

なんとなく投稿です

感想をいただけたら嬉しいです

ではまた

剣菱麻華（ノンライアー・・正直すぎる偽善者に真実の裁きを・・）（前書き）

はいはい、いつも通りの一週間に一回投稿の時間です

今回、影虎君が正義の味方に見えた人はＤＶの予備軍の可能性があるかもなのでご注意を・・・主人公は決して正義とは限らない

ではどうぞ

影虎の狂気を・・・・

剣菱麻華（ノンライアー・・正直すぎる偽善者に真実の裁きを・・）

があの忌々しい子供時代の姿からいつもの身長１８０の姿にもどった翌日

俺はいつも道理、学校にあまり行きたくないというのにも拘らず宿題だけは必ず終わらせてテストでもなかなかの成績をとるいわゆる引き籠り優等生の椿さんの首根っこをつかんで引きずってバイクの後部座席に乗せて学校に行って今回は椿も一緒だったので

全く『孤独の傍観者』が発動せず隣のクラスの担任のサバサバした熱血キャラ体育教師でいつも黄緑色の体育ジャージを着用している。黄泉川に見つかりお説教を受けていた

「あんたら、なんでバイクで登校してんじゃんよ?てか、免許持ってるはずない年じゃんよ?」

っと相変わらず意味のわからんしゃべり方する先生だこと

「おい、影虎、行っても良いか?」

と椿が言ってくるので

「あぁ俺がこの先生にしっかりと教育ってもんを教えとくから」

っと俺は、椿を先に教室に行かせた

すると相変わらずわけのわからんしゃべり方をする体育教師は、

「こら、勝手にいかせるんじゃないじゃんよ!!それに説教をしてるのはわたしじゃんよ?て、こっち見ろじゃん」

っとまたまたわけのわからないしゃべり方で怒ってくる・・面倒くさい・・

「あぁ見てますよちゃんと聞いてますよ?「なんで疑問形じゃん!!」すいません。あなたがジャンジャン星出身のジャン人間だという事はちゃんと理解してますよ・・ただ自分、ジャンジャン語の勉強は少しさぼってしまったので出来れば出良いんですが日本語かまたは英語かそれでなければスワヒリ語でお願いしたい所存なのですが」

っと俺がそう言うと

「あんたは、私をバカにしたいってことはよくわかったじゃん・・てか、スワヒリ語なんて話せないじゃんか!!「いや、しらねぇよ、とにかくジャンジャン星特有の言語は勘弁してください。」あんたねぇ教師っていうものをなめてんじゃ〜{ポト}〜・・・これは何じゃん?」

っと黄泉川は俺の上着から落ちたものを拾い上げて俺に突きつけながらそう言ってきた

「ハハハ、・・・火をつけると有害な煙の出てくる科学の結晶ですよハハハ」

俺がそう言うと

「ふ〜ん、小萌先生のクラスの生徒は、問題児が多いっていうけど

あんたは特に問題児じゃん」

っと俺を睨みながら言ってくる体育教師

すると

「とにかく、これは、没収するから早く教室に行くじゃんよ!!あと、この事は、忍ちゃんに報告しとくからね」

っと背中を軽く蹴られた

この後、ふつうに教室に行くと遅刻した上に教科書をすべて忘れた俺は、小萌先生にお叱りを受けてクラスの全員に笑われた上に吹寄さんに休み時間に

「貴様は、風紀を守るという言葉を知らないのか?それとも校則と言うものが嫌いなのか?」

っとガミガミ怒鳴られながらも熟睡していた

そして、今日は、珍しく屋上に先輩2人（男）と同級生の女の子から呼び出された

そのことをクラスの三バカに話すと

「「それって絶対に告白と先輩からの挑戦じゃん」」

っと言われたので

「じゃとりあえず解決してくる」

そう言って屋上に行って

まず、三年の先輩方二人に

「お前最近ちょうしにのってん」

っと相手が何か言う前にボディブローで沈めて

奥で待っていた女の子が

「あの、その、あなたの事が好きですお付き合いしてください」

っと深く頭を下げられたが

「本当にごめんなさい、気持ちは限りなくうれしいんだが・・俺は、もう一生をともにしようって決めた奴が居るんだ・・だから、君とは付き合えない・・本当にごめん」

っと俺も頭を下げてそう言った

すると女の子は

「ちゃんと言えてスッキリしました・・」

っと言って泣きながら走って階段を下りて行った

俺は、少ししてから俺も教室に戻ろうと階段を下りていると

階段の下のほうで棒付きキャンディをなめている男装中の椿さんが

座っていた

「さっきの子、物凄く泣いてたぞ?」

っと俺のほうを見ずに言ってくるので

「あの子は俺が泣かせまいした。」

っとそう言うと

「結構かわいい子だったぞ?よかったのか?」

っと椿が聞いてくるので

「次そんな質問したら『異世界樹(ユグドラシル)』で突き刺すから・・」

俺はそう椿に言って

教室の戻った

(椿の奴、どうしてあいつはいつも他人のことを先に考えて自分を後回しにしか考えられないんだ?まぁそれを言ったら俺も同じか・・・)

などと考えながらも

「リア充しね!!」

「とらヤンだけは、味方やって信じてたのに!!」

「どうしてお前と当麻と一真ばっかりもてるんだにゃ～！！」

っとクラスの三バカトリオに激しく蹴られて殴られまくっていたら

再び吹寄が来てまさかの俺まで巻き込んで制裁してきた

・・・

・・・・

・・・

などの騒ぎがあったがその後は普通に学校から帰って

普通に飯食ったりしていたその時に

「ピンポーン影虎ピンポーン開けてピンポーンくれ！！ピンポーンＳＯＳ！！ピンポーンＨｅｌｐ！ピンポーン。グハッ！！」

いきなり平穏をぶち壊しにする一真の謎のピンポンラッシュに椿がキレていきなり手から能力者で言えばレベル５相当の火炎を出して扉を吹っ飛ばした

「いちいちうるせぇんだよ！！出てくるまで待ちやがれ！！このピンポーンラッシュ魔が！！」

右手に火を纏わせた椿が怒鳴っていた…。

あの・・・一真死んでないよな？

「た、頼むから力加減をわかってくれ…。
流石に助かった筈の命が亡くなるかと思ったから…。」

「自業自得だ…。
その言い方だと訳アリのようだが、用があるなら扉治してからにしてくれよ。」
「・・・・。」

よっかた!!!生きてた・・・そして相変わらずの俺様気質だな椿さん

それから一真は扉を修理した…。
途中俺の錬成で扉自体を出現させて直した
まぁ椿に言われたからなんだけどさ

「で、何があったんだ?」
俺達は何とか修理を終わらせると一真は椿にそう尋ねられていた

「え〜と…葵に殺されかけた。」
「「・・・・はぁ?」」

どういう意味?今の一言だけでは、さすがに推測できない・・多分樹形図の設計者(ツリーダイアグラム)でも「はぁ何どういう意味?」という回答しか返ってこないと思う
……
……
「なるほど。
つまり、天野がお前を殺して自分も死ぬと言い出したのでとっさに逃げてきました。

めでたし、めでたしと言う訳か♪」

「全然めでたくないがな…。」

俺がめでたしめでたしと終わらせようとすると一真が地味に妨害してきた

「とりあえず家に帰ったらどうだ♪」

「俺に死ねと？」

「そのとおり♪」

「全面拒否！！」

椿が多分悪戯でそう言うと一真は本当に否定していた

「それにしても…ククク…。」

「フフフ…。」

「「アハハハハ…！！」」

「何故だ！？」

俺と多分椿もだが笑いをついにこらえきれず笑ってしまった

「だって…あはは…お前…あは…天野が…なぁ。」

「あはは…とうとう…あはは…葵も…あは…ヤンデレになるとは…いつかは思っていたけど…。」

「腹を抱えながら言われてもあまり説得力が無いんだが…。」

だめだ、笑いすぎて涙出てきた

俺と椿は、腹を抱えて笑っていた
俺なんか下手すれば酸欠になりかけていた
すると
「あり得ないだろ…。」
一真が呟くと俺たち二人はピタリと笑うのをやめた。
意外と簡単に止まった・・・
「何故、お前はそういえるんだ?
あの発言はヤンデレ以外は無いと思うんだが?」
椿さん…。
ゲームやアニメの見すぎですね…。
だが、あなたの意見は正しい
「確かに、葵の発言はゲームやアニメなどでのヤンデレ発言だが、
それって確か、好きな人にすることだろ?
それなら意味がわからん…。」
「「ブッ…アハハハハ…!!」」
「何故そこで笑う!!」
「だ、だって…そこまでわかってて気付かないなんて…鈍感過ぎるぞ…。」
もう駄目だよこれ・・この際だから一真の鈍感か天野のヤンデレの

どちらかを『異常抑圧(ゼロスキルアブノーマル)』で打ち消してやろうかな？とくに一真の鈍さと言ったら能力で言えばレベル５で魔術で言えば大魔術クラスだから塗りつぶせる気がする・・プププ

「ふざけんな！！」
「ンガッ！？」

一真は俺の頭に拳骨を喰らわしてきた。
しかし…。

「イッテェ…。」

ダメージを受けたのは一真だった…。

「全く♪何すんだ♪
なかなか痛かったぞ♪」

絶対嘘だ…。って目で俺を見てくる一真

（フフフ、確かにうそだ実は、皮膚の周りに超薄い『異世界樹(ユグドラシル)』の枝で作った膜を張っていたのだ。これにより俺は究極の防御力を得ているのだよ。この間琉奈と一緒に居た鉄男の能力のオマージュさ♪）

「なら、一真。
逆に聞くが、何故葵はお前を殺そうとしたんだ？」

「えっ！？」

椿が突如そう聞いた

「確かに訳が解らんが…。
でも、他に理由でも…ん？」

一真が言い掛けると突然一真の携帯が鳴り出した。
ディスプレイを見てみると天野　葵と描かれていた…。

「「「・・・・・。」」」

沈黙…。
俺達は鳴り響いている携帯を見て沈黙していると、携帯が止まった…。

「「何故出ない！！」」

「普通に嫌だろ！？」

俺と椿は、じっくりと着信が終わるのを眺めていた一真にどなった

（馬鹿なんですか？ヤンデレ化している人間の着信を無視すると次に来る行動と言えば自害だぞ！！）

っと俺が心の中で突っ込んでいると今度は電話では無くメールが届いた。

『次電話に出なかったら、私は見捨てられたと悟って自殺します。』

「「「・・・・。」」」

またしても、沈黙…。

来ちゃったよ・・・自殺予告・・・ここまで思い道理だと面白いな

しかし、この沈黙の中、また携帯が鳴り出した…。

・・・・・。

「「早く出ろよ!?」」

「そうだった!!」

また、一真が沈黙していたので俺は、右手でこぶしを作って脅すと

一真は電話に嫌そうに出た

「は、はい?」

『やぁやぁ。

ご機嫌いかがかな?

負導　一真君♪』

「ん?」

一真が電話に出ると天野では無く男の人の声が聞こえた

なぜその声が聞こえるかと言うと俺と椿さんは出来る限り電話に近づいて耳を澄ませているからだ

『もしかして、僕の事忘れちゃったかな?』

「あぁ…全くと言って良いほど解らん…。

どちらさまですか?」

あれ?この声って九十九高貴・・・『無我夢中(バーサーカーソウル)』の使い手の馬鹿じゃん

『まぁ、いいさ…。
とりあえず、ゲームは楽しんでくれてるかい？』

「げ、ゲーム？」

一真は相手が言ってる意味が解らず、電話越しで首を傾げていた。
（そういうことか・・・あの野郎、一真に復讐がしたくてまた天野を利用したのか・・・こりないやつ）

『葵ちゃんに殺されかけただろう？』
「ッ！？」
『勘づいたようだね♪
では、葵ちゃん以外にもあと二人いるから頑張ってね♪
それじゃあね♪
ブツッ…。』
「あっ！！
クソッ！！」

いきなり電話を切られてしまった。
ふ～ん、モヤシ野郎が仕掛けてきそうな作戦だこと・・

「今のって誰だっけ？」

「さぁ…。
聞いたことあるような無いような…。」

椿に一真は尋ねられたのでわからないと言った感じで手を左右に広げた。

あれ？もしかしてこの御二方・・気付いてない？

「今のって九十九とか言う奴じゃなかったっけ？」

っとさりげなく教えてあげると

「「へ？」」

「「誰？それ？」」

一真と椿が同時に言うので俺はずっこけていた。

確かこのメンバーの中で俺が一番鈍いんじゃなかったけ？たしかそう言う設定だったはず

「無我夢中（バーサーカーソウル）の使い手だ！！

わかってくれた！？理解できた！？Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋ！？」

「「わ、わかった…。」」

俺は今できる説明をしたすると何とかわかってくれたみたいだ

てか、ふつうわかるよな？

「あの屑野郎…まだ懲りてなかったのかよ…。」

いやいや、あんた、さっきまでそいつのことを忘れてたからね

「ん？っていうか椿はそんな隅っこで何してんだ？」

俺達はなんか隣から異様な何かを感じたので隣を見てみると椿が陰

湿オーラバリバリで壁に手をついていた。
もしかして落ち込んでる？

「大した事じゃない…。
ただ、この中で一番鈍い影虎がわかっていて、私がわかっていなかったのが…。
ショックでな…。」
「あの～、椿さん。
人の悪口を地味に言うの止めていただけません？
かなり傷つくんですが…。」

本当に地味にひどくない？俺ちょっと本気で傷つくんだけど？この傷は『異世界樹（ユグドラシル）』じゃ癒せないんですけど？

「はぁ～…。
ずぼらで鈍感男にまけるとは…。」
「だから…。」

まだ言うかこのやろう！！

～討論する事２０分経過～

「とりあえず♪さっさと対策をたてようか♪」

「「は、はい！！」」

あれからいきなり殴り合いに発展したら一真に止められ現在ゴミ屑（九十九）対策の会議をする事
なんだ今の殺気は？

「因みに真面目にしなかった場合は♪Ｒｅａｌで殺すからね♪
Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋ？♪」

「「わ、わかりました！！」」

なんか一真が怖いのでとりあえず逆らわないでおこうと敬礼しておいた

「さて、そろそろ口調を元に戻して…。
どうするかな～。」

「そうだな…。」

一真が口調を元に戻すと俺たち二人とも安堵の息を吐いて考えていた。

「てか何よりもまず始めにあいつの居場所がわからなければ意味ないだろ？
というわけで…。
影虎…頼んだぞ♪」
「・・・了解…。」

椿に頼まれたので集中して検索に取りかかろうとしたその時

ピンポーン…。

「「「・・・・・。」」」

誰かが来た…。
そして、何故か俺達は固まったまま動こうとしなかった…。

嫌な予感…。
てか、ナイスすぎるタイミングだな・・・ずっこけそうになったよ・
・

俺達三人はソーッと扉の覗き穴を覗いた…。
するとやはりと言うかなんと言うか…天野が立っていた。
俺は手を見るとなぜか赤い液体の垂れている刃渡り１５センチ以上
のぎらぎらと光る包丁を所持していました

「・・・一真…。
ベランダから下ろしてやるから今は何とか逃げろ…。」

「りょ、了解した…。」

それから俺はベランダから一真を異世界樹（ユグドラシル）の蘿で下ろしても、自宅
から出ていってもらった。
これで逃げれただろうと思うと

「ウワァ！？」

と椿が驚いていてその方向を見ると

撃ちの玄関の扉にザクザクと包丁が付きされていて

「ねぇ椿開けてよ。一真が居るのはわかってるんだから」

っと天野さんがホラー映画も真っ青な演出をしていました

すると、いきなり天野の猛攻が終わり覗き穴から様子を見ると

天野が電話に出ていて聞いた声のある女と話していた（俺の聴力は実は結構すごい）

どうやら風紀委員（ジャッジメント）の水城と組んでいるらしい

てか、風紀委員（ジャッジメント）まで九十九にやられたのかよ・・・

これだから偽善者は・・・

俺は怒りを抑えながらとりあえず一真に電話をかけた

『何用ですか!?』

「今、天野が電話に出るなり退散していったがまさか追われてるのか?」

『葵にじゃなくて涼村って奴に追われてる!!』

一真は一応現状報告をしてきた。

「助けて下さい!!」

『お、落ち着け…。
とりあえず今は逃げ延びてくれ…。
俺に考えがあるから。
じゃあ!!ブチッ!!』

俺はそう言って電話を切った

「おい、一真は大丈夫なのか?」

っと椿が言ってくるので

「あぁ大丈夫じゃない・・・まぁ俺が今から助けに行くから安全さ♪」

っと俺は、椿にそう言って検索を初めた

まずは、九十九の位置の検索をして

それを椿に教え

ついでに九十九の言っていた3人のうち2人は、判明しているが残りの1人が誰かわからなかったので九十九の記憶にスキャンをかけて特定すると

まさかまさかの俺が一番ムカつく人物が居た

「フハハハハハ「ど、どうしたんだ・か、影虎?」ハハハ・・・いや、一真に仕向けられた奴の一人に正直者の偽善者さんがいてさ・・・マジムカつく」

「おい、まて、お前またアイツにあんな酷い事するつもりか?「なにいっての?殺すに決まってんじゃん」はぁ?おい、俺はもうあの時の事は、なんにも思ってない!!だから、もうやめろ」

「椿、九十九の始末は任せた」

俺はそう言って『異世界樹(ユグドラシル)』の枝を死ぬほど曲げて

しなりを利用して一真の居る方向に飛び出した

俺が飛び出す瞬間に椿が何かを叫んでいたが聞きたくなかった

（正直言って椿が許そうが許すまいが関係ない・・あのクソ女は、俺が殺す・・ただ殺すだけじゃなくてアイツの好きな真実で殺してやる！！！）

そう思って高速で飛んでいる時に

「じゃあね♪負導さん♪」

「クッ…。」

ある女が飛び上がって一真に殴り掛かかろうとしている最中だった

（・・・フフ、ほんとうに救いようもないような屑だな・・）

俺は、一真の前に着地して女のこぶしを受け止めた

「待たせたな…一真…。」

「影虎！？」

俺がそう言うと一真は少しだけ喜んでいた

まぁそんなことどうでもいい

俺はこの女を地獄にたたき落とすために来たんだからな

「久しぶりだな…。
剣菱さんよ…。」

「あなた…まさか！？」

どうやら剣菱は俺を思い出したのか驚いて影虎から一歩離れた。

「牙桜…。」

それだけを剣菱が呟くと勇ましく構えるが何処か震えているようにも見えた。
（そうだよ、俺を恐れろ！！俺の前に居る状況が一体お前にとってどういう状況かを思い出せ・・・ん？）

俺がちょっと剣菱から目を離して一真のほうを見ると一真がこっちを見ていて目の前の風紀委員（ジャッジメント）さんに気付いていなかった

「一真！！」

「えっ！？ウワァ！？」

「チッ…。」

一真に氷弾が飛んでいたので異世界樹（ユグドラシル）を地面から生やしてガードした。
そして、涼村から舌打ちが聞こえた。
（これだから偽善者は！！！！！！！！！この女も殺してやるよ・・
いや、もっと面白い事考えた）

「一真…剣菱は任せろ…。
残りの2人は任せたぞ…。」

「んなこと言っても！！
アイツラを殴れるか！！」

俺がそう言うと一真は予想道理嫌がっていた

「んなこと言ってる場合か！！
今は生きることだけを考えろ！！」

「・・・生きることだけ…。」

「それだけを考えて目を瞑れ♪」
「はぁ！？」
「いいから早く！！」

俺は一真が目をつぶったのを確認して一真の懐から何とかの仮面を取り出してそれを一真にはめ込んだ

「ッ！？あ…あっ…。」

どうやら、仮面に浸食されたようですな・・正直言って一真に邪魔されるのが一番やりにくい

「さて、氷の能力者（アイスマスター）狩りさんよ♪
暴れるだけ暴れてこい♪」
「「「ッ！？」」」

俺はそう言って異世界樹（ユグドラシル）を引っ込めた。
するとどうだろう？
女三人とも、俺を見て驚いていた。
ハハハ、そりゃそうかだって目の前に都市伝説2つがそろっていてその二つともが敵にまわってるんだもんねぇ

そして、俺がそう言うと一真は、天野と涼村に重力をかけていた

俺はそれを確認すると二人の横に居た剣菱の顔面にハイキックを決めて一真たち三人から引き離した

「さぁて改めて久しぶり～剣菱麻華さん？」

俺がそう言いながら俺に蹴られて倒れている剣菱は、

「い・・や・・」

っと眼に涙を浮かべながら後ずさっていた

「おい、逃げんなよ？逃げていいのは、この前だけだ・・・俺言ったよね？二度と俺の周りをうろつくなってさ・・なのになんでのこのこと俺の前に現れてんだよぉ！！！」

「グフッ！！グフッ！！」

俺は、地面に横たわっている剣菱の腹を蹴り続けた

「おら、どうしたよ！？さっきまで調子に乗って暴れてたんじゃないのかよ！！それともなんですか？自分より強い奴が来たからって大人しくするんですか？いいねぇ弱者を装っていればみんなから同

情されるもんねぇそれで今こうしてのうのうと生きてんだもんねぇ
!!良い人生だよな!!」

「グッ!!!」

俺は最後の最後で思いっきり剣菱の腹を蹴り飛ばして3メートルく
らい飛ばした

「グ、く、・・ウプ・・おえぇ・・」

剣菱は俺に腹部を蹴られすぎて嘔吐していた

「お前にはその無様な格好がお似合いだよ♪」

俺はそう言ってとっさに錬金術で作り出した切るのでなく潰す刀を
作って剣菱の頭蓋骨を砕こうと振り下ろしたら

急に剣菱が走りだして俺の腹部に泣きながら腹にめり込むパンチを
してきた

俺はそれを避けられずにもろに喰らってしまい体をくの字に曲げて
殴り飛ばされてしまった

「く、あいかわらず、泣いてから強くなるみたいな喧嘩しやがって・
・・クソ女!!」

俺はすぐに起き上がって

吐血して口から垂れている地と唾液の混ざった液体を袖で拭いなが
らそう言うと

「はぁはぁ・・・私はあなたなんて大っ嫌いです・けど、もし自首してくれるんなら・・「俺は今からあなたを喰い殺しま～す。ここに宣言したいと思います」・・・もういい！！悪党に手加減なんてしない！！牙桜あなたを私が仕留める！！」

そう言って俺に殴りかかってきた剣菱さん

俺は剣菱の女の力じゃ考えられない蹴りや拳を全部受け流しながら

「本当に救いようねぇな・・・この偽善者が！！」

「ガァ！！」

俺はそう言って剣菱の顔面を容赦なく殴りつけた

すると剣菱は、フラフラとよろめいた後に地面に吸い込まれるように倒れた

「あれ？正義って言うのは確か悪（俺）に勝つもんだったよねぇ？でも結果は俺が勝ったつまり俺が正義でお前が悪ってことだよ♪」

っと俺は、そう言いながら『異世界樹（ユグドラシル）』を出し剣菱をおきあがらせて

剣菱の頭に手をかざして『異世界樹（ユグドラシル）』の葉を剣菱の脳に直接突き刺し

俺は、剣菱さんの大好きな嘘のない世界という一見楽園にも思える地獄の記憶をメモリーキャンセラーの応用『増設』で今から７２時間もの語られることが禁じられた地獄の記憶を流し始めた

その瞬間、

気絶している剣菱は、

「う、うぁあああいやいやぁあああああああああああ」

っと苦しみ始めたその苦しみ方は、本当に地獄を味わっているかのようなそんな感じだ

（まぁ内容が内容だし苦しんで当然かな♪）

内容は簡単だ

拷問の記憶や死刑執行の記憶死刑された人間の最後の記憶、あそびで人の命をもてあそんでいる人間の記憶などを７２時間ずっと流し続けると言う内容

もちろん痛みや苦しみはリアルタイムで伝わってくる

たぶん、２４時間も過ぎれば精神は崩壊して

ただの生きてるだけの肉の塊になるだろうがな

俺がそう納得していると

いきなり何かが俺の右頬を直撃して俺は、謎の衝撃を殺せず

そのまま、一真の所まで吹っ飛ばされた

その瞬間、剣菱を拘束していた俺の『異世界樹（ユグドラシル）』が消えた

（しまった！？『異世界樹（ユグドラシル）』が）

「てめぇら…なにやってんだ…？」

「「ッ！？」」

等と思っているといきなり忍が私服姿で姿を表した。

しかし、口調や雰囲気がいつもとは違い、物凄い殺意を感じた。

（やべぇ・・・忘れてた・・確かに2年前も忍に止められたんだったよな・・なんでいつもいつもこの女を庇うんだこの女は！！）

「さてと…理由はどうあれ二人とも…噛み殺してやるよ…。」

「「グハッ！！」」

また、忍が高速移動で消えると同時に俺達は腹にもの凄い衝撃を食らってくの字に体を曲げてしまった。

「オラァ！！」

「「ンガッ！！」」

さらに顔面を多分鷲掴みにされて地面に後頭部から叩きつけらた。

俺が隣の一真を見るとリアルで堕ちていた。

ちぃ雑魚が

俺は、そう思いながら俺の顔面をつかんでいる忍の手をどかしてバク転して立ち上がり

目の前でマジギレしている忍をにらみながら

「まいどまいどなんで邪魔しに来るのかな忍さん？」

っとおれがきくと忍は、一真を離して右手でこぶしを強く握りしめながら

「椿ちゃんから電話があってあんたを止めてほしいって言われたのよ。じゃぁ聞くけどあんたはなんで毎度毎度、麻華ちゃんをトラウマを振り切ってまで殺そうとするのかしら？」

っとまじめな口調で聞いてくるので

「・・・・なんで何度も何度もお前に説明しなきゃいけねぇんだよ！！」

「そうね、ならあなたも聞かないでもわかるでしょ私がこの子をあんたから守っている理由！！」

「gぁ！？」

っと忍はいきなり俺の目の前に現れて俺の髪の毛を鷲掴みにして壁にたたきつけてきた

「・・・なんだよ！！そんなに俺の邪魔がしたいのかよ！！忍！！！」

俺は、怒りに埋め尽くされ『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』を混合した枝や根っこで攻撃しようとしたその時に

〜ドクン、ドクン〜

「あ、はれ?なんで?体が・・・髪が長く?まさか!!まさか、忍あんた・・くそくそ!!・・・」

俺は、怒りに身を任せた時ある失敗を犯している事に気がついた

俺の怒りは一定を超えると体に異常をきたし

男から女に入れ替わってしまうということを忘れてしまっていたのだ

俺は、どんどん変わっていく自分の体の感覚に違和感を通り越して苦しみを感じて自分の小さくなっていく体を両手で抱きしめてしゃがみ込んで震えだしてしまった

(やっぱりこの感じは・・耐えられない・・怖い・・怖い・・畜生・・ハメられた・・・)

「く、くそ!!・・おえぇ〜バタン〜」

ストレスが強すぎて俺の脳が耐えきれなくなって体が変に痙攣して動かなくなって地べたに倒れこみ涙が自然に出て来て止まらない・・くそ、自分の体が自分の思い道理に動かない・・・能力も発動しない・・くそくそくそ・・

「どうやら、一線を越えたみたいね・・大丈夫?」

っと忍が剣菱を担ぎながら俺のところに来て俺の顔を覗き込みながらそう言ってきた

「・・・（くそったれが）・・・あ、・・う、・・・（畜生が・・そろそろ演算まで出来なくなってきた・・）・・・」

こうして俺の意識は完全にシャットダウンした

（僕は、・・悪くないのに・・悪いのは・・全部、『アリス』と『ゼアル』なのに・・・）

なんだ今の・・・・

つづく

剣菱麻華（ノンライアー・・正直すぎる偽善者に真実の裁きを・・）（後書き）

『絶対真実（ノンライアー）』

剣菱（けんびし）　麻華（まか）

女

年齢１５

身長１６３

体重のデータは、物理的攻撃により破壊されました

体型　スリムで少し筋肉が付いているアスリート体型（Ｄカップ）

髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒

髪は、椿や忍のように長く腰あたりまである

髪型がちょんまげ風にまとめたサイドポニー

顔が一真に少し似ていて椿にも似ている

服装は、制服か黄色と白のパーカーに黒のランニングに短パン、ピンクの指のところのない手袋（手の甲の所に鉄板がはいっていてメリケンサックになる）

性格は、明るく元気で愉快な性格

ただ、天然でドジなところが多いのがたまに傷だが正義と平和いう言葉が好きで風紀委員になるなど正義感は、人一倍強い

常に笑顔をで接するのがポリシー

戦うときは、キックボクシングの要領で戦う　たぶん、殴り合いでは一真と椿よりは強い。大男を拳で倒せるくらい強い

ただ、約束を破られたり裏切られたりするとマジギレしてボコボコにしてしまうことがあるこの時、本人の意志はあまりない

なぜか嘘偽りに無償に怒りを感じてしまいやりすぎてしまうことが多々

一人称　あたし

能力は、あいてのうそを完全に見抜くことができ嘘を言った相手に真実を無理矢理話させることが出来る。

本気で怒ると気を失い突如翼が生え影虎が使った未知の力が暴走して嘘を付いた罪人を殺すまでか倒されるまで暴れる。これを止められるのは、影虎か一真くらい

恋愛感情は、一真以上に鈍い

好きなことは、トレーニング

苦手なこと

乗り物　家庭課　始末書（史上最多記録の持ち主）子供の相手
好きなもの

あんパン　ホットミルク　子供（不器用なためけがさせる可能性があるのであまり可愛がれない）

昔、影虎（牙桜）捕獲作戦時に風紀委員（ジャッジメント）の一人が椿を人質にとりそれを助けようとしたが誤って椿に殴りかかってしまいそれ以来影虎に殺意を抱かれている。

悪い意味で影虎の心を揺さぶっている人物

以上です。

はっきりと言いましょう重要キャラです♪

身分証明（とても長いので読まなくても結構です。後、キャラの貸し出しは基本

この説明は非常に長いので読まなくても結構です

身分証明（とても長いので読まなくても結構です。後、キャラの貸し出しは基本

桜井　忍

ｃｖ湯屋敦子

性別

もちろん女

年齢

２９

性格

極端　真面目であったり不真面目であったり　子供好き　時々暴走したり　するが悪気はない

年齢について触れられると不良時代の凶暴で凶悪な性格に戻る

いつもは基本的に大人としての対応を心がけている

見た目は、相当美人な令嬢

黒髪で長さは、腰辺り

体格

身長が高く１８４センチある

スタイルは、椿＋身長くらいで抜群である

服装

基本、白衣で居るが私服は、普通に大人っぽい服装を好む（家には、良くわからない服がたくさんある）

職業

医者

過去

昔の姿（１２歳の時は身長１５０で椿そっくりだった）時に学園都市に居た

１２歳の時、父親と大ゲンカをして家出をした家出少女だった。

そして、同じ家出仲間とジャッジメントやアンチスキルやスキルアウトといつも揉めていた超問題児であった過去を持つ

能力

『透明人間（スケルトン）』

透明人間になれる。

好きなもの

子供　お酒　可愛いもの（子）

好きなこと

可愛いもの弄り　弱み集め　飲酒　運転　手術　金稼ぎ

『天気戦争（ウェザークロニクル）』レベル５

雨宮（あまみや）　蓮（れん）

性別　男

ｃｖ三瓶由布子

年齢１０歳

身長１４０

髪の色　灰色

髪型　デスノートのニアと同じ

顔は、将来絶対にイケメンになること間違いなしの母性愛をくすぐるような可愛い顔

体型は、ふつうの小学生

服装　常に黄色の雨ガッパを羽織っており靴も少し長靴っぽい

黒のランドセルを常に背負っている

性格は、無邪気で怖がり　ドS

好きなもの　雨音から聞こえてくる自然の音楽

『天気戦争（ウェザークロニクル）』

強烈な日照、豪雨、落雷、竜巻、絶対零度の冷気など、あらゆる気象や天候、自然現象を増幅して自身の技に転用する。

・冷気…人体も凍らせる程の冷気で凍らせバラバラにする
・風…大きな竜巻で吹き飛ばす。跳ね返されると大変
・雷…びりびりで攻撃。固定もできる。使用頻度が高く割とお気に入り
・熱…触れると火傷する
・蜃気楼…技かわしたり逃げる時に使う
・雨…相手を溺死させる。こちらも固定可能

『光子変化（フォトンオーバー）』レベル４～５

園崎（そのざき）　琉奈（るな）

ｃｖ遠藤綾

性別　女

年齢１４歳

身長１７０

髪の色は、青

髪型セミロング

スタイルの良い美人

服装　黒のレザースーツを着ていてチャックをへその辺りまで降ろしている（正直エロい）

性格は、恋する乙女と究極の暴れん坊

過去は、影虎と同じ孤児院に居てすこしの間だけ影虎と一緒に居た。

好きなもの　影虎

『光子変化（フォトンオーバー）』

光を作り上げる粒子のベクトル量、方向、密度を自在に操作できる。

そのため、光通信に侵入することも可能。また暗闇でも自身の体を発光させて読書をする子ことも出来る。

身体を光子（フォトン）に変化させ高速で動いたり無敵とも言え無くもない身体になることが可能で光速の攻撃が可能。演算能力だけで言えば光子（フォトン）を使用しているときだけ影虎をも超える程の超高速演算が可能

本来なら迷うことなくレベル５のはずなのだが影虎にしか興味がないため能力測定を一度もしたことがない

身体を能力に変化させる『身体能力化計画』の被験者

『神体鋼化（オリハルコンアーマー）』レベル４～５

黒金（くろがね）　鉄也（てつや）

ｃｖ玄田哲章

性別　男

年齢２７歳

身長２００センチ

髪の色　黒

髪型　角刈り

男らしい意味では、イケメン

体型は、マッチョで肉体美が自慢？

性格は、無口

好きなもの　殴り合い　英雄

服装　ボロボロのジーンズに黒のタンクトップ

『神体鋼化（オリハルコンアーマー）』

自分の皮膚と筋肉を『神が与えた最も硬い』金属と言う物質に変化させる金属色は、光沢が眩しいシルバー

防御力が高くこの世に存在するどんな弾丸もとうさない程

力も強くなるため防御力＋金属の重量＋怪力の肉弾戦が得意

琉奈と同じく『身体能力化計画』の被験者

『桜小路　影千代』

ＣＶ小清水亜美

身長１７４

体重４２キロ

スタイルは、良く　胸は椿より少し控えめな状態

髪は、桜色に変色し髪はロングになり結構筋肉質だった身体はどん

どんと筋肉がそげおちてぷにぷにした肉質になって出るところが出てきてひっこむところはひっこんでしまった女状態の影虎

そして、声は、男声とは違いソプラノになっている

影虎のホルモンバランスの不安定が引き起こす発作のようなもの

性別が変わる事により心身ともに変化して別人になる

使用能力『幻想掌握』

記憶消去の人の脳に干渉する能力と彼の矛盾が生ずる錬成を最大限に使ったときに発動できる

能力ではなく災害や現象のようなもの

その現象は、相手が使った魔術や能力を乗っ取り自由自在に操る頂上態になる禁忌の技

嫌いなもの　自分を含めた全部、特に嫌いなもの　椿

北条紗香（ほうじょうさやか）２０歳（大学２年）

身長１７０ｃｍ

体重４５ｋｇ

イメージＣＶ　伊瀬　茉莉也さん（夢喰いメリーの霧島　咲やＮＥ（ニ）ＥＤＬＥＳＳ（ードレス）のアルカ・シルト）

茶髪のロングで白い肌にスラッとした体格。

綺麗な藍色の目をしている。
双子の妹の北条　泪(るい)と一緒に姉妹でモデルの仕事をしており、一時期は姉妹でモデルのランキングで一位と二位を独占したこともある。
次元壊し（ディメンションデストロイ）レベル４のとか言う次元を切り裂いたり壊したり出来る能力
殺傷能力だけの能力である

手加減が困難らしく普段は使いどころがないが覚悟を決めれば誰でも殺せるような能力だ

影虎じゃなかったら間違いなく死んでるだろう

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆
★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

此処からは、とある負極の能力解析のキャラです。

主人公
負導(ふどう)　一真(かずま)
身長　１６９．５ｃｍ
体重　５４ｋｇ
イメージＣＶ　金丸淳一さん（ソニックアドベンチャーのソニック・ザ・ヘッジホッグ）

我が小説の主人公でお馴染みの面倒くさがりキャラ。ボサッとした黒短髪で制服などはだらしなく着ている。
学校の成績は良いのだが、まさかの授業態度で内申を落としていて補習を食らっている。
そして、見かけによらず家事は全て人並みにこなせるため、部屋は片付いている。
家族全員が氷を使う者に殺されており、復讐の為に荒れていた時期があった。
今では、翔也や葵の力があって収まっている。
そして、最大の欠点が当麻以上の鈍感さを持っているため葵や他の女子からの好意を見事にぶち壊している。
ラブレターを果たし状と勘違いするのは、中学時代にモテると言う理由でラブレターに偽装されて果たし状を靴箱に１０回連続で入られた事があるためラブレターを果たし状と疑ってしまい直ぐにゴミ箱行きが決定される。
当麻や葵を何度も助けているためか体が嫌でも鍛えられてしまっている。
因みに酒を飲むと何を接種したのか子供のミニ一真になってしまい、別の人格が出てきてしまう。
本人に記憶はない。

能力解析（アビリティスキャン）
（実名、幻想模写（イマジネーションスキャン））
レベル０（マイナスレベル５）
見た能力や食らった能力を３０分間だけなら少し能力を上げて覚える。
五回見るまたは三回食らえば完全に覚えて日常で使える。
因みに四つ目以降を覚えると忘れたと同時に激しい頭痛に襲われて全て忘れてしまう。

竜王の眼（ドラゴンアイ）

一真に備えられた防衛機能で両目が紫と赤に変色する。
この能力が判断した未来が宿主、つまり一真の死に直面した場合に発動する。
能力は以下の通り。

第零能力
時間逆流（タイムジャンプ）
竜王の眼発動時（ドラゴンアイ）に同時に起きる能力。
自分の時間を逆流する事で自分の体に受けた傷が修復される。
記憶までは影響されない。

第一能力
千里眼
自分で見えていない場所や別の場所にある物が見える。

第ニ能力
演算目視（マインドスキャン）
相手の脳波を読むことが出来るため相手の能力を把握できる。
それすなわち、能力解析（アビリティスキャン）で簡単に覚える事が可能。

第三能力
記憶無視（ゼロメモリー）
自分の記憶を忘れる事が出来る。
つまり、能力を忘れる事が出来る。
しかし、四つ目を覚えている時点で一つ忘れると能力解析（アビリティスキャン）の副作用は発動される。

第四能力
未来予知（フューチャービジョン）

自分に起こる２０秒後までの未来を見ることが出来る。
竜王の眼（ドラゴンアイ）が解除されると意識がある状態で子供の姿にまで縮んでしまう。

天野（あまの）　葵（あおい）

身長　１６０ｃｍ
体重　不明ｋｇ

イメージＣＶ　竹達彩名さん（けいおん！！の中野　梓
俺の妹がこんなに可愛いわけがないの高坂　桐野）

黒髪でスラッとしたポニーテールでＣカップ。
顔は幼く美人では無く可愛いと評判。
服装は丁寧にキチッとしているが、家事は絶望的で食材を炭に変える程。

一真の料理スキルが１０とすると葵は０。
１０＋０＝－１００と言う謎の方程式が出来上がるぐらい。
男子達に告白されているが全員をフっている。
理由は簡単で一真の事が好きだから。
一真に振り向いて貰える為に日々努力している。

重力（グラビトン）変化
レベル３→２
人や物に掛かる重力の負担を上げたり下げたりする事が出来る。
体重に悩む女子には羨ましい能力。

宮方（みやかた）　恋歌（れんか）

年齢　１５歳（中学三年生）
身長１５８ｃｍ
体重４８ｋｇ

イメージＣＶ　堀江由衣さん（化物語の羽川翼　ひぐらしのなく頃にの羽入　うみねこのなく頃にの右代宮　真里亜）

ショートヘアーのそばかすが少しある幼い顔立ちの少女。
しゃべり方は無邪気からドスの効いたような声に変わる事がよくある。幻想御手（レベルアッパー）の主犯者で始めの目的は、無能力者と馬鹿にした能力者に幻想御手（レベルアッパー）を配りの副作用を利用して気絶させていたが、途中で自分に能力が加わっていったり人の負の感情を見て、楽しくなってきて幻想御手（レベルアッパー）を流出させたが、無茶苦茶なプログラム構成をしていたために一真の重力を掛けたストレートの衝撃によって幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）を出現させた際に気を失った。
今は意識を取り戻して、幻想御手（レベルアッパー）のプログラムの流出犯としてアンチスキルに確保されている。

幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）

体長２９０ｃｍ

体重６４０ｋｇ

赤い四本の腕にそれぞれの掌には火、氷、雷、風の球体が存在し、背中には天使と悪魔のような羽根が生えてあり、あぐらをかいて宙

に浮いている。
例えるなら血塗られた女神。
火球、氷弾、放電などで攻撃をしたり、風で相手の攻撃を防いだりする。
宙に浮いているのは重力を遮断していて、羽根はバランスをとっている。さらに、バラバラになったり身体の一部が損傷しても発行する六角柱のコアがあるかぎり元通りになる。

幻想御手改（レベルアッパー悪）

初めの木山春生が作り出した幻想御手（レベルアッパー）の改悪版。
何度か聞くと、レベルが０～３と大幅に上がったりする。
その代わり、代償として気を失ってワクチンプログラム、または主犯者から出てきた幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）を潰さない限りは目が覚めない。
目が覚めたあとは、代償として元のレベルより一つ下がってしまう。
レベル０の場合は当分の間、頭痛に悩まされる。
プログラム構造がかなりめちゃくちゃであるため、強力な威力の何かを食らうと脳波が乱れて暴走して幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）が出現してしまう。

かげみね）　翔也（しょうや）

イメージＣＶ　遊佐　浩二さん（↑ソニックアドベンチャーのシャドウ・ザ・ヘッジホッグ　遊戯王ＧＸの天上院　吹雪）

身長　１７０ｃｍ
体重　６０ｋｇ

肩まである長い髪で整った顔立ち。

性格はテンションは高いが人見知り、しかし友達思いな一面がある。
一真とはひょんなことから友達となり当麻とは昔からの知り合い。
現在は入院している。

能力はなくレベル０

涼村（すずむら）　水季（みずき）

１６８ｃｍ
??ｋｇ

イメージＣＶ　日笠陽子さん（けいおん!!の秋山　澪
これはゾンビですか?のセラ（セラフィム））

風紀委員（ジャッジメント）第１７７支部に所属している。普段はセミロング風紀委員（ジャッジメント）の活動の時は髪を後ろで結んでいる。スラッとした体格だが、自分の体格に不安を感じたりする事がある（Ａカップなので特に胸の辺り）。

美食家で料理などはとても上手で変わった食べ物等を食べたりもする。
昆虫食も平気。
そして、再現して自分で作ることもある。
子供好きで、休日などでは孤児院などにボランティアに行って勉強を教えたり手作りクッキーを渡したりしているため、子供達から頼れるお姉さんと認識されている。
風紀委員（ジャッジメント）の活動では、力付くで解決するのでは無く、話し合いで解決しようとする。
彼女に捕まって再犯するものはおらず、逆に感謝されている。

しかし、その性格上人を疑う事が出来ず、騙された時は酷く落ち込んでしまう。
あと、定期的に歯医者に行っているが治療の時の注射や普通の注射も苦手である。

能力
水態変化（アクアチェンジ）レベル４（レベル５に近い存在）
個体から液体や気体、気体から液体や個体、液体から個体や気体に変化させることが出来、個体にした場合様々な形にする事が出来る。

氷を使う能力者…。
風紀委員（ジャッジメント）…。
色々な意味で一真と影虎からは毛嫌いされそうですね

北条泪（ほうじょうるい）
２０歳（大学２年）
身長１７０ｃｍ
体重４５ｋｇ

イメージＣＶ　伊瀬　茉莉也さん（夢喰いメリーの霧島　咲やＮＥＤＬＥＳＳ（ニードレス）のアルカ・シルト）

茶髪のロングで白い肌にスラッとした体格。
綺麗な藍色の目をしている。双子の姉の北条　紗香（さやか）と一緒に姉妹でモデルの仕事をしており、一時期は姉妹でモデルのランキングで一位と二位を独占したこともある。
波長使い（ノイズマスター）レベル４

悲鳴や叫び声などで相手を吹き飛ばしたり、切り裂いたり出来る。
超音波を発することで暗い場所では現状把握や見えない相手の位置なども把握出来る。
ホラー映画を一緒に見に行った時は気を付けよう。

剣菱（けんびし）　麻華（まか）

歳１５歳
身長１６３ｃｍ
体重４３ｋｇ

イメージＣＶ　川田妙子さん（ソニックアドベンチャーのエミー・ローズ
金色のガッシュベル！！のルシカ）

風紀委員（ジャッジメント）で少し筋肉のついているアスリート体型のＤカップ。
黒髪で右目赤、左目黒のオッドアイ。
ちょんまげのように髪を結んでいて、サイドポニー。
緑色のパーカーに指の所が無い手袋をはめていて、手袋の中には鉄板が入っている。
嘘が嫌いで嘘をつかれて約束を破られたりすると暴れた経験あり。
牙桜大戦と呼ばれる牙桜捕獲作戦に牙桜と戦った経験があり、椿を誤って殴ってしまい影虎からは激しい誤解をされている。

絶対真実（ノンライアー）
レベル４
確実に無理矢理でも、相手の口から真実を答えさせる能力。
嘘つきは泥棒の始まり。
嘘も方便。
ついていい嘘とついてはいけない嘘とありますが、本当についてい

い嘘と言うのはあるのか私は疑っていたりします…。

九十九　高貴（つくもこうき）

ｃｖ神谷浩史

身長１８４センチ

性格　一言で言うなら羊の皮をかぶった狼
髪型　金髪ロン毛
顔は、ホストのような顔
体格は、スリムな体型

『無我夢中（バーサーカーソウル）』

自分から見て１００メートルまでの距離の対象と目を合わせるだけで対象の夢中になる物を選択しそれの夢中度を設定できる。

例
はさみ　１０・・ずっと眺めていたくなる
２０・・・・自分を切ってみたくなる
５０・・・・はさみでなら死んでもいいやとおもえるようになる
１００・・・・はさみを体中に刺して笑って死ぬ

以上

身分証明（とても長いので読まなくても結構です。後、キャラの貸し出しは基本

ではまた

代理人格（表と裏、右と左、影虎と影千代）（前書き）

一週間に居回の投稿タイムです。

今回は、影千代メインのお話です。

代理人格（表と裏、右と左、影虎と影千代）

ここは、病院のとある一室

この部屋では、現在、桜井忍との戦闘中に怒りが爆発して見事に影千代と言う第二の姿になってしまって病院のベッドで拘束されてる上に麻酔を撃たれ眠らされている桜小路影虎

っとその横で怒りを抑えるように親指の爪を噛んでいる

桜井忍が居た

忍サイド

さっき椿ちゃんが来たけど影千代ちゃんに会わせるわけにもいかないし今は、椿ちゃんの相手をしてあげられるメンタルじゃないからしぶしぶ一真君に任せることにした

私は正直言って怒りを抑えられなかった

一真君と影虎がまさか、女の子相手に手加減もしないで殺そうとしていたことに

最近では影虎もマシになってきたかな?って思っていたし

一真君も葵ちゃんを泣かせたくないって言っていたくらいだから力の使い方がわかっていたと思ったけど・・

残念ね・・こんな子たちじゃないと思ったのに・・

・・・いや、これだけは言っちゃだめなことよ・・私にはそんなことを言う資格は無いわね・・

ただ、影虎が目を覚ましたら拷問してでも麻華ちゃんにかけた『増設』を取り消させないと多く見積もっても後、１５時間で脳が死ぬ・・・影千代ちゃんになった影虎に話が通じるかもわからないでも記憶消去は、なんとか消せるはず・・

これだけは絶対に阻止しないと・・・絶対に影虎に麻華ちゃんは殺させない

（早く起きて影虎・・いえ、『エルク』）

私がそう思いながら自分の組んだ両腕に顔を沈めていると

「う、う、ん～」

っと影千代ちゃんが目を覚ましたので私は、すぐに駆け寄って

影千代ちゃんの首にナイフをつきつけながら

「医者としてこんなことはしたくないけど暴れないでね？一つだけ言うは、麻華ちゃんにあんたがかけた洗脳を解きなさい」

私は、強く睨みつけながらそう言った

すると

「えぇ構いませんよ？」

「ッ！？」

っと影千代が私に微笑みながらそう軽く言った

私は、その時の影千代の顔に恐れを感じて後ずさってしまった

そして、私は自分でもわかるほど冷や汗をかいていた

いま、影虎いや、影千代のたった一瞬の一言が動作がしぐさがあまりにもアイツに似ていたからだ

「お～い、ひとつだけ条件なんだけど俺の拘束を直ちに解除してほしんだけど？」

っと影千代が拘束されている両手両足をバタバタさせながらそう言ってきた

「え、でも、」

私は予想していた展開とは百八十度違う展開に冷静な判断力を奪われつつあった

「安心しなよ・・・てか、条件とか言う前に彼女にかけている『増設』は、俺が目を覚ました時にすでに幻想掌握でもみ消したから剣菱麻華は死なないこれで君の願いはすべて叶ったはずなんだけどね？」

「え？ちょっととらどうしたのよ？それにそのしゃべり方・・」

私はもうわけがわからなかった

明らかに影虎がおかしくなたのだけは理解できた

あれほどまで麻華ちゃんを殺すことに執着して椿ちゃんの命令ですら無視しようとしたのにあっさりとその殺意を収めたという事実

「ね、ねぇ聞いていいかしら?「?」今のあんたは・・・誰?」

私がそう聞くと

影千代は、くすくすと笑いながらハハハと高笑いしだし

「やっぱりあんたには、気付かれるんだね?さすがだよさすが、そう、あんたの言うとおり俺は影虎という人格とは違う・・・強いて言うなら俺は、桜小路　椿を恨んだ影虎君が自分を守るために創った人格（幻想）だよ・・名前は気が進まないが影千代で良いさこの姿が俺の姿でもあるからね♪」

私は言葉を失っていた

驚きじゃない

達成感だ

（ようやくようやく、初めて影千代に会ったということ・・それが麻華ちゃんを救った・・なら）

「ようやくあなたの話をすることができるわね」

「？」

私がそう言うと影千代は首をかしげていた

「とりあえず、麻華ちゃんを救ってくれてありがとうこれだけは先に言っておくわ。」

私がそう言うと

影千代は、

「あぁその件に関しては、いつもの俺に言ってあげてくださいよ・・・影虎だって気付いていたんですよ。風紀委員（ジャッジメント）のあの子があのクソ女（椿）を殺す気がなかったって言うことは、記憶消去が使える影虎にわからない筈がない・・でも、もう片方の俺は子供っぽい、それ故に認めたくないんないんだろう・・・たかがあの小娘ごときにクソ女（椿）を殺されかけたという現実にいつもの影虎は、殺意と憎悪と言う形でしか向き合えないんだろう・・相変わらず嫌なことからはすぐに逃げる癖は、俺も影虎も変わらないということか。」

影千代はそう言って目をつぶりながらうんうんっと納得していた。

「あんた、自分のことを客観的に見過ぎじゃない？まるで他人事のようにペラペラ話すけど・・」

私がそう言って近づくと

影千代が震えていたのがわかった

「ど、どうしたの！？」

私がそう聞くと影千代は・・・

「あのさ、本当に早く拘束解除してくんない？トイレ行きたいんだけど」

っとちょっと切羽詰まった顔で言ってきたので

私はちょっとずっこけながらも影千代に装着した拘束具を外したその時、

「実質的に俺は俺なんだよ」

そう言って影千代は、本当にお手洗いにいったけど・・・どっちに行ったんだろう？

この疑問だけは否めなかった

ただ戻ってきた彼？彼女？に聞く気にはなれなかった

「ふぅ・・・いやいや、お見苦しいところをすみませんねぇ」

（そうだ聞いておかなくちゃ）

「ねぇ・・・あんたが出ている間、とらは、どうなっているのかしら？」

これだけは絶対に確認しておかなくちゃ

もしここで影虎の人格が無くなったとかだった場合・・・間違いな

く椿ちゃんは、完全に壊れる・・

「一つだけ言うなら今の俺も影虎なんだよ。ただ考え方や思考、性格や価値観が大きく変わってるだけで俺も影虎だから消えたりはしないさ・・もっと簡単に言うと普段の俺が本能で動き発想が豊かで子供っぽい天才型の右脳タイプだとすれば今お俺は、理性的で紳士的で計画的な大人っぽい秀才型の左脳タイプだね」

（つまり、脳の使い方が変わっているからこうも冷静でおとなしいというわけね・・なら、危険は特にない）

「加害者の俺が言うのもなんだがね・・あまり安心しない方がいい、理性的なったことで麻華と言う女を殺すことは、あまりにも無駄な労力だということがわかっただけで確かに殺意はもうないがあのクソｏｎ・・あの忌々しい女性は、別だよ？「それって椿ちゃんのこと？」そう、彼女の普段の行いには俺も怒りを感じていてね。正確にいえば感情論が苦手な今の俺には、彼女が好きだったという感情が理解できない・まずこのことを理解しておいてくれ。「えぇ」まず彼女の使う魔術、あれは強すぎる。絶対能力者の俺でも本気を出されたら苦しい限りだ。それほどの危険因子を愛しているというだけの理由で生かしておく必要がないと思うんだよ。確かにあの女性は強いさ、だが、今の俺なら簡単に殺せると言うのに殺さないのがあまりに論理的でない。いつ彼女が俺を裏切るかもわからないのに愛だのそんな感情を信じて生きているのが俺としては、苦痛なんだよ・・・それに彼女は一度俺を裏切っているじゃないか・・・・・・全く何もしていない俺を殺したじゃないか。あなたもそばで見ていたんだから知っているはずだ。彼女自身は、断片的な記憶しか持っていないがね。いや、正確にいえば１３年前もっと言った方がいいのかもしれないね♪「ッ！！？え、な、ま？」驚かないで下さいよ・・・〇〇さん「あんた！！」おやおや、怖い怖い、今の呼び方に意

味はありませんよ・・・ただ、なんとなくですかねぇ。」

いきなり影千代になった影虎が椿ちゃんを殺したい理由を丁寧に説明してくれた

あまりにも効率的で人間味がない発言、右脳ではなく左脳を使った影虎

感情に頼らない分、融通が効かないと言ったところかしら・・・

そして、この子は、この子が本来知らない筈の私の名前を呼んだ

もう絶対に呼ばれることのないと思っていた呼び名

そして、その反応に戸惑っている私を見て影千代は完全な作り笑いで微笑んでいた

（おそらくこの子は今の状況で私には勝てないと理解しているから出来る限り私を怒らせないように対処しているんだわすべてこの子が作り出したプランと人間の感情の揺れを見て的確な反応をとる・・・・影虎の本性と言うべき思考パターン）

「まぁ基本的に今の俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』に嫌われていて記憶消去も使えず『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』も使えないあるのは、幻想掌握と今の俺だけにあるレベル０の特技だけ・・・正直どう頑張ってもあなたには勝てませんよ。こんな非力な体じゃ極めてね・・・今回は、何もせずに寝ますよ。元に戻ったら起こしてください。その間ずっと右脳の俺をなだめておいてあげますから・・おやすみ「ちょっと！！」・・すぅ・・すぅ」

「・・・相変わらず寝るのは早いわね・・・」

私は思わず呆れてしまった

でも、今回は怪我の功名だった

影虎が影千代になった時には、必ず暴れると言う状況が無くなり

私の思い道理に麻華ちゃんを助けられて椿ちゃんへの被害もゼロ

今日は吉日ね・・・・

ふっと気が抜けた私は、その場で寝てしまった

忍視点の終わり

影虎?視点

俺は、気絶してから目覚めた記憶がある

その記憶があることが現在目覚めた俺には、最悪の気分だった

(なんだよ、さっきのしゃべり方・・・俺らしくなさすぎる・・・・

・それにしても理論的になった俺のせいで・・麻華を殺す理由が本

気で無くなった・・悔しい・・認めなきゃなんないのが悔しい・・

ただの怪力女に出し抜かれたという事実は変わんねぇのに)

「はぁ~・・・それにしても俺が言っていた13年前って何なんだ

?自分で言っていて意味がわからない・・忍~起きろ~」

「・・・・・」

俺は、一応忍に聞いてみようかとも思ったが隣で眠っていらしゃった・・・

（う～ん、暇だな・・正直に言うとさっきの俺の言うとおり右脳型の俺が左脳型の影千代の体で能力を使うのは難しいな・・・能力って言うか脳力？）

俺は、隣で椅子に座ったまま俺の現在座っているベッドに持たれて寝ている忍を見てどうしようかと悩んでいた

この体になると能力と言う能力を一つも使えなくなる使えるのがこの姿になって2分間だけ・・短い

（本当に暇だな・・・でも、椿の所に行ったら間違いなく殺しちまう・・・最近こんなんばっか・・環境の変化が大きな理由の一つだろうけどな・・ただ、一つわかった事は、ストレスをため続けてこの姿になるよりも定期的にこの姿になった方が衝動は圧倒的に少ないってことか・・・適度なストレスは適度なは発散で・・か、どうやらいつもの姿よりこの姿でいることだけでも相当なストレス発散になっているのが分かる・・・・もし、自分の意思でこの姿のオンオフを付けられれば・・完璧だ。もう、人間の発想じゃないが俺にはふさわしい。今度、ヘブンキャンセラーにでも相談しようかな？）

俺はそう考えてベッドから立ち上がって入院患者の着る服から自分の服に着替えた

背が少し低くなっていてなぜかウエストなどが細くくびれが出来て

いてズボンがブカブカになっていたりなぜかある胸にシャツが引っ掛かって変な声が出たりなど赤面オンパレードだった

たださすがにコートを着ていると何かと絡まれる確率がなぜか高いので学校の制服上下で病室を出た

ただ、以前は、椿に言っていたのだが病院の出口付近の鏡を見て一言思った

「女の体で男物の制服は、ちとあぶねぇな・・何がやばいかって俺自身があぶねぇよ!!」

っとなぜか鏡の自分にそう突っ込んでしまった

そして、我を取り戻して周りを見てみると

病院の看護師さんたちや診察に来ていた患者さんたちは、おそらくこう思ったであろう

『なぜ、あのピンク色と言う変わった髪の色をした長髪長身モデル体形女は、下着も付けづに男物の制服を無理やり着てその姿を鏡に映して突っ込んでいるのだろう・・』っと

俺は、その場から一目散に撤退した

眼には少し涙があふれていたが気にしない!!

気にしちゃいけない!!

(だって仕方ないじゃん!!服これしかないし!下着なんか持って

るはずないだろうが！！そして、ピンクの髪も忍に負けず劣らずのスタイルも俺が望んだモノじゃないやい！！第一俺は男なんですよ！！そりゃ性別今見たいに変わるけど心は常にＭＡＮ（男）ですよ？）

っと心の中で叫びながら病院からできるだけ離れた

そして、とある公園のベンチで必死に息を整えて公園に備え付けられていた水道で水分を補給していた

「ごくごく・・プファ〜キュキュキュ〜生き返った〜・・自分の体力忘れて走り続けてたらそりゃ死にかけるわな・・奇跡的にたどり着いたのが公園でよかった・・・ん？」

俺は、水を飲み終わって一息ついていると

え〜とサッカーボールを持った幼稚園くらいの男の子３人と女の子３人が朝っぱらからなぜか活動しているガラの悪い高校生から大学生くらいの茶髪だの金髪だのピアスだのタバコだのの５人組に物凄く怒鳴られていた

「コラクソガキ！！人が親切にしてやったんだから金よこせって言ってんだよ！！お前らにボール蹴り返した時に足折れちまったんだよ」

（えぇ！？カツアゲ？）

「ちょっとボール取ってくださいって言っただけじゃない！！いっつもいっつも絡んで来て！！そんな暇あるんなら働け！！」

っと一人の気の強そうな女の子が男の足を蹴ったそれなりの威力でジャストなところを

「イッテ～・・{ぴょんぴょん}お前らこのガキ達締めちまえ！！」

っと蹴られたボスらしき男が眼に涙を浮かべけんけんしながらそう言った

すると周りにいた男の一人が小さな男の子の顔面を容赦なく蹴った

そして、倒れた男の子を先ほど自分より大きな男の足を蹴っ飛ばした気の強い女の子が庇おうとしたその時、蹴られたリーダらしき男が鉄パイプを部下の一人から取り上げて

「親なしのガキの癖に生意気なんだよ！！」

っと鉄パイプを振り上げたので

俺は、全力で走った

そして、ガァンっと思いっきり背中を鉄パイプで殴られた

「グ、ググ」

俺は、とっさに男の子をかばっている女の子を庇って殴られてしまった

影千代の体ではやはりダメージが大きく下唇を噛み締めて痛みを必死にこらえていた

「な、なんだよ・・お、お前」

俺を殴った男は、俺が睨むと少しだけひるんで後ろに一歩また一歩と下がり部下の４人の後ろ辺りまで下がった

「ぐ、コンニャロウ、こんな小さなガキに絡んでるなんて同い年のみんなが泣いてるぞ？てか、スキルアウトはいつから幼稚園児に絡んで金銭を踏んだ来るなんてチンケナ事するようになったんだ？」

つづく

代理人格（表と裏、右と左、影虎と影千代）（後書き）

以上です。本日中にもう一作を投稿するつもりです。

ではまた

朱唇皓歯（影千代状態での初めての外出）（前書き）

本日二回目の投稿です。ではどうぞ

朱唇皓歯（影千代状態での初めての外出）

「ぐ、コンニャロウ、こんな小さなガキに絡んでるなんて同い年のみんなが泣いてるぞ？てか、スキルアウトはいつから幼稚園児に絡んで金銭を踏んだ来るなんてチンケナ事するようになったんだ？」

っと俺は、背中の痛みを必死のこらえながらスキルアウトにそう言うと

「て、てめぇなめてんのか！？・・・あん？おい、みんな、この女よく見りゃ相当上ものだぜ。こいつ拉致ってお楽しみと行こうぜ♪ゲヘヘ」

っと気色悪い笑みをもらしながら俺のことを見てくる変態一匹

（うわ、マジでキモいよこいつ・・・まず第一に俺男だし・・ただ、こいつら五人を相手にするとして今の俺の非力の体でどう相手する？いつもなら頑固つひとつでノックアウトできるが今のこの見ただけでも華奢だってわかる腕じゃいつもの威力で殴ったら俺の腕が使い物にならなくなる・・てか、よく女の体で忍もあの怪力女もあれだけの力出せるよな・・・話がそれた！！・・・いま、俺にあるのは、腰に挿してある女性の護身用を意識した「Ｍ３６レディ・スミス」１丁（この間椿から取り上げた奴）と弾丸が計５０発と最強の拳銃ダブルアクションリボルバー、Ｍ５００１丁と弾が５発・・・Ｍ５００は撃てねぇよ・・いや、マジで勘弁してくださいだな・・なら、最後の手段でＭ３６で行くかまぁどっちの銃も時代遅れなんだけどね）

俺がそう考えていると

「ピンク色のお姉ちゃん!!」

「ハッ!!」

っと気の強い女の子が大声で叫んでいて

(ピンクのお姉ちゃん?誰それ変わったあだ名をつけられた人もいるもんだな・・・あれ?俺の現在の髪の色って・・ピンク・・俺だ!?)

俺は、その声に少しだけ悩んで周りを見ると

スキルアウトの一人が俺の胸倉に手を伸ばしていた

気持ち悪い顔しながら・・・・

(いやいや、男の胸見てにやにやすんなこの・・)

「変態野郎!!」

俺は、すぐさま男の手をつかんで引っ張り左手で男の髪の毛をつかんで下に抑えつけるように力を入れて右ひざを男の顎に突き出して顎を蹴りあげてやった

顎を蹴りあげられた男は、口から血を吹いて倒れた

それを見た男たちは、突如武器をとって構え出した

ほとんどが鉄パイプなどの鈍器

「おい、チビっ子達、俺の後ろから動くなよ?一応守ってやるけどあんまり期待すんなよ?俺って見たとおり華奢だからさ♪」

「「よそ見してんじゃねぇ」」

っと二人の男が鉄パイプと金属バットで殴りかかってきたので俺は、身体をそらして鉄パイプを避けて

もう一人の男の振り下ろしているバットを避けて男の持ち手を上にあげ

金属バットの先端を上から威力を加えるように押さえつけて

梃子の力で男の持っていた金属バットの持ち手が男の手から離れうまい具合に男の顔面に命中して男は倒れバットは、カランカランと地面を転がった

そして、俺はそのまま、横で鉄パイプを振り上げ直している男に今と同じ方法を使って倒した

するとリーダーらしき男が腰あたりをあさりだした

(警棒か?まぁたいていの武器でもたいしょくらい〜グィ〜な?)

「よっしゃつかまえたぞ〜個性的な髪の色した姉ちゃん」

俺がちょっとよそ見していたときに男の部下が後ろに回り込んでいたのだろう

後ろからいつもより長い髪を引っ張られそして、男に後ろからはじろいじめにされ持ち上げられてしまった

「離せよこのクソ野郎！！」

俺は、必死にジタバタしてみるもやはり男女の力の差は歴然・・ほどけるわけもなかった

「へへへ、男勝りの女てのも身ぐるみ這いだらどうなるんだろうな♪可愛く喘いでくれるのか？」

っと俺を抑えている男が下品に笑った

（はぁ～・・・椿が男が嫌いって言う意味がわかった気がする・・・なら、俺が男みせねぇとな♪）

「おいおい、どうしたよさっきまでの威勢は？おじけづいて声も出ねぇか？それにしてもこの女、さっきから男を誘ってるかっこしてるよな？「まったくだな」よし、この女裏に運んでやっちまおう」

っとリーダーが俺の脚を掴もうとしたそのタイミングを狙って俺は、男の右目に蹴りを食らわせた

右目をジャストミートで蹴られたリーダーは、右目から血を流して苦しんでいた

すると俺を抑え込んでいた男が俺の首を絞めようと一度拘束を解いたので

俺はそのチャンスを生かして

くるりと男に向き合って男の喉仏の部分を思いっきり殴った

しかし弱かったのか一撃では倒れてくれず俺に殴りかかってきたので

俺は男の大きなこぶしを流れに乗って受け止めて男のこぶしの威力をそらした

すると男の拳は、折れ曲がり手首の骨が折れたそれに加えて俺は男の手を思いっきり引っ張ったので

ベギンっと男の肩が外れた

「うがぁあああああ畜生!!!なん名だこの女!!!」

っと必死に自分のめちゃくちゃになった腕をもう片方の腕で押えながらうずくまっている男がそう言った

「ふぅ何とかなっちゃた・・ん?・・・ボタン飛びやがった・・俺は露出狂じゃねぇぞおい!!」

っと制服のボタンがほとんど飛んでしまい上着制服一枚だった俺は、正直言って危ない人仲間入りの格好をしている現状・・泣かないよ?

別に羞恥心はそれほど・・・ないと言えば嘘になる・・・

(まぁとりあえずさっき蹴られてた男の子が心配だな)

俺はそう思い俺の後ろで怖がってかたまっていた子供たちのところに行こうとした時

「くぉんのぉ糞女！！！！」

っとリーダらしき男が立ち上がって腰から拳銃を抜き俺に向けてきたので

俺は、男を流し眼で見ながら腰に刺してある拳銃に手をかけたその時・・・

「はいはい、ガキがそんな物で遊ばないじゃんよ」

「はぁ？なに〜ギリギリ〜イテテテ〜ひょい〜グフ」

俺が男の脳天を曲撃ちで撃ちぬこうとしたら

いきなり警備員の格好をしたジャンジャン星の姫君こと黄泉川愛穂さんがリーダーらしき男の手首をひねってさらには軽く放り投げていた

さすがは、警備員・・・戦い慣れてるな

俺は、その一部始終を見終えて後ろのほうに居るガキどもの所に行こうとすると

ガシっと肩を掴まれた

俺は、後ろを見てみると

黄泉川さんだった

「あんたが子供をかばって男どもに絡まれてるって通報があってきたんだけど案外大丈夫そうじゃん」

っと大丈夫だってわかってるんだったら離せよ!!って言いたかったが我慢した

「え、えぇと大丈夫ですから離していただけませんか?」

っと一応ていねいには言ってみたが

「まぁそうはいっても背中結構キツそうじゃんそれにその格好は、さすがに狼（男）どもに襲ってくれって言ってるも同じじゃんよ?とりあえず一度警備員の事務所まで来てくれじゃん?服とかかしてあげるから」

っと言ってくるので

「悪いが俺は、死んでも風紀委員（ジャッジメント）にも警備員（アンチスキル）にもお世話になる気は無いんでね・・・それにあんたも気づいてるんだろ?さっきから俺の腰にある拳銃と俺の手を気にしながら話してるけど・・」

俺がそう言うと

「へぇ自覚あるじゃんよ。一応あんたは、強姦未遂の被害者ってことになってるから保護という形でその腰にぶら下げてる物については、お話しするつもりだったのは認めるじゃんよ。」

っと俺の肩を未だに離さない黄泉川

これ以上、ごちゃごちゃ言うつもりならこの女の体に鉛玉をぶちこ

もうと拳銃に手をかけたその時、

グイっとズボンを引っ張られたのでその方向に視線を落してみると

「あ、お、お姉さん・・そのありがとう」

っと気の強そうな女の子が照れくさそうに礼を言ってきたので

俺は毒気を抜かれて拳銃から手を離して腰を落として女の目線に合わせて

「あの・・信じれれないだろうけど俺って男なんだよね・・だからお姉ちゃんて言われると微妙な・・・え?何その眼?黄泉川まで?」

俺がそう言いかけると女の子やそのほかの子供たちそして、黄泉川さんまで

なぜか俺の体を一通り見渡して首をかしげながら

「「なにいってのこいつ?」」

見たいな目で見てきた

そして、女子三人は、男子三人の目に眼つぶし

(痛そう・・・ていうか眼つぶしって酷くない?・・まぁ大丈夫そうだし俺はどこか行こう・・・)

俺は、後ろを向いて走り去ろうとした時にやっぱり受けたダメージが大きかったのか

いきなり体の自由を失って土面に倒れこんじまった

「お、お姉ちゃん大丈夫？ねぇ」

っと女の子が俺を揺すっているが身体が全く動かないし

好きでしてるわけじゃないがさらけ出した胸やらが砂利に擦れて痛い

「こらこら、ちびっこ達、倒れた人を無闇に揺すったらだめじゃんよ！！ちゃんと安静にしなきゃ」

っとちびっ子たちを止めた黄泉川・・・今だけは助かる

「君たちは家に帰りなさいこの子は、私が連れていくから」

（じょ、冗談じゃねぇ誰が先行に加えて警備員の女に世話にならなきゃいけねぇんだ？）

「く、あ、いい、お、れは、アンチ、スキルの世話にはらねぇよ」

っと出来るだけ強がって立ち上がろうとしたがフラ付き隣に居た黄泉川に支えられてしまった

「世話にならねぇとはいってもあんたどう見ても普通の格好じゃないじゃん！家近いの？」

（・・・現在リアルに家なし状態ですが何か？）

「今日はここの公園で野宿の予定だ・・・」

俺がそう言っていると

パシャっと何かのフラッシュが光り俺と黄泉川は、目を細めた

すると

「糞女共が！！今てめぇらの顔写真とったからな・・これからは後ろに警戒するんだな・・それに俺たちのバックには、風紀委員（ジャッジメント）やアンチスキルも手を出すことができない都市伝説になられたお方・・『牙桜』が居るんだ。」

そう言ってさっきの男たちは、走ってどこかに消えた

黄泉川も追いかけようとしていたようだが

俺の肩を支えているため走れなかったようだ

「あの餓鬼ども・・・こんどあ・・・」

俺は、右手を大きくあげて怒鳴ろうとしたが完全に力尽きた

（よく考えたら俺って朝昼晩・・2日何も喰ってねぇよ・・・・）

・・・・

・・・・・

・・・・

気を失ってからどれくらい経っただろう・・・

やばい、腹が減り過ぎて死にそう・・・

ん?あれ?なんだか良い匂いが・・

うまそうな・・・

「飯の匂い!!♪」

俺は、死の淵から飯の匂いによって呼び戻され起き上がると

「・・・・・?」

なんだか見たこともない部屋のソファーらしき場所で薄地の毛布のようなものをかぶせられ上着には、シャツが着せられていた

「・・・・・・・・・・・・・・ここ何処?」

俺が首をかしげていると

ズキ「いて!」・・背中の後ろが痛み出して恐る恐る触ってみるとシップが貼られて包帯が巻かれていた

俺はそれを確認していると

ガチャっと部屋の扉が開いて

ぞろぞろと先ほど助けてあげたちびっ子どもが食器やらいろいろ持って来た

すると奥から大きな鍋を持った黄泉川ともう一人、セミロングの一

般的な美人に含まれる見た感じ良いとこのお譲さま女性が同じく鍋を持って入って来て

「目が覚めましたか?今日は本当に家の施設の子供たちを助けていただいてありがとうございます。でも、そのせいでお怪我をなされたとか・・お怪我のほうは大丈夫ですか?勝手ながら処置をさせていただきましたけど」

っと物凄く礼儀正しく甘ったるい声で言われてびっくりした

「キャラがそのまんまだ・・・え?施設?ここってなんかの施設なの?」

俺が胡坐を組んで両手を胡坐の内にいれながら楽な姿勢でそう聞くと

「はい、楠の里という児童保護施設を営なんでいます♪わたしは、園長の里中圭子と言います」

っと甘ったるい声で丁寧にお辞儀までされたのでさすがに俺もお辞儀した

すると、

「頭を上げてください、あのその豪華では無いんですがこの施設の夕食でよければ一緒にお召し上がりませんか?」

っと再び甘ったるい声で言われ周りの子供たちも物凄い期待の目を向けてきて

なんでお前が居るんだよ黄泉川が俺の耳にボソッと

「一つだけ忠告じゃん・・断ったらたぶん圭子さんも子供たちも泣くかんね」

っと言われたが腹の減っている俺に選択地は無い

「ぜひぜひ、ご馳走になりたい所存です！！！」

っと元気よく言うと

みんなが喜んで準備を始めていて手伝おうかと言うとみんなに止められて

無理に動こうとしたら黄泉川に背中を思いっきりたたかれ戦闘不能になった

「じゃみんないただきます」

っと甘ったるい声で言うと施設の子供たち１０人が

「「「いただきま～す」」」

っと全員手を合わせて言っていて

俺は、腹が減っていて作法とか構ってられなかったので食べようとしたら再び黄泉川にバンっと背中をたたかれた

「痛い・・・てか、なんでお前まで一緒に食べてんだよ黄泉川・・」

「そういや本当に今さら何だけどさあんたなんでうちの高校の男子

用制服着てるの？それに私は名乗った覚えはないじゃん？言いたくなければ言わなくて良い」

っと言われて俺は、言葉を失った

（あ、まずい・・まじでうかつに話し過ぎた・・・どうしよう・・）

その後はとにかく無言でうまいご飯を食べ終えて

今回はきっちりとご馳走さまをして圭子さんと子供たちがかたずけをしているときに

「な、なんであんたは、俺にそこまで執拗に絡んでくる？」

「あんたが変な奴らに服脱がされ掛けててそれをあたしが助けたけど助けたあんたは、銃刀法違反してたから放って置くに置けないじゃん。しかも、気絶してても銃だけは離そうとしないし・・・それにあんたのそのしゃべり方とか不陰気とかがうちの学校の問題児に似てるじゃんよ。だから、放っておけないじゃん。それにあんたが絡まれてたやつらは、スキルアウトの中でも下種の集まりとかスキルアウトの悪ガキ達の間でも謙遜されてる連中だ。結構人数が多くて執拗に絡んで来て実は結構の数の子供や女の子や女性が被害に遭ってるんだ。暴行から略奪そして、性犯罪、あたしたちアンチスキルも本来ならすぐにとっ捕まえたいんだけどね・・奴らがハッタリで『牙桜』がバックに居るって言いふらしてその話をアンチスキルの大人たちのほとんどが信じちゃってるんだよ・・そのおかげでビビってる奴が多くてさ・・「都市伝説『牙桜』か・・」まったく、2年前に風紀委員（ジャッジメント）の子たち全員が牙桜たった一人に負けたって言う事実からあたしら大人までビビってるなんて情けない話じゃんよま

ったく。でも、あんたは絶対に守ってやるじゃんから安心しろよ♪
それにしても『牙桜』がスキルアウトのボスなんかになるわけないのにさ・・」

(黄泉川の野郎、何か知ってんのか?牙桜のこと・・いや、そう言えば忍と知り合いだっけ?まぁかんけいねぇな)

「ご馳走になったしそろそろ「どこ行く気じゃん?」さっきの公園「あんたあたしの話ちょっとでも聞いてた?」あぁ女子供が集中的に狙われるんだろなら俺は大丈夫だ。俺は男だからターゲットにあらずそれに『牙桜』がバックて言ったって現に初代牙桜はとっくに引退してる。あんたの言うとうり奴らの言っている牙桜は、偽物だ。本物の牙桜は、きまぐれで人助けはしてもスキルアウト達とは絶対に組まない・・・牙桜とは、スキルアウトどもの頂点でありながら抑止力だ。権力とは戦っても無害な弱者には手を出さない」

俺がそう言って立ち上がって施設の玄関から出ようとすると

「まってまってお姉ちゃん」

っと先ほどのちびっ子の中で気の強い女の子が俺のズボンのすそを掴んでひっぱって来て

何かを言いたそうにしていたのでしゃがんで聞いてみると

「これあげるね。みんなで作ったんだ♪」っと腕に本当にみんなで作りましたな感じの装飾がバラバラのブレスレッドにもなって髪止めにもなるビーズとゴムのミサンガ?を腕に巻いてくれた

「別にいいのに・・・まぁありがたく頂こうかな♪」

俺はそう言って笑顔で立ち上がった

すると気の強そうな女の子は喜びながら門のほうで子供たちと遊んでいた圭子さんの所に走って行った

「ちょっとこの子のお誕生日が近いケーキ買ってきます。」

っと気の強そうな女の子の頭をなでながら甘ったる声でそう言って門を出て歩道を歩いて仲よさそうに歩いて行った

俺もそろそろ帰ろうと門を出ると再び黄泉川先生に肩を掴まれた

「も～う～な～ん～な～ん～で～す～か～」

っと本気でだるいので文句を言ったその時、グォオオオオンっと白いバンが物凄い速度で俺と黄泉川の前をとおり過ぎた

本来なら危ない運転しやがるって済んだだろう

かすかに見えた車の窓に必死に暴れて抵抗しているほんの少し前に施設を出て幸せそうにしていた女の子と男に無理やり押さえつけられていた圭子さんだった

（まさか、あいつら施設の前で張ってたのか!?）

「ちぃ〜カチャ〜」「撃つな!!」なに?離せ今なら・・」

俺が腰から拳銃を出してバンのタイヤを撃ちぬこうとしたら黄泉川が銃口の目の前に立ったので撃てずに白いバンは、射程範囲を超え

て曲がり角を曲がってしまった

（おい、なんでじゃましやがるんだ？）

「てめぇ何舐めた真似してんだよ！！」

俺は、黄泉川の胸倉をつかみ上げて怒鳴った

「いま、俺が撃っとけばあの二人は、ここで助かっただろ！！」

「あんたね、今助けたらあたしはともかくあんたは、常にこの施設の子たちを人じちに取られることになってもいいわけ？この事件はあたしら警備員にまかせてあんたは、この施設にいな。大じょうぶジャンよ。今犯人の写真や車のナンバーは、監視カメラで抑えたじゃん。現行犯てことでやつらは、あたしがきっちり捕まえてやるジャンよ♪牙桜だって絶対に捕まえて更生させてやる。だから、あんたは、ここにいな」

そう言って黄泉川は、すぐに来たアンチスキルの車に乗って仲間と一緒にスキルアウトの犯人を追いかけて行った

（・・・不憫だねぇ・・・この姿じゃまともに能力も使えないし魔術に対しては、皆無・・・でも、牙桜が関係していることも俺が助けたためにあの女とあの娘が巻き込まれたことも全部が俺の責任だ・・・さ～て、果たしてここで俺の取るべき行動は・・・怒りに任せて暴れて結果的に2人を助け出す・・これしかねぇな♪）

俺はそう考えて近くに止めてあった鍵を刺しっぱなしのバイクを盗んで黄泉川たちが行ったであろう道を走った

朱唇皓歯（影千代状態での初めての外出）（後書き）

もう一度だけ投稿するかも知れません

まだ、影千代状態は続きます

男耕女織（兵士が影虎、策士が影千代、二つの姿で桜小路影虎）（前書き）

影千代編終幕です

ではどうぞ

そしてしばらく走っていると

「ん？あれってさっき黄泉川が乗ってた車？」

俺は、少しづつ速度を落としながらその車を見るとガラスが全部割られていて側面のほうが放火されたようで黒焦げになっていた

「だが死体が無いところを見るとうまい事脱出したようだな・・・ん？これは持っていこう」

っと確認して車の中からあるものを持ち出して再びバイクを飛ばすと

急に視線を感じるようになった

そして、狭い道の角をとおり過ぎようとしたその時、

「うぉおおおお」

「グゥ！？〜ガッシャ〜ン〜」

っと横からいきなり髪は茶色、服装はジャージの上に下はジーパン。

鼻にピアスをしているのが特徴の男がとび蹴りをかましてきて

俺は対応できずその蹴りをきれいに脇腹に喰らってバランスを崩しこけてしまった

「ぐ、なんだよいきなり・・スキルアウトか？」

俺は、転げ回った挙句に壁にぶつかって痛みを我慢しながらもヘルメットをとって状況を確認した

「え？予想外の女？しかも巨乳で美人で可愛い！？」

すると俺にとび蹴りをした男がどうやら顔を地面にぶつけたらしく鼻血が出ていた

いや、なぜか普通に顔が赤いし眼がキモい・・・・

俺はすぐさま、自分の格好を確認したがTシャツがボロボロで正直危ない格好になっていた

（・・・毎回思うがこの姿の時、俺って服から嫌われてるのか？逆ラッキースケベチャンスが多い気がするんですけど・・ん？他にも仲間が来やがったか？）

「おい、あっちの奴らは、駒場の旦那がかたずけたぞ浜面・・え？なにお前サボってナンパしてたわけ？」

「ちげぇよ半蔵アイツらかと思ってとび蹴り食らわせたら予想外の女だったんだよ」

「それで襲おうとしてたってわけか？てか、無理やり服を破るなんてお前、そう言う性癖だったんだ・・」

「・・・浜面・・性犯罪はノーだと言ったはず」

俺と謎のチンピラが向かい合っていると黒い服のゴリラのような体格で鬼のような顔をした男いや、昔俺が叩きのめしたことのあるスキルアウトのリーダー駒場利徳（こまばりとく）と半蔵と呼ばれた男があるいてこちらに来た

そして、ゴリラのような男は、右手でこぶしを作りながら浜面と呼ばれた鼻ピアス男を殴ろうとしていた

「頼むから話を聞いてくれ!!なぁあんた、俺は何もしてないよな」

っと切羽詰まったチンピラ男が俺に助けを求めてくるので

「こ、この人です。私の服を無理やりにがそうとした人は!!」

「チョマジ!!ぬぁあああ」

俺は、とび蹴りされたことを恨んでいたのでいやがらせのように予想外に出たか弱い女声で男を呼びさしながらそう言うと

男は、ゴリラのような男（駒場）に殴られていた

駒場は、結構硬派で性犯罪は、嫌いな男だったからうまい事、利用して

俺は、騒ぎのスキに抜け出してビルの屋上に向かった

すると思った通り

俺がとび蹴りされた周辺でスキルアウト同士の抗争が行われていた

たぶん、駒場率いる組織が最近あまりにも目立った動きをするあいつ等を放っておかなかったってわけか

（・・・フフ、ハハハ、こいつは良い駒場の組織を利用するだけ利用しまくって駒場に勝たせてあの二人を連れ戻し警備員を利用して奴らの組織を根元から食い殺す。そうと決まればまず駒場一派の連絡網を手に入れなきゃな・・まずは、さっき黄泉川の車から押収した小型無線機を利用して警備員どもを操作させてもらおう♪）

この後俺は、警備員どもに黄泉川の声色（音痴な俺から予想外に出た！！）を使ってビルの屋上から見下ろしている状況で的確に指示を出しまくって応援を要請したり引き際になったら引かせたり駒場の組織の人間にだけあわないようにしたりそして、ドサクサにまぎれて駒場の部下のケータイ電話を奪取し現状況を味方を装って追求し偽の状況を教えてそこの向かわせ奴らの逃げ道を封じ叩きのめさせた

混乱と言う状況を俺は好きなように利用して駒場一派には、被害がほとんどなく警備員どもは、ヤツらの逃げている奴らを捕まえさせ奴らにとってはまるで駒場一派と警備員が手を組んで自分たちを根絶やしにしに来たと誤認するだろう

俺の本来の能力の真相『侵攻と支配』という思考回路からすればこの程度の情報操作は簡単だ

俺が屋上のドアの上で無線とケータイを使って攻撃していると

いきなり屋上のドアがバァンと開き俺の下を二人の人質を連れた１０人くらいの男たちがゾロゾロと逃げてきてその後ろを少し怪我しているであろうアンチスキル２人と黄泉川が走ってきた

「畜生!!こんな時に限って駒場の野郎が攻めてくるなんて!!どうなてんだチキショウ!!」

っと朝、俺に右目を蹴られたリーダーが銃を先ほどさらわれた施設の女の子に向けていた

そして、その横に居る部下は、同じくさらわれた施設の園長先生を人じちにしてアンチスキルを威嚇していた

「もう、諦めるじゃんよ?その人とその子を離すじゃんよ?〜ズギュン〜」

「黄泉川さん伏せて!!」

っとスキルアウトの一人が発砲したので盾を持ったアンチスキルの男が黄泉川の頭を下げさせた

(ふ〜ん、人質が居て手を出すに出せないって状況か・・・俺が銃を持った奴らの頭を撃ちぬいてもおそらくたすからねぇしこの姿で殴りかかっても人質は、たすからねぇ・・・ほんとに無力な身体だな・・ん?いや、ちょうど今で3日だ♪ただ今からは、俺様の逆襲タイムってところかな♪)

俺はふとケータイ電話の日付と時間を見て微笑んだ

俺はおそらく勝利の女神に激愛されているんだろうこうも都合が悪い状況でそのハンデすら全く気にすることのない力を取り戻したんだからな

そう、俺は、いつもの桜小路影虎、正真正銘の牙桜、学園都市第０位『異世界樹（ユグドラシル）』の
使い手のいつもの怪物の姿に戻れたのだ
俺はそれがあまりに嬉しくて人質を無視して飛び出した
「な、なんだあいつは！！」
っと焦ったスキルアウトが俺に一斉に銃口を向けて発砲してきたが
俺に攻撃しても俺は、ダメージを受けない
俺は、不死身の体に加えて相手の撃った銃弾に手を伸ばして
その銃弾が手のひらにあったった瞬間
頭の中で『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまとわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』っと復唱し
俺の手に当たった銃弾を銃に錬成し直して
その銃で俺を撃っている男の両膝に当たったと同時に溶ける銃弾をぶちこみ
銃を撃ってきた一人を撃破してスキルアウトの集団のど真ん中に入り
手当たり次第に殴りつけた
奴らも抵抗はしてくるものの女状態の俺にすら負けた奴らが今の俺に勝てるわけが無い

一人ひとり的確になぐり倒して

残ったのは、女の子を人質にとって銃を女の子に向けているリーダーらしき男一人だけだった

「な、何もんもんだよてめぇ・・」

っと銃を強く女の子の顔に当てて俺に向かってどなってきた

「・・・俺様は、ただの牙桜だよ『孤独な傍観者』〔パチン〕」

俺は指パッチンと同時に俺に対する認識をこの場に居るアンチスキル、女の子、そして、スキルアウトのリーダーに出来なしくした

「な、きえやがグブｒｙファァ」

俺がリーダーの記憶から消えたことでリーダは驚いて銃を女の子から離したので俺はその状態のまま

リーダーの腹部に思いっきり蹴りをかまし身体がくの字に折れ曲がった時に男の髪の毛を鷲掴みにして

引っ張り男の顔面に影千代状態で受けた屈辱や女扱いされた時の悲しかった感情をすべて怒りに変えて殴り飛ばした

俺に殴られた男は、弧を描きながらアンチスキルのおもに黄泉川のところまで吹っ飛んだ

「えなに?何が起こったじゃんよ?」

黄泉川は、俺が殴り飛ばした男をきちんと捕まえながらも急に消えた俺に驚いているようだ

俺は、その後、女の子と圭子さんが警備員に保護されてビルを下りて行くのを確認して

俺もビルを下りて家に帰ろうと路地裏から出ようとしていた

（・・・とりあえずくっそったれな不良組織は壊滅したな・・元の姿に戻ったことだし帰るか♪一宿一晩の礼はきちんと返したし・・〜グイグイ〜え？）

俺は、誰にも認識されなくなっている状態でいきなり服を引っ張られたので間抜けな声を出してその方向を見ると先ほどの気の強い女の子が俺の姿を眼でしっかりと捕えて俺の服の裾を掴んでいた

「え？d、どうしたんだ？」

俺は思わず話しかけてしまった

すると女の子は、

「さっきは、助けてくれてありがとう・・違うね昨日と今日も助けてくれてありがとうね。お姉ちゃんじゃなくて本当にお兄ちゃんだったんだね」

っと俺の服を強く引っ張りながらなぜか目を輝かせている少女

（今の俺は人識出来ない筈だし第一俺はさっき影千代に関与したす

べての記憶を消したはずなのにこの子は完全に俺のことを覚えている・・・まさかな・・・・・）

「・・・」

「どうしたの？」

「いやちょっとな・・・やっぱりか・・・フフフ、すげぇな」

「え、なに？」

俺が無言で女ん子の額に手を当てていたので女の子が疑問を抱いていたが俺のその瞬間、この女の子の脳に俺の能力をリンクしたそして俺の能力としてのツリーダイアグラムを使用して演算をし一つの事実が発覚して驚くべき事実が判明した

俺はその結果から思わず笑みをこぼしてしまった

俺のことを確実に認識しているこの子は、完全に原石だった

しかも、その能力と言うのがＡＩＭ追跡に匹敵するくらい奇妙な能力

『他人の能力に干渉してその力を倍々的に増幅させ暴走させる』

名付けるなら『無理心中（ブレインバースト）』

という能力だろう

俺の能力が効かないのは、この子が俺の能力に知らずのうちに干渉していて俺と同じ能力の中での上位個体（使用者）に設定されてい

るからか・・

（見た感じこの子は自覚がない見たいだけどこの子がその気になれば俺の能力をこの子が使用して世界中の人間が死んでもおかしくないんだよな・・おそらく統括理事会か学園都市の裏の人間はとうにこの子のイレギュラーには、気が付いているのだろうな・・　素養格付（パラメーターリスト）のせいで　・・）

「いや、唯君の力は、おそらくこのまま放置しては、大変な事になるんだ「え?私能力なんてないよ?」なら、正直に言っておこう君は、本来なら後、５年もすれば君は、レベル５に到達するだろう「嘘?」本当、でも君の力にみんなが気付いたら君のいる施設のみんなにも被害が起こるだからこそ君は力を発揮しない方がいい・・・ちなみに君は俺の能力が通用しないかなりの特別な存在だからサービスで君が将来入れられるであろう学園都市の負のプランを根本から消し去って置いてあげよう・・・このブレスレッドのお礼としてね『削除』開始」

俺はそう言って女の子・・今さっき記憶を読んだところ名前が桜坂八千代ちゃんだった（影千代に八千代・・似てる）・・・この能力に今度は俺が割り込んで俺の能力を強化し八千代に関する裏世界での情報を消し去った

「え?今のなに?頭の中にいろんな・・・〜ガシ〜」

どうやら八千代は俺の能力の副作用にやられて気を失った

俺は倒れそうになった八千代をきれいにキャッチして静かに彼女を施設に届けて

帰路に就いた

（フフ～ン♪いやはや、まさかたまたま助けた施設の子供が予想外の掘り出し物の天然のダイヤ・・今日は気分がいいかもな・・・下手すれば利用価値がある・・・まぁ子供を利用したとか言ったら椿に殺されるかもな～でも、学園都市の裏に利用されるくらいなら俺に利用された方が得策なのは変わりないんだよね♪）

俺がなどと悪知恵を働かせていたら俺の腕に巻かれたブレスレッドがジャラジャラと音を立てていたのを見て思わず毒気を抜かれてしまい

「やっぱ俺もあの能力の事は忘れておこう『削除』開始・・・」

俺はそう言って自分の中の記憶を少しいじくって忘れた

それで良いと確信して・・・

（さぁて椿に久々に手料理作ってもらおうかな♪）

俺はそう言って笑いながら家に帰った

つづく

男耕女織（兵士が影虎、策士が影千代、二つの姿で桜小路影虎）（後書き）

以上です。影虎の椿以外に対する優しさの現れですね。後は、圧倒的なハンデを背負いながらも影虎の勝利は変わらないんですよ。『異世界樹（ユグドラシル）』を使わずとも影虎は戦えるんですよね。

最近感想が全然来ないので出来れば出良いんで気軽に感想ください

ではまた。

夜動朝静（ワーウルフ（狼男）ＶＳユグドラシル（影虎）死なない怪物と死ねない怪物

一週間に一回投稿の時間です。本日は、数本同時投稿です。

感想ください！！

ではどうぞ

夜動朝静（ワーウルフ（狼男））ＶＳユグドラシル（影虎）死なない怪物と死ねない怪物

現在は早朝、学園都市での大々的な体育祭、大覇星祭を前日に控えた朝

学園都市で唯一のレベル６の『異世界樹（ユグドラシル）』。桜小路影虎は、早朝から病院で現在、冥土還し（ヘブンキャンセラー）と呼ばれる医師にある物を手渡されていた

「影虎君、正直言って君の発想は、人間が思いつく案とは、程遠い案だよ。」

っと影虎にある物を渡した

「いやぁいきなり頼んで急ピッチで作ってもらって悪いね♪」

そう言ってあるものを手渡されそれを開けた影虎

そのあるものとは、デジタル腕時計であった外枠のボタンにＣｈａｎｇｅ　と書かれたボタンが１２時の所に１つ付いていて外枠が回転する仕組みになっていた

ただ普通のモデルとは違いメーカーすらどこの物か誰にもわからないようなモデルで時計のデジタル液晶には、時間と日付、そして、心拍数、心電図、そして精神的ストレッサーを数値化したものが詳しくデーターとしていた

「では、試運転としてとりあえず〽プチ、ガチャ〽くぅ・・ちぃ・・グッ・・はぁ～」

っと腕時計に装着されたボタンを押しながら外枠を１２時の所から１時の所まで回すといきなり苦しみながらもなんとか実験が成功して現在女になってしまっている影千代・・・？

「まさか、本当に成功するとは・・・自分で作っておいてなんだけどそのシステムは、君だからこそ有効の技術だよ・・・ストレスを取り除いたり緩和する機械は存在しているがストレスを一瞬だけ爆発的に増大させてその後で静寂を制御する機械なんて本当に君にだけしか役に立たないよ。」

「いやいや、そんなことないよ・・まぁ俺のホルモンバランスが感情にそのまま制御されている人間なんてまずいないしね♪それにもう一つ試したいことがあった」

影千代が笑顔で再び腕時計を操作しようとしたその時、

「悪いがね、男から女にはいつでもなれるが君の今姿から元の姿に戻るためには、君が今、回した時間、つまり一時間は、もとに戻れないよ。「えぇ！・・やっぱり無理だったの？」むちゃを言わないでくれ・・３日間を１時間に縮めただけでも褒めて貰えるだけの功績はあると思うがね」

っと影千代の腕を掴んで制止させそれでいて、つかれた表情のまま影虎にそう言い渡すカエル顔の先生

実は昨日から徹夜で作ったとか何とか・・・

「う～ん・・・そうだ、このシステムのついでに頼んだ『本命』については、出来ましたか？俺が考えて考案した技術を組み込めま

した？」

そう言って疲れているカエルの先生をほったらかしにしてテンションの高い影千代がそう言うと

カエルの先生は、その言葉を聞くと影千代の耳に小さな声で

「『全脳機能』装置については、君の技術が完璧だと証明されているよ。まぁその代物も人間とは明らかに違う脳の構造を持った君にしか使用できないだろうがね♪」

っと言った

するとそれを聞いた影虎は、くすくす笑いながら腰かけに体重をかけギィギィ言わせながら

「いやぁそれはうれしいな～男と女の変化に加えて右脳左脳の変換そして俺の脳だけに存在いている未知の構造の未知の部分を使用することによって脳をすべて活動させる装置は、今度試してみようじゃありがとうございました。」

「・・・お大事に」

何かを納得した影千代は、スタッと椅子から立ち上がって病室からカエルの先生に後ろ向きに手を振りながら出ていった

そして、病院から出た影千代状態の影虎は、晴れた空を見上げながら

周りで大覇星祭の最後の準備に取り掛かっているまじめな学生たちを見て

（ふぅ～ん、大覇星祭ねぇ・・・まぁ俺には縁が無いものさ・・・ん？）

両手をポケットに入れながら歩いていると突如、影虎のケータイに着信があって

影千代状態の影虎は、思わずその電話い出てしまったのだ

「はい」

影虎が思わず出てしまった電話の相手は、

『え？誰？女の子？まさか、とらったら他に女の子を「なんだよてめぇかよオ・バ・サ・ン」あぁん誰だてめえ！！今からそっちに言って身グルミ剥いでやろうか！？』

「きゃ～ごめんなさ～い（機械よりも棒読み）口が滑っちゃって～（スワヒリ語）」

『・・・え？何？何の冗談？もしかして、影千代ちゃん？』

「そうだよ変態」

っと冷たく言い放つ影千代

そして、電話の相手が影千代だと知った忍は、平静を装いながらもロープなどを持って暴走しやすい影千代を捕まえる準備をしていた

そして、今、まさに現在地を聞き出そうとしたその時、

『あぁそうそう、今の俺は、椿に直接触らない限りは、殺意をコントロールできる装置をヘブンキャンセラーに作って貰ったから捕獲に来なくても良いぞ？』

先手を撃たれた忍は、どうすることもできなくなりとりあえずロープなどは、ロッカーに直して

椅子に座って話を聞くことにした病院の忍

『つまり、あんたは、影千代ちゃんになった自分をコントロールできるのね♪』

そう言って電話越しにクラッカーをパァンパァンっと鳴らして

２秒後には、「桜井先生！！病院でいったい何をやっているんですか！？」

『あ、ごめんなさ～いじゃ切るわねブチ』

っといきなり電話を切った忍に呆れながらも影千代状態の影虎は、裏路地ではなく表の大道理を歩いていた

そして、歩くこと３０分、ようやく自分の家のあるマンションにたどり着いたものの男に戻れるまでの残り時間が１０分ほど残っていて

玄関の前でうろうろしている影千代

（この腕時計で衝動を抑えているとはいえ椿に直接会ったら俺自身どこまで抑えられるのかがわからない

・・・後、1分くらいか・・ちょっと家に入ってすぐに外出てみるか）

「悪い子はいねぇかぁ～！！！」（精一杯のギャグ）

っと拳を作って親指を立てその上に顎を置きながらよくある考えるポーズをしながらそういう決断を出して勢いよくドアを開けたその時、

「「え？（はぁ？）」」

ちょうど椿も出かけようとしていたのか帽子を被り明らかに男装をしていて玄関で靴を履工としている真っ最中で影千代を見た椿は、驚いて尻もちをついて

「え？な、なんで、影千代が？影虎は？いや、いやぁあああああ」

っと後ずさりながら途中で止まり怯えて泣き出してしまった

それもかなりの大声で泣いていて

そのとなりでは、あたふたしてどうして良いのか本当にわからないという状態になっていた

「あのさ、あのさ、そんなに怖がらなくても・・」

「うぇえええんうえぇえええええんうぁあああん」

滅多に見れないマジ泣き状態の椿に影千代は、

（もう、早く元に戻れないかなぁ！？）

っと思っていたが

それほどまでに誰もいない状況で部屋に影千代と二人っきりと言う状況は、椿にはとても耐えられない状況で椿自身がもうなぜ泣いているのかが理解できていなかった

・・・そして、過ぎること１０分

「エッグ！グス、なんでぇ・・そんな悪戯・・・するんだよぉ～グスッうぇえええん」

「ほん、とぉ・・・にごめんなさいｏｒｚマジでごめんなさい！！ちょっと影千代をコントロールでいるようになって調子に乗ってました！！お許しください！！泣かないでください」

っと現在ソファぁの上でまだ少し泣いている椿の横で男に無事戻れた影虎は、地面に強く強く頭を擦りつけながら本当に全力で謝罪していた。

「グス・・・絶対に許してやんない！！」

っと眼に涙を浮かべながら物凄く怒っている椿

現在彼女の周りには、たくさんの熱すぎる炎の蛇がまるで彼女を守るように徘徊していてすべての蛇が影虎を睨みつけていて仮に何かの合図があれば影虎は、たくさん咬まれて一瞬だけだが消し炭になるだろう

その状況にもかかわらず影虎は相変わらず殺されることよりも愛想を尽かされることより怖がっている影虎

（うぁ～マジで怒ってるよ・・・それになさっきから椿の周りを飛んだり動いたりしている蛇の目が明らかに俺を獲物としか見てないよ・・・こんなことならあそこで１０分間、粘って置くんだったぁ～）

そう思いながらも床に正座で背筋をぴちっと伸ばしながら許してもらえるのを待っている影虎

すると、突如、椿が立ち上がった

その瞬間影虎は、殺されるなぁ・・っと思い眼をつぶっていたが

いつまでたっても熱くもなく痛くもなかった

そして影虎が目を開けると

椿が目の前に立っていて

「本当に反省してるんだな？「はい？」・・なら、謝罪としてこれ買って♪」

っといきなり椿は、テレビを指さしてそのテレビで流れていたＣＭは、車のＣＭで最新の技術を使った最速のスポーツカーが乗っていた

「E？お前、このマンションの駐車場を８割も支配するほどの車を保有しているのにかかわらずまだ欲しいの？「うん♪」・・え～・・

と君の前の職業は、修道女だった気がするんだけど」

「へぇ～嫌なんだ？」

「・・・・・・・・滅相もございません」

・・・・・・・そして、時は流れて3時間後・・

本当に車を購入させられた影虎とコレクションが増えて大満足な椿

その二人は、満月がきれいな夜空を歩いて帰宅しようとしていた

その時だ

「「グルルルル」」

周りからゾロゾロとよだれだらだらの牙むき出しでものすごく怖い顔した狼さんが２０匹近く俺と椿を取り囲むように現れたのだ

「な、なぁ影虎「・・・かわいい犬じゃん」はぁ？どう考えても狼だぞ？犬じゃないぞ？ていうか学園都市って狼なんていたのか？そもそも日本に狼っているのか？」

っと横でかわいい犬発言している影虎の横で慌てている椿

「「グゥゥゥゥァウ！！ウァウ！！」」

「ハハハ、『一緒に遊んでくださいお姉ちゃん♪』だってさ♪」

「いやいやいや、明らかに食い殺すぞ！！って言ってるだろ！？」

狼が一斉に吠えだしたので影虎の馬鹿な脳が狼たちの威嚇をファンタジーに変換したので椿が思いっきり突っ込んでいた

その瞬間、

「「「ウァアアアアアアアアウウ！！！！」」」

っと２０匹の犬（狼）たちが一斉に襲いかかってきた

「え？」

突然のことで椿はうまく反応できず炎が出せてなかったが一番予想外なのが影虎の顔である

物凄くうれしそうな顔をしていた

しかし、影虎の半径１０メートルの範囲に入った瞬間に狼たちは一斉に怯え出し距離を取り始めた

そしてその様子を見た椿は一瞬ほっとしていたが影虎は、悲しがっていた

「やっぱり俺は、動物に怖がられる体質なんだろうか？なのに蛇にだけは、嫌われない・・・泣きそう」

っと落ち込んでいる影虎の横で

椿が一匹影虎の気にかかり動けなくなった狼の額を見て

「う～ん、この狼たち魔術で操られてるみたいだな・・見た感じ北欧神話に関係する魔術のようだが・・」

っと冷静に判断していた

その時だ

何かがビルの屋上からダッと黒い毛皮を野性的に羽織った小柄の男が飛び降り

椿にめがけて両手両足に着けた金属製の爪のようなものを振り下ろした

「しねぇえええ！！」

ザシュっと言う音とともに真っ赤な鮮血が満月の夜空に噴出した

「ちぃ！！いきなり何しやがる」

っと背中を5本の鋭い爪でひっかかれた影虎が怒鳴った

影虎は、とっさに椿をかばう形で前に出て背中をひっかかれたのだ

「じゃますんなや！！その女は、わいが殺すんや！！やいやい、クロス積年の恨み俺が貼らす！！！」

っと関西弁と言うより大阪弁でしゃべる黒髪のスポーツ刈りの見た感じ白人の男が両手を地面について４足歩行の生き物のように構えながら吠えていた

「だれ？」

っと椿が首をかしげながらそう言うとワイルドファッションの男は、プルプル震えていた

「・・・・・・あのさ、とりあえず思い出してあげろよ？なんか積年の恨みとかどうとか言ってるから多分・・魔術師時代のお前の知り合いだと思うよ？・・・・」

「・・・・・・・・ん～ん・・」

「「・・・・・・・・・」」

「あぁ～「「おぉ！！」」誰？」

「「ぬぉおおおお」」

椿が一生懸命、悩んでいてなぜか影虎と謎の男が空気を呼んで待っている状況で椿が何かを思い出したような素振りをしたので期待した2人だが思ただのおもわせぶりだったので二人は仲好くずっこけているという敵味方関係なしの共同作業と言う滅多に見れないシュールな画面が其処には遭った

「おいおいおい！！！いくらなんでも忘れたってなんやねん！！！最低でも覚えとけよ！！」

「なんかお前とこいつの間で因縁がありそうなフインキじゃん！！忘れるって結構酷いよ？この子が可哀想だよ！？俺涙誘われて痛さじゃなくてこの子があまりにもかわいそうで涙出てきたよ」

「・・ありがとうなほんまにおおきに！！今だれって言われた時に正直俺、気づ付いて涙が出かけてた」

「そうかそうかそうだよな。忘れるなんてひどいよな！！この鬼！！」

「そうやそうや！！因縁の相手を忘れるなんて最低やぞクソ女」

っとなぜか二人で肩を組んで椿を指さして怒鳴った二人の男

そして、指を刺されて怒鳴られた椿はと言うと額に青筋を浮かべ鬼のような形相から

突如笑顔になって

「・・・・・・・・それは悪かったな」

っと笑顔で良い声で言い残して右手を夜空に掲げた

その瞬間に２０匹ほどの狼たちが俺と狼ファッションの男に襲いかかってきた

「また、ワイの狼たちを手なずけおったな！！！ぎゃぁあああ」

「ちょおま！！狼手なずけたの！？痛い痛い痛い！！ｈｅｌｐ　ｍｅ！！」

などとお互い椿に突っ込みながらも狼に噛まれたり追いかけまわされたりして１０分間が経過した

そして、現在は、無傷の影虎と同じく無傷の狼ファッションの男が気絶させた狼たちの横で殴りあっていた

「うおらぁあああ」

「なめんなや！！」

っと影虎が渾身の一撃のファンタジーな威力のパンチを男の顔面に食らわせると殴られた男はのけぞりながらも影虎の顔面に回し蹴りを決めお互いに2メートル近く後ろに飛ばされてしまっていた

「「はぁはぁ・・・こいつ～微妙に強い・・」」

っと互いに汗を拭いながらそう呟くと

隣で一匹の狼の上に座っている椿が

「おぉ～い、影虎とっととガジルを倒して帰ろうぜ・・」

っと疲れ気味の様子でそう言ったすると

「誰のせいでこうなってると思ってるんだ！？お前が魔術師時代にこいつの使役してた狼たちを手なずけて奪ったせいでこいつが必要な時に狼を呼べなくなって酷い目にあったという悲しいストーリーのせいだろうがこのガジル君何も悪い事してないじゃん！！おわぁ？この野郎！！！」

影虎がよそ見しながら目の前の狼ファッション男改めガジル君の記憶を読み取って椿のことを恨んでいる理由を知ったがどう考えても椿が悪い内容なので相手方に何も言えないで戦い続けている影虎

そして、昔、魔術師時代の椿に狼たちを取られてその次の日に戦いとなりまともに戦えず酷い目にあった

北欧地方の魔術師『ガジル』の戦いはどんどんヒートアップして来て

「おい、お前!!「なんだよ?」お前は、そこの女の男かいな?「うん」つまりお前は、意地でもその女を守りたいちゅうわけやな?「あぁ」フ、えらいホンマもんの男がおるもんやな~お前気に入った♪だから、お前がワイを倒せたらその女がしたことを無かったことにしたる。だから、全力で来いや!!」

っと影虎に言って男はいきなり月を見た

その瞬間、小柄の男の体がどんどん膨れ上がり2メートル越えの巨体になり体中から毛が生え出して顔の形がどんどんと人間から離れて犬っぽくなり始めた

「・・・椿さ~ん!!!あれなに?ねぇなに?」

っと影虎は焦りながらガジルを呼びさして尋ねると

「あいつ、狼男に関する魔術を完成させてたのか・・・影虎気をつけろよ。そいつ・・」

「ウァオオオオオオオオオオオオオオ」

椿が話そうとしたその瞬間に狼の遠吠えとともに影虎の左腕が消し飛んでさっきまで影虎の前に居たはずの狼男が影虎の真後ろに居て狼男の口元には、たっぷりと血液が付いていた

「はえぇな・・おい！！狼男君」

「・・影虎、狼男の特徴の一つとして不死身と言う話がある・・「銀の銃弾で死ぬんじゃなかったか？」実を言うとその設定自体が映画とかだけの設定と言う話がある」

「マジで！？不死身とかズルくない？」

「お前が言うな・・てか、腕早く治せ」

っと影虎が驚きながらそう言うと椿は呆れながらも腕を直させた

「ほう、お前も不死身とかそういう口か？」

「あぁそんなとこだよ・・・椿離れてな「なんで？」久々に『異世界樹（ユグドラシル）』との融合やってみる。化け物には化け物で挑むのが俺のポリシーだ。」

影虎がそう言うと椿は、狼にまたがって距離を取った

その瞬間、影虎は、頭からケテルの王冠を出し背中からは、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を１４枚出し体中からは、『異世界樹（ユグドラシル）』のとげが飛び出していて手の甲からは、ユグドラシルの枝の刃がまるでウルヴァリンの爪のように生え身体の皮膚の部分には、『異世界樹（ユグドラシル）』の鎧を纏い影虎の体中からまるで花粉のように粒子となった『異世界樹（ユグドラシル）』が物凄い勢いでまき散らされ神神しくすらある化け物に変化していた。

「それがお前の本気かいな！！じゃぁ始めんでぇ！！！」

と巨大な狼男になったガジルはそう言って再び高速で動き影虎の顔面を儂掴みにしようとしたその時

「ａｂいｏｂｈｊｉｚｅぜｈｆｏｈｗｏｈｐｈｊ速効３ｕｊｏｊ９９ｕｉｐ終ｍｈｉｅｗｙｗｂｙｉｇｃｈｙｗｖｊ　ｂｂｉｂｃｌｂ！！」

っととても人間には、理解しがたい謎の言語？または叫び声の様な言葉で呟くと

狼男状態のガジルの目の前に居たはずの影虎が消え、正確には、そこに居たはずなのに居なくなった瞬間移動でも高速移動でも無く１から０になったそんな感じで

「！？」

「いや～悪い悪いちょっと力の使い方を忘れててさ・・・とりあえずこれでどうよ？」

狼男が驚いて硬直している間に影虎が上空に逆さまに表れ狼男がそれを見た瞬間に狼男の体から『異世界樹（ユグドラシル）』の枝がまるで狼男をサボテンにするように飛び出し狼男の体を内部から串刺しにした

「ぐぁあああ！！！・・・・なんや、いきなり体の中に変なもんが・・」

「ハハッハ、手品の種を紹介すると現在も俺の体から大量に放出されている粒子みたいのあるじゃん？これって実は、『異世界樹（ユグドラシル）』の種なんだよね～だからうっかり吸い込んだり皮膚に付着するだけで・・・『異世界樹（ユグドラシル）』が根を張って育つんだぜ♪「畜生動かれへん！！」

しかし、狼男ってのは本当にタフだな～ふつうの人間なら間違いなく気絶してると思うんだけどな・・ただ、お前が全力を出せって言ったからｎｕｕｂｙｖｗｔｖした・・ｃｂｋｅ　ｖｋｂｏｖｖｉｖｖｕｖｖコホンコホｐン、俺の全力のほんの一つまみを披露したんだが終わっちゃったかな？」

現在体中を内側から貫かれて動けずにいる狼男に影虎は、上空から逆さまに睨みつけて笑っていた

ひどく気分がよかったのだ。自分がちょっとでも力を出せば他人は、一撃で倒れてしまうので一撃で終わらないというこの状況は、骨のある奴に出会えたという一種の仲間を見つけたという感覚を味わっていたからだ

そして、影虎は突如、狼男を拘束していた『異世界樹（ユグドラシル）』を枯らし狼男を解放すると

真上から逆さに見下ろすのをやめ地面に足を付けると翼をすべて折りたたんで

「掛ってこいよ。狼男、さっきのは一番初めに背中をひっかかれた分だからここからは、バトルと行こうや」

影虎がそう言って手をクイクイっと動かして挑発すると

「・・・お前根っからバトルマニアかいな？ええでええで♪、おもろいわ、乗ったるわ、実はなワイも本気出せ言うとって本気出して無かってんだから見したるわ・・・うぐぁあああああああああ」

っと狼男は、さらに巨大化を果たし

まるで怪獣映画に普通に出てきそうなほど巨大で口を開くと上顎と下顎が天と地まで開きそうで、目や鼻や口から炎が吹き出している超巨大怪獣?的な大きさの狼へと変身した

この狼を使う魔術師『ガジル』の使う魔術は、大きく分けて二種類ある一つ目は、狼たちと会話し使役する主従系の魔術と自分の体を伝説上の狼の形に変化させる魔術である

そして、はじめは、狼男と言う北欧神話に登場する化け物の姿に変化し強人的な肉体と素早さを手に入れていた。ただ、北欧神話には、狼男よりも恐ろしくそれでいて強大な力を持った狼の怪物がもう一匹いた

その名も『フェンリル』オーディンと呼ばれる神に一対一で挑んで勝ったと言われる怪物中の怪物である

「ハハハハハ、どうや、ワイの本当の姿は?これが全知全能の神を飲みこんだ怪物の姿や」

っと超巨大怪獣になったガジルは、周りのビルに前足を置いて踏みつぶしていた。

(おいおい、なんで超能力者の町で超巨大怪獣が出てくるんだ?・・・まぁいいどうやら人払いの魔術は既に使用されてるみたいだし俺も好きなだけ暴れられるって寸法だぁ)

「いいねぇさすがの俺様もここまでデカイ化け物と戦うのは初めてだ!!ｃａｍｅ　ｏｎ『異世界樹(ユグドラシル)』たしかお前は魔術師だったよな

？俺の魔法名は、ｖａｌｅｔｅ＋０００（さようなら、永遠に）」

そう言って影虎は、上空からフェンリルにも負けず劣らずの学園都市そのものを飲み込めるほど巨大な『異世界樹（ユグドラシル）』を呼び出し超巨大『異世界樹（ユグドラシル）』の幹から１００門に近い砲塔を現出させすべての砲塔を超巨大狼に向け自分の魔法名を大声で言った

「ほう、それがお前の全力か？えらいたいそうな力やのう？学園都市の能力者って言うもんは、こないにすごい奴ばっかりなんか？もしそうならローマなんとかが学園都市を敵視しとるっちゅうのんも納得やな・・・ほな行くで！！！ワイの名は、ｌｕｐｕｓ３３４（狼（ルプス）は、孤独を恐れない）！！うあぁあああおおおおおおおおおおお」

そういって超巨大怪獣は、はるか上空に居る『異世界樹（ユグドラシル）』の中心に居る影虎に足から炎を出して空を駆けて超巨大な『異世界樹（ユグドラシル）』に襲いかかったその瞬間、『異世界樹（ユグドラシル）』は大きく傾きつつも空中に留まって巨大な狼の体重を空中で支えていた

「ウグゥゥゥゥゥガァウウウウ」

っと必死に『異世界樹（ユグドラシル）』の幹に噛みついてその中心に居る影虎を引きずりだそうとしているその瞬間に『異世界樹（ユグドラシル）』が大きく動き伝説上の大木の枝と弦がフェンリルを縛りつけ始め動きを防ぎ始めた。しかし、フェンリルとなったガジルもただ縛られはせず『異世界樹（ユグドラシル）』の拘束を必死に引きちぎろうとしていた。フェンリルは、鎖を引きちぎることでその恐怖をさらに増大させた怪物で自分を縛りつけるものを引きちぎるのは専売特許である

（・・・俺の『異世界樹（ユグドラシル）』とここまでまともにぶつかって来る怪物もすげーちゃすげーがこれでどうだ！？）

そう言って影虎は現在、『異世界樹（ユグドラシル）』の幹に噛みついて暴れている狼に目掛けて１００門もの砲塔から『竜王の波動』を一斉照射した

「うあがぁ（なんや？）？」

狼がそう言った瞬間に狼の体は、桜色の光の爆発に巻き込まれその巨体は、大きく吹っ飛び学園都市の遥かかなたにある海に落ちた

（どうださすがに応えたと思うぜ？・・・マジかよ？まだ向かってくるのか？・・よし！！）

影虎が『異世界樹（ユグドラシル）』の内部からガジルの様子を見ると超巨大な狼は、ボロボロの状態ながらも何とか海面から抜け出して影虎のいる『異世界樹（ユグドラシル）』に向かって空を駆け始めた

その瞬間に『異世界樹（ユグドラシル）』が強く輝き先ほど影虎が披露した粒子をあり得ない濃度で撒き散らし始め超巨大なサイクロンのようになっていたそして、その粒子の渦に巻き込まれた巨大な狼は、流れに逆らえず遥か上空に吹き飛ばされた

そして、フェンリルに変身したガジルが見た光景は、先ほど大量にまき散らした粒子を『異世界樹（ユグドラシル）』の天辺の龍の形をした砲塔に急速に収束しその塊を自分に向かって撃った光景だった

その時影虎が言った

「これがオシリスの時代にまで自分を無理やり落とした俺様の本気の５０パーセントだ♪」

っとそして撃たれた超巨大な高エネルギーの塊は、ガジルに当りガジルの体は消し飛んだ

その威力は、地球上の雲の動きを大きく変えるほどの威力だった

・・・

した

その後、家に帰った影虎は、

「ただいまぁ・・・・あれ?椿さん?怒ってる?」

「あのなぁ・・いくらなんでもあの暴れ方は無いだろう?巨大怪獣対巨大植物の戦いなんてもんをリアルで拝めるとは思わなかったわ!!」

「ちょっとまって俺は現在、大量のサラマンダーを目の前にしているのですがぁあああああああああああああああ」

この後、やり過ぎという名目で椿に3回も焼き殺された影虎であった

その後の影虎の一言

「自分からおいしそうな焼き肉の匂いがする・・グス」

っと涙を流しながら自分が燃えた時の煤をきれいに掃除している姿がそこにはあった

つづく

夜動朝静（ワーウルフ（狼男）ＶＳユグドラシル（影虎）死なない怪物と死ねない怪物

今回は少し長いです。

『ガジル＝シェパード』

黒髪のスポーツ刈りの見た感じ白人の小柄な男

黒い毛皮を野性的に羽織ったワイルドファッション

両手に金属製の爪のついたアクセサリーをしている

大阪弁で話す

過去に椿に狼を取られたことで椿を恨んでいる

ただ、基本的には、良い奴

魔術

主に北欧神話の狼に関する魔術を使う

不死身の狼男になったり狼を使役したりする

最後の手段のフェンリル化は、対神用にもなる強力な魔術

問答無用に強いキャラ

以上です

大覇星祭（本当は命懸けの体育祭？）（前書き）

本日二本目です。では、どうぞ

大覇星祭（本当は命懸けの体育祭？）

学園都市に所属する全学校が合同で行う超大規模な体育祭。
開催期間は９／１９～２５の七日間。要は異能者が繰り広げる大運動会。
その為、燃える魔球や凍る魔球、消える魔球はザラであり、外部からの注目度も高い。
種目は学校単位のものから個人単位まで多岐に渡り、個人種目では上位三位内に入ると表彰される。

ちなみに能力の使用が許可されているのは、
学園側が「能力者同士の大規模干渉のデータを収集する」という名目でむしろ使用を推奨しているため。
ただし四校合同借り物競争の様に、
一般の見物客と距離が近い競技では干渉数値の制限があり、
能力を使用する事は禁じられている。

部門事の順位があるらしく、
学校部門では昨年に続き今年も長点上機学園が常盤台中学を破り優勝している。

生徒の関係者やただの一般客も開催中は学園都市に入る事ができ、
応援・観戦等で開放区域を自由に移動する事ができる。
数少ない一般開放の機会の為、　人が圧倒的に多く交通制限をされているためいつも道理、バイク登校できず歩いて学校に行くというめんどくさい方法を取っているのだ

まだ朝とはいえ外はなかなか凄い賑わいで『孤独な傍観者』を発動してしまうと俺の事は誰にも見えなくなるので所々で人とぶつかってしまうので『孤独な傍観者』は使えなくなった。

そして、その状況で現在は、　学校まで昨日の夜に間違って酒を飲んでしまい酔っぱらった挙句に眠ってしまって現在熟睡９時間目に突入中の椿さんを背負いながら登校すると言う偉業を成し遂げていた

周りの目がものすごく痛く途中で心が折れそうになって腕時計型の計器を見るとなんだかよくわからんすごい反応をしていた

そして、普通に学校について保健室に椿を運んで保険室の先生に『ちょっとコイツ、学校に来る途中に熱中症で倒れたので見学させてください』っと言って椿を病欠にし

俺は渋々教室に行って出席だけ取ってどこかでサボっておこうかと思ったのだが

俺が抜け出そうとしている最中に後ろから氷の能力を使うジャッジメントの水季が廊下を凍らせてアイススケートの要領で追いかけられていて

（え？なに？なんで追いかけられてんの？・・・あぁ～一真は、めんどくさいとかいう理由でサボろうとして逃げようとしたところを糞真面目なあのクソ女の・・・あの女の友達の水季に見つかって逃げていると・・・ご愁傷さま・・さてと俺は、）

「負導君まちなさ～いん？あなたもどこに行くつもりですか？もうすぐ開会式始まりますよ！？」

「ん？・・・・・？」

「あなたですあなた！」

「・・・・・｛ダッ！！｝一真、何としてでも逃げるぞ！！」

「お、おう、」

「其処の二人まちなさ～い！！！」

っと俺と一真は逃走を図ったのだが途中で天野に言いくるめられた
寝起きの椿さんに物凄く厚い鉄をも溶かす火球をぶつけられ
俺と一真は、捕まった

「二人共、私から逃げれると思わないでくださいね。」

「「はぁ…。」」

（俺、あんたからは簡単に逃げ切れるんだけど・・・）

「とりあえず、二人は頑張ってくださいね。」

（丁重にお断りさせていただきます。てかこうなれば影千代になってでも逃げてやる）

「は？水季は出ないのかよ！？」

っと一真が聞いていた

「私は風紀委員（ジャッジメント）の仕事で忙しいですから。
では頑張って下さい。

それでは。」

最後に一礼して、水季は去っていった…。

今なら逃げれそうだな…。

さてと勝利は我にあり今こそ大いなる自由を掴む時ｄ

「一真に影虎君♪逃げたら涼村さんに電話するように言われてるから♪」

「それに俺から火球をプレゼントしてやるぞ♪」

「「ｏｒｚ」」

（出鼻を挫かれた・・出る前に挫かれた・・・）

・・・

・・・・

・・・

ようやく暑い炎天下のしたでの開会式が終わり、数分俺と一真は選手の入り口にいた…。

大半が俺のクラスの連中だ。

てか、何なんだ…。

あの開会式は…。

１５回連続校長の話＋お喜び電報５０連発って…。

マジで死にそう・・・現在も『異世界樹（ユグドラシル）』フル稼働で何とか命をつなぎとめてる気がする・・・よくよく考えてみれば俺って怪我とかはしなくなったけどガキの時から病弱だったからな・・

一真は白い鉢巻きをして体操服を着てお茶を飲んでいた。

いいなぁあ～マジで死ぬ～

「そんなんで、次の棒倒し大丈夫かよ？」

「暑くて…無理…。」

そう言ってダウン寸前の俺…。

（熱い・・・あつい・・・アツイ・・・あちゅい・・・ＡＴＵＩ・・・あ☆つ☆い・・・ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＴＴＴＴＴＴＴＴＴＴＴＴＴＴＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＩＩＩ

いる皆さんが写った。

「・・・さぁ？」

しかし、俺は簡単にあしらった。

少し眺めていると高校の七不思議こと身長が小学生ぐらいのチアリーダのような衣装を着た当麻達の担任の小萌先生が現れた。

「・・・・・、違いますよね」

その時、ポツリと小萌先生が俯いたまま、ブルブルと震えた声で言っていた。

（どうしたんだろう？ついに自分が不老不死の人体実験の被験者だと悟ったのかな？）

「みんなは、落ちこぼれなんかじゃありませんよね…？」

「「・・・。」」

俺達は沈黙した。（少なくとも俺だけは落ちこぼれじゃない・・・）

すると、ここにいた全員が立ち上がり当麻が振り返った。

「はいはい皆さーん、話は聞きましたね？

ついさっきまで、やる気がないだの、体力が尽きただのと、各々（おのおの）勝手に喚いていましたが…。」

ここで当麻は一旦話を切って息継ぎをして片目を閉じて…。

「もう一度だけ聞く。

テメェら、本当にやる気がねえのか？」

当麻がそう言った瞬間にクラスの奴らの目が力強くなった
（まぁやってやるか～）
とりあえず、事情は当麻から聞かされて相手を潰す事だけを考えて入場した。
（たかが3流のエリート校の教師風情があろうことかこの俺様のいる学校の俺の担任に対して失敗作ばかり持つと大変ですね?だと?この俺様を失敗作だと?1っ週間以内に相手の学校を潰してやる・・・（怒））
棒倒しに参加する選手達は二つのグループに分けられる。
一つは自陣の棒を立てて支える役…。
もう一つは、相手の棒を引きずり倒す役…。
当麻と一真と青髪ピアスは後者を選び俺は前者を選んでいた。
「なぁ～トラやん「ん?」トラやんの能力ってよう考えたら何なん?もしかして、バリアーとか?」
っといきなり青髪ピアスが聞いてくるので
「見てりゃわかるよ。ほら、始まるぜ?」
そう言った瞬間に、競技開始の合図が鳴った。
「「「オオォオォォオオォォォ!!」」」
その瞬間、当麻達は叫びながら敵陣目掛けて突っ走っていった。
すると、横一線に配置された敵陣営から、キラキラとした光が連続で瞬いた。
一瞬応援席のカメラのフラッシュかと思っていたが…違った。
その正体は火球だった…。

発火能力（パイロキネシス）か

遠くからこちらの棒に目掛けて火球を放ってきた敵さん

「こっちは、炎の球なんてなれっこなんだよ！！！」

っと俺は、自分の拳に『異世界樹（ユグドラシル）』を纏わせて飛んできた火球をぶん殴って火球を弾いた

その瞬間、観客席からオオォ～っと言う歓声が聞こえたが無視

すると再び懲りずに火球がたくさん飛んできたので

俺は、棒を守っているクラスの連中よりかなり前に出て

無数に飛んでくる迎撃用ではなく攻撃用の火球やビームや空気弾などを

俺は、すべて『異世界樹（ユグドラシル）』を纏わせた両手拳と両足で

激しく弾き始めた

俺の拳にあったった炎は砕けビームは、曲がり空気弾は、破裂したりなど俺の周りだけ弾かれた能力のせいでクレーターと化していた

「桜小路君、大丈夫！？」

っとクラスの女子の何人かが聞いてきたが

「悪い答える暇ない、答えてほしかったら終わってからにしてく・

れ！！」

俺は両手両足をフルに使い攻撃を弾きながらもそう答えていた

一発のビームが俺に声をかけた女子に向かって飛んできたので

「あぶねぇ！！」

「え？」

ギャインっと俺は何とかビームを殴って屈折させることに成功

その後もずっとそんなことばっかりしていた。

……

……

……

結論から言うと、俺達は勝った…。

当麻は何も考えずに突っ込んで行ったので敵軍からタコ殴りにされていた。

一真は透明人間（スケルトン）の能力で姿を消して攻めたので平気だったらしい…。

このあとの悲劇を考えると恐い…。

「とりあえず勝ったな♪」

「あ、あぁ…そだな…。」

俺が嬉しそうに一真に言った時一真は冷や汗だらだらだった…。

「グワァァア！！」

「ッ！？一真！？大丈夫か！？」

いきなり一真が頭を押さえて物凄く苦しそうにしていたので俺は驚いていた…。

「影虎…。
あとは…頼む…。」

（果てしなくめんどいんですが？）

……

……

……

俺に病室の中にいた。
理由は一真が倒れたからだ。
そして、俺は、椿に連絡して隣に居た天野を呼んでもらった

「あら♪二人共、遅かったわね♪」

すると、ドアが開いて忍さんが出迎えていて、周忍の前を見ると天野と椿が居た

「一真は大丈夫なの？」

「大丈夫よ♪
カズくんは、イマジ…能力解析（アビリティスキャン）の副作用にやられただけだから♪
命に異常はないわ♪
それに、もう少しで起きると思うわ♪」

「そうか…
葵…よかったな。」

「うん♪よかった♪よかった♪」

それを聞いて天野はホッと一安心して、椿と喜んでいた。

「葵ちゃんは本当にカズくんが好きなのね♪」

「にゃッ！？」

天野はいきなり忍に言われたので驚いて次第に顔が赤くなっていた。

素直ですね

「そう言えばここに来る前もかなり心配してたな…。」

「つ、椿まで～！！」

椿がクックックッと笑いながら言っていた。

（うわ～椿めっちゃ楽しんでるよ・・・罰が当らなければいいけど・・ん？）

「？一真…？」

「どうし…た…えッ！？」

俺が視線を外して見てみると一真が泣いていた。

何故泣いているんだろう？

「おかぁ…さん…。

あれ？」

一真は目を覚ますと片手を天井に掲げていた。
てか、寝言でお母さんって・・・フフフ、一真、マザコン理論の仮説が出来たな

「あれ?みんなどうした?
そんなに険しい表情をして?」

(いやいや、皆さん君の寝言に対して色々な解釈をしている最中なんだよ?・・・あれ?忍に関しては、マジで考え込んでるよ?)

「一真…何故、お前は泣いているんだ?」

「えッ!?」

「何があったんだ?
変な夢でも見てたのか?」

「う~ん…。」

一真は腕を組んで考えて夢の内容を思い出そうとしていたみたいだが・・・

「あれ?思い出せない?」

「「「はい!?」」」

忍以外の皆さんが声をあげていた。
(悩むだけ悩んで・・・)

「その…悲しい夢を見てたのはわかるんだけど…。

どんな夢かを忘れた…。」

「「「・・・」」」

（くそ、せっかく面白いネタを掴めると思ったのに・・）

「とりあえず♪カズくんが無事に目を覚ましたので♪
男子は頑張って大覇星祭に女子は二人の応援にいってらっしゃ～い♪」

「「「「ウワァ！！（キャッ！！）」」」」

俺達は忍によって病室から追い出されるように廊下に出された…。

「一真…もう出なくていいよ…。
身体がもたないよ…？」

「葵の言う通り流石にやめた方が良いぞ…？」

廊下を歩きながら珍しく一真が葵と椿に心配されていた。

「心配されたところ悪いが、俺は出るぞ…。
とことんやるって決めたから…。」

「でも、お前！！
「椿！！」えッ！？」

椿が未だに止めようとしてたが俺が大声で止めた
（正直言って天野と椿と一真が言い会っても良い答えなんか出無い）

「一真…お前の気持ちはわかるが、椿達の言い分も一里ある。
だから今日お前が出場する最後の種目以外は出るな♪
そして、1日一種目♪
言うことを聞かなければ強制入院させるぞ♪」

俺は拳をパキパキならしながら笑顔で言った。

「了解…。
はぁ…。」

一真が納得したので

それから、俺達は病院から出た。

つづく

大覇星祭（本当は命懸けの体育祭？）（後書き）

以上です

ではまた

悪魔光臨（ＡＩＭ拡散力場のバグ）（前書き）

本日最後の投稿です。

今回は、いろんな意味で分岐点です。

物語が激しく動き出す前触れです

悪魔光臨（ＡＩＭ拡散力場のバグ）

俺は、病院を後にした後、椿がちょっと体調が悪いと言うのでとりあえず涼しい休憩所に行って飲み物を買おうと学園都市を歩いていると

「何なんだ？このホログラフみたいなのは？忍に一応連絡入れとくか…。『はいはい、で、なに？お姉さんとイイコトｓ』あっ！！忍か？やかましい！！食い殺すぞ！！いい加減にしねぇと椿とは二度と会わせねぇぞ♪」

今まで見たことの無いような・・・いや、訂正すると大昔の『異世界樹（ユグドラシル）』と似たような造りの人間を見つけたのでとりあえず忍にでも回収させようかと思って連絡をした。

「本題に移るが…。」

「エ・・ル・・ク・・？」

っと突如、ＡＩＭの結晶体らしき物に俺の真名を呼ばれ驚いて振り向いたその時、

「何ッ！？ガハッ！？」

ザスッとなかなか鋭い巨大な刃に腹部から胸までを刺されてしまった

「アナ・・タ・・ナンテ・・シン・デ・。ジャアネ・・。」

そう言って結晶体は、突如形を成さなくなりその場から消えた

俺は、すぐに体を直して立ち上がってあたりを見渡したがどこにもいなかった

（・・・・まぁいっか・・・椿が被害に遭わなければたいした問題じゃない）

そう思い俺はすぐに自販機を見つけて適当に飲み物を買って椿のもとに戻った

そして、椿の所に戻ると席でぐったり寝ていた。

「お～い、お前本当に大丈夫か？」

俺がそう言いながら椿の体を揺すっていると

椿が気付いたのかムクっと起き上がると同時にパシンと俺の手を弾き

俺の事をキッとまるで恨むような眼で睨みつけてきて

「ワタシに触れるな！！汚らわしい！！」

っといつもの椿とは違う明らかに怒りを込めた声で怒鳴られた

「え？・・・おい、椿？大丈夫か」

「｛ギリリリ・・・｝ハッ！？いや、なんでも無い。ごめん」

俺がさらに椿の体を揺すりながら問いかけると椿は、自分を掴んでいる俺の手に爪を食いこませながら引きはがそうとしていたが少しすると我に返ったのか急に落ち着きを取り戻して手に力を入れるのをやめて謝ってきた

「「・・・・」」

俺と椿が黙り込んでいる間にも周りに居た人々がざわざわこっちを見ながら騒いでいたので

俺はとりあえず『異世界樹(ユグドラシル)』を遠くの地面から生やし街灯を破壊したその瞬間、みんなが俺と椿から目を離したので椿の手を持って全力で走った

そして、椿を抱き抱えて壁をピョンピョン交互に飛んで屋上までたどり着いたので

椿を下すと

「・・・・・・」

「お～い椿さ～ん?本当に大丈夫か?」

椿は立ってはいるものの心ここにあらずと言った感じでフラフラしていた

ポンっと俺は、椿の両肩に手を置いて身体を思いっきり揺すった

すると無表情だった椿さんの顔がどんどん青白くなっていき・・・・

・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・

「うげぇえええ」

意識を取り戻すと同時にお手洗いに駆けて行ってリバースしていた

そして、椿は戻ってくるなり俺の向う脛を容赦なく蹴ってきたので俺は、痛さのあまりしゃがみ込んでしまうと椿さんの拳が俺のあごに当り綺麗に弧を描いて殴り飛ばされ運悪く木にぶつかって俺のぶつかった木が折れて俺はその後ろにあるブロック塀にぶつかって衝撃のせいで内臓の何個かが破裂して激しく吐血してしまった

「ゴホゴホ、なにすんだよ？・・・・あれ？」

「へ？あれ？」

おそらく今の俺と椿は同じことを考えているだろう

先ほどの椿のプライドが高そうな言動には、俺は、聞き覚えがある。あの不機嫌が詰まったような声も覚えがあって極めつけは、明らかに俺以上ジャッジメントのクソ女（麻華）以下の常人をはるかに超えた怪力キャラになっている現状況、間違いない・・・・さっき椿の代わりに出ていた人格は、クリスだ・・

椿の本性で力、スピード、スタミナ、防御力、才能、能力、魔術、頭脳、運、ｅｔｃ・・・全てが俺を上回っているあり得ない奴で・・（あっ！！背では俺が勝っている）・・・・昔、俺を殺し俺に殺さ

れた女・・・正確には椿は、俺を傷つけて殺しかけたとしか記憶にないが本当は、俺は椿に殺されていた。

そんな人格が何の前触れもなく出て来ていた。

もしあの状況で椿が意識を取りもどさなかったら俺はおそらくどんな方法を使ってでも椿を殺していただろう・・周りに居た人間たちも俺と椿の本気のぶつかり合い有利と不利、勝者と敗者の決まった勝敗の付いた意味のない決闘のせいで死ぬだろうな・・・・

「な、なぁ俺達ってもしかしてさっき物凄く危なかったんじゃ・・・」

「だろうな、次、クリスになったお前と俺がぶつかったら間違いなく俺が死んでお前も死ぬんじゃないか?そうでなくても俺たちは二度と一緒にはいられない・・・」

椿が俺にさっきの状況を聞いてくるので俺は、結果として回避できた現状を伝えた・・・すると

「今度俺がお前に本気で牙をむいたら迷わずに殺してお前は、生き続けろ・・これは事前の命令だ・・」

椿は俺の胸板に右手のこぶしをぶつけながら俺の懐に俯きながら頭をくっつけてきた

「・・・・・死ぬほど難易度高いな・・・まぁ頑張ってはみるさ♪・・・さて、そろそろ、騎馬戦の時間だな・・もどるぞ・・後、普通にしてろ・・これは俺とお前だけの問題だ。他人に悟られるな」

「うん」

俺は椿の頭を撫でながらちょっとだけ抱きしめながらすぐに椿を離して腰を曲げて椿の目線に目を合わせて出来る限り優しくそう言った

すると椿さんは、特に何も言わず良い返事をしてくれた

そして、俺と椿は、競技場へと向かった

その時の俺は椿に気付かれてはいないだろうが冷や汗をかきながら多少震えていただろう腕時計型の計器もいつ影千代になってもおかしくない数値を示し続けていた・・・俺が最強を名乗らないわけ・・それは椿が俺よりも強いから・・・・・・・俺に恐怖と言う感情を抱かせる程の存在、白髪の椿・・・アイツより怖い奴ってのが想像もつかない。だって反則だろ?『完全設備(フルチューニング)』なんて能力を使えるバカたれなんだから・・・まだ震えが止まらない・・正直言って次もアイツを殺せる保障は・・・・・0%だ

「思い出しただけで心臓が止りそうだ・・」

「え?」

「いや、なんでも無い気にしないでくれ」

今の俺は、キチンと表情を作れているのだろうか?椿のことを殺そうとしていて必死に我慢している俺は、笑えているのだろうか?

そう思いながらも俺たちは、競技場に向かい一真君や天野さんに合流した

そして、なぜか当麻がおらずチアガールファッションのインデックスさんが居て

当麻が居ない＝トラブル・・＝なんかの事件？

と言う方程式に従って『検索』してみると何と可哀想なことでしょう

使徒十字とやらを学園都市に持ち込んだオリアナとかその他もろもろと戦ってたのか・・・

まぁ俺が出向くまでも無いな、だって今日はナイトパレードの花火で使徒十字の使用条件はそろわない

教えてあげても良いがここで俺が下手に手を出したら統括理事会にリアルに目をつけられる

そうなると面倒だ・・・俺が利用されるのも癪に障るしもし統括理事会に椿の才能を知られればおそらく優先順位は、俺より上に設定されるし白髪の椿なら自ら学園都市の裏に堕ちて十字教でも滅ぼすんじゃないかな？

などと考えている間に

「取り敢えず行ってくる。」

一真は靴紐を強く縛って天野に言っていた。

「一真…大丈夫なの…？」

「やっぱり止めておいた方がいいんじゃないのか？」

椿と葵にかなり心配されていた。
まぁ一真君は、副作用のせいで神経をシャットダウンしなきゃいけないほど痛みを感じるらしいからね・・・

「大丈夫だよ…。
少しの間気絶するだけだよ。」

「それって普通は大丈夫じゃないよね…。」

「まぁ、行ってくるよ…。」

一真は天野にそう言って競技場に向かおうとしていた

「影虎君…。
一真をお願いね…。」

「はぁ…了解しました…。」

(いま一瞬、謹んで辞退させていただきます。って言いかけた!?
天野の後ろ椿が睨んでこなかったら間違いなく言っていた・・・)

「…行ってくる…。」

「「行ってらっしゃい。」」

俺と一真は最後の種目である騎馬戦に出場した。

……

……

……

そして、何と勝ったのだが再び一真君が苦しみ始めたので楽にして

やった

殺してはいない、後ろから首筋にチョップを決めただけだ

その後、俺が一真を担いで一真の部屋まで運んだ

そして、時間がたつ事2時間後

「う～ん…。

あれ？」

一真が目を覚ましたので椿が天野の後ろに静かに近寄り逃げ腰の天野の背中を文字道理、後押ししていた

「一真♪キャッ！？」

「へ？どわぁ！？」

俺の予想道理天野が一真に倒れていた。

（（ミッションコンプリート！！））

俺と椿は心の中でそう思い思わずガッツポーズ

「いきなり何しやがる！？」

後頭部をぶつけたのでさすりながら叫んでいた。

「ご、ゴメン…。

いきなり何かに押されて…。」

「何かにって何…に・・・。
悪い…分かったから言わなくていい…。」

一真がこっちを睨んでくるので一応笑いかけてみた

「早くベランダに出ろ。
ナイトパレードが始まるぞ♪」

「へ？」

すると椿がウキウキしながらベランダを開けていた。あぁそう言えば後、２分５６秒で（腹時計）ナイトパレードだな♪

「早く♪早く♪」

「ハァ…はいはい…。」

天野もご機嫌にキャッキャッとはしゃぎながら一真の腕を引っ張っていた。

「椿？何故そんなに機嫌が良いんだ？」

「えッ！？そ、そうか！？わ、私は至って普通だぞ！？」

俺が聞いてみると椿が挙動不審だった。やっぱり一瞬だけでも入れ替わったせいで心身ともに影響ありですか・・・まぁ大丈夫だろう・・

ヒュ～…ドーン！！

タイミング良くいきなり花火が上がり、それと同時にパレードが始まった。

「きれいだね。」

「あぁ、かなりきれいだ…。」

天野と椿は目を輝かせながらパレードやら、打ち上がる花火をみて言っていて、俺と一真は顔を見合わせて手を左右にやれやれと言った感じであげていた。

（・・・来るなら来いよ・・俺はお前が相手だろうとお前を幸せにしてやる。）

この時俺は心に決めていた

勝てないんなら負けなきゃ良い

俺（化け物）として俺は、椿の中に居るクリス（魔獣）と正面から向き合ってやると・・

つづく

悪魔光臨（ＡＩＭ拡散力場のバグ）（後書き）

序盤で登場したのは、渡さんの小説でも出てきているはずのキャラです。後、クリスについてですが来週か再来週くらいでわかると思います。

ではまた。

幻想悪魔・序章（思い出したくない過去）（前書き）

一週間に一度は来る投稿タイムです。

最近は感想がこなくて悲しい限りです。

出来れば感想をください。

幻想悪魔・序章（思い出したくない過去）

大雨で冬の気温では、まるでその雨が身体に刺さるような感覚だった

「桁が違う・・か・・・」

「その程度か?その程度で自分が強いとはよく言えたものだな・・・
不愉快極まりない・・ワタシの前からキエロ!!」

いったい何を間違えたんだろう。ただ、今日は、寝坊をした、晩御飯の献立で意見が合わなかった。見たいテレビの時間がお互いにかぶっていた、確かに今日は、何から何まで椿とは合わなかったのは認める。

ただ、なんで俺となぜか白髪の椿は今、・・・殺し合っているのだろういや、俺はなぜ殺されかけているのだろう?なぜ?俺は、椿にボロボロにされた上で踏みつけられているのだろう

確かに体格は、椿のほうがやっぱり大きいし俺の身長とかは、幼稚園児と言っても疑われない

ただ、この差は何だ?俺の攻撃が一発も入らず片手であしらわれている。何発も蹴られたし殴られた

一個だけわかった事がある椿の事が好きな俺は、椿に対してあまりにも無力だ・・・

「なんだ?その目…目障りだ消えて無くなれ」

（…お前がこんなに強いなんてな…俺は喰う側じゃなく喰われる側か…悪くはねぇ…喰えよ椿、俺は今みたいなお前も大好きだが…今のお前は、見るに堪えない…矛盾してるようだけどあまりにも自分の理想に叶いすぎてる物って引くんだよね・・・・それにお前が好きだから能力なんて使えねぇよ・・）

そう言って綺麗な白色の髪をなびかせながら真っ赤な瞳で俺の事を見下しながら椿は、自身の呼び出した天使に手で合図した。その瞬間だ。俺の目の前でたくさんの光が見えてそれが俺に降り注いで来て俺の命は確かに終わりを告げた。

・・・・それなのになぜだろう?なぜか目を覚ました・・すると俺の『死世界樹(キルドラシル)』があろう事か俺が大好きで堪らない椿の腹部を貫いて宙に持ち上げていた。

「カホッカハッ…なんで…この攻…撃…ワタシに…使えない…はずじゃ…カホカホ」

椿は、必死に抜け出そうとしていたが完全にお腹を刺されていてさらにΔ状の死世界樹(キルドラシル)に体重がかかってしまいどんどんずれ落ちながら椿の傷を広げていたそして、椿が吐血した血が俺の頬と右手にかかった。生温かくしかし、すぐに冷たくなった。まるでこれから椿がそうなるぞっと言わんばかりに

「いやだ、嫌だよ・・・〜ガァンガァン〜消えろよ消えろよ!!!」

俺は、必死にコントロールを失って全く言う事を効かない死世界樹(キルドラシル)を手から血が出るまで殴り続けたそんなことで窓のないビルを破壊できるほど強固な死世界樹(キルドラシル)を消せるわけもなかった。ただ、感情が

大きく揺れ過ぎてまともな思考が出来なかった。

ただ、助けたかったそれなのに死世界樹（キルドラシル）は、びくともしなかった

その時だ俺の頭の中にある特技が思い浮かんだのは・・・

（そうだ…『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』を使って…）

「この世界の再構築！！この世界に死世界樹（キルドラシル）は存在しない！！」

俺が、特技を使ってそう言った瞬間に死世界樹（キルドラシル）は、サラサラと消え始め宙に浮いていた椿が解放され地面に落ちた

俺はすぐに駆け寄った。白髪の椿は、完全に気を失っていて腹部からあり得ないほど大量に出血していた

そして、なぜか変色していた白い髪は、地面について自分の血で赤く染まっていた

そして、俺は、自分の小さな手で椿の体を持ち上げようとしたがその時、椿の体温は、すでに冷たく息もいていなかった

「なぁ椿、お前さっきまで強かったじゃん・・・起きろよ起きろよ・・・起きてよ・・・〇〇〇！！！！！」

この時、俺は、必死に椿を揺すりながら大雨にまぎれて本気で泣いていた。はじめて泣いた気がした。

泣いているときの俺は、ただの無力な子供だったと思うもう呼びかけることもやめて空を見ながら大粒の涙を流しながらただわぁんわ

ぁん泣いていただけだ。なんせ、泣いたのが初めてだからどうやって涙を止めていいのかもわからなかった。

「うわぁ～んうわぁ～ぁあああん・・・お願いだよぉお願いだから死なないでよ・・・まだ、俺、お前に何もしてやってないよ…『お前から奪ってばっかじゃん…・・・昔もだ・・いつもお前に何かをしてもらってばっかで…お願いだよ…｛マリア姉ちゃん｝！！！！」

・・・・・

「うぉ！！？・・・・？え？なに？なんで昔の記憶の後半が捏造されてんの？」

俺は、飛び起きた嫌な夢を見たという事もあるだろうただ、俺のトラウマを自ら抉った事に関しては、自業自得なのは認める。だが最後の台詞には覚えがない・・・全く覚えがない・・

「いま何時だ？・・・｛ＡＭ２時２９分｝・・・起きるのにはまだ早いしな・・・かといってすっかり目が覚めっちまって２度寝する気分じゃない・・・久々にジョギングでも行く・・・ん？」

俺が隣を見ると椿が寝ぼけているのもあるんだろうが上半身だけ起こしてボーッと壁を見ていた

「何やってんの？お～い、椿さ～ん・・・」

「・・・」

椿は俺が顔の前で手を振ってみても何の反応も無かった

それどころか眼に生気が無かった

そして、次の瞬間、椿の目に力が籠った瞬間に椿の雰囲気がガラっと変わり冷たくり

眼の色がどんどん赤くなってまるで血のように赤くなった

そして、髪の色が根元から少しずつ色素が抜けていくように白くなり始めていた

「おい!!!椿!!!!しっかりしろ!!!!」

っと俺は、椿の肩を激しく揺すりながら近所迷惑になるくらい大声で怒鳴った

「ヒヤァ?え?なになに?・・・なに?」

っと椿は、ようやく気付いたのか驚いていた

すると急に髪に色素がもどりだした

(・・・・今のってもしかして滅亡までのカウントダウン?昨日と言い今日と言いどうなってんだ?)

俺が首をかしげながら真剣に考えていると

「・・・・・・」

再び椿がフラフラしながらボ〜として俯いていた

（おいおい、またですか?ようしゃね～なおい!!エンドレスはご免だね・・）

「椿」

「・・・・・・・・・・・」

（・・・・・・・これ一刻の猶予も無いって感じだな）

俺はそう思いながら椿の額に左手の掌を当てて

俺のレベル０の特技その２『王道楽土』を使った

王道楽土は、簡単にいえば人に偽りの幸せを与える技（まぁ幸せな幻想夢を見せる力）

ただ、幸せだと誤認させる力だ

正直、催眠術とも言い難い、全くの無駄な特技だ

ただ、偽りの幸せを与えられたものは、その幸せに縋りつきたくなる。もし俺の王道楽土の虚福に縋ってしまった人間は、自分の世界から抜け出せなくなるって言う

結構怖い能力付き・・・いや、これは、むしろレベル０とも言い難いな・・・一真君風に言えばレベル√０

この能力を使うことで俺は、椿の中で現在暴れている人格『クリス』を心の奥底に留めさせる

ただ、この力は、俺から集中力って言うものを奪っていくんだよね・・・まぁ『異世界樹(ユグドラシル)』が捜査不調になったりするだけ・・・あと、物事に対して大雑把になる

俺が、生易しく無理やり『クリス』を主神経から切り離した。その瞬間椿は眠るように眼を閉じてベッドに横たわった

（俺が最近、影千代によくなってしまうように椿も椿で環境の変化には、少し椿の意外とか細い神経に負担掛けてたんだな・・・まぁ俺の王道楽土でしばらくは気が楽だろうよ♪・・・）

俺がそう思った瞬間にズキリと心臓の辺りに鋭い痛みを感じた

「アハハハ、持病の心筋梗塞ですか？この感じは懐かしい・・・」

その後、俺もあまりにも苦しくて忍から貰った薬の錠剤を5錠と水を飲んで寝た

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

次の日

最近、当麻ばっかり魔術師と闘ってばっかりで大変だろうから俺達が学園都市を探索して魔術師がいたら食い殺そうと言う話を一真に持ちかけていたので早起きした

本当は、正直言って魔術師という存在は、椿の精神にダメージを与えるのですぐさま排除しようと思うだけなのだが・・・最近俺は、

妙に調子が悪い・・それはまぁ俺は、レベルを椿に合わせるために落としてるのもあるんだろうがな・・本来ならガジルだって瞬きする前にお星様になってるし他の能力者なんてクシャミ一つで全員土に返せるくらい強いんだけどね（あれ？白髪椿と現在成年になった俺・・たぶん、俺のほうが強いのか？）・・・それにしても最近、学園都市側からのアプローチが無いな・・・俺が見逃してるだけか？・・何かを企んでるのか？また今度、奇襲に行ってみるか？ただそうなれば、リアルで全力ださねぇとな・・今までの力なんてデコピン以下だもんな～

その後色々考えながらも一応掃除に洗濯、朝食を暇だったので終え椿を起こそうとしたのですがなんでも昨日途中で起きたせいで「ね～む～い～～ネムイネムイ・・眠い！！！！！！！！！」っと激しく駄々をこねられながら迎撃と言わんばかりに体中を計１０８回蹴られ人を起こすだけでボロボロの俺（さっきのはまさか１〇８マシンガン？）

その後、半分泣きながら布団を意地でも離さなかった椿にカチンときて椿が意地でも離さない掛け布団ではなく椿の寝巻の襟に物干し座を刺しこんでベランダに干した。

「？」

椿は、自分の状況を見て何がどういう状況下わからなかったらしい

答えは簡単だ。椿自身を布団を干すための洗濯バサミにしたにすぎない

「ハハハハハ・・・って俺は怒りに任せてなにを！？」

その後、すぐに椿を下したが今度は、１０８回を燃え盛る拳で殴られた（１〇８ハンバー〇？）

「起きないからって物干し座を襟に突っ込んで干すことないだろ！！！」

っとその後にかなり怒られた・・やり過ぎたという自覚はある

ただ、なぜ人を起こすという作業だけで計２１６回も攻撃を受けるんだろう？

などと考えながら隣ではガミガミ怒られても何とか準備を終えた

そして、一真たちと合流するとなぜか・・・ゲーセンに足が運んでしまい

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「ま、負けただと？」

「二連勝…。」

現在俺達四人は休憩がてらにゲームセンターにいて、一真と俺はスキルマスターというゲームで学園都市のバンクに載っている能力を自分のキャラクターに取り込ませて戦う格闘ゲームをしていた。

因みに能力がレベル０～レベル５までの能力がちゃんと揃っている上にあろうことか都市伝説の能力やキャラまで存在していた。一真

のキャラクターは学生服に仮面を着けた氷の能力者だ
俺はいつも道理、牙桜だ。まさかこの俺がこのゲームで負けるなんて・・・・・

俺は、敗北したショックでうちのめされていた

幻想悪魔・序章（思い出したくない過去）（後書き）

まさかの影虎君と椿さんの黒歴史です。

そして、徐々に正体を現し始めるクリス・・・小さい時の影虎を手玉に取れるほどの実力者・・・

ではまた

幻想悪魔・中盤（悪魔襲来）

在俺達四人は休憩がてらにゲームセンターにいて、一真と俺はスキルマスターというゲームで学園都市のバンクに載っている能力を自分のキャラクターに取り込ませて戦う格闘ゲームをしていた。
因みに能力がレベル0～レベル5までの能力がちゃんと揃っている上にあろうことか都市伝説の能力やキャラまで存在していた。一真のキャラクターは学生服に仮面を着けた氷の能力者だ
俺はいつも道理、牙桜だ。まさかこの俺がこのゲームで負けるなんて

「もう一回してくれ！！」

「これで三回目だな…。」

このゲームでの現在一位が初心者に二連敗って何んて許されるはずがない

「はぁ…わかったから…早く席に着けよ…。」

一真がそう言うので俺は直ぐに席に着いた。

・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・

「終わりだ…。」

「ぬぁぁあ～！！」

その後も何度もリベンジしたのだがどうしても勝てなかった

一真のチキン戦法を崩す事が出来なかったのだ・・・

「二人とも終わったか？
てか、影虎!?何があった!?」

葵と椿が来て、椿が尋ねてくるなり項垂れている影虎を見て叫んだ。

「お前一体何をした!!!?」

「えぇぇ!!」

一真は理不尽な事にかなり椿に怒られていた。
（それにしても一回も勝てないだと？集中力が常人の半分くらいになっているとはいえ・・・はぁ～）

「え、え～と…。
それは…影虎をゲームでボコボコにした…。」

「・・・は？」

椿の目が点になっていた。
そりゃ驚くよね・・椿なんて俺に格闘ゲームで一撃も与えられず負けた回数が１０００回にも上るんだもん

「え～と…一真さん。
あなたは、こいつにゲームで勝ったと？　ｆ（＾＾；」

「あ、あぁ…。（汗）」

「えぇぇえ！？」

椿はさらに声を上げて驚いて隣にいた天野が驚いたのかビクッとしていた。

（はぁ・・・自信なくすなぁ～）

……

……

俺達はとりあえず、外に出た。

時間を見てみると知らない間に６時と日が傾いていて辺りが少し暗くなっていた。

そのころには俺の気分も良くなっていて

「絶対に負かしてやるからな♪」

「いい加減諦めろよ…。」

椿に大声を出された後椿がこの目で見ないと信じれないからもう一回やれ。と言っていきなり１００円を投入していたので俺と一真はまた勝負してまた敗北した。

「お前を負かせるまではいくらでも勝負を挑む！！」

「やかましい！！

いい加減疲れるし面倒何だよ！！」

「勝ち逃げは許さねぇよ！！」

「ごちゃごちゃうるせー！！」

などと俺と一真は言い合っいになった。
勝ち逃げは許さんそして俺は勝ちたい

「影虎、落ち着け。
何をたかがゲームぐらいでヒートアップしてんだよ？」

「一真も落ち着いて。
ゲームぐらいしてあげれば良いじゃん。」

「「・・・」」

天野と椿に言われて俺と一真は黙り込んだ。
そして、俺は思った。

（あれ？俺って今日なにしようと思ってたんだっけ？）

「「俺達は…何をしていたんだ…。」」

その時、一人の長い背広のコートを着た長い黒髪の少女が顔を下げた状態で椿に近付いていた…。

（なんだろこの感じ・・・どこかで・・）

「ガハッ！？」

「「「ッ！？」」」

いきなり椿が正面から少女に腹部を鋭い剣？に刺されて血を吐いた
同時に、少女は鋭い何かを抜いて走っていった。

「椿ッ!?クソッ!?あの野郎!!」

倒れた椿を抱き抱え、異世界樹（ユグドラシル）を出現させて椿を治療していたが椿は気絶していた。

（さっきの女、昨日俺の事刺したＡＩＭ拡散力場の結晶じゃね～か!?なんで忘れていたんだ俺は・・ん?）

「オイッ!?一真!?」

「一真!?何処に!?」

天野と俺が一真に呼びかけたが、一真は無視して走って逃げる少女を追いかけた。

そんなこと関係ない!!

「おい、椿おい!!・・・すまねぇ・・天野・・「ふぇ?」すぐに忍を呼んでここに、こらせるから・・椿の事頼むわ」

「えぇえぇ?でも、影虎君?椿が椿が・・・」

「頼・む・よ」

俺はそう言って走った

……

……

…

（さっき、天野には悪い事したな・・・アイツは何も悪くないのについ脅しちまったな・・・）

俺は走っている途中に血の上り過ぎでうまく働かなくなっていた頭が冷え始めたので冷静に考えながら本能の赴くままに相手を追いかけていると路地裏という俺の庭に辿りついてあたりを見渡しているとちょんまげ風にまとめたサイドポニーで黄色と白のパーカーに黒のランニングに短パン、ピンクの指のところのない手袋をした。

俺が大嫌いな剣菱麻華がボロボロになりながら倒れていた

（なんでこいつが倒れてるんだ？しかもボロボロで・・・不良集団（スキルアウト）にでもやられたのか？）

「いい気味だ・・・・」

いつもの俺ならこいつをこのまま放置するかそれとも不良集団（スキルアウト）の集会場にでもこの女を捨てただろう

ただ、今の気分はそうじゃなかった・・・

どことなく椿に似ているこの女を俺は無視できず

「・・・どうしちまったんだよ俺は・・・チキショウ！！」

気が付いたら剣菱を肩に担いでいた。

（こいつの事を許したわけじゃない！！ただ、ただ、俺は、医者だ

からけが人を見逃せないだけだ!!)

そう思いながら俺は、『異世界樹(ユグドラシル)』の羽を出して空に飛びあがった

しかし、思ったより出力?が出ず思ったように飛べなかった

(あぁもう、王道楽士の副作用があるのを忘れてた・・・いつもの出力の2%以下とか・・・)

などと心の中で愚痴りながらも

空を飛んで出来る限り病院に向かいながらもさっきの女を探していた

「一真!!」

「影虎…。」

上空から一真を見つけて声をかけながらゆっくりと降りると

「何故、剣菱を担いでいるんだ?」

っとあまり触れられたくないところに触れられた

「道端で拾ってな♪
それよりもだ…あいつは…?」

「・・・すまない…逃げられた…。」

俺が適当に話をそらすと一真が逃がしたと言った

「チッ…そうか…。
あの野郎…！！」

俺は、椿を貫かれた事に腹をたてているので舌打ちをして歯をギリギリと音をたたせていた。

「そう言えば椿と葵は？」

「あぁ…。
椿は異世界樹（ユグドラシル）で治療した後に病院に寝かせてある。
一応、天野には付き添いをしてもらってるがな♪」

「そうか…。
それは良かった…。」

「驚き無しだな。」

「誰かさん達のせいで慣れさせられたからな。」

「そう言えばそうだな♪
早いとこ帰るぞ♪」

確かにその通りなのでとりあえず帰える事にした。

……

……

……

とある公園。

「さてと…今度は…あなたよ…。

桜井　忍…。」

「あらあら♪やっぱり私に来ちゃったか♪」

女は夜道を歩いている忍の前にゆっくりと着陸して羽を消滅させて刃物に変形させた腕を突きつけて言うと忍は分かっていましたと言わんばかりの反応をして笑った。

「まぁ、あなたが襲った三人には共通点があるからね～。」

「三人…やっぱり剣菱　麻華を襲った時に誰かに見られてると思って逃げたけどあなただったのね。」

「あったり～♪」

女は殺意を放っているように冷たい表情に対し、真面目なのか、ふざけているのか分からなかった。

「でも、あなたがここに来たって事は、カズく…負導　一真君を殺しちゃったのかしら?」

忍は急に真剣な表情になり、何故か一真の事を皐に聞いた。

「あなたはバカですか?
私は負導　一真の妹でお兄ちゃんの為にしてるの。
あなたのせいで…いや違う、あなた達のせいで今のお兄ちゃんはあんな感じになっちゃったのよ?
だから、ある意味で私は復讐をしてるの。」

皐は呆れて剣を下ろしてしまい、ため息混じりな声で忍に言った。

「なるほど♪あなた皐ちゃんだったんだ♪
カズくんからは家族が全員死んだって聞かされてたんだけどね。」

「そう。
私は死んでいる。
でもね、お兄ちゃんのお陰で生き返る事が出来たの。
だから私はここにいる。
悪魔としてね！！」

皐はそう言って一気に忍に剣で襲い掛かった。
しかし…。

「残念でした♪」

「チッ…。」

忍がいきなり皐の目の前から消えて見事に剣からの攻撃を交わし皐の後ろから話し掛けて皐は舌打ちをしていた。

「今ので分かったでしょ？
あなたじゃわたしには勝てないわよ♪」

クスクスと笑いながら皐を挑発するかのように言い放った。

「・・・なら…あなたには生き地獄を味わってもらうしかないわね…。」

しかし、皐は冷静どころかニヤリと嫌な笑みを浮かべて両手を普通の腕に戻した。

「生き地獄…？
あなた！！まさか！？」

「気づいた見たいね。」

忍はさっきまでの表情が嘘のように驚いたが皐は未だに表情を変えず歪んだように笑っていた。

「でも、それが私の目的だったから一石二鳥って所ね。
じゃあね…。」

「待ちなさい！！」

忍が言った時には既に遅く、女の子は空へと飛び立ち去っていった。

……

……

……

つづく

幻想悪魔・中盤（悪魔襲来）（後書き）

今回は話がわかりにくいかもしれませんね。皐さんについては、渡さんの小説に乗っておられます。そして、不安定な状態の椿にまさかの攻撃を仕掛けた皐・・・この後、椿はどうなるのか?そして、影虎君は、まさかのツンデレ風に麻華を救った?そして、皐の力とは?

幻想悪魔・後篇（皐襲来！？最大出力２％以下？影虎、苦渋の戦い）

一真たちが出かけたのを確認した俺はすぐに麻華を病室のベッドに運びその後すぐに椿が現在いる集中治療室に足を運んだ

そこでは、ヘブンキャンセラーに治療され完治に向かっていた椿が眠っていた

明らかに異常な状態で・・・

「影虎君、彼女の傷は君の力と私の治療でふさがったが彼女の体の変化が常識では考えられないものだよ。それい彼女の体は、君の力から離れても自身のからで」

そう、椿の見た目はもう完全にあの時のクリスそのものだ

髪の色は完全に変色し白くなっているしおそらく目のほうも・・

後は、目を覚ますだけ

「彼女の細胞が急に変貌し始めているのはどう言うわけかね？」

っとヘブンキャンセラーが聞いてくるので

「あなたも多少ご存じでしょ？科学ならざる力って奴を・・・」

俺がそう言うと

「・・ふう～これ以上の質問は、君には答える気はないということ

か・・では、私は行くよ。私を待っている患者は、まだ居てね」

そう言ってヘブンキャンセラーは、去って行った

「なぁクリス、とりあえずお前を刺した奴を破壊してから・・もどってくるからさ・・・そしたら久々に話し合おうぜ、多少手荒な対話になるだろうけど・・逃げも隠れもしねぇよ♪」

俺はそう言いながら椿の手を握って笑いながらそう言った

すると椿の腕に力が入りだした

しかし、俺はその手を離して病室から出ようとしたその時、

ピピピピピ

っと俺のケータイに着信があったので出てみると

『もしもしとら?今すぐ椿ちゃんと麻華ちゃんを守りなさい!!「はぁ?どういう・・いや良い」ブチ』

電話の途中で俺の真後ろに先ほど椿を刺した女が空から降りてきたので俺は電源を切った

「よう、通り魔さん?今度は何の用だ?」

俺は、後ろ向きに女に話した

「なんで、あんたたち全員生きてるの?普通に考えてあんたたち3人は、致命傷を負っているはずなのに全員が全員当たり前のように

生きてるからちゃんと止めを刺しに来たってわけ」

「ふ～ん、あんまり調子に乗ってると、喰イ殺スゾ！！」

俺は、そう言って『異世界樹（ユグドラシル）』の両翼を出して今出せる最大出力（２％）で加速しながら女のはらに拳を叩きこんだ

その瞬間、女は、吹っ飛びながら背中から羽を出して俺以上の速度で接近して来て両手を変な刃物に変形させ俺に向かって切りかかってきたので俺は、全身の表皮に『異世界樹（ユグドラシル）』を纏わせ両手首に３本の『異世界樹（ユグドラシル）』の枝の刃を出してその刃物を受け止めた

しかし、なんというか出力の問題だろう、俺は、どんどん押された

「あははは、どうしたの？あたしをころすんじゃなかった・・の！！」

「ぐっ・・・よもやこの俺様がお前みたいなやつに押されるとは・・・ハンデってもんは、背負う物じゃないな・・コンチクショウ」

俺がそう言った瞬間に女は、急加速して俺に物凄い勢いで切りかかって来て

あろうことか俺の両手の刃が俺のコントロール不足で形を成さなくなって崩れ俺は、地面にたたき落とされた

「あのクソアマが！！」

「影虎！？」

俺は再び異世界樹（ユグドラシル）の羽を出現させて腕の袖で口の血を拭った。

「ん？一真か。
ちょうどいい♪
応戦頼む！！」

「いきなりだな！？オイッ！！」

声が聞こえたのでその方向を見ると一真が居たので手伝ってもらおう。

「敵は？」

「あいつだよ！！」

一真が聞いてくるので指を刺してやった・・・あんにゃろう笑ってやがる

「えッ！？」

「チッ！！」

女は腕の剣を俺に突き付けて飛行しながら襲い掛かって来たので、俺は舌打ちをしながら迎え撃つように飛行して異世界樹（ユグドラシル）の蔓を腕に巻き付けて殴り掛かっていた。
そして、何度も何度も空中でぶつかり合っていた。
（この女と俺の力の差は、俺のほうが不利、ただ俺は今までの経験を生かして対処している・・・〜ズキン〜うっ今度は、心臓と肝臓かよ）

「よそ見してる暇ないと思うけ・・ど！！！」
「ガハッ！！」

俺が持病の痛みで一瞬眼を離したときごもっともな意見と共に思いっきり殴られ地面に墜落した。

「クソッ！！」

「あなたの強さに敬意を表してこの言葉を送ります…。

死ね…。」

「ッ！？」

女はゆっくりと目を開けて俺目がけて急降下して、剣できりかかろうとしていた。
（こいつを倒してもその後にクリストの本番戦が待ってるんだ）

「エイッ！！」

「キャッ！？」

横で天野が声を上げたと同時に女が見事に剣を振るう前に重力を掛けられて墜落して俺と同じように落ちてきた。

「クッ…。
邪魔しないで！！」

「危ねぇ！！」

「キャッ！？」

女が立ち上がったと同時に天野に襲いかかろうとしていた。一真が咄嗟に庇い避けていた。

一真は腕を押さえていたのでおそらく喰らって知まったんだろう

「どうして…？」

「ん？」

いきなり、女が後ろで俯き、涙を流して呟いていた。

「どうして…お兄ちゃんまで邪魔するの！？
お兄ちゃんは私の味方だと思っていたのに！！
お兄ちゃんなら私の目的の味方になってくれると思っていたのに！！
どうして！！」

「うるせぇ！！」

「ッ！？」

いきなり一真が女に向かって怒っていた

しかもものすごく怒っていた。

（あれ？お兄ちゃん？）

「ならお前に問う！！
お前の目的って何だよ！？」

「そ、それは…今のお兄ちゃんには言えないよ！！」

「今の俺には言えないだと！！
ふざけんな！！
意味わからねぇし、知らない間に友達が巻き込まれて黙っていられるか！！」

「どうして…わかってくれないの…？
どうして！？」

急に女は寂しげな声を出してまた、声が大きくなってきた。

（もしかしてこいつ一真の妹？でもＡＩＭ拡散力場の結晶体・・もしかして一真は、ＡＩＭ・・・よし、全部が解決したら俺は一度、頭のネジを締め直そう）

「ここまで言っても分からねぇようだな…。
もういい…。
俺は今から…テメェの存在と考え（幻想）、全てを否定してやる！！」

一真は仮面を取り出して顔に着けた。
（ありゃりゃ、つけちゃったよ・・・）

「オラァ！！」

「クッ…。」

一真は、妹に向かって走り殴り着けようとすると妹に飛行して回避

された。

「影虎…。
頼みがある…。」

「あぁ!?何だよ!?」

「それはな…。」

一真はあらかたの内容を俺に話してきた。
あいつが一真の妹ですでに死んでいるとか色々話された

「チッ…。
仕方ねぇ…。
別に構わねぇが、お前良いのか?
妹何だろ?」

兄弟というのがよくわからないが多分こういう場合、つらいはずだと思う

「構わねぇよ…。
それに、俺の妹は当の昔に死んでんだからな…。」

「・・・そうか…。
悪かったな…。」

「気にするな。
そんな事より…打ち合わせ通り頼むぞ…。」

「極めて了解。」

「ウオォオ！！」

「ッ！？」

一真は一気に走った。

屋上を勢いよく飛び降りるように…。

そして…。

「ウラァ！！」

妹目掛けて拳を付きだし殴り掛かった。

「甘いよ。

お兄ちゃん。」

しかし、見事に横に避けられて一真はただ、落ちるていく。

今覚えてる能力がなければもちろん空を飛ぶ能力は無い…。

一真一人だったらこのまま地面に確実に落ちて死んでいるだろう…。

だが、この俺様がいるのを忘れるな！！

「なッ！？」

「やれやれだ…。」

妹ちゃんは見事に作戦に引っ掛かり、俺の異世界樹（ユグドラシル）の蔓に拘束され、

一真は異世界樹（ユグドラシル）を足場の様にしてその上に立って、ゆっくりとレッドカーペットを歩いて行くように拘束された妹君の元に歩みよっていく。

「さてと…皐もどき…。
これで、目を覚ましやがれ！！」

「ガバッ！！」

一真は妹さんにアッパーを決めて妹殿は放物線を描いて頭から屋上の地面に叩きつけられていた。

「一真…。
やったな。」

「あぁ…。」

一真は屋上の異世界樹（ユグドラシル）の足場から地面に足を着けると異世界樹（ユグドラシル）が桜色の粒子に変わって消滅した。

（そろそろ形の形成も難しくなってきたな・・・今の俺のレベルは、4くらいか・・・〜ズキン〜く、薬家に置いてきたからな〜・・）

「あ…あぁぐ…。」

「「「ッ！？」」」

妹様が呻きながら立ち上がってきた時、俺達三人は驚愕した。
立ち上がったから驚愕したのではない…。
何故なら…割れているのだ…。
頭が割れていてその中身に幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）の時のように発行する三角柱が見えていたからだ…。（忘れてた・・・あれ壊さないと意味無いじゃん！？）

「どうしたの？お兄ちゃん…。
どうして、私から足を引くの？そうか…。
そうだよね…。
やっぱり恐いよね～。
だったら…私からもう、一生離れないようにしなくちゃね♪
ウフフ…アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

「「「ッ！？」」」
（ヤンデレ？）
いきなり妹閣下が狂った様に笑ったと同時に妹公爵の背中から二本の赤い腕が現れ、あの時の幻想魔獣（ＡＩＭバースト改）のように四種類の球体を浮かせていた。

「お兄ちゃん…。
もう、逃がさないよ…♪」

「ッ！？」

いきなり妹陛下は氷弾を一真に投げつけて来ていた

「しまった！？」

俺の後ろの扉にぶつかり、扉が氷ってしまい開けるのは困難になってしまった。
「今度ははずさないよ♪」
「させるかよ！！」

「ウッ…。」

妹は何かをしようとしたが、俺が異世界樹（ユグドラシル）を巻き付けた。

「ウザいわね…。
本当に…面倒なのよ！！」

「ウワァア！！
グハッ！！」

「「影虎（君）！！」」

妹さんの四本の腕がいきなり四本の触手に変わり異世界樹（ユグドラシル）を脱出したと同時に俺を掴みあげて叩きつけてきた。（マズイ・・・身体が動かない・・・くそ・・）

「さてと♪今度こそ♪」

「ダメー！！」

「キャッ！？」

いきなり妹さんが一真目掛けて火球を投げていたが、天野が火球に重力を掛けていたので和mには当たらずに妹の近くに落ちて爆風に巻き込まれていた。

「邪魔しないで！！」

「えッ！？
ウッ…。」

「「ッ！！」」

妹が手のひらの球体を氷に変えて球体から氷柱を作り上げて四本の氷柱を一気に投げつけそれが天野に刺さって血が垂れていた…。

つづく

幻想悪魔・後篇（皐襲来！？最大出力２％以下？影虎、苦渋の戦い）（後書き）

一真の妹さん・・・強いです。徳の弱った影虎君からすれば物凄く強いでしょう。

そして、迫る椿さんの変貌と天野さんのまさかの死亡フラグ？

そして同時に立った皐さんの死亡フラグ・・・一体どうなるのでしょう？

「邪魔しないで！！」

「えッ！？
ウッ…。」

「「ッ！！」」

妹が手のひらの球体を氷に変えて球体から氷柱を作り上げて四本の氷柱を一気に投げつけそれが天野に刺さって血が垂れていた…。

「…クッ…クックッ…。
ククク…フフフ…。ハハハ

しかし、妹さんは容赦なく一真に風、火、氷、雷の球体を配合させて放って一真に直撃した。

「…ガ、外部ノノノ、ソ、ソ、損傷及ビビビ敵ニヨ、ヨヨル殺意…ガ未ダダニ、ケ、検証サレマ、マ、抹殺サレル…未来ガハ…判明…サレ…マ…シタ…。」

遠くからで聞こえにくいが一真が何かを言っている・・・来る？

「全テ…ノジョ、ジョ、条件ガガガ…ソロッタタッタ…コトニヨ…リ、コ、コ、コレヨ…リ防エエ衛…シス、システ…ムノ…作動ヲ許可シ…。」

「グッ…ァァァアアアァァァアアア〝ァア〝ァアアァァ！！」

何時もと違い、何故か激しい頭痛に襲われ一真は頭を押さえてもがいた。そして、一気に身体が縮んでいた

（どうし、〝ズキリ〟グッ今度は頭痛？違う・・・一真のせいか？違うのか？・・・くそ、意識が・・・『めんどくさい奴が来ちゃったな♪』・・・）

この時の俺の予想はあっていたようだ・・この時、椿とそして、なぜか麻華の脳波に異常が起こっていたらしいその事を知ったのは、かなり後の話だ・・・

「何なの？この火の玉？
キャッ！？」

「アハハ…、久しぶりだな…。

シャバの空気も…。」

面倒くさい奴（子供一真）が目の前の４つ腕の怪物女が俺の周りの炎眼を見てうるさかったのか炎の能力を放った。

「何で能力が！？」

「ごちゃごちゃうるせぇガキだな…。
お前…気持ち悪いから消えろ…怪物女…。」

「ッ！？」

『めんどくさい奴』は手を広げると目の前に黒い雲『混沌空間（ファントムカオス）』を発動させた。
（まったく昔から無意味な事ばっかり・・・終わらすなら終わらせれば良いのに・・・ん？そう言えばあの女、死にかけてるな・・・助けるか・・）

この時の俺は、身に覚えが無い状況で良くわからないことを口走っていた。何と言うか不思議な感覚だ。ただ、入れ替わったのとは違い、元に戻ったみたいな感覚だ。

俺はすぐに天野の所に行き『異世界樹（ユグドラシル）』の治療を始めながらも『めんどくさい奴』とただの化物との戦い言うには、あまりにもお粗末な余興を眺めていた。その時俺も『異世界樹（ユグドラシル）』の使いすぎで子供に戻ってしまった

「ほらほら、どした？
早く逃げねぇと知らねぇぞ？」

黒い雲はゆっくりと怪物女の方に近づいていた。

「何を訳のわからない…ッ!?」

「どした?なんか気づいたのか?」

怪物女が黒い雲の少し下を見て、何かに気づいたらしく『めんどくさい奴』はニヤリと笑った。

「早くとどめさせよ・・・(ボソッ)」

「チッ!!」

怪物女は舌打ちをして、黒い雲に雷撃や氷弾、火球に風弾を使って攻撃をしていたが、直ぐ手前で消滅して吸い込まれる様に消えていった。

(あの雲には、無いも通じないのがわからないのかな?あんなもん対抗できるのは、俺くらいだよ)

「ほらほら。
何とかしねぇとお前もあんな風に消滅するぞ?」

「クッ…だったら!!」

怪物女はいきなり俺に向かって全ての球体を投げつけていた。

「えッ!?」

「終わったか?」

俺の前に巨大な火柱を出現させて怪物女の球体は爆発すら起こらずに燃え散った。

「一体…何を…？」

「神炎複眼（ロニウスアイ）…。
一つ一つが俺の眼であり一つ一つが意思を持つ攻防を兼ね備えた相棒でもあるんだよ。」

『めんどくさい奴』は火柱にしていた神炎複眼（ロニウスアイ）を元の火の玉に戻して説明をした。

「いい加減イライラしてきた・・弱い者虐めが相変わらず好きな奴」
ボソッ

そう呟いていると天野の治療が終わった。傷跡も残らず完璧に直した。

「さてと…飽きたな…。
そろそろ閉幕にするか…。」
（殴るぞ？どんだけ虐めるんだよ？見てて可哀想なんだけど・・）

「キャッ！！」

『めんどくさい奴』は数匹の神炎複眼（ロニウスアイ）を怪物女の周りに配置させて火柱を作り、黒い雲を上空から怪物女に向かわせて完全に逃げ道を封じた。
そして…。

「イヤァ！？イヤァァ！！

お兄ちゃん!!助けて!!」

怪物女と黒い雲の距離がドンドンと無くなっていき恐怖を感じたのか『めんどくさい奴』に手を伸ばしていた。

「お兄ちゃん?
何言ってんだお前?
俺に妹は一人しかいねぇぞ?
最も、お前みたいに怪物だったがな。」

(もう悲劇を通り越してあの娘が哀れだよ・・・)

「ッ!?
お兄ちゃんはそんな事言わない…。
あなたは誰!?」

いきなり怪物女が驚くと『めんどくさい奴』に向かって怒鳴っていた。
(そりゃ皐の兄じゃないよ、その『面倒くさい奴』の名は・・・)

「冥土の土産に教えといてやる。
俺の名は『ゼアル』…。」

(「『ゼアル=エクシーズ』だ。」)

俺の心の声と一真の声がきれいにハモった

「そんな…。」

怪物女は伸ばしていた手をダラリと下ろして、膝から倒れた。

「じゃあな…。
勘違いの怪物女さん…。」

「イヤァァァア！！」

そして怪物女は悲鳴をあげて黒い雲に飲み込まれていった。
（相変わらず気に食わない事しかしない奴だな・・・自分の力を過信しているくそったれが・・）

「さてと…。
つまらねぇな…。」

ゼアルは仮面をとった。
すると…。

「…ア、相手ノ敵意、ア、アア悪意ガ、ス、ス、全テ消エタコトニヨリリリ、防衛システムヲ、ヲヲ、解除シマスススス…。
グワッ！！」

そう言って子供状態の一真は、急に倒れた

そう、たくさんの炎の目や黒い雲を消し忘れて・・・・・

その瞬間、ようやく身体が自分の物になったみたいな感覚がして独り言を話さなくなったので

俺はすぐに一真のもとに天野を『異世界樹（ユグドラシル）』で持ち上げながら近寄って
気絶している一真の胸倉をつかみ

「はぁ～・・・とりあえず気絶するんならあれ消せよ!!置いていくなよ!!未だにモコモコ膨張してるぞコンニャロウ!!って気絶している馬鹿に怒鳴なっても仕方ない『異常抑圧(ゼロスキルアブノーマル)』発動・・・〔『～(この世にすべてを飲み込む黒き雲や燃え盛る眼は存在しない)～』〕」

俺がそう言った瞬間に黒い雲や炎の目がお互いを飲み込んで消えた。

「どうやら、一真の正体が多少俺に関係のある人物ということか・・・それにさっきの力・・謎が深まるばかりだ・・さて、こいつらを病院に運んで・・・・・・ラスボスとの対峙か・・・鬱になりそう・・まぁいいか、実は、クリスになった時の椿は俺的には、もろタイプなんだよね♪」

俺はそう言って病院の屋上まで『異世界樹(ユグドラシル)』で飛んで(かなり無理しながら)到着すると同時に天野とチビ一真を忍の診察室にこっそり連れて行くと

「・・・あれ?忍いねぇじゃん・・・アイツが此処に居なくて俺にどうしろと・・・」

「「すぅすぅ」」

俺の背中の『異世界樹(ユグドラシル)』の上で寝ている一真と天野

「・・・・人の気も知らないで・・・」

とりあえず俺は、天野と一真をベッドに置いて

(はぁ～覚悟決めなきゃな・・・それにしたって『異世界樹(ユグドラシル)』は、

いつもの2%以下しか使えずさらにガキになっている・・・・厄日かな?)

そう思いながら効果音を付けるならトテトテと椿の居るであろう集中治療室に向かった

最近では、チビの体でも普通に動けるようになってきた

そして、集中治療室に行くと

あろうことか忍が倒れていて椿に付けられていた拘束具がすべて引きちぎられていた

「う、・・・あら?・・・アハハ、ごめんねとら♪やっぱりあの娘強いわね・・・止めようとしたんだけど・・・力及ばず」

忍は、腹部を抑えながら途切れ途切れにそう言った

「入れ手違い・・か・・・まぁいいや、最初から期待はしてねぇよ・・・すぐに直してやるから一真の事頼むわ、アイツ自分の妹を殺しちまったんだよ。それに良くわからん黒い雲や炎の柱とか能力って言うよりも魔術に近いような力を使ってた。「え?」それにちょっとの間だけアイツ、変だった・・・・まぁ頼むよ♪」

「あんた、その状態で一人であぁなったあの子を止める気?」

俺が行こうとすると忍が手を伸ばしてきて俺の肩を掴んで止めてきたので

「う~ん、出来ればそうしたい今日この頃」

そう言いながら俺は、手をどかして脱走した椿を追いかけた

つづく

幻想悪魔・終幕（悪魔死す一 真の謎の能力と影虎の異変）（後書き）

幻想悪魔編は終了です。今回は、影虎良い所なしですよね・・・・意識を一時乗っ取られて居たような感じですからね。そして、次回は、いよいよ白髪の椿・・・クリスさんとの対峙です。お楽しみに

魔女再臨（椿の身体の主人格）（前書き）

時間が余ったのでもう一本投稿します。

では、どうぞ

魔女再臨（椿の身体の主人格）

俺はあの後、椿を追いかけた

先ほどの忍の容体から見ておそらく邪魔をした忍の肝に思いっきり強いパンチを叩き込んだんだろう・・

恐ろしい・・・

と思い思い椿を探して走り続けているとあたりかしこに惨いほどボコボコにされてみんな手の骨があり得ない方向に曲げられていて顔面がみんなつぶれていた

みんな虫の息だが死んではいないので『異世界樹（ユグドラシル）』の残り少ない出力で胞子のように桜色の粒子をばらまいて治療を始めた

そして、歩きながら治療するという偉業を成し遂げながら椿をおいかけていると人気があまりない大きな自然公園についた・・・そこでポツンと夜空を見て立っている椿を見つけた

夜空の星の光と公園の街灯の光で照らされていた椿は、いつもの綺麗な黒髪ではなく、怪しい雰囲気を漂わせてまるで気を抜いたらあの世に連れていかれていた・・見たいな事になりかねないほど白い髪と睨まれただけで気絶しそうなほど赤い瞳そして白い肌で服装は、病院で患者が着る服だ

普段の椿からじゃ誰も気付かないだろうがどうやら椿は、一方通行さんと同じアルビノぽい、ただ、本当に軽いアルビノだ。

そして、今の椿こそが俺が勝てないと思った人物

「よぉ・・・クリス・・・」

俺が遠くからそう言うと椿は静かにこっちを見て俺の事を物凄く冷たい目で確認して

「・・・・・・桜小路　影虎か・・・」

椿は俺からすぐに目を離してどこかに行こうとしていた

「どこに行くつもりだ？」

「・・・・ワタシが何処に行こうがワタシの勝手だ・・」

椿はそう言ってどこかに歩いて行った

俺は俺の事を無視して行こうとする椿にムカついて…

バアァン

っと腰から取り出したレディース用の拳銃を抜き椿の右足の膝に鉛玉をぶちこんだ

弾の当った椿は少しだけよろけるだけですぐに体勢を立て直した

（相変わらず化け物加減がぶっ飛んでるねぇ・・クリス・・・はぁ！？）

俺は、冷や汗を掻いている事に気づいて汗を拭っている間に椿がい

つの間にか俺の前に居て首を掴まれ持ち上げられた

「ぐ・・がぁ・・・〜ギリギリ〜・・」

俺は、あり得ない怪力で首を絞められて首の骨が折れそうになっている状況で

「・・・・子供がこんなもので遊ぶな・・・」

バァアンバァアンバァアンバァアンバァアンバァアン

椿が俺が首を絞められた時に落とした銃を拾って俺の手足の関節に向かってゼロ距離から発砲してきた

「うぁあああああああああああああああ・・・ぐぅううううう」

全身の関節が銃弾によって砕かれた痛みは俺に苦痛をもたらした

「ウグゥゥウウウ・・・ぐぁあああああ」

「喚くな・・・耳障りだ・・」

椿はさらに俺の首を絞めている手の力を強め本気で首の骨をへし折ろうとしている椿

（このままじゃ本当に・・・しぬ・・『死にたくない、もう動けなくなるのは嫌だ、あんな無力なのは嫌だ・・・』・・・また、頭の中で変な声が・・・・・だが、声の通りだ・・もう無力を味わうのが嫌だ・・考えろ・・・この現状をどう切りぬける・・・・・・

よし、やってやる）

俺はそう思った瞬間に口の中で鉄分を錬成して作った毒のない毒針を椿に目掛けて吹いた

「プゥ！！」

「ぐっ・・なんだこれは・・・身体がしびれて・・・」

俺の含み針を首筋に受けた椿は、急に俺の事を離して奇妙に痙攣していた

「そりゃそうだ、毒が無いとは言っても麻酔の効果くらいはあるんだよ俺の作った針はな」

椿から解放された俺はすぐに銃を拾って椿から距離を取るために走った

「・・くだらない小細工を・・だが、所詮は子供だましだ」

「おいおい、クジラでも失神してしまうほど強い麻酔だぞ？それを受けて5秒も経たない内にそれを中和するってお前は、河豚か？」

俺は内心驚いていた以前も似たような手は使ったが1分くらいは、動けなくなっていたのに今じゃ数秒だ・・・化け物加減に加速がついてやがる

「ワタシの体に・・・奇妙なものを刺すとは・・・身の程を知れ！！下等生物がぁ！！！」

椿はいきなり激昂して俺に向かって明らかにきついパンチを仕掛けてきたので俺はその攻撃を避けて椿の手首を掴み椿の現在の馬鹿力＋体重を利用して背負い投げをし椿を地面に叩きつけた

「くそガキ！！」

（うわぁ本気で怒ってる・・・だが怒って頭に血が上っては、まともな思考は出来ない）

椿が倒れたまま起き上がる要領で俺に蹴りを入れようとしたが俺はその脚を掴んで関節技に移行して椿の膝の関節を砕いた

その時、ボギィンという鈍い音が鳴ったのだがその瞬間に椿のもう片方の足が俺の顎を切れにとらえ蹴りあげた

俺は綺麗に蹴り上げられ中を待って地面に落ちた

「あが・・ガガ・・・・く・・」

綺麗に強烈なのを子供の体のあごに喰らってしまい全く動けなくなった

その状況で椿にマウントを取られて少しの抵抗も出来なくなった

（作戦を実行する前に動きを全部止められた・・・まずは、〜ドクン・・ドクン・・・・・・・・ドクン〜！？）

影虎サイド終わり

椿？サイド

ワタシは、だいたい3年ぶりに目を覚ました。

私が今まで眠っていた原因は、今ワタシの下で動けなくなっているただのガキのせいだ

このワタシが三年間も自分のこの人類の頂点に立つためにある能力を宿した身体を代理人格などにずっと預ける事になった。

このワタシが・・だ・・・

（だが、それも終わりだ。もうこのガキの動きは封じた。まぁ色々とめんどくさい奴だが所詮は浅知恵・・これで終わりだ・・・ん？）

「う、うぁあああああああああうぁあああああああああああああ」

ワタシがこのガキの首の骨をへし折ってやろうと首に手を伸ばした瞬間にガキは、急に左胸の辺りを強く掴んで酷く苦しみ始めた

「う、うぐぅ・・がぁあああ」

（疾患か？そう言えばこいつ、通常では考えられないほどたくさんの病を患っているんだったな・・）

「せめてもの情けで一撃でお前の脳と顔面を砕いてやる・・・さっさとくたばれ」

ワタシは、本気でこの哀れなガキを殺そうと拳に力を入れそれをガキの顔面に向かって繰り出した・・・

その時だ

ガキの顔面に当たる本当に直前で急にストップしたのだ・・・・

「!?・・・なぜ、ワタシの手が勝手に動いてワタシを邪魔する?」

ワタシは、少し驚きを隠せなかった。

ワタシの振り下ろした右手をワタシの左手が捕まえて必死に阻止していたのだ

グググッ〜グググ〜

ワタシがどう動かそうとしても左手は動かずむしろワタシ自身の手を強く握りしめてまるで引きちぎると言わんばかりに締めつけていた

(なぜ動かない・・・痛ッ?なんだこのガキの能力か?)

ワタシの左腕がどんどん私の右手首を締め付ける力を強くしてワタシの右手首からは血が出ていた。

ワタシはすぐにワタシの下で胸を押さえて必死に痛みと戦っている惨めで見ているだけでイライラする無力なガキを見て犯人はこいつだと認定して魔術を発動してガキの頭を吹き飛ばそうとしたその時、

キィイイイイイインっと頭の中で物凄い騒音のような謎の歌が聞こえた

それは、能力者の能力を封じるようなものと魔術師にとって致命的

になるであろう魔滅の声（シェオールフィア）を混ぜたような不気味でいて清々しい歌声がワタシの頭の中で何度も何度も響いた

「うぁああ・・・なんだこれは・・・なぜ私の頭の中から・・〜キィイイインキュィイイイン〜・・耐えられない！！・このガキか！？このガキのせいか！！？」

ワタシは、だんだんと耐えられなくなり子供に目掛けて銃を突きつけて引き金を引こうとした

キュィイイイイイイインキィイイイイイイイインキュィィィイイイイイイイイイイン

その時、今までで一番強い歌が頭を貫くような音量でそれでいて洗脳されそうなほど繊細な音がワタシの頭を襲った

（うぁああ・・・あああぁ・・もういやだ・・・耐えられない・・・なんなんだこの痛みは？）

ワタシが必死にうまく働かない脳で考えていると

頭の中から消したはずの代理人格の必死に泣きながら訴えかける声が聞こえた

（影虎は俺、私が守る。死なせない。そして、私は死にたくない、あたしはまだ生きてたい。まだやりたい事が一杯ある。影虎としたい事もいっぱいある。
そして影虎と居るのが嬉しくて楽しくて、・・消えたくない。この世界にまだ存在していたい。影虎のそばに居たい。まだ影虎と一緒にいたい。ここまで好きなのに、こんなに幸せなのに、なんで今そ

れをお前なんかにに奪われなきゃいけないの!?そんなのおかしい。あたしにだって幸せになる権利はあるはずなのに!!!お前の代理人格だろうが私は私だ!!今さらお前なんかに今の幸せも影虎も絶対に渡さない!!!!)

それは私の中であまりにも大きすぎる自我だった。本来この身体は生まれた時からワタシの物だ。

だが、ある日私は、世界という物に耐えられなくなりワタシは、代理人格を大量に作り目覚めるまでの間、ワタシの体の制御や調整、そして、生存と維持を任せた。

代理人格とはワタシの中でただのその時だけのピンチヒッターのようでその場しのぎだけの存在だ。

その代理人格の一つ、ワタシの体の常に所有権を与えた代理人格がよもやワタシ自身に刃向かって来て消したはずなのにどういう手品を使ったのか本丸であるワタシを乗っ取り始めているのだ

「うぁあああああやmろ・・・消えろ!!お前なんて早く消えてしまえ!!!」

ワタシは、頭を押さえながら必死に代理人格このガキに『桜小路椿』・・『椿』という名を与えられ浮かれて本来の目的も忘れてただ、平凡な毎日を幸せなどという戯言しか言わない人格を必死に消そうとしていた

しかし、『椿』という人格は、力を弱めるどころかさらに力を強めていたワタシは、ついに我慢できなくなりガキの上から倒れて地面の上でもがき苦しんでいた

「死ね死ね死ね!!お前が消えたらこのガキもいっしょに始末してやる!!たかが代理人格としてワタシが一番最初に作られた。代用品の分際で!!(だまれ!!!俺は、私は、代用品なんかじゃない!!お前なんか大嫌いだ!!)」

ワタシの中で代用品が再び歌いだした・・・

「うぐぁああ・・もう・いやぁあああ・・・もう、やめてぇ!!!」

(絶対のお前なんかにお前なんかに!!!!!お前こそ消えてしまえー!!!!!)

「うぁあああああ・・・・いyぁあああああ・・・や、やめてぇえー!!!!!お願い・・うぁあああああああ」

ワタシは、ゴロゴロと地面でもがいていた。頭が割れそうで自分が塗り替えられていきそうなのだ。

そして、本当に私と言う存在が壊れてしまいそうなのだ

(ワタシは、ワタシは・・・また、誰かに存在を否定されるのか?・・・今度は自分自身に?・・・また、ワタシは避けられる?嫌われる?疎まれる?また怖がられる?・・・・・・なんで?なんで?)

もうまともな思考が出来なかった。ただ、苦しくて、ただ開放されたいそう思っていた

その時だ、

ポン・・・ナデナデ

「・・・うぅ・・・？」

「〜はぁはぁ・・〜椿・・・あんまり・・・クリスを虐めるなよ・・・さすがに・・・可哀想だ・・・クリスもクリスだ・・・・お前は俺がお前のこと嫌いだと思ってるだろうけど・・・・俺は、今のお前もいつもの椿も・・・両方好きだ・・・だから、喧嘩するな・・どっちが泣いても俺が悲しむ・・・あ、もう…無…理〜バタン〜」

自分の胸を必死に抑えながらガキは、顔を青白くして眼の下に怪しげなくまを作りながらも苦しみながらもワタシの頭を撫でながらにっこりと笑ってそう言い述べて前のめりにワタシの胸に倒れてきた

（ワタシの事をこいつは認めてくれるのか？こいつが好きなのは、いつもこいつのそばに居る代理人格（椿）じゃなかったのか？ワタシの事も好きだと？また、嘘だろ？また私の事を恐れてワタシから奪っていくんだろ？『シアン』だってワタシの事を好きだと言ってくれたワタシだって好きだった・・・・それなのにそれなのに・・・・ワタシはワタシｈ・・・・・・・・）

椿？サイド終わり

つづく

魔女再臨（椿の身体の主人格）（後書き）

遂に登場したクリス、影虎が遊ばれています。しかし、影虎を救いたい一心で復活した椿、彼女は、元からの存在ではなく後天的に作られた人格なのです。ハイスッペクな彼女に対しても影虎は好きだと言いました。それは姿かたちでなくクリスと椿の両方を合わせて『好き』と認識しているからです。ではまた

魔女光臨（最強の少女の怒り）

椿サイド

ハッと私は、気が付いた

私は先ほどまで気を失っていたのか？てか、ここどこ？公園？

私は、何してたんだっけ？・・・確か朝、眠たくて起きなかったら影虎に干されて・・・その後、ゲーセン行って・・・その後、腹を刺されて・・・ゾッ！？

私はすぐに刺された位置を確認した私が刺されたのはどうやら上腹部で胃の辺りだろう

「・・・ほっ・・・・良かった・・どうやら大丈夫っぽい」

私は一安心して肩を撫でおろした

そして、私は、自分の横で誰かが倒れているのを目撃した。

子供だ

私は、その子をよ～く見たそれはやはり影虎だった

しかもなぜか背が縮んで子供状態の・・だ・・そしていつもと違ったのは、影虎はほとんど息をしておらずものすごい量の冷や汗をかいていて自分の服の胸の辺りを必死に握りしめていたがどんどんとその力が弱まっているのが見て取れた

「おい、影虎・・・「・・・・・」おい!!大丈夫か?なぁ胸が苦しいのか!?おい!!」

私は、一気に血の気が引いたのがわかったそして私は、影虎の頭を起こして必死に呼びかけてみたが影虎は、私の膝の上あたりでピクリとも動かなくなっていた

(なんで?どういう事?・{サラ}?・・・!!)

私は、さっきまで気にしていなかったが自分の髪を見てゾッとしたいつもの私の髪の色は、黒なのに今は、白い髪と黒い髪そして、先端の辺りだけが黒い髪や根元だけが白い髪など白と黒両方が混ざったような髪の色になっていた

そしてそれを見た瞬間に全てが頭に流れ込んでくるような形で思い出した

(私は、主人格に身体の主導権を奪われ・・・影虎を・・・殺そうとした・・・・でも、必死に抵抗した・・・でもなんで・・私がいくら抵抗しても主人格から主導権は奪い還せない・・・・せいぜい廃人にすることくらいだ・・・なのに今は、身体が私に戻ってる・・・なぜ?)

必死に考えたがそこのところがいまいち思い出せない。

でも、今はそれどころじゃなかった医療には全く疎い私だが人並みには知っているつもりだ。

だから、今の影虎の状況がどういった物かはわからないがヤバいのだけはわかった。

よくよく思い出してみれば影虎は、今回は一度も『異世界樹（ユグドラシル）』を使わなかった。攻撃にではなく防御にもだ・・おそらく使えなかったのだろう・・・『異世界樹（ユグドラシル）』が使えないと言う事は、自分の体も満足に直せないということ＝影虎は、自身が掛っている万病を癒せない・・

（どうしようどうしようどうしよう！！）

私は内心物凄く焦っていた此処まで苦しそうにしている影虎は見た事が無いのだ

普通の人間なら間違いなく死んでいるほどの重病を万単位で掛っている究極の病弱体質の影虎から『異世界樹（ユグドラシル）』を抜けば死ぬそう理解したからだ

（でも、私には、万病を癒す魔術は使えない・・・病院に行くにしてもここからじゃかなりの距離がある
・・・そうだ、確か家には、影虎自身が自身のために処方した薬があった！！あれなら効くかもしれない・・）

私は、少しだけ希望を見つけて影虎をおぶって家に向かおうと思ったその時、

木々に囲まれた公園であるこの場所に２０人ほどの人の気配を感じた

そして、その気配は、少しずつ近寄ってきた

２０人が二十人とも駆動鎧を着ていたおそらく警備員じゃない。鎧すべてが暗闇では見難い夜にまぎれるための迷彩をしていた

そして、そのうちの一人が私と私の膝の上でいまだに苦しんでいる影虎に近寄って来て

私の眉間の辺りに銃を構えて

ボイスチェンジャーを通したような機械的な声で

〝その子供、『被検体６－００３』を渡して貰おう。〟

（こいつら学園都市の裏側の人間か？影虎を被検体と言ったか？つまりそれは、影虎の存在が学園都市に認識されたということか・・）

私がそう考えていた時、鎧男の一人が私に銃を向けている男の肩に手を駆けて

〝何を迷っている！！その女を殺してそのガキを回収しろ。被検体６－００３は、他人の記憶を自由に操作できる能力を持っている。現在気を失っているこの状況を逃せば次は無・・〟

男が男に話している瞬間に私は、チビ虎を抱えて走った少しでも距離がとりたかったのだが

その瞬間にバァンと発砲され私の左足に綺麗に命中して私の足は吹っ飛んだ

大型の銃で撃たれたのだから当然だが私の驚きはそこじゃなかった。

撃たれた私の足が撃たれた直後から再生しだして元に戻ったのだ
それを見ていた駆動鎧の奴らも鎧を着ていてもわかるほど驚いていた。
なんせ、吹き飛んだ足が瞬きした瞬間に復元されているのだから当然である
ただ、今私の体を治したのは、魔術とおそらく能力のようなものだ・・主人格が即死しない治癒過程の加速をし、傷付いたり破壊された身体の部位を通常の人間の能力をはるかに超えたレベルで再生し、ほとんどの毒と病気に対して免疫を与える力・・たしか『超速再生（ヒーリングファクター）』だっけ？
（もしかして、今の私の体は、主人格が主導権を握っている状況と同じだ・・・なら・・・何とかなるのか？）
私がそう思っていると男の一人が何やらパネルのようなものを見だして
〖何をしている？〗
〖この少女の再生速度は異常だ。まだ発見前の原石かもしれない〗
などといきなり揉めだした。
再び逃げようかとも思ったが銃を今度は影虎に向けられ動けなかった
〖今度逃げようとすれば頭を吹き飛ばす〗

そう言われた

絶体絶命、今の私に使える魔術は、罪深き聖火と炎蛇の毒牙（駆動鎧に対してはあまりにも無力だ）・・・今すぐに新書血録の効力で魔術術式を血液中に構成しても良いが時間がかかる・・・そもそも新書血録発動までは最低でも２０秒の詠唱が必要・・魔術の損なところだ・・・・・

私が考えていた時に駆動鎧の男が私の背中に居た病気で苦しんでいる無力な影虎を取り上げ

私に目掛けて男たちが発砲してきた

その時だ、私がキレたのは、私は、私という人格は、影虎を誰かにどういった形でも取り上げられることに怒りを感じる・・・ただ違ったのは、今回は、殺意も同時に沸いたという所だ。

私という人格は、怒りや憤怒は、感じても殺意だけは、感じられないのだ

ただ、今回の物は、怒りと殺意の融合・・・

この時、私？いやワタシ？に迷いはなかった

主人格のワタシは、基本的にしたい事は何でもできる才能のようなものを持っているそれが能力なのだ

逆に普段の私は、何かをするには、必ず素人から始まる・・・私は試しに・・でうまくいったためしがない・・・というよりもうまくいくはずがない・・・だが私は、努力すれば必ず成功する才能は持

っている・・ナルシストとかそういうのじゃない・・・ただ、私とワタシは、綺麗に正反対なのだ・・だから、なんでもできるのがワタシなら何もすることが出来ないのが私・・だが、私は努力すると言うワタシに出来ない事ができ、努力が実れば何でもできる万能なワタシより有能になれる

だから今の状態は、ワタシと私、エゴと慈悲　無口と饒舌　無関心と感動屋　反射と思考　万能と有能、殺意と怒り、創造と完成、天才と秀才、存在喚起力
と完成能力、今は、どれも私のものある・・・・・・

（なら・・・私が負ける事は・・・・・あり得ない・・・影虎を守れる！！）

私はそう思った瞬間に奴らの撃って来た銃弾をすべて避けて人間では到底出す事の出来ないであろう速度で走って駆動鎧の男の機械で強化された両腕を素手で引きちぎった

ブチブチブチッっと簡単に引きちぎれた

そして、引き千切られてようやく私に千切られた事を知った駆動鎧の男は

〜はぁ・・うぎゃ・・うぎゃぁあああああ（バリバリバリ）俺の腕がぁあああああああああ〜

っと両手のあった場所から大量の血を流してボイスチェンジャーで音割れするほど大きな声を出して叫んでいた

そして、突如私が消えて驚いていた無能な駆動鎧の男たちは、自分

たちの仲間の哀れな姿を見て恐れをなしたのかすぐに私に銃を向けてきた。

（だが・・遅いよ）

私は、自分でも理解不能な不規則で非常識な動きでいつのまにか銃を構えた男達の銃口を捻じ曲げた

その瞬間に馬鹿な男達が発砲し全ての大型の銃が暴発し爆発した。

その爆発のせいで少しだけ装甲が削れていた。

（が、しかし、さすがは、学園都市製の装甲爆発程度では、壊せないか・・・でも、もうおわりだよ・・）

私がそう確信してにやりと笑ったその瞬間に

１０人程の駆動鎧の男が雑巾の用に捻じれ出しどんどんどんどん捻じれてし四肢は完全に使い物にならないほど捻じれ装甲ごとぐにゃぐにゃにねじ曲がって捻じれのせいでゆがんだ装甲の隙間から大量の血や肉が噴出した

〝〝〝うぎゃぁあああ・・・〟〟〟

１０人の駆動鎧は無理な動き方をしてぶっ壊れそれを着ていた男達の声が聞こえなくなった

〝な、なにをしたんだ！！？〟

まだ動ける駆動鎧の男が私のことを指さして慌てながらそう言った

ので
親切に
「なに、ただ、お前らの駆動鎧の制御装置とリミッターを取りはずしたんだよ♪〜ジャラジャラ〜簡単言うとハンドルもブレーキもなしでＦ１マシンに乗るような状態だよ♪さっき倒れた１０人は爆発に驚いてついつい動いたから自部の着ている鎧に潰されたってわけ♪」
私が駆動鎧のパーツを地面に落して踏みつぶしてそう微笑みかけると駆動鎧の男の一人が大きな声で
〜みんな!!動くな!!動いたら鎧に殺されるぞ!!〜
〜〜〜〜はい!!〜〜〜〜
〜え?どうい〜ギュィイイン〜なんだ?勝手に・・アガッガガガガ・・・gびゅぁ・・・〜
リーダーらしき男がみんなにそう言った瞬間に周りの奴は察したのか動かなくなったが馬鹿が一人動いたせいで自分の今まで安全だと持って着ていた。スーツに両手両足の関節を粉々に潰され倒れたが未だにスーツのほうは、動き続けていた
ただ、この男達は知らないのであろう動かないと言う事が生物にとってどれだけ辛い事かという事を・・
そして、１分後・・・駆動鎧の男たちは、必死に頑張って動かないでいた

{{はぁはぁ・・・グ}}

{{いったいいつになったら応援が来るんだ!?}}

{{俺だんだん体中が攣ってきた・・}}

などと自身の限界を感じながらお互いに励ましていた

私はずっとそれを公園のベンチで眺めていた

影虎の身体は心配だが今のところ特に問題はなさそうだしいざとなれば今の私ならどうにかできる・・そういう自信があった・・普段の私には無いエゴ・・だとは分かっているが影虎を私から奪おうとしたコイツらは許せない。殺しはしなくても・・・生まれた事を後悔させる・・・それまでは許さない

そう思っていた時に

{{うgぁあああとt、止めてくれぇえええええ・・・アグググ・・グぅ～・・}} gシャンア

私がそう思ってた時に一人の男が動いて自滅した

「フフフ♪・・・ねぇ・・一分間も動かないなんて大変だね~・・どう、助けてあげようか?可哀想だけど応援はこないよ?人払いをすでにしてあるからいくら待っても来ないからさ・・・一人だけ助けてあげるよ♪助けてほしい人は、手を上げて」

私がそう笑いながら猫なで声で言うと駆動鎧の男のひとりが我先に

と手を上げた

{はい！！おれを、俺を助けてくれ！！}

そう言っていた・・・しかし

{ば、ばか}

{え？しま{ギュィィィン}うぁぁあああうでがあしがぁあああ}ガン

{おれまで巻き込・・・うぁあああああとまってくれぇえええそっちにはまがらｎぁあああああ}

一人の馬鹿が動いて鎧が勝手にむちゃくちゃに動き出してその動いた手が隣に居た全く動いていない奴に当り2人そろって鎧の暴走の餌食になっていた

「フフフ・・・ハハハハ、馬鹿だよ本当に馬鹿だよ「はい！！」だってさ・・・あんたら本当に裏世界の人間？ちゃんちゃらおかしくて笑いが止まらないよ♪」

私は眼から出た涙を手で拭いながら腹を抱えた笑った自分が最低な事をしている自覚はあるが最低な人間たちに何をしようと私の勝手だと思う・・これもエゴなのはわかってる・・それでも

「う、ぐ、」

かすかにうめき声が聞こえた駆動鎧の男たちではなく男の一人に捕まえられている子供になっている影虎からだ

その瞬間一気に私の頭は冷えた・・・

（私は、影虎の事を無視してあの時の復讐をしようとしていただけか・・・そうだ、影虎が苦しそうにしてるのに・・）

そう思った瞬間、男に一人が

〝おい、小娘!!おれたちを解放しろ!!さもなければこのガキを巻き添えにして死んでやるよ。お前はしらなかったみたいだけどなこの鎧には、自爆装置もあるんだよ!!てめぇは、それを解除はしてない。つまりこのガキは人質だ!!!〟

そう、私に目掛けて男が声を張り上げてそう言った

その行為が私をどれほど怒らせるかも知らずにな・・・

椿サイド一時終了

魔女光臨（最強の少女の怒り）（後書き）

自分勝手でエゴの塊で強い椿さんの誕生です。正直言って自分の小説では椿さんはかなり上位に食い込んでいます。ではまた。

魔女進化（美しき魔性の女）（前書き）

気が付いたら総合評価が１５０を超えていてＰＶが７万件を超えていたので気分が良いので投稿します。

ではどうぞ

魔女進化（美しき魔性の女）

｛おい、小娘！！おれたちを解放しろ！！さもなければこのガキを巻き添えにして死んでやるよ。お前はしらなかったみたいだけどなこの鎧には、自爆装置もあるんだよ！！てめぇは、それを解除はしてない。つまりこのガキは人質だ！！！｝

そう、私に目掛けて男が声を張り上げてそう言った

それが私をどれほど怒らせるかも知らずにな・・・

椿サイド一時終了

「｛ギリギリ｝｛おいどうした小娘！！早く解放しろっていってん｝ダマレ」

歯を噛みしめながら怒鳴った椿

｛おいおい、なんですか？やつ当たりですか？・・・・はぁ・・おいなんだよ・・急に背が伸びた？はぁ？急に大人になった？な、なんだよ・・ちかずくんじゃねよ！！それ以上ちかよったら｝

男は怯えていたなぜなら、さっきまで自分の前に居たのは、黒と白の混ざった髪の色をした女だが明らかに小学生か中学生くらいの小娘だった・・・ただ今はどうだろう？

美少女は、まるで今まで未完成の蛹から脱皮して美女に変わったか

のように変わっていたのだ

男の前に居るのは、赤い瞳に黒と白の混ざった髪の色までは同じだ。ただ違うのは、今目の前に居るのは、明らかに成熟し女性と呼ぶにふさわしい容姿で綺麗過ぎて怖いそう言う印象を受けるほど男の目や周りの男の目にはそう見えた。この状況でも頬を赤くして見惚れていた者もいた。あまりも綺麗過ぎてあまりにも可憐過ぎたのだ・・・のめり込みたいほどはたまた人生を捨ててもいいほどだった。

そして、その女は、一歩一歩影虎を掴んだままフリーズしている駆動鎧の男に微笑みながら・・

〔『〜(その子を還して)〜』〕

ただ、そう言った、綺麗な声でそしてまるで誰かを魅了するかのような優しい声でこの声を聞いた瞬間に誰もが女神という神が居ることを認めてしまいそうなそんな頬笑みと声だ

その声でそう言われた男は、しばらく硬着してすぐに

〜わかりました。〜

っと魂が抜けたような声でそう言い影虎をすぐに妖艶な女性に手渡し鎧による自滅し体を潰した。

〔『〜(…フフ♪…可愛い♪)〜』〕

影虎をその大きな胸で抱きとめ優しく頭を撫でながら影虎をみて微笑み妖艶の女性は、今度は、未だに自滅せずに耐え抜いている奴に…

〜（「『【動きなさい】』」）〜

と再び誰かを魅了するかのような優しい声でそう言った。

その瞬間先ほどと同じでさっきまで頑張っていた奴等がいきなり

〜〜〜…はい〜〜〜

そう言った直後に男たちは、急に動き出し自滅し死にはせずとも血の花を咲かした

そして、その光景を見れば誰でも目を逸らしたくなる光景を妖艶の長髪女は、子供を胸に抱えながらただそれを眺めていた

そして、

「『〜（もういいよ、気が済んだから許してあげる。ただ、二度と来ないでね…早く帰らなきゃ・・この子が可哀想そう）〜』」

妖艶の女は、そう言い残して一瞬ではなく徐々に姿が薄れていきその場から霞のように消えた

……

……

……

女が消え公園の広場には、未だにたくさんの動かなくなった駆動鎧の中で手足を潰されはいずりまわることもできなくなった２０人の男達が倒れていた。

そして、公園の広場から少し離れた公園に植えられた春には花見のスポットになる桜の木の後ろでしゃがみ込んで頭を抱えながら大量の冷や汗をかいている人物がいた

影虎や一真そして、椿と同じ学校の制服を着た。学園都市・・暗部『グループ』のリーダー土御門である

彼は未だに先ほどの光景を思い出し身体が震え動けないでいた

無残な光景だったからとかえぐかったとかそういうことではない彼は、裏で動いている以上は、そんなものは腐るほど見てきた。彼が恐れているのは

先ほどの黒と白が反発しているような白と黒の混ざった長髪の髪を持った女だ

あまりにも例外過ぎて彼女の収まる枠と言う物が見つからないほどだ

姿にしても言動にしても全てが規格外、おそらく学園都市でいくら計測しても彼女は能力者としても計測不能、魔術師にしても例外で異端と言われ魔術師とすら名乗らせてはもらえないであろうそれどころか修道女や何処かの教派を持つことすら許されない。誰からも爪弾きにされるいや、誰からも見とめてもらえいようなそんな印象を受けたのだ

そして、彼女は、土御門元春に対して「二度と来ないで」と言ったのだ

（・・・あの不気味な女・・・おれに気付いていただと?あり得ない・・・だが、一部始終を見たところあの女は、新書血録であるこ

とは、間違いないが・・話に聞いてたのと違うぜよ・・思わずときめいちまったが急に成人になるだと?それに確かに新書血録は戦えると聞いていたがそれは、いっぱんの魔術師としてだ・・・あんな、おぞましいモノなのか?アレイスターに匹敵しかねね~ぞあんなもん・・さすがは、二代目のアレイスターと呼ばれるほどなだけはある・・・とりあえず『グループ』には、もう一人、化け物みたいに強い奴が必要だな・・今の戦力じゃ今の新書血録クラスの相手の相手は難しいを通り越して自殺だ・・・)

その後、土御門は、震えが収まると同時に何処かへ消えた

「割にあわねぇにゃ~」

っと呟きながらまるで自分を落ち着かせるように・・・

・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・

此処は、影虎たちの家のベランダ

其処には、子供状態の影虎をまるで母親のように優しく抱きかかえた星をちりばめたマントのような物を纏い身体を隠している白と黒の長髪な妖艶の女性だったここまでくればわかるがこの女性は、椿である。

椿は、窓を開けようとするが自分で戸締りしていたので

〔『(はぁ~・・・自分で閉めたのだからしょうがないわね・・)』〕

椿はそう言うと細く白い指を窓に伸ばして少しずつ窓をすり抜けた

物理法則無視も良いところである

そして、椿は、鍵を開け影虎をすぐにソファに寝かせると影虎の部屋に行き鍵を無視して開け影虎が薬を置いていそうな場所を逆探知しそれを見つけ椿自身の予言ともいえる判断で薬を選別しそれを影虎に飲ませようとしていたのだが影虎はほとんど息もせず執拗に口を開けなかった。

椿サイド再開

（・・・影虎が・・・飲んでくれない・・・・）

私は思い出した影虎は、影虎は、眠っている時や病気で苦しんで居る時は、歯を噛み締めて我慢する癖があって意地でも口を開けないんだ

（どうしよう、このまま無理やり飲ませるか？・・・）

「『～（ねぇ影虎、死にたくないんでしょ？ならお願いだから口をあけて？飲まなきゃ死んじゃうのよ？ねぇ）～』」

私は必死に影虎に呼びかけた

すると

「う、・・・」

影虎が少しだけ返事をしたどうやら少しだけ意思気を取り戻したみたいだ。

〔『～（「ねぇ影虎、早く口あけて？これ飲んだら楽になるから。ね？」）～』〕

必死に私がそう言うが影虎は、私の姿を見るなり物凄くいやがってすこし抵抗し出した

影虎は、少し触っただけでわかるくらい高熱を出している。

だから、記憶が混乱しているのかもしれないし第一今の私の姿は、私だと理解出来る人は少ないはず・・・でもどうやって戻るのかまでわからない

〔『～（影虎、お前を助けるためなんだ、お願いだから・・）～』〕

「うう～んうぅん」

私が少し怒りながら言ったら影虎は、目に涙を浮かべながら首を振って嫌がった

（・・・もしかして、影虎、今、記憶が本当に混乱してる？・・・自分がだれかもわからないのか？・・・影虎が自分だってわからないのか？・・・絶対にそうだなら無理にでも飲ませてあげないと・・）

私はそう判断すると影虎の小さな口を無理やり開けようとしたが影虎もなかなか頑張るせいで開けてくれない

〔『～（口を開けなさい！！『エルク』！！（？））～』〕

私は、ワタシ自身ですらよくわからない名前を呼んで一瞬だけ動きが止まってしまった

しかし、幸いなことになぜか影虎は一瞬ビクっと驚いて少しすると少しづつ影虎が素直に口を開けた。少し怯えてはいたのだが開けてくれたので薬を口の中に入れて

〔『～(飲んで)～』〕

私は、そう言うがうまく飲み込めないようだった

〔『～(・・・仕方ない・・・)～』〕

「ん～・・うぐ～チュ・・ゴpクン～・・pファ・・・・はぁ・・・はぁ・・・・ス～ス～・・・ス～」

私はすぐに口に水を含んで影虎に口移しで飲ませた

薬を飲んだ影虎は、薬の中にあった速効性の鎮痛剤が早くも効いたのか少しずつ楽そうに私の膝の上で眠った。

〔『～(ふぅ…良かった♪)～』〕

私はそう言って一息ついて安心して小さくなって私の膝の上でスヤスヤ眠っている影虎の頭を撫でながら目の前にある鏡を見て考えていた

・・・さっき頭の中が真っ白になって気が付いたらこんな姿になってたけど・・・まるで別人みたいだな…私の面影が残ってはいる

けどこんな女になるとは・・・でも、よく見たら・・今の私の顔や姿…影千代に似てる気がする…それもかなり似てる…そりゃ影虎には悪いが影千代になった時の影虎は、美人になってて背も高くて怖いけど憧れてもいた…でも、この姿・・・影千代より多少年上の女性ってところか？

「『〜（フフフ・・あ、うれしくて思わず笑っちゃった…）〜』」

ついつい自分が大人になったのがうれしくて笑ってしまったが…

「『〜（自画自賛したいほど美人だな…私も成長したらこうなれるのかな？もしこれが私の成長した姿ならうれしいな♪）〜』」

私はそう思って笑ったら鏡に映っている影虎を膝に寝かせて撫でている女性も笑っていた

（これくらい綺麗になれるんなら女で生きてもいいかもな・・・・）

などと考えていたら急に眠くなって影虎を膝に乗せたまま眠ってしまった

つづく

椿（大人形態）

ＣＶ田村ゆかり

身長１７６

体重４８キロ

白と黒の混ざった長い髪で整った顔立ちをしていて背が高くてスタイルが忍並に良い若い美女

能力は、『完全設備（フルチューニング）』です。

その中の一つが『超速再生（ヒーリングファクター）』

即死しない程度の怪我なら治癒過程の加速をし、傷付いたり破壊された身体の部位を通常の人間の能力をはるかに超えたレベルで再生し、ほとんどの毒と病気に対して免疫を与える力

他の色々な能力や現象も全てはこの能力のせいです。

詳細については、まだ秘密です。

魔女進化（美しき魔性の女）（後書き）

遂に椿の大人の姿が登場しました。完全に美女です。恐いくらいの・・・そしてこの人は、なんでもやってのけるハイスペックちゃんです。次回の投稿日は変わらず土曜日にするのでご心配なく。ではまた

魔女健在（誰この人？）（前書き）

一週間に一回来る投稿タイムです。

まだ魔女編が続きます。

ではどうぞ

魔女健在（誰この人？）

俺こと桜小路影虎は、朝日が上がったころにいつもどおり早起きしたのだが

おれは謎の現象に見舞われていた

誰かが俺の横で寝ているのだ

いつもなら椿であろうだがよ～く目をこすって見ても目の前に居るのは、白と黒の混ざった長い髪で整った顔立ちをしていて背が高くてスタイルが忍並に良い若い女が居たのだ

「すぅ…すぅ…」

（だれ？）

おれはそう思いながら女が俺を掴んでいる手を離して距離を取りつつ机の隠し棚に秘蔵している拳銃を取り出して女ののところに行こうとしたその時、『プルルルル…。
プルルルガチャッ！！』
「何の様だ…変態…。」

俺はケータイに着信があったので俺は電話に出た。

『おはよう♪
まだ寝てたの♪？』

「そりゃあ昨日あれだけ能力使いまくったら疲れるだろうが…？」

『本当にそれだけ♪？
どうせ夜遅くまであんな事やこんな…『違うわ！！
まず子供状態だっつーの！！」そうだったわね♪』

いちいちムカつく奴だ・・・こっちは、立て込んでるのに・・

『なら要件だけ言うわね♪
カズくん昨日一日の事何も覚えていないらしいのよ♪』

「・・・はぁ？」
意味がわからなかった
『一応カズくんには私が部屋に侵入して、お酒を飲ませたって誤魔化してあるから♪』

「ちょっと待て！！
頭の整理が全く出来てない状態で話を進めるんじゃない！！
えっ！？何！？どういう事！？
あいつ昨日一日の記憶が無いの！？」

あれだけ暴れてて？記憶が無いとか・・・

『そう言った筈だけど…？』

忍に呆れながら答えられた！？物凄くショック・・

「・・・マジかよ～…。
あいつに昨日の事で聞きたい事山ほどあったのに～…。」

『残念でした♪
とりあえず話を合わせておいてね♪
あと葵ちゃんにも伝えてね♪
ｇｏｄ　ｂａｙ♪チュッ♪』

忍が電話を切った後俺は女に近づいて

女の脚に向けて

迷うことなくバァンっと発砲した。

するとどうだろうか銃弾は、女に当らずソファを貫通しただけである

そして、さっきまで俺の目の前で寝ていた女は、現在俺の後ろに居て俺の両脇から手をまわして俺の銃を掴み同時に俺を持ちあげた

「!?何早?（今どうやって避けた?…だめだ、頭に霞がかかってるみたいで思考がはたらかねぇ）〜ギュ〜おい、何、抱きしめて来てんだこのオバ〜ガァン〜痛い」

「オバサンなんて生まれて初めて言われたわ!!意外に傷つくよその言葉!!」

いきなり美人の女は、俺を抱きしめてきたので文句を言おうとすると頭をガンっと殴られた

（なんなんだこの露出狂オバ〜ガァン〜）

「また、ぶった!!!」

いきなりなぜか殴られたしかも今度は、結構本気で痛かったので動いていたのだが未だに女は、俺の事を片手で抱いたままでいた。

「なんですぐに私だってわかってくれないの？」

っと女がいきなり泣き出した

・・・
・・・・
・・・

「ごめんごめんごめんなさい」

俺はあの後、女から椿と俺の関係や俺と椿しか知らない事など１００問問い詰めたが全てに答えられてしまい認めざるを得なかったしかもお互いに赤面してしまう事も聞いたので現在はお互いに顔を逸らしている

「で、そのなんだ椿さん？」

「その？はいらないけどそうだよ」

（めちゃくちゃ可愛くなってる上にお淑やかで優しい！？）

「で、そのお願いって何なんだ？」

俺は、説明の後に椿から言われたお願いと言う内容について聞いてみた

すると驚くべき返答が

「お前の深層心理・・・つまり影千代になった時のお前に遭わせてほしい」

「・・・はぁ!?何言っての?影千代に合わせろ?無理無理、絶対に嫌だ!!俺お前を殴りたくないし第一この腕の計器を使ったら子供の状態の俺じゃどうなるかも想像がつかねぇんだ・・・よ」

「ごめん、どうしても今じゃないとだめなんだ」

椿がそう言いながら俺の腕時計に触って勝手に操作した設定時間は、3時間だった。

「え、ばか、なにかって・・グ・・ウグ・・・いやだ、・・にげて・・tばき・・・はやく!!・・・お願いだから・・・にげて・・」

もう俺の髪は、変色して声もちょっと高くなっていた。そして、時計を使えば理性が保っていられる設計なのだが俺の意識は段々と薄れていった

(・・・・・・椿の馬鹿野郎・・・・・・

にした

途中物凄く苦しんでいたそして、影虎の苦しむ声が無くなった時、
私の前には、長い桜色の髪の毛に顔が暮れているおそらく今の私と
同じくらいの身長の女だおそらく子供状態でこれを使えば子供から
大人に戻れるのだろう

「かげ・・・影千代？」

私がそう問いかけると

「・・・へぇ自分から俺を呼び出すなんて・・・死にたいんだよ
ね！？？」

影千代になった影虎は、迷うことなく銃を抜いて私を押し倒して私
の眉間に押し当ててきた。

「じゃぁな・・〜ググ〜え？なに？」

そして、引き金を引こうとしていたので私は、腕力で体勢を立て直し
今度は私が影千代の両手首を掴んで馬乗りになって影千代を抑え込
んだ

「く、のやろ、どきやがれ！！フグググ・・・ググ」

私に押さえつけられている影千代は必死に腕を動かそうとしている
がいつもの影虎とは違い細くて柔らかい手で普段の影虎くらいの力
を出している私の腕力には勝てないようだ

「くそ、なんで動けないんだよ!?畜生!!・・
ウググ・・・グググ・・・〜ツー〜なんでなんで動けないんだよぉ
おお、お前もお前だ!!なんで俺を拘束出来ているのに俺を殺そう
としない!?」

必死に力を入れて頑張っていたが途中で疲れてきたのか段々と影千
代の動きが弱まってきたそして、歯を噛み占めながら私に噛みつく
ようにそう言った

眼にはたくさんの涙があった

本当に悔しくて本当に憎くて本当に私の事が怖いのだろう

「ねぇ影虎、私の話を聞いて」

「お前の話なんか聞く必要ない!!とっととどけ!!どけ!!」

私が話を聞いてもらおうとしたら影千代は、再びジタバタしだして
首を左右に激しく降っていた

「影虎お願い!!お願いだから私から逃げないで!?お願い今だけ
で良いの、今の私の内に謝りたいのよ。お前をそんなふうにした事
を」

「〜ビクッ〜な、何を・・何を謝るって?・・・ふざけんな!!俺
は、お目のせいでこんな破壊人格になっちまったんだろうが!!俺
を生み出したのはお前だろうが!!其れを今さら謝るだぁ?ふざけ
んな・・ふざけんなふざけんなふざけんなぁあああ!!!!」

影虎は、急に激昂しだした物凄く暴れていた。

私もそれに合わせて力を強くした。すると急に諦めたのか影千代は抵抗をやめ

「グス・・くそ・・・・うわぁあああうぇえええええん」

大粒の涙を流しながら大泣きしだした。忍さんが言っていたが影千代になった影虎は凶暴だけど無理に抑えたりするとおお泣きするって言ってたな。たしか、深層心理が表に出ているため感情の抑制が出来ないって・・
正直言って私が影千代になった時の影虎を泣かしたのは今回で2度目だ。

「ごめん、泣かないで・・・影虎、ただ、本当に謝りたいだけなんだ」

「うぅううぅぁあああああん」

「泣いたままでもいいから聞いて?私は、お前が初めて影千代になった時に裏切ってしまったんだよな?「うわぁあああんうわぁあああん」あの時、お前は自分の体が急に変化して不安で不安でしかったなかったんだよな?急に女になったんだから物凄く怖かったんだよな?どうしても誰かに相談したくてそれでも誰にも言えなくてたまたま、私がお前の変化に気づいてお前は私に初めて頼ってきたんだよな?私の事を信じて相談して来てくれたのに…「ウグ、エッグ・・エッグ」私は、お前の事をバカにして笑った上に怒ったお前が私を蹴ってきた時に勝手にキレてぶっちゃったんだよな?あの時は、本当に私が悪かったのにお前は怒って蹴って来るのが当然なのに私が逆ギレして理不尽な暴力をフルたんだよな?お前はただ、親身に考えて欲しかっただけなのに私を信じてくれていたのに・・・本当にごめんなさい!!許してとは言えないよね。まだ子供で純粋だっ

たお前の心に私自身が一生消えないような傷を付けたんだ。本来なら殺されても仕方ないよね。ごめん今退くから…」

私は、影千代の顔に自身の顔を近づけて話した

私の髪の毛が影千代と私の顔を包んでまるでパイプのようになった

目の前にあるのは、影千代の顔だけで影千代からは、私の顔しか見えないだろう

マジかで見れば見るほど私たちの顔は似ている。似すぎている。もしかしたら私たち二人は、親戚なのかもしれない、姉弟いや今は姉妹かもしれない、双子かもしれない、それほど似ている。

そして、私は話すだけ話して影千代のうえから降りた

今なら殺されても良かった。

昔から3年前からずっと謝りたかった。でも、私は、怖がりで影千代にあの日以降まともに向き合う事が出来なかった。影千代になった影虎の目が怖くて何も考えられなくなるからだ。でも、今の状態の私ならちゃんと向き合えるからちゃんと向き合いたかった。でも死にたくはない。

「ウグググ、う〜・・・」

「影千代?」

私は、目をつぶって待っていたが何も起こらないので眼を開けてみると

影千代が頭を押さえて髪の毛をひっぱりながら三角座りして部屋の片隅で顔を埋めていた

「影虎?」

「ブツブツ・・・」

影千代は、誰もいない壁に目線を合わせながら小さな声で何かをぶつぶつ言っていた

そして、

「ブツブツブツブツ・・・ふぅ～・・よぉただいま、椿♪」

急に表情がかわり私にそう言ってきた。私はなんとなくわかったこれは影虎だってことに

「影虎、影千代は一体どこに〜パチン〜え?」

私は、影虎に近づいたと同時に影虎に笑顔で頬を割とキツメに殴られた。

「どうしたの影虎?」

「どうしたじゃねぇだろ・・・なに勝手に影千代にしてんだよ!?なに勝手に好きにさせてんだよ!!もし、本当に俺がお前を撃ったらどうするつもりだったんだよ?俺は嫌だっていったじゃんか・・傷付けたくないって・・それなのにお前は勝手に・・・・勝手に・・・」

「ごめん、やっぱり私はどう変わっても俺だ・・・・・・でも、なんで急に元に戻ったんだ?」

私は気になっていた事を聞いたすると影虎は、少し笑いながら

「お前の態度が気持ち悪くて興が冷めたって破壊衝動と殺戮衝動を司る人格から言われて・・・伝言で『次俺を呼んだら眉間を撃ちぬく』って本気で言ってた。あと、本当にシクシク痛いなこの野郎・・」

「?」

影千代からの伝言を伝えた後に影虎は、腹を抑えながらコテンと横たわったので私は、不思議に思った

「なぁ椿さん・・・俺、絶対に女に生まれなくて良かったとただ今実感しています。」

影虎は、苦しそうに私にそう言ってきた

「はぁ?どういう意味?なに?また病気か?」

「ハハハ、病気なら楽だよね・・・」

影千代状態の影虎は、ハハハっと苦笑いしながら両手で下腹部を押さえて冷や汗をかきながら横たわっていた。

「本当にどうしたんだ?お腹痛いのか?」

「・・・いや、その、あの、多分なんだけど・・・この痙攣のような腹痛って女性特有のアレじゃ・・・」

影虎がそう言った時に私は、速効で納得した。あれが何とは言わない絶対に!!

「ていうかマジで?お前男じゃなかったの?」

「いやいや、俺は男だけど影千代になる時は生半可な変化じゃなくて生物学的に女になるからあるとは思ってたよこういう落ち・・・痛い・・・てか、体中が痺れてて腰のあたりが砕けそうなほど以上に痛い・・・てか、ズボンが血で汚れて気持ち悪い・・」

「・・・とりあえず頭痛薬飲んどこうな・・あれ鎮痛剤だから・・ついでに着替えような・・・」

私はその後、影虎に頭痛薬と水を飲ませてその後、着替えさせた。マジで女だったので驚いた。

そして、3時間後影虎は、子供に戻った。

「ふぅ〜ようやく地獄の苦しみから解放された〜・・・女ってあんなに痛いの1ヶ月に1回の割合で耐えてるの?」

「まぁそうだけどお前は特にキツイ体質みたいだな・・・痛くて動けなくなって薬を飲んでも移動不可能だったもんな・・・」

影虎が私にぼやいてきたので私は、冷静に答えた。

「・・・いやぁガキでも女よりは百倍マシだな♪で、椿」

「な、なに?」

「そんなに怯えなくてももう叩いたりしないよ。あれは、破壊人格との契約なんだよ。俺が俺自身の手でお前を殴れば今回は出てこない。っていう約束だったんだが・・・アイツ、きっと女子特有のお悩みが来るのをわかってたから俺に身体を譲ったんだな?・・・自分の人格の一つだからとはいえムカつく奴だ!!・・・・・あれ?・・・ふぁれ?・・・なんか・・・眠く・・・・・〜モフン〜ZZZ・・・ZZ」

影虎は、急に手をグーにして天井目掛けて怒鳴っていた

よほどつらかったんだろう

そして、影虎は怒鳴り終えるとフラフラとしだして急に目眩がしたような動きを取ると急に私のほうに倒れてきて私が両手と胸で受け止めると影虎は、眠って静かな寝息を立てていた

「・・・あぁもう9時半か・・・良い子は、寝る時間だよね♪・・・こんなこと言ったら後で怒られるかな?それにしても安心して可愛い顔で寝るよな影虎は♪すぅ・・Ｈｕｎａ ｂｌｅｎｔｙｎ ｙｎ ｆｙ ｍｙｎｗｅｓ，Ｃｌｙｄ ａ ｃｈｙｎｎｅｓ ｙｄｙｗ ｈｏｎ；♪

Ｂｒｅｉｃｈｉａｕ ｍａｍ ｓｙ､ｎ ｄｙｎ ａｍ ｄａｎａｔ，Ｃａｒｉａｄ ｍａｍ ｓｙ ｄａｎ ｆｙ ｍｒｏｎ；♪

（眠れ我が子　胸に抱かれ

暖かく居心地が良い　それは真実
母の腕の中　母の愛
誰にも貴方を傷付けたりさせない）

・・・・・♪・・・・♪・・・・・」

その後私は久々に歌いたくなり影虎の頭を優しく撫でながら子守唄をうたっていた

すると私の胸の上で寝ている3歳の子供より小さい影虎は、私の髪の毛を自然に掴み

猫のように丸まって寝ながら

「う・・・う～ん、・・・ねえ・・ちゃん・・いかないで・・・・わすれないで・・・・おねがいだから・・・・・わすれないで・・・・」

影虎は寝言でそう言った。影虎は、ごく偶にだが寝言で『お姉ちゃん』と良く言う

影虎に聞いても「俺に家族はいない。家族はお前だけだ」っと影虎に変な顔されるので気にしないが

チビ虎になった時だけ影虎は、泣きながら今のように私の知らない影虎も知らない『お姉ちゃん』が何処かに行こうとして物凄く悲しんでいる寝言を言う

（もし影虎に本当にお姉ちゃんが居たのならなぜ、あなたは、こんなに寂しがりやで優しい子を置いて行ったんですか?私は、もしか

したらあなたを恨んでいるのかもしれません。私は、影虎の家族を見つけたその時、あなたなのかもあなたたちなのかもしれないけど必ず殺します。それが知り合いだろうが見ず知らずの人間だろうが・・・影虎と言うこの子を捨てた罪に対する私からの裁きとして…影虎・・フフフ♪)

私は夜空を見上げながら世界に居るはずの影虎を捨てた家族に影虎を見るたびに思う殺害予告をした。そして、目線がカレンダーに言った

「そう言えばそろそろ影虎の誕生日だったな明日・・・プレゼントでも買ってあげようかな?でも何を買えばいいんだろう?そういえばいつも影虎の誕生日の日には、必ずと言って何かあるからなにもあげてなかったな。よし、明日は、プレゼントを買いに行こう!!!」

その後私は、ベッドに影虎と一緒に寝売り次の日の朝、私の姿はいつも通りのチビの姿に戻っていた.

「もう少しだけあの姿で居たかったな・・・・・まぁいいや影虎行ってきます。」

つづく

魔女健在（誰この人？）（後書き）

以上で魔女編終了です。

影千代との対峙、

まともに見える椿さんのの中で黒く渦巻いている影虎を捨てた家族への殺意

影虎の家族とは？影千代と大人椿はなぜ同じ顔をしているのか？

その謎は、渡さんの多分本日中に投稿される話で分かると思いますよ？

ではまた

迷子迷走（え？迷子俺？）（前書き）

本日二回目の投稿です。

感想が欲しいです！！

ではどうぞ

迷子迷走（え？迷子俺？）

朝俺が起きると椿が家に居なかった。

・・・・・・・

「何処行ったんだよ椿の奴～・・・書置きくらい置いていけってんだ｛怒｝」

俺は未だにチビのままだったので椿の服を借りたのだがそれでもダボダボだった。

そして、俺は、その服装のまま学園都市を出歩いていたのだが

「僕、迷子？お母さん探してあげようか？」

「きゃぁ可愛い！！」

などそこらじゅうで子供扱いされて疲れていた。

まぁアイスもらったりしたので特に文句はないがそろそろ子供扱いや迷子扱いは勘弁したい

そう思ってショッピングモールを歩いていた時だ。

「何を買えば喜ぶかな…？」

１０メートルくらい離れた商品棚の前で激しく悩んでいた。

「何やってんの？天野さん？」

俺は近寄って声をかけた。すると天野さんは俺に気づいて・・・

「あれ？チビ…影虎君！？」

「今チビ虎って言おうとしたよな？」

いきなり失礼なことを言いかけやがった・・・

「まぁいい…。
それよりも椿を知らねぇか？」

俺は、朝からずっと椿を探していたので天野さんにも一応聞いてみた。

「へ？椿？
今日はまだ見てないけど…？」

「そうか…。」

俺ははぁ…とため息を吐いてガックリした。まぁ期待してはいなかったが椿が一番仲のいい天野が知らないとなると多分誰に聞いても知らないのだろうな・・・何処行ったの？

「何かあったの？」

「いや、あいつがいきなりいなくなっただけだ…。
たく…あの気紛れ我が儘姫め…何処行きやがった？」

全く悪口の一つは言いたくなるよ・・・朝ごはんも昼御飯のお金も用意してくれてないんだぞ?俺は、カードしか持ってないしこの姿じゃカードはとてもじゃないが使えず補導されるに決まっている・・・

「ねぇ影虎君♪」

「ん?何だ?」

いきなり天野から声をかけられたので聞き返してみると

「あのさ、椿探すついでに一真の誕生日プレゼント何買うかを手伝ってくれないかな?」

「え~~~……。」

物凄く面倒くさい・・・ん?あれは、学園都市の中でも5つの指に入るクレープ屋だ。今は甘い物が食べたい・・・でも、俺では買えない・・・となりにはクレープを大好きでもおかしくない女子高生が居る・・利用しよう(どうしても食べたい)

「まぁ、面白そうだし♪
あれ奢ってくれたらいいぞ♪」

「あれ?」

俺はクレープを売っている車を指さした。それを天野は見た

「いいよ♪
その代わり手伝ってよ♪」

「極めて了解♪」

ミッションコンプリート♪

そして俺と天野はクレープを片手にショッピングモールを歩き回った。

「これ上手い、マジで上手い。」

「本当だね。これおいしい。」

買って貰ったクレープが物凄くおいしくツイツイ頬が緩んでし待ったその後、俺は、約束通り天野の一真の誕プレ選びを手伝うためあちらこちらと連れまわされた。

まぁ俺もそれなりに考えて否定しているので文句を言われる筋合いはないのだが

「これじゃダメかな?」

「却下」

「もうこれで12件めだよ?」

「・・お前それはお前がほしいものであって一真は絶対に臨んでいない。むしろ物凄い顔をされた上に病院に連れて行かれるぞ?故に俺は悪くない。なんだよ一真に少し似てるぬいぐるみって・・・」

毎回毎回どの店でも天野は、良くわからない物を出してくるんだ。
センスが悪いのか?でも、服のセンスは悪くないからな~どうなんだ?

・・・・・ピキーン

俺はすぐに感じ取った。

「なぁ天野、「なに?チビ虎君」・・(こいつもう影虎と呼ぶ気はないな?)・・唯一お前のセンスが他発揮できるものがある」

「え?なになに?」

「実はなゴニョゴニョ・・・・・・・以上」

俺は天野が腰を落として耳を傾けてきたのでコソコソ話でアドバイスをした。

アドバイスの内容については、後ほど

俺のアドバイスを聞いた天野は、タタタっと走って行って帰って来た時には、紙袋を持っていた。

「ありがとうねチビ虎君、ちゃんと買えたよ♪」

この野郎、またチビだと言いやがった・・・

「・・・・・よかたねじゃとりあえず一度チェックしてみよう」

俺は、一応確認のために袋の中をのぞいたまぁ普通袋に梱包されて
て見えないのだがどうしても見たくなるのが人間かな♪

そして、中に入っていたのは、ごつごつした黒い鉄板に表側には、
電盤が付いており電盤に電子文字で１０分と書かれており其処から
あらゆる場所に配線がしてあり横には、ケータイ電話を分解して受
信機能だけみたいな装置が取り付けられており配線を辿っていくと
箱の中身にＣ４と書かれた四角い何かがたくさん詰められていた♪

「よ、「え？」このバカチンが！！〜カツン〜」

「痛い痛いよ影虎クンどうしたの？」

「おまえ、プレゼントに服とかにしろって言ったよな？「うん」な
らなぜ携帯機動式プラスチック爆弾型時限爆弾を買って来ているん
だ？馬鹿なんですか？目が悪いんですか？頭が悪いんですか？病院
行こうか？救急車呼ぼうか？・・・てか、ここショッピングモール
だよね？なんで爆弾買えるの？なんで売ってるの？なんで高校生が
買えちゃうの？ここってモールじゃなくてブラックマーケット？」

っと俺が手当たり次第に文句を言うと・・・天野さんが若干
泣いていた

「わたし、ちゅあんと、買ったもん・・・爆弾なんて・・かってな
い！！」

っと眼に涙を浮かべられながら怒られるのだが

「だったらこれ見てみろよ！！後お願いだから泣かないで！！お願
いします！！」

俺はそう言って袋を開いて天野に見せた

すると

「ふぇ・・ふぇぇえええええ!?」

「声がでかい!!」

どうやら天野も袋の中身を見てようやく事態を理解したらしい

だが、周りの視線が痛いのですぐに天野の口をジャンプしてふさぎ

恥ずかしながら

「ごごめんんさい葵お姉さん（お姉ちゃんとは呼ばない絶対に!!）

買ってくるものよくわからなかったから今度は、ついてきてね」

っと必死に子供のように話、天野の手を引いて目立たないところに

向かった

（ここら辺で目立たないところって・・・・あそこがあった）

俺は天野を森林豊かな公園に連れて行った。爆弾が爆発しても被害

が出にくい場所って言う意味で

迷子迷走（え？迷子俺？）（後書き）

チビ虎君の冒険第一話です。

天野さん結構おドジですね

服を買いに行って爆弾って・・・・・

そして、影虎は影虎でチビ虎状態を満喫してます。

ではまた

時限爆弾（面倒くさい戦い、頑張れチビ虎！！）（前書き）

チビ虎君の冒険終了です。

ではどうぞ

時限爆弾（面倒くさい戦い、頑張れチビ虎！！）

俺は天野を森林豊かな公園に連れて行った。爆弾が爆発しても被害が出にくい場所って言う意味で

なぜか途中に

「か、かわいい、カズくんもかわいいけど生意気な子が急にお姉ちゃんって言うのはキュンと来る・・これって浮気になるのかな？」

っとよくわからんことを口に出しながら悶えていた

「どうかしましたかな？爆弾を買ってきた葵お姉ちゃん♪」

物凄くい声と笑顔でものすごく嫌味を言ってやった

すると

「やっぱり小さい子はかわいい」

・・・・・・{怖！！}

「なんかごめんなさい！！物凄く怖いのでその手をワキワキ動かすのやめて！！お願い！！」

俺は土下座してそう言った・・・だっていつも俺に抱きついてくる椿さんに行動パターンがほとんど一緒なんだもん！！

「あ、ごめん、でもどうしようこの爆弾・・・」

「んなもん解体するに決まってるだろ?起動させられたら厄介だし・・・な〜{〜プチ〜}〜」

俺は天野と話しながらも爆弾を１０得ナイフのハサミで波線を的確に切って爆弾を解除した。

天野に聞いたら紙袋を持ったまま5人組の男達とぶつかり袋が入れ替わったのかもしれないと言っていた。・・・爆弾でテロ活動でもしたかった5人組の皆さんご愁傷さま

「へぇ影虎君って爆弾解体の免許もってるの?」

天野が腰をおろして聞いてくるので

「いいや、ただ、今日のラッキーカラーは赤だから赤色のケーブルを切ってるだ・・・け〜?」

俺がそう言うと天野はすぐに俺の事を抱えて爆弾の入った紙袋から引き離され

かなり離れた場所のベンチに座らされると天野は、座らされた俺に目線を合わせて

「なんて危ない事するのよ!?もしかしたら爆発してたかもしれないんだよ?わかってる?」

っと中々怖い顔で言われちょっとビビってしまった自分がいる

所詮今の俺の心は子供、年上の人間に真正面から怒られれば怖いわ

けで

「ご、ごめんなさい」

子供の状態だと周りの大人が怖い、この精神状態が俺が子供状態の時に椿に抵抗できないわけだ

「あ、ごめんね、ちょっと怒り過ぎたね・・・それにしても影虎君って椿から聞いたんだけど１２歳まで子の身長だったって本当？あまりも小さい姿が板についてる気がするんだ、カズ君よりも小さいもんね」

天野は不思議そうに聞いてくるので俺は

「まぁな、今までの食生活が悪かったのか遺伝なのか１３歳の誕生日を向かえてから急に背が伸び始めてな、実を言うと中学の時は、俺がロリコンと言われるのではなく椿がショタコンと呼ばれていたほどだ」

っと俺は、哀しくも懐かしい思い出話をして

「まぁそれは良いとしてあの爆弾あそこに置いておくわけにもいかないし解除しよ、フフ～ん、今日のラッキーカラーは赤♪」

その後、天野さんに怒られながらも解除に成功した。

「ふぅ～解除完了、予定よりも隣でギャーギャー騒いでいる人のせいで遅れたな」

「影虎君ってなんで子供の時はそんなに生意気なのに今は、優しく

て気遣いできる性格になったの？」

・・・・・・・・

「まぁ椿の理想にかなった人間になろうとあれこれ努力した結果でだな、後は、経験と・・・おぞましい程の椿からの教育だ・・・・」

俺がそう言うと天野は「ふ～ん、やっぱり影虎君と椿って私と一真みたいな関係とは懸け離れたくらい進んでるんだね。・・・そうだ、椿に聞いたら怒られるから聞かなかったんだけどキスはどっちからしたの？」っと聞いてきたので

「・・・ガキの時は、椿から好意と言う形ででも、付き合ってから・・・背が俺のほうが高くなってからは、ちょうどお前がもたれかかってる木に椿が持たれて余所見しているときに俺が唇を奪った。「え？」・・・なんか怖かったんだよ・・あの頃の椿は、結構今以上に荒れててな・・何処かに行ってしまいそうだったからついつい「お前の事が好きだ」っと言って椿の頭の上くらいに手を置いて驚いて何もできなくなっている椿にキスをしちまったのだ♪そしたらさ、椿の奴、怒るのでもなく殴るのでもなくただ、頬を赤くしてシクシクと泣き出したんだぞ？傷つけちまったのかと焦っていたらその後、泣きやんだ椿から飛びかかられて無理やりディープキスされました。荒れていたのは、俺の事が好きになってしまっていてでも、俺がいつまでも子供だから好きとも言えなくてただ、切なくていつか俺が女をつくって自分の事を捨てるんじゃないかって悩んでいて荒れていたんだって・・・いわゆる恋煩いってやつだね。「私が一体どれくらいお前にそう言ってほしかったと思う！！一体どれくらい切なかったと思う！！・・今日は絶対に寝かせない！！寝かせてやるものか！！私を今晩は、死ぬほど愛せ馬鹿虎！！♪」っと噛みつくように言いながら椿さんがそう言ったんだよ♪・・・あれ？天野さ

ん？」

天野さんは、顔を真っ赤にして何かをぶつぶつ言っていた

「・・・・・私も一真と早くそういう関係になりたい！！」

っとなぜか握りこぶし二つをつくって俺のほうを見てそう怒鳴っていた

（しらねぇよ頑張れよこの際だから一真を誘惑しまくって一真から襲わせたら？）

っと口に出しそうになったが言うと一真と喧嘩になりそうなので自嘲した

そして、少し時間がたつとピピピピっと俺が解体した爆弾に装着されていたケータイに電話がかかった。

画面には風見と書かれていた。

おそらく起爆したいのだろう

俺は、その電話に勝手に出て

「もしもし？」

『な、は？子供？なんで爆弾の機動装置に掛けたら子供が出るんだよ？』

相手は電話の向こうで驚いていた。

「あぁあのなかなか高度な爆弾のこと?あれなら俺が解体したぜ♪」

「影虎君?だめだよそんな奴らと電話で話しちゃ」

『・・・あれを解体しただと?・・お前何もんだ?』

っと男が凄んで聞いてくるので

俺は、出来るだけ声を低くして

「俺か?俺様は、『牙桜』、てめぇらチンケな不良集団(スキルアウト)どもの頂点でありながらてめぇらの抑止力だ・・お前ら、なんでショッピングモールに爆弾なんて仕掛けた?まだ、アンチスキルや学園都市に反抗するのならわかる・・だがてめぇらのしようとしていた事は、無差別テロ・・・第七学区の不良集団(スキルアウト)には、ちょっとばかしでも誇りがあると思ってたがどういう訳だ?駒場の野郎がそんなことさせるはずないと思っていたぜアイツは、子供や無実の人間を傷つけない筈だが?」

俺が冷静にいつもの俺の声真似をしながら話していると

『お前が牙桜さんか?この前は、俺の兄貴が世話になったな。覚えてるか?てめぇが仕組んだであろう駒場と警備員の挟み撃ち劇をよ。』

(影千代の時のアイツか・・・つまり組織のほとんどが捕まったため過激な行動に出てるってわけか・・目的はなんだ?テロか?それとも・・・・・自分たちの力を誇示して裏との交渉の材料にでもしたいのかな)

俺がそう思っていると

『「おいガキ!!」』

「え?「なに?」」

急に電話の声と遠くからの男の声が聞こえて俺は振り返った

其処には、１０人くらいの男たちが前に居るケータイ電話を持った男達とこっちに向かって歩いて来ていた男の手元には、爆弾が入っていた者と同じ袋が持たれていた（天野さんのプレゼントね）

どうやらケータイのＧＰＳを利用して追いかけてきたようだ

俺たちと男達との距離は２０メートル・・周りは、木々に囲まれた自然公園、銃を撃ったくらいじゃ誰も駆けつけてこないだろう

どうする?いつもの俺ならこんな奴ら叩きのめして終わりだ。影千代の状態だって多少酷い目には遭うだろうが勝てる、だが、現在は子供の状態、『異世界樹（ユグドラシル）』の出力は、１%以下、元に戻れば出力も戻るんだが・・・今は、１０人の武装した成人男性相手に天野さんを守りながら戦うのは、しんどいんだよなぁ

俺が考えている間も男達はどんどんと近づいてきた、天野も横で少し怯えていた

まぁ普通の女の子ならこの状態は怖いわな・・・どうする?影千代モードになって戦うか?俺だけじゃ天野を守りながら何てのは無理だ。

へたすりゃ2人とも捕まって酷い目に遭う・・・ぞっとするな・・・
・まぁいいや

現状戦力は、『異世界樹（ユグドラシル）』１％、Ｍ５００　１丁、Ｍ３６レディ・スミス　１丁、隣には平均的なか弱い女子高生１人で能力は「重力変化（グラビトン）」レベル２（かけられる重量は１０キロ前後か・・・）

やってやるよ。

俺は天野の手を持って走った

「どうしよう影虎君・・・怖いよ・・・一真ぁ」

っと天野は不安で泣いてしまっていたが俺はずっと走っていた

一真を呼ぶのもありだが銃を持っている相手に一真でも、無傷では済まないに確率が高いだから呼ばない

そして俺と天野は後ろから追いかけてくる男達と少しだけ距離を取って俺は天野を思いっきり引っ張って木の幹の間に出来た大穴に天野を放り込んだ

「ふぇ？なんで逃げないと」

っと天野さんは、本気で怖いのか泣きながら俺にそう聞いてきた

「シッ・・・静かに・・泣いても良いが声を殺して泣け・・・さっき俺らの進行方向１００Ｍに硝煙の臭いがする奴らが５人くらいいた。だから、あのままいたら捕まって俺は殺されてお前は、男達の

玩具なんてパターンが待ってたかもよ♪まぁ安心しなさい♪俺がキチンと一真の所に送り届けてやる。悪いな白馬の王子様じゃなくて姫様を幽閉する龍なんかでさ。後、これ、別に撃たなくても良いからもっとけ脅しになる。後、お願いがあるんだよね♪「お願い？」

そう、あのなゴニョゴニョ・・・

を簡単に殺してもおかしくないくらいの場所、

「お前がやったのか？」

っと男の一人が聞いてくるので

「違うよ？この人を倒したのは、背が高い桜吹雪のコートを着た人だよ♪」

っと俺は怪しく笑いながらそう男達に微笑んでやった

そして、その瞬間に木々にはえていた葉っぱが物凄い勢いで俺を囲んでいた不良集団達に降り注ぎ男達は、葉っぱが身体を切ったりからだに刺さったりして全員血を吹いてたおれた

そして、意識のある一人が這いつくばりながらも俺を睨んで

「なにをした・・・なんだこの葉っぱは、まるで鉄板のように重い・・・」

「ちがうちがう♪俺の力じゃなくて重力の増加の座標攻撃なんて芸当が出来る実は天才さんの仕業だよ。おもしろいよね～葉っ葉いちまいの重量は１グラムにも満たないのに現在の重量は、１０キロこれがどういう意味かわかるか？重量が掛ると言う事は、落下する時の速度も上がり地面に落ちる時の衝撃も増大する。そして葉っぱの形は、鋭角だ。つまり葉っぱの重量を上げるだけで十分武器に変わるんだよ。理解できたかな？後十秒後にまた葉っぱが降ってくるぜ？どうする逃げるか？」

俺がそう言った瞬間に男達は逃げて行ったボロボロになりながらも

実は、もうこんな攻撃予定してないんだよね♪ハッタリとは相撲の手ではなく、ブラッフとかそーゆー類の実物よりも自分や所属する企業などを大きく立派に見せる手法、実は天野の能力もほとんどがうそだ。普通の葉っぱの中に『異世界樹（ユグドラシル）』を混ぜることで凶器にしただけまだまだ、天野には、葉っぱを凶器にするほど力はない。まぁレベルアッパーのせいだな、副作用ってやつか・・・

俺がそう思っていた瞬間に

バァン

っと銃声が聞こえた

俺はすぐにそちらを見た

その瞬間に天野がいたはずの位置の木々がどんどんと倒れ出した

そして、天野が走っていた

その後ろを先ほどの天野のプレゼントの袋を持ち半袖の服にジーパンに帽子を深くかぶった男が追いかけていた。

そして、天野が木を避けて走っていると男は目の前の木に手刀を振り下ろした

すると木が綺麗に切られて切られた木がずれ始めて倒れた

「キャ・・・来ないで・・・一真ぁ！！！」

天野が逃げている途中木の幹に足を引っ掛からせて転んでどんどんと近づいてくる男に覚えて泣いていた

「俺とぶつかった事が運のつきだったなどうする此処で口封じのために殺しても良いが此処は、当初の作戦通り『人身売買(ドールハウス)』に高値で売るのが賢いかな。少しでも財源はほしいからな♪大人しくついてくるんなら一応生かしてやるぜ♪人並みの生活とはいかねぇがな」

っと男は笑いながら天野にそう言った

俺はその瞬間に背中にしょっていた大型拳銃を抜いて男に目掛けてぶっ放した

バァアアアンっとあり得ないくらいの銃声がして俺は、反動で後ろの木に背中からぶつかった

そして、俺の撃った弾丸は、当初狙っていた男の足ではなく男が天野に伸ばした手に当り男の手の肉がえぐれた（かすっただけでこの威力か）

「うあああああ。。あのガキぃ！！！」

撃たれた男は、腕をもう片方の手で抑えながら俺の事を今すぐ殺すと言わんばかりに睨んで来て思いっきり走ってきた

俺は、銃を撃った反動で木に叩きつけられ動けないでいたので

男に髪の毛を掴まれ木に再び持ち上げられながら叩きつけられ横に投げられた

その瞬間に俺の髪の毛はほとんどかられたように地面に散らばっていた

（剥げちまうじゃねぇかこのやろう）

「コノコノこのこの！！クソガキ！！」

「ぐっぐｋぐは」

俺は、男に踏みつけられ腹部を何打も蹴られた

「影虎君！！」っと天野が駆け寄ってきた

「じゃまするな！！」

っと男が天野に向かって裏拳で払いのけようとしたので俺は跳んで天野と男の手の間に入ると男の手が俺に当り俺は吹き飛ばされた

背中に大きな切り傷を付けられて・・・

「カハッ・・・ググ、（裏拳で背中が切れた・・・さっきからこいつは手にカマイタチを纏って攻撃してるってわけか）・・・」

俺は地面にうつぶせになって倒れながらも考えていた

傷の回復は、しているがやはり回復速度が異常に遅い・・・

俺があれこれ薄れゆく意識なのかで考えていると

男は天野の腕を掴んで無理やり連れて行こうとしていた。

「はなして！！」

「大人しくしねぇとお前の顔をあのガキの背中みたいに切り裂くぞ！！」

っと男は抵抗する天野を脅していた。

（手を掴まれてるのが椿ならやる気出るんだけどなぁ・・・・けど天野がいなくなったら椿の奴泣くかな・・・泣かれるのは嫌だな・・・天野を助ければ・・・泣かせないで済む）

「はぁ～あ嫌だな・・・めんどくさいな・・・」

俺はフラフラしながらも起き上がった

起きあがった俺を見た男は、少し驚いて

「化けもんかよ・・・おいガキ！！動くなよ！！この女の顔がミンチになるぜ」

っと天野を引き寄せ天野の顔に手刀を押し当てていた

どうやらカマイタチを作れるのは、掌から3？距離まで見たいだな、おそらく飛ばせないのだろう。それにしても良い切れ味だぜ・・・そして、天野を人質に取っている体制も悪くない

（さて、どうする？どうやって助ける？銃を撃っても恐らくまともに狙えないから却下、ならあれを使うか♪）

「おい、近づくな!!」

「わかったよ近づかねぇけど逃がしはしない・・・ぜ!!」

俺は、天野と男に思いっきり遠くから腕を振りかぶって手を伸ばした・・・・

「え?「なんだ?いったいなウグァ!?」えぇえええええ」

その時だ、俺の左手から先が突如消え天野を人質に取っていた男が火のように燃えて光り輝いている筋肉は燃え上がる炎で、骨はあかあかと燃える石炭のようなもので出来た巨大な腕に壁に叩きおつけられていた。

「アガガガッガガ」

男はどんどんと壁に押し付けられていた

これが俺に最近発症した新たな特技、掴みたいものだけ、掴まなければいけない物だけ、つかめない物だけを掴む事が出来る超巨大な腕、本気になれば太陽ですら軽く掴む事が出来る腕だ

なずけるのなら『真相掌握(トゥルースハンド)』

それを使って俺は、天野をすり抜けてお城に居る男だけを掴んだんだ

そして、それを壁に押し付け続けていた

「あが、がぎゅぎぎ」

「どうした?俺はただのクソガキだぜ?早く抜け出して見せろよ♪人を人質に取った時点で死ぬ覚悟くらいできてんだよな!?お前たちは、ただ平和に生きていた人たちの人生を奪おうとしたんだぜ?別に他人がどうなっても文句言わねぇけど誰が傷ついても他人のために泣いちまうような奴が俺のそばにいるんだよ。だから、し「影虎君ストップ!!!」え~いやだよ~せっかく俺様タイムに入ったのに」

俺が男を握りつぶして肉の塊にしようとした時に天野が目の前に来て俺の邪魔をしてきた

「人を殺しちゃ絶対に駄目だよ!!」

っと肩を掴んでそう言ってくる

「・・・・・・・・・・・・・・はぁ~・・・なら、俺が今日この左腕を使った事を椿には言うな。それを守れば今回は、助ける・・・まぁ監獄で兄貴と仲良くしては貰うがな♪」

その後すぐに俺は、『真相掌握(トゥルースハンド)』を収めて笑いながらそう言った

そして、その後すぐに天野は、警備員をよんでその場を立ち去った

男が最初に持っていた天野のプレゼントを拾って

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

そして、一番、近かった俺の家でしばらく身を隠すことにした。

其処で俺は腹が減ったので飯をつくりながら台所にある鏡で自分の髪の毛を見ていた

さっきかなりかられて中途半端な髪形になっているからだ

ついでに言うと料理をつくろうとした時に天野さんが作ると言いだしたがとりあえず却下させていただき

手ごろな料理と思いながらもついつい凝りに凝ってビーフストロガノフを制作していた。

背が足らなかったので椅子を下に置いて創っていた

「それにしてもこの髪型どうしようかな～この際だからばっさりって言うのも悪くないんだけどそれだとな～」

「髪が短いとだめなの？影虎君。」

「駄目じゃないけど俺って髪型をオールバックと普段の髪形を使い分けてるからな・・よし、伸ばそう」

俺はそう言って『異世界樹（ユグドラシル）』で髪の毛の成長を速めて伸ばした

難点は、もともとの髪の色の黒髪に戻ってしまう所だ・・・また染め直さなきゃいけないな・・トホホ

「え、うそ、「・・・ん？どうかしたか天野さん？」ちょっと良く顔見せて「え？」・・・やっぱりちょっとだけどカズ君に似てる・・・」

（はぁ？俺と一真が似てるだ？馬鹿言うなよ・・・それをいうなら麻華と椿っていう組み合わせのほうが似てる気がする）

などと思っていたら椿となぜか一真が一緒に帰って来たので俺はすぐに錬金術で一時的に髪を染め直した

そして、俺と天野が飯を食っている姿を見て椿は出ていきかけたので俺が止めようとすると身長が身長なので逆に抱き着かれてしまい、椿は現在、疲れていたのか直ぐに寝てしまった。
そして、現在は一真に今日の出来事を全て話すと一真と椿も大変な目に遭ったらしい

「えっ！？そっちでもそんな事があったの！？」

「ん♪まぁな♪」

「影虎君の指示が凄く的確でビックリしたよ♪」

「そ、そうなのか…。」

なぜか一真の表情が惹きつっている。

「とまぁ、それは置いといて、影虎。
あのヘルメット、ちゃんと着けてやれよ。」

一真は、椿が「少し早いが誕生日プレゼントだ…。」と照れながら俺に渡してくれたヘルメットを指差して言ってきた。

「当たり前だ♪椿からの初めての誕生日プレゼントだからな♪」

「それを聞いて安心したよ…。」

俺は一応、かぶってみるのだが頭だけでなく上半身までかぶれてちょっと不思議体験した。

「か、一真…。」

「ん?」

一真は、いきなり葵に呼ばれてそちらを振り向くと、手を後ろにしてモジモジとしていた。
ついに渡すのか♪

「これ!!」

「えッ!?」

いきなり天野が包装用紙の小さな紙袋を渡していた。

「・・・何これ?」

「え〜と…その…それは…。」

天野は顔を真っ赤にして人差し指をツンツンしながらチラチラと一真を見ていた。
・・・助け船を出してやりますか♪

「はぁ…天野からの少し早いが誕生日プレゼントだそうだ♪」

「えっ！？」

「今日俺が天野と一緒にいたのはお前の誕生日プレゼント探しだ♪
だから快く受け取っておけ♪」

これでいいだろう

「・・・開けて良いか？」

「う、うん…。」

天野から許可を貰って一真は小包から中身を取り出した。

「へぇ…ちょうどいい…。」

中身は白いマフラーが入っていた。ほぉなかなか心がこもってますね。来年あたりは手ずくりですか。

「ありがとよ。
葵。」

「う、うん♪」

一真は素直に礼を言うと天野は笑っていた。

「お二人さん♪おあついね♪」

「「あのな（ね）…。
えっ！？」」

「アハハハハ！！」

俺は一真たちを見てついつい笑ってしまった。まだまだ、発展途上の子供の恋だが成就してくれよ♪結構暇潰しになるんだからさ♪

つづく

名前：風見双夜（かざみ　そうや）
能力：風力操作（ウィングコントロール）

風力操作
詳細
風を操作をすることが出来る、手に風を纏わせてチェンソーなんの斬れ味の手刀を作れる。

このキャラクターはユタさんの投稿してくれたキャラクターです。

時限爆弾（面倒くさい戦い、頑張れチビ虎！！）（後書き）

本日影虎が使った、『真相掌握（トゥルースハンド）』の説明

『真相掌握（トゥルースハンド）』

左手から先が突如消えると火のように燃えて光り輝いている筋肉は燃え上がる炎で、骨はあかあかと燃える石炭のようなもので出来た巨大な腕が現れる

大きさは自由自在で力も自由自在で掴みたいものだけ、掴まなければいけない物だけ、つかめない物だけを掴む事が出来る超巨大な腕、本気になれば太陽ですら軽く掴む事が出来る腕

この特技は、もう一人使える人物が実はいます。

以上です

ではまた

感想を待ってます。

四面楚歌２（謎の組織、メタモルからの勧誘）（前書き）

１週間に１回の投稿タイムです。

では、どうぞ

四面楚歌2（謎の組織、メタモルからの勧誘）

俺こと桜小路影虎は、いつも道理起きていつも通り朝食を作ったり忙しかったのだがいつもどおり椿を乗せて投稿しようかと思ったその時に俺のケータイに着信があり

ケータイを開いてその画面を確認すると『園崎　瑠奈』と書かれていたので俺は

「どうした影虎？一真から電話でもあったのか？」

「いんや、だがちょっと用事が入って今日は学校に行けないから椿、お前一人で行ってくれ」

「・・・用事ってなに？」

「用事は用事♪俺とお前は、基本的には隠し事は無しだが個人の時間に関しては浮気以外は、干渉禁止♪ほらほら早く行かないとバス出ちまうぞ」

っと軽やかん椿を家から追い出した

ドアの外で「なんだよ馬鹿虎！！」っと少しむくれながらもエレベーターに向かった椿を見て俺は安心してドアを閉めてドアに凭れ掛り

「もう来てるんだろ？ピカリン」

俺がそう言うとガチャっと俺の部屋からレザースーツを着たピカリ

ンこと幼馴染の園崎　瑠奈が出てきた

「良く私が部屋に居るのがわかりましたね・・・エルク様」

瑠奈はそう言ってサングラスを外していた

「お前は自信を光情報に変換して光回線から俺の部屋に侵入してパソコンの画面から出てきたんだろ？」

「・・その通りですけど普通その発想はこの学園都市でも思いつく人は少ないですよ」

瑠奈がそう言った時に俺は少し腹が立って

「俺がお前程度のクズの能力も見切れないとでも言うつもりか？」

っと少し殺意を込めていうと

「いえエルク様なら出来て当然の事ですよね♪誠に失礼いたしました。」

っと軽くお辞儀をして謝って来た

「わかればいいんだよ・・・で、用とはなんだ？」

（どうも瑠奈の前だと昔の俺でいやすいな・・・とうの昔に消したと思っていた俺の本性がな）

「はい、誠に身勝手ながらこのたびは、エルク様に再び闇を治めていただきたいのです。」

瑠奈がそう言った時俺は迷うことなく『異世界樹（ユグドラシル）』で瑠奈の目を貫いた

「グ・・・誠に申し訳ありません・・・エルク様」

「ふざけるな、俺にもう一度闇に落ちろだと？いつからお前にそんな権限があるようになったんだ？」

瑠奈は右目から出血して痛みを耐えながらもひざまずいていた。

俺は、少し怒っていた

「本当に申し訳ありません・・・・・・「だまれ・・」あがぁ・・・すみません」

俺は瑠奈の言葉がムカついたので『異世界樹（ユグドラシル）』で腹部を貫いた。

俺の本性、それは完全なる『利己主義』

つまりは、俺様だ。

まぁその性格も最近はマシになったと思ったんだがな・・・・

そして、腹を刺されながら痛みに顔をゆがめながらも瑠奈は必死に意識を保ちながら俺の事を見ていた

その瞬間に再び

（あなたもあたしを虐めるの？）

突如、再び目の前にぬいぐるみを抱きかかえながら部屋の隅で泣いていた昔の琉奈の声と姿が一瞬目の前に見え

俺は完全に毒気を抜かれて

「・・・悪い、ついカッとしちまった」

俺はそう言って瑠奈の顔に手を伸ばし俺が突き刺して潰してしまった眼を直してその後すぐに目に包帯を巻いてやった

甘いのはわかってる・・・自分勝手なのもわかってる・・・でも・・・

「マジで悪かったな・・・・「いえ」それで、俺に裏を支配してほしいと言う案だが却下だ。俺は、裏の世界に入らない。どうしてもアイツと一緒に居たいんだ。それに裏での仕事で血の味を覚えちまったらまた、戻れなくなる・・・だから無理だ。」

俺が包帯を巻きながらそう言うと瑠奈はかなり残念そうな顔をして

「やっぱりあの小娘が邪魔なんですね・・・なら、私が」

瑠奈が殺意を込めた目でそう言うので俺は、

「言っておくが椿に手を出そうとしたら例えお前でも殺す。」

俺が力強くそう言うと瑠奈は、微笑んでいて

「今はあの子にゾッコンなんですね・・・羨ましい・・・「瑠奈

？」では、エルク様「・・・ん？」では、今度、私に力を貸していただけませんか？「・・・どういうことだ？」あなたが、移り気なお方で無い事は存じています。そんな御方なら私は惚れませんから♪ですから、無駄にアタックはしません。でも、いつかあの小娘からあなたの心を奪い取るとだけ言っておきます。で、本題ですが・・・今度、私たちの小組織『メタモル』のリーダーと副リーダーを使い物にならなくしていただきたいんです。そして、ある被検体の撃破と保護そして救済をあなたの寛大な心と偉大な力で行ってほしいのです。」

「・・・『メタモル』ってとお前やあの時の鉄人みたいに身体を能力そのものに変えちまう能力者ばかりの組織か？」

「えぇ私たち身体能力化研究の被検体達の組織です。基本的に私たちのようなものを生み出させないために活動していた偽善組織なんですけど・・・其処のリーダー達が私たちを裏切って学園都市の研究者に手を貸したんです。それによってある一人のモンスター的な被検体が生まれました。」

俺はその話を聞いていて哀しい気持ちになった

「それは一人の小さな子どもです。モンスターチャイルド、糸色始です。彼は、強力な念動力の能力者でしたが研究の末に自身の体を念動力に変換する事が可能になって私たち『メタモル』が全員でかかっても傷一つ付けられませんでした・・・そして彼は、マインドコントロール的なものを受けていて・」

「だから、お前は、そいつを助ける事が出来る力を持っている俺様に助けを求めたってわけか・・・それにしちゃ～この前は、やり過ぎだろ？俺あの時、お前も知っているように熱出してたんだぞ？そ

れに今の俺には、化け物を狩る力なんて・・・」

俺がそう言うと瑠奈は嬉しそうに笑いながら

「断る気はなさそうですね・・・あなたは、やっぱり私たち被検体には、心底優しいお方ですね。自分より地位の下の者を従え使いこなしそれでいて下の者に報酬と言う名の幸福を与え自分より地位が上の者を蹴落とし引きずり落とし地べたに這いつくばらせるなど圧倒的な『王』の才を持ったあなただからこそ救える命があります。覇王ではなく絶対的な王で皇帝であるあなたなら・・・そして、レベル６であり学園都市の『神生徒会（マスターピース）』のお力をどうかお貸しくださいい」

瑠奈はそう言い残すとすぐに光になって消えた

俺はすぐにソファーに垂れかかり天井を見上げながら考えていた

「・・・・ガキがマッドな大人どもの食い物にされるのは気に食わないな・・・・・」

そして、１０分間悩んだ挙句

「仕方がない本物の化け物が何なのかを教えてあげよう♪」

俺はそう決めて身体を起こしソファから飛び降りるとケータイにメールが来ていてそれを見ると椿から

『今日、昼飯を用意するのを忘れたので一真の家にでもお邪魔しに行こう♪』

っと書かれていた・・・人任せ・・・・・・まあいいや

「昼までにはまだ結構時間があるな・・・昼寝でもしてよ・・・・・」

俺はこの後すぐに自室で眠っていた

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「ん？・・・・・」

俺は、意識が少しずつ目覚めていくのを感じていた

そして、瞼を開けて上半身だけを起こしてみると

時計では、現在、１４時と書かれていて起き上がろうとしたら

「すぅ・・すぅ・・・」

隣で寝息が聞こえたので見てみると案の定、黒髪を下した椿さんが気持ちよさそうに俺の右手を握りながら丸まって寝ていた

日光に照らされて眩しかったのか俺の影に隠れようともぞもぞと動いていた

「ふ、火の玉さえ無けりゃかわいいのに・・・」

俺はそう言いながら椿の頭を撫でていた

しかし、その時だ、

カプッ

・・・・「いッてぇ！！！！」

頭を撫でていたら椿が急に寝返りを打って俺の指が椿の口元に言った瞬間に噛まれた

そして、段々と噛む力が強くなってきて

寝ているはずの椿さんなんて全身に力を入れて本気で噛んでいた

「フグググ・・・」

「痛い痛い痛い！！椿お前起きてるだろ！？」

「・・・うん〜ガリガリ〜」

「痛いってのこの馬鹿！！〜コチン〜」

俺は少し怒って椿の頭を軽く殴った

すると椿は、頭を押さえて蹲りながら痛がっていた

「殴る事無いだろ！？」

っと椿が目に涙をためながら怒って来るので

「お前だって噛む事無いじゃん?何自分だけ被害者ずらしてんだよ!!」

などと椿と少し口論いなったがすぐに仲直りが出来た

そして、お互いに愚痴りながらも俺のバイクに二人乗りして椿は、俺にちゃんと捕まってヘルメットをかぶっていて俺は椿に貰ったヘルメットをちゃんと装着して一真の家に向かっていた

「なぁ影虎~」

椿が運転しているときに俺を呼んで来たので

「なんだ?」

っと聞き返すと

「お前、今日誰を連れ込んでた?」

おおぉい!?なんだ怖いぞ?なぜばれた?・・・後ろを見なくても椿がどんな顔してるのか分かる気がする・・・・・怒ってる?

「誤解されたくないのではっきり言っておく・・・昔の俺の部下が来てたんだ・・・力を貸してほしいってさ・・・」

俺が背中に捕まっている椿に言うと

「・・・そいつってお前が昔言っていた最高の部下って奴か?」

「あぁそいつだ・・・・安心しろ俺はおまえ以外には傾かねぇよ・

・・・・そろそろ、一真の家に着くぞ?それと今日は、身体測定だったんだろ?どうだ?背は伸びたか?」

俺が笑いながらそう聞くと

「今回もいつも通りお前の捏造した記録のおかげで女子として受けたけど身長は、結構伸びてて１５０をようやく超えた「へぇ～毎日牛乳を飲んでただけはあるな♪」ただ、「ただ?」バストがまた大きくなった・・・「ハハハ「～ゴゴゴゴg」・・・ご愁傷様です」・・・うん・・・・・」

俺が笑うとまるで俺の後ろに般若が居るような気配を感じて俺は黙った・・

それから今日の晩飯何にする?などと話しながらも一真の寮についたのでバイクを置いて一真の部屋まで行って

ピンポーン。っとインターホンを鳴らして

「一真～。
遊びに来たぞ～。」

「早く開けろ…。」

ちょっと待っても出てこないので無断でドアを開けて入ると
「「お邪魔しまーす。
あっ…。」」

「あっ…。」

「「失礼しましたー！！」」

一真は葵の肩に手を置いていると言った若気の至りで間違いを起こす少し前の状態を見てしまった。

（（やばい、天野（葵）のラッキーチャンスを潰してしまう！！））

「ちょっと待て！！

誤解したまま帰らないで！！

Ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ　ｐｌｅａｓｅ！！」

俺と椿は扉を閉め、早急にどこかに行こうとしたら一真がえらい勢いで出てきて俺と椿に「帰ってこい」っと叫んでいた

……

……

「な、なるほど…。

葵は急に泣き出したのか…。」

「そういう事…。

はぁ…。」

なんでも天野は急に泣き出したらしく一真にも良く理解できていないらしい

「エグッ…エグッ…ヒックッ…ウワァ～ァア！！」

未だに離れる気配が無く一真の胸板で泣いている天野…。

どうしたんだろうな？

「う～ん…何があったんだ？

一応検索掛けてみるか？」

「いや、良い…。
こいつの口から言わすよ…。
その方がお前も楽だろ？」

「確かにそうだが…。」

俺の提案を一真が断ったので俺は未だに泣き続けている天野を見た。
（でも、さっきから泣いてばかりで埒が明かないんだよな・・）

「まぁ、気長に待とうぜ。
その間にそこの飯でも食ってくれ…。」

一真はそうめんを指を差して言ってきた・・・・・

「「では遠慮無く♪」」

お腹が減っていたので俺と椿はガッツいて食べた

……

……

……

「「ごちそうさまでした！！」」

俺と椿は見事に完食していた。
そして…。

「一真…。」

「やっと泣き止んだか…。」

ふと横を見ると天野が眼もとを真っ赤にしながらも泣きやんでいた

「ごめんね…急に泣き出しちゃって…。」

「そ、それよりも、何で泣いてたんだよ…?」

一真は、一番気になることを聞いていた。
すると…。

「えっ?
・・・ヒックッ…エグッ…。」

「「「えぇぇぇえ!?」」」

天野はまたマジ泣きしそうになり、涙をポロポロと溢していたので
俺達は三人同時に驚いた。

「一真!!え~と!!え~と!!
すまん!!」

(もう、人の気持ちなんて俺には絶対わかんねぇよ!!めんどくさい!!考えるのが面倒だ!!)

「ングッ!?」
「ンッ!?」

俺はパニックになり謝りながら一真を押すと天野とキスをしてしまった…。

「テメェ!!何しやがる!?」

「今のは許さん!!いくら鈍くても許さん!!」

「イテッ!!痛い!!痛い!!
悪かった!!すまない!!助けて!!」

俺は椿と一真にゲシゲシと蹴りまくられた。
(だって、昔瑠奈が泣いたらキスしたら泣きやんだんだよ~!!)

「ヒッ!?」

「「「ん?」」」

誰かの携帯が鳴り、同時に天野が怯えたような声を出していたので、俺達は天野に注目すると天野は携帯を取りな出しディスプレイを見つめるだけで出ようとはしなかった。

「葵、誰からだ?」

一真はディスプレイを覗いていた。
俺はすぐ記憶消去『受信』で勝手に察知させてもらった

「・・・父親…?」

父と書かれていた(受信されていた)

そして、一真が声に出して呟くと天野はパッと携帯を隠した。
すると、携帯が鳴り止みまた、携帯が鳴り響いた。

「葵？お前が泣いている原因は父親に関係があるのか？」

「・・・」

天野は鳴り続ける携帯を握りしめながら黙っていた。

（原因発見♪）

「とりあえず、出てやれよ…。

聞かれたくないなら外に出とくから…。

良いだろ？影虎に椿？」

「「あ、あぁ…。」」

俺と椿は首を縦に振った。

「わ、わかったよ…。

でも、聞かれても大丈夫だから…側にいて…。」

「・・・了解した…。」

「ありがとう…。」

天野が一真に言うなり一真は首を縦に振ると天野はお礼を言って電話に出た。

「は、はい？」

『おう、葵。

お前今何処にいるんだ？』

「喫茶店で少し時間を潰してる。
で何の用？」

なんか天野の話し方がいつもと違った・・・なんて言うのだろう俺の俺様モードみたいに・・・もしかすればこう言った話し方や雰囲気が天野の本性なのかもな・・・・

『いや、まさか荷物を纏めてるんじゃないかと思ってな。』

「「「ッ！？」」」

天野以外の全員が顔をあげて驚いた。
荷物を纏める？引越しの話？

「いや、してない。
それd…『そうか。それはこっちで明日にはしとくから見合いの時間には間に合うように。』」

「「「ッ！！？」」」

見合い！？え？天野さんってちょっといいとこの出身？けどなぜ？もしかして何かの冗談かな？

『じゃあ。ブチッ…。』

「ちょッ！？」

そこで無理矢理会話が終了した。

「・・・葵？見合いってもしかして、あの結婚を前提にするあれ？」

「・・・多分…。」

「「「・・・スゥ～…。
えぇぇぇえ！！」」」

俺達は顔を見合わせて息を吸って叫んだ。

「見合い！？何で！！何故見合い！？どうして見合い！？何事見合い！？」

「一真！！落ち着け！！
良くわからん言葉になってるぞ！！」

一真はパニックになり目がクルクルと回りながら天野に問いかけていたので俺が止めツッコんだ。

「無理無理無理！！
落ち着け何て無理！！
今なら小学生レベルの計算も分からないぐらい落ち着けねぇよ！！」

「1＋1は？」

「2！！」

「いけるじゃねぇか！？」

「グハッ！！」

椿に突如問題を出されて答えると椿に腹を思いっきり殴られていた…。
椿さんも若干パニックになってるな……
……
……
「なるほど…。
昨日いきなり言われておまけに誰かは愚かどんな奴かも見合い相手が分からず、話を無理矢理進められてるわけか…。」
「うん…。」
あれから事情は全て天野から聞かせてもらった。
その前に俺は拳骨をパニックになっていた一真に喰らわせた。
「でお前はどうしたいんだ?」
「えっ!?そんなの嫌に決まってるじゃん…。」
椿が聞くと天野は弱気な声で言っていた。
「なら、断れば良いだろ?」
「断っても無駄だよ…。
無理矢理でもお見合いさせられるよ…。
お父さんはそういう人だから…。」
椿がそう言うと天野がポツリポツリと言葉を出していく。
「なぁ、葵…。

何故そこまでお前は見合いを嫌うんだ？」

「ふぇ？」

「お前、好きな人でもいるのか？」

「「「えっ！？え～と…。」」」

一真の発言に一真以外の皆が驚き目を逸らした。

（俺は人外だから人の心が良くわからないけど・・・一真って鈍い？）

「そ、それもそうだけど、もうひとつ理由があるんだ。」

「もうひとつ？」

天野は真っ赤にしながら手を振っていた。

「うん…。

お父さんの仕事は薬を開発する仕事なの。

でも、家の事はお母さんに任せっきりにしてた挙げ句にお母さんに試作品の薬を毎回飲ませていたんだ…。

私は辛くないの？って聞いたらお母さんは毎回、『私が人の為の犠牲になれるんなら幸せだよ…。』と私に言ってくれた。

でも、最悪の事態は起きた…。

お母さんに飲ませた薬が失敗してお母さんは植物人間状態となり、入院…。

お父さんのそのあとの一言は…失敗したか…。

次は…必ず…と言って出ていっただけだったの…。

そして、今度は私を道具にする気なんだよ…。」

天野は話終えるとギュッと制服の袖を握った。
俺達は黙って天野の話を聞いた。
ふ～ん科学者ね・・・やっぱり大人って奴は、クズが多いようだな・・・『神生徒会（マスターピース）』総集会での決議・・・俺と真逆の『生徒会長（プレジデント）』の意見も一理あるな・・

「人の事言えねぇが、酷い親だな…。
逃げ出すか？」

「ううん…そんな事しても、無意味…。
直ぐにアンチスキルを使って見つけ出して来るよ…。」

「既にお手上げ状態か…。」

天野が答えて一真が手をあげて言った。
俺の記憶消去（メモリーキャンセラー）を使うと言う手もあるが、消したとしてもまた通報されれば永久的に能力を使わなくてはダメなので採用は出来ない…。

「う～ん…何か良い方法は…「あるぞ…。」「「えっ！？」」」

椿が悩んでいる俺達を差し置いて言うと俺達は驚いた。

「つまり、見合いを潰せば良いんだろ？」

「「ちょっと待てー！！」」

椿の爆弾発言に俺と一真が怒鳴った。
この人の考えは人を物としか考えていない

「て、手荒な事したら通報されちゃうよ!!」

「え～と…何を早とちりしているんだ?
とりあえず説明するぞ。
一真、葵の彼氏になれ♪」
「・・・は?」

「えっ!?」
(あぁそう言うことね♪)
俺はすぐに納得した。

「何で彼氏にならなきゃいけないんだよ!?
それにこいつには好きな人がいるだろうが!?」

「なら、葵の見合いを潰す事は不可能だが…それでも良いか?」

「一体さっきから何を・・・・・・なるほど…そういう事か…。」

「えっ!?どういう事!?」

一真も椿が何を言いたいのか分かり天野は一真に尋ねていた。

「多分、椿の作戦は俺が葵の彼氏のフリをして、葵の父親と話をすれば諦めて見合いが潰れるだろうと言った作戦だろ…。」

「その通り♪」

「えっ!?」

俺が内容を話すと椿はニッコリ笑って頷き葵はまたもや驚いていた。

「そんなの迷惑だよ…。
私なんかの為に…。」

天野が俯きながらそう言った。

「でどうする一真?
やるのか♪?やらないのか♪?」

「う〜ん…。」

俺が物凄く楽しそうに言うと一真は腕を組んで悩んでいた。
そして…。

「はぁ…。
一肌脱いでやるよ…。」

「えっ!?」

一真がため息を吐いて答えると天野は驚いていた
すると椿が俺にすり寄って来て小さな声で耳元に

「もし、一真じゃ無理ならお前が助けてやって。お願い」

っとなぜか少し可愛い声で言われたので俺は

一真のお人よしが移ったかの様に

「了解♪」

そう言った

「決まりだな♪
とりあえず、時間も時間だし、向かうぞ♪」

「「了解…。」」

俺と影虎は椿にそう言って立ち上がった。

「行くぞ、葵…。
案内よろしく。」

「えっ!?えっ!?あっ!?」

とりあえず時計を見てみると、３時５０分だったため天野の家に向かう事にし一真は天野の手を引いて家を出た。

つづく

四面楚歌２（謎の組織、メタモルからの勧誘）（後書き）

以上です。ある意味瑠奈さんの能力は万能です。ただ弱点と言えば光速で移動するときは、目の前に障害物があるとそれにぶつかってしまう所ですね。後は、攻撃する時に身体を一度、実体化させなければならないのでカウンターには弱い方です。

ではまた

威風堂々（天野さんの家は、・・・・おヤクザさん？）（前書き）

今回は天野さんのおうちへんです

ではどうぞ

威風堂々（天野さんの家は、・・・・おヤクザさん？）

さてさて、ひょんな事から一真は天野の一時的な彼氏となり俺の能力を使って学園都市を出て天野の家に向かっているのだが、なかなかつかず椿がつかれたと言うのでおぶりながら天野の案内の元歩いていた

「つ、着いたよ…。」

「ん？そうか…。
了解…し…た…。」

天野が言うので俺達は前を見てみた。
すると俺達の目の前には大きな古風溢れる門があり、表札を見ると「天野組」と書かれていて言葉を失った…。そして、とりあえず椿をおろした

「ま、まさか…あ、葵…。
天野組って…。」

椿は指をさして恐る恐る天野に聞いていた。
いやいや、これって聞くまでも無く・・・

「う、うん…お父さん…裏ではヤクザの仕事だよ…。」

と天野は少し目を背けて言っていた。
（ですよね～♪♪♪）

「「「・・・エェェェエ！？」」」

って俺達は驚きを隠せないで声をあげていた。（俺様はノリで♪）

「何故そう言う事を始めに言わないんだよ！？」

一真は天野に怒鳴った。

「だ、だって…嫌われたくなかったから…。」

「「「はぁ？」」」

俺達三人はまたしても声をあげてしまった。

「私が昔に虐められてた理由はこれだから…言いたくなくて…隠してごめんなさい…。」

珍しく天野は俯いたまま謝っていた。（俺の周りにいじめられっ子が多いね～・・・なぜだろうな・・・）

「ふぇ？」

「あのな…葵…。
そんなくだらん理由で嫌ったりしねぇし虐める訳無いだろうが…。
全く…。」

（本来なら俺が止める事になってるんだが中々いい雰囲気なので俺が出る幕は無いな・・・仕方ない・・・）

そして、俺は腕時計に手をかけて制限時間を設定して操作した。

「変身！！」

「「「へ？」」」

そして腕時計のボタンを押した。
俺の髪が長くなりさらには桜色に変わり胸が出てきて、筋肉が無くなりスラッとしてきた。
（く・・・ぐ・・・やっぱりこれは苦痛だな・・・）

そして何とか何とも言えぬ苦痛が収まってどうやら完全に影千代の姿に変身が完了した。

「変身完了♪」

「「エェェェエ！？」」

いきなり俺が影千代に変わり皆は驚いて椿は一真の制服の袖を持ってブルブルと後ろに隠れていた。
（・・・怖がらせちゃったな・・・）

「えっ！？何！？何！？
ストレスでも溜まりに溜まってたのか！？
クソッ！？こんな時に！？」

すると

一真は携帯を取り出して忍に掛けようとした。（マズイ！！変態の介入だけは阻止せねば！！）

「一真落ち着け！！

影虎だから!!Ｉ　ａｍ　Ｋａｇｅｔｏｒａ!!ＯＫ!?」

「えっ!?影虎!?自我あんのかよ!?」

……

……

……

「と言うことは8時になるまではその状態って事?」

「その通りだ。」

俺は影千代状態になった事情を説明して、腕時計によって自我を持った状態で影千代になれるが、椿に触れると危ない状態になると伝えた

それも、8時に指定した為にこっちの時間で8時にならないと元に戻れないんだ…。

「しっかし、何でまた影千代モードになったの?」

「まぁ、気にすんな♪

それよりＬｅｔ's　ｇｏ!!（≧∇≦）σ□」

（お熱い関係を邪魔したくないので♪）

「「「あっ!?ΣΣ（ °д°）」」」

ピンポーン!!

俺がインターホンを鳴らすと一真達は驚いていたが容赦なくインターホンは鳴り響いた。

すると、いきなり門が開いて中から少し老けた小太りの優しそうに

微笑んでいる男の人が出てきた。

「おう、葵よく戻ったなと言いたいが、その人達は誰だ?」

早くも男の人が俺達に気づいて食い付いてきた。

(こいつが天野の親か・・・・隙あらば食い殺す♪)

「私の友達よ。
詳しい事は中で話すから。」

「そうかい。
なら中に行こうか。」

「「「お邪魔しまーす。」」」

天野の父親に案内されて天野の家の中に入った。

俺達が歩いている両脇で男の人が整列して頭を下げていた。

……

……

「で、そちらの三人はどちら様で?
遊びに来たようには見えないが…。」

俺達は中に入り、天野の父親と対面して座った。

(ふ~ん、一応インテリヤクザじゃないみたいだな・・・むしろ実働派か・・)

「え~とね…。
お父さん…。
こっちは私の友達の桜子路　椿でこっちは桜子路　影千代…。

そして…。」

「俺は葵の彼氏の負導　一真だ。
お見知り置きを…。」

一真は天野の変わりに丁寧に言って、天野は一真をチラッと見ると真っ赤になっていた。
へぇ～一真の奴ビビって無いとは一般人にしちゃいい度胸じゃん♪

「彼氏？
なるほど…葵から見合いの話を聞いて止めにでも来たか？」

「その通りと言えば？」

一真はを見下すように天野の親父を見て答えた。（・・・あんまり調子に乗って殺されても生き返らせないよ？）

「なかなか面白い奴だな…。
どうだ？俺と二人で話さねぇか？」

「・・・まぁ、良いだろ。「一真！！」心配すんな影と…影千代…。
悪いが三人共、席を外してくれ…。」

一真が頼むので渋々俺と椿と天野は席を外した。

そして俺らは、天野に連れられ広間に向かった

其処で俺と椿は、出来るだけ距離を取りながらも座布団に座っていた

天野の家の門をくぐってからは明らかに俺や椿、そして、一真にさ

っきが向けられている・・・まぁ俺も椿を狂気に当てないために殺気を振りまいていたのだがどうやらそれが悪かったようでゾロゾロと怖い顔の男達が広間に入ってきた

「・・・（影・・）・・・」

椿は少し怖がって俺に助けを求めたかったみたいだが俺が影千代の状態なので縋りついて来れないようだ

「はぁ～椿おいで、本気で我慢して見るからそんなにはなれなくていい後ろにいな」

「うん・・」

っと椿はすぐに俺の後ろに来て座っていた

まぁ触らなければいいので大丈夫だろう

俺がそう思い右ひざを立立てその上に手を置いた状況で座っていると

「おい、譲ちゃん、「（今は俺か?）あぁ?」・・・あんまり調子にのるつもんじゃねぇぜ」

一人の顔に傷を持った男が俺にそう言ってきた

「いくら葵お譲の御交友とはいえわしらに殺気をずっと振りかざすのはやめとけや」

「おいおい、政さん、やめとけってあんたよっぱらってるんだから・・ガハ」

「うるせーこの小娘の目がさっきから俺に喧嘩売ってんだよ」

政と呼ばれた男が自分を止めようとしていた3人の男を殴り飛ばしていた

この酔っぱらい親父が・・・・

「あぁん?なんだ譲ちゃん?俺に文句でもあるってのか?」

「いえ、別に何もありませんよ♪お気に触ったのならすみません。つい珍しかったもので♪」

っと一応微笑んでみた。ついでに言えば今からはすべて、演技で通すことにした。

すると

「そうかよ・・・・おい!!そっちの譲ちゃん!!」

「ヒッ・・・・」

椿はいきなり指を刺されて男に怒鳴られたので驚いていた

すると

「あぁぁんなんだよこの顔が怖いってか?ちょっとこっちに来い!!「ッヒ・・かげぇ~」〔ガシ〕なんだよお譲ちゃん、俺はそっちの譲ちゃんに話が・・・」

俺は椿に延ばされた手を影千代状態のほそい弱弱しい腕で男のがっ

ちりとした腕を掴んだ

「そいつにあんたと話す事は無い!!そいつを怖がらせるな!!その娘が泣いたらあんたを泣かすぞ!!」

っとおれは、影千代の声ではにあわないセリフで脅した

「なんだよやっぱそれが正体か?男勝りな女か?おい、ちょっと道場にきな」

「いてて、おい政さんやめろって!!その子女の子だぞ!!」

「黙ってろ!!」

「グッ・・」

っと復活した一人が男を止めるがすぐに殴り飛ばされていた

「おいおい、ちょっと今日の政さん荒れすぎだろ・・・お譲ちゃん、悪い事言わないから逃げなよ。」

っとおれの肩に手を置いてそうボソッと言ってきたが俺がここで辞めてもこのおっさん絶対に椿に手を出すだろうし

「いいぜ、やってやるよ」

「「お譲ちゃん!?」」

っと周りの大人たちは俺を止めようとしていたが

俺は、政とよばれた男に連れられるまま道場に行ったすると中々きれいに整備されている

そして、男から木刀を渡された

俺はそれを受け取り

「なんだ？剣道か？」

っと挑発するように聞くと

「おうよ、その生意気な態度を改めさせてやるよ。」

そう言うと男は俺に木刀で切りかかってきた

「お譲ちゃんあぶねぇ！！」

っと男の一人がそう言っていたので俺はとりあえずしゃがんでそれを避けて距離を取り自分が持っている木刀を眺めながら

（俺って銃と素手以外は、あまり強くないんだがな～・・・まぁいいや）

そう思い俺は、右手に木刀を持って右手を高く上げて

左手を地面に指先だけついてまるで獣のように3足歩行のように構えた

「なんなんだあの構え方？」

「さぁ？異常に変わった型ではあるのは見てわかるが・・・」

っと2人が俺の構えを見て何やら議論をしていたがこの型は俺オリジナルの型なので何処にもなって無いぜ

「うぉおおおおお」っと政が俺に向かって走って木刀を振り下ろしてきた。

俺はそれを見てにやりと笑いながら

「・・・勝った」

そう言って俺は、政の木刀を弾き飛ばし遠心力を利用して強力な一太刀を脇腹に与えた

すると政と呼ばれていた男は、顔を真っ青にして一太刀喰らった脇腹を押えて荒い呼吸をしていた

かなり強力なのが決まったからね～♪

しかし俺は攻撃はやめる気が無く男の頭の上で木刀を振り上げた

すると

「ウグググ・・・ま、まいった」

っと男は、苦し紛れに土下座して来た

そして、俺はやる気が無くなり

「おい、俺が今は女だからって侮るなよ?それと酒は飲んでも飲まれるんじゃね～よ!!ついでに許してやるかわりにきっちりとあの娘に怖がらせた事を謝んな!!それでお前のケジメだ。」

俺がバンと床を叩きながら言うと

「へ、へい、申し訳ありやせんでした!!」

っと謝ってきたので

俺はすぐに木刀を政に渡してさっきから横で解説ばかりしていた奴らににらみを利かせて

「てめぇらもてめぇらだ。酒癖が悪い奴に酒を飲ませてんじゃねぇよ!!全員罰として道場の掃除!!」

俺がそう言うとみんなビビったのか少し驚いて少ししたら

「「「へ、へい!!わかりました姐さん」」」

「よろしい。」

俺はそう言って道場を出た。すると道場の入口の所に椿が凭れかかっていて

「おまえ、影千代の状態でも強かったんだな」

っと聞いてくるので

「ふぅ～ん、この前ちょっとこの身体の使い方を覚えてね♪」

「そうか・・・それにしてもお前、馴染むの速すぎだろ・・・」

「まぁ、俺には王の才能があるのでね。人を引っ張るのは得意んなんだよ。（足を引っ張るのもな♪）」

俺はそう言って道場を出ると椿も3歩後ろに付いてきた

そして、廊下から客間を見ると一真と天野の父親と謎の二人が揉めていた。

そして、謎の二人が帰った

（・・・・・何かあったのか?てか、さっきのあいつが天野のお見合い相手か・・・）

「姐さ～ん!!」

（・・・・・・・・なんか今決闘とか聞こえた気が・・・）

「姐さん」

「（・・・・・俺か?）なに?」

「どうです?一杯やりませんか?みんなも待ってますよ?」

っと先ほど道場に居た一人がそう言ってきたので

「・・・・・「なぁ影虎・・・一真の事・・」飲もう♪飲もう♪「影と・・千代!?」まいいじゃんいいじゃん♪」

俺は椿に手招きをして呼んだそして居間に行くと５０人くらいの男達が酒を飲んでいて俺もそこに交じって座った

「このお譲さんがあの酒癖の悪い政さんを叩きのめしたのか？」

「あぁ♪政さんの得意な剣道でほぼ一瞬で叩きのめしたんだよ。」

っと俺の話で盛り上がっていた

「どうぞ姐さん一杯」

っと政が俺におちょこと熱燗を持って来たので俺は素直にそれを受け取ってついでくれたのでそれを一気にいつものペースで飲んだ

ゴクゴク・・・うまあ～い

「おぉ良い飲みっぷりですね・・・どうぞ、もう一杯」

「うん、ちょうだい♪」

と俺は、上手かったのでもう一杯飲む事にした。

椿もどうやら多少離れたようでお願いされてお酒を注いでいた

・・・どうやら酒のにおいで酔ったな・・・物凄い笑顔・・・

さぁて俺はいつも通り・・・・酔わない程度に

「ヒック・・・あれ？なんか気分が良くなって来た♪」

影虎視点終わり

椿サイド

俺は、だんだん慣れてきてこの人たちもあまり悪い人じゃない気がしてきたとちょっと気分がいいので最低限のおもてなしでお酒を注いでいたら

葵が来て

「椿に影千代ちゃん・・・物凄く馴染んでるね・・・意外・・」

「「「葵お譲もどうです？一杯」」」

「結構です・・・はぁ～」

っと天野は若干冷たく組の人たちにそう言った

俺の後ろで影虎、もとい影千代が顔を良い感じに紅潮させて

「熱い・・・やっぱ無理」

っといきなり緑色のコートを脱いで・・・さらに学校の制服のシャツを脱いで・・・さらに中に着ている変に胸が大きいせいでぱっつんぱっつんになりかけているシャツに手を駆けて脱ごうと・・

「「だめだ～（だめ～）！！！！」」

俺と天野ですぐに影千代の腕を掴んで服から手を離させた。（どう

やら酔っていて俺が触っても大丈夫みたいだ・・・ホッ・・）どう
やら酒に異常に強い影虎は影千代になると弱くなるらしい・・・

「何するんだよ椿に天野さん・・・離せよ」

っと影千代は少し怒り気味だったが

「あのな、お前こんな男ばっかりの所で裸になろうとするな!!」

「そうだよ、いきなりぬいじゃ駄目だよ?」

っと俺と天野が怒ると

影千代は、物凄い目で俺たちを睨みながら

「・・・君たち俺を女扱いしてない?俺は男だから脱いでも大丈
夫なんだ!!」

っと意地になって再び脱ごうとしていた

「「今は女だろ!?（でしょ!?）」」

っと2人で両手を抑え込んだ。

「熱いんだよ～」っと影千代は駄々をこね出した

なので俺はすぐに影千代に冷たいジュースを飲ませた。

そして、その後は酒とジュースを交互に飲ませて影虎の脱衣をギリ
ギリ阻止していた。

そのころ庭では、一真と誰かが戦っていたが相手箱は小物だし今はこっちのほうが大変なので構ってられない！！

「あっコラ！！服を脱ぎたくなったらジュースでも飲め」

俺がそう言って相手してると

「いいぞいいぞ、姐さん！！」

っとあおって来る大人が居たので俺は、出来るだけ殺気を込めて

「・・・・うるさい」

っと言うと男は、急にぶるぶる震えだし

「酔いがさめちゃった」

っと言っていた

（知るか！！影虎も影千代の裸も私のもんだ！！・・・何言ってるんだろう俺・・）

……

……

……

そして知らぬ間に一真たちの決着が付いてお見合いは白紙になった。

・・・適当でごめん

「さて♪野郎共♪またな♪」

「「「お勤めご苦労様でした!!姐さん!!」」」

俺は、一真と葵に呼ばれて帰宅する為に門の前にいるんだが、影千代の奴ここのヤクザ達を舎弟にしたらしく完全に組長だった…。
馬鹿だろ?

・・・・
・・・・・
・・・・

「・・・助けられる範囲で全力で助ける…。
ただ、それだけですから…。
それでは。」

「あっ!!待ってよ~!!」

「俺を置いてくな!!」

「じゃあな♪お前ら♪
気が向いたら遊びに来るからな♪」

「「「「姐さん!!おたっしゃで!!」」」」

俺たちは（特に影千代）大勢から見送られて帰路に就いた

しかし、俺達の本当の事件はこれだけではなかった…。
まさか、俺達がいない間に学園都市が大変な事になっているなんて…今は知る余地も無かった…。

続く

・・・

が・・・まぁよい、今日から学園都市の出入り口に警戒線を張っておけその娘があらわれた時は館に連れてこい』

電話の先の男はそう言った

「了解しました。」

怪しい悪意は、椿に刻一刻と迫っていた

威風堂々（天野さんの家は、・・・・おヤクザさん？）（後書き）

以上です。基本的にこの話は一真君が主役なので影虎と椿は、おまけです。

影虎の性格はやくざの人たちに受け入れられやすいようです。

ではまた。次回はいよいよ学園都市にヴェントが来ているお話です。ですが影虎は全く関わりません。ですが激しい戦闘になること間違いなしです。

人造天使（帰って来たら大決戦？）（前書き）

一週間に1回の投稿の時間です

では、どうぞ

人造天使（帰って来たら大決戦？）

俺と椿は、一真たち親公認の夫婦♪と分かれて
大雨の中フードをつきコートを椿に貸して（防水加工済み）
影千代から元に戻った俺と椿は、家に帰ろうとしていたのだが
椿には内緒で俺はある事に気付いていた
学園都市に入った瞬間にＡＩＭ拡散力場の明らかな異常と学園都市中でどんどんと生命力が弱まっていくのを本能的に感じていた。
「なぁ影虎♪」っと隣で楽しそうに話している椿に相槌を討ちながらも俺の意識は完全に俺の縄張り（テリトリー）に土足で入ってきた失礼な奴に興味（殺意）が湧いたので検索してみると
まさかまさかのローマ正教の神の右席の一人、後方のヴェントだった
俺がその存在いを確認した瞬間に俺の悪意と敵意に反応して倒れそうになったが『異世界樹（ユグドラシル）』が俺の仮死状態を解除してさらにはケテルの王冠が反応して『天罰術式』に対して耐性を持たせてきた。
そして、現状を良く調べると統括理事会の会長様が虚数学区・五行機関がすでに使用されていた。
いわば人工的な異界を作り出し、異界の物理法則を現実に無理やり適用する事で発動する魔術は、
虚数学区の中では「魔術的法則」を書き換えられたような状態になってしまい、今までの方法で使おうとすれば暴走して自滅してしま

う。なんて魔術ジャマーが発動されていたので俺は純粋な魔術師で常に魔術を精製しているような状態の椿を守るために記憶消去と『異世界樹（ユグドラシル）』と『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』を同時に使い『異世界樹（ユグドラシル）』の本当の名前のセフィロトの樹とは、世界そのものでもあるので一時的な世界の再構成をし記憶消去の応用で世界法則の捏造を行い『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』による五行機関の無効化をすべて同時に行い椿だけには、学園都市の技術の影響の起きない空界を疑似的に生み出した。

正直骨が折れる作業ではあるのだが一秒もかからずに発動できるので椿に今のところ影響は無い。

「お～い、影虎聞いてるのかよ？」

「・・・あぁ聞いてるぜ・・それよりも今日は疲れたから家に帰ろうぜ？」

俺がそう言うと椿は素直に頷いていた俺は椿の手を握って少し早歩きで帰ろうとしていたその時、俺の本能が一気にアラートを示した。

その瞬間俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を最大展開して椿を抱きかかえて一瞬ではるか上空の雲の上まで飛びあがったなかなか凄いＧではあったものの椿も慣れていたのであまり文句は言われなかった。そして、俺に必死に捕まりながら怒っていた椿をしっかりと抱き抱えながら遥か上空から学園都市を見下ろすと頭上には外周部に鉛筆のような棒の生えた天使の輪、

そしてその背からは、紫電を撒き散らす雷光のような鋭い翼が１０ｍから１００ｍ規模のものまで数十生えている何かが下に居て一瞬で学園都市の外側をなぎ払っていた・・・

あれは・・・ＡＩＭ拡散力場の集合体の結晶か？

俺がその正体を解析しているとと

「・・・・疑似的な天使・・・・」

そう椿が言っていた

まぁそうだろうな・・・あれはどう見ても天使だ。ただ、テレズマではなく完全なるＡＩＭ拡散力場により構成されている存在、たしか一真の妹陛下も同じような作りだったな・・・

マズイな・・・物凄く面白い事になってる・・・『アイツラ』がのこのことこの街に帰ってくるかもしれねぇな・・・・災厄だよ・・

「か、かげとら！！！」

「え？」

俺が悪い癖で考えこんでいると俺と椿の方向に翼と同じ翼の間をほとばしる雷光のような力を操り『雷光のような力』で攻撃して来た

「おらぁあああああ」

俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼の片翼の大きさをキロ単位まで巨大化させその攻撃を弾いた

弾かれた攻撃は、バチュィンと何とも耳障りな音を放って分散して消えた

俺はその天使？に竜王の波動をぶっ放そうかと思ったが次々と『雷

光のような力』が飛んできてそれをはじいているうちに大した攻撃じゃない気がしてきたので俺は、ＡＩＭ拡散力場の結晶体に記憶消去でハッキングをかけた。するとその天使は、その場から動くのをやめた

（所詮はこの程度か・・・ただ、俺にいや、『神生徒会』に喧嘩を売った事は後悔させてやるよ・・・・）

俺はそう怒りながらもとりあえず椿を抱えたまま暴れるのはしんどいので全速力で降下して家に向かった

その時俺は椿を片手でしっかりと抱きとめもう片方の手で椿の頭を守るように抑えていた

椿は必死に俺にしがみついていた

「今は攻撃は絶対に来ないから安心しろ」

「お前が居るから心配はこれっぽっちもしてない・・・むしろ安心してる。」

俺が椿にそう言うとちょうど家のベランダについてベランダから家に入ると椿を下して俺も降りて

俺は、パチンと指を弾いた

それを合図に俺の住んでいるマンションの周りの地面からマンションを囲むように『異世界樹（ユグドラシル）』の目が出始め瞬きする間も無く『異世界樹（ユグドラシル）』の枝や茎や葉がマンションを包み込んで特に俺と椿の居る部屋はもう『異世界樹（ユグドラシル）』と一体化していた

そう俺が考案した『異世界樹（ユグドラシル）』のシェルターだ

俺は、その後すぐにベランダの窓を開けて飛び出そうとした時に

椿に引きとめられた。

「なぁ影虎、何処に行くんだ？もう、なにも無いだろう？」

椿がそう言ってくるのでそう言われればそうなのだがさっきから妙に胸騒ぎがするのだ

「あぁたしかにそうなんだろうけ」

俺が椿の方向に振り返って言おうとしたその時にいきなりザバァっとプール２０杯分くらいの水の流れがいきなり俺に遅いかかって来て

俺はすぐに椿を突き飛ばした

俺は、水の流れにとらわれて何処かに運ばれているのがわかったそしてかすかに見えたのが椿の居る部屋の『異世界樹（ユグドラシル）』の隙間を狙って明らかにマグマや溶岩のようなものがまるで龍のように襲いかかろうとしていた

（やらせるか！！）

俺はすぐに隙間を『異世界樹（ユグドラシル）』で塞いだ

するとマグマは『異世界樹（ユグドラシル）』の幹にぶつかるだけで何も起こらずすぐにマグマは、『異世界樹（ユグドラシル）』を離れまるで生き物のように蠢きだし空を飛びながら動いていた

（あのマグマと俺を現在包み込んで溺死させようとしているこの大量の水は、誰かの能力だな）

俺は、急に水の流れで空中に名が出され水が俺を囲むように動き出し俺を中心に水の玉が空に浮かんでいてその周りをマグマの塊が浮いていた

（・・・まさかこいつらが瑠奈の言っていた奴らか・・・ハハハ、いいぜいいぜ♪喰い合いの始まりだ！！！！！！！！！！！！！）

俺がそう思った瞬間に『異世界樹（ユグドラシル）』を体中から突き出し、頭からケテルの王冠を出し背中からは、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を１４枚出し体中からは、『異世界樹（ユグドラシル）』のとげが飛び出していて手の甲からは、ユグドラシルの枝の刃がまるでウルヴァリンの爪のように生え身体の皮膚の部分には、『異世界樹（ユグドラシル）』の鎧を纏い影虎の体中からまるで花粉のように粒子となった『異世界樹（ユグドラシル）』が物凄い勢いでまき散らされ神神しくすらある化け物に変化して

俺は大量の『異世界樹（ユグドラシル）』の粒子を発散して水を吹き飛ばしマグマの塊を翼の一つで地面にたたき落とした

「ふふはっはｕｂｂａｂｃｋｂａｖｗｃｉｂｗｙ８９１２ｔｙｅ７８ｇ２１ｒ；２ｐｎ０８ｇｈｙ７９ｇ９ｄｂｐ１；ｈｎｎ／・・・・コホンコホン・・で、お前らは何者だ？」

俺が地面に撒き散らされた水とコンクリにベチャッと伸びている溶岩にそう言うと

その二つは、急に一点に集まりだし人型となって二人の男女が現れた

影虎視点終わり

人造天使（帰って来たら大決戦？）（後書き）

以上です

帰ってきたらヴェントやらヒューズカザキリやらで大変ですね

そして、出てきた、謎の敵！？

ではまた

森羅万象（王の資格）（前書き）

本日二回目の投稿です。

ではどうぞ

森羅万象（王の資格）

2人の若い男女は、2人そろって影虎の事を見ていた

ちなみに言うとマグマが男で服装が執事服で水が女のほうでなぜかメイド服の変わったペアだ

しかし、2人が二人とも危ない雰囲気がにじみ出ている。

「あなたが、あの瑠奈が頼ろうとしていた人物ですね・・・いやはや噂以上にすさマジい奴のようだね静香」

「フフフ、どうやらそうみたいですね。私のあの攻撃から生きているなんてあなたくらいだったのにね亮」

執事とメイドは、仲がよさそうに微笑んでいた

「・・・瑠奈はどうした？」

影虎が粒子を振りまきながらも見下しながら2人に聞くと

「「死にましたよ♪」」

っと二人で仲良くハモッてそう言っていた

「最後まで私たちに牙をむいていたので私たちが殺しましたよ♪」

「あの子最後まであなたの事を信じていましたのよ♪どんな奴か聞いても意地でもはきませんでしたよ♪あいされてますね♪でも、あ

なたも私たちには殺されるからあの世で仲良くしてあげてね♪」

2人は挑発するように影虎に対して攻撃を始めた

静香と呼ばれた女は、水をまるでウォーターカッターの勢いで噴出して亮と呼ばれた執事男は両手をマグマ化して大きい溶岩の塊を投げつけてきた

それに対して影虎は、両腕を組んで背中から『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を展開しつつ大量の粒子を噴射している状態のまま

2人の攻撃を避けようともせず

執事とメイドの二人の間にいきなり現れた

瞬間移動ではなく元から其処に居たかのように

「ッ！？」

「な？」

2人はいきなり間に現れた影虎に驚いていた

そして、影虎は両目を閉じたまま両手の『異世界樹（ユグドラシル）』の刃を男と女の首に振り下ろし2人の首を落とした。

しかし、首を落とされたとたんに水と溶岩に変化してさらに変化していた体にくっつくと再び人型になり始めて元の姿に戻った

影虎が不死身ならばこの二人は不死であろう

「これはこれは驚きましたよ。まさか私や静香までもが気が付いたら殺されているみたいな事になるとは・・・我々も本気を出してもいいのですが・・・ちょうどあなたのような怪物に適した怪物が居るんですよ」

っと執事の男は、ネクタイを締め直してそう言うと

「おいで、始」

メイド服の女がそう言うと特に何も子らなかったが見た目からして小学生くらいだろう

それぐらいの男の子が眼に光を宿さずまるで意思が無いような表情のまま出てきて

その子が片手を伸ばすとその瞬間、影虎は何かに押されるかのようにっ壁に押し付けられさらに勢いはなくならずビルをひとつまたひとつと破壊して言った

（これが瑠奈の言っていた念動力の少年か・・・確かに凄まじい力ではあるな・・・）

影虎はそう思考しながら『異世界樹（ユグドラシル）』で念動力に拮抗し始めた

「ほう、始の念動力にも抵抗できる能力ですか・・・珍しい。」

「ふふふ、始早くあの男を握り潰してしまいなさい」

メイド服の女が子供にそう言うと

男の子は静かに頷いて

身体を念動力に変換しだし約３００メートルクラスの念動力の腕？を作り出しそれを影虎に向けた

それに対して影虎は、

「死んでも生き返らせてやるからな・・・・」

そう言って影虎は左手を前に伸ばしそして、左腕の先から肩の辺りまでが消えると

始も念動力の腕と影虎の真相掌握というスキルで迎え撃った

念動力の腕はどんどんと押され始と呼ばれていた少年の身体が少しずつ復元し始めていた

影虎が真相掌握（トゥルースハンド）で少年の身体を掴みとり元の形に押し戻していたからだ

それを見ていた執事とメイドは、驚きを隠せないでいたようだ

「始・・・が負けてる？」

「何者なのよこいつ・・・」

２人は焦りながらも何をするべきなのかを理解してマグマと水化して二人は別々に影虎に襲いかかっていた

その瞬間だ、影虎が笑ったのは、

その瞬間、影虎は、真相掌握(トゥルースハンド)を解除して始と呼ばれた少年を『異世界樹(ユグドラシル)』で包み込んで影虎は、

なんと、むかてくる二人に対して

「『身体を水やマグマに変化させる事は人間には出来ない』」

っと『異常抑圧(ゼロスキルアブノーマル)』を発動した。

その瞬間に執事とメイドの能力が無くなり急に失速して速度が落ちだした

「だがこれで」

「死ね」

っと男は懐から出した。ナイフを空中で始と呼ばれた少年を真相掌握(トゥルースハンド)で押えこんでいる影虎に襲いかかった

メイドの女は、拳銃を取り出して影虎に目掛けて引き金を引こうとしていた

その瞬間に影虎は、

「俺様が命じる・・・来い俺の下僕」

彼がそう呟いた瞬間に2人の持っていた武器に光の閃光が当たり二つの武器は、真っ赤に溶けてなくなった。

そして、明るい光の塊が執事とメイドにぶつかって二人を吹っ飛ばした

飛ばされた二人は、地面にぶつかりバウンドして地べたに這いつくばるように倒れた

「うぐぐぐ・・・」

「なになんなの？」

っとメイドと執事は影虎の周りを行き来する光に驚いていた

その光は急に人型に成り始めその人型は、瑠奈だった

「「馬鹿な！？」お前は、私と静香で殺したはずだ！？」

っと執事男がそう言うので影虎が未だに念動力の塊を握りながら

「あぁ瑠奈は確かに死んだよ。それもあり得ないくらい無残にな。だが俺はすぐにお前たちの記憶を呼んでお前達が瑠奈たちを殺した位置を特定して生き帰えらせたんだよ。ほら、さっきから俺ずっと桜色の粒子を巻き散らしてただろ？」

「その粒子でエルク様は、私たちを生き返らせてくれたんだよ。甘かったわね♪私の愛した御方は、人の生き死にも思うがままの人よ」

っと影虎の言葉に続いて瑠奈がそう嬉しそうに言った

「・・・人を生き返らせるだと？そんな事が出来るわけが無い！

！」

と女が倒れながらもそう言うと

「それをやってしまうのがエルク様なんですよ♪あのお方こそ最高の指導者にして最強の先導者です。」

「・・・く。そがぁあああああ」

っと執事が立ち上がり影虎に襲いかかろうとしたその時に瑠奈が前に立ちはだかったが

能力の戻ったメイド女が水流で瑠奈を吹き飛ばし瑠奈は吹き飛ばされていた

そして、再びナイフを取り出した男のナイフが影虎に刺さろうとしたその時！！

なんと影虎の右指の先から瑠奈と同じ光が発射され亮の持っていたナイフを溶かしその後で亮の眉間をレーザーで打ち抜いたのだ。そして、亮と呼ばれた執事は息を引き取った。そう死んだのである

「亮！！！！・・・なんで・・なんであんたが・・・瑠奈の能力を・・・」

「王の権限により瑠奈のフォトンオーバーの使用権限を俺に映しすという方法でも出来るんだが・・・今回のこれを正しく言えば１１年前に瑠奈にキスされた時があってな。その時に俺の特技の一つが発揮されていたんだよ。俺に忠誠を誓ったものの力を好きに引き出す事が出来る『民の忠誠（エンペラーオーダー）』でな。」

っと影虎がそう告げると
隣のほうで瑠奈がものすごくうれしそうな顔をしていた
ときどき、浮気にも見えるこの二人の関係は、恋愛関係にあらず
言うなら上下関係や主従関係に位置しており長い月日や生と死すら
凌駕し椿と影虎の信頼の絆にも匹敵しかねない瑠奈の忠誠の証なの
である。

「さぁ、お仕置きの時間だ・・・・」

影虎が人差し指を倒れているメイドの眉間に向けて指を伸ばしその
指先を光らせ女の手足を撃ち抜きまくった

そして、女が気を失うと

いきなり始がメイドの目の前に飛び出してきた

それを見た影虎は、指先を天に向けてレーザを放った

「小僧、何のつもりだ?」

影虎が首をかしげながら聞くと

「はぁ・・ひぃ・・・お。かあ、さん・・・・・・いじめ・・・」

途切れ途切れに喋れないのに無理やり話そうとしている始の言って
いる事で影虎と瑠奈はある事に気付いた

（（この子供・・・こいつらの子供か・・・））
必死に泣きながら前に立ちふさがっている始を見て影虎は、手をかざし
始の頭の上に手を置いて
「退け」
影虎がそう言うと始は自身より上位の怪物に怯えながらも必死に母親を守ろうとしていた
自身から喋る力を奪いただただ、兵器として利用するために自分の子供を実験体にした親をだ
「エルク様・・・・あの・・・その・・・」
瑠奈が近寄りながら影虎に対して遠回りにやめてほしいと言おうとすると
「お前は本当にいいのか?そんな親の元でまだ居たいのか?」
コクンっと頷く始を見て影虎は、手を大きく振り上げて
「エルク様!!?」
始は眼を閉じていた
「そのクソ親どもを許し守ろうとするお前の寛大さ・・・褒めて遣わす。」

影虎は、ついに王様モードに歯止めがかからなくなり暴走一歩手前の影虎は始の頭を撫でながら笑顔でそう言った

そして、

「お前の親を助けてやる。そして生き返らせてやる。「え？・・・あれ？話せる？」それに関しては俺の『異世界樹（ユグドラシル）』で直した。この時点でお前は、堪能だ。そして、お前に一つ取引だ。「取引？」そう、お前の馬鹿親を蘇らせる・・・だからお前たちは学園都市から出ていけ。そして、お前は俺に忠誠を誓え、そして、お前の親が悪事を行ったらお前が裁けそれで許してやる。つまりは、追放だ。」

影虎は笑いながらそう言った。

そして、始の返事はＹＥＳであった。

その瞬間に影虎は、『異世界樹（ユグドラシル）』の力で両親を回復させ始に学園都市の外に執事とメイドごと出て行けと言った。現在の学園都市の警備は死んだも同然で簡単に出れたようだ。そして影虎はその後、すぐに学園都市の警備用のロボやヘリなどがおいかけてくるのを確認してそれらをるなと撃退し始達を完全に学園都市から遠ざけた。

「しっかりと森羅万象を手に入れましたね♪相変わらず抜け目のないお方ですねエルク様は♪」

全てをやり遂げ『異世界樹（ユグドラシル）』最大展開モードを解除した影虎に寄り添うように言った

「・・・・・・・なぁ・・・親が居る子供って言うのは、親のためにあそこまでするものなのか？」

「さぁ？私にはわかりませんよ。私もあなたと同じチャイルドエラーですし・・・」

瑠奈はそう言って影虎に寄り添った。

影虎はそれを嫌がり遠ざけた。瑠奈は少し不満そうな顔をしたがすぐに笑顔に戻った

「だな、俺らは俺らで絆を作るしかない・・・・・・」

「どうしました？哀しそうな表情をして・・・孤独ですか？」

瑠奈が影虎の表情を覗き込むようにそう言っていた

「・・・調子に乗るな・・クズが・・・あんな奴らに殺されやがって・・とことん使えないな～・・さてと、俺は家に帰るかね、アイツも多分怖がって怯えてるだろうし・・・ヴェントは、当麻にやられ疑似天使は消えた・・・くそ、俺も参戦したかったのに・・・とりあえず瑠奈「はい」今を持ってお前達のメタモルを俺の指揮下に置く俺様からの命令が無い限りは、自由にしてていい、だが、俺様の命令は絶対だ。逆らえば全力を持って追放する。そう言っといてじゃ」

影虎はそう言い残しその場から消えた

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・

椿サイド

突如、影虎が水の流れにさらわれその後にすぐに溶岩が飛んできたら影虎がこの部屋を完全に『異世界樹（ユグドラシル）』で密閉された

今頃影虎の奴は、また戦ってるのかな？アイツはいつも自身のダメージを考えないで戦う

だから、周りは心配なんだよ。

「影虎・・・帰ってこいよ～」

俺は、最近の影虎の行動を考えていると影虎が何処か遠くに行ってしまいそうな・・・そんな感覚を覚えていた

アイツが居なくなったら？

そんな事を考えると吐きそうになるくらい辛い

私がそう思いながら両膝に顔を埋めていると

「ただいま♪」

っと影虎の声がして私はすぐに顔を上げると影虎がにっこりと笑っていた

子供っぽく腕白な感じの笑顔でだ

「おかえり」

私はそういつもどおりそう言ってやった

昔、影虎に聞いた事がある。影虎の能力に死世界樹（キルドラシル）が発揮されたのが影虎自身が孤独に耐えられなくなったからだと。

影虎が私を大事にしてくれる理由の一つは、帰ってくる場所が欲しいんだ

家族が・・・仲間が・・・友達が・・・

繋がりがほしいんだ

決して切れる事の無い・・・・

私は、本当にお前の居場所になってやれてるのか？守られてばかりの私が？

私がそう思っていると

「あのさ、もしかして俺はお前を心配させてる？もしそうならもう少し自制するけど？」

「いいや、お前はお前らしくすればいいさ♪」

私はそう答えた。

でも、心の中では

もうやめて欲しい。傷付かないでほしい

そう心でいっぱいだった

最近の私の心境の変化の激しさは私自身でも理解出来なかった。

つづく

森羅万象（王の資格）（後書き）

新キャラ紹介

マグマと水のペア

『糸色　亮』＆ａｍｐ;『糸色　静香』

能力名　『流動溶岩（ボルケーノウェーブ）』＆ａｍｐ;『万能水態（サマーウェーブ）』

レベル？

男で服装が執事服で水が女のほうでなぜかメイド服の変わったペア

言葉使いは基本丁寧

性格は、冷徹で残忍

利益を第一に考え行動するため実の子供を実験態にする事も気にしなかった夫婦

こんな性格だがお互いを大切にはしている

身体能力化によって合理的な判断しかできなくなった人間

戦闘能力は高く身体をマグマや水に変え攻撃したり防御したりさらには、飛行する事まで可能としている。また、ナイフやけん銃での戦闘も得意。瑠奈よりも強い二人組

新キャラ２

糸色　始

『森羅万象』レベル？

圧倒的な念動力を全身から放ち相手を握り潰したり引き裂いたりできる。

身体を念力に変え移動することも可能

精神が崩壊していて両親の言う事にしか従わない少年兵器だったが影虎との戦闘のおかげで徐々に壊れた脳が回復しだし理性を取り戻した。

残酷で合理的な判断しかできない両親だが二人の事を大切に思っている。

影虎の能力　紹介

今回影虎が使った『民の忠誠（エンペラーオーダ）』

影虎が触れている相手が影虎に本心から忠誠を誓った場合にのみ発動できる。他人の才を忠誠心に応じた分だけ引き出す事が出来る。

瑠奈の場合は９９％まで

始の場合は４５％まで

ただし、これを使うと精神が異常を起こし必ず俺様至上主義と言う非社会適合者になってしまうのでご注意を

以上です。ではまた

予定通り（運命？何それおいしいの？そして、会いたくない奴、『生徒会長』登

はいはい、本日は最後の投稿です

今回は、結果報告さんの投稿してくれたキャラ達が登場します。

ではどうぞ

予定通り（運命？何それおいしいの？そして、会いたくない奴、『生徒会長』登場

翌日、朝目が覚めて起きてみると再び机に置手紙があり

『仕事が入った。今日は学校はサボる。飯は学食で頑張れ！！』

と書かれていた

なぜだろう？

最近椿さんが冷たい気がする・・・いつも気が付いたら出かけてて置手紙だけ・・・

泣かないぞ？あれ？目から塩分が・・・・・

っと眼の下を赤く腫らしながらバイクをかっ飛ばして学校に堂々とバイク登校を決め

機嫌が悪かったので長い睡眠についていた

青髪達が何か言って来ていたが寝た振りでスルーした

その時、「虎ヤンに無視された・・・」っと呟いていたが無視！！断固として無視！！

授業中に小萌先生から注意されたが無視！！とにかく無視！！

そして、休み時間にクラスのみんなに「俺の眠りを妨げたものは、当麻以上の不幸を一生味あわせる」

っと怒りながら言うとその後は、特に何もなかった

途中、なぜか非常ベルが鳴って皆が避難していたが俺は眠り続けようとしていたその時、

だれかが俺の身体を揺すってきたので

少しだけ目を開けてみてみると淡い水色のふんわりとした肩までの
短いツインテールに、これまた澄ん　だ淡い空色の瞳に学校特注のブレザーを身につけている。椿よりも小さい少女が目の前に居た

・・・・？

「どうしてあなたは、私の思い通りにならないの？」

「ＷＨＡＴ！？」

女の子の言っている意味が微塵にもわからなかった。

影虎視点終幕

？？？？視点

キーンコーンカンコーン

チャイムがなりみんながみんながぞろぞろと教室移動を始めた

私は、いつも通り一人で教室の一番後ろの席で本を読んでいた

この学校の生徒たちはなかなか興味深い生徒が多いが誰一人私の力に抗える人間はいなかった

（つまらない、ただ平凡に流れていくこの時間がつまらない・・・少しだけいたずらしようかな）

私はそう決めるとちょっとした悪戯心でノートをカバンから取り出しペンで

『本日、１１時４０分に地震があり全校生徒は、非難する。』

っと書いていながら悪戯の域では済まない事をしているが私には関係ない

お姉ちゃんだって言っていた私が何をしても咎められる事は無い。

それにお姉ちゃんに勝てる人なんていないからなにしても良いって・・・

そして、私が書き終えてノートをたたむと

ちょうど時間が来て地震が起こり

非常ベルが鳴り出し皆が避難を始めた

「ようやく静かになった・・・」

私が一段落して本を読もうと思った時

「かぁあああく～かぁあああく～」

っと中々耳障りな鼾が聞こえた

誰か寝ているのかな？・・・・あれ？どうして誰かがこの校内に居るの？

外に出てる筈じゃ・・・・・それなのに外に出ていない・・・・・・イレギュラー？お姉ちゃんと同じ？

私は、すぐに立ち上がって鼾のする方向に向かった

そして、鼾の正体は、私の隣のクラスに居た

教卓の一番前で堂々と寝ている長身で茶色と金髪が混ざったような髪の男？が眠っていた

今まで私の能力：『予定通り（スケイラー）』が効かなかった人間はお姉ちゃんくらいだ

私はつい思いきって

男の人の体を揺すった

すると男の人は少しだけ目を開けて私の事を見ていて不思議そうな顔をしていた

そして、私は、

「どうしてあなたは、私の思い通りにならないの？」

「ＷＨＡＴ！？」

私がそう言うと男の人は、英語で何？と言っていた。

？？？？サイド終了

影虎サイド

・・・なんなんだ？この子？

何処かで見た顔でもある気はするんだけどな～

それに思い通りにならない？どういう・・・

「君名前は？後、何歳？」

俺がそう聞くと女の子は、少しだけ黙って

「・・・すずみ　華音（すずみ　かのん）１３歳・・・あなたは？」

すずみ？・・・俺の知っている奴とは、違うか・・・

「・・・・あぁ俺様は、桜小路　影虎・・・・・・・」

俺がそう名乗り返すと

「桜小路影虎・・・・・では、質問です。あなたはなぜ私の‥『予定通り（スケイラー）』に抗えるのですか？」

「・・・『予定通り（スケイラー）』って何？」

俺が腕を組みながら机の椅子に凭れかかって言うと

「・・・私の能力です。紙に書いた出来事を自らの立てた予定の通りに進ませる事が出来き、
しかも、強制等では無い為全てが誰も分からぬ内にシナリオ通りに進んでいく実現する力です。」

「ふ～ん♪・・・面白い能力だな♪・・・なぁじゃぁさ俺がこう書くとどうなるんだ？」

「え？ちょ！？なにを！？」

俺は、ノートを開いて華音の小さな手を掴みペンを持たせノートにある事を興味本位で書かせた

その内容は、『１２時ちょうどに学園都市に居る桜小路影虎と呼ばれる生徒一人が苦しみ出し確実に死ぬ』っと書いた

それを見て華音は、顔を真っ青にしていた

そして、時計を俺が見ると華音も俺につられてみていた

時刻は１１時５９分だった

「はっ！？はやく・・「いいよ待ってな・・ほら」え？私の能力は冗談なんかじゃ・・」

華音がそう言った瞬間に時計の針が１２時をしめした

「え？まさか」

華音が俺の事を凄い目で見てきたので

「ぐぁぁあああ死んでしまう～・・・ガク」

俺は苦しみながら机にもたれかかった

「え？嫌ななんで・・・さっきは抵抗してたのに・・・嘘、わたし、は人を殺してない・・人殺しなんかじゃ・・・「うん♪殺してないね」え？えぇ～？」

俺は泣きそうな声が聞こえたのですぐに死んだふりをやめて安心させてやった。

「なんで死んでないの？確かに書いたはずだよ・・・」

華音は、先ほどまでのクールなキャラから一転して焦りながら俺に聞いてきた

「俺様が思うにねお前の能力は、主に世界に効果があるんだろうね。たが、俺様を含めておそらく7人には、君の能力は何の意味もなさないよ。（『異世界樹（ユグドラシル）』と『ケテルの王冠』と『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』と『死世界樹（キルドラシル）』が異常に反応して能力を根本的に阻害したんだけどね・・・俺の意思に関係なしに・・）俺様は、人外だからね♪そして、君の能力に関しての記憶をさっき読ませてもらったが・・ひとつだけ言おう人の人生で遊ぶな・・さっき俺様が死ぬと思って悲しむ事が出来たんなら二度とその能力を遊びで使うな。たった今見たぜ、お前その力を暇つぶしに使ってたみたいだな・・・感心できないぞ。」

俺が少し脅しながらそう言うと

「は、はい、「ごめんさいは？」・・・お姉ちゃんは私がなにしても悪くないって言ってた「悪いもんは悪いんだよ」でもでも・・・

「なら俺様が教えてやる人間は確かに下等で愚図で生きている事に意味なんて無い死んで肥料になることでようやく意味をなす蛋白質の塊である事は俺も認めよう。」私そこまで言ってない・・・」

華音の言葉に腹が立ち華音を指さしながら俺は凄んで片手の指先で額を押さえて

「だが、人が生きると言う事は、素晴らしいことだ。これだけは絶対だ。」

なぜか王様モード全開になってしまい物凄く偉そうになりながらも華音にそう伝えた

「・・・お姉ちゃんは・・・私は・・・人間より上位の存在だって・・・」

どうやらこいつは姉に間違った教育をされたようだ。

「なら、俺様がたった一つの真実を教えてやるよ。俺様はお前より絶対的に上位の存在だ。だから言おう二度と人の人生で悪戯をするな・・・」

俺がそう笑いながら言うと華音が少しだけ黙って

俺の顔を見て少しだけ顔を赤くしながら

「はい、わかりました♪」

っと言って笑っていた。

所詮はガキの悪戯だから咎める必要はないんだけどな。寂しかっただけなんだろうし・・・ただ、こいつの姉?俺の検索でも全くヒットしない謎の人物・・・何物かは知らないがとりあえず叩きのめす。

「わかればよろしい♪で、お前本が好きなんだって?俺様も結構好きだぜ。とくにな・・・・・・「それは私も読んだ事があります。中々独創的な帝王学ですよね。」そうそう……・・・・・・

「・・・・あなたがユニークだから観察したい」

俺は、珍しい生き物ですか？

「・・・・あのさ、ユニークな生き物に俺様をランクインさせるのをやめてくれない？」

俺が焦りながらそう言うと華音は、唸りながら悩んで・・・

「いや」

即答！？しかも俺の意見は否決？さっき俺は華音より上位の存在だって言ったと思うんだけどな～

「とりあえず後ろから付いてくるのやめてくれない？」

俺がそう言うとコクンと頷いてくれたので

再び歩こうとすると

ギュッと俺の服の裾を掴んでいた

あれれ～なんだろう状況が悪化したような気がするよ～

「あのさ、今度はなんで服の裾を掴んでるの？」

「・・・・後ろに居ちゃだめだと言われたから」

・・・・なぜだろう、失礼ながらチンパンジーに芸を背ている気分だ・・・

てかこんな状況誰かに見られたら・・・・

「え?・・・影虎君・・・・浮気?」

天~野~さぁあああん~!!!!!!!

「そうだよね・・・影虎くんでも浮気ぐらいするよね・・・椿に連絡しなきゃ・・」

そう言ってケータイを取りだした天野さん

そして、椿にメールを送っていた

「待って待って誤解誤解!!」

その後に、すぐ天野さんを止めてなんとか送信だけはやめて貰った。

そして、その後に、一真の所に遊びに行こうと思いバイクに乗ると・・・

なんであんたたちが後ろに乗ってるんだよ?天野さん華音・・

「さっきそこで華音ちゃんに会ってね。影虎君、ばらされたく無かったら一真の家まで乗せて行って」

っとなぜか強気の天野さん

「私はあなたを観察したい」

・・・・・・・・・もう何も言わない

俺はその後天野の前に華音を載せて天野に捕まるように指示して天野にはしっかりと俺の服を掴ませてアクセル全開で後ろが重かったのでウィリーしながらも体勢を立て直し走って

一真の家についた

天野さんは物凄く怒っていて華音は、初めてバイクに乗ったらしく少し喜んでいた

そして、一真の家のインターホンを押した

ピンポーン…。

「「「・・・」」」

ピンポーン!!ピンポーン!!ピンポーン!!ピピピピピンポーン!!ピピピピピンピンポーン!!

「やかましいわ!!」

「やっと出たか…。」

一真はドアをバンッ!!と勢い良く開けた。人がインターホンを押しているのに無視しようとする一真が悪い

「何かよう…か?」

一真は俺の足の後ろに隠れている華音を見つけて視線をそちらに移し・・・・

「年はいくつかな？」

「・・・１３歳…。」

「名前は？」

「すずみ　華音（かのん）…。」

華音は俺の脚の後ろに隠れながら一真にそう答えた。

「へぇ～…でまた何でこの子を連れてきたんだ？」

「ん～…分かんない。」

「良くわからんがついてこられた…。」

「なるほど…とりあえず三人とも中に入れ…。」

一真に言われるがまま俺たちは仲に入った

「影虎…この際だからはっきり言おう…。」

ここで一真は一息おいた。

な、なんだよ？

「こんな小さな女の子に何をした！！！？」

一真は部屋中が響くぐらいに心の底から叫んだ。

「何もしてないわ！！

それにするか！！」
なんて失礼な奴だ！！一真の癖に！！

「嘘つけ！！このロリコンが！！」

「誰がロリコンじゃ！！
それに本当に何もしてないわ！！」
いきなりのロリコン宣言だと！？ふざけるな！！！

「前科１着いてる人間が言っても説得力無いわ！！」

「前科１ってなんだよ！？
俺は何もしてないはずだ！！」
前科一っと言われても思い当たる節が無いぞ？

「椿はどうなる！？」

・・・・・・・・・くそ・・・・・・

「・・・今回は本当に何もしてません！！」

「「前のは認めた！？」」

俺が黙ってから答えると華音と天野は２人そろって突っ込んできた
仕方ないじゃん・・・実際に手を出してるし男女関係だってちゃんとあるもん・・・・・でもエロいのは椿であって俺は普通だ！！

「冗談一割はこの辺にして「一割！？」何があったか説明してもらおうか？」

冗談が一割ってことは9割は本気だったのかよ!?俺の趣味はロリコンではないぞ?基本的に悪女を好きなように躾けるのが・・・・・心頭滅却火もまた涼し!!!

「いやぁ…それが一部始終を全て話すとね…。」

……

……

……

「と言う訳なんです。」

「すまん。さっぱら分かりません。」

「わ、私も分からない…かな…。」

さっきの事を嘘がほとんどで簡単に説明した。

俺が寝ていると、急に不思議がられて、昼御飯を当てると言って紙に書いたのだが、俺様は見事に外した食べ物を選んで追いかけ回されていたと言うわけなのだが意味が分からない理由にした。自殺しようとしたとは言えないよね♪

「てか、何で中学生が高校にいるんだ…?」

「それは私が聞きたいんですけど…。

影虎「様」は高校生の友達に会いに行くと言っていたのに何故小中学生ぐらいのあなたに会いに来ているのかさっきから気になっていたんですけど…。」

あれ?俺の呼び方が様になった?・・・そう言えばあいつの前で俺、俺様としか言っていなかった気がする

「・・・」

「？」

一真はゆっくりと俺の背後にたった。
俺は首を傾げていた。
すると

「テメェは女の子に何言わしてんじゃい！！」

「ンガッ！？」

俺はガツンッ！！と氷のハンマーで殴られた、俺の頭を殴¥った氷は砕けて元の空気中の水分に戻った。

「何すんだ！？」

「だから女の子に何言わしてんだよ！？」

「勝手に言ってるだけです！？
言わせてませんから！！」

俺は言えとは言ってない確かに様付けされるのは大好きだけどさ・・・

「二人とも落ち着いて！！」

……

……

……

「…と言う訳だ。」

「そんな能力が一真に…。」

「なるほど。
もともとあなたの身長は一般の高校生ぐらいの身長があったわけですね。
これまた興味深い能力と体質ですね。
それも、あのクラスで有名な問題児の負導さんとは。
あなたも面白い♪」

俺は一真との言い合いを終えた。言い合っている途中で腹が立ち一真の頭を殴ったりもしたが何とか平和に終わった

「で次はあんたの番だけど。」

「え～と…私の場合は飛び級で高校に最近転校してきましたが、ご存知ありませんか？」

「・・・。」

「分かりました。
その様子だと無いようですね。」

「はい…。」

何故か華音に普通にバレてしまい天野にため息を吐かれて呆れられた一真。クラスメイトくらい覚えておけよ・・・

「華音ちゃんゴメンね。

一真は学校に興味無いから仕方ないと言えば仕方ないの。
許してあげてね♪」

「はい、分かりました。
葵さん。」

多分だが、俺は今、葵にバカにされたよな？って顔を一真が横でしているので言わせてもらおう・・・お前は馬鹿だよ♪

「であんたが影虎に付きまとう理由は何だよ？」

一真は俺が気になっていることを華音に聞いていた。
「私の思い通りにならないからです。」

「「「・・・はぁ？（ふぇ？）」」」

「言い方が悪かったですね。
なら…え～と…。」

「「「？」」」

みすずはいきなりノートとペンを取り出して、何かを書き始めて俺達三人は首を傾げた。
また、何かする気か？

「はい、出来ました。」

「「「・・・。」」」

華音はノートを見せてきて、その内容を読んで俺達三人は言葉を失

った。
その内容とは、子供好きがいきなり扉を蹴り飛ばして入ってきて俺を怒鳴ってから一真に抱きついてくると言った訳の分からない内容であった。
なんて事を書くんだこいつは・・・・

「影虎ァァア！！」

「「「えっ！？」」」

来ちゃったよ…。
予想外にドアを文字通り蹴り飛ばして、扉が壊れてそちらに振り向くと怒りを露にしている椿さんが俺を怒鳴ってきた。
おのれ～華音め！！

「テメェ！！女の子を拉致したって本当か！？」

「あの～…椿さん。
激しい誤解はやめていただきたいのですが…。」

椿は俺の胸ぐらを掴んで、もう片方の手には炎を纏わしてにも殴り掛かろうとしてきたので冷静に話し合いで解決したがっていると

「椿！！ストップ！！リアルに火事になる！！」

一真が止めに入って来てくれた

すると

「おっ♪一真幼年期じゃん♪」

「えっ！？ぐわぁ！！」

一真は一応椿を落ち着かせようとして、止めに入るが何故か椿が目の色を変えて抱きついていた。

どうやら俺様を風景のひとつにすることで多少は俺にも影響させる事が出来るのか・・・・『異世界樹（ユグドラシル）』とかを発動したら完全に無効だからな・・・

「わかってくれましたか？」

「うん…。

華音ちゃんって未来予知でもあるの？」

「いいえ…。

私には…「「とりあえず助けてくれよ！？」」「・・・はぁ…。」」

俺と一真は和んでいる天野と華音に助けを求めると、二人してため息を吐いていた。

この野郎！！怒るぞ！！蹴るぞ！！殴るぞ！！泣かすぞ！！虐めるぞ♪

「椿…とりあえず説明するから落ち着いて…。

ね。」

「えっ♪あっ、うん…。」

椿は天野に言われて自分がやっとどういう状況なのかに気づいて、顔を真っ赤にしていた。

人前で女の子の様にしている自分にやっと気づいたらしい…。ちょ

っと可愛いじゃねぇか・・・
……
……
……
「なるほど…全く…。
ややこしい事しやがって…。」

「さっきも言ったけど、ややこしい事をやったのはこいつだからな？」

俺達は何とか椿を落ち着かせて、俺は華音を拉致したのではなく勝手に着いてきたのだと説明してやった。
俺はその前に一真の部屋の扉の修理を泣きながらやっていて、現在椿は今にも一真に抱き着こうとウズウズしているように見える。

「あのさ…椿…いきなり抱き着いてこようとするなよ…。」

「理性が無くなったらゴメンね♪」

「絶対許さん！！」

一真は椿に怒鳴っていた。何だか椿が乙女に見えた！？ときどき可愛い仕草をするからこいつは、侮れない・・・

「ところでこちらの方は誰ですか？」

「ん？あぁ…。
まだ紹介してなかったな…。
こいつは、影虎のかの「姉の桜子路　椿だ！！よろしく！！」へ？」
一真が椿の紹介をしようとすると、椿が慌てて遮ってきて自分を俺

様の姉と言って紹介していた。
どうしてそんなことするんだ？

「影虎様のお姉さんでしたか。
納得です。」

「・・・」

ガンッ！！

「イッテェェ！？」

椿は立ち上がりフラフラと歩き出して、何処からかフライパンを取り出していきなり俺の後頭部を殴った。一個だけ言いたい俺の頭って他人からは何に見えてるの？サンドバッグ？最近みんながみんな酷い気がする・・・くそがぁあああ

「いきなり何しやがる！？」

「これはどういう意味だ！？
女の子に様呼ばわりさせるなんて、お前は堕ちぶれたか！？ロリコン！！いやロリ虎！！」

「バカ虎までは許すがロリ虎って何だよ！？
それに一真にも言ったが勝手に呼んでるだけだってーの！！
このショタコンが！！」

俺は基本的に様付けされるタイプの人間なんだよ馬鹿椿め！！

「誰がショタコンだ！！
テメェのロリコンよりは百億倍マシだ！！
バカロリ虎！！」

「「「認めた！？」」」

他の人たちが何か言っていたが無視だ

「また増やしたね！！
バカを増やしたね！！
このバカ椿！！」

～喧嘩する事３０分経過～

「「も、申し訳ございませんでした…（ガタガタガタ…）。」」

「全く♪今度からは気を付けてよ♪」

「「は、はい…気を付けます…（ガタガタガタ…）。」」

なぜだろうこの一真の喋り方がキモいような怖いようないろんな意味で苦手だ・・

「とりあえず話題を戻して、今の何？予言？」

「す、少し違います。
予定通り（スケイラー）と言う能力で紙に書いた事を現実に起こすことが出来る能力なのですが…。」

「ですが？」

一真はここで一息置いて俺を見た。

「この能力に予想外に反発したのが、影虎様なのです♪」

「ウオッ！？」

華音は笑顔で俺の腕に抱き着いた。

その時、隣から殺気とゴオォォ…と物凄い音が聞こえて隣を見てみた。

「つ、椿さん…。

お、おお落ち着いて下さい…。

俺は炭にはなりたくないですよ…ハイ…。」

椿が両腕に剛炎を纏わせて、背後から黒いオーラが見える…。

これはヤバイな…。

女の嫉妬って恐い…。

俺、死ぬ気がする・・・・冗談抜きで・・・

「つ、椿！！落ち着いて！！

私達どころか家が燃えちゃうよ！！」

「・・・チッ…。」

天野がそこまで言うと、何とか椿は抑えてくれた。

危なかった…。俺の命が危なかった

「でも、紙に書いた事を現実に起こすことが出来る能力か…。

ふむふむ…。」

椿は一真と天野を交互に見ながら何かを考えていた。
何を企んでやがる…。

「ちょっと葵とこいつ借りるぞ♪」

「「えっ!?（ふぇ?）
キャア!?」」

そして、椿は天野と華音を連れて脱衣場に向かっていった…。

「まぁ、ゲームでもしながら待ちましょうや♪」

「あ、あぁ…。」

……
……
……
……
……
……

ゲームを終えて俺達は帰ることにした

「じゃあな。
一真。」

「お邪魔しました♪
葵さん頑張ってくださいね♪」

「は、はい…ガンバリマス…。」

華音が天野に何か言っていて天野はなぜか申し訳なさそうだった

そして、その後、家に帰ろうかとも思ったのだがさすがに１３歳の少女を夜に一人で帰らせるのも危ないので椿を家の玄関で下し

華音を後ろに乗せてバイクで送ることにした。

そして、夜の学園都市を風を切りながら走っていた

基本的に学園都市は学生がほとんどなのでバスや電車が止まった後は、車の行き来は少ない

そして、俺は背中にしがみつきながら夜の街を見ている華音に

「あのさ、お前の家ってここら辺なのか？」

「・・・・はい、あ、あそこです。」

華音が指を頑張ってさしながら言ってきたので俺はすぐに其処にバイクを止めた

そして、スタンドを下してバイクから降りてヘルメットを外して華音を下して華音の家とやらを見てみたのだが・・・・でかい・・・・そして、見た目が完全に図書館だ・・

「此処が家なのか？・・・・・」

「うん、じゃありがとうございました。」

華音がペコリとお辞儀して玄関を開けて家に入ったのを確認してバイクに乗ろうかと思った時

「一体、こんな時間までどこに行っていたの?華音・・・・わたしの『観察の邪眼』から完全にお前が消えたのはどういう訳かしら?」

っと家の中で何処か聞き覚えのあるような声が華音を怒っているのが聞こえた

(・・・俺が家の人に説明した方がいいのかな?・・・)

「ご、ごめんなさい・・・」

「謝れとは言っていないわよ?なんでこんなに遅いのかを聞いているのだけど?」

「う、・・・・は・・い」

華音の泣きそうな声が聞こえ俺は、とりあえず説明して謝ることにしバイクを降りて

とりあえず玄関を開けて

「あ、あの~gハァ!?」

俺は突如、謎の軽く逆立たせ　た黒髪に、深い蒼色の瞳、白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服をマントの様に羽織っている。

そして体の周りを白と黒のエネルギー体が交差して廻っている長身女に顔面を掴まれ遠くのビルの壁にめり込まされたそしてさらに

「屑が貴様が華音をたぶらかしたのか！？」

っと連続でもうスッチャカメッチャかなくらいに謎の攻撃でぼこられ俺の全身は、爆発に巻き込まれた方がまだましな位にボロボロにされた

そして、それを見ていた華音は、口元を手で抑えて驚いていた

「これに懲りたら二度とこの子に近づくな」

っと人間の目であり得ないような文様が浮かんで目で俺に言っていた

その眼を見た瞬間、頭にちくっとした嫌な感触が走ったがすぐに『異世界樹（ユグドラシル）』が勝手に発動して俺の傷をいやし始めた。さすがにもう死ぬほど痛めつけられたのだから当然だ

そして、回復しようとしたその時に再びあり得ない速度で無数の魔術を発動され俺は、瞬きをする前にズタぼろにされた・・・恐らくこいつの強さは、白い髪の椿と対等ぐらいだろう・・・白い髪の椿と誰かを比べるのは間違いなのだが現状況でいえば同じ程度だろう・・・

俺は薄れ行く意識の中である言葉を口にした

（・・・まったく・・『異世界樹（ユグドラシル）』以外は使いたくないんだけどな・・・死にたくないし・・・『幻影武者（フェイクトラップ）』）

俺がそう言った瞬間に世界は・・・・ねじ曲がった

・・・・・
・・・・・・
・・・・・

軽く逆立たせた黒髪に、深い蒼色の瞳、白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服　をマントの様に羽織っている。
そして体の周りを白と黒のエネルギ　ー体が交差して廻っている長身女は、ボロボロになり回復も追いつかなくなってしまった男にとどめを刺そうとしていたが男の身体がまるで霞のように消えたのだそして

女の隣に現れたのだそして、『異世界樹（ユグドラシル）』で女の身体を包み込むように縛り付けたのだ

「おいおい、相手くらい確認してから殺しにかかれよ・・・・『生徒会長』」

影虎がそう言った瞬間に女の動きが止った

「・・・・おい屑、お前まさか・・・桜小路影虎か？」

女がそう聞いた瞬間に影虎は女の後ろに居て

「あぁ俺様は、影虎だ・・・・ついでに言おうか？神生徒会所属役職は、議長。ちなみにＬＥＶＥＬ６」

影虎がそう言った瞬間に女の姿が変わった

翡翠色のツインテールの髪に、紅色　の瞳。
背中の部分に大きなリボンの着いた
これまた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており明らかにさっきまでの長身な女性とは違い明らかに少女の姿であった

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

俺は、殴られたり魔術の渦の中で俺に攻撃して来ている女について思い出したのでそいつの事を『生徒会長』と呼んだ

すると女は急に縮んで服装から何までかわっていた。

相変わらず人間離れしてるよな・・・・

「え?え?お姉ちゃんと影虎様ってお知り合いですか?」

「「違うよ。こいつはただのウザい奴だから」」

俺と女の言葉が被った

そして、俺は横に居るチビ女を見降ろしながらそう言った

「まさか、あなたが華音の相手をしていてくれたとはね・・・人間でないだけましか」

「え?お姉ちゃんどういう事?それに影虎様のレベルって・・」

華音が焦りながら隣に居る華音の姉(だった)『天音(あまね)　廻黎(かいり)』に聞いていた

正直に言おう俺はこの生き物（天音(あまね)　廻黎）が嫌いだ

天敵とかではなく物理的に嫌いだ

「この男は、私と同じレベル６だ・・・」

そう、この女は俺と同じ学園都市から忘れ去られたＬＥＶＥＬ６の絶対能力者なのだ・・・

俺は、学園都市にただ一人のレベル６と言っていたのは、俺たちレベル６は、６大陸を其々分けて生きて行くと言う条例を作ったからだから、実際には、レベル６は、６人居る・・・

「てかなんでお前が俺の領土内に居る？お前は、アフリカ大陸に居る約束だろ？」

俺がそう怒鳴るように言うと

「・・・もうじき学園都市で面白い事が多発するから帰って来たんだよ・・・他の彼らもすぐに帰って来るはずだよ？」

天音(あまね)　廻黎の嫌な笑みを見て俺は、泣きたくなった

また、他の奴らを追い出さねばならないのだから・・・・・・・・・

「とりあえず、今日は帰りなさい。後、華音を送ってくれてありがとう（棒読み）。近いうちに彼らを集めて話し合いでもしようじゃ

ないか？血なまぐさい挨拶から始まるね♪」

「あ、お姉ちゃん・・・影虎様ありがとうございました。」

天音（あまね）　廻黎が玄関から家に入ると華音も後を追うように家に入って行った

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

「また、あいつらが来るのか・・・そして、全員合わせて『神生徒会』の『生徒総会』を開くと？・・・・下手すれば世界が終るかも・・・・」

俺はそう言いながら問題を後送りにして家に帰った

その後は、家で椿にずっとロリコンロリコンと侮辱され続け

何とか許して貰ったのだが

その後、椿さんに私以外に目が向かないようにしてやる

っと男女同念＋圧倒的に大人な営み（一真や天野ではたどり着くのに1年かかりそうなこと）を強要されました。

俺って流されやすい・・・・

そして、その次の日に椿は、肌の張りと艶が何倍にもなったと言っ

ていた。

そして、次の日に恐ろしい事が起こるとも知らず俺は、期限が大変よろしい椿さんが子供のように甘えてくるので年上の兄のように接しながら

過ごしていた

ある意味のわからん電話がかかって来るまで・・・

「あ、こら、気分が良いからって酒に手を出すな!!お前にはまだ１０年早い!!」

「うるさい!!子供扱いするな」

「大人子供言う前にお前は酒乱だろうが!!」

つづく

予定通り（運命？何それおいしいの？そして、会いたくない奴、『生徒会長』登場！！）

以上です。今回は、レベル６のもう一人が登場！！さらにその妹の華音も異常で影虎と会長意外に後４人のレベル６の存在が発覚しました。

キャラ紹介です。

名前：すずみ　華音（すずみ　かのん）
性別：女
身長：１３２
年齢：１３
性格：今までは他人と関わりを全く持とうとせず、　姉である天音（あまね）廻黎（かいり）　以外とはほとんど会話等をしようと　しない。
しかし、読書が趣味なので、本関係　の事ならばたまに話し掛けて来る事　がある。
結構天然なところがある。
能力：『予定通り（スケイラー）』
原石であり、その中でも最上位に位　置する。
その名の通りの能力で、森羅万象の　出来事を自らの立てた予定の通りに　進ませる事が出来る。
しかも、強制等では無い為全てが誰も分からぬ内にシナリオ通りに進ん　でいく。
しかしこの能力に関しては科学者達　の間でもこれ以外に全くと言ってい　いほど分かっておらず、その能力の　異常性からすずみ華音を自らの手元　に置いておこうとする人間が現れて　来ている。
ＬＥＶＥＬ０にして、誰もその正体を知ら　ない
設定：一真達のクラスに飛び級で転校して　きた天才少女。
廊下側の一番後ろの席で、常に本を　読んでいる。

性格の為に周りからは忌避されていて、友達等も全くいない。
唯一、隣の席の女子とは気が合う様子。
小さい頃姉が家に図書室を作った故に家からほとんど出た事が無い為、少し常識がついていない。
ちなみに、両親はいない。
容姿：淡い水色のふんわりとした肩までの短いツインテールに、これまた澄んだ淡い空色の瞳。
夏場等は白いTシャツに水色のワンピースを着ており、冬場はその上から学校特注のブレザーを身につけている。
どちらも学校から特別に許可されている。

名前：天音（あまね）　廻黎（かいり）
性別：女
身長：１４７ｃｍ（アンデルフォン時：１８１ｃｍ）
年齢：不明
性格：妹の華音以外とはほとんど関わりを持たず、常に本を読んでいる為他人が顔を見る事は無いだがレベル６の連中とは会話が弾む。
また、二つの人格を使い分けていて、二つ目の人格のときは性格が真逆になり、全てを見下している様な感じの口調や態度となる。
能力：『神魔邪眼』
廻黎の二つある能力の内の一つで、一番の原石。
その名の通り眼を扱う能力で、無数に存在するありとあらゆる眼を保有している。
故にその効果も様々で、それぞれを見極めるのはかなり困難である。
常時使用しているのは『観察の邪眼』という眼で、常にあらゆるモノの情報等をその眼で観ている。
『攻略不可（アンデルフォン）』

廻黎二つ目の人格と能力にして、最　も謎に包まれている原石。
異常な程の耐久性　と体力を持つ。（影虎以上！！）
容姿：翡翠色のツインテールの髪に、紅色　の瞳。
背中の部分に大きなリボンの着いた
これまた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており、そこに淡い紅色の　桜の花の形をした独特の日傘を差し　ている。
ちなみに日傘と本はそれぞれ持たず　に浮いている。
アンデルフォン時は、軽く逆立たせ　た黒髪に、深い蒼色の瞳。
白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服　をマントの様に羽織っている。
そして体の周りを白と黒のエネルギ　ー体が交差して廻っている。
（テイルズシリーズのダオスを参照し　ています）
設定：元は自分がテイルズシリーズ好きな　ので、それに基づいて作ったキャラ　クター。
ちなみに、人間がアンデルフォンを攻略したいと思ったら、飽きるのを待つし　か手段は無い。
（それで一応は攻略したという事にな　る）
それでも本気で攻略したいと思った　ら、最初に周りを廻っているエネル　ギー体を破壊し、次に異常な耐久性　の耐久性の元である鋼体を破り、最　後にアンデルフォン自身にダメージ　を与えれば勝てる。
イメージＣＶ：廻黎はひぐらしのなく頃にの　竜宮レナの声優さんで、アン　デルフォンはテイルズオブヴ　ェスペリアのジュディスの声　優さん。

以上です。

結果報告さん物凄い濃いキャラ設定ありがとうございました。

これからも使わせていただきます。

ではまた。

負導一美（…一真よ・・・気持ちはよくわかる）（前書き）

先ほど投稿する順番を間違えました。

ではどうぞ

今回まさかの人が〇〇〇になります。

負導一美（…一真よ・・・気持ちはよくわかる）

話をしよう、あれは今から３６万・・・いや、１万４０００年前だったか、
まぁいい、私にとってはつい昨日の出来事だが、君たちにとっては多分明日の出来事だ

俺にとっては現在なのだが・・・

それは、突然来た

椿がなぜか甘え?出して来てそれの相手に追われていると突如俺のケータイに着信が入った

そして俺はそれを開けて覗いてみた

其処には天野と書かれていた

（なんで天野から電話が俺に来るんだ?第一俺教えた記憶が無いんだよな・・・・あれ～?椿さん怒ってる!?）

俺の後ろから首に手をまわして俺の体をよじ登りながら椿がケータイの画面を見ながら

「ねぇなんで俺じゃなくてお前に葵から電話が来るんだ?・・・・・もしかして・・・・浮気★」

椿がそう言った瞬間俺は寒気だけで体が凍りそうだった

物凄く可愛い笑顔でいてそれでいながら眼が笑っていなかったのだ

「違います。断固として違います。天野さんは俺の趣味とは違う。」

俺が首を振りながらそう言うと椿は笑顔になり俺の体から飛び降りた

「そっかそっか♪お前はロリコンだったもんな♪」

っと納得して着替えに行った

椿の納得した理由に異を唱えて泣きながら違うといってやりたかったがめんどくさかった

そして、俺は電話に出た

「はい？」

『か、かかか影虎君!?
か、一真が大変なの!?
お願い!!すぐ来て!!』

「えっ!?いきなり何!?
それに何故そんなに泣きそうなの!?
お願いだから落ち着いて状況を伝えて!?」

『落ち着いてなんかいられないよ!?
状況は一真の家で話すから早く来て下さい!?
お、お願い…しま…す。』

「分かった!!分かったから泣かないで!?お願いだから!!

とりあえずそっちに向かうから！！」

『う、うん…グスッ…。』

「じゃあ！！ガチャッ！！」

何やら大変の状況らしいので俺は通話を終えるとすぐに椿を持って窓から『異世界樹（ユグドラシル）』の翼で飛び立ち一真の家に向かって飛び一真の家の玄関前で降りた

ピンポーんとインターホンを押した

「あら？どちら様でしょうか？
ちょっと出てきますね♪」

インターホンが鳴り響き、中から声がした聞いた事の無い女の声だけど・・・

「はい？あっ！！影虎さんに椿さん♪ごきげんよう♪」

「「・・・誰？」」

いきなり目の前には一真では無くショートで綺麗な青い髪の可愛い女の子が出てきた

「二人供もド忘れしているのですか♪
一美ですよ♪負導　一美♪
もう♪忘れないで下さいね♪」

うん、ちょっとだけわかった気がする♪

「「・・・天野（葵）ちょっと話そうか？」」

「う、うん…。」

天野は俺と椿に呼ばれて一美を置いて外の廊下で話した。

「「あれは何ですか！？」」

俺と椿は腹の底から怒鳴った。

「え～と…説明するなら…恐らくだけど、一真が女の子になっちゃったみたいです…。」

なんだよその面白い現象！！

「何があったんだよ！？
ストレスでも、溜めてたのか！？
それで現在爆発して女の子になっちゃいましたってオチなのか！？」

どんな現象だよどんな！！全くマンガじゃあるまいし・・・あれ？誰かにたようなこと出来る人って近くに居なかったっけ？

「ちょっとは落ち着け影虎！！
まだ本当に一真って決まった訳じゃないだろ！？
なら、あいつの頭の中を読んでみるんだ！！」

「そ、そうだな…。」

そして、俺達はコッソリと部屋に入った。
すると、一美が男用の私服にエプロンと三角巾を着けて台所を掃除していた。
そして俺は、検索を掛けた
しかし
「・・・エラー…。」
「「・・・。」」
俺の一言で椿と天野は、黙り込んで
ガチャッ…。
「「「間違いなく一真だぁぁあ!?」」」
俺達は外に出て叫んだ。
何があったかは知らないがあれは紛れもなく一真の様だ…。
そしてよくよく思い返してみれば同じような事を出来るのは俺だった影千代モードの存在を忘れてた
「皆さんさっきから何をしているのですか♪
いい加減にしないと怒りますよ♪
プンプン♪」
「「「・・・」」」
この娘は何者なんだろう?
本気なのか冗談なのか全くわからない…。

てか、俺の影千代モードは、俺のホルモンバランスの悪さが引き起こすものだが一真は何？趣味？

「とりあえず♪中へどうぞ♪
紅茶入れますので♪」

「・・・もう、いいや…。
どうでもいいや…。
では、御言葉に甘えるぞ♪」

「「諦めちゃった！？」」

椿は狂った様に小さく笑って天野と俺は驚いた。
て言うか椿の目が危ない気がする…。
むしろ楽しんでない？

「お二方は入らないのですか♪」

「「・・・はい…お邪魔します…。」」

結局俺たちも入って紅茶を煎れてもらい、飲みながら（旨い）一美を見た…。
うん…一真要素が全部消えてるなこいつは・・・むしろ一真の悪い部分が無くなったのか？

「なるほど…。
今回の件には変態ロリータＸＹＺ（イクスワイゼータ）が関わってそうだな…。」

「う、うん？
だ、誰の事？」

俺はある事を思い出しそう呟いた。忘れていたあのマッドドクターの存在を…

「ん？忍の事だよ。
ほら。」

「あっ！？」

俺はそばにあった来る理の紙袋を天野に見せたところ察したようだついでに椿の奴、一美と仲良すぎだ！！気が合うのか？見た目が仲のいい姉妹だね・・・

「確かに一真、今日病院に行ってくるって言ってた気がする。」

「よし！！呼び出すぞ！！」

俺は直ぐに携帯を取り出して発信した。

『何？とら？
今私は探し物中で忙しいんだけど～。』

「テメェに話があるから今すぐ一真の家に来い！！」

『えっ！？何？おねぇさんに告白♪
椿ちゃんには何て言えば…「んな訳あるか！！とっとと来やがれ！！」ブツッ…。』

「全く…。」

「まぁ♪まぁ♪
短気は損気ですよ♪」

話し終えると一美が紅茶を渡してきたのでそれを飲んだが当事者が
他人事と言うのは気に食わない

「あっ♪どうも♪
うん♪うまい♪
ってテメェのせいなんだよ!!」

「影虎君!!ストップ!!ストーップ!!」

「ンガッ!?」

いきなり俺の胸部に火球が飛んできて、俺は後ろに吹き飛んだ。

「つ、椿…テメェ…。」

「お前♪女の子に手を出したら♪わかってるよな♪」

椿の野郎、一美と気が合うから本気で妨害しやがったな・・・

「だ、大丈夫ですか!?」

椿が恐いぐらいの笑顔で言ってくると、一美は俺に救急箱を持ってきていた。

「あ、ありがとう…。」

「いえ♪当たり前の事ですから♪」

・・・あれ？意識が・・・

「あれ？俺は今何を？」

「この浮気者！！」

「えっ！？グハッ！！」

「影虎の！！影虎の！！バカー！！」

「ガハッ！！ゴハッ！！ヘブッ！！」

気が付いたら椿にボカスカと炎を纏った手で殴られていた。
多分、ゲームなら１００ＨＩＴって書かれてる気がする…。

「うぅ…。」

「よしよし…。」

「あの～…椿さん…。
何故わたくしはここまでボコボコに？」

椿が天野の胸に泣き付いていて頭を撫でられていた。

「今のは影虎君が悪いよ…。
一美ちゃんにコロッと堕とされちゃうんだから…。
それに、僕って言ってたし…。」

「一美にコロッと堕ちる?僕って言ってた?全く記憶にございませんが?」

なにがあったんだ?

「「えっ!?」」

俺の返答に天野達は驚いて一美の方を見た。

すると、一美はほえ?と声を上げて首を傾げていた。

「影虎…まさかと思うがお前、手当てされた後の事は覚えているか?」

「ん?手当てされた後は…壁にぶつかっていた上に胸の辺りが火傷した様に熱かって、状況の把握がつかめない状況で知らない間にお前に殴られまくった。」

俺が正直な感想を言うと

「「・・・」」

天野と椿は沈黙した…。

「それより影虎さん、大丈夫ですか♪」

「えっ!?あ、あぁ…だ、大丈夫だけど…。」

「それは良かったです♪」

あれれ?また目の前が真っ暗・・・・・

「い、一体何が起きてんだよ…。」

「お前はさっきから天昇笑み（エンジェルスマイル）にやられてるだけだよ。」

また気が付いたらやられていたので疑問に思っていたら椿が何かを言っていた

「天昇笑み（エンジェルスマイル）？何それ？」

「簡単に説明するなら、異姓を簡単に落とすことが出来る洗脳魔術だ。
恐いのは永遠に死ぬまで奴隷の様に愛し続けなければならない魔術…。
まぁ、死ぬ寸前の一撃を当てれば直ぐに戻るがな。」

「「なるほど。」」

俺と天野は納得したが基本精神操作系は、『異世界樹（ユグドラシル）』が防ぐ約束なんだが・・・

何？面白いから防ぐ気が起きなかっただと？ふざけんなセフィー！！！誰がお前を世界につなぎとめてやってると思ってんだ！！！

っと『異世界樹（ユグドラシル）』と会話していたら

いきなり天野さんが俺の腕時計型性転換装置をいじくり始めた

なんで？

「えっ！？何！？天野さん！？やめて！？
腕時計を弄らないで！！何故御乱心に！？お願いだから落ち着いて！？」

俺は必死に抵抗しながら落ち着かせようとした

「因みに一美。
一応聞くが、どんな男性が好みなんだ？」

椿が一美に何かを聞いていた

「もう♪椿さんったら♪
でも、そうですね～。
背が高くてワイルドな方がお好きです♪」

「あれれ！？椿さんまで何故に乱心に！？本当にやめて頂けませんか！？」

一美が頬を少し赤くして答えると椿も天野と同じでを俺を取り押さえに来た。

「葵今だ！！」

「了解！！」

「マジで…やめてくれぇえ！！」

その瞬間に操作されてしまい異常なほど気持ち悪い感覚が俺を襲い

「あが・・く・・・・あぁ・・・・・・・・何すんだよ?」

俺の髪が長くなりさらには桜色に変わり胸が出てきて、筋肉が無くなりスラッとしてきた。
影千代の姿であった

俺は無きながら天野に怒ると

天野はなぜか自分の胸を見ながら俺の胸に手を伸ばして・・・・

むにゅ

「ひゃん・・・?」

いきなり掴んできた!!そして俺の口から勝手に変な声が出た!!

「なんで私の周りの女の子たちはこうも胸が大きいのかな?どうすればこんな理想的な胸に・・・・」

っと俺の事まで女の子扱いで胸をムニュムニュと揉んでくる

「ひう、あs・・・ちょ・・やめ・・・ひゃん・・・・・・・・うがぁあああああ!!!!」

天野の行為に加えて自分の体の勝手な反応などに腹が立って天野を一真のベッドに放り投げた

もう少しで危ない気分になるところだ・・・・・

そして、投げた瞬間に目頭が熱くなってきてなぜか涙が自然に出てきておれは部屋の隅でシクシク泣いた

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

ピンポーン…。

「はい♪あっ♪忍さん♪いらっしゃい♪」

「・・・誰?」

忍はショートの青い髪にかなり可愛い見知らぬ女の子が出てきたので驚いていた。、まぁそうなりますよね

「中へどうぞ♪」

「えっ!?え、えぇ…。」

忍は一美に言われるがままに部屋の中に入ってきたようだ・・・だが今の俺には構っている余裕はない

「何とかなった。」

「そ、そだな…。」

「グスッ…お嫁にいけない…。」

あれ?自分で言ってて疑問に思うが今は女の体なので問題は無いは

ずだ・・・グス

「今、紅茶煎れますね♪」

「へ?え、えぇ…。
それよりあなたは誰?」

「もう、忍さんまで♪
負導　一美で・す♪
みんなどうして忘れるのですか♪」

忍も始の俺たちと同じで激しく驚いていた
……
……
……

「えっ!?カズくんが女の子になっちゃったの!?」

「はい…そうなんです…。」

俺達は忍に今までの事を全て話した。

「でも、何でまたカズくんが女の子に?」

俺達は鼻唄を歌いながら楽しそうに掃除や洗濯をしている一美を見た。
本当に楽しそうにしてやがる・・・だがなぜおれまで影千代にされたんだ?その疑問だけがぬぐえなかった

「それを聞くためにあんたを呼んだんだよ、変態。
何か心当たりはねぇのかよ?」

俺は忍に怒鳴る様に尋ねた。すると

「これに関しては心当たりは無いわね。」

しかし、忍は両手を上げてお手上げと言った感じであった…。

ん～ん、最後の手がかりが無くなったか・・・

「あれ？」

「ん？どした？変態？」

いきなり忍が何かを見つけた見たいで声を上げていて、それに気づいて俺は忍に声を掛けた。一体なんだ？

「えっ！？何でもない♪何でもない♪」

とは言っているものの明らかに冷や汗の量が尋常ではない…。

まさか…。

「テメェ！！何を隠してやがる！！」

「キャッ！？」

「ん？」

俺が忍に突撃すると、俺達の足元に何かが飛んできた。

「何だこれ？

カプセル薬？」

椿が拾い上げると密封された赤と青のカプセル薬があった。

「ヒッ！？」

「ちょっと待てよ♪
ちょっとお話しよっか♪
変態さん♪」

ソロリソロリと逃げようとしていた忍の腕を俺は掴んで笑いながら言った…心の中でこの野郎！！怒るぞ！！蹴るぞ！！殴るぞ！！泣かすぞ！！殺すぞ！！虐めるぞ♪っと

「さて♪包み隠さず全て話して貰おうか♪」

「・・・わかりました…。」

俺は忍に正座させて無理やり承諾させた。

「え～と…カズくんに風邪薬を渡した筈なのですが…どういう訳か私が製作していたデメリットを無くした麻薬を渡してしまったらしいです…。」

あぁ麻薬ねデメリットが無くなってただのお薬に♪って・・・・

「ふむふむ…なるほど…。
よ～く分かりました♪
バカ野郎！！」

「ウグッ！？いったぁ～い…。」

俺は忍の頭を殴った!!忍は頭を抑えていた。

「何を作ってるの!?
デメリットがない麻薬何て出来るわけねぇだろう!?
諦めろ!?それに、麻薬何てどっから持ってきた!?それを何故一真に渡した!?
バカですか!?あなたは極度を越えたバカなのですか!?」

「大変!?これどうぞ!?」

「あ、ありがとうカズく…一美ちゃん…。」

一美は氷の入ったナイロン袋を持ってきて、忍に渡していた。

「影千代さん♪暴力はダメですよ♪」

「ウッ!?」

なぜだろう再び寒気で凍りそうになった・・・

「分かりましたか♪」

「は、はい…以後気を付けます…。」

笑顔が恐い…。なんだろ・・・苦手だ・・・

「私今からちょっとお買い物に行ってきますね♪」

「い、いってらっしゃいませ…。」

一美はそれから何処からかエコバッグを取り出して買い物に出掛けた。

「さて、今のうちに作戦会議だ！！
どうやって元に戻す？」

「「「う～ん…。」」」

俺の言葉と共に皆が腕を組んで悩んだ…。
何か良い案があるか？・・・・くそ、この姿じゃ大して演算も出来ない

「もう一度飲んだら戻るかな？」

「あり得ない話じゃ無いが、それは最後の手段として取っておこう。」

天野の案は一度薬を飲んで女の子になるならもう一度飲めば直ると考えたらしい。
俺はその手段を最後の手段として置いとくことにした。

「酒を飲ませたら小さくなるだけかな？」

「ん～…どうだろな。
まずはそれから試すか。」

椿の案はお酒を飲ませればどうなるかと言う案だった。
俺はその案から試す事が決めた。

「そう言えば、とらがこれ飲んだらどうなるの？」

「自分でも分からんから止めていただきたい！！」

忍はカプセル薬を持って俺に言うので、俺は手を左右にブンブンと振って拒んだ。本当にどうなるか予想もつかない！！

「ん？なぁ、影虎。
あいつ一人で買い物いかせて良かったのか？」

「へ？何で？」

椿が聞いてきたので俺は甲高い声を出して聞いた。

「いや、あいつかなりの美人になっちゃったから男どもに襲われないかと心配で…。」

「「・・・」」

椿の言葉に俺達は沈黙した。・・・・・・・・・・・・う～ん

「で、でも大丈夫だよ…。
今の一真にはレベル５並の氷の能力があるから。」

「それは『一真』であっての事だろ？
影千代の例も考えられるから能力解析（アビリティスキャン）は無いかも知れないぞ？
それに、今のあいつには天昇笑み（エンジェルスマイル）があるからもしかしたら…。」

「「・・・」」

俺達はまたしても沈黙…。
そして…。

「「ヤバーイ!!」」

俺と天野は飛び出して、一美を探しに出掛けた。
椿と忍を残して…。

・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・

色々と探し回っている最中に影千代モードが効力を失って影虎状態で探し回っていると・・・・

何と言うか一美が一真に戻っていて変な輩が何人かいてその一人が天野を人質に取っているって言う展開か・・・・
…「大人しく解放しようか♪」ッ!?」

俺は男の背後に現れて男の後頭部に拳銃を当てた。

男はものすごく驚いていた

「全く…遅いぞ影虎…。」

「一真・・・
悪いけどさっき戻って検索して直ぐに駆け付けて来たんだぞ♪早い方だろ?」

ていうか助けて貰って遅いって何だ!?

「それもそうだな…。
さて、どうする?解放するか?」

ちょっとの会話をして一真は向き直った。

「わ、わかった…解放する。
だから助けてくれ!!」

「わかった、わかった…。
考えてやるから解放しろ…。」

「や、約束だぞ!!」

男はそう言って天野を解放した。

「一真~…。」

「葵…。」

天野は一真の胸板で泣いていた…。
まぁ怖かったんですよね~さてと・・・お仕置きの時間だ♪

「影虎…悪いが肩を撃て…。」

「なッ!?」

「極めて了解♪」

俺は男の頭から肩に標準を合わせてバァンと撃った。そして男の肩から真っ赤な血が噴き出した

「グワァァア!!
な、何故…?や、約束が違う…。
ウッ!?」

一真は天野を退かして倒れた男の顔面を踏みつけた。・・・・こいつってやる時は怖いよな・・

「約束?何の事だ?
俺は考えてやるって言ったんだ。
だから、考えた結果潰す事にしたんだよ!!」

「そんな…ウグッ!?」

一真は言い放つと同時に男の顔面さらにギリギリと踏みつけた。

「憎いか?憎いよな!?
葵もそんな気持ちだったんだよ!!
テメェらに騙されてな!!
そんな奴等はこの世にイラねぇ!!
テメェらの存在を否定してこの世から消し去って「ダメー!!」なっ!!葵!!お前!!」

一真は男に手を掲げて殺そうとすると、天野が抱きついてきいて止められていた。
一真の奴は怒ると手加減を忘れて暴れるからガキなんだよな・・・

「人は殺さないで!!

お願いだから…。」

「・・・はぁ～…。
これぐらいにしとくか…よっと！！」

「グハッ！！」

天野が泣きながら頼んで仕方無く一真は腹を蹴り飛ばして気絶させていた…。
俺はその間、ずっと暴れまわっていた・・・

「一真？」

「ありがとな。
助けようとしてくれてよ。
それに、恐い思いさせて悪かったな…。」

「一真～…うわぁ～ん…！！」

「泣くなよ…全く…。」

おいおい、隣で見てるこっちが恥ずかしくなるくらい

「一真♪大丈夫か♪」

「あぁ、大丈夫だ。
コイツは大丈夫そうじゃないけどな。」

俺がスッキリしたので一真に声をかけると、一真は天野を指差して答えた。

「そうかい。
なら今は泣かしてやれ。
俺は少しそこらを回ってくるからさ。」

「分かったよ…。」

空気は読んであげないとね
……
……
……

「一真…。」

「えっ？うォッ！？」

俺がうろうろするのにに飽きて戻っていた時、俺は見た
天野が一真の首に手を回していきなり抱き着いていた。
「お二人さんあつすぎだね♪」

「「わぁッ！？」」

俺に声をかけられて一真達は少し距離をおいて離れた。

さすがに公衆の面前で男と女になられても困るのでここは空気を読
まずに介入しよう

「影虎…いつからそこに？」

「さっき戻ったら一真が両腕を天野の背中に回しているところだぞ♪」

俺は嫌味のように言った。

「これは…。」

「どしたの？一真？」

「ちょ、ちょっと？一真さん？どうしたのですか？え、笑顔が恐いのですが…？」

本気で怖い！！なんだこの悪戯をする前の子供のように邪気と好奇心にあふれた表情は・・・

「気にするな♪」

「うわぁ！？ちょ、ちょっと待て！！何をしようとしている！！」

一真は薬を持ちながら俺に近づいてきた、俺は腕を掴んで阻止している。

「べ、つに！！
お前が…これを飲め…ば！！
どうなるか…なってな！！」

「あなたは馬鹿ですか！？
やめてくださいませんか！！
それにお前のこの力は何！？」

一真が答えてドンドンと力を加えて来てかなり口元まで近づいてきた。
ありえんなんだこの馬鹿力は！？
「クソッ！！こうなったら！！ンッ！？」
「ングッ！？」
俺はとっさに一真のポケットから薬を取り出して口の中に指ではじいて打ち込んだ。
しかし、俺もこうなったらっと言った瞬間に薬を飲まされてしまい
意識がぶっ飛んだ
そして、黒い部屋に入った
これが良く言う精神世界・・・いや、人格の控室とでも呼ぼう・・・
先客が一人居た
影千代状態の俺だ…・俺は額を抑えながら
「お前って俺の何の人格？」
俺が聞くと影千代状態の俺は、
「ん？俺は、お前と真逆の左脳状態の君だよ」
っと丁寧に応えられた

この前に俺を説得して来た理性的な奴か・・・つまり今表に出てるのは・・・

「今表に出てるのは・・・破壊衝動と殺戮衝動の人格？」

俺がそう聞くと

「恐らくそうでしょうね・・・現にこの部屋には君と俺しかいないだろう？」

っと俺のほうを見ずに窓らしきものを見ている影千代状態の俺・・・ちなみ俺は、キチンと男状態だ・・

（破壊人格が表に出てるのかよ・・・・・椿に出くわさないでくれよ？）

っと思っていると

「残念だけど俺も外に出てないぞ！！」

っと謎の声でが後ろから聞こえ振り向いてみると

明らかい凶暴そうな表情をした小さな状態の俺が俺を見上げていた

・・・・・・

「お前って俺？「そうだよ文句あっか！！ちくしょうあのクソ女を今度こそ殺せると思ったのに・・・此処は俺様の出番だろうが！！」うるさい」

どうやら破壊衝動の俺までもが控室から出ていなかったようだ・・・

あれ?じゃいま誰が出てるんだ?

俺の中で人格と言えば俺と影千代と破壊衝動を司る影千代・・・現在は、チビ虎・・・あれ?

俺が頭をひねって考えいると

「え?・・・なにやってんの?」

っと窓を見ていた影千代が焦りだしたので俺は俺の脛を蹴り続けている破壊衝動を捕まえて窓をのぞいてみた

其処で見た光景は・・・天野にキスしてた・・・・・

「「「なにやってんだぁあああああああ~!!!!」」」

俺たち三人の声が見事に重なった

そして、この後は地獄と言わざるを得ない

天野に突き飛ばされて逃げた天野たちを追いかけ

椿には抱きついてキスするはセクハラするは、忍にまで抱きついてキスしようとしてたし・・・最終的に一美に抱きついて寝ちまった・・・

俺たちはその間、各々悶え苦しんでいた

チビ虎状態の俺なんて泣き出しちまったもんだからなだめるのが大変だった・・後半なんて影千代にチビ虎の世話をさせていた

そして、控室にある人物が入ってきた

・・・・・いったいどんな人格かな?と思ってとにかく拳を構えてみたら

入ってきたのは・・・・・チビ虎の影千代バージョン・・・チビ千代だった

殴れねぇ・・・・

そして、入ってきたチビ千代は、すぐに影千代の所に行き抱きついて寝ていた

「「「?」」」

俺と影千代とチビ虎は、三人とも謎の人格に対して首をかしげた

そして、目覚めるまでの間、話し合っていた

「どうやらこの薬によって生まれた人格は・・・・異常なまでの母性への欲求や愛情に対する欲望がキツイみたいですね・・・歪んではいないが真っすぐ過ぎる・・・困ったものだよ」

っと影千代が膝の上で寝ているチビ千代の頭を撫でながら溜息をついていた

そして俺は、チビ千代を殴り殺そうとしているチビ虎を抑え込みながら話を聞いていた

「うぐぐぐ・・・はなせ～」

「馬鹿・・・人格同士で殺しあいしてどうする・・・・はぁ～厄介なのが増えたな～・・・とりあず天野さんには全身全霊を駆けて謝罪しておこう・・・おい影千代！「なんだい？」とりあえず・・・其処のチビ2人を抑えつけておけ」

俺がそう言うと

「抑えつけておく？消さなくていいのかい？」

影千代がそう言ってくるので

「・・・俺の中に出来た人間らしい感情の塊だ・・・捨て置くのはもったいない・・それに俺は、人間になりたいんだ・・化け物じゃなくて・・だからこそ、感情は大事だ」

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

翌朝

「すみませんでしたー！！」

「う、うん…別に女の子同士ならカウントはされない筈だから気にしないで…。グスッ…。」

戻った俺は朝一発目に椿に黒炎でボコボコにされたあと天野に頭を床に打ち付けて謝っていた。
ちくしょう、今回は俺は悪くないのに！！謝るべきが俺って理不尽な気がする

「面倒だ…面倒過ぎる…。」

「まぁ、まぁ♪よかったじゃない♪これからは暇があれば女の子になれるんだからそれそれでお得「誰が特なんかするか！！」」

一真が隣で忍の言葉を遮っていた

「それよりももう一度薬飲まない♪おねぇさんもう一度一美ちゃんに会いたいな♪」

「断固拒否！！
絶対無理！！」

一真が忍に怒鳴っていた。俺はその間にも謝り続けていた

「一真！！学校遅れるよ！！」

「ん？そう言えばそうだったな…。
行くか…。」

「すみませんでし…グハッ！！」

「いつまで謝ってやがる！！
とっとと行くぞ馬鹿虎！！」

俺がもう一度謝ろうとした時に椿は火球を投げつけてきた。

・・・・・俺は悪くないのに～！！！！！！

おれはこの日、寝るとき枕を濡らした

つづく

負導一美（…一真よ・・・気持ちはよくわかる）（後書き）

始の方は言わずと知れたネタです。主人公たちは、メタトロンをイメージしているので正規ルートだと思います。

一真君まさかの女性化・・・そして、影虎を影千代に変えさらには、百合っ子の人格まで精製する忍の薬・・・・もう無茶苦茶です。

ちなみに影虎の人格を感情に表すと

喜＝影虎
怒＝チビ虎
哀＝影千代
楽＝チビ千代

という感じです。ではまた

悪戯第一（すずみ華音の卑劣な罠）（前書き）

一週間に居回の投稿タイム

今回は、ちょっとしたネタの話です

悪戯第一（すずみ華音の卑劣な罠）

ある日、学校に行ってみると
面白い光景が見えた

「一真さん。
影虎様は何処ですか？
教えて下さい～お願いします～♪」

何故かすずみに一真が服の袖を掴まれ右に左にブンブンと振られてイライラしていた。

「か、華音ちゃん…、落ち着いて…ね。」

天野は一真の態度を察してかすずみを落ち着かせようとしていた。
はは、まるで小さな子をあやす夫婦だな

「影虎様は何処ですか？
ねえねえねえねえ！！」

「うるせぇー！！」

一真は腕を振りほどいて叫んだ。
クラス中の目線が一真に集まっていた。
俺はひそかに笑っていた

「ん？」

すると、一真の視点が扉の方に移り俺は見つかってしまった

「影虎なら、扉の前にいるぞ…。
行ってこい…。」

一真の馬鹿は俺がいる方を指差すので、俺は驚いた。

「本当だ♪影虎さまー♪」

「うぉお!!」

すずみは喜びながら俺の方へ来て、俺は驚きながら逃げ回った。

そして、逃げ回っているとさすがにすばしっこい子供だすぐに捕まったかとおもうといきなり後ろの方で一真が手を振り上げた・・・
そして

カチャン!!

「「カチャン?」」

その異様な音の正体を知るために見てみると、俺の左腕と一真の右腕に手錠がかけられていた。
何故!?そして何処から出した!?

「大成功♪」

後ろですずみが何かを投げた後のポーズで立っていた。まさか投げ手錠!?

「テメェ！！何を！？」

「へ？あぁ…。
少し私の能力を使っただけですよ♪ほら♪」

俺が聞くとすずみはノートをこっちに見せ着けてきた。
内容は…。
俺のお仕置きの為、一真と俺の腕に華音が投げた手錠がはまる。
あり？俺まで巻き込まれた？なんで？

「ってちょっと待てぃ！！
何故俺まで巻き込まれ食らってんだ！！」

一真は何故巻き込まれているのかさっぱり分からず、すずみに怒鳴った。

「葵さんの頭を殴っているのを見てしまったので♪
それに、その手錠は私の持ってる鍵以外で開けるのは不可能ですから♪」

不可能？そんなもの俺の腕力でこじ開けてやるさ！！

ガン

「か、固い…。」

俺は拳を抑えていた。
思いっきり手錠殴ったのに壊れない・・・痛い

「だから無駄と言ったじゃないですか♪」

「ならお前から無理矢理鍵を奪うまで！！」

「えっ！？どわぁ！！」

「キャァァア♪」

俺は、全力ですずみから鍵を奪うために一真を引きづりながら学校を走った

……

……

……

「やっと追い詰めたぞ…。」

「痛い…。」

俺は一真を引きづりながら屋上まですずみを追い詰めたすると

「甘いですね、エイ！！」

「「えっ！？」」

いきなりすずみは屋上から飛び降りて、俺は驚いて心配でいっぱいになり駆け寄り下を見てみた。

すると…。

「影虎さまー！！

ここまでおいでー！！」

見事に下にいた生徒達が体育に使ったであろうマットレスを片付けている上に落ちていき、すずみは怪我すら無しにタタタッと走っていった。よかった～・・・ってそうじゃねぇ!!

「あの野郎!!」

「えっ!?うわぁ!!」

俺は異世界樹（ユグドラシル）の羽を展開して飛び上がった。
一真は咄嗟に俺の背中に捕まり、異世界樹（ユグドラシル）が巻き付けてやった。
……
……
……
「捕まっちゃいましたか♪」

「「はぁ…はぁ…さっさと解除しやがれ!!」」

あれから追いかけ回し、学校の外にまで出てきてしまい異世界樹（ユグドラシル）でやっと捕獲する事が出来て現在は息を切らしながらすずみに手錠をつけられた腕を一真と一緒に前に出していた。

「仕方ありませんね♪
え～と…あれ?ん～と…こっちかな?こっちだったっけ?
あれれ?」

すずみがあちらこちらと手を突っ込んだりして何かを探していた。
もしかして…。

「「まさか、落とした?」」

「・・・てへ☆」

すずみは頭をコツンと叩いて下を出して誤魔化していた。

「てへじゃねぇよ!!
何!?テメェ鍵無くしたの!!
俺と一真一生このままなの!?
流石にきついから何とかしやがれ!!」

「お、落ち着け影虎…。
とりあえず、探すのが優先…。」

俺は今にもすずみを殴りそうなになったが一真に落ち着かせられた。

「す、すずみ…願いがある…。
お前の能力で鍵を見つけてもらって手元に帰ってくるって書いてくれ…。」

「あっ!?なるほど…。
グッドアイデア♪」

一真の提案に俺は納得していた。
しかし…。

「そ、それがノートにもう、ページが無くて…それにインクも無かったり…。」

「「なにー!?」」

終わった…、もう、終わった…。

更なる手段は…。

「「学校にノートとペンを取りに帰ろう!!」」

俺と一真はすずみを連れて学校にノートとペンを取りに帰る事にした…。

〜〜歩く事１０分〜〜

「「つ、辛すぎる…。」」

俺達は学校に戻っているのだが、何故かさっきからカップル連れが多く、この空間に俺と一真、さらにすずみだけと言った状況が辛かった…。

何よりも居場所が無い気がする。てかさっきからずっと変な目で見られてる・・・今くすくす笑われた!?もうやだもういやだ!!!

「こうした方がマシじゃあ!!」

「「えっ!?」」

俺は精神的につらかったのでいきなり腕時計を弄り影千代に変化した。

「えっ!?影虎様が女性に!?
えっ!?どういう事ですか!?
女だったのですか!?でも、さっきまでは胸なんて無かったし。
えっ!?」

「ハァ…。」

しかし、見事にパニックになってる人が1人…。
仕方無い…話すか…と思った矢先に…。

「また、あなたは学校をサボって女の子と遊んでいるのですか…？」

「「ん？」」

後ろからいきなり聞き覚えのある声が聞こえたのでそちらを見てみた。
すると…。

「み、水季さん…。
何故ここに？」

水季がこちらを睨み付けていた。
なぜだろう俺の方を凄い目で見て黒いオーラを出している・・
「愚問ですね…。
学校が終わっていないにも関わらずに学校を飛び出した問題児二名と秀才が一名いると言うので探しに来て、やっと見つけたまでですよ…。」

「そ、そうですか…あは、アハハハハハ…。」

もしかしてこれは嫉妬か？あぁ現在美人の俺が一真と一緒に居て悔しいんだ♪一真よ・・・死ね♪

「かずまー♪」

「うわぁ！？」

俺は悪戯心全開で影千代で女声で首に手を巻き付けて抱きついてやった。

「み、水季さん!!これは違う!!違うから!!」

一真が水季の方を見るとただならぬ殺気を感じて直ぐに誤解を解くために一真は弁解をしたのだが…。

「問答無用!!」

「えっ!?ゴハッ!!」

一真は水季に氷の塊を投げられて腹部に命中し倒れた。フフフ♪女になった時の俺は、悪戯大好きだぜ♪

……

……

……

「って言う事は、影虎君なのですか!?」

もちろん、いつも通り喫茶店で水季にどうしてこうなったかや、何故俺が女体化したのかを話すと納得してくれた。

「そう言う事。

バラシタラ　バラバラニスルカラナ。」

俺は笑いながら言ったが、もちろん冗談であるものか!!

「わ、わかってますよ…。」

水季さんは顔が惹きつ理ながら返事した。よろしい♪

「とりあえず、問題はその手錠とここのカルボナーラの不味さですね…。」

「「「うん…えっ!?（へ?）」」」

水季が頼んでいたカルボナーラを睨みながら途中訳の分からない事を言ったので俺達三人は驚いた。
因みに変な声を出したのはすずみだ。

「どうすればこの様に不味くできるのですか…。
それに、この不味さでお金を取るなんて…許せません!!
これは、犯罪です!!
今すぐにでも、これを作った人を取っ捕まえて「「ちょっと待てぃ!!」」ッ!?」
いきなり、水季が訳の分からない怒りを露にし出して立ち上がったので俺と一真は水季の上から手錠で繋がれた腕を水季の前に出して水季の行く手を阻んだ。

「何をするのですか!?
通しなさい!!
私はこのカルボナーラを作った人を公正する義務があるのです!!」

「いやいやいや!?
あなたはバカですか!?
たかが、カルボナーラごときで連行って何事ですか!?」

一真は水季の豹変振りに驚きながら言い返した。
すると…。

「何ですか？
公務執行妨害ですか？
ならあなた達から公正してあげましょうか？」

「「ヒッ！？」」

水季が睨んで来ると、その顔が非常に恐かったのでつい怯えてしまった。俺なんか怖くて泣きそうになった・・・

「今度うまい飯屋紹介してやるからやめろ！！な！！」

「・・・そう言う事なら仕方ありません…。」

な、何とかなったみたいだ？

……

……

……

「では、今回は見逃しますが、あなた達は少し問題を起こし過ぎですから気をつけて下さいね…。」

「「申し訳ございません…。」」

あのあと、一真は理不尽に奢らされていて外に出ていた。
そして、何故か二人して謝ってしまった。
後ろではクスクスと聞こえるからきっとすずみが笑っているんだろう

「それでは失礼しました。」

水季はいつも通り一礼して何処かへと行った。

「さて、問題はここからだな…。」

「確かにな…。」

一真は本題に移り未だに影千代から戻らない俺は悩んだ。
まず、俺がこの格好で一真と一緒に居たら変な誤解が皆さま方から絶えないだろう…。
それならどうするか…。
と考えていると…。

カチャンッ!!カチャンッ!!

「「ん?」」

変な音が聞こえてまさかと思い手を見てみた。
すると、手錠が外れていてすずみがクスクス笑っていた。

「騙してごめんなさい♪
実は鍵持ってたんです♪
それに、ノートの予備もありますし♪」

「「・・・す~ず~み~(華~音~)!!」」

「ヒッ!?わ、私はこれより戦略的撤退に移ります!!」

「「待ちやがれ!!」」

俺達は逃げていったすずみを追いかけ回した。

「ごめんなさい〜!!」

「「絶対に許すか!!」」

・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・

そして、この後俺は、すずみを影千代状態のまま見つけ捕まえてから家まで送った

華音が言うには、俺が初めての友達なので遊んで欲しかったと華音の姉の生徒会長に眠っている華音を撫でられながら言われ

「君もその姿は可愛いじゃないか」

と言われたのですぐに退散した

まぁ妹が出来たみたいで悪くはなかったかな?っとおおらかに考える事が出来た今日この頃。

つづく

悪戯第一（すずみ華音の卑劣な罠）（後書き）

以上です。ではまた

剣菱麻華（ドロップアウトガール）（前書き）

はい、二回目の投稿です。

今回は、以前登場した剣菱麻華のストーリーです。

では、また

剣菱麻華（ドロップアウトガール）

あたし事、剣菱麻華は、ある日、謎の女子に襲われて入院し3日後に退院した。ある事を思い出した・・・私の・・・幼少時代の記憶・・の一部・・・全く覚えていない家族の記憶・・・・

怪我なら良くなったし病院に入院したことも何度かあったけど今回の入院は、今まで史上最低の気分だ。

そして、あたしは、学校の寮の自分の部屋に帰るとベッドに座ってケータイ電話をカバンから取り出して

ある人に電話をかけた

『プルルルプルルルガチャはい？もしもし剣菱法律相談所の弁護士、剣菱春華（はるか）ですが』

「・・・・お母さん？『もしかして麻華？どうしたの？この番号にいきなり掛けてくるなんて？』ねぇ正直に答えてね・・・『どうしたの麻華？泣いてるの？大丈夫？今からそっちに行こうか？』・・・あたしって・・・本当の娘じゃないんでしょ？・・・『え？あ、な、なに言ってるのよ麻華？大丈夫？いきなりどうしたのよ！？』答えて・・いや、答えろ！！『・・・・あなたは私たちの娘よ。』（『絶対真実（ノンライアー）』発動）『・・・私たちの娘じゃないわ・・・血もつながって無い・・ハッ！？やめなさい麻華！？あなた、記憶が戻ったの？・・・ねぇ』そうなんだ・・・やっぱりそうなんだ・・・あんたたちだけはあたしに嘘をついて無いって信じてたのに・・・ずっと信じてたのに！！！『麻華？血がつながって無くともあなたは私たちの娘よ？』信じられるか！！やっぱり人間なんて嘘の塊だ！！・・

・もう誰も信じない『ま、まか』」ブツリ

あたしは、すぐに電話を切ったすると母親っと自身を名乗っていた女が電話をかけ直してきた

「言いわけなんか聞くか！！！」

あたしは、ケータイを壁に投げつけたするとケータイはバラバラになり破片になった

「・・・もう誰も信じられないよ・・・」

あたしはその夜、両膝を腕で抱いて顔をウズくめながら泣いた

声を殺しそれでも出てくる涙は止まらなかった

信じていたことすべてが嘘に見えて皆がみんな嘘吐きに思えてあたしは、全てが怖かった。今までの楽しい思い出が全部嘘であたしの人生が全部嘘にしか思えなかった。

気が変になりそうで苦しくて誰かに相談してくても話す相手が嘘吐きにしか見えなかった

あたしの嘘の対する反応が異常なのは自分でも理解でいている。でもこればかりは直せないんだ。

そんなあたしの心は、どんどんと自分の圧力に潰され衰弱して行くのがわかった

嘘に対しては潔癖症と言わんばかりのあたしの心は、全てが嘘だと

思い込んでしまったマイナススパイラルに耐えられなかった。

そして、2日間泣き続けた私の涙は枯れてしまい

その日に、あたしは学校の寮を出て行った

二度と戻る気はないと置手紙を置いて・・・・

麻華サイド終了

その日を境に剣菱麻華の消息は突如なくなり風紀委員(ジャッジメント)が全員で捜索するも彼女の所在は掴めなかった。

そして、その数日後には、ある事件が多発していた

『壊皇(かいおう)』と呼ばれる女の不良(スキルアウト)が最近出没し不良(スキルアウト)集団や一般生徒、警備員、大人、高ＬＥＶＥＬ能力者を問わずに遅い金品を奪い病院送りにしていると言う事件だ

この事件の解決が風紀委員(ジャッジメント)に早急に求められた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・1週間後

ドガァ

「っひ・・・助けてください・・・お願いします・・・誰にも言いませんから・・・」

「へぇ～本当に誰にも言わないんなら許してあげても良いよ？」

「は、はい、誰にもいいませ、言うに決まってるだろ馬鹿！！てめぇなんか警備員にでも捕まっちまえ！！・・・・え？あれ？口が勝手に・・」

「残ね～ん嘘吐きは・・・死ね」

その瞬間、髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒で黒い髪を腰あたりまで伸ばし服装は、黒の皮ジャンにダメージジーンズを履いていて顔は多少化粧がしてある美人な女の明らかに殺傷能力がありそうなメリケンサックを装着した拳が男の腹部に決まり男は血を吹きながらゴミ箱の中に吹っ飛んだ。

そして、男は気を失いその場で倒れた

・・・・
・・・・・
・・・・

「ふふふ、あははははは、やっぱりいいや～♪自分に嘘をつかないで自分らしく生きるって♪風紀委員（ジャッジメント）なんかして正義ぶってた自分が馬鹿みたい・・・それに今まで守ろうとしていた奴らだって嘘吐きばっかり・・・守る価値なんて無かったんだ・・・ゴクゴク・・ぷは～～ぽい・・・がしゃん｝さてと」

瓦礫の上に腰かけながらボトルのままウィスキーを飲み干した髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒で黒い髪を腰あたりまで伸ばした女が空になったボトルを放り投げて投げられたボトルは壁に当りばらばらに砕けた

そして、女は、少しジャンプして瓦礫の下に降りてから少し歩いて本日の獲物を探そうと路地裏から獲物を定めているとある人物が前を通っていた

それを見た瞬間、女は、にやりと笑い右手を怪しく伸ばした

その瞬間に女の手は、手首から先が消えていた・・・

そして、夜になりまたまた、絡まれやすい時間になって来たので早く帰ろうと椿をせかしながら帰っていると夜空が綺麗だな～と思い空を眺めていたらいきなりなぞの巨大な手に掴まれ路地裏に引きずり込まれた

そして俺は謎の大きな手に引きずられながら俺は必死に抜け出そうともがいていたが抜け出せずさらに俺を掴んでいた大きな手は、俺を放り投げた

「カハッ・・グ」

放り投げられた俺は、ビルに激突して俺は壁にめり込みそして、重力に従い瓦礫の上に落ちた

（なんだ?今の・・・・）

俺はダメージを『異世界樹(ユグドラシル)』で回復しながら立ちあがって周りを見渡した

しかし、周りにはだれもいず何なんだ?と思っていた矢先

「久しぶり♪牙桜!!!!」

突如上から髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒で黒い髪を腰あたりまで伸ばし服装は、黒の皮ジャンにダメージジーンズを履いていて顔は多少化粧がしてある美人な女が俺に向かって殴りかかってきた（・・・良い女じゃん）

俺はとっさに反応してその拳を受け止めるが・・あり得ない威力で

あったため俺は威力を全く殺せず後ろにブッ飛ばされてしまった

しかし、俺は何とか『異世界樹（ユグドラシル）』を地面に刺すことで威力を殺しなんとかその場に踏みとどまった

そして、俺は襲撃者を睨みつけながら

「なんだお前？いきなり襲いかかってきやがって俺を牙桜だって認識できてるってことは、不良集団（スキルアウト）の誰かか？」

俺がそう相手をバカにしながら聞くと

女は、くすくす笑い出した

「気味悪い奴だな・・・・なんだ？馬鹿なんですか？」

「ククク、へぇやっぱりこの姿だと誰もあたしって気が付かないんだぁ♪」

俺はその笑い声と顔に誰かの顔が重なって見えた

「・・・・・？」

俺が頭をひねりながら考えて言うと

「へぇ本当にわからないんだ♪あたしがポニーテールならわかるかな？」

女がそう言ってくるので脳内変換して見た

すると驚きの人物だった

「つ、椿!?」

なぜだろうポニーテール状態の椿のそっくりだった・・・なんで?何?椿の本当の家族!?何?お姉さんか何か?気味が悪いほどに似てる!!!!

「はぁ?・・・・あんたって鈍かったんだね・・・なら、あたしが腕に腕章を巻いていれば判る?」

女がそう言った瞬間に驚きと怒りが同時に沸いた

「剣菱・・・麻華ぁ!!!!!」

俺は、あそこまでボコボコニしたのにまだめげずにあろうことか俺様に刃向かって来ているのだからな!!

俺が跳んで麻華の顔面に本気でパンチを叩き込もうとした時、麻華の拳が俺の腹部に突き刺さった

俺は九の字に折れ曲がり吐血をしながら空に浮かび上がった

(馬鹿な?見えなかった?この俺が?・・・レベルを落としているとはいえこの俺がか?)

そうおもっているといつの間にか麻華が俺の隣まで跳んでいて笑顔のまま俺の顔を蹴りとばした。

「がぁ・・・・・グハ」

俺は、頭部をあり得ない力で蹴られグルんぐるん回りながら瓦礫の上に叩きつけられた

「・・・・コンチクショウ・・・これが・・あの女の本気かよ・・・伸び方が半端じゃないなぁ～・・・めんどくせぇ・・『異世界樹（ユグドラシル）』で殺してやるよ！！！」

俺は、壁に凭れ掛りながら『異世界樹（ユグドラシル）』の枝を樹形図のように枝分かれさせながら全方向から『異世界樹（ユグドラシル）』の刃のような枝で攻撃を仕掛けた

その時俺は見た、剣菱麻華はしっかりと笑っていた

そして、俺の『異世界樹（ユグドラシル）』が麻華の体に触れようとしたその時・・・

麻華の背中の衣服が一気に破け背中から燃え盛る炎のように見える無数のいや、７２枚の天にまで届きそうなほど巨大で長い翼が飛び出し『異世界樹（ユグドラシル）』の枝を燃やし光速に近い速度で動き俺の『異世界樹（ユグドラシル）』を切り裂き燃やしながら俺の体に２０００程の圧倒的に深い切り傷を刻みその傷を再生しようとすればその傷が燃えだすと言う中々ハプニングな攻撃をされ俺は、さらに焔の翼の一つに殴り飛ばされ俺は瓦礫の山に突っ込んで俺は、瓦礫の雪崩に潰された。

その瞬間に一瞬だけ麻華の恍惚に笑う禍々しい笑みを見たがなぜだろう

俺（圧倒的な化け物）の眼には・・・麻華の奴が泣いているようにしか見えなかった

まるで迷子の小さな女の子が泣きじゃくっているようにしか見えなかった

誰かが手を差し伸べなければ・・・ずっと泣き続けることになりそうなほど・・・

（・・・・・・めんどくさいけど・・・仕方ないな・・・・・・・・しばし休息だ・・・・・休んだら・・・・絶対に助けてやるよ・・・・ネジ曲がったお前を・・・俺の歪みで・・・螺子戻してやる）

影虎サイドｅｎｄ

剣菱麻華（ドロップアウトガール）（後書き）

以上です。まさかの影虎の敗北!?圧倒的な力量を発揮した麻華・・・さすがは影虎の姉の一人です。

ではまた。

焔両刃翼（ジャオエルの翼）（前書き）

はい、今回で麻華編は終了です。

ではどうぞ

焔両刃翼（ジャオエルの翼）

・・・・
・・・・・
・・・・・

がちゃがちゃ

「はぁ・・はぁ・・・・影虎、なんでお前こんなにぼろぼろに・・・息してるか？」

そういいながら瓦礫を小さな体で必死にどかしながら瓦礫の中でボロボロをとおり越してぐちゃぐちゃの桜小路影虎を助けようとしている桜小路椿の姿がそこにあった

「おい影虎、影虎！！」

彼女はずっと影虎を探していてこの場所で明らかな戦闘があったことを確認して探しそして見つけたのだが影虎の反応がなったのだ普段なら『異世界樹（ユグドラシル）』で傷を治して絶対に気絶なんかしないのに彼の体はボロボロで体中が未だに燃えていたのだ

そして、彼女が影虎の体を揺すっていた

するとパチッと影虎が目をさましたのだ。

「影虎！！」

椿がそう大きな声で言うと

「・・・・はぁ・・『逆転再生（リ・スタート）』」

「え？」

影虎が何かを呟いた瞬間に影虎の傷が治ったのではなく無くなったのだ

そして、影虎は何事も無かったのかのように立ち上がり笑っていた

「か、影虎？・・・・」

「なぁ椿・・・俺どのくらい眠っていた？」

影虎が椿に聞いた

「え～と３０分くらい？」

っと彼女がそう言うと影虎は、空を見ながら

「そうか、そんなに眠っていたか・・・なぁ椿♪明日の朝までには帰るから今日だけは、夜遊びの許可をください・・・どうしても噛み砕きたい奴が居るんだ♪お願いだ」

影虎は、両手を合わせてお願いしていた

それを見た椿は、

「・・・・怪我だけはするなよ？そして、今度また何処か遊びに連れっていってくれよ？」

っと椿はそう言って影虎に微笑んでいた
その笑顔はまるで我儘な子供の我儘を聞き入れた母親のような笑顔だった
「ありがとう。『危機一髪(ヘルダイブ)』」
影虎がそう呟いた瞬間に影虎はすでに其処にはいなかった
・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・
今から２０分前だろうその間に2人の青年たちが麻華の毒牙にかかっていた
一人は、ある人物に頼まれ麻華を探していた者『赤沙汰薙(あかさたな)』
彼は彼女を捜索していて発見することに成功したのだが影虎をも簡単に撃破した麻華の狂気と怒りに触れ己の能力でかろうじて致命傷だけは負っていないもののダメージが積み重なってピンチであった
そして、もう一人は、『負導一真』であった
彼は、汰薙とそして、麻華を助けようと2人の間に入り必死に奮闘したものの
麻華のオネストハンドによって抵抗ごと叩きのめされこちらもピンチであった

そして当事者の麻華は、何度か殴られた跡があるがピンピンとしていて片方の目から涙をながしてはいるものの狂気に満ちた笑いをしていた

もし、一真が麻華に影虎を殺すより前に会っていれば麻華をとめる事が出来たのだろうが

彼女は、影虎を殺したと誤認しもう後戻りはできないと自身を追い詰め

自身が恋愛感情を持っている男を殺そうとしていた

「ぐ・・・麻華・・・・やめろ・・・・考え直せ・・・」

一真は傷つきながらも必死に麻華を説得しようとしていたが

「ごめんね♪あたしはもう人を殺しちゃってるんだ♪もう、後戻りできないし・・戻る気も無い！！」

麻華はそう言って涙を流しながらも一真に拳を振り下ろした

その瞬間、

「麻華、やめなさい！！！」

「「？」」

2人は振り向いた先には、30台くらいであろうかスーツを着て汗だくになりながらも麻華に近寄って来るショートカットの女性があるいてきたのだ

「・・・麻華、・・・あなた・・・」

涙を眼に浮かべながらも近づいてくる女性

その女性を見て麻華は、酷く動揺しながら

「・・・お、お母さん・・・いや、違う！！何しに来たんだ剣菱春華(はるか)！！」

彼女はそう怒鳴った

「・・・麻華、やめなさい、あなたを傷つけたのは私たちよ。その子たちは関係ないじゃない・・その子たちを傷つけちゃだめよ」

彼女はそう言って麻華の肩に触れて目を真っすぐに見ていた

「・・・・うるさいあんたに関係なんか・・「あるわ私はあなたの母親よ。」あんたはあたしの親なんかじゃない！！「きゃ！！」あんたなんかあんたなんかぁ！！！！」

麻華は義理の母親を殴り飛ばし母親の身体を涙を流しながら蹴りつづけた

まるで影虎が麻華にした事のように怒りをぶちまけながら怒鳴った

そして、麻華が少し疲れた具合に

「はぁはぁ・・・はぁ・・」

母親が麻華の足を掴みながら這いあがったのだそしてフラフラしながら二本の足で立ち上がり麻華を優しく抱きとめたのだ

「ッ？」

「麻華・・聞いて・私はね・・子供が産めない身体なの・・・「？」・・あなたは、私の親友の子なの・・今まで黙っていたのは・・・親友との約束なの・・・あなたに嘘をつきたかったわけじゃない・・でもね・・・もし本当の事を言えば・・・あなたは親友の所に帰ってしまうかもしれない・・・そう思うと怖かったの・・・私にとってはあなたは本当の娘なの・・だから言えなかった・・・あたしの勝手であなたにこんなにつらい思いをさせている・・・ごめんなさい・・ごめんね麻華ぁああ・・」

母親は泣きだしながらもきっちりと麻華に伝えたのだ

嘘の無い正直な言葉で・・・・・

そして、麻華は、泣きながらも動揺していたしかし

彼女の目にたくさん傷つけた人の姿や殺してしまった牙桜の姿がよみがえった

罪悪感に嫌悪感のせいで収まりかけていた彼女の心の憤怒が再び噴火した

「・・・だからなに？「え？」・・あんたがどう思っていようが関係ないあんたは、嘘吐きだ！！「ま、麻華？」あんたがあたしをどう思っていようがあんたはたしが殺す！！」

麻華はそう言いながら母親の身体を空中に投げ飛ばして右手を母親に伸ばしたそして、右手が消えオネストハンドが母親に向かって飛んだ

そう麻華は、オネストハンドで母親を握りつぶそうとしていたのだ

「・・まか・・」

母親はあきらめたのか目をつぶり身をゆだねていた

「やめろぉおおおおおおお」

一真が横から叫ぶがもう止まりはしなかった

そして、母親にオネストハンドが当たるコンマ一秒に麻華の義理の母親の前に影虎が現れたのだ

そして、麻華の母親を右手で抱え

左手を伸ばし左手が消え真相掌握（トゥルースハンド）をオネストハンドにぶつけた

火のように燃えて光り輝いている筋肉は燃え上がる炎で、骨はあかあかと燃える石炭のようなもので出来た巨大な腕が空中でがっつりと掴み合いながら拮抗していた

名前がちがうだけで全く同じ力同志のぶつかり合い

そして、影虎は言った

「よう、馬鹿女・・お前の感情の負の連鎖、噛み砕きに来たぜ♪」

そう言った瞬間に影虎は、真相掌握（トゥルースハンド）を解除して麻華のオネストハンドをかわして麻華の母親をビルの物影に寝かせた

すると麻華の母親が手を影虎の頬に伸ばして

「・・・あなた、エルク君ね・・「なんで俺の名を?」・・お願い・・麻華を・・助けてあげて・・・」

彼女はそう言って気を失なった

影虎は、立ち上がって

「・・・・・最近妙に俺の名前を知っている人物が多いな・・」

彼はそう言ってビルの壁を垂直に歩きながら考えていて麻華に向き合った

「壁を歩いてる?」

っと一真が驚いていたので

「・・・今の俺に『異世界樹（ユグドラシル）』は使えないからな・・ちょっと代用品として俺の特技のオンパレードで対応する・・・はぁ～あ、まったくもって面倒くさい・・一真君、拝んどけよ?マイナス６の足の引っ張り方って言うのをな」

影虎はそう言って麻華に向き合った

「なんで?あんたはあたしが殺したはずじゃ・・・」

麻華は幽霊を見るかのように後ずさっていた

「あぁ死んだ・・・一度はきっちりと死んでいる・・・だが、俺は人外だ・・死と言う感性はお前達とは少し違う俺にとっては寝るようなものだよ。」

そう言いながら影虎は一歩一歩麻華に近づいた

「そ、そう、ならもう一回死ねばいい！！！」

麻華がそう言うと再び麻華の背中の衣服が吹っ飛び背中から燃え盛る炎のように見える無数のいや、７２枚の天にまで届きそうなほど巨大で長い翼が飛び出し影虎にすべての翼が襲いかかった

その瞬間影虎は笑いながら

「罪を重ねるなよ未成年だろ？『幻影武者（フェイクトラップ）』」

影虎がそう言った瞬間に炎のように見える翼は影虎の体を４つに裂いたが裂かれた影虎からは血も出ず霞のように消滅した

「ふふふ、あははは、どうよ、これでさすがに死んだでしょ？あははははは」

麻華は完全に勝ち誇って高らかに笑っていた

彼女の心はもう破滅寸前であった

そして、壊れた彼女は、倒れている一真たちにまでその力を振るお

うとした

その時、

「おいおい、誰が死んだって？」

プニ

「ッ！？」

突如影虎が麻華の後ろに現れ麻華に話しかけると同時に麻華の頬を人差し指で軽くつついていた

「何なんだよお前はぁあああああああ」

麻華は、背中ら生えている羽根をすべて使い影虎に昼ったが気が付けば彼は消えていて

今度は、麻華の頭の上に片手で逆立ちしながら立っていた

「うぁあああああ死ね死ね死ね！！！」

あまりにも奇妙な動きが麻華には不気味に映り麻華を焦らせ麻華のリミッターが外れ今まで以上に巨大な翼たちが影虎を襲った

しかし、

「いい加減学習しような？俺に勝てる物はいないんだよ。そろそろだな」

影虎が腕時計を確認しながら壁に垂直に立ってそう言うと

「え？あぁあああ、なんで！！！！」

突如麻華が苦しみ始めた。そして、背中から生えていた炎のような翼がお互いを打ちのめし合い徐々に消滅しだした

そして、麻華が蹲りながら苦しんでいて麻華の翼は、小さな羽にまで縮まった

しかし、麻華のほうは震えだしていた

身体が言う事を聞かず限界が来ているのに関わらず未だにギアがトップに入り続けていることにより自身の実力によって内側からダメージを受けているのだ

（なんで？身体が勝手に全力を引き出してる？苦しい・・・体中が苦しい・・・）

麻華が苦しんでいる姿を見て影虎はすぐに倒れている麻華の横に壁を歩きながら降りると

しゃがんで麻華を見下しながら話した

「相変わらずうっとしい目つきだなお前」

「・・・・ぐぐ、何をした！？」

いきなり失礼な発言をした影虎に食いつくように怒鳴る麻華

彼女自身はもうまともに動けはしない

「いやね、とどめをさすのが面倒くさいし説得なんかにお前は応じないでしょう?だから俺様が寛大な措置でお前の全力を引き出し続ける特技を使ったんだよその名も『不完全開(オーバーヒート)』、基本的に俺がしばかれている間に相手が自爆するってだけでデメリットしかないのが現状だよ。素直に言うと勝つことに興味は無い。」

それを聞いた瞬間に麻華はあきらめたかのように黙り込んだ

(勝つ事を度外視してあたしに負けさせるなんて・・・もう殺されても良いやどの道こんな嘘ばっかの世界に未練なんてもう捨てたんだ・・・・)

そう思い麻華は眼を閉じた

この男(影虎)なら迷わずあたしを殺してくれるだろうそう思い

麻華は、地面に大の字で仰向けになった

「なに?もう完全に諦めたのか?」

影虎は麻華にそう言った

「・・・殺してよ・・・もう生きて居たくなんかない・・」

「ふん、そう言っている割には、お前泣いてるぞ」

影虎がそう言った瞬間に確かに麻華は泣いていた

「・・・・・早く殺してよ」

麻華がいら立ちながらそう言うと影虎は、

「とりあえず、『不完全開(オーバーヒート)』は解除しておいてやったよ。力を抜けるぜ。そして・・・バーロ、俺は、お前に勝ったんだから殺すか生かすかは俺の自由だ。ひとつだけ聞かせろ何故、荒れてるんだ？」

此処で影虎は空気を読まずに疑問をぶつけた

「っふ・・・あんたがさっき助けた女があたしにずっと嘘をつき続けてたんだよ・・それが哀しくて・・・辛くて・それから何が何だか分からなくなって・・・・わから・・・グス・なくなってぇ～・・・エグ・・・・グス・・・なんで・・・こんな・・・ことに・・・なった・・・グス、えぐ・・・・あたしの人生が・・・・全部嘘にしか・・・思えなくて・・・・グス・・エグ・・・誰にも相談できなくて・・・・うぅううう・・うぇえええええんうぇえええんうぁあああああん」

麻華は途中で泣き始め後半はほとんど言葉になっていなかった

麻華の言葉を聞いた影虎は、やれやれと溜息をつきながら

「なぁ・・・確かにお前の親はお前に嘘をついていたのかもしれない「グス、いきなり何よぉ・・」・・・言葉では確かに嘘をついていたかもしれないがあの人の気持ちは嘘なのか？」

「う・・・・」

麻華は、『不完全開(オーバーヒート)』を解除された事によりクールダウンして頭に

血が上らず冷静に影虎の的確すぎる正論に基づいた問いかけを聞いた

「ついでに聞こう、本当にお前は、自分の人生全てが嘘だったと本当に思っているのか？お前の自分の家族が好きだって気持ちまで、嘘ってたった一言で塗りつぶしちまうのか？お前と仲良くしてくれた皆の気持ちを嘘って言葉で台無しにするのか？今こうしてお前のために傷ついている一真たちの気持ちまでも嘘って言葉でなあった事にしちまうのか？」

影虎が淡々と疑問をぶつけ始めた

それに対して麻華は、大粒の涙を流しながら目を腕で隠しながら泣いていた

彼女自身、もう理解できていたのである。ただ、意地や悔しさが邪魔をして素直になれずただあがいていただけの子供なのだ

影虎はそれを最初から見抜いていた

そして、彼女のＳＯＳを敵である彼が察知して彼は文字通り麻華の感情の負の連鎖を噛み砕きに来たのだ。

「うぅううう、わかってるわかってるよ！！でも、許せなかったんだ・・・どうしても・・・」

麻華がそう泣きながら影虎の目を真っすぐに見てそう言った

今の麻華の目には、歪みはほとんどなかった

「親しい人だったからだろ？自分が好きな人にだけは嘘をついて欲

しくもつかれたくもなかっただけなんだろ。その感情が抑えきれなくなって自分に嘘をついてしまっただけなんだよな・・」

影虎は酷く優しい目と声でそう言った

そして、その時の影虎の姿は、周りの人間からは影千代にも影虎にも見えたであろう

二つの姿が混ざったかのようなズレているようなどちらでもあるような良くわからない姿だ。

この姿には影虎も気付いていない。

そして、その姿のまま麻華の額に手を載せてなでだした

「？・・・なんで牙桜のあなたがあたしを助けてくれるの？あたしあなたを殺したんだよ？」

「バカタレ、「え？」」

ドクンドクンドクン

麻華が影虎？にそういうと影虎は麻華を一言でけなし抱き寄せた

抱き寄せられた麻華は顔を真っ赤にしていた

「こういう役目は本来ならお前が惚れてる一真君譲るべきなのだろうがお前がぶちのめしたせいで代役は俺が務めるぞ？・・・俺の心音聞こえるだろ？「あ、え？」俺もお前の心音が聞こえる・・生きてるんだよ。嘘偽りなく俺は生きてる。お前も嘘偽りなく生きてる。

人生が・・楽しい事がすべて嘘だなんて言うな・・・お前は今もこうして周りにたくさん嘘の無い心で接してくれている人がたくさんいるじゃねぇか♪もうお前は、歪むな・・自分に嘘をつくな・・お前はお前だ。くそ真面目で真っすぐで俺みたいな歪みからは眩しすぎて目を背けたくなるくらいな・・ついでいうと嘘も方便ってこともあるんだぜ♪」

「あっ」

影虎は、そういうとすぐに麻華の肩に手を置いて麻華を離すと立ち上がって

「お前は、自分の罪を認めるか？」

そう聞いたただそう聞いた

「・・・・うん・・・ご、ごめんなさい！！！！」

麻華は、おお泣きしながら正座して両手を地面について確かにそう大きな声でよこで倒れている母親や一真たちに謝ったのだ

「・・・麻華・・私こそごめんなさい」

すると麻華の母親がすぐに起き上がって麻華に抱きついたのだ

その瞬間にまた麻華はおお泣きしだして母親の胸で泣いていた

それを見ていた影虎は、

（ていうかあの怪力女のにボコボコニされてたのにすぐに立ち上が

るとかあの女（母親）。。どんだけタフなんだよ・・・）

っと冷静に考えて冷や汗をかいていた

その瞬間に影虎の体にも限界が訪れた

「かは、ぐほ・・・さすがに『異世界樹（ユグドラシル）』無しじゃ長くは持たないな俺の命・・・おい、剣菱・・・」

影虎は血を吐きながらも麻華を呼んだ

そして

「お前はまだ正義のために風紀委員（ジャッジメント）でいたいか？」

そう聞いた

しかし、麻華はうつむいて

「・・・風紀委員（ジャッジメント）は続けたい・・・やめたくないけど・・・・あたしは一杯罪を犯したから・・・」

麻華がそう言った瞬間に影虎は椿の時と同様『続けたい』という一言だけを聞き入れ

「今宵は、偉大なる俺様の最高にして最大の恩赦を授けよう。お前の罪、この偉大なる俺様が肩代わりしよう『大罪滅星（おおつみほろぼし）』発動、全ての滞在は我が引き継がん」

俺様モードに入った影虎がそう言うとこの一連の騒動の犯人がすべ

て牙桜という事になった。
全ての情報や記憶を捻じ曲げたのだ
そしてすべての罪を自身で背負ったのだ

「なにを？」

麻華は疑問に思った彼女からしてみれば何をしたのかがわからないのだ

「ん？あぁお前が起こした暴力事件または窃盗事件をすべて俺のしたことにしただけだ。ただ、お前を心配していた一真たちは忘れないだろうがね」

「はぁなんで？なんでそんなことまで！？」

麻華は焦りながら影虎に聞いた

「俺はお前を認めた。」

影虎は麻華を指さしてただそう言った

そして、その瞬間に風紀委員（ジャッジメント）が１０人単位で来た

そして、

ガチャ

影虎は、両手に手錠をかけられた

「牙桜、あなたを暴力行為、公務執行妨害などの件で逮捕します。剣菱さん、長い間、勝手な休暇を取っていたのかと思えばいきなりの牙桜逮捕、ですが・牙桜逮捕を差し引いても・・始末書ものですよ」

とあっさり風紀委員（ジャッジメント）に捕まった影虎は、笑いながら

麻華達を見て

「お前の罪は、お前の意思で償え、お前の罰は、自分のしたことを心に刻み決して…忘れるな!!」

影虎はそう言って風紀委員（ジャッジメント）たちに連行された

・・・

麻華がうれしそうに始末書を書いているので水希が気になって聞いた

「ん?なんでもないよ・・ただね…負導さん意外にも一目惚れした様な人が居るんだよね♪よしまた一枚終わり♪」

麻華がうれしそうにそう言うと

「負導君以外に・・・誰ですかその方?」

これはチャンスとばかりに食いつく水城に麻華は、やさしく笑いながら

「あたしたちがよ~く知っていてでも実は知らない人♪」

麻華はそう言って笑っていた

つづく

焔両刃翼（ジャオエルの翼）（後書き）

剣菱麻華（ドロップアウトＶｅｒ）

剣菱麻華がグレた状態

髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒で黒い髪を腰あたりまで伸ばし服装は、黒の皮ジャンにダメージジーンズを履いていて顔は多少化粧がしてある美人な女の明らかに殺傷能力がありそうなメリケンサックを装着した拳が特徴

精神的にリミッターが外れたためか手加減が一切なくなり正直言って格闘技の面では影虎をも圧倒する。最強の格闘技王になれるやらなれないやら…渡さんの所でのネタバレで発覚しているが麻華は、椿と一真の妹で影虎の姉である。

能力

『真実の手（オネストハンド）』

掴みたいものだけ、掴まなければいけない物だけ、つかめない物だけを掴む事が出来る超巨大な腕、本気になれば太陽ですら軽く掴む事が出来る腕。ぶっちゃけ影虎の『真相掌握（トゥルースハンド）』と同じ力

『焔両刃翼（ジャオエルの翼）』

背中から衣服を破きながら７２枚の巨大で転移も届くほど長い焔の翼

光速で動きあらゆるものを切り刻める

そして、切り刻まれた傷は治らず燃え上がり傷が広がる。『異世界樹（ユグドラシル）』を燃やす事の出来る唯一の炎を纏った翼。本当は中に骨のようなものがある。

以上です。

影虎の特技（これらを使っているときは『異世界樹（ユグドラシル）』が使えなくなり不死身ではなくなる）

『幻影武者（フェイクトラップ）』

死を含め、不利な事は夢に変え、有利な事は現実に出来る。

幻と現実の狭間を操る術（すべ）です。

具体的な能力は、術者に対するダメージ（死も含む）などの不利な事柄をを幻として無かったことにできます。
また、術者の攻撃などの有利な事柄を現実のものとする事が出来ます。

『逆転再生（リ・スタート）』
全てを最初からやり直させる能力（原石）
もちろん、攻撃すらもやり直しになる
永遠に結果が出せない能力

『混乱重力（ウォールウォーカー）』
自身にかかる重力が狂い壁などが歩けるようになる

『不完全開（オーバーヒート）』

相手の意思に関係なく相手の全力（限界）を引き出し自身の力で自滅させる

『危機一髪（ヘルダイブ）』

あえて自身が圧倒的に大ダメージを負ってしまう位置に移動する能力。

『自壊本願（ジ・エンド）』

潜在能力を超越した動きを可能にする。ただし１０秒だけでそれが終わると９０倍の反動を受ける。急に麻華の頭の上に移動したのは、身体能力を増加させたから。

『大罪滅星（バッドジャッジ）』

相手が犯した罪を無かった事にする。または、相手の罪をすべて自分で被る事が出来る。

以上です。影虎君って本気で死に掛けるといろんな能力が発言します。

超常現象（遂に現れたレベル６の２人目、椿の初恋の相手、奇怪のシアン現る）

今回はショートストーリーです

では、どうぞ

超常現象（遂に現れたレベル6の2人目、椿の初恋の相手、奇怪のシアン現る）

影虎が再びどこかに行ってから俺は一人で歩いて家に帰っていた
誰かに絡まれたくなので出来るだけ人どおりの多い明るい道を選んで歩いていた

一応男装をしているので俺の事は、背の低い男子にしか見えないだろう

・・・でも、暗い夜を独りで歩くと言うのは、怖い

今でもまだ怖い

「はぁ・・・影虎の奴どこに行ったんだよ～」

ドン

「あっごめんなさい」

俺は、よそ見をしていて誰かにぶつかったので一応謝って置いた

しかし、嫌な予感は的中するものだ

「ひっく・・・なんだぁ人にぶつかっといて謝りも死ねぇのかガキ」

っと酔っぱらったサラリーマンが俺に怒鳴ってきた

（謝ったじゃん！！）

「おい、なんだ?その反抗的な目は?」

「こらこら社長、子供に絡まないで」

一人の部下らしき男が酔っぱらいを止めるが男はその部下を払いのけて俺に拳を振り上げてきた

(どうする?燃やすか?・・)

俺が構えて掌から火を出そうとしたその瞬間に

【彼女に触れないでくれない?】

そう後ろから声がした瞬間に

「「ぐぁあああああああああ」」

「ッ!?・・・え?」

突如、サラリーマンの二人が赤い光を浴びて身体が砂のようになって消えた

俺は驚いて後ろに振り返った

其処にはある人物が空を階段を下りるかのように降りていた

そいつを見た瞬間私は全身が降着して身の毛がよだつ思いだった

そいつは、黒のスーツをキチンと着こなし赤色のネクタイをし金髪

の髪を右側だけ立たせ左側をたくさんのピンで留めている個性的だ
が中々カッコイイ髪型の長身でスリムで顔つきはカッコイイ男だった

私はこいつを知っている・・・嫌と言うほど知っている

そして男は階段を下りるように空から地面に降り立った

そして、男は私の目の前まで歩いてくると腰を落として私の顔に触れ

【久しぶりだねマリア、俺がわかるかい?】

そいつがそう言った瞬間に私は、ワタシに変わった

「触れるな下種が!!」

白髪になった私はすぐに男の手を払いのけた

【おやおや、嫌われたものだね・・・】

男はそう言って立ちあがりワタシを見おろしていた

「黙れ!!貴様の顔など見たくも無い!!」

ワタシはすぐに男に殴りかかった

しかし…

男はワタシの拳が当たる直前に急にしゃがみ込みワタシのこぶしを
交わした

そして私が男の後ろに回ったとたんに男は、しゃがむのをやめてた

ちあがった

男の手には、１００００円が握られていた

【あれ?もしかして殴ろうとした?ハハハごめんね♪ちょっと足元にお金が落ちていたからひろったんだよ。】

「・・・クソが・・」

男はワタシの攻撃を避けたのではなく地面にあったお金を拾っただけだった

こいつはそれほど強くは無い・・・ただ、ただ、運が良すぎるのだ。

それがこいつの強さ・・・

圧倒的な運命に選ばれているとしか言いようのない力…ワタシから奪った物と自身の力が混ざって生まれたワタシに対しての当てつけの魔術『絶対強運』

それを使うのがこいつだ

「相変わらずワタシから奪った加護に守られているようだな・・・『シアン』!!」

ワタシが全力で叩きのめすために『新書血録』を使用しようとしたその時に

【フフフ、怒った君も僕からすれば愛おしい・・・チュ】

「ウグ！？・・・・・・・・・・・・」

ワタシは、いきなり目の前に現れたシアンに唇を奪われてしまいなぜか抵抗する気が失せてしまった

そして、どんどんと身体が熱くなっていくのがわかったそして、自然と涙が出てくるのが分かった・・憎くて憎くて仕方が無かったシアンをワタシはまだ・・・・

・・・だめだ・・・ワタシは・・・シアンを殺せない・・・・・・

ワタシの心が折かけていたその時、

（シアンなんて大っ嫌いだ！！！）

っとワタシの代理人格がワタシの中で怒り狂っていた

そして・・・・・・・

（私は、こんな奴に躊躇なんてしない！！シアンなんて消えろ！！）

その瞬間にワタシの意識は完全に椿にのっとりかえされた

そして、気が付けば・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

俺は、主人格がこの男に弱いことをすっかりと忘れて主人格に任せ

ようとしていたのですぐにやめて身体を再び取りかえした

そして、その瞬間に背が伸びて髪の色は、黒なのに今は、白い髪と黒い髪そして、先端の辺りだけが黒い髪や根元だけが白い髪など白と黒両方が混ざったような髪の色になっていた・・・そう、以前の大人状態だ・・

その姿になった私を見てシアンは、驚きながら

【いきなり大人になりだすなんて相変わらず君は、ハイスペックだよね♪グファ】

〔『｛（きもいからこっち見るな）｝』〕

奇妙な笑い顔を向けてきたので私は、シアンを幸運では絶対に避け切ることのできないような速度でこぶしを振るいシアンを空中に殴り飛ばした

殴り飛ばされたシアンは、空中に弧を描きながら空を飛んでいるかと思うと空中で急に停止して逆さになりながら何かにぶら下がるように空を逆さに飛んで

私のほうを見ながら

【今日は帰るよ。久しぶりに君の顔を見れたうえにキスまでしたんだ。これ以上望むのは、『異世界樹（ユグドラシル）』に悪いし彼に僕は一度負けているからね♪でも、忘れないでね。椿ちゃん、僕は必ず君の主人格であり僕の恋人であるマリアを取り戻しに来るとね。アディオス】

そうシアンが言うとシアンは月の光を受けて徐々に透明になり始め

その場から消えた

〔『～（私の中のマリアを取り戻しに来る・・か・・・次シアンが来たら・・私が殺す・・もう影虎に無理はさせない・・）～』〕

この後私はすぐに元の姿に戻り影虎が居るような気がして一真の家に向かった。

シアンは、クリスのいや、マリアの初恋の相手・・・そして、マリアでない私の宿敵、私から幸運や加護を奪った頂本人・・・
私はあいつが嫌いだ・・・

何処か影虎に似ているあいつの事が大っ嫌いだ

つづく

超常現象（遂に現れたレベル６の２人目、椿の初恋の相手、奇怪のシアン現る）

クレリア＝クロス＝死闇（シアン）

ｃｖ三橋加奈子

性別　男

年齢　１７

性格　負けた相手を不謹慎な言葉で罵倒したりと悪辣な性格　自分と同族（レベル６）など認めた物には、世話焼き　欲しい物またはしたいことのためなら誰でも犠牲に捧げる　（欲しい物に『椿』が入っている）

顔　イケメン

髪の色　金

髪型　長い髪をヘアピンをたくさん使いオーズのアンクみたいにしている

体格　ふつう

服装　常にスーツ（黒）

所持品　手帳（自分が心を折った能力者や魔術師のことが日記として記されている）　たばこ　お菓子　ケータイ

『絶対強運』

圧倒的な幸運を持ちさらには他人から幸運を奪い己が物とする事が出来る。

『超常現象（パラノーマルアクティビティ）』

この世で起きるはずのない現象を運命的に誘発する能力

能力の効果も発動タイミングも運任せ

彼自身の特性　『絶対強運』があるため

どんなことでも（実際に起きるはずのないこと）ほとんど自由に出来て

タイミングも強運のため絶妙なタイミングに発動する

黄金錬成のように自滅することもないため

本当の意味で最強

例、誰かが殴りかかってきたらその腕が何故かドロドロに解けたり

他人の心を自分の物にしたり本人が嫌がっているのに感情と身体が自分を愛してしまっていたり

ビルがいきなりひっくり返ったり

死んだ人が生き返ったり

隕石が振ってきたり

いきなり身体が破裂したり

攻撃が自分をすり抜けてしまったり

年を取らなくなったり

いきなり別の場所に移動したりなどランダム過ぎて予想が本人にもつかない様な戦い方をする。

追加事項

椿さんの過去に因縁がある模様。元は恋人だったらしい。

以上です

喧嘩勃発（椿さんＶＳ天野さん、宿命の対決（嘘）・・・けど喧嘩は本当）（前

一週間に1回の投稿タイムです。

今回は、珍しいペアの喧嘩騒動です。

ではどうぞ

「一真～。」

俺は減なりしながら教室に残っていた一真の所に行った

「よう、影と…。
何か凄い疲れてないか？」

「まぁ、昨日走り回ってな…。
それより、椿知らない？
見当たらなくてさ。」

そうなんですまた椿さん書き置きもなしに出かけたんです！！

最近俺の扱い酷いんです。あの人朝に弱いのに用事がある日には体内時計で必ず起きるんです

「椿？あぁ～そう言えばさっき葵が椿に料理教わりに行くとかウキウキしながら言ってたから先に葵と一緒に帰ったんじゃないか？」

う・・・そ・・・・・？・・・・・おれ・・・・今日学校サボって・・・探してたのに・・・・

まぁいいや♪

「へぇ～…あの天野がねぇ～。
まぁ、椿の料理の教え方なら猿でも３ヶ月あれば料理が出来るようになるな。」

っと俺はなぜか椿の事を自慢してやりたくなり一真のそう言った・・
・こういう所って俺は子供だよな・・

「ふ～ん…アイツはどうだろな…。
下手をすれば猿以下かも知れねぇからな。」

「お前…酷すぎるだろ…。」

俺は一真の発言に素直にそう言った

酷過ぎると

「多分、誰しもが思う解答だよ…。
まぁ、行ってみれば分かる話だ。
行こうぜ。」

「おう♪」

俺と一真は教室から出て自宅に向かうことにした。
ただ、廊下を歩いている時、地味に女子がこちらをチラチラ見ていたのは何故だ？
一真のせいか？
やはり、一真はモテるのかね・・・いやこの場合は俺かな？
と思っていただけで心の内に秘めて置く事にした。
……
……
数時間後、俺達はゲーセンや本屋、コンビニと色々寄り道をしながら自宅について中に入った。

「「・・・何があった!!!!!?」」

状況の説明をすると何がどうなっているのか分からないが椿さんと天野さんが台所で睨み合っていて、台所が散らかっている上に焦げた料理や穴の空いたフライパンなどがあった。
何があったんだ?そして、椿のあの目つきはマジでキレてる

「そんなにキツイ言い方をしなくてもいいじゃない!!」

「うるせぇ!!
お前はどれだけ本当に物覚えが悪いんだ!!
この万年片想いが!!」

「うるさいよ!!
私だってこんな感じにしたくてやってるんじゃないもん!!
このチビ炎悪女!!」

「テメェ!!」

「何よ!!」

「何だよ!!」

「「ｓｔｏｐ!!!!!ｓｔｏｐ!!!!!!」」

そろそろヤバイ感じになってきたので、俺達は間に割って入って止めることにした。
しかし・・・

「「一真（影虎）！？
邪魔しないで（すんな）！！」」

「「ガハッ！！」」

俺は火球を顔面にぶつけられ、一真は重力のかかったパンチを食らわされて、二人して横に倒れた…。
つ、つよい・・・それと顔面にって酷い・・・背中や腹なら慣れてるけど顔って・・・

「お前なんかな……。」

「椿なんて……。」

俺達の事は気にせず、未だに二人はガミガミ言ってる…。
俺は怒りに燃えたので立ち上がりポケットからあるものを取り出し

「テメェら！！いい加減にしないとこれ飲むぞ！！」

「「えッ！？」」

俺がポケットから何かを取り出して、二人を脅すと二人は一応視線をそちらに移した。
すると、少し沈黙が出来た。
まぁ、無理もない…。
だって、俺が今持ってるのは…忍特製の忍ＣＭＤＸ４・・・つまりは、俺の中に生まれたレズな女の人格を呼び出すための薬だ。

「本当なら俺もこんな事はしたくない！！
しかし！！未だに喧嘩を続けると言うならこれを飲むぞ！！」

「「すみませんでした！！」」

すると、二人は突然俺様に土下座しだした。

よろしい♪では、とりあえず

「とりあえず、何があったんだ？」

「「それがさ（ね）…。

ッ！？」」

「テメェ！！影虎は俺に聞いてるんだぞ！！邪魔すんなよ！！」

「椿こそ、私が説明しようとしてるのに邪魔しないで！！」

「んだと！！

殺んのかよ！？」

「何よ！！結局暴力で解決しようとするんだね！！

良いよ！！うけてたって…「「やめんかー！！」」「キャッ！！」」

何故かまた喧嘩に発展してきたので俺達は止めるために二人を後ろから押さえ付けた。

このままでは、マジで火事になるか家がつぶれる・・・最近オーナーさんから苦情が来てるのでとにかく阻止！！

「放せ～！！

俺はあいつを焼き殺す！！」

「放してよ一真！！

私は椿を潰すんだから!!」

これは不味い…非常に不味い…。
俺は椿を押さえ付けながら一真と目があった。

「影虎…わかってるよな…?」

「あぁ…。
ここは一先ず…。」

「「うん!!おりゃあ!!」」

「「キャッ（ウワァア）!!」」

俺と一真は頷きあって、無理矢理天野と椿を引き離し、俺は寝室に移動した。

「離せ離せ離せ〜!!」

っと俺に羽交い絞めにされて両足が地面についていない状況で手足をばたばたさせる椿に俺は

「とりあえず落ち着けって何があったんだよ?」

っと聞くと

「葵が悪いんだ!!全部あいつが悪いんだ〜!!」

っと寝室にあったものを手当たりしだいに投げてくるので俺はそれらをさっさっとキャッチして元の位置に直し続けた

すると

「だってなだってな・・今日な・・・」

っと椿さんがようやく落ち着いてほっぺたを膨らませて口を尖らせながらも話してくれた。

つづく

喧嘩勃発（椿さんＶＳ天野さん、宿命の対決（嘘）・・・けど喧嘩は本当）（後

以上です。本当に影虎は、苦労人な気がします。

まだ続きます。もう一回投稿するのでよろしく!!

出来れば感想が欲しいです。感想が作者の励みになります。

ではまた

喧嘩騒動（天野ＶＳ椿・・・命を掛けた戦い（嘘））（前書き）

さて続けて投稿します

喧嘩をしている椿と天野さん・・一体どうなるのか?絶交か?仲直りか?苦渋の第二ラウンドがはじまります。

そして、あの人登場です。

喧嘩騒動（天野ＶＳ椿・・・命を掛けた戦い（嘘））

……

……

……

回想

「じゃあ、始めるぞ。」

「よろしく御願いします！！
椿先生！！」

「うむ。
じゃあ、簡単に卵焼きから行くぞ。
この器に卵を割ってくれ。」

「わかった♪せーの♪」

グシャッ！！

「「・・・」」

「あ、葵…ゆ、ゆっくり割れよ？」

・・・まぁこのくらいのミスは俺でも一生に一回くらいはね・・・♪？

「わ、わかった…。」

グシャッ！！

「今度は割るなよ？」

ま・・・ぁ・・・・・・・このくらいのミスは、誰でもするかな？な
な？

「うん…あッ！？」

グシャッ！！

「「・・・」」

今度は卵を割る以前に落とした・・・・フフフ

「よし、卵割りは今回俺がしよう。
焼く段階に移ろう。」

「そ、そだね…。」

……

……

……

「では、油を挽いて卵を流せ。」

「了解♪」

～～～～１０分経過～～～～

「「・・・」」

俺達の目の前には真っ黒な物体がある…。
何だろう?これ?危ない気がする?て言うかどうやったらこれが作れるんだ?むしろ俺のレシピでこれを作る方法を知りたい

「もう一度やろう…。」

「う、うん…。」

～～～～２０分経過～～～～

「「・・・」」

今度は、卵焼き器が焦げて穴が空きました。
あれ?なんで?どうして?・・・・・て言うかもう俺の手に負えない・・

「葵…ハッキリと言うが、お前には料理の才能が無い…。
諦めろ…。」

「えッ!?」

「家事は一真にしてもらえ。
アイツなら何とかしてくれる。
だから諦めろ♪」

「そんな～…。
料理が出来なかったら私、一真に迷惑掛けてばかりだよ～…。」

「それでいいじゃないか♪」

ついつい出てしまった軽い一言・・・

「それでいいって何よ!?
私が一真にずっと迷惑掛けてろって言うの!?」

葵は急にキレて俺に怒鳴ってきた

「なッ!?別にそう言う訳じゃ…。」

「そう言う意味だよ!!
人の気持ちも知らないで!!
椿のバカー!!」

俺は天野の馬鹿と言う一言に怒りが爆発した。

「なッ!?テメェ!!教えてやったのにバカはねぇだろ!?
さっきから聞いてればよ!!
テメェに料理が出来ねぇのは紛れもねぇ事実だろうが!?」

「そこまで言わなくても良いじゃない!?
椿なんか大ッ嫌いだ!!」

「ッ!?そうかよ!!俺だって葵なんか大ッ嫌いだよ!!」

回想終了

……

……

……

「…それで、お前達が帰って来たんだよ・・・」

っと椿は、抱き枕に怒りをぶつけるかのように叩きのめしながら俺にそう言った

まぁ気の短い椿にしては良く頑張ったと言う所だけどちょっと言葉が悪かったかな?

「まぁとりあえずお前は、しばらくここで頭冷やしてろ」

俺はそう言って寝室を出た

……

……

……

「あれ?影虎さん♪どうしたのですか♪」

「よう、かず…あれ!?」

廊下に出たとたんに誰かが俺に尋ねてきたのでは一真かと思ったら予想外の一美で驚いた

「お気持ちはわかりますよ♪
何故変わっているのか?ですよね♪」

「あ、あぁ…。」

いや、特にそんなことは考えていないが確かに気になる・・

「え~と、初めから説明しますと、一真さんが葵さんに怒鳴られて、

一真さんが少し怒ってしまって私と交代した訳です♪
わかってくれましたか♪」

「う、うん？
お前、一真から事情を聞いたり出来るの？
ならこの前の一真状態の過去が無いって話はなんだったの？」

さては・・・嘘だったのか？

「あッ…え～と…その…。
ごめんなさい…あれは嘘です…。
私が普通の女の子だったらこんな過去なのかなぁ～って創造していた過去です…。」

一美は俺に頭を下げて謝った。
なんだろう頭を下げられるとどうしても良い気分になって許してしまう俺様体質の俺・・

「そうかい…。
ハァ～…俺の周りの女って、世話が焼ける人ばっかりだな…。」

「うぅ～…。」

ちょっといじわるを言ってみたらシュンってなっていた

マズイ、フォローしよう！！

「でもまぁ、あんたが一番女らしいかもな。」

「えっ！？」

いきなり一美が顔を赤くして俺の方を見ていた・・・アレ本当にこいつ一真なのか？

「まぁ、お前はお前らしく生きればいいんじゃないの？
女らしく道を踏み外さずに。
一真と変わってもらえるだけ嬉しい事だと思えよ。」

俺なんて影千代に本気でなった場合には、意識があっても身体が勝手に動いてもう災厄だもん

「・・・ハイ♪（／／／／）」

「お前、大丈夫か？
顔が真っ赤だぞ？」

一真とはもう人が違うと言う事が完全にわかった・・・完全に乙女な性格さんですね・・なら接し方も一真と同じじゃ悪いのかな？

「ほえ？あッ！？
だ、大丈夫です…♪」

一美は少し自分の頬を触るといきなり驚いて顔を逸らした。
あれ？俺何かしたのかな？

「そ、それなら良いけど…。
で、それはそうとあんたは何をしに来たん…｛ドカッシャーン！！｝
んん！？」

「えッ！？」

いきなり部屋の扉が吹っ飛んでいき、俺達は驚きました。
何故扉が？ていうかもう犯人はわかってるけど！！！
「黙って聞いてりゃ！！
テメェ～！！」

「つ、椿さん？
何でしょうか？
私は何か不味いことでも言ったでしょうか？」

部屋から椿さんが両手に炎を纏わせながら怒りながら出てきました
！！！
物凄く怒った表情で・・・

「そんなに一美が女らしいなら一美と付き合えば良いだろうが！！」

「グフェラ！？」

「キャッ！？」

椿さんが両手を広げて胸辺りに大きな火球を作って俺にに放つので
見事に当たって扉を突き破り、天野さんが驚いていた。

俺に何かした？・・・ていうか一美と付き合えばいいって・・・
何の御冗談を・・・俺はあんた一筋で・・・ガク

「ちょっと！！椿！！何するのよ！？」

「うるせぇ！！
黙ってろ！！この残念美人が！！」

椿さんが本気で天野に悪口を言っているのが聞こえる

「何よ!?この女の恥!!」

天野さん、それはさすがに人の彼女に失礼じゃないでしょうか!?椿さんだってそんなこと言われたら本気でキレますよ?いいんですね?行け椿・・・♪

「この野郎!!」

「キャッ!!」

椿さんは天野に飛び付いていき取っ組み合いになっていた。そして二人で髪の毛を引っ張ったり物凄いとっくみ合いになっていた。椿も小さな体で自分より背が高い天野と互角に喧嘩するよな・・・あれ?一美の奴がプルプルしてる

「二人とも!!いい加減にしてください!!」

「「ッ!?」」

一美は二人に怒鳴ると2人はピタッと止まった。ていうか物凄く大きな声でおれまで動きが止まっちゃったよ・・・

「どうして、あんなに仲良しでしたのにそこまでの喧嘩になるんですか!?」

「「だって、椿(葵)が…。」」

「だってじゃありません！！」

一美がまた怒鳴ると今度は二人ともビクッとなっていた。物凄く大きい声・・・また、オーナーに怒られる・・

「葵さんが失敗ばかりしてムカムカするかもしれませんがキツく当たりすぎです！！」

「は、はい！！」

「葵さんも葵さんです！！
言われたからって言い返しちゃダメです！！」

「はい！！」

「では、二人とも何て言うんですか！？
分かりますよね！？」

「「はい！！」」

「では♪頑張って下さいね♪
影虎さん♪少し出ますよ♪」

「は、はい…。」

何故か俺は一美にひっぱられて外に出された

それにしても

「お前、やるな…。」

「？何がですか？」

俺の言葉に一美は首を傾げていました。

「あの我が儘姫をあそこまで反省させるなんて普通は出来ねぇよ。」

「そうなのですか？」

一美はまたしても俺の言葉に首を傾げていました。自覚ないのかな？

「あぁ…本当なら逆ギレしてただろうな…。」

「そうなのですか…。
もしかしたら影虎さんや葵さんや一真さん達、皆さんのおかげだと思いますよ。」

「？俺達の？何で？」

今度は俺が一美の言葉に首を傾げてしまった。どういう意味？

「もしかしたら、あなた達と出会って椿さんは変わったのだと思いますよ？
そして、椿さんが変わったと言うことは皆さんも変わっているのだと思いますよ♪良い方向に♪」

「…俺達が変わってるね～。
フッ…言ってくれるじゃねぇか♪
確かにそうかもな。
でも、椿が変わったのはお前のお陰でもあるかもしれねぇぞ♪」

面白い事を言われたのでよくよく考えてみればそんな気もするので気分が良くなり俺は、災いを呼ぶ事覚悟で一美を評価した。

「エッ？私？」

「おう♪もしかしたらお前が言ったから椿は謝ったのかも知れないだろ♪
それに、椿はお前といると楽しそうだったからな♪
だから、お前のお陰でもあるかもしれねぇぞ♪」

「えッ！？あっ…はい…。
ありがとうございます…。」

俺がそう言うと一美は顔を逸らしていた

そして、その後、椿と天野は仲直りしていて一美と天野は家に帰った

「なぁまた一美と2人っきりで何話してたんだ？」

っと一緒に寝ながら椿が俺の胸板に顔を押しつけながら聞いてきた

「ん～ナイショ♪」

カブリ・・・ブシュー

俺がそう言うと椿に首に齧り付かれ俺は首筋から出血した

まさかの頸動脈を噛み切られてしまった

「ご、ごめん！！」

噛みついてきた椿も驚いていた

俺じゃなかったら死んでるよマジで？

……

……

……

翌日

「何だよ！？別に構わねぇだろうが！？」

「良かねぇよ！？

何で荒運転に俺まで付き合わされるんだよ！！」

「なら乗らなければ良いだけだろうが！？」

「誰が無理矢理、異世界樹（ユグドラシル）を腰に巻き付けて乗せたんだよ！！」

「お前待ってるの面倒なんだよ！？このノロ真！！」

「ンだと！？このロリ虎！！」

ロリ虎だと！？万死に値する！！

「「ハァ…。」」

二人の少年の喧嘩を見て二人の少女が顔を向かい合わせて頭を抑えてため息を吐いていた。

なんと言うか、今日も平和であった。

つづく

喧嘩騒動（天野ＶＳ椿・・・命を掛けた戦い（嘘））（後書き）

なんだかんだ言って解決した模様です。ちなみに影虎と椿が喧嘩すると必ず影虎が先に折れて謝ります。基本的に影虎は椿と喧嘩がしたくないので…以上です。では次回は…なんと天野さん宅編、の最後に出てきた男が登場です。ではまた

断固拒否（絶対に椿は渡さん！！てか、なんでこうも苦手なタイプばっかりなん

本日最後の投稿です。

ではどうぞ

断固拒否（絶対に椿は渡さん！！てか、なんでこうも苦手なタイプばっかりなんだ）

剣菱麻華を暴力ではなく言葉でねじふせてから一日経ち

その日の朝に椿が早起きしていて

「学園都市の外に遊びに行きたい」発言のせいで

学園都市の外壁をぶち破って学園都市の外に出ているのだが

なんというか昨日の今日でいきなり学園都市を出たいとかどういう心境の変化なんだか・・・

などと呆れながらも椿に手をひかれ外を俺も俺なりに楽しんでいた

「なぁなぁ影虎、次あそこに行ってみようぜ♪」

っとのりのりで俺の事を連れまわす椿さん、彼女が俺に構ってもらおうと必死になるのは必ず嫌な事があった時なのだ

だから俺は何も言わずに椿との時間を楽しんでいた

そして、正午くらいになると腹が減ってきたので何か食べようと椿が言いだし

買ってくると言ったので行かせたのだが…

・・・

・・・

っと一人の男が俺の後頭部に銃を当ててそう言った

（なんて勝手な奴？それに椿を攫っただぁ？おいおい、これ以上椿の奴に心の傷を負わせるのはやめてくれよ・・・）

「あのさ、その女の子ってのはどこに居るの？」

「貴様にはもはや関係ない、これがあるじから貴様に渡せと言われた示談金だ」

男はそう言うと俺に１億円くらいが入りそうなトランクを投げつけてきた

素直に言おう痛いと・・・

「示談金？なんの？」

俺が男達に聞くと

「「お前が連れていたあの少女の事を忘れて欲しいと言う金だ」」

っと１０人が１０人とも同時に言った

（誘拐したのなら俺から金を絞り取ろうとするはずなのに俺に金を与えただと？・・・・・）

「なぁ・・・いや、いいやどうせ答えてくれないし・・」

「「？」」

俺がそう言うと男達は、首をかしげていた

「とりあえずお前らから食い殺す！！」

「「「な？」」」

俺が右手を上にあげると同時に『異世界樹（ユグドラシル）』の刃状の枝が男達を地面から貫き男達を串刺しにし異に染まった桜のような形になった

「ふん、たかが原石ごときで俺に挑むなっての。さてさて、お前らはどこから来たのかな？」

俺はそう言って串刺しにされている男の服から手掛かりになりそうな物を探していた

ほんとうなら『検索』でちょちょいのチョイなのだがあまりにも面白みに欠けるので俺はなぜか探偵ごっこにはまっていた

そして、男の服からあるカードキーを発見した

そして、俺はそれを見てみた…其処には・・・・

『桜井グループ』と書かれたカードだった

・・・・あれ？何処かで聞いた事のある名前だな・・・・どこだっけ？

・・・・まぁいいや、

「とりあえず行ってみますか♪桜井グループに♪」

俺はそう言いながら

影虎サイドＥＮＤ

？？？サイド

明るい廊下を私は、走っていた

そして、ある情報を受け取って私は、ある部屋に向かっていた

ドンとある部屋のドアを開けると

広い豪華な部屋に入った

その部屋の真ん中には、大きなベッドがありその上に中学生か小学生くらいの黒い長髪の女の子がドレスのような服を着せられ眠っていた

寝顔はかわいらしくお姫様のようにも見える少女だ

私はベッドの横に腰かけた

「・・・まったく、お父様は一体何を考えているの？いきなり女の子を誘拐するなんて・・・」

私がそう怒りをあらわにしていると

「う、ん・・・・影虎ぁ・・・」

長髪の女の子が寝返りを打って私の横に来た

「ごめんね・・薬で眠らされちゃってるのね・・・それにしてもあなた本当に妹の若い頃にそっくりだわ・・もしかすると本当にそうなのかもしれなわね・・しかし、お父様の行為は決して許されない・・」

私が女の子の頭を撫でていると

いきなりドォンと言う爆発音とともにぐらぐらとビルが揺れた

そして、警報が鳴り出した

「なに?」

『緊急事態緊急事態、学園都市の能力者らしき青年が単体でオーシャンズビルに警備員や障壁を破壊して侵入・・・青年の姿は、緑色のコートを着た身長１８０センチくらいの男・・なに?う、うあぁあああブチン』

・・・・

「一体何なの?・・・もしかしてこの子を取りかえしに来たのかしら・・なら、お母様に会う前にこの子を引き渡して帰らせないと」

私は、そう思い女の子を起こした

「ん・・・あれ?・・・此処は何処?・・・あなたはだれ?・・それになんだこの格好!?え?たしか私は、影虎と遊びに来てて・・そしたら、黒い車にいきなり・・ハっ・・・は、は、・・」

少女は思いだしたと同時にいきなり泣きだし呼吸困難になりかけていた

「大丈夫よあなたは私が守るから怖がらなくて良いわ」

「いやだ、いやだ、怖い怖い怖い、影虎助けてよぉ~・・・怖いよ・・・恐いよ・・・恐いよぉ・・・」

私は女の子を抱きとめなだめていた

泣いている姿や声そして仕草は本当に若い頃の私の妹・・『忍』にそっくりで懐かしい感じがあった

お父様に酷くさげすまれおお泣きして私に泣きついてきた忍にそっくりなこの子、本当に忍の娘なのかもしれない

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

現在、侵入者こと影虎は、だだっ広いビルを一歩一歩一階一階登っていた

途中、警備員やガードマンや銃を持った怖いおじさんたちに明らかにターミネーター3に出てそうな凶悪な警備ロボなどが彼の前に立ちふさがったが椿を取りかえしに来ている彼には遊ぶ気分でも無いため『異世界樹（ユグドラシル）』と錬金術で真っ向から突破しつづけていた

そして、最上階から五階したのあるひろいフロアーにいた。

（…それにしても広いなこの建物、ん？）

影虎は、フロアーのど真ん中にある人影を見つけて目を凝らしてみた。

其処には、大きな机がありふたりの人間が居た

５０台くらいの威厳がありそうな厳格なスーツ姿のジジイと車椅子に乗った

髪が長くボリュームがあり自身の身長と同じくらい長くまるで髪の毛をマフラーのように扱っている髪の色は、白髪の目を瞑っている見た目十代くらいの女の子？がいた

そして、ジジイが俺のほうを鋭い目つきで見ながら

「貴様か・・・で、何の用だ？」

「何の用かじゃねぇよ・・椿を帰せって言ってんだよ！！」

影虎がそう言い全力で走り男目掛けて飛びあがり顔面に鉄をも砕く鉄拳を叩き込もうとしたその時

「わたくしの夫に着やすく触れないでいただきたい」

そう目を瞑っている白髪の少女？が言った瞬間に

影虎の腹部と頭部と肩に直径３センチ程度の鉄球３つが身体にめり込み影虎の体は、ビルの壁にブッ飛ばされていた

「ぐぁあああああ・・・・ぐぅううなんだ？鉄球だぁ！？」

影虎は苦痛に顔を歪めていた

壁に押さえつけている鉄球がどんどんと影虎を押さえつける力が強まっていたのだ

「フフフ♪えぇ鉄球ですよ。ただの鉄球」

そう言いながら車椅子ごと宙に浮いてその周りを高速で動き回る鉄球に囲まれた白髪の女が影虎の目に前に飛んでそう言った

「・・・・・・はん、磁力かよ」

影虎は女に目掛けてそう言った

「そのとおりだ、明日香の能力は学園都市で言う原石、つまりは磁力を操る原石だ」

そう机にすわりっぱなしのジジイがそう言った

「・・・原石だぁ？マジかよ・・・学園都市の外の能力者って初めて見たぜ・・・・・・あれ？・・・・夫？あの爺が？・・・・あのジジイロリコンかよ」

影虎が呆れながらそう言った。

「・・・フフフ♪あのわたくは、こう見えても夫と同い年ですよ」

白髪の少女がそう言った瞬間に影虎の時間が止った

（・・・・予想外のババァ！！！！！！！！！？てか、若ぁ！？）

影虎が心の中で絶叫しているときに

影虎を押さえつけていた鉄球が変形しだし枷のような形になり影虎の四肢を壁に押さえつけ拘束した

（くそ、動けねぇな・・・仕方がねぇ『異世界樹（ユグドラシル）』で）

影虎がそう思った瞬間にジジイが影虎に

「何か抵抗しても構わんが貴様の返してほしい人物に何があっても補償はせんぞ」

っとそう言った

「フフフ♪そうですね。その子を傷つけられたくなければお帰りなさい♪こんなにいい顔を鉄くずのようにぐしゃぐしゃにされたくないのなら」

白髪の盲目？の女は、優しい声で影虎の顔を撫でながらそう言った

「ふざけんなぁ！！！！！！！！！！ｃｏｍｅ　ｏｎ『異世界樹（ユグドラシル）』」

影虎がそう言い『異世界樹（ユグドラシル）』を身体から突き出し女を貫こうとした

その時に

ザシュッと影虎の左腕が消し飛んだ

そして、壁ごと吹き飛ばされた影虎は隣の部屋の壁にぶつかり口から血を吹いて前のめりに倒れた

そして、すぐに立ち上がり左手を修復しようと『異世界樹（ユグドラシル）』で治療を始たが異常に治りが遅く影虎は不審に思っていた

しかし、机から立ち上がり物凄く若く見え得るババアの横に居る男の持っている剣を見て納得した

「・・・神バルドルを殺した魔剣ミスティルテインか・・・」

影虎はその手に握られた宿り木の剣を見てそう言った

「その通りだ、これは、以前気に食わん男を殺すために手に入れた品物だ。きさまは、能力者でありながら魔術についても知っているようだな」

そう言いつつ男は、影虎に目掛けて剣をふるってきた

「チ・・〜ドクン〜な？ぐわぁ！！」

影虎は横に飛ぼうとしたがその瞬間に不運な事に白髪の女の磁力のせいで俺の腕時計型の機械が壊れ作動し影千代化が始まりうまく動けなくなり右目から右足の下までを４？ほど切られ後ろに飛ばされてしまった

「うぐぐ・・・くそ・・」

影虎（影千代）は、右目を右手で抑えながら距離を取るように下が

った

（なんでこういう時に壊れるかな?さてどうする?影千代モードで勝てるか?）

っと影虎が考えていると

「・・・ほう女だったのか」

っと男が言うと

「はれ?あなた、さっき男の子と言っていませんでした?もしかして、男の娘?」

っと白髪の女がそう言ってくるので

「俺は男だよバカたれ・・・ただちょくちょく性別がかわるだけのな（後、やっぱり目は見えてないのか・・・）」

影千代が噛みつくようにそう言うと

「フフフ♪それは面白いお身体ですね♪」

っと満面の偽笑いで微笑みながら白髪の女は、影千代に目掛けて鉄球を飛ばしてきた

影千代は走ってそれらを避けたが今度は建物の補強に使われているはずの鉄骨などが壁を突き破って影千代めがけて飛んでいた

（なんて磁力だ!!この姿じゃマジでヤバイ・・・あぶね!!）

影千代が鉄骨に気を使っていると

男が剣をふるっていたので影千代はスライディングで斬撃を交わした

しかし、その瞬間に角に追い込まれ

白髪の女は、車椅子を磁力で浮かせ宙に浮きながら鉄骨などを全て集め一つの球体に変形させ超巨大な鉄球を5個作りだし

それらを全て縦に並べ一番後ろの鉄球で思いっきり後ろから付いた

その瞬間に一番前の鉄球は、ガウス加速器の要領ですさマジい速度で鉄球が打ち出された

そして、男は、剣をふるっていた

鉄球と飛ぶ斬撃・・

（嘘・・マジで死ぬ・・冗談抜きで死んじまう・・・（嫌だ・・死にたくない・・死ぬぐらいなら・・殺せばいい）・・・・）

影千代は、だらんと首と手の力を抜いた

そして、

「『敗北の王（ビクターパラドックス）』」

影虎がそう言った瞬間に影千代に向かって飛んでいた巨大な鉄球や空を切り裂く.j強力なの斬撃が突如、緑色の光を発して砕け散り砕

け散った破片は、さらに砕け散りそれらを繰り返し2秒も経たない内に鉄球と斬撃は、この世から消えて無くなった

そして、影千代が居たはずの場所には、膝裏ほどもある長い銀髪で、両目の下に二本の紋様がはいっている背が高くガタイもなかなか良い爪が少し長い。瞳が赤々しく獣のような鋭い瞳でしかし、目つきは冷たく睨まれただけで心が凍ってしまいそうなほど冷たい目をした大人っぽい中性的な美青年が其処に立っていた

「また姿が変わったか?」

男が剣を構えなおしそう言うと

「あの~一体どういう事ですか?あなた、男から女になったとかさらに姿が変わったとか?」

盲目の白髪の女は、状況が理解できず夫のジジイに怒っていた

その瞬間に銀髪の青年が歩み出し

白髪の女に指をさしたそして・・・・

「『不完全開(オーバーヒート)』」

小さな声で呟いた瞬間に白髪の女の周りに浮いていた鉄球は、突如奇妙な変形をしだし建物の補強や製造に使われていた鉄骨やねじなどを引きつけ始めた

「明日香、何をやっている!!・・・明日香?」

「はぁ・・・はぁ・・・ぐぐう」

男が白髪の女に怒鳴るが女のほうは呼吸が乱れて心臓の辺りを押さえて苦しんでいた

そう銀髪の青年が白髪の女性に掛けたのは、『不完全開(オーバーヒート)』である。
他人の全力を勝手に引き出し続ける特異なスキルである

そして、白髪の女性は、車椅子から落ち地面に倒れた・・・酷く顔いろを悪くして・・そして、女性の上空には、巨大な鉄球が形成されていた

「あすか・・・貴様、明日香に何をしたのだ?」

っと男は白髪の女性を傷かいながら銀髪の青年に剣をふるった男

そして、再び飛ぶ斬撃が銀髪の青年に向かったが銀髪の青年は避けるそぶりも見せずに

「『死離滅裂(スターダスト)』」

っと呟き右手の人差指と中指を合わせその先から白い光の鞭を出しそれを振った

その瞬間にパシンと言う音とともに斬撃が裂けた

そして、銀髪の男は、鞭をふるったその鞭は迷うことなく倒れている白髪の女に向かった

「ッ!?」

男はすぐに女を庇うように前に出たがを持っていない腕が切り裂かれ横に転がった

そして、男は、銀髪の青年を睨みつけながら切り裂かれた右腕の付け根を剣を持った手で抑えていた

「gっぐ・・おのれ・・・」

っと男がそう言うが

青年は、気にとめることもなく鞭で首をはねようとしていたその時に青年の顔をかするように音速をはるかに超える何かが通り過ぎソニックムーブのせいで青年は吹き飛ばされた

その何かを飛ばしたのは、年齢３０歳くらいの黒髪で、スタイルは、忍よりいいお淑やかな性格で心やさしい性格をしていそうな髪は肩までで切りそろえられておりポワポワしている感じの女性だ

そして、彼女のもう片方の手には、黒髪の長髪の少女・・・椿の手が握られていた

そして、椿は、銀髪の青年を見て驚きと同時に涙を流していた

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

椿サイド

俺は、しばらくパニックになって泣いていてその後に俺を逃がしてくれると言う雫さんと言う女の人に手を引っ張られ逃げようとしていた

なんでも、俺が俺を攫った人間の娘にそっくりだった事が原因らしいと教えてくれた

この人はなぜだかわからないけど敵な匂いはしなかったのでこの人を信じてみた

そして、階段を下り散るとものすごい音がして其処をのぞいてみるとどこか俺に似ているような白髪の女が地面に心臓を押さえて倒れていてその横で魔剣ミスティルテインのレプリカを持った５０代くらいの男が方腕を失っていた

そして、銀髪の男は、右手から光の鞭を出していた

その光景を見た雫は、指輪をはずしてそれを少し上に放り投げ

「良くわからないけどお母様とお父様が危ないわね。椿ちゃん、少し耳をふさいでいてね」

そう言われたので耳をふさぐと

雫さんは、宙に浮いている指輪を右手の掌だ軽く押した

その瞬間にキュァアアンという独特の音がし指輪は、物凄い速度で飛び遠くの銀髪の男の顔をかすめるように飛んでいき衝撃はで男を

ふっとばしていた

俺は一瞬だけ目に見えた銀髪の髪の長い男を見た瞬間に心が急に苦しくなって涙が出てきた

そして、

俺は気が付いたら雫さんの手を振りほどいて銀髪の男の元へ身体が勝手に走っていた

そして、吹き飛ばされたはずなのに何事も無いかのようにさっきと同じ位置に立っている男の腰に手をまわして抱きしめていて男の顔を見上げて

勝手に口が動き

「エルク、もうやめて!!もう、苦しまなくて良いよ?もう自分が傷つくのはやめて!!」

っと自分でも姫かしいと思うような声で男に対してそう言った

すると男は、俺の事を冷たい凍るような目で見ながら

「・・・・・・・・・・離れろ・・・死にたいのか」

っと影虎の声で言ってきた

(なっ!?こいつ影虎なのか!?この銀髪で背の高い男が・・・いや、よく見れば確かに影虎だ・・・子供っぽさが無いだけで)

俺がそう思っていると再び口と体が勝手に動き
男を動かすまいと抱きしめ
「絶対に嫌だよ・・・エルクはこれ以上傷ついちゃだめなんだ！！！」
俺の身体勝手に涙を流しながらそう言うと身体の芯からなぜか温かくなって来て目を閉じた。そして、目を開けると
私が抱きしめていたのは、いつもの影虎だった
「へ？」
っと私はもう何が何か分からずに間抜けな声を出すと
「・・・強制的にもどされたか・・・・・まぁいいか・・」
っと先ほどまでの雰囲気は保ちながらも影虎だった
「影虎？「おう♪影虎様だぜ♪お迎えにあがりました。」・・・あ、うん／／／／／／／」
急に私に笑顔で言ってきたので私は、顔が赤くなるのがわかった
その瞬間に私や影虎の前で
「お父様！！痛い何をやっていらっしゃるのですか！？」
「ええい離せ！！失敗作が！！小僧！！よくも明日香を！！！」

っと雫さんが５０代くらいの男の人を止めようとしていたが突き飛ばされていた

そして、男は、私と影虎に剣を向けていた

魔剣ミスティルテイン・・・不死身の神を殺した宿り木でロキの剣・・・影虎に対しては相性が少し悪いな・・・どうするんだ？

私が影虎にどうするのかを聞いたら

影虎はにやりと笑いだし

「久々にあれを使いますか・・・・椿、『新書血録』第３章、『神々の武器庫』を使え」

「・・・・・・・・魔導書『発展の書』およびメイン魔導書『エノクの書』から現段階で最も適した魔術術式の構造の掲示および体内の血液配列による魔術術式構成を開始、これより『新書血録』を起動します・・・使用する魔術は、神々の武器庫・・使用する武器は、エアの剣です。」

影虎がそう言ってきたので私はほとんど無意識ですぐに右手の人差指の先を持っていたナイフで切り血を垂らしそれを地面にためた

そして、血が勝手に地面に魔法陣を描くとその真ん中に禍々しい程の威圧感を持った青銅の剣が現れた

それを影虎は迷うことなく掴んだ

そして、それを私たちに向かってくる魔剣ミステイルティンをもった片腕の男の剣に対して軽くふるった

その瞬間に男の持っていた剣は、まるでバターのように綺麗に切られるのでは無く分けられるように二つになった

「な？・・・私の霊装が・・・なんだ、貴様の持っているその剣は？」

っと男ほどろきながら影虎のふるった剣を指さしながら聞いてきた

「エアの剣・・神話の中でも群をぬいて強大な力をもつ神剣。それがこのエアの剣だ。『世界のはじめに天と地を分けた』という桁外れの威力をもつこの剣はヒッタイトという王国の伝説で語られているらしい
世界を分けた神剣であるこの剣の斬撃はたとえどのようなものであろうと耐えれるはずは無い。って代物だよ♪そして、この剣は、俺の斬りたいものを切る事が出来る。こんなふうにな！！」

影虎はそう言うとビルに目掛けて縦に振りおろした

その瞬間にビルはぱっくりと二つに分かれ崩れ出したそして、影虎は、私を片手で抱えて『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を出して空を飛んだ。

そして、１０秒後ビルは崩れた

まわりに人気のない建物だったので被害は周りには無いだろうが中の人間たちは全滅したであろう

雫さんも・・・・

「安心しな椿♪誰も死んじゃいねぇよ・・・第一俺が人を殺すなんてへまするわけ無いだろ♪」

影虎がそう言うので崩れたビルを見て見ると『異世界樹（ユグドラシル）』の桜色の枝が人たちが潰されないように支えていて治療までしていた

「なぁ椿、さっきは止めてくれてありがとうな・・・マジでヤバかった・・・本気の本気で・・・」

っと空を飛びながらも顔中冷や汗だらけで顔色がものすごく悪い状態だった

「大丈夫だ。私をお前が助けてくれるように私がお前を守るから・・・」

私はそう言って影虎の首に手をまわして抱きしめていた

「・・・帰るか・・・」

影虎がそう言ってきたので

私は

「なぁ影虎、ちょっと待って・・・」

私はそう言って影虎に卸して貰い下で倒れている雫さんの所に行って

『ありがとう』と書いた紙を置いて影虎に捕まって学園都市に帰った

あの人が逃がしてくれなかったら影虎は必ず人を殺していた・・・
また、やらせるところだった

「絶対に人は殺しちゃだめだぞ・・・」

「ん?何か言ったか?」

「いいや、重要な事言っただけ」

「ふ~ん・・・って重要なのかよ!?」

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

この日、桜井忍の実家の別荘のビルが老朽化で倒壊をしたとニュースであった死者やけが人はゼロという奇跡があったと凄いニュースで取り上げられていたこの事件の犯人が私の横で寝ている馬鹿とはだれも気付かないであろう・・・

つづく

今日の霊装♪

『魔剣ミストルティン』

元ネタ

無敵のバルドルと宿り木
バルドルは不吉な夢を多く見るようになったので，父オーディン

と母フリッグに相談してみた。そこで主神オーディンは冥界の巫女に会い，この夢について尋ねてみることにした。すると，バルドルが死んでしまう運命にあり，これは避けられないと予言されてしまった。母である女神フリッグは，この逃れられないという残酷な運命を変えようと努力した。そこで彼女は世界中の生物／無機物など，あらゆるものがバルドルに害を与えなければ助かるに違いないと思い，すべてのものから「バルドルを傷つけない」との誓約を取り付けてしまった。こうしてバルドルは無敵の神になってしまう。剣で斬りつけようとも，病気を投げかけようとも，まったく無害で平気なのである。

しかし，この光景を見て不満を持っている者もいた。それが，北欧神話で奸智に富みトリックスターとして知られるロキだ。ロキは得意の変身能力で女性に姿を変えると，フリッグに近づいて「本当にバルドルは無敵なのでしょうか？　本当にすべてのものから誓約を取り付けたのですか？」と質問した。フリッグは，「実は神々の住むヴァルハラの西に生えていた宿り木だけは，まだ幼すぎて誓約をとれなかったのですが，宿り木が敵対することはないので，安心でしょう」と話してしまった。

これを聞いたロキは急いでヴァルハラの西に向かうと，宿り木を引き抜き，それを持って盲目の神であるホズに渡して，「きみも皆と同じように何かをバルドルにぶつけてごらん？　きっと彼は無傷だし，怪我をしないことでバルドルの名声は高まるはずだ」と囁いた。この言葉を信じたホズが宿り木の枝を投げると，その枝は槍に変化してバルドルに命中した。多くの神々が見守る中でバルドルは宿り木に貫かれ，死んでしまう。

ここで登場するバルドルを刺し貫いた宿り木こそが，ミストルテイン（Ｍｉｓｔｌｅｔａｉｎｎ）である。宿り木の名前。つまりは、無敵なものを殺すことのできる剣。

『エアの剣』

神話の中でも群をぬいて強大な力をもつ神剣。それがこのエアの剣である。

『世界のはじめに天と地を分けた』という桁外れの威力をもつこの剣はヒッタイトという王国の伝説で語られている。

このヒッタイトの神話には多くの神が出てくる。エアもその神々の一人で知恵の神（もしくは水神）だった。

これらの神話の中でエアの剣が登場するのは天空の支配者をかけてアヌという神とその宰相だったクマルビが争う物語の中である。

二人は激しく争い、傷つけあった。やがてクマルビは石の巨人ウルリクンミを作り出す。この巨人には剣も矢も効かず、さらには目も耳もなかったため、色仕掛け（当時の神々は平気でしていたようだ）も通じない。

そこで知恵の神エアは宝物庫で眠っている一振りの剣を思い出した。これがエアの剣である。

世界を分けた神剣である。たとえどのようなものであろうとこの剣の一撃に耐えれるはずは無い。

ウルリクンミは足を断たれ、倒れて死んでしまった。と言う剣

距離は関係なくさらに物体であろうがなんであろうが真っ二つに分けることのできる剣。

以上

断固拒否（絶対に椿は渡さん！！てか、なんでこうも苦手なタイプばっかりなんだよ）

今回は新キャラたくさん登場でした。

それにしても影虎に椿さんを売れって馬鹿な奴ら出したよ。

ではでは、
キャラ紹介に移行しましょうかね

忍の家族

桜井　明嶺（あきみね）

声優　竹中直人

男

身長１８０

年齢　５４

威厳がありそうな厳格なジジイ

桜井グループの総取締

代々桜井の名を継いで来た

人を見下したような言動が目につく

桜井家は、代々男が継ぐことになっているが生憎彼の子供は全員、女であったため

桜井家の家訓、『ひとつの代で女子しか生まれなかった場合、その娘が産んだ子供を後継者にする。そして、その子に再び娘しか生まれなかった場合は、その娘の婚約者との間い生まれた子を後継者にする。』という家訓に従って忍の子供を取り上げようとしたがその時、唯一才能に恵まれなかった『影虎』の事を失敗作と呼んだため影虎たちの父親に思いっきり殴られたうえに逆勘当された。

今でも執拗に忍の子供を探している

自分の気に食わない物を失敗作と呼ぶ癖があり昔、出来の良い姉に対して出来の悪かった忍の事を『失敗作』と呼び邪険に扱った事がありそれが中学で忍がグレれた原因

物凄いお金持ちで魔術師や能力者を何人も雇っており魔術の才能は高く霊装を使用する。

桜井　明日香

声優　山口由里子

女

身長１６０

年齢５０（見た目、１０代後半！？）

忍の実の母親

髪が長くボリュームがあり自身の身長と同じくらい長い

足が悪く車椅子で盲目のため目を瞑っている

常に笑っている（影虎の能面笑顔の原点）

まるで髪の毛をマフラーのように扱っている

髪の色は、白髪（年だから？）

顔立ちは幼くよ～く見れば椿に似ているがどちらかと言えば麻華に似ている

スタイルは、普通

性格、お淑やか、でも腹黒く、厳しく、悪意の塊、でも普段は、良い人

能力者『原石』

『磁場格差（マグネホール）』レベル４相当

磁界で攻撃を防いだり金属を自在に操って攻撃したり磁力を使い計器を壊しあらゆる磁力の法則を自在に操る。集中すれば相手の血液の鉄分に干渉することが可能。

口癖「フフフ♪」

唯一忍が怖がって逆らえない相手

桜井　雫（しずく）

声優　山川琴美

女

年齢３０歳

黒髪、スタイルは、忍よりいい

見た目も中身もお淑やかな性格で心やさしい性格

髪は肩までで切りそろえられておりポワポワしている感じ

忍が唯一家族の中で心を許せる相手

能力『超直進力（ノンストップ）』レベル４

自分の手で押したものは、自分が良いと思うまで止まることなく直進する。速度は、最低で１０キロで最高速度がマッハ１８

自衛用に指輪を飛ばしたりする

済婚者だが病気で子供が産めず負い目がありそのため父親からは距離は取っている

旦那は、食品関係の会社の会長

実は影虎たちの叔母

以上です。実は、もう一人忍には家族が居ます。

そして、今回出てきた影虎君・・・実は、仮面ライダーディケイドで言うコンプリートフォーム見たいな感じです。

★☆★☆

年齢２５歳（見た目）

レベル－６

身長１９０センチ

体重７０キロ

膝裏ほどもある長い銀髪の大人っぽい中性的な美青年、両目の下に二本の紋様がはいっている

背が高くガタイもなかなか良い

爪が少し長い。瞳が赤々しく獣のような鋭い瞳に変わる

しかし、目つきは冷たく

性格　優しさが無くなり無口になり全てにおいて悟っており全てが滅ぶためにあり自身は、消えて無くなるためにあると自覚している。真っすぐで歪みの無い滅亡願望があり正直言って影虎らしさが微塵にも残っていない。もともと影虎と言う人格自体が存在していた事

が彼の不幸で奇跡。

無情に無表情に無血に無涙に無敵に無敗に無駄に無理に無害に無性に無定見に無意識に無計画に無慈悲に無節操に無鉄砲に無分別に無知に無恥に無茶に無礼に無差別に無心に虚無に無垢に無音に無感覚に無触に無目に無殺気に無気配に無痛に無風に無声に無言無口に無理矢理に『無』にする事が目的

大人になった影虎

服装は、特に変化していないが緑色のコートを心境の変化から脱いでいる。

強さ

『誰にも何にも決して負ける事のない』程の弱さ

能力

『敗北の王（ビクターパラドックス）』推定レベル？

世界の帳尻を合わせるために生まれた全ての才能や発展や幸福や奇跡を無かった事にするための４９のスキルの名称

このすべてと真正面からっち向かうのは自殺行為を通り越して決定的な負けにしかならない

そして、抜け道を探して対応すればそこそこの戦果が得られるが結局は、戦おう守ろう倒そうなどと言う感情を抱いている時点で負けている状況になる。対応策中の対応策は、戦わない事。すぐに負け

を認めて武装をやめ彼が何処かに行く事を待つ事。

本日使用した能力。

『破壊傷倒（ブレイクンブライカー）』

絶大な破壊力を秘めており、手刀で斬った対象を凄まじい爆発で打ち砕き、その後も効果が持続して破壊を続ける。無敵に近い相手にも、効果がある数少ない能力。影虎自身の能力である。影虎の数少ない攻撃能力の中で2番目に強力で取り返しのつかない能力。何気に必殺技です♪

『死離滅裂（スターダスト）』

指先から全てを通過してその後にすり抜けたものが分かれる性質の光を鞭状に振るう技。見た目が流れ星に見える。

以上です。

生徒総会（集いし無茶苦茶なレベル６達）（前書き）

はい、今回は自作のレベル６が６人全員揃います。全員が全員めちゃくちゃでカオスと言う言葉がぴったりです。

では、レベル６の織りなすカオスな世界にようこそ。

生徒総会（集いし無茶苦茶なレベル6達）

俺こと桜小路影虎は、現在ある廃ビルに『異世界樹（ユグドラシル）』で飛びながら向かっていた

なぜかと言うと朝起きて窓をのぞくといきなり目の前に隕石が落下していて

目が覚めるより早く隕石を竜王の波動で吹きとばし世界を救ったのだ

朝っぱらからこんな事をしてくるのは、生徒会長のあの忌々しい女だ・・・

そして、ケータイを見てみると

『生徒総会を開こうと思う・・・遅れた奴は大切な人間が死ぬと思っておけ』

っと書かれた内容だった

俺はすぐにケータイを閉じると窓から飛び出した

俺達レベル6は言うなら世界に適合する事を拒まれた人の形をした何か・・だ

だからこそ、冗談が冗談でなかったりする

「はぁ・・・また、あいつらがここに帰って来てるのかよ・・・まとめて全力で排除しようかな・・」

っと俺は呟きながらも内心、同類が存在しているという感じは、喜びでもあり同時に怒りと殺意に包まれていた

そして、俺は目的地の上空に停止していた

中にはもう3人はいるみたいだった

しかし、気になるのが廃ビルの周りに居る大勢の人間だ

（俺らに喧嘩でも売りに来たのか？・・・まぁどうでもいい・・・どうせ死んでＥＮＤだ・・・俺はともかく他の５人に遊ばれたら終わりだからな）

俺はそう考え中に入った

すると

「やぁ議長君、元気にしてたかい？」

っと気さくに俺に話しかけてきたのは副会長の・・『絶対時間（タイムオーバー）』事、園崎（そのざき）　陽（よう）・・・ぶっちゃけ瑠奈の兄だ（この前瑠奈にあってようやく思い出した）・・・身長が俺と同じくらいで髪型が青い髪の長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下制服（ブレザー）で首にロケットペンダントを掛けている爽やか系の色男だ・・唯一おかしいのが腰に掛けた日本刀だ・・ちなみにシスコンだ・・・

ついでのついでに言うとこの男は、俺と同じくらい強い

「まぁまぁだ・・・それよりも副会長殿・・・なんで俺の縄張りに入ってきた?」

俺が目を開いてそう威嚇すると

カチャ

急に俺の前に机と紅茶が用意されていた

「まぁ立ち話もなんだ飲みたまえよ」

っとすでに席に座りながらそう言ってきたこの男には腹が立ったがこんなことで腹が立っていてはこの先来るやつらとの会話には耐えられない・・

「とりあえず貰うがなんか喰いもんないか?腹が減った「これで良いかい?」・・・いただきます」

俺が言いかけると気が付いたら目の前に和食やら洋食屋らで朝食が出されていた。

俺はそれを迷わず貰うことにした

この男も奇妙な奴だが俺らの中では一番まともなんだよな・・お?このケーキうまいじゃん

なんだかんだいって朝食をもらったことで機嫌が良かった俺にいきなりの襲撃者が・・・

そろりそろりと何故か人間の腕らしきものだけが俺の食べているピ

ザに手を伸ばしてきていた

ザク

「ぎゃあああああああああ」

俺はとりあえず手元にあったフォークを手に突き刺したすると何処からか不気味な声がした

「「はぁ・・・」」

俺と陽が溜息をついた

そして、陽が立ち上がると腰に掛けたに本当に手を掛けて迷うことなく居合い切りをした

その瞬間に空間がっぱっくりとお口を開け人型の何かが倒れていた

「「はぁ・・・」」

再び溜息・・・・

倒れた人物は、髪の毛がはねっパねの髪形で革ジャンとボロボロを通り越して雑巾なズボンをはいた俺と同い年の男だ

身長１７０で体形はスリム系でこいつも見た目は完璧だ・・

名前は、『日暮（ひぐらし）　暮日（くれにち）』

こいつは、『神生徒会』の『庶務』の役職で能力は、すきな空間を

自由に作り出し自由に移動し自由に消し去ると言う『閉鎖空間（フリースペース）』と言う能力を持ったレベル6だ。こいつも人間とは違う・・人の形をした何か・・

「いたいじゃねぇか！！いきなり刺す事はないだろうが！！切ることないだろうが！！」

性格・・・キレ症

「勝手に彼にご馳走している料理に汚い手で触るからですよ」

っと陽は紅茶を飲みながらそう言った

「まぁお前の馬鹿面を拝めただけで許してやるよ。」

俺がそう言うと

「あ、ありがとうございます・・・・ちがうだろがぁ！！！！！！！！！！！」

っと再びキレ出した暮日が俺と陽の居る空間を歪めだした。

宇宙にでも飛ばす気かこいつ？・・・ウザ

「「『異世界樹（ユグドラシル）』＆amp;『時空断罪（アウトページ）』」

俺と陽は、『異世界樹（ユグドラシル）』と先ほど陽がやった空間を日本刀で斬る奥義を同時に使い馬鹿を半殺しにして陽に紅茶のお代わりをもらった旨いな・・

「お前ら俺に恨みでもあるのか!?」

っと1秒も経たない内に復帰した化け物・・・暮日が怒鳴りながらずかずかと近づいてくる

「俺お前のこと嫌いなんだよね・・・正直今すぐにでも喰い殺したい」

俺が睨みつけながらそう言うと

「へぇ?あのチビの議長が俺とタイマン張るってことだな?ハハハ、相手にもならねｇｏｂｕｆａｌａ」

「ごめん、なんか余裕面が俺の怒りにふれたから本気で殴っちゃたよ・・・どうしよう」

俺は、俺を見下した馬鹿の顔面にファンタジーパンチ（喧嘩勃発の時のコンクリを砕いたパンチ）×１０００倍の威力で殴った

馬鹿は、物凄い勢いで吹っ飛んだが途中で空間に割れ目が出来てその中に飛び込んで

次の瞬間に威力を全く殺さず俺の後ろに現れ俺を物凄威力で殴り飛ばした

（この手品師が!!）

俺はすぐに『異世界樹（ユグドラシル）』を最大で発動し粒子をバラまきながら『竜王の波動』をゼロ距離で打とうとしたがその時

俺と馬鹿の間に巨大な壁が現れた

「「？」」

俺と馬鹿は臨戦態勢を取って横を見てみると真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿で身長が１６０ちょっとの黒がメインカラーの上下制服の女子が居た

彼女は手を伸ばしておりそして、俺達３人を見るとものすごい速さで・・・・・

「出娑婆ってご免歳！！！生まれてきてご免歳！！！存在してごめん歳！！！」

っといきなり物凄い速さで地面にめり込みそうなほどの土下座をしてきたので俺は内心焦った

周りを見てみると皆が皆、顔が引きつっていて冷や汗をかいていた

俺もだがどうもこう自分から謝って来る奴は苦手なんだよね・・・ドSだからかな？Mな奴とは意外と相性が悪い・・・

「ま、まぁそんなところに頭を付けていては綺麗な顔が台無しですよ？」

っと俺らより２つ年上の陽が言うが未だに謝り続けている女

「あ、あのもう良いから・・・謝らなくて・・・いや、謝らないで！！！」

俺がそう言うと女は少しだけ顔を上げて俺の顔を見た

普通に可愛い顔はしている・・・

俺がそう思った時に馬鹿が

「めそめそしやがってそれでもお前、同類か!?あん?話じゃ人間相手にまで土下座してると聞いたぞ!?どうなんだ!・・・・おいおい、なぜ、副会長が剣を抜いていて議長さんが俺にアイアンクローをきめ

「女性を泣かせてどうするんです?」

「俺様が励ましているのに踏みにじりやがって」

〔ザシュ〕〔メキョ〕・・・・・・」

俺が頭を本当に握りつぶし陽が馬鹿の首を切り落とした

死体となった馬鹿の体は、地面に倒れ俺が持っている頭を上に投げて窓から外に蹴り飛ばした

サッカーボールのように飛んだバカの首は、思っ切り飛び隣の廃ビルに入った

その瞬間に何人かの男やら女の悲鳴が聞こえたが無視

(さっきからコソコソ鬱陶しいんだよな・・・あれ?なんか今一真らしき声が聞こえた気がするけど気のせいだな)

俺たちが解決解決と納得していると先ほどから土下座している女子

俺達レベル６の通称『神生徒会』の会計の少女、『月灯（つきあかり）　明（あかり）』という塒なうえに引っ込み思案で自身が無く謝り譲碁な彼女は、これでもレベル６で能力は、かなり特殊なもので

代表的なのが夢と現実の境界線を破壊すると言った能力である

幻が現実になったり現実が幻になったりなど自由に使用できる。幻覚なども使用が可能で黄金錬成に効果は酷にしているが願った事しか現実にならないという点では、こちらのほうが使い勝手は良く。自身が死んだ事や怪我をしたなどは、幻に変えてしまえるなど素晴らしい能力の持ち主だ。俺の『幻影武者』も似たような性質ではあるが夢を現実には出来ないためこっちの方が上だ

ちなみに年齢は、１６と同い年だ

「あの、本当にすみません・・・はっ!?勝手に話しかけてもうしわけありません!!あっ・・謝ってご免歳!!」

っと地獄のようなスパイラルを展開しそうなのでとりあえず止めた。

すると先ほどまで死んでいた馬鹿の身体が急に空間に飲み込まれたかと思うと空間の歪から首をコキコキならしながら出てきた

（死んでいれば良いのに・・・）

「おい、お前また俺が死ねばいいって思っただろ?」

っと俺にがんを聞かせてくる馬鹿、俺はそれにがんで返して

「おう」

そう言った・・・その瞬間に俺の体の腹部よりしたが何かに食われたかのように無くなった

しかし、俺はすぐに『異世界樹(ユグドラシル)』で回復し服を錬金術で再生したので実際には何ともない

「ッケ・・空間に身体の一部だけさらったのにその対応の早さは相変わらずだな!?あん?」

っと人に先に手を出しておいてこの男は、俺に対して文句を言ってくるのであるこの野郎!!怒るぞ!!蹴るぞ!!殴るぞ!!泣かすぞ!!虐めるぞ♪

「俺様に牙をむくたぁこれまたしつけのなって無い犬だな・・・おすわり」

俺はそう言って馬鹿の頭を方足で踏みつけ椅子に座りながらグリグリと足に力を入れていた

そして、俺がさらにやりかえそうかと思ったその時に翡翠色のツインテールの髪に、紅色　の瞳。
背中の部分に大きなリボンの着いた
これまた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており、そこに淡い紅色の　桜の花の形をした独特の日傘を差し　ている。
ちなみに日傘と本はそれぞれ持たず　に浮いている。謎と言えば謎である人物

我らが『神生徒会』のじゃんけんで決めたリーダー『生徒会長』こと：『神魔邪眼』＆ａｍｐ；『攻略不可能（アンデルフォン）』という能力を持った人物

天音（あまね）　廻黎（かいり）とそいつは、黒のスーツをキチンと着こなし赤色のネクタイをし金髪の髪を右側だけ立たせ左側をたくさんのピンで留めている個性的だが中々カッコイイ髪型の長身でスリムで顔つきはカッコイイ男だ俺より一つ年上のムカつく笑みの男・・・・その名もクレリア＝クロス＝死闇役職（シアン）『書記』

俺がなぜだか嫌いで嫌いでたまらない人物だ

「良く俺様の前に現れる気になったな！！！シアン君よ！！」

俺はその姿を見ると同時に『異世界樹（ユグドラシル）』で襲いかかったがシアンは、『異世界樹（ユグドラシル）』の枝の攻撃を真っすぐに歩いてきてすべて避けていたむしろ、運命が俺に外させたように・・・・・

そして、シアンが俺に笑いながら手刀を向けてきた

「く・・・敗北の」

俺が敗北の王を使おうかと思った瞬間に俺とシアンは、周りに居た全員に身体をバラバラにされた

「「「「「おとなしくしろ（しなさい）（したまえ）（喧嘩はダメですよ・・ご免歳！！）」」」」」

そして、ばらばらになった俺らは2秒後に復活した

レベル６の喧嘩は周りの人間が止める・・・ルールその１
血が上っているのなら一度殺して冷静にしようと会長様が決めたルールだ
ちなみに明以外のみんなは会長も含め一度は殺された事がある。
そして、全員が全員、ソファーなどに腰かけていると会長が急に
「で、皆落ち着いたところで相談があるんだ・・・」
俺達５人は、話を聞いた
「そろそろ、この狭っ苦しい地球から生物を消滅させないかい？」
っと笑顔で言う翡翠色のツインテールの小さな女・・・これで俺より年上なのだから世界はおかしい
そしてそいつがそう言うと
「俺は賛成~だって人間てウザいじゃん」
っと高笑いしながら会長の肩に手を載せている暮日が居た
そして、その横で手を上げている、『月灯（つきあかり）　明（あかり）』が居た
「わ、わたしも・・・人間が嫌いです・・・本当にごめんなさい！！」

っとすぐに謝りだした女

これで神生徒会の半数が人類や生物を滅ぼすことに賛成か・・・・

「俺様は反対させてもらう。俺様は従える家来として人間が欲しい」

っと俺は反対意見を出すと

「議長に同感です。私としても虐げる存在くらいっほしいですしね・・・それに私の天使は人間ですから滅ぼされたら妹に泣かれてしまいます。」

そう紅茶を飲みながら賛成した陽・・・こいつとはやはり意見が合うな

【はい！！はい！！僕も『異世界樹（ユグドラシル）』に賛成♪だって人間の女の子たちが死ぬと僕の遊び相手が居なくなっちゃうからね♪・・・・と言うのは冗談で人間に好きな子が居るんだよね♪モグモグ】

っといつの間にか俺と陽の横でケーキを食べていたシアンがそう言った物凄く汚くく食べていたが本人には汚れが付かず俺と陽の服にたくさんのクリームが付いていた

ブツ

ガシャ

っと俺はキレて、シアンの頭を掴んで地面に叩きつけた

しかし、シアンは、奇跡的に床が崩れたせいで叩きつけられず無傷

であった

【ごめんね♪】

っとシアンはすぐに起き上がって服の汚れを払うと俺と陽に謝ってきた

気に食わない奴だがこいつはなぜか俺と似ているんだ・・・どこかがわからないが何かが似ているんだ。だから意見が合う・・・コンチクショウ!!

「おやおや、まさかの三人が反対組だね・・」

会長が俺たち机に座ってコーヒーを飲んでいる俺と陽とシアンという変わったメンバーと会長に馬鹿（暮日）と明が向き合っていた

「・・・私達に従った方が良いよ?君達死ぬよ?」

っと会長が殺気を出しながらそう言ってきた

「なんですか?やるんですか?あなたたちも確かに強いですが主に戦闘向きの私と彼ら2人の生徒会執行部にあなたたちが喧嘩を売るんですか?」

っと副会長こと陽がに本当に手を掛けながらそう言った

その瞬間に会長の姿が変化しようとしていたが

いきなり窓の外からゴウィィインという奇妙な音とともに俺たちの居る廃ビルの部屋が吹っ飛んだ

・・・

此処までの攻撃を仕掛ける彼らの目的は、突如存在が鮮明になったレベル6を殺し力を見せつけさらにはレベル6の死体からデータを取ったり学園都市との交渉の材料にしようとしていたのだ

そして、2分にも及ぶ圧倒的な殲滅は一時終わりを迎えた

圧倒的な火力で焼かれたビルの周りは、煙でほとんど見えないが当たりがもう地上と呼べる状況ではなかった。いうなら地獄だ。

そして、アーマーに身を包んだ奴らはビルのあった場所に煙がはれる前に突撃しようとしていたが煙がすこし晴れるとその場に居た全員は驚いた

機械でさえ予測不可能の事態に一時停止してしまっていた

自分たちが襲撃したビルは、跡形も無くなるどころかそびえ立っていたのだ

それも先ほどと違いまるで新築のビルのように綺麗で窓も割れておらずそれどころかいっぺんのしみすらないような姿であった

そして、それを見ていた全員は驚いた

何とビル中で6人の少年少女たちは、外の自分たちに構う事も無く口喧嘩をしていたのである

これほどの奇妙な状況を見た人はいるのであろうか

あれほどの兵器を使い能力を使い人員を使ったのにもかかわらず気に掛けられてすらいないのだから

かの学園都市最強の一方通行ですら気にはするほどの戦力を・・・だ

この瞬間に此処に居たほとんどの彼らは、心が折れそうになった

その瞬間にだ、ビルの中の少年少女たちが屋上に出てきたのは、

6人の少年少女たちは、ビルから出ると周りを見渡し何かを話していた

その瞬間に上空で待機していた六枚羽が少年少女たちに機銃掃射し始めた

しかし、ガトリングで発射される口紅よりも巨大で鋼鉄の鉄板ですら軽く貫く弾丸は少年少女たちの半径１０メートルのところまで真っすぐに飛ぶと急に紫色の代わり小年少女に当る前に粒子状になってしまっていたのだ

そして、一人の日本刀を持った青年が日本刀を少しだけ抜いてまた鞘に入れると六枚羽が次々と墜落し始めたそして、一基の六枚羽が少年少女たちの真上に落ちたがそれはまた彼らに触れる前に今度は、水になって彼らを避けるように地面に落ちビルの下のほうで燃え始めすぐに燃え尽きると発泡スチロールの様になっていた

そして、今度は、駆動鎧たちが攻め込もうと前進し空を飛べるタイプもあるので飛べるタイプは、そのまま屋上に居る彼らにレールガンを連射できる最新兵器のファイブオーバーが主力武装の左右の鎌の内に１門ずつ取り付けられているガトリングレールガンを発射したが一発も少年少女にあたらず全てがすべて今度は、まるで綿の様になっていた。ファイブオーバー・・つまりは、モデル名からも分

かる通り、第三位『超電磁砲』を機械的に再現・超越する為の駆動鎧と言う恐ろしい兵器だが相手は、影虎を合わせたレベル６なので正直言って力不足なのは言うまでも無い今度は、影虎がファイブオーバーに飛びかかり５ｍ物巨体であるボディを地面に腕力だけで叩きつけたのである

そして、影虎が動くと同時に少年少女たち各々動きだした

そして、

下等生物の分際で化け物である自身らに牙をむいた愚かしい人に牙をむいたのである

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ババババババババババッバ

「なんだこの女！！さっきから弾が当たっているのに霧見たいになって消えやがる！？」

そう言いながら集中砲火を続けるアーマーを纏った兵士のような傭兵２０人は、黒髪で色白な少女の奇妙な力に驚いていたそして

「ごめんなさい、あなた達が撃っているのは私では無く私の幻です。後、本当にご免歳！！あなたたちもう死んでます。ご免歳」

「「「「か、からだがあああああああああ・・・・・・・・・」」」」

明がそう土下座しながら言うと傭兵たちの体は、霧のようになりこ

の世から消えた

彼らは、明によって存在を現実ではなく幻想に変えられたのだ。

引っ込み思案な彼女が攻めて血を流さずにとこのんで使う殺人の仕方である。

・・・・・・・・・・・・・・・

一方、日暮　暮日はというと大量の駆動鎧たちとある空間の中に居たその空間は、地球の土壌とあまり変わらないが一つだけ違う点がある・・・

駆動鎧の装着者は、すでに死んでいた

そして、その鎧だけで動いているなにかに彼はこう言った

「どうだ機械ども?平均気温８０００度の世界は!?ハッハ~!!」

彼は好きに空間を作れるので本当に物理を無視した世界を構築できるのだ。そして構築した世界に他人や物を攫い連れてくる事が出来るのだ

そして、あまりの温度のせいで機械は、壊れ溶けてただの鉄くずとなっていた

・・・・・・・・・・・・・

シアンはと言うと

駆動鎧を着た兵士たちが彼に攻撃を仕掛ける前に鎧の故障により機

能が停止して皆が皆動けずにいてシアンはそれらを隣にあったゴミを地下に捨てる大型のハッチに捨てていた

人が入ったままで・・・・

「や、やめてくれ!!ゆるしてくれ・・・あぁあああああ」

また一人また一人と地下に動かないただの鎧いやただの檻のまま捨てられるのだ

「貴様、此処はあと3時間もすればゴミの回収が来るその時が貴様の最後だ!!」

そう最後の男が言うと

【と言う事は僕が幸せになるためにはゴミの回収がこない事が条件だね♪】

シアンはそう笑いながら言うとまた地下に捨てた

そして、地下にゴミを送る大きな穴のふたを閉めた

その蓋の表面に紙が貼られていた

『先日よりこの場所でのゴミの回収は終了いたしました。此処にゴミは捨てないでください』

っとかかれていた

【~♪】

シアンは、笑いながらその場を後にした。後日談だがその後、ゴミの中から白骨死体の入った駆動鎧がたくさん見つかったらしい

・・・・・・・・・

会長さんはと言うと道の力を秘めた魔眼により兵士たち３０人を睨みつけると

「死んでくださいな」

そう言った

彼女がそう言った瞬間に兵士たちの心臓はなぜか自主的に停止し全員が全員、屍となった。

彼女の魔眼を拝んだ人間は必ず屍になる運命にあると言っても過言ではない

・・・・・・・・・・

影虎はと言うと現在、地上の人たちを『異世界樹（ユグドラシル）』で串刺しにして駆動鎧達を完全に破壊して上空で　ＨｓＦ－００３機との超音速戦闘機ＶＳ生身の超音速で移動可能な生き物である

影虎は、撃退した駆動鎧のパーツから錬金術でどんなに早く振っても曲がらないし折れ無い剣を作り出しそれを片手に持ちながら学園都市製の超音速戦闘機との時速７０００キロを超えた遊覧飛行を楽しんでいた

そして、一機の学園都市製の超音速戦闘機が影虎に向かって飛び機

銃掃射を加えようとしていたが『異世界樹（ユグドラシル）』を最大に活用している影虎には銃も剣も重圧も気圧も意味を成さず空中で影虎は全長８０Ｍもある巨体の学園都市製の超音速戦闘機を両手で持っている全長１０メートルの剣で真っ二つに切り裂いた

そして、切り裂かれたＨｓＦ－００の残骸は自身の速度が生み出した気圧の壁に半壊した状態でぶつかりばらばらになりながら学園都市の海に落ちたしかし、脱出は間に合ったようで脱出ポッドのようなものが海面に浮かんでいた

それを見ていたのこりのＨｓＦ－００のパイロットたちは、自分たちが何に喧嘩を撃ったのかを理解していた

・・・・・想像外の怪物だと

そして、二機は、自慢の速度で戦線を離脱しようとしたがその時はもう遅し

２機の上空にはるかに巨大な桜色の輝き桜色の花弁のようなものを散らしている世界樹と言うのがふさわしいものが浮いていて

それは、瞬きをする間の無い間に機は地面に向かって落ち始め世界樹の根っこの部分に２機のＨｓＦ－００は激突して爆発を起こした

こちらも脱出ポッドが海に向かって飛んでいき海に浮かんでいた

まるで怪獣映画のワンシーンのような戦闘であった

そして、彼は上空から下を見を下ろし眺めていた

「ふむふむ、だいたいみんな遊び終わったみたいだな・・・あれ？陽は・・・！？か、一真！？なんであいつがここに！？それに陽が剣を抜いて・・・やばい！！」

彼はそう言って『異世界樹（ユグドラシル）』の翼から生命力を噴射し最大加速で地上に向かった

・・・

そして、彼が歩いていると物影に灰色の髪に黒いサングラスをかけていて、服装は影虎と同じ制服で筋肉のついた中々良い体の男を発見したので陽は迷うことなく剣を抜き首を落とそうとしたのだが予想外の事が起きた

彼が斬ったのは、男の首ではなく斬ろうとしていた男を突き飛ばしたボサッとした黒短髪で制服などはだらしなく着ている身長１７０くらいの男の肩を軽く斬ってしまったのだ

そして、突き飛ばされた男は、すぐに体勢を立て直したが斬られた方は、肩を押さえながら苦しんでいた

「「な！？」」

突き飛ばされた男とその横に居た金髪ロングの女は、すぐに戦う態勢を取り

男が殴りかかり女がナイフを自分に刺そうとしていた

その瞬間に陽は刀を抜いた

ズバズバズバッバ・・ドス・・カチン

刹那・・・陽が刀を抜いて鞘に仕舞ったとたんに男は、全身をズタズタにされ女は、何かをする前に首筋に嶺打ちを喰らい気絶した

その光景を見ていた目の色白い部分は黒、黒い部分は赤という変わった目をしている男は

「おい！！お前いったい何もんだよ！？」

っと大きな声でそう問いかけた

彼は陽の容姿に似た特徴のある女性を一人知っていた。彼はその女性に似ていたのだ。

だから、こそ青年は、陽に話しかけた

しかし

陽はその質問に何の反応も示さず突如、光速で腕を動かし何かを光速で投げた

・・・・・・

陽が投げたものは、鉄製の５センチ程度の杭を投げたのだ

光速で鉄が跳べば本来なら溶けて無くなるのだろうが鉄自身の時間の流れは平常なので摩擦で燃え尽きる事はないのだ

しかし、高速で動く杭は、男いや、一真に音速で避けられたのだ

実際は、陽が投げるよりも早くに一真が避けていたと言った方が良い動き方だった

（へぇ今の動き方は予知能力かな？）

っと一瞬で一真の能力の小隊に王手を掛けた陽

そして彼は再び杭を投げた

しかし、一真はそれをやはり投げる前から音速で避けていたのだ

しかし、一真に三度目の回避のチャンスは訪れなかった

一真が確かに竜王の目で捕えていた陽の姿が消えたのだ

光速移動くらいなら一真は予知と音速で回避できただろう

だが、陽が笑いながら使ったのは、『絶対時間』つまりは時を止める能力なのである

そして、陽は、ゆっくりと歩きながら時間が止められ動きが完全に停止している一真に

「気味の目はなかなか個性的な目のようだがレベル6をのぞき見るのは・・・目の毒だよ」

ズチュウウ・・・・・キュポン

・・・・・

なぜか、水のような感触と目玉の感触が無いのだ

そして、自身の手を左目で見ると

血まみれになっていた

それを見た瞬間に一真の右目に激痛が走り一真は膝をついて声にならない悲鳴を上げていた

目を潰されたと言う感覚だった

するといきなり一真の前に白いブレザーの男が現れ

握りこぶしを前に出し開いて一真に見せた

掌の上には眼球があった

それを見た一真は、痛みとショックと相手の異常さで吐きそうになった

この男は、一真の目を抜き取ったのだ

「君の目は面白いけど覗かれるのは気味が悪いのでね。」

グチャ

っと陽が眼球を握りつぶしたのだ

それを見た一真はさらに右目があった場所が居たくなるような感覚

を味わっていた

「・・・・くるな・・・」

一真はそう言って少しずつ下がっていた

「さてと君の左目ももらって君の首をはねようか？」

そう言って、陽は、一真の左目に手を伸ばした

その瞬間だ

一真の右目があった個所が突如燃えだし炎の目になり

一真は、近づいてきた陽を突き飛ばそうと手を伸ばした瞬間に手から強力な謎の炎が噴射され陽は吹っ飛ばされた

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

吹っ飛ばされた陽は、焦げた服に手を当てて離すと服は綺麗に戻っており高速移動で一真の前に移動し日本刀を抜き一真を本気で斬ろうとしたその瞬間に陽の日本刀を１０メートルはあろう大剣が弾き飛ばした

そして、頭に『異世界樹（ユグドラシル）』の王冠をかぶり背中からは枝の翼を生やし体中からも『異世界樹（ユグドラシル）』の刃が飛び出ている少し本気の影虎が

一真と陽の間に影虎が入った

「陽、もう終わりだ。こいつは俺の・・・仲間なんだ・・手を出すな！！」

そう一真を庇うように手を横に伸ばしてそう言った

「・・・・ですが私の服は彼に「俺が弁償してやる・・許せ」・・・わかりましたよ。君がそこまで必死になるなんてね・・皆さんも帰ったようですね・・ではわたしも」

陽がそう言った瞬間には、陽はそこに居なかった

「一真・・・今日は帰れ・・・明日、話がある」

影虎もそう言ってその場から消えた

・・・・

生徒総会（集いし無茶苦茶なレベル6達）（後書き）

レベル6辞典

★☆★桜小路影虎☆★☆

言わずと知れたこの小説の主人公?兼悪役（笑）

能力は『異世界樹（ユグドラシル）』と死世界樹（キルドラシル）と『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』と記憶消去が主な能力

『異世界樹（ユグドラシル）』を捨てれば他にもたくさんの能力が使える化け物

☆★★園崎陽（そのざきよう）☆☆★

18歳

男

瑠奈の兄

身長が影虎と同じくらいで髪型が青い髪の長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下制服（ブレザー）で首にロケットペンダントを掛けている爽やか系の色男だ

唯一おかしいのが腰に掛けた日本刀（模造刀）

『絶対時間（タイムオーバー）』

時間を完全に操作することのできる能力。詳細は不明だが対物時変など物の時間を操ったり時間を止めたり早めたりできる。

特技はおいしい紅茶を入れる事と模造刀で空間から何まで切る居合い斬り。

シスコンだが優しく礼儀正しい影虎と気の合う化け物。

役職『副会長』

★☆★日暮（ひぐらし）　暮日（くれにち）☆★☆

１６歳

男

髪の毛がはねっパねの髪形で革ジャンとボロボロを通り越して雑巾なズボンをはいた影虎が完璧と認める容姿の男

キレ症

『閉鎖空間（フリースペース）』

すきな空間を自由に作り出し自由に移動し自由に消し去ると言う能力

『平均気温８０００度の世界』や『自分だけがモテる世界』など本当に好きな世界を作れる。死なない理由は、空間が彼を殺したがらずすぐに『死者が蘇る世界』に引きずり込み復活させるからである。

影虎とは犬猿の仲である化け物

役職は『庶務』

☆★☆月明（つきあかり）　灯（あかり）★☆★

１６歳

女

真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿で身長が１６０ちょっとの黒がメインカラーの上下制服の女

顔は結構かわいらしい。

性格は、引っ込み思案

特技１分間に３００回の土下座と２００にも及ぶ謝罪

『幻実？ぎ（ドリーム・オア・リアル）』

幻が現実になったり現実が幻になったりなど自由に使用できる。幻覚なども使用が可能で黄金錬成に効果は酷にしているが願った事しか現実にならないという点では、こちらのほうが使い勝手は良く。自身が死んだ事や怪我をしたなどは、幻に変えてしまえるなど素晴らしい能力の持ち主。実はかなりお強いお方

役職『会計』

☆★☆クレリア＝クロス＝死闇（シアン）★☆★

性別　男

年齢　１７

性格　負けた相手を不謹慎な言葉で罵倒したりと悪辣な性格　自分と同族（レベル６）など認めた物には、世話焼き　欲しい物またはしたいことのためなら誰でも犠牲に捧げる　（欲しい物に『椿』が入っている）

顔　イケメン

髪の色　金

髪型　長い髪をヘアピンをたくさん使いオーズのアンクみたいにしている

体格　ふつう

服装　常にスーツ（黒）

所持品　手帳（自分が心を折った能力者や魔術師のことが日記として記されている）　たばこ　お菓子　ケータイ

『絶対強運』

圧倒的な幸運を持ちさらには他人から幸運を奪い己が物とする事が出来る。

パラノーマルアクティビティ
『超常現象』

この世で起きるはずのない現象を運命的に誘発する能力

能力の効果も発動タイミングも運任せ

彼自身の特性　『絶対強運』があるため

どんなことでも（実際に起きるはずのないこと）ほとんど自由に出来て

タイミングも強運のため絶妙なタイミングに発動する

黄金錬成のように自滅することもないため

本当の意味で最強

例、誰かが殴りかかってきたらその腕が何故かドロドロに解けたり

他人の心を自分の物にしたり本人が嫌がっているのに感情と身体が自分を愛してしまっていたり

ビルがいきなりひっくり返ったり

死んだ人が生き返ったり

隕石が振ってきたり

いきなり身体が破裂したり

攻撃が自分をすり抜けてしまったり
年を取らなくなったり
いきなり別の場所に移動したりなどランダム過ぎて予想が本人にもつかない様な戦い方をする。

追加事項
椿さんの過去に因縁がある模様。元は恋人だったらしい。

役職『書記』

☆★☆名前：天音（あまね）　廻黎（かいり）☆★☆
性別：女
身長：１４７ｃｍ（アンデルフォン時：１８１ｃｍ）
年齢：不明
性格：妹の華音以外とはほとんど関わりを　持たず、常に本を読んでいる為他人　が顔を見る事は無いだがレベル６の連中とは会話が弾む。
また、二つの人格を使い分けていて　、二つ目の人格のときは性格が真逆　になり、全てを見下している様な感　じの口調や態度となる。
能力：『神魔邪眼』
廻黎の二つある能力の内の一つで、　一番の原石。
その名の通り眼を扱う能力で、無数　に存在するありとあらゆる眼を保有　している。
故にその効果も様々で、それぞれを　見極めるのはかなり困難である。
常時使用しているのは『観察の邪眼　』という眼で、常にあらゆるモノの　情報等をその眼で観ている。

『攻略不可（アンデルフォン）』

廻黎二つ目の人格と能力にして、最　も謎に包まれている原石。
異常な程の耐久性　と体力を持つ。（影虎以上！！）
容姿：翡翠色のツインテールの髪に、紅色　の瞳。
背中の部分に大きなリボンの着いた
これまた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており、そこに淡い紅色の　桜の花の形をした独特の日傘を差し　ている。
ちなみに日傘と本はそれぞれ持たず　に浮いている。
アンデルフォン時は、軽く逆立たせ　た黒髪に、深い蒼色の瞳。
白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服　をマントの様に羽織っている。
そして体の周りを白と黒のエネルギ　ー体が交差して廻っている。
（テイルズシリーズのダオスを参照し　ています）
設定：元は自分がテイルズシリーズ好きな　ので、それに基づいて作ったキャラ　クター。
ちなみに、人間がアンデルフォンを攻略したいと思ったら、飽きるのを待つし　か手段は無い。
（それで一応は攻略したという事にな　る）
それでも本気で攻略したいと思った　ら、最初に周りを廻っているエネル　ギー体を破壊し、次に異常な耐久性　の耐久性の元である鋼体を破り、最　後にアンデルフォン自身にダメージ　を与えれば勝てる。
イメージＣＶ：廻黎はひぐらしのなく頃にの　竜宮レナの声優さんで、アン　デルフォンはテイルズオブヴ　ェスペリアのジュディスの声　優さん

以上です。

神生徒会とは、レベル６によるレベル６のためのレベル６の組織でいつもお茶会からの人類存亡か滅亡かの会議を真剣にしてます。一

人ひとりが簡単に世界を滅ぼせるので冗談にあらず・・

ではまた

感想ください！！！お願いします！！

記憶喪失（解離性健忘!?女であることを忘れた椿!?）（前書き）

本日二回目の投稿です。

今回は、椿さんが・・・・なお話です。

では、かくごしてどうぞ

記憶喪失（解離性健忘!?女であることを忘れた椿!?）

翌日　１０月６日

俺こと影虎は、朝日を浴びて目をさまして身体を伸ばしていた

そして、何かいつもと違う違和感を感じたので俺はすぐに隣で寝ている椿さんを見た

椿さんは俺のパジャマをがっちりと握りしめ俺に抱きつくと言うよりもしがみ付くと言う方がしっくりくるほど絡みつきながら椿は、震えていた

眠りながらも震えていた椿を見て俺は、椿を揺すって起こしてみた

ユサユサ

「ハッ！・・・え、あ、・・・・影・・虎?・・うぅ・・うわあああああん」

っと椿はいきなり立ち上がるとまわりを涙をためた目で見渡して俺を認識するといきなり俺に泣きついてきた

「ど、どうしたんだよ椿?」

「うぅううアイツらがあいつらが・・」

っと椿は泣きじゃくりながら俺に訴えかけていた

そして、しばらくすると椿は泣きやんではいた。

その後、俺は一真を呼び出していたので出かけようとすると

椿が俺のコートの端を軽く掴んで

「・・・今日は一緒に居てくれない？」

っと弱弱しい声で言ってきた

その時の声と表情は、俺の心を軽く打ち抜いていて俺は赤面しながら

「／／／／／・・でも、今日お前、忍に呼び出されてるんじゃなかったけ？」

俺がそう言うと椿は少しだけ俯きながらすぐに服を離して

「そうだな・・・・・行ってらっしゃい」

「お、おう」

俺は椿がそう言うので家を出て学校の屋上に向かった

ただ、なぜか椿の表情から何かを自分が忘れている気がしてならなかった・・・重大な何かを・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この日、俺が屋上に向かうと一真が右目に眼帯をした状態で待っていた

そして、俺は一真に殺気駄々もれで色々裏世界について語り

後戻りはできない世界に踏み込んだ事を伝え

俺がレベル６であり一真を襲っていた奴の仲間である事を教えた

一真ももちろん驚いていたが俺には関係が無かった

そして、言うだけ言って

最後に

『お前が何をしようが勝手だが・・・・・もしお前のせいで椿が巻き込まれるような事があればお前ごと原因を殺す。ただそれだけだ、まぁ基本的には友達でいようぜ♪』

っと最終警告とまだ絶交はする気はないと伝え

その後は、学校でずっと寝ていた

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

俺こと桜小路椿いや現在は、金桜　奈々は、忍さんにモデルの仕事で呼び出されもうすぐ秋なので冬服のモデルをしていた。カメラマ

ンの人に言われたとおり表情を作ったりはもう慣れているのだがどうしても今日だけは辛かった。俺は、学園都市の背の小さい女の子たちに背が低いなら低いなりの可愛さがあるというコンセプトでモデルをやらされている。中々儲かるので嫌いじゃないのだがやはり女ものの服と言うのは俺に合わない・・・それに今日は特に女の格好はしたくないのだ・・

だが一応プロなのでプライベートのせいで支障は絶対に出したくないので必死に頑張った

そして、仕事が終わったころ（１６時）に家に帰ろうとおもい歩いていると

周りにあまり人がおらず静かな道だった

車は多く走っているので人気の無い道ではないが今の俺の心境からすれば激しく怖かった

（あぁもう・・・やっぱり無理言って影虎についてきてもらうんだった・・・ていうか最近の影虎はずっと一真と遊んでばっかりだ・・・彼女である俺よりもより遊んでいる気がする・・・・はぁ俺が男ならもっと構ってくれるのか？・・・いやそれだと彼女じゃ無くなるからな・・・影虎が影千代で居れば良いんだよな～）

っと馬鹿なことを気を紛らわすために考えていると俺は、後ろから

「椿ちゃん！？危ない！！！」

っと後ろから忍さんに呼ばれ振り返ったその時、俺は、こめかみに何か重いものがすごい勢いでぶつかったのがわかった

そして、宙を浮かんでいる間に俺は理解した

信号を無視した俺は車に轢かれたのだと・・・・・

そして、地面に打ち付けられた

俺は意識がかすかに残っていて

忍さんが焦りながら寄ってきておれに呼びかけてきた

俺は返事したかったが口が動かなかった

死ぬのかな?とも思った

すると忍さんは運転席から出てきた子連れの女のひとの胸倉をい掴んで物凄く怒っていた

殴りかけてすらいた

そして、救急車が来た

其処で俺の意識は途絶えた

その瞬間に俺の中で何かが壊れた気がした

・・・・・

影虎サイド

俺はただ今、バイクを飛ばして病院に向かっていた

忍から

「とら?聞いて椿ちゃんが椿ちゃんが「落ちつけ馬鹿、何があった」車に轢かれたの・・「マジか?今は病院に居るのか?」えぇ今、私と冥土返しが治療したわ」

「そうか、なら俺が今すぐ行くよ」

っと電話を切ってすぐに向かっていたのだ

そして、バイクを駐車場に止めて病院なのに走って椿の病室に向かった

そこには、一真と天野に忍が居てベッドの上では椿が頭に包帯を巻いていたが元気そうに座っていた

「ほ・・・」俺はすぐに安心して力が抜けて壁にもたれかかった

しかし、周りを見てみると天野と一真と忍が顔を真っ青にして冷や汗を書いていた

俺は不思議に思ったがとにかく椿に話しかけた

「よ，よう椿・・・大丈夫か?」

「おう」

っと椿が元気に返事して来たので俺は完全に安心して隣にあった椅子に座ると

「馬鹿だなお前、信号無視って誰にも文句いえねぇじゃん」

っとれは笑いながらそう言うと

「あぁ悪い悪い本当に馬鹿だよな俺って」

っといつもなら少し頬を赤くして逆ギレするところを普通に返してくれた椿

なんか違和感があったがとりあえず無視した

すると椿が俺の方を見て

「そういえばなんで影千代は影虎モードになってるんだ?」

っと笑顔で言ってきた

(・・・・?・・・・・??・・・・・・?????・・・・・〜ポクポクポク・・・チーン〜?????????????

俺が焦ってパニックになりかけていると
椿が不思議そうな顔で俺の事を見て
「どうしたんだ?変な女・・いや今は男だったな悪いな」
っと椿がいっしゅん壊れてしまったのかな?っと思いとりあえず殴ろうかな?っと思っていると忍に部屋の外に連れ出された
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「虎落ち着いて聞いてね」
っと忍が俺の両肩を掴みながらそう言って来るのでとりあえず頷いた
そして、忍の口から発せられた言葉は、俺の姿を二等身に変化させるほどショックなものであった
「椿ちゃんは自分が女の子であると言う事を忘れて「・・・」・・・自分の事を男の子だと思ってるのよ」
っと忍がそう言った瞬間に俺の上に伝統が急に割れ電線が俺に当りリアルになりが俺の上に落ちた
そして、ビリビｒの後に焦げた俺はプスプスいう体のまま
「・・・・・・それって冗談?」

俺がそう聞くと忍は無言のまま首を横に振った

「ついでにあんたの事をなぜか本気で影千代ちゃんが正体だと思ってるわよ・・・あれ?ねぇ虎?聞いて・・・・」

俺はとりあえず無言で病室の扉を開けて

椿の所まで行くと

「あの椿さん・・・質問」

俺がそう小さな声で言うと椿はなに?っと言ってきた

「俺の名前は」

「桜小路影千代」

(グハ)

「俺の性別と君の性別は?」

「お前は本当は女で俺は男」

(グハウハグハ)

「俺とお前の関係は?」

「付き合ってる・・」

(よかった~)

「女のお前とな」

(ぐふふぁあああああああああああああああああ)

「・・俺の身長は?」

もう俺自身わけがわからなくなって聞くと

「ん?身長は確か・・・身長は１７４で体重が４８キロ、そしてスリーサイズ（Ｂ－Ｗ－Ｈ）が８８－５７－８５のＥカップという非の出し所のない女だよ♪」

（それ影千代!!そしてなんで知ってるんだよ!?胸なんて測ったことも無いぞ）

椿が笑いながらそう言った瞬間に俺の希望と言う言葉はついえた

そして、俺はプルプル震えながら

「・・・・・とりあえず・・」

「?」

「元に戻ってくれ!!」

っと大声で言うと椿さんは、

「て言うかお前こそ元に戻れよ」

っと冷静に言われた俺の怒りは大爆発した。

変なストレスと不安が俺を負ったせいで腕時計型の計器の制御を振り切って俺は、髪が、桜色に変色し髪はロングになり結構筋肉質だった身体はどんどんと筋肉がそげおちてぷにぷにした肉質になって出るところが出てきてひっこむところはひっこんでしまったそう影千代である

影虎サイドＥＮＤ

そして、影千代になった影虎は迷うことなくベッドの上に座っている椿に殴りかかった

途中で一真が止めようと前に出たが軽く突き飛ばされていた

「人格が男になったからって俺はお前をゆるさねぇよ!!!」

そう言って影千代状態（暴走）の影虎は、殴りかかった

すると普段なら怯えうごくことも出来なくなる椿がニヤリと笑い

「全く相変わらず乱暴な女だな」

っと言った瞬間に周りのみんなが驚くような発言と共に驚くべき現象が起きた

「うぐ・・・なに？」

ギリギリと椿が殴りかかっていた影千代の後ろに回り込み腕をひねって影千代の体をベッドに押し付けていたのだ

身体の小さい椿が・・・だ

ギリギリギリ

「いて・・・いたったった」

苦痛に顔を歪めている影千代を見て椿は影千代の髪を引っ張って自身の口の前まで無理やり力ずくで持ってきて

「無駄だよ何度やればわかるんだ？お前じゃ『俺』には勝てねぇよ」

っと呟いた

今の椿の『俺』という一人称には、男っぽくなるという意味はなく自然に出てしまう一人称なのである。

「ふざけんな！！お前なんかすぐに」

「なまいき」

ギリギｒギｒ

「痛い痛い痛い痛い！！」

すると椿？はさらに強く腕をひねると影千代は眼に涙を浮かべながら苦痛の表情をあらわにしていた

「椿ちゃんやめなさい」

すぐに忍が間に入って椿を引き離すと

影千代が銃を抜いて目から涙を流しながら怒りをあらわにした顔で椿に向かって構えた

「てめぇ良くも俺に恥をかかせてくれたな・・・」

そう言いながら引き金を引こうとすると影千代の腕につけていた計器が急に赤色に光って

急に影千代は、感電したかのように震えだし力が抜けてしゃがみ込み
動かなくなったそして、5秒後、動き出した影千代の第一声は、
「セーフ、なんとか制御完了・・・ん?なんで俺は椿に胸倉を掴まれてるんだ?」
影虎の意識を機械によって取り戻した影千代は現状況に困惑していた
椿は怒りを込めた表情で影千代の胸倉を掴んでいて
拳が握られていてそれを忍と一真と天野が必死に止めていた
「やめろって椿!!」
「そうだよ椿、暴力はちょっと」
っと一真と天野で椿の体を必死に抑えているが椿の潜在能力のひとつの怪力のせいで旨く止められないのだ
すると
「椿ちゃん、やめないとぶつわよ?」
っと怒った忍が椿にそう言うと椿は、忍の方を見て
・・・・・・・・・
「うっせーよババア」

そうイラつきながらそう言った

その瞬間に忍の顔から笑顔は消えていて拳が握られていた

そして、

「いっぺんくたばりな小娘」

一真がすぐに忍を止めに入り天野は今度は忍を攻撃しようとしている椿を取り押さえていた

それを見た影千代は、溜息をつきながら立ちあがり

椿と忍の間に入り2人の顔の前に両手をつきだすと

「もう、鬱陶しいから喧嘩するな、俺はもう元に戻ったから」

っと言うと

「「グルルルル・・このババア（この小娘）」」

っと怒りと殺意むき出しで向き合っていた

その光景を見て影虎はある事を思った

（なんだ?椿が男の人格になると俺に似てないか?）

・・・

・・・

」

忍はそう言って部屋を出て椿を迎えに行った

・・・

すると後部座席の方から

「なんで俺が女に怒られなきゃいけねぇんだよ・・・てか、影千代の癖に生意気だ」

そう言う声が聞こえたと同時にフニョンっと言う音とともに

「きゃぁあああ」

っと影千代が席から飛びあがったしかしシートベルトをしているので飛び出せてはいない

そして、影千代は、胸を押さえながら後ろを見ると

椿が笑顔で笑っていた

「お前また胸でかくなったよな♪」

「はぁ？黙れ」

っと自身が男だと思っているれっきとした女性の椿さんに胸を触られさらに褒められた身体が一時だけ女のれっきとした男の影虎がその瞬間に席を後ろに下げて助手席の椅子で椿の頭を殴打したのだ

「いって！？何しやがるこの暴力女！？」

「俺は男だそれに胸ならお前にも大きいの付いてるだろ！？」

っと椿の物言いに全力で対処する影虎

「何言ってんだよ・・・・・・・あれ?あれれ?何この脂肪の塊?」

椿は影虎に言われ襟を少し開けて自分の胸を見て確認すると顔を真っ青にしていたそしてズボン入れて直ショックを受けていた

「嘘だよな・・・俺女になってる!・・・ウウ・・グス・・・アレも無い・・・・・・なんだよ・・・俺の体どうしちまったんだよ!!」

っと驚き泣き出した椿

その交易を見ていた影千代と忍は、頭を抱えて

「「あんたはもともと女だ・・」」

などと色々ありながらも最終的に椿は泣き続けて静かになったので忍の家について

忍の家のリビングで影虎はテレビを見ていて

忍は、椅子に座りながらコーヒーを飲みながら雑誌を読んでいた

そして、椿は、自分の体を見るたびに泣いて泣きやんだら体をチェックと言う事を繰り返していた

そして、９時頃になると忍が風呂から出てきた

「とら、椿ちゃ・・・君、あなた達もお風呂に入りなさい」

っと頭をタオルで拭きながら忍がそう言うと

「「この身体でどう入れと!?」」

っと椿と影千代は息ぴったりにそう忍に寄り添う2人に忍は

「そういえば・・・とらもいつもその姿になったら目隠しをして看護師さん達に洗って貰ってたわね・・・どうしようかし・・・この際だから女の子同士で椿ちゃんと一緒に入っちゃったら?」

ガン「痛い!?」

「あのな忍、俺は、男だぞ?それに今の椿と俺が入ったら間違いが起きかねん」

っと忍に怒りを込めた声で言うと

「でも、あなたたちもう20回以上過ちを「男の俺でな」・・・了解です」

影千代が逆らえばこの世から除外されると言わんばかりの表情をしながらそう言うと

「・・・なら、お姉さんが洗ってあげるから」

「う~ん・・・微妙な・・・絶対に身体に変な事するなよ?したら、暴れるからな?」

そして、風呂に入った影千代・・・

・・・・・・・・・・・・

そして、１０分後髪が濡れて頬が赤くなった影千代が忍のタオルケットを借りて出てきた

「ふぅ・・さっぱりした。次椿も入れよ」

っと影虎が言うと椿は影千代の姿を見て顔を赤くしていた

そして、俯きながら風呂に行った

「どうしたんだ椿の奴？」

「たぶんだけど、あんたの格好を見て恥ずかしくなったんでしょう？」

「はぁなん・・・・そうか今の椿は身体以外は男だったな・・・・なぁなんでこんな事になってるんだと思う」

影千代がタオルで頭を拭きながら忍にそう聞くと

「ねぇとら今日が何日かわかってる？」

「１０月４日だけどそれがどうした？」

っと忍の問いに影千代が答えると

「やっぱりわからないか・・・「なんだよ？」もういいわ、先に寝ておきなさい。」

（なんだよ・・・・まぁいいや）

「わかったよ前まで俺が使ってた部屋で寝るわ、おやすみ」

そう言って影千代はあくびをしながら寝室に向かい

ボフンっとベッドに飛び込んだ

（なつかしいなこのベッド・・・・胸が邪魔で息苦しいな・・・）

そう思いながら影千代は仰向けになって天井を見ながら涙を流して

「なんで、なんでこんなことになっちまったんだよ・・・グス・・・くそ・・・なんでこの姿じゃすぐに涙が出てくるんだよ・・・・元に戻ってくれよ椿・・なんで俺の事を忘れたんだよ・・・俺と居るのがそんなにつらかったのか？・・・・・くそ・」

そう泣きながら影虎は、静かに眠った

・・・・・

そしてその部屋のドアを開け静香にひとつの小さな影が侵入していた

その影は、眼の下を涙で赤くしながら唇をかみしめてベッドの上の影千代に近寄り影千代の両手をガーゼでくくりそれをベッドの上の金具にくくりつけていた!?そして影千代のお腹の上に馬乗りになって・・・

「おれは・・・女じゃない・・・女なんなんて嫌だ・・・・・・俺は女なんかじゃない!!それにお前が悪いんだ・・そんな格好でいるお前が・・・」

椿はそう大声で言うとすぐに寝ている影千代にキスした

「んぐ?ンバビ?ナンベギズシデンノ?(んぐ?椿?なんでキスしてんの?)」

ガチャガチャ

「バァ?デガブブラレテルダ?ボイブバビ!?バビシベルン・・〜ムニュ〜・・キャ!?(はぁ?手が括られてるだ?おい椿!?なにしてるん・・キャ!?)」

「すぅはぁ~ 騒ぐなよ・・俺が女なはず無い!!だからだから」

椿はキスしながら影千代の胸を揉むと唇を離してそう言った

「何言ってるんだよ?お前は女だよ。俺の大好きな女なんだよ!!」

っと影千代の状態でいきなりキスされ胸を揉み続けられ変な感覚がして力が入らず多少パニックになりながらも影虎はそう言った

「うるさい黙れ!!黙らなきゃもっと酷い目にあわすぞ!?」

っと物凄い怒りを込めた表情で影千代（影虎）でそう言い拳を作りそう言った

「俺はもともと男だ、椿、眼を覚ませよ。こういう事お前がされて一番嫌だったんじゃないのか?」

影千代がそういうと椿はさらに怒りを込めた表情をし影千代の頬を殴った

「グ!?・・・いて・・・プッ・・・あぅ・・・」

（なんで変わっちまった椿?俺もいつもこんな感じなのか?だから、やりかえしてきてるのか?）

再び影千代になった影虎の胸を触りだし身体を触りだした椿

影虎は、椿が変わってしまった事と自身のふがいなさと変な声が出てしまった自分への羞恥で唇をかみしめ椿の事を殺そうと考え始めている影虎がいた

そして、

「いい加減にしろ「あん?」もう堪忍袋の緒が切れた・・・今すぐ退かねぇと痛い目に合わせるぞ!?」

影千代状態で多少は気が長くなっちた影虎もあまりに勝手な椿に遂にキレたのだ

そして、怒りを込めた目で椿を見たのだ

しかし、手を括られて居て馬乗りにされている影千代ではどうする事も出来ないのは事実である。

影千代の姿は、影虎から強さを引いた姿に近く相手が抵抗しな場合でしか一方的に殴る事も出来ないほど弱いのである。体力が落ち筋力が落ちて耐久力が無くなり腕力も脚力も一般の中学生女子以下になっているのだ。実際に抵抗も出来ずにただ、脱力しているだけだった

しかし、椿はと言うと影千代に睨まれ

「・・・なんだよその眼・・なんだよ!!・弱いくせに生意気なんだよお前!!」

そう言いながら再び拳を振り上げたのだ

しかし、その拳は、影千代に当る事はなく

椿の上げた手は、この家の家主の黒い髪の長髪の桜井忍に掴まれていて

「え!?あんた薬で寝てる筈じゃ・・・」

そう椿が驚いていた

（て言うか椿の野郎薬まで使ったのかよ?）

「えぇぐっすりと逝ってたけどさっきちょっと椅子から落ちてねで

も意識がすぐに飛びかけたからワイングラスを割って手に突き刺してるってわけ・・・とりあえずとらからどこうか？いいえ、・・退きな！！」

「グ！？いったぁあああ・・・いてぇえええ」

忍が笑顔から一変して本気で怒り椿の右肩に回し蹴りを決め

椿は、壁にぶつかって頭をぶつけ物凄く痛がっていた

「いっぺん頭ぶつけて可笑しくなったんならもう一回ぶつかったんだから戻るかもね・・ほら、とら大丈夫？今回はこんな状態だから恐かったでしょう？」

っと椿を見はなし影虎を助けた忍がそう言うと影千代は、

「サンキュー・・・でも、俺が何か嫌な事したから椿がこうなったのかな？・・・俺がいつもこんなことしてるって言う意味なのかな？」

「とっとら？どうしたの？本当の怖かったの？「だって今の椿は昔の俺に似てるんだよ・・・」・・・はっきりと言うわ、確かに多少椿ちゃんが男の子になったらあなたに似るのは当然のよ「は？」いえ、まぁとにかくよ。でも、あんたが椿ちゃんを大切にしてるのは私が保証する、今の椿ちゃんのこうどうは、おそらくだけど椿ちゃんが本能的に抱いている男性のイメージの現れじゃないかしら？」

「え？でも、椿の身近な男って俺しかいない筈だぜ？」

影千代がそう言うと忍は、少しつらそうな表情をして

「聞いたことあるでしょ？5年前に椿ちゃんが心に大きな傷を負って男性恐怖症になったっていう哀しい事件の下種な男どもが・・・」

その言葉を聞いた瞬間に影千代（影虎）は、固まった

そして、言葉の意味を理解した

その瞬間に急に隣で痛がっていた椿が

「いったぁあああああ・・・・ウグググググ・・・いぎゃあぁあああああ・・・・」

っと頭を押さえて尋常でないほどの痛がり方をして床をはいずりまわっていたのだ

「おい椿!?だいじょうぶ〜{パシン}〜！？」

「俺に触るな!!・・・うぁあああ・・・なんだこれ・・・頭の中に変な映像が!?・・・俺がだれかに押さえつけられてる？・・・誰だよこいつら・・・・・やめて・・・・・離せよ・・・いやぁあああああ!!!」

っと椿は影千代の手を払い寝蹴るがその後すぐに椿の人生の中で一番の不幸が脳裏に鮮明に蘇り激しい靴と痛みとその時の恐怖をリアルタイムで味わって涙を流しながら叫んでいた

「ちょ椿ちゃん?」

「忍!!椿の奴やっぱり今日の事が原因みたいだ!!多分椿はもう

一回味わってるんだ・・・イスラエルに居た時に薬を飲まされその後、犯された時の事を・・・椿が本気で男を怖がる原因になった事件を・・・」

影千代はつらそうにそういうとすぐに椿を抱きしめた

「いやぁあああああやめてぇえええゆるしてぇえええ!!いやだぁあああああはなしてぇえええ」

っと目の焦点が合わず哀しい記憶に苦しみ続けている椿を影千代は、必死で抱きしめ

「大丈夫だから・・・もう大丈夫だから・・・絶対絶対守るから・・・もう、恐い思いもさせないし二度とお前をそんな身に合わせる奴らになんか触らせないから!!俺を信じろ椿!!」

っと自身も泣きそうな声で椿にそう言いかけた

「いやぁあああああイタイイタイイタイ!!」

っと本来あるはずのない痛みや恐怖や苦痛に声を上げる椿を見た影虎は、

「お願いだ・・・俺を信じてくれ!!」

っと影千代がそう叫ぶと

椿は一瞬だけ泣きやみ影千代の頬を震える手で触って・・・

「ごめんね影虎・・・私やっぱり弱いよ・・・物凄く怖いよ・・・・

一度は耐えれたのに・・・もう無理だよ・・・・・・死にたい・・・死にたいよ・・・」

そう泣きながら言い椿は気を失った

「・・・・・・・・・・」影千代は椿を見つめながら無言で涙を流した

未だに過去の戒めから解き放たれない小さな少女を思い出た涙だった

「とら、とりあえず椿ちゃんを・・ヒッ!?」

忍が影千代の肩に手を置いて椿を持ち上げようとした時、影千代の表情を見て忍は身震いし後ろに下がった

殺意と怒りが限界を超えて何かが起こりそなほど冷たい目で無表情ながら修羅のような顔つきになっていたのだ。そして瞳は、虹色に輝いており心境が言葉で語れぬものだと言う事が忍にも理解出来た

「俺今からちょっとイスラエル行って椿に傷を付けた奴の首を本気でもぎ取って来るわ・・それぐらいしなきゃ椿の心から傷は無くならない」

そう言ってフラッと立ち上がった影千代を忍は、止めた

「そんなことしても何にもならないわ!!椿ちゃんが余計に傷つくだけよ前にも言ったでしょう?」

「・・・だってな・・・だって・・・・・椿が・・・・・「とら?」わかったよ・・・今の俺を俺として見てくれるのは悔しいがあんただ

けだからな・・・今回は従うよ・・」

そして、この後、忍が椿と一緒に寝て影千代は寝室で眠らずに壁に背中を凭れさせて夜が明けるのを待っていた

つづく

記憶喪失（解離性健忘!?女であることを忘れた椿!?）（後書き）

いきなりの椿さんの男化・・・すこし卑猥な描写もありましたが椿の心の傷の大きさを表すために仕方なしにやりました。次回、椿の心の傷の謎が明らかに・・・ではまた。

記憶喪失（辛い思い出と幸せな思い出）（前書き）

本日はこれで最後です。記憶を失った椿さん・・男に対するイメージが無理やり人を犯すというイメージで固定されているこの現状・・・さて椿はどうなるのか？

ではどうぞ

記憶喪失（辛い思い出と幸せな思い出）

次の日の朝に影千代が椿の様子を見に行った時・・・椿の姿はそこに無かった

すぐに影千代が忍を起こし起こされた忍が物凄く焦っていた

そして、２人で家を探したが椿の姿を何処にもなく

机の所に書きなぐったような文字と何故か少しぬれている書置きがあった

『俺は女なんなんて嫌だ・・絶対に記憶を取り戻したくない・・でも、取り戻してしまいそうだ・・さっきから頭のなかでぐるぐる回ってる・・・思い出したら俺は、死んでやる』

っと書かれていた

その文章を見た瞬間に影千代と忍の表情がこわばった

そして、書置きがぬれていた理由も２人には理解出来た

椿が泣きながらこの文を書いたのだ

そして椿は、怒りを込めながら書いたのだ

自身が女でありたくないと思うほどの強烈なトラウマという心の傷の痛みと誰に向けていいのかもわからない激しい怒りが椿を変えその変った椿が出て行ってしまったのだ

「とら！！私すぐに警備員に連絡するわあなたも椿ちゃんを捜しに行きなさい」

忍がそう言った瞬間に影千代はコートを着てすぐに外に飛び出した

影千代サイド

俺は、必死に学園都市を走りまわっていた

さぁ昔の話を少しだけ思い出したので言おう

俺が初めて会った時の椿は、昔の事はどうしても思い出したくないと言っていた

そして、昔の事を思い出すと必ずパニックになりその場から動けなくなるのがほとんどだったが

稀に椿は、パニックを起こすと同時に自殺しようとした事が５回ある。

毎回毎回死に方は変わるが俺が止めても現実から逃げるのに必死なため誰の言葉も聞こえずにただ、死のうとする事があった

その時の椿の苦しそうな顔が見たく無くて俺は、椿を幸せにするための条件に椿のトラウマを悪化させないと誓った

しかし、今回の事故で椿の心の安定を守るために決して思いだせないようになっていた思い出が椿の頭の中に戻り椿は、そのショックから女である事を忘れた

そして、今も椿は苦しんでる・・・辛いってSOSを出しているのに俺は救えてない

椿が自身を守るために被害者側ではなく加害者側として記憶を改竄してまで保っていた安定は完全に崩れている。

椿の心に未だに残り続けている事件

まだ俺に会う前の椿は、イギリス聖教から逃げるためにイスラエルへと足を運んでいた時の話だ

椿は、そこの宿に泊まった時の事だ

椿は、其処で出された飲み物や食べ物を食べたとたんに激しい眠気に誘われ気が付けばからだが一切動かなくなっていたらしい

そして、意識がもうろうとしているときに2人の男が入って来て動けない椿から無理やり貞操を奪われたらしい動けずしゃべることもできなのに痛みと苦痛だけは感じていたと

そしてそんな状況が三日三晩続けられたらしい

この時、椿の心は一度死んでその次の夜に薬の効力が無くなった時に椿は、物凄い炎の魔術でその二人を襲い瀕死の重傷を負わせたらしい。そしてその日に警察に保護されたがその事が原因で男嫌いが過剰に攻撃性のある男性恐怖症になった原因らしい

辛いよな・・・本当なら鬱どころか死んだっておかしくないんだ

でも椿にはそんなことを考える時間も無くただ毎日のように命を狙われ続けていた

その時は、苦しんでいる暇も無く心を閉ざしていたので何とか生きてこれた

だが今は？心を閉ざしているわけでもなく悩む時間が無いと言う事も無いのだ

ただただ苦しむだけだ

・・・・・・・・・・・・・・・

そして、俺は必死に走ってずっと探しているといきなりガタイの良い男が俺の進路を阻んできた

「どけよ」

「ふっ・・変わった髪のお譲ちゃん・・人にものを頼むのにどけはないんじゃないの？お譲ちゃん可愛いんだしもっと他に頼み方が・・」

っと俺の体を見定めるようなやらしい目つきをしながら男はそう言ったので俺は、他の道を通ろうと動くと今度は、別の男が通せんぼして来てバックしようとすると今度は、後ろに外国人の剣を持った女とその後ろに２０人くらいの男達が居た

あれ？こんなことしてる時間が無いのにどんどんと・・・

「おいあんた、ずいぶん変わった髪してんじゃん？あれ？もしかし

てそれ地毛？マジかよ・・・お前、あたしらの縄張りに土足で入って来てただで帰れると思ってないでしょうね？」

「思ってるけど？お前の事なんて知らねぇし」

俺が腕を組みながらそう言うと女は、俺に剣の先を向けながら

「あたしの事を知らないだ？あたしは、マチルダ・クルサンス！！学園都市最強のスキルアウトだボケ！！やっちまいな！！ボコッて好きなだけ犯してやりな二度と生意気な口がきけないようにな！！」

マチルダがそう言うと男達は一斉に影千代に向かって下品な笑顔を受けべながら襲いかかっていた

その時俺は、全身の力を抜いて

「くだらねぇ・・・俺は学園都市の牙桜・・・桜小路影虎・・・牙桜のしきたりに従い・・てめぇらを食い殺す！！」

そう言った

・・・

そして、死体のようにおかれている男達の上には、返り血を浴び白い肌が若干に赤く染まり桜色の髪は朱に変わっているところもある影千代が居た

影千代の状態でなぜ２０人以上の男達を倒せたのかと言うと影千代状態では非力なのは影虎が一番理解していてあえて合気道のような他人の力を利用する戦いを選んだのだ

後は、喧嘩で培われた反射神経と勘と技術で一人また一人と撃退しあっという間にマチルダと言う外国人の女一人だけにしたのだ

それを見ていたマチルダが

「・・・どんだけクレイジーなんだよ・・・」

っと驚いていた

「最強のスキルアウトの部下たちはこんなに弱いけどお前は強いのか？何か手があるんなら早くしな。俺は今物凄く機嫌が悪いんだ」

っと影千代が言うとマチルダはすぐに手に持った剣いやサーベルで影千代に突きをしてきた

影千代は、後ろに下がりながら腰を低くしてそれを交わした

「甘い！！」

そう言いマチルダはサーベルを横に振り影千代の首筋を狙った

「そっちこそ甘い！！激甘だ」

そう言い影千代は、前に飛び出しサーベルの刃に髪を切られたがそんなの置かまいなしでマチルダの剣を握っている手を両手で握りマチルダが突きをした時の推進力を利用してマチルダの体を背負い投げしたのだ

投げられたマチルダは、横にあったダストボックスにぶつかり痛みに顔を歪めていた

「ぐ・・・なんだ今のは？」

マチルダが首を振りながらそう聞いた

「お前ってさ絶対どこぞのお嬢様だよね？「なんだと？」動きに気品があり過ぎだし剣の型だってそうだ型に当てはまり過ぎてて動きが読みやす過ぎ」

っと影千代がマチルダを見下しながら嘲笑うようにそういうと

チャキ

「だったらコイツなら型も何にもないわよね？」

っとマチルダは、地面に腰が付きながらも拳銃を抜いて影千代に向けていた

そして引き金を引こうとすると

影千代は、腰に刺していた拳銃を抜きマチルダの拳銃の銃口に自身

の拳銃の銃口をくっつけそのまま発砲した

バァン

と言う音と共にマチルダの拳銃がマチルダの手から離れマチルダは自分の赤くはれ上がった手をもう片方の手で抑えて痛みに顔を歪めていた

そして、影千代は、銃をマチルダに構えていた

「その銃、ショートコイルだから撃てなかっただろ?私の・・・俺の単純なストレートブローバックの銃の勝ちよ♪・・・勝ちだ!!」

っといちいち言葉を訂正しながら話す影千代

「痛い・・・・くそ・・・・・」

マチルダは腕を押さえながら後ず去っていた

「どうしたのかな?最強のスキルアウトさん?フフフハハハハ・・・バイバイ♪」

影千代はそう言って引き金を引いた

拳銃の銃口から飛び出した銃弾はマチルダが密かに握ろうとしていたサーベルの刃に当りサーベルは折れた

そして、武器を奪われたマチルダはもう終わりだと諦めを瞑っていた

「・・・・牙桜の仕事終了・・・・さてと椿の奴を探さなきゃ」

「な？」

影千代はマチルダの事をほったらかして何処かへ行ってしまったのだ

まるで眼中にないかのように去っていったのだ

・・・・

「なんだよ？」

『なぁ影虎？椿の奴さっき見かけたんだけどなんか物凄く様子がおかしくてさ一体何があったんだ？』

「何処に居た！？そして今どこに居るんだ！？」

俺はすぐに立ち上がり聞いた

『え？いや、第一学区のほらこの間お前がモデルの女と喧嘩した無人ビルに入って行ったけど？』

「今すぐに椿を引きとめておいてくれ！！俺も今からすぐに行くから」

そう言って俺は機体を折りたたんでポケットに入れその場所に走った。

・・・

お互いに掌から物凄い炎を出してぶつかっていたのだ

椿は立っていて一真は、尻もちをつきながら物凄い炎を出していた

炎とは一言で言えても全く違う性質の炎同士がお互いのを燃やしつくそうと食い合っていたのだ

一真と椿が本気で争っている光景を見て俺の脳髄の奥がいきなり痛み出した

そいて、何としてでもとめなければいけないと言う感情と『敗北の王（ビクターパラドックス）』のひとつが脳髄に蘇った気がした。

そして俺は、とにかく二人の戦いを止めようと特技を使う事にした

先ほど手に入れた影千代の状態だからこそ使える能力・・・学園都市で言えば測定不能になるであろうスキル

『特別待遇（フリーパス）』を発揮した。

その瞬間に影千代モードの俺の右背中から金色の大きな翼が生えてきた

「っぐ・・・・」

俺はその時の激痛で失神しそうになったが何とか意識を保ち右手を椿と一真の出している炎に向け

「堕ちろ！！」

そう言い俺は右手を下におろすと一真と椿の出していた圧倒的に強

力な炎は屈折し地面に落ちて爆発し一真と椿をふっとばして2人をフェンスに叩きつけていた

「うぐ・・・」

俺は急にきた心臓への痛みで胸の脂肪ごと胸を握りしめ苦しみを耐えていた

そして、俺の背中から生えている方翼の金色の翼の羽が3枚ほど抜け落ち消えた

その光景を見ていた一真は、驚いていて

椿はと言うとすぐに立ち上がって

「何しに来たんだよ影千代・・・お前まで・・お前まで俺に苦しめって言うのかよ!!」

っとよくわからない事を言っていたがまぁ最終的にそうなるだろう

俺は椿に思い出してほしい辛い記憶を・・・そして・・・・・・・・・

「椿、お前ももうわかってるだろ?お前は間違いなく女だよ。口が悪くて乱暴で自分勝手な所もあるけど誰よりも傷つきやすくてキチンと優しいところもあるし可愛いものが実は大好きで俺に見つからないようにこっそりと貯め込んでて男の服しか着ないのにクローゼットにはきちんと女の子向けの服が置いてあって素直になれないだけで十分に女の子らしい俺の好きな女だぜ?」

俺がそう言うと椿は、頭を押さえながら首を激しく横に振り

「うるさいうるさい！！俺は、女なんかに戻らない！！思い出すなんて嫌だ！！！影千代なんか死んでしまえ！！！」

っと俺に目掛けて本気で火炎放射してくる椿

俺は、椿の炎に手を伸ばしてしっかりと見てから再び手を下し

「堕ちろ！！」

っと良い炎は再び地面に落ちて消えた。また俺の心臓は、痛みを発し翼の羽が3枚堕ちて消えた

この俺の黄金の翼の正体は、影千代状態での俺の寿命・・・一枚につき5年の割合で消費されていく

残りの羽の数は6枚・・・ひしぎな現象を起こせるのはあと2回が限界・・それに二回目起こせば俺の寿命はほとんど尽き影千代の状態のままなら死ぬ・・・だから実際に使えるのは一回・・・

俺がそう考え散ると椿はどうやら魔力の生成に限界が生じたようで手から炎が出る事はなかった

どうやら一真が椿を消費させてくれたみたいだな・・・助かる・・こっちとしては、さっきから影千代の姿に心まで変化させられ始めて来たからな・・・ほんとうに時間が無い

俺がそう思い疲れたうなだれている椿に俺は胸の痛みを抑えながら手を差し伸べようとすると

ザシュ

「な？・・・え・・・・ゴフ」

「はぁ・・・はぁ・・・・俺は消えたくない・・・・元に戻ったらおれは死んじまう・・・消えちゃう・・・・絶対に嫌だ・・・辛い事を思い出して消えたくない！！」

椿は、何処からか取り出したナイフで俺の腹部を刺していた

俺は徐々に来る痛みと内臓を刺されたために吐血した

予想外だった・・・椿がここまで嫌がるほど記憶を取り戻したくないっと言う事が・・・・

俺は、刺された傷を押さえながらフラフラする足で何とか立ち続けた

俺の服はもう俺の血で赤く染まっていてぽたぽたと血が流れていた

「影虎！！？大丈夫か？今すぐ救急車呼ぶから」

っと一真が血相を変えて走ってきておれの傷を見るなり携帯で救急車を呼ぼうとしていた

だが俺はそれを止めた

そして俺は一真の携帯を取り上げて一真に絶対に取られないように胸の間に挟んでおいた

女の姿は嫌だがこういう時は便利だ

「おい、お前死んじまうぞ!?俺の携帯還せよ」

っと一真が焦っていたがどうやらどうする事も出来ないようだ

「今、俺たち以外に誰かを呼んだりしたら椿の奴本気で自殺しちまうよ・・・ん?椿やめろ」

俺が一真に話していると椿が俺の事を見て目を見開いて泣きながらナイフを自分の腹部に構え出した

・・・

なんで邪魔するんだ?俺はもう幸せなのにわざわざ思い出して辛い思いをしろと影虎が言っているようにしか聞こえなった

そして、影千代に牙をむいたが疲れで魔術を使えなくなった

それを見て影千代が俺に迫ってきた

(なんで俺がこんな思いしなきゃならないんだ?もし思い出したりしたら俺は消えちまうんじゃないのか?)

そう考えると俺の恐怖は殺意に変わった

そして俺はナイフで影千代を刺した

しかし、その後は後悔で一杯であった

俺の事を好きだと言ってくれて俺のために手を差し伸べてくれた奴を俺は刺してしまったのだ

もうどうしていいのかわからなかったただ、逃げたくてもう迷うことなく死のう

そう思い俺はナイフを自分の腹部に向けて突き刺そうと手を上げ振り下ろした

その時だ

俺の頭と心から

(だめぇえええええええええええええええええええええ

えええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！）

っと女の俺の声が聞こえたのだ必死で泣きながら俺の事を停止させた

腕が動かなくなった

なんで？なんで・・・・・なんで俺が邪魔するんだよ！！！

（妊娠してる？俺が・・・・・本当に？）

その時、少しだけ最近の記憶を取り戻した

そして、それより少し後の記憶が戻った

（俺の・・・私のお腹の中に本当に命が二つもあるんですね・・・信じられない・・・俺が・・・私見たいなのが・・母親にお母さんなれるんだって・・・・・でも、影虎はどういう反応するのかな・・・）

その時の俺は本当にうれしそうに泣いていた

そして、俺の頭の中で昨日までの俺は俺に

（お腹の子たちに酷こととしないで私の本当の幸せを思い出して？私の体はもう私だけの物じゃないんだよ？私の夢を思いだして？辛い記憶だけじゃ無かったよ私の人生・・・本当の幸せは辛い記憶の後にあったでしょ？ね、思いだそう。乗り越えよう？この子たちのためにも・・生きようよ？）

っと泣きながら訴えかけられた

俺の別の人格ではなく俺自身女であることを忘れる前の椿と言う人格・・・つまり昨日までの俺に・・・

（ハハ・・・そうだった俺は、母親になるんだった・・・それが昔からの夢だった・・・ふ・・・だったら思いださなきゃな・・・本当の俺に戻らなきゃな）

その瞬間に俺はナイフを捨てた

それを見ていた影千代は、俺を止めようとしていたのかそのまま飛びついてきて俺を突き倒し

そして、

パチンっと俺の頬を涙を流して歯を噛み締めながらぶって来た

そして、「ふざけんな!!椿・・・今回と言う今回はゆるさない!!自分から命を立とうとするなんて・・・」

っと本気で泣きながら泣いている影千代を見て俺は影千代にいや影虎の頬を優しく撫でながら

「ごめんな・・・もう元に戻るから・・思い出すよ・・・お前に会えた記憶を・・・いつもの自分をさ・・・」

そう言って俺は、必死に思い出そうと頑張った

でも、辛い記憶がよみがえって着た瞬間にすぐにい逃げたくなって

しまった

「いや・・いやぁあああああああ」

俺が恐怖に耐えられず声を上げていると影千代が

「お前だ気に苦しめなんて言わない・・・俺も一緒に苦しんでやるから・・・一緒に幸せになろうぜ？」

影千代が俺の事を抱きしめてきてそう言うと影千代の右肩から生えている金色の翼が俺と影千代を優しく包み込んだ

俺は影虎の胸のあたりの服を握りしめて目を閉じた

いつもの影虎の優しい匂いだった

でも今は影千代の状態で眼根に顔をウずくめていた俺からは、一瞬だけ影千代が俺の見た事のない俺の母親にかぶって見えた

そして、俺はその後すぐに意識を失った。記憶をすべて取り戻したが俺の心が壊れる事はない。影虎がそばに居てくれてなぜか俺の心に入ってきておれの事を励まし守り一緒に悲しんでくれた・・だからもう俺には、元に戻るのが怖いことなんてなかった

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

次の日、病院のベッドで目を覚ました俺は『私』になっていた

まだ、男は怖いけどもう私は、女として生きて行くことに決めた。

もう強がらなくても良い偽らなくても影虎が守ってくれると信じたから・・

そして、隣を見ると影千代が隣のベッドに腰から胸に包帯をグルグル巻いて肘を枕にしながら俺の方を笑いながら見て

「おかえり椿」

っと言ってくれた。自分を刺した人物に笑顔でだ・・・正直、もう少しか怒ってくれても良いと思う正直罪悪感で一杯になる

でも、其処を絶対に怒らないのが影虎なんだ

「うん♪ただいま『影虎』♪」

私がそう言って笑顔で言うと影千代は顔赤くして

「ど、どうしたんだよ椿、なんかいつもと違う気が・・・」

っと影千代が悩んでいたが私はフフフとわらいながらその光景を見て楽しんでいた

「あれ?椿ちゃん眼が覚めたの?」

っと忍さんが私に寄って来て影千代に見えないように私に

「表情から察するにもう記憶は戻ったみたいね・・・それになんだか表情が柔らかく優しくなってるわよ・・・もうすっかり女の子ね・・・」

っと笑顔で私に言うと今度は私の耳元で物凄い笑顔で小さな声で

「あなたが眠っている間に検査させてもらったんだけどねお腹の子たちは大丈夫よ♪問題ないから♪そして、お知らせよ・・・双子ちゃんはね女の子だって」

っと言っていて私は驚いて声をあげそうになった

「え?女の子の双子?「そうよ」喜んで良い?「良いけど女の子を産むんならまず椿ちゃんは、言葉づかいと服装をどうにかした方が良いわよ?」う・・・頑張って直します。」

私が忍さんにそう言うと忍さんはガンバっと言って顔を私から離したすると忍さんの後ろでは、影千代が頭の上に?を浮かべながら座っていた

「でね、此処から話し戻すけど椿ちゃんが影千代ちゃんを刺したせいで影千代ちゃん全治1週間ね・・・でね、昨日の椿ちゃんは椿ちゃんでないのはわかってるんだけどあの悪口の連続は椿ちゃんの心からのものだと私は思うのよ」

っと忍さんは私にもの凄い悪な笑顔で私にそう言って来て

「何はじめんだ変態?」

っと影千代がそう忍さん言うが忍さんはすでに人間を超えている

「やっぱりね無地方面じゃ駄目だと思うの♪だからえい♪」

忍さんが何かのスイッチを押した瞬間に病室にスクリーンが降りてきて部屋の電気が消えて

いきなり何かの映像が始まりだした

そして、『記憶喪失の少女と男勝りな美女、禁断の愛。夜這い編』

と書かれて居ていきなり画面におととといの自分が映っていて私はすぐに赤面して忍さんの持っているチャンネルを取り上げようとしたが避けられ

そして画面では眼の下を涙で赤くしながら唇をかみしめておととといの私がベッドの上の影千代に近寄り影千代の両手をガーゼでくくりそれをベッドの上の金具にくくりつけていた!?そして影千代のお腹の上に馬乗りになって・・・

「おれは・・・女じゃない・・・女なんなんて嫌だ・・・・・・俺は女なんかじゃない!!それにお前が悪いんだ・・そんな格好でいるお前が・・・」

そう大声で言うとすぐに寝ている影千代にキスした

それを見た私は、恥ずかしさのあまり泣きそうになった

そして影千代に助けを求めてみたが影千代自身私のせいで怪我をしていて動けず

「まぁ俺もこの時はものすごく嫌な気持ちでさらには殴られたからな・・・よ~く反省してろよ♪」

っと物凄く邪悪な笑顔で私に微笑んでいた

本気で怒ってる?もしかして思い出し怒り?

そして、この日の夜、さんざん影千代と忍さんにいじられ枕を涙でぬれしていた

まぁこの程度で許してくれる2人は、はたから見れば異常だろう

私は泣きやんで仰向けに寝ていると影千代がカーテン越しに

「なぁ椿「ん?」俺ってお前からしたらお前の心に傷を付けた奴らと変わらない?」

影千代が小さな声でそう聞いてきておれは驚いた

そんなこと考えた事も無い。むしろ頼りになって信頼できて私には無くてはならない存在だ

「全然違う。むしろ影虎はアイツらと対極に居るよ」

私がそう言うと影千代はカーテン越しから

「ちょっとイラッときた」

そう言って影虎は、チャンネルをいじるとまたスクリーンが降りてきて先ほど私がいじられた私の黒歴史を再生しだした

私は、もう赤面の連続で枕を頭からかぶり敷布団に顔得おうずくめながら

（やっぱり私は影千代嫌いだ~）

っと恥ずかしがりながら眠った

そして、次の日、私と影千代は退院した。影千代も影虎に戻ればすぐに回復するからとＯＫが忍さんから出た

そして、病院を出ようかと思った時忍さんに呼び止められ

「なんですか?私速くいかないと影虎に」

私がそう言うと忍さんは私の肩に手を置きながら

「昨日の今日ですっかり女の子らしくなっちゃたわね♪それと本当に本題だけど・・・いい加減とらには言いなさい?あの子もまだお共だけどもう一人の立派の男よ?きちんと責任は取らせなさい。・・・でも、とらがお父さんで椿ちゃんがお母さんか~時間が流れるのは早いわね・・・じゃ行きなさい」

そう言って忍さんは私の背中を押した

そうだ私はキチンと影虎に言わなきゃいけないんだ

妊娠している事、それが私と影虎の子である事、双子だと言う事、私はもう産む決心が付いている事、全てを影虎に話さなきゃいけないんだ

つづく

記憶喪失（辛い思い出と幸せな思い出）（後書き）

能力名『特別待遇（フリーパス）』

影千代の時だけの能力

黄金の羽根を右背中から出し一枚寿命5年の羽を消費してあらゆる奇跡を起こす力

以上

遂に記憶が戻り辛い記憶を乗り越えた椿さん・・・椿さんの心境に激しい変化が起こりました。男ではなく女の子として生きようと決めました。

・・・・え？なんで、妊娠なんて急にそんな話にって？第四話の喧嘩勃発のシーンをご覧ください。後、お腹をかばったり色々ふ点はありますよ？つわりで吐いたりとかね？

後、今回登場したマチルダさんは、とある未来の学末戦争で活躍中のマチルダ公爵の若かりし頃の姿です。小説家さんからの出場依頼があったので実現しました。

自分のキャラも出してほしいと言う方が居ればご相談ください。

ではまた

感想ください！！出来ればください！！

恋愛成就（天野と一真）（前書き）

今回の話はおめでたいお話です。

ついに・・・・・・・・です。

では、どうぞ

椿の記憶が戻ってから数日、椿さんが急に遊びに行きたいと言うので俺は連れて行くことにした

さすがに病み上がりなので遊園地などよりも買い物とかの方が良いと思い

ショッピングに連れて行くことにした

始めは俺の服とかを椿さんが選んでいた

「う~ん、ムカつくくらい良い体形してるからどんな服でも会うんだよな~」

っと服を二着位俺に着せてくる椿さん

「あのさ、俺って基本服は制服とこのコートだけで良いぞ？」

俺がそう言うと椿は頬を膨らませながら俺を見上げて

「私の選んだ服じゃいや？」

っと言ってきた

「いえ、むしろ感謝です！！」

俺はそう言って椿にしたがった

椿自身は、自分の服を見たかったのか少しうずうずしていたので

俺が行こうか？というと椿はいいと言って断ってきた

そして、その次に椿に連れて行かれたのは、ペットショップだった

俺は入るなりすぐに犬や猫などを愛でに行った

俺は動物が大好きなのだ。あり得ないくらい好きなのだ。椿の次に好きでその次にカップラーメンその次に人間的な順番だ

俺が犬猫を抱きかかえてよろこんでいると椿が急にすねた表情をして何処かへ行った

そして、しばらくするとベトンと俺の両肩に何かが乗った

ひんやりと冷たく湿っていてニュルニュルしていてその物体は俺に巻きついてきた

そして、そのぶったの先端からはニュルニュルと舌を出して俺の頬を仲間のようになめてくる・・・そう蛇である・・・しかも物凄く大きな

隣を見ると椿さんがカメラを構えていた

そして、パシャとたられた写真には、大きな蛇が俺に巻きついていて顔を真っ青にして顔から物凄い汗をかいている引きつった表情の俺が写っていた

そして、１０分間ぐらは蛇から離れても青い顔とひ冷汗だけは引か

なかった

その後にファミレスに行って腹いっぱい食べたが隣で椿があまり食べていなかったのを見て少し心配になって聞くと

「・・・・ボソボソ」

椿が食べながら何かぼそぼそ言っているので俺がもう一度聞くと

「・・最近体重増えてきたから・・・」

っと俯きながらそう言っていたが

「馬鹿椿、お前はただでさえ小さいんだから喰わなきゃダメだろ？」

「うるさい、お前と違って私には色々あるんだよ」

俺がそう言うと椿は少し怒りながらもジュースを飲んでいた

そして、その後は、今日の晩飯やらスイーツなどを食べに行ったりした

すると途中から雨が降り出したので椿にいつも通り防弾防水防炎防刃防電仕様のコートをかしてやって俺は雨に撃たれていた

そして、椿さんと色々、世間話しをしながら帰路を歩いていると

天野が逃げるようにいきなり降りだした雨の中走っている。見た感じ周り気見えておらず俺や椿の前を通り過ぎて行った

雨とは違う別の滴が頬に堕ちていたように見えた

「キャッ!?」

少し遠くで何もない場所で天野は足が縺れて転んだ…。
そして、天野はゆっくりと立ち上がって雨が降る空を見る…。
そして、天野はずぶ濡れになりながらも足を進める…。

その様子を見て俺と椿は顔を見合って

「さっきのって葵だよな?」

「多分そうだろ?てか一真は?」

すると、黒い車が天野の目の前で止まった…。
何だろう?でも、関係無いよな、そう思って椿と帰ろうとすると

「キャッ!?何ッ!?放して!!んん!?」

突然黒い車から男が出てきて天野が取り抑えられた

「影虎命令だ!!葵を助けろ!!」

久々に椿さんから命令が下った

俺は命令を聞くと椿の頭にポンと手を置きながら

「極めて了解!!」

そう言いながら俺は、フルスピードで走った

そして、天野の目の前まで走り男どもを蹴り飛ばした

「ハイ♪ドーン♪」

「「「ウワァァア!?」」」

そして、車がこちらに向かって走り出してきた。

「吹き飛べ♪」

俺は向かってきた車を『異世界樹(ユグドラシル)』の翼で受け止め吹き飛ばした

「大丈夫か?天野?」

俺が振り返って天野にそう言うと天野はなぜか泣き出した

「えッ?泣かないで!?もし人が通ったら俺がしたみたいになるから泣かない、グハッ!?」

俺は椿に怒られると思い焦ったが時すでに遅し俺の顔面に火球が当たった

「テメェ!?葵を泣かせるんじゃねぇ!?「何も…してません…。」

大丈夫か?葵?」

俺が無罪を主張すると

天野は椿に抱き寄せられていた。

「椿…。」

天野も椿に抱きついて泣いていた…。

「これは、相当な訳ありだな。」

俺がそう言うと椿も同感と言う表情で

「だな…。
とりあえずここじゃずぶ濡れになるだけだし、家に帰って訳を聞くぞ。
異論は無いよな、影虎。」

「ありませ～ん。」

俺はそう言いながら家に向かう途中、天野を狙っている他の連中に睨みを聞かせ警告した

『手を出せば殺す』っとわかりやすく

……

……

……

「ごめんね、お風呂だけじゃなくて衣類まで借りちゃって…。」

椿と俺は天野に風呂を借して、椿の服を借していた…。

「良いんだよ別に。
で葵、何があったんだよ…。」

「・・・」

あまり話したくないのかな?

俺がそう考えていると天野は口を開き

「私ね、一真にフラれちゃった…♪」

「「・・・はぁ?」」

椿と俺は驚いた

「あの~葵、悪いが一から教えてくれ…。」

椿が頭をポリポリと掻きながら聞いてきたので、天野は詳しく話した…。

……

……

……

俺は天野の話を聞いて若干の責任を感じたがそれ以上に一真が許せなった

あいつは、天野を拒絶しやがった突き放しやがった・・・自分が怖いから・・・

裏に入れば天野がヤバいとは言った・・・だがそれは逃げろって意味じゃない・・・守り抜けって意味だ

アイツは逃げる事を守る事と正当化しただけだ!!腰ぬけが!!!

俺は、怒りにかられ家を窓から飛び出した

……
……
……

一真の家の前まで俺は飛ぶと一真の家の窓に思いっきり拳銃の球を投げてガラスを割った

すると、ベッドで寝ていた一真が起き上がり俺を見ていたので俺は一真に

「降りてこい…一真…。
テメェの根性の腐り食い殺してやる！！」

そう呼んだ

そして、下に降りるなり明らかには気のない一真を俺は睨んでいた。

「よう、一真…。
天野から全部聞かせてもらったよ…。」

「・・・」

先に口を開いたのは俺だった…。
そして、俺は話を続ける。
言いたいことが山ほどあるんだ

「まさかと思うが、お前が天野にあんな事を言ったのは裏に狙われるから、とかそんな理由じゃねぇよな？」

俺は口調を荒くする。

「いや、俺はアイツといるのが疲れただけだ…。」

両手をポケットに入れて一真は俺の言葉を否定した。

くだらねぇ馬鹿が！！

「左手を擦る癖の次はポケットに入れる癖か？」

「なッ！？」

図星のように一真は驚いていた。本当に下らねぇことばっかりは思いつきやがって・・・

「そんなんじゃねぇ…。」

「なら剣菱　麻華に頼んで絶対正直（ノンライアー）を掛けられたとしても、嘘じゃないと言えるか？」

「・・・」

俺が全力で怒りを抑えながらそう言うと一真は下唇を噛んで黙った…。

「なぁ、一真…。
お前はそこまで弱い人間だったのか？
お前は天野から…天野　葵と言う女から逃げるのか！？」

「・・・」

これだけ言って何も言おうとしない一真に俺は、怒りの鎖が外れ思いっきり腕を上げ

「歯を食い縛りやがれ!!」

「――――!!」

一真の右頬を殴った

一真は吹っ飛び地面に倒れた・・・この意気地なしが!!

「立てよ…。
昔のお前ならトコトン立ち上がっては立ち向かって来た筈だ…。
立てよ!!一真!!」

俺は何故か立ち上がろうとはしなかった一真にさらに怒りがアップしていた…。

「この野郎!?そこまで腑抜けになったのかよ!?
お前はどれだけ逃げれば気が済むんだ!?
えッ!?」

俺は異世界樹(ユグドラシル)で一真の両腕を拘束し無理矢理たたした…。
しかし、一真は死んだような目で黙る…。

「チッ…もういい…。」

俺は『異世界樹(ユグドラシル)』を消した。すると一真はドサリと地面に落ちた…。

「最後に聞いてやる…。
一真…、お前にとって天野はどういう存在なんだ?」
俺は一真の顔を覗き込むように聞いた

俺には分からねぇ好きな奴を突き放してでも守りたい奴の気持ちなんてただ逃げてるだけじゃねぇか・・・そんな方法で守られてうれしい奴が居るわけねぇだろ・・・きずけよ・・
それともお前は天野の事を本気で好きじゃねぇのか?
「分からねぇよ…。」

一真は急に泣き出し俺に・・・

「正直…自分でも分からねぇよ…。
葵を裏の奴らから守る為に決心して、嫌われようとしたのに…遠くにしてみると…胸が苦しくて…息が詰まりそうで…。
こんな事前までは無かったのに…。
何なんだよ…?何なんだよこの気持ちは…?
さっぱり分からねぇんだよ!?」

一真は泣きながらいろんな気持ちを俺にぶつけてきた

なんだよ・・・やっぱり…お前だって・・天野がきちんと好きなんじゃねぇかよ・・・俺が椿を好きだって気持ちと同じじゃねぇかよ

「一真…お前…もう気づいているんじゃないのか?
その気持ちが何なのかを?」

俺がそう言うと一真は少し悔しそうな顔をしていた

「お前のその気持ちは…。」

俺が一真の代わりに代弁すると一真は子供のように耳をふさいだ
だが、お前は気付かなければいけない・・・自分の気持ちに・・
「恋…だよ…。一真…お前は自分からも逃げるのか?自分の気持ちからも…。」
「・・・」
黙る一真・・
「もう、そろそろ自分と向き合え。
そして、本当に天野を守ってやりたいならずっと一緒にいてやれ…。
あいつは今でもお前の事を待っているから…。」
俺はそう言って一真に手を差し出す。
「俺は葵を守れない…。
俺じゃ…無理なんだよ…。」
一真は俯いて俺の手を取ろうとはしなかった…。
地震が弱いとでも思ってるんだろうな
「お前だけで無理なら頼れ。」
俺は真っ直ぐにそう言った。
「お前は無力かも知れないが一人じゃない。

お前は頼る奴がいる。
忍でも、当麻でも、俺でもいい。
もし、一人で無理ならトコトン頼れば良いじゃねえか。
自分の弱さを認めてから人間は本当に強くなれるんだから…。
だから…向かえに行ってやれよ。」

俺はニッと笑って言った。
俺だって万能じゃない・・・弱点だってある

それに俺は他人の力を使う事が何よりも得意ってことは誰かに頼るのが得意なんだよな・・・一真も頼って良いと思うんだよ

「なら…これからもよろしく頼むぜ…。
影虎…。」

「おうよ♪」

ガッチリと手を握って言うと、俺は何時もの笑顔でそう言った…。

「一真…。」

「ん？」

突然誰かに声を掛けられてそちらを見てみた。
すると、そこには…。

「――ッ！？」

傘を刺した椿の隣に天野が不安そうに立っていた…。

「あの話って本当なの？
私を守る為だって…？」

天野がそう言うとを一真は俺を見るのでしてやったりと言わんばかりに笑っていた。

此処からは一真と天野の話だ

・・・

「な、なにッ！？」

「お前が良ければだけど…その…付き合ってくれないか？」

そして、一真は単純に告白した…。

「――――えッ？」

突然、天野が一真の胸の中に飛び込んでいた。

「良いに決まってるじゃん♪一真♪」

天野が少し泣いた様な声で言っていた。

「「おめでとうございます！！」」

後ろで俺と椿はイェーイ！！と言いながらハイタッチをしていた。

「いやぁ～、やっと繋がったか…。
ここまで来るのは相当苦労した…。」

「全く…。
この鈍一真が。
鈍すぎなんだよ。
葵の気持ちに気づくの遅すぎだ。」

俺と椿はお互いようやく奥歯に詰まったゴミがとれた様なすがすがしい気分になり本気で喜んでやった

「えッ！？」

一真は天野の肩を持って遠ざけて、天野はキョトンとしていた。

「お前、俺の事好きだったの？」

「う、うん…。」

「いつから？」

「え、え～と…初めて私の家を掃除してきた時に真剣に好きになったから」

「・・・お前…約五ヶ月間も俺の事好きだったの？」

「そ、そうだよ…。
椿や影虎君に相談なんかいっぱいしすぎて忘れちゃったよ♪」

「・・・ごめん…。」

「何で謝るの！？」

「だって、俺ってお前の気持ちも考えずにずっと傷つけてたんだな…って思ってさ…。」

「・・・もう…本当だよね…。
全く…一真は…。」

「――――ッ！？」

色々一真と天野が話してると天野がいきなり一真の唇を奪った

「「おぉお♪」」

いきなりの事に俺と椿は歓声をあげていた。

「これで、許してあげる♪」

と天野は小悪魔のようにイタズラに笑っていた。

「これからも、よろしくね♪」

「・・・こちらこそ…。」

そして、雨だった筈の空が晴れて、綺麗な満月が浮かんでいた。

この後俺と椿は家に帰って俺らが付きあった時の話などをずっとしていた。

つづく

恋愛成就（天野と一真）（後書き）

やーおめでとう一真と天野♪

影虎君、物凄く怒ってました。

それにしてもおめでとうございます。

ではまた

花の楽園（イジメと牙桜）（前書き）

今回はちょっとしたお話です。

ではどうぞ

花の楽園（イジメと牙桜）

椿の記憶喪失が無事に解決して数日が立った

ひとつだけ可笑しなことがあった

椿の奴が激しく変わったのだ

今までは寝間着には正直言って過激すぎるほどラフな服装でいたのにきちんとパジャマにきちんと着替えていて

朝起きてみると椿奴は、いつもの帽子やジーパンやらの男装ではなくおしゃれなワンピースにピンク色のダウンコートを着ている状態だった

物凄く女の子らしい！！そして、可愛い！！

俺は、鏡を見て姿をチェックしている椿を眺めていると

椿が俺に気づいて振り返って来た時は、椿の顔が良く見たがかなり分かりにくいくらい薄化粧がしてあり唇が光を反射していてただでさえ白い肌は、光を反射していて

物凄く綺麗だった

俺は赤面しながら手を前に伸ばして拳を作り親指を立てて

「惚れたぜ♪」

っとなぜか口走ってしまい変な空気が流れたが椿は俺を見て上品に笑い

「フフ惚れたか♪まぁお前にそう言って貰えるんならオシャレしてる意味もあるな」

っと上機嫌で鏡に向かいだした

「あのさ・・・どうして急におしゃれしようとか思ったんだ?」

俺が少し心配になって聞くと

「私は女だからね、お洒落ぐらいしたくなったって良いでしょ?」

っと椿さんが真面目な瞳で俺に言ってくるのだ

「・・・無理はしてないんだな?嫌じゃないんだな?」

俺が、確認を取ると椿さんは

「嫌じゃないよ?記憶を取り戻した時に決めたんだ・・・もう、自分を犠牲にしないってだから私はやりたい事をやりたかった事をやっているだけだよ・・・あれ?なんで影虎泣いてるの!?」

「・・・へッ・・・ようやく素直になりやがったか・・嬉しいんだよ。」

俺は涙をぬぐいながらそう言った

そして、この日は、椿さんは、仕事があるらしく仕事に出かけ俺は

いつも通り学校に行った

・・・

クラスの皆は、ざわざわと教室から脱出し

一真は、天野と水季と一緒に必死に説得していたが彼女は聞く耳を持たなかった

と言うよりも聞く耳を持っていないんじゃないのか？

明らかに彼女は、誰の言葉に同様すらない

そして、彼女が自分の腕にナイフを本気で刺そうとしたので

俺は、走ってその手を止めた

その瞬間に彼女は、驚いていてクラスの全員も驚いていたが無視して俺は、口を動かしながら

彼女の目の前で手を動かし

『自殺なんてするべきじゃないぞ？』

っと手話で言った

すると顔所は手を動かして俺に返してきた

『あなた、手話できるの？』

っと

『まぁほぼ完ぺきに出来るよ』

『・・私はもう嫌なの!!耳が聞こえない私に友達なんてできない!!小学校の時も中学の時も高校だって耳が聞こえないってだけで虐めてくる・・・もう苦しいのよ!!』

っと感情を込めた手話で俺に八つ当たりするように言ってきたので俺は記憶消去を使って情報を引き出し現状を理解した

彼女は耳が聞こえない事を何故かクラスの連中は知らないんだ

だからクラスの皆は、彼女が無視して来てると思って自然に仲間はずれにして虐めてたんだろうな・・・

コミュニケーションが取れないってことはま麻ぁそう言う事だからな

『クラスの皆は君の耳の事知らないだけだ』

っとれ俺は伝えると

『知らないって一度先生が伝えてくれてる。それを忘れるってことは私の事なんかどうでもいいってことじゃない!!もういい!!』

そう言って彼女がまたカッターを掴もうとしたので俺はそれを取り上げて

『耳が聞こえねぇのはお前だけじゃねぇんだよ!!俺だって偶に耳が聞こえなくなるし眼も見えなくなる。自分だけが被害者ずらするな。お前だって自分から伝えようとしたのか?してないよな?誰かが勝手に手を差し伸べてくれると思ってるのか?そんなわけないだろ?』

俺が必死に説得していると一真が

「お前それって手話?もしかしてそいつ、耳が聞こえないのか?」

っと聞いていた

クラスの奴の事くらい覚えてろよ!!気分悪りぃな・・

「そうだ、なのにお前の後ろで野次馬に扮している女子どもが陰湿ないじめを繰り返してたんだよ。今日はそいつらこいつが大切に育ててた花壇を荒らしてその写真を見せて笑ってたんだよ。普段お淑やかな子でも毎日のいじめに加え大切にしていたものを壊されたんだキレるぜ?なぁ句須磨　涼、竹千　七海、林道　百々、夕八女　佳奈美。」

「「「「ッ!?」」」」

俺が虐めていた不良グループを名指しで呼ぶと全員が驚いていて

「なんの証拠があるのよ!?」

っと一人の女子が言うが俺はあえて

「第一、お前らの靴にはおそらく花壇の土が大量に付着しており草木も付着しているはずだしお前らが踏んでいる土はこの・・風葉風(かざはふ)花(うか)の花壇には、結構特殊な肥料やらを使われて居て調べればすぐわかんだぜ?」

っと俺は、女子どもを睨みつけながら奴らの前に立って見下ろすように腰を曲げて両手をポケットに入れながらそう言った

すると女子どもはハトが豆鉄砲を食らったかのような顔をして去って行った

学園都市では能力者と無能力者との間で差別のようなものがありレベルの低いものはレベルの高いものにれっとうかんを抱きそれは、さらにレベルが低いものへと振るわれる場合が多いそして、自分よりも下の者が居ない物はそのストレスを障害者やハンデを負った物にぶつける・・・このいじめがそれと同じだ

『一応きつく言っといたからもう来ないとは思うよ？・あの顔傑作だっただろう♪・・・とりあえず花壇直しに行こうか？半年もがんばったんだもんなあきらめるのは苦しいよな』

俺がそう言うと風葉風花（かざはふうか）は、俺の言った言葉を理解したのか泣きやんで

『ありがとう』

っと言ってきた

俺はすぐに風花と教室を出た

その時周りの奴らは、何故か俺に拍手していたがお前らも同罪なんだぜ？と思いながら向かった

華音の奴はやっと静かになったと喜んでいた。

その後すぐに花壇に行き俺は折れた花などを『異世界樹（ユグドラシル）』で直した

それを見ていた風花は、驚いていたが俺は直すだけ直した

ついでに俺も驚いた彼女が土に触れるだけで草木が生えてきて新しい芽が出たのだ

俺が命を助ける能力なら風花の能力は命を育む力か・・・優しい能力だよ・・屑な能力者より全然良い奴だな

『自暴自棄になるな、自分を傷つけるなよ、お前と友達になりたがってたやつもクラスに居るんだぜ』

っと頭を撫でながら伝えてやると驚いていた

でも、そんな人いないって首を振っていたので

『居るんだよ。ん？先生来たな』

俺が指さすと風花のクラスの担任がすぐに駆けつけてきた

そして、物凄く謝っていた。土下座までしていた・・

心から謝っているようだったので俺は特に文句は言わなかった

そして、俺は風花に向き合って

『二度と手首なんて切るな・・・もしまた辛い事があれば誰かに頼れ、迷うことなく誰かに相談しろ・・もしどうにもならない事なら俺に頼め。助けてやる俺の名は『牙桜』・・学園都市で最も頼りになる男だ♪』

そう先生方にわからぬように手話で言って俺は教室に帰った

すると土御門と青髪に三つ編み巨乳メガネっ子とフラグを立てたと何故かいちゃもんを付けられ殴り合いに発展し当麻君を巻き込んでの大乱戦になったが吹寄に頭突きを喰らい終幕した

・・・・・・・

それから数日後に風花のやつは、テレパシーの能力の子と友達になり楽しく学校に通っているらしい。

・・・・・・・・・・麻ぁそれはかなり後の話

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

そして、頭を押さえながら家に帰ると椿が帰っていて俺は当たり前のようにリビングに入って椿が居なかったので椿の部屋に入ると

「え？」

椿さんが鏡に向かいあいながら上下女ものの下着を付けていた

「ん？影虎お帰り・・・やっぱりこれは付け憎いな」

っとすぐに俺から視線を外して鏡を見て下着を付け直している椿を見て俺は、固まっていた

あまりにも新鮮なのだ

今日の朝から妙に女の子らしい椿に正直ほれなおしているのである

そして、１０秒間くらい硬直しているといきなり後ろから忍に耳を

引っ張られた

「いててていて」

「こら！！椿ちゃんが恥ずかしがってるでしょ？女の子の着替えを覗いてそのままそこでのぞき続けるんじゃないわよ」

っと言って耳を引っ張られていたが恥ずかしがってた？どこが？

と思って忍に聞くと

「さっきから椿ちゃん一度も動かないでしょうが」

っと言われよ～く考えてみた確かに鏡に向き合ってからほとんど動いていないし息もほとんどしていない

「椿ちゃん自分が女の子っぽくしてるのあなたに見られて恥ずかしくて固まってるのよ。朝だって私の家に来るなり顔を真っ赤にしながら服装変えただけで影虎に『惚れたぜ♪』って言われたっていきなり言ってくるのよ。よっぽどうれしかったのね♪」

（へ～椿がね～・・・あれ？）

「て言う事は今日椿の奴お前の所に行ったのか？仕事じゃなかったのか？」

っと俺が忍が聞くと忍は壁に凭れ掛りながらフフンと笑い

「実わね、椿ちゃんの下着を買いに行ってたのよ♪」

っと笑顔で言われたがその先は聞く気も無いので自分の部屋に行こうと思うと忍に止められ

「それでね初めて女物を買いに行くからついて来てくれってね。そして、店に着いたらバストサイズがわからない言って言うのよ其処で店員に測って貰ったらなんと９１のＦカップよ?私と３センチしか違わないのよ?店員も驚いてたわよ♪どうして今までブラしなかったのかってね♪それにしてもとらあんたどれだけ育てさせたのよ?」

っと人を赤面させて楽しんでいる変態が居るのだ俺の目の前に・・・・・制裁の時だ

「イッ~ タイ何するのよ?」

俺は忍の後頭部を主一機ｒ殴ったすると忍は頭を押さえて蹲りながら本気で痛がっていた

「そんな情報をもらって俺にどうしろと?」

俺が殺意を込めながら言うとその瞬間にいきなり隣の部屋からよ~く見なれたメラメラ光る炎の球が飛んできておれの体は吹っ飛んだ

「／／／／／／／／／き、きが、きがえ、の覗くんじゃねぇよ」

っと物凄く顔を真っ赤にしながら俺に噛み噛みでそう言ってきた

女の子らしくなると言う事は、羞恥心も前にも増して強くなると言う事ですね・・・

「女の子ぽくなっても火球で体罰は無くならないのね・・・・ガク」

俺は力尽きて倒れた・・・椿さんの火には、対象を燃やすだけでなく相手の精神を吸い取って燃やす作用もあるので俺の意識は軽く攫われる・・・

「あ、とら?大丈夫?てこら椿ちゃん追撃しようとしない!!」

っと何か不吉な声が聞こえたが気にしないでおこう

・・・・

花の楽園（イジメと牙桜）（後書き）

キャラ紹介

風葉風花（かざはふうか）

年齢１６歳

眼鏡に三つ編み姿。服装は制服姿で、かなりの巨乳の女子

性格：おっとりとして物静かだが大切な者や花たちを汚す又はいじめる奴には容赦しない物事を我慢する癖があり我慢が限界になるとパニックを起こし自虐する。

特徴　耳が聞こえず言葉を聞き取れない。

趣味：花を育てること

能力：花の楽園（フラワーガーデン）

能力説明

植物を操ることができて何もないところから花を咲かせることが可能（人の体からは不可）

主に花の成長管理に使用

怒ると人に使用する

主な攻撃方法は茨で相手を縛り付ける

能力の応用として土をいいものにして花を育てている

以上

今回は影虎が少しいい人でしたね。基本は紳士な影虎君です。

椿の女の子化も着々と進んでいます。

ではまた。

誕生世代（アダムとイブＶＳ影虎と椿、カップル同士の戦い！？知恵の実と生命の実）

今回の敵はかなり異質な敵キャラが出ます。

ではどうぞ

ある日、椿が急に神社に行きたいと言いだしたので俺は、椿をバイクに乗せて行こうかと言ったら椿がバイクは嫌だと言うので仕方なしにバスで行くことにした。

理由を聞いても今度言うとしか言われず渋々、ついて行く事にした

「なぁこんなところに来てどうするんだ？お前元シスターなのに神社って・・・」

俺がそう聞くと椿は俺ににらみを利かせながら

「だいたい日本人だって十字教でもないのにクリスマスにはお祝いをするだろ？それと同じよ」

っと言われた・・・なんか怒らせてる？

（ていうかえらくこの神社カップルが多いな・・・なんで？恋愛成就起願でもあるのかこの神社？）

っとおもっていると椿が突如消えた

そして、俺のすぐ横には白髪のショートヘアに、澄んだ紅色の瞳。背中に大きなリボンの着いた白黒の腋の部分が開いた巫女服を着ているさい銭箱を持った少女が居て

俺に賽銭箱を突き出して「賽銭寄越せ」っと言ってきた

なんて失礼な奴だろう！！

そう思いながらも特にやる気も起きなかったので一応５００円を入れてやると喜んでどこかに行ってしまった。

そして、待っていればすぐに帰って来るだろうと思い鳥居の柱に凭れ掛りながら待っていると

っとおくでお守りを握った椿がく逆立たせた金髪に、深い紅色の瞳。聞いた百人が全員カッコイイと言うイケメンで黒いタンクトップに同じく黒いジーパンを着用していて、顔から下の上半身全体に黒い幾何学的な模様の紋章が刻んである変わった背の高い男が椿の手を握って止めていた

そして、椿はものすごく嫌がって振りほどこうとしていた

ブチン

俺は、男の元へと歩いていき男の肩に手を掛けて

「おい、おまえその子に手をだすんじゃッ！？」

男が俺の目を見た瞬間に身の毛が一気によだつような感覚に見舞われ俺はすぐに椿を抱きかかえてかなり後ろに飛んで距離を取った

すると俺が抱きかかえている椿が震えながら俺に向かって

「影虎・・・アイツなんか変だ！？・・・さっきから身体中がアイツの事を拒絶してる・・・」

っと椿が俺の方を見ながら言ってきたが

椿の目の色がおかしいのだ

いつものように黒のカラーコンタクトをしているはずなのに椿の目は、内側が金色で瞳の外側が赤色の人間では絶対にあり得ない眼の色をしていた

ついでに言うと俺にも椿と同じ感覚がさっきからある

そして、相手の男の方は俺たちを紫色に輝く瞳で見ながら

「へぇ・・ＹＨＷＥの遺伝子を持つ人間か・・・俺とイブの血を完全に否定した新たなる人類か・・」

っとおれと椿を見定めるような目でそう言った

俺はその眼が気に入らず飛び出して殴りかかったその時、男は俺の攻撃を軽く避けて俺にカウンターで蹴りを食らわせてきた

可笑しいのはその蹴りの威力だ

俺が両腕でガードしているのにもかかわらず俺の体は後ろに吹っ飛ばされ地面に何度もバウンドしてようやく止まった

俺以上・・・麻華並の怪力だ

俺の腕の骨は、粉々に砕けていた

すぐに『異世界樹（ユグドラシル）』で身体を直して『異世界樹（ユグドラシル）』の枝を地面から男に差し向けたが男は何と全身串刺しになるであろうほどの『異世界（ユグドラシル）』

樹』の刃を針の穴を通すかのような見事な動きで回避して俺の左目に拳銃を押し当ててきてバァンと打ち抜いてきた

俺は右目から血を流しそのまま地面に倒れた

・・・

そう思って立ち上がったら私の箍が完全に外れた

そして、新書血録を発動させて本格的に攻撃しようとしたその時

予想外の速度で何かが私に目掛けて飛んできて私は、背中に炎の翼を出し空に飛びあがりそれを避けた

そして、何が跳んで来たのかと其処を見ると白髪のショートヘアに背中に大きなリボンの着いた白黒の腋の部分が開いた巫女服を着ているさい銭箱を持った少女が居た

（あの賽銭箱でやったの？うそでしょ・・）

私がその光景に驚いていると

巫女少女区の少女は私を紫色に輝く瞳で見ながら

「僕と同じ様な感覚がすると思ったらまさか、ＹＨＷＥの遺伝子の持ち主だったんだ」

っとあどけない表情で私に言った

「くらえ」

私はそう言って炎蛇を１０００匹出してそれら全てを男と女に向かわせた

そして辺りはモノすごい惨劇になっているのがわかる。

そして、私が蛇達を引かせると物凄い事があった

男と女の二人共無傷でその場に立っていたのだ

そして、男の方が私の方を見て手を伸ばしてきた

すると男の手から私の使った魔術、サラマンダーを呼び出し使役する魔術を私に目掛けて使用して来たのだ

私は、羽を利用して空を飛んで必死に避け続けていると急に吐き気がして

私は口を両手で抑えてしまい炎の蛇が私に向かって来て

大きく口を開けて私を飲み込もうとしていた

（もう無理だ間に合わない・・影虎！！！）

私が目をつぶり身体を丸めて腹部を庇うような体制を取って蛇に背中を向けたすると

〔『～（この俺、エルク＝ガーランドが命ずる・・・去れ）～』〕

そう影虎の声が聞こえた瞬間に炎の蛇の額に＊が刻まれていて六芒星？と共に刻まれていて盾の形をしていたたしか、ダビデ王の盾だ・・・それが蛇の方向転換し再び男に目掛けて飛んで行った

ダビデの盾・・古いユダヤの魔術文書によれば、ダビデ王は不思議な盾を持っており、その盾は魔術的な防御力を発揮した。この盾は、メタトロンの名を示す星文字がダビデ王のために盾のかたちをとったもので、盾には、六芒星とともに、「汝が戦いに出かけ、敵の攻

撃を受けた時、この名（メタトロンの名）を唱えよ。そうすれば、無傷でいられる」という言葉が刻まれているという話だ。

今、影虎はなんて言った？エルク？エルク＝ガーランド？そんな名前でその盾が発動するのか？

まさか・・・・・・

私がそう思っていると私の横に両目から血を流している影虎が居た影虎の目にはVの文字が刻まれて居て

目の色が金色だったそして、目の中の文字は燃えるように揺らめいていてその瞳の奥に太陽ですらる蝋燭の光と変わらないほど小さく見えるくらいの光が見えた

そして影虎は、男と女の方を見て？

「良くもやってくれたな・・・それに椿の悲鳴が聞こえたってことは椿の子と酷い目にあわせやがったな・・・」

そう言うと影虎は一度両目を閉じて

かっと見開いて

〔『～（死ね）～』〕

そう言った瞬間に男は巫女装束の女を抱えて影虎の目線からはなれた

そして、影虎の目線の先では、さっきまであった木や花が枯れていていた

「か、かげとら?」

私が影虎の服を引っ張ってそう言うと

影虎は私の方を見ずに

「なんだ其処に居たのか椿」

っと言った

?其処に居たのか?私はずっと此処に居たんだけど

そう私が考えていると

両目から血を流しっぱなしの影虎が私の事を一切見ずに私の手を握り自分の背中にまわして

「椿俺は今二重の意味でお前が見れない・・まず視力が今の俺には無い・・・そして、もう一つの理由は・・・今まで黙ってて悪い・・俺もさっき使い方を思い出したんだ『絶対遵守(エンペラーコマンド)』って言ってな・・まぁ・・・俺の左目の目線に居る相手は命令には絶対に逆らえないみたいな感じかな?生き物限定だけどね・・」

影虎はそう言っていた

影虎は『異世界樹(ユグドラシル)』と記憶消去と私が与えた錬金術以外にもまだ、何かあったのか?

私がそう思っていると

「なんで僕の事を持って逃げるんだよ?僕がなんか喰らうとでも思ったの?」

っと巫女装束の女が男に言うと男は冷や汗をかきながら

「馬鹿、あの目の紋章見てわからないのか?いや見なくて良い・・・見ている最中に死ねとか言われたらまずいぞ」

男はそう言った。そして、女は、不満そうにしていたが一瞬だけ影虎の目を見た瞬間に額に汗を出して

男の後ろに隠れた

それを男が確認すると男の口から

「まさか、ＹＨＷＥの遺伝子を継いでるだけの人間かと思ったら・・こいつはびっくり・・ＹＨＷＥに限りなく近い存在かよ・・・失敗作なんて一言は取り消さないとな」

っと言った

その瞬間に影虎の目に力がこもり目のＶの文字が強く輝いていた

「ほう、自らの非を詫びるか?ならば聞こう、なぜ貴様らアダムとイブが此処に居る?そしてなぜ俺の恋仲に手を出した!?」

そうキレながら言った

アダムとイブ?あのアダムとイブか?人類の祖?それがあの二人?

ていうか影虎は一体何言ってるんだ?それに先から変なしゃべり方してる・・・どうしちゃったの?影虎・・お前は一体ダレ?

私がそう思っていると

男の口が開き

「お前と同じでその彼女からもＹＨＷＨの気配を感じてね・・俺らを殺しに来たのかと思ってやられる前にやろうとしただけだ」

そう男が影虎の目線から外れながらそう言うと

急に巫女装束のアルビノの女が飛び出して上空から賽銭箱?で影虎の頭を狙って振り下ろそうとしていた

私はその時影虎に

「上だ!!」

そう叫んだそれを聞いた瞬間に影虎は視線を上にあげて

〔『～(死ね)～』〕

そう言った、巫女装束の女は、賽銭箱を目線に置いた

すると何も起こらなかった

(生き物じゃないと効果が無いのか?)

私がそう思って言ると影虎は目を細めて何かを感じ取ったかのよう

に私ごと後ろに飛び
賽銭箱による攻撃を避けた
「おい、目が見えないんじゃなかったの？」
私が驚きながらそう言うと
「あぁ見えない・・・だが目線は感じるそれだけだ」
そう言って影虎は、右目を強く見開いて
『砕けろ』
影虎の目線が賽銭箱に向いた瞬間に賽銭箱が突如砕け中から大量のお札とお金や小判などが転がった
「！？」
巫女装束の女は突然の出来事に驚いていて
影虎は、気配を感じたのか女の方を左目を強く見開いてみながら
『死ね』
そう言った瞬間に先ほど遠くに居た男が女を抱えて走り綺麗に影虎の死線（視線）から離した
さすがだと思う・・戦況はさっきまで相手が有利だったが影虎がいきなりよくわからない力を使って戦況を立て直して追い込んでいた

がもうこれはただの掃討だ

圧倒的に相性の悪い相手を影虎は必死にいたぶっているように見える

『死ね』

『砕けろ』

『破裂しろ』

影虎がまたそう言って気配で相手を追ってそう言った

男と女は二手に分かれて影虎の視界から離れようとした

あの二人は影虎の目が一体何なのかを理解して対処している

影虎自身はどうなんだ?理解してるのか?今私たちの周りは、死で満ちている事に・・

私がふと周りを見渡すと先ほどまでの平穏な神社が一変して地獄のようになっていた

木々や花は枯れ建物のあちこちは崩れていた

それを見ていてわかった事がある

あのアダムとか言う男の能力は反射だ反射神経と行ったらいいのか避けること交わすことに長けているんだ

そして、巫女装束のアルビノの女の方は、反射とは真逆の能力、透

過・・・ようはすり抜ける能力だ

さっきから砕けた石などが彼女の体をすり抜けているのだ

でも、彼女が影虎の目線を避ける理由は、おそらく紫外線などの光は透過できても自身を映し出している光、だれしも身体に受けている光だけは、透過できないのか?それとも影虎の瞳から出ている光だけは例外なのかのどちらかだとおうもう。おそらくは後者だろう

そして、いまでも必死に影虎は二人の男と女を見えない眼で追いかけ殺そうとしている。

二人の男と女がバラバラに移動しているせいで影虎は捕えられずにいた

「ち、ちょこまかと動いているのは、感じているけど二人同時に察知するのは大変だな・・ゴフ」

影虎はそう言いつつも口から血を吐いていた

「かげとら!?やっぱりその眼体に悪いんだろ?」

私が影虎の体を揺すりながらそう言うと影虎は、うるさいと言って私を突き放した

(なんで私の言っている事を聞いてくれないの?もしかして目が見えていないから私の存在を認識していても出来ていないの?・・・)

私がそう思って悩んでいる時影虎は、ポケットから鏡のようなものを取り出しそれを上空に投げそれを腰から抜いた拳銃を抜いてそれ

を上空に投げた鏡に視界ゼロで器用に撃ち抜き鏡の破片が散らばった

「椿目を閉じて俺の背中に入ってろ」

そう言って影虎は私の全身に緑のコートをかぶせた

（まさか!?鏡の反射を利用して全方位に隙間なく命令する気か?）

私がそう思い影虎の言った通りコートを全身にかぶり身を守ろうとしたその時、私の視界に一瞬だけ

ベビーカーを押して神社に来た夫婦と赤ちゃんが見えた

そして、影虎の鏡の反射の先に巫女装束の女と金髪の男意外に彼らが写っていた

駄目だ!!影虎に今、目を使わせちゃ駄目だ。

止めなきゃ!!

「影虎やめろ!!」

私がそう言ったが影虎は反応せず上を見上げて口を開いていた

『我が命ずる!!貴様らは、カゼをウグ』

影虎が口を開いて言葉を上げた瞬間に私は、影虎の口を自身唇で塞いだ

もうこれしかないと思った

関係ない人たちを守るためには・・・これしかなかった

影虎が見えていないながらも目も思いっきり開いて私の事を見ていた私も影虎に飛びつきながら影虎の瞳を見ていた

金色にかがたく瞳に炎のように揺らめくVの文字そしてその奥底にある物凄い光に私は少し見とれていた

そして、私の勢いは、影虎を押し倒したそして私は影虎の腰の上に居た

「何すんの椿？」

影虎が倒れて起き上がろうとした時に頭を押さえながら私の事見ながら言ってきた

その時の影虎の瞳は、黒に戻っていて目に光が反射していた

「もう、私がだれかわかるんだな？・・・この馬鹿！！お前あの男達だけじゃなく関係ない人まで巻き込んで殺しかけていたんだぞ！！」

私は、影虎の頬をぶった

結構本気で・・・だが私の細うでと小さな手では身体の大きい影虎にはダメージにはならない

でも、怒鳴りながら叩いたので影虎は頬を押さえながら

「・・・・あ、ごめん・・・・でもな」

「でもなんだよ！？」

影虎が良いわけをしようとするので私は影虎の耳を引っ張りながら怒った

幸いアダムとイブの二人は、もう近くに居ず何処かへいったようだ

あの二人影虎だからこそこの程度ですんだんだろう・・・・・私はそう思うまた何処かで会う気がする・・・

そして、私は影虎の言葉に耳を傾けた

「いや、殺す気なんてさらさらなかったから最後のあれは、『我は命ずる。貴様らは、風邪をひき三日日間は苦しみ洗いざらい全て吐け』っていう死ぬほど軽い命令なんだけど・・・・・あれ？もしかして俺が人を本気で殺すと思った？さっきのは冗談だよ♪俺は殺されたくらいじゃ人はころさねぇよ・・・あれ？椿さんマジ？」

私はふと力が抜けて影虎に身を預けた

身体が熱いような寒いような・・・頭も痛いし・・・・なんだろうすっごく腹立つうえにダルイ

「も〜う〜だ〜め・・・・」

私はそういって倒れた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

なんていうか散々な一日だ・・・

「うぅ~んうぅ~ん」

「はいはい今すぐ枕替えに行くからな!!」

俺は、部屋中走って椿の看病を始めた

まぁ病院に行かなくても家にある薬で良いだろう・・・俺一応これでも医者なので・・

ていうかあの巫女さんと男・・アダムとイブ・・・また、会うことになりそうだな・・・

つづく

誕生世代（アダムとイブＶＳ影虎と椿、カップル同士の戦い！？知恵の実と生命の実）

今回の敵はアダムとイブでした。

キャラ説明です

名前：如月＝Ａ＝ユゥイ

性別：男

年齢：不明

性格：超が付くほどの気分屋で、どっちつかず。
ふらっと現れてはふらっと居なくなる。

容姿：軽く逆立たせた金髪に、深い紅色の瞳。聞いた百人が全員カッコイイと言うイケメン。黒いタンクトップに同じく黒いジーパンを着用していて、顔から下の上半身全体に黒い幾何学的な模様の紋章が刻んである。

能力：『条件反射（エラー・カウンター）』　魔術サイド～『因果応報』

能力設定：先在能力と魔術二つの力を持っている。
『条件反射（エラー・カウンター）』
ユゥイが創られし時より持っている能力で、自身が認識した事象に対する条件反射（カウンター）の能力。
それが何であれ本当に全てに反応するので、エラーという言葉がついている。レベルは測定不能。
（例：道具に対するカウンター

武器に対するカウンター
攻撃に対するカウンター
能力に対するカウンター）
『因果応報』
攻撃等自らの体に受けたモノを、そのままの状態で相手に返す魔術。
上半身に刻んである紋章がこれ。
しかし、『条件反射（エラー・カウンター）』がある為ほとんど使用する事が無い。

その他：名前のＡとは「アダム」の頭文字のＡであり、実は最初に創られた人類。
とある事情により不老不死となり、そしてそれより悠久の時を生きる事になった化け物でもある。
退治屋という仕事を営んでいて、学園都市の内外に複数のパイプを持つ。
一人称は俺で、口癖は「暇だぜ」。
魔術師でもあるがとんでもなく異質であり、魔法名は『ｅｒｒｏｒ６６６（自らの行いは全て自らに還る）』。

名前：神坂（かんざか）　イヴ

性別：女

年齢：不明

性格：少し天然気味な気分屋で、アダムと同じどっちつかず。
ノンビリが好き。
僕っ子。

容姿：白髪のショートヘアに、澄んだ紅色の瞳。背中に大きなリボンの着いた白黒の腋の部分が開いた巫女服を着ている。

ちなみにアルビノであり、理由は体質の関係で紫外線等が全て体を透過してしまう為である。

能力（？）：『超速再生（エクストラ・リバース）』
『無効透過（ノー・カウント）』

能力設定：（？）であるのは、これが実際にいえば能力では無く体質である為。
しかし、誰もそれを認識する事無く、能力として扱っている。
そしてこれらの体質、特に二つ目の体質の為イヴには死というモノが存在しない。
『超速再生（エクストラ・リバース）』
イヴ一つ目の体質。「常にこの姿に固定されている為、何をされようともこの姿に戻る」体質で、イヴが誕生した瞬間イヴの体はその誕生した瞬間の状態に固定されて、そのまま変わる事が無くなった。
『無効透過（ノー・カウント）』
イヴ二つ目の体質で、攻撃や衝撃等が体に当たると無効されるか透過されてしまう体質。
簡単に言えば、攻撃が当たるとその衝撃やダメージはイヴの体を素通りあるいはそこで無効化する。
そして後ろに人がいてそれが素通りした場合、その人がその衝撃やダメージを全て受ける事になる。
次に状態異常の攻撃等だった場合は、それらは全て体を素通りし人や地面が異常を起こす。

ちなみに体質に関係無く、イヴは攻撃は喰らうし木っ端みじんになったりもする。しかし、それらは喰らって直ぐ元に戻る。
後、体の外側だけじゃなく内側のモノも透過させる。そしてその中には死や老い等も含まれている。

その他：アダムと同じ最初に創られた人類。
しかし、イヴの場合は誕生した時から既に巫女服で賽銭箱を所持しており、第一声が「賽銭寄越せ」であった。
それ故に、アダムと同じく悠久の時を生きているが、行く所行く所でその台詞を言って来た為今はとんでもない額のお金（賽銭）を持っている。
ある時代々神主を輩出する神坂家に養子として誘われ、今は長女として神社にてのほほんとした生活を送っている。
ちなみに戦闘時は、賽銭箱を武器にして闘う。
しかもこの賽銭箱、木で出来ているのにも関わらずそれより堅いモノもたやすく破壊出来るし、何故かいろんな材質の武器等に形を変える事の出来る不思議賽銭箱である。
一人称は僕で、口癖は「賽銭寄越せ」。

この二人です。投稿してくれたのはｄａｙさんです。すてきなキャラクターありがとうございました。

基本的に弱点は無いんですが影虎が唯一の弱点でしたね。

影虎の父親にヒントがあるんですよね。

影虎の能力紹介

『絶対王政（エンペラーダビデ）』

目線の先に居る非生物に命令できるダビデ王の盾が秘められた左目

命令を掛けられると非生物はその通りになる。

使用中は血を流しながら失明する。

『絶対遵守（エンペラーコマンド）』

目線の先に居る生物に命令する事が出来るツォハルの宝石を秘められた右目

命令には基本さからえない。

こちらも使用中は目から出血し失明する。

以上の二つです。正直ギアスです。しかも役に立たないタイプの・・・

以上です。ではまた

病人看病（もういろいろと大変）（前書き）

今回は今まで史上最高の長編です。

長ったらしいですがどうぞ

病人看病（もういろいろと大変）

次の日の朝、椿さんはやっぱり風邪をひいて寝込んでいた
今回のこれは間違いなく俺のせいなので必死に寝ないで看病していた
タオルを変えてやったり水を持ってきたりと大忙しだった
そして、浅いなって俺は、おかゆをせっせと作った
服装は、黒のエプロンに白のYシャツとジーパンだ。
「パク・・・うんこれで良い」
そして、味見をしておいしかったので土鍋にふたをしてお盆に載せて水の入ったコップと梅干しと薬を持て椿の寝込んでいる部屋に持っていくと
椿はテレビを見ていた
寝転びながらアニメを見ていた
そして、俺が部屋に居る事にきづくとすぐにチャンネルを変えて寝たふりを決行しだした
椿の奴アニメが好きだってこと俺にばれたくないんだよな・・・
「お~い椿さん起きろ、飯作ったから」

俺があえて知らぬふりをすると
椿は寝返りを打って俺の方を見た
椿の顔は真っ赤に火照っていて息遣いも荒かった
ちょっとドキとしながらも俺は椿に食べさせようとしたが椿は、
「ヤ」
っと一言で返してきてまた寝返った
「またかよ」
俺はそう言って顔を右手で抑えながら怒った
椿さんは毎回、風邪や病気にかかるとリミッターがは外れたかのように我儘になる・・・
「椿食べろよ、食べなきゃ良くならないぞ」
俺が椿の肩を掴んで無理やりこっちを向かそうとすると
「ヤったらヤ!!」
そう言って椿は布団にもぐり話を聞かなくなった
「食べろって言う事聞かなきゃＤＶＤ全部売るぞ?」
俺がそう言うと椿は目に涙を貯めながらまるで亀のように首だけ布

団から出して俺を睨んでいた

「そんなことしたら・・・わかｔゴホゴホ」

なんか俺に言おうとしたみたいだがせき込んでしゃべれないでいた

そして、その後、椿をベッドに座らせて

俺は、椿に食べろと言ったが椿の奴は全然食べようとしなかったので俺が代わりにレンゲを取って椿に食べさせてやると

「・・・・あ~」

っと口を開けていたので俺はため息をつきながら椿の口に運んでやった

一応、鯛とかからだし汁を取ったり俺に出来る限りの技量で作ったがどうだろ

俺が椿の表情をうかがっていると椿はうれしそうな表情をして

「おいしい」

っと言っていたそして椿がまた俺に口を開けて待っているので俺はまたレンゲで粥をすくって口に運んでやった

そして、椿は、完食したので薬を飲ませようかと思ったらまた、椿は

「ヤ」

っと言って愚図りだした。そして、薬を飲ませようと必死に頑張って何とか飲ませることに成功した

そして、ふとテレビを見ると
『昨日の夜八時頃に、能力者の男性が鉄パイプに埋もれているのを発見しました。
何とか一命を取り止めて情報を聞いたところ、黒いポニーテールの制服を着た少女の仕業との事がわかりました。
人物については未だ不明で能力については物体を落としたり上げたり出来る能力と言うことしか分かっていません。
犯人は未だ逃走中です。
この区域の近所の方はくれぐれも気をつけて下さい。
次のニュースです……。』

っと言う物騒なニュースが流れていた

「恐いね」

っと椿が言うので俺は椿の頭を撫でながら

「大丈夫、俺が守るから」

そう言った
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
その後、椿さんは、のどが痛いので飴がなめたいと言ったので買いに行くことにした後なぜかレモンやオレンジなどすっぱいものも食べたいと言われた

「たく、我儘にターボが掛って来たな・・・まぁエンジン掛けたのは俺か・・・はぁ~ゲフ」

俺がそう思いながら買い物袋を片手に歩いているといきなり顔面に中学校からサッカーボールらしき物が俺の顔面にプロです!!と言っても過言ではないほどの強烈な速度で当たり俺の体は、地面に倒れてしまった

「・・・・・・・・」

俺は地面に大の字で倒れながら空を見ていた

するとタタタと誰かが走ってくる音が聞こえた

俺は心の中である事を考えていた

1怒鳴る
2大人の対応
3迷わず発砲
4ｃｏｍｅ　ｏｎ　『異世界樹(ユグドラシル)』

・・・・う~ん迷うな・・・特に3か4かで悩むな~

俺が色々考えていると俺の顔を焦げ茶色のショートヘアの少女が覗きながら

「あの大丈夫ですか!?あの、その、私が蹴ったボールが・・ごめんなさい」

っと女子は焦っていた

「ん?あぁ大丈夫だよ。さっきのボールの１０００倍きついのにも慣れてるから」

っと起き上がりながらそう言った

「１０００倍!?」

っと焦げ茶色のショートヘアでスタイルに関しては中の中か中の上ぐらいで身長は女子中学生の平均くらいの女子が驚いていた

「あの、本当に大丈夫ですか?私の蹴ったボールは当たった人が必ず病院に運ばれるって有名でさらに顔面って」

っと焦っていたが

「問題ない・・・おい、お前の仲間呼んでるぞ?」

っと俺が女子にそう言うと女子はまだ責任を感じているのかサッカーボールを抱えたまま固まっていた

(めんどくせ～)

「お前がボール持っていかないと再開できないんだろ?」

「はい・・・」

あまりにも愚図愚図しているので俺は、女子のボールを足ですくい上げ

それを何回かリフティングしてから思いっきり中学校のグラウンドの端にある小さなゴールに蹴った

その距離、約５００メートルである

俺の蹴ったボールは綺麗な縁を描きながらゴールの網を揺らしていた

中学の奴らは物凄く驚いていた

「え？」

焦げ茶色のショートヘアでスタイルに関しては中の中か中の上の女子は唖然としていた

「みての通り俺は、プロなので慣れてるから大丈夫♪じゃあね」

俺はそう言って家に向かって歩き出した

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

家の玄関の前

「久々にサッカーしたな～懐かしかったな・・ ｶﾞﾁｬ ただいま」

俺が家に帰ると椿がベッドで着替え中に倒れこんだのか上半身だけ下着姿。

ベッドに倒れこんだままの彼女は身動きせずに苦しそうに息をしていた。

ちらりと見え隠れする白い肌、下着姿がやけに生々しい、俺もこれ

には動揺する。

とりあえず大慌てで服のボタンを止めてベッド寝寝かせて水を飲ませた

「大丈夫か？どうしたんだよおい」

俺は必死に呼びかけたすると椿は、苦しそうに泣きながら

「ぐす・・・だって・・らって・・寝て・・・起きたら影虎居なくて・・・急に・・・恐くなって・・・恐くなって・・・だから迎えに行こうと思ったんだよぉ」

っと泣きながら言われた・・・あいたた・・忘れてた・・椿の奴風邪をひくと我儘だけじゃなく本気で怖がりになってすぐ泣くんだよな・・・

「大丈夫だ。もう出かける予定ないしほらご希望のアメだ」

パク

「あまぁい」

俺が買い物袋から棒付きのアメを取り出し椿の口に突っ込むとそれを転がしながら椿は笑っていた

なんて言うんだろうな妹が出来た気分だ

俺はそう思いながら椿の頭を撫でていた。

そして、椿は一度眠りお昼頃に目を覚まして熱は少し下がっていた。

目覚めた椿は、ぼーとしながらねこんでいた

するといきなりピンポーンとインターホンが鳴ってドアを開けてみると

目の下を真っ赤にした天野さんが泣きながら立っていた

「また一真に泣かされたのか」

俺がそう聞くと天野は、首を大きく横に振って

「椿居る？」

っと言ってきた

「いるけど今は「ちょっとだけお話しさせて」・・・ちょっとだけな・・アイツ風邪ひいてるんだよ」

俺はそう言って天野を家に入れた

そして、椿の部屋の前に行き天野を入れた

すると天野は椿に泣きついた

椿も椿で力なしに天野を受け止めていた

そして、天野は、俺と椿に一部始終を話した

なんでも今朝テレビでやっていた鉄パイプの落下し男が大怪我をした事件の犯人が自分と能力姿共にそっくりでクラスの女子にいじめられ一真だけは信じてくれてると思ったのに一真の奴は信じてくれていなかったらしい

それで自分で解決すると言って出てきたもののどうしようもないわけね

「まぁそうは言われても俺たちにはどうする事も出来ないんだ」

俺がどうしようも出来ないんだよっと言おうとしたその瞬間に天野さんの顔が修羅のようになっていて俺の腕時計のボタンをぽちっと押していた

「お願いだから手伝って・・・さもないと押した後に回して影千代ちゃんにするよ?私も切羽詰まってるの」

っと脅されるのですがあなたのした事は人質の頭にどでかい穴をあけた後に人質がどうなっても良いのか!?と言っているようなもので

「馬鹿野郎・・・これは・・・押して回すんじゃなくて・・・・・回してから押すんだよ・・・・・ぐ・・・あ・・・・・よくも」

天野さんのマニュアルを読まない使用のせいで俺は、激しいストレスと激痛と苦痛の中で影千代にされた

俺は、汗を全身でかいて力がふと抜けて床にへたり込んでいた

「あ、あれ?私もしかして操作間違えた!?」

っと天野さんは口元に手を置いて驚いていた

「このやろう・・・お前のせいで検索も使えなくなっちまったじゃねぇか!!!!」

俺が影千代の姿で本気でキレると天野さんは、泣きそうになっていた

するといきなり椿が天野の頭を撫でながら

「おい影虎、お前今から学校に行って犯人捜して・・・こい「えぇ!!?なんで?第一学校には人が居るかなんて・・・そういえば昨日の今日でなんでいきなり天野が犯人だって噂が流れたんだ?」そう幾らなんでも早すぎる。ニュースでは物を上げたり落としたりできる能力としか言ってないから天野よりかは、念動力や風系統の能力者の方が可能性が高いからまずそっちから疑われるだろ?それにその犯人の姿や能力の使い方だっけ?明らかに葵を意識してやってる。それに犯行を犯すのにわざわざ特徴的な姿を相手に見せるか?見せないだろ?明らかにそいつは、被害者に間違った犯人像を抱かせようとしてる。そして、この近くの地域で高校って言ったらうちの学校しかない・・・影虎、ちょうど良いから女子の輪の中に入って噂の元をたどってこい・・」

「ていうことは、女子たちの中に犯人が居るか手がかりがあるってことか・・・わかったよ行って来る・・天野「え?」椿の事頼むね♪頑張って見つけてくるから」

俺はそう言ってコートを脱いでクローゼットに入れて男子用の制服を着て家を出てバイクに乗って学校に向かった

・・・

・・・

「お近づきになりて~」

などと俺の体をジロジロと淀んだ目で見てくる男子ども・・・殺す

「すごい綺麗な髪~あんな色なのに物凄く自然な感じ」

「肌も白くてきめ細かくてどうやったらあんなに綺麗になれるんだろ?」

「外国人かな?それともハーフ?物凄く背が高いし綺麗だね」

「嫉妬したくなるくらい綺麗だわ」

「あの凛とした表情、カッコイイ♪お姉さまって呼びたい」

っとなぜか女子たちからは綺麗だのカッコイイなど褒められまくって嫌な気分と良い気分が戦っていた・・・まぁいいや

などと男子と女子の根本的な違いを感じつつ何処の女子に話を聞こうかなっと悩んでいると急にトイレに行きたくなった

さて、俺はどっちに行ったらいいと思う?ここは勇気を出して男子トイレ?それとも恥を忍んで女子トイレ?・・・・・・・・俺は迷うことなく車いす専用トイレ!!!

俺はそう思いながらトイレに駆け込んだ。

そしてなんなく(実はものすごく赤面しながら目をつぶって必死だったのでなんなくとはほど遠く)用を済ませトイレから出ると

3人くらいの男子達（物凄くチャラそう・・・）が俺を壁に追いやって俺の頭の上に手を置きながら俺を見定めるようにジロジロ見ながら

「君どこのクラスの子？もしかして転校生？」

「可愛いね。その髪の色は目立ちたかったの？」

っと二人の男は俺に言って来てもう一人の男は、

「なんか言えよ」

っと物凄くからんでくる・・・

「はぁ～退けさもないと殺しちゃうぞ♪」

そう俺が怒りをこめながら言うと男達はすぐに顔を真っ青にして何処かへ行った

あれ？ただ、殺すぞ♪って笑顔で本気で言っただけなのに・・・そう思いながら歩いていた・・やっぱり視線は痛い

すると

「「ちょっとあなた！！待ちなさい」」

っと二人の女子に止められた

一人は、背は高い方でスタイルは良い。が、別名「美人なのにちっとも色っぽくない鉄壁の女」こと吹寄整理と隣の同じく背の高いク

ラスのジャッジメントの髪を後ろで結んでいてスラッとした体格だがあまり発育が進んでいないような女こと涼村水季に呼び止められた

俺の顔を見るなり水希の表情が凍りそうになっていた

そして、吹寄せが俺に

「あなたなんなのその格好?はしたない。恥ずかしくないわけ?それともお見せたいわけ?人間どんな趣味を持ってても責められないけど実行するのとしないのでは大きな違いが」

「まぁまぁ吹寄さんそれくらいに彼女も出来心だったんだと思いますよ」

っと物凄い言ってきた

俺はその言葉ひとつひとつに心に大ダメージを負っていた水季さんが止めてくれなかったら俺は間違いなく泣いていただろう

とにかくここに居てはヤバいと思って逃げようと思ったその時、吹寄に後ろ襟を掴まれ胸が服に圧迫されせき込んだ

「あなたそう言えばいったいどこのクラスの誰?うちの学校じゃ見ない顔だけどなんでうちの学校の男子制服を着てるの?」

っと物凄い質問をされ俺は固まっていた

すると、後ろからいきなり小さな手が俺の胸を鷲掴みにしてきた

「キャ!?・・・・華~ 音!!」

俺が後ろを振り向くと淡い水色のふんわりとした肩までの　短いツインテールに、これまた澄ん　だ淡い空色の瞳に学校特注のブレザーを身につけている。椿よりも小さい少女・・すずみ　華音がそこに居た

「吹寄さん、この人は、あなたのクラスの桜小路影虎さ・・くんと桜小路椿くんのお姉さんです。」

そう言ってごまかしてくれた華音

「え?あ、あのボンクラ四人衆のいえ・・その」

っと突如の俺の位置決めに吹寄が驚いていたので

「え、えぇちょっと私の母校に通ってる弟達の様子を見にこようかなと思いまして・・ただ、っ学校にアポなしで入れるか不安だったのでちょっと弟の制服を借りて・・・けど男のだったんで失敗でした。」

っと優しく頭を小突きながら言ってみた

正直に言うと心が俺かかっている。今なら死んでも良い

そう思えてきた今の俺を性にしがみつかせているのは間違いなく椿さんだ

「あのその・・今日は二人ともお休みですよ?」

っと水希が言ってくるので

「えぇ!?そうなんですか?まったくあの子たちたら・・・じゃもう少しだけ学校を見てから帰りますね。」

そう言って俺はその場から全力疾走で退散した

自身の演技力が恥ずかしかったのだもうあり得ないくらい良く俺あんな演技できたなと自分で思う

そして、走り終わった矢先隣に華音が居て

「さっきの影虎様はすごくお淑やかな女性でしたよ♪」

っと物凄く憐れみを込めた表情で言われ俺は、階段に上り真ん中の辺りに腰をついて

「グス・・・うぇえええんうぇえええええええん」

本気で泣いた。もう我慢無理!!プライドが傷だらけでもう修復するより新しいのに買い替えたいくらい!!

俺がいきなり泣き出して驚いたの華音が焦っていたが出ちまった涙はもう止まらない

そして、チャイムが鳴り華音はごめんなさいと謝って移動教室に向かった

そして俺はしばらく泣いていてようやく泣きやんだ

「クソ…何で…何で…俺がこんな事に…。」

と階段に座って泣いていると

「何やってんの…？影虎…？」

ふと振り返ると一真が呆れた表情をしながら俺に声を掛けてきた

「一真…。」

俺がそう涙声で言うと一真は少し固まっていた

「どうしたんだよ…一真…。」

「いや！？何でもない！？何でもない！？」

俺が涙を拭いながら聞いたら一真は慌てて首と手を振った。

「そうか…。」

「それより、お前こそ何で影千代モードで学校にいるの？」

「それは…。」

……

……

……

「…となった訳です…。」

「本当に申し訳ない…。」

俺が一真に全てを話すと一真は即座に土下座した。
内容は天野の我が儘によって影千代モードにされた上に検索が使えなくなって学校に調査してみたのだが、トイレに困ったり、男子に絡まれたり、水季や吹寄に服装に注意されたり、そしてトドメと言わんばかりにすずみに胸を触られて女の子扱いされてしまい、心が折れてここで泣いていたという内容だ

「全く…。
でも、何でお前は葵が犯人じゃないって信じなかったわけ?」

「・・・」

俺が一真にそう聞くと一真は、物凄く切羽詰まった表情をして黙っていた

「お前…さては天野をいじるためにわざと言ったな?」

俺がもしやと思い聞いてみると強ち正解だったようだ・・・

「そんなくだらねぇ事しねぇよ。」

「目を合わせて話そうか。
あと、左手も擦ってるし。」

「あッ…。」

俺は確証を持って一真の指を見た・・・コンニャロウ・・・こっちはてめぇのせいで大変な目にあってんだぞ!?

「テメェ♪なるほど♪
そんなに殺されたいらしいな♪
それならそうと早く言ってくれれば良いのに♪」

と、俺は肩を回しながら笑顔で明らかに殺気を込めながら言った。
ヤバイ…マジで殺したい♪

「本当に申し訳ない…。
命だけは勘弁してくれ…。」

一真は土下座をして頼み込んできた・・・なんだろう嫌な気はしない・・・

「全く…。
と言う訳でお前も犯人探しに手伝え。
さもなくば殺す…。」

「りょ、了解した…。」

一真は敬礼して承諾した。まぁいいや

俺はそうおもいながら長い髪の毛を払って捜索を開始した

……

……

椿ｓｉｄｅ

「椿、大丈夫？」

葵が私に尋ねてくるので私は

「うん～…何とか～…。」

っと答えた・・・頭痛いしだるいけどね・・・

「ゴメンね、影虎君を無理矢理手伝わせて…。」

天野が何か謝って来るので私は笑顔で

「気にするな～。お前が困ってるなら、俺は何も言わねぇよ～。」

そう男口調で言ったもう最近、男口調がしんどい・・・

「ありがとう♪でも、本当にごめんなさい…。
飲み物持ってくるね♪」

葵はもう一度、私に謝って部屋を出て行こうとしたけど

「ん？」

葵は部屋のほんの片隅で何かを見つけたのか拾い上げていた

あれ？あそこに何おいたっけ？・・・・・・あ！？

「あッ！？」

私はすぐに立ち上がり葵が持っていた者を後ろから取り上げた

「全く…勝手にみるな…よ…。」

しかし、無理をしたため急に立ちくらみのような感覚に襲われ意識が飛んだ

「って!?椿!?意識を確かに!?」

……

……

……

「んあ?」

私は急に目が覚めて目の前に葵の顔があって間抜けな声を出してしまった・・・

「椿?大丈夫?」

突然葵は手を私の顔の前に振って声を掛けてきた。

「うん…。」

先ほど何を見られたか思いだし寝返って私は顔を葵から逸らした。

「椿?あの~…。
どう話せばいいか分からないのだけど…?」

葵は先ほどの母子手帳を手にとって私に。

「これって、つまりは…。
そう言う事だよね…。」

葵ももうわかったみたいで私はうなずいた・・・そう私は、妊娠している・・・そう認めるため私はうなずいた

「うん…。」

認めてしまった・・・そうだこれだけは言わなくちゃ

「誰にも言わないでよ。
影虎にもまだ話してないんだから。」

私が影虎には伝えて欲しくないと言うと葵は顔を真っ赤にして私の方を見て

「・・・・かあいい…。」

「へ?あッ!?しまった!?」

(まさか私は女口調でなかっただろうか?マズイ!?)

「椿~♪」

「キャッ!?」

葵の抱きしめられ驚いてまた女の子のような甲高い悲鳴をあげてしまった。

「あ、葵…俺は風邪をひいているから放れろ…移るぞ…。」

「ごめん♪無理♪
椿、柔らかくて温かいよ~♪」

それからずっと葵は私に抱き付き続けていた
ちょっとしんどいかも・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
「「・・・はぁ～……。」」
あれから俺と一真は、女子達に（主に俺が女子の輪に混ざって）聞いたりこの間、陽に斬られた男や女に聞いたりと情報を集めたがこれと言った情報が何一つ見つからなかった。
「お前…犯人の目星はついてないのかよ?」
俺は一真をジト目で見て呆れながら言った
「あるにはあるんだが…。
流石に宛にならない推測でな…。」
あるのか?ならなぜ言わなんだ?
「はぁ?推測?何だよ?
言うだけでも、価値はあると思うぞ。」
俺はそう言って一真に聞いた

「あぁ…俺の考えでは、葵を嫌っている誰かだと思うんだよ。」

「・・・はぁ？」

そんなこと百も承知できてるんだけど

「だって、ニュースでは物を浮かせたり質量を変化させたり出来る能力ってだけで葵の重力変化（グラビトン）が疑われてる。
普通なら風力使い（エアロシューター）とかの風力系能力の方が疑わないか？
重力変化（グラビトン）なんて滅多にいない能力だぞ？」

「まぁな…。」

それも千も承知なんです・・・椿さんが言ってたもん

「それに、もう一つ不自然な点があるんだよ。
何故犯人はかなり印象のある格好で人を襲ったのかだ。
ポニーテールとかなら、まだいけるかも知れないが、制服を着て犯罪なんかしたら学校がバレるじゃん。
だから、明らかにわざとしたようにしか思えなくてな…。」

「・・・一真…その～…。」

もう我慢できない・・・教えてやろう真実と言う物を！！

「ん？どした？」

「言いにくいんだが、椿からその推測をまるっきり聞かされてる…。」

言いきったぞ俺!!やったぞ俺!!遂に同じ説明から逃れる事が出来たぞ!!

「・・・え?」

一真は目を真ん丸に見開いて驚いた。
そして、

「は、ははは、ははははは…。」

「一真!?落ち着け!?気を確かに持て!?」

一真は急にアッチにフラフラ…こっちにフラフラと酔っ払いの様に笑いながら歩いていた。

「一真!?危ない!!」

俺が大声で注意するが時すでに遅し

「ゴハッ!?」

「はうッ!!」

誰かと一真は頭をぶつけてとうとう後ろに倒れた。
・・・痛いそう

「大丈夫か?一真?」

「な、何とか…。

それよりも一体誰が…。」

一真が何にぶつかったのか前を見てみると…。

「はうぅ～…。
い、痛い…ハッ!!はわわわ!!はわわわ!!」

ショートでピンク色の髪の幼い顔立ちの制服を着た少女が額を抑えて痛がってると思えば今度は慌てて散乱した荷物を広い集めただした。

あれ?俺の髪と同じ色?いやちょっと俺の方が薄いな・・・

「す、すまん!!
俺の不注意でぶつかって悪かった!!」

一真も謝りながら散乱している荷物を広い集めた。
化粧ポーチに筆箱、ノートに教科書、さらにはお守りを広い集めた。
そして、何故か筆箱は開いていないのに丸い消しゴムがあった。
それを拾おうとすると…。

「ヒャッ!?」

一真の手が女の手と当たり女は急に手を引っ込めた。

「??まぁ、悪かった…。
はい、これ。」

一真は拾い集めた物をすべて女に返した。

「あ、ありがとうございました…。
そ、それでは！！」

女は赤面して俺の隣を走っていった。
その時、俺を少しだけ見ていた気がする・・・いや、恨みと憎しみをこめて睨まれたような気がする

（いや、今ビビっと来た絶対に睨まれたな・・・まぁいいや）

これが野生の勘ならぬ女の勘ってやつかな♪

「一真、大丈夫かよ？」

「まだ痛いが何とかな…。」

「そうかい。
今日はもう無理そうだな…。
そろそろ帰るか。」

「だな…。」

俺達は今日はもう、情報は集まらないと見越して帰る事にした。

……

……

俺と一真は一緒の帰っていると俺はある事を思い出した

椿に頼まれたレモンとミカンを買い忘れたのだ

なので俺は買いに行って来るといいスーパーに行きミカンとレモン

を購入して家に帰ろうと夜道を歩いていると

ズキ

いきなり頭痛を感じ頭を押さえていると

急に上から看板らしきものが落ちてきた

俺は、すぐに前に飛んでかわしたがミカンが一個袋からこぼれおち
看板の下敷きになった

ミカンはぐチャット潰れていた避けなかったら俺もああなっていた
のだろうか

そう思っているとまた頭痛がして俺はすぐに走ったやはり俺の居た
場所に物がたくさんの堕ちてきた

そして、逃げつづけていると行き止まりに追い込まれ上にはたくさ
んの鉄パイプと工具箱があった

そして、夜明かりに照らされている場所にある一人の人物が立って
いた

ポニーテールでうちの学校の制服を着ているそう天野のそっくりの
女子だ

そして、その天野は、俺の方を見ながら

「一真に近づくなんて最低!!」

そう言って親指を立ててそれを下におろしたその瞬間に大量の鉄パイプや工具が頭痛と共に俺に降り注いできた

そして、俺は潰された

訳はないつぶされた振りして実は、右肩から黄金の翼を出して身体を守った消費した寿命は5年分つまり羽一枚・・・まぁ影虎に戻れば寿命もまたリセットされるからいいんだけどさ

そう思ってると天野は何処か得走って行ってしまった

ガラッと俺は邪魔なものをどかして血をはきながらも瓦礫の山から脱出した

「畜生、天野の奴、殺す」

俺はそう思いながら家に帰った

途中に俺は、元の姿に戻ったのでもう一度ミカンとレモンを買って家に走って帰った

そして、家に着き

バンッ!!っとドアを開けて

「天野ーー!!」

っと今回の犯人様の名前を怒鳴りながら呼んだ

「「「えッ（ふぇ）!?」」」

すると全員が特に天野が驚いていた。

「テメェ!!どういうつもりだ!!」

「な、何が!?何の事!?」

「しらばっくれるな!!
俺に鉄パイプ落としてきただろうが!!」

俺はありったけの怒りを込めながら天野に怒鳴った

「えッ!?してないよ!?ずっと一真達といたよ!?」

「う、うん。
今の今までずっと葵と一緒にいたぞ。」

天野と一真が必死に弁解してきた・・・・あれ?

「でもあれは確かにお前だったぞ!?
えぇ!!テメェラもろとも冥土送りにーーー」

俺は言い終わる前に火球を頭に当てられて見事に倒れた。
つ、椿…酷いよ・・・

「あちゃちゃちゃちゃ!!」

さらに、俺の髪が燃えてあっちこっちに走り回ってしまった

……

……
……

「はぁ…熱かった…。」

「頭は冷えたか…。」

「何とか…。」

火が水を掛けても消えず風呂に氷水を入れて頭を突っ込んだら何とか消えてくれた…。

「で何があったんだよ～？」

さらに顔を火照らしている椿さん…。
熱上がってない？大丈夫？

「ん…あぁ…それが…。」

～～１０分後～～

「…とこんな感じかな。」

俺が説明すると

「「「かなり運が良いな（良かったね）！？」」」

っと三人に言われ俺は怒鳴った
帰り道に突然耳が痛くなり、頭痛がしてフラフラしていると後ろから葵（偽）が現れて鉄パイプを落とされてダメだと思ったと同時に

影虎に戻って何とかなって、女は何処かに去っていたと嘘を込めながら言った

「気になるな…。」

「ん?何がだ?」

一真が顎に手を当てて口に出すので俺は聞いてみた。

「耳が痛くなって激しい頭痛がしたんだろ?」

「そうだが?それがどうかしたのか?」

「いや、戒…俺がいる事務所からの情報で被害者の男も同じ様な事があったんだよ…。
なんか違和感を感じてな…。」

一真の話を聞いて俺は悩んだ

「うーむ…。
確かに気になるな…。
では、元に戻った所で検索でも始めるか…。」

そう言って久し振りに俺は目を瞑って頭を抑え記憶消去応用編『検索』を掛けた

「なるほど…。
能力は圧力調整。(バイオニック・コンプレッサー)
気圧を操作したり出来る能力。
恐らく気・・・・・・」

俺は説明を終えて犯人が分かったのだが

「犯人については…こいつはちょっと言えないな…。」

「はぁ？何で？」

一真が質問してくるので

「これは犯人に直接会って聞いた方が良いな…。
それに、証拠もないのに突然お前が犯人だ！！なんて言っても無駄だしな。」

「納得…。」

一真は、どうやら納得をしきれてなかったが、面倒な事を避けるために今回は納得して貰おう。色恋沙汰の問題は俺が解決するべき事じゃない

……

……

そして、朝。

「「「・・・何故？」」」

一真と椿と天野は俺を見て固まっていた。
俺が突然自ら影千代モードになったからだ。

「まぁ、気にすんな♪
と言うわけでＬｅｔ‘ｓ　ｇｏ♪」

「「うわぁ（キャッ）！？」」

俺は一真と天野を部屋から出し、俺達は学校に向かった。

……

……

……

そして、学校について俺と一真は屋上ですべての授業をサボる事にした。

今回は学校に居る事が大事なんだ

「何故抱きついてくる…？」

俺が一真の首に手を回して抱きついていると一真は顔を真っ赤にしながら俺の方を見ずに言ってきた

そりゃおれだって恥ずかしいよ？あえて胸当てたりものすごく恥ずかしいんだけど・・・

「これも、犯人を誘き寄せる作戦なんです…（涙）」

と泣きながら言った

俺だってさっきから恥ずかしいし胸が変な感じになって来ててもうやめたいんだよ・・・

「一真…落ち着いて聞け…。

あのな――――。」

「――――了解した…。」

俺は一真作戦を耳打ちして一真は承諾した…。

すると

ガチャリ…。

「「ん？」」

突然扉が開いてそちらを見てみた。

すると…。

「か、一真？にか、影虎君？」

突然、天野が現れて、俺達を泣きそうな目と驚愕を受けた表情で見てきた。

何故だろうと思って自分の現状況を確認してみた。

真っ正面から女である俺が一真に抱きついている。

・・・・・・・・・・あ！？

「影虎君に、浮気されたー！！」

天野は突然泣きながら走り去っていく。俺はヤバいと思った

「「ちょっと待てぇ！？」」

今の発言で走り回られたら変な噂が広まり兼ねないため俺達は天野を全力で追い掛けた。

「ご、ごめんなさい…。」

「全く…。

突然誤解して飛び出してくなよ…。」

あれから天野を取っ捕まえて、泣き止まして事情を説明した。
特に周りの目線は果てしなく痛かった・・・

「とりあえず、こう言う作戦だからよろしく♪」

「はぁ～い♪」

と俺が少し小さめの声で言うと天野は元気の良い返事をした。
うまくいくのかな？
……
……
……

「んじゃ、またな♪」

「ん。
じゃあな。」

「バイバ～イ♪」

俺と一真と天野は別れて別々に歩いた。
さてと…。
あとは待つだけだな。
俺は形態を通話状態のまま置いておきそれをポケットに突っ込んで歩いていた
そう、俺は囮・・・つまりは餌・・

俺がそう思いながら歩いていると再び耳鳴りがして頭痛が起こりだ

した

「来やがったか！？」

ガァン！！カランカランカラン

俺の上に鉄パイプなど落下して来た

その瞬間に俺は右背中から黄金に近い羽を出してそれらを風邪で払いのけた

もちろん出した瞬間に失神しそうになって体中に嫌な汗かいて力張らなくなったし風が起こった瞬間に羽が3枚も抜け落ちて心臓が3秒近く止まったが何とか意識は保ててる

すると

ポニーテールの制服を着た女がこちらを向くなり驚いて走り去ろうとしていた。

「逃がすかよ！！」

どうやら俺にみられたと言うより一真に見られるのが嫌で逃げ出したのね・・・

しかし、鉄パイプを二本持った俺に行く手を阻んで逃げ場を奪った。

「もう、正体を明かそうぜ。
八九二三九（はちくじみく）さんよ！！」

俺は、犯人の少女の名前を呼んだ・・・往生際が悪い奴は嫌いなんだよ

「ッ！？」

俺に名前を言われて女は驚いていた。
そして、女は一筋の涙を流して観念したかの様に髪を掴んで横にづらすとカツラだったらしくするりと落ちて、ショートのピンク色の髪が街灯に照らされていた。

「コイツって…。」

一真が女を指さしながら俺に聞いてくるので

「そうだよ…お前とぶつかった女だ…。」

俺がそう言うと一真と天野は驚いていた・・・まぁ驚くよね・・・

「なんで？」

この静寂のなか、ポツリと天野が呟いていた。

「なんで私の真似をして人を襲ったの！？どうして！？」

「・・・」

天野がぶつける様に八九二に怒鳴ったが、八九二は答えようとはしなかった…。
だが、俺は理由がなぜか今はわかってしまっていた・・・影千代状態のせいか女心が良く判るんだよね・・・後、勘が鋭くなる・・・

「嫉妬だよ…。」

「えッ!?」

「ッ!?」

俺が答えると天野は驚いていて、八九二は顔を上げて俺の事を見ていた。

「一真…お前、４月半ばにこいつとあってるんだよ…。覚えてねぇか?」

「・・・」

そんな昔の事を言われても覚えている訳が無い…か。

「はぁ〜…。

このずぼら男が…。

コイツはテストの時に間違えて消しゴムで消そうとしたが、消しゴムを忘れて困っている最中にお前が後ろから声をかけて消しゴムを渡したんだよ…。

あの丸い消しゴムをな…。」

俺が先ほど女の記憶を呼んでいたので動機などははっきりとわかっているので代弁した。たく、子の鈍感男が・・・呆れてくるぜ・・・・たく女の俺からこんな事・・・・・あれ?俺そろそろ戻らないとやばい?最近・・・俺ヤバい!!!

一真が思いだしたようだ・・・が！

「でも…それとこれとが何の関係があるんだよ？」

「ここから先は俺じゃなく、コイツに聞け！！
そして、一真…その答えをちゃんとコイツに教えてやれ！！」

俺はこいつの鈍さにいら立ちがやまなくなったので怒鳴りながら一真に言った

「？？？」

一真は全く訳が分からず首を傾げていた。殴るぞ！？

「・・・」

しかし、八九二は黙っていて、喋る気配は無かった…。

「大丈夫、言うだけでも言ってしまえ。
例え無理だったとしても無駄な事じゃないから。」

と俺が優しく慰める様に八九二に言うと、八九二は何かを決心して一真の方を向いた。

「負導さん…私…あの時消しゴムが無くて困っていたの…。
こんな、性格だから先生に言うことも出来ずに…。
でも、後ろから突然肩を叩かれて…消しゴム無いのか？って聞かれた時はビックリして私は頷いた…。
すると、あなたはこれを使えって言ってくれたの…。

それがあの丸い消しゴム…。
その後先生にカンニングで疑われてあなたは俺から話し掛けたと言って教室から出ていった…。
それから、私はずっと消しゴムを変えそうとタイミングを見計らっていたけど、タイミングが分からなかった所か、恥ずかしくてあなたの前に出れなかったの…。」

「・・・」

一真は黙って八九二の言葉を一つ一つを聞いた。俺は天野を横でなだめながら落ち着かせていた

「それなのに、天野さんはあなたに喋り掛けていって…ドンドンとあなたとの距離が遠くなっていく気がして許せなかった…。
だから、私は…天野さんに変装して人を襲ったの。」

「「ッ!?」」

「勿論ダメな事って分かってた…。
こんな事しちゃいけないって…。
でも、私は幸い誰にも…先生にも能力を知られていない、それに、天野さんと似た能力を持っているから大丈夫と思ったの。
そしたら、1日目は上手くいけた!!そう思ったの…。
でも、あなたのせいで予定が狂ったの…。
あなたが天野さんを助けたから…。」

突然、八九二は涙を流して泣き出した。好きだけど好きと言えない好きな相手がだれかと一緒に居る・・乙女にゃ辛いことだろうな・・

「どうしてなの?

どうして天野さんを助けたの…？
私は…それから、分からなくなって…あなたに近づく女の人を殺そうとしたの…。」

「なッ！？」

「天野さんを殺そうとしたけど、あなたの近くにいて、殺せなかった…。
なら、桜色の髪をしたあの人を殺そうとした…。
でも、次来てみたらあなたに抱きついていて死んでなかった…。
だから、私は…もう一度殺すために…もう一度殺しにかかった…。
今度は失敗所か…あなたに…。」

八九二はそこまで言うと泣き崩れてしまった…。あ、やっぱり俺、の事勘違いしてたんだね・・

「何でなんだよ…。
どうして俺に近づく女を殺さなきゃいけなかったんだよ…。」

「・・・」

「答えろよ…。」

一真は八九二に近付いて見下しながら尋ねていた。
わかんねぇのかよ・・この鈍い男は間違いなく下手すれば当麻以上の女の敵だな・・・

「あなたの事が…好きだから…。」

「・・・えッ！？」

一真は突然抱き締められて予想外の事を言われ、身動きがとれなかいようだった…。

「私は…あなたの事が…大好きなの！！」

と泣きながら大声で言われ、一真は困った表情をしていた…そして一真は八九二の両肩に手をおいて引き離した。

「ごめん…。」

と謝った…。まぁ正しい・・

「お前の気持ちには答える事は出来ない…。」

「ど、どうしてですか…？
私は…ずっとあなたの事を…。」

此処でくいさがる三九・・・可哀想だけどお前の思いは今は絶対に通らない・・・

俺はそう思いながら両腕を組んで二人の様子を見ていた

「それは…俺はもう、葵と付き合っているからだ…。」

「・・・えッ？」

一真が真実を言うと、八九二は目を見開いて驚いていた…。
そして…。

「また、天野さん…ですか…。」

「八九二？」

とフラフラした足取りで一真から放れていく。
まさか・・・・ね♪

「また、私は…大切な人を…奪われたの…？
そんなのイヤ！！イヤ！！イヤァァァア！！」

「「「ウグッ（キャッ）！？」」」

突然、耳がキィィンと鳴っていたくなり頭が割れる様な頭痛がして、
体が重くなって全員ひざまずいてしまう…。やっぱり見た目が幼い
感じだから癇癪起こすと思ったぜ

「あなただけは…許さない…。
もう…大切な人を奪われたくない！！」

そう言って八九二は天野の真上に鉄パイプを振り上げた

その瞬間に俺の腕時計は、九時を刺した

ｃｏｍｅ　ｏｎ　『異世界樹（ユグドラシル）』

「ッ！？」

俺は三九の鉄パイプを『異世界樹（ユグドラシル）』の桜色の優しい光を放つ刃状の
枝で防いだ。

「9時…ジャスト…。
間に合ったみたいだ…。」

俺が元に戻っていて立ち上がった・・・すると三九は俺を見て驚きの表情を隠せないでいた。

「あなた…女性じゃなかったの？」

「俺は…少し…特殊な人間…でな…。
一真…早く…何とかしやがれ…。」

ほんとうなら俺一人で解決できるんだけど今回は演技してでも一真に解決させる。そう決めたのであえて痛くも痒くもないのに苦しんでみた

「今…やってる…とこだよ！！」

「えッ！？」

一真は何とか気圧を元に戻すことが出来て八九二は驚いていた。

「ふぅ～…やっと元に戻った…。」

俺は頭をコツコツと叩きながら言った後、八九二を睨んで…。

「さぁて♪この喧嘩屋牙桜に喧嘩を売った奴はどうなるか教えてや
「待て…影虎…。」る…ってえぇえ！？何で！？」

俺の言葉を遮って一真が止めるのでかなり驚いた。

（俺から一真に振る予定だったのに！？）

「今回は俺が原因だ…。
だから…俺なりのやり方でやらせてくれ…。」

「・・・わかったよ…。
その代わり、また今度食い物奢れよ…。」

そう言って俺は異世界樹（ユグドラシル）を消して、胡座をかいて座った。
珍しくやる気ですね

「さて、八九二…。
こっちの話は終わったぜ…。
今度はあんたとの話だ…。」

「いや…来ないで…来ないで！！」

「グッ…。」

急に一真はまた、ひざまずいてしまった。

「はぁ…はぁ…。
悪かった…な…。
「おい！？一真！！」
お前の気持ちなんか…知らなかった…。
昔の…事も…忘れてた…。」

一真はどんどん三九に近づいていく

「どうして…？どうして…こっちに来るの？

そんな状態で…。」

確かに人間の一真には辛いでしょうね・・・でも、やっぱり・・俺が手出すけした方が・・

「八九二…。」

そして、いつの間にか一真は八九二の前に居て…。

「昔のお前に…何があったかは知らない…。
でも、こんな事で…人を傷付けるのは…間違ってる…。
お前だって…分かってる筈だ…。
だから…もう、これ以上罪を重ね…る…な…。」

「――――ッ!?」

「一真!?」

一真は急に倒れた・・・馬鹿が!!身体を追い込みすぎだ!!

……

……

……

三九　ｓｉｄｅ

「イヤァァァア!?」

負導さんが私の能力のせいで気を失い私は知らず知らずの内に涙が溢れ、叫んで、崩れてしまった…。

「八九二さん！！落ち着いて！！」

突然後ろから天野さんが抱きしめてきた。

「放して！？私は…私は――――。」

天野さんに突然振り向かせられて私は一瞬何が起きたか分からなかったが、直ぐに理解した…。

私は頬を叩かれたのだと…。

「な、何するのよ！？」

「キャッ！？」

私は天野さんの肩を掴んで押し倒した…。

「あなたがいなければ…。

あなたの…せいで…。

あなたのせいで！！」

感情が溢れてしまい、私は涙がポタポタと落ちていく…。

すると…。

「私だって…あなたが憎いよ…。」

突然天野さんが口を開いて言ってきて、私は驚いた…。

「私に罪を被せる真似をして、友達を傷つけられて…一真を傷つけられて…。

あなたが心底憎いよ…。

でも、私にはあなたの気持ちが良く分かるの…。」

「ッ！？あなたに私の気持ちなんか分かりはしない！！」

「分かるよ！！」

「ッ！？」

天野さんに言い放たれて私は怯んでしまった…。

「私だって…一真に振り向いて貰いたくて…卑怯な事したの…。
でね…私もその事がバレちゃって…物凄く怒られた…。
だから…あなたの気持ちが痛いほど分かるの…。
だから…もうやめよ…こんな事…。
まだ、間に合うから…。」

天野さん言われて私は力を抜いた…。
そして、気づけば私は天野さんに抱き着いて泣いていた…。
負導さん…ごめんなさい…。
そして…。

「天野さん…ごめんなさい…。」

「・・・うん…。」

私は天野さんに謝ると天野さんに頭を撫でられた…。
謝らなきゃいけないなら…初めからしなきゃよかった…。

三九　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

……

……

……

翌日

「はぁ～まさかこうなるとは…。」

「まぁ、自業自得だ…あんな無茶して…。」

俺は現在病院に入院している一真の横で椅子に座りながらくるくる回っている…。

俺はついでにとおもい一日、桜小路『先生』をしていた。最近こづかいがヤバい！！

そして、俺は暇なのでリンゴの皮をナイフで剥きながら一真の馬鹿な行動に呆れていた…。

「全く…筋肉裂傷にところどころの骨にヒビが入るって、俺がいなかったら明らかにヤバかったぞ…。」

「悪い悪い…。」

一真がそう言ってくるので俺は本当に分かっているのか？と疑った

「ところで…あいつ…大丈夫かな…。」

一真は病院の窓の外を見て呟いた。

八九二、あのあとアンチスキルに保護されたらしいが…。まぁ本当なら退学は免れないだろうね・・・ただ、近くに居たのが俺だからよかったんだよね・・・色々と手回しして保留くらいにはしてやったさ・・・ああいう弱弱しい奴ってのは、見過ごせないんだよな・・・相変わらずそんな性格だぜ

「・・・さぁな…まぁ、天野が今面会に行って帰って来るところだからその時に聞けば。」

「それもそうだな…。」

俺は天野が三九の友達になったと教え面会に行ったと伝えた

「ほいっ出来た。」

アレこれしているうちに俺の超大作が四つも完成した

「ん。
どう…も……。」

一真は俺の切ったリンゴに手を出そうとしたが出せなかったようだ…フフフ。
それは、リンゴが龍、虎、亀、不死鳥と凄まじい作品になっていて食べるのが勿体無く思えたにちがいない…。

「……俺は遠慮しとく…。」

「やっぱりな♪
じゃあ、ここに飾っとくぞ。」

俺は笑顔でリンゴの芸術を乗せた皿を棚に乗せて帰った。

この日はその後特になんいも無かったがまさか次の日にあんな事が起こるなんて想像もできなかった・・・

つづく

病人看病（もういろいろと大変）（後書き）

以上です。途中で登場したのは、小説家さんの小説とある未来の学末戦争の尖立（せんだて）　襟香（えりか）さんです。

それにしても一真もフラグが結構多いからこういうことが一回じゃ終わらないかも♪（ザマァ♪）

次回は・・・ホラーで幽霊なお話です。お楽しみに

心霊現象（ガクガクブルブル）（前書き）

今回は、今まで史上稀に見るおはなしだと思います

本当にすごい世界観になります。

では・・・・・・どうぞ

心霊現象（ガクガクブルブル）

深夜…

此処は桜小路家、そして、大きな窓とカーテンがある部屋の大きなベッドの上で身を寄せ合いながら眠っている影虎と椿は、すぅすぅと寝息を立てながら眠っていた

すると急に彼らが眠っている部屋の窓のかぎが少しずつ緩み始め・・・勝手に開き窓が少しだけ開いた

その瞬間に部屋には冷たい風が流れ込み二人は寒がるように身を寄せ合った

そして、急にカーテンが蠢いた

その瞬間に影虎が急に起き上がり全員から『異世界樹（ユグドラシル）』を生やし周りを警戒していた

すると椿が目をこすりながら影虎に

「ろおしたの？影虎」

そう言うと影虎は一度、あたりを見渡し『異世界樹（ユグドラシル）』をひっこめて椿の頭を撫でて

「気のせいだったみたいだ」

そう言って影虎が眠り椿が眠ろうとしたその時！！

（!?身体が動かない?）

椿は、急に自身の体が動かなくなり声も出せなくなり驚いて意識が覚醒していた

すると急に自分の手が勝手に動き影虎の体を離すと身体が勝手に仰向けになった

その時椿はおどろくべきものを見た

青白く怪しく透ける肌の長髪の女性が自信を物凄く恨んだような目で見ていたのだ

（こ、こわい!!恐い影虎助けてよ・・・声が出ない!?）

椿は必死に影虎を見るが影虎は眠っており自身の手が勝手に影虎に布団を掛けて気づけないようにしていた

そして、恐ろしいほどの恨みを持ったような目をした女が手を伸ばして自身をみると

（か、身体が勝手に!?い、行きたくない・・・いやだ・・・やめて・・・）

急に椿の体は、動き出し立ち上がり一歩一歩、女に目掛けて歩み出した

そして、女の足もとまで行くと

女が椿の顔の前に自身の顔を持っていきそして、右目で椿の左目を覗き込んだ

（いや、やめて！！！）

「“憎い・・・憎い・・・お前も憎め！！”」

そう女が言った瞬間に椿の意識は途切れた

・・・

「ワ田し、キョ右は、チョッと嶽、行キたい所がアルん堕。」

っといきなり言われたそして話を聞くと

・・・

「いや、別にそんな意味は無い。
何だか、椿が突然行きたいと言い出して、何ならみんなの方が楽しいからと言う理由で天野と一真を誘おう♪と言う話に無理矢理発展した。
それに、旅行費は椿が払うらしいが…。」

「余計に怖い…。」

一真がくすぶっていた・・・

「おウ♪
オレが全ブ払う♪
ダっテ、かずマ達ジャ多分無リな金ガクだロうし♪」

「・・・」

てか、今朝から椿に何かスンゴイ違和感を感じるんだが、気のせいかな？

「とりあえず、頼む…。
今回は騙されたと思って付いてきてくれ…。」

俺は頭を下げて頼み込んだ…。

「う～ん…どうする？
あお…い……。」

「へ♪」

天野はすでに荷物を纏めている…。
「一真…頼む!!マジでお願い!!俺まだ死にたくありません!!」
なんだか椿の様子がおかしいんだよ!?断ったらおれが死ぬと言うか椿が死んでしまいそうなんだよ!!さっきからずっと顔色悪いし汗だって掻いてるんだよ~
「お前死なないだろ…。」
「ふんふん♪ふ~ん♪」
となりで天野が物凄くうれしそうに準備していた。
「分かったよ…。
行ってやるよ…。」
一真はため息混じりな声で了承して、用意を始めた。
ようやくミッションコンプリート
「よし!!決まりだな♪
Ｃｏｍｅ　ｏｎ!!異世界樹(ユグドラシル)!!」
「「へ（ふぇ）？うわぁ（キャッ）!?」」
俺は異世界樹(ユグドラシル)を一真と天野の身体に巻き付かせてそのまま下に止めてあった車に乗せた
「よし♪出発♪」
「ちょっと待って!?

まだ、シートベルトしてないから!!待てッ!?」

一真が何か言っていたが俺は、迷わず運転を始めた・・・バイクでなく・・・椿コレクションのひとつのジャガーでね

「か、影虎?
この安全運転は何?」

一真がいきなり聞いてきたので俺は面倒だったが答えた

「何って、だってバイクと違って風を受けれねぇし、何よりバイクと違って大きさとか、運転の仕方が全く違うから。
あと、ぶつけたら椿に燃やされるから。」

「・・・納得…。」
一真はそう言って黙り込んでいた

その後すぐ学園都市の関所を俺の情報操作でスルーした。

それから２０分くらい経って天野と椿も一真も眠っていたので俺も眠たくなり

「俺も眠たいな・・・でも寝るわけには・・・・・運転よろしくセフィー」

俺はそう言って『異世界樹（ユグドラシル）』の枝を呼び出し運転させながら椅子を後ろに倒して眠った

・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

スパパパパン！！

「イタタタタタ！？痛いわ！？セフィー！！
何なんですか！？どうしたんですか！？」

突然、異世界樹（ユグドラシル）が俺の頬を往復ビンタをして無理矢理俺を起こそうとしていた？

「ん？あぁ…ガス欠だな…こりゃ…。」

俺がメーターを見るとガソリンがゼロになってたので俺はそう呟いてドアを開けて外に出た

「とりあえず、椿の言ってた旅館は目の前だし、仕方なく車を押していくか…。
一真♪手伝え♪」

「はぁ…了解…。」

一真は天野の服装をただしてから降りて、一真は車の重さを覚えていた重力変化（グラビトン）で軽くして、一緒に押して進み村に入った。
村に入ってからなぜか俺の野生の勘が危険だと言っていて俺に『異世界樹（ユグドラシル）』が逃げた方がいいと警告して来た

（この村何かおかしいぞ何かさっきから背筋がゾクゾクと嫌な感じがする。この村何か居やがるな・・）
俺は一応周りにいる人達に用心しながら車を押して進んだ。警戒していたが何も起きずに旅館までたどり着いた。

「「いらっしゃいませ。」」

と二人の巫女の姿をした人が現れて出迎えてくれた。
その時、チラッと二人は車内を見て…。

「「こちらの方々も宿泊される方ですか？」」

と俺達に聞いてきた。

「あぁ、そうだ。
悪い、直ぐに起こす。」
そう言って俺は椿を揺すって起こした。

「あれ？」

一真が鏡を見て首を傾げていた。

「一真何やってんだよ？
早く天野起こせよ。」

「あ、あぁ…。」

俺は一真をせかせた。なんだ？この巫女さん二人・・・・気配が無い？・・・ていうか生気が無い？

……

……

……

「「「いらっしゃいませ。」」」

「「・・・」」

「「うわぁ～…。」」

旅館に入るなり従業員であろうか、数人が出迎えてくれて天野と椿は中を見て驚いていた。
確かに中は古風で綺麗だ。だがなんか嫌な感じがする。
巫女もそうだがこの女将さんもなんか変だ・・・
しかし、従業員のみんながクスクスと笑っているのが少し気になっておれは気にするのをやめたちょっと思いすごしか…

「お客様、こちらへどうぞ。」

そして、一人の巫女さんが部屋の鍵を持って俺達を先導していた。
ロビーを歩いていると翁鏡が目に入ったそしてそこを通り過ぎようとした時、横目に鏡に映っているはずの俺の横に桜色の髪をした影千代に見えたしかも、俺の首に手をまわして下を出して俺の頬をなめてた?

「ん?」

「どした?影虎?」

「・・・」

俺は見間違いか?と思いながら鏡を見ていると

「影虎?

オイッ!!影虎!!」

「わぁ!?」

俺は一真が顔を覗き込んで名前を呼んできたのでかなり驚いていた。

「何してたんだよ…影虎…。」

「えっ?あぁ…。

・・・なぁ、一真。

あの鏡見てどう思う?」

「はぁ?」

俺が鏡を指さして一真がそこを見に行ったが

「何もないけど?」

「・・・なら良いが…。」

「?」

俺はそう言うと椿達を追いかけるように歩いた

だって、俺の頬がなぜか濡れたように湿ってるんだからよ・・・・

ここって幽霊屋敷?

……

……

……

「こちらがお部屋です。

どうぞ。」

巫女さんが部屋の扉を開けて手を差し出していた。
中はいたってシンプルな和室で押し入れやテレビ、机が一卓だけ。
だが、窓からの景色は見渡す限り山で絶景であった。

「浴場は一階の突き当たりになっております。
何かあった場合はそちらの電話でお知らせください。
では、ごゆっくりどうぞ。」

そう言って巫女さんは丁寧にお辞儀をして去っていく。

ザザッ…。

「ん?」

しかし、何か後ろの方で雑音が聞こえたので、そちらを振り返って見てみると、電源の入っていないテレビがあるだけで何も無かった。

「・・・まさかな…?」

「なぁ、一真。
さっきテレビの砂嵐画面の雑音みたいな音聞こえなかったか?」

俺が一真にも聞こえたのかな?と思い聞くと一真は顔を真っ青をにしていた

「一応、聞こえた…。
」
「やっぱり、気のせいじゃなかったのか。」
「でもテレビはついてないよな…?」

俺達はジーッとテレビを見ていた。
すると…。

『今日も1日グイッと行こう!!』

「「ギャァァア!!」」

突然テレビがついて俺達はかなり驚いた。俺なんて尻もちをつきかけた

「一マに影トら?
どウし太?」

「「つ、椿?」」

俺達は声の主を見ると椿がテレビのリモコンを持って座っていた。
脅かさないでくれ!!

「物凄い驚きようだったよ。
二人とも何かあったの?」

「「・・・何でもない…。」」

天野の問いに俺達は流すように答えた。

そして、俺はあるものが気になった

時計だ。すごく気になった…

「一真、今何時だ？」

「はぁ？え～と…４時半だけど？」

俺が聞くと一真がケータイを開いて確認していた。

「そうか…。

はぁ、壊れてるの時計を置くなよな…。」

俺は文句を言いながら部屋の時計を取った。

妙な事に時計の針はピクリとも動いていなかった。

「まぁ、仕方ないんじゃね？

時計は俺達の携帯で分かるし。」

「それもそうか。」

そう言って俺は元の位置に時計を置いた。

しかし、時計の時刻は４時４４分ピッタリで止まっている…。

……

……

「お待たせしました。

本日のお食事でございます。」

「「「おぉ。」」」

机の上に並べられた料理を見て感動した。

魚の造りや塩焼きさらに真ん中にはすっぽん鍋があった。

「では、お召し上がり下さい。」

「「「いただきます！！」」」

そして、俺達は豪華なご馳走を楽しく美味しく頂いた。
だが、しかしこのあと、あんな大変な事になるなんてな・・・・

そして、俺はもっと早くにきづいてやるべきだった…

つづく

心霊現象（ガクガクブルブル）（後書き）

恐怖がじわじわと影虎たちに迫ってきました

初めから飛ばしてます！！

さぁさぁ一体この後どうなるのか・・・・ではどうぞ

悪霊退散（ゴーストバスターズ）（前書き）

いよいよ、始まります

ホラーだけど影虎ならへっちゃらな回です。

そして結構シリアスです。

では、どうぞ

悪霊退散（ゴーストバスターズ）

俺達は晩飯を平らげてトランプで遊んでいた。

「私、ワンペア。」

「俺は、フルはうス。」

「俺はストレートフラッシュだ。」

「甘いな♪俺、ファイブカードだから♪」

「「「・・・」」」

良いかげん誰か俺のいかさまにきづかないのかな？まぁ単細胞の集まりだし気付くわけないかハハハハ

「一真、早くカード渡せよ。」

「あ、あぁ…。」

一真はカードの束にカードを置こうとした瞬間、ピタッと手が止まった。

「ん？どした、一真？」

「いや、影虎俺が組んでやるよ♪」

「はぁ？」

「まぁ、いいから♪いいから♪」

「なッ！？」

俺はほぼ無理やりカードを取り上げられカード枚数を数えられた。

「やはりな…。」

ばれたか・・・

「……」

気が付くと俺は汗をダラダラと流していた。

「か、影虎君…大丈夫…？
物凄い汗だよ？」

天野がそれに気づいて気遣ってくれた

「影虎♪暑いなら上着脱いだら♪」

「へ？」

「ほら♪汗かいて暑そうだし♪な♪」

「・・・さて、風呂にでも入って来ようか…「逃げんなよ…。」・・・。」

俺が逃げようとすると一真に捕まった

「フルえてるケど、ダイ丈ぶカ?かげ虎?」

「えッ?あ、あぁ…、地味に冷えてきてな。いやぁ、今日は暑いし寒いな（ぱさ…。）・・・」

俺が手を上げて汗を拭った瞬間、パーカーの袖から五枚のトランプのカードが落ちて、俺はピシッと固まった。

「あれ?どうして影虎君のパーカーからカードが?」

天野が広い上げてそれを全て表にして見ていた。

スペード１０、スペードＪ、スペードＱ、スペードＫ、スペードＡ

見事に最強のロイヤルストレートフラッシュであった。

「か、影虎君…如何様してたんだ…。」

「オまえ…最テいだな…。

今カラお前抜キでスルから…。」

「それは酷くない…「異ロんは?」あ、ありません（涙）」

（ちょっとしたお茶目ないたずらなのに・・・でもずるしてたんだから文句いえない・・・）

……

……

……

そして、あのあと椿が風呂に入りにいた後俺はやっぱりこの村が可笑しく感じた・・・一体この村はなんだ?

……

……
「影虎？どうした？」
……
一真がいきなり声を掛けてきたので俺は、振り向き
「ん？いや、別に。
ただ、気になることがあってな。」
「？気になること？」
一真は首を傾げて俺に聞いてきた。
「あぁ、一真。
正直言ってこの旅館、いや、この村全体が何か可笑しくないか？」
「・・・」
俺が本能で感じた違和感を話すと一真も心当たりがあるのか黙り込んだ
「一真！？」
「うわぁ！？」
突然ドアが開いて一真に天野が抱き着いていた。
何事ですか！？
「ど、どうした？葵？」

「で、出た…。
出たんだよ…か、鏡にお、オバケが！！」
天野はテンパりながらカミカミに答えた。
オバケって・・・やはりか！？
「はぁ？オバケ？
自分の顔を見間違え――――。」
一真がデリカシーのない一言を吐いたので天野と一緒に殴った・・・
「少しは女心をわかれ…。」
俺は手を振りながら言った
「そんな事よりも天野。
椿は？」
「あッ！？椿！？そうだ！！
それが、突然いなくなっちゃったの！？」
「「はぁ？」」
天野の言葉に俺達は二人同時に声を上げた。
い、いなくなった！？何で！？どこで！？いったい・・・なんで・・・
「天野！！一から事情を教え「ドンドン！！」「「・・・えッ？」」」

突然、押し入れの中から音が聞こえて俺達はゆっくりとそちらを見た。
そして…。

ドンドンドンドン！！

「ヒッ！？」

押し入れの襖が内側から何度か叩かれて、天野は怯えている。

「・・・」

俺が押し入れの襖に手を置いた。

「とりあえず、開けるぞ。」

「「あ、あぁ（う、うん）。」」

ガラガラガラ…。

俺は扉を開いた。
すると、中には青白い男がいてこちらを見て笑っていた。

ピシャッ…。

そして、それを確認するなり俺は扉を閉めた。

（来ちゃったよこう言う不確定要素の塊・・・めんどくせ～・・・）

「「「・・・」」」

沈黙…。
そして、そうしている内に…。
ザザッ…。
「「「ッ！？」」」
突然テレビがついて、俺達はそちらを見た。
もちろん誰もリモコンなんて持っていない。
ご丁寧にリモコンはテレビの横に置いてあった。
そして、砂嵐画面のテレビを見ていると赤い文字が浮かび上がってきた。
内容は、『諸君、儀式の時が来た。
さぁ、前祝いに宴を始めよう。』
と書いていた。
宴？儀式？何の事だ。
そして、テレビと部屋の明かりがプツンッと消えた。
そして…。
「「「――――ッ！？」」」
俺達は周りを見て驚いた。何故なら、俺達の周りには信じられない事に透き通った色、いや、向こう側の壁が見えるほど本当に透き通った色少しの光を放っている血塗れになった、「人」の様な形をした何かが目の前に何人もいた。と言うより幽霊だ
そいつらがまず俺の体をそこらじゅう掴んで噛みついてきた痛みがあり血が出るが俺が振り払おうとしても俺は触れなかった

「しゃらくせー！！」

「「「――――ッ！？ガッ！？ァ〝ァ〝ァァァア！！」」」

俺は全身から『異世界樹（ユグドラシル）』を出したが刺さらず未だに噛み続けられるので桜色の粒子を全身から旅館の隅々に行きわたらせるほど出した。すると幽霊たちは苦しみながら俺の周りから消えた

（どうやら生命力を直接浴びるのはつらいらしいな・・・椿を助けなきゃ）

「椿ー！！何処だー！！」

俺は直ぐに大慌てで走りだし部屋を飛び出して何処かに行ってしまった。

「「「アァ…ウゥ…アァ…。」」」

っと旅館を走っているとそこらじゅうから幽霊いやスタンドと呼ぼうか・・・ゴーストが俺に襲いかかって来て手足を掴まれると粒子を放出して退けるの繰り返しだ

さすがの俺も疲れ初めていたいくら探しても椿が見つからないんだ・・・そして、俺は目の前を扉が塞いできたので『破壊傷倒（ブレイクンブレイカー）』で突き破りながら幽霊無双をしていた

すると俺は始の旅館のフロントの部分に来ていた

よく見ると建物自体がボロボロで俺らは幻覚でも見せられていたの

かと思い俺を負って廊下から来た幽霊の大群に『破壊傷倒（ブレイクンブレイカー）』で引き裂いたが意味が無い事がわかったので粒子で退けた

するとさっき俺が気になった鏡が後ろにあり俺は驚いた

俺が鏡に映っていないんだ・・・そして、鏡に映っているのは影千代だ

鏡のなあの影千代は俺のことをいやな目つきで見ると急に鏡から飛び出してきておれの体御鏡の中に引きずり込んできた

・・・

「なんでお前がいるんだ？」

俺がそうきつく言うと影千代は上品に笑いながら

「私は、あんたたち四人の中で一番綺麗だと思われている女の姿になってるだけよ？ただ、私の好みがあんただったから此処に引きずり込んだだけ♪ねぇ一緒に堕ちようよ？生と死なんて吹っ飛ばしてさ」

そう言って服を脱ぎながら迫って来る影千代・・最終的に一糸まとわぬ姿になった・・・普通の男ならこれだけでアウトで幽霊の一人になってしまうのだろうが生憎俺には。

「自分に欲情する性癖は無いんでね！！」

そう言って影千代の腹を蹴り驚いているか影千代のあごに拳を振り上げて殴り飛ばした

殴りつばされた影千代は驚いていたので俺は不敵な笑みを浮かべながら

「お前が化けてるのって主に女になった時の俺なんだよね？「え？」でね、俺はその姿が大っ嫌いでその姿が鏡に移ったらいっつも鏡殴ってるんだ♪でも、今は俺は実態を殴れる・・・こんなに素晴らしい事は無い・・だって自分を傷つけないで自分を殴れるんだからな・・・俺好みの焼き肉の肉みたいにしてやるよ♪」

「いや・・・嘘だろ狂ってる」

そう影千代が言っていたが俺は無視して殴りとばしたすると影千代の姿が歪みだし俺は気が付くと鏡の外に居て俺の見ていた鏡は粉々に砕けていた

そして、鏡のあった場所に血で狂ってるお前なんか死ねと書かれていた

遂に幽霊にまでトラウマを埋め込むことに成功しました♪

俺は喜びながら椿捜索を始めたそして、巫女さんやら村長などの霊が押しかかってきた

「めんどくせ~！！！」

俺はそう言いながら粒子を出そうとしたがこれ以上やるとさすがにチビ虎化してしまうのですぐにやめたが・・・どうする？『破壊傷倒(ブレイクンブレイカー)』は、意味がない・・・そうだ『絶対遵守(エンペラーコマンド)』と対をなすもう片方の目での力・・・左目の能力『絶対王政(エンペラーダビデ)』・・つまりは、生き物ではない物を無理やり命令に従わせる能力・・

俺はそう思いながら左目だけダビデの盾の紋章を発現させそして、霊どもに向かって

「王の名において命ずる・・・消えろ」

そう言った瞬間に俺の左目から血が流れると霊たちは苦しみながらその場から消えた

そして、横から男の霊が向かってきたので

〔『〜(消えろ)〜』〕

そう言うと俺に掴みかかってきた例は苦しみながら消えた

「これなら、何とかなるかな?」

そう思いながら俺は、一番嫌な気配のする場所に向かった・・・そこら辺から椿のシャンプーと最近初めてつけ始めた香水のような香りがしたから

「待ってろ椿、此処に居る奴ら全員、あの世じゃなくて地獄に送ってやるからな♪」

・・・

そう思って周りを見渡していると１０秒に居回襲ってきた奴らがこない・・・気配って言うか霊気を全く感じない・・・でもなんか違う・・・まるで何かに食われたみたいな感覚だ

するとふと椿の髪の借りがして振り返ると

俺がさっき降りてきた階段の入口に椿が立っていた

服装がいつもと違い真っ白な和服で帯の色が黒だった

そして、椿は俺の事を見て笑っていた

「おい、椿大丈夫だったか?怪我してないか?」

俺はすぐに椿に駆け寄り両膝を地面につけて椿を抱きしめた

すると椿は俺の顔を見ながら

「“ずっと待ってた♪あなたが生まれ変わって私の所に来てくれるのを♪”」

ズウバっと俺の心臓の辺りから肉を引き裂くような音が聞こえその音の発信源を見ると椿がエアの剣を持って俺の心臓に突き刺していた

ぽたぽたと俺の血が剣を伝って椿の手に掛りそれが地面に垂れていた

「なにすんだ・・・いきなり?」

俺が聞くと椿は優しく俺の方を見て

「“あたしを置いて言って何処かの女と幸せに生きられて嬉しかった?私は、あなたに捨てられたのにね♪だから私は待ったんだよ?あなたが生まれ変わって再び私の前に現れるのをね・・・そして・・・私と同じように絶望を味わって死んでもらうためにね!!!!!!今度はあなたが私に・・愛する者に裏切られて死ね!!!光龍!!!”」

椿がいきなり俺の事を光龍とよびあり得ない力で俺の事を押し俺を井戸に近づけていた

俺は椿に押されるがままどんどんと地面を削りながら後ろに下がってた

椿の様子がおかしいのは言うまでも無い・・・だがもっとおかしいのは椿が泣いていることだ・・・俺を殺そうと笑っていると同時に涙を流し泣いている

俺は、とりあえず椿の力を逸らすと剣が俺の体から抜け俺は後ろに飛び椿を見た

椿は、力なく倒れていたと思ったら急に重力を無視して起き上がり俺の方を見て

「“なんで逃げるの?また、私を置いて逃げるの?また、私を捨てて?そして自分だけは幸せに?”」

そう言うと椿は急に空に浮きあがりエアの剣を俺に向かって振ってきた

俺はすぐに剣筋から避けるように飛んだ

俺の居た場所は地面ごと真っ二つにわれていた

マジだマジで椿は俺を殺すつもりなのか？

「おい、椿・・・お前は俺を殺すつもりなのか？」

聞いてしまったそんなの見ればわかるのに・・・

「“光龍、あなたが私とあの子たちを裏切ったせいで・・・私は私は・・・ゆるさないゆるさない・・殺してやる殺してやる！！！！”」

もう会話がかみ合う気配も無い椿はただ苦しみながら俺に向かって剣を振ってきたので俺はそれを横へ前へとかわし続けていた

明らかに椿はおかしい・・なぜだ？・・・今回の相手は幽霊か・・・幽霊・・・憑依・・・あ！！・・・・・・・クソ俺とした事が幽霊の特性を忘れてた・・・つまり椿は何かに取り付けれてるのか・・・

「椿、今助けてやるからな♪」

俺が椿に対してそう言うと椿は無表情のまま俺に向かって飛んで来た

「・・・ちょっと痛いかもしれないけど我慢な♪」

そして、俺は椿の持っていたエアの剣をもう一度身体で受け止め椿の額に右手を置いて目を瞑りながら

「とっとと椿の体から出て行きやがれ！！！王道楽士！！！」

俺は最後の手段、相手に幸せだと言う感情を無理やり抱かせる屑な特技を発揮した

すると椿は剣を手から落とし頭を押さえて苦しみ始めた

「「“うぐあぁあああああ・・・いやぁ・・・忘れるものか・・・・お前を堕とすまで・・・消えるものかぁ～！！！！！！！！！！！！！！！”」」

っと椿の後ろに透明の人型の何かが出てきて苦しみながらもがいていた

今だ！！

俺はその姿を確認したのですぐに左手を前に突き出して真相掌握（トゥルースハンド）の巨大な手でその透明の何かを掴み椿をしっかりと右手で掴みそいつを椿から引き離した

しかし、椿は未だに苦しんでいた

そして、透明の何かは、俺の真相掌握（トゥルースハンド）を弾き俺に対して

「“無駄だ光龍！！その女と私の魂のつながりはキレてはいない・・貴様が新たに愛した女はもうすぐ死ぬさ♪いい気味だ！！！”」

っと下品な笑い声で笑っているようだった

椿の魂とつなってるってのか・・・ならやる事は一つだ

「あぁ~あ、最近どうも世界は俺に出し惜しみして欲しくないらしい・・・仕方ないか・・呼ぶとしましょうか・・王の名において命ずる戒めを断ち切れ…ていうかマジでおねがいがします『死の天使(グリムリッパー)』・・・また名を・・死神大王・・そして、愛称は死神先輩!!」

俺がそう言って自分の影に血を吐くと俺の影の形が変わり俺好みのゴーストのような仮面をつけた、黒を基調にした傷んだローブを身にまとった人間の白骨の姿の巨大な死神が現れた

そして、ボリボリと頭を掻きながら俺を見て俺にしかわからない声で

「くりょぁあああああああ

魂は、紫色と黒と白だった

（はぁ？魂が3体3？・・・まぁいいや）

俺はそれを見て死神に『『絶対王政（エンペラーダビデ）』』を使い

〔『｛（二人のつながりを・・・断ち切れ！！）｝』〕（ていうかお願いしますよ先輩）

俺の言葉と共に死神先輩はもう片方の手に黒く深い闇のような鎌を出し椿と霊のつながりを完全に断ち切った

その瞬間に椿は糸の切れた人形のようにたおれた

そして、死神先輩はその場から消えた

あの死神先輩は、俺に常に付きまとっている死神を喰らい俺の命を『異世界樹（ユグドラシル）』の代わりにつなぎ止めている死神殺しの死神さんだ。

『異世界樹（ユグドラシル）』が命なら死神先輩は、魂を守ってくれてるありがたい存在・・・久々に呼べたな・・・そして、あの人は物凄く男前で男の俺ですら男気に惚れそうになる・・

俺がそう椿を救出して安心していると透明のなにかが突如姿を現し始めた

俺は警戒しそして驚いた

俺の前に疲れきって地べたに座っているのは・・・・なんと・・・・

肌の色が青白く透き通って片方の目が怪しい光を持っている事以外

は・・・黒い髪に小柄ながらスタイルはよく顔は少女よりの美女と言った感じで・・・そうなんというか・・・椿そのものが居たのだ

しかし少し違うのは椿が後、3年ぐらい成長した姿と言うか背が少し高く大人っぽい感じだ

俺は言葉を失った・・・俺の手に抱いているのは椿、そして、椿に取り付いていた霊も椿・・・意味がわからん

「“うぅぅぅう・・・うぅ・・・許さない・・・光龍・・・お前だけは・・・お前だけは・・・どうせ捨てるつもりならば・・初めから戻るなど言わなければ私は、自分の手で死ねていたさ!!!お前が戻ると言ったからお前が!!!”」

そう言うと女の霊は、急に俺に向かって飛んできておれの首を両手で絞め俺を洞窟の天井まで持ち上げ壁に押し付けながら俺の首をしめあげ始めた

「“お前が・・・お前が”」

そう言って俺の首を絞めてくる椿そっくりの霊は、おお泣きしながら首を絞めているが力が大きくなっていく一方だ

どうやらこいつは俺を誰かと勘違いしているのだろうそして、恨みながら死んでしまった

いや、おそらくあの死臭のする井戸に落とされ殺されたのだろう・・・なんとなくわかる

この霊の表情を見てると全てが手に取るようにわかる・・・椿と同

じ顔してるんだもんな

そして、恨みながら死んだが本当は恨んではいないんだ・・恨まなきゃ・・憎まなきゃ・・耐えられなかったんだ・・・

「お前は馬鹿だ・・「!?」そもそも見当違いの相手を恨んでいる・・そして、お前は、本当に光龍って奴が憎いのか?・・それとも」

俺が霊に話しかけると霊は、やめろやめろっと俺から離れ右目を押さえていた

そして、苦しみながら再び椿の方を見て

「“やめろ、私に貴様の幸せなど語るな!!!見せるな!!!!”」

っと苦しんでいた

(椿の奴の魂とつながってたってことは、椿の意思があいつの中に少し残ったってことか・・)

「“ふざけるなふざけるな、貴様など”」

霊がそう言うと椿の方を睨むと椿の体が浮き上がりそして、何かに引きずられるように井戸に向かい始めた俺はすぐに椿の所まで走り椿の体を掴んだが俺の怪力ごと穴に引きずり込もうとしている霊の眼力に俺は、今回最高使用率の左目の『絶対王政(エンペラーダビデ)』で女の右目を睨みそれにきずいた女は俺の左目を睨みながら

「“お前も堕ちろ!!”」

「『〜(呪われた眼の力を禁ずる)〜』」

二人の眼光が輝いた瞬間

「”馬鹿な私の神通力が・・うぁ・・うあぁあああああああああ”」

っと女の霊の右目から光が失われた

俺の目と俺の目では俺が勝ったようだ・・・

しかし、まだ、終わってはいないようだ

「おいおい・・・」

彼女が叫ぶと同時に井戸から青白い何かがたくさん出てきて女の中に入って行った・・・

そして、なんかよくわからない喰らい闇が広がり始めた

俺は椿を抱いてすぐに逃げようかと思うといきなり

「椿を離せ!!」

っといきなり誰かに顔面を殴られて椿を取り上げられて俺は倒れてしまった

「いって・・ん?あれ?」

「きさま・・ん?あれ?」

俺は、殴ってきた男の胸倉を掴んで殴ろうかと思ったがそいつの顔

を見るとなんというか・・

「「惚れ惚れするくらいの色男だ」」

俺の感想に男が俺の顔を見ながら言っていたなんて言うのかな相手がものすごく格好良いんだ

ていか正直に言うと

「「俺だと!?」」

俺は男と同時にお互いを指さして驚いた

俺だ俺が居る・・・髪の色と服装が違うだけで俺が居る・・

「「お前いったい誰だ名乗りやがれ!?」」

二人同時に言った

「「俺は、桜小路　影虎（梅小屋　光龍）だ!!!文句あるか!?」」

・・・・またはもったよ・・

それにこいつが椿2号の言っていた光龍ね・・よくよく考えたらこいつの名前苗字はそっくりだし名前は俺の正反対だ

影＝光

虎＝龍

光龍・・・・世の中には同じ人間が3人はいると言うが・・・

アイツの方も俺を見て同じことを考えているそぶりだ・・

するとカメラを持った天野とフラフラの一真が階段を下りてきておれと光龍を見て固まっていた

「「どっちがどっち?」」

と聞いてきた服装で判断してくれ

とにかく俺は光龍から椿を取り上げお前の探しているのはあっちの椿さん二号だと指さすと光龍は驚いて闇の中で泣いている椿さんそっくりの少女を見て

「・・・椿・・・」

っと言って両手に力を入れて少女に走って行った

「椿って・・・あいつ、名前も同じなのか?」

俺がそう言っていると一真と天野が俺の指さした女を見て

「「椿?椿そっくりだ」」

と二人して驚いていた

するとその頃光龍は必死に

「椿、俺だ、光龍だ!!おい、目を覚ますんだ!!呪いたいなら俺を呪えば良い!!」

そう言って椿2号に向かっていくが椿二号を包み込んでいる暗い雲に阻まれていた

「いやぁいやあああああああ」

そう叫びながら頭を押さえて泣いている俺はその姿を見た時、胸が苦しくなると同時になぜか使命感に駆られ

「天野、椿を頼む!!」

そう言って椿を天野に抱えて貰い俺は、闇に包まれている椿二号に俺は光龍と同時に手を伸ばした

「な?何故君が?」

っと光龍は驚いていたが俺は前の椿二号を見て

「耳障りで目障りなんだよ・・・好きな女そっくりの女の叫び声や泣き顔は特によ!!」

俺はそう言いながら黒い闇の力に逆らって前に進もうとしているがなかなか進めないでいた

すると横で光龍が…

「きみの・・君の体を貸してくれ」

そう言ってきたふと横を見ると一真や天野や椿が闇にのまれそうになっていた

時間が無い・・・

「勝手にしやがれ!!」

俺がそう言うと光龍は俺の身体に入った

すると俺の体が急に軽くなった

そして、俺の姿は、銀髪の長髪になり背が伸びた・・大人な俺だ

俺はふと後ろを見たが一真も天野も闇ですでに見えない・・・

（（これならいける））

俺の心の声と光龍の心の声が重なり俺の体は闇を払いのけながら血の涙を流している椿さんｍａｒｋ2にたどり着いた

そして、俺の体を借りている光龍は俺の体で椿さん2号機を抱きしめた

その瞬間に俺の頭の中に

・・・・・・・・

「光龍・・・きっと迎えに来てくれるよね?」

・・・・っと牢の中から夜空を見上げ膨らんだお腹を優しくさすっている椿さん二号

「はやく来て・・・お願いだから・・・早く・・・・」

・・・・・・っと牢の中でさらにお聞くなったお腹を見ながらそう言う椿二号

「お父さんが迎えに来たら・・この村を出て・・幸せになろうね♪」

・・・・・・・・・・お腹の中の子供に言い聞かせながら自分に言い聞かせる椿二号

「いや、お願い!!この子だけでも!!お願いします!!」

「だめだ、今までもお前たちを支えるためにたくさんの女子が身をささげてきた・・お前もこの村の娘なら覚悟を決めよ・・・そしてお前に知らせだ。光龍は村の外で今は別の女と幸せに生きているらしい」

っと泣きながら祭壇にしばりつけられ子供の命を助けてと乞う椿さん二号に告げられた絶望の一言

・・・・・・・・・・・・・・

「いや、お願い・・・まだ・・出てこないで・・・お願いだか・・・あぁああ・・光龍!!!!!」

陣痛が始まりいよいよ儀式開始と言う時、必死に耐えながら光龍を呼ぶ椿二号

・・・・・・・・・・・・・・

そして、子供が生まれようとしたその時、儀式が始まり

「嫌やめてお願い！！いや、いやぁあああああああああ」

叫び声もむなしく井戸に落とされ

そして、たくさんの死体が転がっている井戸の底に落ちた

しかし、体中が痛みで動かずも何とか生きておりそして、井戸の入口を見つめながら子供を出産した椿二号

彼女の子供は二人だった双子の女子たちそして、彼女が産み落とし赤ん坊の泣き声が井戸に響いたと同時に井戸のふたが閉ざされ暗闇に包まれた

そして、椿二号は、暗闇の中で動かない身体を無理に動かし母乳を与え赤子を育てようとしたが

しかし、極寒の井戸の中で生まれたばかりの赤子2人は、少しずつ弱り・・・息絶えた

そして、一人悲しみに暮れていた椿2号は、天上のあった場所を見ながら

「光龍は・・・私を・・・この子たちをおいて・・・別の女を・・・（憎い憎い憎い！！）」

その瞬間に椿二号の目から血の涙がこぼれ血に涙を流しながら

「もし・・・光龍・・・あなたが・・・お前が生まれ変わったら・・・今度は私がお前を・・・お前を殺してやる！！！！！！！！・・・

・・私の・・私の・恨みを思い知れ！！！！！！！！！！」

そう言いながら椿二号は息絶えその瞬間に井戸の強い怨念を土台に黄泉を開き

その夜、怨霊となった椿二号は子供たちの恨みを晴らすかの如く村人を皆殺しにしその魂をこの世にしばりつけた

そして、俺に・・光龍にした魂や身体を持った男に長い時間ずっと復讐し続けてきたのか・・

そして、変なビジョンが俺の頭から抜けると光龍は俺の体で

「ごめんよ・・椿・・・俺が・・・俺があんなところで足を滑らせていなければ・・・」

そう俺の体で勝手に泣く光龍、

すると椿さん二号は俺の事に気づいて

「光龍?」

っと血の涙を流しながら俺の顔を見て

「・・・あなたは、私を裏切ったの?」

っと怒るのでもなく殺しに来るのでもなく質問して来た

「俺は、ドジをして君との約束を守れなかった裏切り者だよ・・・ごめん・・・」

そう俺（光龍）が言うと椿二号は、血の涙から綺麗な透明の涙に変わっていた

「いま、あなたの記憶が読めた・・・あなたは私を助けようとしてくれていた・・・なのに私は・・」

「君は悪くない・・悪いのは僕だ・・・力不足で・・ドジで間抜けな僕だ・・・君を・・そして娘たちを死なせてしまった・・・ごめん」

そう俺（光龍）が言うと俺の体は勝手に椿二号にキスした

そして、キスした瞬間に俺から光龍がはなれ椿二号と抱き合いそして、黒い闇を消していた

その瞬間に俺の姿は元に戻っていた

そして、「私たち、ようやく・・・幸せになれるのかな?」っと椿二号が言うと

「なれるさ・・生まれ変わっても・・・君を愛す」

っと光龍が言うと急に赤ん坊らしき霊が2つとんできて椿二号と光龍の腕の中に来て抱かれ

光り出し徐々に消えはじめた

すると光龍は俺と後ろに居る天野と一真を見て

「ありがとう」

そう言って椿二号と一緒に消え始めた

その瞬間に天野がなぜか写真を取って涙を流していた

そして、2人の赤ん坊と幸せそうな表情で消えて行った光龍と椿に

俺は

拳を向けて

「俺はあんたらみたいな人生は死んでも歩まない・・・あんたらの分まで幸せに生きてやるよ。」

そう言った。

そして、光龍達が消えると俺は天野の所へ行うとした・・・・・・・

その時、夥しい程の闇が噴き出した

「マズイ、蓋を絞めないと」

っと天野が言った瞬間に一真は走って井戸の横の蓋を掴んだ

しかし、重かったのか動かせないようでいた

すると天野が指を上にあげて能力で比重を軽くし蓋を一真が持ち上げ井戸に置いたが今にも蓋が外れそうで一真が必死に抑えつけていた

俺も走って行こうと思うと急に椿が目を覚ましたかと思うと

椿さんの両目が桜色と黒に輝いていて
椿さんからおどろくことに『異世界樹(ユグドラシル)』と『死世界樹(キルドラシル)』が茨の弦のように生え
俺を押しながら井戸まで行くと一真を振りほどいて蓋と井戸を結び付け急にどちらの『異世界樹(ユグドラシル)』と『死世界樹(キルドラシル)』から花が咲き抑え込んでいた
俺は、頭でパニックになりながらも一真に
「後は俺がやる!!」
っと言ってどかせ蓋に目掛けて俺は『絶対王政(エンペラーダビデ)』を発動し
〔『〜(閉じろ!!)〜』〕
っと命令すると蓋は絶対に開かなくなった
そして、椿さんを見ると両目を閉じていて『異世界樹(ユグドラシル)』と『死世界樹(キルドラシル)』の両方が花弁として散った
その瞬間に洞窟が揺れ出し俺は椿を担ぎ天野と一真は手をつなぎ必死に走り洞窟を出た
すると洞窟の入口が瓦礫で埋まり俺達が居た呪いの場所は土砂に埋もれた
・・・・・・・

・・・・・・・・・
・・・・・・・・
その後、俺たちは、椿の車に錬金術で作った燃料を入れ学園都市に帰った

椿はその事件を覚えておらず俺や一真たちはあえて話さないことにした・・・

その後の噂では、あの村は１００年以上だれも住んでおらず１００年前に大量失踪事件があった場所らしいそして、俺達が不思議な恐怖体験を味わった次の日には、開発が終わったダムの水の底に沈んだらしい

おそらくだがあの椿さんは、旦那さんに最後に会いたかったんだろう恨みでも祟りでも何でもいいから・・・ただ、今でもたまにあの村の周辺では、カップルの失踪事件と車の水没事故が多発しているらしい・・・長く培ってきた技術が功を奏すように誤った仕来たりは災いを呼ぶのだろう・・俺は、そのニュースを見た後、その村に祈りをささげ『異世界樹（ユグドラシル）』の大木を密かに村に沈め大きな墓標にした。

とつぜん、奥さんや彼女が知らない村に行きたがったらご注意を・・・俺達でなきゃ・・井戸に引きずり込まれますよ?

つづく

悪霊退散（ゴーストバスターズ）（後書き）

能力紹介

『死の天使（グリムリッパー）』

血を流すと影虎の影に血を吐くと影虎の影の形が変わりゴーストのような仮面をつけた、黒を基調にした傷んだローブを身にまとった人間の白骨の姿の巨大な死神を呼び出す

この死神は吐き気がするほどの奇妙な奇声をあげ片方の手に黒く深い闇のような鎌で何かを狩り取ったり断ち切ることが出来る。

性格は実はかなりの男前で影虎は尊敬をこめて死神先輩と呼んでいる死神殺しの死神さん。

実はかなり強くあらゆる攻撃を片手だけで受け止めることもできる。

場所

もうすぐダムの底に沈んでしまう呪われた村人口は１０００人近く大きな村であったが１００年前のある儀式の失敗により村人が全員謎の死を遂げた村

儀式

大きな地震が起きた年に身ごもった女が出産すると同時に村の中心にある深い深い井戸に生きたまま放り投げ絶対に外れぬようにふたを夫に閉めさせ黄泉の門が開くのを封じるという儀式

１００年前にも、この儀式が行われた。

その年は、神社の強力な霊力を持つと言われる宮司と巫女が選ばれたが二人はある日村人の眼を主んで出したがすぐに追いつかれ子を宿していた巫女は捕まり夫は必ず助けに戻ると言い逃げた

そして、６ヶ月後、遂に巫女は出産の日を迎え儀式の祭壇にたたされた

妻は夫を待ち続けたが夫は戻ってこず妻は絶望と恨みを抱えたまま生贄として子が生まれようとした時井戸に落とされ深い深い闇の中の死体の山に落とされた

其処には産み落とされた赤ん坊の死体と恨みを持ち井戸を掻き雀ったような爪痕と母親の死体であった

そして、井戸のふたは閉められた

女が双子の赤子を産み落とすと同時に・・・

しかし、この儀式で必要な夫の宮司がどうしても見つからず結局は村長が女たちの怨念と黄泉の門の邪念に蓋をしたがそれがまずく

儀式は失敗に終わり

強力な霊力を持った巫女の怨霊が他の儀式によって現れ村人たちを皆殺しにしその村は、１夜を開けぬうちに壊滅した。そして現在は呪われた村として認知され誰も近づかないが

稀に女の怨念に引き付けられ身ごもった女性がその村に男と共に引き込まれるという噂がある

霊

村人たちの霊

女の巫女に殺され現在もあの世に行けづに彷徨っているうちに女の怨念に怪我され悪霊となっている

数１０００以上

怨念の巫女（霊）

梅小屋　椿

身長１６０程度

体重？幽霊に質量はない！！・・・・はず

年齢１７歳（１１７歳）

長い黒髪で白い和服を来ている

肌は、透き通るように白く（ていうか透き通っている）

顔は、結構椿に似ている

右目に人を縛り操るちからがある

霊力が強く人を金縛りにしたり念力のようなものを使ったり能力者に例えるならレベル５越え

霊らしく宙に浮いており非常に力が強く攻撃がほとんど効かない

１００年前に生贄とされ出産と同時に井戸に落とされた少女の霊

今でも恨みにかられ村の外から身ごもった女とその旦那を招き寄せ殺し怨念を増やし続けている。

すべての女と男は自分たちと同じ目に遭えば良いと思っている。

性格は破綻している。

宮司（霊）

梅小屋　光龍（こうりゅう）

年齢２０

身長１８０

髪の色は黒、左目に霊を鎮め払う力がある。

椿（霊）の夫、こちらも強い霊力を持っていた

見た目は影虎そっくりで瓜二つ。

ある日妻が儀式のいけにえに選ばれたとき、身を呈して逃げようとしたが妻がつかまりそのため村の外に助けを求めに行ったが山道で

足を滑らせとある井戸に落ちその場で死亡した

妻を助けられない後悔と苦痛そして妻が悪霊になった事を悔やみ今でも井戸の中で泣いている霊

双子の赤ん坊の霊

双子の少女の赤ん坊の霊

実はこつらが一番邪悪

生まれおちてすぐ死んだためこの世への未練が強い

そして、１０００組の生贄の子供の集大成のため母親よりも実は強い怨念の塊

村から出れなくなり村がずっと夜なのはこの二人のせい

神隠しの力を持っている

レベル５状態の影虎と同等の力がある。母と父の心が一つになった時恨みから解放された。

以上です。

結構暗い話になりました。ちなみにシナリオはあるホラーゲームのオマージュです。

ではまた。感想待ってます。

空想世界（何ですかこの世界は！？そしてなんだこの俺は！？）（前書き）

今回は完全に番外編です。

では、どうぞ

笑えたら感想ください。

空想世界（何ですかこの世界は！？そしてなんだこの俺は！？）

この物語は、影虎と椿が居る世界ではあるもののずれた世界である。

・・・

その光景を見た俺はそう確信して頬をつねるが痛い・・・けど・・・
夢が覚めない!!

「馬鹿な・・・夢が覚めない・・・」

俺が頭を抱えて悩んでいると俺の目の前を今度はメイドさん２０人
くらいに囲まれているゴージャスな土御門は幸せそうに通り過ぎた

・・・・・・・・・俺の夢って何?

そう思いながら適当に歩いてコンビニに入るとコンビニの店員に一
方通行が居て恐がりながらコンビニ強盗をしている水希さんに両手
を上げていた

「ひ、お、おたすけェ~」

「ちっ・・どけ・・ぎゃふん」

っと水希がナイフを振り回しながら出入り口に居る俺に向かった来
るので足をかけてこかした。

水希は俺を睨んでいたが水希の取ったレジを俺は拾い上げて強盗の
水城を無視してレジのあった場所に置くと水希さんは走りながら「
覚えてろ!!」っと逃げた

「あ、あのォありがとうございましたァ!!」

っと一方通行が思いっきり頭を下げてきたので俺はいえいえ人助け
は当然ですよっと良い青年を偽ってコーヒー牛乳を購入してコンビ
ニを出た

そして、近くのベンチに座りコーヒー牛乳を飲み・・ふぅ~と一息ついてから

「元に帰りたい・・・」

そう俺が悲しみながら言うと急にデパートの大きなテレビに

『またまた、宝くじ大当たり学園都市一ついている学園都市第一位の超能力者・・『鉄拳制裁』の上条当麻』と書かれていた・・・ん?

「本当に上条さんはついてますね?一体その幸運は何処から来るんですか?」

っとリポーターがマイクを当麻に近づけると

「いや~なんでですかね~アハハハ・・やっぱりこの右手の不幸殺しのおかげだと思いますですハイ」

少しイラッときた・・・

「では、今後のお望みは?」

「・・・・・・・女の子との接点が欲しいです・・グス」

「現場の里中でした~」

っと中継が終わった

ふ・・ザマァ・・・当麻ザマァ♪

俺は納得しながらとりあえず自分の家に行って見ることにした

正直怖いのが夢の中で椿さんがどうなっているかだ・・・・・・・

俺って過保護?

そう思いながらも俺の住んでいるマンションについた俺は、一応持っていたカードキーでドアを開けた

すると・・・・奥の方から

「あれ~ お姉ちゃん帰ってるの~ ?」

っと寝起きなのか眼をこすりながらなんと上下大人のお姉さんぽい下着姿の・・・椿さんでは無くその・・

「この世界では俺はお前か~ !!!!!!!!!!!!」

影千代さんが居ました・・・俺泣いて良い?俺が女ものの下着を付けてる姿なんて一生想像もしたくなかった・・・まぁ女なんだから仕方ないんだろうけどさ

俺がそう思っていると影千代は不愉快そうな顔で俺の体を押し玄関の外に出し

バタンとドアを閉めやがった・・・

ドンドンドン

俺がドアをたたくとガチャっとチェーンをかけてから顔をちょこっ

と出して不機嫌そうに俺を睨みながら

「あのさ、帰ってくんない?俺マジ男とか趣味じゃね~し・・あんたくらい良い男なら他にもいっぱい女いるだろ?家まで押し掛けてくるなんてストーカーかよ・・・・」

・・・・・・こいつ、物凄い勘違いしてるな・・はぁ・・

「悪いが俺はお前に用が無い・・ていうかお前影千代だな?」

俺がそう聞くと影千代は首をかしげて「何言ってのこいつ?」みたいな顔してやがった

「ついでにいうと俺は現実世界のお前だ」

俺がそう言うと影千代は「あんた頭悪いんだな・・病院に行けよ」っとドアを閉められた

そして、俺がもう一度ドアを叩こうとすると

「次ドア叩いたら俺がお前の事殺すから!!」

っとものすごく不機嫌な声でそう言われた

(俺を殺す?影千代の癖に?・・・・)

ドンドンドン

俺は躊躇することなくドアを殴打したするといきなりドアを『異世界樹(ユグドラシル)』が貫いて来て俺に突き刺さりそうになったが俺も腕を組んで

『異世界樹（ユグドラシル）』を出現させ『異世界樹（ユグドラシル）』を『異世界樹（ユグドラシル）』で受け止めた

するとドアから飛び出してきた方の『異世界樹（ユグドラシル）』が徐々に消えだし

影千代がドアを開けた

相変わらず上下下着姿だ・・・そして、「入れ」っと言ってきたので俺はとりあえずただ今と家に入りソファーにそわって向かい側に座った影千代（てか服着ろよ）に向かい合った

「で、あんたが別の世界の俺ってわけ？」

っと影千代は不機嫌そうに俺を睨みながらそう言ってきた

「と言うよりこの世界が夢の世界だろうが？」

俺がそう言うと影千代は

「はぁ？あんた馬鹿か？俺はまぎれも無く生きてんだよ勝手に自分の良いように置き換えるな！！」

っと怒鳴られた・・あ、こいつ本当に生きてるわ・・

「悪いな・・俺でもまだ理解が追いついてないんだ・・それと聞きたいんだが椿って女知ってるか？めっちゃ背が低くいくせに物凄くスタイルの良い可愛い奴なんだけどさ？」

俺がそう聞くと影千代は首をかしげながら

「しらないな・・似てる人なら知ってるけど多分違うね「ちなみにそれって？」俺の姉ちゃんだよ。」

（ふ~ん、この世界の俺には、家族が居るのか・・そういやさっきお姉ちゃん?って少しうれしそうにしてたもんな~・・・はぁ俺も早く帰りたい）

俺はそう思いながらソファーを上下に動かして揺らしていた

「とりあえず、お前を元に戻す方法を考えようか?」

っと影千代が言ってきたので

っとれは嬉しくなりそう言うと

「やっと協力してくれるわけ!?」

「あぁどうせお前此処に居座る気だろ?「あぁまあな」やだ、「え?」お前が居たら女の子家に連れ込めない」

（・・・ん?この場合・・・・え?）

「お前まさかのレズ!?「ｙｅｓ♪Ｉ　ｌｏｖｅ　女の子♪」・・ハハハ、まぁ女の子が可愛いのな」

俺は半ばあきれながらも納得していた・・・どうころんでも俺の魂が男を受け入れるはずないよな♪

結構嬉しかったりする俺・・・でも・・やっぱり・・どうなの?

「俺ってね特に嫌な事があったわけじゃないけど・・変態の親父とクソ兄貴を見てると男に幻滅してさ・・それに比べたら母さんや姉

ちゃん達可愛いし格好良いしそれで・・・「女に走ったと？」おう♪ちなみにお前がさっきから気にしてるであろう俺の格好は俺の趣味じゃないよ？俺はさブラなんかしたくないって言い続けたんだけど姉ちゃん2人と母の3人との激しい口論と拳闘のすえこの格好しなきゃいけなくなったのだ・・・・・」

正直どうでもいいけど・・・・苦労してたんだね♪どうでもいいけど♪

「それよりもさ、俺ってどうやったら戻れると思う？」

俺が影千代（ようやく着替えた）に聞くと影千代は頭をひねりながら悩んで

「君・・・名前は？「影虎」・・影虎がここに来たのには何か意味があると俺は思う「よくあるマンガみたいな？」そうそう、とりあえずなんか最近事件あったかな？」

「あった場合、それを俺に解決しろと？」

俺がそう言うと影千代は「そうだ」っと言っていた。

すると何かを納得した影千代は俺の部屋があるはずの場所を開けた

部屋には大量の機材とモニターと綺麗に整えられたファイルだけだったいや違うのは部屋の中に大量の猫が居た！！

ニャンっと俺と影千代に寄ってくる猫・・・可愛いじゃねぇか♪

俺は猫を何匹か持ち上げて近くになった猫じゃらしのようなおもち

ゃで猫と遊んでいた

そして、影千代はその部屋の真ん中に行くと何やらヘッドギアを装着して

パソコンのキーボードを両手でそれぞれ一台ずつそえて物凄く速いタイピングを始めやがった

部屋中にあるモニターに画面が表示され大量にハッキングしているのがわかった

でもなんでこんな部屋で?俺なら記憶消去で対処できるんじゃないの?・・・あぁ出来ないのか・・

俺がその光景を眺めていると急にモニターの端を見ると誰かにハッキングされかけていた

「おい、お前攻撃受けてんぞ?」

「はぁ!?マジ?・・・あのクソオタク!!!」

そう影千代が言いながらそのサイバー攻撃に対応しているがどうも間に合ってない

「また、あいつは俺の回路を使って覗きをしてやがるのか!!こうなったらあいつの画像とエロゲのデータ消してやる!!!」

っと物凄く大慌てでタイピングしていたが俺から見ても相手の方が上手だ

いくつもの攻撃手段で影千代のスパコンを乗っ取るとしている・・・
はぁ・・

「おい、影千代、ノーパソ貸せ」

俺はそう言ってノートパソコンを開き神がかり的なハッキングをかけ始め

影千代のパソコンに攻撃しているハッカーの目を盗んで相手のＰＣを支配下においてその権限を影千代に渡すと

「へぇさすがは俺、やるねぇ♪」と笑いながら削除と言うボタンを押した。

すると隣の部屋で・・・・・

「うわぁあああああああ

しかも、めちゃくちゃ聞いたことあるような悲鳴だ・・・だれだっけ？

「あぁあいつもうじきこっち来るな・・・お願いだからさ影虎・・クソニートの相手してよ」

「はぁ？誰それ！？」

影千代の言葉に首をかしげているとドンドンドン

っとドアが叩かれる音がした

「おねがいトラ、俺の彼氏とか何とか言ってごまかして」

っと両手を合わせて俺に懇願して来た

お前男駄目なんじゃないのか？

「まぁいいや、とりあえず追いかえせばいいんだな？」

俺はそうやってドアを開けると

「おい！！影千代！！お前よくも俺のエロゲと葵さんの画像消しやが・・・・・だれ？」

一真がそこにいた・・でも服装がなんていうか・・・オタク？ニート？引き籠り？みたいな恰好でメガネかけてる・・・

「いや・・・え～と・・・影千代の彼氏（今でけ許して椿さん！！

俺はあなたがいつでも本命です!!）」

っと誰もいないのに心の中で言い訳しながらそう言った

すると一真はなぜか俺の事を見て憎たらしそうにして

「てめぇ・・よくも俺の妹に・・・」

っと胸倉を掴まれた・・・妹?だれ?影千代?いやいやあり得ないって・・・あぁ~ 義妹ならあるかもね・・そういえば

「俺の事よりお前、天野はどうしたんだよ?」

俺がそう聞くと一真は顔を真っ赤にして

「何でお前、葵さんの事知ってるんだよ!!なんだ?お前!!妹だけじゃなくあのやくざの姐さんの葵さんにまで手を出してるのか?」

っと物凄く涙を込めた目でそう言われた・・・めっちゃ面白い・・・

「うん♪」

俺が笑顔でそう言うと一真が殴り勝って来た・・・・でも、俺の胸板に当ったパンチは・・なんというか・・・痒い

「クソこの野郎!!」

声だけ大きくて一発も痛くない・・・痒い・・・こいつ本気で引き籠ってたんだな・・5発殴ってきただけで息切れしてるし・・

「おい・・・気絶した・・・どうしろと？」

・・・

・・・

「だって姉ちゃん2人以外で言えば俺が一番美人なんだ!!だからこそ一番の美人を抱きたいと思うのは当然だろ!?」

「しらねぇよ!!てか、恐いからやめて!?俺は俺が恐いよ!!」

そうやって後ろにじりじり下がっていると何故か家の床に穴があって俺はそれに落ちた

すると穴の入口で

「さっき『異世界樹(ユグドラシル)』をお前の世界の空間につなげたんだ。じゃ~ね~♪さて今日は誰を連れ込もうかな~♪」

っと影千代が手を振っていた・・・お前今度会ったら殺す!!!

そう思いながらも意識が無くなった

・・・

すると椿さんがうれしそうに微笑みながら

「うぅ~む・・・・影千代・・・・大好き・・・・・・・・・」

ねぇこれって夢？悪夢？

おわり

空想世界（何ですかこの世界は！？そしてなんだこの俺は！？）（後書き）

以上です。ある世界のお話どうでしたか？まぁ夢落ちなんですけど…

影虎は他の世界では男か女かが酷くランダムです。

ただ、中身は同じなんですけどね。

ではまたノシ

破局危機（キレた影虎！！泣く椿！？）（前書き）

今回は珍しい喧嘩へんです。正直、影虎君、鬼畜です。

椿さん本気で泣かされます。

影虎君キレます。

破局危機（キレた影虎！！泣く椿！？）

ある日、桜小路家での事件

朝、桜小路影虎が目覚めるとせっせと椿さんがいつも以上に騒がしくしていた

「おはよう椿」

っと影虎があくびしながら言うと椿は顔真っ青で

「おお、おお、おおおお、おおおはようございます！！！」

っといきなりすごい挨拶をされ影虎は一瞬引いたがその後すぐに

「おい、「え？」お前いったい何やった？」

っと影虎が少し不機嫌そうにそう言うと椿は汗をだらだらとかきながら

「なななんあななんにも！！」

っと明らかに嘘丸出しで心臓をバクバクさせながらそう言った

「ふ～ん…ならさ・・あの水槽の水がコーヒーの色に染まってて熱帯魚達が泳ぐ気も無く水面に浮いて日光浴してるのはなんで？」

っと影虎が水槽を指さしながらそう言うと椿はびくりと震えて

「それはその・・コヒー飲もうと思って・・でも、インスタントなかったから詰め替えの袋開けようとした開かなくて力を入れたらザバーっと水槽に・・・」

っと椿がそう言うと影虎は呆れながら水槽を見て掃除し始めた

そして、魚一匹一匹を取り上げて行くと椿が後ろから

「ああのな?そう落ち込むなよ?また買ってあげるからさ?ね?」

っと椿は謝罪の気持ちからそう言ったのだろう・・だがその一言が余計だった

ぶちっと言う効果音と共に影虎が机を力いっぱい殴りつけた

ガァンと言う音に椿は驚いて飛びあがり壁にもたれかかった

そんな椿は影虎の顔を見るに見れなかったそして目があった時、恐怖からぺたんと腰が抜け床に座り込んでしまったのだ

そして、影虎は髪でうまく表情が読めないがフラット立ち上がり明らかに常人では無いオーラを出しながら

椅子に座り足を組んでキッと椿を睨みつけた

「ひ!?」っと椿は睨まれただけで飛びあがり壁に後頭部をぶつけていた

「いたい・・」

っと椿は頭をぶつけ泣いている。普段の影虎なら飛んできて心配するのであろう。

ただ、今は違う・・・・影虎は痛がっている椿を見て

「うるせぇよギャーギャー騒ぐな耳触りだ「え?」ていうか目障りだしお前俺の視界に入らないでくれる?」

っと影虎がそうはっきりと椿にそう言ったのだ。椿はショックを受けてすぐに謝ろうとしたが

「あのご、ご「しゃべるなよ貴重な空気がお前に消費されるのは俺は耐えられない」・・・ごめんなさい!!!」

っと椿が泣きそうな顔で謝ったが影虎は冷たい目で見たまま

「泣くなよ…」

っと言ったその言葉を聞いた瞬間に椿は許してくれたと思ったが現実は・・・影虎は甘くなかった

「涙で床が汚れたら雑巾で拭くじゃ綺麗にならないし床を張り替えなきゃな・・いや、もうすでにこいつが家にいるってことは家中が汚れてるよな・・引っ越そうかな」

っと椿を無視してそう言ったのだそんなことを好きな相手に言われた椿はブワット泣き出し

「ごめんさいごめんなさい!!許してよぉかげとらぁ!!」

っと土下座しながら本気泣きして大きな声で謝った

すると影虎は立ちあがって椿を置いて別の部屋に行くと椿に急に何かを投げた

「えあ・・なにこれ？」

っと椿は投げられ自身がキャッチしたウサギのぬいぐるみのようなカバンを見て影虎を見た

「出て行けお前の声が耳触りで近所迷惑だ。ていうかお前…ウザいよ」

っと冷酷にいいきったのだ。そう言われた椿はもう影虎に縋りつきながら必死に謝ったが聞く耳を持って貰えず家から出されてしまった。

そして、椿が必死に家に入れて欲しいと懇願するも影虎は迷うことなく扉を閉め鍵を閉めた

扉の外で椿が

「開けてよ開けてよ影虎ぁ！！！謝るから～　！！！おねがいだからでていけなんかいわないでよぉおおおおお」

っと扉の外でワーワー大声で泣きだしたのだ。そして、何度も家の扉をたたいたのだ

すると影虎は扉を開けたのだ。しかし影虎は椿の首に巻かれている鍵を取り上げたのだ

「ゆるしてくれないの？」

っと椿は唇をかみしめながら言うと

「そもそも許して貰うという選択地がお前にあることがおこがましいだろ？お前の言ったことって赤ん坊を殺したら罪の意識も無く慰謝料払いますって言うのと同じだろ？二度と俺に近づかないでね？帰ってこないでね？ていうかどこかで勝手に死ねば？」

そう言って影虎は無情にも笑顔で扉を閉めた。そして椿はおお泣きしながら家を離れた。

とにかく泣きながらウサギの縫いぐるものようなカバンを引きづりながら当てもなく泣きながら歩いていた

周りにいた人たちも声をかけようにも泣きじゃくっているので声をかけられなかった。

そして、椿は天野の所に向かった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

椿を追い出してから影虎はイライラしていた。

影虎があそこまで椿を突き放したのは実は影千代状態を抜けば始めてなのだ。

どうしても影虎は許せなかったのだ。熱帯魚のこともそうだ。彼は

趣味として飼っていて結構こっていたのだ。それを全滅させられたのには確かに影虎も腹が立っていた。だが影虎がキレたのはそこじゃない

椿が言ったまた買ってやると言う一言だ。

確かに人間は生き物を金で売り買いはする生き物だが椿が今言った言葉では意味が違うのだ

命を自分で奪っておいて金で解決しようとした椿の深層心理の中にある汚い心が許せないのだ。

追い出して後悔はしたが椿のことを許せないと言うの本心なのだ

影虎はぶっちぎれた瞬間に自分の中の椿の優先順位が一気に最下位に下がったのに内心驚いていた。

酷いことを言った自覚もあり反省もしたがこちらから謝る事は無かった。

すると急にインターホンが鳴ったので影虎はドアを思いっきり空けっと大声で怒鳴ると

「帰って来んなって言っただろうが！？」

「うわぁッ！？」

「…って何だ一真かよ…。」

ドアの前にいたのは椿ではなく一真であった・・

「ど、どうしたんだよ？
影虎…。
機嫌が悪いみたいだが…。」

「ん？まぁ、立ち話も何だし上がれよ…。」

一真が影虎に焦りながらそう言うと影虎は一気にクールダウンして
一真を家に入れた。

実はこの時一真が来るのが１０秒早かったら影虎にボコボコニされ
ていた未来があったことは誰も知らない

「あ、あぁ…。」

一真は一先ず部屋に上がって影虎の部屋を見渡していた。

「あれ？そう言えば椿は？」

一真は周りを見渡し、椿の姿が見当たらなかったので影虎に尋ねて
みた。
すると…。

「ん？追い出した。」

「えッ！？何で！？」

影虎から予想外の言葉が帰ってきて一真は眼を見開いて驚いた。
……

……
……

一方一真の居ない負導家では・・

「うぇぇえん！！」

と椿がドアの前で大泣きしていて
一体誰だろう？と思って天野がドアを開け…

「つ、椿！？」

「うぅ…葵…。」

何故かウサギのぬいぐるみの様なカバンを抱き締めて号泣しているファンシーな椿を見て天野は目を輝かせていたが少しすると冷静になり

「どうしたの？
部屋の前で泣いたりして…。
とりあえず…上がって…。」

天野は理由を聞く前に椿を部屋の中に入れて、適当な場所に座らせた。

「で何があったの？」

「うぅ…影虎が…影虎が…。」

「うわぁ？」

椿が突然辛くなって天野に抱きつき抱きつかれた天野は驚いた。
その時、一瞬邪念があったのは言うまでも無い

「大丈夫…椿…。
気が済むまで泣いて良いよ♪
ゆっくり話して♪」

「う、うん…。」

天野は椿の頭を撫でながら言った。
でも、影虎君と何があったのだろう?と疑問に思っていた

……
……
……

「…で追い出したと。」

「その通りだよ…全く…。」

一真は影虎から話を聞いて結論を言った。

「でも、まぁ、お前も何でまたここにきたんだ?」

熱帯魚の水槽の水に異世界樹(ユグドラシル)を浸けて綺麗にしながら影虎は一真に言った。

「ん?葵にムカついて出てきた。」

「・・・はぁ?」

と影虎が驚いたと同時に熱帯魚が復活した。
別段生き物の生と死などは影虎にとってはおもちゃも同然なのだ。
ただ、影虎自身その力に甘えられたくは無いのだ・・・

……
……
……
再び負導家

「酷い話だね…。」

「うん…。」

天野は椿から影虎君に出ていけと言われた事を話された。

「なぁ、葵…一真…？」

「えッ？」

突然椿が天野に話し掛けて天野は戸惑ってしまった。

「出ていっちゃった。
でも、一真が悪いんだから！！」

「えッ？えッ！？何が！？
一体何があったの！？」

天野は知らずの間に怒鳴ってしまっていて、椿がパニックになっていた。

「ご、ごめんね…椿…。
ちゃんと話すから…。」

「う、うん…。」

……

……

……

「なるほどね。
で、出てきたと。」

「そう言う事。」

一真は先程起きた喧嘩を影虎にすべて話した。

「ただ…。
何故お前が出てくるんだ?」

「ん?いや、一秒でも、一瞬でも早くアイツから離れたかったから。
」

一真の反応を聞いて影虎は半ばあきれながら

「お前…中々酷い奴だな…。」

と表情が惹きつりながら影虎はいっていた。

影虎自身自分を棚に上げているが影虎の性格的に必然である。そもそも俺様体質が今まで下手に出ていたことが奇跡なのである

「で、影虎。
椿の事はどうするんだよ？
このままだったらヤバイんじゃないの？」

一応一真は影虎は心配しているのかの確認をとるために聞いてみた。
すると…。

「別に～…生き物の命を金で解決しようとする奴なんてどうでもいいし～…。」

影虎は恐ろしいほど無表情で一真に言った。
結構本気である。反省はしても公開は一切していないのだ。

「でも、一応女何だからヤバイんじゃない？」

「だから？襲われようが何されようがどうにでもなれば良いんじゃない？
それにそれを言ったら裏に関わり過ぎて狙われてるかも知れない天野さんはどうするんだよ？
君は普通にここにいるけど。」

「・・・・」

影虎の厭らしい質問に一真は悩みながら黙った

「ん？」

一真は急に天井を見て固まった

「？どした？一真？」

「いや…誰かに呼ばれたような…。
あッ！？」

首を傾げて疑問符を浮かべている影虎に聞かれて、一真は急に何かを納得した。

「おいッ！？一真！！
何してんだよ！？」

そして急に薬を飲もうとするので、影虎が腕を掴んで止める。

「いや、一美がちょっとお前と話したいらしくてな。
だから…。」

「おいッ！？」

一真は影虎が掴んでいる方とは逆の手で薬を掴み変えて飲んだ。
そして、一真はグッタリと力が抜けて一真の体が変化し始めた。

……

……

「影虎さん…痛いです…。」

一美になった一真は影虎に腕を捕まれていて、とても痛いとつたえた…。

ギュウウウ！！

「イタタタタ!?痛いです!?痛いです!!影虎さん!!放して下さい!?」

何故か影虎は笑いながら掴む力を強めてきて、一美は涙目になりながらも頼みました。
しかし…。

ギュウウウ!!

「痛い!?痛いです!?放して下さい!!ぐす…。」

あまりの痛さに一美は泣いてしまって、膝から倒れてしまった…。

「あぁ～♪楽しかった♪」

「うぅ～…痛いよ…。」

影虎は急に手を放して、一美は腕を抑えて泣いた…。

「で♪話って何だ♪一美♪」

「影虎さん…。」

正直影虎はイライラしてるのにめんどくさいことをした一真を殴りたかったが一美なってしまったので殴れず少し優しい方法でストレス発散に走ったのだ。

「か、影虎さん…どうしちゃったのですか…?
そんなに酷いことする人じゃなかったじゃないですか…。
そんな影虎さんを見て椿さんはどのように思うですか?」

「知るか♪
命を金で解決する奴なんてどうにでもなれば良いんだよ♪」

っと本心からそう言うと

「そんな…。
影虎さん、目を覚まして下さい！！
確かに命をお金で解決しようとした椿さんは間違っていたかも知れませんが、もっと話し合えば良い結果は出せた筈です！！
それに、椿さんは絶対に反省していると思います！！」

っと一美が反撃して来て影虎はイラだって立ち上がり

「いちいたうるせぇな…。
どうして、お前が俺たちの話しに関わってくるんだ！！
関係無いだろ！？」

っと大声で睨みながら怒鳴り倒した。これなら大抵の不良でも逃げて行くのだが・・

「あります！！」

「なッ！？」

一美は影虎に即答するので影虎は本気で驚いた。

「なら、お前がどう関係あるって言うんだよ！？」

「それは…影虎さんの事が好きなんです！！」

「・・・は？」

影虎は意味がわからなかった・・・今まで好きと言われ付き合ってくれとか言われたことはたくさんあるが今回は珍しいケースだ・・

「だから…影虎さんと椿さんには幸せになってほしいんです！！だから…椿さんと仲直りしてください！！」

「・・・え～と…あの～…一美さん…？」

「ちょっと落ち着こうか？」

一美は影虎にそう言われて、少し落ち着いた。
そして…。

「～～～～！！」

一美は自分で言った事を思い出して顔が熱くなって悶えていた

「と、とにかく…この際だからはっきりいわせてもらいますが、影虎さんが好きだから…幸せになってほしいから仲直りしてほしいだけです…。」

と言いつつも一美は視線を影虎からはずし背を向けていた。

「ふ～ん♪そうか、そうか♪
仲直りしてほしいだけです…か♪」

「キャッ！？」

影虎はそう言うと一美を優しく抱きしめてやった。

浮気に近いが影虎は基本的に好意には好意で返す人間なので勘違いさせることが・・・

「ありがとな。
もう一度『だけ』椿と話してみるよ。
でも、これで分からなかったらさすがに許さねぇけどな。」

「はい♪」

影虎は椿と話すと言ったので一美は笑顔で返し喜んでいた・・・が・・・

「一美?どうした?
泣いてんのか?」

「ほえ?あっ?」

一美は影虎に指摘されて自分の目を触ってみると濡れていることにきづいた…。
それを見た影虎はなんとなく一真では無い一美自身の心を理解して・・・

「はぁ…ごめんな…一美…。」

「えッ?影虎さん?」

影虎はため息をついたあと、一美に謝りながら再び抱き締めた。

「お前は優しすぎだ♪
恋愛ぐらいは自分の為に動けよ♪
損ばっかりするぜ♪」

「影虎さん…。
う、うぇぇん！！」

一美がおお泣きしたので影虎はそれを好きなだけ泣かせてやった。

ただ、内心、椿を裏切っていると言う気もしたが椿が謝って着たらきっちりと全部謝ろうと決めていた。

……

……

……

「なぁ、葵…お前は一真とどうする気だよ？」

天野が訳を話したあと、椿が一真とはこれからどうするかと言う話になった。

「正直言うなら帰って来てほしいよ…。
でも、一真が謝ってくれないし…。」

正直言うと一真には帰ってきてほしいという気持ちだったが意地を張っている天野に椿さんは…

「そんな見栄張ってる場合かよ？
確かに一真も悪いところがあったかも知れないが、葵にも問題があるだろ？
そこまで縛られてる一真が可哀想だ…。」

っと椿さんは豊富な恋愛経験をもとに語った。椿さん自身影虎をあまり縛らない。縛ればアイツははなれることを知って放っておけば必ず自分の所に帰って来る男だと確信しているからだ。

「分かってるけど、一真ってモテるんだよ?
だから、怖いの・・・いつ、捨てられるか分からないから…。」

天野は体育座りをして答えた。
早い話、嫉妬心ダラダラなのだ

しかし付き合ったばかりで心配なのは椿も理解していたので其処まできつく言えないのだ。

「葵・・・アイツは、お前の事を一度でも見放したか…?
少なくともアイツはお前の為に命をかけていたと思うぞ。
そんな奴が見捨てたりするとはおもえないが?」

「正直、私なんかが一真と一緒にいて良いのか自信無いんだよね…。
そんな鬱憤だらけの時に風華ちゃんから一真が告白されたって連絡がきて、鬱憤とかを一真にぶつけちゃったのかな?
一真が悪くないって分かっているんだけど、こうなっちゃって・・・。
それに、一真って裏に関わったりしてるし、ムチャな事ばっかりするから・・・。
だから、もし、死んじゃったら?って思うと怖いの・・・。
だから…。」

「なるほど。
不安な、気持ちになっていたわけか・・・。

その気持ち、私も分かるよ。」

っと椿はそう優しく言った。

「え?」

椿の言葉に天野はものすごく驚いたような顔をし驚いた。

椿は失礼なという顔だった

「影虎も、私の知らない所で危ない事とかしてるの。
影虎の能力上死なないのは分かっているをだけど・・・。
やっぱり恐い・・・。
いつ、いなくなっちゃうのか・・・ね…。
だから、私も葵の気持ちは分かるよ♪
でも、信じようよ。
どんなに、危ない事をしてても、無事に帰って来るって♪」

やはり椿はいろんな面で天野より経験を積んで来ているのだ。

もうすぐ母になる少女の言葉は天野の心に深く優しく届いた。

「葵、早く一真に謝ったら?
まだ、手遅れにはなってないはずだよ?」

「うん♪ありがとう♪椿♪」

椿のすすめに天野は素直に従った。勧めた椿自身未だに泣きたいのを我慢しているのだ。

そして、天野に見えないようにお腹を撫でながら

「きっと許してくれるよね？」

っとお腹の中の子供たちにそう尋ねていたのだ。

：

…

：

「影虎・・・気持ちは分かるがそろそろ電話したらどうなんだ？」

あれから一美と変わった一真は携帯と、ずっとにらみ合っている影虎にそう言った

「分かってるんだが…何て言えばいいのか分からねぇんだよ…。」

そう影虎が答えると一真がいきなり

「・・・は？」

「どうした？一真？」

いきなり一人で驚いて考えだした椿に影虎は困りながらも一応心配して

「オイ！？一真！！」

「うわぁ！！何だよ影虎！！」

影虎が大声で呼びかけると一真は驚いて少し飛びあがり影虎に文句

を言った
すると影虎は呆れながら腕を組んで
「・・・お前、まさかまた一美と話してたのか?」
「そうだけど?」
「そうか・・・、せめて一美と話すとか言ってくれ・・・。いきなり驚かれたらこっちがビックリするから。」
っと挙動不審な行動をやめろと注意した
「あぁ、悪い、悪い・・・。」
「全く…。」
一真が影虎な謝ると、影虎はかなり呆れていた。
「ちょっと一美と話してくるから、その間に仲直りしとけよ?」
「了解~。」
影虎のやる気の無い返事を聞いて、一真は廊下に出た。
それを見て影虎は携帯を捜査して椿と書かれた画面と睨めっこしていたが
ついに決心がつき電話をかけたするとワンコールが鳴り終わる前に繋がったのだ。

それには驚きながらも冷静に影虎は携帯に向かって

『もしもし？』

「すいません間違えました。」

っと影虎は椿が出た瞬間に焦って切ろうとしてしまったが椿が大慌てで

『間違ってない間違ってない！！！』っと止めたのだ。

「『・・・・・・・・・』」

そしてしばらくの沈黙の後、

『あのね・・・ごめんなさい！！「え？」お泣きして冷静になってからわかったの・・・幾らなんでも殺しちゃったのにまた買ってやるって言うのは無かったよね・・・本当にごめんなさい』

っと少し泣きそうな声で謝られた影虎はもう文句が言えなかった。

「・・・おれ…『ん？』俺の方こそご免・・幾らなんでもお前を気づ付けるようなこと言いすぎた許してください。」

っと丁寧に謝ると椿も椿で謝って来て

最終的に影虎が「本当に悪かった・・・頼むから帰って来てくれ」の一言と「迎えに来てね♪」と言う返事で解決したのだ。

そして、影虎は一真の所に向かい

「終わったか？一真。」

「あぁ、葵とも、仲直りした。
そっちは？」

「俺の方も許す事にしたよ。
大分反省したみたいだし。」

と影虎は笑いながら自分も謝って帰って来て欲しいと言った事は伏せて言った。

「そうか。
良かったな。」

「あぁ、一美に礼を言っといてくれ。
ありがとう…ってな。」

影虎はにっこりと笑って一真に言った結構感謝していたからだ

「分かった。」

「と言うわけで一真。
家の我が儘姫がお前の家にいるらしいから、天野と仲直りしてるなら行こうぜ。」

「なら、帰るか。
お邪魔しました…。」

影虎達は桜子路宅を後にして、一真の家に向かった。
そして、全員は見事に仲直りした。
その後、家に帰ると影虎が椿を抱きしめながら涙を流して謝ったのは内緒のお話♪

つづく

破局危機（キレた影虎！！泣く椿！？）（後書き）

以上です。椿さん珍しくおお泣きしてました。

影虎君も仏では無いので許容範囲がありました。

まぁ結局仲直りをしました。

ではまた。

光子力化（ライブ!?カリスマボーカルRUNA?!?）（前書き）

はい、今回は異質なお話です。

これを書いている時いきなり歌詞の無断掲載禁止が出たので驚きました。

今回の話に出てくる曲は自分のお気に入りとキャラに似合いそうな曲です。

ぜひ、聞いてみてください聞いた事がある人は歌詞を思い浮かべてください。

ではどうぞ。

光子力化（ライブ!?カリスマボーカルRUNA?!?）

椿に本気で怒りおお泣きさせながら出て行かせた次の日、俺は、仲直りはしたもののまだ俺の事が怖いのかよそよそしい椿にあるチケットを渡された

「ん?何これ?ライブのチケット?」

俺が椿に聞くと椿はうなずいた

「あのね・・・その・・・昨日は本当にごめんね。物凄く反省したから・・もう「怒らねぇよ・・俺が怒ってたのは、小さな生き物の命を金で解決しようとしたところだから反省すればもう良いよ」・・そっか♪でね、そのチケット、最近学園都市で流行のバンドなんだ♪特にボーカルがすごいんだ。アニソンからロックまで何でもＯＫなんだよ。人気過ぎてチケットにプレミアが付いててね?忍さんに仕事頑張るからチケット取ってほしいって言っててこの間貰ったんだ。でね、一緒に行かない?」

っと物凄くうれしそうに笑いながら上目使いで子猫のように言ってくる椿

（行きたいのね・・・まぁいいか）

「いいよ（パぁ~！！）いつ?（可愛いなこいつ）」

俺が良いよと言うと椿が目を輝かせて喜んでいたので俺はつい笑ってしまった

「後、３０分後♪」

そう椿が言った瞬間に俺は椿を摘み上げバイクではなく椿のコレクションの車（今回はフェラーリＦ４０）に乗せ急いでそこへ向かった

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

場所は学園都市の主にライブなどで使われる若者の歓楽街にある少し大きめなドームであった

俺は車を路駐するわけにもいかず駐車場探しで手間取ったが何とか見つかり椿の元へ向かうと

「君可愛いね♪ライブ見に来たの？なら俺らと一緒に見ようよ？」

「そうそう、俺らアリーナの席のチケットたくさん持ってるんだよね～ どう来る？」

「いい、人を待ってるから・・・あ？さ、さわらないで・・」

今日の椿の格好は薄いピンク色のヒラヒラのワンピースにピンク色のダウンコートを着ていて首にネックレス（確かかなり高価な・・）で手に小さなポーチを持ってて長く黒い髪と可愛らしい顔からとても男の子には見えない・・というより普通に可愛い女の子だ。

そのかわいい女の子の椿は男に肩を掴まれ泣きそうになっていた

「おい、椿、待たせたな」

俺が少しだけ走って椿の元へ行くと椿が涙目で走ってきておれのあしに捕まった

「っち男連れかよ」

「でも、あいつなんか背が高いだけでへらへら笑ってて弱そうだぜ？」

っと二人組の男は俺の事を見て話しこみ

「ねぇお兄ちゃん、俺らその子と遊びたいわけね？だから君はどっか行っててよ」

っと俺の胸倉を掴んで凄む男

「あはは、嫌だな暴力ですか？」

っと俺は両手を上げて無抵抗のアピールをしながら笑った

「おいおい、やめとけってお前この前喧嘩して3人にかったじゃん？そんな木偶の棒君に可哀想だって」

っと俺を見て笑う男

周りの人間も俺たちに気付いてぞろぞろとギャラリーが集まりだした

ちなみに俺は、髪型はいつもと違い完全にオールバックで黒っぽいジーンズに上は紫色のYシャツでボタンは胸元まで外して首に一応金の装飾品を付けて腕にも金のブレスレッド・・ぶっちゃけ、ちょ

っと金持ちそうな男だよ

さすがに牙桜の格好でこんな所に来たくない・・・だが牙桜と認識されないので血の気の多いこう言う場所では絡まれるんだよね

でもギャラリーがあまり多くなるのも嫌なので俺は笑いながら済まそうとしていると

「何いつまでもへらへら笑ってんだ!!」

っと男が俺に向かって拳を出してきたので俺はそれを片手で受け止めて腕をひねってやった

「いて、いててててて」

「このやろ~!!!」

仲間がやられてるのを見てもう一人の男が俺にナイフを持ってかかってきた

ギャラリーも騒いでいたが俺は冷静に・・

「刃物の使い方初歩から学んでこい」

俺は、足で男の持っていたナイフを蹴り飛ばし男の顔面に頭突きをかまし男を倒した

そして、腕をひねっている男を離し

「さっさとそいつ連れてどっかいきやがれ!!」

俺がそう怒鳴ると男は気絶した愛棒を担いで何処かえ行った

よく周りを見るとギャラリーが物凄く騒いでいた

「あの人かっこいい~♪」

「イケメンで優しくて強いってすごい!!」

など女性の方々が俺を見て色々感想を述べていたが俺は椿が気になり見ると

ムスっとふてくされていた

「ごめんごめん、俺って色男だから仕方ないんだよ♪」

っと両手を合わせて謝る?と椿に

「お兄ちゃん小学生に欲情する変態のロリコンだもんね♪」

っとおおきな声で言われ周りのギャラリーが見てはいけない物を見るような目をして何処かへ行ってしまった

椿の野郎、肩がふるえている・・・笑ってやがる・・

椿のいきなりの俺のロリコン宣言のせいで赤っ恥をかいた

ちなみに椿の小学生のモノマネはすごいぞ?だって素材その物が小学・・・(ドス)

「ぐ・・・ひじ打ちはやめろよ・・・・」

「私は小学生じゃない・・立派な女だ！！」（うん胸はね♪）

俺が頭の中で回想していると椿が太ももにひじ打ちを食らわせてきた

そしてさらにもう一度、ひじ打ちを決めてきた

結構痛い

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

そして、いよいよ、ライブ会場に入ると中にもすごい人が居て結構人気がある事が見て取れた

お客は女やら男やらで本格的に男女ともに人気があるんだとわかった

「待ってよ影虎」

っと人ごみに遮ら得て椿が少し離れていたので俺は椿に手をのばして椿の手を掴み引いた

そして、指定された席に着くと思いの他良い席でアリーナって奴だ

ライブはまだそうなので椿に荷物番を頼んでジュースを買いに行った

俺の席から売店まではあり得ないほど近くどうやら椿をあまり一人にしないように忍があえてこの席をくれたようだ。売店から椿見えるし

「いらっしゃいませ何になさいますか？」

「「コーヒーとジュースで」」

っと誰かと声がハモった

「すみませんお客様、生憎コーヒーは、残りひとつしかなくてあのどちらかでお願いしても」

そう店員さんが困った表情で言うので俺は、横の人に

「なら、どうぞ？俺は、ビールで良いんで・・・一真？」

「あ、どう・・・・・誰？」

となりに制服姿の一真が居た

此処に来て制服って・・・ていうか

「俺だよ影虎だ」

俺が追う言うと一真は俺の事を見て

「か、影虎だ！？」

っと驚いていた。

「うるさい、とにかく店員さんビールにコーヒーにジュース２つね」

俺がそう言うと店員さんがそれらを持ってきておれは、カードを渡して採算して一真にコーヒーとジュースを渡して

俺の事をジロジロ見ている一真に

「なんだよ?文句あるか?」

俺がそう言うと一真は首を振って

「いや、いつも同じ格好しか見てないからすぐにお前だってわからなかったんだよ。髪型も服装も違いすぎだろ?」

っと一真が言ってくるので俺は、あきれながら

「俺が私服を持ってないわけないだろ?これでも一応、昔は・・・いや、いいや」

「?」一真が首をかしげていたが俺は無視して席に戻ると

椿とは違うが女子高生らしい可愛い格好をした天野が椿と楽しそうに話していた

「なんか席横みたいだな?」

っと一真が言ってきたので俺は、そうだなっと言って席に行くと天野が俺を見て

「誰?」

っと言っていたので再び影虎であると説明した

すると天野は

「う、うそ!?か、影虎君?全然雰囲気違うじゃん!?」

っと俺を見て驚いていると椿が天野に笑顔で

「格好良いでしょ?私が影虎に似合うと思って忍さんから貰って来たんだよ♪」

っと女言葉全開で嬉しそうに笑っている椿に一真は何か違和感を感じているらしい

すると椿が急に俺の服を掴んで俺の顔を下させてきておれが椿に耳を貸すと

「一真と葵デートなんだってさ「ふ~ん」でね・・・ちょっと悪戯しよっか?」

っと笑顔で言ってくるので俺はそれに乗った

「椿達どうしたの?」

っと天野が言ってくるので俺はすかさず椿にキスしたそれもフレンチではなくディープの方で・・

俺がふと横を見ると天野と一真が顔を真っ赤にして俺と椿を見ていて俺が椿から唇を離すと

「「影虎(君)!!いきなりなにやってんだ!?(やってるの?)」」

」

っといってきたら椿が微笑みながら

「だってこれくらい恋人同士なら普通だよな？」

っと男口調に直して俺にそう言ってきたので俺は・・・

「そうそう、付き合ったら3日もあればこれくらい簡単に・・な？」

っと俺と椿はあえて一真や天野に向かって言うと二人は顔を真っ赤にしながらあたふたしていた

一真の奴、これが経験の差か？なんて思っているに違いない・・・

フフフ、追い打ちだ

「そう言えばお二人さんは今どこまで？」

「「え？」」

俺が問いかけると二人はお互いを見合って固まった

そろそろやめて・・・

「もちろん人前でも俺たちみたいなキス出来るよな？」

っと小悪魔って言うか悪魔全開の椿さんが言った・・・ちょっと！？

すると顔を真っ赤にして湯気が出そうな天野が

「で、できるもん！！・・今やってあげるね！！」

っと椿の挑発に赤面パラダイスのまま乗ってしまった

「おい、葵！！」

っと一真は大慌てで行っていたが天野が真っ赤になりながら一真に近づき始めた

さすがに可哀想だろ・・・

俺がそう思いやめさせようとすると

「あ、始まった♪」

っと椿が言った瞬間にステージから大きくて明るい火が上がり音楽が鳴り出した

なんていうかファンタジーなリズムだ

そして、ステージに光が上がりギターとベースとドラムが出てきてステージの真ん中に少しビジュアル系なのかそう言った服を着てマイクを持った・・・・・・・・・・あれ？・・・俺目が悪くなったのかな？・・・・・・・・・・

とにかくその歌姫は歌いだしたそれも物凄綺麗な声でその声に会場のテンションが一気に上がった

曲は、マクロスFのユニバーサルバニー・・

アニソンなのに格好良い歌だったリズムも格好良かった・・歌声もギターやドラムなどもレベルが高くなんと言うか自分たちの音を持っていた。

そして、今度は二曲目では、ＧＩＲＬ　ＮＥＸＴ　ＤＯＯＲの運命のしずく～Ｄｅｓｔｉｎｙ’ｓ　ｓｔａｒ～／星空計画

っとますます盛り上がる会場・・歌うますぎるだろ?それに加えてボーカルがスタイル抜群で物凄い美人で他のメンバーもかなりレベルの高いイケメンなので皆夢中のようだ

すると再び音楽がなり今度は、静かなリズムで

『西野カナ』の『会いたくて会いたくて』だった。

歌が終わると凄い拍手が会場に響いた。椿も天野も二人してとびあがり少し泣きながら感動していた・・こうしてボーカルたちが感想やお礼などを行ってアンコールでライブが終了した

確かに素晴らしい・・・すばらしい・・・・だが、あのボーカル・・・なんで・・・

「瑠奈なんだ?」

この一言に尽きた・・・・・・・・

そして、ライブが終わり俺はとりあえず会場の裏口に回った

するとアンチスキルでない会場の警備員さんが2人来て

「お客さん、此処からは関係者以外立ち入り禁止です。」

っと言われたので俺は、

「なら、園崎瑠奈さんに『俺様』が来たと伝えてください」

俺がそう言うと二人は首をかしげながらトランシーバーで

「え~ ただいま瑠奈さんノ知り合いだと言う男が瑠奈さんに『俺様』がきたとつた・・」

そう警備さんが言い終える前に

「エルク様~♪」

「おわ?」

バキ

急に光の速度で青髪のセミロングで胸元を開いたエロい服装の瑠奈が俺の胸に飛び込んできた・・・正直言う・・・腰の骨が折れた・・・

そして、瑠奈の飛びつかれた俺は見事に倒れ瑠奈は俺に馬乗りになっていた

「いてて・・何しやがる」

「はぁ・・・はぁ・・・」

俺が頭を上げると瑠奈は顔を赤く染めていて息遣いもなんか荒かった

「エルク様」

っと急に口付けをしようと俺に向かってきたので俺は・・・

バシ

「冷た!?」

俺は即座に恐らくライブの後で興奮しているであろう瑠奈の額にヒエピタを張った

瑠奈は頭を押さえながら驚いていた

「あの・・・エルク様?目の前にエロいナイスバディな女性が興奮して発情してキスを迫って居るのにヒエピタって酷くありませんか?」

っと瑠奈が珍しく俺に反抗して来るのでpタピタピタピタっと連続で顔にヒエピタを張りまくり瑠奈は顔がミイラのようになっていた

「ふぇるふはま・・ふみまふぇんはぐふぃてくだへい」

っとヒエピタだらけでそう言うので俺は、とりあえず外してやることにした

額以外のヒエピタを外された瑠奈は少し不満そうにしていたが俺は

今日は椿と来ているのだキス一つだって浮気になってしまうのだ・・
・

「で、あのエルク様?一体今日は?それと物凄く似合ってますよその格好♪」

っといつもの瑠奈らしく下手に出て聞いてくるので俺は素直に

「椿の奴がお前のファンで連れてこられたんだよ」

俺がそう言うと瑠奈の奴は不満そうにして

「私のライブでデートですか・・・そうと知っていれば・・無茶苦茶に・・」

っと何か言っている

「椿に何かしたら殺すぞ?」

「えぇ私は直接何かしたりしませんよ。私からエルク様を取っておいて楽に殺すわけがありません・・もしあるのならあなたを私に取られた後で悲しみゆえの自殺は仕方ありませんよね?・・・・・・・・」

今さらながら女って恐いと思う・・・

「・・・俺お前にはなびかないぞ?多分絶対完全に。」

俺がそう言うとゾロゾロと楽屋からメンバー（あ、鉄矢が居る）が出てきておれと瑠奈を見て

一人が「なんだよ瑠奈!!彼氏居たのかよ~ 俺狙ってたのに~」

っと一人が肩を落としてガッカリしており

「・・・・・・・・・・」

鉄矢に関しては俺の事を見て黙ってるだけ・・・この無口キャラが・・・

「それにしてもずいぶんとレベルの高いカップルだね・・・君、どっかの大学生?」

っともう一人が言ってきたので俺は、首を横に振り

「俺は高校生だよちなみに1年だよ」

俺がそう言うと周りのみんなが驚いていた警備員さんまで・・

「マジで?これで高校1年?・・・」っと悔しがっていた男がさらに悔しがっていた

するともう一人の男が

「じゃぁ瑠奈は年下の子を彼氏にしたわけだ」っと言った・・

俺が年下?ありえないな俺はふと笑いながら瑠奈の頭を押さえて

「俺だってロリコンじゃないもん♪」「「は?瑠奈と付き合ってロリコン?」」ふふふ、こいつの年齢知ってるかお前ら?」

俺がそう言うと3人の男達は固まって考えていたそして、瑠奈はどうしよう?見たいな表情をしていた

「18歳!!」「20歳くらいか?」「・・・・・・・17歳」

っとみなが悩みに悩んで言った・・・どうやら瑠奈の奴、年齢隠してたな?

「全員外れ・・・正解は13歳だ」

「「「は?」」」

俺の一言で鉄矢を交えた3人の男衆は口を開けたまま固まっていた

「だから、こいつは俺が5歳の時2歳の幼馴染で今は恐らく13歳くらいであってるはずだ・・・ちなみに去年まではランドセルを背負っていたに違いない」

俺がこう言うと瑠奈が顔を真っ赤にして俺に

「エルク様!!!何でばらすんですか!!」

っと怒っていた・・・だって・・・ねぇ?虐めたいじゃん

「嘘・・だろ?・・・このナイスバディなお姉さん系の瑠奈が去年まで小学生?」

っと男がうなだれて驚いていて

「世の中って不思議な事があるね・・・ていうか俺らが瑠奈にあった時は確か3年前くらいだ・・・あのときももう完全にグラマラスな体形だったよ・・・小学三年生からあの体型なわけ!?犯罪だろ!?」

っともう一人の男がそう言うと瑠奈が

「なによ!?喧嘩売ってんの?私は、ちょっと2次性徴が速かっただけよ!!何でそれだけで犯罪者!?ていうか私を厭らしい目で見てたあんた等とガキの同級生といちいちちら見してくる先公共のほうが犯罪だっていうのよ!!」

っと本気で怒っていた・・・瑠奈・・・おまえ・・結構つらい体験あったんだね・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・グホ」

何故か、鉄矢が鋼鉄化しながら吐血して倒れた・・・・・・

「「「おい鉄矢・・・思い当たる節があったんだな・・・」」」

っと何故か俺と男達2人は声を合わせて鉄矢に言った

すると

「いつまで待たせるんだよ!!かげと・・・・あ、ＲＵＮＡだ♪」

っと俺が遅いので迎えに来た椿が一緒に来た天野と一真を置いて走ってきた

「ち、あの女・・・」

っと瑠奈が襲いかかりそうなくらい睨んでいて椿も怖がってその場から動かなくなった

その瞬間に一真が

「園崎瑠奈・・・やっぱりお前か・・見間違えじゃなかった」

「あ、あんたも来てたんだ？」

「え？なに？一真ってＲＵＮＡと知り合い？」

「俺じゃない正確には影虎だ」

そう天野の質問に一真が答えている頃、瑠奈に睨まれた椿は少し瑠奈を警戒しながら俺のズボンを掴んで後ろに隠れていた

「あの…影虎君？ＲＵＮＡと知り合いなの？」

っと天野がこそこそと聞いてくるので俺は普通に

「あぁ昔から幼馴染「でこの人の愛人よ♪」（で唯の奴隷その一）・・瑠奈・・・ハウス！！！」

俺がそう言った瞬間に瑠奈は速効で楽屋に帰った

すると天野が物凄い青白い顔をしていて俺は周りを見ると皆がせっせと楽屋に帰ってしまった

なんで？

俺は再び天野達に目を向けると一真が居なくなっていて天野が物凄く距離を取っていた

俺がふと目線を落とすと俺の服を掴んでいるいや引き千切ろうとしている般若ですら泣きながら命乞いをするであろう程の笑？顔の椿さんが居た

そして、俺の服をあり得ない力で引っ張り俺の腰お無理やり下させ同じ目線にすると・・・

「愛人ってどういう意味♪」

うん、おれ死ぬね。物凄くいい笑顔で猫なで声なのに目が笑っていないむしろ獲物を目の前にしてるようだ

「いや、あれは瑠奈が勝手にね？」

俺が説明に入ると椿がいきなり俺の首を強く締め上げてきた

あれれ・・・・・死亡フラグならまだ生ぬるいけど此処から進むと何故だかはわからないが俺、生き返れない気がする・・・・死にたくないな・・・・誰かＳＯＳ！！！

俺が心の中で大きな声で叫んでいると

「え？ちょっと！？」

「エルク様を離しなさいよクソ女、あんたね自分の彼氏だからって

この人の事、ちょっと物みたいに扱いすぎいい加減にしないと締めるよ?・・ちょっと楽屋来て・・・大事なお話しよ?」

っといきなり現れた瑠奈が椿の手を取って俺を救ってくれたかと思うといきなり椿を喧嘩腰で呼び出した。すると椿は驚いた顔から物凄く怒った表情になり身長１７０もある瑠奈に正面から胸を張り見上げながら睨んで

「行ってやる!!ミュージシャンだからって偉そうに・・お前なんかに言われたくない!!」

っと瑠奈の挑発を受けて楽屋えずんずんと進んで行ってしまった

そして、俺は、楽屋から出てきた一真に「どうしたんだ?さっきの二人組・・なんか今すぐにでも死闘が始まりかねない雰囲気だったけど」

っと空気を読まない一真が来たが天野さんがすぐに一真の所に行って事情を離すと一真は、あぁまだ続いてたんだ・・・っと大変だなっと言って何処かへ行ってしまった

あの野郎・・・今度何かあっても助けてやらねぇ・・・

俺がそう思って拳を握っているといきなり後ろから

「よう、久しぶりだな小さな王様よ」

っと耳に突き刺さるような厭らしい男の声が俺の耳に入り俺は、そちらを不機嫌全開の表情で見た。

するとそこには、右頬の下に大きな傷がある金髪の黒い制服を着た男と赤毛の長髪のゴスロリ?な衣装を着た女とボスらしき風貌のガタイが良く俺より背の高い白いスーツを着こなしている黒髪の角刈りの男が居た

「久しぶりねだなエルク＝ガーランド」っと俺に嫌らしい笑みを浮かべる金髪

「なっつかしいね~ 久しぶりだね~ 小さな俺様だ~ でもあたしより大きいね~」っと微笑みながらイライラするほどおっとりとした話し方の赤毛

「貴様に言いたいことは山ほどあるが・・・瑠奈より貴様を先に『スクラップにしてやろう』」っと巨体のおお男が俺に対してそう言った

「お客さんたち此処は、立ち入り禁止で」

っと警備員がその三人に近づいた時、ザシュっと警備員二人の腕が斬り落とされた

「「う、うぁあああああ」」

っと悲鳴を上げようとした二人だがその瞬間に俺は、『異世界樹(ユグドラシル)』を地面から生やし二人の警備員に突き刺し治療と同時に十字路になっていた通路の両面をふさぎ俺と3人を一直線の通路に並ばせた

そして、俺は立ちあがり頭を掻きながら3人ににらみを利かせながら

「久しぶりだな幕府三兄弟・・・今頃になってまで瑠奈を虐めてる

ってか？いい加減、大人になれよ・・さもなきゃガキの時みたいに食い殺すぞ！！！」

っと完全に戦闘態勢で本気で威嚇するかのような声で怒鳴りながらそう言った

余裕そうな笑みで言ったものの・・・この3人・・・一人ひとりが瑠奈並に強いんだよな・・・

俺はそう思いながら『異世界樹（ユグドラシル）』の節約のために錬金術でコンクリを変形させ高熱の柱を作り出し3人に飛ばした

影虎サイド終わり

・・・

「あなたに関係ないじゃん!!そんなことより影虎の愛人ってどういうことよ!?」

っと怒りが噴出して顔が真っ赤な椿に瑠奈は余裕そうに笑いながら

「安心しなさいよ私が勝手に言ってるだけで肉体関係はまだないわよ♪まだ・・ね」

一瞬安心した椿だが腕を組み余裕そうに笑っている瑠奈の一言で椿がまた怒りだした

「まだって何んだよ!!影虎は私・・・だけしか・・・私しか・・・」

急に自身が無くなりシュンとした椿を見て瑠奈は少し可哀想になり

「冗談よ、あの人の心は私なんて見ていない仲良くはしてくれるし助けてもくれる・・・昔のまま私はあの人に仕えてるけど昔との大きな違いは、私の事を愛してくれてないってこと・・あの人の心はあなただけを愛してる・・・正直言ってうらやましいわよ」

瑠奈がそう言うと

「お前は、影虎の何なの?」

「私?昔、エル・・影虎様に地獄の中で救われて地獄のエンジョイの仕方を教わった・・・ただの片思いの１３歳の小娘よ」

っと自嘲気味に言うと椿は口をパクパク開けて固まって

「１３歳!?私より全然年下!?そんなに背が高いのに?」

っと椿は本心から驚いていた。自分は１５歳にもなって身長が１５０に行くか行かないかくらいなのにこの目の前の女は１３歳つまりは小学生から中学生に上がったくらいの少女に大人っぽさで負けているのである。

「そうよ私は小３の頃からこの身体よ・・・で、本題に戻るけど１つ絶対な事は、エルク様は浮気はしていない。だから勝手に分かれるとかやめてね?「別れないよ!!」・・なに子供でも出来たわけ?「う!?」・・ふ~んそれは別れられないわね~・・なら安心した♪」

瑠奈はそう言って笑っていた椿はなぜ笑っているのか分からず首をかしげていた

「何笑ってるの?影虎のこと好きだったんじゃないの?」

「えぇ大好き♪だってね・・子供が生まれて幸せに笑っているあんたからあの人を奪ったらさぞかし気分良いじゃない♪「な?」あぁ安心してねキチンと慰謝料も養育費も私が出すからそして、子供にはキチンとエルク様に合わせるからね。後生活には困らない用にするから子供と幸せに暮らしなよ?」

そう言って大笑いし散る瑠奈を見て椿は机を両手で叩き椅子に立って瑠奈を見下す形になり

「ふざけんな!!私と影虎の関係にお前が入る隙間なんてない!!私はこれからも影虎と幸せに生きて行くんだ!!」

っと瑠奈に言うと瑠奈も若干怒って立ち上がり

「エルク様が将来もあんたを選ぶとはかぎらないね！私見てたんだよ？あんたずっとエルク様を物みたいに扱って機嫌が悪いといつも炎で焼いたりしてさ～ そんなのＤＶといっしょじゃん？結局は疲れると思うね私は思う！！第一あんたはエルク様を愛していないんじゃない？「愛してるし愛して貰ってる！！」あんたはただ甘えてるだけよ。エルク様の優しさに甘えてるだけ！！エルク様の優しさに対してあんたはいつも何してる？火球よね？いっつも優しくして貰ったお返しが攻撃よね？ふざけんな！！私だけじゃなくても他にエルク様が好きな子だってこう言うわよ！！あんたじゃ影虎様を幸せになんてできっこない！！」

そう怒鳴った瑠奈に椿は歯を噛み締めながら涙を流して

「・・・私が影虎を虐めてないって言ったら嘘になる・・確かにひどいことしてると思う「認めるんだ？」・・・でも、私もそれじゃ駄目だって思ってる！！変えなきゃって努力してる！！影虎が優しくしてくれるんなら私はその分影虎を愛してる！！私はあいつが居なきゃとっくに終わってるんだ・・それくらい好きなんだ！！だからだれにも影虎は渡さない！！必死に頑張って私だけじゃなく影虎も幸せにして見せるんだ！！お前なんかに影虎が好きで幸せにしてあげたい気持ちが負けるか！！お前が私に勝ってるのは身長だけだ！！」

椿がそう言うと瑠奈も完全にキレて立ち上がり

「だまれチビ餓鬼！！私がお前に勝ってるのは身長だけだ？胸だってなんだって勝ってるっていうの！！！このツルペタ！！ロリっ子！！第一エルク様の趣味は、お前みたいな幼児体型のお子様じゃな

くて私みたいなナイスバディの美女だって言うの!!あんたなんてエルク様に相応しくない!!」

そう瑠奈が言った瞬間に椿はマジでキレた!!本気でキレた

「・・・私が・・・ツルペタ・・・幼児体型?・・・・・・ふふ、・・・・今までこの体形が嫌だったけど・・・今回ばかりは発育に感謝だ・・・これ見ても同じこと言えるか!!」

っと椿はコートを脱いでワンピースの上を少しだけ脱いで胸を見せた

「は?なにベチャパイ見せて楽しいわけ?負け惜しみでも攻めて「これを見やがれ!!」はん・・・あれ?・・・・待ってよ・・A,B、C、D、E!?えまさか私より・・・「91のFだこの貧乳娘!!」な!?私があんたより貧乳!?嘘よ!!私がこんなロリっ子に?」

っと胸を見せつけサラシを外した瞬間に瑠奈は悔しそうにしていた

「ちなみにウエストはきちんとくびれてるしヒップもある!!お前知らないな?背が低いのが幼児体型なんて考えは甘いんだよ。私はトランジスターグラマーっていう立派なグラマーなんだよお譲ちゃん♪

ちなみにトランジスターグラマーとは小さくても高機能なトランジスタのように、小柄でも均整の取れた体つきの女性のことである。つまりは女性として成熟した、いわゆる「ボン・キュッ・ボン」の豊満な肉体をさす言葉だ!!(by忍)」

「私がこんな・・・今までスタイルで負けた事は無いのに・・」

っと予想外の事態に瑠奈はひるんでいた

「甘いなお譲ちゃん、年上の女性をなめんな！！」

「・・・でもね、幾らスタイルが良くたってその身長じゃモデル体形の私よりは」

「これ私ね」

っと瑠奈の言葉を遮って瑠奈の楽屋にあったファッション誌を見せつけたそこには金桜　奈々特集　天才少女モデルの歴史っと書かれていた

「え？奈々ちゃんがあんたなわけないじゃん。私この子のファッションは気に入って・・・嘘・・・」

「褒めてくれてありがとうねお譲ちゃん♪奈々は私のモデル名だ。どうだ社会的にも私は評価されてるぞ？・・・・だからさ・・・私が影虎に相応しくないって言ったの・・取り消そうか？小娘」

取り消そうかと言った時の椿は、先ほどまでの少女でなく白と黒の長髪の成熟した背の高い女性の姿で俯いている瑠奈の顎から頬を優しく怪しく撫でながら余裕の笑みで言った

「ちなみになろうと頑張ればこう言う大人なスタイルにもなれるよ？これで満足？」

「あんた、その姿・・・・・そんな姿されたら・・私負けてんじゃん・・・性格以外で・・」

っと悔しそうな瑠奈を見て大人な女性の椿・・・椿さんは、

「早く取り消せよ小娘、あたしはあんたより2年先に生まれてるんだこの2年があんたとあたしの恋の気剣や人生経験、大人の経験の差だよ・・でも取り消さないで良いやあんたに認めてもらたって影虎に見とめてもらわなきゃ意味無いもんね「余裕のつもり?」うん、これが大人の余裕だよ小娘、大人をなめんな!!本気で私の男に恋するなら人生全て掛けてやりな!!・・・あんたの宣戦布告、真正面から私が受ける。影虎を渡し以外に見向き出来ないほど愛して愛されてやる。お前なんかが一切入れないくらいにな!!そのために私は生きる。いつでもきな!!相手してやる・・・私は小娘になんか負けない。」

そう言ってつ倍は大人形態のまま楽屋を出た

そして、残された瑠奈は歯を噛み締め泣いていた

今回ばかりは完全に子供の瑠奈の敗北であり大人の椿の勝ちだった

「・・・私だって絶対に負けない!!」

そう瑠奈が言って机をたたき楽屋の外に出た。

つづく

光子力化（ライブ！？カリスマボーカルＲＵＮＡ？！？）（後書き）

以上です。椿さんは以外にミーハーです。

そして、新設定　瑠奈の芸能活動です。西野カナさんの会いたくて会いたくてを瑠奈が歌うと歌詞の意味でどういった感情をこめているのか分かると思います。

そして、瑠奈ＶＳ椿でした。瑠奈ははなから影虎を取り戻す気満々だったんですね・・それも汚い手は使わず真正面から全力で責める気だった。二人の美女または、美少女に取り合われてる影虎は現在遊んでいるわけではありません。

次回は特別に瑠奈のストーリーです。

ではまた。

園崎瑠奈（地獄の中の明るい光）（前書き）

今回は、影虎の幼馴染みで配下で歌手で中学生の園崎瑠奈の過去です。

彼女の過去のお話と影虎との出会いです。

ではどうぞ。

園崎瑠奈（地獄の中の明るい光）

私こと園崎瑠奈は、母がホステスで父がホストという水商売の家庭で生まれた

家は、普通より小さなアパートで結構ボロだった

両親は借金を抱えていたらしい。私は、生まれてから半年くらいでもう記憶がある。私はエルク様達とは違うタイプでだが天才と呼ばれるタイプなのだろう・・そんな私には6歳年上の兄が居た。私と同じで母ゆずりの青っぽい髪をしている美人な兄だ

うちは、借金のせいで両親は日夜仕事に追われストレスを兄にぶつけていたのを覚えている

兄はいつも何かあると何もしていないのに殴られ蹴られ熱湯をかけられたりなど酷い有様で私はそれを見てしまいいつ大泣きしていた。そうすればすぐに両親は私の所に来て兄を殴らなくなるのだ

でも、私がそんなことする必要は無かった・・・だって兄はなにをされようが一切気にせずどんな傷でも怪我でもすぐに直してしまうのだ

両親も全く理解不能な力を持っている兄を恐れまた虐待を繰り返すの繰り返しだったが私が歩き始めてからだ

両親の虐待は徐々に私に向いてきた。

私は両親が好きだったので必死に我慢して耐えていた。母は私に「

あんたも泣かないところを見ると陽と同じ化け物なのね！？」っとさらにアイロンなどを背中に当てられた

ただ、私は傷を治せたりはしないのでやけどの跡や殴られた跡は身体に残り続けるのだ

2歳の前ぐらいになっても両親の虐待は続いた・・・いやそれ以上に今まで怖がりながらも怒りをぶつけるために仕方なしに振るわれていた兄への暴力が私に向かってふるわれ出した

この両親は賢く背中などにしか虐待をしないで絶対に死なないようにと手加減が絶妙にうまいのだ

そして、2歳の誕生日の日には私は、虐待ため虫の息であった・・・父がホストクラブの金を首になったのだ

そして、その事が原因で私は両親によって殺されることになったらしい

ご飯抜きの時は大抵兄がなぜかご飯をもって来てくれて食べていた。虐待の時は兄が帰って来る前に終わった。兄はいつも私の傷を治してくれた

でも、今兄は、学園都市と言う町に居るのだ・・・兄は才能を見とめられたのだ。

そして、私は散々殴られたり蹴られたりした後に父によって首を絞められ息が出来なく首が折れそうになった

（くるしいよ・・・恐いよ・・・お金ってそんなに大事なの？・・・

・私は・・・・死ぬの？でも、またお母さん達が笑うんなら・・・・・）

っと2年しか生きていない私でもいっちょ前にが見れた走馬灯・・全く中身のないことこの上なかった

そして、意識が観世に飛びかけた時にガチャッと家の扉が開き両親は驚いて底を見た

其処には、青い長髪の姉と見間違うような兄だった・・・彼は爽やかにはにかみながら母の心臓をもぎ取った

っは声もあげられずに血を噴き出しながら倒れた

「ひ！？・・・よ、陽！？なんでお前がここに！！それに今お前何して！！？」

っと父は私から手を離して後ろに飛び家に入って来る兄を恐がっていた

兄は、８歳にしては背が高く中学生くらいだった。

でも、容姿は母親似で女の子？と思うような男の子だ

私には優しくしてくれた兄は、確かに母の心臓をもぎ取ったのだ右手にはたくさんの血と未だに動いている心臓があった

兄はそれを微笑みながら握りつぶし口元に着いた血をなめて笑い

そして、あたしの前で・・いや、始めて口を開き

「私の居ない間に私の可愛い妹を殺そうだなんて生意気にもほどがありますよ父上？」

「この化け物がぁあああああああああああ」

っと父は近くにあったビール瓶で兄の頭を殴った

兄の頭にあたちビール瓶は粉々になっていたしかし、兄は動じていなかった。

「浅ましいね・・・なぜ人間とはこうも浅ましいのだろう・・・「ひ、くるなくるな！！」下品だよ。」

そう兄が言った瞬間に父は、細切れの肉片になっていた

「ひ・・あ・・・」

私は何が何か分からずただ泣いていた部屋の一面が血まみれになっていたからだ

そんな私を見ると兄は、私の所に来て…私を抱き上げて・・・

「ごめんね・・・私は君の兄なのにね・・・さぁ行こうか・・・私と来るのもありだが・・・いやだろ」

兄がそう言った時は私は泣きじゃくりながら兄を心の底から否定していた

「いや・・・人殺し！！離して！！」

私がそう言うと兄は大きく笑いながら私をいきなり知らない場所に連れてきた

木原塾と書かれて居る場所だった兄は私をそこで下すと

「私が憎いなら力を付けて殺しに来ると言い・・・でもそのためには君は、力をつけなきゃね・・此処は一見孤児院に見えるけど本当は私のような化け物養成所さ・・・そして、瑠奈、君のような天才症候群の人間ばかりが集められた場所さ・・稀に生まれてくる君みたいな超人ばかりの場所だよ。中に入ってこれを渡すんだ。そうすれば君はここに住めるから・・後これも・・・良い化け物を探すんだ・・そうすれば・・・ね♪」

そう言った瞬間に兄は消えていた。

そして、私は、兄に渡された手紙を握りつぶしながらもう一つ兄に渡された私が唯一母からもらったクマのぬいぐるみを握りしめながら中に入り受付のオバさんに紙を渡した

するとおばさんはすぐに私の事を見て少しだけ悩みながら私を園に入れてくれた

この園は大きな黒い壁に覆われているが基本的には学校一つ程の起き差があるのには2歳の私も気づいた。私は、2歳だが基本的に成長が早く4歳くらいには成長していた

「では、どうぞ、後で園長が来て説明してくれるから」

「・・・・はい」

そんな私が園に入った瞬間に私は吐き気がした

周りには２００人近い子供が居てそれぞれが数人でグループを作って遊んでいたが皆が皆、殺気立っていて私にその殺気が向けられていたんだ

明らかに子供の物じゃない・・・皆がみんな子供の皮を被った何かだって言うのがわかった

私は怖くなり園の庭の隅でぬいぐるみを抱きしめ一人、園長が来るのを待った

そして、その時、私は驚くべき光景を見た

一人の赤ちゃんみたいな男の子が5人くらいのとこの子たちにかこまれて居たのだ

「おい、エルクてめぇ！！いつまでも偉そうな態度しやがって！！」

そう一人の男の子が言うと周りの男の子たちはなんと能力を使いだした

一人は黒い手のようなもので、一人はガラスの破片を浮かし。一人は、小さな竜巻のようなものを出し、一人は、電撃を出していた。

そして、リーダー格の男の子は赤ちゃんみたいに小さい男の子に対して高速移動で殴りかかった

小さな男の子は白いダボダボ過ぎて袖が気物みたいになっている服を着ていてその子は頭をかきながらめんどくさそうに

「『異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）』・・・『死離滅裂（アルバトロンウィップ）』・・」

そう言うと周りにいた男の子たちの能力が消え驚いている隙に小さな男の子は両手から緑色の光の鞭のようなものを出してそれを身体全体で振り回し周りにいた男の子たちを吹き飛ばし叩きのめした

男の子たちは怪我をしておお泣きして去って行った

それを見て小さな男の子は、余裕の表情で去って行った

周りはその子を凝視して彼が施設の中に入るとまた、それぞれのグループで気の張り合いが始まった

（わたし・・こんなところで・・・生活出来るのかな？）

「きみだね？『被検体６－００１』・・・陽君の実の妹さんは？まだ小さいようだが話せるかい？」

っと急に年を取った白衣の男が来たので私は見上げながら

「そうだよ・・・あの人殺しの妹だよ」

っと言うと私はすぐに運ばれて検査をされた体中変な機械に掛けられ注射を打たれ血を抜かれたりなど・・・でも、虐待に１歳から手ているわたしにとっては苦では無かった。

そして、私は席に座らされてある紙を渡された

「この問題が解けるかい？」っと園長さん言われたので私は、子供

番組で覚えたひらがなと数字で全ての問題を解いた
すると園長は驚いていて
「これはすごいな・・・コンピュータでも2分かかる計算をあっさりといているとは・・・里中君、瑠奈ちゃんを天才症候群ランクＡに認定しておいてくれ」
そう言うとさっきの受付の叔母さんがパソコンに何かを打ち出し私はカードを渡された
「君は今日からここで暮らす・・・だがこの中はしっての通り弱肉強食の世界だ。さすがに死者が出るまでの事をすれば止めるが・・・強く生きてくれ・・誰かと仲間になる事をお勧めするよ」
そう園長先生が言って私は食堂に向かわされた。２００人くらいの少年少女たちがグループをそれぞれ作り食事していた。でも、楽しい雰囲気なんてなくて・・ただの栄養補給みたいな感じだ
ふと横を見るとさっきの白いダボダボの服を着た男の子がとても満足そうに大きな肉に齧り付いていた
下品だけどとてもうれしそうでこの冷たい食事よりは全然いいと思った
そして、食事が終わると皆は、ある一つの地下ドームに集められ皆がみんな、能力測定をしていた
そして、私の番が来た

しかし、私はどうやって能力が使えるのかもまず私の能力が何なのかもわからなかった

けど必死に頑張った

すると私の体が光り出した!?

「え?えぇ!?なんで!?」

私は身体が光っていることに驚いていると研究者の人は冷静に私の事を見ていた

そして、私の能力名が『発光物質(ライトアップ)』という身体を光に変換する能力だと認定された

強度は懐中電灯からナイター用の光くらいまでの光量だそうだ

「私にも能力ってあったんだ・・・がんばらなきゃ」

っとその夜、部屋で私は一人能力を使えることで喜んでいた

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

次の日、朝起きて朝食のパンを食べていると赤毛のおっとりとした感じの女の子が私の所に来て

「あなたが~昨日~入ってきた~ランク~Aの~子~?」

っと物凄くゆったりとした話方だ

「うん、そうだよ・・」

「ふ～ん～・・・そうなんだ～・・ん?そのぬいぐるみは～?」

っと私の持っているぬいぐるみを指さしてきたので私は、ぬいぐるみを持ち上げて見せてあげた

でも、その子は私からそれを取り上げるとスープの入ったカップを持ち上げ私のぬいぐるみにかけた!?

「きゃぁ!!何するの!?」

私がぬいぐるみを取り上げ汚れたそれを吹きながら睨むと優しそうな赤毛の女の子は黒い笑みを浮かべながら

「新人いびり～♪」っと楽しそうに言った

すると周りにいた2人の男の子たちが大笑いしながら私に水をかけてきた

私は怒って

「なにすんのよ!!」

っと拳を作ってそれを振り上げたが一人の男の子の光の刃見たいので手首を切られて血が出て物凄く痛かった

それでもぬいぐるみを汚した女が許せなくてとびかかろうとすると

グニャ～

っと急に視界が歪み平衡感覚とかが無くなって来て音も変に聞こえてきて匂いもわからなくなってきて私はその場に倒れた

（からだが・・うごかないよ！？・・）

「ごめんね～私～相手の～身体の～神経を狂わせる能力者なんだ～まだまだ虐めてあげるから～はやく死んでね～♪」

「キャハハハ、相変わらず室町は面白いぜ♪」っとさっきの光のわっかの男の子が高笑いしながら私の手を踏んできた・・痛い・・

「ふん、貴様、俺たちに反抗したら潰してやるからな」

っともう一人の背の高い男の子が私の頭を踏みながらそう言ってきたそして、帰り際にぬいぐるみを踏みつけて行った

（くやしい！！くやしい！！・・・くやしいよ・・・・）

そして、それから1時間ほどが経ち麻痺が治った私は外に出たが誰も遊んでくれなかった・・・・完全に周りから避けられた

周りの話を盗み聞きしたらあの三人はランクAの将来レベル5候補なんだってさ・・・同じランクAの私を蹴落とそうとしているらしい・・・私の前に入った子たちは彼女たちにいじめられ続け自殺したり病気になったり逃げ出したりしたらしい・・・先生たちも彼らがつよ過ぎて文句が言えないらしい

誰もアイツらに目を付けられたくないから私の事をそれからずっと避け続けた・・・・・・・・

1週間の間、誰とも話せずぬいぐるみとお話しする毎日・・・

唯一話す相手と言えばアイツらがいじめに来た時だけ・・・「やめて」というだけ

踏みつけられ蹴られてぬいぐるみを汚され馬鹿にされて逆らおうとすればすぐに動けなくされ・・・もう、涙も枯れそうだった。段々と他の子たちまで私の事を虐めてきた・・大切なくまちゃんを隠されたり切り刻まれたりもした・・・そのたびに私は泣きながらぬった・・・

1ヶ月間が過ぎた

私は、ピカリンと言うあだ名でずっと虐められ続けていた。私が男の子たちに髪を引っ張られて必死に涙をこらえていると男の子たちの手が止った

白いダボダボの服の彼が今度は20人近くを相手に喧嘩をしていつも通り何事も無かったように勝っていたからだ

彼が暴れる時だけこの園の時間は止まるのだ・・あの小さな男の子は、ずっと一人なのに私とは違う・・・彼がひとりなのは孤高なまでに強い精神力と圧倒的な強さのためだ・・・彼は、園では一番の問題児で周りからは小さな王様と呼ばれている。それに比べて私は力が無くて弱くて心ももろいから皆から虐げられているだけ・・・彼が全員を傷だらけにしてあくびをしながら施設に戻った

彼が居る場所はいつもジャングルジムの天辺か樹の上の大きな鳥の巣の中か施設の中だけ・・・いつも攻撃されるのは施設に帰る時だけ・・

そして、男の子が私の髪を引っ張るのをやめたので私はすぐに逃げようとしたが急に身体に力が入らなくなってその場に倒れた

「「ピ～カリン♪」」

「スクラップの時間だ」

またアイツらが来た・・・赤毛の女　室町　香苗（むろまちかなえ）といつも厭らしい笑いをする光の輪を操る男　鎌倉　毅（かまくらたけし）、そして、園で一番身体が大きい大江戸　龍慈（おおえどりゅうじ）……通称『幕府三兄弟』が来て鎌倉が私の体を蹴り続け室町は苦しむ私の事をほほえましい表情で見ている。私が動けないでいると大江戸が私のぬいぐるみの首を引き千切って私に投げてきた

私はついにこらえ切れなくなって涙を流した・・・

「ふん、とっとと出て行けばいいんだよキャハハッハ」

「屑は屑らしく屑の場所に帰るんだな♪」

「ま～た～ね～♪」

っと3人は、私を置いて何処かへ走って行ってしまった。

すると大雨が降ってきた・・・もう嫌になる・・・クソ兄貴が両親を殺さなきゃ私はこんな辛い目に遭わないですんだのに・・・・・

私はようやく体が動くようになって私は泣きながら施設に戻った

・・・

ふすまを閉めて私が居るのにもかかわらず横で寝出した!?

「え、あの・・あなたは・・・あたしの事いじめに来たんじゃないの?」

っとあまりにも調子が狂ったのでそう言うと王様は、せっせと何故か押し入れの中にあったコンセントにポッドのコンセントを差し込みお湯を沸かし何故かある押し入れの中の電気を付けて照らして押し入れの奥からごそごそとカップラーメンを取りだした取り出した箱には災害用と書かれていた

「あの・・・」私が話そうとすると彼は私の方を見て

「お前、今日、飯食いに来なくて正解だな♪今日はサラダと野菜炒めと卵スープで野菜ばっかだったんだよ。お前も喰うか?」

っと彼は私にカップめんを渡してきた

「あの、なんで私に優しくするの?・・・そうか室町見たいに安心させて傷つける気なんだ?ならそうと言って」

私が狂ったようにいうと彼はズルズルとおいしそうな音を立てながらラーメンを食べていた

そして私の方を見ると「うん?」っと首をかしげていた

何故だろう・・・この人私に悪意が無い気がして仕方ない・・

そう思っていると私のカップめんが三分たったので私にお箸を渡してきた

私はお腹が減ったので食べることにした・・・でもどうせまた下剤でも入れてるんでしょ？

わたしはそう思いながらラーメンを食べていた・・・悲しいけど人にやさしくされている（今だけ）で食べるラーメンはものすごくおいしい

「お前、虐められてたな・・・なんで？」

そう聞いてくる王様・・・あなただって虐める気でしょ？

「・・・私が弱いレベルＡだから・・・・」

私がそう言うと彼はそっかそっかと聞きながら満面の笑みでラーメンを食べていた

「それにしてもいつも見てるけどお前意気地なしだな」

そう言われたのになぜか怒りが出てこなかった・・・

「そうだよね・・・あたし心も身体も圧倒的に弱いもん」

「だな、後悔してるだけで反省も何にもしないんだもん虐められて当然。」

っとはっきり言われた・・なんで穴てゃ私をいじめる側なのになんでそんなに親密に聞いてくれるの？

私が疑問に思っていると彼はラーメンを食べ終わりごろんと寝転ん

でいた電気を付けてよく見るとこの押し入れは広い・・中には、いろんなものがある・・ラーメンやポッドなど意外にも布団や枕や本などである

彼はごろんと寝転び本を読みだした

本当に調子が狂う・・・中途半端に優しくされても辛いだけ・・

「この押し入れさ～俺がここに来た時に見つけて俺が勝手に改装して使ってる俺だけの城なんだよね。夜食もあるし電気もあるしたいていなんでもあるから住み心地いいんだよ・・・なぁお前は虐められててそれでいいの？」

彼が急にそう言ってきた私は、涙をこらえ切れなくなって

「いやだよぉ・・・皆と仲良くしたいよぉおお・・・虐められたくない・・・でも・・・私じゃ・・・勝てないよ・・・大勢だし強いし・・・」

私がそう言いながら泣くと彼ははぁ～っと溜め息をつきながら私の身体を掴んで大きな布団に寝かせてハンカチで私の涙を吹いてくれた

「泣くなよ、布団が濡れると寝にくいんだよ・・・お前、俺の下部になれ」

彼がそう言った・・・意味がわかりません

「え？わからない？」

心を読まれた！？

「だから俺は、この園の中で一番強いランクＥＸの化け物だ。その俺の第一の下部になればお前は誰にも虐められないと思うぜ？それにお前が俺のために働いてくれるなら俺はお前を守ってやる・・・前々から俺のような王の才能にあふれる者には手下が必要だと思っていてな・・・お前くらい見た目が良い奴なら俺の手下に相応しい・・どうだ？」

・・・・・・・・・・・・私は彼の言葉に運命を感じた気がする・・・僕ってなんか嫌な感じもするけど・・・あなたなら救ってくれるのかな？・・・なら

「私、・・変わるためにあなたに仕える。」

私がそう言うと彼は八重歯を出しながら笑い

「なら、お前は俺様の手下だ。俺の名はエルク、エルク＝ガーランド・・よろしくな瑠奈♪〜チュ〜・・」

そう言って彼が喜んでいて私はなぜか彼にキスをした

「？」

エルクが首をかしげていたので私はすぐに笑って

「忠誠の証です『エルク様』」

これが私がエルク様に忠誠を誓った記念すべき日であり私が初恋をした日でもある。

・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・次の日

私は、押し入れでぐっすりと眠っていた・・・ここに来て以来・・部屋に居ても嫌がらせをされるため・・まともに寝た事が無かった・・けどぐっすりと寝れた・・・この押し入れはすでにエルク様の場所だからだれも手が出せないんだとすぐに分かった

私は、起きて朝食を食べに行った。しかし、周りの目は私を敵視していて私はまた一人で食事をしていた

すると幕府三兄弟が私の所に来た

「おまえ昨日何処に居たんだよ?てっきり俺は逃げたのかと思ったぜキャハハハハ」

っと鎌倉が言ってくるが私は無視して食べ続けた

すると大江戸が私の髪を引っ張ってきた小市は本当に力が強い

私が泣きそうになっていると遠くからエルク様が歩いてきて私たちの間に不満そうな顔で

「おい、瑠奈、お茶!!」

っと怒っていた・・・あ!?そうか、私って手下だった!?けど動けないよ

「なんだ、エルク、何の用だ」

っと大江戸が少し警戒しながらエルク様にそう言った

「お前に話してないよ？ていうか俺様の奴隷に気安く触るな！！」

そうエルク様が怒鳴った瞬間に大江戸は驚いて手を離して室町は後ろに下がり鎌倉もいつものキモい笑いをやめて下がっていた

この三人を怒鳴るだけで鎮めるなんて・・・やっぱりすごい・・・

「てい」

「あう！？・・・なんですか？「お茶！！」は、はいただ今！！」

エルク様が跳び上がりわつぃの頭にチョップを決めてきたそして、不満そうな顔で私に言ったので私はすぐにお茶を取りに行った

そして、私がお茶を持っていくとエルク様がそれを小さな手で受け取って両手で飲んでいた

私叩かれたし怒鳴られたけどこの人は今私を助けてくれた・・・

私がそう思いながらエルク様の前で座っていると

「お前も食べたらどうだ？」

そう言ってくれたので私は食べ始めた

物凄く安心して食べれた。・・・そしてエルク様は私の食べている物を少しちょうだいと言ってきたのであげるとおいしそうに微笑ん

でいた

「なぁお前って何でここに来たんだ？」

そう彼が無邪気な表情で聞いてくるので私は素直に全部を話した兄の事両親の事、ここでの辛かったこと・・全部を

彼はその話を聞いて

「ふ~んていうかお前俺より3歳も年下なんだな♪」

っと彼が言った・・・あれ？こんなに小さいエルク様が私より年上なの？

私がそう言う目で見ていると

「・・・なんだその反抗的な目はよ？」

「ごめんなさい」

物凄く怒っていたので私はすぐに謝った・・・

その後は会話しながらずっと食事をしていた。楽しかった・・誰かと会話しながら食事できるのがうれしかった。私は食べながらに涙を流していた

人と一緒にご飯を食べるのがこんなにうれしいしご飯がおいしいなんて知らなかったから・・

そして、食べ終わるとエルク様が何処かに行こうとしていたのでつ

いて行った

すると樹に垂直で登っていた・・・

「え、エルク様!?」

私が驚いて声を上げるとエルク様は私の方に振り帰って

「くるか?下僕その一」

そう言って手を伸ばしてきたので私はその手に捕まった

そして、小さなエルク様に大きな私が抱きかかえられて樹の上に登らされた

結構高い樹なので自然と周りが見渡せた私は少し感動をしていた

するとエルク様が私の顔を自分に無理やり向けて

「おい、お前、強くなりたくないか?」

そう聞いていた・・・なりたい・・・

「なりたいです・・けど・・・わたしじゃ」

「なりたいんだな?よし決まり♪」

私の言葉を遮って彼は納得して笑っていた

「瑠奈、お前を俺が強くしてやる・・幕府三兄弟をけちょんけちょ

んに出来るくらいにな♪」

「え？えぇ～！？」

「俺が決めた今決めたはい、決定・・これからは俺様の事をエルク様か師匠とよぶように！！」

こうしてなぜか私の特訓が始まった・・・

基本的にエルク様は、私に戦い方を教えてくれた。

厳しくも私を労わってくれた

そんな特訓が3カ月にもわたって続けられた・・・・・・・・

そして、3か月がたったある日、エルク様が急にいなくなった・・・・

そうしたらどうだ今まで何もしてこなかった奴らが私にちょっかいを出し始めてきた

でも、今までとは私は違った・・・・

男の子たちが大勢でいつものようにかかってきたが私は傷一つ負うことなく全員を叩きのめす事が出来た・・・皆がみんな能力を使ってきたけど私はそれらを避けて急所を殴るだけでよかった

すると女子たちも私に対して睨みを利かせてきたけど私はちっとも怖くなった

分かった事がある・・・エルク様に仕えていることで私は強くなれてるんだってことに・・・石を投げられれば石を蹴り返して投げた奴の頭に命中させると女子たちも顔を傷つけられたくないのかすぐに逃げた行った

すると私に急に光の輪が跳んで来た

私はそれを見て身体を逸らしてそれを交わした

「ヒヒヒ、よく避けたなピカリン♪最近ずっと小さな王様にそばにいて虐められ足りないだろうかと思って虐めに来ちゃったぜ♪」

っと大笑いしながら近寄って来る鎌倉・・・

「うるさい、あんたの笑い声は耳障り」

「なまいきなぁ!!」

私がそう言った瞬間に鎌倉はキレて走りながら両手に光輪を出して私に投げつけてきた

私は落ち着いて考えた・・・そして、思い出した・・エルク様の言葉を・・・

『鎌倉の光臨は2つまでしか出せないから2つを避けたら痕は簡単に倒せる』

私は、頭を下げながら飛び光輪は私の頭と足のあった一を通りぬけて行った

「な？」

「まずは一人目！！よくも私のクマを切り刻んでくれたわね！！」

っと私は文句を言いながら鎌倉の首にパンチをして頭突きをした

鎌倉は鼻次を出しながら鼻を押さえて悶えていた

私の喧嘩の仕方って本当に女子からかけ離れてるな・・

すると今度は後ろから私に始めて虐めを始めた赤毛の室町が来て私の事を微笑みながら睨んで

「もう～役に立たないな～鎌倉～♪それと～ピカリ～ン・・・・調子のらないでね？」

そう言った瞬間に私の視界が歪んだ

また、感覚を狂わされ始めてるのがわかるでも

「あんたこそ・・・調子に乗らないで・・小さな王様の部下だ！！」

そう言って私は室町の真ん前でナイター照明ほどの光をフラッシュのように出した

「あう！？めが・・・目が・・・」

っと目を押さえて泣いている室町・・・急に体が動くようになった

エルク様の言葉に『室町の能力は眼で１０秒間睨んでいる人物に発

動するんだ。ならあいつの目を潰せば勝機はある』

「本当ですねこんなに簡単だったんだ・・・こいつを思いっきり殴るのって！！」

「う！？・・・ごほ・・・いたいい・・・いたいよぉおおおお」

っとお腹を押さえておお泣きしていた・・いい気味だ

最後はあいつか・・いつも私を力でねじ伏せてくる・・・大江戸

「貴様、どうやらスクラップになりたいみたいだな・・よかろう・・この俺が直々に潰してやる」

そう言った瞬間に大江戸の周りを砂が舞い始めた

コイツの能力は粒子状の物を好きに動かせると言う物・・・砂場が近くにある時点で砂はアイツの武器

そう思っていると砂の手が私に向かって伸びてきた

「！？・・・きゃ！？」

私がそれを交わすと私の顔面に大江戸の拳が当たり私は殴り飛ばされてしまった

でも、私はすぐに起き上がり大江戸の拳を見きってまたまたフラッシュで大江戸の目を潰し大江戸の足にとび蹴りをした。すると大江戸はフラフラと体勢を崩し園にある観賞用の池に落ちた

『大江戸の奴はガタイも良いし第一力が強いから女のお前が真正面からやっちゃだめだ。アイツは実は・・カナズチなんだよ。だから池にでも落としてやれ泣きながら溺れるぜ♪』

エルク様の言った通り大江戸は泣きながら必死にもがいてなんとか岸に上がっていた

勝った・・・私をいつも虐めてきた奴らに勝った・・・

私は拳を強く握りながら喜んでいたしかし、急に何かが私の頭に当り私は頭から血が出ているのがわかりすの場から動けなくなった

痛い・・

投げたのは室町だったすると鎌倉も起き上がって大江戸も泣きながら私に向かってきた

他の殺気の男の子たちや女の子たちも向かってきたのだ

（あぁ~あ、後もうちょいだったのに・・・ごめんなさい・・エルク様）

私がそう思っていると大江戸がものすごい形相で私を睨みながら

「きさま・・・よくも俺様を・・・顔をぐちゃぐちゃに潰してやる」

そう言って足を上げた

もうだめだ

そう思った時だ。私を囲んでいる幕府三兄弟の真上に急に黒い影が現れて

幕府三兄弟と周りにいた男子の顔を身体を相手んさせながら回し蹴りで蹴り飛ばしの前に着地した

その影は白いダボダボの服を着た小さな赤ん坊のような・・私の主で私の初恋の相手だった

「へへへ、よく頑張ったじゃん瑠奈・・・合格だ」

そう彼は私に笑いかけながらそう言った

「うぐ・・えるくさまぁ~」っと褒められると同時に私はうれしくてエルク様に抱きついた

「よしよし、お前はよくやったよ・・・痕は俺がやってやるよ・・」

そうエルク様が言った瞬間に園のほとんどの児童がエルク様に襲いかかった

しかし、エルク様は、笑いながら全員を一人ひとり地面に平伏させた

庭にはほとんどの児童が怪我をしながら倒れていた・・・女子は怪我はしなくても大泣きしていた

そして、唯一立っているエルク様は倒れてる奴らにダボダボで手が出ていない袖で指さし

「てめぇら!!聞きやがれ!!瑠奈は今日から本当に俺様の部下だ

♪瑠奈に何かするっていう事はつ・まり・・・俺の宣戦布告として承諾する。死にたくない奴は、わかってるかい？」

そう悪い笑みをするとゾロゾロと児童たちは、施設に帰って行った

「エルク様・・・何処に行っていたんですか？」

「あぁ・・ちょっと猫と遊んでたらいつの間にか塀つたいに知らない公園まで行っててさ・・・それで今帰って来たんだ」

私はエルク様の言葉に呆れた・・・この人生まれながらの猫だと思う・・

「まぁそれよりもこれからもよろしくな♪瑠奈」

彼がそう言ってきたので私は笑いながら

「はい、仰せのままにエルク様♪」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

この後の2年間は楽しかった。でも、その後、エルク様は何処か得連れて行かれてしまった・・・その後にはやはり私に絡んでくるやつらはいたが私はもう力でねじ伏せる事が出来た

そして、エルク様が居なくなってからも私は、強く生きれた

小学3年のころある実験の被検体にされ身体を光に帰ることが可能

になった・・・そして私は私のような不幸な子を増やさないようにその力をエルク様のように誰かのために使った。

今では、たくさんの仲間が居る・・ついでに歌が好きだった私は、歌手としても成功した

もしあの時、親に殺されて居ればこんない楽しい事は出来なかった。

もし、エルク様にあの押し入れで会っていなければ・・・そう思うと私は恵まれていると思う

そして、私は仲間とともに裏切り者を探している時・・大勢の男達に囲まれた

レベルアッパーなんてものに頼っている下種どもだった

そいつらを私は叩きのめそうと思っているとき上空からある人が降ってきた

「なにもんだ?どこからあらわれた!?」

っとボスらしき男が聞いた・・でも私にすぐに誰かわかった

「見て解らなかったのか?上からだよ・・・正確に言えば上空２００メートルくらいかな?さぁ～て・・『噛み殺してやろうか?』〜ニコ〜」

っと私の前で笑っているのは・・・９年前に私の前から消えた主・・・あのときとは比べるべくも無くたくましく成長し格好よくなったエルク様だった

そして、あの方の笑顔を見た時・・

私は、もういちどエルク様に恋をした・・・・・・・

ＥＮＤ

園崎瑠奈（地獄の中の明るい光）（後書き）

実は瑠奈を強くしたのは影虎だったんです。心と体を鍛えてあげていたのです。

そして、瑠奈の兄のレベル６の陽は幼少時代から人外でありながらも妹の瑠奈が心配で仕方がなかったが自分がからむと瑠奈が不幸になる事はわかっていたのであえて影虎の居る施設に送ったのです。

ちなみに影虎と瑠奈そして過去に陽が居た施設は現在もどこかに存在しています。また今度出てくるかも・・

ではまた。

魔造人間（ホムンクルス）（前書き）

今回は、ホムンクルスｓｉｄｅのお話です。

ホムンクルスのお話です。

主人公は前回登場したミトラです。

ではどうぞ

魔造人間（ホムンクルス）

此処は学園都市を離れた遠い街の病院・・・そこには、目に包帯をした車椅子の少女『舞』とその車椅子を押してお医者さんに話を聞いている銀髪の影千代が居た

「で、舞ちゃんですが後、1か月すれば目が見えるようになりますよ♪」

其処のお医者さんがそう言うと銀髪の影千代は嬉しそうな表情になり

「本当にありがとうございます!!舞に伝えてきます・・それと・・・あの~ あの件は~？」

「特別に許可しましょう。舞ちゃんには早く元気に走りまわれるようになって欲しいですからね♪」

「ありがとうございます。」

っと頭を下げて嬉しそうに走っている銀髪の影千代は看護師の人に注意され照れながら病室に向かった

病室の中にはベッドに座り眼の所に包帯をした舞が居た

「舞♪」

「どうしたのお姉ちゃん?」

っと銀髪の影千代の声に疑問を持った舞が聞くと銀髪の影千代は嬉

しそうに

「後、一カ月したら眼が見えるようになるって「ほんと?」本当だ。それと驚くなよ?クリスマスの日にオーロラ見に行っても良いって先生が言ってたよ♪」

彼女がそう言った瞬間に舞は包帯から涙を流し

「ほんとうに♪私うれしい!!」

っと銀髪の影千代に抱きついた舞を影千代は撫でながら一緒に喜んでいた

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・

「すぅ・・・すぅ・・・」

嬉しくてはしゃぎ過ぎた舞は眠ってしまい銀髪の影千代は舞に布団をかけ直してあげると

男状態に戻り優しくも悲しい目で舞の事を撫でながら

「ごめんな・・舞・・俺は一緒にいけないかもしれない・・ごめんな・・」

そう言って彼女から彼になったミトラは病室を出て病院を出て夜道を一人で歩いていた

学園都市の外の日本と言う町で悲しみに満ちた表情をしているミトラに・・

「よう、ミトラ」

っと後ろから声をかけてくる人物が居た

そいつは、パーカーにジーパンをはいていて口元にたっぷりと血を付けているボサッとした黒短髪の青年・・負導一真と瓜二つのそいつは

「何の用だ?また、自分に告白して来た女を喰ったのか・・トロン」

ミトラがそう言うとトロンは下品に笑いながら

「あぁ喰ったぜ?本当に女って馬鹿だよな?俺がちょっと優しくしただけで惚れてよ?それで今は俺の胃袋に収まってるってわけだ♪泣き叫びながら助けてって言う奴を喰うのは最高に美味いよ」

っと嬉しそうに言ったそんなトロンをミトラはながし眼で見て

「下種だな・・・」

そう言って立ち去ろうとするとトロンは笑いながら

「そう言うてめぇは最近食ってないみたいだな?人をよ?なんでお前は男でも女でも食えるのに急に喰わなくなったんだ?此処1年近く喰ってないよな?それで物凄く弱り果ててるのが目に見えるぜ?なんでだよ?」

「貴様に我の事は関係ない、女が喰いたいのなら勝手に喰えば良い・・我はもう誰も喰わん・・」

そうミトラが言うとトロンは、物凄く厭らしい笑みで

「なら、あの舞ってガキを喰わせてもらおうかな?」

そう言った瞬間にミトラはトロンの首を掴み少しずつ灰に変え始めた

「怒ったのか?あの冷酷で人を喰うのが大好きだったミトラがかわったねぇ~」

「だまれ!!」

ミトラが怒鳴りながら手に力を入れるがトロンは相変わらず笑っており

「俺らホムンクルスは、短い寿命を異性の命を喰うことによって生きながらえる化け物だ。アインに関しては男を誘惑して一度ヤってから喰うっていう方法を好んでる悪女だしな♪ロゴスに関しては親父に身体をいじられて好きになった異性に愛情以上の食欲が湧くよう改造されてから恋をするたびに喰ってるからな♪いつもいつも食欲に負けておお泣きして帰って来てるもんな♪そう言う意味じゃお前とロゴスは似てるな?」

「ロゴスはかわいそうな奴だ・・それ以上馬鹿にするな」

「やだね、自分の本能を受け入れろよ?生きたいって本能と喰いたいって本能を解放しろよ?それともお前あの舞ってガキを育ててから食うつもりか?」

「消えろ」

そうミトラが力を入れた瞬間にトロンの首は灰になり首が落ちて身体も地面に落ちた

そして、それを見たミトラは、つまらなそうに歩いて行くと後ろに身体が再生したトロンが居て

「ひゃははは、もしお前が消えたら俺が舞を喰ってやるよ」

っと大笑いしながら闇に消えた

「俺は・・・どうすれば・・舞を守れる?」

そう夜空を見え上げながらミトラは呟いたまるで神の言葉を欲するように・・・

そして、内なる食欲に駆り立てられていた

人であればもう誰でも喰ってしまいたい衝動にかられながらもそれを抑え込む日々

いつからだろう・・俺が人を喰わなくなったのは・・・たしか・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・6年前

俺は生体ポッドの培養液の中で生まれた

目を覚ました俺はポッドの中から周りをの覗くと一人の年老いた男とその男に縋るように集まっている女が2人とソファーで寝転んでいる男が一人

そして、俺はポッドから出された俺は赤ん坊の姿だがすでにある程度の知識のはありそいて、ポッドから出された俺は赤ん坊の姿から急激に成長し始めた

周りにいた奴らはそれを普通の光景を見届けていたが俺は急にあらゆる苦痛を感じ始めた

急に俺の姿が女に変わったり男に戻ったりと異常な反応が起こったのだ

それを見ていた製作者は驚きの湯すでモニターを見始めた

「ぐ・・・あぁあああああ・・・く・・・・・あぁ・・・」

徐々に変化してくる俺の男と女の身体・・・・二つの性の二つの変化が同時に怒った俺は、痛みに耐えながら必死に意識を保った

そして、何とか俺の成長は終わった

俺は、男の姿で身長が１８０くらいだった

それを見て製造者は安心していて女二人は、俺を避けるような目で見ていた

そして、俺に二人の女は服を渡してきた

一人は、美人な背の高い性格がキツそうな美人な女で一人は背は普通くらいでポニーテールの気弱そうな女

俺は女に借りた服を着ると立ち上がって周りを見渡した

すると製造者が俺に

「意識ははっきりとしているようだな・・あの欠陥細胞ではどうなるかと思ったが・・・うまくいったようだな」

っと何かを納得していた俺は聞かずとも俺が何かを分かった・・・俺は魔術いや錬金術によって生まれた生命・・ホムンクルスだと言う事を・・・

「で？我は一体何為に作られた？」

俺がそう製造者聞くと製造者が口を開いたその時！！

「死ね」

っといきなり俺に向かって青紫色の炎の球がソファーに座っていた男から来た

しかし、俺は、一切気にしなかった炎は俺に触れると灰になってサラサラと地面に落ちた

「っち・・・スキルもちかよ・・」

っとソファーに座っていた男は面白くなさそうに寝ていた

「ほほぉ・・生まれてからすぐに特殊能力が使えるとは・・・素晴らしい・・貴様の名は・・・ミトラだ」

製造者がそう言うと3人の男女が驚いていた

「おい、おやじ!!俺様ですらミトラじゃないのになんでこいつが神の名を与えられてるんだ!?」

「そうよ!!私達では無くいち番最後に生まれてきたコイツが私たちの中で一番強いってこと?ねぇパパ?」

「・・・・・私は良いですよ?」

「黙れ、トロン、アイン、ロゴス・・お前達には文句は言わせん」

「・・・私言ってませんよ?お父さん?」

っと順番にソファーの男『トロン』気の強そうな長髪長身の女『アイン』気のよわそうなポニーテールの女『ロゴス』がそう言ったと共に製造者がきつく言ってロゴスが困りながらそう言った

「ふざっけんな!!〜ガン〜何で新入りより俺達が格したなんだ!?」

っとトロンは机を蹴り飛ばしながらそう言った

するとアインも不満のそうに何処からか出した弓と矢を俺に向けていた

すると製造者が大きな声で

「逆らうな！！」

そう言った瞬間にトロンとアインの体に紋章が浮かび上がり紅く輝きながら二人を苦しめていた

「あっぁあああああああああああああ・・ごえんさい・・・・・ぐぁあああああゆるしてぇえええええ・・」

「ぐぁあああああああああああああああ・・・くそ・・・・・うぐぁあああああああああああああああああ」

っと二人が地面を転がりながら苦しみのあまり叫び声をあげていた

これは俺たちホムンクルスを縛り付けるために製造者が設定した鎖・・・

俺はあまりにも二人が哀れに思えて製造者を殴った

「ぐ！？・・・・・・・・何をするミトラ！！」

「お父さん！？ミトラさん？」

っと製造者は俺を睨んでいてロゴスはオロオロとしていた

「貴様、あの二人を見てホムンクルスが私に逆らうと言う事がどういう意味かわかっていないらしいな・・苦しめ！！！」

そう製造者が言った瞬間に俺の体に紅い紋章が浮かび上がったが苦

しみを味わう前にその紋章は灰になって消えた

「「「「!?」」」」

俺がいとも簡単に鎖をはずしたので全員が驚いていた

「馬鹿な?・・鎖を・・・自分でじゃと?」

っと製造者は驚いていた・・・・・が俺には関係が無かった初めから鎖に繋がれるつもりはなかった

「いいわね・・鎖から簡単に逃げれて・・・」

そう鎖の力が収まったアインは立ちあがって弓を構えながらそう言った

そして、横ではトロンが全身に青紫色の炎を纏いながら俺の事を睨んでいた

「トロン、アイン、ミトラを止めよ!!」

「「言われなくとも!!」」

そう言ってアインは物凄く速い弓を打って来た

俺はそれを受け止めたが受け止めたはずの矢は俺に向かって進んできた

そして、トロンは青紫の炎を纏ったまま俺のところに飛んできた

本当に・・・ウザい！！

その後の事は覚えていないがアインの矢を灰に変えアインを一時灰に変えてずっとトロンと殴りあってた気がする

そして、身体的には俺が劣っていたが能力で勝ったのを覚えている

灰に変えられたトロンとアインはすぐに元に戻ったがアインはそれ以来俺に近づかなくなった

そして、２人勝った俺を製造者は睨みつけながら

「何処得行く！！」

っと怒鳴っていたので俺はただ・・・・

「外の空気を吸いにな・・」

そう言って外に出た・・・外は良い・・・空は良い・・

そして、鉄塔の真上に居た俺は、下を見下ろした

すると人間達が居た俺はそれを見た瞬間に『喰いたい』という欲求に襲われた

俺はその欲求に従い下に降りてとにかく自分とは違う性別の女を食いまくった

その日だけで１０人は喰った。物凄くうまくてあの味は忘れられなかった

すると今度は男が来た・・・俺達ホムンクルスは異性しか食えない筈だったが俺はその瞬間に女に変化してくった女の恋人の男の肉と内臓を女の姿で喰らった

これはまた別の味がして美味かった

俺はホムンクルス初の両喰い鬼だった。

それからの5年間は、暇があれば肉を貪っていた

トロンもアインもそれなりに楽しんでいた。恋と一緒に食事が出来るって・・・ただ、ロゴスだけは食欲があまりなかったので製造者に改造され恋心を食欲が上回るようにされいつもいつも大泣きしていた

俺にはあいつの気持ちがわからなかったけどそれも個性なのだと認めていた

何だかんだ言って人を喰った量は俺が一番多いのだが・・・

そして、1年前のクリスマスの日、俺はまた人を喰おうと出歩いていたすると車椅子を押した美人な女が居た

髪が長く結構背が高くてスレンダーな女と車椅子に乗せられていた目に包帯を巻いた3歳程度の少女

その二人が岬の高台に居たのだ

おれは、そっと近寄った

二人はどうやら気付いていないようだった・・・俺は、適当に話しかけて喰おうと思ったしかし、俺が喰らいつくよりも先に女は、車椅子の少女を海に突き落とした

「な！？」

俺はそれを見ると同時に女に食いつくよりも先に全力で走り眠っている包帯をした椅子の少女を高台から足理降りてキャッチした。

そして、そのまま海に落ちずに俺は海を灰に変え着地し少女を見たまるで薬で眠らされているかのように静かに眠っていた

俺はなぜか怒りに燃え上がり少女を抱えたまま一気に高台まで跳び上がり少女を突き落とした女の前に着地した

そして、女を睨んだ・・・・・・だが

少女を突き落とした女は、体中痣だらけでやせ細っており目に生気が無かったまるで生きながらにして死んでいるようだった

そして、女は俺の抱いている少女を見ると俺の女状態と似たような声で

「・・・助けちゃったんだ？・・人喰いさんも人助けってするのね？・・・よりにもよって助けなくて良い子を・・」

そう言っていた俺はとりあえず少女を車いすに座らせて女の胸倉をつかんだ

女は軽く簡単に全身が持ち上がった

「何であんなことしやがった!?」

「あら?人喰いさんに人を殺す理由を聞かれるとは思わなかったわ・・強いて言うなら私は、もうすぐ死んじゃうの?私の家ね両親が借金を残したまま死んじゃってね病弱な私と同じく病弱なあの子の二人が残されたわけ・・わたしも必死に育てようと身体を売ったり色々したんだけどね・・私の病が悪化して余命半年って言われたの・・「・・・・」でねあの子は親戚も誰もいないから私が死んだら一人ぼっち・・施設にも入れないわよ・・あれだけ身体が弱いんだから治療費も馬鹿にならない・・そんな子を誰が幸せにしてくれる?ならせめて楽なうちに殺してあげようと思ったのに・・・あなたは助けてしまった・・」

俺は女をすぐに下した・・許される事じゃないのはわかってるのにこの女は愛があった

本当に少女を思うからこそ殺そうとしたのだ

「でね「?」あなたに私の身体も肉も血も内臓も骨も全部あげるから・・・舞を・・・舞のそばにいてあげて?あの子が気にいらないなら殺しても良いから・・一人にしないで・・・私の全部を上げる」

そう言って女は俺にキスして来た

愛のない、ただ、貪られるためだけのキス・・・それだけで俺はこの何を考えているのかもわからない可笑しな女に惹かれて愛して女を抱いた・・そして、終えた後、女は血を吐きながら・・・

「舞を・・・お願い・・・・あと、私の名は・・・愛っていうんだ・・・・さぁ・・・腐る前に・・食べて・・・・最後に愛してくれてありがとう・・・・・・・・ーーーーーーーーーーーーーーーー・・・」

そう言いながら女は息絶えようと目を閉じた

俺は喰うことに躊躇した・・・・だが・・俺は、あえて女を喰ったおいしくなかった・・・塩分の味がした・・・しょっぱかった・・でも、この女の死体を誰にも拝ませたくなった・・始め愛した女は、俺の前で死に俺によって喰われた・・・

そして、女の全てを喰らった俺は、泣いていた喰うのがこんなにつらいって知らなかった・・血を飲めば飲むほど女の辛さが伝わり心臓を喰えば女の舞への愛が伝わってきた

すると朝が来ていて朝日がでていて

「う?う~ ん・・おねえちゃん?どこ?」

っと車椅子の少女が目覚めて周りを見渡していた

この少女がいなければ愛は少しまともな人生を送れただろう・・・許せない・・・

俺は、憎しみを何故か罪のない少女に抱いていたが・・・「舞を・・・お願い・」っという愛の言葉を思い出し酷く愛らしく思えた

そして、俺は女の姿になって優しく少女を撫でながら抱きしめ

「お姉ちゃんは此処いるよ♪」

っと愛の声真似ではなしたすると舞は喜びながらお姉ちゃんお姉ちゃんと顔を胸に擦りつけながら笑っていた

この日から俺のミトラと愛という舞の偽の姉の生活が始まった

舞の前では俺は別人になった・・・でも、舞に触れあの子の成長を見守っていると愛おしくなった

彼女を本気で守ろうと思った

そして、俺は愛を喰った時から人を喰えなくなった・・・愛以上の人は俺に見つからない・・だから喰いたくなかった

・・・

・俺は後、1週間もしたら壊れて死ぬ・・・・・俺はどう頑張ってもひとを喰わなきゃ舞と一緒にオーロラなんて拝めない・・・・そういえば

今日、学園都市のライブ会場に居た俺のオリジナル・・・あいつの・・・・・

「そうか、我はオリジナルの心臓を喰えば・・永遠の命が手に入る・・・そうすれば・・舞と一緒に・・舞を一人ぼっちにしないで済む・・・・なら、我は・・・最後に一度だけ人を喰おう・・愛、お前も許してくれるよな?・・・そして、オリジナル・・・お前には悪いが・・愛と俺の約束のため・・・そして舞のために死んでもらうぜ?」

俺がそう決めて笑いながら歩いていると

「面白そうな話してるわね?ミトラ」

っと長髪のアインが俺に色目を使いながら迫ってきた後ろにはおお泣きしているロゴスがいた

「うぇえええん・・オリジナルの筋肉を食べれば・・・私はもう好きな子を食べないで済むのかな?」

っとロゴスが迫ってきた俺は頭を撫でながら頷いた

そもそもオリジナルが居なきゃ俺らは生まれなかった・・・こんな思いして生きなくてよかったんだ

だったらせめて償いとして死ねよオリジナル

「私は、とくに理由は無いけどオリジナルって食ってみたいわ」

コイツは悩みが無くて良いな・・・喰うこととヤルことしか頭にないんだもんな

「面白そうじゃん」っと上からトロンまで入ってきた

夜道でそろったホムンクルス四人・・・

「なら、行くか？永遠を手に入れるために？」

俺がそう言うと皆は、笑いながら

「「「あぁ（おう）（はい！！）」」」

「良い返事だ・・行くか・・最後の晩餐によ！！！」

そう言った瞬間に４人はその場にいないかった。新たな化け物が愛と欲望のために学園都市に侵入したのであった。彼らはホムンクルス・・魔術に作られた・・・化け物である。

つづく

魔造人間（ホムンクルス）（後書き）

以上です。次回、こいつらが学園都市に本格的に来ます・・さぁ一体どうなるのか・・お楽しみに！！

トロン

ゼアルの血を元に作られたホムンクルス

一真と同じ姿だが性格が悪く相手をおちょくるのが趣味

寿命が短いだけで不老不死

特殊能力『疑神炎鎧』

青紫色の神の業をも燃やしつくす炎を身にまとい戦う。主に黒い雲や炎の目など

中に入っている精神は、『ケルビム』ちなみに４枚の翼の天使

アイン

椿の血液からつくられたホムンクルス

椿とは違い初めから大人形態で性格は、悪意の塊で冷酷な残忍

寿命が短いだけで不死身

特殊能力『病魔の矢』と『太陽の矢』

疫病の矢は交わすことも避けることも受けることも逃げることも防ぐこともできない太陽の光のような矢を放つその矢に当るとあらゆる疫病にかかりその病は絶対に治る事が無い。

太陽の矢は、交わすことも避けることも受けることも逃げることも防ぐこともできない太陽の光のような矢を放つその矢に当ったものはどんなものだろうが瞬間的に燃え尽きて灰も残らない。

精神の元になっていおるのは『ドミニオン』

ロゴス

麻華の血液によってつくられたホムンクルス

性格はまぁ優しいのだが相手を追い込むのが好き

寿命が短いだけで不老不死

特殊能力『コトダマ』

物または人の真の名をかたるだけでそれらを1分間自在に操る。基本的に強力で抗う事は出来ない絶対の力。

精神の元になったのは『ソロネ』

ミトラ

影虎の遺伝子と血液を改良して作られたホムンクルス

性別は女と男とが入れ替わるため不明

性格は、天邪鬼で影虎に全く似ていない一人称は我

一番若い天使であるメタトロンの力と一番古き天使であり悪魔であるベリアルのハイブリッド

本来は天使の魂を元にするはずが失敗し悪魔であるベリアルの魂が憑依した

特殊能力『死の天使』＆amp;『神怒の炎』

自分に触れたものをなんであろうとも灰に変える力を持つ。しかも、灰になったモノに触れたものも灰に変える力。

もう一つは、七つの大罪の内どれかを抱いたものを燃やしつくす炎と世界そのものを燃やしつくすほど強力な神の炎を操る。

人格の元になっているのは、『ベリアル』

ホムンクルス

魔術の人工生命で生まれたホムンクルスとは人間の肉体を有し、知性と言語能力を有しているが、人間の魂を持たない存在のことであるという。そして、こうしたホムンクルスには、人間の魂の代わりに、惑星の精霊や天使や悪魔の魂を入れることが可能だという。

人間の子供は受胎してから早いうちには、まだ人間の魂は宿って

はいない。だから、人間の魂が宿る前に、この胎児に鍵をかけ、魂が入れなくする。そして、その代わりに惑星の霊などを呼び出して、その胎児に宿らせれば、強力な才能を持った人造人間を造ることが出来る。これがホムンクルスである、と。
言って見れば、これは本来肉体を持たないはずの精霊を受肉させてしまおうという技術によって生まれた。

今回の４人はクローン技術と錬金術を組み合されて生まれた科学と魔術のハイブリッドの怪物です。

身体能力が聖人の何倍も高く全員が怪力で戦車くらいなら軽く持ち上げられるほど強い

足も速く車に追いつけるほど早くチータを超えている。

そして、彼らには魂が無く死が無い

身体はどれだけ傷つけられてもすぐに回復する。

だが、寿命が短く短命である。

永遠に息ながらえるのはオリジナルの心臓や内臓または血液や筋肉を喰らう必要がある。製造者にはミトラ以外逆らえない。

それぞれがオリジナルに嫉妬し恨んでいる。

食料は、異性の人間

トロンは女を捕食して寿命を延ばす。

アインとロゴスは男を喰って（比喩にあらず）寿命を延ばす

ミトラは、両性タイプなので男でも女でもどちらでも食える

製造者

アルバトロン・ホーエンハイム

４６歳

男

ひげ面のメガネをかけたやせ細った男

彼の先祖はテオフラストゥス・フィリップス・アウレオールス・ボンバストゥス・フォン・ホーエンハイムでかつてホムンクルスの製造に成功した物の子孫

昔は魔術と科学の両方を学びクローンのホムンクルス化について研究していた錬金術師の魔術師。

かつては、天使のような強大な魂を肉体に入れる事が出来なかったがエノクの子供である４人に目を付け見事に天使の宿ったホムンクルス４体を１０年かけて完成させた。

昔は、忍が四人を出産した病院の医師だったが研究の異質さから首になった

ちなみに四人の血液や細胞などは、病院で赤ん坊のころに採取していた。

現在には、４体のホムンクルスを完成させていたが寿命が短い事を知り４体にオリジナルの事を教え不老不死の怪物を作ろうとしている。

以上。

ではまた

二心別体（それぞれの思い）（前書き）

ついにホムンクルス達との激闘の始まりです。

ではどうぞ。

二心別体（それぞれの思い）

えぇ、俺こと桜小路影虎は、ライブの一件から2日たった今、あるニュースを見て吹いていた

そのニュースには、『アイスマスター狩り復活!!』

っと大々的に取り上げられていた

そして、大々的にある事項が書かれていた

『今回復活した氷能力者狩りは、男性の場合は炎により殺害し女性の能力者の場合は見るも無残な姿に変えているとのことです。死体解剖に回された死体に関しましてはまるで何かに喰われたかのようであるとのことです・・被害者の方の冥福をお祈りします。そして、警備員によって非常線が張られており夜の外出はできるだけ避けてください氷能力者の皆様は特に外出はおやめください。』

っとニュースで流れていた・・・

どういうこと?なんで一真・・・・・あいつならやると思った・・・・ん~んていうか死者まで出てるのか・・・やり過ぎだろ一真?・・・あまりに大きくなった都市伝説は・・からなきゃな

俺はそう思ってテレビを消した

すると寝ぼけ気味でフラフラした足取りの椿さんが目をこすりながら来ていきなりストンと俺の膝の上に当たり前のように座り込んで眠りだした

・・・うごけん・・・ていうか朝からかわいらしいいやがらせか？

そう思いながら俺は冷静に考えていた・・一応、一真に電話してみたが通話不能で正直信じても良かったし信じなくても良かったのだが一応気になっていたのでまた、時間がたってから聞き直すことにした。

そして、俺もなぜか眠くなってお昼ごろまで眠ることにした。

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・そしてお昼頃、水季はと言うと風紀委員（ジャッジメント）として同僚から氷能力者であるために止められながらも必死に幼馴染みの氷能力者狩りをしていた負導一真の事を探していた

ケータイに繋がらず天野にかけても繋がらないので必死に走っていた。

風紀委員（ジャッジメント）には、一真がアイスマスター狩りとは知らせていないので協力は求めない

だけどどうしても一真を止めたかったのだ

そして、彼女の中にはどうしても一真が犯人だとは思えない・・・今までアイスマスター狩りは確かに氷能力者を半殺しにはしてきた・・でも、命までは奪わなかった

（信じたい・・信じたい）

その思いでいっぱいだったそして、彼女が裏路地に入った時！！

「きゃぁあああああああああああああ！！いあめてぇ！！！！！！！」

っと女子高生らしき少女の叫び声が聞こえて水希は走った

すると段々聞こえていた悲鳴が無くなった

水希はとにかくヤバいと思い氷でローラーシューズを作って滑りながらその声のあった場所に向かった・・・すると水希は眼を手で覆いたくなるような光景に吐き気がした

裏路地の行き止まりの場所であたりそこら中の壁が血で染まっていたのだ

そして、ところどころに血の手形が付いていていたるところに氷や水があり抵抗の後が見て取れた

そして、その事件のど真ん中にある人物が居た

水希は氷でナイフを作りそれを構えながらその犯人に言った

「・・・信じたくなかった・・・でも・・やっぱりあなたなんですね・・負導君！！！」

そう涙を流しながら水希が言うとその男は立ち上がり水希の方へと振り返った

パーカーにジーンズ姿の・・口元にたっぷりと血を付けた一真が居た

（仮面は付けていなかったので疑いの余地が無い・・・でも、なにかが負導君と違う・・目つき？）

水希はそう思いながら警戒した

一真と全く同じ顔をした男の目は何というか淀んでいて濁っていてそれでいながら恍惚としていた

「ふ~ん、ようやくオリジナルを知ってる奴が現れたか・・・へへへ、「負導君？」・・へぇその眼は俺に恋してるって目か？おもしれぇ・・来いよ・・俺がお前を」

気が付いたら水希は氷のナイフを取り上げられ一真そっくりの男に言い寄られ動けないでいた

（この人は・・負導君じゃない・・なのに・・・なのに・・・）

水希は眼を瞑りその瞬間に一真そっくりの男・・・ホムンクルスのトロンは口を開け人間らしい歯から
鋭く鋭利な肉を貪るためだけの牙を出し水希の肩に噛みついた

「ぐ・・・ふどう・・・くん・・・・・・・・一真・・・・・」

どんどんと強くなるあごの力に水希の骨は折れそうになり大量に出血していた

もう駄目だと水希が思った時、後ろから

「水希さんを離せ！！」

「な!?ロゴス!?」

っとポニーテールに髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒で色と白のパーカーに黒のランニングに短パン、ピンクの指のところのない手袋をした水希と同じ風紀委員(ジャッジメント)で実は影虎と椿と一真の兄妹の麻華が一真そっくりの偽物のトロンの顔面を殴り飛ばし殴られたトロンは水季から離れてコンクリートの壁にめり込んでいた

そして、麻華はすぐに水希を大きな胸で抱きしめながら一真の偽物から目線を逸らさせた

「いてって、まさか、ロゴスのオリジナルが来るとは・・・ていうか人間なのに怪力すぎるだろ?」

っと壁にめり込んでいたトロンが首を鳴らしながら感想を述べていた

似ているのは姿だけで仕草や言葉使いなどは全くの別物だった

「剣菱さん・・・負導君が・・・・負導君が・・・」

っと精神的なショックのためか何時もみたいに話せない水希に麻華は

「水希もしっかりして!!こいつが負導さんな訳ないじゃん!!見てわからないの?」

っと麻華は自信を持って力説するが見た目はどう見ても一真であった

麻華が偽物と判別したのは、影虎の野生の勘や影千代状態の時の女の勘のようなもので『超超直感』のためである。

そして、麻華が片手で水季の傷口を押さえているとトロンが笑いながら近寄って

「へぇなかなか良い女だな♪二人ともまとめて俺の胃袋に入れてやるよ♪」

「あたしに近寄るな！！！」

っと麻華は、背中から72枚の巨大で長い炎の翼を出しそれらをトロンに向けて動かしたがトロンは全身を青紫色の炎で覆い尽くしそれらの羽の攻撃をかわしながら近づいていた

そして、炎の翼をすべて交わし麻華と水希の前に立ったトロンは笑いながら二人に手を伸ばした

麻華ももう駄目だと思い眼を瞑った

「影虎！！！あの馬鹿を倒せ！！！」

「あいさ、了解！！」

っと少女の大きな声が聞こえると途端に桜色のレーザーのようなものがトロンをブッ飛ばした

そして、麻華は後ろを見ると黒髪の長髪で背は低いが胸が大きく胸元を強調したワンピースを着ている少女と地面に両手をついて地面から桜色の枝を生やしてそれを大砲のような形にしている緑色のコートを着た麻華たち風紀委員（ジャッジメント）の天敵でありの麻華のトラウマの人であり麻華を本当の意味で救ったアイスマスター狩りに匹敵する伝説

殺しの都市伝説・・喧嘩屋『牙桜』が其処にいた

そして、牙桜は麻華たちの所まで来ると笑いながらしゃがみ込んで

「おい、剣菱、その女、早く病院に連れて行け・・噛みつかれてるだけじゃなくて少し肉を抉られてる・・まぁ治ると思う俺の女の車に乗せてもらえ」

影虎がそう言うと麻華はどうして良いかわからずとにかく頷いて動けないで泣いている水希をおぶって椿の元へと向かった

「あの・・すみません」

っと麻華が頭を下げると椿は車のドアを開けて

「そんなの良いから今は乗って・・はやく」

そう椿が怒鳴るので麻華は水希を車に乗せて自分は一真そっくりのあいつを捕まえようとしたが椿に手を掴まれ真剣な表情で

「助けてあげるから・・・アイツの邪魔しないで」

っと言われ麻華は大人しく車に乗り椿は小柄な体形用に改造した車を走らせ病院に向かった

・・・

トロンは、口を開いた

「へぇお前がミトラのオリジナルか・・・ふ~んやっぱりムカつく面してるな♪」

っとトロンが言ったので影虎は不機嫌になりながらも

「ミトラ・・・お前俺のそっくりさんの仲間か?」

っと影虎が聞くとトロンは下品な笑い声を上げながら影虎の事を見て

「おれだけじゃねぇよこいつらもだ」

「どうも・・・」

そう言ってトロンが指を鳴らすと物陰からポニーテールに大人しめの黒のセーラー服のメガネをかけた剣菱麻華と瓜二つなホムンクルス『ロゴス』と

「へぇ~すご~い♪オリジナルって此処まで似るモノなの?ミトラとそっくり~」

っと黄色い声で騒いでいる今時の女子大生くらいが着そうな服装に身を包んだ黒と白の混ざりあった長髪の物凄くグラマーな女・・・大人形態の椿さんそっくりなホムンクルス『アイン』が影虎をロゴスとトロンとで挟み込むように後ろに立った

「・・・え?マジで?・・・俺のそっくりさんは、見たけど・・剣菱麻華のそっくりさんに大人っぽい椿さんのそっくりさんに一真

のそっくりさんだ?ここは、万国そっくりさん集合世界大会の会場ですかっての・・・・で、俺のそっくりさんは?」

っとある程度落ち着いて影虎は聞いた

するとトロンが影虎に対して・・・・・・

「あぁミトラの奴なら今頃、舞ってガキのお見舞いに行ってるぜ?」

っとトロンが言ったが影虎は首をかしげていた、ただ、影虎は一つ聞いておきたい事があったのだ。

人間ではなく化け物であるホムンクルス達に・・・

「とりあえず、ひとつ聞くけど・・・お前ら人間で何がしたい?」

影虎がそう言うと3人は悩みながらトロン、アイン、ロゴスの順で

「苦痛にゆがむ顔を見たい」

(お前は死ね)

「世界中の男達を手玉にとって食べたい」

(椿の姿で飛んでも無い発言を・・・くそ、俺で殺せるかな?コイツに攻撃できん!!)

「私は・・・人間になりたい・・そして、普通に恋がしたい」

(応援してあげたい気分山々・・・でも・・・・ね?)

3人の言葉を聞いて影虎は完全に戦闘態勢に入った

するとホムンクルス三人もやる気満々になり
桜色と紫と緑と鼠色の４つの閃光が激しくぶつかりながら徐々に徐々に上空に上がりながら火花を散らしていた
「これがミトラのオリジナルかよ！！やるねぇ！！」
っと空中で静止した体中を青白い炎に変化させているトロン
「本当ね、人間じゃないみたい・・フフフ。おいしそう」
っと物凄い美人のアインがそう言うが影虎は微妙な心境だった
そう言う影虎は全身に矢が刺さっておりところどころ焼け焦げておりそして、病気が発症し始めて息が荒くなっていた
すると影虎の後ろにロゴスが立って影虎を見ながら
「はやく抵抗はやめて大人しくしてください！！真名を明かす『空（ヴェントゥス）』！！」
そうロゴスが言った瞬間に影虎の周りの気流が急に乱れ空気の砲弾とも言う衝撃が影虎の体を何度も襲った
影虎は必死に『異世界樹（ユグドラシル）』の翼でそれらを回避しようと飛びまわるが空と言うそのものを支配下に置いているロゴスに空で挑むのは得策では無かった
（やばい・・・『異世界樹（ユグドラシル）』の存在を保てなくなって来た・・オートに変えるか？・・・でもそれだと・・・ビクターは普通に無理だ・

・俺が俺じゃなくなる・・）

「考えててもしょうがねぇ！！！」

そう言いながら影虎は上空と言う自分の土俵に上がっていたのでかなり無理をしてビッグサイズの『異世界樹（ユグドラシル）』を呼び出して木の幹から龍の口のような砲塔を２００門（全開なら３６５万５０００個は固いを）だしてそれらから全て『竜王の波動』という生命エネルギーの閃光を全てトロンに向けた

「何故俺だけ！？」

っとトロンは焦りながらも全弾受け止め学園都市の海に落ちた

「残りはお前らだけだな・・・」

っと影虎がロゴスとアインを睨むと二人は余裕そうに構えながら向かってきた

影虎もまた再び『異世界樹（ユグドラシル）』の羽から光を放ち物凄い殴り合いの空中戦になったがいきなり影虎の前に物凄い速さで何かが向かって来て影虎のこぶしを軽く受け止めていた

その受け止めた奴を見て影虎は狂気の笑みを見せながら

「よう、俺様のホムンクルス・・ミトラ！！」

そう影虎が言うと影虎と全く同じ容姿で服装だけが違うミトラは余裕の笑みを浮かべながら影虎のこぶしを少しずつ灰に変えながら

「よう、我のオリジナル・・・会っていきなりだが・・お前の心臓をよこせ！！」

そうミトラが言った瞬間に影虎は左手の甲から『異世界樹（ユグドラシル）』の刃を出しミトラは手刀でお互いの心臓に突き刺した

しかし、影虎の『異世界樹（ユグドラシル）』は影虎の限界が訪れ存在を形成できなくなり灰に変えられミトラの肌の上で砂になった

そして、影虎の左胸にはミトラの手刀が刺さっており血は出ていないものの傷口からは灰がサラサラと零れ落ちていた

そして

「悪いな・・お前の体調が一番悪そうな時を狙わせてもらった・・我のオリジナルなんだ・・さすがに楽に行くとは思ってねぇよ・・・ごめんな・・俺はどうしても舞のそばに居なきゃならねぇんだ・・悪い」

自身に力なく持たれている影虎にそう言ったミトラは影虎の心臓を抜き取り影虎の『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を手刀で灰に変え影虎を蹴飛ばしゴミ山に蹴り飛ばした

気を失っている影虎は、すごい勢いのままゴミ山にまっさかさまに落ちた

それを見届けたミトラは銀髪の女状態になり影虎からもぎ取った心臓を迷うこと無く喰らった

その瞬間にミトラの体に力が漲り今までの空腹や欲望が満たされた

ような感じだった

「これがオリジナルを取りこむってことか」

そう言った瞬間にミトラの壊れかけていた体は完全に全快し今まで史上で最高の気分であった

「あの・・・ミトラ?どう?」

とロゴスが聞くとミトラは笑いながら頭を撫でて

「永遠を手に入れる事が出来た・・力が漲るぜ・・次はロゴス、お前に協力してやる。もう、人を喰いたくないんだろ?」

「うん・・・食べたくない・・・」

っと泣きながらそう言うロゴスを見てミトラは高揚した気分のままそう言った

その光景を見ていたアインと海の中でしっかりとトロンは拝んでいた

オリジナルを喰った瞬間のミトラの活性化と肌に感じるその存在感が二人は欲しくなったのだ

ミトラは『舞』のためまたは『愛』との約束のため永遠を欲し

ロゴスは『人』として生き本当の『愛』が欲しいがために永遠を欲しているのに対して

アインとトロンは『欲』のためにオリジナルを喰らおうと心に決め

たのだ。

そして、この日、学園都市の化け物を倒した魔術の化け物が生まれた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・ここは、学園都市の病院・・

そこにはタンカーに乗せられた影虎が運び込まれていた

心臓が無くなっておりそれでもなお生き続けている影虎は、意識が無くただ、『異世界樹（ユグドラシル）』によって生かし続けられているだけだった

タンカーに乗っている間にも心臓は徐々に再生していて命の別状はないのだが・・影虎はその日1日、目を覚まさなかった

その横で椿が1日中おお泣きしていたそして、その横で水希の病室からお見舞いに来た麻華が椿にいろいろと話をしていた

麻華も椿の気持ちを察してあまりなにも言わなかったが椿を見ているとこの前の自分のようになってしまうのではないかと心配していた

そして、そんな2人を見ながら治療していた忍は今すぐにでも暴れたい気分だった

自分の本当の子供の一人である影虎を此処までボロボロにした奴に恨みを覚えていた

前にも一度、影虎はボロボロになって帰って来た事があった

自分と同じ化け物が5人もいたと大喜びしながら影虎は入院した

それはつまりレベル6が居たと言う事

これによって影虎を倒した人物はレベル6に匹敵する化け物だと言う事はもう答えに出ていた

そして、この日の夜、椿の泣き声がやむと同時に日付がかわった。

この日、一真と天野は学園都市の外の天野の実家に行っていたと言う事を後に知り一真と天野も影虎と水希が何者かにやられたと聞き驚いていた。

ホムンクルスと神の子共の戦いが始まった。

つづく

二心別体（それぞれの思い）（後書き）

影虎の敗北でした。４体１の戦闘で相手が全員レベル５かレベル６相当なので今回は体調不良も重なっての敗北です。

果たしてリベンジはあるのか？そして、影虎を倒された椿さんは・・・

ではまた

椿の復讐（覚醒！！怒れるマリア＝クロスロード）（前書き）

今回はあの椿さんが出てきます。

何気に一番戦闘能力が高い椿さん登場です。

ではどうぞ。

椿の復讐（覚醒！！怒れるマリア＝クロスロード）

私は、影虎を一人でおいていたことに酷い後悔をしていた
自分が許せなかった

私は、影虎に一真のそっくりさんを倒せとしか言わなかった・・・・
無事に帰って来いと言わなかった・・私はそれが後悔だ

今日の影虎はすこぶる調子が悪いと言っていたのに・・・
私はベッドで静かに寝ている影虎を見ながら

「お前の事だどうせ一真のそっくりさんは意地でも倒したんだろうな・・今は、レベル４くらいの力しかないのに・・・私の命令を馬鹿みたいに・・でも、水希さんと麻華って子を助けた時のお前は格好よかったよ♪安心して寝てて・・・今日は、影虎にとってのお休みだよ♪」

そう子供をあやすかのように優しい声で影虎の頭を小さな手で撫でている私は一見優しくも見えるだろうが

その眼の奥には化け物が住み着いてもいるはずだ

心臓が張り裂けそうで今すぐにでも誰かを殺したかった・・・最近の私は感情が高ぶると大人見たいな姿に代わる・・・けどその変化が起きないほど私は怒ってる

影虎をここまでボロボロにした奴に私は殺意を抱いてる・・・殺し

たい今すぐにでも殺したい

もう、我慢できない

忍さんが私を見張ってなきゃ私はすぐにでも犯人を殺す！！どんな手を使ってでも・・・誰であっても・・・・

でも、私は必死に我慢していた・・私が勝手にそんなことしたら影虎はいつも怒るから・・本気で泣きながら怒るから・・・

だから、私は影虎の手をずっと握ってる・・この手を離したらすぐにでも私は狂ってしまう

以前、影虎の喧嘩に巻き込まれた時に間違って私の事を殴ってきた剣菱麻華っていう女は話してみれば結構話やすかった・・気を使ってくれてるのもわかった。彼女が私に話していてくれたおかげで私は人で在れた・・・

「影虎・・・私ももう寝るね・・・影虎が・・・・〔『〜（エルクが先に起きてなかったら・・・お姉ちゃんがアイツとアイツの仲間を片っ端から・・・殺してあげるね）〜』〕・・お休み」

そう言って私は、影虎のベッドにうつ伏せで寝た・・・その時からだろう・・私の意識が完全に無くなったのは・・・・

椿サイドｅｎｄ

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

そして、次の日のお昼頃、椿は眼を覚まして影虎の事を見たが未だに規則正しい呼吸をして眠っていた

その様子を見た椿は微笑みながら頭を撫でて

〔『〜(お姉ちゃん行ってくるね・・エルク)〜』〕

そう言った時の椿は完全に椿ではなくそれでいてクリスでもない一番初めの記憶・・影虎の・・エルクの姉のマリアだった

姿は白と黒の混ざりあった長髪でスタイルも良く背が高いホムンクルスのアインよりも美人な大人の椿・・いや、椿の成長が途中で止まっていなければ辿りついていたはずの姿になり

病室を出ようとしたすると病室に入ろうとしていた忍と鉢合わせした

「え?あ?・・・椿・・・・ちゃん?」っと忍が持っていた資料とカルテと飲み物を落として怯えるように確認すると

マリアは、ふふっと笑いながらそれらを踏みつけて忍の横に立ち

〔『〜(久しぶりね・・・お母さん♪今は生かしておいてあげるけど・・今日までの命だと思うのね♪じゃ)〜』〕

そう言ったマリアに忍は焦って振り返るとマリアはそこにいなかった

「ま・・り・あ・・・・・・あぁ頭が・・・マリア・・・待って・・・・〜バタン〜」

そして、忍はその場に頭を抱えながら崩れ落ちた

その後、看護師に発見され診察室のベッドで寝かされていた病状は『心的外傷後ストレス障害』・・つまりはトラウマによるストレスに耐えられなかったため脳が意識をシャットアウトした結果だった。

・・・

んだから嬉しかったんだよ。・・・そういやぁ椿は?此処は俺が目覚めて椿が泣きながら俺に飛び込んでくるって場面でしょうが!!」

っと影虎は、なにやら訳がわからないことを期待していて少しすねていた

「あ、あの~椿さんなら・・・行方不明です・・」っと麻華が申し訳なさそうにそう言うと影虎は少しの間、固まり・・・布団をかぶって眠った

そして、皆がなにやってるんだっと怒ろうとした時に影虎はびゅんっと言う音と共に目に目ない速度で病室の窓から外に着替えて出ていた

そして、窓の淵に足を置いて全員に首をかしげながら

「お前ら・・・特に一真とけんび・・・麻華は、そっくりさんに気を付けるんだな?・・喰われるぜ?」っとそう言いながら病室から飛び出した

そして、影虎は『異世界樹(ユグドラシル)』の昨日よりも強く輝く翼を出して昨日よりも圧倒的に機敏な動きで空を飛んで行った。

椿を探しに・・・ホムンクルスの中には椿のホムンクルスらる物が居たので影虎は全速力で椿を探した。

・・・

その頃、完全に過去の記憶を取り戻しマリアになった椿は、成長した姿のまま勘に頼って学園都市を歩いていた

彼女が歩いていれば相手から勝手に来ると根拠が無くとも絶対の確信が持てていたのである。

彼女は、記憶が戻り元の身体を取り戻せた事を喜びながら街を一人で見物していたのだ

だが、椿の心がマリアに進化したことで椿とクリスという表裏の人格が少しずつ消え始めているのは言うまでも無い

あまりにもマリアの記憶と思いが強過ぎて椿であった時間やクリスであった時間が少しずつマリアの中から消え始めていたのだ

元々はマリアの身体でマリアの人格しかなかったのに何かの拍子に記憶を失い人格を二つに裂かれさらに細かく裂かれ続けていたマリアが完全に目覚めたのだ彼女の中で余分は消えて行く運命なのだ

心身の急激な成長が招いている危険な危険なボーナスタイム進化の対価は思い出をマリアは楽しんでいた

「ねぇ君、うちの事務所でモデルやらない？」

などと、先ほどから何度もスカウトやらナンパやらと声をかけられまくっているマリアはつまらなそうに「結構よ・・私用事があるから・・」

っと言うだけ言って通り過ぎるのだ彼女には男も女も引き付ける魅力が満ち溢れていたのだ

もし食いついてくれれば力でねじ伏せればいいと思いながら歩いていた

そんなマリアに一人だけ殺意と嫉妬を向ける者が居た

マリアの生き映しの如く彼女に似た容姿をしている椿の・・正確にはマリアのホムンクルスのアインがだ

自分と同じ容姿をしているのにオリジナルは誰からも声をかけられ自分なら迷わず乗るのに彼女はそれをせず全てを避けていながらも自身より圧倒的に輝いているのだ

(私だってあそこまで注目されたことないわよ・・・何なの?オリジナルのあのオーラ・・・アイツの脳を喰って私も♪)

そうアインは、ビルの屋上で緑色に輝く弓と矢を構えて2キロ程先に居るオリジナルに弓を引き矢を放とうとしたその時、

「『〜(み~ つ~ けた)〜』」

「!?」

急に後ろから声がしてさっきまで見ていたはずのオリジナルが消えていて後ろ売り向くといきなりアインは背中を手刀で刺され胸を貫いていたのだ

そして、血を吐きながら後ろを振り向くと自分と同じ顔をしたオリジナルが自分の手に付いた血をなめて笑っていたのだ

その恍惚の表情を見た時、アインは捕食するときの自分と同じ表情

をしていると察知し人間を圧倒的に超える身体能力でオリジナルから距離を取った・・・はずだったのだが

〔『〰（鬼ごっこのつもり？）〰』〕

っとビルを１０個も超えるほど遠くに飛んだアインより先にマリアは、着地地点に立っておりそう言った

（うそようそよ！！人間が私より早い！？）

焦りながらアインは、右手の爪でマリアを引き裂こうと腕をふるったその瞬間にビルの屋上の床には凄まじい裂け目が出来たがアインはそれ以上に驚いていた

人間であるはずのオリジナルがホムンクルスである自分の腕力を優に超える力で自身の腕を握りつぶそうと受け止めていたのだ

「おまえ・・なんなんだ〔『〰（うるさい）〰』〕〰ゴギン〰いｙぁあああああああああああ・・」

アインが話そうとするとマリアが無表情のままアインの鋼鉄よりも高質な腕の骨を握力で握りつぶし腕を握力で握り切ったのだ

アインは腕を押さえながら苦しんでいた

そして、彼女が怒りと殺意の目でマリアを見るとマリアは片足で立っていてもう片方の足を後ろに振り上げて勢いを付けてアインの顔を蹴り飛ばしたのだ

屋上で蹴り飛ばされたアインは学園都市のゴミ焼却場の辺りまで飛ばされた

「う・・うぅ・・・あいつ・・・私のオリジナルってことがよ~く分かったわ・・・」

そう言いながら腕が完治して蹴られた顔も完治したアインは起きあがり周りを見渡すと遠くに軽い足取りでビルをピョンピョン超えてくるオリジナルが居たのだ

それを見たアインは再び弓と矢を取り出しそれをオリジナル目掛けてはなった

夜はものすごい速さで進み一直線にマリアの右胸に向かって飛んでいたマリアは軽くそれを避けたが矢は急に方向転換して先ほどの倍の速度でマリアに向かったのだ

〔『~(?面倒ね)~』〕

そう言いながらマリアは椿の時から自慢の足で光速を超えて神速にたどり着かんと言う速度で動くが矢はそれ以上の速度で向かってくるのでマリアはあえてジグザグに動き回りながらアインの元に向かっていた
が矢はドンドンとマリアの肌に近づいた

その光景を見ていたアインは厭らしく笑いながら

「馬鹿ね・・その矢は、交わすことも避けることも受けることも逃げることも防ぐこともできないのよ。つまりは、当たる矢なの♪ちなみにそれは私の二つあるうちの一つの矢、病魔の矢って言って当

たればあなたは一生治らない病気にかかる・・・その矢に込めた病魔は身体が痺れて動けなくなる神経系の病気ね♪」

そうアインが笑った瞬間に必死に逃げていたマリアの豊満な右胸に刺さりマリアは全身にしびれを感じその場で動けなくなりアインから少し離れた場所で凭れ書かていた

「どう?苦しいでしょ?はいもしびれてるから呼吸もできないものね?もうじき脳の活動も終わるから安心して♪」

そうアインが笑うともう一本矢を構え出した。

〔『〝(私がこの程度で動けないと思った?)〟』〕

っとマリアは急に立ち上がり走りだしアインに殴りかかったがその瞬間にはアインの手に矢が凭れておらずその瞬間にマリアの左肩に矢が刺さりマリアは矢の威力で吹っ飛ばされて壁にもたれかかるとマリアは、口から血を吐いて倒れた

〔『〝(かほ・・・けほ・・・)〟』〕

「今のは物凄くきつい結核ね♪次は何が良い?癌?それとも一生子供が産めないように子宮癌なんて言うのもあるけど?」

っと優位に立った瞬間に調子にのりだすアインは動けないアインそっくりのマリアを脅し出した

マリアは若干お腹を押さえながら苦しそうにして上を見ながら

〔『〝(はぁ・・・久しぶりだから身体がうまく馴染まないし・・

才能も集めにくいな・・・あなた達の新たな苗床は、私が死んだら無くなるわよ?・・・もう一度私に力を貸しなさい・・そして、私とこの子たちを守りな・・・セフィー、クリフォト)~』」

そうマリアが言った瞬間にマリアの両目が桜色と黒色に染まった時、

「あはははは、無駄無駄!!あたしの矢は交わすことも避けることも受けることも逃げることも防ぐこともできないのよ♪」

っと今度は2本同時にマリアの頭と心臓に向かって飛んだ

その瞬間にマリアは眼を閉じていた

「終わりよ!!あんたが死んだら私が喰って私があんたの分も綺麗になって」

「『~(いいえ、終わったのはあなた♪)~』」

「『~(交わすことも避けることも受けることも逃げることも防ぐこともできないの矢でも助けてもらう事は出来るでしょ♪)~』」

そう言いながらマリアは笑ったその瞬間に2本の矢は、マリアの直前でストップした

「え?だれ?」

アインがそう言ったのは、桜色の服を着た茶髪の背の高い優しそうな男と肌の色が焼けて黒く健康的な黒髪の煙草をくわえた髪の長い女が二人してマリアに放った矢を掴んで止めていたからである

っと大人っぽい顔でありながら眩しい笑顔でそう言うマリアを見てアインは後ろに下がり距離を取った

すると肌の黒い女が掴んだ矢を捨ててマリアに迫りながら

「いきなり呼び出すなんて非常識ねマリア、以前の宿主だからって調子に乗らないで?私は、エルクと契約してるの?意味分かってる?」

っと怒りをぶつけるように話す肌の黒い女性・・・死世界樹(キルドラシル)のクリフォトはそう言うとマリアは睨みながら

〔『〜(それはごめん、でも、ちょっとお腹が痛くてね・・だからお願いよ・・もうこの子たちとはセフィーもクリフォトも絆が出来てるんでしょう?)〜』〕

そう言われると二人の・・・2本の生命の樹『セフィー』と邪悪の樹『クリフォト』は何も言えなかった

と言うよりもあまりにも2本の伝説の樹を使えていた昔のマリアと今の飄々として明るく軽い性格の彼女に驚きを隠せないのも事実だった

「・・・わかりました。エルクの子供と以前の使用者であるあなたに力を貸しましょう。」

っと桜色の服を着た男が言うと肌の黒い女性は

「ちょっと・・忘れたわけ?私たちは、この世界に存在する限り繋がりを持った使用者の命を第一として・・「だから、あくまでエル

クのためです」・・・わかった」

なだめられるように従ったクリフォトを見てセフィーは、人間のような姿から『異世界樹(ユグドラシル)』に戻りクリフォトは死世界樹(キルドラシル)に戻り立ち上がったマリアの両手に絡みつくように巻きつき剣のような形になった現に言うとマリアは黒と桜色の剣のような物を持っているのだ

そして、『異世界樹(ユグドラシル)』に触れることにより身体が楽になったマリアは、驚いて矢を構えているアインに対して

〔『〜(お前終わったぜ?)〜』〕

そう言った刹那、アインは、弓と矢を斬られ心臓の辺りに『異世界樹(ユグドラシル)』の剣が付き刺され体中を死世界樹(キルドラシル)の茨が拘束し締め上げ体中をひっかいていた

「うぐ・あぁあああああ・・・いた・・・・・く・・・」

っと痛みに涙を流しているアインにマリアは、『異世界樹(ユグドラシル)』の剣をもう一度刺して

〔『〜(それにしてもエルクって本当に『異世界樹(ユグドラシル)』と『死世界樹(キルドラシル)』だっけ?セフィロトとクリフォトの使い方が下手よね・・・まぁそんな出来の悪いところも好きであげたんだけどね・・・まったく・・セフィロトは命を与えるのではなく吸い取って自身の力に変えるものでクリフォトつまりは邪悪の樹は自身の死を吸い取りそれを他者に浴びせ死に至らしめる・・こう言う物なのに・・・なんであの子、翼にしたり砲台にしたり遊んでるのかしら?・・・で、どう?命を吸われ死を与えられるのって?)〜』〕

そうマリアが笑った頃、アインの生命力は吸われ続けさらにマリアの死を与えられ続け体中が罅だらけで存在しているのが不思議な位であった。不死身のホムンクルスではあるが精神は人と同じ・・精神が崩壊していたのだ

よだれを垂れ流しで目は焦点があっておらず正直、マリアと同じ容姿でもここまで変わるのだと『異世界樹(ユグドラシル)』と『死世界樹(キルドラシル)』は思った

〔『～(醜いね♪こんなゴミに用は無いよ)～』〕

そう言うとマリアはゴミ焼却炉にアインを投げ入れ蓋をした

焼却炉の中で悲鳴が聞こえたがマリアは笑っていた

すると彼女の後ろに・・・・・影虎と瓜二つの存在・・・ミトラが立っていた。

「あんた・・・アインのオリジナルか・・・・あの女をはるかに超えた残忍さだな・・」

そうミトラが言うとマリアは。ミトラを見て頬笑みながら

〔『～(私の可愛い弟の姿をしてるなんて幸せだね?あんたが犯人だろうらせめて楽に殺してあげるよ・・・・・来な!!小僧!!)～』〕

そう、マリアが言った瞬間にミトラとマリアは本気でぶつかりあった

強者と認めあい・・そして、命の危機をお互いに感じて・・・・・・

つづく

椿の復讐（覚醒！！怒れるマリア＝クロスロード）（後書き）

今回は、椿の本名のマリアと呼ばれて居ました。そして、アインとの戦闘では圧倒的な力を見せつけさらには、『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』を影虎以上に使いこなすと言う格の違いを見せつけました。そして、マリアの前に現れたミトラ・・果たしてどうなるのか・・

そして、椿が影虎に『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』を授けたとはどういう事なのか・・・ではまた来週。

そして、今回はオリキャラ投稿募集と人気投票をします。オリキャラを考えたついでに好きなキャラに一票入れてください。ではまた

言霊使い（ロゴスＶＳ麻華…恋に恋する女の戦い）（前書き）

投稿タイムです。ホムンクルスとの戦闘編です。ではどうぞ。

言霊使い（ロゴスＶＳ麻華…恋に恋する女の戦い）

「お前ら・・・特に一真とけんび・・・麻華は、そっくりさんに気を付けるんだな？・・喰われるぜ？」っとそう言いながら病室から飛び出した背の高い私好みのイケメンが窓から大空にはばたいていた

彼は牙桜・・・以前、風紀委員（ジャッジメント）との大きな抗争で私は牙桜の彼女に誤って攻撃を加えてしまいそれから恨みを買いトラウマを植え付けられた

でも、あの人は悪人じゃなかった・・・好きな人の事ではただ、本気になってしまうだけの人

私は以前助けられた時から負導さんと同じくらいに好きだった性格的には負導さんの方がいい、けど見た目で言えば牙桜・・彼女さんに名前を聞けば桜小路　影虎というかなり男らしい名前だった（名前負けしてない…）人の方が好みだ

私は正直って本気で恋をした事が無い・・恋に恋する女子高生なのだ

ただ、私は少しうれしかった。影虎さんが私の事を麻華っと名前で呼んでくれたからだ。

負導さんも影虎さんも彼女がすでにいるけど・・好きなものは好きなんだ

そして、私は水希さんのお見舞いを終え今回の事件を解決させなければと風紀委員（ジャッジメント）の腕章をつけて学園都市を歩いていた

いわゆるパトロールだ・・・ただ、昨日の一真さんのそっくりさんは本当に怖かった・・同じ顔でも全然違った・・・あの時、牙桜が助けてくれていなかったらと思うと・・・・恐ろしい

私はそう思いながら肩を抱いて少し震えていた

全身に鳥肌が立ったからだ・・しかし、私の体から寒気や鳥肌が中々引かないことに内心焦っていた

自分、こう言いのもなんだけど霊勘はあるので寒気が引かないと言う事は・・つまり・・

「あの~…」

「きゃぁあああああああああああああああ!!!!!?」

「きゃぁあああああああああああああああ!?」

あたしはいきなり後ろから小さな声で声をかけられ想像と恐怖と実現が混ざってとび跳ねながら驚ろいてしまった

すると私に声をかけた子も驚いて飛びあがりながら尻もちをついていた

「あ!?ごめんなさい!!あたしったら・・・・え?あたし?」

私がその人に手を貸すと手を掴んだ人は黒い長髪をポニーテールにして黒色のセーラー服に赤いスカーフでメガネをかけている事以外は全く私と同じ姿だった

「はじめまして・・オリジナルさん」

そう立ち上がった彼女は私を見ながら礼儀正しくお辞儀しながらそう言った

（この人、もしかして牙桜が言ってたそっくりさん!?本当にそっくりだ・・・性格以外）

正直って私より仕草とか言葉使いとか物凄く可愛くて守ってあげたいな感じ・・・悔しい

「・・・あの~聞いてますか？」

「え、いや、あうん・・あなた、昨日の・・」

私が悩ましくなってそう聞くと彼女は申し訳なさそうにしながら

「えぇあなた方を襲ったのは私の兄と言うべきですかね？」

そう聞いた瞬間に私は少し警戒しながら

「そ、か・・ねぇあなた、ちょっと私について来てくれないかな？一応お話が聞きたいだけだけど」

っと私は腕章を見せながら彼女にそう言ったこの子を捕まえて取り調べをすれば何か分かるかも・・そうおもったのだ

大人しそうな子だし素直についてきてくれる・・そう思ったのに

「お断りします・・だって私はあなたを喰らうためにここに来たん

ですもん。」

（やっぱりこの人も！！！！！！！！？）

私はがっくりしながらも一応、お母さんに教わったキックボクシングの構えを取った

ちなみに以前、ぐれた時に殺しかけた母だがあの人あれくらいじゃ死なないくらい喧嘩強いです。あの時は抵抗もしなかったから私が一方的に蹴ってたけど・・・マジ強いです。私いつもテストで欠点とったら喧嘩になるけど一方的に泣かされてますですハイ。

そして、私が構えを取りながら彼女に

「じゃ仕方ないね手荒になるけどついて来て貰うよ？」

私がそう言った瞬間に彼女は髪をほどき黒い綺麗な長髪をたらしメガネをはずしてさっきとは打って変わって物凄い目で睨みながら

「そっちがそう来るのはわかってたから・・後悔すんなよ？」

・・・マジでこいつ私だ！！私も髪ほどくとスイッチ入る・・・戦闘態勢のね？

そう思っていると彼女がいきなり目の前にいて拳を私のレバーに入れてきた

「ぐ・・・こ・・の！！」

私は意識が跳びそうになるも必死に歯を食いしばり拳に力を込めて

彼女の頬を殴った

彼女はそれに反応して顔を下げてそれを交わし私のあごに拳をアッパーを決めてきた

「ぐ・・・・」

私は顎を思いいきり殴られ宙に浮いた

そして、背中から地面に激突して息を吐いた

すると髪をといたバージョンのあたしが

「あんた、キックボクシングみたいだね・・私はボクシングでピン級の世界チャンピオンね」

「まじ?・・あたしもフライ級じゃ世界チャンプだけど?」

っと何気に私は自分の功績を彼女に言ったが彼女の方が格闘技の面では強そうだ

大人しそうな彼女は何処に・・・・

しかし、私も食べられたくはない・・だから・・・

私は立ち上がってポニーテールにくくっているゴムを外し髪を下ろし首を横に振って髪を綺麗に下した

私って髪を下ろすと周りから印象が変わるとよく言われ続けていた・・この前もそれで誰もきづかなかった。

そして、私は髪をろし

「はぁ・・・あなたも後悔しないでね♪」

「？グ」

私は思いっきり地面を蹴ってその威力を殺さずに彼女の顔を蹴り壁に叩きつけた

そして、手首だけ動かして相手を招くような動かし方をし

「来いよ！！偽麻華・・叩きのめしてやる。」

そう言うと女は立ち上がって構えていた

改めて同じように髪をおろしてみるやはりあたしがもう一人いる・・・変なの・・・

そう思っていると偽者は私に向かって走って来て連続でジョブを仕掛けてきて私が殴ると両腕でガードして開いた私の腹部に拳をめり込ませてきた

私は吐きだしそうになったが歯を噛み締めて女のがら空きな顎に一発蹴りを入れてやった

すると偽者は少しのけぞって後ろに下がっていた

私もさっきから何発ももらってるからわかるけど・・こいつ・・物凄く力が強い・・一発殴られるたびに死にそうだ・・・でも、本気

出してない・・

「うおぉおおおおお」

っと私は、思いいきり走って彼女に迫ると彼女は私の頬にストレートを決めてきて私はクロスカウンターで彼女の頬を殴った

お互いに物凄い衝撃が走りかなり吹っ飛ばされてしまった

この偽物・・私よりやっぱり強い？・・・でも、私なんでだかこの子・・戦いたがってないみたいに見える

そう私が見ている事に気付いたのか彼女は私を見下ろしながら

「大人しく私に食べられてよ・・安心してよ死ぬような所は食べないし・・必ず治る程度の傷いにするから」

っと辛そうな表情のまま私にそう言った

「いまいち理解出来ないんだけど・・・なんであなたはわたしを食べたいの？」

私が聞くと彼女はじゃ言うねっと説明しだした

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

彼女は好きな男の子が出来るとその子をどうしても食べたくなるように改造されたらしい

それから普通の彼女は恋をするたびに人を殺めていたらいい

酷過ぎる・・この子もただ、恋愛がしたいだけなのに・・・・・私は無性にこいつの生みの親を殴りたくなった。

そして、彼女は私のクローンに近いと言う事

彼女が永遠に生きるためそして普通の女子高生のように恋をするには私の血と肉をのまなきゃだめらしい。

・・・・・・・・彼女は確かに被害者だ・・でも、食べられるのは普通に嫌!!

そう思いながら私はロゴスと本気で殴り合っていた

そして、中々勝負がつかずイライラしていた時

「私は、どんなことをしてでももう人は食べたくない!!!!真名を明かす『壁(パリエース)』よ」

そう彼女が言うと両サイドの壁から壁と同じ素材の巨大な拳がいくつも飛び出してきて私はそれらを必死に避けていた

すると彼女が目の前にいて思いっきり私の頭を殴りつけ私は地面にうつ伏せに落ちた

その瞬間に「真名を明かす『大地(テラ)』」

そう言った瞬間に私の四肢が地面に飲み込まれ動けなくなった

（やばい！！・・食べられる！！）

「終り・・・」

そう言って彼女は口から物凄く鋭利な歯を噛み締めながら私に噛みつこうとしていた

「ふざけんな！！！」

私は背中から巨大で長い炎の羽を出しそれでロゴスを叩きのめし羽を両サイドの壁に突き刺してふんばって四肢を地面から抜いた

そして、私はロゴスを睨みながら体力的に限界を感じていたので走り最後の一発で殴りかかった

するとロゴスは私の羽にやられボロボロだったのかフラフラしながら飛びかかっていた

「私は・・人が好きだ・・・人として生きたい・・・だから私は永遠を手に入れる！！！」

本当にロゴスは人間が好きで誰も食べていないから物凄く弱ってるんだと思った

そして、私とロゴスのこぶしはお互いの頬をとらえて私はダメージで動けないくなった

動けない私をロゴスは支えながら

「ごめんね・・・」

そう言いながら私に

ガブ

噛みついた・・・物凄く痛くて涙が出た

（私・・・死ぬんだ・・・嫌だな・・・恐いな・・・）

そう思いながら私の意識は完全に途絶えた

・・・

確かに肩がチクリと痛いけど・・あれ?私としては丸のみのイメージがあったんだけど・・

「食べるって私があなたを丸のみにするとでも思った?「ギク!?」・・私たち基本的には同姓は食べられない・・・男性だったら頭から丸のみだけど」

そう辛そうな表情でそう言っていた・・・・

「え?でも、あなた」

私がそう言うと彼女はにこりと笑って「私ももう普通に恋、出来るんだ・・・ごめんなさい・・」

「そう、よかったね・・」

私がそう言うと彼女は

「私はきちんとあなたに捕まるね・・でもそれよりも先にトロンやアインを止めなきゃ・・・え?博士が来てる?」

「私としてはそいつを捕まえたいな」

「うん・・博士がこの街に来るなんて何か企んでるとしか思えない・・私、博士を裏切るよ」

「じゃ、とりあえず博士さんを探そうか?よろしくねロゴス」

「うん、麻華」

そう彼女は言っていて私はロゴスと一緒に元凶の元に向かった。

つづく

言霊使い（ロゴスＶＳ麻華…恋に恋する女の戦い）（後書き）

以上です。ホムンクルスが全部が全部悪ではありません。悲しい運命を背負って生きているロゴスと麻華とのお話でした。

次回は遂にミトラが戦います。ではまた。

弱肉強食（喰うか食われるか・・ミトラＶＳ影虎）（前書き）

いよいよホムンクルス編、最終です。

では神の血を持つ怪物と神を殺せる怪物の命と大切なものを守るために全力を出す

激戦どうぞ！！

弱肉強食（喰うか食われるか・・ミトラＶＳ影虎）

とある広いゴミ処理場の焼却されたゴミの灰の山の上で桜色と黒色の物凄い早い何かと灰色の何かがぶつかりながら火花を散らしていた

そして、２人の動きが止ると

片方は桜色と黒色の生命の樹と邪悪の樹のサーベルを持っているマリアは服がいたるところ灰になており
身体も少し灰になって出血していた。しかし、彼女は笑っていた。

そして、ミトラはと言うと服がボロボロで至る所を切り刻まれていたがすぐに傷が灰になって回復していた

見たところ互角と言うところであろう

「『～（結構やるわね・・・これでどう!?）～』」

っとマリアは『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』を剣からメリケンサックのような形状に変え地面に両手をついた

すると地面を盛り上げながら『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』の幹が伸びて物凄い速さでミトラに向かい襲いかかった

それに反応してミトラは、光速で駆けずり回りそれらを避けながらマリアの元へと手刀を繰り出そうと前進していた

マリアはマリアで動きを先読みして光速で『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』を手足のように動かし確実にミトラを追いこんで居た

「・・・・このままでは思う・・つぼか」

〔『｛（！？）｝』〕

ミトラがそう呟きマリアに向かって『異世界樹（ユグドラシル）』も死世界樹（キルドラシル）もお構いなしに向かってきたのだ

〔『｛（あら、予想外♪）｝』〕

そうマリアは笑いながら真正面に向かってくるミトラに『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』をつきっ刺そうとしたその時

ドクンドクン

（！？時間・・・ギ・・・・レ）

その瞬間にマリアは胸を押さえながら背が縮んでいき今までの魔性の女から幼さの残る少女の姿に変わっていた。

「姿が変わった？・・まぁいい」

そう思いながらミトラは手刀をマリアではなく元に戻った椿に向けたが椿は良いタイミングで意識を失い倒れた

その影もあってか全てを灰に変える攻撃は椿の顔に当らず椿の長い髪に当り灰になりパラパラと髪が数本地面に落ちた

そして、攻撃を外したミトラは、幼くなったマリア・・椿を見ながら

「先程まで暴れていた女とは思えないな・・だが、お前は邪魔になる・・・悪く思うな」

そう言ってミトラが椿の胸倉を掴んでだらんとしている椿を持ち上げて手刀で椿の心臓を貫こうとした時!!

さらっと長い銀髪をし背の高く子供っぽい印象が無い背の高い男が今まで自分が持っていた少女を優しく抱きかかえその寝顔を眺めて静かに微笑んでいた

「な!?どうい｛ベギンボギンゴギャン｝」

ミトラが驚いてその男に疑問を投げかけようとすると急に頬が歪み衝撃が走り体中にそんな衝撃が広がりミトラの体は遠くのゴミ山に吹っ飛ばされていた

痛みと衝撃が時間差を置いてくるほど早い打撃にゴミに埋もれながらミトラは驚きを隠せないでいた

よく思い浮かべるとさっき自分の前に現れた男の手と膝は若干灰化していたのを理解した

そして、ミトラがゴミ山から出ると銀髪長髪の美青年は、少女を粗大ごみの場所にあった綺麗なソファーに優しく寝かせていた

そして、ふと消えるとミトラの前に佇んでいた

「おまえ、強いな・・・だれ?」

っとミトラが目の前の青年に言うと青年は失笑し

「あぁこの姿だとわからないかな・・・これでどうだ?ミトラ!!」

っと青年は落ち着いた雰囲気から一変し影虎の姿になった

「ォ、オリジナル!?」

ミトラはさすがにポーカーフェイスを出来ないで驚いていた

「オリジナルオリジナルってうるせぇんだよ!!ミトラ、俺様は影虎だ。覚えてろ・・・それで本題に入るが椿をあそこまでボロボロにして髪を切ったりしたのはお前か?」

そう影虎が聞くとミトラはふっと笑った

ガァン

その瞬間にミトラはまた影虎のあり得ない速度のパンチを受けて気が付いたら殴り飛ばされていたのだ

恐らく影虎が質問する前に影虎は殴っていたのだろう・・・

「いて・・・なんだこの野郎・・・」

っと口から出た血を拭いながらミトラが立ち上がった

そして、影虎を見た

(この間見た雰囲気が無い・・気持ち悪い歪みに歪んだオーラが無くて今は圧倒的に強いってだけの存在って感じだ)

それがミトラの正直な感想だった。

今の影虎はいつもの残忍さも無ければ飄々とした雰囲気も無いのだ

ただ、強いだけの存在なのだ

「お前、急に強くなったな」

そうミトラが言うと影虎は拳を構えながら

「俺の大事な女が目の前で酷い目にあってるんだ遊び心なんて捨てて全力で相手を迎え撃ちたいと思うのは当然だろ?俺の４９の特技のうちの１つ『等価交換（ギブ＆ａｍｐ;テイク）』により俺の４７個の特技を封じて対価をゼロに俺自身の健康的な肉体を取り戻してるだけだよ♪」

「健康体だ?てかおめぇ健康になると強くなるのか?」

ミトラがそう言うと影虎は笑いながら

「あぁなっちゃうね・・俺は幾千万もの病気にかかってても能力だけでレベル６の化け物なんだ。なら、能力を捨てて身体のみ強化したらどうなるでしょう?もともと聖人である俺に神程度の身体がくわあわるんだ・・正解は、１日間の最強タイムだ!!正直言います。俺はこれで一度レベル６に勝ってるぜ?」

そう影虎が笑った瞬間にミトラは警戒し構えたが構えた時、ミトラの頬と腹部に激しい衝撃が走った。

「gぁあああああ!?」

っとミトラが声を上げながら中に浮かび上がったそして、影虎はその頃ミトラの後ろにいた

姿が見えた時にはすでに攻撃をもらっているという規格外の速さにミトラは最大限の警戒をしていた。

「おいおい、まだまだ、こんな早さも力も序の口だぞ?俺様が特別に本気になってやってるんだ・・楽しませろよ!!」

っと灰に変わっていく腕を振りながら『異世界樹(ユグドラシル)』で修復した影虎。今の影虎は４９の特技を捨て『異世界樹(ユグドラシル)』の圧倒的な力を全て回復と強化に回しているのである。回復力は今までの比ではないのだ。

(オリジナルがまさかここまでハチャメチャな奴とはな・・なら此処は、素直に負けてやるか?俺はもうやる事は終えた・・・なら侘びとしてこいつに好きなだけ殴られてやってもいいのか?・・・)

っといきなりやる気をなくし脱力したミトラ、彼はこの状況であっても余裕だったのである彼が影虎と違うのは自分が最強だと疑わないところである。影虎は椿を守れれば良いという価値観を持っているので基本的にそこそこ力があればいいと思っているのであるそれが二人の価値観の違いである。

「おい、もう降参?俺せっかく本気になってるんだけど!?てか、椿の髪を切っておいて逃げるわけじゃねぇよな!?」

っと影虎が困りながら言っていた。椿を助けて時点で影虎は納得していたのだがやはり気に喰わない相手を殴りたいのに相手にやる気

が無いのだ

「ふん、殺したきゃ殺しにくれば」

ミトラがめんど臭そうに言いかけたその時!!ミトラの後ろのテレビの粗大ゴミが急につきだし

画面にやせ細っている白衣を着た男が映っていた

「「あん!?」」

ミトラと影虎はそろってそう声を上げたするとテレビの中の人が

〈ミトラよ負ける事は許さん〉

「なんで俺があんたの命令に」

テレビの中の男に突っかかるミトラすると

〈ワシは、アインを簡単に倒したオリジナル・・マリア＝クロスロードを研究の材料にしたい。あの娘のアインとの殺し合いを見ておったが明らかに生命として進化をしておる・・・だから言おうミトラよ・・『舞』をワシの実験の材料にされたくなくばその小娘を連れて来い〉

そうテレビの男は告げていたそして、画面の先に眼の所に包帯を巻いた車椅子の少女が広い白い空間にポツンと座らされていて涙を流しながら「おねちゃ~ん!!」っとおお泣きしていた

それを見たミトラは何を思ったのか急に銀髪の影千代になってすぐ

にテレビに駆け寄り

「舞！！だ、大丈夫！？」

っと影虎も驚きの女声でそういうとどういう仕組みなのかテレビ越しに話しかけるとテレビの中の少女が

「お、お姉ちゃん？」っと声を探すかのように首を横に振っていた

〜この子を助けたいのならワシに従うんだな・・・それにしても人間の娘を育てているとは・・変わった奴だ〜

「舞、お姉ちゃんすぐに行くからね？待ってて、必ず助けてあげるから！！」

そう、ミトラの影千代・・・ミ千代が言ったとったんにテレビが爆発した

そして、テレビを全部灰に変えたミ千代は、涙を流しながら歯を噛み締めて影虎を睨んだ

そして、「わりぃな・・オリジナル・・あの女、貰ってくぜ！！」

そう言って物凄い速さで椿の元に走ったミ千代

「させねぇ」

そう言った影虎はミ千代を追い抜きミ千代の身体を連続で８回蹴り再びスタート地点までぶっ飛んだ。

しかし、すぐに体勢を立て直しミトラに戻りすぐさま今度は影虎に向かって手刀を振った

影虎はそれを交わし再びタイムラグのあるパンチでミトラの全身をめった殴りにしていた

もちろん触れた部分がすぐに灰化するのですぐに拳を引くのであまり強烈な一撃は出来ないが『異世界樹（ユグドラシル）』で回復しているうえに圧倒的な威力のパンチはミサイルよりも強烈なのである

しかし、本気になったミトラは一味違った見えない筈のタイムラグパンチをまさかの本能で受け止め

影虎の腕を灰化させながら影虎の顔面に拳をめり込ませ影虎を殴り飛ばしたのだ

「ぐぅううううとまれぇ！！！」

殴られた影虎は地面に踏ん張りを利かせるが地面が威力に耐えられず砕け影虎はゴミ山三つを貫いてようやく止まっていた

そして、影虎はミトラをにらんだ

ミトラも本気で影虎を睨んだ

「「フフ、ハハハハ」」

そして、お互いに笑いだした

「お前は心底その娘が大事みたいだな？おれにゃ分からねぇよお前

の趣味」

っとミトラが椿を指さしてそう言うと影虎は、

「わからないで良いよ俺そっくりのお前が椿に惚れたら俺の心臓がもたねぇっての・・それにしてもお前も訳ありね・・・あの女の子のためか？」

全てを察して影虎がそう言うとミトラは大笑いしながら

「さすがは勘が良い・・そうだ我はあの小娘を訳あって俺は姉として育ててる・・で、今の状況だ・・察しろよ？」

そうミトラが言うと影虎とミトラは本気で構え出した今までにないほど真剣に・・二人とも喧嘩に格闘技は使わない派だが二人は本気のときだけ型を使うのだ

「我は、舞のために何があっても負けられない・・恨んでくれて構わない・・だが」

「俺だって椿のために何があっても負けねぇ・・俺の勝ち負けじゃなく椿の生き死にが掛ってるんなら・・」

ミトラの後に影虎が続きそして二人で

「俺は！！」「我は！！」

「椿に」「舞に」

「「邪魔なお前を・・・・・・」」

『『喰い殺してやるよ！！！！！！！！』』

二人がそう言うと影虎とミトラの激しいぶつかり合いが始まった

二人のこぶしが交われば３００Ｍの範囲が吹っ飛び影虎のタイムラグストレートが決まればミトラの体がゴミの山を崩しミトラの蹴りが決まれば影虎が上空に打ち上げられるそして、打ち上げられた影虎は触れれば灰化する拳で地面にたたき空き落とされしかし、影虎も負けじとタイムラグストレートのオンパレードで対抗した。

そんな戦いが３時間にも及んだ

方やホムンクルスと言う化け物であり昨日に永遠の命を手に入れ方や学園都市のレベル６であり現在は疲れを知らないいわゆるドーピング状態なのだ。

二人とも疲れた表情はしていないがお互いにそろそろけりを付けなければと思っていた

「次で決めてやる・・」

そう言って影虎は左手に思いいきり力をいれていた

するとミトラは、「悪いなオリジナル・・・殴り合いで勝負がつきそうにない・・悪く思うな」

そう言うとミトラの体から灰ではなく炎が立ち上りだしただが色が可笑しかった７色であり虹のようであるが雰囲気がそれでは無かった

そして大きくなる炎は、ミトラの体をも焼け子がしながら大きくなり
まるで強大な悪魔のような姿になっていた。

「神怒の炎・・・七つの大罪と呼ばれる悪魔全てを燃やしつくせる
神の炎だ。「暴食」、「色欲」、「強欲」、「憂鬱」、「憤怒」、
「怠惰」、「虚飾」、「傲慢」のどれかを今抱けばお前はそれに対
応する炎に焼かれるそれも普通の炎じゃねぇそれぞれが圧倒的な苦
痛の炎だ・・・!?」

「こんな火、へでもねぇよ」

ミトラがそう説明すると影虎は迷うことなくそれら全てを抱き全身
を七色の炎に覆われた

しかし、燃え尽きるよりも早く回復する影虎の前に炎は意味を成さ
ない

もしこれが影虎以外なら欲を抱いた瞬間に圧倒的に高温でそれでい
て苦痛な炎に焼かれて死ぬだろうが影虎には関係が無かった

だが、やはり強力な力のようで無限に近いはずの影虎の体力を奪い
始めた

「どうだ?七つの大罪を燃やしつくす炎の威力は?苦しいよな?だ
がそれで終わらないんだよ・・」

そうミトラが言うと七つの炎は、7人の悪魔たちが混ざるかのよう
に混ざりミトラの真上に灰色の巨大で広大な炎が生まれていた

「七つの大罪のもう一つの大罪・・・『正義』の大罪を燃やしつくす炎、そのなも無価値なものを意味するベリアルフレア・・・残念だよ8つの炎に焼かれれば不死身だろうが不死だろうが神だろうがどんな能力を持ってようがこの世から消える・・・終わりだオリ・・・影虎・・いや兄弟!!」

「・・・お前にぴったりの寂しい色だな・・・うおぉおおお

身では無く全てが痛いそんな感覚を味わいまったく一ｍＭも動けないでいたしかしそれでもマシなようで彼の全てを必要無きもの（灰）に変える力が働いておりなんとか彼の存在を保ちながら体中から灰が出続けていた

すると目の前に左手を構えた影虎が立っていた

「此処は、世界創造の光だ。俺が認めた奴しか絶対に動けないよ・・・そして、この光に触れれば本来ならすべてが必要無きものとしてこの世から消えるんだよ・・よく耐えてるな・・・・・・・・でも・これで終わりだ・・・はぁくいしばれぇえええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

っと影虎が今まで史上最高威力のパンチがミトラの腹部に直撃しまるで超巨大隕石が地球に墜落したような衝撃がミトラの体に走りミトラの体はぶつかった影虎の拳を完全に灰に変え衝撃を殺しながらも全てをその身体に受け体中に罅が入りそのまま、ミトラの体は光のドームを突き抜けて学園都市のある施設のある建物まで飛ばされていた

そして、その建物にぶち当たると建物を灰に変えクッションにしてなんとかダメージを軽減していた

「く・・そ・・・・・・・（ダメージが大きすぎる・・・身体と魂の接続がキレるかと思った・・・）・・でも、早く・・舞を・・・」

そう言ってミトラは立ちあがろうとするがあり得ないダメージに身体がうまく動かないでいた。

限界が来ていたのだ・・・死にはしなくても動けなくはなるのである

すると

「よぉ・・・目的地にしっかりとたどり着いたな・・それにしても俺のあのファンタジーとは死んでも言えん世界を壊せるパンチに対しての対処が早すぎだろ俺、自分の限界を１０００乗になるまで上げ続けると言う快挙をしてあの力手に入れたのに・・・正直今の俺、悟空より強いぜ♪」

そう影虎が椿を背負ってやってきたのだただ、左手はだらんとしているところを見ると回復が追いつかないほどのダメージを負ったのだとミトラは理解した

「止めを刺しに来たのか・・・賢いな・・」

そうミトラが言うと影虎はミトラを見下しながら

「まぁそうしたい気持ちは山々だけどな・・・だが俺はお前より殴りたい奴が居るんだ」

「何言って？」

影虎の言動にミトラが首をかしげていると

「おねぇ～ ちゃ～ ん！！おねぇ～ ちゃ～ ん！！」

っとミトラの後ろで車いすに乗せられている眼の所に包帯を巻いた少女？いや、幼女がおお泣きしていて

それを見たミトラは「ま、まい・・・なんで？」

「さっきの映像見た時どこかで見たことあるなぁと思ったんだよ・・
そしたら前に知り合いに連れてこられた撮影所だよ・・」

「お前まさかあえて我をここに？」

そうミトラが言うとミトラの前にコンクリートの壁が生まれミトラのまえから舞の姿が消えた

そして、コンクリの壁から先ほどテレビに映っていた人間が現れた。だが少し傷ついているような姿だった

すると今度は階段を上りその部屋に一真と天野とボロボロの麻華とロゴスと呼ばれる麻華そっくりのホムンクルスがお互いに肩を組みながら来た

それには影虎もミトラも驚いていて一真も天野もロゴスも麻華も驚いていた。

そして、なんとなく察した全員は、目の前の杖をついている老人を睨んだ

「く・・・貴様ら・・よくも・・・そして、ロゴス貴様がワシを裏切るなど千年早い！！」

「うぁ・・・いｙぁあああああああああああああ・・・・・ｇｙぁあああああああ」

っとジジイが地面に杖をついくとロゴスの体に紅い紋が浮かび上がりロゴスは泣きながらその場でもがいていた

「ろ、ロゴスちゃん!?・・・あんたって人は・・・ロゴスちゃんを勝手に改造して苦しめるだけじゃありたらずさらに・・・許さない!!」

っとロゴスを心配しそして、それに対して怒りに燃えた麻華が跳び上がり今回の事件の全ての元凶に殴りかかった・・・しかし

「ワシに手を上げるなど百年早いは小娘!!」

そうジジイは自分の体に注射を打つと眼の色が緑にかわり麻華の怪力パンチを指で受け止めて麻華を引き寄せ腹部を思いっきり杖で突いた

「かは・・・・う・・・・」

麻華は気を失いその場でだらんとなるとジジイは麻華の体を思いっきり割れたガラスの破片が散らばっている場所に投げた

「麻華（麻華ちゃん）!?」

っと天野は投げ飛ばされガラスの破片が天上を向いて散らばっている場所に投げられたのを見て驚き目をおい一真は走りだそうとしたが体中が痛み走れないでいた

そして、麻華の体がガラスの上に落ちかけたその時、影虎が目に見えないほどの速さで移動し綺麗にキャッチしていた

「!?・・己己!!オリジナルごときが・・ミトラ!!舞と言う子供を助けたくばこいつらを」

追い込まれたジジイがミトラにそう言いかけるとミトラは其処に居ないでジジイの後ろのコンクリートの壁を灰にして穴をあけ舞と呼ばれた少女をミ千代の姿になって抱きかかえていた

「しまった!?」

そうジジイが言った瞬間にミ千代は手で銃の形を作りそれを製造者に向けてバンっとジェスチャーした。

その瞬間にジジイの顔面に殴られたような跡が浮かび上がりジジイの体はミ千代の方向にとんで来てそれをミ千代は、舞を抱えながら思いっきり顔面を殴り飛ばした。

殴られたジジイの顔は灰に変わりながらぶっ飛び建物の壁にめり込み瓦礫に埋もれた

するとロゴスを苦しめていた紅い紋が消えロゴスはその場に気絶した。

そして、麻華は椿の横で寝かされており一真は天野に肩を借りていると言った状態で影虎はと言うとムカつく方法を使った奴を殴れてスッキリそうな顔をしていた。

そして、ミトラはと言うと銀髪の影千代状態で涙を流しながら本当の妹の無事を喜ぶかのような表情で抱きしめていた。

でも、少女の方は喜んではいたが何かを言いたそうだった

そして、ミ千代が少しだけ舞を離すと舞はミ千代の方を向いて

「物凄く・・痛いおもいしたんだね?お姉ちゃん?ううんお兄ちゃん?」

っと舞が言うとミ千代は、?と首をかしげ怖がっていた

「ごめんね?ミトラさん「え?舞?」私知ってたんだよ・・・初めから・あなたがお姉ちゃんじゃないってことを・・「それってどういう・・」私とお姉ちゃんはねサイコメトラーって奴でね。触った人やモノの気持ちが読み取れるんだ?」

そう舞はミ千代の胸に手を当てて微笑みながら

「今でもわかるよ「なんで?」って思ってるでしょ?私はっきり言うね・・私、お姉ちゃんを食べたミトラさんが・・・憎かった」

「う・・・・そうだよね・・・そうだよな・・・我はお前の姉を喰いそれでいながら飄々とお前の姉になり済まそうとして来たんだもんな・・・俺みたいな「最後まで聞いて」?」

「初めは憎かったよ・・・私にお姉ちゃんを食べた手で触らないでとかどうせ私も食べるんでしょうとか一杯思ってて・・殺してやりたいって思ってた・・・・でも、「でも?」私に接してくれるミトラは本当に優しかったもん!!お姉ちゃんが一瞬で一目ぼれしたのも納得できるくらい優しかったもん・・お姉ちゃんのあなたも強いあなたも本当に優しくて・・・それでいながらきちんと怒ってもくれたし・・お姉ちゃんを最後に幸せにしたのはミトラさんだってわかった・・だから・・もう恨んでない・・・それに私も・・ミトラさんのこと好きだもん・・だから・・・もう無理しないで?そして、離れるなんて言わないで?」

そう4歳の女ん子は今まで抱えていたミトラへの気持ちを正直に幼い口調をあえて大人っぽい言葉で伝えた。彼女はミトラに触れミトラの心が読め自分のために彼が居なくなろうとしている事を悟り全てを離したのだ。

そして、そう言われたミトラは、元の姿に戻り舞を優しく抱き寄せ

「ごめんな・・お前みたいな小さな子供にそんな思いさせて・・なぁ舞、我はお前のそばにいていいのか?「いてほしいです。お姉ちゃんの代わりじゃなくて・・ミトラとして」・・・わかった」

そうミトラの問いに舞が答えた

一真と天野と影虎はこれで解決したなと納得していた時、

「ワシの最高傑作のホムンクルスが人間の小娘一人の物になるだと!?ワシは許さん!!!」

っといきなりジジイの声がしていきなりジジイの埋もれていたはずの瓦礫からまたたくさんのコンクリート状の柱がたくさん伸び出し舞を抱きしめているミトラ目掛けて伸びていた

しかし、ミトラが背中で庇い柱をすべて灰に変えることで攻撃を防いでいた

「ふん、やはり防ぐか・・しかし、ミトラよ今のワシは貴様よりも上位のホムンクルスじゃ」

そうジジイが言った瞬間にジジイはミトラの前に居て杖のとがった

先で舞を突き刺そうとしていた

その瞬間に影虎は走りタイムラグストレートをジジイに叩きこみジジイを壁に叩きつけたがジジイはピンピンしていて笑っていた

次の瞬間に疲れが出てきて弱っていた影虎を杖で殴り飛ばしたのだ

殴られた影虎は、壁にぶち当たりたおれた・・『異世界樹(ユグドラシル)』の回復能力でもそろそろ限界が来るほど影虎は肉体を酷使していたのだ

しかし、もう無理してるんだから限界まで行こうという思惑の影虎は立ちあがった

そして、一真もまだ終わっていないことを理解してフラフラながらも影虎の横に並んでいた

ミトラはなんと七つの大罪の七匹の悪魔に舞を見張らせだしたのだ。

そして、舞に動くなよっと告げると影虎の後ろまで来た

「どうする気だ?兄弟?」

そうミトラが言うと影虎はフフフと笑った

「おい、影虎?大丈夫か?今回はお前も珍しくフラフラしてっけど?ていうかあの爺さんマジで何なんだ?自分まで改造したのか?」

っと一真が影虎の肩に手を置いて凭れながらそう言うと影虎は

「さぁなただ、正直言えるのは、俺あと一回殴るので限界・・・ち

なみに一真と・・・ミトラは？」

「我は灰化は常時出来るが攻撃となると俺もパンチ一回が限界・・というよりお前のあの地球を粉々にでき里ほどのパンチのせいだ！！」

「俺は、あと、もうちょいしたらぶっ倒れる」

何とも絶望的な三人である・・・そして、ジジイは何やら物凄い勢いで身体の体積が膨張していた・・・

「アガァアアハハハッハハハハハ」

っと何やら大きな怪物になろうとしていた

「「「そりゃいくらなんでも無しだろ？」」」

っと参院の男はそう感想を述べながら一真を置いて二人は走りだし一真は真正面に立ち右目がなぜか燃え上がり右手から物凄い炎が生まれそれがジジイを燃やし始めた

「ｇｙぎゃぁあああああああああ」

っと苦しみもがくジジイは真っ先に一真に向かって走り出した

しかし、そのジジイをミトラが真正面から暴走を始めたジジイの怪力を怪力で抑えつけながら灰に変え始め腕を完全に灰に変え腕失いバランスを崩した途端に

ミトラは両手を地面につき地面を灰に変えビルの地下まで灰に変えた

そして、それはこれからある衝撃を他に与えないためだったそして未だにミトラは地面を灰に変え続け地下３０階ほどでそれをやめたすると暴走した爺から気持ちの悪い肉質の腕が大量に表れもはや人型をしていなかった

その腕にミトラは掴まれ土の壁に叩きつけれられたが対してダメージはなった

もはや暴走した生物兵器ジジイは、人の顔をしておらず巨体になっており何の抵抗もしないミトラに本能的に首をかしげた

そして、

「上を見ろよ」

っとミトラがサラサラとジジイの手を灰に変えながら上を指さすとビルの上から一真が地下につながった穴に目掛けて炎を噴出していたその瞬間にミトラは壁を灰にし横穴を作り逃げたそして、残された最終兵器ＧＩＧＩＩは炎に焼かれてもが居ていたが逃げ場など無く苦しみにもが居ていたそして、最後の手段で一真の焔の勢いに逆らって地下の穴を上り始めたのだ

「ウグぅらるあああワシぉはぁあああまだぁあああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

しかし、・・・・・

「あめぇよ・・・第一、俺様そっくりの奴に人質を取った時点でお前は終わってんだ！！！」

そう影虎は、一真の焔の勢いを背中に受けて今度は右手で生物兵器ジジイの顔面?を殴りその巨体を地下の底まで叩き落とした

ガラガラ・・・ドシャァアアアア

「あぐ・・・ウグゥオオオオ」

すると地価の穴の周りの土の壁が崩れ出しジジイは洛盤に潰され地面に埋まった

そして、ジジイの声が聞こえることも動くことも無くなった人間として死んだジジイは化け物として3人に地下に永遠に閉じ込められたのだ。

こうして、ホムンクルスの生みの親は、この世に二度と現れる事はなくなった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

そして、地面を掘り進んだモグラのようなミトラは先ほど掘った穴とは違う穴からビルの中に入り舞を迎えに行ったのだ

舞はと言うと7匹の極悪の悪魔に守られていた

そして、ミトラが悪魔たちを消し舞の手を取った

「え?・・・ミトラさん・・一緒にいてくれるんだね♪」

っと手が触れたことにより心を読み取った舞は笑っていた。

「あぁ、一緒にいてやる。それでお前が我に相応しい女に成長したら・・お前の願いかなえてやる。それまで俺はお前を永遠と言う名の生涯すべてをかけて守るよ・・そうだ、ロゴスの奴も連れて行ってやるか・・舞、いいか?」

そうミトラが聞くと舞は首を縦に振った

「また、家族が増えるんだね♪」

っと笑っていた。そして、ミトラは気絶しているが嬉しそうな顔をしているロゴスを肩に担ぎ舞を片手で抱きかかえながら影虎たちの元へ向かった

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

そのころ、後先考えていなかった影虎は必死に壁ジャンプで戻ろうとするも後一歩足りず一緒に埋まると言う所で一真に腕を掴まれ助けられた

そして、プラーンと腕を掴まれている状況の影虎は少しも這い上がろうとしないので一真が不審に重い首をかしげながら

「おい、影虎、はやく登ってくれ・・・腕がヤバい」

っと一真が言い瞬きするとその瞬間に影虎の姿はそこに無く一真の掴んでいるのは桜色の長髪の白い肌の美人・・・影千代だった

影千代は力なく首を上げ一真を見ると

「ごめんね・・・体中筋肉痛で・・引き上げて・お願い？」

っと影虎らしからなぬ仕草で影千代にそう言われ一真は顔を真っ赤にしていたが引き上げる力が無いのだ

すると一真の横から天野が来て影千代になったちょっと可笑しな影虎を引き上げた

「「ふぅ～」」

っと天野と一真が一息ついてると

影千代が頭を書きながら周りを見渡し自分の姿を見て溜息をついていた

「どうしたの？影虎君？」

「いやね・・・俺の特技って必ず代償が必要なんだよ・・・そして、今回の対価が・・・激しい筋肉痛に・・・完全な影千代化が3日と言う嫌な状態な訳・・・わかるかな葵ちゃん♪」

っとまさかの変わりように二人は唖然としていた

「「どういうこと？何か違うの？」」

「つ~ ま~ り~ ほれ」

「ん?…／／／

きかかえて来たのだ

そして、頭を下げて

「本当にすまなかった・・俺たちはもうこの学園都市に二度と来ない・・本当にすまなかった」

っと頭を下げたのだ

すると影千代（姐さん）が意地悪そうに笑って

「そうだねぇ落とし前は大事だよねぇ・・よし、お前は3日間、女ですごせ「え？」え？じゃねぇよ俺お前のせいで強制女コース突入なんだぞ？」

そう影千代が言うとミトラは銀髪のミ千代になり少し恥ずかしくなったのか頬を赤くしながら

「これで良いのか？」

っと言うと影千代は楽しそうに頷いた。

天野の目の前には影千代に許しを請うている銀髪の影千代が居た

「いいよいいよ♪後、俺は私用でお前を呼び出すかもよ？それには答えてくれれば後は自由にしな。後、ケータイの番号変えるなよ？」

そう影千代は言うとミ千代たちを許すと言うとミトラたちは、その場から消えた。

そして、事件を解決した事を納得した影千代は、携帯で忍に電話をかけるともう復活したらしく元気であったが「とら?椿ちゃんは!?あの子は!?」っと忍がしつこく聞いていたので

「あん?あの子ならスヤスヤと寝てるよ・・で?迎えに来てくれるの?くれないの?」

っと影千代が言うと忍は大きめなワンボックスカーで迎えに来た

そして、その後、病院に運ばれ椿は疲労と少しの発熱で大事を取って3日の入院

麻華は2日間の入院と2日間の自宅療養

一真は特に怪我は無いの手当をされ目覚めたら帰って良いそうで

影千代はと言うと忍に一通りの質問を受けてから全身に湿布を貼って貰い一人で帰宅した。

ホムンクルスと影虎たちの戦いは、こうして幕を閉じた・・たくさんの火種を残しつつも無事に解決した。

つづく

弱肉強食（喰うか食われるか・・ミトラＶＳ影虎）（後書き）

以上です。最終決戦終わりました。影虎の真面目な戦いを書いてみました。そして、ミトラとの決着とホムンクルスの生みの親との戦闘、いろいろ詰め込みすぎました。

影虎のスキル

『等価交換（ギブ＆ａｍｐ；テイク）』

自分の４９のスキルのうち４７個を犠牲に自身の身体能力を向上させる。（本当は使用不可にするだけで戦闘能力が上がったのはスキルの副作用がないから。）

『無限光罰（アイン・オフ・オウル）』

４９のスキル史上最強で一番厄介な特技。どんな力にも影響されない。
王冠から発生する光のフィールドを発生させる。その中では影虎の気にらないものは必要無き物として光に同化する。そして、中に入ってしまったものは、細胞ひとつ、元素ひとつレベルにまでダメージが及ぶ。

『自壊本願』

潜在能力を超越した動きを可能にする。ただし１０秒だけでそれが終わると９０倍の反動を受ける。

惑星破壊パンチ

影虎の身体能力を自壊本願と不完全開で自身のパワーを１０００乗させることで繰り出すパンチ。ミトラはそれを１０乗にまで威力を防いだ。

以上です。

ではまた。

銃剣対決（ガン＝カタＶＳ般若の死神）（前書き）

えぇ～今回はアポリオンさんとのコラボでとある死神の娯楽遊戯より死神こと岩見祥吾が登場します。すでに影虎や椿が死神さんの小説に出させてもらっているのでこちらでも登場させてみます。ではどうぞ。

銃剣対決（ガン＝カタＶＳ般若の死神）

此処は桜小路宅

この家の寝室では、ベッドの上で桜色の髪を長く伸ばした美人の女・・影千代が持っていた2丁のけん銃を丁寧に手入れしていた。

「それにしてもやっぱりこのマグナムは・・・今の俺の細腕じゃとても打てないな・・・それにこっちのレディースの方は撃てても威力が・・・どうしようかな?・・・買うか?」

そう言いながら影千代はケータイを持ってある人に電話をかけた

プルルル・・・プルルル・・・ガチャ

『はい、もしもし?影虎君?どうしたの?』

「あぁあのね・・銃を売ってほしいんだよ」

『はぁ?あなただれ?「影虎だよ・・忍さんに聞かなかった?俺って女にもなれるって」・・聞いた気がする・・で?なに?銃?またあんた面白いもの鉄板屋に言ってくるわね・・「いいじゃん・・今日取りに行くから・・ガン＝カタ用の銃2丁ね♪」こらちょっと!!』ブチ

一方的に通話を終えた影千代は、ベッドの上でごろんと寝転び枕を掴むとスヤスヤと眠っていた

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

次の日、開店前の桜彩音の店では、赤い髪の長い、見た目は美人で露出の高い服装をした女性こと、桜彩音（さくらあやね）が机の反対側に座る桜色の髪の男装をした影千代を見ながら

「あんたって本当に影虎なの？」

っと聞くと影千代はおう♪っと笑顔で答えていた。

「まぁいいわ、忍にも確認取ったし・・」

そう彩音が言いながら鉄板の下のスイッチを押すと鉄板がひっくり返り2丁の拳銃とマガジンが4本綺麗に纏められているスーツケースが出てきてそれを影千代は開けて中身を確認していた

影千代が注文した銃はクラリック・ガンという特殊な銃でセミオート／フルオートでの射撃が可能で、マガジンの底には、打撃用の小さな突起が出るギミックが装備されている。マガジンは通常のマガジンと、起き上がり小法師の様にマガジンを直立させる半球状のグリップエンドがついた、エクステンドマガジンがある。銃弾は特殊な貫通作用のある強力なものだ

それを影千代は適当にくるくる回し手になじませるとスーツケースに入っていたガンベルトを腰に巻いて

そこに二丁のけん銃を収め長い髪でそれを隠した。

そして、影千代は今月の小遣い（椿さん管理の元支給されたお金）２００万円をポンっと置いて店から出て行った

その姿を見た彩音は頬杖をつきながらその姿を眺め

「あの赤ん坊が大きくなったじゃん・・・忍も出来る限り早く残りの3人・・いや、マリアとエルクに本当のこと言わないとまたこじれちゃうよ・・・まぁどうなるかね~」

そう言いながら彩音は、店を開く準備をしていた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ふふ~ん♪朝っぱらから堂々と学校をさぼるのは気分が良いや~・・・」

っと喜びながら身体を伸ばしている影千代

本来の性別は男であるが代償により本当の女になった影千代は意外に周りから好意の視線を浴びていた

人一倍目立つ容姿にさらに目立つ天然の桜色の髪と無い新が女性なりその仕草が際立って女性としては申し分ない文句のつけどころの無い姿になっていた

もちろんそこらじゅうから声を掛けられていたスキルアウトだけでなく健全そうな学生たちからもナンパされていた

しかし、影千代はもちろんのことすべてを断っていた

むしろストーカーも発生するんじゃないかと言うくらいにモテテい

た影千代・・

影千代がふとコンビニに行くとコンビニの中にシンプルな形の般若の仮面、腰から下げた西洋刀、逆にきっちりとしたビジネススーツ、ブランド物のショルダーバックを背負った男が居た

そして、その男は店員に西洋刀を向けていた

（・・・・・）

影千代は店員とその男の死線を無視しながらテクテク歩いて商品棚からコーヒー牛乳を取り出してそれを強盗に剣を向けられてる店員の前において

「あのこれください」

っと強盗犯を完全に無視してそう言うと店員は強盗と目を合わせて・・どうしよう?といった顔をしながら

「ひゃ、１２０円です。」

「じゃこれで」

っとお金を置いてコーヒー牛乳を持って出て行こうとする影千代に強盗犯は、西洋刀を向け

「お譲ちゃん、いまどう言う状況下わかってるよな?喧嘩売ってるのか?俺が誰か知らないわけじゃないよな?」

そうさすがに影千代の破天荒ぶりにペースを乱されつつある般若仮

面は影千代を睨んでいた

彼は学園都市で都市伝説になりかけている「岩見祥吾」という男、今まで「イライラした」という理由だけで、善人、罪人、動物問わず千にも上る生き物達を殺してきた全国指名手配の連続無差別殺人犯である彼は意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとブチギレて殺そうとするし基本美人であれば仲良くなろうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラッとするような言動などであれば脅して従順にしようとする傾向がある。そして相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうするなどの常人では考えられない人格で構成されている彼は破天荒だが見た目は１００％完璧な影千代を脅し良いなりにしようとたくらんでいたのだ。

「大人しくしな？安心しろよ美人には手を出さない主義なんだよ」

「俺お前知らないぞ？ていうか玩具振り回すなよ」

すると影千代は特に恐れるでもなくコーヒー牛乳をのみながらその剣の刃で無い部分を手の甲ではじき店を出たのだ

その瞬間に般若仮面はブチギレて追いかけようとしたがすでに影千代の姿はそこに無く警備員が通報に従い向かってきたので彼は逃げた。

（あの女、性格はあれだが見た目は完璧だ・・・今日のいつもの時間に襲ってやる。あの澄ました女の恐怖におののく顔が目に浮かぶな♪）

そう彼は言いながらビルの上で影千代を見下ろしていた

今日のターゲットは完全に影千代に決まったようだ

一方影千代は、男の時では食べられなかったパフェなどをおいしそうに食べてある意味、開き直って謳歌していた。何故か夜は飲み歩いてもいた。

・・・

するとフォンっと風を切り裂くような音がしその瞬間に死神と呼ばれる男は西洋刀を振り抜いていたのだ

その刃は本来なら影千代の髪を切り落としているはずなのだが影千代が予想外の後ろから来る斬撃を後ろに倒れて交わしたのだ

「アハハハハハハ♪」

そして、自分を斬ろうとしていた死神を見ると何故か影千代は指を刺して寝転びながら笑いだした

ブチ

全く理解不能な影千代の反応にキレた死神は影千代でもてあそぶのを予定から抜き恐怖に慄かせてから惨殺しようと西洋刀を振り下ろすと

「・・・え?蛇・・蛇は嫌だ~ !!」

カン

っと今度は泣きながら寝がえりを打って刃を交わしたため思いっきり振り下ろされた刃は地面に当り死神は手が痺れたのか若干手を振っていた

「てめぇ!!おちょくりやがって!!」

「ウフフ♪おりゃ」

そう言って今度は斜め下に水平切りをすると影千代は起き上って死神の眼前で頬を真っ赤にしながらニコッと笑うと頭を掴んでそのまま背負い投げをした

そしてドスンと地面に叩きつけられた

死神の戦闘力は人よりも圧倒的に強い・・・しかし、その彼がここまで苦戦しているのは影千代が酒で酔っているため行動が不規則なのだ

彼ほどの一流の殺人犯なら理性で動く相手も勘に頼り野生の如く戦う相手だろうと動きを先読みすることは可能だろう

しかし、現在背負い投げの勢いで地面に頭を打ちつけ痛みもがいて自滅している目の前の女の動きは無駄が多すぎて多すぎてとても読めないのだ

「いった~い・・・よくもやったな!!」

っと涙目で歯を噛み締めて死神を睨みつける影千代に般若の死神は（コイツわけわからねぇ!!）っと内心焦っていた

「えぐ・・・この野郎!!」

っと物凄く怒りに満ちた表情をしていたので死神は、ようやくヤル気になったかと思い口頭を上げながら笑って物凄い速さで斬りかかった

しかし、再び斬撃は影千代の肌に触れることなく空振りした

「おえぇ・・・」

（この女、吐きやがった！？）

なんと影千代は着られる寸前でしゃがみ込んで嘔吐しだしたのだ

そして、吐いた後頭を上げたのだが

ガン

「ぐ！？」

「いた~ い・・・・うえぇえええええん」

ちょうど影千代の頭の上に死神の顎がありそのあごに不本意な頭突きがクリーンヒットしたのだ

死神は何かを悟ったのかダメージもあるのか後ろに飛び距離を取った

一方影千代は再び頭を押さえて悶えていた

「いって・・・馬鹿になったらどうすんだこの野郎！！！」

っと大きな声を上げながら立ち上がり両手をぐるぐるまわしながら怒って死神に向かって走っていた

（向うから仕掛けて来るんならカウンターを仕掛ければ良い話じゃねぇか・・イライラしすぎて冷静さが掛けたら元も子も・・な？）

死神が構えて試行していると影千代が目の前で頬を膨らませていて驚くことに死神が持っていたはずの西洋刀を無刀取りで取り上げそ

れを死神に向かって振り下ろしたのだ

死神はもちろんの事交わしたがその刃が地面を叩く前に影千代は急に泣きそうな顔になり

「へ、へび！？」

っと驚きながら蛇の幻覚を斬るために刀の軌道を縦から水平に変えそのため横に避けた死神の体に斬撃があたり死神は少し腹部を斬られるのではなく殴られ後ろに飛んだ

「ふざけんなこのアマ！！」

「ぐ・・・がは・・」

そう言って死神は怒りに任せ影千代の腹部を殴り顔に回し蹴りを食らわせて吹っ飛ばした

その瞬間にカランカランと西洋刀が地面に落ちそれを死神は拾っていた

そして、蹴り飛ばされた影千代は額を押さえていた額からは血が流れていて若干泣いているようだった

「グス・・エグ・・・エグ・・・痛い・・・・」

そして、泣きながら愚図りだした影千代・・正直影虎の名残が全くないのはご愛敬♪

「さんざんひとの事おちょくりやがってこのイライラはお前殺した

だけじゃ晴れねぇなお前の大切な人全員殺してやるよ」

そう死神が言った瞬間だ。酒を飲み干す女神が覚醒したのは・・・物凄くキレた・・酒で酔ってる人間がキレたんだ・・・笑顔で

影千代は急に愚図るのをやめフラ~と力なく立ち上がり脱力していたその雰囲気がヤバいのなんのって言う問題じゃなく

死神も近づくのは危険と察知し距離を取りながら面倒になりカバンから手りゅう弾を2個取り出してそれを掴んでスイッチを押し影千代に向かって投げようとしたその時!!

ドドドン

と言う音が鳴るとともにキャインキャインと死神が両手に持っていた手りゅう弾が弾かれ死神の後ろに転がった

そして、手りゅう弾は爆発しその爆風で祥吾の体はふっとび影千代の元まで一直線で飛んでいた

一方影千代は物凄く落ち着いていて両目から涙を流しながら両手に黒く光る大型の拳銃を携えており銃からは煙が少し出ていた

そして、影千代は跳んでくる祥吾の腹部と左肩に拳法のような動きで銃を当て

ダダン!!

発砲した

「ぐ・・ぐ!?」

至近距離からのゼロ距離射撃は、祥吾の特殊なスーツによって貫通はしないもののダメージはあり祥吾は再び吹っ飛んだ

そして、地面に両足で着地した祥吾を襲ったのは奇妙なポーズで銃を構えている影千代だ

影千代は再び銃を打ち出した

それに対して祥吾は西洋刀でそれらを弾いたそして、前に駆けようとしたその時、後ろでギャインギャインギャインという金属音が聞こえると祥吾の背中に激しい衝撃が走った

祥吾の背中には、先ほど弾いた銃弾が全て命中していたのだ

種を明かすなら祥吾に弾かれることを想定して撃った弾丸が弾かれそれらが奇跡的なほど綺麗に影千代の予測したコースを走り壁や物にぶつかり兆弾し祥吾の背中に命中したのだ

（なに!?）

そう思いながら圭吾が一度倒れると影千代が涙をながしながら銃を構えて

「俺の大切な人を殺すだって?調子に乗んなよ・・・・・お前本気で俺を怒らせたから・・」

そう言うと影千代は祥吾に距離を詰めながら発砲をしどんどんと近寄って来た

ドドドンパパパンキャインキャイン

っと銃を乱射しそれでいてキチンと計算された精巧な射撃を出来る影千代は、戦闘能力ならレベル４程度なら軽く銃殺出来るだろう

彼には嫌、今の彼女の射撃には死角が無いのだ祥吾が物陰に隠れようものなら兆弾を利用してあらゆる角度から銃弾を叩き込むので意外な伏兵も良いところである。

「だが、これで終わりだ女」

さすがに銃の達人の女に剣で挑むのはナンセンスだと感じどこから出したか、祥吾は拳銃を構える。だが、それは一般的な拳銃とはかけ離れた大きさのグリップから銃口までの長さが４０センチに迫り、重量が2キログラムを超える、拳銃としては常軌を逸した巨大な代物だ。弾丸も巨大な為、銃の見かけに反して玉は5発までしか装填できない。

スミス&ウェッソンM(モデル)５００。５００S&Wマグナム弾という専用の弾丸を用いる、世界最強の拳銃の引鉄を、祥吾は片手で構えたまま平然と引いた。

ダガァンという拳銃あるまじき音と共に弾丸は影千代の顔に飛んだが影千代はそれをブリッジをして交わしそのままバク転して前に向かって走りさらに祥吾が発砲するとまるで弾のコースを銃口から算出しているかのように迷いなく飛びあがり祥吾との距離を１Mまで縮めた

そして、影千代は両手に持った銃で祥吾に襲いかかった

それに対応して祥吾も銃撃で対応しようとするが生憎リーチが長すぎて接近戦には不向きだったためか

銃口を向けた瞬間に影千代の銃を使った打撃に銃口を逸らされ右胸に銃口を向けられ至近距離で連射され

それにひるんでいるところをもう片方の手に持った銃を頭に向けられた

そして、そいの時な影千代の顔は、涙を流しながらも笑ったいた

（コイツのこの顔・・・イライラしてる時の俺と同じ）

パァン

そう思った瞬間に発砲され般若の仮面に銃弾を受けた祥吾は後ろにとばされた

「終わったか・・・ヒック・・世界が回る~」

そして、仰向けに地面に倒れた祥吾を見た影千代は泣きやんで再びお酒に酔った状態に戻っていた

しかし、死神はこれくらいじゃ絶対に死なないのだ

「世界が周りに回って・・・ひっくりかえ〔ズバ〕あう？」

安心しきった影千代はフラフラと帰路に就こうとしていた時、行かれる祥吾の斬撃が影千代の背中を大きく切り裂いた

切り裂かれた影千代の背には大きな切り傷があり影千代のコートを
も貫通していた

まさに形勢逆転

運がいいのか影千代のコートはかなり丈夫なものだったので致命傷
にはならないが背中を大きく斬られ痛みで影千代は倒れた

「あれれ？・・・身体が思うように・・ぐあああああああ・」

状況が理解できていない影千代に祥吾は西洋刀を足に突き刺しながら

「お前は、俺に負けたんだよクソアマ、今からお前の顔ぐちゃぐち
ゃにしてやる」

っというと影千代はまた泣き始め

「うぅう・・・足が・・・・・ごめんなさい・・」

「ゆるさねぇよボケ」

っと言って影千代の体を蹴り仰向けにした後、西洋刀を顔に突き刺
そうとした時だ

「・・・なんてねアッカンベ~」

そう影千代が下を出した瞬間だ祥吾はあるものが目に入った

影千代の右手に携帯らしきものが握られて居たのだ

それを確認した時、祥吾の体を光の速度ともいう速さで何かが突き飛ばした

「ぐは？なんだ？」

祥吾は何かに飛ばされビルのガラスを貫いてオフィスをむちゃくちゃにしている祥吾がその光を見るとレザースーツの色っぽい女が光から出てきた影虎の奴隷で下部で部下で配下の園崎瑠奈である。

瑠奈は影千代の体を起こしながら祥吾を睨んでいた

（へぇアイツもなかなか美人だな）

そう思っていた結構切り替えの早い祥吾は一目散に二人を殺すために走り出した

所詮は女二人と高をくくったのだしかし、影千代の携帯電話での集合の意味を祥吾は全く理解していなかった。

「とりあえず女は殺してもう一人は犯すとでもしようかな？」

そう言って剣を抜いた瞬間に

「ワォオオオ

再び吹っ飛ばされていた

そして、祥吾は驚くものを見た・・・・自分をブッ飛ばした物体は・・俗に言う狼男と言う奴だったのだしかもそいつは急に姿を人間に変えて影千代に文句を言ってレザースーツの女と言い合いになっていた

「おいおい、化け物が味方として登場って・・」

祥吾がそんなことを言っていると祥吾の後ろから影千代そっくりの声で

「貴様か兄弟のてこづっているストーカって言うのは・・・ていうか昨日の今日で呼び出すとかどんだけ非常識なんだ?」

「!?馬鹿な!?」

祥吾はもうパニックになりかけていた

なんと目の前に銀髪の影千代が現れたのだ

祥吾は驚きながらも冷静に西洋等で切りかかったが攻撃を避けられ銀髪の影千代・・実は影虎のホムンクルスのミトラに腹を殴られブッ飛ばされていた

ミトラの打撃は祥吾の受けた攻撃の中で一番重かったので気後も腹部を押さえながら少し動けなくなった

するとミ千代は気まずそうに影千代と瑠奈と狼男の魔術師ガジルの文句の中に入って言った

それを見た祥吾は、大量の手りゅう弾を４人にめがけて投げたが４人お前の大柄の巨大な金属の皮膚を持った男が立ちふさがり爆発を受けとめていた瑠奈の相棒で体中を高質な金属に反化できる黒金（くろがね）鉄也がいた。さらに祥吾は拳銃を残りの弾の数打ち込むが全て鉄也に弾かれた。

その瞬間に祥吾は完全にマズイ奴に手を出したと悟った

圧倒的に戦闘力の高い奴を４人も呼び出せる女はそうそういないのだ。

（逃げるか此処は閃光弾で）

そう祥吾は閃光弾をだして投げようとすると

瑠奈が発光して先に眼つぶしをされ

バァン

と言う音とともに再び影千代の射撃で閃光弾が撃ち落とされそれに動揺していると

鉄人が跳びかかって来てそれ開店して避けると銀髪の影千代が目の前にいて腹部にまた打撃を仕掛けてきた。しかも殴られた部分が灰になると言う特殊なパンチでそして吹っ飛んでいるとき祥吾の横を狼に乗った影千代が両手に銃を構えていて物凄く怒った顔しながら涙を流して

「あやまったのに・・この野郎！！」

っと子供っぽい怒り方で般若の仮面に目掛けてゼロ距離でフルオートで連射し始めた

ババババッバッババッババッババッババアババババｂッバッバッバッバッピキピキピキ・・バァン

さすがの般若の仮面は砕け祥吾の体は衝撃にとても耐えられずぶっ飛び

遠くの茂みに落ちた。

ボロボロで気絶した死神はその瞬間に祥吾の体は地面に何故か発生した門に引きずり込まれきえた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「うぐ・・・えぐ・・・いたい・・・」

っとお酒と女化と痛みのせいで若干幼児化している影千代をその後すぐに跳んできた瑠奈に足を治療されなだめられていた。この時、瑠奈が影虎にはあるまじき影千代の可愛さに悶えていたのは言うまでも無い。ミ千代はその後すぐに帰り鉄也は瑠奈と一緒に弱体化し殺されそうになっておお泣きしていた影千代を家まで送っていた。

ガジルは吹っ飛んだ祥吾の匂いを辿っていたが途中の茂みで完全消えているため捜索を打ち切って学園都市の外に影千代を運んで帰った。

ちなみに瑠奈にあやされながら家に帰り眠っていた影千代は、目覚めるとほとんど何も覚えておらず隣の部屋で警護していた瑠奈達から女状態での飲酒を禁止されたのは言うまでも無い。

第一級犯罪者の岩見祥吾に圧倒的に劣る影千代の勝利の理由は意外な才能（完成したガン＝カタ）と意外な偶然（酒乱で天然の酔拳に目覚めた偶然）に今までの影虎の利用できる人物は利用できるようにしておいた用意周到さからであろう。もし、死神に心強い仲間が居れば・・・・・

つづく

銃剣対決（ガン＝カタＶＳ般若の死神）（後書き）

以上です。今回の影千代は今まで史上最高の天然です。酒が入っているのでさらに進化しています。死神も災難でしたね・・・

ではまた。

電脳頭脳（ハッキング、ハッキング♪人生初のハッキング♪）（前書き）

はい、今回もきました。投稿タイム。未だに影千代から戻らない影虎、そして新たな事件が・・・

ではどうぞ

電脳頭脳（ハッキング、ハッキング♪人生初のハッキング♪）

謎の殺人鬼と戦った次の日・・未だに影虎は影千代だった

影千代は瑠奈達が帰ってから自分の足を見た

西洋刀が刺された傷は残っていたが歩けないほどきつくは刺さっていなかった

まぁ普通にしたら重症なのだが

「はぁ・・・今日は椿が帰って来るんだよね・・・この姿で心まで・・・こんな俺であうのか~ 嫌だな~」

彼女はそう言いながら頭を掻いて足を引きずりながらも冷蔵庫を開けて大好物のコーヒー牛乳1?を飲み干した。

「プファ♪やっぱりうまいな~♪」

ガチャっと言う音が聞こえた瞬間に影千代は玄関に顔を出して覗くと椿さんが帰って来ていた

「た、ただいま!?」

っと椿が言うと影千代は走りながら片足で跳び込み椿に抱きつき頬擦りをしていた

「ど、どうしたの?かげ・・影千代!?」

嬉しそうに頬ずりしてくる影千代に椿は困り果てていた

「いやね・・寂しかったんだよね~」

っと未だにひっついてはなれない影千代の頭を椿は撫でていた

小さな姉に大きな妹のようなシチェーションであるそして、しばらくそんな状態が進んだ

椿も椿で影千代の足を見て弱っているときにさらに怖い事があったんだなぁと納得し心まで弱った影千代をなだめていた

そして、しばらくすると影千代が昼寝をしていたので椿はそっと毛布をかぶせて

家事をしていた。2日間もサボっていたのでやる事は山積みだった

そして、洗濯や掃除などを終えて一息ついてソファに腰掛けてテレビを付けていると

突如警報と言う文字が浮かび上がった瞬間に椿のシンプルな携帯に着信が入り椿はテレビの警告の画面を見ながら携帯に出た瞬間に

椿の耳に携帯から不思議な周波数の音が一定のリズムで流れ始め椿は体が動かなくなり

そのまま意識を失ってたおれた・・・

その瞬間に影千代は目覚めて飲み物を飲もうとリビングに行くと

「ん?・・・あれ?・・つ、椿!!!大丈夫か?おい!!返事しろ!!!」

っと倒れている椿に駆け寄って身体を揺すったが目を開けたまま椿はピクリとも動かなかった

可笑しいなと思いながらとりあえずベッドに寝かせた影千代はテレビを見て困った

『警告、何者かが携帯端末を利用し特殊な音波により神経がうまく働かなくなり倒れる事件が多発しています。犯人を警備員も全力で捜査していますが未だ見つかっておらず安全が確保されるまで携帯端末の使用はおやめください』

っとニュースキャスターが言っていた

(特殊な音波?つまり椿もそれのせいでうまく動けないのか・・)

そう思っているとッピンポーンとインターホンが鳴り

画面を影千代が覗くと一真を背負った天野が涙を浮かべながら立っていた

「あ、え?今開ける!!」

っと影千代がドアを開けると天野が入って来て一真は片手に携帯を持ったまま気絶していて

椿と同じ条件だったと気づいた・・・そして、とりあえず天野に手を貸して影千代は一真をソファーに寝かせた

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「一真ね・・電話に出たと思ったら急に・・急に・・エグ・・・」

っと天野が泣きだしたので俺は、頭を撫でながら

「たぶん、さっきテレビでやってたやつだからすぐに解決すると思うよ?葵ちゃん?・・ていうか椿さんも見事に巻き込まれちゃってるし」

っと俺が言うと・・・ていうかいつの間にか呼び方が変わってるけど心境の変化からかな?

そう俺が思いながらなだめているが天野は泣きやまなかった

(どうすればいいんですか?女の俺に一体何が出来るんですか?勇気も男の時以下の俺でどうしよう・・・忍に頼る?・・・それもありか)

っと俺はそう思いながら片手で天野を撫でて片手で家の電話で連絡するとプープープーと繋がらなかった。

そして俺は病院に直接かけるとなんと看護師さんが忍まで事件に巻き込まれて気絶していると言う・・

ざけんなこの野郎!!頼みの綱全ぶ切りやがって!!

そう怒りながら受話器を本体に叩きつけると天野がまた泣きだした

「ごめん、天野・・・何とかして見るから・・・・・〜プルルル・・pルルル〜ちょっと待ってて」

天野を慰めていると俺のプライベート（とは名ばかりの裏世界専用）携帯端末に連絡が入り俺はそれを手にとって大事を取って俺の部屋にある機械につないで通話した

ちなみに天野は部屋に入ってはいない

すると携帯から男にも女にも、子供にも老人にも聞こえる落ち着いた声で

『やぁ『異世界樹（ユグドラシル）』・・学園都市史上数奇な怪物』

っと声がして俺はすぐに理解して

「なんのようだ?学園都市統括理事長?」

『ほう?もう私の正体を理解したか・・ではちょうど良い君にひとつ頼みたいことがあってね』

「俺の報酬は?『内容は聞かないのかい?』俺の報酬はそうだな・・俺と椿とメタモルのメンバーへの学園都市からのいらない攻撃はやめさせろ・・無理とは言わせない組織同士共食いでもさせろよ『・・・恐ろしいまでに冷酷でありながら的確だな・・良いだろう。レベル6を手ゴマとして使わせていただくんだ・・お安い御用だ。』なら本題に入れ」

俺がそう学園都市の一応ボスに言うとそいつはこう言った

学園都市の開発組織がひそかに作り上げた人工頭脳ほんらいなら駆動鎧などをオートで動かすための性能の向上とサイバー攻撃を撃退するのが目的のモノなのだが

それを開発中に人工頭脳が（ターミネーターのスカイネット並の）学習を始め制御装置を停止させ暴走しまずは学園都市の人間を次々と脳を操れる特殊な音波によって次々と襲い気絶させ

学園都市を学園都市の科学技術そのものが乗っ取ろうとしているらしい（自業自得だぜ）

そして、俺はその人工頭脳の破壊を頼まれた

レベル６の中で一番、理解がある俺だから頼んで来たらしい。理事長お前がやれよと言うとまだ自分の存在を表に知らせるわけにはいかないから無理だと言われた

ついで人工頭脳を壊す前にワクチンデータの収集を頼まれた

学園都市としてはサポートが非常にしにくいらしい（連絡取りにくいんだって携帯文化の終わりだな・・）

（めんどくせ・・・）

っと思いながらも俺は携帯を機械から外し俺の部屋を出ると天野が一真の手を握っていた

「影虎君！！わたし、やっぱり犯人捜すね・・一真が苦しそうなの

にしてるのにじっとなんか」

っと出て行こうとしていたので俺は天野さんの腕を掴んで

「いやいや、この事件は犯人なんていないの・・さっきの電話で俺全部聞いちゃったんだよ」

俺がそう言うと葵ちゃんは俺にどんどんと寄って来て

「じゃあ何が原因？答えてね影千代ちゃん♪」

っと笑顔だが明らかにオーラは洗いざらい話せねぇと東京湾に沈めるぞ女！！な感じだ

マジで必死だ・・・・俺思うんだよね・・この人・・・いろんな意味で強いと・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

そして、その後、洗いざらい話すと天野さんはすぐに立ち上がり壊しに行こうと目が殺気だっていた

現在俺は、椿と一真をお互い別々の部屋に寝かせ一応横に水やらいろいろ置いて電子頭脳を破壊しに行こうと地図を転送して貰って行こうとしていた・・唯一つ違うのは・・天野さんが付いてくると言う所だ

「あの・・・天野さんは危ないから家に・・・」

「行くよ!!最近私っつも置いてきぼりだもん私だって一真を助けたいの!!」

っと睨まれながら言われるんだ

「あのね・・此処からはすごく危ないの女の子が着ていい所じゃ」

「影千代ちゃんだって女子だよ「俺は男だよ」今は女の子でしょ?」

「本当にお願いだから待っててくれない?正直言って足手まとい・・そんな顔しなくても・・でもね・・はぁ・・・じゃこれ持って」

俺は泣きそうな顔で俺の方を見てくる天野にナイフを一本渡した

「これで俺に傷を付けられた〜ヒュン〜マジで?」

俺が説明しようとすると天野さんがナイフで俺に向かってきた

俺はあわててナイフを出して受け止めた

俺のはコンバットの戦い方で天野さんは・・・ドスの使い方だ

しかも目がマジで迷いが無い・・ていうか強!!ちょマジで!?俺ここで死ぬ?

「ストップストップ!!」

「え?あれ?私・・・」

この人やっぱりナイフ持った時から意識飛んでたね?さすがはヤクザの一人娘・・得物の扱いにはなれてますって?

笑い事じゃないな・・・・一真・・・ご愁傷様だ

夫婦喧嘩は台所でしないように・・・あははは

・・・・

（確か地図によると・・・あそこか・・）

俺はバイクで少しずつ進んでいると入口が見えたが天上に目をやると監視カメラと・・ガトリングガンがくっついている奴があった

（さてさてどうしたものか・・・・・このまま突っ切ってみるか？）

俺はそうもいながらかなりの距離を取ってアクセル全開にし突っ走った

天野は後ろで何か言っていたがしっかりと捕まっているので問題は無い

そして、１００ＫＭを超えたあたりで俺はハンドルから手を離し腰から拳銃を抜き2機の監視カメラのレンズに発泡した

俺の撃った銃弾は綺麗に俺と天野の乗っているバイクを照準を合わせていたガトリングの銃口に吸い込まれガトリングは、機械的な嫌な音を立てて煙を出し破損していた

そして俺は、監視カメラを通過して入口の前でバイクを止めた

するといきなり天野さんに後頭部を殴られた

「いたい・・」

俺はヘルメットしてたので素手で殴った天野さんが位置のは当たり前なのだ

「なんでいきなり殴るの？」

俺がそう聞くと天野さんは怒りながら

「なんでっていきなりハンドルから手を離すんだよ！？私がどれだけ怖かったかわかってるの！？なんでいきなり手放し！？」

っと再び怒られた。ていうか天野さん現状今日を理解してほしい・・俺たちは今・・駆動鎧またはオートマトンなどの機械研究所の入口に居ると言うことも・・そして、研究所は電子頭脳に乗っ取られて要塞と化していると言うことを・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

現在俺はノートパソコンを出してケーブルを入口の機械に接続し頑丈なドアをこじ開けようとしていた

相手が電子頭脳なだけにハッキングもかなり骨が折れるのだが俺の技術をなめて貰っちゃ困る

ピー・・・ガチャン

「開いた」

俺がそう言ってパソコンをカバンに入れそれを俺が背負うと天野さんは不思議そうな顔で見ていた

「それでこのドアが開いたの・・・？」

っと言ってくるので「そうだよ」っと言うと何かを納得して中に入って行った

「待て待て待てバカチン！！！」

「え？だって開いたから・・・」

っと天野さんが言っているが実際にはこの場所かなりヤバいんですよ！！？理解できてるんですか？

と思いながらも入ることには変わりないので入った

真っ白い壁に真っ白な床と天井・・いかにも無機質で生活館の無い閉鎖された環境・・・・そこを俺が先陣を切って歩いていたんだけど

何の因果か天野さんが赤外線のセンサーに触れちゃって前から銃装備の監視ロボが４機も出てきて現在は、通路の腋で銃撃戦だ

ババババダダダダ

っと俺と天野が隠れている壁を少しずつ削ってきだした

「あわわわわどうしようどうしよう」

っと天野が焦っていたので俺は睨みを利かせて

「大人しくしてろ足手まといちゃん♪」と悪魔の笑みを浮かべて黙らせカバンからＥＭＰグレネードまたの名を電磁パルス手りゅう弾を取り出してそれを投げた

それは一気に爆発し警備ロボ達の機能を完全に停止させた

それを確認した俺は、天野の手を引いて赤外線を見ることのできるサングラスを天野に渡して奥に向かった

「あの・・ごめんね?どうしても一真助けたくて・・」

っと反省していたので何も言わないで奥に進んでいるとまたまた、赤外線の網が貼ってあった

「うわこれすごいね・・でもギリギリ通れるかな?」

っと天野さんは身体がやらかいのかスルスルと赤外線センサーの網を抜けていった

「影千代ちゃん今回はOKだよ」

っと天野さんが読んでいたので俺も行こうとするとビービービーと警報が鳴った

「な、なんで?」

俺は確かに潜り抜けたはずだ。褒められたことじゃないが俺はスパイでも何でもできる用に経験を積んでいたのに・・・なぜ?

俺がそう思っていると天野さんが俺を指さしながら

「影千代ちゃん胸!!」

っと言ってきておれは理解した・・・女になっていて俺には脂肪の塊が生まれていたんだ・・

それに赤外線が当っていた・・・畜生!!

ダダダダダダン

「「うわぁあああああああああああああ」」

そう思っていると後ろに4本足の少し大きな銃を搭載した警備ロボがたくさん迫ってきて撃って来たので俺は走って

天野さんを押してドアを開け部屋に入り自動ドアが勝手に閉める前にＥＭＰグレネードを隙間から放り投げオートマトンを昨日不能にして倒れている天野さんを起こしてさらに奥に走った

さっきから通路が狭いから小型のロボしか入ってこないけど通路が広くなったら当然相手にはしたくない奴が出てくるわけだ

「はぁ・・・ん?」

俺はため息とつきながら横を見ると天野さんが若干震えていた・・・まぁ銃とかは怖いよね・・正直当ればほとんど死んじゃうんもんね

しかも相手は人じゃなくて無機質な機械

怖いわな・・・それにしても電脳頭脳って奴はよほど性能が低いみたいだな・・・天野さんを同行させている俺なんかに簡単に侵入をゆるしてるんだもんなまぁ俺のとっておきのグレネードが警備シス

テムを崩壊させてあるんだけど・・・

それにしても静かだ・・・可笑しいな・・・人間じゃない機械だからか?そもそも警備体制が甘すぎるだろう?確かに巡回のロボは多いがこの程度なら警備員でも簡単に突破できる。

(なら・・何故俺に依頼した?それこそ裏の人間なら簡単にそれとも・・・まさか・・俺の記憶消去に頼らなきゃけないほどおおごとがあるのか?)

「ねぇ影千代ちゃん「ん?」なんかさっきから人影が見えるんだけど・・・」

「はぁ?え?マジ」

俺は部屋に入って来た人間を見て驚いた警備員で皆目が白目で狂ってるていうか首に巻いてるの何?青色の首輪・・・・・ん?あれって・・・神経操作装置!?

「やばい逃げっぞ天野!!」

「え?でもあの人たち味方〜ドン〜え?」

俺が天野を抱えて別の部屋に飛び込んでドアが閉まった瞬間に警備んたちがお絵たちに向かって大量発砲して来た

ちょうど一発の銃弾が天野を抱えて飛んだ俺の肩に当ったが防弾コートのおかげで何とか痛みだけで済んだ

「ぐ・・・でもいて~・・・・」

「堕、大丈夫!!?「うんだいじょぶ・・」でもなんで・・」

俺が肩を押さえながらもがいていると天野が気付いて俺に聞いてきた

俺は片手で天野の頭を押さえて

「さっきの奴らはな・・恐らくだが首に付けられた機械で身体を操られてるんだよ。元々は脊髄を損傷した人たちのために開発されたデバイスのはずなのに・・・本当は頭からの信号を受け止めそれを運動神経に伝えるってシステムなんだけどどうやらあれは馬鹿が改造して電子頭脳からの命令に身体を従わせるタイプだな・・・いうなら電子奴隷(サイバーソルジャー)てか?」

俺がそう言うと天野は驚いて目を白黒させていた

「でもどうするのさすがに人が相手じゃさっき見たいに手りゅう弾はつかえないよ」

「え?だめなの?俺使おうとしてたんだけど・・」

「駄目だよ!!絶対にダメ!!もうこれ取り上げるね」

「おい、勝手に取るなよ!!コラ還せこの野郎」

っと俺の発言に驚いた天野が俺のカバンから手りゅう弾を取り上げてきたので俺はそれを取り上げようとすると天野がダメと怒ってきた

めんどくせぇ・・此処に置き去りにしてやりてぇ・・

そう思っているとゾロゾロと扉を開けてサイバーソルジャーが１０人くらい来たので俺は天野と一緒に集中砲火を避けながら逃げ回っていた

（それにしてもサイバーソルジャー共の精度が悪くて感謝だ・・・もし良かったら俺と天野なんて蜂の巣だ）

操られた人間はどうもこうも皆不器用なのだ

そのため銃もまともに発砲できていない

そのおかげで俺達は生きているのだ。

そう思いながら必死に天野さんと逃げていると天野さんは疲れ出したのか息が上がっていた

それにしても広い・・・この地下研究所・・・結構本格的な施設みたいだな・・・金掛けてる

そう思っていると俺と天野は最悪な場所に出た

地下ドームだ・・・かなり広くておそらくオートマトンや駆動鎧の性能実験でもする場所なのだろう

さっきまでは、狭い通路だから小型ばかりで何とかなったんだ

それを今は、広場だと？やばい・・

そう思っていると８つあるうちの７つの扉が開き大量の警備ロボや見たことのない人型の新型や・・かなりのサイズの駆動鎧などがゾロゾロと出てきた

（どうするどうする・・・どうやって対処する!?・・・なに!?
入口が）

「あわわわ・・・「天野!!!走れ!!!!」えあ・・キャ!?」

俺は最後の出口を塞がれたはたまらないので俺は天野の手を掴んで
走りもう少しと言う所まで行くと

「ハ・・ハァ」

「頑張れ天野!!もうすこsウワァ!?」

シュルシュルと俺の脚に警備ロボのはなったケーブルが巻きつき俺
はこけた

そして天野は俺に振り向いたが俺は天野に「走れ!!」っと言った

天野はでもとか言っていたが俺が睨むと怯えながらも走って閉まり
かけたゲートをくぐっていた

それを見た俺は安心して足に巻きついたケーブルを銃で切り

立ち上がって一応構えてみた

１００機近いロボットに１０台以上の超大型駆動鎧・・それに操ら
れている人・・６０名（フル装備）

「素直に言わせて貰うと・・・無理・・」

だって俺のガン＝カタは対人専用だもん機械とかロボととか論外だ！！

と思いながらもすこしだけお酒を飲んでフラフラしながらあらゆる角度から飛んでくる銃弾を上手い事交わしていた

正直に言うと俺は今人間の限界にいどんでいる

相手に滑空砲などが装備されて居ないのが救いだあれは避けられない

そう思いながらも距離を詰めてくる警備ロボ達にさすがのおれもあきらめた

俺が抵抗をやめようと銃を下すとロボットっ地は俺にずんずんと近づいてきた

アームのようなものから電気が出てるので俺を気絶させて使役するつもりか・・・やんなっちゃうな・・

そう思って俺が目を閉じた時

〜おいおい、俺様がもう諦めるのか？やっぱり女になった時の俺は弱いな・・・ていうかさ・・〜

っと心の中で俺自身の声が聞こえた

その瞬間に俺は武者ぶるいし「あぁ・・・わかってるよ・・最近忘れてたな・・闘争本能に身を任せることをよ」

そう俺が言った瞬間に全てのロボが俺に向かって発砲して来た

・・・

大型の駆動鎧を両手から伸びている『異世界樹（ユグドラシル）』の刃で中の人ごと真っ二つに破壊し操られている人間をも迷いも無く八つ裂きにしながら地下ドームを飛び回っていた

絶対に死なせない力を持つ影虎だからこそできる人質を攻撃対象に設定した戦い

この動きは電脳頭脳の計算を越えていた。レベル6を測るのは不可能なのだ

そして、1分後

全ての機会を鉄くずに変えた影虎は一時的な変身?を解いて人間の姿を現し

「ふぅ~ 久々久々♪あんな暴れ方したの・・・・そういや天野さんは大丈夫かな?」

影虎そう呟きながら閉じられた扉を『異世界樹（ユグドラシル）』でこじ開けていた

「それにしても天野さん・・・やり過ぎだろ?」

少し影虎が歩いていると明らかに天野が気絶させたであろう操られた警備員が酷い有様になっていた

(たぶん・・・ヤクザの血が騒いだのかな?一真には内緒にしておこう)

そう心に誓った影虎であった

ちなみに将来の一真と天野の夫婦喧嘩が今から楽しみで仕方のない影虎であった

そしてところどころで罠にワザと引っ掛かりその罠を片っ端から破壊していく影虎

そして、目の前にある扉を再びこじ開けたその先に天野さんが居て天野さんは中央にある電子頭脳から生えている巨大なたくさんのアームに捕まえられていた

「か、影虎君!!!これだよ!!目の前にあるあれが!!」

っともがきながら言っている天野さんを見て影虎は手から『異世界樹(ユグドラシル)』を出して天野さんを捕まえていたアームを切り裂いた

「これが電子頭脳か・・・なんていうかどっかの映画で見たことある奴だな・・それにしても天野・・よくたどり着けたな此処まで」

影虎がそう言うと天野は

「あ、なんか軽く逆立たせた金髪に、深い紅色の瞳で黒いタンクトップに黒いジーパンを着た、顔から下の上半身全体に黒いタトゥーをした人と白髪のショートヘアに、澄んだ紅色の瞳。背中に大きなリボンの着いた白黒の腋の部分が開いた巫女服を着ている女の子が先導してくれて協力してくれたんだ・・でも途中で消えちゃって・・」

っと天野が言うと影虎は頭を押さえて悩んでいた

影虎にはこの二人の特徴に聞覚えがあったのだ

「・・・たく・・・アダムとイブか・・「え?」なんでもねぇよ・・・それよりもあれはぶっ壊すぞ」

「え、うん」

俺がそう思いながら『異世界樹(ユグドラシル)』で壊そうと思うとあることを思い出した

「そうだ、ワクチンが居るんだった・・・天野さ~ん「え?な、なにかな?」俺は少しだけ無防備になるその間俺を守ってくんない?」

「え?私が?「そう」でも、私無理だよ・・・やっぱり・・」

っと天野さんがそう申し訳なさそうにいうと

「ていうかさ・・あんた一真を助けたいとか言って俺に頼り過ぎ・・たまには頑張れ・・てめぇは一応能力者だろうが」

「でも・・私は・・・その・・・「安心しろお前に言いわけは俺がさせねぇ」え?イタ!?」

影虎がそう言うと天野の頭に『異世界樹(ユグドラシル)』が刺さり天野は頭を抱えて痛がっていた

「おい天野・・・今お前の脳に俺の演算機能を接続した・・3分だけだがお前の能力の強度・・・レベル5まで上がってるぜ」

「えぇ!!??」

っと天野が驚いているとアームがたくさん襲って来て
その瞬間に天野が手を下におろすと３０本近いアームが天野の目の前に現れた黒い空間のねじれに巻き込まれて消えた

「え？何今の？・・私はただ重くした・・・」

天野が口をポカンと上げて驚いていると影虎が目を瞑り座りながら

「お前の操るのは重力だ・・そして、お前の重力は普段なら３０キロが限界だろうただ、今は俺がサポートしている・・そして、重力計の能力を最大まで高めた先にあるのは重力変化の最終段階・・・『超重力穴（ブラックホール）』♪」

影虎のその発言に天野は今まで史上最大のリアクションで

「ブラックホール！？それが今の私の能力！？」

っと物凄く驚いていた影虎はそれにそうだと言いながら天野に前に注意させた

その瞬間にまたたくさんのアームが跳んできて天野は立ち上がって両手を前に出すと前に黒い空間の歪みが身が発生しアームは次々に吸い込まれた

（天野さん以外にやるじゃん・・天野さんの能力なら本来は学園都市第２位くらいにはなれてるんだよね・・・実は変なところでドーピング使わなきゃ・・今頃はレベル４にはなってた・・こいつも天才症候群の予備軍なんだよね・・実は・・）

そう影虎が笑いながら記憶消去応用編クラッキングで電子頭脳の莫大なデータからワクチンを抽出しようとしていた。

電子頭脳も抵抗としてあらゆるダミーを作りだし抵抗していた

その間に天野さんは全力で能力を使いアームを防いでいた

そして、影虎がワクチンプログラムを見つけそれを携帯に移すと

「よし、ワクチンゲット♪天野やっちまえ」

「よくも一真を!!えい!!」

影虎がそう言うと天野は両手を前に突き出しながら巨大な電子頭脳にめがけてブラックホールを・・・・

放り投げた

その行動に影虎は眼を見開いて驚いていた

そして、天野の投げたブラックホールは電子頭脳の前まで跳び一機に膨張しだして電子頭脳の9割を飲みこんで消えた

（もちろんのこと電子頭脳は機能を停止して破損したそれにしても統括理事長様も破壊されても破片くらい残す魂胆だっただろう・・それを天野さんはこの世から消しちゃうんだもんな・・マジズリーよ・・ていうか今回は頑張ったな天野さん）

そう影虎が思っていると天野が急にふらふらと倒れた

影虎のサポートが終わり脳が休息を求めたためだった
影虎は天野さんを抱えて天井を突き破り『異世界樹（ユグドラシル）』の翼で飛びあがり
窓ないビルの屋上まで跳びそこで『異世界樹（ユグドラシル）』を広げ
学園都市の夜空を桜で覆いながら
「記憶消去応用編・・・『発信』」
そう影虎が言うと影虎のケテルの王冠から桜色の衝撃波が出てそれらが学園都市を覆った
そして、その瞬間に昏睡状態だった皆が目を覚まし始めたのだ
もちろんのこと椿も一真もそれを確認した影虎は静かに笑いながら空を飛び家に帰った
家に変えると椿が涙目で布団をかぶっており一真は頬を何かにぶたれたのか頬を赤くしていてすねていた
「だから俺は葵を起こそうと・・・」
「へんたい・・へんたい!!・・・夜這い男!!だったらお前は起こすためにいちいち胸を揉むのか!!変態!!」
っと椿が泣きながらそう一真に枕を投げていて

一真はそれを受けながら

「だから事故だって!!他意はねぇよ!!さっきからそう言ってるじゃんか・・それに俺は葵が居るんだよお前みたいなちびっ子の「しにたいのか!!?葵に言うぞ!?」・・ごめんなさい」

っと一真は疲れ切っていたそして少しでも反論しようとすると椿の怒鳴られていた

影虎は天野をとりあえずおろし二人の話を聞くと一真は目を覚まして寝ぼけながらいつも隣で寝ている天野を起こすつもりで体をゆすろうとしたら横のベッドで寝ていたのは椿でさらに身体がうまく動かず間違って胸に触ってしまい目覚めた椿にぶたれたらし

それを聞いて一真はようやく終わるかと安心していたら影虎まで椿の応援に回り深夜まで一真ＶＳ影虎＆ａｍｐ;椿の口論が続けられその後に天野が目覚めて椿が話に周り一真を責めたため

一真は泣きながら家に帰った

天野と影虎は今日の事は内緒にしようと決めその後の話はしなかった

科学によって生まれるものは、なにも平和だけとは限らない・・時には破滅であっても生まれる。

つづく

電脳頭脳（ハッキング、ハッキング♪人生初のハッキング♪）（後書き）

以上です。今回の敵は学園都市の科学力でした。

そして、今回影虎は人ならざる姿に始めて変化しました。

この姿は結構レアな姿です。

そして、天野さんの能力の進化も果たせました。その後、一真が椿にセクハラしてましたね・・・

次回もお楽しみに

新書血録（血まみれの魔道書ＶＳ血みどろの魔女）（前書き）

今回は珍しい戦いです。魔術師が登場します。

メチャ強です。

ではどうぞ

新書血録（血まみれの魔道書ＶＳ血みどろの魔女）

人工頭脳事件の次の日、椿は未だに一真に怒っていた

「あのさ・・そろそろ許してやろうぜ？一真からも謝罪のメールも結構来てるぜ？」

っと影虎が言うと椿は布団をかぶりながら

「私は許さない！！・・・今度から変態って呼んでやる！！」

っと怒りをあらわにしていて影虎は呆れながら手を頭に当てて

「さすがにそこまで行くと可哀想だってもし同じことが二回起こったら一真を半殺しにするから今回は許してやれよ」

っと爽やかに影虎が言ったが実は今回が二回目だったりする一真君・・・これは彼は知らない

そして、しばらく影虎がなだめると椿も機嫌を直して普段通り生活し始めた

すると急に影虎は誰かから連絡を受けて

「椿、ちょっと出かけてくるな・・９時前には家帰るから」

っと言いながら窓から飛び出し『異世界樹（ユグドラシル）』の翼で飛び立っていった。

それを椿は眺めながらしばらくして

「買い物にいこ」っと言い珍しく男装して冷蔵庫の中身を買いに行くことにしたようだ

・・・

雀が飛んできて椿はポケットから食べようと思っていたチョコバーを出してそれを砕いて地面に巻くと室はそれを突いて食べていた

それを椿が可愛がっていると急に後ろから手が伸び椿の頬を真っ赤な爪の細い手がなでた

「ひゃ！？」

椿はいきなり頬を撫でられたので驚き後ろを見た

そして、椿は後ろにいる者の姿を見て固まった

そして、急に震えながら指を刺し

「ア、ディディディアナ・・ねねねねねね・義　姉さん！！！！！！！！！！！！！？？？？？？？」

と驚きながら椿は全身から背が吹き出ていた

椿は男は全般で苦手だが椿は唯一どうしても受け付けられない女が居るのだ

それが今目の前にいる朱色の長い髪に血のように真っ赤な修道服で頭にお洒落な帽子をかぶった身長１６０位のスタイルのいい女

椿の魔術師時代の師匠であり育ての親であり大切な人であり・・・椿を裏切り卑劣な罠に嵌めた頂本人

名はディアナ＝クロス＝ブラッドレイ

そして二つ名は血みどろの魔女

「ウふふ♪どうしたのマリア？久しぶりに私にあって驚いた？」

っとずんずんとディアナがほほ笑みながら椿に近寄った

それに椿は怯えながら後ろに下がっていた

すると足元にあった木の根っこに足をつまずかせて尻もちをついた

「こないで・・・義姉さん・・・私はもういや・・・もう二度とあんなの嫌！！」

っと椿が叫ぶと幼さ残る笑顔でディアナは椿の髪を握りしめて

「お前がどう思っていようが関係ねぇよ・・・お前は私のお人形・・忘れたの？マリア？」

そう苦痛に顔を歪める椿の顔を覗きこんで言った

「私は人形なん・・かじゃない〜グイ〜あああぁぁあああ！！」

椿がそう言うとディアナは椿の髪をさらに強く引っ張り椿は泣き叫んだ

そして、ディアナは椿に優しく耳元で

「あなたは人形よ？自分の意志では何もできないようなお人形♪それにあの血のクリスマスはあなたが引き起こしたんじゃない「え・・あ・・」あなたが・・ミサに来ていた魔術師やシスター・・そして、

罪のない小さな子どもから赤ちゃんまで・・あなた、笑いながら殺してたじゃない。」

それは椿の中から完全に隔離された記憶・・・白い椿ではなく黒い椿が生まれて初めて人を殺した時の記憶・・・どんなことが当ても思いださないようになっていた記憶

そう言われ思いかえした瞬間に椿の心の何かが見るも無残に砕け散った

カクンと椿は体中の力を抜き本当に人形のようになった

目はなにも映そうとせず全部を否定するのに必死だった

それを見てディアナは笑った眩しいくらいの笑顔で・・・

「あの時全員を殺したのはあなただけど殺すように育てて洗脳したのは私なのに私の分まで罪の意識にとらわれちゃって・・立派なお人形さんよマリア」

っとディアナが椿にそう言うとその瞬間に椿の体から血の剣が大量に飛び出しディアナを貫いた・・・

かのように見えたがディアナは後ろに飛んで悠々と交わしていた

そして、ディアナは立ち上がった椿を見ながら

「あれれ?スイッチ入っちゃった?本当ならあの子の大切にしてる物を壊すのとあるものが無いと入らないのに?ん?」

そうは言いながらもディアナは余裕の笑みを浮かべながら体中から血液の剣を出して自身を睨んでいる椿を見て微笑んでいた

「私は・・・人形なんかじゃない！！」

っと涙目の椿がそうディアナに行ったのだ

そして、2人が瞬きして目を開けた瞬間に二人の周りから凄まじい炎が上がり二つの炎の渦がぶつかりあった

激しい炎と炎をぶつけ合いながら余裕の表情のディアナに椿は押されていた

火力からしてディアナの方が上なのだ

「ぐぐ・・・」

っとおされぎみな椿を見てディアナは

「どうしたのマリア？こんな殺傷力の低い魔術なんか使って？もっとあなたにはいろいろ教えたでしょ？例えばこれとかね！！！」

っとディアナは炎を消し椿の焔を消し去って椿の前に飛び真っ赤な爪の先から血液の鋭い刃を出した

「！？」

椿はとっさに身体から血液の剣をたくさん飛びださせそれを弾いた

体中から飛び出した刃は再び体の中に収まり椿は後ろに飛び前にい

るディアナに目掛けて強力な切れ味の風をぶつけた

その瞬間、ディアナの白い皮膚から血が噴き出しその血液が椿の口に入った

「!?おえぇ・・・ごほごほ（いや・・いや・・迂闊だった!?・・・うそ・・また・・い・・・・・や・・・・・・）・・・・・・・ハハ・・・あはは♪」

っと椿は必死に血を吐きだそうとしていた。

しかし、もう間に合わなかった。

椿は幼少時代からずっと教会でディアナに付きっきりで生活していた

４歳年上のディアナが年上のシスターから記憶を失い人格そのものが死んでいた椿を育てていたのだ

周りの人間には、彼女が良い姉に見えていた

実際にも全てを失っている椿をディアナは愛情を持って育てていた

ただし、人形に対しての愛情として・・・・

彼女は空っぽの椿に人らしい人格（椿）と人ならざる人格（クリス）があることを見抜き

人らしい人格を呼び起こしそれを育てそうしながら幼くひ弱な人格に自分の思い道理に動くように洗脳を続けてきたのだ。

条件は大切な物を壊そうとしてから血を飲ませること

この条件が整った場合にだけ椿の箍が外れるようにずっと洗脳していたのだ。

もしその条件がそろえば椿は・・・・判断能力を著しく失い罪に対する意識が一時的に消失するのだ。

「あはははあはははあはははははは♪」

っと椿は急に大笑いを始めたそして、ディアナに迷うことなく血液の剣を飛ばしたのだ

当たれば必ず死ぬであろう刃を!!

「スイッチ完全に入ったのね♪」

っとディアナはよろこびながら剣をこちらも血液の剣で弾いたそして、大きな声で

「私のために踊れ・・私だけのお人形」

っと不気味なまでの笑顔でそう言った

すると椿は無邪気に笑いながら地面に両手をつくと何処からともなくディアナに目掛けて地割れが発生した

ディアナはジャンプしてそれを交わしたが椿の起こした地割れは止まらずに遠くにいるカップルのいる場所を襲った

カップルは、地割れに巻き込まれていた。

普段の椿ならすぐにでも助けに行っただろう

ただ、スイッチが入った椿に誰がどう犠牲になろうが関係ないのだ

そのまま、ディアナを目でとらえて巨大な炎の火球を飛ばすとディアナがそれをかわした

すると巨大な火球は幼稚園児が遊んでいる公園に飛び公園が炎に包まれた

それを見たディアナは笑いながら

「あらあら、スイッチは未だに健在ね♪あんた小さな子たちを焼き尽くすなんて・・やっぱり私はあなたの事が好きよ」

そう言ってディアナは急に空を飛びそれにつられて椿も炎の翼で飛びあがった

するとディアナは人の多い場所に行き人々は空を飛んでいる彼女に驚くと同時にバタバタと倒れ始めた

皆が皆、目や耳から出血し大量の血液が噴出したからだ。

２０名くらいの人々から致死量ギリギリの血を集めたディアナはそれで魔術術式を構築した

「マリア、一度眠って起きたらまた遊んであげる♪」

そう言うと彼女は、血の逆ペンタクルの魔法陣に自分の腕から垂れている血を注いだ

そして、何やら呪文のような詠唱を始めると

魔法陣がどす黒く光り出し

「現れなさい私のドール・・『悪魔の人(バフォメット)』」

そう言った瞬間にある程度「人間に似た形」をし、肌が紺色、あるいは黒や赤色で、目は赤く、とがった耳を持ち、とがった歯を有する裂けた口を持ち、頭部にはヤギのような角を生やし、とがった爪の付いたコウモリのような翼に尻尾を持つこの世のものでないものが現れそれは不気味な声を上げながら

炎の翼をもっている椿に尻尾で攻撃を仕掛けた

「ふふ・・ん?あう!?」

椿はそれを避け切れず直撃をもらい林にブッ飛ばされた

「いたい・・・ぐ!?」

林に飛ばされ背中を強打した椿は痛みにもがきながらもディアナを殺そうと必死だった。

ディアナ自身それには驚いていた以前の彼女は一番初めに命令した

ことに忠実に従うのに椿は何の命令も聞かずただ殺しているだけなのだ

それは暴走

（暴走するなんてまだまだ調整が甘かったのかな~？）

っとディアナがそう思考しているとき椿はナイフで迷わず自身の手首を切り裂いた

そして、ドバドバと手首から流れ出る血液は地面に落ちるとまるで意思を持っているかのごとく動き魔法陣を形成した

そして、椿は垂れている血で自身の胸元に魔法陣を描き

「ハハ♪」

っと無邪気で幼い笑顔でそう言った瞬間に椿の魔法陣が二つ光り出しその瞬間に椿が地面を蹴ると地面が割れ

一瞬でディアナが呼びだした悪魔の前にいて悪魔を蹴り飛ばした

蹴り飛ばされた悪魔は地面にめり込みそれを見たディアナは椿と同じ術式を組み立てすぐにそれを発動し

椿のこめかみを蹴り飛ばした

蹴られた椿は地面に叩きつけられ体中から出血し仰向けに倒れた

そして、椿の横にディアナは歩み寄って

椿の頬を優しく撫でながら

「まさかいきなりスティグマータを使用するなんて…でも、やっぱりあなた・・弱くなったわね・・と言うより衰弱してるわね」

っと冷静にそう言った。今の椿は全盛期の１０％にも満たないほど確かに弱体化しているのだ。

原因は精神的な疲労と肉体的な疲労・・そして、腹の中に赤ん坊が居て本気が出せないのだ

ディアナ自身は、名の知れた魔術師であり椿の血の術式を一緒に作りあげた女であり

彼女は椿の使った術式をまねするだけでそれを再現できるのだ

「・・・・義姉さん？」

っと動けない椿がそう言うとディアナは笑顔で微笑んだ。しかしその瞬間に椿の傷口から大量の血の刃が飛び出しディアナを串刺しにしさらにブッ飛ばした

「げほ・・がほ・・・・やるぅ～♪」

っと全身血まみれのディアナは立ち上がりながら血を吐いていた

「フフ♪引っかかった」

っと椿は満面の笑みで笑っていた。今回はあまりにもディアナが馬

鹿すぎたのだ

殺すことしか考えていない人間に自分から近づいたのだから刺されても当然である。

とうの椿は、ディアナに傷を負わせて大はしゃぎしている。

「あぁ~あ、本当に面倒な子」

そうディアナが言った瞬間に椿の背後の地面から先ほどの悪魔が現れ尻尾と腕で椿の体を完全に拘束したのだ

「もう、前にも教えたでしょう?術式が発動したらまずは術式を見極めて壊せって」

そうディアナが言うと悪魔は椿の首をつるのような尻尾で絞めつけ始めた

「あが・・ぐぐ・・・」

必死に手こうしようとする椿にディアナは近寄り椿の胸元の魔法陣を自身の血で消した

その瞬間椿から疑似的な聖人の力が失われた。

するとどうだろうか先ほどまで抵抗で来ていた悪魔の力に一切抵抗できなくなっていた。

そしてどんどん締めあげられていた

椿も体から血の刃を出し悪魔に刺そうとしたが悪魔にはあまり意味を成さず徐々に体力を奪われていた。

敗北である・・・・椿は手の力が抜けだらりと垂れ下がった。血液を消耗しすぎてもう体力が残っていないのだ。ただでさえ久々の血液消費型の魔術でさらに妊娠していることもあるので貧血気味なのだ。

「ふぅ・・・やっと眠ったか・・・・連れて帰ってあげるわ私の目的のために」

そして、それを見たディアナは自身の血を操りひも状にしてそれらを椿に目掛けて飛ばした。

その時、血液のひもが椿に触れる前にある男によって防がれた

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

１０本ほどのひもが男の手に掴まれていた

それを見たディアナは誰かしら？と首をかしげた。

もちろんのこと駆けつけたのは影虎なのだ。

彼は、ディアナを睨みながら血のロープを引きちぎり椿をとらえている悪魔に殺気を放った

悪魔は特に恐れる事は無かったが影虎がケテルの王冠を出した瞬間に徐々に震え始めた

そして影虎が悪魔を睨みつけておぞましいまでの気を放ちながら

「去れ」っと言った瞬間に悪魔は、後ろに後ずさった

その時椿を解放して

解放された椿は、地面には落ちず影虎にキャッチされていたが目を覚ました椿は迷うことなく影虎を血の刃でぶすぶすと子供のように突き刺した

その時の目は笑っていた

ありがとうの代わりに殺そうとしていたのだ。そして全身から血の刃を出して自身を抱きかかえている影虎に突き刺した。

化が虎の体からはどくどくと大量の血が流れた

「アハハ♪死んじゃえ死んじゃえ」

っと狂った顔で発言をする椿を影虎は静かに眺めながら未だに立っていた

椿自身自分が何をしているのか理解できてはいないのだ

ただ、楽しい事がしたいから暴れているのだ。そんなかわいそうな椿を影虎は睨みつけた

その瞬間に椿は急に笑えなくなった

「え・・あ・・・」

心と頭が理解出来無い状況でも椿の体が勝手に震えだしたのだ

「なになに?」っと椿自身勝手に震え始めた身体に驚いていた。椿の体は知っているのだ

影虎が自信を無言で睨みつける時、それは、逆らえば自分にとって最悪な事態だと言う事は椿の体は忘れていないのだ。

そして、恐怖で動けなくなっている椿を見ると影虎は目は怒ったまま笑いながら

「いい加減、大人しくしねぇと…お仕置きだぜ」

っといままでで一番静かで重みのある言葉でそう言った。その一言を聞いてから椿は嫌でも冷静にさせられた

そして、スイッチを一時的に切られた椿は自分が何をしたのかを思い出しブワッと涙を流し始めた。

彼女は影虎の胸で泣いたが声にもならないほどのショックを受けて喋れないでいた

なんにも悪くないしあわせそうなカップルや砂場で遊んでいた無邪気な子供たちを手に掛けてしまったのだ

椿は滝のように涙を流して震え続けていた。何度も何度もごめんな

さいごめんなさいと繰り返していた

すると影虎は椿に頭突きを決めた

ガンと言う音が響き椿は頭を押さえて痛みで泣いていた

椿のおでこと影虎のおでこからは血が流れていて

椿はこわがりながらも影虎を見上げるとさっきまでお姫様だっこ状態だったのに影虎は椿を放り投げたのだ

椿は地面に落とされ身体を打ちつけたがその瞬間に影虎の顔面に先ほど距離を取った悪魔の尻尾が鞭のように飛んできた

それを影虎は片手で掴みとり悪魔を力ずくで引っ張り山羊のような悪魔の顔面を殴ったのだ

「ぐげるあぁ!?」

っと悪魔はこの世ならぬ音を発して再び羽根を広げて空に飛びあがった

そして、明らかに影虎を睨みつけながら構えていた

その後、尻もちをついて驚いている椿に影虎は冷たい目で

「安心しろ・・・お前がやらかしたことの収集はすべて俺が付けた・・誰も死んじゃいない「ほんとに?」あぁ本当だ本当だとも…でだ・・椿・・・今すぐあの女ぶちのめしてこい・・それが終わったらお仕置きだ♪」

っと悪と言う顔で影虎が言うと椿は文句も言えずディアナに立ち向かわされた。この時も椿の幼児化洗脳の効果は続いていたが影虎のお仕置きと言う言葉の怖さに身体が勝手に動いたのだ。

みなさんのお忘れだろうが影虎は俺様で本性は極ドSなのだ。

椿がなぜ怯えているかはご想像にお任せ…

そして、影虎は悪魔の居る高さまで翼を広げて飛びあがり椿を見下ろしながら

「自分のことには自分でケジメつけろ・・・たく・・」

っと影虎はそう言いながら『異世界樹(ユグドラシル)』の枝を伸ばし悪魔に攻撃を仕掛けた

それを悪魔は避けて尻尾で影虎に攻撃した影虎も弦で応戦を仕掛けた

・・・

洗脳がうまくはたらかないのは坊やのせいか・・」

っとディアナが言った瞬間にディアナ自身は影虎を殺そうと

自分の人形に心を芽生えさせ奪いとった恨めしい男を殺すために炎で巨大な鳥の翼を作り出し空中で悪魔の相手をしている影虎に背後から襲いかかった

のだが…

「だめ！！」

っと椿が同じく炎で翼を作り飛びあがりディアナにタックルをかましたのだ

空中でのタックルでもスピードが速かったのでそれなりに痛くディアナの身体は影虎から話された

「痛いわね・・ちょっと邪魔しないで」

っとディアナが炎の翼から大量の羽を飛ばすと「いや」と椿が激坑しながら炎ではなく水の塊をたくさん自身の周りに飛ばしそれらで炎の羽を防ぎそして、水の塊が突如竜巻に変わりそれがディアナに襲いかかった

ディアナ自身も黒い塊を目の前に作り出しそれで竜巻を貫いた

そして竜巻を貫いた塊は、椿へと真っすぐ飛んだが椿はそれを交わし傷口から血液の居場を突き出してそれでディアナに襲いかかったがディアナは羽を消し急降下して先ほど悪魔を呼び出した時とおな

じ量の血液を再び自身の真上に集め再び魔法陣を形成し自分の血液を垂らして再びアクマを呼び出した

呼ぶ出されたのは、槍を携え、旗を掲げ、蛇または杖を持った端整な騎士の姿で現れる悪魔エリゴスであった。

そして、エリゴスは槍を椿に目掛けて放り投げた

椿は避けようと上昇したが槍は予想外の上昇した椿に当る角度で投げられていたのだ。

エリゴスは特殊能力で未来を見る事が出来るのだ

「う・・・そ・・・・？」

そう椿が言った瞬間に椿の左肩を槍が貫き椿の炎の羽が消え椿は重力に従い上空から地面に向かってあたまから急降下した

「また、暴れられても面倒ね・・仕留めなエリゴス」

そうディアナが言うとエリゴスが再びやりを構えたが途中でカタカタと震えて動かなくなった

影虎が来たわけでもなく影虎は現在、悪魔と交戦中なのだ。本気を出せば簡単に片が付くが椿が終わらせるまで絶対に倒さないと決めて遊んでいるのだ。そんな影虎を傍に悪魔は全力で挑んでいるのだ

そして、槍に当り地面に落下しそうになった椿は未だに落下していた

ディアナが何度命じてもエリゴリは動こうとしなかったがようやく

槍を椿に目掛けて放り投げた

しかし、エリゴリは恐怖から震えていたのだ。そして、現在、影虎と戦っている悪魔も震えていた。悪魔たちが震えること・・それは・・天使の存在

椿に槍が再び当ろうとした瞬間に気絶していた椿が目を覚ました

右目が桜で左目が黒に染まり悪魔の槍が椿に触れる前にネジ曲り消え去った

そして、椿の左肩から花の咲いた『異世界樹（ユグドラシル）』の禍々しい翼が生え右肩からも花の咲いた『死世界樹（キルドラシル）』の翼が現れ椿の体は再び空に持ち上げられた。

そして、椿の体から生えた『異世界樹（ユグドラシル）』と死世界樹（キルドラシル）の枝は絡み合い椿の頭上で天使の輪っ化のような形の黒とピンクの花の王冠が完成した。

「何あれ？あの坊やと同じ？」

っとディアナは驚いていたその瞬間に椿が上空から悪魔に目掛けて手を伸ばすと悪魔はびくりと震え

「ｈｈ儀ｇｖｇｗ８ｑｇｖｗｑｆｔｖｆ１づｖｑ８ｃｖｋｖ８ｑｆ８ｖｃｑｆｃｄ８咲け（裂け）んｃｂｂｃｖｙｖｃｖｔｖｉｖｐｅｇｕｉｗｈｏｐｇｈｉｇｉ　ｂ　ｃｗｂｏｗｖｙｖ」

「がぐｇふあいあいヴぃｙｃｖｌｖｃぐｄｖｃつｌｖｃ　ｉｖａａａ

！！！

しかし、ディアナは生きており未だに椿を狙っている状況には変わりない・・・・

つづく

新書血録（血まみれの魔道書ＶＳ血みどろの魔女）（後書き）

ディアナ＝クロス＝ブラッドレイ

朱色の長い髪に血のように真っ赤な修道服で頭にお洒落な帽子をかぶった身長１６０位のスタイルのいい女

二つ名は血みどろの魔女

使用魔術

血の術式

椿と同じ血液を使った魔術が得意。得意系統は火。

血の契約。

血によって悪魔と契約し使役する。

椿の居た教会の先輩で椿の教育係だった女。性格は歪んでおり椿を人形と認識している。

強さは椿と互角位。

以上です。

今回は酷い争いでした。椿の過去の人物、そして、椿の不幸の始ま

りであるキャラでした。

次回も展開がかなり飛ぶと思います。ではまた

未元毒身（毒男の憤怒と憎しみの力・・・迎え撃つ影虎の王道と呪われた力）

一週間に一回の投稿タイムです。

ではどうぞ。

未元毒身（毒男の憤怒と憎しみの力・・・迎え撃つ影虎の王道と呪われた力）

深夜の学園都市

スキルアウトや裏組織の人間が活発的に動く時間帯、その時間帯に一人の逃げ惑う人間とそれを追う人の形をギリギリで保っているゲル状の何かがそれを追いかけていた。

そして、裏路地の行き止まりに追い込まれた男は後ろから追ってくるものに怯えながら

「やめろ・・・やめてくれ・・・あの時の事は・・・悪かった・・・か、金なら払う！！うそだろやめて・・・ぐぎゃあああああああ！！！！！」

男が何かを言っていたがゲル状の何かは男を綺麗に飲み込み綺麗に腐食させ男の体だけを髪一本残さずに消し去ったのだ。

すると男の服の裾から一枚の写真が堕ち地面に落ちた。

それをゲル状の体を持った黒髪の癖毛に焦げ茶色の瞳で暗い顔をして常に帽子と長袖の服に手袋をしている首から上が人間の男自らの事をニヒトと呼び復讐を続けている篠崎　祐【シノサキ・ユウ】がその写真を拾った。その写真には白衣を着てその下に大人の色っぽい服を着て写真でもよく判るほど綺麗な黒髪長髪の美人な女がそこに写っていた。そして、その後ろにユウが一度見たことのある男が映っていた髪を黄色に染めており目立つ緑色のコートを羽織った男・・・過去に研究所を抜け出す時に一度だけ研究所で見かけた男・・・

「この女とあの時の男・・・こいつらが俺をこんな体にし・・レイナと俺の時間を永遠に動かなくし俺らのガキを奪った奴の・・・関係者か・・・殺してやる・・俺以上に醜い姿に変えてやる・・」

そうニヒトは言いながら写真を人のものとはいえない手で握りつぶした・・すると写真は腐食して朽ちて消えた・・・

写真に写っていたのは、桜井忍と桜小路影虎だった・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺こと桜小路影虎は、なにを間違えたのか今、大変な事になっている。今日は少し体調が悪くまぁ病気と言う訳ではない。ただ、椿を家に寝かせて久々に病院にでも行こうかと思って歩いていたのだがどうやら何の因果か記憶消去の効力が激薄で俺は今、指名手配中の暴力行為の常習犯、牙桜として風紀委員（ジャッジメント）１０人に追われて居るのだ

俺が走っていると中学生くらいの風紀委員（ジャッジメント）が掌から焔を出してきたので

壁を駆けあがってビルの６階に移動して屋根伝いに逃げると急に俺のコートの端に急に白い杭が刺さり俺は後ろに引っ張られて倒れてしまった

そして、お天道様を眺めていると俺の目の前に常盤台中学の制服に腕章を付けた茶髪ツインテールの少女が鈴のような声で俺を見降ろしながら腕章を見せつけて「ジャッジメントですの」

っと言ってきた・・・知ってるし・・言われなくてもわかってる・・
・

そう思った俺は、鉄矢を引きぬいてそれを握りつぶした

「!?・・・さすがにこれでは犯人一人も捕まりませんわね・・これでどうですの!!」

そう風紀委員(ジャッジメント)様は太股に忍ばせた鉄矢を転移させて俺の衣服を地面に縫いつけようとしたのだが・・・野生の勘一つだけで俺はそれら全てを避けた転移した鉄矢は間抜けに地面に刺さっていた

「まさかすべて交わされるなんて・・・」

そうテレポーターが一歩下がったかと思うと急に転移して消えたがおそらくは俺の斜め後ろ上に転移でもしてとび蹴りでもするのだろう・・・記憶消去が働かない分・・・勘がうまく働く・・・

俺の的中通りテレポーターは俺の真後ろからとび蹴りをしてきたが俺は、それを交わし女が俺がくぁした事に驚いていて俺は女の服を掴んでビルの六階から遠心力と筋力を使い放り投げた。

「あ!?」

っと女は瞬間移動ですぐに体勢を立て直そうとしたがテレポートじゃ勢いまで殺せないので少し着地で足を痛めたようだった。俺は一応心配になりビルの屋上から覗いてると屋上のドアが開き3人くらいの風紀委員(ジャッジメント)がゾロゾロと現れそれぞれが空気の弾丸と小さな竜巻と電撃を俺に向けてはなって来たので俺はとりあえず地面をへこむほど強く蹴って飛んで交わして

着地の前に指先から緑色のムチを出してそれで下にいる3人を叩きのめしてビルではなく遥か下の地面に着地した。

その瞬間だろういきなり物凄い速さで協力の電撃が跳んで来たのだ・・・・

「めんどくせ・・・」

俺は目の前から飛んでくる電撃を根性で耐えた激痛どころじゃないがどうってことない。

すると前から学生鞄を持った同じく常盤台中学の制服を着た化粧がいらない程度に整った顔立ちで、肩まで届く短めの茶髪にヘアピンを付けている女が居て

そいつは、足を痛めているツインテールに

「どうしたの黒子、あんたがえらく押されてるじゃない」

「お、お姉さま!?どうしてここに?今日は、授業だったんじゃありませんの?」

っとツインテールがそう言うと

「あんたがいきなり先生の言葉を無視して飛び出して行ったんだから何事かと思ったのよ。」

そう女が言うと

「そうですの？・・あのその手に握っているタオルはなんですの？」

「げ！？・・・そこでもらったのよ。」

「本当ですの？開店限定記念ゲコ太タオルって書いてますわよ？」

っと急に二人で話が盛り上がっているので俺はこほんと咳払いして

「すみません、俺行ってもよろしいでしょうか？」

俺がそう言うとヘアピン女は俺の方を見て

「黒子アイツを捕まえればいいのよね？「はいですの・・」そういえばさっきの電撃は弱いとは言え気絶してるレベルのはずよね・・・なにで防いだか知らないけど今度はマジで行くわよ！！」

っと女が急に電気をは強いて俺に強力な電撃を放って来たが俺はあえて受け止めた

そして、一歩一歩進んだ。

それを見て二人は驚いていて電撃を強くしてきたが今さらなので俺は電撃を浴びながら女に目掛けて走り殴ろうとするとジャンプして壁に着地しテレｐ－トツインテールが瞬間移動で俺に蹴りをしようとしたのだろうが錬金術で電撃を鉄の棒に変えそれで鳩尾をついて気絶させた。

「くろこぉ！！・・・あんたよくも」

っと俺を睨みながら壁に張り付く女・・はビリビリと電気をほとば

しらせていた

「いやね、明らかにしかけてきてるの君らだろ？」

「！？」

俺が女の後ろに飛び壁に垂直に立っているとびりびり女は驚いて吸着が無くなり地面に落ちかけていた

結構高い位置から落ちるので俺は壁を走って追いかけた・・・すると・・・

女はコインを指で俺に弾いてきた

助けようとしている相手に・・・至近距離からレールガンを打って来たのだ・・・

俺はとりあえず左手に全てを破壊する緑色の閃光『破壊傷倒（ブレイクンブレイカー）』を纏わせレールガンを軽く引き裂いて

「うそでしょ！！」

「いやほんと」

壁に再び吸着した女の首筋にチョップを決め気絶させた。

そして、俺は、放置するわけにもいかず先ほど倒した奴らと常盤台2人をひとまとめにして顔に落書きしてからまた風紀委員（ジャッジメント）から逃げていた。

・・・

俺がそう言うと急に水の塊が跳んで来たので俺はスライディングで交わして女の懐に入り首筋を狙って手刀を繰り出したのだが綺麗に避けられた

（まぁまぁやるのね・・・）

そう俺が考えていると女はしゃがんだ状態で回し蹴りを俺の脚にしてきたので俺はその蹴りを足の裏で受け止め女の胸倉をつかんでフェンすに放り投げて俺は、フェンスを乗り越えて下に降りた。屋上から句や思想のあ表情の女が見えたが気にしない。

そして、さすがに追跡を撒けたようで俺は病院に向かっていたすると・・・・

近くで爆発の音が聞こえたのだ。俺はそこに行って見ると車が爆発していて中から煙にむせている忍が出てきた。

いやいや、爆発の中心でむせるだけってお前は本当に人類なのか？

そうは思いながら忍の所に掛けよると俺と忍に向かって黒い身事情の何かが跳んできておれは思わず忍をカバてそれを浴びてしまった・・・その瞬間だ俺の上着やシャツなどが解けて無くなったのだ

「とら？」

っと俺を見て忍が驚いていたが俺の目線は俺の服を溶かした相手だ。

ゲル状の体を持った黒髪の癖毛に焦げ茶色の瞳で暗い顔をして常に帽子と長袖の服に手袋をしている首から上が人間の男・・・実際に

９０％は化け物ってか？

俺は服が解けて上半身裸になってしまった・・・寒い・・・・・

「おまえは・・・そうかこいつの仲間か・・・ならば死ね」

「おいおい、忍今度はどんなトラブルを呼び寄せたんだ？おっと？」

俺は忍を庇って液体を体で受け止めると身体が痺れてき初めた。忍を見ると他党にも立てないみたいな感じだったおそらくアイツにこの毒でも貰って車を運転できなくなったんだろう・・・

「とら・・・だいじょう・・・ぶ？」

「おう、服が溶けて寒いが特に問題は無い、とりあえずあの男・・・俺のお気に入りのコート溶かしやがって・・・・マジで食い殺す！！」

俺がそう言って男の後ろに移動して殴ると男の体を俺のこぶしはすり抜けたのだ

まるで水の塊を殴ったかのような感触と酷い消化液のせいで俺の右腕は溶けて大やけどしていた・・・

「コイツでしまいに「見つけましたよ牙桜！！今からあなたを・・・・」・・・ん？」

そして、俺は腕を引きぬき後ろに飛ぶと同時に男に目掛けて真相掌（トゥルースハンド）握を繰り出そうと思ったがその瞬間に先ほど、の風紀委員（ジャッジメント）のみず使いが現れたのだ

すると女は俺が戦っている化け物を見て何故か固まっていた・・

「あが・・え？・・・く、・・・・・が・・・」

「・・・・麗奈・・・」

女は急に頭を押さえて苦しみ出した。すると今度は化け物男の方が女を見て動揺し始めた。

すると男の体が膨張し始め明らかに強い瘴気が広まり徐々に周りを溶かし始めていた

「いや、あああああああ！！」

頭を押さえた風紀委員（ジャッジメント）が水の攻撃を男に仕掛けた瞬間に男はみずに吹っ飛ばされた。

しかし化け物男は途中で水を紫色に染めると急にあたりそこらじゅうにまるで散弾銃のように消化液の水滴を飛ばしたのだ

俺は、一瞬で『異世界樹（ユグドラシル）』の巨大な翼で風紀委員（ジャッジメント）の女と忍を包み込みで体中を『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』で覆いまるで鎧のように身にまといその時の影虎はもう人の形をした絶対能力の化け物の姿・・・

全身が桜色と黒の鎧で４本の角と王冠、棘状のパーツのついた各部、全身に浮き出た桜色の血管状組織がありとても人間には見えない姿になって攻撃を防いだ。そして、激しい消化の煙が上がり煙がはれると男はそこにいなかった・・・そして、辺り彼処は溶けて朽ち

果てて酷い有様だった。

「とら・・・その子も守ってあげたのね・・・」

ボロボロの忍が俺を見てそう言って気絶した・・・まぁ毒を浴びているようだし仕方ないか・・・しかし、さっきの水を取りこんだ時の暴発は・・・あぶねぇな・・・レベル5位じゃないと死ぬぞ？

俺はそう思いながら化け物状態から人間に変身して忍を担いで風紀委員（ジャッジメント）の女をアイツと関係があると睨んで忍の上に担いで病院までビル伝いに走った。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

そして、俺は、忍と風紀委員（ジャッジメント）の女・・本名、一ノ宮麗奈（過去に内の病院に入院履歴があったので判明）症状は・・・・記憶喪失・・・・

俺は病院でカルテを見ながら悩んだ・・・記憶喪失の相手に記憶消去を使っても消せないし検索もできないのだ・・・

「どうしようかな・・・ていうか変態さん、身体の調子はいかがですかな？」

「・・・・し・・・ぬ・・・・・ガク」

忍はベッドの上で動けなくなり再び気絶した。毒は中和しようとしても出来なかったから忍の全身の血を抜いて『異世界樹（ユグドラシル）』で直すと言う荒療治で直したが忍の体力が終わっていた・・

「さてと・・・どうやらあの化け物は俺と忍を狙っていて・・・この女の関係者みたいだな・・とりあえず水をかけるのは危険か・・・情報が・・足りない!!欲しい!!手に入れたい!!」

「先生病院では静かに!!」

「すいません」

俺が大声を出してると看護師さんに怒られ俺は頭を下げた・・・・

「とりあえずは、あのドロドロを何とかしないとな・・」

そう考えて腕を組みながら椅子に座りくるくる回っているとガララっと病室の扉が開いた。

「あの~ 此処は関係者以外立ち入り・・・え?・・・・あぁ!桜小路先生の・・・どうぞ」

・・・・・・・・・・・・・

「えぐ・・・エグ・・・かげとらのばかぁ!!」

「ぐほ!!!」

っと扉を開けたのは眼に涙をためている椿さんで椿さんは泣きながら俺の腹にロケット頭突きを決めてきた

椅子に乗っていた俺は、ローラーのせいで滑り壁にぶつかり頭を壁に打ち付けた・・・

「バカバカバカバカバカバカァ！！」

っと椿が大暴れして来て俺はもうボロボロだ・・・・・

「ごめんごめん、本当はすぐに帰れるはずだったんだ・・・「ホント？」嘘はつかねぇよ・・お前に嘘はいわねぇよ・・・（隠し事は多いけど）」

俺がそう俺を見上げながら泣いている椿さんを撫でながら言うと嬉しそうにしていた・・・

皆さんお気づきだろう・・・椿さん元に戻ってません・・幼児退行？記憶は戻ってるのに中身は幼児です。正直、ピッタリだと自賛したいですが椿さん体形は大人で見た目も完璧なので無防備です。

そう言っている間も必要に嬉しそうな表情で甘えてくる椿さんにこんわく気味だ・・・

恐らくは洗脳だと思うがこれがかなり強力らしいこの洗脳の恐いところは・・・・

「ふふふ～ん♪」

「させるか！！」

椿が急に俺から離れてとことこと歩いて手にシャーペンを持つとそれを忍の喉元に突き刺そうとしたので『異世界樹（ユグドラシル）』の弦で縛りつけ引き寄せ抱っこして俺を見上げる椿に

「人を刺すの禁止な？「なんで？」・・・お仕置きするよ？「はいわかりましたです。」よろしい」

おもに判断能力が低下した善悪の区別がつかなくなってる・・つまりは好奇心で人が殺せるんだ。

・・・悩みどころだ・・・解除の仕方がわからない・・

そう思っているとガララとまた扉が開いて黄色い雨カッパの少年、雨宮連が入って来て

「あ、影虎の兄ちゃん久しぶり。それに椿お姉ちゃんまで・・あれ？どういう状況？」

「ふふふ、よく来た連、「なに？目が悪いよ！！悪の顔してるよ！！」椿の相手してたら１００万やるから」

「意外とくれるんだ！！」

俺がそう言うと連は喜んでいた・・・かかったな・・・１００万？椿の相手で？・・・ふん、治療費にもならねぇ

俺は部屋を出た後に聞こえた椿のはしゃぎ声と連の死ぬ～の悲鳴を楽しみながら屋上から空を飛んだ

目的は怪人ドロドロ男を探すため飛びあがったが探すまでもなかったようだ

俺は空中で静止し目の前に浮いているドロドロと向かい合って空を飛び

「貴様は何者だ？何故俺と忍を狙う？」

「かえせ・・・おれのからだ・・・・れいなを・・・・そしてこどもを・・・・返せ！！！」

俺が質問するといきなり水の流れとして押しかかってきたので俺も羽ばたいて交わした

そして、俺が跳んで逃げて奴が追ってくる追いかけっこの始まりだ

「返せ・・・・返せ！！」

っと急に大きくな手飛んでいる俺を飲み込もうとするドロドロ毒男

「返すもんはねぇよ！！」

俺は急加速して包み込む攻撃をかわして竜王の波動で生命エネルギーをドロドロに打ち込んだが・・・

爆発はしたのだが液体なのですぐに収束して塊になり俺に飛んで来た

（物理攻撃は基本効かないと見た・・・）

そう思いながら俺の全力を出せる上空に移動して行くのだがその瞬間に下にいる男が開店しだしたくさんの水滴に分離すると急激な速度で弾のように俺に飛んで来た

俺は避け切れず全身に毒を喰らった・・・まるで体中に散弾銃を喰らっているような痛みが続くのだ・・・

「ふざけんな！！！！！そっちが怪物ならこっちは化け物で行ってやるよ！！！」

俺は速効で化け物状態に細胞を変化させ攻撃を全て防いだ。全身を『異世界樹（ユグドラシル）』と『死世界樹（キルドラシル）』と同じ性質に変化させる唯一無二の絶対防御の鎧・・・ていうほどではないが何にも影響を受けない鎧が正しいな

俺はその状態で男に殴りかかった。掴みたいもの触れたい物にだけ触れられる真相掌握（トゥルースハンド）の腕で殴ったすると男はダメージを受けたのかよろめいた

「くそがぁあああああああああああ」

っと男は巨大化した毒の腕で俺に拳を放って来たが俺も真相掌握（トゥルースハンド）で受け止めた。

「悪いがお前からつたあって来る感じでモノを言わせてもらうと憎悪や憎しみが俺の呪われた王道にかなうわけねぇだろうがぁ！！！」

「ぐわぁあああ」

俺は男の毒の手を引き寄せ男の顔面を真相掌握（トゥルースハンド）の手で殴った。

殴られた男はダメージを受けながら俺に毒の瘴気を振りかけてきた・・・だが俺にはもともと毒は論外、勝てる！！

「これで終わりにしてや・・・・・る・・・マジですか・・・雨かよ！！！」

急に雨が降り出しその雨を吸って男がどんどん肥大化しそのまま空高く跳び上がったのだ

その瞬間に俺も急上昇して追いかけた・・・・すると・・・

男が上空で蜘蛛の水分まで吸収して膨張していたのだ。・・・・また、破裂したら大量の雨としてこいつの猛毒が学園都市に降り注ぐだろう・・・解毒不可の屋根やあらゆるものを溶かす毒が・・・・

「おれは・・・しあわせも・・・れいなも・・・・こどもも・・・・貴様ら学園都市の科学者に奪われた!!!なら学園都市を俺が奪ってやる!!」

「俺は科学者じゃねぇよボケ!!ｃｏｍｅ　ｏｎ久々に完全体『異（ユ）世界樹（グドラシル）』!!」

男が破裂して毒のシャワーになったところで俺は雲の中に『異世界樹（ユグドラシル）』世界樹
ｓｉｚｅを呼び出し学園都市に傘を刺した。猛毒の雨は『異世界樹（ユグドラシル）』に受け止められて学園都市には一滴も落ちない

「きさま、・・・」

大量に毒を消費したドロドロは小さくなっている・・それにしても学園都市は中からの攻撃にはとことん弱い街だよな・・・・

「どうやらさっきの女とのガキを科学者に取りあげられたみたいな涙誘うパターンか？「そうだ!!お前達が・・・俺や」関係ないね・・・俺と忍はそんなことにかかわってないし・・まぁどんな事情があろうが俺様に敵対する事だけで万死に値する・・・・とりあえず

終われ」

俺は男に向かって羽を動かし超音速移動し顔面を殴った・・・意外と凡庸性がめっちゃ高い真相掌握（トゥルースハンド）だからこそ可能の流動態えの打撃が聞いたのか男は地面に向かって急降下しだした・・

そして、地面に落ちた・・・その瞬間に道路は溶けてクレーターになっていて俺が腕を組みながら地上に降下すると男は地面でのたうちまわっていた

「お前がどんな事情を抱えていようが・・・少なくとも俺の目の届く範囲では誰も殺させねぇ『命を弄んでいいのは俺だけだ』！！」

「ふざけんな・・・俺は全部を取り戻すまでは・・」

男はドロドロの体で俺の足を掴んだ・・・俺はそれを振り払った。

そして、男の顔面を踏みつけた

「知るか！！ついでにさっきの毒のシャワー攻撃だがあれを俺が防がなければどうした？・・・お前の大切なものをお前が殺すことになっているかもしれねぇぜ？何だよその驚いた顔はよ？」

その瞬間だろう俺の記憶消去が元に戻っていたのだ。

（こいつは…あぁ2年前のクソ研究所で俺が暴れてた時の奴か・・・）

おれは話しながらそれを思い出していた・・・すると男が立ち上がり・・・フラフラしながら俺に向かって来ようとしていた

「残念だがお前はもう・・・・・終わってるよ『乾燥冷血(ドライアイス)』」

俺の体の色が白く染まった時、俺に触れた毒男の体は氷出した・・・

俺のスキルの一つ・・・俺に触れているものを俺ごと凍らせる言うなら捨て身・・・

「あがｇ{ぱきぱき}・・・・・」

おれを含め毒男はパキパキに凍っていた・・・

俺も凍りついていたが・・・俺は根性で動いて砕こうとするといきなり後ろから「やめてぇえええ!!」

っと女の叫び声が聞こえて振り向くと風紀委員(ジャッジメント)の水使いの女がいた・・・

「話は忍さんに聞いた・・・それに・・・まだ記憶は戻ってないけど・・・一目見た時から分かったんです・・この人は・・・私の大切な人なんです!!お願いです牙桜!!助けてください!!」

っと俺に土下座して来た・・・・・

「おいおい、この毒男は俺が殺さなくても「お願いします!!」・・・ハ♪、よろしい。寛大な俺様が貴様の素晴らしい土下座に免じて・・・特別に許してやる・・・」

「ありがとうございます!!「た・だ・し、二度とお前の部署で俺を追うな・・・くたびれる」・・・「もちろんイエスか了解しましただよな?」・・・・・ハイ」

「素晴らしい。なら帰るかね・・・そうだ、女、やる。」

俺はそう言って凍った身体を動かして病院に帰ろうとした時思いついたので俺はポケットに入っていた紙を取り出しそこにペンで書き込んでそれを捨てて行った

俺が書いたのは・・・あの二人の記憶を調べ上げた時に出てきた情報・・・ガキの情報。

・・・

この後俺は、看護師さん達に物凄く怒られ泣きそうになった。

つづく。

未元毒身（毒男の憤怒と憎しみの力・・・迎え撃つ影虎の王道と呪われた力）

以上です。今回は空風さんの投稿キャラクターのお話です。

名前　篠崎　祐
【シノサキ・ユウ】

年齢　１８

性別　男

身長　１７３
体重　６０

容姿　黒髪の癖毛に焦げ茶色の瞳で暗い顔をしている。
常に帽子と長袖の服に手袋をしている。

性格　皮肉で口が悪く、他人には容赦ないが、子供には優しい

一人称　俺

能力　未現毒身【ポイズンマスター】

過去の度重なる実験の結果、自身の体を多種多様な毒にする能力を得る、特に麻痺毒や腐食毒を使う
そしてその毒の殆どが未だこの世界には存在しない事が判明、つまり解毒薬も存在しない。

その他
かつては液体操作系の能力者だったが、６年前に体内で微量の毒を精製する能力がある事が発覚しそれから４年間、投薬などにより能力を上げようとしたが失敗した。
しかし目を覚ました後、今まで投薬された複数の薬のせいかこの世界にはまだ存在しない筈の毒を精製する能力が開眼した
ダークマターに匹敵する危険性があると判断され廃棄されそうになったが廃棄される前に逃走し姿をくらました。

そんな彼を拾ってくれた同年代の少女【一ノ宮麗奈】の元に居候し、漸く安息の日常を得たかに思えたが、１年後麗奈が自分の子供を身ごもった事を告げられたその日に彼を探していた研究者達に捕まり２人とも研究所に運ばれた。

その後麗奈にも液体操作系の能力が有る事が分かりその子供に注目が集まる。

自分の子供を取り上げられ、悲しむ麗奈を見て怒りが爆発、能力が暴走する。
その結果最終的に人としての姿を失ってしまい、現在は首から下はスライムの様な状態になっている。

その姿は人と言うより、人の形をした毒の塊に近い

そのため今は常時神経毒の様なものを放出し姿を偽っている。
なお、毒は自分の意志で種類が変わる

そして自分がこんな姿になる理由を作った研究者や医者を抹殺するのと同時に麗奈や子供を探す為学園都市中にある関係者のいる研究所や病院などを襲って回っている。

なお、犯行は腐食毒を使い対象を毛髪の一本すら残さない為、解決の糸口がなかなか掴めない。

また、実弾などは体の殆どが液体化している為効かない。
そして斬撃なども両断される前に刃が溶ける。
万が一斬られても液体であるためくっつく。

今の自分は人では無いという皮肉から存在しない事を意味する【ニヒト】を名乗っている。

名前　一ノ宮麗奈
【イチノミヤ・レイナ】
性別　女

年齢　１８

身長　１６３
体重　４９
スタイルは五和以上椿以下。

容姿　茶色の腰まである長い髪に同色の柔らかな瞳
ただし目の下にうっすらとクマが出来ている

性格　おっとりした感じに見えるが毒舌で丁寧な言葉で様々な毒をはく。しかし、面倒見が良い為最終的には人助けに動く捨てられた子犬や猫を見捨てられず拾ってしまうタイプで祐を拾ってしまった理由もそれ。

一人称は私

能力　水流操作【アクアプレイヤー】

レベル４
辺り３００ｍの水を操作することが出来る。
一度に動かせるのは最大２４０ｋｇまで。
川などの近くでは本領発揮出来るが水の少ない所では弱い。
なお、学園都市の街中では能力が半減すると勘違いされているが、必要とあらばアスファルトの下にある水道管を流れる水を操作するから大丈夫との事。

ただし周囲が断水になったり、始末書が増えたりと良いとこ無しなのであまりやらない。

その他
祐を拾った少女、最初は正義感からだったが次第に愛情へと変わり、祐とは約１年の交際の後２人の子供が出来た事をとても喜んでいたが事件のおり、連れて行かれる子供を助ける事が出来なかったショックから虚脱感に襲われる

その後祐の暴走により研究所は半壊、ボロボロの状態で逃げ出した。
しかし愛した全てを失ったショックから祐と出会う少し前から目が覚めるまでの記憶をほとんど忘れている。

現在はジャッチメントに所属し黒子達の先輩にあたる。
実は黒子に寮監と同レベルの危険人物といわれている。
本人も1年以上の記憶が欠けている事には気づいてはいるが思い出そうとすると激しい頭痛が走る為あまり思い出せていない。
また、祐の起こした謎の消失事件の担当にされるが、担当になって以来毎日の様に続く頭痛と悪夢であまり眠れていない。

今回はこの二人の物語でした。シリアスな内容ですみません。空風さんありがとうございました

ではまた

神の争い（影虎ＶＳシアン。レベル６同士の頂上決戦・開幕！！）（前書き）

今回は次回の前振りみたいなものです。

ではどうぞ

神の争い（影虎ＶＳシアン。レベル６同士の頂上決戦・開幕！！）

昨日、毒男を叩きのめした後、フラフラの状態で椿さんのお守をして、忍を家に送り連にお別れをして家に帰っている途中に椿が喉が渇いたと言ってきたので俺は椿を公園のベンチに座らせコンビニに買いに行き袋をもらってそこに缶を入れ椿のベンチの前に立った。
椿は遊び疲れたのか眠っていた・・・俺がそれを眺めていたその時だ

突如俺の後ろに、黒のスーツをキチンと着こなし赤色のネクタイをし金髪の髪を右側だけ立たせ左側をたくさんのピンで留めている個性的だが中々カッコイイ髪型の長身でスリムな男・・・レベル６史上最強の奇術師、奇怪のシアンが居たのだ

「何の用だ？（ちくしょう、『異世界樹（ユグドラシル）』の使用が限界に近いって時に・・・）」

俺が凄みのある声で聞くとシアンはにっこりと笑いながら

【何、僕のマリアを返して貰らいに来たよって伝えに来たんだよ】

その一言で十分だった・・・俺の逆鱗に触れ堪忍袋の緒を切るのは十分すぎた・・・・

俺はその瞬間に周りの建物ごと俺が扱える最後の『異世界樹（ユグドラシル）』でシアンを潰した！！！

しかし

【こわ～い、バナナの皮で滑ってなきゃ死んでたよ～影虎君？】

っと俺の後ろのシアンが居た・・・その瞬間に俺は左手をこの世ならざるものの火のように燃えて光り輝いている筋肉は燃え上がる炎で、骨はあかあかと燃える石炭のようなもので出来た怪物の腕に変化させシアンに殴りかかったがシアンは右手をオリーブ色に輝く不気味な腕に変化させ俺の拳を受け止めた

そして俺とシアンは睨みあった・・・お互いがお互いの対局である存在と言う事を確かめながら・・・触りたければどんなものでも触る事が出来る俺の真相掌握（トゥルースハンド）を防ぐ事のできる腕・・それは

【つまりは、僕の腕は触れられたくないものを触れられる前に掴めると言う事だよ】

「てめぇ！！」

俺の言いたい事を勝手に言ったシアンに俺は左手から今度は巨大な真相掌握（トゥルースハンド）を飛ばすが対するシアンはオリーブ色に輝く腕から黒色の衝撃波を放ってきて俺の焔の腕と均衡して来やがった

それどころか波動を強めて俺を押し始めた

「このやろぉ！！」

【おいおい、こんなところで暴れちゃダメだろ？この世が耐えられないよ・・・くたばれ】

「うぉおおおあああああガハァア」

俺は圧倒的な波動に押されて真相掌握（トゥルースハンド）ごと俺は地面に叩きつけられ

た・・・その瞬間に俺の体が若返り始めて子供の姿に戻ったのだ・・・

【ふん、弱ってる君なんて相手にしても面白くもないね・・・だいたい弱点がある君はただの欠陥品だよ・・とりあえずマリアは返して貰った・・・じゃあね】

そう言ってシアンは眠っている椿を抱えて何処かへ消えた・・・

俺は、すぐに周りを探したが椿の姿も気配も鼓動も匂いもなにもなかったのだ

確実に完全に絶対に確定的に俺は椿を守れずに一瞬で負けて・・・奪われたのだ・・・眼の前で無力に・・なにも出来ずに・・・

「うぁあああああああ

そう呟いた瞬間だろう・・・俺の枷が綺麗に外れ・・・長年留めてきた力が漏れ出したのは・・・火のように燃えて光り輝いき筋肉は燃え上がる炎、骨はあかあかと燃える石炭、まつげは雷のひらめき、目は炎のトーチ、毛髪は炎、手足は燃える炎の翼のような姿に俺の体は変化していた・・・そして、頭にはケテル王冠が現れ王冠に４９個の宝石がはめ込まれていた・・・俺は、ある意味で進化をしていた

負の感情から来る成長・・・敗北の王の進化だ。その次の瞬間に俺の体の変化はなくなり・・敗北の王の姿に変化していた・・・・パワーアップを逆に利用しより弱くより深く足を引っ張る存在に俺は進化した・・・

人としての心が無くなりただ、対象を殺すためだけのシステム・・・・負ける事がなくただ、自分より強い相手が自滅するまで戦うシステム

それが起動した瞬間だった・・・

つづく

神の争い（影虎ＶＳシアン。レベル６同士の頂上決戦・開幕！！）（後書き）

以上です。連れ去られた椿、連れ去ったレベル６、シアン、そして影虎怒りの暴走。

次回、絶対能力者と絶対能力者がぶつかり合う時、新たな運命の歯車が回る。

ではまた

絶対強運（影虎と椿とシアン）（前書き）

一週間に1回の投稿タイムの時間です。

今回は、シアンと影虎のあり得ない戦いのお話です。

チートとバグが真正面からぶつかり合っています。

ではどうぞ

絶対強運（影虎と椿とシアン）

とある世界からずれた空間の中にある奇妙な形をした建物の中の一室で椿は眠っていた・・・

そして、眠っている椿の椅子に座って眺めている男がいた

シアンである・・・彼は影虎から椿を奪い去り自身の王国に連れて来たのだ・・・

子供の時から好きだったマリアという存在と共に過ごそうと作り出した空間だった・・・

彼は椿が１０歳まで椿が本当に愛していた男だった。シアンもマリアの事が本当に好きだった。そんなシアンとマリアの関係が修復不可能になったのは椿が事件を起こした血のクリスマスより少し前だった・・

これは椿とシアンの物語・・・・・・・・・・・・・・・

１４年前・・・・イギリスのとある教会で・・お話。

今ではレベル６という人ならざるもののシアン、本名、クレリア＝クロス＝シアン。

彼は、６年前まではただの平凡な魔術師だったのは血のクリスマスでの教会での生き残りの椿とディアナだけである。

シアンは実は生まれた時、まだへその緒が付いた状態で教会の前に

捨てられていた。

彼は教会に拾われ優しいシスターたちに育てられた・・。貧しくも幸せな生活だった。このころからシアンは運が良かったのだ。この協会にはシアンと同い年の子供が2人居てディアナと言う赤毛の女だった。

後は年上が１０人居ただけだった。本当の家族の様に全員が暮らしていた

そして彼が6歳のころ、シアンにとって初恋の相手が教会に来たのだ。

その子はまだ、三歳で綺麗な白い髪を持ち綺麗な朱色の瞳、そして白い肌、そして、可愛らしい顔をした女の子だったマリアという名前がぴったりだとシアンは思った。

眼にはなぜか光が宿っていなくて抜け殻の様だったがシアンはこの瞬間に彼女、昔の椿、マリアに一目惚れしたのだ。

彼女は親に教会に預けられたとシスターに聞かされた。なんでも記憶喪失で名前だけが判明しているだけで何も覚えていないらしいとシアンは聞いた。

そして、マリアのお守役はディアナに決まり、若干悔しがっていた・・・

それからという物、シアンはマリアとよく遊ぶようになった。マリアに者を教えるのはディアナで心を開かせたのはシアンだった。マリアはなんでもできる子供だった。才能の塊と言う奴でディアナが

教える事はほとんどなかった。ただ、マリアは年不相応なほど大人びていたがきっちりと甘えてくる子供だった。というよりも二重人格だった。基本シアン以外の前では大人びているのが白い髪のマリア、ドジで恐がりな年相応な女の子が黒髪のマリア、生まれたばかりの人格だった。ディアナが黒いマリアを育て白いマリアをシアンが手をしていた・・・

っとマリアがそう言った時、シアンにはマリアが辛そうな表情をしているのが見えた。その瞬間にシアンは、マリアを抱き寄せた。

「え？シアン？」

「君が魔術を学ぶのなら僕も一緒に魔術師になってあげるよ・・君を守るために力が僕は欲しい・・」

チュ

シアンがマリアを抱きしめながらそう言った時、マリアがシアンにキスをしたのだ。小さな女の子のそれとは違う愛情のこもった本気のキスを

それをされた時、シアンは顔を真っ赤にして煙が噴き出しそうになっていた。

そして、マリアが唇を離すとよっこいしょとベンチから降りてシアンの裾を引っ張り

「・・帰ろうシアン。」

そう夕日で見えにくかったが頬を赤らめてマリアがそう言った。

この時からシアンはマリアを守ると誓った

そして、2人は魔術を学び始めたのだ。片方は力を手に入れるため片方は守るために2人麻魔術師となるために奮闘した。

・・・・・・・・・・

・・・

一瞬だった。一瞬で５０人はいたシスター達が血をまき散らしながらバタバタと倒れたのは・・・そして、マリアは両手についた血を払っていた。

「あら？シアンじゃない？久しぶりね・・・悪いけどあんたも殺すわよ？」

っとシアンに目掛けてディアナがそう言った。シアンは圧倒的に自身より強い２人に狙われて居るのだ

恐怖ですくみそうになった・・・・

「シアン、悪いな、ワタシはワタシの目的のために貴様を殺す・・・せめて楽にしてやる」

「マリア、君は・・」

「ワタシの力になりたかったのだろう？ならワタシのために死ね。」

マリアはそう言ってシアンに向かって血の剣を振り下ろした・・それに対してシアンは腕でとっさにガードしようとしていた。所詮は無駄なあがきなのに・・

そしてシアンは身体を切られ血を噴き出しながら倒れた・・・

そして、そうまとうを見ていた・・・今までの生い立ち・・・マリアとの出会い・・幸せだった生活。それでいながら自分が力がないばかりに変わってしまった関係。自身に力があればマリアは力を欲する事もなかった。そして、力無きが故に初恋の彼女に殺されそう

という現実・・・すべてが自身に力がないからだと言う事に気付いた・・その瞬間だろう・・マリアにキスされた時のことを思い出したのは・・・

「まだ生きているのか・・楽になれ！！」

マリアがシアンに近づき血の剣を心臓に突き刺そうとしたその時だ。

その瞬間に3年前にマリアがした何気ないキスがその時シアンに入ったマリアの特殊な遺伝子、テレズマがシアンの遺伝子に干渉した。シアンが魔術を苦手としたのは、魔術のレベルがシアンの魔力のレベルに不釣り合いだったのだ。

マリアの剣がシアンに刺さろうとした時、剣をシアンの人のものとは思えないようなオリーブ色に輝く不気味な怪物の腕が剣を受け止めそれを砕いたのだ。その瞬間にマリアは驚き後ろに飛んだ。

そして、その瞬間にシアンが浮き上がりマリアを見て化け物のようなオリーブ色の腕をマリアに向けて

「今の君はあまりにも罪深い・・マリア、君に大いなる裁きを！！」

「うわぁ！！」

そうシアンが言った瞬間にシアンのオリーブ色の腕から黒色の衝撃波を放った。その衝撃波はマリアの小さな体をふっ飛ばしそれでいながらマリアからあるものを吸い取っていた・・そして、マリアの体から何かが吸い取られて居るのがディアナにも見えた。

そして、マリアにまとわりついていた黒い波動が消えマリアは力が抜けたように上手く身体動かせないでいた・・・そう、奪われたのだ。シアンの力に・・・マリア自身がシアンの扉の鍵を開けてしまっていた力、３０００年以上一度も発症しなかった力。それがマリアから奪った『神の加護』を奪った事により覚醒したのだ。

圧倒的な幸運を手に入れたのだ。絶対強運という万物をある意味で支配する万能な力。それをシアンが手に入れた瞬間に体の自由が聞くようになったマリアがシアンに焔の魔術を発生させ火の蛇を繰り出すとシアンはクスっと笑いながら自身の力に酔いしれて身体のうちから沸き起こる力を解き放った。強大なまでの謎な黒い波動がマリアの焔ごとディアナの血の盾ごと教会を吹きとばしたのだ。本来マリアならこの程度の攻撃なら対処はできただろうが神の加護を奪われ力を吸い取られた状況では進化し続ける力を持っているマリアでもどうしようもなかった。

そして、教会が全て吹っ飛び瓦礫の中でディアナとマリアは死んではおらず・・ただ、ダメージを負っていた

そして、２人が見たのは全身が人では無い別の存在、人型の怪物と言った姿がぴったりな白と金を基調にした精練とされ、神々しささえもある姿となっていたのだ。

そして、完全に人類を超えたシアンは、【じゃあねマリア、僕は行くよ・・・君も早く人間を超えるべきだ・・その時がきたら迎えにくるよ。】そう言ってシアンはその場から消えて無くなった。

自らの力のせいでマリアが死ぬ事を恐れ距離を取ったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・

骨はあかあかと燃える石炭のようなもので出来た巨大な腕に変化させそこから白い波動、シアンの波動とは対極を位置する力である

【どうして君がここに？それにその力・・】

〔『～（俺様が何処に用が俺様の勝手だ・・・それにお前言っていたよな俺様と貴様は鏡映しの如くだと、ならお前に出来て俺に出来ない事は無いだろ）～』〕

そう言って銀髪影虎は左腕を前に突き出した。それに反応してシアンもオリーブ色に輝く右腕を突き出し

同時に白と黒の波動を放った。片方は幸運を奪い取る黒い波動。片方は不運を植え付ける白い波動。

二つの波動同士がぶつかり合った。

１ｂａｙｍａｉｉ　ｄｕｃｅｋｓ　ｋ　ｖｂｊ　ｖ　ｋａｓｕｂｖ　ｃｘｇａｕｊｖｕｚｖｊ．／！！！！！

といったとても音符でも言葉でも表せないような不思議な音を放ちながら二つの波動をぶつけあい

徐々に一歩一歩2人は、距離を縮め出した。

【ハハハ、君が僕に勝てたのはたまたまだよ。今は君は僕には勝てない】

〔『～（そうかそれはよかったな・・俺が勝つんじゃない・・負けるべくして貴様が負けるんだよ）～』〕

そう二人の腕はもう1ミリほどまで波動を放ちあいながら接近したその時。二つの衝撃に耐えられなくなった空間が爆発しシアンと影虎の体を吹っ飛ばした

〔『｛（【やるねぇ・・（な）】）｝』〕

【君との戦いでは僕の幸運が君の不幸によって中和されるからやりにくい・・本来なら僕はチートな奴だろうが神だろうが神以上だろうが僕に何にも出来ないのに・・・まったく・・・】

そうシアンが言っている瞬間にシアンの周りからシアンの意思に関係なく鉄の刃が飛び出しそれが影虎に向かって伸びたのだ。

【え？なにこれ？】

本人ですら発動のタイミングもなにが発動するのかも理解不能の能力名、超常現象（パラノーマルアクティビティ）。魔術の名は絶対強運、これ以上にして上がないほど強力で理解不能な能力。

それに対して影虎は両手の指の間に槍のような杭を作り出しそれを伸びてくる剣に向かって投げそれを

弾いて空を飛んでいるシアンを壁に垂直に走りながら飛びあがり槍のような杭を１０本また作り出しそれを至近距離で空中で回転しながら槍を投げたが

シアンはその瞬間に驚くと急に影虎の杭を何処からか降ってきた隕石が弾き影虎の体に隕石が激突し影虎を地面に激とさせた。

その光景を見て心底驚いているシアン、彼が自分の力を制御しない

と言う事はこう言う事である。

そして、空中から隕石ごと落ちた影虎を見ようと煙の中から緑色の触れたものを破壊し尽くす光線がシアンを襲った。

〔『～（お前の能力はランダムだから止めをさせたのか同化をいちいち確認しなきゃならねぇからある意味損だな。）～』〕

そう影虎は左手から緑色の閃光を放ちながらそう言った。

すると影虎の真ん前に無傷のシアンが居て頭を書きながら【本当にびっくりしたよまさかあのタイミングで時限の裂け目におちるとは思わなかったよ】

と言っていた。影虎の攻撃が当たる直前にシアンは浮力失い時限の裂け目に落っこちて助かったのだ・・まさに幸運!!

〔『～（ケッ・・・いちいち頭にくるな・・）～』〕

【まぁこれが僕の強さのゆえんだからね。あれ?】

シアンが義面の声をあげた瞬間に影虎の腹部を謎の騎士が貫いた・・・〔『～（・・・なんだ?お前?）～』〕

影虎が刺されたまま後ろを見てそう言うと男はシアンを見て

「我らはイギリス清教、騎士派、斧槍騎士団のものだ。これまで幾度となく追手を殺戮してきた重犯罪者クレリア＝クロス＝死闇（シアン）、貴様を抹殺する命令が出ている。この空間はすでに我々騎士派の取り囲んでいる。選りすぐりの総勢１０００人だ。」

【まったく・・好きだよね能力と魔術を使うハーフを殺すの・・確か前に殺されたのは・・エリスだっけ？】

「貴様には関係がない我々騎士はイギリスの王族のために剣を振るのだ。大人しく死ね怪物眼め」

そう言った瞬間に影虎とシアンの周りに霊装の武器と鎧を身に纏った騎士たち１０００人が集まったのだ。

〔『〜（あん？なんだこいつら・・・）〜』〕

【僕や君みたいな魔術も使えて能力も使えるような奴が嫌いなのさ・・まったく僕に勝てるはずなんてないのに惨めだよね・・・ていうかいい加減その剣抜くかなんとかしたら？】

そうシアンがお手上げといったポーズを取ってそう言った

影虎もそれに賛成し自身に剣を刺し後ろにいる騎士の剣を掴み左手で男の鎧に触れた瞬間に

「うぐわぁあああああああ！！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」」」」」」」

ガシャン・・

〔『〜（たくよ、いきなり後ろからとかな・・酷いよな）〜』〕

「ガ！？」

そう笑顔で自子音に刺さった剣を素手で抜きそれを迷うことなく遠くにいる騎士の鎧の隙間に投げ突き刺し倒したのだ。ちなみに始め男は錬金術で鎧を鎧型のメイデンに変えられ串刺しになりたおれたのだ。

それを見た騎士たちは一瞬恐れたが「我らは英国に選らばれし騎士だこの2人などおそるるに足らん！！」そうボスらしき一人が言うと騎士たちは活気付き始めた。

〔『〜（はぁ・・）〜』〕【悪いね・・すぐに片付けるから】

戦っていた事も忘れ目の前の前の哀れにも勇敢と無謀を間違えた者たちのヤル気に気分が萎えてきた2人

「シアン達を殺した後は、血まみれの魔道書、新書血録を狩るぞ！！奴もここにいる。」

そう騎士のボスが言った瞬間だ

【あん?】〔『〜（あぁ!?）〜』〕

シアンと影虎の怒りがゼロからマックスになったのは・・その瞬間に騎士たちは全員が地球を三日で一周するほどの高速潜行の魔術をその身一つで発動したり、鎧にかけた加護以上の怪力と十字軍時代の神撲騎士から伝わる術を操り１０００人で影虎とシアンに襲いかかったがその瞬間だ。

〔『〜（ふざけんな！！！！！）〜』〕

【調子に乗るなよ！！！】

【屑が！！】〔『～（カスが！！）～』〕

「「「「「「「「「「「「「「「へ？」」」」」」」」」」」」」」」

っと２人がキレた瞬間に２人の体から白と黒の波動がほとばしり騎士たちを一瞬で砂に変えたのだ・・能力でも特技でもなくただの怒りによって・・漏れたわずかな力でだけで・・

ヒュゥ～

先ほどまで花畑であった場所が２人の気にあてられ砂となり唯の砂場に変わっていた・・・植物や人の砂によって・・・

そして、影虎とシアンが居た場所には人は織らずオリーブ色の体に鎧のような肌で顔も兜のようなものい覆われ翼を持った超巨大な存在、あまりに巨大で、存在感あふれ誰しも立ち向かうことを諦めるほどの雰囲気を出した足から頭まで登りつめるには５００年はかかるというほど巨大な存在に等しい存在となったシアンと

それに立ち向かうが如く影虎の身体は、火のように燃えて光り輝いている。筋肉は燃え上がる炎、骨はあかあかと燃える石炭、まつげは雷のひらめき、目は炎のトーチ、毛髪は炎、手足は燃える炎の翼のようで大きさは、幅も長さも世界そのものと同じくらい大きく七二枚の翼を持ち三六万五千個の燃える目を持ち星をちりばめたマントを纏い巨大な宝冠を被った巨人に等しき姿に変化していた。

２人がその姿になった時、シアンが作り出していた疑似空間が崩壊を始めたのだ。

そして、巨大な2人の超巨大な巨人は、お互いに殴り合った。

一撃一撃が空間の存在を削りそれが何度も繰り返されていた。

【マリアは僕のものだ！！】

そう言ってオリーブ色の巨人が神の焔の巨人を殴ると〔『〜（お前ではあいつを救う事は出来ない！！一度逃げたお前ではな！！）〜』〕と神の焔の巨人も殴り返した

【君だって彼女を救えはしない！！彼女を救うのは僕だ！！】

ヅガァアアアアン

〔『〜（ぐ！？）〜』〕

オリーブ色の超巨大な巨人は焔の様な超巨大な巨人の胸部に拳を決め焔の巨人の身体を後ろに下がらせると飛びあがり焔の巨人に目掛け回し蹴りを決めた

〔『〜（ぐは！！・・・テメ）〜』〕

【ぐ、かは！！】

焔の巨人は大地に倒れ込んだがすぐに起き上がりオリーブ色の巨人の腹部を殴りのけぞった巨人の頭部を肘で殴った。

そう言った殴り合いの繰り返しであった。もうその空間に残ったのは椿の眠っている一室と2人と砂だけであった

2人がなぜ能力を使わず巨大化しているのかというとお互いがお互いに能力の相性という訳ではなくお互いの存在がお互いの力を無効化し合っていることに2人は2年前の決闘において気付いているのだ

だからこそ、肉弾戦で一瞬で決闘が付けたいのだ。

そして、2人がお互いに殴り合っていると急に姿が変わりシアンは全体的に白い鎧のようなフォルムに黄金の装飾、そして金の装飾ににあう四本の王冠を意識したかのような神聖な雰囲気の漂う頭部の角、黄金に輝くマントを身にまとい棘棘としたフォルムの刃が四肢に存在し黒き瞳の奥に全てが凍りつくかのような静けさと渦巻く彼の欲望があり体中からオリーブ色の光と白い瘴気が滲み出てそれでいながら神々しい白い怪物に姿を変え

影虎はそれに相対するかのような基本カラーは黒。全身が桜色と黒の鎧で４本の角と王
冠、棘状のパーツのついた各部、全身に浮き出た桜色の血管状組織があり血管組織から桜色の優しい粒子が放出され続け黒き鎧からは黒く醜い瘴気が滲み出ていて赤色の瞳の奥には全てを燃え尽かせるような焔とその炎から出る黒い煙は破滅を意味し見たものは気が狂うほどで見た物に死を抱かせるような禍々しい怪物、とても人間には見えない姿になりお互いに腹部を殴り吹っ飛び

2人がその後、起き上り黒い力と白い力を腕から出しぶつけ合い二人で掴みあい砂山を転がっていた

そして、疑似空間の中で１３時間殴り続けた後だろう・・・二人は巨人の姿にまた戻っていて本来の姿では傷だらけでボロボロだった。相手がシアンでなければ影虎でなければだれがどんな力を持っていようが勝てる二人の戦いは遂に終局に向かった。

【はぁ・・・はぁ・・・・しつこいね・・】

〔『〜(・・・ヒョロヒョロのくせに相変わらず・・いい加減にしやがれ)〜』〕

そう二人の巨人はお互いに睨みあい最後の一撃に掛けていた・・見た目では変化がないが中身である人間の姿はもう限界だった。

2人がその瞬間にぶつかりあおうとしたその時、2人の前に二つの何かが飛んで来たのだ

・・・・

のは、一瞬だけ椿の形をした白い光がぶれたのだ

【これは偽物、まがいものだ！！！！！！終われ！！】

そう言ってシアンは椿の形をした白い光ごと影虎を殴ろうとした。

それに対して影虎は・・

〔『～（つばき！！、あぶねぇ！！）～』〕

と大きな腕と背中で椿の光を優しく握り身を呈して守ろうとしたのだ。

その瞬間に焔の巨人はなぐり飛ばされ元の影虎の姿に戻った

その瞬間にオリーブ色の巨人は身震いしながら【勝った・・僕は勝った♪これでマリアは僕の者だ。】

そう言った瞬間にシアンは驚くものを見た。ダメージを受けた影虎の腕の中に白い髪の椿が居たのだ・・

シアンが愛していたマリアだった。マリアは涙を流しながらその場に留まっていた・・・

〔『～（うぐぐ・・・椿・・・無事だったみたいだな・・・・・よかったぜ・・・シアン【あえ・・うそだ・・・僕がマリアを・・・】終わらせるぞ！！異常抑圧（ゼロスキルアブノーマル）・・・）～』〕

〔『～（最大展開！！！）～』〕

そう白い髪の椿を優しく地面に寝かせ影虎はそう大声で言うと額から王冠が消え背中から大量にプリズムのように光を反射し虹色に輝いて見える粒子が噴き出しいつもの翼では無く不気味な生き物の翼の形になった。それはずっと噴き出し続け空間を・・疑似の地球サイズの空間を粒子にって飲み込み始めた。

粒子の実体は、他人の能力を粒子に分解する機能を持った無数のエネルギーであり、他人の能力を飲み込むことでどんどんと増幅する。ただし、能力や魔術以外には効果が無くさらに空気に触れると消滅してしまうほど儚いエネルギーなので今回のような空間でしか使用できない。しかも自分の能力もまる一日使用不可になると言うおまけつき。

ただ、今の状況でこの力は・・・・一番強烈なのだ

【く、くそ!!!ばかな・・・う、うわぁあああああああああ!!!】

そういって巨大なオリーブ色の巨人は影虎に居向かって拳を叩きつけようとしたが影虎に触れようとした瞬間にオリーブ色の巨人は消滅し中身であるシアンが能力も幸運も無しにはるか高みから重力に従い落下しだした

そして、その真下で影虎が拳を構えており落下してくるシアンの腹部に「『〜(人の女に・・・手をだすな!!!!!!!!)〜』」

と言い放ちながらリミッターが完全に外れた馬鹿力で殴ったのだ・・・殴られた瞬間にシアンの内臓は全て潰れ口から夥しいほどの血を吹きぶっ飛んだ。

そして、砂場に倒れそのまま痙攣し動かなくなると・・・・その場で息を引き取った・・

それを限界状態の影虎が確認すると・・・よっしゃ！！と喜んだ。

その瞬間に疑似空間は影虎の粒子に飲み込まれ消滅し元の公園に戻った。

影虎もふと気が抜け両膝をついて４つんばになり呼吸を整え始めた

「はぁ・・・はぁ・・・・ギリで勝てたのかな・・・・・くそ、俺もシアンも・・実力の一京分の一も出せなかった・・・・マジでヤバかった・・・それにしてもまだ寝てやがるよこいつ・・よく寝るね～」

影虎は限界を超えた身体でベンチで何事もなかったように眠る椿をおぶるとフラフラとした足取りでめまいがしながらも何とか意地だけで自宅に戻り椿をソファーに寝かせると・・・

「ふぅ・・・椿がこんなに重く感じるなんてな・・・」

そう言いながら冷蔵庫を開け・・・ビールを２０歳未満なのに飲んでいた時だ・・

ストンと影虎の衣服が床に落ち影虎の手に持たれていたはずの缶が床に落ち床にこぼれたのだ。

そして、影虎の立っていた場所には影虎の姿がなかった・・・・

つづく

絶対強運（影虎と椿とシアン）（後書き）

以上です。決着がつきました。

戦いでも椿に対する思いでも・・シアンに影虎が勝った瞬間でした。

ちなみにシアンの第一モチーフはサンダルフォンで影虎はメタトロンです。

さらに二度目の体の変化の姿は、イメージ的に

シアン＝ン・ダグバ・ゼバ

影虎＝クウガアルティメット

みたいな感じで意識していてください。

ではまた。

敗北の味（失ったもの・・新たな何か…）（前書き）

今回は番外編。

影虎や椿では無いある人のお話です。

フラグ回です。

敗北の味（失ったもの・・新たな何か…）

〔『〜（人の女に・・・手をだすな！！！！！！！！）〜』〕

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【ん・・・ん？あれ？・・・ここは・・・イッツ！！】

急に腹部に痛みを感じた・・・そして、その瞬間に全てを思い出した・・・僕はマリアの奪い合いに敗れたんだ・・・完全にこれ以上とないくらいに・・・止めようとしていたマリアごと僕は攻撃しようとした・・・最低で最悪な負け方だよ・・

と感傷に浸っていたのだが・・・僕が今いる此処は何処だろう？よく見ると服も上着が無くて包帯が巻かれてる・・

「あの〜大丈夫かな？」

【え？・・・ま・・り・あ？・・・・（いや違う）】

「ま、マリア？誰ですか？・・・ていうかどっかで聞いた事ありますねその名前。。」

と目の前の髪の色が黒で目の色が片目だけ赤でもう片方が黒

髪型がちょんまげ風にまとめたサイドポニー

服装は、制服か黄色と白のパーカーに黒のランニングに短パンの少女が一瞬だけマリアに見えたがすぐにそうは思えなくなった・・少しは似ているのだが違うな

【え～君は誰?此処は何処かな?】

「あ、ここはその・・私の学校の女子寮です。」

と僕が聞くと彼女はそう答えた・・・

【なんで僕はここに?】

「それはですね・・・風紀委員(ジャッジメント)の仕事の帰りにゴミ置き場で野垂れ死にかけて大けがをしているお兄さんを見つけたんです。それで何かありそうだったので一応今晩は家でという考えになったんですよ。」

とこの子はそう言うが

【あのね、一人暮らしで男を無闇に泊める物じゃないよ?・・・まぁどうやらお世話になったようだし例は言うけどグ・・・】

「大丈夫ですか?ていうか怪我が酷いんですから動かないでください」

【大丈夫、大丈夫…たとえ死んでも一日もあれば運よく生き返るから・・・(そう言えばこんなきずがまだ残っている事が可笑しい・・・)くそ、影虎の奴、僕の運まで消しやがった・・】

僕がそう言いながら壁にもたれかかると「だめですよ!!キャ」

彼女が僕を抑えようとひっぱったせいで僕は体勢を崩して彼女を押し倒す形で倒れてしまった・・

「あ、・・・えと・・・・その・・／／／

【ほっぺにチュウしただけじゃん♪アメリカで一種のあいさつだよ？・・・あのさきみ・・その羽仕舞わないで大丈夫？】

僕は彼女の頬にキスをすると急に意識が戻り大慌てしていた・・本当に初だねぇ・・

（ていうかなぜ僕はこの子で遊んでいるんだろう・・）そう思った時だ・・

彼女の背中から衣服を破いてたくさんの焔の翼が跳び出て動き回っていたのだ

「えぇえええええまた勝手に！！えいうんしょ・・とまらない！！きゃぁあああああ！！」

ガシャアアンと彼女は必死に翼を引っこめようとしていたが暴走しているのか部屋中を荒らしまわって急に外に飛び出していた・・・

【・・あれってコントロールできてないの？ていうかアレ、間違いなく天使の翼だよな？能力者なのに・・天使の力を？】

僕がそう思いながら窓から彼女を見ると

「うわぁあああきゃぁあああああなんで止まらないの！！！！お、おちる！！！！」

【仕方ない・・・】

彼女が空を蘭飛行していたので僕も背中から翼を出して飛びあがり

何故か迷うことなく急降下していた彼女の翼にオリーブ色に変化した右手から白い波動を放って消してからキャッチした

「はぁはぁ・・・ありがとうございます・・・なんでいつもはコントロールできてるのに・・それにあなたのその羽・・私と同じ？」

【・・君コントロールなんか出来てないよ？ただ、翼が君の感情にそって動いてるだけ・・目を瞑りながら剣を構えてるみたいな感じかな？】

どうみても彼女の翼は不完全も良いところだ・・・そもそもテレズマの使い方がわからないんだろう・・・魔術師でもないみたいだし無理もない・・・ていうかこの子中中、強いね

「あの～降ろして貰えませんか？【はいはい・・・ていうか限界】きゃぁあああごめんあさい！！！」

僕はさすがに無理がたたってまた倒れてしまった。

・・・

【あの近いよ?】

僕がそう言うと彼女はすぐにどいた。パジャマ姿で髪をおろしているので先ほどまでの活発そうな少女の雰囲気が一変してお淑やかな女の子だ

「え～と、そう言えば先ほどから聞かれてましたね私の名前、【まぁね】私の名前は剣菱麻華です。お兄さんの名前は?【・・・(言わなきゃいけないかな?)・・シアン＝クレリアン(本名言っちゃった)】・・・やっぱり外国人なんですね～道理で造形が日本人と違うと思いましたよ。」

っと彼女は俺にそう言ってきた。だから僕の顔を観察してたのか・・ていうか

【君も日本人じゃない感じだよ?どう見ても肌や目がアジア系じゃない「・・・・・・」ごめんね、何か気にしてた?】

「えぇちょっとこの間それ見たいなケースで・・・・あと、あなたなら私の翼の正体って知ってます・・・か?あなたもさっき飛んでましたけど…」

【君の物と僕の翼は全然違う・・・だから正体はわからないがそっくりなものを持っている人間とは戦った事があるよ(つい昨日・・)だから使い勝手は同じだと思うよ・・】

「そうなんですか私と同じような・・・ならもう一つ聞いても良いですか?私のこの翼は…超能力なんですか?私能力者なんですけどこの翼ともう一つの力だけは・・【能力なんかじゃない…それは天

使の翼、能力とはまた違うね・・本来君にあるはずの部位と言うべきかな?君の体の一部なんだよ】私って本当は天使とかそんな落ちですか?【いやいや違うけど君は間違いなく天使の血を継いでいると思うね】私が天使か～」

いきなり浮かれだすのの子にめんどくさくなった僕は早く結果を教えることにした

【その力はやくコントロールしないと暴走するし体の内側からドカンだよ?】

「えぇえええええええええええええええええええええええええええええええ!!!

そう言って僕はまた右手をオリーブ色に変換して白い波動を出し彼女の翼の力を吸い取ろうとすると彼女の体から黒い波動が漏れ出しそれが僕に吸いこまれた・・すると麻華は力が抜けたのかその場に倒れた【!!?黒い波動・・まさか・・・この子は・・・マリアや影虎と遠い血縁関係でもあるのか?同じくらいに強力だ】

なんの運目のめぐりあわせだろう・・・・・【まったく・・・目が話せないほど危ういな・・・】

僕はそう思いながら・・・天上を見て笑い・・・【手当のお礼に・・・力の制御を教えてあげるかな・・】

少しだけ、何かを守りたい気持ちになった・・・

つづく

敗北の味（失ったもの・・新たな何か…）（後書き）

はい、前回負けたシアン君のその後です。

剣菱麻華が助けていてフラグがたちました。麻華は結構、惚れっぽいですがカッコイイが恋だと思っていたのでシアンが本命ですかね~

ではまた。

誘拐事件（事件発生・・・意外なヒトとの共闘）（前書き）

今回は、本編です。

意外な人物が出てきます。

ではどうぞ

誘拐事件（事件発生・・・意外なヒトとの共闘）

「あうあう」

「そっくり~♪」

「・・・・・・」

「これは一体どういう事かしら?とら?いえ影千代ちゃん?」

「言い直さなくていい・・・て、いた!!椿髪引っ張んな「凄いそっくり♪」イテテテ・・・「だうだう」こら俺は男だからおっぱい出ないぞ!!」

「どういう状態か?教えてやる。第一に椿は幼児退行から戻らず俺は諸事情により影千代化＋幼児化が始まって椿の身長辺りで止まったんだよ。ついでにこの赤ん坊は公園で拾った以上。」

そう。俺はシアンとの戦いの後、女になってしまい、加えて背が縮み椿に少し負けているのだ・・それに恐いくらい椿にそっくりで俺自身驚いていて椿は俺で遊んでいるのだ。そして、俺の腕の中に俺の胸に捕まっている赤ん坊（女）がいて俺の髪をひぱった

「あんた、ひろったって何よ?ていうかその子、まだ生まれたばかりでそんなに日が立ってない子じゃないの?早く産婦人科の先生に事情を離して新生児室に連れて行かないと!!「判ってるよ」早く!!」

俺は忍にせかされて産婦人科の先生を見つけ事情を離すと大急ぎで

新生児室のケースの中に赤ん坊を入れて看護師と先生が何やらしていた・・・

そして、俺が忍の病室に戻るとガバッと椿さんがタックルを腹に決めてきて女の体兼椿さん以下の身長のおれはぶっ飛んで壁に背中をぶつけた

「いた・・・{スリスリスリ}なんだよ椿、何を執拗に胸に谷間に顔こすりつけてんだよ・・・」

俺がそう言うと椿は俺の上目づかいで見上げて首をかしげていた・・可愛いなおい！！

「赤ちゃんばかり構って構ってくれない」

と泣き出した・・・もうわけわからん

「あのな、俺は今お前よりも小さい（二？だけ）んだぞ？そんな俺が赤ん坊も俺よりデカイ椿の相手を同時に出来る訳ないだろ？」

「む～」

椿は突如むくれ出した・・・すねられてもね・・ていうかこの前の記憶喪失よりやっかいだ・・

「椿ちゃん、落ちつきなさい・・・ていうより今の椿ちゃんならＲ作戦が決行出来る・・うふふ設けるわよ♪」

っと忍が悪い表情をして急に携帯を取り出して何処か得連絡し始めた

なにをしているのだろうか?そう俺が思っていると急に部屋に金髪の長髪の女の人が入って来て「社長!!奈々があの作戦に協力すると言うのは本当でありますでしょうか?」

と言った。あの作戦?なんだ?

「えぇ今ならいけるわさっそく連れて行ってちょうだい。「あいあいさ!!」よし」

と忍となぜか盛り上がってる二人・・・すると金髪さんが俺と椿を見て・・・固まった

「あの社長?どちらが奈々さんですか!?ていうか片方はどなたですか!?そっくりでしょ!!」

「・・・あぁ黒髪のほうが奈々で桜色の方が「(おい、なんて説明する気だ・・)」その子は奈々の・・・双子の妹・・・・金桜八千代よ」

ややこしくするな!!!!

「まぁ☆始めまして私、桜井コンツェルンファッション雑誌編集長兼モデルスカウト支部部長の兵藤早苗で~す?。奈々の妹さんね・・・う~ んなんていうか奈々とは違うこの釣り目が良いわね♪それにこの髪の色もファンシー?」

「は?え?なに?忍・・・これどういう・・・」

「ふふふ、社長、この妹さんと奈々でコラボならいつもの5倍は売れると思いますよ(*^^)v」

え何どういう状況!?「そっくりさん♪」駄目ってろ椿!!身の危険を感じるぞ

「・・・・・・・・いいわ、やっちゃいましょ／（＾ｏ＾）／」

「貴様ぁあああああああああ!!!

そう兵藤が言った瞬間に俺の服が一瞬で入れ替わった・・・ゴスロリに・・・まさか!!

「その通り私の能力は対物置換。私が触れているものと同じくらいの質量の物を入れ替える事が出来るのよ♪」

おそるべき瞬間着せかえ能力!!「ていうか元に戻せよ俺の服還せ!!」

俺がそう抗議していると横で椿さんは霊装を使って金髪になっていた・・・そして、嬉しそうにゴスロリを着ていた・・・似合いすぎだ・・

「ねぇかげ、可愛い?」

とくるりと回って見せてきた・・・「あぁ可愛いぜ・・・じゃなくてだな!!兵藤さん俺の服還せ!!」

「うん、ただし条件があるわ「条件?」そう、今日だけは撮影に参加してくれない?どうしても撮りたいの!!金桜奈々とその妹金桜八千代　双子の美少女姉妹特集を作りたいの!!」

と胸倉を掴まれ壁に追いやられありえないほど懇願された

「嫌でも俺は女の格好とか絶対にいやだし「確かにパンツまで男物はいてたもんね」てみるなボケ!!」

「かげ・・・嫌?」

と椿が首をかしげながら俺に言って来た・・・「俺は嫌「いや・・なの・・・？」・・・嫌だってね俺本当は男だし・・・それにね・・・その・・・「い・・・な・・・の・・・・・」・・・・・すみませんやらせていただきます・・・＞（＿＿）＜。ｏ○（ＴｏＴ）／~~~（さらば・・・俺のプライド・・）」

椿が瞳に涙をためながらどんどんと泣き顔になって行き俺は折れた

「よし決まりね、さぁ二人ともこち向いて笑って♪」

・・・・・

「本当にそっくりだよな・・」

「二人とも可愛いしどう僕らとそこの喫茶店でお茶でも？」

「美人姉妹って感じだね」

「片方は天然な感じで桜色の髪の子は気が強そうだね俺そう言うこのほうが好きだけど」

と普通の屑よりはましなのだろうが正直言って腹が立つ

「どけ、俺らは用事があるんだよ」「ちょっとだけ時間取れない？なんならメアドだけでも」

「ウザいキモい消えろ・・・これ以上絡むんなら手段を考えるぜ」

俺がそう言うと男たちは驚いて道を開けた椿が横で「おぉ」と感心していた・・・

そして、俺らが歩いている時、後ろの方で「調子に乗りやがって・・」と聞こえ後ろを振り向くと先ほどの男達はもういなかった・・・

（なんだ、一瞬で消えた？・・・まぁいいか・・気にするほどではないな）

グイ

「なに？「アレ食べたい」・・・ケーキバイキングだと・・〜ゴク〜・・俺も食べたい！！」

それからなぜか俺まで欲に負けてケーキを大量に平らげていた。最近は小食のはずの椿まで俺と張り合っていた・・・。その間なぜか俺と椿の皿の量に人だかりが出来ていた

「双子？」「大食いね～」「可愛らしい双子ね」などと一杯言われ恥ずかしくなり椿もたらふく食べたのか満足そうな表情でいた。

「行くか椿。「は～い」おい・・「んふふ♪」／／／／／／」

俺がそう言うと椿は、素直に従って何故か俺の腕に腕を絡らめて嬉しそうにしていた・・

俺は少し照れて頬を掻きながら（そういや中学のころまではこうできたのに俺が背が伸びすぎて出来なくなったんだよなって・・椿言ってたな）

そんなどうでもいい事を思い出しながらトボトボと椿を連れながら病院に帰った。

そして、忍の病室に行くと忍の前に先ほどの赤ん坊が居てカエルの先生がいた・・

「・・・どういう状況？」

俺が首をかしげながら聞くと2人は・・

「君がこの赤ん坊を拾ったんだね？「まぁはい、公園で泣き声が聞こえるなと思って身に行ったら公園のど真ん中で赤ん坊一人だったもんで」この子の親は宇都宮奈央、１８歳。この子は今月生まれた

ばかりの子だよ。シングルマザーでね昔、スキルアウトだったらしい。だが話では自分を更生させてくれた警備員（アンチスキル）の男と恋人が出来てこの皐ちゃんを授かってからぬけたのだが旦那さんがレベル０を止めようと一人を捕まえたんだがその後、闇討ちをされ死亡したんだ。」

「それで？」最近どうも彼女は誰かと揉めていたらしい。恐らくは元仲間のスキルアウトのメンバーか「ＬＥＶＥＬ０狩りの犯人がこの赤ん坊の親に復讐したってことか？」何とも言えないがそう考えるのがベストだろうね」

そうヘブンキャンセラーが写真を見せながらそう言った。黒い髪のショートカットの女だった。

「ふ~んそれで？「あんたなら探せるんじゃないかと思って・・」本来の俺ならできるが今の俺では無理だぜ？いつ戻るのかもわからないし・・「あうあうあ~」・・・まあ探してやらん事もない（畜生、いつもの俺なら放っておいても平気なのに・・人間になっちまってる俺には、断れないな・・）・・」

俺は、籠の中から俺に手を伸ばす赤ん坊を見て心が揺らいだ。

「かわいい赤ちゃんだ~」と椿がはしゃいでいた。

とりあえず置いていくか・・・

「とら何処に行くの？その身体で」

「人捜し。・・・」

俺はそう言って部屋を出てドアを閉めた。すると黄色い雨カッパの子供・・連が居た

「あ、椿おねえ・・・？・・・あれ？なんか違うような・・・でもどう見ても・・・」

「よし、連、俺についてこい。「まさかの影虎兄ちゃん！！何その格好！！」説明するのが面倒だ迷わず俺についてこいさもなければ雨カッパを穴だらけにする。」

「それ脅迫だよ！！僕の能力的にカッパは必需品なのに！！「ならこいよ」このお兄ちゃん椿お姉ちゃんそっくりなのに別な怖さがあるよ・・・」

「遅れてるぞ連~」

俺は連の意見を無視しながら連れて行った。ガキでも高位の能力者一人くらいは戦力に欲しい・・

何せ今から戦うのは高位の能力者の集団・・・・俗に言う腐った優等生ども・・・心当たりは山ほどあるんだ・・・不良集団（スキルアウト）狩りをしていた俺の記憶によれば屑以上の屑どもだ・・・確か最近では一方通行に狩られたと思ったんだがな・・人間という生き物は・・・屑になるために生きてるのかねぇ・・・・

そう思いながら俺は連を連れてある場所に向かった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・「あの影虎・・おねえ「殴ろうか？」兄ちゃん・・・なにがどういう理由でここに来たの？」

連が俺にそう聞いてきた・・・俺らは今、不良集団（スキルアウト）の本拠地に堂々と入って現在囲まれています。

それはもう武装した大量の悪ガキどもに・・・・

すると一人の拳銃を持った女が俺に銃を向けながら

「なんだいあんたら？此処がどういう場所かはすでに分かってんだよね？それともわかってないのかい？ガキをこんなところに連れてきてるくらいだからね」

その瞬間に俺は女の銃を取り上げ女の顎を突き上げるように銃口で押し付けた

「「！？！？！？！？」」

「く！！」

「動くな！！「な！？」」なにも俺は戦いに来たわけじゃない・・情報が欲しいだけだ。「じょ情報だって？」あぁそれさえ話してくれればなにもしない」

「兄ちゃん？大じょぶなの？」

「大丈夫だ、問題ない」

俺が女と仲間にそう言うと連が小さな声で聞いてきたので俺はすぐに応えた。

「ど、どんな情報が欲しいって？」

女が俺に聞いてくるので俺は銃口を突き上げながら

「悪質なレベル０狩りの実行犯の情報が知りたい「!?・・・レベル０狩りの情報?・・なんでそんなのが必要なんだい?」なにレベル０狩りを狩ろうと思ってな。「ていう事はあんた、駒場の所の人間かい?」いいや、そうじゃねぇよ・・ただな、賢い力ある屑が社会のゴミより嫌いなんだよ。」

俺がそう言うと「フハ、ハハハハハ・・つまりは私らよりもそいつらの方が気に喰わないってことか?「あぁそうだ」いいよ、教えてやる・・おい、メモリーチップもってきな」

女がそう言うと部下らしき奴がハイと言ってメモリーを取ってきた。それを女は俺に手渡した俺はそれを携帯に読み込ませ投げ返した。

「じゃ帰るわ・・・悪かったな集会を荒らして」

俺はそう言って立ち去った。追いかけようとした輩がいたので連に突風を起こさせた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・

「で、どこにいくの?」「まぁとりあえずヒントは手に入ったから後は・・・・はぁ・・・嫌な奴に情報をもらうかね・・」

連が後ろからついてきてそ聞いてきたので俺は、携帯電話を開いて

絶対に掛けたくないと思っていた人間に掛けた

プルルルプルルル

『はい、全く珍しいな君が私に通話をするなんて「俺もごめんなんだけどな」それにしても結構かわいらしい姿じゃないか♪「今お前を殺したいよ会長・・」で、なんだ？「レベル０狩りの奴らのアジトが知りたい」あぁそれならね……』

「分かったじゃあな」

俺は情報を聞き出して電話を切った。笑われた・・・あの野郎は何処からでも何でも見たい時に見れる目を持ってるからな・・記憶消去で対抗しないとプライバシーが守れないんだよ

「わかったの？「おう、わかったぜ・・・今から行くか・・連、今回は適当に暴れていいぞ」マジで？」

連の質問に俺は静かに頷いた。そして、目的地の工場地に着いた時俺も腰から拳銃を二丁抜いた・・

そして、工場のドアを開けて入ると３０人くらいの制服を着た優等生タイプの男達がいた

そして、そいつの周りには、８人くらいの女が縛られていた・・・

「なんだ君達」

と優等生が聞いてきた・・「お前らこそここで何やってるんだよ？」

俺がそう聞くと男達はくすくすと笑って「僕たちは悲鳴が聞こえたのでたまたま此処に駆け付けたんだよそしたらこんな状況でね・・だから」

と優等生振りまいて俺に近寄り俺の肩に触れようとした瞬間に俺はあるものが見えた・・・

俺の肩に触れ得ようとしている男の手から電気が出ているのを

ジャキ

「な、なんだい・・・それにそれは・・・」

「おいおい、きたねぇ手で俺に触るなよ・・・いちおう見た目だけでも椿と瓜二つなんでね怪我されるのは虫唾が走る。そっれとこれは本物だ。」

「ち、唯のガキじゃねぇのかよ・・・そんなもの持ってるって事は・・君みたいに可愛い子も屑の一人ってことか・・ハハ」

「あ、そいつさっき繁華街で暴言はいてきた奴じゃん」

「ほんとうだな、やっぱり屑だから言葉遣いが鳴って無かったんだな・・屑には押し置きが必要だな」

「まぁ屑でも見た目が良けりゃ俺らエリートのおもちゃにはちょうどいいな」

「喜べよお譲ちゃん、将来世界を導く俺らが直々にしつけし直してあげるぜ♪」

そう男達は優等生の仮面をはがしてぺちゃくちゃと話し始めた・・・

「てなわけだ・・痛いの始だけだよ!!ぐわぁあああ・・・・・シュゥウウ」

と俺が銃を向けている男が俺に向かって電撃を繰り出そうとしていたが

男の体を強力な電撃が襲い男は黒焦げになって倒れた

そして、その電撃のあるじは俺の後ろで髪を全部逆立たせている連だ・・・どうやらこいつらの言動にブチギレタらしい

「屑屑言いやがってこのゴミどもが!!おまえらに裏の人間の恐さを教えてやるよ!!」

と連がそう言って竜巻に乗りながら数人に襲いかかった男達も高位の能力者らしく風や炎や念力で攻撃していた。さすがは優等生、

(だが、連の能力・・転向を自在に操り使役する能力の多様性は目を見張るものがある。それを行使すればアイツの実力は伸び続ける)

俺がそう思っていると3人くらいの男が拘束移動で俺に向かって走ってきた手元にはスタンガンを持っていた・・(身体強化の能力か?)

俺はぎりぎりで男達の攻撃をかわし続け銃を発砲し続けた。しかし男達の動きが中々早くて銃弾がなかなか当たらない・・

「どうしたんだ？もうへばったのか不良（スキルアウト）集団のゴミ！！」

「うるせぇよ！！」ダンダン

俺の弾丸はまた外れた・・・いつもなら外さないのだが背が小さいと言うのと身体が弱いのが原因だろう撃ったら反動で照準が狂う・・・

すると「ちょこまかと動いて女一人に大勢だと男の風上にも置けねぇな！！」と連がキレて地面を凍らせはじめた。

すると「「「うわぁあああ」」」と氷の上で滑りはじめた。そして、動きがゆっくりとなった瞬間に俺はそいつらの足片膝を銃弾で撃ち抜いた。

しかしその時、シュンと音が聞こえると後ろに優等生らしき男が居たのだ・・・「良いね俺は君みたいなじゃじゃ馬みたいなタイプを服従させるのが大好きなんだ」

と男が言うとその瞬間に一人のスタンガンを持った男が俺の後ろに瞬間移動させられ俺にそれを当てようとしてきた・・

（やば！！！）

思わず目を瞑った。くそしくった・・

しかし、衝撃はこなかった・・・そして、目を開けると

「アガガガッガガガガッガ」

っとスタンガンを持った男は何故か自分が感電しておりその男のスタンガンを・・白い短髪と赤い瞳に中性的な体格。服装はシンプルかつ独特なデザインが特徴の秋は白とグレーの縞柄の長袖Tシャツ、首に黒いチョーカーが巻かれロフストランドクラッチ式の現代的なデザインの杖をついている男・・・がそれを受け止めて電気が逆流して優等生に襲いかかっていたのだ

「なんだァ?この馬鹿丸出しな光景はよォ・・未だに馬鹿の事やってる能力者がいるって聞いて来てみればよォ女ばかり攫ってさらにはガキと女一人にゾロゾロゾロゾロと見っとも無くて涙が出てきちまうなァ・・」

「うるさい貴様誰だ!!俺らはその子供と女がこの女性たちを「いちいち人が来るたびにいわけすンのかよアァアン!!」ぐほ!!!」

一人の警棒を持った男がそう言うと何故かこの場に来た学園都市最強の一方通行はチョーカーのスイッチを入れ現在気絶している男を蹴り飛ばした蹴られた男は弾丸のように5人ほどの男を吹っ飛ばした

「「「まさか・・・お前学園都市の第一位・・・・」」」

「ゆ、許してください!!出来心だったんです!!」

「日々の勉強のストレスでその・・」

「俺らにはまだまだ未来があるんです・・」

と優等生たちは相手が誰か理解して恐れていた

「おいおい、相手を見て態度を変えるのはよォよくねェな・・第一

出来心で人を殺してる時点でてめェらは屑以下だ・・一度闇に落ちた人間が謝って許して貰えるわけねェだろォおがよォォォォ」

そう一方通行が一歩一歩近づこうとすると瞬間移動（テレポーター）が急に移動し赤ん坊の母親出る女の首に注射を突き刺しさらに注射器を大量に手に持ちながら「動くな!!「「あん!?（あァン!?）」」俺らな・・エリートなんだよ・・お前らみたいな屑に・・お前らみたいな屑に・・人生狂わされてたまるか!!」

と逆ギレした馬鹿に俺は迷うことなく拳銃を向けた。すると一方通行も銃を構えながらチョーカーのスイッチに手を当てていた・・

「う、動くなって言ってるだろうが!!この注射には猛毒が入ってるんだ!!」

と大きな声でそういう馬鹿に他の優秀な馬鹿が元気づけられたのがじりじりと迫って来る

俺と一方通行をかこむように迫ってきた

連は連で俺と一方通行の真上に飛んでいた・・・

俺と一方通行は背中合わせになった。

「おい、一方通行「あァンなんだお前?チビの癖に銃を持って暴れてんのかよォ・・（あのガキにも一応持たせとくか?）」お前、体内の毒はベクトル操作で排出できるよな?」

「なんだァ?俺に頼るのか・・俺は別に正義の味方じゃねェお前の協力する義理もなにも」

「良いから黙ってやれ・・・今はこの空間にはあのガキと人質以外には悪党以外いなんだ・・なら黙ってやれよお前の意思を貫けよザコ！！」

「てめェはこれが終わったら殺してやるよ」

「どうぞご勝手にその場合は俺が殺す！！」

そう俺と一方通行が言った瞬間に一方通行はチョーカーのスイッチを入れ音速以上の速度で一気に周りの優等生たちを殴り飛ばし始めた。圧倒的なパワーと最強に相応しい能力でそれを合図乗れもパニックになっている男達を銃で撃ち抜いていたこれはスピード勝負、一瞬の遅れで全てを失う戦い！！

「ぐわ！！」

「ぎゃ」

「ぐほ」

「か、かてるわけない・・・にげなきゃ・・・「ふン」ぐはぁああ」

と一方通行の機動力に俺の射撃そして連の竜巻でほとんどが壊滅的だった

そして、その光景を見てパニックになったテレポーターが注射をながしこもうとした時、一方通行が男の顔面に手を伸ばしていた「ヒィ！？」その瞬間に男はそこから消えたので一方通行は女性に刺さった注射器を抜き取りすぐに男を探した・・・だが俺様には奴が何

処に来るかは見当がついていたのだよ♪

そう、やつは弱い奴を人質にするしか能の無い屑以下のゴミだ！！

ダｇｙゥウウン

「うぎゃ！！あぐううう」

俺はそう思いながら軽やかに腕を動かし俺の真後ろに瞬間移動した

男の腹部に鉛玉をお見舞いした

そして、俺は痛みでもがいている男の頭を踏みつけて

「さぁえらべ・・・此処で風紀委員（ジャッジメント）に捕まって社会的に死ぬか一方通行に殺されるか俺に殺されるかだ」

「おねがいだぁあああたすけてくれぇえええ・・ガ！！」」

男がそう言ったおで俺は男の顔面を思いいきり踏みつぶした

男の鼻は折れて口からはがたくさん転げ落ちた

「さぁえらべ・・・誰に殺されたい？」

「しにたくない・・・うごがぁあああ」

俺はしつこい男の顔面にジャンプして両足で踏みつぶした

男は顔をさえてもがき苦しんでいた

その光景を連も一方通行も当たり前の光景だと普通の表情で見ていた。

「おい、はやく選べ社会的に死ぬか生物学的に死ぬか両方で死ぬかだよ。」

「うぐぐぐ・・・いやだ・・・〜バン〜 アアガアアアア」

めんどくさ、俺がそう思いもう一回蹴ろうとした時、一方通行が男の顎を拳銃で撃ち抜いた

俺は横目で見ると一方通行も恍惚の表情をしていて

もう死にそうなほど苦しんでいる男を杖で殴って

「お前見たなクズに教えてやるよォ後悔って奴はした所で何一つ変わらねェンだ・・・お前のたちの人生はここから地獄までの一方通行だ。」

そう一方通行が言った瞬間に男は気を失った・・・

ジャキジャキ

その瞬間だろう俺と一方通行がお互いに銃を構えたのは・・・

俺は銃二丁を向けて一方通行（アクセラレータ）は、銃を俺に向けチョーカーに手を当てていた

そして、連は能力発動し地面を凍らせていた。

俺らはただ協力して人質を救っただけで仲間でもなくましてやこのままさようならともいかないだろう

「で？お前はなンなンだァ？悪党だと言っていたが裏の人間ってことだな・・それとガキ、怪我したくなきゃ帰るんだな見逃してやる。」

一方通行（アクセラレータ）が俺にそう言い連にそう言った・・2流が・・

「おいおい、なに勝手に俺の貴重な戦力を逃がそうとしてるんだ？偽善のつもりか？俺を殺したいんならさっさとしろ・・・まぁただでは殺されてやらねぇよ・・・俺がお前を食い殺す！！」

「！？そのセリフ・・・お前・・いやまさかな・・ンァ！？」

一方通行（アクセラレータ）は俺の言葉を聞いて一瞬油断した俺はそれを見計らい手持ちの煙幕を地面に投げた

そして、俺はすぐに連に捕まり大空に飛びあがり近くのビルに身を潜めた・・・すると一方通行（アクセラレータ）が背中に竜巻を纏って空を飛んでおり辺りをさがしていたがどうやら見失ったらしい

正直言って影千代（少女）で戦うにのは嫌だ・・・勝つ秘策はいくらでもあるが連を守りながらはしんどいし面倒。

故に戦略的撤退がふさわしい・・・・珍しく勝負捨てちゃったな・・まぁいいか

「連帰るぞ？」

「だったらはやく離して!!胸当てないで／／／／／／／／／／／／／／」

俺はついつい連の口をふさぐために胸を押し当てていたようだ

純情め♪

「安心しろよ例え俺が椿そっくりでも男だから問題な~い」

「あるよ!!僕の気持ちは!!?」

「しらないな・・まぁいいやとりあえずまた空飛んでくれ病院に帰る」

「人の話を「また胸押し付けてやろうかスケベの連君?」仰せのままに」

・・・

それを聞いた瞬間に俺も眠くなり忍の病室のもう一つのベッドの上に眠ってしまった・・・この身体燃費悪い・・・

そう思いながら眠った。・・・・・・そして、次の日、俺は元の体には戻ってはいなかったが男には戻れていた中学2年くらいの時の椿と同じくらいの身長でだが・・・後、髪の色が黒に持っていた（また染めねば・・）そして、「あれ？私は？」と椿さんも洗脳が自然に溶けたらしく元に戻っていて俺の姿を見ると懐かしいなと言って何故かキスをしてきた。

まぁいいか♪そう思っていた次の日、俺と椿は忘れていた事を思い出した・・・なんとネット上にスクープ金桜奈々のゴスロリ写真集発売決定！！さらに期待の新人、奈々の双子の妹の金桜　八千代登場！！双子のモデル姉妹。と大々的に書かれて居たメールが届いた・・・

「影虎・・・なにこれ・・・あぁあああああああああ！！！！！！！！」

椿もどうやら思い出したらしい・・・俺と幼児化した椿はながされるがままこんなおぞましいものを作ってしまったのだ・・・

「つばき・・・おれ・・・ちょっと・・・・生きる気力なくした」

「わたしもだ・・・・・・・」

・・・・・・・

「「帰れ帰ってくれ！！」」

この後、2日間は家の外に出れませんでした。一真達がたづねてきても出れませんでした。

つづく

誘拐事件（事件発生・・・意外なヒトとの共闘）（後書き）

以上です。

やっと一方通行さん登場しました（遅いだろ！！）。

そして、椿さんがやっといつもの椿さんに戻り影虎も元に戻りました。

影虎は基本銃があれば大抵は対応できるので今さらながらずるいな～と思いました。

ではまた。

桜小路椿（お前の名前は椿だ）（前書き）

今回も番外編です。

椿と影虎の過去のお話。

この話の最初の方の初志貫徹の後の話です。

桜小路椿（お前の名前は椿だ）

これは４年前

椿と影虎が初めて会った次の日

まだ椿がクロス＝マリアンヌだった時のお話

・・・

を確認して女は驚いて

ベッドから飛び起きて周りを見渡していた

俺は女が真っ裸なので恥ずかしくなりシーツを放り投げて

「馬鹿!!、隠せよ!!」

っと俺が言うとそいつは冷静に自分の服を探しそれを着た

ていうかもっと恥ずかしがるのが普通だろなんだこいつ・・・てい

うかさっきからキョロキョロして周りを見てるな

そう思っているとガチャっとドアを開けて忍が入ってきた

その瞬間に女は忍に飛びかかろうとしていたので俺はとりあえず女

の服を掴んだ

すると女は空中で止められ地面に落ちた

そして、花を床にぶつけたのかいたがっていた

「こら!!とら!!女の子になんてことするの!!」

っと俺が怒られたんだが・・・俺って良い事したよね?

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「なぁ忍・・・お前あの女に何かしたのか？」

俺が気になったのでそう聞くと

「えぇ・・・ただ、昨日、いつも猫と一緒に遊びにって迷子になるから付けておいた発信器であんたを見つけた時は驚いたわよ・・・あの女の子があんたのことを必死で守ってたのよ？ちょっと手荒なことして気を失わせたけど・・・それとあの子かなり大きな怪我してて衰弱してたから私の家でだけど治療と検査させてもらったんだけど・・あの子体中痣だらけで骨も弱くて内臓機能も低下して手正直言って生きてるのがキセキな位、衰弱してるの・・それに・・あの子、いろんな種類の薬物依存症で中毒なのよ」

そう忍が申し訳なさそうに俺に言ってきた

俺は驚きから飛び上がりそうになったアイツ薬物なんかやってたの!?

「それでねあの子の持ってた薬物全部取り上げたら物凄く怒ってね・・」

「それで禁断症状が出始めてるのかあの女？」

俺がそう聞くと

「さすがにまだだけど・・・いずれは来るわね・・あの子・・相当長いことやってるわよ・・それだけ薬に逃げなきゃやってられなかったんでしょうね・・」

そう忍は少し涙を流しながらそう言った

忍は俺が研究所を壊滅させ自由を楽しんでいた時に俺を保護してくれた大人だ・・良い奴なんだが変態チックな女だ・・・

「で?どうするの?あの女・・・さっきからずっと俺とあんたの事見てるけど・・」

俺はそう言いながら女にトーストを渡すと女は警戒しながらそれを取って

俺と後ろで笑いながら手を振っている忍を睨んで少しだけ齧るとすぐに真っ青になって吐きだした

「げほごほ・・・」

「きたないな・・・食べられないんならそう言えよ・・息なり吐くとかそれでも女かよ」

っと俺が言うと女はすごい目つきで俺の胸倉を掴んで

「覚えとけよガキ・・俺は女じゃない!!」

っと思いっきり宣告されたのだが俺はとりあえず頭を撫でて

「可哀想にまだ眠たいんだな」

っと言うと女は怒って俺を放り投げた!?

投げられた俺は壁にぶつかりそうになって慌てて壁ジャンプをし女の頭に頭突きを食らわせ意識を狩り取った

そして、気を失った女の足を掴んで俺が引きずると

「とら・・その子女の子なのよ?頭突きは無いんじゃない?」

っと忍がそう言いながら女をおぶった

「とりあえず飯が食えないくらい衰弱してるから病院に連れて行こうぜ?」

「うん、初めからそのつもりよ・・・病院の機材でもう一度検査したいしね♪」

っと忍が笑っていたがやはりかなり辛そうな表情をしていた

・・・

「は、はなせ!!なんだここは?何故俺はこんなところに居るんだ!?」

っとどうやら記憶が跳んでいるらしい・・・

「あの後お前が俺に喧嘩売って来たから頭突きして気でつさせたんだよ・・それで検査のために病院に連れて来たんだよタコ」

俺がそう言うと女はどういうこと?と周りを見渡しながら警戒していた

(この女やっぱり怖いんだな・・周りの者が全て・・)

俺はそう思うと椅子の上に立って頭を撫でてやった

「な、なにしやがる!!」

っと女が俺に噛みつくように言ってくるので俺は

「なんだよ昨日は泣きながら幸せになりたいよ~って泣いてた女が今日はずいぶんと男勝りだな」

「だまれ!!俺は女じゃない!!二度と女扱いするな!!」

っと胸倉を掴んできたので

「やんのか泣き虫女!!」

っと俺も小さな手で胸倉を掴んで怒鳴った

すると忍が間に入って来て俺は抱き上げられ抵抗できなくなった（小柄は損だぜ・・・）

「・・・とら、だから女の子に暴力は「俺は女じゃない！！」・・・ややこしいな・・あなた名前は？」

っと忍が女に聞いたそういや、こいつの名前って・・昨日聞いた気もするな・・

「・・・クロス」

っと俯きながら言ったすると忍は

「嘘よね」

「本当だ・・・」

「いいえ違うと思うわ・・・あなたみたいな可愛い女の子にそんな格好良い名前ありえない」

っと相手の名前を否定して自信満々な忍に俺は引いた

「さぁ本名を言いなさい」

っと忍がおんなの肩を掴んで拘束しそう言うと女は必死に抜け出そうとしていたが無駄に怪力な忍に勝てるはずは無いのだ

するとしばらく抵抗を続けた女は涙目になって

「・・・・マリア・・・」

そういうと忍急に涙を流しながらごめんねっと言って部屋を出て行った

「変な奴・・で、お前ってマリアって名前なんだ「・・・」うわ今度はシカトかよ・・でもお前って全然マリアって感じじゃないよな「・・・」一人称俺だし「・・う」男だって言い張るし「うう・・」それにいきなり裸で寝てるし「ぐ・・」ていうか女らしさゼロだし」

俺がそう慰めて?いると俺の横でマリアさんは、泣きそうな子をして俺を睨んでいた

(なぜ?女扱いしないでって言ったから・・・男っぽいよと褒めてるのに!?)

「・・・それに・・・う~ん「黙れ!!うるさいしゃべるな!!病院で騒ぐな」・・お前の方が声でけぇっての!!其れに騒いでるのは一方的にお前だ!!なんだよ女の子って言われたら怒って男扱いしたらなくって・・一体どうしたいわけ?」

「・・・・それは・・・俺にも・・・俺にも・・・わかんないんだよ!!・・・俺だって・・・」

俺がそう怒鳴るとマリアは急に泣き出した

コイツやっぱり泣くときは女の子なんだと思う・・弱弱しくて触ったただけで崩れてしまいそうだなっと思った。

(コイツの過去を少しだけ見れたけど・・・やっぱり暗いな・・・ていうか俺幸せにするって言ったけど何すればいいの?気軽に言っ

たけど何すれば幸せってことになるの?俺はカップめん食べてる時が一番幸せだけど・・女ってどうなの?)

などと必死に試行錯誤していると忍が帰って来て泣かせ茶駄目だって言ったでしょ!!っと拳骨を食らわされた・・・俺はこの恨みを忘れない・・永遠に・・

・・・

その瞬間に忍は驚いて後ろに飛びの居てマリアは病室から出ようとしていた

それを眺めていた俺は忍に大声で「止めなさい！！」と言われ

俺はあわてて死世界樹（キルドラシル）で入り口をふさぎ弦でマリアを縛り付けるとアイツは物凄く暴れ出した

そして、その後マリアは、病室に隔離された

・・・

げだそうとしたので俺は女の服を掴んでそのまま放り投げるとドアを閉めてやった

するとマイクから忍が「何する気!?」っとどなり声が聞こえてその瞬間にマリアが俺に飛びかかってきた

俺はそれをもちろん受け止められずにたおれマリアに殴られたマウントを取られずっと殴られていた

マリアの奴は涙を流しながら顔色も最悪で苦しいから暴れているだけ見たいだった

そして、しばらくすると俺を殴るのをやめて壁にもたれながら苦しんでいた

俺はそれを見ていると何故か辛かった

痛いとかはほとんどなかったがこの目の前にいる女の子が苦しんでいるのを見るとどうして良いかわからなくて気が付いたら

俺は女の膝にまたがって抱きしめていた

俺の方が小さいから抱っこされ似言ってる子状態だけど抱きしめた

「え?・・・えぐ・・・うぐ・・」

っと苦しんでいる女は泣きながら俺を抱きしめてきた

それはもう痛いくらいに抱きしめてきて窒息するんじゃないか？と思うくらいに圧迫され苦しかった

でも、俺は常にマリアの頭を撫で続け苦しみ続けているマリアにがんばれっと言い続けた

そして、そんなことを続けて４週間経つとマリアはあまり騒がなくなった

それでも俺がはなれると急に心細くなるのか泣きだすのでずっとそばにいてやった

そして、寝静まると俺はいつも病室を出た。

すると忍が飯を作ってくれていて俺専用の高い椅子に座るとそれを食べていた

「とら・・あの子を支えてくれてありがとう・・あの子ももう禁断症状は克服してるわ・・でもね・・出来ればあの子が唯一信頼してるあなたが「俺アイツと一緒に暮らす」え？・・一緒に暮らす？「うん」・・そう・・ならあの子のこと・・お願い・・一度、薬物に走った子は辛い事があるとまた薬物に手を出してしまう子が多いのよ・・だからお願いね？」

「うん、でも俺どこに住もうかな・・」

っと俺は悩んでいた・・正直って俺は忍の家に住んで居たくない

忍はやな奴じゃないけど一緒に居たい相手じゃない

「なら、二人に私が家買ってあげようか？」

っと忍が言ってきた

コイツ物凄い金持ちなんだよな・・・でもな・・

「・・・う～ん、金は俺が出すからあんた名義でマンションの一室かっといて」

俺がそう言うと忍は了解と言ってパソコンを開いて探していた

俺はその間も飯を食べていた

それからしばらくするととなりの病室で泣き声が聞こえたので俺は走った

するとマリアが大泣きしながら「チビどこ～！！？」っと探していたので俺はすぐに駆け寄った

俺は名乗るタイミングを失って何故かマリアにチビという愛称をつけられてしまった・・くそ

そして俺が現れるとマリアは一目散に俺を抱きしめてきた

（いい加減慣れてきたが未だにこの女は震えてるんだな・・）

そう思いながら俺より体の大きい女を慰めながら眠るまで横にいてやった

途中で目が覚めると俺が居なくて人のぬくもりが無くて暗い部屋に

一人だから怖くなって泣いていたって

コイツやっぱり精神面がものすごく貧弱だ・・身体もだけど心も酷使し続けてすり減ってもう限界だったんだな・・・

「すぅ・・・・・・すぅ・・・・・・・・」

「・・・・・・前途多難だな・・」

そう思いながら俺もその日はそこで寝た

物凄く懐かしい感じがした・・俺も珍しくその日はマリアの腕の中で熟睡していた。

そして、次の日、マリアと俺は忍に連れられて大きなマンションに連れて行かれた

マリアは相変わらず俺から離れる気は無いらしい

そして、椅子に座らされると何故か俺はマリアの膝に座らされて不満で暴れたがその後、忍にマリアを落ち着かせるためにそうしてあげなさいと言われ承諾した

すると忍が真剣な表情で

「あのねマリアちゃん?「・・・・・」・・あなたは追われてる身なのよね?「・・・・〜コクリ〜」それにあなたは学園都市に不正な集団で入ってきたのよね?「あぁ」だからあなたには選択地が2つある「2つ?」えぇ学園都市を出てまた追われるかあなたが抱いてるその子と一緒にいるかよ」

忍が言うと女は、驚いた顔をしながら俯いて悩みだした。

そして、「・・・俺は・・こいつといる・・」

そうマリアが言うと忍は、そう　と言い俺の方を見て

「その子の面倒見てあげるのよとら?「え?なんで?」幸せにしてあげるんでしょ?大抵の女の子は好きな人と一緒にいるのが幸せなのよ」

っと言って出て行った

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

忍が帰ってから会話が成り立たなかった

得に話すことも無いのでそのまま気まずい時間が過ぎた

「あのさ・・・腹すかねぇ?」

っと初めに口を開いたのはマリアだった

そう言われたので俺は、台所をあさると忍は俺の大好物のカップ麺をよういしていたのでそれに湯を入れていると

「お前そんなのばかり食べてるのか?」

っとマリアが言ってきた

「マリアよりましだろ？お前なんて何も食べて無いんだからな」

俺がそう言うとマリアは少し怒っていた

「マリアって呼ぶな「はぁ？なんで？」俺はその名前が死ぬほど嫌いだ次呼んだら殺す」

名前呼ぶだけで殺すとか失敬な・・・

「ならなんて呼べばいいんだ？」

「・・・・・・・・・・」

俺が聞くと女は黙りだした・・

「・・・・・・お前が決めろよ・・正し女っぽくない名前でだ。」

そう言われたので俺は考えた・・男でもん名でも普通の名前・・・

「じゃ・・・・・・椿で・・お前の名は椿だ」

「椿？花のか？」

俺がそう言うと女は少し嫌そうにしていたが否定ではないらしい

「男でも椿っているからさ・・・お前みたいに中途半端な奴でも大丈夫だろ？」

俺がそう言うと女はクスリと笑い

「それでいいよ・・俺は過去を捨てる・・マリアもクロスも全部・・・・俺は今から椿だ」

そう儚く笑っていた。

・・・・

そして俺がちょっと料理をつまもうとしたら椿に手をはたかれて

「いって!?何すんだよ!?」

「お前は喰わなくていい１０００倍そっちの方がいいんだろ?」

「あらら・・・・とら・・・怒らしちゃったのね?」

っと椿は俺には一切くれなくて忍が俺にくれようとしたら本気で怒っていた

「やな奴「・・・」性格悪いんだよ「ちょっととら?」第一女じゃないとか言って一番女々しの自分じゃん。」

俺がそう言いながら食べていると椿がいきなり飛びかかってきた

俺は驚いて後ろに倒れそのまま椿と掴みあったまま転げ回った

そして俺たちはとっくみあいの喧嘩をしていた

そして、殴り合ったりして最終的に椿が負けておお泣きしだした

すると忍に俺は殴られて椿が泣きやむまでずっとお説教された

椿はずるいと思ういつもは強がって偉そうなくせに負けると女の子になって弱弱しくなるんだもんな

それでいつも怒られるのは俺・・・

「・・・・・椿なんて大嫌いだ・・」

「う、・・・うえぇえええええん！！！」

っと泣きやみかけていた椿がいきなり大声でまた泣きだした。

「本当にあんたって子は！！」

っと忍に拳骨された

「いたい・・・なんで俺ばっかり」

っとそれからの毎日、ずっと椿と喧嘩して怒鳴り合ってほとんど俺が泣かして偶に俺が泣かされてなどを繰り返しながら半年近く生活していた

男ぽい所もあるんだけど椿はやっぱり女子なんだなと思う事が多々あった仕草とか表情を見てると恥ずかしくなってみれないことが多くなって来た

そして、一度俺はクリスとの戦いで椿を殺し『異世界樹（ユグドラシル）』を手に入れアイツを生き返らせた

そして、俺はその間、椿と接しているうちに俺はあいつの事が好きになっていた。

そして、俺は椿に恋心を抱きながら少し背も伸び中学に上がった

つづく

桜小路椿（お前の名前は椿だ）（後書き）

以上です。

昔は影虎と椿は仲が悪かったです。

そこからどんどんとお互いがお互いを気にし始め今に至ったみたいな話ですね。

ではまた来週、感想お待ちしています。

略奪の王（能力を奪われた6人）（前書き）

今回はなぜか渡さんの所に投稿されたキャラが出てきます。

頼まれました。

では、どうぞ

略奪の王（能力を奪われた6人）

ここは、神生徒会の集会場所。

そこには影虎やシアンを含めレベル6が全員集合していた。

理由は、カイリが携帯の捜査を間違えたことからはじまる・・・・・・

「「【「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・何で呼ばれたの？」」」】」」

「・・・特に理由は無いけど言うなら携帯電話という人類の進歩の形の最前線はいかほどのものかといじくりまわしていた時ふとアクシデントがおきたんだ・・まずは地獄から魔王が来てドラゴンに変身したからそれを倒したら宝石が手に入ってその宝石に中にお姫様が居て・・その呪いを解くために・・・以下略で世界は一時的に平和になったわけだよ。」

【あのさ、携帯の操作ミスだったんだね？「まぁそう言うことになるかな・・・」・・まぁ後半お話もノンフィクションなんだろうけどね】

「「「「まぁよくあることだ（です）」」」」

シアンの声にレベル6全員が賛同した。皆にたようなことを体験した事があるのだ。

ついでに本当にノンフィクションです。

「まぁそれで一度呼んでやっぱり間違いでしたと言うのは・・・良い憎くてな
」

そうチンチクリンの会長が恥ずかしそうに言おうとしていた時

「おおっと動くなよ」

と急に服装が、学校指定の夏制服という時期に合わない服を着た背の高い男が現れたのだ

「「「「「「？」」」」」」

この瞬間にレベル６の全員が首をかしげた・・・

「貴様達の強大な能力、俺の目的のために狩らせて貰う！！」

その瞬間だろうその隙を睨んで急に白髪の白い服を着た男が全員の額に手を置いた。そして、光った瞬間にもうその場にいなかった

「「「「「？」」」」」

とカイリを抜いた５人は首をかしげていて

カイリに関しては頭を押さえていて

パチンとまず初めにレベル６で最年長でいちばん大人な陽が指を弾いた・・

【「「「「・・・・・・・・・?」」」」】

「おかしいですね・・時間がうんともすんともしませんね」

そう陽が言うと各々が能力を使おうとしたが使えない事に気が付いた・・

【「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・能力が使えない!!!!!!!!!!」」」」】

とカイリを抜いた全員が大声を出した・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いくら私たちの力を奪おうと・・・あの男は決して私たちにはなれないのに・・・それどころからアイツは私たちをこの程度につなぎ止めておく鎖をはずしてしまった・・・さてどうなる事やら・・」

「お姉ちゃん・・名に一人で話してるんですか?」

「おや、華音、なんでもないさただ、神が一度、世界を海に沈めた理由がわかった気がしてね・・・ごはんいしようか♪」

「はい、それにしてもお姉ちゃんなんだか・・・人っぽくなりましたね?」

「ちょっと失礼だよ。かのん?」

「ごめんなさい」

ある意味、人間と怪物の姉妹の中は今日も好調であった。

・・・

「まったく私を置いて出かけるなんて・・・最近影虎に迷惑ばっかり掛けてるから私といるの疲れたのかな?・・・そんなことは無いあっていいはずがない・・・はぁ・・・それにしてもいつ言おうかな～そろそろお腹が出てきちゃうよ～・・本当にごめんね・・こんな肝心な時に勇気が出ない私がお母さんで・・・はぁ～」

そう悩みながら味噌汁をすすっていると

シュンと影虎が全力疾走で開いた窓から家に入ってきたのだ・・翼も出さずに・・・

「よし、世界１０周にコンマ一秒からなかった!!お、椿うまそうなの喰ってるじゃん・・俺にもちょうだい」

と帰ってきた影虎はそう言ったのだ。椿はいきなりの高速移動で驚いていた・・そして、味噌汁を吐いて吹いていた

「ごほごほ・・いきなり窓から帰って来る・・・な・・・・・あれ?影虎だよな?」

椿は口をタオルで拭きながら影虎を見て疑問に思いぺたぺたと影虎を触り始めた

そして首をかしげながら可笑しな感覚に違和感を覚えていた

「俺だよもしかして気付いちゃった?俺今は『異世界樹(ユグドラシル)』とか能力全般使えないんだよね・・・だからこそ今の俺は力が漲って漲ってめちゃくちゃ気分が良いんだ♪そうだ、今から遊園地にでもデートに行くか?」

とご機嫌の影虎が椿にそう言ったので椿は素直にうれしいので喜んでいた。

実際に今の影虎は能力をロストしたおかげで圧倒的に強く進化していた。

他のレベル6も同じような変化が怒っていた・・レベル6にとって本来はみんなが縋る能力であっても蛇足なのだそれどころか蛇足にさらにつけられた足かせのように全員が感じていた。それをあろうことか取り除いてくれる優しい人がいたのだから素晴らしいものである。

「行く♪行く♪行く♪ぜひ行きたい！！まってろ今すぐ準備してくる！！」

と椿は大はしゃぎで自室に走って行った。それを見て影虎はハハと笑いながら勝手に朝食を食べていた。

ダダダダダッと椿が走って来た・・・その姿を見た時、影虎は頬を赤らめていた

椿の服装は胸元が少し開き椿の胸を強調をするも何処か清楚さを引き出す白のフリルのついた服と濃い藍色のミニスカートに可愛らしい帽子をかぶり手に小さなバッグが握られていた。ミニスカートから見える白い肌、椿のふとももに向けていた影虎はすぐに視線を戻した。目の前にいる少女は本当に変化が激しい・・そう思わずにはいられなかった。

・・・・・・・・・・・・・

・・・

で人間の仲間と集まってブレイクダンスを踊っていた。

「おい、もう一曲だ」

「まだやるのかよ・・あついねぇ～」

何故か趣味がダンスという暮日らしいすごし方なのである。ちなみに彼は能力のせいで自分の作った空間に迷子になる事が多々あったので今は気分が良いのだ。

ちなみにこいつが踊っている場所は遊園地。

・・・

と椿が笑顔で乗っているのは学園都市最新鋭の最速のジェットコースターである

椿が依然ＣＭで宣伝されているのを見て乗りたかったらしい

「面白かったな♪」

「まぁなでも俺の足より遅いけどな」

「お前はどれだけ速いんだ！？」

「光の何十倍くらい。それが今までで試した速度・・まぁまだまだいけるけどさすがにそれ以上早くはしっても仕方ない。」

と椿の質問に影虎はそう答えた・・横で手をつないでくる椿に半ばテレながら接していた。

その２人の甘々の世界観を見て砂糖を吐きかけたものがいてその姿をねたんだ奴も存在した

「今日の晩御飯何が良い？」

「・・・さっき昼飯食べたばかりだからな・・・う～ん、天ぷら？それより喉渇いたのでジュース買ってくる・・なにが良い？」

「コーラ」

「判ったよ。行ってくる」

と影虎が答えた時、ドスンと椿がガラの悪い男にぶつかり尻もちをついた

「いたた・・あ、ごめんなさい」

とぶつかったのは自分が悪いと思い椿があやまると男は椿の胸倉を掴んで

「おい、お前のせいで俺の服汚れたじゃん・・謝ってすむと思ってんの？」

「あの、その・・・」

「ならお詫びに俺らに今日一日付き合えよ」

「いや、あのちょっと！！」

と男が椿の手を掴んで引っ張ろうとした時、男の顔面に缶がぶつかり男の体は地面に倒れた

カランカラン・・ゴロゴロ

「たく、人がちょっと目を離したすきに絡まれてるんじゃねぇよ椿、ていうかどんだけ絡まれてるんだ？」

そう影虎が言った瞬間には、影虎と椿は６人くらいに囲まれていた

影虎は内心（あ～あ、可哀想に・・）と思っていたその時だ

ある一人の男がリーダーらしき風格を持って来た・・

「お前かよリンドに怪我させた・・・・の・・・は?」

「・・・いや・・・その・・・・・・・何でお前が・・「こっちのセリフだボケ!!」なんだとクソガキ!!」

と遊園地に仲間と来ていたストリートダンサーの日暮が影虎の前に現れお互いに引いていた者の犬猿のなかなのですぐに掴みあった。それを見て周りの奴らが茶化したが二人からこぶしは出なかった

お互いに喧嘩では勝負がつかないと理解していたからである。

しかし、ムカつく相手を見逃すのも癪に障ったのだ

「おい、クレちゃんどうしたんだよ殴らないのかよ?」

と日暮の仲間が日暮にそう聞くと日暮は目を瞑りながら悩んでいた・・以前殴り合った時1週間殴りあっても勝負がつかなかったんだ

その時、日暮らしは自分が絶対に勝てる勝負を思いついた

「おい、影虎・・・殴り合いはこう言う公衆の面前では相応しくない「お前からそんな全うな言葉が聞けるとは世も末だな」調子に乗るな・・・此処はちょうど俺らの縄張りなんだ・・だから俺たちなりの戦いで決着つけようぜ?」

「あん?・・・・なにで勝負するって?」

「ハハハ、じゃダンスバトルでもするか?「はぁ!!?」なんだよまさかお前、ダンスとか無理?そういえば音痴だったもんな、リズ

ム感が無いのか？」

と日暮が影虎を馬鹿にすると椿がキレそうになっていた

しかし、影虎が前に出て

「いいぜ、もし俺が勝ったらお前、俺に土下座して生まれてきてすみませんて言えよ？」

と影虎が邪悪過ぎて椿も引くような顔で言うと日暮も皆が引くほどどす黒い表情で影虎に「じゃ俺が勝ったらお前の連れてるガキ一日借りるぜ何をされてても文句言うなよ？」

そう日暮が言った瞬間に勝負が始まった

・・・

表的なもののシックスステップ、ツーステップなどをしながら背中や肩で回転するウィンドミル、頭で回るヘッドスピ。基本的には脚を地面につけることのないムーブ、スワイプスなど脚を地面につける技も盛り込み、うつ伏せで体を浮かし手のひらで回転するクリケットや開脚旋回のトーマスフレアなど一般にブレイクダンスと言うと大抵このパワームーブを思い浮かべるあろう技を繰り出し、連続技を披露していた。そして、遊園地の観客も日暮の仲間や椿も二人の熱狂的なダンスで盛り上がっていた。

ワァ～ワァ～

ヘッドスタンド、ジョーダンタートル、ダウンロック、ヘッドスピン、シックスステップ、アローバック、ウィンドミル、エアベイビー、ハンドスタンド・プッシュアップ
と言った技を影虎も日暮も繰り出しお互いに威嚇しながら完璧に踊っていた

（あの音痴の野郎が此処までブレイクダンスがうまいだと?）

と日暮が影虎の意外な歳のに驚いていて

（かかったな・・暮日!!俺様は歌以外は大の得意なのだよ・・ちなみに椿の方がダンスは上手いけどな・・）

そう影虎が思った瞬間に曲の最後の方が来たので

（（なら大技でとどめだ!!））

そう日暮は、いきなり斜めの逆立ちの状態から、手で跳ねて空中で一回転する大技。足をつけないでスワイプスを回ったような技。難易度が高く、危険度もかなり高い。エアートラックスを披露した

その瞬間に観客が湧いて勝ったと日暮が思った瞬間に影虎が「やるな・・だがまだまだだ!!」

と影虎は片手だけで行うエルボーエアートラックスという超大技ワンハンドエルボーエアーを１０回転という世界記録を超える技を披露し

日暮は、両手を地面につき足を曲げながら体を浮かし、片膝を肘に当ててバランスをとって止まる技。右足に左ひじ、左足に右ひじなど足と腕が交差するバージョンもあるエアーベイビーで停止し影虎は思い切り肩を入れて頭を前に出して静止する逆立ち。股を開きお尻を後ろに突き出し、上体を腕の前に出してくの字で止まるハローバックで終わった。

「「ハァ・・ハァ・・・・」」

その瞬間に周りから凄い拍手が来て二人は立ち上がり汗を拭きながら審判の判定を待った。

日暮も少し疲れていて影虎も汗をかいていて髪が張り付いていた

椿がカバンからハンカチを出してそれで影虎の汗を吹いていた。

「で、審判、どっちが上だ?」

日暮がそうジャッジに聞くとジャッジは影虎の腕を掴んで上げた

それは影虎の勝利だということだった。お互いに世界大会決勝レベルの戦いを繰り広げたのでだれしもが勝敗を気にしていなかった

「くそ！！」

「とりあえず俺様の勝ちださぁその醜い顔を早く地べたに擦りつけて生まれてきた事を謝罪しろ」

そう影虎が言った瞬間に椿が「そこまでしなくても・・」

と言った。すると影虎は少し悩んでいた。・・・結論は「まぁいいか、暮日、今回は俺様の寛大な精神な精神で許してやる「てめぇ」なんだそんなに土下座したかったのか？いやならササッと何処か得行け」

そう影虎が言った瞬間に暮日は罰が悪そうにしながら仲間と一緒に何処か得行った

その時後ろから一真と天野が来て

「影虎・・・最近騒ぎの中心にお前が居るのはなぜなんだ？」

「椿に影虎君、奇遇だね。それと影虎君てブレイクダンスも踊れたんだね」

と一真が疑問で天野が感想を言っていたどうやらデートの途中に自分たちを見つけたのだ。

「まぁな、昔、椿と競っててダンスなら大抵踊れるよ。」

そう影虎が言った・・・その後に影虎が一真と天野のデートを邪魔しちゃ悪いと言って何処へ行こうとした時、「あ」と隣で間抜けな

声がして、その方向を影虎が振り向くとそこには・・肩まである長い髪で整った顔立ちの以前まで病院に入院していた一真と天野の親友の影峰翔也とその横に・・・翠色のツインテールの髪に、紅色の瞳。背中の部分に大きなリボンの着いた、これまた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており、そこに淡い紅色の　桜の花の形をした独特の日傘を差し　ている。
ちなみに日傘と本はそれぞれ持たず　に浮いている。独特すぎる人物・・・天音　廻黎が翔也と手をつないでいたのだ。そして影虎の姿を見つけると逃げようとしたが翔也に手を掴まれて居て動けなかった

その光景を見ていた一真と天野は内心心の中で（・・・ロリコン二人がそろった!!）と焦っていて椿に関しては翔也に対して誰?と思いながら自身と同じくらいの身長のゴスロリ少女の顔を眺めながら何か嫌な予感がすると思っていた。

廻黎も廻黎で始めて拝んだ椿の存在から何かを感じ取って警戒し翔也の後ろに隠れた

椿も同タイミングで影虎の後ろに隠れ・・・

「「私、コイツ嫌いだ」」

と2人とも呟いたのだ。初対面で第一人称でお互いにそりが合わない相手だと認識できたある意味超人的な直観を持つ二人の少女・・は睨みあっていた

その様子を一応病院での顔見知りである翔也と影虎はお互いに苦笑いしながら何処か意気投合していて

「そういえば、この前は聞きそびれちゃったけどその子は・・・詳しくは誰なの?」

と天野が聞くと翔也は、「あぁこの前はちょっとしか会えなかったもんな・・」と説明しようと翔也がした時翔也も詳しくは知らなかった事に気付きどうしようかと悩んでいる時、

横で影虎が「天音　廻黎・・・すずみ　華音の姉だよ・・「「「「えぇ!!」」」「華音って誰?」」」

と影虎の一言に椿と一真と天野は驚き翔也は誰?と首をかしげ

廻黎に関しては、少し秘密をばらされたことに怒っていた・・・

そして、今度は翔也が椿に誰?と聞きそれを天野と一真が必死に説明していた。その後、翔也がよろしくなと椿の肩をたたいた瞬間だ・・椿から炎が立ち上り翔也が火傷して走りまわっていた

そんな時、廻黎に影虎は耳打ちするように「安心しろお前の正体はバラさねぇよ・・ただ、どういうことだ?今日一日だけで暮日と会長に遊園地で会うなんておかしくないか?」

と影虎が言うと廻黎にも同じような違和感は感じていた・・

「確かにそうかもしれない・・もしかすれば遊園地で何かが起こるのかもね・・古代の石造都市ルルイエの時みたいに何かが起こる前兆なのかな?そういえば今言ってて思い出したがそろそろじゃないのか?ルルイエが再び浮上するの・・」

天音　廻黎がそう影虎に耳打ちすると影虎も一瞬計算しだし確認し

た・・

「確かに・・・まぁそれはまた今度・・・なぁ会長・・あれって・・・」

そう影虎が指を刺しながら言うとその指の先には、清潔感あふれる純白の制服を着た園崎陽とその横にいつもの暗い表情がすっ飛んでいる黒の静けさ物語る制服を着た月明　灯が二人して歩いていたのだ

「以外だね・・」

「あぁまさかああなるとは」

と影虎と会長は意外な事実を目撃したと焦っていると・・

「コラ影虎!!そんな女となにコソコソ話てるんだ!!」

と椿が影虎の腕を掴んで引きはがした・・影虎を取られた気分になって不機嫌らしい

本来なら影虎は椿にそんな感情を抱かせるへまはしない、がしかし、現在、その身に感じる謎の危機感から行動に一貫性が無くなっているのだ。

ちなみに陽は遊園地側から招待されて居たのを思い出しそこに向かい、灯は、ぐっすり眠った時に湯んで遊園地で遊ぶ夢を見たのでたまたまきたらしい。そこでたまたま鉢合わせをして一緒に行動している。

「悪い悪い・・・「そういえば、なんで影虎はそんなにそいつと

親しそうなんだ？」別に親しくは無いよ・・むしろ嫌いだし」

椿の質問に影虎は言いにくそうにそう言った。その横で翔也も天音
廻黎にどういう関係？と聞いていて

一真と天野はどういう事かわからず絶句していた。

「「どういう関係！！！（だ？）」」

と翔也はなぜここまで気になるかわからないがすごくむかむかしながら聞き椿は危機感いっぱいでそう聞いた。

それに対してレベル６であり人間を見下している廻黎とレベル６であり生き死にを自由に扱える影虎は

「「・・・４年前・・ルルイエの遺跡で知り合いました・・・それだけです・・」」

と正直にそう言ったその言葉を聞いた瞬間に全員が（（（（なにルルイエって！？））））と思っていた・・

・・・

能力・・・ぐぅうう」

と内側から湧き出る力にくるしんでいるカインの横でパソコンをいじくっているパジャマ姿で自分の身長より長いのではないかと思うほど黒く長い髪に真っ白な肌をした小学生ぐらいの少女がカインを見下ろしながら

「君の器が小さすぎたに他ならないねカイン、今すぐにでも返しておいでよ。そもそもボクは言ったはずだよ?彼らレベル6には手を出すなって・・第一君は、姪の廻黎ちゃんに勝てないだろ?いつまでも人間である君が彼らにおいつこうとする事が間違いだよ」

「お前に何がわかるライラ・・・・ようやくなんだ・・ようやく・・・きっと俺は廻黎（化け物）たちから力を制御するなにかを奪いそこなったんだ・・・今からグワァアアア」

カインがそう言いながら出かけようとした時、シアンのオートで発動する超常現象と暮日の閉鎖空間が偶然に発動し空間に引きずり込まれた。

その光景を見たライラはパソコンの電源を落として

「まったく・・・無いものねだりの激しい奴だよ・・」

と言っていた。

・・・・

カインが消えた瞬間だろう、たまたま偶然に遊園地に来ていたレベル６のうち５人がふと空を見上げた瞬間にそこに空から地面から空間から伸びる大量の鎖でつながれているカインの姿が見えた・・

「うぁああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

と上空にいるカインの鎖がさらに増えその瞬間に世界の時が止ったのだ。これは陽のタイムオーバーのせいである・・これによって動ける人間は、何故か一真だけで残りは、レベル６だけだった・・・

「カイン先輩！？７な、なんだよ・・おい、葵！！椿！！翔也！！・・どうしたんだよ・・急にみんな動かなく・・・・」

「あ~あ、やっぱり無理だったか・・」

「だな、ぶくぶくに膨れて爆発寸前だな・・・それにあそこまで拘束されてるとな」

と状況が理解できていない一真の横で腕を組みながら空を見上げて冷静に納得している影虎と廻黎、彼らには鎖が見えているのにもかかわらず一真にはカインを拘束している鎖が一切見えないのだ

見えるのと見えない・・この差が大きすぎる差、ちなみにカイン自身にも見えてはいないし自分の状況すら理解していなかった・・

「ウガァアアグワァアアアアアア」

と空中で苦しんでいるカインを傍に

「で、どうすんの？て言うかそもそもアイツ誰？」

「私の叔父だよ・・「・・・・・で、その伯父さんが俺らの能力奪って置いて力を一切扱えず苦しんでるわけね・・どうする？このまま放置するのもありだ・・」・・・・このまま放置すると君は一生彼女とキスも出来ないし会話もできないし夫婦の営みもできないが？」

「是非今すぐ殺そうさっさと殺ろう！！」

と影虎がやる気満々で腕をボキボキと鳴らしていてその横で廻黎も笑みを浮かべていた

「おい、影虎説明しろよ！！カイン先輩どうしちまったんだよ？それに能力とられたって？」

と影虎の肩を一真が掴んでそう言うと廻黎が一真の体を小さな体で遊園地の噴水に放り投げた

「ほらいきな・・」

「命令するな・・・俺は愛する女のために動くだけだ・・「それは私もだ・・お前たちみたいに気味の悪い連中を仕切っているのは妹のためだよ・・他はどうでもいい」・・守るものがあるレベル６はつくづく損だな」

「いけよ」

と廻黎が言った瞬間に「ウワァアアアアアアアア」

とカインがうなり声を上げた瞬間にカインの体から大量の鎖が飛び出しそれらが遊園地にいる時間の流れの停止により動けない人間に向かって飛び出したそれはもう雨のように・・

その鎖が人間に襲いかかろうとした時、ガシャンという音と共に鎖がバラバラと切り裂かれていた

そして、観覧車の上とジェットコースターの上に何処から出したのか日本刀を持った陽とどうやって伸ばしたのか?酷く鋭い爪を持った灯が立っていて

2人が鎖を切っていたのだ・・・

「ぐ・・・廻黎に化け物どもか・・お前らから超能力でも魔術でもない力を支配するための鍵を奪う・・そうすれば俺もこの力を支配できる・・・・」

と上空で『異世界樹(ユグドラシル)』の翼(影虎や椿のものとは違いやせ細った頼りない枝)を広げたカインが全員を見を?しながらそう言った

「いや、たぶん無理だと思う・・第一それらは俺らにとって力じゃない・・・そりゃなければ困る事が多いが本来は必要のないものだ・・・会長は足枷と呼んで嫌ってるぜ・・」

そう地面で影虎がくるくる回転しながら地面を蹴ると次の瞬間には、カインの頬に影虎のある意味必殺技の殴られたことに殴られてから数秒後に気が付くパンチをお見舞いしすでにカインの後ろまで跳んでいたが「ぐ!!!」と殴られた衝撃がようやく伝わったカインの体がさらに影虎に向かって飛びそれをさらに影虎がタイムラグストレート(ただの早すぎて時間差で来るパンチ)をさらに背中にお見

舞いしそのダメージで地面に向かってぶっ飛びかけたカインの体から生えた未完成な『異世界樹(ユグドラシル)』を影虎は素手でつかみそれを引き寄せ空中でぐるぐると回し重力に従い地面に落ちる瞬間に地面に叩きつけた。その瞬間に影虎は地面に着地し天音　廻黎の隣にまで戻っていた

スタッ

「おかえり・・どうだい?私の伯父は仕留められたか?」

と隣で着地した影虎に聞くと影虎は墜落させた場所に立ち上る土煙を眼を細めながら眺めていた

「ありゃちょっと生ぬるかったな・・・足場がないのが「君空に浮けただろ?」・・・アァアア!!」

「お前は馬鹿の子だな・・・まったく、これだから下等生物は役に立たない!!」

といきなり翡翠色のツインテールの髪に、紅色　の瞳、背中の部分に大きなリボンの着いた翡翠色のゴスロリのワンピ　ースを着ており、そこに淡い紅色の　桜の花の形をした独特の日傘を差し　ている姿から
軽く逆立たせ　た黒髪に、深い蒼色の瞳、白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服　をマントの様に羽織っている。
そして体の周りを白と黒のエネルギ　ー体が交差して廻っている姿に変化していた・・・

「うぐ・・・俺の略奪帝国の容量が限界で一切奪えないだと?・・・

・・・ウガァアアアアアアアアアア・・・・・・」

そうカインが冷静に考えようとしたが次の瞬間にカインの中から『異世界樹（ユグドラシル）』と緑色の閃光と幻影から実体化した槍や斧などが影虎と変化した廻黎とその後ろの噴水から出ようとしている一真に向かって襲いかかった

「うそだろ！！」

「アレの事はゴミの貴様に任せた・・・第一、あれの連れはお前だろ？」

「えぇ！！一真なら〜シュン〜・・行きやがったな！！」

天音　廻黎がその瞬間に消え残された影虎は、一真の前でチョップで緑色の閃光をチョップで二つに裂き飛んでくる凶器の数々を全て弾いた。その間に廻黎は暴走したカインに攻撃を仕掛けていた。

その様ははげしいもので圧倒的な力や圧倒的な身体能力を持つはずのカインを一方的になぶっているのだ

天音　廻黎の攻撃に対しカインは自身の時間を早め高速移動したりシアンのランダムに発動するスキルを使ったり廻黎を幻に変えようとはするもののどれもうまい事行かずにダメージをもらっていたのだ

（馬鹿な馬鹿な・・俺は誰よりも強いはずだ・・中途半端とはいえレベル６の能力を６つもうばっているんだぞ！？それなのに・・・なんでこいつは・・一切臆せず・・）

「カインよ貴様には何故、私に手も足もでないかわかるか？「廻黎

！！」貴様が物欲しそうに望んでいた我々の力はもはや我々にとって足枷でしかない！！「ぐあ！！」〔スタ〕進化の方法を間違えたなカイン・・愚かな男よ」

と廻黎がカインを超える高速移動の後、かかと落としをカインに決めカインは再び地面に落下し天音　廻黎は、地面に軽やかに着地した。

そして、その横で膝をついているカイン・・・その間にも一真にもカインにも見えない鎖で徐々にカインの体は拘束され続けていた

その光景を遠くから見ていた。一真は、自身のしたっていた先輩の酷いやられ方のあり様に絶句していて

影虎の肩を掴んで

「影虎！！なんだよこれ・・やめさせてくれよ！！カイン先輩が死んじまう・・それに廻黎って子があの女に変身した？」

と一真がパニックになりながらも影虎に制止を要求しカインを助けようとしたが影虎は

「あのさ、一真・・・・別に躊躇しても良いけどお前の言うカインって男さ・・・早くなんとかしないと・・・・全てが終わるぞ？「おわる？」そう終わる・・・何もかもが終わる・・・別にいいよ、終わっても・・俺には椿が居るからな・・アイツだけは終わらせないから・・・それでもいいんなら会長を止めてやる」

影虎が営業スマイルでそう言うと一真は迫力で後ずさりした・・・

そして、尻もちをついた・・・一真は知っている・・・影虎の『異世界樹（ユグドラシル）』だけでも世界が簡単に終わる事を・・・それが6つそろっている状況・・・それがどれほどの物かおぼろげにだが理解したのだ

すると影虎が一真の頭にポンと手を置くと頭を無理やり動かしてカインに向けると静かな声で

「・・・試しに竜王の目でカインて野郎を見てみろよ・・・「・・・嘘だろ？」見えたか・・・あれがレベル6に・・・いや、俺達（神生徒会）に多少なりにでも近づこうとした物の末路さ・・哀れだろ？あの鎖は俺達を世界の理屈にとどめておこうと言う働きの結果だ・・・・まだ、会長が人間に有益な戦いをしている今の方が・・お前には好都合だろうよ・・・「でもそれじゃ・・カイン先輩が」・・・まぁとりあえずそこでじっとしてろ・・・巻き込まれたら・・死ぬとか言う前に消えるぞ」

そう影虎が言った瞬間にカインが空間移動で廻黎の目の前から消え

遠くに距離を取ろうとしたがその移動の出口に先回りするかのように暮日が立っておりつその姿は人間の姿にぶれるかのように白銀の光を身に纏い、背中に備わる伸縮自在の銀翼の力で時空超越すら可能にし、神業の如き奇跡を発現させ全身がほぼ銀一色で、赤いラインのような胸部で、眼に3本の縦筋が入っているという独特の眼

身体モールドは筋肉質に施され、黒いラインも入っている。背部の翼状に据え付けられた翼は形状は所謂横に広がる翼ではなく、仏像の後光のような、上に伸びた形となって頭部ラインは頭部上部左右の装飾内の小さな空きスペースがみられる姿でつまらなそうな目で見ると迷うことなく能力が暴走したカインの腹部を銀色の光り輝く拳で殴るとカインの体は何の抵抗も出来ず殴られた部分から火柱を

立てながら空中までとびカインは腹部を押さえ『異世界樹（ユグドラシル）』の力で再生を始めた・・・

しかし、カインにはもはや休むと言う行動すらなかったのだ

「申し訳ありませんがそろそろ精算の時間ですよ」

とカインの後ろには陽が居て彼の姿もまた人である姿からずれが生じ・・黄金の甲冑をまとった騎士のような姿、両肩からは長いマフラーが伸び白を基調した陣羽織のような衣をまとい全身にベルト状の何かが装着されているのが特徴。黒いマント状の物を持っており右手には日本刀を持っておりそのまま刀を光速で振り下ろした・・ズバという音と共にカインの皮膚は切られ血が飛び出した・・この状況でも死なないカインは死が存在しないからこそ死なないのであって他の人間なら間違いなくしんでいたところを考えると彼もまた化け物なのだろう・・・

そして、カインの周りには、

全身が赤い煙のようなものに包まれ。黒い右腕と白い左腕を持ち、頭部から霞のような髪を滾らせ天女の衣のようなものを纏いまるで背後に大量の魑魅魍魎を纏っているかのような巨大な闇を背後に持ち闇の中からたくさんの何かが覗いているような女神のような魔女のようなイメージを思い浮かばせる女性の姿をした人ならぬ者のような姿になりかけている灯と

白銀の光を身に纏い、背中に備わる伸縮自在の銀翼の力で時空超越すら可能にし、神業の如き奇跡を発現させ全身がほぼ銀一色で、赤いラインのような胸部で、眼に3本の縦筋が入っているという独特の眼

身体モールドは筋肉質に施され、黒いラインも入っている。背部の翼状に据え付けられた翼は形状は所謂横に広がる翼ではなく、仏像の後光のような、上に伸びた形となって頭部ラインは頭部上部左右の装飾内の小さな空きスペースがみられ・・偉大な存在のような雰囲気を醸し出す姿になりかけている暮日と

逆立たせ　た黒髪に、深い蒼色の瞳、白い袖無しのシャツと黒い学生ズボ　ンを身につけ、その上に黒い学生服　をマントの様に羽織っている。

そして体の周りを白と黒のエネルギ　ー体が交差して廻っている姿にさらに背中には3本の赤い羽根が生え自らの背後に血涙を流す阿修羅のように顔の多い巨大な千手観音像を顕現させその観音の掌に一つづつ特徴的なそれぞれ違う魔眼が埋め込まれておりそれも血の涙を流していた、まるであらゆる面を持っている廻黎そのもののような偶像が実体化しかけている廻黎、

黄金の甲冑をまとった騎士のような姿、両肩からは長いマフラーが伸び白を基調した陣羽織のような衣をまとい全身にベルト状の何かが装着されているのが特徴。黒いマント状の物を持っており背中からは、オレンジ色の放射状に延びる翼、右手には日本刀を持っている神神しくそれでいて気品あふれる姿になりかけている陽

そして、遅れてやってきた全体的に白い鎧のようなフォルムに黄金の装飾、そして金の装飾ににあう四本の王冠を意識したかのような神聖な雰囲気の漂う頭部の角、黄金に輝くマントを身にまとい棘棘としたフォルムの刃が四肢に存在し黒き瞳の奥に全てが凍りつくかのような静けさと渦巻く彼の欲望があり体中からオリーブ色の光と白い瘴気が滲み出てそれでいながら神々しい白い怪物のような以前影虎との戦いで疲労したオリーブ色の姿とは違う化け物の姿になりかけているシアン

そして、最後に地面を強く蹴り飛びあがってきた基本カラーは黒。
全身が桜色と黒の鎧で４本の角と王
冠、棘状のパーツのついた各部、全身に浮き出た桜色の血管状組織
があり血管組織から桜色の優しい粒子が放出され続け黒き鎧からは
黒く醜い瘴気が滲み出ていて赤色の瞳の奥には全てを燃え尽かせる
ような焔とその炎から出る黒い煙は破滅を意味し見たものは気が狂
うほどで見た物に死を抱かせるような禍々しい怪物、とても人間に
は見えない姿になりかけている影虎がいた

その６にんが何故姿から変化しようとしているのかは・・・レベル
６、それも明らかに常識からずれた彼らだからこそ起こりうる現象、
自身の自分だけの現実・・・自分の心の姿の偶像、それに身体が変
化しかけているのだ。人の姿でありながら人とは明らかに違う彼ら
にとってはむしろ偶像の姿の方が正しいのかもしれない・・・・・

そんな、６人に囲まれたカインは・・・胸を押さえながら

「それがお前らの正体かよ・・・飛んだ化け物だなおい！！！！」

ダダダダダダダダダダダンダッダダンダダダダ・・・・

と大声を上げ全身から武器や能力での攻撃、『異世界樹（ユグドラシル）』の枝や幻
を実態に変える攻撃などを６人に一気に仕掛けた・・・その瞬間に
空に大きな桜色の世界中が咲き空中で大量の爆発が起きた。

そして、その中心地でカインが息切れを起こし方を上下にして

「どうだよ・・・俺の・・・・・力は？・・・・・・うそだろ・・・
もうやめてくれよ・・・冗談じゃない・・」

そして、煙がはれると影虎、陽、シアン、灯、暮日、廻黎の六人は、人間の姿ではなく全員が全員、己の偶像の姿になっており無傷でいて全員が何を思ったのか右手を上げそれをカインに向けた。その瞬間にカインは、『異世界樹（ユグドラシル）』や時間操作、空間捻曲などあらゆるガードの手段を取った。

しかし、廻黎が「カインよ、貴様の力など他人から奪ってきただけの力だそれを自分の力とは・・・朽ちろ」

と言った瞬間に6人の手から目視不可防御不可回避不可吸収不可変換不可完勝不可の何かが放たれ

カインを中心に大爆発が起こった・・・そして、爆発が起こった時、カインの居た場所からたくさんの鎖（絶対能力）が絶対能力（レベル6）の、さらに先にあるものまで普通に進んでいた6人の身体に巻き付き6人を拘束し人間の姿に戻し・・レベル6にレベルダウンさせた・・・

そして、煙がはれるとカインの居た場所には誰もいなかった・・・

「やれやれ、・・もう少し人でいたかったね・・」

そう廻黎が切なそうな表情で呟いた時、他のレベル6、全員はそれぞれ、無言でいながら何かを思ったのか自分の姿を見ながらまた目線を上げ

「じゃ俺は帰る・・・」

「私もお先に失礼します！！」

と言って暮日と灯の二人は、先にいなくなり次にシアンが【じゃ、僕は帰るね・・・ちょっと用事があるからアディオス】とカッコ付けて帰り

陽は、日本刀を鞘に仕舞うと廻黎と影虎を見て「私もこれで帰りますがお二人さんも早く帰った方がいい、2分間だけ時間を止めておきます・・・それでは」

と陽が言うと陽はもうそこにはいなかった・・・

「さぁ戻るかね・・・」

そう言って影虎が当たり前のように椿達の元に戻り廻黎も傘を持ちながらフワフワと地面に降りて翔也の横に立つと影虎も時間が止る直後の位置に戻った・・・

その様子を見ていた一真はあまりに激しくそしてあまりにもあっけない決着に絶句していたが雰囲気で察したのか一真も定位置に戻ると次の瞬間に時間の流れが動き出し

「影虎・・・ルルイエってなに？どこ？」

と椿が影虎に質問すると影虎は悩みながら何事もなかったのかのように

「秘密だ「なんだ？隠し事か？浮気か？不倫か！！？」真っ先にお前の思考回路をときあかしたいよ・・とりあえずお前の嫌いなタコに似た頭部、イカのような触腕を無数に生やした顔、巨大な鉤爪の

ある手足、ぬらぬらした鱗に覆われた山のように大きなゴム状の身体、背にはコウモリのような細い翼を持つような何かが出てくるお話だけどいいのか？」

と影虎が悪戯っぽく聞くと椿は少しの間言われた物を想像し顔を真っ青にさせながらフラフラとし「やっぱりいい」と言って影虎の服の裾を掴んだ

影虎が横を見ると廻黎と翔也と一真と天野が話していた。

「・・・・・よし」

ヒョイ

「んにゃ！？」

影虎はさすがに混ざるのも面倒だと思い椿をお姫様だっこすると椿が驚いて間抜けな声を出していて

その様子を影虎が確認すると

「今日は二人っきりのデートだろ♪俺ら二人はそうだな・・空中散歩にでもいくか♪」と八重歯を出しながら笑いかけると椿は嬉しさとはずかっ差の混ざったかのような表情で「うん♪」と頬をあかくしながらそう言った瞬間に影虎は、大空に誰にも見られずに飛びあがりそのまま空中で羽を広げ空中散歩に向かった。・・・そこからは、空を飛びながら夜景が見えたり影虎のアクロバティックな飛行などおこない椿に怖いと言われペチと頬を軽く叩かれお互いに笑っていた。

椿と影虎はお互いにお互いを思う気持ちが強くなった出来事だった。
ちなみに一真達のその後は、また別のお話。ついでにいうなら一真はその後、竜王の目の効果で子供になったらしい。

・・・

そしてこの能力は常時発現していることを為、常に光や風を奪い続けている。
そしてその奪われたモノは彼の内に存在する”帝国”という場所に送られ、そこで色々なモノに変換される。（魔力等の力や武器など様々なモノ、人間や動物はそのまま）
ちなみに能力を奪われた場合、能力自体を奪う訳では無いので、一日使えなくなるが、次の日には使える様になる。（レベル６の場合は戻らない）
しかし、その能力は帝国内にある技術研究所のマッドなドクター達の元へと送られ、全て丸裸にされた上でカインだけが使えるデメリットが一切無い能力に変えられて、カインに渡される。
（ただし、レベル６の能力を手に入れることはできても制御が一切効かず蝕まれる。）
ちなみに、レベルは計っていない為、不明。

○設定：一真達の通う学校の先輩。
一真達とは家が近いので、よく勉強を教えたりしている。
それに、帝国内の菓子製作所で作られる新作の菓子等の試食をさせている。
自由気ままで面倒臭がり屋な性格で、神出鬼没のスキルを持っている。
服装は、学校指定の夏制服を常時着用していて、偶に私服を着ている。
異常な身体能力を持っていて、生身で核をくらっても、傷一つ付かない、普通の蹴りやパンチの一撃で巨大ビルを破壊する、マッハ４のスピードを止まって見える等色々と狂っている。

○ＣＶ：テイルズのリッドの声をやっている
石田彰さん

ライラ

謎の情報屋カインとは昔馴染みの様子の少女。

略奪の王（能力を奪われた６人）（後書き）

今回は圧倒的な強敵の出現に加え、この作品においてレベル６とはなんなんのかという場面や能力が枷として書かれて居たり全員が全員、別々の進化を果たしており人ではなくなってしまっている現状みたいな感じです。

さすがにレベル６の力六つを取りこむと大変なことになります。

いずれカインはリベンジに来ますでしょうね。

では、また

死なぬ人（椿のために…燃え尽きろ）（前書き）

今回は若干Ｒ－１５くらいです。

では、どうぞ

死なぬ人（椿のために…燃え尽きろ）

私は影虎とのデートの次の日、久々に手の込んだ手料理でも作って驚かせてあげようと思い影虎に内緒で出かけた。基本影虎は肉類が好きだが好き嫌いが無いので今日は、ロールキャベツとビーフストロガノフにしようと決め服装はあまり目立たない程度の最近覚えた薄化粧をして基本的に大好きなワンピースを着て出かけた。

今日はいつものスーパーではなく良い素材を使いたいので少し遠くのデパートにモノレールに乗って向かった。

電車には実は生まれて初めて乗ったので切符の買い方など周りを見て学んだ

しかし、乗り換えとかがわからなく反対の場所に向かったりして時間を浪費した（途中、降りる駅を間違えて泣きそうにもなった）がおかげで電車の乗り方はマスターした

長い道のりだった・・・だが得た物も大きい・・

そう思いながら私は、大きなデパートに行き買い物カートを取ろうと思った時だ・・・カートに腕輪が装着されて持つところがないのだ・・・仕方なく私はそれをはめてくださいと書いてあったのでそれをはめると急にカートが自動で動き出したのだ・・

これは、カートを自分の腕で押さなくても自動で動き運んでくれると言う品物で籠に商品を入れるとその段階で計算してレジに着くころには精算するだけという便利機能らしい・・

改めて無駄に凄いな学園都市。

そうは思いながらも結構いろいろ見て回ってるうちにいろいろ今日はいらない物もかさばった・・とても持って帰れそうになくまた、魔術で飛ばそうかと考えていると・・・即日配達のサービスがありそれをお願いして私は、手ぶらで歩いて帰ることにした・・・・まだ夕日が出ていて暗くなる前までにはかえれそうだった

「♪~ ♪♪」と私は口笛を吹きながら周りにある店などを見ながらウロウロしていて

そしたら、少し遅くなったので早く帰ろうと思いバスに乗った。

バスは自動式で運転手はおらずお客さんは私と後ろにいる男の人だけだった・・・ふと横目で見ると

その人は、サーフィンでもして日に焼けたのか肌が真っ黒で黒髪で細く白い歯がよくめだっていた

すると私の目線に気が付いたのか男の人は、私の方を見て少しだけ笑うと・・・口を開き

「?????? ?????? ??????? ??? ??? 」

と言った・・・その声と言葉を聞いた瞬間に私は全身に鳥肌が立ち瞳孔が揺れ息が出来なくなり・・体中から焔を問答無用で噴き出しバスを爆発させた。

・・・・・・・・・・・・・

・・・

と男がそう言った瞬間に男の体は急速に回復したのだ

そして、一歩一歩こちらに向かって

「ヒッィ！！・・・来るな来るな来ないでぇえええええええ

私の・・・トラウマの中心にいつもいた恐怖の対象・・・昔、逃げ回っていた時、私に手を差し伸べてくれ・・・その後、無理矢理、犯してきた・・・二人のうちの一人！！！！

「おぇえええ・・・おぇえええええ」

私は、胃の中身がストレスで急に逆流し嘔吐した・・・

「吐く事ないじゃんマリアちゃん♪」

「ぐ・・・あが・・・・・がが」

と男は私の肩を蹴り地面に倒れた私の首を踏みつけてきた・・・

私は必死にその脚をどかそうと両手に力を入れるがびくともしないあきらかに人間の力じゃない力で踏みつけてきた・・・私は窒息しそうになり意識が無くなってきた

こんな状況なのにもう一人の白い私は出て来てくれない・・・いつもは私が死に掛けると勝手に出て来るのに・・・いや、だ、死にたくない・・

わたしが目を瞑ってしまった時

「助けてあげようか？」

と男はそう言った・・・その瞬間に私は目を開けて男の目を見てしまった

「なんて言うと思った？誰が君なんか助けるかよ・・君は誰にも必

要とされて居ないんだよ・・・

誰もお前なんか必要にしてないよ誰もお前なんか助けに来ない」

「いや、助けは来るぞ？て言うかもう来てるし」

そう男が高らかに言った時だ男の隣のガードレールに影虎が腰かけていたのだ

「ツ！？馬鹿な・・・人払いって奴をしたんだぞ？なのになんで人が・・」

「まぁ俺にはそれが効かないってことでしょ・・・それよりもさ、俺の女に随分と舐めた真似してくれてるじゃん」

「ウグァアア」

影虎が立ち上がり男に一歩一歩ちかより男の頭を鷲掴みして持ち上げたのだ

男の体が退いた事により私はようやく酸素を吸う事が出来てゴホゴホとむせていた

そして、涙のたまった目で影虎を見つめた・・・影虎は、片手で男の体をもち上げていて男は両手で影虎の腕を掴んでいたが外れない・・・

そして、影虎の口元が緩んだ瞬間に影虎が一気に手に力を入れ男の頭蓋骨を握り潰した。

グジョという音と共に男は地面に落ちた・・・

2006

「終わったの？」
私は未だに震えながら影虎に聞くと影虎は「まだだ」といった
そう、その瞬間に男の体はなぜか回復して「そうだ、まだだ、言っただろ？俺はお前と交わった時からすでに不死身の生き物だってそれに俺はもう頭を握りつぶす攻撃は効かない・・て言うかそもそも俺は死なない生き物だ！！」
男の声が聞こえた時私は耳をふさいでしまった・・・でも、影虎が優しく頭に手を置いて
「安心しろ、後でいっぱい胸貸してやるから・・今は俺を信じてろ」
そう言って影虎は男の腹部に蹴りをしようとしたが男の体が発光し影虎の蹴りが受け止められたのだ
「今の蹴り程度のダメージなら以前におった事があるだからきかねぇよ」
と影虎に言うと男は銃を取り出し影虎の体を蹴って遠ざけそれを影虎に向かって撃った
しかし銃弾に胸を打ち抜かれた影虎は、一切ひるむことなく走り再び男の頭を鷲掴みにした。
「おい、また同じことかよ・・・言っただろ？俺に同じ攻撃は通用しないってグフ！！」
そう男が影虎に言うが影虎迷うことなく男の腹部に拳をお見舞いした

男は一瞬痛みで気を失いそうになったがすぐに笑いだし

「おいおい、学習しないなお前、もう俺にはグハ！！・・・あ、バカな・・俺に同じ攻撃は・・」

次の瞬間に影虎は先ほどの二倍ほどの力で男を殴ったするとあろうことか男は同じ攻撃でダメージを喰らったのだ

「お前の能力は『学習能力（テスタメント）』つまりはお前の言った通り一度受けたダメージは二度は負わないと言う能力だ。なぜ不死身なのかは不明だがな・・「そうだ、俺は二度も同じ」だからこそ俺はどんどんと威力を強くしてるんだよ「なに？」倍々式で俺は今から拳の威力を高めて殴っていく「なんだと？」じゃとりあえず殴り続けてやるよ・・俺に限界は存在しない！！」

バキドガグサバゴン

そう言って影虎は殴り始めた

「はい、これで３０発、それにおまけで一発♪まさかもういやとは言わないよな？お前は椿になにをした？一生消えないような傷作りやがって！！」

とまるで私の恐れて仕方な無かった男を影虎はいたぶり続けた・・それはもう強烈すぎる威力で

初めの方は男も「許してくれ」など拷問に耐えかねて悲鳴などを上げていたが隕石衝突のレベルにまであったパンチを受けるころには動けなくなっていた。

身体は正常に強制的にもどされても心、精神のダメージだけは一切回復しないのだ・・・

そして、倍々式パンチ２３０８発目で影虎はついに殴るのをやめ地面に投げ捨てた

するとバラバラになった男の体は、地面で再生し始めた。

そして、ようやく解放された事が理解出来たのかすぐに動き始めた・・・

精神は死んでも根っこにある物が男を動かしているのだろう・・・

そして、男が立ち上がった時、影虎が左手から緑色の閃光を飛ばすと男の体に当ると男の体を破壊し始め一瞬で砂状に変えた。

今度こそ終わったのか・・・・影虎も案緒の表情をしていた・・・

その瞬間に私は涙がこみ上げ影虎の腰に手を巻きつけ影虎に泣きついた

もう今までの怖かったもの全てをはきだすくらい泣きわめいた。

その時だ、男の砂が急に意思を持ったかのように浮き出し私と影虎に向かって飛んで来たのは

「ウォワアアアアア」

という叫び声で私に向かって飛んでくる男、人ではなくもはや化け物、それが私に向かって飛んで来た

「キャァアア！！！！！｛ポフ｝」

私が悲鳴をあげると影虎はギュッと私を左手で優しく抱き寄せてきて

「お前はあまりにも罪深いそしてお前の心はもう生き物ですらない・・椿のために…燃え尽きろ」

そう言って影虎は右手で男の再生しかけていた頭を鷲掴みにして右手から一目見ても全く性質のわからない炎を出しその炎が男に引火して燃え盛り男は一瞬にして灰も残さずに消えた

そして、男が完全にこの世から消えた時、影虎が力強く私を抱きしめてくれた

「悪かったな・・・もっと早く助けにこれれば良かった・・そうすれば心の傷を抉るような事起きなかったのにな・・ごめん」

そう言って影虎は片膝をついて片手を私の腰にそして片手を頭に回して抱きしめてきた

私もそれに対して涙がこみ上げて来て影虎の背中に手を回して抱きしめながら影虎の胸をかりて子供のようにワンワン大泣きした。

いままでで一番涙を流した。

「ワァアアアンわぁあああああああん怖かったよぉおおおー！！怖かったよーーーーー！！！」

「よしよし、大丈夫だ大丈夫・・もう二度とあいつは現れはしない

から「えぐ・・ほんとう?」あぁアイツには死より恐ろしい罰を与えた・・さっきの炎は対象の存在の力を燃やす炎だ・・どんな事をしても消すことも生きながらえることもできない・・・奴は、死ぬ以前に存在が消滅したのさ・・」

そう言って影虎は優しく抱きしめてくれた。

そして、その後しばらく泣き続けた私は、少しだけ泣きやんで影虎に

「お願い・・怖い事全部忘れられるくらい・・優しく・・・抱いてください・・・」

とそうお願いすると影虎は、「わかった」と言っていた。

・・・

「私とお前が初めて交わった時も私は泣いていたなって…」

私の言葉に、影虎が一瞬目を丸くするが、次にはにっこりと笑う。
ゆっくりと握られていた手を外して、影虎がぴったりと私の横に寄り添った。
私の頬を撫でる影虎の手はとても熱い。

どちらからともなく近づけられた顔は、
やがて自然な流れでお互いの唇へと導かれた。そして嬉しかった

「ん…」

小さく上がってしまった私の声が合図であったように、
ゆっくりと啄ばむようだった影虎の口付けがやがて深いものへと変わってゆく。
私もそれに応えるようにゆるゆると舌を影虎へとさしだせば、
影虎が熱をもってそれを自身の口内へと導く。いつも優しくてエロい事はあまりしない影虎だけど一度スイッチが入るともうフェロモン出しまくりで私もクラっと頭が痺れて私も抗えない・・今は安定期だから大丈夫だよね？

気がつけば私は影虎の首に両手をまわしていて
影虎は私の背中を折れないようにしかし力強く抱きしめながら、
溺れてしまっているかのように私の唇を貪った。

やがてゆっくりと離された唇から、どちらのものかわからない
荒い息遣いがもれる。

影虎の瞳に写った潤んだ瞳でみつめる私の顔が見えその表情は自分

から見ても
影虎の理性が決壊するのが当然だと思った。

「椿……ベッドいこうか。」

私が紅潮し涙目の表情でうなずくと

「ひゃっ！」

予告無しにお姫様抱っこをされた私は、驚いて間抜けな声をあげてしまった。
影虎が頭上でくすくすと笑うので、それをじろり、と私は睨みつける。笑わなくたって・・

「ごめんごめん、ただお前はやっぱり可愛いなと思って。」
「…バカ」
「ふん、あぁ俺は馬鹿だよ、バカで良いバカでもお前が好きだから♪」

苦笑して、ぎゅ、と抱き込まれた私の左耳がちょうど影虎の心臓部分に当たる。
私は、その心音に何故か安らぎを感じた

「…影虎の心臓の音、凄く安心する…」
「そうか…」
「……うん」

少しおどけた口調でお互い笑い合えば、
私の恐怖でがちがちだった身体が幾分和らいだ。

ゆっくりと寝室のドアが開かれ、私の頬が赤く染まる。
みえてきたベッドが位置も異常に異様に生々しくうつれば、
私の心を不安とも恐怖ともに期待や安心感も感じられた・・私ってちょっと淫乱?などと思いながらも
ぎゅ、と影虎の服の裾をつかめば、影虎がそれに気付いた。

ゆっくりと壊れ物を扱うかのように私の身体をベッド淵へと座らせれば、
影虎はそのまま跪いて私の顔を見た。
微笑みながら、ゆっくりと頬に触れる。

「椿、やめるか?」

私は、ぶんぶんと首を横にふった。

「か、影虎が、好きだから…やめない。」

小さく囁くように発した私の言葉は、影虎の理性を完全にとっぱらってしまったようだ。
そのままぎゅ、と私の身体を抱きしめれば、
耳元で影虎がなるべく優しくするから、あの男のことなんて忘れろ、
俺だけを見て俺だけに溺れろ。
私が顔を真っ赤に染めながら無言でそれにうなずく。

部屋の明かりがひとつ落とされて、いちばんほのかな光だけが
部屋全体を包んでいる。

私と影虎は抱き合ってお互いに口付けを交わしながら、
この日同じ心のままに心身を愛しい愛しすぎる人に渡しあった。

2014

触れる手はどこまでも優しいのに、どこまでも熱かった。

「大丈夫か？」

「…うん、大丈夫」

熱に浮かされながら私は私を抱いている人物のその顔と声に、影虎を見てなんて綺麗な男だろうと思った。

ああ、やっぱり私はこのひとがどうしようもないくらい本当に好きなのだと実感したときには、

どうしてか涙がこぼれて。

「大丈夫だ、なにも考えるな、俺の事だけみて、俺だけを愛せ、俺もお前だけを愛しお前だけを見続ける。」

穏やかに微笑むその顔とは裏腹に、私をいじめるその指がいつしか快感の声すら我慢するのを咎める彼がひどく残酷だと思ったのはなぜだろう。

羞恥さえ、快感に変えられてしまっていたからなのか。

「椿、好きだ…愛してる、どうしようもないくらいにな…」

「かげ…かげとらぁ……わたし…も…」

鼻にかかったその声は本当に自分が発しているかもわからない。

身体すべてを影虎の指と舌が這い回って、きっと触れられていないところなんてない。

恥ずかしいだとか、そんなに見ないでほしいとか、

言うたび影虎は「可愛いな」と耳元で囁くばかりで。

ちっともその行為を止めてはくれない。

そのすべてが甘やかな毒をもたらして上手に私を駄目にすれば、私の頭はまっしろになって、ただ施されるそれらを享受していた。そうして打たれた熱のあつさに目が眩んだのか、いつしか意識を手放した。

ひとつになった。いや、私この人と心から何から何まで共有して愛し愛され

私は、彼を選んで本当によかったと私は薄れゆく意識の中で思いながらその幸せを噛み締めるように…

その夜、私は影虎の腕の中で影虎の肌の優しいぬくもりを感じながら眠った。

つづく

2016

死なぬ人（椿のために…燃え尽きろ）（後書き）

後書き　以上です・・・ギリギリＲ－１５くらいでとどまったはず・・

ちなみに今回登場した男は、影虎でなければ勝てない相手だたと思います。

ある意味で最強キャラですからね。

ちなみに名前はありません。不老不死なのは椿の唇を無理やり奪ったからですかね。椿のキスには人を、生き物を爆発的に進化させる何かがあります。

ではまた。

2017

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ）（前書き）

はい、今回は今まで史上初の怪物だらけの大運動会です。

今回登場する場所は知っている人なら知っているあの場所です。

すこしと言うよりかなり設定を改編しましたがどうぞ

2018

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ）

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ）

ルルイエ（Ｒ'ｌｙｅｈ）は　太平洋、南緯４７度９分　西経１２６度４３分の海底に位置し、ニュージーランド・南米大陸・南極大陸の中間付近、現実には太平洋到達不能極に程近い絶海の海域で異常極まりない非ユークリッド幾何学的な外形を持つ多くの建造物からなっている場所とされ　死せるクトゥルフ（クトゥルー）が封じられ、夢見ながら待つ場所であり、クトゥルフ神話の中核をなす要素のひとつである。星辰が正しい位置についたとき、クトゥルーは目覚め、ルルイエは再び浮上すると伝えられている場所である。

全てが架空であるはずのこの場所は存在しているんですハイ。

そんな遺跡に目が覚めたら寝ていたという経験あるかな?ははは

「あるわきゃねぇだろ！！！！」

ダロ~ ダロ~

洞窟のような場所で叫んだので声がこだましていた。

俺は、イラだっていた。何の因果で椿と寝た次の日に、こんなゴツゴツとしてじめじめとしてて真っ暗な地べたで寝なければ行かんのだ・・・・・

それにおまけに椿さんまで居るので俺は椿さんをおんぶしながらテクテクと洞窟を歩き続けている。

2019

不幸中の幸いか椿さんはぐうすか寝ていて目を覚まさない。

椿さんが眠っているうちに早く帰りたいのだが記憶消去を使っても此処の現在地を示せるようなものがないのだ・・・唯一つだけわかる事は、この場所が人間には有害だと言う事だ・・・明らかにこう・・瘴気のようなものが漂ってるしそこらじゅうに散らばる見た事もない様な生き物死骸が俺にこの場所をどこだと理解させてくれている・・・

（また、来ちまったな・・・古代都市ルルイエ・・・ていうか今回は呼ばれたと言う訳か・・・うわぁ・・闇が漂ってる・・・・早く出ないとな）

そう思いながら俺は、必死に出口を探しているとよくわからない二メートルくらいの鳥のような人のような何かが１００匹単位で飛んで来た

「「「「「「「「ギャーギャー」」」」」」」」

とうるさいくらいの羽ばたいている音と泣き声が洞窟にこだましめちゃくちゃうるさい・・

そしてそいつらは飢えたかのように俺らに向かって飛来してきた。

「グウ・・スカ・・ピー」

と俺の背か名で漫画みたいな寝息を立てている椿さんをしっかりと背負って俺は、『異世界樹（ユグドラシル）』の翼を出さないで『異世界樹（ユグドラシル）』を洞窟のあちらこちらから生やして

鋭い刃のような枝で突き刺したが何匹かは素早い動きで潜り抜けて俺たちの方へきたので俺はすぐに右手に錬金術で作った闇から光を発する光の刀を出し前に向かって椿を背負いながら走り怪物を一匹一匹真っ二つに死羽などもぶった切りながら『異世界樹(ユグドラシル)』で作った足場を利用して一歩一歩出口に向かった・・・すると今度は後ろから再び鳥のような人間のような怪物がさっきの倍以上の数で向かってきたので俺は、右手を消し後ろに目掛けて超巨大な真相掌握（トゥルースハンドをお見舞いしたくさんの怪物を掴んだところで握りつぶした。そして、俺の腕は元の形に戻り急に行き止まりについてしまったが上を見るとトンネルが上に続いていたので俺は『異世界樹(ユグドラシル)』の翼を背中ではなく両腕から生やしひれのような感じにして飛びあがった・・すると上からたくさんの　青白いぶよぶよとした楕円形の胴体に、骨張った無数の脚が生えている外見を持つ化け物がたくさん落ちてきた

「気持ち悪!!」

俺は焦って空中で急停止して横にあったトンネルに逃げ込むが次の瞬間に　青白いぶよぶよとした楕円形の胴体に、骨張った無数の脚が生えている外見を持つ化け物がそのトンネルに入って着て追いかけてきたのだ・・・椿が目を覚ましたら泣きわめくぞ

「めんどくせ~ !!!」

と俺は、空中に飛び上がった後に『異世界樹(ユグドラシル)』を軸に『異世界樹(ユグドラシル)』をドリル状に変形して相手に突貫攻撃を仕掛けた。

すると気持ちの悪い生き物は俺に向かって飛んでは来るが俺の攻撃の餌食になり気持ちの悪い中身をぶちまけてどんどんと数を減らした

そして、洞窟の中で大抵の青白いぶよぶよとした楕円形の胴体に、骨張った無数の脚が生えている外見を持つ化け物を肉片に変え安心しているとその肉片が徐々に集まり始めて再生し始めた・・・

「まじですか・・・此処は逃げる！！」

俺はそう言いながら足に力を入れて飛びあがり上に向いた空洞の壁に『異世界樹（ユグドラシル）』を生やして階段を作り上った

正直言ってキモ悪、生き物の相手をし続ける気はない・・・

そう思いながら落ちそうになった椿を必死に抱えて登った。今さら思うけど服着てて良かった椿もパジャマ姿でよかったとどうでもいいが素っ裸でないことに感謝する・・

そう思いながらもう１０分ぐらい登った時だろうか巨大で恐ろしい黒い毛に覆われた蜘蛛のような姿をし人間に似たような頭部を持ち、そこには毛に囲まれた真紅の目がついてほぼ人間と同じ大きさであるらしい再び化け物が俺の真上で蜘蛛の巣を張って待ち伏せしていたそれもたくさんの数で・・・

どうやら完全に罠にはめられているらしい・・・そう思いながらも右手に刀を持って切りかかろうとしたが蜘蛛の手を一本切っただけで残りの足で俺は弾かれてしまい椿と一緒に落ちかけた

俺はとっさに刀を壁に突き刺して何とか落ちないですんだが徐々に俺に・・・いや、椿を・・極上の苗床を狙って向かってきた

俺はその瞬間に闘争本能に従い人間性を捨てようかとも思ったが一

瞬で蜘蛛のような化け物が細切れになって変な知るをバラまきながら

ボロボロと暗い地面の底へと落ちて行った・・・そして、俺が上を見ると蜘蛛の巣の上で俺に向かって手を伸ばしてくる

髪型が青い髪の長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下制服（ブレザー）で首にロケットペンダントを掛けている爽やか系の色男で唯一おかしいのが腰に掛けた日本刀（模造刀）の園崎陽が俺に手を差し伸べていた

「さぁ早く捕まりなさい」

「あぁ」

俺はそう言って俺は陽の腕に捕まり蜘蛛の巣の上まで引き上げて貰った

「お前も来てたのか陽「えぇそんなところです。さぁこちらに安全な場所があります。」そうか」

俺は陽にしたがって椿をおぶりなおしてついて行くと和泉のようなものがある空洞の場所についた

「此処が安全な場所か？「えぇそうですあの化け物たちはどうやらこの和泉が苦手のようで」そうか、そりゃそうだよな」

バン・・・シュゥウウ

俺は陽の話に話を合わせながら拳銃を抜き陽の後頭部に向かって発砲した。

すると陽はその場で倒れ俺を見ながら「なぜ?」と

「いや、俺、陽の事は性格は気に入ってるけどなんとなくキザなのところは嫌いなんでうったんだ」

俺が言葉をつづけようとした時に陽の姿が幻のように消え

泉の中からザッパーンと数の尖った刺を持つ楕円形の体をしており、

楕円の尖っていない方の端に、厚い唇のついた丸い口があり口の上から三本の細い茎が伸びており、その先端には黄色い目がついていて体の下に白い三角形の物体が沢山ついており、恐らく移動の為に使われる脚のようなものの生えた化け物・・・もう、モンスターその3でいいや。

それが飛び出してきておれと椿にとび乗って来てそれが一気に俺と椿をしっかりと押さえつけて体に生えている刺によって突き刺してきた。　ブスと刺さった刺は抜け落ちて俺たちの体に入り、毒液を分泌してきた。

それを見た化け物はひそかに喜んだかのようなうめき声を上げたが俺だけではなく椿まで刺されて俺がこんなに落ち着いてる訳ないだろ?

「それで気が済んだか?たしか・・・グラーキだっけ?「オゴルァ!?」終われ!!」

俺はすぐに偶然発揮できた特技、幻影武者で刺された事を幻覚に変えグラーキの前に現れグラーキを光の刀で真っ二つにまたまた気持

ちの悪い液体をぶちまけさせながら刀についた液体を払っていた

そして、確かに少しは安全な場所のようなので天井を見上げながらなぜ今ここに俺だけでなく椿も居て先ほどから椿は一度も目を覚まさない点についてだ・・・幾らなんでも深い眠りに突きすぎというか・・寝息が少し弱まって・・・

「マジか！！〜ヒュン〜」「ギュギョオオ」・・・・・」

俺が大声を上げた瞬間に俺の後ろでグラーキの半身が俺に向かって飛んできてそれに驚いて拳銃を抜こうとした時に俺の顔をかすめるように日本刀（模造刀）が飛んできておれの後ろに居るグラーキの脳天らしき部分を貫きグラーキは壁に突き刺されそのまま息絶えた・・・そして、刀を投げた方向に居るのは、正真正銘の園崎陽がそこに居た・・・そう思った時は陽はもう俺の後ろに居てグラーキの死体から刀を抜いていてそれを鞘に納めていた

「よう、やっぱりお前も来ていたか「えぇ今回もこの汚らわしい場所に招待された次第です。まったく」そうか、とりあえず進むか」

「えぇそうしましょうか」

と陽はそう言って俺についてきた。

このルルイエでは、能力者や魔術師などは力を全て失う・・全くの無力になる。稀にこの場所に今の俺らのように神隠しによって引き寄せられるがもしその時、世界の法則からずれた力を持っていなければ此処に居る能力も魔術も通用しない旧支配者どもに捕まり喰われるか奴隷にされるか種族を増やすための肉の苗床にされるかなど破滅以外待ってない。それにさらに絶望的な事を言えば此処に居る

旧支配者どもは、死んでもすぐに再生しそれどころか分裂して増える・・・

そんな空間を女一人背負って歩いているのだ・・・

だが、暗いジメジメした空間をひとりでさまようのはしんどいので

「なぁ「なんですか？」この場所ってこんなに広かったけ？」

俺があまりにも暇なので陽に話しかけると陽は、落ち着いた口調で俺の事を見て

「そもそもこの場所に広さってあるんですかね？「・・・・ないのか？」えぇありませんよ。此処はまたむげんてきな広さのある場所です。エデンとは真逆に存在するような場所ですからね。神の目の届かぬ場所です。おや？」

そう陽が言いながら二人で歩いていると今度は頭の無い太った人間のような姿をして両手に濡れた赤い口が付いており、全身が白熱して光り輝いている怪物が居た・・・俺はその姿を見た瞬間に構えたがその瞬間には、陽が模造刀でそいつを盾に真っ二つにしていた。

「よ、早わざ」

「ブゴォオオオ」

ズバ

と俺が褒めるとその瞬間にもう一匹が俺の真上から振ってきたので俺は右手に持っていた光の刀で上に目掛けて振り上げ俺に当る前に

真っ二つにした・・・

「あなたも中々」

と陽が俺に向かってそう言っていた・・・

「それにしても、この都市は、都市は都市でも学園都市とは偉いちがいだ。」

「仕方ありませんよ。」

そう陽が言うと影虎はある事に気が付いた。

「そう言えばお前、空間切れるじゃん!!それで帰れねぇのか?」

俺がそう言うと陽はため息をついて

「それを言うなら君も簡単に世界だろうが時間だろうが渡れるだろ?」

それを言われて俺は飛びあがった、そうだった・・・俺、いろいろ出来たじゃん

そう思いすぐに帰ろうとしたら陽に肩を掴まれ

「だが、この状況で誰かが下手に脱出してみなさい・・ルルイエが現実世界に現れて1分で世界終わりますよ?」

と少し怒られた・・・そうだった・・・

「もしそんなことして瑠奈が死ぬような事が起こったら瑠奈は生き返らせますがあなたを殺しますよ?」

と陽がそう脅してきた・・・死なない相手に殺すよ?って言うのも微妙だ・・て言うか陽の奴、いつもの紅茶タイムが取れないから機嫌悪いのかね・・・

「とりあえず、前みたいにクトゥルフを惨殺するんだな?」

「いえ、以前それをしての今回ですから二度と浮上しないように滅ぼしましょう。ていうかぶっちゃけ人類には到底無理な旧支配者の殲滅もやってしまいましょう。」

「あぁそうだな。」

俺がそれに賛同すると陽は俺の背負っている椿を見てクスリと笑うと

「・・可愛らしい子ですね。「いきなりなんだ?お前が酷く人間らしい」君のような破天荒な化け物にはその子のような優しそうな子が本当にお似合いだと思いましてね。まぁ大抵は私に任せておいてください・・」

とそう陽は言いながらまた、無言になって歩き始めた。

なにを思ったのかこいつにも多少の変化はあるらしい。神生徒会の中で一番落ち着いていて文句も言わずに自分から働くのに誰よりも意思が固くてゆづらない・・男

相変わらずよくわからない奴だ。

つづく

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ）（後書き）

今回は、シリーズです。

ルルイエの遺跡に招かれたレベル６のお話です。

次回もお楽しみに。

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ２）（前書き）

本日もルルイエです。

それではどうぞ

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ2）

「いやぁあああああ~！！！！あ！？君達！！この気持ち悪のどうにかしろ！！」

と俺らの方向に悲鳴を上げながら水色のふんわりとした肩までの短いツインテールの眠っている、すずみ　華音を宙に浮いた傘の上に乗せ自身も飛びながら女の子らしい悲鳴を上げている天音　廻黎が俺と陽を見つけすぐに飛んで来た

そして、その後ろには、外見は長い触手に取り囲まれた、大きな緑色の一つ目のくねくねした化け物、生きている暗黒を思わせる塊であり、そこから好きなように偽足や触手を伸ばしてくる化け物が天音　廻黎を追いかけていた・・そして、追いかけられて居る廻黎は、眼に涙をためながら俺らに任せてきた

「「メンドくさい」」

と俺と陽は同時に言いながらもその触手の一本一本を刀で切り落とし眼の部分に突き刺し殺し始めた。

それから3分くらい殺しまわてあらかた殺し終えると俺と陽は普段の１０倍は疲れたのでその場に座り込んでしまった

すると天音　廻黎が近寄ってきて「はぁはぁ・・・なんて恐ろしい生き物だ・・あのウネウネ、あのクネクネ、そして、私を見つめる大きい気持ちの悪い目、あんなおぞましい物が存在していたなんて」

と深呼吸しながら汗を流していた。トラウマになったようだ・・・

まぁあれはあれでキモさマックスだけど・・・強いしな・・

「この文でしたらそろそろ、我々（レベル６）がそろうのも時間の問題ですかね」

「あぁ、そういえば月明　灯ならさっき途中で見た」

と陽がそう言うと天音　廻黎が答えた。・・・・？

「「ちなみに灯さんは？」」

「あぁなんか気持ちの悪い生き物に睨まれると泡を吹いて気絶してた。」

「「バカ野郎！！！」」

天音　廻黎の冷静な返答に俺と陽はさすがに灯の野郎が危ないと思い廻黎の両腕を掴んで走った！！レベル６に情をかけるのは意味がないが・・灯くらい大人しい奴が居なくなると人間関係というか化け物関係のバランスが崩れる・・・それだけは嫌だ・・・少しでも両親のある奴を残したい。どうやらそれは陽も同じようで俺と陽は全力で走った。

現状戦力、レベル６　陽、廻黎（気持ち悪いの嫌いで戦力にならない）俺（椿を背負っていて戦力低下）、気絶した椿と華音（お荷物とは言わないが動かないので荷物。）

さぁ絶望的か？

ふ、陽が居るだろ？アイツは一人で全員を守るなんてお茶の子さいさいなのだ。

その認識が甘かったのだろう、今度は、人間の倍以上の球状の胴体を持ち、カニの鋏のような6本の曲がりくねった脚を持つ頭部には三角に位置する3個の魚眼と、両生類のようなエラがあり全身に黒くて細いヘビのような触手が密生してあり、特に鼻の下に集中していて鼻は長さ1フィートにも及び、この器官でエサを捕獲し、全身の触手で獲物の血液を吸収するという化け物が居て

「「陽（副会長）、頼んだ」」

と俺と会長（廻黎）が言うと陽は俺と廻黎の後ろに立って居た

そして、そこから一歩も動かない陽に俺と天音　廻黎は首をかしげた・・・

「私は実は・・・海老アレルギーでして・・・その・・・影虎君？」

と俺に向かって言ってきたが

「俺も無理だ・・・奴には蛇の触手がある・・・・以前来た時、半人半蛇の蛇の神も俺苦手じゃん？ていうことで…」

「あぁちなみに私も無理だあの両生類のようなぬるぬるボディは生理的に無理だ。」

「「会長！！」」

「ギュニュアアア」

（（（ギニア！？））））

希望は絶たれたかと思った時、俺らに近寄ってきたカニちゃんを白い波動がぶつかりブッ飛ばしていた

ちなみにそのカニちゃんの叫び声に俺たち三人の心は一つになった。

【やぁ、みんな♪元気♪お？まさかマリアまで居るとはね】

と天上に片手でぶら下がっているシアンが居たそして、シアンが手を離して下りてきた奴の手を見るとオリーブ色の怪人のような腕になっていた・・・ん？

「シアン【ん？なんだい？】その背中の・・【あぁこの子は少し面白いから運んでるんだよ。それにしてもなぜマリアまで此処に？】どうやら今回は俺たちだけじゃないらしい。て言うかお前まだこいつの事狙ってるのか？」

【さぁ？】

そうシアンが言った瞬間に俺は椿を地面に置いて次の瞬間に俺は、両手を大きく横に開き足を前に出し人間を捨て攻撃しようとした時、俺の体黒い波動が噴出してその瞬間にシアンもこの前と同じように白い波動のようなものを出してきてお互いの力場と力場がぶつかり合った。

その瞬間に壁や天井を張ってこっそり近づいてきていた子供ぐらいの大きさの、人間型のミイラのような姿をしている体中皺だらけで、1度も呼吸したことが無い中絶胎児のようで手の先には骨のような鉤爪がついており、腕は常に真っ直ぐ前に伸ばされている生き物が全て砂になった。

それを見た瞬間に俺とシアンの意識がそがれ力と力がお互いに消え

「お二人ともそれくらいにしておきましょう。こんなところで戦っていては後半戦まで持ちません」

「わかったよ・・」【そうそう、短気は損気なのさ♪】

そう陽に言われ納得したがシアンの野郎は腹が立つ・・・・・・と思い足を踏んでやろうと持った矢先

ズゴゴゴゴグラグラグラグラと急に洞窟・・というか全てが揺れ始めた・・・そして、天上の辺りに穴が出来たので俺たち全員はそこから飛び出ると

一つの島の大きな山の噴火口のような場所から出た俺たちの目にひろがったのは・・広大な清潔感のない黒い海と高い波・・・そして、巨大なアンモナイト状の頭部に上下逆さまの顔がついているような姿をしており、触腕と長い鼻、蛸の目を持ち、胴体は鱗と皺に覆われた両脇に触手が生えまた、海に浸かった体からは鋏状の巨大な腕が伸びているめちゃくちゃ巨大な怪物が黒焦げになってブクブクと海の底に沈んでいった

【あらら、どうやら暮日チャンと灯チャンが殺したようだね】

そう俺たちの横でシアンがそう呟くと確かに怪物の真上に白銀の光を身に纏い、背中に備わる伸縮自在の銀翼の力で時空超越すら可能にし、神業の如き奇跡を発現させ全身がほぼ銀一色で、赤いラインのような胸部で、眼に3本の縦筋が入っているという独特の眼身体モールドは筋肉質に施され、黒いラインも入っている。背部の翼状

に据え付けられた翼は形状は所謂横に広がる翼ではなく、仏像の後光のような、上に伸びた形となって頭部ラインは頭部上部左右の装飾内の小さな空きスペースがみられ・・偉大な存在のような雰囲気を醸し出す姿の暮日と

その横に全身が赤い煙のようなものに包まれ。黒い右腕と白い左腕を持ち、頭部から霞のような髪を滾らせ天女の衣のようなものを纏いまるで背後に大量の魑魅魍魎を纏っているかのような巨大な闇を背後に持ち闇の中からたくさんの何かが覗いているような女神のような魔女のようなイメージを思い浮かばせる女性の姿をした人ならぬ者のような姿の灯が浮いていた。

それを見て俺たちは安心ではなく次に来る脅威に構えていた。

邪神であるガタノソアを倒せば次に出てくるのは本命で俺たちを此処に呼び出した

ザザザザザァアアアと海底の奥深くから現れたするものとされた。

タコに似た頭部、イカのような触腕を無数に生やした顔、巨大な鉤爪のある手足、ぬらぬらした鱗に覆われた山のように大きなゴム状の身体、背にはコウモリのような細い翼を持つ怪物、クトゥルフが浮上した。この怪物は強力なテレパシー能力を持っていて人間を確実に狂わせる事が出来、全てを死に居たらしめる毒素を体中から発し世界を2秒で死だけに変える事が出来る

その瞬間に津波が起こり島の下の方に居た化け物どもは津波にのまれて流されていき島の頂上に居る俺たちだけは残った。

「とりあえずクトゥルフを・・・・・食い殺す!!あれは、有害だ!!」

「「同意」」

俺がそう言って『異世界樹(ユグドラシル)』の巨大な世界樹を呼び出しそれをクトゥルフの真上に落としたその時、陽と廻黎が水を渡り『異世界樹(ユグドラシル)』に潰されかけているクトゥルフの触手を陽が斬って廻黎が蝙蝠の翼に穴をあけていた。

それを見て暮日と灯が二人に混ざって化け物を4人でタコ殴りにしていた・・・

【相変わらず激しいよね~】

「あぁただ、なんでお前が剣菱の奴を背負ってる?椿から乗りかえたのか?」

【う~ん、そんなつもりはないよ。ただ・・「なんだ?」なんとなくかな】

「お前に深刻な話をしようとした俺がバカだった・・・ついでに言うと今度椿を狙いやがったらこの前の倍は痛いの食らわせ…」

俺がシアンにそう言おうかと思った時、シアンはすでにおらず

超巨大なオリーブ色の巨人(シアン・・多分、不完全体)がクトゥルフに両手のこぶしを組んでそれを上から下に叩きつけていた。

「グルォオオ」

とクトゥルフも体力のハサミや触手で5人に襲いかかろうとしたが

「俺がさせねぇ！！」

俺は世界樹サイズのセフィロトでクトゥルフを縛り拘束した。

そして、次の瞬間に灯が灯の恐怖を実体化した腐った羊のような大きなまん丸の生き物を襲わせ暮日は、急に世界のあちらこちらをずらしそのずれに触手やハサミ、クトゥルフの体を拘束し

陽が全速力でバサバサと触手を日本刀（模造刀）で切り始め廻黎は、自らの両目を輝かせ触手の再生を始めようとしたクトゥルフの再生を『時の魔眼』という陽の時間操作の縮小版を使用し再生を完全にストップさせながらウネウネしている部分以外を執拗に殴っていた。

そして、シアンはシアンで巨大な姿ではなくなり人の姿で身体の周りからいろんな攻撃を仕掛けていた。というよりも全てが運がよく勝手に発揮されて居たのだ。

それどころかシアンの真上に銀色の靄ごしに浮かぶ、小さな炎がきらめく「貌」として人の目に映る。

その貌は未知の幾何学によって構成された図形のようで、まったく人間とかけ離れてその黒々とした目は神秘的な知性をたたえており、見る者に安心感を与えるような怪物が現れた

【なんだこいつ！！】

とシアンも大きく驚いていたがその怪物は、クトゥルフに体当たりしてその巨体を炎で包み込んだ

どうやら味方の化け物をシアンは偶然に呼び出したようだ。

「ナイスだ・・・咲け（裂け）紅桜・・・・青桜？」

「グォオオオオオオ」

『異世界樹（ユグドラシル）』を使いクトゥルフの体に枝を刺しこみ内部で成長させ体中を貫き血を噴き出させたが血の色が青かったので俺は内心驚いたそれに合わせて暮日、陽、灯、廻黎も己に出来る殺傷力の高い攻撃らしきものをしかけた。以前は、適当に攻撃して止めを刺したと思っていたのだ・・・だからこそ今度は化け物の死なないこの世界でも確実にとどめをさせる力で。

するとさすがに力尽きたのかクトゥルフは息絶えブクブクと水の底に沈み始めルルイエの遺跡自体が沈み始めた・・・。

そして、この世界の主が永遠に近い眠りに就いた時、主が沈んだ場所から黒い煙が噴き出し俺らを包み込んだ

「「【「終わったか。」】」」と男四人が言うと「「今回は完全に終わったよ（次は１０年後くらいに目覚めるかもですね）」」と女二人が答えその瞬間に俺は・・いや、俺と椿は自室に居た・・・

何事もなかったかのように椿はベッドの上で寝息を立てながら眠っており・・俺はというと、全身が真っ黒になっていた・・・

「ハァ~・・・最悪だ・・・シャワー浴びようかな・・こいつ、ずっと寝てやがったよ・・」

俺は、隣で寝ている椿の寝顔を見てなんとなく鼻をつまんでやると椿は苦しそうに唸り始めたのですぐに離して服を脱ぎながら風呂場に行き朝シャワーを浴びた。

ちょっと不思議と驚きと気持ち悪さの混ざりあったスリリングな朝だった。

つづく

古代都市（浮上する超古大都市ルルイエ２）（後書き）

はいルルイエ編終了です。おもにクトゥルフ神話に登場する化け物たちを登場させ化け物ＶＳ化け物のお話でした。

ではまた。

脳内分泌（恐ろしき忍の…）（前書き）

今回はネタ話です。

ルルイエから帰った後のお話です。

脳内分泌（恐ろしき忍の…）

ある日、影虎と一真は、椿と天野のショッピングに連れ回されていた。ちなみに二人とも私服である。

俺は疲労で疲れていて一真も一真でなぜか疲れ切った表情をしていた。そんな2人をほったらかして

2人は先先と何処か得行ってしまったのだ。一真は完全に気疲れしてベンチに腰お下ろし

影虎に関しては、素直に椿の純粋な姿に喜んでいた。

そして、携帯で一応椿達に連絡を取り、絡まれたりしたら可哀想なので出来る限り早く戻って来るようにと何かあったら大声を上げろと椿に言って携帯を閉じていた。

「はぁ・・・女の買い物に付き合うのって・・めんどうだ・・」

と一真が疲れきった声でそう言うと影虎は、「別に。本当に好きな奴となら好きな奴の好きな時間を共有するのも楽しいがな」

と影虎がベンチの横の電灯の柱にもたれながらコーヒーを飲むと一真と影虎の姿を見てショピングに来たり映画を見に来たりしていた女性の方々は、2人を見るとキャーカッコイイ、など中々居ないイケメン2人組で目の保養をしていた。

そんな2人にある一人の女が近寄った。

身長１７０位で長い黒髪をパーマセミロングにし、赤と黒の胸元の大きく開いたお洒落な服を着て派手なバッグを持っておりイヤリングとネックレスをしている少し童顔な美人が影虎と一真の前に来て

「ねぇ君達高校生？なんだか暇そうだね。お姉さんと遊びにいかない？」

とあえて胸元を強調するかのような角度で一真と影虎にそう言った・・・逆ナンパである。

「いや、その、俺は「え？なに？聞こえなかったな？」〔ムギュ〕うわちょっと！！」

一真が断ろうとした時聞こえないと言って一真に近寄りその胸を一真の腕に押し付けていたのだ。

一真はその感触と大人を思わせる香水やら色気に顔を真っ赤にしてあたふたしていた。それを見て女は一人は落とせると認識して

今度は影虎に意識を集中して腕を勝手に影虎の腕に絡め「ねぇ君もその子と一緒にお姉さんと遊びに行こうよ♪」とお色気作戦に出たが影虎は一真とは違い顔色一つ眉一つ動かさずに

「俺、彼女居るんで離して貰えない？」「え？・・そんなこと言ってもう長い事二人で居るの知ってるんだよ？それにその彼女さんよりお姉さんの方がきっと楽しいよ♪君、プレイボーイぽいからお姉さんと一時だけ楽しまない？」

と影虎の返答に少し困ったがすぐに誘惑し始めた。しかし、影虎は無理に絡まれた腕を振り払い

「俺・・あんた見たいな真面目に付き合う気もないのに手当たり次第に手を伸ばす女嫌いなんだよね裏表も激しそうだし性格も悪そう、第一あんたみたいなやつ一度だって愛してるなんか言われた事ないだろ?あきらかに男遊び大好きの尻軽女って感じだもんな♪」

「な!?」

と毒舌を吐くと女は驚いて硬直し横に居た一真はようやく緩んだ表情をひきつらせながら影虎を見ていた

「「おぉ~い」」

するとその時、公園の入口の方で私服の椿と天野が手を振りながら入って着てそれを見て影虎はやっと来たかと喜びの表情を見せ一真はよかった助かったと安心したその時だ。

チュ

「う!?」

女が公園の入口に居る天野と椿を見るとなにを思ったのか一真に口づけしたのだ。一真は慌てて突き飛ばそうとしたがその前に一真の意識が飛んだ

一真が倒れたのを見ると女はくるりと振り返りいきなりの事に驚いている影虎に背伸びをして

チュ「ウグ!?」

この一連の行動にはさすがに影虎もびっくりした。

その光景を見ていた椿と天野・・天野は荷物を地面に落して固まり椿に関しては「イヤァアアアア」と言いながら影虎の元に走って来て女を突き飛ばし影虎の口に背伸びをしてハンカチを当てゴシゴシト拭いていた。

しかし、影虎も意識が飛びかけたが何とか踏ん張り椿に支えられながら立っていて

「イテテ、いきなり突き飛ばす事ないでしょお譲ちゃん。」

と椿に突き飛ばされこけた女が服に付いたほこりを払いながらそう言うと椿は女の方向にキッと睨みを利かせて小さなからっで影虎の前に躍り出て守ろうとしていた

椿は完全にこの目の前に居る見ただけでなぜか好かない女を敵だと認識したのだ

その後ろで影虎は頭を押さえながらふらついていた

そう、影虎も一真も女にキスと同時に何かをされたのだ

「お前いったい影虎になにした!?」

と椿が頬をすこし膨らませ顔を真っ赤にしながら涙目で女に聞くと女はクスッと笑い厭らしい大人な笑みを浮かべ

「あぁ、おねえさんの言うことを何でも聞くようにしたのよ♪カワイイお譲さん」

と余裕の笑みを向けながら椿にそう言った

その時、葵もすでに動き出し近づいていたので女の言葉を聞いてまた固まった

「言う事を聞くようにした!?」

と椿が睨みながら言うと女はまた笑い

「そんな可愛らしい表情で睨んでも恐くもないわよ?」

そうバカにされた瞬間に椿はもう限界だった。プチんと言う音が頭の中でなり何かがはじけ飛んだ

「そう・・そうよね・・・なら大人の私なら怖いかしらね?」

と首をかしげながら普段とは違う言葉使いで言うと急に表情が凍りつき目がキラキラしたパッチとした目から鋭くまるで刺すかのような瞳で睨んだ。

「「え?」」

その目と表情に天野と女は驚きいっぽ後ろに下がった。天野はただ椿の見た事のない表情に驚いただけだったが女はというと目の前居るさっきまで可愛らしい表情だった少女の突然の変化とその冷たい目を出来る人物を一人知っているのだ・・物凄くそっくりな目をする女を・・

「はぁ・・・なんだったんでしょうか今の頭痛は・・・あれ?服が

ブカブカに・・・」

と椿の後ろで頭を抱えていた影虎がそう言ったが声が女の様になっておりというか何故か影千代の姿になっており頬が少しあからんでおり口調が女のようになっていたのだ。

「「「え？」」」

急に影千代になった事に驚く天野、男だったのに急に女の子に入れ替わった事に驚いた女、そして、自分の真後ろに居る影千代があまりにもお淑やかでいつもより綺麗だった事に驚いた椿は飛びあがった。

「う、う~ん、はぁ？何この状況？あぁん？なに勝手なこと言ってるんだよ今は私の時間だろうが！！あれ以来一度も出さないとかふざけんな！！ぷっ」

「「「えぇ！！！」」」

すると今度はベンチで倒れていた一真が目を覚ましたのだがその姿は一美状態でまたしても女の姿だった。

しかもこちらはこちらでいつもとは違い乱暴な言葉使いで誰かと会話しているようだった。座り方もラフで頭を掻きながらつばを吐いていた。どうやらこちらは、グレてしまったらしい。

それにも椿と天野と女は驚いていた。

「「二人になにした！？（したの！！）」」

と椿と天野が泣きそうな表情で犯人の女に問い詰めたが女自身さっきから驚いているのだから出てくる答えは・・・「ごめん、わかんない」

「あんたふざけないでよ!!」「そうだよ!!」

と椿と天野が怒ると女はさすがに申し訳ない事してしまったと思い

「実は・・・私の能力であの背の高い方を女性ホルモンの分泌を多くして優しく平均くらいの身長の子を男性ホルモンを少し多くして野性的にしようとしただけなの・・・それが何故か・・女の子になって」

と女はマジでヤバいと想い冷や汗をかいていた・・今までも自分の容姿でも引っかからない男はたくさん居てそんな時は天から授かったこの脳内物質の分泌を操る能力で男を操っては、弄んで恋人たちを引き裂いて遊んだりもしていた。

だが今回はパラレルレアクラスのレアケース・・・

「「どうなるの~!?」」

と椿と天野が頭を抱えていると

ホルモンのせいでお淑やかになってしまった影千代がホルモンのせいでドロップアウトしている一美に近寄り

「あの、わた、・・俺たちはどうなったんでしょうね?」

と現状が全く理解できていない影千代・・今まで何度も違う人格に

なってきたが今回は、脳内物質のせいで影虎の性格が変化させられたため奇跡的に天然さんになったようだ。

「しるか!!ていうか気安く話しかけんな」

とベンチの上に行儀悪く片足ついて座り影千代を睨みつけてそう言った

「はぁ・・・すみません。」

「なんだその意味深なため息は!!」

ガァンガシャ

「うわ!?」

と影千代がため息の後に謝ると一美の額に青筋が立ちガンとベンチの横にあったゴミ箱を蹴り飛ばした

それに対して影千代は驚き少しビビって引いた・・どうやら影虎の性格をいじると天然、お淑やか、怖がりなど元が男らしかったので女らしくなったようである。

すると一美が立ち上がって影千代の桜色の長髪を引っ張り引き寄せ涙が出ている影千代に

「なんだよこの髪は!!それに無駄に背馬ばかり高くてよそんなに人を見降ろすのが好きか?「結構好きだけど」ふざけんな!!それに私の気持ち踏みにじりやがって・・ゆるせねぇ~」

「えぇ!!、あれはもう片が付いたでしょう?「うるせぇ」はい!はい!、すみません!!って痛った!?イタタタ、抜ける剥げる~」

影千代が口ごたえしようとすると一美はさらに髪の毛を引っ張った。影千代は痛がってはいるものの一応は笑っていた・・・怒れなくなっているのだ。

それに比べて一美はすぐにキレる乱暴者の性格になってしまったのだ。

「「どうしよう・・・」」

と椿も天野も止めに入りにくそうにしていてその状況で女は、さすがにこのまま逃げるのはどうか?と常識にしたがい自分が唯一頼れる人物に5カ月ぶりに電話をかけていた。

プルルルプルルル・・ガチャ

『はい、桜井忍ですが?どちら様?』

と忍が電話に出た瞬間に女はにっこりと笑い。

「やぁ久しぶりね『お姉ちゃん』♪私よ心(ココロ)よ♪」

と言うと電話の向こうで椅子が倒れたような音がしてすぐに心には実姉である忍が驚いて転んだことぉ察して

「転んでないで話を聞いてよ『いきなり何よ?あんた、今まで何処に居たわけ?家は?仕事は?学校は?』・・今は適当に大学通ってるよ。家に関してはお姉ちゃんの知っている通り家出中♪仕事はま

ぁ彩音っちの裏の仕事と同じ事業で生計立ててるよ。やっぱり桜井の血は、商売の神に恵まれてるよね~ きっちりビジネスとして成り立つもん。」

『それで一体何なの?心』

そう電話越しに忍が聞くと

「そうだそうだ、本題ね、実はさっき喰おうと思っていたおいしそうな男の子二人にね私の能力を使ったら『使ったら?』女の子になったんだけど助けてお姉ちゃん!!」

そう心が電話なのに姉に両手を合わせてお願いすると忍は・・・

『片方はピンクで片方は青髪?』

「うん、て言うか何でわかったの?」

忍の返答に心は正直驚いていた。そして、さらなる忍の返答は・・・

『あんた・・ふざけるなよ?その二人は私の子供よ!!』

そう忍が大声で言うと心は携帯を耳から離し少し考え

「うそ!!マジで?つまりは、あの私の趣味にドストライクな2人は義兄さんと姉さんの子供なの?そういえば義兄さんに似てるわ・・」

『ていうかあんた、私の旦那にあった時、3歳よ?覚えてるの?』

と忍が驚いていたが心の反応は

「あの現在失踪した人でしょ?覚えてるよ～子供だった私が一目惚れしたもん。・・じゃなくて迎えに来て欲しいんだけど『わかった・・それからあんたとは話がしたいわね』じゃね～」

ブチと通話をやめ心は、静かに４人を眺めていた

キレながら桜色の髪を引っ張る少女と髪を引っ張られ痛がっている背の高い女性、その二人を何とかしようとしている二人の少女、

「そういえば、あの長髪のおチビちゃんも姉さんの怒った時とまったく同じ目をしたからあの子も・・・あぁ～あの白髪の子か～面影あり過ぎ納得♪」

と先ほどとは違い４人中3人の赤ん坊の姿を見た事があるので急に親近感がわいていた・・

それから１０分間くらい経つと大型のワンボックスに乗った忍が来て現在の状況に呆れながらとりあえず5人を車に乗せ病院ではなく一番広い忍の家に連れて行った。

・・・

「そうお姉さんの私が心で～す。まったくもって不幸よね～こんな姉の妹だなんて」

忍の家に行きリビングに全員が座り影千代と一美は、二人とも中央のソファーに座らされ忍と心、天野と椿

忍　心
テーブル　影
テーブル　一
椿　葵

という順番に座らされた

そして、２人が姉妹だと言う衝撃発表で影千代一美天野椿の４人が驚き忍と心は二人とも肘をつき顎を手に載せながら左右逆で同じしぐさでそう言った

「そういえば・・似てるかも」

「よく見たら仕草とかもそっくりだ」

と天野と椿が言うと2人は机に乗り出して「「似てないわよ!!」」とハモリながらそう言った。

「あたしがこんな３０間近の叔母さんとそっくりってこと?」

「誰がおばさんだこのガキ!!」

「その必死になってるところがオバさんぽ「そんなあんたは年増よ」

なんだとこのオバさんめ!!」

と忍と心は二人で取っ組み合いを始めた。

・・・

「それであんたの能力の効力は？」

「あぁそれは丸1日よ。でも今回はいつまでか私にもわからない。」

「それじゃ戻らないってこともあるんですか！？」

「そんな、ふざけんな！！」

忍の質問に心が答え天野が泣きそうになり椿が怒りから体中から炎を出し忍の家の家具を吹っ飛ばした。

吹っ飛んで来た机などを蹴りで止めていた忍は椿を落ち着かせ椅子に座らされた。

「大丈夫、きっともどるから」

「うぐ・・・・戻らなかったら？もし戻らなかったら？」

「・・・・・絶対に大丈夫、大丈夫じゃなきゃだめなの・・」

と忍が言い聞かせた。

その時、心が笑顔で立ち上がり「さてと、私はそろそろ帰ろうかな」と言った

「待ってくださいよ！！誰のせいでこんなことになったと思ってるんですか！？」

と天野が怒りながら立ち上がり心の胸倉をつかんだ。

すると心は悪意に満ちた笑みを向けながら

天野の腕を掴み関節わざを決め「あぁこんなことになったのは・・幸せそうなあなた達のせいかな♪「イタイ・・」じゃねお姉ちゃん♪」

「キャ」

そう言って天野をソファーに投げて家を出て行った。

「あの女!!」

と椿が追いかけようとしたが忍に止められた。

「やめておきなさい・・あの子私と同じで腕っ節だけは強いしアイツが居ても何もできないわよ」

「「そういうんなら・・・」」

・・・

と忍が言って「早くしろよ!!」と一美が部屋に戻った

そして、「「「あんな一美ちゃんに嫌・・」」」と天野と椿と忍は三人とも頭をかかえてそう言った。

「そういえば影虎どうしてるのかな?さっきからうんともすんとも聞こえない・・ちょっと見てくるね」

と椿が影千代の部屋に向かうとテレビの前で影千代がお腹を押さえて倒れていた

「影千代!!!どうした!!!お腹痛いのか!!!」

と椿が問い詰めると冷や汗をかきながら苦しんでいる影千代はコクリと頷き

「いま、忍を「絶対に・・ダメ」え?なんで?「・・・恥ずかしいから」え?どう・・・まさか・・・また?」

と椿が影千代のお腹に触りながらそう言うとコクリと頷いた。その瞬間に椿は可愛らしい影千代に抱きつきたくなったが心配の方が強いのでやめた。

影千代には月経が来ていたのだ・・・本来男である影虎だが女になると生物学的には、女性になるので生理現象も必然的に起こり現在影千代は激しい鈍痛で身動きできなく唸っていた

「とりあえず・・鎮痛剤と必要なもの持ってくるね」

・・・

・・・

それから椿が世話を焼き一応影千代の容体は収まった。

・・・

れた。

・・・

分が見られるのが恥ずかしく身体を隠すように隠れていた。

それから羞恥に浸りながらのぼせてしまった一美と影千代は即刻退場し忍たちもしばらく浸かると出てきてマッサージなどを受けていた。

ちなみに途中で忍と椿は胸が大きく肩がこると言う話をして影千代や一美も確かに胸が今現在重く肩がこりそうと言う話をしていたら横で天野さんは胸を両手の平でおさえため息をつき絶句していたのは誰も知らない。

それからしばらくして全員で涼んでいると・・・ピピピと忍の携帯にメッセージが届いた。

「あら、彩音から・・なにかしら・・・・」

そう言って忍が画面を開くと椿と天野も少し気になったのかのぞくとそこには、『あんたの所に心ちゃん行ったでしょ?あのこ、もしかしてなんかしてない?もしなんかされたんなら心ちゃんにもう一度、接触して解除して貰ったらいいよ♪・・・・もしかして心ちゃん逃げちゃったりしてない?』

と心の能力の内容について書かれていた・・・

その瞬間に忍は自身と同じ悪女の血を継ぐ人を不幸にするのが大好きな妹の性格を忘れていた・・・

そして、忍が後ろを見ると椿と天野がすでにいなかったのだ・・

「あ、行っちゃった・・・」

「どうしたんですか？」

とお淑やかな影千代が聞くと忍はきっちりと説明した。すると影千代は少しだけ悩んでピクンと何かを察知すると

「判りました・・・じゃ今すぐある場所の屋上に連れて行ってください」

と笑顔で行った

「「へ？」」

と一美と忍は意味がわからず首をかしげていた。この時影虎は、女の勘たる物によって全てを解決する方法を察知したのだ。

・・・

「もう、なんであなた達まできちゃうかな~ お姉さん困らせたいの？」

「「あんたのせいだろ!!」」ヅゥイン

「「キャ!?」」

「頭出さない・・もう~ お荷物ちゃん達♪」

椿と天野が怒りで思わず顔を出してしまった時銃弾が二人の顔の間をすり抜けて心が飛び出し二人の頭を押さえた

そう心が言った瞬間に椿が今まで史上最強のキレ方をして炎を体から出し追手に向かって炎の大蛇を仕向けたのだ。

「うわぁあ」

と何人かは椿の焔の蛇に襲われ火に包まれながら苦しんでいてそれを見た心は「やる~♪」と表彰していて椿は怒りから肩を上下に震わせていたがまた銃撃が来たので

天野が二人の襟を掴んで引っ張って逃げ出した。

ダアアダダンと未だに追ってくる銃撃にふエ~ンと天野は泣きながら必死に逃げていた・・以前ならおお泣きしながらガチガチに身体が硬直してしまっていたのだが今は少し慣れてしまっていた。

そして、必死に逃げる天野たちだが相手もプロなので中々逃げられずむしろ追い込まれてすらいた

「不味いわね・・・完全に追い込まれた・・」

「行き止まりか・・」

「どうしよう」

と三人が焦っているとあらゆる角度から刺客があらわれ初め

もう駄目かと椿と天野が泣きそうになったその時、

「ぐわ」

と資格の一人が急に吹っ飛んで気絶したのだ・・・それを見て資格たちは辺りを見渡すが誰も居ないのだ

するとまた、「うわ」と一人が吹っ飛んだ・・・

夜と言う時間に対応して暗視ゴーグルをしている資格たちでも現在の攻撃がどこかｒ来ているのかわからない状況で

急に椿の携帯にメールが来てそこには、

『援護は私が・・・俺がしますので犯人を捕まえて置いていてくださいちなみに私はそこから３００Ｍはなれたビルの屋上だよ）＾ｏ＾（』

と影虎らしくない可愛らしいメールのないように椿はほっとしながら心の腕を掴んだ

そして、「やぁココロちゃん?」

「うそ！！忍ねえ！！」

急に透明になっていた忍が姿を現し心の体を椿と一緒に捕まえた

その瞬間に天野ももう大丈夫と安心したのだ

・・・

でマイホーム集合と送ってキチンと警備員（アンチスキル）が来るのを屋上から見張り途中で目を覚ました男に狙撃し眠らせてから捕まったのを目撃してから一美にライフルを持たせて（重くて影千代では持てない）せっせとプロのような手際の良さで去っていき当たり前のようにバスに乗り家に帰った。

・・・

と書かれて居たのは誰も知らない

つづく

桜井　心

声優　斎藤千和

年齢１８

身長１６８

肩ぐらいのミディアムヘア

顔は、年の割には童顔でスタイルは、抜群。

性格が子供っぽい上に自己中、恋愛に対して積極を通り越して極端で他人から奪うのが大好きで手段を得らばない

能力『脳内分泌（ブレインアロー）』レベル４

キスをした相手の２時間だけ相手の脳内物質（ホルモンやドーパミンなど）を自在に操作できる能

力、相手の警戒心を強制的に解いたり相手を混乱させたり落ち着かせたり色々できる。

学園都市の高校に通っていて、逆ナンパを繰り返しているとある日、自分の好みに極ストライクな二人組（影虎と一真）を見つけ声をかけたが片方（影虎）に全く相手にされなかった後に椿と葵が来て悪い癖が出て影虎と一真の両方にキスをし操ろうとしたが失敗した。

脳内分泌（恐ろしき忍の…）（後書き）

今回は忍の妹登場でした。忍の一族はどうやらトラブルメイカーの一族です。

それではまた。

来週もお楽しみに♪

鬼対怪物（遂に見えてしまった悪霊・・・死神の男と死に見放された男）（前書き）

すみません、パソコンが急に壊れて昨日投稿できませんでした。

本当にすみません。今度からはＰＣの調子にも気を使い投稿が遅れる事がない様にします。

今回はどらごん５６４さんのとある雷光の白銀夜叉（Ｗｈｉｔｅ Ｏｒｇｅｒ）の主役の榎本千影（エノモトチカゲ）が登場します。

今回は完全な番外編です。

ではどうぞ

鬼対怪物（遂に見えてしまった悪霊・・・死神の男と死に見放された男）

見てしまった・・・俺はただ、目が痛かっただけなのに…眼科に行こうとしただけなのに・・・

市街地のど真ん中を・・・数も多く全て同じ姿で頭から黒い布状のものをすっぽりかぶり、鼻の部分がとがった仮面をつけている生き物でない何か・・ていうか幽霊に近いと思う・・・悪霊だワーイ＼（＾ｏ＾）／

「どうする？」

と学校の屋上でそれらを眺めていて朝から目が痛く擦っているとそれが見え誰もいないにもかかわらず呟いた・・・類は友を呼ぶ・・・つまりは俺（化け物）は化け物を引き寄せる才能があるのだ

「ていうか・・・こんなタイプの物が学園都市を真昼間からうろついているって・・・すごいな~」

と俺は、お茶があればここで飲んでいるではないかというくらい落ち着いた・・・だってどう見ても雑魚のたぐいだし

「まぁいいや、有害そう・・絶滅タイムだ」

俺がそう言って体を起して立ち上がり屋上から飛び出そうかと思ったその時、ビュンと俺の横を赤がかった黒髪にまっ黒なウインドブレーカーとスラックスの服装で刀を鎖で下げていて、十字架のついた首輪をしている変わった男が飛び出して行った・・・

「？」

俺はそれを見て首をかしげていると男は遠くまで空を走っていき大きな仮面をした怪物に持っていた刀で切りかかった。

すると大きな仮面の化け物の仮面が真っ二つに割れてそいつはこの世から消えた・・・・

そして、一匹が消えると周りに居た大型のそれらは急に口を開いて口から真っ赤な閃光をそいつに向かって放っていたが男は急に刀を刃が１３本存在する、長く細い槍に変化させ瞬間移動のような動きで後ろに回り込みそいつの一匹の仮面を真後ろから切り裂いた

「なんだ？魔術とも能力とも違うよな～もしかして・・俺のこれと同じか？」

とその光景を眺めながら俺は屋上で自分の姿をおぞましい基本カラーは黒。全身が桜色と黒の鎧で４本の角と王冠、棘状のパーツのついた各部、全身に浮き出た桜色の血管状組織があり血管組織から桜色の優しい粒子が放出され続け黒き鎧からは黒く醜い瘴気が滲み出ていて赤色の瞳の奥には全てを燃え尽かせるような焔とその炎から出る黒い煙は破滅を意味し見たものは気が狂うほどで見た物に死を抱かせるような禍々しい怪物、とても人間には見えない姿という俺自身の本当の姿のようなものに変化した瞬間に仮面のそれらと黒の男が俺の方を戦いをすぐさまやめて向いて驚いていた・・・

「な、なにごと！？」

と俺は人間では無い進化した姿のまま驚いてキョドていると大型のそれらが赤い閃光を屋上に居る俺に目掛けてぶっ放してきた

その一発が俺の身体を飲み込んだが・・・・（なんだろう・・凄く・・・痒い）

そう思った俺は第二第三と来る赤い閃光を「ウワァアアアアアアシャァアアア」

と気合いと『異世界樹（ユグドラシル）』の粒子と黒いよくわからない煙のようなものを出しそれらを弾き返した

弾き返された仮面は自身の攻撃を喰らい仮面が割れ消滅した。

それを遠くから見ていた男は驚いていて大型の仮面の化け物たちが騒ぎだした時、俺は、人間の姿に戻ってすぐに『異世界樹（ユグドラシル）』を背中から生やし大空高くに飛びあがり

空中から急降下しながら仮面が撃って来る赤い閃光を回避しながら接近して男を見習って腕から『異世界樹（ユグドラシル）』の刃を出現させ仮面を真っ二つにし止まることなくもう一匹のほうは、腕力で首をもぎ取ったそして、すたっと別の場所に着陸すると二匹は綺麗にこの世から消えて無くなった

どうやら俺でも倒せるタイプらしい・・・そう思っていると残りの２０匹近くが全部俺に向かって赤い何かを打とうとしたので

黒の男が焦って再び高速移動をし罰さばっさと大型のそれを切り裂いていった。

そして、俺も椿が珍しく居る学校に攻撃しようとした馬鹿野郎（仮面の黒マント）を駆逐しようと思い『異世界樹（ユグドラシル）』を消し手首に噛み

ついて出血させそれを足で雑に伸ばして円を描きそこから死神先輩を現実背かに具現化させた

死神先輩が出たとたんに黒服の刀を持った男は停止し俺の方を見ていたがそんなのお構いなしで死神先輩が耳をふさぎたくなるような声を上げ

俺の真上で俺の動きに同調するかのように動き俺に重なると俺の姿はボロボロのマントと骸骨のマスクに覆われ死神先輩と俺の腕が上に上がった時、死神のアイテム、ただただ黒いだけの鎌を出しそれをくるくる途中で回していた

そして、俺が「もうちょっとでかいのが良いな・」

そう俺が言うと鎌の刃がどんどんと巨大になり最終的に学園都市の中心で一回転すれば学園都市が真っ二つになるほど巨大な鎌になった

俺はそれを大きく振りまわした

それはただの一閃・・・それだけ風を切る音もしないような不思議な鎌が動くと

次の瞬間には、仮面大きな奴の首が全て飛び体中が黒い煙のようになったかと思うと急にそれらが死神先輩の手元に集まり一つの弾になったかと思うとそれを死神先輩は喰ったのだ

(俺と合体してるのに・・・ていうか・・・こいつら中中うまいな)

と俺も若干驚いていた。・・・だってねぇ?

そう俺が思っていると俺の真後ろに先ほどの男が現れて刀を向けてきた

「お前・・虚(ほろう)か？」

と言ってきた俺はその言葉に首をかしげたが次の瞬間に死神先輩が男の刀を掴んで引き寄せ殴った・・

（人の体で何やってるんすか先輩！！）

俺が心の中で言うと先輩は「こいつらはな・・・死神なんだよ」と言った。

それも死神先輩とはまた違った死神らしい・・・やる事はほとんど同じだが元が人間かそうでないかの違いらしい・・・俺にまとわりついてくる物とは違うらしい・・・

一言に死神と言ってもいろいろあるんだな~ と思っていると死神先輩が急に気配を変えると・・

「この霊圧・・・やはり虚(ホロウ)でも死神でもない・・・・卍解・雷光白銀夜叉(らいこうはくぎんやしゃ)！！」

と急に男が体中からなんか変な光を出したかと思うと山羊のような角。

左手首の６６６の数字(ナンバー)。

白と黒が見事に半々になっている、死覇装(しはくしょう)。

手に持った、６本の刃を持つ、刀。

少し長めの八重歯というなんと言うか・・・夜叉（のような姿？に変化して先ほどとは何もかもが違った感じがした

「行くぜ・・・」

と男が言った瞬間に男が何やら強力な力の塊のような勢いで向かって来た、そして、刀を俺に向かって振り下ろしてきた

その瞬間に死神先輩（俺の体）が機敏に反応し

鎌を回転させ勢いよく刀にぶつけに行き斬撃を横に弾いて死神先輩の得意技の拳で男の体を殴り男の襟を掴んで頭突きを決め男を地面に落した

もちろん俺の体を勝手に使われたのでお痛いのは俺だ・・・

すると死神先輩は「同業者に殺されるのは面倒くさいし・・・なぁ・・コイツ喰っていいか？」

と死神先輩は面倒くさそうにそう言ってきた

「やめてください・・・ていうか・・・あいつまた・・・・・」

俺が下を向くと先ほどの男が「グォォォォォォォォ！」と雄たけびを上げると男の体から大量の光が出てそれが光の柱の陽になったかと思うと

いきなりボコボコと白い液体が男の身体を包み、顔を覆う真っ白で

凶暴そうで鋭い犬歯を生やした仮面。

両手に鋭い爪。

足から伸びる鋭い爪。

長く、丈夫そうな尻尾。

山羊のような角。

真っ白な翼。

変貌を遂げると、翼を羽ばたかせながら、大声で吠え俺の横に飛んで来た

「グォォォォォォォ！」

「・・・喰っていいか？最近なにも喰ってなくて俺骸骨になってるんだけど」

「駄目だ・・・・俺が喰いたくない（まずそう・・）だが・・・身に降りかかる火の粉は払わなきゃな♪行きますぜ・・・先輩！！」

俺がそう言うと死神先輩は、俺に完全に同調して鎌を高速で回転させ白い鬼の攻撃を弾き攻め込んだすると・・白い魔王のような男は尻尾にもう一本巨大な刀を持ってそれを俺にぶつけようとしてきたが

俺は俺で負けじと死神のマントに広がる死者と亡者の無念を骨の腕という形で実体化させそれを受け止め

死神先輩と分離して人間ではない

桜色のラインが張り巡らされた黒い鎧

血管組織から桜色の優しい粒子が放出され続け

黒く醜い瘴気が滲み出ていて

その瘴気から見え隠れする禍々しくも美しい巨大で強大な３５枚の
不均等に伸びる翼

赤色の瞳の奥には全てを燃え尽かせるような焔、

その炎から出る黒い煙は破滅を意味し見たものは気が狂うほどで見
た物に死を抱かせるような禍々しい…

まさに化け物（俺の本性のような姿）になりながら拳に力を入れて
白い鬼のような男の翼を引っ張り白い鬼の頭部を上から殴り衝撃で
落下しそうになる白い鬼の体を腕を伸ばして掴み腕を収縮させなが
ら引き寄せ殴ろうとすると身体を白い鬼に逸らされ交わされ尻尾に
持った刀と両手で持った刀で俺の上半身と左腕に斬りかかってきた
がガキンと俺の変質した皮膚に阻まれおれもやりかえすように両前
腕部には巨大な鉤爪と、両踵には伸縮自在の鉤爪を、展開して使用
し身体を激しく回転させながら攻撃すると白い鬼は刀で何度も俺の
激しい野性的な攻撃をはじき偶に入る一撃でも固い皮膚のようなも
ので防いでいたが一撃に力を込めて踵の鉤爪で攻撃すると腕が一本
吹っ飛び「グワァア」と悲鳴を上げたかと思うと急に腕が高速再生
しすぐに元の腕にもどり両手に刀を持ち空中で前転し尻尾で俺のガ
ードを弾きもう一回転するときににほんの刀で俺の両腕を斬り落と
そうとしてきたが俺の前に鎌を持った死神先輩が現れ鎌の柄で斬撃

を受け止めてくれた

「ウヲォオオオオ」

と雄たけびを上げながら白い鬼は死神先輩を倒そうとしていた・・

俺もそれに合わせて死神先輩の鎌のもう一本を受け取りそれを巨大化させそのまま攻撃を受けとめている死神先輩ごと真っ二つにしようと一閃すると

一瞬で知り鬼がそこから消え遥か上空から真っ赤な閃光を増したの俺に向かって放って来た・・・それに対して俺は死神先輩に盾をお願いし

巨大な二本の鎌を捨て人間の姿に戻り赤き閃光を受け止めている死神先輩の骸骨を踏み台にし飛びあがり

ただの拳・・・ただそれだけを白い鬼の仮面に目掛けてぶつけ・・・そのまま力を入れ思い切り殴ると男の仮面に罅が入り男は刀を振り回してきたが死神先輩がそれをマントで防ぎ

さらに俺はもう一度拳でそいつを殴るとそいつの仮面やら白い鎧がビキビキと完全に砕け散った・・・

その瞬間に気を失ったのか急に地面に落ちていった・・・・

「終わったのか?ていうかあいつはいったい「キュオオオ」!?・・・う、うそ~ん…」

俺が急に周りの景色が変わったに気がついて周りを見ると空がたく

さん割れていてそこから先ほどの黒いマントの仮面の大きな化け物が覗いていて俺に目掛けて赤い閃光を放とうとしていた。

「どうやら学園都市が偶然にあちらの世界に繋がりやすいようだな・・・なぁ餓鬼「なんですか？」・・・喰いたい」

「お好きにどうぞ・・・先輩」

俺がそう言うと死神先輩は巨大になり超巨大になった死神先輩は世界の割れ目から顔をのぞかせている大型の化け物を鷲掴みにして口に放り込み逃げようとした化け物も空間の穴に手を突っ込んで引きずりだし

喰らった・・・どっちが悪霊なんだか・・・・

そんな死神先輩を見てあらかたかたずき食事を終えた先輩が帰った後、その時は夕方になっており俺は屋上から飛び降りて辺りを見渡すとあれだけの事が怒っち他のにも拘らず何事もないように世界は動いていてその次の日に眼を覚ますと俺には何も見えなくなっていた・・・というよりも俺の目が見る必要がないと判断しているのだろうか？・・・それに昨日の奴は何者だったんだろう・・・そう色々考えながら世界の不思議にまた触れてしまった俺だった。

つづく

鬼対怪物（遂に見えてしまった悪霊・・・死神の男と死に見放された男）（後書き）

今回は死神と虚と影虎のマスコット的気存在、死神先輩が登場しました。

主食は魂や死神です。死ににくくしんでもすぐにリボーンする影虎の『異世界樹（ユグドラシル）』以上の相棒です。

ではまた

残留思念（最後の楽園と言う名の地獄、地獄を壊す怪物…たった一人の英雄伝説

今回は・・・鬱になりそうな話です。

それでも良ければどうぞ。

出来れば感想ください・・欲を言えば元気が出る感想を・・

残留思念（最後の楽園と言う名の地獄、地獄を壊す怪物…たった一人の英雄伝説

学園都市には、子供の霊が多いらしい。それは死んでいった子供たちの無念や思念が学園都市の中にある不思議な力の中で現象を起こしているらしい。

そこは【死悦楽園（ゲートパーク）】というらしい学園都市の何処か…または複数かそれとも移動してるのかはわからないがそこえの入口があるらしい

その中に入ってはいけない・・たとえ中が気になっても・・呼ばれても・・現実から逃げたくなっても・・その中に入ってはいけない…一度入ったら逃げられない・・逃れられない・・決して逃げようとは思えない・・優しき物はなお帰れない・・中に居る者たちを遠ざけられない・・開くであろうとその世界では無垢の子供となってしまう・・・この中に居れば必ず人は幸せを感じながらあの子たちと同じになってしまうのだから…決して入ってはいけない。

そして、その世界を壊してはいけない・・なかの者たちに危害を加えてはいけない・・だってかれらは罪のない者たちなのだから・・もし脅かすようなものがあらわれればそのものは永遠に忌み嫌われ恐れられ孤独を味わうだろう…その世界と住人を壊してはいけない・・彼らに罪は無いのだから・・そしてその世界に堕ちた者をとがめてはいけない…だってそれは仕方のないことだから…誰しも苦しみとは無縁でいたいのだから・・・・・だがいずれは世界がその世界にのまれてしまう・・でも、決して入ってはいけない・・心に傷を負っているものは特に・・・人より早く彼等になってしまう・・・悲劇の主人公になってしまう…だがだれかがそこを壊せねばいけない。たった一人だけで味方も居なくなり孤独の淵に落ちる覚悟を決めたものだけに・・・・世界にとらわれた罪なき者たちと世界の罪

なき住人を救う事が出来る。

孤独を代償に誰かを救おうと思えるのなら…

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

「それでね、それでね♪この前なんて別の事務所からモデルじゃなくてアイドルにならないかなんてオファーがきちゃったりね♪」

と日曜日の学園都市を椿と影虎は街を歩きながら今回はデートをしていた。

椿は横で自分の話を聞いてくれる影虎に嬉しそうに手をつなぎ見上げながら仕事の話や最近興味を持ち始めたことなど話続けていた。それを影虎はそうかと真剣に聞きながら楽しそうな椿を眺めていた。

幸せな時間を影虎も椿も楽しんでいた…しかし、幸せとは決して続かず終わってしまう物なのかもしれない。

二人で人ごみの中目的地に向かおうとしていた時、2人の後ろから

〚遊ぼ♪〛

「「っ!？」」

と奇妙な声が聞こえその瞬間に寒気と嫌な予感がよぎり影虎と椿が振り向いたとき、小さな女の子がそこに居て笑っていたかと思うと隣で先ほどまで手をつないでいたはずの椿がそこには居なくて人ごみにさらわれたかと思うと何処にも居なく匂いもその場から無くな

っており眼の前に居た少女が影虎の真横に居て

〝あなたはダメ〟というとその場から消えた・・・・

「椿…椿！！」

と人の目を気にせずに椿の名前を呼ぶが椿の声は無かった・・・そして、携帯で椿のＧＰＳで現在地を調べようとしたが・・・影虎は驚いた・・・

椿の情報が自分の携帯に入ってないのだ。画像もメールアドレスも何もかもが消えていた・・・

「どういうことだ・・・」

影虎は最悪の場合を想定して恐る恐る忍に電話してみると「なにトラ？」と忍が出たことに安心し

「あのさ・・お前、椿の事覚えてるか？」

そういうと忍の返答は…「…誰？」

と帰って着た瞬間に影虎は携帯を閉じた・・・・間違いない・・・影虎は記憶消去を使い学園都市、そして、全世界で椿の記憶をたどったが情報や記憶と言う文化ではすでに消失していた。

己と同じ力があるのかそれとも存在を抹消する事だけに特化した何者かの犯行だろうか

ぐしゃりと携帯を握りつぶしながら「どこにいるんだ？」と呟きな

がら風力発電機の羽の上から飛び降り

鉄塔を渡りながら影虎は必死に椿の匂い、気配を探していた・・・

（椿はまだ死んでない・・・俺と椿の命をつなぐ繋がり（生命の樹）はまだ立たれていない・・）

影虎と椿のつながり、それだけが影虎を安心させ奮い立たせている・・・

そして、影虎は学園都市で一番謎の深い『窓の無いビル』の上に登りすでに夜空tなり月が自身の真後ろにある状況で片手を前に突き出しもう片手を自身の左胸にあて

眼をつむりながら・・・

「我、王の名において龍脈や地脈に問う、我が願いを聞きいれるのなら玉座に侍る者であり監視者である我に伝えよ！！」

と眼を開いた瞬間にある一本の白い鎖が影虎の心臓から伸び始めジャラジャラと果てしなく伸びて行き窓ないビルから最終的には学園都市の何気ないただの公園の入口に延びて空間の隙間まで伸びた

「あそこか！！」

そう思い影虎がそこに向かい鎖を辿りながら「今、助けに〰バチバチバチ〰ぐ？」

影虎がその入口に入ろうとした瞬間に空間に罅が発生して影虎はすぐに入ろうとしていた右手を戻すと影虎のひじから先が焼け爛れ血

まみれになっていた・・

これは一つの拒絶、拒絶だけなら影虎は迷うことなく中に入っただろう・・しかし、罅が入った・・拒絶の先に罅が入った・・・それは椿の居る場所に影虎は容量オーバーだと言う事を現していた

もし無理にはろうものなら世界そのものが崩れさる・・・

そう理解した影虎はひとまずその場から離れた・・・・とりあえず、情報と言う観念で自分に負けず劣らずの天音　廻黎にいやいやながら知恵を貸して貰おうと人には黙視できないほどの速度で空を駆けた。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・そして、天音　廻黎の家の電柱のてっぺんに着地した俺は、空を見上げると

フワフワと自身の目の前で天音　廻黎が浮かんでいて影虎は彼女を見上げた

「よう、会長さん」

「やぁ、なんのようだい・・・冗談だよ・・わかっているよ・・彼女のことだろ?ちなみに返事はＹＥＳさ、断ったら君とは消し合いになりそうだからね・・・君は知ってるかい?【死悦楽園(ゲートパーク)】という都市伝説を?」

その天音　廻黎の言葉を影虎は素直に聞いていた

・・・

「ちなみにタイムリミットは？わかるか？」

と天音　廻黎に聞いた・・・ある一定期間と言っていた事に救出することが出来るタイムリミットがあるのだと理解した影虎は頭を切り替えて聞いたのだ。

その影虎の様子に天音　廻黎も安心して頭のいい子だよと微笑みながら

「今日までだよ「そうか」驚かないのかい？「あぁなら今日中に・・・ぶっ壊して椿を助けるさ」・・・他はどうでもいいのかい？「あぁ、勝手に楽な方え逃げて行く奴なんて知らないな」ふん、では、どうする？」

そう天音　廻黎が聞いた瞬間に影虎は、

「…そう急に俺の心ぶっ壊してくれ会長♪」

そう言った瞬間に天音　廻黎は目を輝かせ「わかったよ・・生易しく知らない内に廃人にしてやるよ。」

…そう言った。

・・・

っとたくさんの小さな子どもが広い公園のような場所で無邪気に遊んでいた。そして、それらは二種類に分かれていた。

ＡＩＭの結晶が丸見えな生き物では無い様な子供のシルエットと小さな人間の子供たちである。

その子供たちは仲良く何もかも忘れただ、遊んでいた。無邪気と言う言葉がぴったりなほど無垢にそして、純粋なままにこの世界の住人となろうとしていた。それはすなわち永遠の死を意味している

この世界の住人は、同じ時間を永遠に過ごすのだ・・何一つ感じることなく・・それは死よりも恐ろしいことの一つ。そんな空間で

ある一人の少女は、公園の噴水のある場所に腰かけていた・・・椿である。

彼女は他の連れてこられた人間が彼らに最終的に同化して子供に戻る現象に逆らいながら無邪気に遊ぶ子供たちを眺めていた

彼女自身も此処から出るのは無理だと理解していて無駄な手こうはせず出来る事だけをしているのだ。

グイグイ

「？」

すると二人の少年少女が椿のスカートの裾を引っ張った。椿が誰かと思い振り向くと椿を見上げるように小さな子供が二人いた・・

片方は、黒髪をツインテールにしたワンピースの可愛らしい女の子

で片方はキレイにまとめられた黒短髪の短パンとTシャツの・・・・小さな天野葵と負導一真がキラキラした瞳で呼んでいたのだ。

「「あちょぼ♪」」

と二人して遊びに誘ってきたのだ・・・すでに二人はこの謎の世界のせいか辛かった現実（または過去）から逃げてしまい体も心も幼児化していた。決して心が弱いわけではない・・子供の頃に素晴らしい思い出があったのだ。だからこそ子供になってしまっている。

一方椿は子供の時、良い思い出が全くなかった・・・だからこそ今もこうしていつもの姿を保っているのである。

「ごめんね、私…待たなきゃいけない人が…」と椿が断ろうとすると2人は椿の両手を引っ張りながら

「「あちょぼあちょぼ~ あそんで~ ~ ~ ~ !!! ワァアアアア」」

と天野と一真が泣きだしてしまい椿はやれやれと言った感じで立ち上がって

「わかった、お姉ちゃんが遊んであげる・・・なにしよっか?」

と椿はしゃがんで二人の頭を優しく撫でながら微笑みかけた。

その瞬間に2人がヒシっと軽く抱きついて「「…お母さん」」となにやら呟いた。

それに椿は文句を言う訳でもなく優しく抱きしめながら

「よしよし、じゃブランコでもしようか？」

「「あ～い♪」」

と2人に言い2人はそれに従って嬉しそうに椿の手をひっぱった。

そして、椿がブランコを押してやると2人は大喜びしていてその光景を見ていた他の子供たちやシルエットまでもが集まって来てアソンデアソンデと寄ってきて椿は疲れながらも遊んであげることにした。

恐らく以前までの椿であれば全てを灰に変えてしまっていただろうが内から沸き起こる母性が働き椿を支配しているに等しかった。それでも椿は待ち続けていた・・自分を助けに来てくれる存在を・・騎士でもなければ王子様でもない・・それは絶対の存在例えるなら化け物椿（ドラゴン）にしか手綱を取れないような化け物が今現在、椿を失い奪い返そうと翻弄しているのを椿は感じ取っていた

すると椿の真後ろにこの世界に来る前に椿を読んだ女の子がそこに居た

その瞬間だろう周りではしゃぐ子供や子供になった者たちの声が聞こえなくなり椿と恐らくこの世界の主の時が怪我動いて他は止まっているような感覚が椿を襲った

「あなた、どうして他のみんなみたいにならないの？皆がみんな子供の時に戻りたいと思ってるやり残したことや楽しい思い出に浸ってるのに…」

と少女が首をかしげると椿は、「私はね、今が一番幸せなの」

とたった一言そう言った・・・少女はさらにわからないような顔をして

「わからないや、どうして?あなたには子供のときを取り戻したいとか思わないの?後悔は無いの?大人になるのって辛くないの?「幸せ…私は反省はしても後悔はしたくない・・私はもう子供には戻れない」どうして?なんで?「私はお母さんだから・・今に幸せを感じないなんて子供たちに失礼でしょ?」う~ん・・・わかんないや」

と少女は好奇心からの質問をし椿は語るが腹に子を宿している女と明らかに生気も無く子供のままの彼女に椿の気持ちは伝わるはずもない。

「それに、私にはもうすぐお迎えが来るから♪」

そうにっこりと笑う椿に少女は必要以上に好奇心がわいた・・・それと同時に恐怖を感じ・・その場から消えた・・

その瞬間に椿は遠くを見ながら…ぽつりと願うかのように呟いた

「影虎、この子たちを早く解放してあげて。」

・・・

そして、椿はずっと誰かを待っていたので子供の一真、一人が椿に歩み寄り

「ねぇねぇお姉ちゃんは誰を待ってるの?もしかして白馬の王子様でも待ってるの~」

と首をかしげながら馬鹿にした様に言うと聞くと椿はくすっと笑い一真の頭を撫でながら

「王子さまなんかに私は救われないの・・「え?」私を助けてくれるのはったったひとりの存在・・言うなら私を連れ戻しに来る強くて偉大で心やさしいドラゴンかな?」

「「えぇ~変なの~」」

と天野と一真にそう言われた椿だが椿は自分の言った事は結構的を射ているなと納得していた。

そして、椿はそれからしばらくの間、ずっと待ち続けた・・・時間が流れが異常なこの空間ではどれほどあったのかがわからないがただ、待っていると

・・・

そして、空に大きな亀裂が入っており・・・それを見たシルエットは何かに脅えていて

ズシンズシンと壁の亀裂が大きくなり・・・そして、一つの黒い何かが地面に落下した・・・

それは髪の色が真っ白になり生気のない目をした影虎だった影虎はその場で少しだけ周りを見渡し・・・椿を見つけると「『～（うおぁあああああああ

「お姉ちゃん助けて~ おばけだよ!!!!!」

と天野が言うと椿は悲しそうな表情のまま・・・「ここはね、とっても悲しい境遇の良い子たちが作った場所、でもねこんなところに居ちゃいけないの・・私たちは全員、自分の時間を生きなきゃいけないの・・子供のままじゃいけないの・・」

そう椿が言った瞬間に黒い怪物である影虎にシルエット達が夥しい数で飛び付き全員で拘束すると

ドカァアアアンと大爆発を起こした・・・・

土煙は上がり爆風が椿達にも襲いかかり公園にあった遊具などが椿達に向かってとん出来たが

瞬間に光速にも等しい速い速度で黒い怪物が椿たちの前に立ちはだかりその身体でその全てを受け止め次の瞬間に椿から距離を取るように走りだしそれを飛んで追いかけてくる生前につらい記憶しかない状態で死んだ子供の残留思念(シルエット)に対して影虎は背中から身体から立ち上る瘴気から見え隠れする禍々しくも美しい巨大で強大な３５枚の不均等に伸びる翼を出し飛びあがり激しく回転しながらシルエット達に体当たりして一体一体砕いていた

何故影虎はわざわざ暴走してまで暴れているかと言うと・・・この世界では魔術の法則も化学の法則も適用されずまともに発動しないうえに『異世界樹(ユグドラシル)』などは力が強過ぎてこの世界が耐えられないといった状況なので影ちらにできるのは進化によって手に入れたその化け物の肉体だけなのだ

「グゥルルルアアアアアアアアアアア」

と影虎だった生き物はさらにその凄まじさを増していた・・・

するとシルエット達がそれにこたえるかのように

胎児のような姿をしており、かつて「幻想御手」を使用した１万人のＡＩＭ拡散力場によって構成されて生まれたネットワークの中核人物と同様に「多才能力」を使用でき体内に三角柱の核がある怪物が大量にシルエットから脱皮するように現れそれらはノイズの混じった人外言語を話しながら

触手で黒き侵入者をとらえあるいは殺そうと四肢をとらえそれぞれが引っ張ろうとした時影虎は腕力だけでそれらを引き千切り右手に巻きついていた幻想猛獣を両手でつかんでぶんぶんと振り回し自分に向かって飛んでくる幻想猛獣にぶつけそれらをふっ飛ばし最終的に下に居た幻想猛獣に向かって振り下ろし２匹同時に潰したのだ。

しかし、幻想猛獣は数が多くとてもじゃないが一気には無理だった。

そして、そんな光景を見ていた椿の周りの子供になってしまった者たちは、怯えていた

何せ自分たちの目の前で化け物と化け物が戦っているのだ・・・正義の味方には到底見えないほど醜くそして、激しすぎる戦いに怯えるしかなかった・・・・

そして、１０分後最後の幻想猛獣がコアを破壊され消滅した時だ・・・

黒き怪物の前には幼い少女の姿があった・・・

その少女は事の元凶、悲しい過去を持ち・・その無念のあまりにこの世界を作り上げてしまった惨めな被害者・・・この世界に来たものは彼女の記憶を見せられたくさんの記憶を見せられ共感したり可哀想だと思った瞬間に取り込まれるのだ・・・

その世界の初めの被害者である少女が光を放ちながら

「あなたは誰?どうして私たちの邪魔をするの?私たちはただ遊べないまま死んでしまったから遊びたかっただけなのに…なのになのに…」

と涙を流しながら友達を壊されたことに悔しさなどいろんな感情込みで泣き叫んだ。

それに対して彼女の不幸な人生を見てしまい哀れだと思い子供になったものたちは、黒き者にも人としての乗があると、彼女に罪はないとわかってくれたと思った時

「ウグァアアア

その瞬間に子供に変えられた者たちは全員元の姿に戻りつつも・・・・涙を流し泣き叫ぶの女性、怒りをあらわにして黒い怪物を睨みつける男達、反応はそれぞれだった・・・・

ただ、全員の気持ちはたったひとつだった・・・優しい少女を破壊した黒い怪物えのただならぬ怒りだった・・・・

そして、次の瞬間に全員は学園都市の公園のあちこちに佇んでいて・・・世界から抜け出したのだ・・・

そして、黒き怪物も戻ってきており・・・・椿以外の皆は、黒い怪物を囲んで涙を流しながら・・・

「「「「「この化け物がぁああ!!!!!」」」」」

と全員が全員、自らの善意から来る激しい怒り・・・正義、人としての感情にしたがい黒い怪物から元に戻ったバテバテの影虎に襲いかかった・・・・他にも方法はあった・・・殺す必要はなかった・・など自らの女の子に対する愛情から来る怒りをぶつけた・・・

それに影虎はただ殴られるだけだった・・・・影虎のその眼には密かにだが泣いた跡があったがその事は誰も知らずに影虎は、２時間ほどいたぶられ・・・解放された

・・・・

が聞こえ始めぞろぞろとみながその場から逃げ始めた

そして、残ったのは無傷の影虎と椿、そして、涙を流しながら怒っている一真と天野葵であった。

一真は影虎の胸倉を掴んで仇を見るかのような目で睨みつけた

それに対して影虎は「…どうした?今なら気が済むまで殴らせてやるぞ?」

と余裕の笑みでいった・・・影虎は笑っていた。

それは明らかに人を見下し眼中にないと言わんばかりの・・・

その表情を見た瞬間に一真は手をすぐに離し、体中に鳥肌を作りながら離れた

それに対して天野は影虎に

「ねぇ・・どうしてあんな事したの?あの子はあの子たちは何もわるくないんだよ?・・それなのに・・・それなのに・・・うぅ・・・う・・・」

と天野は顔を両手で覆いながら泣きだしてしまった・・・

それを見た影虎は・・・「…俺にとって邪魔だったから破壊した・・・それに奴はもともと生きてはいない・・それだけだ・・・帰るぞ椿」

そう影虎が言うとベンチで座っていた椿が無言で立ち上がって影虎

のそばに行く影虎の差し出した手を掴んで大人しく付いて行った・・
・

そして、影虎と椿は一真と天野を放置して大人しく家に帰っていた

・・・

影虎は椿の背中で泣いていたのだ・・・声を殺し・・・それを感じた椿は、現在はもうバスのこないバス停のベンチに座り子供になってしまった影虎をおんぶから抱っこに変えて優しく抱きしめ頭を撫でていた

「おれは・・おれは・・・本当に罪のない・・・アイツらを・・・」

「影虎は本当にがんばったよ・・悪くなんかない・・誰かがやらなきゃいけなかったの・・誰かがあの子たちを解放して背負ってあげなきゃいけなかったの・・・影虎は頑張ったよ・・ヒーローだったよ・・」

そう椿が影虎を抱きしめながら言うとかげとらは椿の胸で泣きながら椿の優しい言葉や優しい匂い優しい仕草についに我慢できなくなり・・・

「うわぁあああんうわぁあああああうわぁあああああん」

と激しく泣きだしたのだ・・・それに椿は優しくそして守りながら泣きやむまで撫で続けていた・・・

まるで母のように・・

そして、3分近く泣き続けた影虎の顔はボロボロで椿の服も涙でぬれていた・・・少し泣きやんではいるものの未だに泣きやんでいなかった

そんな影虎を椿は何も言わずにかかえ続けた

「あいつ、俺があの姿で壊したとき・・・お兄ちゃんはとっても優

しいねって・・ありがとうって・・・うわぁあああんくそくそ・・・うわぁああ」

「やっぱり辛かったんだよ・・・とってもとっても・・・だからあのこもありがとうっていったんだよ」

と椿は泣きわめく影虎を必死で励ました・・・

そして、しばらくするとチビ虎は泣き疲れて眠り・・・寝息が聞こえた椿は家もすぐだったので抱っこしたまま家に帰った・・・・

・・・・

戻り・・・動揺の表情を見せていた・・・しかしすぐに元に戻り・・・

「今お前なんて？」

と黒き怪物が聞くと少女は微笑みながら・・・

「私を、私たちをこの地獄から救って暮れて・・ありがとう「俺は・・・俺は・・・救ってなんか・・」ふふ、怪物さんは怖い怪物さんだと思って攻撃しちゃったけど・・・やっぱり優しいのね・・私たちは怒ってほしかった・・・助けて欲しかった・・・でも、此処に来る人たちは優しくても私たちの記憶を見たせいで私たちを此処からは解放してくれなかった・・ただ、泣いてくれただけ・・それが当たり前だと思ってた・・・でも怪物さんは、心を鬼にして私たちをこの檻から解放してくれた・・・あ、おにいちゃんも私たちのために泣いてくれるんだ・・・優しい怪物さん・・ありがとう」

と少女がそう言った瞬間に黒き怪物の赤き眼から・・・一つの雫・・それが怪物の固い黒い鎧をつたり・・怪物の手の甲に落ちた・・・その瞬間に怪物の鎧のような外殻はパリーンと砕け散り人間の姿の影虎が現れた・・・その眼を真っ赤にはらし・・鼻息を荒くしダラダラと大量の涙を流しながら唇を噛み締めていた・・・・

影虎は心までは怪物になれないのだ・・・だからこそ椿を救うために・・残酷な運命に過去に縛られた・・未だに自由になれない少女たちを救うために優しさを・・・涙を・・・その全てを放棄し怪物の外郭に隠し破壊に走ったのだ・・・・残酷なのは影虎ではなくその方法でしか楽にしてやることのできない世界の理であった。涙を流しながら号泣しながら・・・影虎は殺したのだ・・・誰かがやらねばならない汚れ役を・・己が使命と認知し・・・そんな影虎に目

の前の少女は感謝していたのだ
そんな影虎を見て少女はにこりと笑うと

「あのね・・私が消える前に・・・私のお話聞いてくれる?」

と弱弱しい声でそう言うと影虎は・・・一切の我慢をせずおお泣き
しながらもうすぐ消えて行く少女を抱きしめウンウンと頷いた

それを見た少女は影虎の胸の中で自分について語りだした

・・・・・・・・・・・・・

どうにも、私は、生まれてはいけなかったらしい
そう私が幼い時に思ったのは、母親が直接私にそう言ってきたから。

「アンタなんか産むんじゃなかった。」

母親の口癖だ。とにかく思い知らされていた気がする・・とても辛
くて聞きたくなかった言葉・・

母は私を産みたくて産んだわけじゃないと顔を合わせるたび・・話
しかけるたびに・・私をぶってそう言った・・・
物心がついた頃から、放置されていた記憶しかない。
母は母ではなく女で毎日男を求めは私を放置して出かけていた。だ
から、私に気を回すなんて親切な心は当然、持ち合わせてない・・・
そう思い知ったのは割と物心ついてからすぐだった

私の母・・・あの女は私をいないものとして振る舞っていた。全く、
見えてないように。

ほんの時々、与えられる眼差しは温かさとはかけ離れていて。そう、まるで汚いものを見るようだった。

夜は、家に居ないことの方が多かった。私は暗いアパートに独り、取り残されていた
無論、1歳とか2歳の私が耐えられる暗闇ではなかった。
毎日泣き叫んで、母さんを呼んだ。
扉の向こうから、お母さんが迎えに来てくれるんじゃないかって。
願って、すがって。
でも、誰も来ない。
どれだけ泣いても、『お母さん』と呼んでも・・・来るはずのない母を呼び続け、泣き疲れて寝ることが続くとある日母親に「うるさい！！」と殴られた。痛かった。頬よりも母親を求めた叫びが・・・うるさいの一言で済まされたのが凄く痛かった・・

そして彼女は、また何事もないように自分の、自分だけの生活を楽しむ。私を残して、夜の街へ。
いつしか私は夜中に泣かなくなった・・・違う、泣けなくなった・・・泣くことに疲れ縋ることを諦めた

彼女は所謂、育児放棄をしていたのだろう。

しかし、外にいるときの態度は別だ。完璧な母親を演じ、他のママさん連中と良好な関係を急速に作り上げた。

母は、演技はとても上手かった。私を愛しているフリが。
本当は、自分は愛されてるのではないかと、錯覚するほど。
・・・そんなわけ、ないのに。これでまた私の心は壊れた・・・

どこにも連れて行ってくれない。遊び道具もない。あまつさえ、話

しかけても返事は返ってこない。まるで透明人間になったような毎日・・・もはや恐怖だった・・・

母は私に興味はなかった。…そんなこと、分かっていた…分かっていたはずだった
でも、それでも私は彼女を求め続けた。…私には母しかいなかったから・・・
ひたすら『愛されること』を。ただ、名前だけでも呼んでほしい、と。

よんで。わたしのなまえ。
わたしのなまえ、あなたがつけてくれたんでしょ？かんがえて、くれたんでしょ？
よんでよ・・・・・わたし・・・・はここにい・・・るんだから・・・
『メイ』って・・・よん・・・で・・・それだけでいいから・・

思い続けて数日、ふと、母が私に振り向いた。眉間には皺が刻まれていた。

「アンタ、」

ビクッと、体が跳ねる。

「ウザイから近付かないで。あと、話しかけてこないで。こっちはアンタのせいで苦労してんのよ。」

心底迷惑がっている顔だった・・・それからも彼女は、私のことを決して名前で呼ぼうとしなかった
あの人の心から、私は消えてしまったんだろうか・・もしかすると

私の名前など忘れてしまっていたのかもしれない・・

どれだけ願っても、喚いても、抗議しても、相変わらずの毎日が続く。しかも体が成長していくにつれ、悪化していく。母はもはや目も合わせてくれなくなった・・・彼女の中で私は・・・存在しなくなってしまったのだろう・・

そしていつだったか私は、母から愛情を受けるのを諦めた・・

構ってもらいたくて何かしても、殴られるか蔑まれるだけだし、自分も痛い・・・なら傍にいれるだけでいい

私は、幼いながら自我が芽生えるのが早かった。
そして、『諦め』を知っている珍しい子供だったと思う。

・・・・・・・それから1年くらいたった時だろう・・・母は私が眠っていた好きに・・・出て行ってしまった・・・・

それから私はたったひとり残され・・・・部屋からも出れず・・・ずっと母を待った・・・それでも・・・帰ってこなかった・・・

暖房も無いこの家は・・・酷く寒く・・・毛布も一つしかなく・・・水道も私の手では届かず・・・飲み食いも出来なかった

そして、3がたち・・・私はもう餓死寸前だった・・・・それでも母は帰ってこず・・・・

私は、死ぬ想いで窓を非力な力で割り・・・外に出ると・・・

空はもう暗く真っ暗で眼の前には公園があり・・・私は、そこのベ

ンチの横の街灯にもたれながら立っていた

そして、公園を見渡した・・・そこは、私がずっと母と遊びたかった場所、幸せそうな親子を見せつけられた場所・・・私には縁のない場所・・・母と来たかった・・目の前にあるのに・・・連れて来て貰えなかった場所・・・・

そして、ふと横を見るとビルの時計に日付が書いてあり・・それをみると・・・・私の・・・４歳の誕生日だった・・・

誰にも祝ってももらえず・・・生まれてこなければいいと言われた日・・・寒さと空腹で私は薄れ行く意識の中、苦笑していると・・・私の少し離れた場所を・・・母が通った・・満面の笑みで・・・そのよこで一人の男の人・・・・そして、その傍らには・・・・私と同じくらいの小さな女の子の姿が・・・・

「あやか、めぐみさんにお礼を言いなさい」

「めぐみさん誕生日プレゼントありがとう♪」

「いいのよ、あやかちゃん♪お誕生日おめでとう、でも今度からはお母さんって呼んで欲しいな♪綾香ちゃんのおかげで巧に出会えたの・・・生まれてきてくれてありがとうね♪」

と楽しそうな家族のような会話・・・・私には向けてくれた事の無い笑顔・・・それが私と誕生日の同じ別の子に・・・注がれていた・・・

その光景を見て私は死んだ・・・冷たくてつらい思いの中で・・・

・・・・・・・・・・・・・・

「それでね気が付いたら此処に居て・・・寂しくてさびしくて・・・
それでせめてお友達が欲しくて・・遊んで欲しくて・それで・・・
こんなことになっちゃって・・・本当は遊んでほしいんじゃなくて・
・迎えに来て欲しかったの・・・だから本当にありが「メイ」え?・
・・おにい・・・お姉ちゃん?」

と少女はいきなり頭上から女の声で名前を呼ばれ・・顔をあげると
目の前には影虎ではなく桜の髪をし涙を流しながら影千代は少女を
抱きしめ・・・「メイ」と優しい目と声、そして、死んだ時から
ずっと凍えるほど冷え切っていたメイの体を温かな体で抱きしめあ
たまを撫でながら

メイっと呼び続けた・・・メイが呼んで欲しくても死ぬまで呼んで
くれなかった名前を・・

「え?・・・・ど、どうして・・・怪物のおにいちゃん?」

と少女は泣きながら影千代に問いかけると影千代は優しさにあふれ
た表情で少女を抱っこして・・

「まだ、時間はある・・俺が門限（世界の終わり）まで遊んであげ
るよ・・だから一緒にあそぼっかメイ」

そう影千代がメイを引き寄せ行ったとき・・メイは生まれて初めて
母に抱き締められたような気がした・・・そう誤認してもおかしく
ないほどに影千代は優しかった・・・

まぁそれは影虎は男であり女でもある事が可能な鬼神と女神の両属

性を持っているためである。

「ほんとうに・・そんでくれるの？・・・わたしと・・・・ねぇ・・・もう一回、抱きしめながら・・・おなまえ「メイ♪」・・・うぅ・・・うぅ・・・うわあああああああああうわあああああああああ」

と影千代が名を呼ぶとメイと言う名の少女は泣き始め・・・それからしばらくして泣きやむと・・・影千代のことお母さんと間違えて呼び・・・それからメイに頼まれた遊び・・ブランコを押してほしいやシーソーに乗ってほしいなど影千代は付き合ってあげていた

（椿、たったひっときだけで・・この可哀想なメイに愛情を注がせてくれ・・・俺が甘ちゃんなのは理解してる・・・けど今回はほっとけない・・・）

「おにいちゃん、すべりだいしたい！！」

「ふふ、あぁわかった」

そう言って影千代はしばらくメイの遊びに付きあった・・・メイは満面の笑みで少しずつ少しずつ壊れ散った・・・

そして、世界の崩壊も早くいよいよメイと影千代の居るベンチだけだった・・・

その状況でメイは影千代の体に頭をコテンと凭れさせていて・・・

そして、もうすでに限界だった・・・

「ありがとう、おにいちゃん・・・わたし、嬉しかった・・・遊ん

でくれて・・お名前呼んでくれて・・・抱きしめてくれて・・・愛してくれて・・・お母さんになってくれて・・・ほんとうにありがとう・・・・私もう眠たい・・・」

そうコクリコクリ眠りそうになっているメイ・・・彼女が眠ると言うこてゃそれは消滅を意味している

そんなメイを涙を流しながら・・・抱きしめ背中をさすりながら・・・影千代はメイを寝かしつけるようにして

「がｇ・・びき・・・・ｎｄｓｎｉｋｄｂｗｈｉｂｉｂｉｖｗｉｖｉｖｉ怖いよ・・ｎ；ｐａｎｏｃｂｎｗｅｂｉｂ　ｗｂｇｉｇｈ９７ｙ９２３４５ｈｔ４ｙ２９８ｔｙｏｈ２４０ｔｈｙ０ｈ２４０ｈｈｃ９４ｇｈｂｎｉｏｃｂｎ９ｐｈ３２ｈｉ９ｈｃ９ｇｈ３９２ｈｏｈｇ９・・・」

いよいよ限界に到達したメイはもう人外言語しか話せなくなっていた・・・完全な故障・・・

そして、震えていた・・・眠りたくないそううういう感情を抱いていた・・それでも影千代は、終わらさなきゃならなかった

ポンとメイの頭に手を置き今までで一番強くギュッと抱き名の顔が胸に埋まるくらい抱きしめ

「一緒に帰ろう・・・メイ・・」

「うん、ｕｎｗｓｎｃｖｕｉ９ｈ７９３４ｙｇｏ４ｈ３０ｕｇ０／／お母さん…」

そうメイが言った瞬間にメイは消え世界は崩れ去り・・・影千代は影虎に戻りもとの世界に戻された

影虎にすべての罪を背負わせて・・・・

・・・・

静かに立ち上がった。

そして、後ろ向きに「よかったな・・・」

そう言って影虎は歩きだし親猫が子猫の一匹を加えて行こうとしたら

「ミャーーーーーーー♪」

と大きな声で鳴いた・・・まるで初めて会った影虎を知っているかのように・・感謝したかのように・・・すると影虎の後ろを裕福そうな小さな女の子とその母親が駆け寄って

「あやかママ、猫さんたち可愛そう・・おうちに連れて行っても良い？」

と女の子が母親に聞いて・・その母親は頬笑みながら「自分で世話しなさいよ・・」

と言って女の子が大喜びで親猫ごとダンボールを持って帰って行った・・・

それを振り返ってみていた影虎はその光景を眺めて笑っていた・・・するとうしろから椿が来て「何でお前傘持ってないんだ!?」と怒鳴られ「風で飛んで行った」と言ってその場から去って行った

・・・・

そして、影虎たちの後ろを猫を持ったが少女が

「このお母さん猫はクミ、赤ちゃんはミケ、ナナ、モカ、アミ、ク

ロ、でこのずっと後ろを眺めてる子は『メイ』♪」

そう少女が言って母親が笑っていて・・子猫たちが段ボールの中でじゃれあっていた。

「ミャーーーーーーー」

そして、メイと呼ばれた猫が大きな声で鳴くと皆が驚き・・・子供と母親も驚いていたがすぐに笑顔に戻った。

・・・・・・・・・・・・・・・

ミャーーーーーーという泣き声が聞こえ椿が「えらく大きな声で泣く猫だな・・」と言っていて

影虎はフフと笑いながら

「本当によかったな・・メイ」

つづく

残留思念（最後の楽園と言う名の地獄、地獄を壊す怪物…たった一人の英雄伝説）

以上です。

かなり酷い内容でした・・・

でもメイは救われたと思います。今回の題名は・・・影虎が一人で誰にも理解されない戦いをするというものです。

そして、椿にとっての英雄となりメイにとっても英雄となりました。

ではまた。来週の投稿は難しいかもしれないので・・・2週間後になるかもしれません。

小さな恋（連と華音）（前書き）

今回は番外編です。

天気を操る能力者のヤクザ少年と運命を操る不思議少女の出会いです。

ではどうぞ

小さな恋（連と華音）

ある日、お母さんと一緒に病院に泊っている僕こと黄色い雨合カッパがトレードマークの雨宮連は、日課の散歩に出かけていて

今日は少し遠いけど図書館にでも行こうかと思いバスに乗って図書館に向かい図書館に着いたら僕はとりあえず極道の本を読み漁っていた。結構泣ける内容が多く涙しながら組長の漢義に感動していた。

ちなみに将来の夢は組を作って組長やることです。（椿お姉ちゃんに向いてないと思うよ？）とげげんな顔をされたことが多いが諦めません。中学に上がったら先ずは番長になって暴走族になって上り詰めます。

そう胸に誓いながら黙々と読んでいると閉館時間が来たので本を借りると

「あら、連ちゃんまたこんな本読んで~ 悪い子になっちゃだめよ？」

と受付の叔母さんがそう言って本を渡してくれた

そして、ホクホクが顔で帰ろうとしていると道端で

淡い水色のふんわりとした肩までの　短いツインテールに、これまた澄ん　だ淡い空色の瞳に

白いＴシャツに水色のワン　ピースを着ており、その上か　ら学校特注のブレザーを身につけている女の子がカバンを地面に落していてお腹の辺りを押さえて冷や汗をかきながらうずくまっていた・・

「どうしたの？」

僕はとりあえず駆け寄ってみると女の子は顔の色が悪くまるで貧血のようだった。

「ねぇ大丈夫？」

僕がそう言って声をかけると女の子はしばらく黙っていたが首を横に振った

よほど辛いのだろう・・・

「とりあえず・・そこの公園で横になろう」

僕がそう言って僕と同じくらいの女の子をお姫様だっこのような体制でベンチに寝転ばせた

多少はマシになったのだろうけど未だに苦しそうにしていた

僕はどうしていいのかわからないがとりあえず聞いてみることにした。

「お腹痛いの？名前言える？」

と僕が言うと女の子はボーと僕を見ているだけだった・・・

どうやら僕を疑っているようだった・・・

「ハァ~・・・僕は雨宮連いずれ世界中の裏世界を牛耳る男だよ。」

と僕が雨カッパを外して言うと女の子は一瞬驚いていた。

「私は…華音、痛・・・「君、大丈夫?」・・私、高校生だから多分あなたより年上だよ?さっきから年下として扱ってない?」

そう言われて僕は驚いた・・・年上なの?信じられん…いや、椿お姉ちゃんの例もあるしね

「それは失礼しました。お姉さん。「ん」それで大丈夫なのかよ?やけに辛そうだな、救急車呼ぼうか?」

僕がそう言うと華音は驚きながら少し睨んで来て「絶対に年上なのに・・」と起こっていた。

どうでもいいだろう?

「熱は無いみたいだね…あれ?上がった!?」

僕が額を華音の額にくっつけてみたら熱が無かったのに上がっていた・・・

「な、な、なにをするの!?」

と華音が驚きながら耳まで真っ赤にしていた…あぁ~

「お前、俺に惚れただろ?」

そう俺は華音の耳元で優しく呟いた。

・・・・・・・・

・・・

そう彼は私のの耳元で優しく呟いてきた。その瞬間に小学生で年下の男子なのにその顔が綺麗で格好良く見えた・・・

「…はい」

と気がつけば私はボーとしていて頷いていた、自分で自分がわからなかった・・操られたとかじゃない

急に脈拍が上がるのが分かった・・・

「とりあえず、病院までおぶってやるよ」

そう言ってこの子は私をおぶりなんと空をとんで病院まで連れて行ってくれた・・・

そして、その子はお医者さんに私を見せるとバイバイと言って何処かへ行った。

その間も私の心臓はバクバク言っていて胸が高鳴り続けていた・・・死ぬんじゃないかとも思った・・・

その後、お姉ちゃんが連絡を受けて飛んできて必死になりながら女の先生に妹は大丈夫なんですか!!

と叫んでいると

綺麗な黒髪にめちゃくちゃ大きな胸の目立つ美人な先生が私に

「おめでとうございます、今日は赤飯でもたいてあげてくださいね♪」

と言って私は、家に帰されお赤飯を食べていた・・・その後姉から説明を受けて自分にも遂に初物がきて女の子から女への第一歩が始まったらしいと理解した。

お姉ちゃんはあたしが成長して嬉しいと泣きながら喜んでいた

そんなことはどうでもよかったがそんなことより私はあの雨カッパの少年が気になった・・・そして、もう一度会いたいと思った。

・・・

小さな恋（連と華音）（後書き）

短いです。

この出会いが後々に二人の運命を決めるのですが・・・それはまた別のお話。

ではまた。

椿の愛情（たった一人の英雄の理解者）（前書き）

今回は椿が主役です。

ではどうぞ

椿の愛情（たった一人の英雄の理解者）

2人が帰っている途中に急に椿の手を握っていたはｚの影虎の体が縮み、チビ虎になっていた。

それを見た椿はチビ虎の手を引っ張りながらゆっくりとあるいた

「ごめん、さすがに今回は無理した・・・〜コクリコクリ〜え？」

チビ虎は疲れ切っていて眠りかけていたので椿はチビ虎をおんぶして歩き始めた

「本当にごめん…重くないか？」

「チビ虎は軽いよ・・影虎・・・がんばったね・・あの子たちもようやく自由になれたと思う・・・あの子たちを救ってくれてありがとう」

とまるで聖母のような優しい声で影虎にそう言った・・・皆が皆影虎を化け物だの悪魔だの否定し拒絶した中で椿だけは影虎にそう言った・・・その瞬間だろう椿は自らの小さな背中にさらに小さな頭をくっつけている影虎から・・・グスグスと鼻息が聞こえジンワリと背中が湿って着て居たに築いたのは

影虎は椿の背中で泣いていたのだ・・・声を殺し・・・それを感じた椿は、現在はもうバスのこないバス停のベンチに座り子供になってしまった影虎をおんぶから抱っこに変えて優しく抱きしめ頭を撫でていた

「おれは・・おれは・・・本当に罪のない・・・アイツらを・・・」

「影虎は本当にがんばったよ・・悪くなんかない・・誰かがやらなきゃいけなかったの・・誰かがあの子たちを解放して背負ってあげなきゃいけなかったの・・・影虎は頑張ったよ・・ヒーローだったよ・・」

そう椿が影虎を抱きしめながら言うとかげとらは椿の胸で泣きながら椿の優しい言葉や優しい匂い優しい仕草についに我慢できなくなり・・・

「うわぁあああんうわぁあああああうわぁあああああん」

と激しく泣きだしたのだ・・・それに椿は優しくそして守りながら泣きやむまで撫で続けていた・・・

まるで母のように・・

そして、3分近く泣き続けた影虎の顔はボロボロで椿の服も涙でぬれていた・・・少し泣きやんではいるものの未だに泣きやんでいなかった

そんな影虎を椿は何も言わずにかかえ続けた

「あいつ、俺があの姿で壊したとき・・・お兄ちゃんはとっても優しいねって・・ありがとうって・・・うわぁあああんくそくそ・・・うわぁああ」

「やっぱり辛かったんだよ・・・とってもとっても・・・だからあの子もありがとうっていったんだよ」

と椿は泣きわめく影虎を必死で励ました・・・

頭を撫でて泣きじゃくるチビ虎に優しい言葉をかけて…

そして、しばらくするとチビ虎は泣き疲れて眠り・・・寝息が聞こえた椿は家もすぐだったので抱っこしたまま家に帰った・・・・

「頑張ったね・・愛してる・・今はお休み・・・ｏｎｌｙｍｙ ｈｅｒｏ（私のたった一人の英雄）…」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜、椿とそい寝させられているチビ虎の様子がおかしいことに椿は気付いてネグリジェ姿のまま起き上って影虎の額に手を当てると

「・・・熱がある・・ショックで疲れが一気に出たのか・・」

そう椿は納得すると急いで台所から氷枕と洗面器に水を入れタオルを持ってきてそれを影虎の後頭部と額に当てた

「・・・はぁ・・・・・・・はぁ・・・・・」

しかし、一瞬でよくなるわけも無く電気を付けて見ると影虎の顔は真っ赤で呼吸も荒く体温計で測ってみると３９度も熱があり椿は飛びあがりすぐに病院に連絡して救急車を読んだ。

そして、椿もいち早く着替えて影虎にも自らの服を着せて救急車がくると椿はチビ虎を抱っこして一階に降り救急隊員に

「弟が急に高熱を出しちゃって…肉親も出かけてて・・」

とあらかじめ用意した言い訳を良い救急車に乗り込んだ椿と影虎、
そして１０分くらいして、病院に付き

チビ虎は検査を受けて病室に移されベッドで点滴を受けながら寝かされ・・椿はカエル顔の先生から

「ふむ、この酷い高熱はどうも精神的なショックのようだね・・これといって原因が見当たらないからおそらくだがそう思うね・・・」

「・・・そうですか・・あの？」

「3日も大人しくして眠れば治ると思うよ？もしだめなら薬を投与しよう。」

カエル顔の先生の一言に安心して立ち上がり

「ありがとうございました。失礼します。」

というと「お大事に」と言われた。

・・・

少しだけ楽そうな表情をしているチビ虎を見て案緒の表情を見せると
耳に入った病室の外から来るある足音を聞いて椿の表情は凍った・・
・そして、「はぁ…ウジ虫が」
ともし周りに人がいれば凍えてしまうような冷たい声で呟きをして
手に炎ではなく冷たい氷のナイフを作ってフラっと病室から出た
・・・

「はなしてくれよ!!「あなたトラが危険だとでも言うの!?」・・アイツが強いのはしってた・・けど昨日見たあれは強いとかじゃない・・・狂ってた・・・・アイツは殺人鬼だ!!人を襲う化け物だ!!」

「違う!!トラは理由も無しに殺したりしない・・・それにあの子は人を殺すことが出来ないのよ」

「私も・・怖かった・・信じたいけど・・・眼の間で躊躇なく女の子を殺した・・・忍さん!!「・・・」私たち一体どうやって信じればいいんですか?」

と一真を取り押さえる忍に天野が泣きながら怒鳴ったそれには忍も言葉を失った・・・

ただ、すぐに一真を抑えて

「とりあえずトラには理由も無しにそんなことすることはない・・それだけは私が命に掛けても補償する・・・だからやめなさい・・それに・・もし椿ちゃんがここに居たら・・・」

そう忍が俯き長理うので一真はいい加減腹が立って忍を突き飛ばして

「今回ばかりは椿には邪魔させない・・「第一無理よ」あぁ?「たかが16のガキが本気の椿ちゃんを相手にできるとでも思ってるの?」暴力は使いたくない・・でもその気になれば気絶させて・・」

そう一真が言うと忍はすっかり呆れお手上げといったポーズを取って「間違いなくカズ君殺されるわよ?なんせ椿ちゃんの本気はトラでも手に負えないのよ?それにあの子は昔、【裏】に居たの・・実

質な殴り合いなら勝てるでしょうけど・・・暗殺というジャンルではカズ君と椿ちゃんは勝負にならない・・だからこそ自分の命のためにやめなさい」

そう忍が起きあがってそう言うと一真は「それでも！！」と駆けだそうとしたとき

「そうやすやすと『俺』が行かせると思ったか？」

「「「え？」」」

日差しが病院に入り込み先ほどまで影だった場所に・・一真の真後ろで忍と天野の前に上下が黒い防弾防刃防炎防電で完璧に計算しつくされた刺繍や縫い方は魔術的意味を持ち、その結界の防御力は法王級。

布地はロンギヌスに貫かれた聖人を包んだトリノ聖骸布を正確にコピーした物で、その強度は絶対であり物理・魔術を問わずダメージを受け流し吸収するという包丁程度では傷もつかない特注の神父服に懐かしい帽子で長い黒髪を隠している過去に必要悪の教会に居た時の姿の椿が立っていて

忍と天野が驚き一真が振り返ろうとした時、急に髪の毛を掴まれ膝に蹴りを入れられ折られ両膝が地面に付き片手をひねられそのまま椿の髪の毛1本でひねられた片手と首をくくられもう片方の手はもう一度ひねって肩を外し一真の首元に氷のナイフをくっつけた・・その間・・わずか1秒だった。

「ぐぁぁあああああああああ」

「キャアア！！」

一真が痛みで叫び天野が悲鳴をあげた

そして、忍が止めようとすると…

椿は「動くな・・動けば一真の頸動脈をかき切る・・・」と暗殺者の目でそう言った・・

「ぐ・・・椿？」

「あぁ俺だよ・・・諸事情で本来ならお前の首をはねて影虎を避難させるところをお前を屈服させ影虎を守る作戦に変更だ・・・最近、あまり走れなくてな・・隠密行動に切り替えた・・・どうする一真？葵？・・・俺としては早く眼を覚ましてほしい・・・それでなくてもいらぬ事は考えないでほしい・・・基本俺はお前達は友達だと思ってる・・けど・・影虎を悪者扱いして傷つけるんなら・・・私の持てる全ての技術を駆使して排除する・・わかった？」

そう椿が一真にナイフを当てながら耳元で優しくそして甘い声で呟くと一真の顔色が悪くなる一方だった・・

強さでは無い・・・殺しの上手さ・・拷問の上手さ・・・強さでは無い技術に一真は全身に鳥肌が立った・・・。

しかし、それで少し・・・頭に上った血も・・・降りてきた。

「か、かずま！！」

とようやく天野が動き出そうとした時、椿はすかさず「動かないで！！」と怒鳴ったので動きを止めた・・というよりも殺気を込めら

れた怒声に止まらずを得なかった

今の椿を天野の目で見れば・・普段の小さな女の子でも昔の男の子みたいな少女でもなく・・その眼に映りしは映画などで見る者とは違う・・本物の暗殺者・・・小さな暗殺者だった。

「く・・・・」

っと肩を外された激痛に一真が表情を歪めているが椿は一切気にしていない

「・・・で、どうする負導一真?此処は大人しく帰るかそれともここで死ぬか?」

と質問と言うより尋問に近い雰囲気でそう言うと一真はようやく自分が大それたことを今自分がされて居ることのその先をあたかも気を失っている友達にしようとしたのだと思いだし・・・大人しくなった

それを見て椿が少し力を緩めるとガシっといつの間にか透明になり後ろに回り込んでいた忍が椿を羽交い絞めした・・・

そのせいで一真の拘束は溶け一真はむせながら酸素を肺いっぱい吸い込んだ

それに天野がかけよって一真の安否を心配した

そして、忍に羽交い絞めされた椿は身長差があるのでプラーンと足が浮いており「あぁこりゃだめだ」と大人しくしていた

そんな椿に忍は「踏みとどまってくれてありがとう」と頬に軽いキスをして地面に下ろした

地面に下ろされた椿は、タタタと歩いていき病室に入ると病室のドアから少しだけ顔をのぞかせて「さっきのは警告に付き猶予をあげる・・・入って来るな」

そう椿は言って病室に入った・・・中でガサゴソと言う音が聞こえるのでおそらくバリゲードや魔術術式でも組んでいるのだろう・・・

そう理解した忍は、一真と天野を怒りながら引きずった・・・お説教である。

・・・

椿みたいに信じてやればよかったのに・・ごめん・・・ごめん・・・
」

っとその後何度も椿は謝られて・・・すこし悩んだが

「・・・私に謝っても仕方ない・・・でも私は許してあげる・・・
影虎が眼をさましたら・・・出来れば出良い・・・あの子たちを救
ってくれて【ありがとう】と言ってあげて欲しい」

そう椿は言った・・・

その翌日影虎は眼を覚ました・・・もちろん天野も一真も謝罪し影
虎は別にいいよ、気にしてないとふっきれた表情で言った。

つづく

椿の愛情（たった一人の英雄の理解者）（後書き）

以上です。

最後の方は適当で済みません。

ではまた。

旧生徒会（蘇る怪物クラスの覇王達）　（前書き）

今回は最強の敵登場かな。

チートＶＳチートです。

ではどうぞ

なげぇです。

旧生徒会（蘇る怪物クラスの覇王達）

晴天の朝日の中、ある一２人の人物がボロボロの状態で発見された・・・その人ともう片方の人物は瀕死の重体でなぜ死んでいないのか不思議なほどいためつけられていた。

その人物を発見したのは警備ロボでその人物は早朝から救急車で病院に搬送され緊急治療室で治療を受け一命を取り留めた・・・その人物は天音　廻黎・・・もう一人は意識不明で運ばれてきた外傷がない影峰　翔也であった

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

次の日

天音　廻黎の病室には包帯にくるまれベッドに横たわっている天音　廻黎とその周りに心配そうな園崎陽、明らかに機嫌が悪い暮日、明らかに泣きそうな灯、明らかに朝帰りですと言わんばかりに乱れ切った服装のシアン、そして、白衣にメガネをかけ髪型を綺麗に整えている影虎が居て

天音　廻黎が眼を覚ますと椅子に座りくるくる回っていた影虎が

「よ、会長「・・・ここは？」病院、まったくお前が運び込まれた時は何事かと思ったぜおかげで今日は大雪だぜ♪」

「そうかい・・・痛!?」

と冗談のように天音　廻黎に笑いかけていた影虎・・・しかし・・・

「・・・お前の傷・・・あきらかにこの世の物じゃない・・一体誰にやられた?」

と酷くまじめな顔になりながら天音　廻黎の腕の傷に触れてそう言った

すると天音　廻黎は少しだけ申し訳なさそうに俯き・・・「油断した・・ごめん・・」と少し謝ると

青髪の長髪の陽が立ち上がり・・・天音　廻黎に「別に悪くはありませんよ・・・むしろ」

と陽が何かを付け加えようと…

「あなたが油断しただけで倒せる相手がいると言う事は大変喜ばしいですね」

と常人とは思えない発言をすると・・影虎とシアンと廻黎以外の３人は喜んでいた・・・

決してレベル６は戦闘狂では無い・・・しかし、同族、または自らより上位の物を見つけると嬉しくてたまらないのだ・・・全力が出せる・・・自分たちだけが異端ではないなど安心感が出るのだ。

その衝動に特に弱いのは陽と暮日と灯なのである。

影虎は自らは本当は弱いと理解していて椿を守れる力があれば他はいらないと認識していてシアンも強さには大して興味がなく天音廻黎もあまり興味はないのだ

一方、

暮日は喧嘩大好きで強い奴が居ればかったっぱしから喧嘩を売るタイプ。

灯は自分だけが化け物でないと認識で来て喜び

一番戦いが嫌いに見える陽は全てを手に入れなければ気が済まない面があり自らより強い相手が許せないのである。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

そして、天音　廻黎はなぜ自分がやられたのか言い始めた・・・

「私はたまたま、その・・・か、か・・か・・・「彼氏ね」ち、違うぞ!!何故私が人間の男など!!「じゃ赤の他人ね」・・それはその・・・友達・・・・「友達?」・・・・よりは・・「友達以上恋人未満ね」・うん・・・「で、最終的に付き合いたいの?付き合わないの?」・・・ば・・／／／

ています。

すると影虎が横からシアンの後頭部を殴ろうとしたがシアンはポケットから財布を落としそれを拾おうとしてしゃがんだので空振りになり・・・イライラしながらも深呼吸し

「別に人間と恋人になっても良いだろ?俺だって人間と付き合ってるんだぜ?」

と影虎が天音　廻黎に言うとシアンが

【そうそう、僕もただいま人間の可愛い子を全力で攻略中さ♪】

と驚きの爆弾発言を投下したが皆は無視して後ろから【ねぇきいてよ~】など言っていたが全員がシカトヲ決め込み灯は土下座しながら無言で試案に謝っていた・・

そして、次に影虎は・・・天音　廻黎の真ん前に顔を近づけながら

「それでさ・・天音　廻黎・・・お前、眼は何処まで見えてる?」

「ーーッ?」

影虎の一言に天音　廻黎は動揺しまくって驚いていた・・・そして、さらに俯いて・・・掛け布団を握りしめながら

「・・・あのさ・・・翔也は・・「あいつも変わったダメージ追ってたな・・・まあ明日には目を覚ますさ」・・・そうか・・・「で、お前の目が全く見えていないのは・・・あの男が関係してるのか?」・・なぜ私が目が見えていないとわかるの?」

と天音　廻黎が聞くと影虎は優しい声で

「だってな・・・全員がお前に武器を向けてるのにきずかないんだよ」

そう影虎が言った瞬間に天音　廻黎は呆れていた

そうベッドに寝る天音　廻黎に全員は攻撃しようとしていて影虎とシアンはそれを制止していた・・・

「・・・・・・実は・・昨日はその華音が出かけてたから・・・暇で・・・暇だったから珍種の観察でもしようかと思って・・・・・・それで・・・遊んでたんだ・・・・それで晩御飯食べて・・・帰ろうと思ったらいきなり・・・赤い服の男とその他5人に襲われて・・・・私も迎え撃とうとしたが・・・・相性がとびっきり悪いのが赤服で・・・私が剣を突き刺されそうになった時、翔也が前に出てきて代わりに刺されて・・・それから・・・・・それから・・・・・・」

急に天音　廻黎の情緒が不安定になり始めた・・・おそらく翔也が目の前で刺された時、ショックで視力を失ってしまったのだと皆が仮定した・・・

今も震えている天音　廻黎を見れば決定的だった・・・心に傷を負ったのだと・・・

すると影虎はポンと廻黎の頭に手を置いて・・・

「どうする?華音を呼ぼうか?「・・・やめてくれ・・・恐らく奴らはまた来る・・」・・・わかった・・一応ごまかしとくよ・・そ

れとお前ら・・・相手はご丁寧に6人だとよ・・5対6だがやれるか?」

影虎がそう言うとシアン、灯、暮日、陽は頷いた・・・しかし天音　廻黎だけは・・

「5人だと?どういうことだ・・6対6だろ?」

「悪いがお前は喰い合いどころか喧嘩も出来ないだろ?「そんなことは」だってお前、傷ついた乙女みたいな表情だぜ・・安心しろ・・あんたにレベル6を名乗る資格がないとかは言わねぇよ・・・ただ、お前みたいな表情をしながら戦い命を落としかけた奴を俺は知っている・・・だからやめろ・・・・・・・・・・・ふん、やっこさん来やがったみたいだな♪・・・・・・・・行くぞてめェら」「ちょっ!?」

天音　廻黎が叫んだときにはもうすでに神生徒会のメンバーは誰もいなかった・・・・

廻黎は唇を噛み締め布団を握りしめながら涙を流して・・・・

「不甲斐ない・・・ごめん・・・」

と言っていた・・・・。

・・・・・・・・・・・

と上条当麻が死闘を繰り広げ勝利を幻想殺しその右手で掴みとった場所

そこにその場所にそれぞれ、バラバラに園崎陽が先陣にいる神生徒会をまるで囲むかのように6人の奇怪で珍妙で強大な存在がそこに居た・・・魔術師ではとても縛りきれず超能力者と言えばあまりにも突き抜け過ぎているそんな存在・・・・人ならざる存在・・・それが自分たち以外にも6人もいた・・・

そのことに陽たちは内心驚いていた・・・

そして、模造刀を抜いた陽が「「それではお招きいただいたことに感謝しまして・・問おうか?あなた方は何者で・・・いったいいつ湧いて出た!!」

そう陽が言った瞬間に・・・

「そうだな・・・僕たちは貴様たちよりも何世紀も以前に存在した貴様らと同じ世界に縛られるほどの存在・・今宵はこの時代に蘇ったのさ・・まぁ旧生徒会とでも呼んでくれ・・・それでは・・・始めよう・・先輩からの後輩いびりをね」

急に白髪で三白眼の青年で、左目の下には三つ爪のマークがある服装は純白の人物が巨大で美しい翼を広げながら言うと陽を謎の電撃が襲い陽は刀でガードしながらも押されに押され謎の空間に押し込まれた・・・

それを見ていた陽が急に空間渡りで翼を持った男に殴りかかろうとしたが急に目の前に現れた空間から突き出た機械的な手に掴まれ引き込まれ・・・

それに対して灯が妄想から現出した鎖で暮日の腕に巻き引っ張ろうとしたが急に灯の後ろに現れた赤服に巨大な剣を背おった金髪の男が灯の腹部を蹴り・・・それに対処して影虎が『異世界樹(ユグドラシル)』の杖で引き裂こうとしたが赤服はそれを受け止めよこから蹴りを放って来たシアンの攻撃はかすりはしたものの体をくるくると回転させながら交わし

蹴り飛ばされた灯は体勢を立て直そうとした時、目の前に立っているかなりの肥満体型だが、本人は多少ポッチャリしている程度と主張している、顎と口が非常に細長いかつ大きく、鋭い歯がむき出しになってうてシルクハットをかぶっている男の顔が眼に入り驚くと

「ほう、あなたも夢の世界に行きましょう」

と腕を引っ張られ気が付けば現実世界から夢の世界に連れ込まれた・・・

残りはシアンと影虎だけで二人は背中合わせになって赤服剣師と白髪で三白眼の青年、そして、髪の色は濃い緑色をしていて、耳が隠れ、背中の真ん中部分まである長髪
瞳の色は濃い青色をしていて赤色のマフラーと赤色の手袋をし、ジャケットの上から薄茶色のコートを着る男と3体2になっていた・・・それぞれが間違いなく自身と同等の存在だと理解していて・・・さすがにきついかなど二人でぼやき続けていた・・・

それでもお互いに気を張りつめていて・・・一切の隙すらなかった・・・その状況には謎の襲撃者・・3名もさすがに動けないでいた・・・シアンの両手はすでにオリーブ色の怪物の腕に変化していて影虎の両手にも錬金術で作りあげられた光の刃と闇の刃が握られていた・・・完全に戦闘態勢に入っていた

・・・・その二人に攻撃を仕掛けたのは赤服の男で背負っていた剣がなぜか巨大化して二人に振る降ろされそれを影虎ちょシアンは全速力で避けると影虎の前にマフラーをした若い男が立ちふさがりシアンのまえには白髪の三白眼の翼を生やした男が立ちふさがった

「ふわあぁ……最近面白い事ないんだよなぁ……お前は俺を楽しませてくれるか？」

と影虎をゆびさしながら目の前の男はそう言った・・・・それに対して影虎も

「俺は男を楽しませる趣味はないぜ・・・」

そう影虎が言った瞬間に影虎は二本の刃を投げようとしたその時だ・・パリーンと影虎の投げようと思った刀が投げる以前に破壊されたのだ・・・

それにはさすがに影虎も驚きつつも相手の能力の一部である現象だとさっそく情報解析を始め・・・もう一本出すかと

錬金術を使用しようとしたが白刀と黒刀が現出としようとした時、現出するより先にそれが砕けたのだ・・

「・・・・・」

影虎は冷静に考えているの言葉を発しないが・・・目の前の男は頭を掻きながら

「・・・おいおい、幾らなんでもそんな・・餓鬼の玩具で俺とやり

合おうとか思ってないよな？」

その男の一言に影虎は少しイラだった・・・そして、今度は拳銃を抜き男に向かって発砲すると

なんと弾は出ず・・・銃は砕けちり鉄の破片となった・・・

また、破壊された・・・それをまた影虎は本能に従い冷静に記憶した・・・いまであり得るのはアイツの能力は自身に向けられる武器を破壊する能力である・・

そう一つの仮定を立て今度は影虎が男に向かって走った・・「おぉ・・まるで野生の獣だな・・怖い怖い」・すると男が影虎を見た瞬間に両手両足が悲鳴をあげ骨が砕け肉が裂け血が噴き出し影虎は倒れたがしかし、すぐに回復してハンドスプリングの要領で立ち上がり一気に前に駆け「来い、『異世界樹（ユグドラシル）』！！」

そう影虎が言った瞬間に男が構え再び影虎の両手両足そして脳から心臓、血管内臓あらゆるものが破裂やバラバラになり影虎は倒れたが男の後ろから桜色の枝が襲いかかった・・・それに男は対処した・・枝の周りで爆発が怒るがそれでも枝はとまらず男の体を貫いた・・・

かのように見えたが・・・男はすでにその場におらず・・・コンテナの上にいてそれを『異世界樹（ユグドラシル）』は枝分かれしながら追い詰め・・男は「何これ？俺のことが好きなのか？破壊もできねぇしよ・・・・・あん？」と避け続けていると男はある事に気が付いた・・・桜色の枝に自身が囲まれて居ると言うことに・・

そして、ふと遠目に見ると初めに交わした樹の枝が枝分かれしてその一本が影虎に刺さっており影虎は影虎は完全回復して自らを見ていた・・・それはボードゲームで勝利を確信したような表情で・・・

しかし、襲撃者である男には影虎や神生徒会のメンバーと同じく・・・常識は通用しない

「いいね、いいね・・・やっぱお前ら面白いわ・・くそったれな奴に縛られながらでも復活した価値あるわ・・・眠気も収まったし～パチン～遊ぼうぜ、後輩！！」

男が指を弾いたとともにコンテナのあった場所が急に暗くなり下から荒野が現れそこに影虎と男はたっていた・・・『異世界樹（ユグドラシル）』に囲まれていたはずの男はその場におらず

荒野の山脈のてっぺんで影虎を見下ろしていた・・・

そして、影虎は自らがなぜここに居るかわからなかった・・・

「瞬間移動？・・・ちがうな・・・瞬間移動ではない・・瞬間移動くらいな俺の反射速度のほうが早い・・・「なぁにワープという奴だよ宇宙空間歪曲航法ってやつだ。俺とお前とこの場所までにある距離という概念を破壊したのだ。」・・・・ワープ・・か・・・そんな荒っぽい方歩があるとは・・・面白い・・・つまるところお前の能力は無条件な破壊能力だな？」

「おう、その通りだ・・・まぁお前の桜色のあれは無理だったな・・・「そういう物体なんだよ・・あれは俺が作り出してるんじゃない・・」ふん、そうか、操っているだけか・・なぁそれ俺にくれよ」

そう影虎が男を見上げながら話すと男もくすくすと笑っている男はいたって真面目な表情で言った・・・

「あん?くれだ?「そうだ、なんかお前のそれカッコイイなくれ」・・・だってよ・・『異世界樹(ユグドラシル)』!!」

男が手を前に出してくれと言うので影虎は『異世界樹(ユグドラシル)』を伸ばして攻撃を仕掛けた・・

すると男は、急にその場から消え影虎の後ろに拳を振りかぶりながら構えていて・・恐らくはワープしたのだろうが思いっきり拳を影虎にぶつけようとした

影虎もそれに対処しようとしたがガードしようとした手が破壊され使い物にならず・・・避けようとした足も動く前に破壊され影虎はその拳をもろに頬に受け殴り飛ばされた

殴り飛ばされた影虎はとっさに体を回復するより先に細胞が活性化してしまい・・黒い化け物の姿に変わり自分の着地場所より少し前に『異世界樹(ユグドラシル)』を生やしそれに両足をついてバネのように『異世界樹(ユグドラシル)』をしならせ黒き怪物は飛んだ・・・目の前の得物目掛け・・・両手に破壊の緑色の光を宿して・・・・それを見た目の前の男は、とんでくる黒き怪物に片手を向けて破壊をかけたが・・・どうにも回復の方が早いようで破壊は進んでいるもの止まる気配がなくその様子に心底驚いている

「■■■

ともはや獣のそれに酷にした雄たけびを上げながら真っすぐに自分にとんで来るそれに

「いい、まさかそれが出来るとは思わなかった・・・最高だよ後輩！！」

と次の瞬間には外見は2本の角と仮面紋のついた仮面、白い肌、胸の孔と虚の特徴を色濃く残しており、髪も長髪に変化した黒き怪物（本気）になった影虎にも劣らないほど

異質で強大な力の塊に変化した男は、真っすぐに飛んでくる黒き怪物の突き出してきた破壊の拳を両手で受け止め地面を少し削りながらも止まり・・今まで負け知らずの怪物の影虎と真っ向から力勝負になった

ギリギリとお互いの力を相手に伝えながら二人・・いや、2匹は一歩も譲らすにお互いにただ突進するように押し合った・・・「「ｇｕｒｕｒｕｒｕｒｕｒｕ！！！」」

「ｇｕａ！！
ｇｕｒｕａｌａａａ
」

その均衡を破ったのは白い方の化け物であったいきなり腕をひねり頭突きを決めひるんだ黒い怪物の頭部を鷲つかみにし自らのこぶしを叩き込んだがそれを機に黒い化け物が白い怪物の髪を掴み引き寄せ拳を仮面にめり込ませその後、白い怪物の腕を掴んでブンと回し怪物の体を岩壁に叩きつけ狂った獣のように地面に叩きつけハンマー投げの陽に放り投げると空中を待っている怪物に目掛けて体中の鍵爪などを破壊されながらも生み出しそれらを用いて回転しながら

弾丸のように襲いかかった・・そのかんも影虎の体を破壊がむしばんでいる状況だが止めと言ったところで・・・白き怪物の髪が伸びて黒い怪物の体にまとわりつき回転を強制停止させそのまま黒い怪物を持ち上げ自らも高く飛び黒き怪物の真上に飛びあがりその口から『とてつもないもの』を当たり前のように吐き出しそれは影虎に当ると・・・圧倒的な破壊が影虎を襲った・・・・・影虎の外郭を破壊し中身までをもぐちゃぐちゃにし圧倒的な破壊の渦が影虎の体を襲った・・・痛みを感じる暇も無い『異世界樹（ユグドラシル）』での回復の暇も無い・・・叫ぶことのできる器官ですらも破壊され・・・・その破壊はまるで影虎そのものを破壊しているようだった・・・今までで一番ひどい破壊と言ったらいいのだろう・・・・『異世界樹（ユグドラシル）』の鎧も中身を攻撃されれば実にもろい・・・『敗北の王（ビクターパラドックス）』の反則効果が今使えればこのダメージを相手に押し付けたりダメージを消してしまえばいいが・・・この破壊はそれすらも許してくれない・・・・圧倒的な破壊が・・・男の破壊によっては荒れることのない空間の中で影虎を襲った・・・・それから時系列も崩壊している世界で影虎は１０年近く破壊され続け・・・ようやく破壊が終わったころには『異世界樹（ユグドラシル）』で回復しながらもボロボロになり地面に倒れて起き上がれなかった・・・そして、白き怪物は人の姿に霧が晴れたかのように変化して影虎を見下ろし頭を踏みつけ

「なんだよ・・もう終わりかよ・・・楽しませてくれよ！！」

「・・・・・・・」

その時影虎の目は何もとらえていなかった・・・人生で初めて・・・

『諦めた』

・・・・・・・

・・・

シアンに関しても彼は最凶ではある能力だ・・・なにせ運が良すぎて攻撃があたらず知らずのうちに自分がダメージを負っていることがある・・そして、完全ランダムの超常現象はなんでもありなので彼に真っ向勝負で勝てるのは反極性の影虎くらいだろうそれにしたって彼はまだまだ何かを隠し持っている・・・恐らくだが彼程運命にすかれた物はいない・・まぁ弱点は本気を出したことがないのでそこが知れないと言えば恐怖だが自分の力量を把握しきれていないのは弱点の一つである。

影虎の能力は『異世界樹（ユグドラシル）』と『敗北の王（ビクターパラドックス）』といい彼が死ぬことは何があってもありえなく身体能力の高さは随一で魔術、能力、礼装、武具、武術、銃器、神聖な特技、召喚、転移、消失、無効、変化・・etc．など多々に踊る戦闘の技術、能力が死なぬ上に性能の高い肉体に宿っている・・・まぁこれは椿を守りたかったが故に培ったものが多くその努力のたまもの本来は本能に従い暴れた方が強い・・・陽とは戦ったことはないが恐らくは性能の差で陽には正攻法では勝てない

そして、残った灯だが彼女の能力は陽と影虎に続いて強いのである。彼女の能力は夢を現実に変え夢の武器や物体を現出させそれを自由に操り戦う事が出来、やりようによってはレベル6を無力化させるアイテムという破格の物であっても彼女であれば作り出せる・・・逆に現実を夢にし現実で怒った事柄を妄想に変換することができ自身を妄想に変えれば誰も触れることすらかなわなくなるそして、対象を幻想にかえこの世から消してしまうこともできる・・・彼女の能力は誰にとっても天敵である存在である。

そんな彼女に弱点があるとすれば・・・それは彼女の引っ込み事案で消極的でそれでいて何もかも恐れてる憶病な性格であろう・・・悪夢を見ることですら怖く・・悪夢が現実になったらと思うと恐怖

で眠れもしないのだ・・・・

そして、彼女にはトラウマがあった・・・・ついでにいうと灯は以前はこんな性格では無かった。

彼女は、かつて普通の子供だった・・・明日を夢見る少女だった

ある日、中国のある小さな村でのことで昼寝が大好きだった灯はある日、日々の貧しい生活のストレスから村が自らの夢の中のお友達によって滅ぶという夢を見た・・・そして、眼を覚ますとそこには自分の夢の中のお友達が現実に現れ村は一瞬のうちにほろんでいたと言う、自覚のないところでの力の覚醒が怒った事故。

その時の悪夢を今、灯は見せられているのだ・・・・家族を自分の夢が殺してしまった…友達を・・・殺してしまった・・・少女にはとても耐えがたき地獄・・その時の映像を流され灯は狂いかけ

「やめろ!!!!!もうやめてぇ!!!!!」と自らの夢に出てきた大量の武器や悪夢の亡者たちなどを現出させそれらで伯爵にそう攻撃を仕掛けたが・・・伯爵がニターと笑った瞬間にその全てが自分に刺さっていた・・・・「か・・・は・・・・・」バタンとその場に串刺しになりながら倒れた灯、彼女は夢を見ている時は絶対に優勢だが・・・悪夢を見ている時に限り能力はマスターである灯に襲いかかったのだ・・・

「ふふふ、手を加えるまでもありませんね？・・勝手にお死になさい★さぁあなたの素晴らしい夢の続きを見せてください？」

「やめ、やめて!!!!!いやぁあああああああああああああああああああ」

と灯が苦しみ姿を見て伯爵は笑っていた・・・・

・・・・

つないでしまうと言うこれまた恐ろしいスキルなのだ。

「ドウシマシタ？モウアキラメマスカ？」

とアンモナイトが暮日に無機質な機械声でそう言った。

それに対して暮日は「やなこったアンモ！！今すぐお前を殴り殺してやるよ！！」

そう言って暮日が空間移動を使おうと思った瞬間に

「ザンネンデス、デハアナタノフクブヲツラヌク可能性ニショウタイシマショウ」

そうアンモナイトが言った瞬間に暮日の周りの世界がぐにゃりと暮日ごと捻じれいつの間にか暮日は腹部を機械的な腕に貫かれていた

「か・・・は・・・・」

と暮日は腹部と口から血を吐いて・・・その場に倒れた・・・・ふだんならすぐに回復しているはずの異次元人である暮日の体も・・・回復する可能性というものを封じられているため・・・に傷は絶対にふさがらないのだ

その状況で異次元に移動してもすぐに引き寄せられてしまうため暮日に勝ち目はなかった・・・

するとアンモナイトは急に

「アナタハアキマシタネ・・・ソウダ・・イマカラワタシモホカノ

ミナサマニマゼテイタダキマショウ。アナタヨリハユウイギナ研究ニナルコトデショウ」

とアンモが言った瞬間に・・・

「あぁ？俺の喧嘩に・・・あいつらを巻き込む？」

と暮日の顔は青筋が立ちまくっていた・・・

・・・

操作をたやすく無効化している・・・そして、雷の速度で移動し強力な一撃をぶつけてくるのだ・・しかもたまたま電気を通さない陽の模造刀でなければ、傷つけられるほど傷つけた相手にその電気エネルギーが流れ込む雷電の体質に苦しい戦いを強いられていただろう

・・・・「いやはや・・・それにしてもあなたのそのお力・・素晴らしいですね」

そう陽が言うと目の前の黒衣を纏った男は「・・・・・」とだんまりを決め込んでいて陽もどうした物かと悩んでいた・・・・

しかし、陽の目的はたった一つだった・・・目の前の男から力を奪い取ってやること・・・それだけだった・・・

すると目の前の黒服の男は急に無言で何の動作も無しに爆発的で下手をすればちきゅう程度の惑星であれば黒焦げになるであろう程の電撃を天に放った・・・

その電撃が自分に来ないので陽は?と首をかしげた・・・予想外・・それは自分たち怪物のとっては正当な評価のひとつ・・・そのことを思い陽は刀を構えて真っすぐに目の前の雷電を見た・・はたから見れば騎士に見えるその風格と構え・・これで剣の手ほどきを受けたことも無いという事実を知れば皆が驚くほど見事で隙の無い構えを取りないか来るであろうそれに真っ向から挑もうとした・・・

目の前の男は戦闘力だけで言えばおそらく誰よりも強いだろう・・・近づくだけで電子の力で体が沸騰し彼の体から自然に漏れる電気に触れれば感電死し彼が力を込めれば絶縁性の物以外すべて破壊されその物体が雷の速度で動くのだ・・・攻撃力が高すぎる・・・おまけに黒い衣装をまとった男は体がありえないほど強固なのだ・・・

どれほどかといえば『傷つかない』ほど強固なのだ・・

その黒服の男が両腕を組みながら「・・・・強きものよ・・決して死ぬなよ」

そうかれこれ１０時間の激戦で初めて話した・・それに陽は驚愕の表情で構えをついといてしまいその瞬間に・・・・陽は天にあるものを見た

「・・・・雷のオリュンポス・・・・」

そう陽が呟いた瞬間に超巨大な雷撃の槍が地面にそそがれそれは世界中にそそがれ逃げ道はなく・・交わすこそもならず回避不能の雷撃の槍だった集中砲火ではなく広域掃射だった一発一発が国を滅ぼす威力を秘めていたそれが無限に落とされたのだ・・・・

その中で陽も全力で刀を持って抵抗した・・・しかし、４５本目の電撃の槍でついに刀が折れ・・・

陽はそれでも全力で手刀で防ぎ弾き光を超えるほどの速度で迎え撃ったが２分程度した時（１３８７本目の槍）、ついに手数が足りなくなった陽の体は光の中に消えた・・・

光に消える前の陽は、品性方向とは真逆の欲望塗れの醜く歪んだ素顔をさらしていた・・・・

・・・・

【僕は君のこと嫌いだな~】

「ハハハ、それは僕のセリフだ。」

とたったいま、現在、シアンは大量の本棚のある世界に居てたくさんの本が空中で開きその本から大量の炎や氷やら電気やら槍やら剣やら銃やらが無数にシアンをホーミングして追いかけておりそれをシアンは紙一重で避け続けていた・・・

それどころか針の穴一つも無い空に居る白髪で三白眼の青年で、左目の下には三つ爪のマークがある服装は純白の人物が巨大で美しい翼を広げながら攻撃してくる人物の隙をついてジャンプし蹴りをかませるほどシアンは余裕があった・・それでも決定打にはならない・・超常現象という完全ランダムな能力は全てが全てシアンの防御に回ってしまっているため実質的に肉弾戦しかできないのが現状である。

幾ら運が良くても攻撃をすべて交わせるわけではない・・許容を超えた攻撃にシアンは超能力で迎撃させるのだ・・・あらゆることがランダムで起こせる能力でも目の前のなんちゃって天使、そのなもゴスペルの地球で起こったありとあらゆる現象を召喚する魔本を収める図書館の手数の多さにいら立ちを感じていた・・・

拮抗しているこの状況が落ち着きのないシアンには苦痛なのだ・・・

「ふん、どうやら君はそこまでのようだね【なんだって?】僕は君と違って力の1割しか出してなんだ・・・」

そうゴスペルが良いはなった瞬間に無数の本棚から大量の本が飛び

立ち・・・それら全てがシアンに目掛けて降り注いだ

それは地球の今までの歴史・・・その全てがシアンに降り注いだのだ・・・

【うそでしょ・・・ていうか・・・幸福からは程遠いな】

そうシアンが言った瞬間にシアンの額を一本の燃える弓が貫いた・・・

・・・

・・・

全ての声が合わさったような声で。

Ｔｈｅｒｅｆｏｒｅ，　ｗｅ　ｅｘｉｓｔ．（だからこそ我らは存在する）

そこにもはや、彼らはいなかった。

『界の書換（ｒｅｃｏｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ｅｎｔｉｒｅ　ｗｏｒｌｄ）』

そう呟いて

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「な、なんだ?」

と急に目の前に倒れている影虎の気配が変わり驚いている破壊者・・・

すると影虎が顔をあげ・・光を宿していない眼で

「俺の敗北か…「『〜（我は問う、我であり汝の使命は何か?答えられるのなら我が答えよう。我であり汝である我の使命、それは無である…なら無とは何か・・・それは日常である・・・日常とは何か?それは何も起こりはしないこと・・時間だけがただ過ぎ・・過ぎるだけ・・・それはある意味地獄、しかしそれこそが我の望み・・平和でもなく・・争うことすらも無く・・・ただ、死にゆくだけ・・・そんな世界を我は望む・・・・我の問いに答えよ誰しもが望み誰

しもが絶望する真の平和の象徴、『無の境界（ゼロ）』）」

影虎が敗北を認めた瞬間に影虎のケテルの王冠が砕けその瞬間に影虎の深層心理である『無』の人格に変化し頭から透明の王冠が現れた。

そして世界の風景は綺麗な巨大な桜の咲き乱れる荒れ果てまるで生命が死滅してしまったかのような毒々しい黒い地面、全てが意味を成さないと言うほど空しい光景の広がる透明な空など明らかに世界の理を度外視した世界が広がっておりさすがに破壊者も驚愕の表情を見せた

「・・・クレイジー・・？」

世界が一瞬で乗っ取られたので驚きそして、自身の目の前に影虎が当たり前の世界の中心…ように立っていた・・・この正気とは思えない醜悪でありながら何処か救いを求めるようなそのような風景・・・

そして、頭からは噴き出すような透明の王冠が現れており・・・眼には何も宿していなかった

「・・・とりあえず・・お前・・最高だわ♪」

そう言って男は影虎に向かって白き破壊の権化となり「決めた・・俺はお前を完全に完璧に『破壊』する！！」

そう喜びながら再び立ち上がったチャレンジャーに挑んだ・・・しかし・・・・

「・・・

「おや、どうしたんですか~？まだあなたの苦しみ姿を「・・・・そうですね・・私は・・・忘れていました・・・ありがとうございます・・どうやら最近、憶病が加速して・・忘れていました・・・あの地獄を・・そして・・私の夢は…現実（犠牲）の元になりたつということを！！」

伯爵が言葉を放とうとした時、灯がそれを遮りくわっと伯爵を一切見逃さず睨みつけ髪が全て逆立った時・・・

世界中が虹に包まれ空には子供の落書きのようなものがたくさん浮いていて地面がお花畑に変わる。

そして、その世界は今まで見てきた灯の夢のゴミ処理場で次から次へと空想の産物などが振って来る。

この世界では現実は全て夢になり空想こそ仮想こそが実態を持ち力となる・・・灯が二度と使わないと決めた本当の夢・・・

「ほほ~ ★これは一体何なんですか~ ？」

とそう言いながら伯爵は鬼のような形相になり両手で巨大なエアの剣を灯に目掛けて振り下ろした

ギャインギャイン

「ッ！！？」

すると・・・なんと伯爵の攻撃を同じく新たに目の前に現れた伯爵が受け止めたのだ

「な、なんですかこれは★」

さすがに伯爵が驚くと自身の周りに大量の自分（伯爵）が立っていた・・・しかも驚くのが周りに居る偽物はまぎれも無いオリジナルのアーチボルト伯爵だということ・・・

そして目の前に立つ灯の姿はあきらかにねぐらとは違い着物姿で女が居て

「この世界では灯の夢なの・・・灯の夢の中で灯が望めばそれはどんなむちゃだろうが実現する・・・それどころかもっと凄い事だって起きるのよ♪」

と着物の女は九本の狐の尻尾をからめながらそう言った

この世界とは灯があいたい人物やいきもの・・・夢の墓場・・・アーチボルトがいっぱいいるのは・・・灯は優しい伯爵に会ってみたかったから・・・それだけである・・・

「ふざけるんじゃありません★」

と伯爵が急に黒い膜につつまれそして、一瞬で全てを吹きとばそうとしたその時、大量の伯爵までが同じ能力を伯爵に使いそれぞれが一斉に消滅した

その光景を空から眺めていた・・・灯の願望から生まれた九本の尾を持つ妖怪、玉藻・・この世界でガイドをしている彼女はくすくすと笑い

「灯に勝てる化け物なんていやしないのよ・・・・私だって無理だ

ったのに・・」

そう言った・・・そして、女狐は炎になって消え灯もまた現実世界に帰還していた。

・・・

るようだった・・・

「説明してやる・・・以前は空間の条件を一つ変えそこに相手を引きずりこんだり逃げ込んだり空間移動で攻撃していた俺の能力が俺自身が作った空間の物なら何でも好きなように物体を操ることが可能になる。それどころか扉につながった別の世界の物まで使用し持ってくる事が出来、自由に使ったり、書き換えたりすることができる。この能力で連れ込まれた人間は、俺の許可なく剥離世界から出ることはできない。剥離世界にあるものを動かせるのは俺のみであり、さらにものの形状も多少なり変えることができる。たとえば俺以外の人間がものを動かそうとしてもびくともしないなど剥離世界では俺に勝つ事は不可能・・以上♪」

そう上機嫌に両腕を組みながら話した直後にアルハザードは大量の扉からありとあらゆる物質がこの世界に吸い寄せられれるのを見たスプーンからビル・・・さらに星までなんでも空を浮いていて・・・・それらはすべて暮日の所有物であり暮日の実力である・・・空間把握能力で言えば暮日はレベル6の誰にも負けない実力を持っているのだ

そして、両腕をくみながらアルハザードを見て

「お前それほど強くはないんだろ?ただ、そのオモチャが強力だっただけだな・・・滅べ!!ガラクタ!!」

そう暮日が言った瞬間にアルハザードの体を世界そのものが攻撃した・・・激しすぎるそれは、オーバーキルをゆうに超えていた・・そして、何もかもが壊れ・・疑似太陽系ひとつが無くなり宇宙空間でくれにちは眼を瞑りながら・・・「はぁ~・・・灯でも助けにい

ってやるとしようか」

そう言っていつもの空間移動で帰った・・・・・別の宇宙一つを破壊して・・・

・・・・・

お気遣いどうも・・・オホン、私の日本刀・・実は・・・私の気に入った攻撃を吸収し、また吸収した分だけ私を強くしてくれるんです♪まぁ名前はないんです・・・ただ、普段は模造刀にでも入れておかないと暴れちゃうんですよ・・・・キュラはね・・・・・それと雷電さん・・・あなた、私にもう手段がないとか思ってますよね？「・・・・」今度はだんまりですか・・・まぁいいや・・私は時の逆行者です、何度でもやり直し何度でも這い上がる。私に終わりはありません…さぁ粛清の時ですよ」

タイムパラドックス・ネバーダイ
『逆行時間』

陽の絶対時間は化け物以外の時間を止め早め遅くし遡りなどが出来たある種の最強の能力だがレベル６には効果が薄いという弱点をはらんでいたが今回の…

この空に巨大な時計や時計塔が無限に近く存在する世界を構成したこの中では逆に化け物である存在は対処法がない限り時間を操られ、さらにこの世界では陽は無限の回数、物事をやり直すことが可能で必ず対処法を見つける事が出来て最終的には、そして、あらゆる未来や過去からから違う世界違う能力、違う性能を持った自分を呼び出しタイムパラドックスを無視した戦いが可能。

そして、たくさんの時計からたくさんの年寄りや子供、あろうことか女などたくさんの園崎陽、そのものが出てきて皆がそれぞれ武装していた

それらは陽の別の生き方をした陽自身、

「「「

と大勢が言うと雷電も体中から雷を作り出しそれを天にはなって再び無数の雷撃の槍を作り出しそれらを全て余すところなく放った

「・・・・・・ゼウスの雷光戦火!!!」

「「「

荒々しい眼でまるで・・・捕食者と言わんばかりの迫力で自らの電撃のよろにつつまれた体を押さえつけているのだ

「ギャハハハ・・・ザマァねぇな雷電!!!お前の力・・・・この俺が貰う!!!」

といったいどこから出たのかという嫌い下品な声でさわぎなんと雷電の鍛え抜かれた右腕を細い女のような腕で陽が引きちぎったのだ

「ウグォアアアア!!!!・・・え!?」

それには雷電も激痛を感じ一気に放電を始めるが自らを踏みつけている陽は感電一つしておらず・・

雷電からほとばしる雷撃はすべて陽の持つ刃の砕けた園崎陽が遥か未来の魔術師に生み出させた世界に存在しない魔剣食いの魔剣・・・魔剣グリードに吸い寄せられ・・というよりも雷が喰われていた・・・そして、透明の剣は雷電の雷を喰うことで存在しなかった刀身を雷で作り出した・・・・

その瞬間に雷電は陽を払いのけ雷の移動で陽から距離を取り全身にもう一度雷を纏わせた・・そして、陽を睨みつけた

それに陽はゆらりと立ち上がり・・・にっこりと妖艶な笑顔を向け…

「ふん、それでは・・・まいりましょう!!!!」

「ウグルァアアアアアアアア!!!!!」

と雷を纏った雷電が全速力で片手だけになってもその拳を向けてき

た雷電を魔剣で時を超える速度での居合い斬り二つの雷がぶつかり合った・・・・

そして、「・・・・・・・狂犬め」と体を上半身と下半身に分けられた雷電は最後に陽にそう言ってこの世を再び去った・・・

「・・狂犬・・ね~・・・・」

カチンと陽は刀を鞘におさめた・・・。

・・・・・・・

【もしも「シアンさん！！！いったいいつまで遊んでるんですか！！」え？「早く帰ってきなさい！！晩御飯覚めちゃうんですよ！！」・・・ごめん？「何で！！疑問形だ！？」・・・なるべき早く帰るね・・「一分に一枚ごとピザ食べて行きますからね！！」ちょまって！！「なんですか？」そんなペースで食べたら大きくなっちゃうよ？…横に・・「もうしりません！！ガチャ！！ＰＵ－ＰＵ－」・・・】

といきなり少女の大きな声で耳をやられたシアンは携帯をしまって当たり前のようにゴスペルを見てから急にボロボロの姿が瞬きした瞬間になにごとも無い様になり

【アハハ、驚いたよ、一度ならず二度までぶちのめされるなんて・・・でも僕にもようやく分かったかな…道化じゃ「大切な物は守れねぇ～よな、俺が馬鹿だったぜ、此処からはガチだ！！気合い入れろよ？俺のピザのために」

全ての０％以外の確率を０％～１００％に操作できる。いままではランダムであった運命を確立という概念に置き換えあらゆる確率を自分の都合がいいように操る。

今までのランダムと確率という二つの因果を操ることが出来るようになったシアン

今現在、世界そのものがサイコロやルーレットなどと言ったギャンブルに使う物にあふれた世界になる。空は超巨大なルーレットになっていて地面はルーレットのテーブルのようになっている状況でシアンは言った。

「ふーん、こんなことが出来るなんてさすがは幸運だね・・・でも僕の方が強いよ!!」

ゴスペルが本を開きそこから連鎖するように宙に浮いている本が全て開き光を放った時

「ふん、俺が幸運だけだと思うなよ?」

そうシアンが呟いた瞬間にバタンバタンとゴスペルの本が閉じたのだ・・・

「・・・・どうしてだよ!!なんで!!」

ゴスペルは困惑していた・・本はすべてゴスペルの物でありそれらが一切機能しない・・その状況を必死に優秀な頭脳を駆使して考えたが答えが出てこない。。。(運がいいとはいえそれは自身にだけの幸福で僕を不幸にすることはできないはずだ・・・)

「ふん、二つだけ教えてやる・・・今の俺は幸福だけでなくこれから起こるであろう確率を完全にコントロールできるようになっている・・今のこれはお前の能力の不具合が起きるなどと言う天文学的確率を操っただけだ・「嘘だ!!そんなのあり得ない!!」・・俺が嫌いな影虎は自分が負ける確率はゼロだとか自分がマリアを裏切ることはないとかマリアの心は揺れ動かないとか断言する馬鹿なんだけどさ・・・ありあえない事なんてありないぜ?だからこそ世界は楽しいのであって常に世界は生きるというギャンブルを楽しんでいるんだ・・それをおまえは・・地球が生まれるより前から生きていてあろうことか・・・ありえないなんて・・・・・まったく・・・あわれな・・・何を学んで来たんだよって話・・・「お前僕w侮辱

するのか!!僕は神だ!!この翼がその証拠だ!!」・・ウザい・・もう一個言わせてくれよ?・・・誰を前に見下ろしてる!!たかが鳥風情が!!!」

そうシアンが起こった瞬間にゴスペルの周りを嫌な風が吹き・・・ボウとゴスペルの翼が燃えだしたのだ!!

「うわぁあああなんだなんで!!!僕の神の証が!!!??」

見る見るうちに炎はゴスペルの翼を包みゴスペルを焼けこがし・・・もがき苦しみ最終的に灰になったゴスペルにシアンは凶器の目を向け・・興味がなさそうに「・・あぁ~あ【詰まんないギャンブルだったな~・・・さて家に帰って麻華ちゃんを僕色に染めよう♪】

そう指をパチンとならすとシアンは麻華の女子寮の前に居た。

・・・

こうして、謎だらけの旧生徒会・・・過去に不死でなかった怪物たちの襲撃は幕を閉じた・・神生徒会をより強大な者にしてしまって…

つづく

アーチボルト伯爵

声　ー　滝口順平

国籍、年齢等の詳細は不明。身長２２０ｃｍ（帽子は除く）、体重８５ｋｇ。

３０００年以上前に存在した、世界終焉を目論んでいた怪人物。かなりの肥満体型だが、本人は多少ポッチャリしている程度と主張している。顎と口が非常に細長いかつ大きく、鋭い歯がむき出しになっており。一人称は「吾輩」。

怒ると恐ろしい形相になる。毎回シルクハットをかぶって登場する。影虎のと色違いのエアの剣を持っていて、戦闘力は強大。学園都市を一瞬で真っ平らに消滅させるほどの力を持つ。

能力

『恐怖の夢（ホラー・ザ・アンリミテッド）』

他人の恐怖や嫌悪を抱く物や事柄、事故、運命を具現化または実現する事が出来る。

2人目

雷電（ライデン）

常に黒衣を纏った謎の男。とにかく寡黙で言葉一つはっさない・・それでいながら眼力だけで相手を気絶させるほど威圧感あふれる存在、２０００年以上前に存在していた人類である日、偶然にゼウスの雷光を体に受け止め死なずに進化した元人間。

能力、『覇王雷電（エレクトリック＝ボルテックス）』

無限のエネルギー

雷帝になるとそれまでに受けたどんなダメージも一瞬で回復し、戦闘中のダメージも瞬時に回復する。一度雷帝化すると全ての人やモノを破壊しつくす怒れる暴君と化す。雷帝を解いた後も雷帝時の記憶は残っている。

周囲に起こす激しい電磁力により、不用意に近付くと電子レンジの原理で血液が沸騰する

応用

ゼウスの雷光

神々の王ゼウスの武器、雷である。凄まじいまでの破壊力を持つ是に打たれれば、全ての物が焼き滅ぼされる。

翼のある槍の形状で、舵の神ヘパイストスが作り。

ペガサスによってゼウスの元に運ばれる。

ヘパイストスは是を作った褒美にゼウスの娘にして
オリンポス一の美神アフロディテを妻として与えられた。
ゼウス達オリンポスの神々が先代の支配者クロノスを殺した事を呪って
大地の女神ガイアが怪物テュポンを送り込んできた事があった。
百の頭を持つ大蛇テュポンには流石の神々もたじろいだが
ゼウスが放つ雷光が遂にこの怪物を打ち倒したほどの一撃を無限に発射できる。

3人目アルハザード

9000年前にすでに存在して超古代の科学力を宇宙との交信によりオーバーテクノロジーに仕上げた人物。

アンモナイトのような巨大な装置に乗る謎の男で顔は仮面を着けているため目の周囲しか見る事が出来ないが、目の周りの皺から相当な高齢である事が伺える。
本来は足を引きずっている上に全身を鎧のようなもので固めているためおそらく義手、義足であると思われる。
仮面の模様が超古代文字でと同じ、乗っている装置の形状が遊星号に似ている等の事実から、登場当初から遊星何か関係があるのでは、と予想されていた。（後述）
ちなみに乗っている装置を左右対称になっている。声帯が壊死し補強しているのか、声が機械音混じりである。

『終末の剣』

能力は、あらゆる可能性（パラレルワールド）を破壊し己が望む現実（世界）だけを実現することのできる能力。この能力は自身に埋め込んだオーパーツにより発することのできる不確定要素の一蹴の能力。

応用

永遠の敗北や永久に続く苦痛を相手に死居る事の出来る力。

以上

４人目

パンドラ

赤いロングコートと背中に背負った大剣が目立つガタイい良い金髪の大男

悪魔の血を引くが故に、超人的な怪力と生命力を持つ。脳や心臓を銃弾で貫かれた程度では死なない。身体が損傷しても、瞬時に再生する。悪魔の存在を「匂い」で感知したり、人間と、人間に化けた悪魔を見分けることも出来る。また、内なる悪魔の力を引き出すことで「魔人」と化す。

５０００年前に人々の英雄として存在していた。

霊装

魔剣スパーダ

能力は、おもに身体能力の強化や飛行などだが背中に構える大剣は

あらゆる悪魔を喰らい力を手に入れる刀で在り６６６通りの形態や能力があるうえに大きさや重さなどが自由自在で単純に戦闘力だけの化け物。

大剣の特殊能力で能力や魔術などは一日に６６６通りを駆使してその全てで殺さなければならないため厄介。

名前　峰崎（みねざき）　一輝（かずき）（仮）

能力
絶対破壊（ディストラクション）
自分に危害を加えるもの総てを破壊する能力。
それは人であっても能力であっても、何であっても同じこと。
例えば、炎が一輝の身体に触れても触れなくても、一輝や絶対破壊が害だと判断すれば、その炎は破壊される。
一輝を幻に変えようとしても、時を止めようとしても、破壊されて効かない。
しかも、破壊したいと思った場所の範囲を設定すれば、例えどんなに広い範囲でも、その場所は破壊される。
死んだとしても、死を破壊してしまえば生き還る。

年齢　外見上１９歳（１万年に死亡）

身長　１７５センチ

性格

とにかく散歩が大好きで、暇さえあれば街中をフラフラと歩きまわっている。

眠たくなったら寝て、遊びたいときには遊ぶ。
好きな食べ物はたくさんあるが、嫌いな食べ物はとくにない。
イベントが大好きで、不良が歩いてくると何かと肩をぶつけて喧嘩の原因を作ったりする。そしてニコニコしながらその場から逃走。
他人に対してイラッとすることはないが、他人をイラッとさせる事はある。
幻獣を呼び出し、人を脅かして楽しんでいる事もある。

容姿

髪の色は濃い緑色をしていて、耳が隠れ、背中の真ん中部分までである長髪。
瞳の色は濃い青色をしている。
白色のTシャツを着ていて、その上から灰色のジャケットを着ている。
下は紺色のジーパンに黒色のブーツを履いている。
暑いと感じるときはジャケットを脱いで、白いTシャツだけになる。
逆に寒いときには赤色のマフラーと赤色の手袋をし、ジャケットの上から薄茶色のコートを着る。

口調

「ふわあぁ……最近面白い事ないなぁ……」
「みんなそんなにオレの事が好きなんだ！」
「オレってホントに愛されてるよね！」
「ふざけるな。こっちは真面目な話をしてるんだ」
「お前みたいな奴がいるから、世の中は狂うんだよ」
「世に人がいる限り、負の感情は決して消えることはない」

念の為の人間形態以外の形態は、一護のホロウ化みたいになる。

6人目

ゴスペル

アダムより以前に生まれていた人の形をした何か。

白髪で三白眼の青年で、左目の下には三つ爪のマークがある。一人称は「僕」。

服装は純白の物を好んで着る。汚れるとすぐに捨てる。

食道楽で、マシュマロが大好物。

常に飄々としており捉え所のない態度で人と接し、その反面、ボンゴレ狩りや幻騎士を切り捨てた例のように冷徹な一面もある。
その戦闘能力は非常に高く、一対一で負傷しているとはいえシアンを軽く退けるほどである。

つねに背中に翼が生えており、ゴスペルはこれを人間を越えた存在であることの象徴だと語っている。

厳密には天使ではなく悪魔でもない第三の勢力、またの名を新種。

テスラ・マネージメント
『星指導者』

脳内に今まで生きてきた情報の本棚がある。この本棚には、ほぼ全ての地球の出来事が入っており、「地球の記憶」と呼ばれ、本の形で脳内に莫大な数でデータが収まっている。この本棚にアクセスす

る事で目の前で起きている事や起きることに関連しているキーワードからその言葉に関連している資料、文献、由来を探り当てる。インターネットで同じくキーワードを元にＷＥＢサイトに記されている語句を絞り込み探す「検索エンジン」と理屈は同じ。一つのキーワードに他の語句を付け足す事で検索対象を狭める。本棚は記された語句が増える事に本棚と本は減り、最終的に検索キーワードが記された本棚の中の１冊にたどり着く。その本に記された文章を徹底的に分析し、その対象の歴史、文化、材料、性質、方法とありとあらゆる情報を洗い出しそれらを全て具現化させる事が出来る。

具現化するのはこの世で起きた事柄なら何でも可能だが生命の誕生に関しては不可能。

だが、それ以外の事柄においては事件でも事故でも災害であろうが武器であろうが天使の光臨であろうがなんにでも可能。

以上。

レベル６の進化

臨界者の能力

『界の書換（ｒｅｃｏｎｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　ｅｎｔｉｒｅ　ｗｏｒｌｄ）』

レベル６の頭脳で世界そのものを完全に把握し魔術的能力によってその法則を捻じ曲げ

術者の心象世界をカタチにし、現実に侵食させて形成する事によって発生する世界。
世界と繋がり自然を変貌させる力、世界内の風景・世界法則を一時的に塗りつぶしｏｒねじ曲げてｏｒ入れ替えてｏｒ変貌させる。

世界は術者の一つの内面を具現化させるため、世界の心象風景・能力を術者の意志で変えることは出来ない。
内部のあらゆるものを結界内のルールの影響下におく。

自然の延長であるが結界を形成した場合、世界そのものが法則をねじ曲げられた異界を潰しにかかるため、
維持には莫大なエネルギーが必要になる。展開し維持できる時間は個人では数分程度、
強力な化け物であれば1年程度が限度とされている。

影虎

「俺の敗北か…〔『～（我は問う、我であり汝の使命は何か？答えられるのなら我が答えよう。我であり汝である我の使命、それは無である…なら無とは何か・・・それは日常である・・・日常とは何か？それは何も起こりはしないこと・・時間だけがただ過ぎ・・過ぎるだけ・・・それはある意味地獄、しかしそれこそが我の望み・・平和でもなく・・争うことすらも無く・・・ただ、死にゆくだけ・・・そんな世界を我は望む・・・・我の問いに答えよ誰しもが望み誰しもが絶望する真の平和の象徴、『無の境界（ゼロ）』）～』〕」

『敗北の王』⇒『無の境界（ゼロ）』

影虎が敗北を認めた瞬間に影虎のケテルの王冠が砕けその瞬間に影

虎の深層心理である『無』の人格に変化し頭から透明の王冠が現れる。

世界の風景は綺麗な巨大な桜の咲き乱れる荒れ果てまるで生命が死滅してしまったかのような毒々しい黒い地面、全てが意味を成さないと言うほど空しい光景の広がる透明な空など明らかに世界の理を度外視した世界が広がる。

この世界では、ありとあらゆる何もかもがその機能を果たさなくなる。生命は死、武器は朽ち果て、望みは全て絶たれ、思い出は風化し、価値は無くなり、能力は役に立たなくなり、魔術は存在しなくなり
、存在は無に帰し、才能は必要が無くなり、努力は実らず、奇跡は起きず、夢は夢でしかなく、愛は消失し、なにもかもが必要のない平等（無の境地）へと変わる空間を精製する。

この時、影虎は意識もなにもないため影虎自身使った記憶がないためこんな事が出来るとは知らない。

暮日

「俺は、自分の世界に帰りたかった…でもアイツ（レベル６）らが今の俺のいどころなんだクソッタレばかりだが・・アイツらだけは俺を導いてくれる・・・」

『閉鎖空間』⇒『剥離空間（パラダイスロスト）』

空間のそこらじゅうに扉が出現し地面に突き刺さったり空に浮いたりして世界そのものが広大で終わりのない迷路のような空間になる。

以前は空間の条件を一つ変えそこに相手を引きずりこんだり逃げ込んだり空間移動で攻撃していた能力が
自身が作った空間の物なら何でも好きなように物体を操ることが可能になる。それどころか扉につながった別の世界の物まで使用し持ってくる事が出来、自由に使ったり、書き換えたりすることができる。
この能力で連れ込まれた人間は、暮日の許可なく剥離世界から出ることはできない。剥離世界にあるものを動かせるのは暮日のみであり、さらにものの形状も多少なり変えることができる。暮日以外の人間がものを動かそうとしてもびくともしないなど剥離世界では彼に勝つ事は不可能。

陽

「私は時の逆行者、何度でもやり直し何度でも這い上がる。私に終わりはありません…さぁ粛清の時ですよ」

『絶対時間』⇒『逆行時間（タイムパラドックス・ネバーダイ）』

化け物以外の時間を止め早め遅くし遡りなどが出来たある種の最強の能力だがレベル6には効果が薄いという弱点をはらんでいたが今回のこの空に巨大な時計が無限に近い存在する世界を構成したこの中では逆に化け物である存在は対処法がない限り時間を操られ、さらにこの世界では陽は無限の回数、物事をやり直すことが可能で必ず対処法を見つける事が出来て最終的には、そして、あらゆる未来や過去からから違う世界違う能力、違う性能を持った自分を呼び出しタイムパラドックスを無視した戦いが可能。

この時、陽は普段から品行方正な性格ではなく本性である野獣で欲張りで強欲で狂気じみた性格になる。

灯

「私の夢は…犠牲の元になりたつ！！」

『幻実?ぎ（ドリーム・オア・リアル）』⇒『幻実放棄（ダイヤモンドダスト・ドリーム）』

怖がりでマイナス思考の塊の灯の心が灯の一番の恐怖（トラウマ）を呼び起こした時、世界そのものが灯の夢へと姿を変える。

灯のトラウマである事がらは、ある日、中国のある小さな村でのことで昼寝が大好きだった灯はある日、日々のストレスから村が自らの夢の中のお友達によって滅ぶという夢を見た・・・そして、眼を覚ますとそこには自分の夢の中のお友達が現実に現れ村は一瞬のうちにほろんでいたと言う、自覚のないところでの力の覚醒が怒った事故。

世界中が虹に包まれそらには子供の落書きのようなものがたくさん浮いていて地面がお花畑に変わる。

そして、その世界は今まで見てきた灯の夢のゴミ処理場で次から次へと空想の産物などが振って来る。

この世界では現実は全て夢になり空想こそ仮想こそが実態を持ち力となる。

廻黎

「無駄、そんなの今さら言われるまでもないわ、でも帰らなきゃいけないの…私のことを待ってくれるあの子がいる限り…」

『神魔邪眼』⇒『眼の世界（アイ・アム・アイ）』（眼は私である）

天音　廻黎が現実から目を逸らし眼を閉じたときに自動で能力のコントロールが制御できなくなｒ

空から地面からそして、相手の体から無数のそれぞれ効果を持った破壊不可能の目が覗き見ている世界を構成する。

世界中から見張り死角がなく過去も未来も思いも気持ちも何もかも見透かされ全てを暴きだされ逃げることも抗うことも許されない空間。

『空の神眼』
『無の邪眼』
『時の魔眼』
『爆の邪眼』
『速度の魔眼』
『温度の邪眼』
『境界の神眼』
『感覚の魔眼』
『歪曲の邪眼』
『観察の邪眼』
『干渉の魔眼』
『石化の魔眼』
『即死の邪眼』
『直死の魔眼』

『確率の邪眼』
『影と光の魔眼』
『異常と正常の邪眼』
『警戒と油断の魔眼』
『現実と理想の邪眼』
『混乱と秩序の魔眼』
『増加と減少の邪眼』
『可視と不可視の邪眼』
『虚像と実像の魔眼』
『支配と従属の邪眼』
『実在と架空の魔眼』
『直線と曲線の邪眼』
『分解と合成の邪眼』
『閉鎖と開放の魔眼』
『未来と過去の邪眼』
『融解と凝固の魔眼』
『流転と静止の魔眼』
『偶然と必然の魔眼』
『人災と天災の邪眼』
『始源と終焉の神眼』
『英雄と反英雄の邪眼』
『創造と破壊の神眼』
『過程と結果の魔眼』
『開闢と乖離の神眼』
『永劫と刹那の魔眼』
『本能と無意識の邪眼』
『存在と非存在の魔眼』

後、９５７３無量大数もの目が存在しあらゆる攻撃あらゆる能力あらゆる呪いなど無限に近い戦法を使用できるようになる。使用した目は一度きりで閉じてしまうが次の瞬間には、新たな目が開眼する。

この時、天音　廻黎自身は眼から血の涙を流しながら眼を閉じなければいけない。という面倒なポイントがあるが戦闘能力の性能はピカイチ。

シアン

【アハハ、驚いたよ、一度ならず二度までぶちのめされるなんて・・・でも僕にもようやく分かったかな…道化じゃ「大切な物は守れねぇ~よな、俺が馬鹿だったぜ、此処からはガチだ!!気合い入れろよ?」

『絶対強運』⇒『運命の罠（ディスティニー・オブ・フェイカー）』

全ての０%以外の確率を０%~１００%に操作できる。いままではランダムであった運命を確立という概念に置き換えあらゆる確率を自分の都合がいいように操る。

今までのランダムと確率という二つの因果を操ることが出来るようになった。

世界そのものがサイコロやルーレットなどと言ったギャンブルに使う物にあふれた世界になる。空は超巨大なルーレットになっていて地面はルーレットのテーブルのようになっている。

旧生徒会（蘇る怪物クラスの覇王達）　（後書き）

以上です。

お正月は投稿できません。

ではまた。

聖夜の戦（知っているか？サンタって・・強いんだぜ？めちゃくちゃな・・）

今回はクリスマス特別編です。

ではどうぞ

クリスマスに訪れる赤き聖者を

聖夜の戦（知っているか？サンタって・・強いんだぜ？めちゃくちゃな・・）

今日、学園都市はにぎわっていた。クリスマスイブである。

街はカップルであふれ木々はイルミネーションで幻想的な光で夜を照らしていた。

俺は今現在、『異世界樹（ユグドラシル）』の使い過ぎで子供になっていて部屋の中では酒を飲まされミニカズになり天野に可愛がるという名目で遊ばれて居て椿はキッチンで料理を作りテーブルに並べていた

そして、オーブンから七面鳥を取り出しそれをテーブルおいて「影虎、そこ寒いだろ？おいで」っと膝の上をポンポンと叩いている椿が居たのでとりあえず蹴って置いた。

椿は涙目で「チビ虎がぐれた~」と言っていたが無視だ。そして、適当にご飯を・・膝の上で不本意に食べました。俺の身長では椅子を使っても食べられないのだ。前に机で後ろに椿の巨大な活火山があり落ちつかなかった・・椿が前にかがむと俺は机とごっつんこだ。何故か天野は椿を羨ましがっていたがチビカズはちゃんと机で食べられるため天野は必要ない・・用無しプフw

飯を食い終わった後にケーキを出された。もちろん椿さんの手作りだ。羨ましかろう？

そのケーキを皿に映されそれを小さなフォークでほうばって食べていると口に周りにたくさんついてしまい、それを天野に笑われ椿には「もう~ チビ虎ったらこんなに汚しちゃって~ いけない子でちゅね~」と赤ちゃん言葉で顔を拭かれチビカズは横で肩を震わせてい

た・・・・・元に戻ったら全員3階から落としてやる・・・・

俺は幼い姿のまま決意した。子供の俺は執念深いのだ。

俺はそうガッツポーズで決意しながらその後もケーキをほおばっていた。その光景を見て皆が温かい目で笑っていた・・・・蹴ってやる!!

そう思いながら黙々と食べて食べ終えると

急に天野が一真を抱っこしたまま近寄ってきて可愛く首をかしげながら

「影虎君はクリスマスプレゼントなにが欲しいの?」と靴下を持ちながら来た

(俺を子供と勘違いしてやがる・・)

俺はキレそうになったがため息をつき天野を見て

「オートバイ」そう一言で言うと天野は困った顔になり椿はキッチンで洗い物しながら笑っていた。

「むぅ・・」と天野はすねていたがそんなこと無視してトランプなどして遊んでいた。

そして、サンタの話になった。

そして、サンタクロースについて話し合っている時、俺の一言で皆が固まった。

「知っているか?サンタって・・強いんだぜ?めちゃくちゃな・・」

そういうと天野と一真が泣きそうな顔で俺を見て

椿はハンカチで目元を押さえながら「どうしてこんなにひねくれちゃったんだろう」

と言っていた腹がったったが俺は語りだした

「あれは、去年のクリスマスの話だ・・・」

・・・

「なんだ?あのジジイ、空を飛んでやがる・・・・まさか・・・・サンタクロースか!?」

この時俺はその姿を見ても正体に気付くまで30秒かかった・・・その間にサンタは飛びまわり袋から何か金色の粉をまいていた・・・

この時俺はどうかしていたんだろう・・・袋の中に宝があると勘違いして迷うことなく・・・『異世界樹(ユグドラシル)』の砲塔を用意して生命力の砲撃を仕掛けた

桜色の閃光はまっすぐ進みサンタのそりに当りかけたその時、パチンと言う音とともにトナカイのそりが方向転換して俺の砲撃を交わしたのだ・・・「ばかな!?」

いきなりの方向転換がはやすぎる!!俺は連射したがそれらすべて避けられるので散弾に変更して撃ったのだがトナカイが早いのなんのって・・・すべて綺麗にかわされた

「マジかよ・・・」全てを交わしたサンタに俺は『異世界樹(ユグドラシル)』の翼を出して追いかけた。

さすがにいくら早くても俺からは逃げられずどんどん距離を詰めた。するといきなりの方向転換で俺に向かってきたのだ・・・俺はあまりの速さに反応出来ず真っ赤なお鼻のトナカイの光を超える速度の角での体当たりを受けた。

俺はものの見事に弾き飛ばされた・・・・「貴様、たかがサンタの分際で!!」と俺はトナカイ以上の速度で飛び直接そりに乗ってい

る赤い服のジジイに殴りかかったがソリの上にはサンタはおらず俺が周りを見ると・・・

「ＨＯＨＯＨＯ、こっちじゃよ」

その声が後ろから聞こえ振り向いたと同時に「ベギン」と言う音がわき腹から聞こえ痛みが走るとサンタクロースの年季の入った拳が・・俺のわき腹を完ぺきにとらえていて・・・俺の体はすぐに衝撃で地面に落とされた・・・・それも学園都市では無い別の場所に・・・・

「瞬間移動か？「ＨＯＨＯＨＯ」？ふん、サンタさんよ、あんた強いな本当にプレゼント配グハ！！！」

影虎が話そうとした瞬間にはソリから解き放たれた。トナカイが影虎に襲いかかった・・

恐ろしく速く恐ろしく強いトナカイが俺を囲み一斉に襲ってきた・・・

とても避ける事が出来ず俺は半ばトナカイに遊ばれていた。ひゅんひゅんと軽く拘束を超えて飛びまわるトナカイに翻弄されて居るとまた、気がつかない内にサンタが後ろに回り込んでいて俺はとっさに腕をクロスしてガードしようとするとサンタは拳を握ってはいおらず、白い袋の蓋を開けていた・・・袋の中を見た俺は袋に異次元の入口を見たするとサンタは微笑んで「ＨＯＨＯＨＯ」と笑うと袋の中から院生のような威力で飛んで来た・・・プレゼントが俺にぶち当たり、俺の体は吹っ飛んだ・・・そして、カチカチと音のする俺にめり込んでいるプレゼントが爆破した・・・・

光に包まれた俺は、驚いた・・・・目線が下がり服がずれ落ちるのだ・・・

俺は自分の手を見ると・・・先ほどまでの手ではなく紅葉のようなおててになっていた・・・・

一瞬で子供にされたのだ・・・・

俺がパニックになっていると・・・目の前にトナカイとサンタが居てサンタが俺を見下ろしていた・・・

「（まずい、やられる!!）」

と目を瞑り丸々とパサッと急にサンタに赤い服を着せられた・・・？

「は？」

俺が慌てるとサンタが俺に寒そうな格好のまま俺の頭を撫でると・・・「メーリークリスマース」と俺にプレゼントを手渡してきてそれが勝手に開くと・・・光にまた包まれた・・・

眩しくて、眼がぼやけてようやく目が見えると・・・俺の家に俺が居て・・・俺は玄関の前に居た

サンタの上着を来て・・・・「え？え？」と焦っているとガチャリと扉が開いて・・・

「お、影虎・・・さっきはごめんなさ・・・どうした？その格好？」

と椿さんが帰って来たのだ・・・そして俺を指さして驚いていたが俺はなぜか嬉しくなり椿に抱きつき

「・・・え、いやその・・・・俺もごめん！！」

「・・・・あぁ俺もごめん。それとサンタの格好かわいいぞ影虎♪」

と謝った・・・そして、椿と仲直りしてクリスマスを楽しんだのだ・・・サンタはプレゼントに椿との仲直りをさせてくれたのだ・・・つまりは幸せな時間をくれた恩人なのだ・・・それと・・・

・・・・

ーーーーーーーーーー俺ジジイになったら・・・あんたの後ついでやるから待ってろよ~」

と言うとサンタは「ＨＯＨＯＨＯ」と手を振って何処かにまたプレゼントを配りに行ったのだろう・・・

その後、椿と天野と一真はサンタがいる事を本気で信じたらしい。

また、来年も楽しみだ

つづく

聖夜の戦（知っているか？サンタって・・強いんだぜ？めちゃくちゃな・・）

以上です。サンタさんを強くしてみました。

サンタさんはおそらく神裂よりも強いと思います。

ではまた来年、よいお年をノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2637q/

とある正極（プラス）の異世界樹（ユグドラシル）

2011年12月24日19時48分発行